神宮司廳藏版

古事類苑

政治部 三

古事類苑刊行會

古事類苑

政治部第三册目錄

政治部五十七
下編
印 華押附
政治部五十八
下編
使者
政治部五十九
下編
出仕
宿直
休假
政治部六十
下編
戶籍上

政治部七十四

下編

邸宅上

政治部七十五

下編

邸宅下 辻番 自身番附

古事類苑

政治部五十一

下編

吉書始 御判始 并入

評定始 內評定始 御沙汰始 并入 內談始

政治部五十三

下編

内書 公帖 附入

奉書

〇

政治部五十五

下編

制符

上申狀

政治部五十六

下編

上書

政治部五十七

下編

印 華押附

附 華押

政治部五十八

下編

使者

政治部五十九

下編

出仕

宿直

休假

政治部六十

下編

戶籍上

政治部六十一

下編

戸籍中

政治部六十二

下編

戸籍下

政治部六十三

下編

相續上

政治部六十四

下編

相續下

政治部六十五

下編

養子

政治部六十六

下編

隱居

後見

政治部六十七

下編

賤民上

政治部六十八

下編

賤民下

政治部六十九

下編

會計上

政治部七十

下編

會計下

政治部七十一

下編

田文

政治部七十二

下編

田積

田品

政治部七十三

下編

開墾

隱田

政治部七十四

下編

邸宅上

政治部七十五

下編

邸宅下 辻番　自身番附

附辻番

附自身番

古事類苑

政治部五十一

下編

吉書始 御判始併入

武家ノ吉書始ハ、本ト王朝ノ吉書奏ニ擬シタルモノナルベシ、毎年正月吉日ヲ擇ビテ行ハル、又將軍襲職ノトキ、官位昇進ノトキ、改元アリシトキ等ニモ、必ズ此事アリ、足利幕府ノ時ニハ、吉書トハ、必ズ神事、農桑、乃貢ノ三ヶ條ヲ擧ゲ、將軍ノ判ヲ捺シテ、之ヲ關東ノ國々ヘ下スヲ慣例トセシモノヽ如シ、而シテ將軍襲職ノ始ニ行フヲバ、亦御判始トモ云ヘリ、

御判始ハ、固ト吉書始ト異ナルコトナク、鎌倉幕府ニテハ、凡テ吉書始トノミ云ヒシヲ、足利幕府ノ時ニ至リテ、始テ吉書始ト御判始トヲ區別セリ、卽チ將軍襲職後ニ、始テ吉書ニ判ヲ捺スルヲ、特ニ御判始ト稱シ、將軍官位昇進ノトキ、新所移徙ノトキ、改元ノトキ等ニ行フヲバ、仍ホ吉書始ト云ヘリ、

名稱

〔倭訓栞中編五〕きつしよはじめ　東鑑に、十月六日、新造公文所吉書始也、邦通先書吉書と見えたり、庭訓往來に、吉書令撰行吉日良辰とあるは、始て百姓へ定書あたふる取帳などをいふといへり、侍中群要に、撰吉書、併解文類、若美濃國絹解文とみゆ、

〔武家名目抄職名二十二〕按御吉書始は、建久二年に、政所にて其事ありしをもて根元とす、それより後、將軍家政務相續の時は勿論、任官、移徙、改元などやうの改れる事あるおりには、かならずこの事を行なはるゝならひなり、其日政所執事代、もしくは他の奉行人にても、吉書の右筆といふ

所役をうけ給はりて、吉書を清書す、これいはゆる御吉書奉行なり、但鎌倉殿の時には、いまだ御吉書奉行といふ名もなく、たゞ奉行人の内にのみ、其職掌はありしを、足利殿の世となりてぞ、其名目はいできにける、抑此吉書といへるは、惠林院殿將軍宣下記に見えたる如く、神事、農桑、乃貢の三ヶ條を書立て、將軍家の御判をすへ、關東の國々へ下さるゝが舊例なり、鎌倉の足利家にも、その作法は大かた京都の准據なりけれど、これは毎年の正月に吉書始を行はるゝならひにて、其外には行はれざりしよしにきこゆ、もと規式のみにて實事にあらざれば、定かせられしにもあるべし、京都將軍家にも、正月ごとに御吉書始あれど、これは年始の賀儀を述らるゝ御内書を、細川家へ遣はさるゝことありて、それを御吉書始といひしなり、本文にいへる御吉書始と、名目は同くして其事は異なるなり、

政所吉書始
問注所吉書始

〔吾妻鏡十一〕建久二年正月十五日甲子、被行政所吉書始、前々諸家人浴恩澤之時、或被載御判、或被用奉書、而今令備羽林上將給之間、有沙汰召返彼狀、可被成改于家御下文旨被定云云、

○按ズルニ、此月始テ政所ヲ置タ、

〔吾妻鏡十九〕承元五年〇建暦元年正月十日甲午、政所問注所吉書始也、行光、善信、各參行之、今日橘三藏人被加問注所衆、

〔吾妻鏡二十六〕貞應三年〇元仁元年八月廿八日、武州泰時、故政所吉書始云云、又家務條々被定、其式、左近將監景綱、平三郎兵衛尉盛綱等奉行云云、

年首吉書始

〔年中定例記〕殿中從正月十二月迄、御對面御祝巳下之事、

一二日〇正月御對面、御祝巳下おもてにての御盃如朔日、

一御吉書の御内書、毎年細川殿へ被遣候、御使我等也、やがて御禮に細川殿御參、今日は兩度御出仕也、御對面も在也、

〔室町家御内書案上〕一正二日管領へ御成之時、御吉書始、七ヶ國被成國々事、　武藏　相摸　伊豆

新將軍吉書始

駿河　甲斐　出羽　陸奧　此七ヶ國也

〔公方樣正月御事始之記〕一同月〇正七日、御吉書始也、右京大夫へ被遣御書候、御使は伊勢守、京兆則有見參、太刀を伊勢守貞宗に被出之、駿河守も罷出、御吉書之入たる御文箱を、秋庭備中守持出渡候を、駿河守出向給之、同伊勢守に從京兆太刀をも被出、伊勢守次の間にて貞雅に渡之、御文箱をば左に持、同太刀を右に持候て罷出、京兆之緣にて伊勢守被管人に遣之、從先々此分に仕來候、則京兆御禮に祗候有之、次伊勢守支度うら打、京兆同前也、

一御吉書之御文言之事

改年吉兆不可有際限、猶期面候也、

正月七日　御判

右京大夫どのへ

〔成氏年中行事正月〕一同十五日、朝御祝如常、〇中略次御吉書、多分二日也、但日限不定、關東御分國ヲ被註、執事代ヲ召具シテ、政所有出仕、可有御料物ヲバ執事代持參、御硯ヲバ政所之子息持テ被參時、御判有、其後又執事代參、御料物ヲ給、政所ノ子息參テ被罷出タル後、先御式三獻有、淸執事代ヲ勤、二階堂寄領也、二階堂政所勤、公方樣政所執事代、又御荷用ノ人々モ直垂也、式三獻過テ後、政所御劒進上、別而有御酒、被下御劒也、

〔吾妻鏡十二〕建久三年八月五日乙巳、令補將軍〇此年七月、源賴朝爲征夷大將軍給之後、今日政所始、則渡御、

家司

別當　前因幡守中原朝臣廣元、前下總守源朝臣邦業、

令民部少丞藤原朝臣行政

案主　藤井俊長

知家事　中原光家

大夫屬入道善信、筑後權守俊兼、民部丞盛時、藤判官代邦通、前隼人佑康時、前豐前介實俊、前右京進仲業等候其座、千葉介常胤先給御下文、而御上階以前者、被載御判於下文訖、被始置政所之後者、被召返之、被成政所下文之處、常胤頗確執、謂政所下文者、家司等署名也、難備後鑒、於常胤分者、別被副置御判可爲子孫末代龜鏡之由申請之、仍如所望云云、

〔武家名目抄職式五〕按將軍宣下の事、武家にては鎌倉右幕下賴朝卿を始とす、抑將軍宣下の次第は、陣座宣下といひて、剋限其日の上卿仗座に著、〇中略此陣座畢て後、勅使を下され、宣旨等を給はる事也、然る後に、御拜賀、御上洛、又直衣始、吉書始等の規式を行はる、

〔吾妻鏡十六〕建久十年〇正治元年二月六日戊辰、羽林殿下〇源賴家去月二十日轉左中將給、同二十六日宣下云云、兼前征夷將軍源朝臣〇賴朝遺跡、宜令彼家人郎從等如舊奉行諸國守護者、彼狀到著之間、今日有吉書始、淸大夫擇申日時云云、北條殿、兵庫頭廣元朝臣、三浦介義澄、前大和守光行、中宮大夫屬入道善信、八田右衞門尉知家、和田左衞門尉義盛、比企右衞門尉能員、梶原平三景時、藤民部丞行光、平民部丞盛時、右京進仲業、文章生宣衡等、列著政所、善信草吉書、武藏國海月郡事云云、仲業加淸書、廣元朝臣持參之、羽林於寢殿被覽之給、此事故將軍薨御之後、雖未經廿箇日、綸旨嚴密之間、重々有其沙汰、以內々儀、先被遂行之云云、

〔吾妻鏡十八〕建仁三年十月九日甲辰、將軍家〇此年九月、源實朝爲征夷大將軍、政所始也、午剋別當遠州〇北條時政、廣元朝臣已下家司各布衣等著政所、民部丞行光書吉書、令圖書允淸定成返抄、遠州持參吉書於御前給之後、有垸飯盃酒之儀、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年四月十四日丁卯、寅一剋、將軍家〇此月宗尊親王爲征夷大將軍、始御參鶴岡之八幡宮、〇中略辰剋、爲秋田城介義景奉行、故可有政所始之由被仰下之、〇中略次人々著庭上座、將軍家御直衣出

御寢殿南面、土御門宰相中將(顯方直衣)自西方參進、揚御座間幷左右二間御簾、次奧州被參御前簀子、伊勢前司行綱持參吉書(納覽筥蓋)奧州取之被置御前、御覽之後給之、令歸著本座給、

[illegible]前吉書始

〔吾妻鏡三十五〕寬元二年四月廿一日辛卯、今日將軍家若君(六歲、御名字賴嗣、御母中納言親能女大宮局)○中略御元服也、○中略可令蒙將軍宣旨給云云、○中略次武州相率評定衆被參政所、有吉書始儀、左衞門尉滿定爲執筆、五月五日甲辰、平新左衞門尉自京都歸著、持參去月廿八日宣下狀除書等、冠者殿蒙征夷大將軍宣旨、任右近衞少將、令敍從五位上給云云、

任官吉書始

〔吾妻鏡二十三〕建保六年十二月廿日戊午、去二日將軍家(○源實朝)令任右大臣給、仍今日有政所始、右京兆(○北條義時)幷當所執事信濃守行光、及家司文章博士仲章朝臣、右馬權頭賴茂朝臣、武藏守親廣、相州(○北條時房)伊豆左衞門尉賴定、圖書允淸定等著布衣列座、淸定爲執筆書吉書、右京兆座而覽吉書、參御所給、路次行光捧持之、從于京兆御後、將軍家故以出御南面階間覽之、(京兆持參吉書於御前給)京兆又令歸政所給、被行垸飯云云、

〔吾妻鏡三十六〕寬元二年六月十三日壬午、將軍家御元服、御任官之後、(○此年四月、藤原賴嗣爲征夷大將軍)有吉書始之儀、

新所吉書始

〔吾妻鏡三〕壽永三年(○元曆元年)十月六日辛酉、未剋新造公文所吉書始也、安藝介中原廣元爲別當著座、齋院次官中原親能、主計允藤原行政、足立右馬允藤內遠元、甲斐四郎、大中臣秋家、藤判官代邦通等、爲寄人參上、邦通先書吉書、廣元披覽御前、次相摸國中神領佛物等事沙汰之、其後行垸飯、武衞出御、千葉介經營、公私有引出物、上分御馬一疋、下各野劍一柄云云、

〔吾妻鏡三十三〕延應二年(○仁治元年)三月九日癸酉、政所造畢之間、今日有吉書始儀、前武州(北條泰時)布衣以下同之參給、評定衆前攝津守師員、藏人大夫入道西阿以下參上、

〔吾妻鏡五十〕文應二年(○弘長元年)十二月三日辛卯、新造政所始也、評定衆等列參云云、

改元吉書始

〔吾妻鏡二十七〕安貞三年〇寛喜元年三月廿五日、於政所有改元吉書始、信濃二郎左衛門尉爲武州御共、持參御所披覽御前云云、

〔將軍執權次第〕應長元年辛亥四月廿九日改元、五月八日關東吉書始、〇中略

正和元年壬子三月廿日改元、四月二日關東吉書始、〇中略

文保元年丁巳二月三日改元、二月八日關東吉書始、〇中略

元應元年己未四月廿八日改元、五月九日關東吉書始、〇中略

元亨元年辛酉二月廿三日改元、三月八日關東吉書始、〇中略

正中元年甲子十二月九日改元、同十九日關東吉書始、

嘉曆元年丙寅四月廿六日改元、五月十三日關東吉書始、〇中略

元德元年己巳八月廿九日改元、九月十三日關東吉書始、〇中略

正慶元年壬申元德四年月日改元、五月十四日吉書始、

〔花營三代記〕貞治七年二月十八日、改元、爲應安元、三月一日、齋藤四郎右衛門尉可參侍所之由、被仰出之、改元吉書施行武藏、相摸、伊豆、持參之、齋藤四郎右衛門尉、于時政所執事代、同日被仰關東畢、

應安八年三月、去月廿七日改元、爲永和元年、九日、武家施行、吉書始之、

〔建内記〕嘉吉元年二月廿一日己丑、改元已後、於室町殿今朝有吉書事、其子細、正長度尋記了、定其趣歟、依此事、東西參仕人々、太刀進二腰云々、

〔康富記〕嘉吉四年〇文安元年二月十三日癸巳、今日室町殿御沙汰始也、管領左衛門督入道出仕也、是日夕、御吉書始也、改元以後也云々、

〇

御判始

〔武家名目抄職名二十二〕按、御判始といふは、もと吉書始とことなることなかりけれど、政務の始

に執行なはる、をば御判始といひ、昇進移徙改元などのおりに行なはる、をば、御吉書始といへるならひなり、鎌倉殿の世には、いまだ其分別なく、なべて吉書始とのみ云しを、足利殿の時にいたりてぞわかちよべることゝはなれりける、かくとなへをわけらるゝに従ひて、何事も微細になれるからに、政務始の時の例にて、神社に所領を寄附せらるゝ、御敎書、もしくはさるべき神領の、訴訟などを裁判せらるゝ、御敎書のたぐひを、御判とよび、神事、農桑、乃貢の三條を記して、關東諸國へ下さるゝ、文書を吉書とよべるが、常の事となりて、をのづから御判始と御吉書始とは、格別の規式のやうになりしなり、されば普廣院殿〇足利義敎はいまだ元服なき間に御吉書始ありて、將軍宣下の後、御判始行なはれし例もいできしなるべし、普廣院殿御元服記にみゆ抑此總奉行は、評定衆のうけ給はることにて、本は定まれる家とてもなかりしが、普廣院殿より後は、攝津氏に限れるごとくなれり、又さしつぎの奉行は、應安の例にて、世々松田氏のうけ給はることにてありしなり、

〔室町家御内書案上〕一御元服之時、御評定始、御判始、御前御沙汰在之、御判始、此七ヶ國同前、〇武藏、相摸、伊豆、駿河、甲斐、出羽、陸奧、御判始御判物認侍雜司渡之、御判アリテ、ヤガテ奉行請取申之、大高檀紙、又小高檀紙、上下ツヾメテ吉也、大タカダンシラバ、吉ホドニ少サクツヾメテ調進也、

〔鹿苑院殿御元服記〕一同五年〇應安十一月廿二日、御判始、御歲十五、〇足利義滿、應安元年爲征夷大將軍、御裝束、御立烏帽子、御直垂、白長絹、於寢殿十二間西面自政所御吉書進之、御判七ヶ國山城三郎左衛門尉持參、次於當座御所被聞食三獻、政所沙汰之、

〔花營三代記〕應安五年十一月廿二日、將軍家御判始、御年十五御裝束立烏帽子、長絹直垂、執權武藏守賴之朝臣、著直垂、淺黃總奉行治部少輔高秀、同右筆松田左衛門尉貞秀、同白直垂合奉行齋藤四郎右衛門基兼、裝束白直垂

〔普廣院殿御元服記〕一同〇正長二年三月十五日、任征夷大將軍給宣下、辰刻〇足利義敎

同四月十五日、御判始、

御吉書事、去年御沙汰之上者、只雖訴大方落居スル物ニ被成御判也、

〔康富記〕寶德元年四月廿九日、室町殿○足利義政征夷大將軍、并禁色等宣下也、○中略其後有御。判。始。被。行。吉。書。儀。、管領著殿上被行之、頭人波多野、二階堂、間注所町野攝津、掃部頭等也、○中略今日御判始之間、有石淸水八幡宮御寄進事、法眼晃淸十歳被賜御判、天下大平御運長久之儀珍重、

〔惠林院殿將軍宣下記武家名目抄職名二十二所引〕延德二年七月五日丙辰、將軍宣下云々、○足利義稙次御判始、宣下事終之後被執行之、御吉書、右筆飯尾左衞門大夫爲規、白大麟七ヶ國武藏、相模、伊豆、駿河、甲斐、出羽、陸奥、文章同前、下武藏國仰三ヶ條、一神事、右神之爲神、以人之祭祀、人之爲人、以神之加被、因玆守式目、專如在禮奠限永代、爲不朽之勤行焉、一農桑事、右國者以民爲基、民者以農爲天、各勵池溝堰堤之勉、宜致稻穀紬絹之備矣、一乃貢事、右諸國之濟物、任土之貢賦、早守每年之所當、可致合期之進納焉、以前三ヶ條所仰如件、以下延德二年七月五日御吉書七通、入ニ葛籠爲規、今月二日巳剋渡侍雜仕、當日雜仕持參之、列居爲査御硯等、渡御硯役、二階堂山城三郎左衞門尉尙行大館請取之、直持參于御前、被加御判之後、給之相退、如已前渡雜仕了、

〔松田長秀記武家名目抄職名二十二所引〕延德二年七月五日丙辰、義材任征夷大將軍給、次御判始、公方樣御座南面管領、書座御吉書七ヶ國被成ニ御判二階堂三郎左衞門尉持參、政所當日計奉行代大館云々、長秀御昇進奉行飯尾左衞門大夫爲規、御吉書奉行飯尾大藏大夫堯連、御說奉行

〔和長卿記〕明應三年十二月廿七日壬午、今朝武家○足利義澄御元服也、依慈照院殿○足利義政御例、武家之儀也云々、○中略次將軍宣下、小槻時元持參宣旨、慈照院殿御代長興宿禰以持參例、今度更中ニ補禰、同有禁色宣下、已上共上卿宣下大納言、奉行職事權左少辨守光、次御評定始、御沙汰始、御判始等有之、今度無御昇殿沙汰、尤不審、

大永元年十二月廿四日、若君○足利義晴御元服也、○中略同廿五日、將軍宣下也、上卿權中納言實宣奉行

職事頭中將也、官務于恒持參宣下、大外記師象朝臣禁色宣下、同持參今日御判始等如例云々、

〔光源院殿御元服記〕一十二月〇天文十五年廿日、若君義藤朝臣、征夷大將軍、從四位下、禁色、昇殿宣下有之、

〇中略

一同日二十日十二月、新將軍義藤若君御評定始、御判始等有之、

一御評定始關役、松田九郎左衛門尉賴隆、奏事飯尾大和守堯通、御判始奉行、松田對馬守盛秀、

一御前御沙汰有之、御吉書始有之、〇中略

一其後又各々如元著座有テ、御判始有之、御物七通ヲ硯ノ蓋ニ入、伊勢守貞孝持參シテ、管領代定賴ニ渡サル、定賴又御前ヘ持參、其間御前ニ貞孝伺候、御判スヱラレ、畢テ管領蓋ニ入、貞孝ニ被渡之、貞孝持テ出、侍雜司ニ被渡之、〇中略

一奉寄御判物、侍雜司ヨリ康定請取持參、御前ニ置、著座、御判スヱラレテ後、又罷出、康定取申サル、次御硯取申ス、侍雜司ニ被渡、御判物ハ元造朝臣取テ管領ヘ渡ス、善法寺ウヘ又御前ニテ管領被渡之、

評定始 内評定始 御沙汰始 〔附〕内談始

評定始ハ、毎年正月ニ行ハレ、又將軍襲職ノトキニモ之ヲ行ハル、幕府ニテ始テ政務ヲ評定スル儀式ナリ、其儀鎌倉幕府ニテハ、兼日ニ奉行ヲ定メ、執權以下、評定衆著座シテ政事ヲ議ス、著座ニ、奧座、端座ノ別アリ、足利幕府ノ時ニ至リテハ、全ク一ノ儀式トシテ之ヲ行フニ過ギズ、其儀先ヅ管領、評定衆奉行衆以下出仕シ、將軍ノ出座ヲ待テ各々式ノ座ニ著ス、時ニ右筆折紙ニ三ケ條ノ議案ヲ記シテ披露ス、一伊勢皇大神宮ノ事、二鶴岡八幡宮ノ事、三勝長壽院

年首評定始

ノ事、若シクハ二階堂永福寺ノ事ニシテ、毎年殆ンド異ル所ナシ、即チ關ノ老若ニヨリテ、衆中ノ一人意見ヲ陳シ、議案ニ同心ノモノハ同ト云フ、意見同一決ノ後、奏事ノ右筆、折紙ヲ以テ將軍ニ聞ス、將軍乃チ一覽シテ點ヲ加フ、畢テ酒盃ヲ賜ヒ三獻ノ式アリ、

内評定始ハ、政所及ビ問注所ニテ行フ、孔子、奏事著到、籤著到等ノ役アリ、皆寄人ノ勤ムル所ニシテ引付衆ハ之ヲ勤メズ、

内談始モ亦政所問注所等ニテ行ヘドモ、専ラ引付ノ沙汰始ヲ謂ヘリ、一方内談始、三方内談始、五方内談始等ノ別アリ、

御沙汰始ハ、二月十七日ヲ以テ式日トス、管領以下出仕シテ、將軍御前ニ於テ之ヲ行フ、此儀將軍薨職、移徙改元等ニ行ハルヽコト、略〻吉書始、評定始等ニ同ジ、

〔東山殿年中行事正月〕十一日、御評定初、三管領、評定衆、奉行衆以下、未刻出仕、但應仁亂前マテノ事也

〔長祿二年以來申次記〕同正月十一日、

一御評定始在之、毎年今日式日也、如此也、此次第態々尋可申候、○中略

一御評定始、未刻管領幷評定衆ニハ、攝津、二階堂、波多野、町野、其外奉行衆以下出仕也、此儀も應仁亂前迄之事也、

〔年中恒例記〕正月十一日、今日は御評定御沙汰始にて、管領以下出仕、但應仁亂以前之儀也、御評定初儀式事、未上刻、公方樣御著座、御座をしかれ、御裝束はかりぎぬ、其後管領著座、大帷也、其後に評定衆攝津、二階堂、波多野、町野、各大帷也、其時之官位次第に著座、其次右筆方の中、評定衆に被召加之人數著座、大帷也、其後に右筆方之衆壹人ヅヽ御前へ參て、祝詞をつくりて披露之、各裏打也、如此事すみて、管領黒太刀進上之、其外評定衆以下、御太刀金進上之、其後管領に御太刀黒直に被下之御前へ被持參、伊勢守裏打也、其後評定衆に、於御前御太刀被下之、直には不被下、伊勢守役也、

〔成氏年中行事正月〕一同十一日、御評定始、公方樣香之御直垂、精好ノ御大口ニテ、御直垂付ニ白キ綾ヲメサル、因茲平人白綾ヲ不著、御劒御直代、大食役人ハ常ノゴトク、御一家御沓之役、名字不定、御評定所ハ十五間、中ハ油臈紫緣之御疊、廻敷ニテ衆中ノマヘゴトニ半疊アリ、御座ハ常ノ御座ヲ、紫緣ノ御タヽミノ上ニ重テシカルヽ也、面ハ皆御隔子ノマヘニテ障子ヲ立ラルヽ、公方樣御出ノ口ハ御ヤリ戸、御荷用ノミチモ御遣戸ニテ、北ハ大ヘラ也、管領ハ大御門ノナラビ、南ノ小門ヨリ被參、評定奉行、政所問注所、其外ノ衆中ハ皆面ノ御門ヨリ出仕、網代輿也、馬ニテ出仕之方モアリ、俗體ハ皆常ノ直垂ナリ、法體ハ無紋褐地之直垂紙縒紐タビ、只時ハ白小袖ニ練ノ大口、シタウヅト名テ、シヲ革ノ單皮ヲハカル、管領評定奉行ハ供二騎、其外ハ一騎也、何モ直垂、管領之出仕ナキ前ニハ、衆中先二間御厩侍伺候セラルヽ、管領ハ直ニ衆來之座へ被參、彼御座ハ七間ニテ、中ハ油ミガキノ板也、管領出仕ヲ聞テ、衆中皆集來之座エ被參、彼座者秘所トモ申也、管領ノ供ヲ爲始、七間御厩之侍ニ集、正印ノ太刀共ヲバ、我々ガソバニタテヽヲク、管領其外衆中之座位之樣ニ、供モ可居、仍テ管領評定奉行衆來ノ座ニテ、公方樣之出御ヲ待被申、悉出仕之由聞召テ、纔而御出アル也、被見申御出、管領自下絓烏帽子懸ヲ取テ懸ラルヽヲ見テ、自餘モ同心ニ掛ラルヽ、管領各へ目禮アッテ被參、其後評定奉行、其座至之樣ニヨリテ、次第ニ被參、二間御遣戸ヲマナカ明テ、障子ヲ立ラレタルヲ、左ノ手ニテヲサヘテアケテ、御座ノ内へ被參、右ノ指ニテ御障子ノハヅレヲ取テ立ラル、三寸ヅヽ立殘シテ、其後先手ニテ懷ニサシタル扇ヲヌキテ、右ノ手へ取ウツシテ、持テ御座ニ著ルヽ也、如此之後、右筆折紙ニ三ヶ條記之、一ヶ條ハ皇太神宮伊勢ノ御事也、一ヶ條ハ八幡宮鶴岡之御事也、一ヶ條ハ勝長壽院之御事也、大御堂之事ハ、此三ヶ條、油ミガキノ座中ニ右筆致伺候、令披露時、鬮役是モ右筆老若ノ鬮ヲ持テ廻時、管領評定奉行ヲ爲始鬮ヲ被取、老鬮ナレバ衆中ニ年之增タル人ノ、去年發言申サヌ人、當年意見ヲ被申也、若ノ鬮ナレバ、其内ニ年ノワカキ

人ノ中ニ意見ヲ申サル丶、但初參ハ、三ケ年過テ發言ヲバ被申規式也、毎月六度之御沙汰之時ハ、遲參之人發言被申ナリ、仍御評定始之發言ハ、一年充番廻テ、三ケ條何ニ意見有、上古ニハ勝長壽院ノ事一年、二階堂永福寺之事一年、各年ニ被載之、近代永福寺回祿以後、御堂之事毎年披露アリ、三ケ條之意見共調テ後、同心之分ニテ同ト云コトヲ被申、是モ一年宛番ニ廻テ被申也、意見ニモ同ニモ、右筆ノ披露ニモ調子アリ、如此條々、衆中皆以可有覺悟、意見調子、其外次第トモ、自然外見聊爾タル間、不及子細記之、意見同調テ後、三ケ條記タル折紙ト、御硯ヲ奏事之右筆持參申時、公方樣御點ヲアハサル丶也、其後折紙ト御硯ヲ右筆持テマカリ出、其時御奉行代直垂ニテ參、奏事ノ役、敷タル圓座ヲ取テマカリ出、其以後御障子皆アケテ、式ノ御肴ニテ御酒三獻參、只ノ時ハ御酌御座ノ内ニテ、鬼ノミヲ申、御評定始ニ限テ、御評定所ノ内ヘ不參シテ、御敷居ノ際ニテ鬼呑ヲ申テ持テ參、○中略 御菓子アガリ、ヤガテ公方樣御所ヘ御還アツテ、十二間ニテ御酒三獻、管領評定奉行御劍進上又被下、其後皆々歸宅アル也、○下略

〔吾妻鏡 三十三〕延應二年○仁治元年 正月十五日庚辰、評定始也、先々正月以後雖行之、依甚星事、及此儀、云云、前武州○北條泰時 被參評定衆、

右馬權頭　武藏守　攝津前司　佐渡前司　出羽前司　秋田城介　太宰少貳　對馬前司

加賀民部大夫　太田民部大夫　淸右衞門大夫　佐藤民部大夫

〔吾妻鏡 四十六〕建長八年○康元元年 正月十日壬寅、於相州○北條時頼 御亭有評定始、前右京兆已下著布衣出仕、盃酌如例、

〔吾妻鏡 五十二〕文永二年正月六日丙子、依山門園城寺騷動事、去夜六波羅使者、持參經任朝臣奉書幷駐進狀、御使伊勢入道行願○依使節、自去年在京、書狀等可有披露、而今年雖評定始以前、爲急事之間、不及日次沙汰、有今日評定、但人々不著布衣、又無盃酌、是非評定始之禮歟、近年無如此之例云云、相州○北條政村

村、今出仕、給、尾張入道見西、越後守實時、出羽入道道空、秋田城介泰盛、縫殿頭師連、大宰權少貳入道心蓮、伊賀入道道圓、對馬前司倫長、勘解由判官康有等、候其座、佐藤民部次郎業連、執筆事書等候畢、泰盛、心蓮、持參之、上覽之後、召使者於評議座、被下御返事、卽時使介歸洛畢、　十二日壬午、今日被行評定始、去六日者臨時儀也、仍就吉日、故被始之、師連、泰盛持參事書云云、

〔太田康有記〕建治三年正月十五日、御弓一五度、次御評定始、老

〔花營三代記〕貞治七年元年○應安正月廿八日、御評定始、

御座　南土禅　管領　中禅　洒掃　中書禅　北島屋　今禅　常禅　進禅　安禅

御硯　町野加賀民部大夫為問注所進禅代勤仕之

奏事　飯尾美濃守

孔子　諏方左近將監

應安二年正月十日、御評定始、

御座　左武州禅　洒掃　中書禅　右光綱　進禅

役

硯役　町野民部大夫

孔子　諏方左近將監

奏事　飯尾美濃守

應安三年正月十八日、御評定始、

御座　西南頼　光禄　道禅　醫州　北綱　武州　洒掃　中書禅

御硯　町野加賀三郎

奏事　飯尾美濃守

孔子　津戸左近將監

日次事、去七日、十日、十六日、宗時朝臣雖ㇾ撰ㇾ申之、七日寶篋院殿〈○足利義詮〉御忌日、十日依山名中務大輔去五日事御斟酌、十六日後醍醐院御國忌之間、十八日被ㇾ始行ㇾ畢、　四年正月廿。二。日、御評定始、〈○出座諸役人略〉

〈役人略〉　五年正月十。日、御評定始、〈○出座諸役人略〉　六年正月十。二。日、御評定始、

御座

細河武藏守賴之　佐々木治部少輔高秀　攝津掃部頭能直　町野遠江入道眞勝

山城中務少輔入道行照　佐々木備前入道道壽

御硯役　問注所町野掃部助

奏事　飯尾美濃守貞行

孔子　諏方左近將監

御加用

佐々木信濃彥五郎　小串次郎右衛門尉　海老名備中四郎　伊勢彌三郎

七年正月十。日。、御評定始、

御出座

武藏守賴之〈執事、于時、細川〉　〈佐々木〉大膳大夫高秀　〈攝津〉掃部頭能直　〈町野〉遠江入道眞勝

〈二階堂〉中務少輔入道行照　〈佐々木〉備前入道道壽

役人

硯　問注所町野掃部助

奏事　飯尾美濃守

孔子　飯尾右近將監

御荷用

佐々木隱岐斎五郎　斎都新左衛門尉　海老名備中四郎　伊勢孫三郎

三月廿三日、御評定始、(依後光嚴院崩御事、(此年正月二十九日崩)御沙汰延引之故也、)

應永廿八年正月十一日、御評定始、官領頭人有出仕、御所樣有御對面、頭人四人、攝津左馬助、波多野入道、闕注所二階堂、

〔康富記〕應永廿九年正月十一日己巳、武家御評定始也、管領(畠山右衛門督入道)出仕如例年云々、武家御院參云々、

〔建內記〕永享十二年正月十一日乙卯、今日武家評定始如例云々、

新將軍評定始

文安四年正月十一日甲戌、室町殿評定始也、管領細川右京大夫勝元已下出仕、

〔齋藤親基日記〕寬正七年(○文正元年)正月十一日、御評定始、

御座　管領(政長)　(攝)酒掃(之親)　(波)雲禪(元政)　(元宗且)因州(通弘)　(布)野州(貞基)　(不參也)遠禪(玄眞)

奏事　兵大貞有

鬮子　飯尾加賀孫四郞淸房

〔吾妻鏡四十二〕建長四年四月十四日丁卯、將軍家(○宗尊親王、此月爲征夷大將軍、)始御參鶴岡之八幡宮、(○中略)日出以前御神拜、事終還御云云、辰剋爲秋田城介義景奉行、故可有政所始之由被仰下之、仍兩國司(布衣)被參政所、各著座、(○中略)次可有評定始之旨被仰出、秋田城介奉行云云、奧州(○重時、陸奧守北條)以下參上、各著座、

奧座

陸奧守　右馬權頭政村

武藏守朝直　前出羽守行義

端座

足利氏評定始

相模守　　　　　　秋田城介義景
民部大夫康連　　　前尾張守時章
對馬守倫長　　　　淸左衞門尉淸定

〔康富記〕寶德元年十一月九日甲寅、是日武家御評定始也、管領畠山左衞門督入道出仕也、頭人、問注所〈加賀守〉攝津掃部頭、二階堂、波多野、飯尾肥前入道、大和入道、齋藤加賀入道、飯尾備中守新加云々、同美濃守等十人、皆評定衆也、此外役人飯尾左衞門大夫、布施十郎等也云々、

○按ズルニ、足利家官位記ニハ、義政、文安六年〈○寶德元年〉四月十六日御元服、同廿七日評定始、同廿九日征夷大將軍ト爲ルトアリ、

〔將軍執權次第〕久明親王〈三品〉
建治二年九月十一日誕生、正應二年十月一日立親王、同六日御元服、同十日自仙洞渡御六波羅北方、同日御出京、同廿五日入鎌倉、卽日吉書始、評定始、十一月九日爲將軍、

〔鹿苑院殿御元服記〕廿七日〈○應安元年四月〉御評定始、
御座〈御持衣○足利義滿〉　武州〈法體出仕細川〉酒掃、松田貞秀奏事、〈寺社三ヶ條、伊勢、石淸水、安樂寺俗別當、○中略〉

同二年正月一日、任征夷大將軍給、

〔普廣院殿御元服記〕正長二年〈○永享元年〉三月九日、御元服〈○足利義敎、中略〉十一日御評定事、
今年巳正月十一日、被始行之上者、重而不及被行之歟之由、就尋下サル、、當見中者也云々、

〔建內記〕嘉吉元年十一月廿日壬午、今日武家〈室町殿御亭也、從五位下源義勝、御第室町面東頰北小路以北、號去北也、〉御評定始也、當代初度之儀也、日來雖無評定始之儀式、執事行沙汰如例、今日被表其儀、雖御童體如成人云々、管領〈執事也〉細川右京大夫持之朝臣、奉行頭人出仕已下如年始之時云々、

〔管見記〕嘉吉二年十月廿七日、今日武家當代評定始云々、仍珍重之由賀遣管領了、

新所評定始

雜載

○按ズルニ、足利義教、嘉吉元年六月、赤松滿祐ニ弑セラル、而シテ義勝ノ將軍トナリシハ、同二年十一月ナリ、サレバ建內記、看聞記ノ文、共ニ義勝襲職以前ニ屬セリト雖モ、已ニ義教ノ薨後ナルヲ以テ、兩書ニ當代ト指シタルハ、義勝ナルコト明ナリ、

〔吾妻鏡 三十二〕嘉禎二年八月五日己丑、匠作、武州被參、於新造評定所有評議始、其衆皆參、但出羽前司家長依所勞不參、先被定之御勤仕之輩云云、

〔北條九代記 下〕嘉元三年五月十四日、就闕相州師時移武藏守久時亭、今日評定始、

〔御評定着座次第〕評定衆列、執權之上例

文和三年五月廿日、寶篋院殿〈○足利義詮〉御自筆御記云、評定始〈○中略〉也、是來二十八日予發向之間、以前可始行也、今日評定當參、

石橋左衛門入道心勝　仁木左京大夫賴章朝臣　佐渡判官入道道譽　土岐大膳大夫賴康　二階堂大藏少輔政元　問注所美作守顯行　披露奉行相原左近大夫也、

〔後愚昧記〕貞治五年八月十八日、武家評定始并引付等、自明日可始行云々、十九日、今日武家評定始也、引付庭中等同始行之云々、大夫入道沒落以後、始有此事、執事雖未補、沙汰始了、兩巻說不可覃、執事云々、

〔花營三代記〕應安四年五月廿七日、御評定被始行之、

出仕人々

中禪　酒播　遠禪　中書禪　安禪

〔花營三代記〕應安四年五月十九日、〈夜〉武州〈○細川賴之〉號令辭退管領職、被赴西山西芳寺、仍御所〈○足利義滿〉御出并赤松律師坊以下相向之間、武州自路次被歸畢、

〔花營三代記〕應永廿八年十一月二日、管領〈○此年八月、畠山滿家爲管領〉、評定始、騎馬五番、〈路次ハムテヌテ、コシ衣クサナリ〉、御所樣

出仕以後、三寳院ヘ有御成、其次管領ヘ御成アリテ、供ノ馬共被御覽、

〔康富記〕嘉吉二年八月廿八日丙辰、或語云、飯尾肥前入道永祥者評定衆也、去廿二日御評定始日、此〇（年六月、畠山持國爲管領、）與頭人波多野出雲守座席令相論也、爲評定衆上者、任位階上首、可著頭人出頭上之由、肥前申之、出雲申云、雖爲衆、爲奉行人之間、不可著頭人上、候間、可著肥前上之由、出雲守募申之、於去廿二日者、出雲守著肥前上云々、今日事、兩方及對論、所詮任位階上首、爲衆者可著頭人上之條、有文證之間、諸奉行一味同心申此子細候云々、仍出雲守假一級事被執申、今日著肥前入道上云々、

〔關八州古戰錄十六〕北條家軍評定附山中城守兵事
天旋リ地轉ジ物換リ星移テ、天正モ十八年ニ成ヌ、庚寅ノ正月、小田原ノ城中ニハ、華歲ノ慶賀、群臣ノ出仕、毎例ニ異ナル事ナシト云ヘドモ、傍ニ寄合寄除キ、大小トナク潜メキアフ者共而巳ナリ、聞キ十七日ハ公文所ノ評定始、初春定式ノ義ナレバ、宿老ノ面々ヲ本トシテ、芳賀伯耆守綱可、福島伊賀入道道眸、松田肥後守康鄉、山角紀伊守政長、安藤豐前守正季、伊勢備中守貞運、大和兵部少輔晴親、小笠原播磨守長範、板部岡江雪齋等出席ス、

〇

內評定始

〔武家名目抄（職名八下）〕按、（〇中略）內評定始の時、孔子、奏事著到、議著到等の役は、寄人の所役として、引付衆は勤むる事なし、もとこれらの事は、下臈たる者の勤仕すべき定なればなり、但平常は引付衆と共に、右筆衆奉行人など呼るゝことなれど、御評定始御沙汰始等の時、御前祗候を許されざるものなれば、又は御前未參衆とも稱せり、（引付衆に補せられし後も、恩賞方に加はらざる間は、猶未參衆の列にあり、然れども兩三年を經れば、大かた恩賞方に加補せらるゝならひなり、）

政所內評定始
問注所內評定始

〔武政軌範（政所沙汰篇）〕一內評定儀式事
問。注。所。政。所。沙汰者、被撰御前評定、是故號內評定、以往者元日以來正月中日々被行之乎、仍議著到

者自朔日每日記之、右者年始之執行、式日不定、應永以後以廿六日被行之、先兼日為政所廻折紙相觸之、至評定衆者不載之、以使者被觸遣之、

明後日廿六午剋政所內評定被始行候、可有參勤之由候也、

某殿　　　　　　右筆以下悉一紙載之

某殿

漸及其剋限、寄人參列、先執事代差定役者、儀者、右筆之上首、奏事者、其次座人著到者、又其次圖者、右筆末座役也、役者既定之後、執事出座、寄人次第著座、

〔花營三代記〕應安三年正月廿八日、問注所內評定始云々、

永和三年二月廿八日、政所內評定始之、依執事代松田左衛門尉母儀、去年十二月他界服中延引、今日被行之、　四年正月十一日、御評定始、(中略)　同日、問注所內評定始、　五年八月廿五日、(康暦元)　政所內評定始、(政所執事伊勢入道沙汰始、執事代松田丹後守、)　飯尾大和入道可為評定衆之由被仰出之、

一方(康暦元八廿九施行　奉行人攝津掃部頭、右筆雅樂左近入道、)

左兵衛佐入道　　　當手十始行之

一方

畠山右衛門佐　　　此手十一始行之

禪律奉行人、

侍所　山名民部少輔

地方　二階堂中務少輔入道

〔政所內評定記錄〕政所內評定始著到(寬正二年正月廿六日)

伊勢守、諏訪信濃守、松田丹後守、飯尾加賀守、飯尾左衞門大夫、治部河內守、飯尾兵衞大夫、淸式部丞、齋藤大藏丞、齋藤五郎兵衞尉、淸四郎左衞門尉、諏訪左近將監種基、相觸折紙書樣、以二公人一相二觸之一、此三人依レ爲二引付衆一、以二私ノ使者一觸二方々一、

諏訪信濃守殿　　松田丹後守殿　　飯尾加賀守殿

明後日廿六日午剋、政所內評定始被レ執行一、可レ有二參勤一之由候、

齋藤三郎兵衞入道殿奉、依二歡樂一無二參勤一、爲二年始一之間、被レ奉云々、○中間人名略

諏訪左近將監殿奉○中略

當日時儀次第、先頭人御著座之後、面々著座、其後條々、役者各於二當座一定、但於二次間一面々被レ定之、一番孔子之役、當年諏訪左近將監殿、老若之紙札二如レ常、入二平硯蓋一、孔子之役者持レ之、發言之前ニ向、仍發言一被レ取之、一持之歸、二番奏事、治部河內殿、先目錄ヲ頭人之御前ニ置レ之、其以後致二披露一、三番硯出之、侍所司役之、奏事歸二本座一之後、目錄ニ頭人被レ合二御點一、其後御前ニ被レ置之、四番著到、齋藤四郎右衞門尉殿、著座以後、當座ニ書レ之、立座テ頭人之御前ニ置レ之、是モ其儘被レ置之、五番鎰著到、飯尾左衞門大夫殿、於二次間一整之、於二當座一各自身被レ書レ諱、但頭人之諱者、執事代最前書レ之、半疊ヲトル、侍雜司役之、右此後式三獻、○中略三獻事訖、先頭人被レ立二御座敷一、以二前之目錄一、外著到御讀畢、其後面々立座畢、

寬正三年正月廿六日、內評定始、

頭人、諏信州、松丹州、飯左大、治河、淸泉、齋藤左、飯兵太、齋四右、淸式、淸四左、諏左將　一番孔子諏左將、當年加番、　二番奏事、淸泉、　三番著到、飯兵太、　四番鎰著到、治河、　次式三獻、如二去年一、

〔武家名目抄職名五下〕建武式目追加ナル曆應三年ノ條目ニ、五方引付トアリ、又花營三代記應安三年ノ所ニハ、一方內談始トイフガ五方アリテ、各其頭人ノ名ヲノセ、又永和元年ノ所ニモ、五方引付トアリ、是五番ヲ置レシノ證ナリ、但御評定著座次第ニ、文和三年五月廿日、評定始、又三方內談

內談始

政所内談始

始也トミユ、貞和ハ暦應ト康安トノ間ナリ、サラバ貞和ノ際、シバシバガホド三番ニナサレシゴトク聞ユレド、五方内談始、必一日ニカギラザレバ、當時五方アリナガラ、ソノ日ハ三方ノ内談始ナリシトミユ、何レニモ前後ナクテ五方トアレバ、五番アリシコト疑フベキニアラズ、内談始トハ、引付ノ沙汰始ヲイフナリ、

〔齋藤親基日記〕文正二年〇應仁元年正月廿六日、政所內談始、於赤日亭可執行之由、雖被相觸之、若公樣御所御座候間、既於住宅在之、

政所內評定著到 文正二年正月廿六日

伊勢兵庫助

飯尾下總守 執事代雖爲二式評定一靜之、雖引付衆有座也、古者式評定衆有座也、今執事弁二式評定一候歟歟、

諏方信濃守　松田丹後守　飯尾肥前守　清式部和泉守

奉行 齋藤加賀守　齋藤民部大夫　齋藤大藏丞　齋藤五郎兵衞尉

清四郎左衛門尉　飯尾四郎左衛門尉　松田主計允　飯尾孫四郎

貞有

不參　治河國通 所勢　齋新左基綠 同　飯左大爲修 同　使節 諏將貞通 本名一郷

〔親元日記〕文明十年正月廿六日己丑、政所內談始無之、

侍所内談始

〔花營三代記〕應安三年正月廿五日、侍所 佐々木 治部 內談始行之、

引付内談始

〔武政軌範〕引付內談篇 一內談始行事

當日開闔進折紙、相觸衆中、

明後日十二午剋、於殿中一方內談被始行候、可令參勤給之由也、恐々謹言、

二月十日　　實名判

某殿

至其剋限、衆中參著、先開闔申合頭人、差定奏事著到、闔等之役者、奏事者、右筆之上首、著到者其次座人闔者末座人、其右筆之所作也、役者既定之時、頭人著座、次寄人次第列座、御座席之中央一間者、徹疊而鋪剋筵、其上鋪半疊、

上座

頭人　權頭　某　某　某

半疊

頭輩　某　某　某　某

座定之後、開闔起座而進於中座、披露規式、

一方內談規式

一式日

二日、七日、十二日、十七日、廿二日、廿七日、

一剋限

自巳剋至未剋

一條數

一日廿箇條

以上、竪紙書之、式日者依其方可相替、

次今日役者、奏事某、著到某、鬮某之由申之、還著本座、次侍雑仕持硯蓋而置于鬮役之前、卽執之起座、至于別座、座鬮於硯蓋、持之進于頭人、自其次第進之、列座衆執畢、役者跪于末席執己鬮入懐中、持蓋退于列座、置之而進出、候于中座、雑仕持紙與硯、置于中座之半疊、則鬮役意見之次第、先書廻給與一番二番之字見上座、此時頭人以下各披鬮而令見之、則一二之下注其人名、座遠而雖見鬮之時者、其人微音告一二之數、頭人評定衆者載唐名、右筆以下者注名字與官之片字、鬮役者注實名也、當參外之鬮者不注之、又末座之人執當于一番二番鬮之時者、持之進于第一二座之人、與其人鬮替之、是則若輩之禮也、

意見次第（明德元 二十二） 折紙書之

一番　因州	二番
三番　飯加	四番　中書禪
五番	六番　松丹州
七番	八番
九番　淸左	十番　齋兵
十一番	十二番　布民大
十三番	十四番　矢縫
十五番	十六番　依新左
十七番	十八番

十九番　貞一　廿番　左兵衛

鬮作樣、其大者方二寸許、書一二字如常、其數者不依參不參、總寄人之數作之、假令寄人有廿人者、當參衆雖爲十人、可作廿人之鬮也、鬮之出樣、最末鬮者可出于頭人、其前鬮者鬮役可執之、頭人之鬮者不混于自餘之鬮之樣置之、則頭人得其意執之、已鬮者插大拇下持之、故實也、見意見次第而可意得之、

書注文單疊之置于半疊之上、退著本座、次雜仕出而執中座之料紙硯退、次捧持硯置于頭人之前、次奏事役起座進出于中座、先以申詞與扇子置于半疊之上、捧持目錄獻頭人、

目錄（明德元二十二）　折紙書之

一石清水八幡宮御神樂料足事

一北野宮寺御神寶料足事

一諸國御年貢事

已上　實名（奏事之役人名也）

還中座、向于上座、跪而披露奏事詞、

一石清水八幡宮御神樂料足事

任例可被仰付之焉

一北野宮寺御神寶料足事

可被仰付御倉焉

一諸國御年貢事

任例可被成御奉書焉

堅紙書之、但奏事詞等、依時有相替事歟、

議中初條、而向于發言人、聞意見同、諸左右之間、同畢向于頭人之時、則頭人發聞詞、卽合點於目錄、二箇條三箇條之儀式亦如是、三箇條畢、還著本座、雜仕進而執頭人前硯退、次持料紙與硯置于著到役者之前、則書之、

〔御評定著座次第〕評定衆列執權之上例

文和三年五月廿日、寶篋院殿〇足利義詮御自筆御記云、評議始、又三方內談始也、是來二十八日予發向之間、以前可始行也、〇下略

〔花營三代記〕貞治七年〇應安元年二月十九日、禪律內談始、行於御所、管領〇細川頼之佐々木大夫判官入道

三月八日、一方內談左武衞禪始行、右筆安威左衞門入道、　四月三日、一方內談今川與州禪始行、

六月十五日、內談、山名左京大夫入道幷子息中務少輔始行之於御所、　九月廿一日、禪律內談始、行於御所、

應安三年四月十一日、內談始行、左兵衞禪　六月十七日、一方內談始行、細川兵部業氏　十八日、一方內談始行、山名霜臺義理、　同日、一方內談始行、今川與州禪、　廿日、一方內談始行、仁木兵部禪、

八年〇永和元年十一月廿六日、五方引付幷侍所衆又施行、

〔年中定例記〕一十七日、〇二月御沙汰始、例年、

〔室町家御內書案上〕二月御沙汰始折紙明後日十七被始行御前御沙汰候、可被參勤之由候、恐々謹言、

二月十五日

飯尾近江守殿

同前明後日十七可被執行御前御沙汰之由、謹而承候、可致參勤候、此旨可得御意候、恐惶謹言、

二月十五日　爲完

松田丹後守殿

〔鎌倉九代後記〕基氏

文和元年三月十三日、沙汰始、

〔花營三代記〕貞治七年（○應安元年）四月十日、侍所沙汰始、頭人（今川中務）宿所、

應安二年二月十一日、侍所沙汰始、（土岐左馬助奉行之始也）　五年正月廿三日、小侍所沙汰始、（於山名右衛門佐入道亭被始行之）

山名次郎（時義）

奉行人

松田左衛門尉　　門眞權少外記

八年（○永和元年）正月十三日、御評定始、（○中略）同夜、政所御沙汰始延引、依執事違例也、

永和二年三月九日、侍所沙汰始、（于時畠山右衛門佐基國）　三年二月廿九日、侍所番文施行、（右筆布施彈正大夫入道）同三月九日、沙汰始行之、

〔普廣院殿御元服記〕同年（○正長二年）三月廿四日、御前（○足利義教）御沙汰被行之、

御座　管領　洒掃　因幡　雍州

奉行人參勤如先規、

抑御元服（御歲十六）三奉行事、二月十五日被仰付以來、兩三人、洒掃、秀藤、基貞、每日出仕、

上管領伺事、篇目依事繁、不及注文、就中記錄事、基貞秀藤各以草案持參總奉行所、訖、秀藤之記分、尤

妙也云々、事外被甘心了、仍一卷有抑留之上者、不及拘惜也、然間於彼家所持之記錄者、可為秀藤所

書進之記錄之、後證為存知、粗所注置也而已、

三寶院御門跡可書進之由、為權家蒙仰之間、雖□無斟酌、一本令進覽之也、

〔建內記〕永享三年十二月廿六日、御前御沙汰始也、是又御移徙以後、初度御沙汰也、次諸大名又進太

刀、　十二年二月十七日庚寅、今日室町殿御沙汰始、每年之儀也、

〔康富記〕嘉吉四年〇文安元年二月十三日癸巳、今日室町殿御沙汰始也、管領左衛門督入道出仕也、是日夕御吉書始也、改元以後也云々、御沙汰始事、代々二月十七日也、近年御例不快之間、今日被行之、以往者十三日被行之故也云々、

文安五年二月廿五日辛巳、是日武家御沙汰始也、管領細川右京大夫勝元出仕也、今月十七日式日、延引、

寶德元年閏十月十九日甲子、是日武家御沙汰始也、役人等可尋注之、

〔蔭凉軒日錄〕寛正五年十一月十五日、率報今日御談義之事也、管領出仕御評定始、同御沙汰始可爲同日也、午後出仕、

〔親元日記〕寛正六年二月廿七日乙巳、御沙汰始、去十七日之儀、于今延引也、

〔齋藤親基日記〕寛正七年二月十七日、御前御沙汰始、

御座　管領　酒播
　雲禪　因州

伺事次第

野州貞基　玄良以上式評定也、恩賞方者座、未御免、　諏信州忠郷　松丹州秀興
飯肥州之種　清泉貞秀　飯兵大貞有　飯和元連
齋四右親基　親基　齋五兵豊基　飯四左爲衛
依獻樂不參衆　治河國通　飯新左爲修

〔和長卿記〕明應三年十二月廿七日壬午、今朝武家〇足利義澄御元服也、〇中略次將軍宣下、〇中略次御評定始、御沙汰始、御判始等有之、

〔親俊日記〕天文八年正月廿六日乙未、當所〇政所御沙汰初、執事代以太刀頭人一禮被申之、貴殿御見

參、以其次、奉行衆公人奉行諏訪信濃守、一束矢根、三平持來、治部河內守、兩種一荷執事代松丹州兩種一荷松田對馬守、兩種一荷各持來食在之アリ、

〔大館常興日記〕天文九年二月十七日、今日御沙汰始也、仍御內談衆も、每年御太刀金進上也、十一年二月十七日、今日御沙汰始如例年、仍御太刀進上之也、若公樣へも同御禮同前也、御太刀金進上之也、

古事類苑

政治部五十二

下編

教書

鎌倉幕府ノ創設以來、上ヨリ下ニ遞ボス文書ニ、教書、内書、奉書、下文、下知狀等ノ別アリ、教書トハ、將軍ノ命令ヲ傳フル書ナリ、中古以降攝關大臣等ノ令スル書ヲ御教書ト云ヒシガ、源頼朝禍亂ヲ戡定シ、覇府ヲ鎌倉ニ開キ、教書ヲ以テ天下ニ令セシハ、其稱ヲ襲ヒシナリ、後世織田氏ニ至ルマデ、相承ケテ之ニ依ル、而シテ鎌倉幕府ノ當初、教書ニハ、將軍自ラ判ヲ加フル例ナリシガ、後改メテ、執權、連署、署名シテ下スコトヽナリ、其西國ニ下スニハ、必ズ南北兩六波羅探題之ニ署ス、足利幕府ノ時、仍ホ其制ニ遵ヒ、管領署名シタリシガ、義滿ノ時、改メテ將軍ノ判ヲ加ヘタリ、然レドモ爾後猶ホ舊制ニ依リシコトアリ、將軍ノ判ヲ加ヘタルヲ御判御教書トモ、御書御教書トモ云ヒ、教書一本ヲ以テ數處ニ廻達スルヲ廻文御教書ト云ヒ、守護地頭以上及ビ社司等ヲ補任スル爲メニ下スヲ補任御教書ト云ヒ、幕府ヨリ吹擧スルヲ吹擧御教書ト云ヒ、本領ヲ安堵スル由ヲ命ズルヲ安堵御教書ト云ヒ、勳功ヲ感賞スル爲メ下スヲ御感御教書ト云ヒ、訴訟ニ依テ、被告人ヲ召喚スル爲メ下スヲ問狀御教書ト云ヒ、再ビ問狀御教書ヲ發シ、猶ホ答狀ヲ上ラザル時、更ニ召喚スル書ヲ召文御教書ト云ヒ、裁判ヲ宣告スル爲メ下スヲ裁許御教書ト云フ、教書ハ杉原ニ書シ、二ツニ折テ之ヲ卷キ、更ニ懸紙ヲ加ヘ、其兩端ヲ折テ封緘セズ、而シテ國

名稱

ノ遠近ニ隨ヒ、日時ヲ定メテ、之ヲ送達セシムル等ノ制アリキ、

〔下學集 下 態藝〕御敎書（ゲウシヨ）

〔庭訓往來〕將軍家之御敎書、執事施行、侍所奉書者、規模也、且嘉例、且先規也、可被申沙汰、

○按ズルニ、中古以降、攝關大臣等ノ、下ニ令スル書ヲ御敎書ト云ヘリ、而シテ御敎書ハ、家司等命ヲ奉ジテ之ヲ書シ、月日ノ下ニ署名シテ以テ下シタリ、其書式ハ次下引ク朝野群載、雜筆要集等ヲ見テ知ルベシ、鎌倉幕府以來、御敎書ヲ以テ天下ニ令セシハ、蓋シ之ニ依レルモノナラン、

〔朝野群載 七 攝籙家〕御敎書

被關白殿仰云、來廿六日、伊勢公卿勅使祿分料、幷合袴三腰、期日以前、美麗可調進由、宜仰遣者、仰旨如此、知綱謹狀、

十月十二日　右衞門權佐藤原知綱奉

謹奉　淡路守殿

〔雜筆要集〕關白宣樣

被殿下仰云、御出既以明日也、以寅一點、可令入見參給之由所候也、仍執達如件、

其月ム日　左近將監平某奉

源式部大輔殿

同請文樣

謹請

御敎書事

右任御敎書之旨、以明日寅一點、可早參候也、依謹所請如件、誠惶誠恐謹言、

其月ム日　　散位源朝臣ム請文

〔賓簡集十九〕東寺長者御敎書

光信阿闍梨分天野舞童間事、御札旨披露候了、於光信者、依關東召、當時在國之上者、誠難治事候歟、門弟他行之時、師範勤仕如此役之條、尤可依先例候歟、早加評定、可令相計給之由所候也、仍執達如件、

正月廿八日　　權律師寛知

〔和簡禮經五〕御敎書事

一御敎書ト計申時ハ、管領ノ被書出ヲ申也、○中略

押紙云

御敎書事、從管領其身ニ當テ被成ヲ御敎書ト云、

〔曾我流書札法式〕一御敎書事管領之狀也

從頼朝卿至守邦親王ハ、北條家ヲ執權ト申候、尊氏卿ヨリ至義滿公ハ執事ト云、義滿公御代半、斯波義將在職之時、改執事號管領、斯波細川畠山三管領也、此面々受上意被書出御敎書ト申候、

〔沙汰未練書〕一召符御敎書日數事

關東御敎書者、美濃尾張日數三十日也、六波羅御敎書者、日數二十日也、○中略以上過此日數者云違背也、但依國々遠近日數遲速在之、○中略

一被成御敎書充所事關東六波羅同前

地頭御家人者、二ケ度マデハ、充其身被成之、凡下雜者、初度より仰御使被成之、何も三ケ度之御敎書者、以御使被成之、以上以三ケ度可稱之、

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年五月十日己未、鎌倉中幷國々雜人沙汰事、被定法、是可仰付主人幷在所地

違背教書

頭事也、其事書様、

一鎌倉中幷國々雜人沙汰事

奉行人奉書、三箇度不敘用者、可被成御教書、又彼狀等及三。箇。度。不事行者、於引付尋明子細、非實者、可注申所領之由、可被成御教書、次難治事、同於引付可有其沙汰矣、

〔新御式目〕本所幷同司領家所當年貢事正應三九十九評、

領主所致未進對捍之條無謂、任被定置之旨可致之沙汰之由、可被成御教書於六波羅、以此趣可被仰五方引付歟、○中略

一弘安七年四月以前成敗事、永仁二十二、評、○中略

一御下知以後、御。教。書。可。爲。一。ヶ。度事、

一不可成違御教書事、○中略

條々

正安二七十九　　但馬前司渡之○中略

一急事外、於引付庭不可書御教書以下事、

〔吾妻鏡四十六〕建長八年六月五日甲子、於御教書違背之咎者、爲令召可注進所領之由、可下知之旨、所被相觸五方引付也、

〔建武以來追加〕一寺社幷本所領以下押領輩事暦應三四十五、御沙汰、

近年武家被官人甲乙之輩、令違背下知御教書、剩對于守護使幷使節等、及合戰狼藉之由有其聞、縡超常篇、然者別而可有嚴密之沙汰、奉行人令隨身文書、直令被露者、可被裁判罪名之旨、可觸仰五方引付焉、○中略

一違背御下知御教書幷奉書等、不渡下地輩事康永二四十一、御沙汰、

訴申請敎書

或被裁許、或被成奉書之後、雖申子細、依無其理、不被許容之輩、猶以押領下地、成煩云々、於如然之族者、可被處于違背咎之上、付總別、永不可被聞食訴訟也、〇中略

一寺社本所領事 觀應二六十三、御沙汰、〇中略

使節事、守御敎書日限、沙汰付下地、可執進請取狀、令遲怠者、於守護人者、改補其職、至御家人者、可被分召所領三分一矣、〇中略

一不應御敎書輩事 觀應三九十八評右筆飯尾大和守淨圓

背被仰下之旨之由、使節令注進者、准御定違背咎、可被召所帶三分一、次對使節、致合戰輩事、可准故戰矣、〇中略

一寺社本所領事 文和元十一十五、御沙汰、

嚴密可遵行之子細、去七月以來、載兩度奉書之上、就面々訴、雖被成御敎書、寄事於世上物忩、云守護、云使節、徇緩怠之間、多以不事行云々、難遁其咎、但無勘錄者、定有未盡之後訴歟、所詮且取調先日散狀、召出守護代幷論人等、尋究遵行難澀之旨趣、陳謝無謂者、准先例可勘申罪名、亦有殊會尺者、隨事體加糺決、宜經評議之由、可仰五方之引付、

〔吾妻鏡〕三十六 寬元二年六月十六日乙酉、〇乙酉原作甲寅、今據本書此月一日庚午文改、日野六郎長用與平五郎季長法師、法名妙蓮、相論伯耆國日野新印鄉、同下村得分物事、六月廿日、掠給御敎書之條、雖遁罪科之由、有其沙汰、長用所被止鎌倉出仕也、兩條共對馬前司爲奉行云云、

〔建武以來追加〕條々 文明九八廿七、于時公人奉行松田丹後守秀興奉行之、

一成懸御敎書幷奉書等事、不及伺申、調進之段、先規勿論也、雖然於訴人掠申之儀者、可有御糺明、若不實令露顯者、任先例可被沒收所領、無所帶者、可被處其身於罪科矣、

敎書式

〔貞丈雜記〕九書札 一御敎書に三品あり、一には御判の御敎書、二には御書之御敎書、三には御敎書也、

御判の御敎書と云は、年號月日御諱御判まであるを云、御書の御敎書と云は、年號月日御諱計有をいふ、御敎書と計云は、仰を受て、公方樣の御文言之通りを、管領より調て、書出しに奉(ウケタマハル)の字をかきて、留には執達如件など丶書を御敎書と計云也、三品ともに公方樣より被下候御書也、管領並奉行より仰を受て書出すをば、奉書と云也、

〔簡禮記 四〕御敎書之法式

一御敎書ノ事、三品之差別有之、○中略 第三管領ノ書出セルヲ押出シテ、謂御敎書トナリ、此時ノ料紙ハ、杉原ナド一枚竪紙ニシテ用之、書留ハ依仰執達如件トモ、或被仰下也、仍執達如件トモ可有之、年月日書續、日ノ下ニハ、官カ受領ニ判アルベシ、稱號實名ハ不可有之、偖上卷アッテ、上下ノ端ヲ押折ナリ、文言ノ趣假令バ、近江國大江大萱幷今井六郞左衞門尉跡等事、任御下文之旨、早可被沙汰付攝津掃部頭能直代之狀、依仰執達如件、

永和五年三月廿三日　武藏守判

佐々木龜壽殿

〔和簡禮經 五〕一御敎書ハ

請上意諸事、從管領被書出ヲ――――ト申也、若ハ所帶ニ付テ、其國ノ守護ト申分アル輩ニ其身ニ宛テ被書出ヲモ爾云也、依于事號御書御敎書ト、直ノ御判アル事モアリ、其書樣杉原一枚ニ書テ、年號月日書續ケ二ツニ折テ、奥ヨリクル〱ト卷テ、表卷不封、上下押折テ墨不引上書アリ、

タトヘバ

曾我兵庫助敎助申近江國野洲郡邇保庄内宇都宮信濃守跡事、鴨社雜掌雖有申子細、異于他、爲先給之替被宛行上者、任當知行敎助領掌不可有相違由所被仰付也、仍下知如件、

文安五年十二月十五日　右京大夫源朝臣在判

敎書例

右御敎書也、宮領ナリ、

右慈照院義政之御代細川政元(永正五年、號大心院、)

押紙云　御敎書

就持氏御息隱謀常州凶徒等蜂起云々、不日令發向、可抽忠節之旨、所被仰下也、仍執達如件、

永享十二年四月十一日　　右京大夫判

曾我小次郎殿

普光院殿(義敎)〇足利御代官領細川殿持之(弘源寺、嘉吉二年薨、)

〔沙汰未練書〕御敎書トハ、關東ニハ、兩所御判、京都ニハ兩六波羅殿御判ノ成ヲ云也、

〇按ズルニ、鎌倉幕府ノ初メ、御敎書ニハ、將軍自ラ判ヲ加ヘラレタリシガ、後ニハ執權連署等、署名シテ下スコトヽナリ、且ツ承久三年、六波羅ニ探題ヲ置キシヨリ、西國ノ諸事ハ、探題ノ敎書ヲ以テ令スルコトヽナレリ、宜シク官位部鎌倉職員編ノ遠國職篇ヲ參看スベシ、

〔花營三代記〕永和元年十一月廿二日、御敎書已下、可爲御判物之由被定之間、今日始三社御祈禱御敎書被成之、

〇按ズルニ、足利義滿ノ時、御敎書ニハ、將軍ノ判ヲ載スル制ヲ定メシナリ、然レドモ爾後猶ホ管領署名シテ下シタルコトモアリシハ、文書ニ徵シテ知ラル、

〔吾妻鏡十一〕建久二年十二月十九日癸巳、爲鶴岡神事、遣山城江次久家以下侍十三人、可傳神樂秘曲之由、所被成下御敎書於好方之許也、

爲鶴岡八幡宮神事、山城江次久家以下侍十三人、被遣之、爲弟子、撰器量、早可被敎立御神樂一座之所作、忩被沙汰出後、如本社始行二季御神樂、可被上洛也、弓立星歌者、爲秘事之由聞食、然者相傳之仁、重可被仰遣、且又其志可有御存知也者、鎌倉殿仰旨如此、仍執達如件、

十二月十九日　　　　　　　　　　　　　盛時（平、在判、○公事奉行人）

右近將監殿

〔東寺百合文書ノ之一至八〕

御家人役間事、今年八月三日關。東。御。教。書。

如此、任被仰下候旨、可令披露若狹國中給、

依執達如件、

寛元元年九月一日　　　　相模守（在御判○六波羅探題北條重時）

佐分藏人殿

〔吾妻鏡三十六〕寛元三年四月廿二日丙戌、鎌倉中保々奉行人等、令存知可致沙汰條々、今日被定、佐渡前司基綱○後藤爲奉行、

保司奉行人可存知條々

一不作道事

一差出宅檐於路事

一作町屋漸々狹路事

一造懸小家於溝上事

一不夜行事

右以前五箇條、仰保々奉行、可被禁制也、且相觸之後、七日於立之者、相具保奉行人者、使者可被破却之状、依仰執達如件、

寛元三年四月廿二日　　　　武藏守（○執權北條經時）

佐渡前司殿

廿七日辛卯、基綱寫。法廿二日。御。教。書。今。日。相。觸。保。奉。行。人。云。云、

○按ズルニ、府下街坊ニ關スル制ヲ定ムレバ、先ヅ其奉行ヲ定メ、之ニ御教書ヲ下セバ、其奉行更ニ數通ヲ寫シテ、保々奉行ニ示シヽナリ、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年六月十九日辛未、祈雨事、被仰鶴岡別當法印隆辨、淸左衞門尉滿定、帶其御。教。書。爲御使行向彼雪下本坊、仍申領狀、

〔新編追加侍所〕一奥大道夜討強盜事○中略

小山出羽前司　阿波前司　周防五郎兵衞尉　氏家余三跡　壹岐六郎左衞門尉　同七郎左衞門尉　出羽四郎左衞門尉　陸奥留守兵衞尉　宮城右衞門尉　和賀三郎兵衞尉　同五郎左衞門尉　葦野地頭　福原小太郎　澁江太郎兵衞尉　伊呂宇又次郎　武藏平間鄕地頭　淸久左衞門次郎　鳩井兵衞尉跡　那須肥前々司　宇都宮五郎左衞門尉　岩平左衞門太郎　岩平次郎　矢古宇左衞門次郎

已上廿四人○二十四人中、恐脱一人名、被下之同御。教。書、

一近日出羽陸奥國夜討強盜蜂起之間、往還之輩、有其煩之由風聞、尤不便、是偏郡鄕地頭等背先御下知、無沙汰之所致也、甚無其謂、早柴田郡內知行宿々造宿直屋、令結番、殊可令警固也、且寵置惡黨之所々、不可見聞隱之旨、可被召進沙汰人等起請文者、依仰執達如件、

正嘉二年八月廿日　武藏守北條長時○執權　相模守北條政村○連署

阿波前司殿○又見吾妻鏡

〔吾妻鏡四十九〕正元二年○文應元年六月十二日戊申、爲人庶疾疫對治、可致祈禱之由、今日被仰諸國守護人云云、其御。教。書云、

諸國寺社大般若經轉讀事

爲國土安穩疾病對治、於諸國寺社、可被轉讀大般若經最勝仁王經等也、早仰其國寺社之住僧、致精誠可轉讀之由、可令相觸地頭等也、只於知行所者、同可令下知之狀、依仰執達如件、

文應元年六月十二日

武藏守（○執權北條長時）

相模守（○連署北條政村）

某殿

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年六月廿三日辛未、將軍家（○宗尊）御上洛事、有其沙汰、被充課役於諸國、御敎書文章一同也、西海事者被仰遣六波羅云云、御敎書云、

御上洛間百姓等所役事、段別百文、五町別官駄一疋、夫二人可充行、（至畠者、以二町可准田一町、）此外不可成民之煩、但有逃散之輩者、相觸在所可令勤其役之狀、依仰執達如件、

弘長三年六月廿三日

武藏守（○執權北條長時）

相模守（○連署北條政村）

陸奥左近大夫將監殿

八月廿五日壬申、御上洛事、依大風諸國稼穀損亡之間、爲休弊民煩、所被延引也、仍今日以其旨被仰遣六波羅御敎書二通被遣之、一通者可相觸京畿御家人事、一通左親衛（○藤原能保）分國輩可存知事也、其狀云、

御上洛事、依大風御延引之由、所被仰下也、其間雖可被進御使、且其旨可被相觸御家人等也、依仰執達如件、

弘長三年八月廿五日

武藏守

相模守

陸奧左近大夫將監殿

來十月御上洛、所有御延引也、且於御京上役辨濟所々者、可令糺返于百姓也、早以此趣、可被下知攝津若狹國中之狀、依仰執達如件、

弘長三年八月廿五日　武藏守
　　　　　　　　　　相模守

陸奧左近大夫將監殿

〔集古文書御教書十〕將軍守邦親王御教書○伊勢國度會郡前田光明寺藏

先帝遷幸叡山事、可防申之旨、已被下院宣云々、仍爲對治凶徒等、所被差進貞直貞冬高氏也、以此趣、可被申入西園寺家之狀、依仰執達如件、

元德三年九月五日　右馬權頭判○連署北條茂時
　　　　　　　　　相模守判○執權北條守時

越後守殿

越後左近大夫將監殿

〔和簡禮經五〕一御判物事

同日之下御判

さがみの國そがの郷の年貢みくだし御めん、幷しかゆの使ちやうしせらるゝなり、

觀應三年六月十七日御判

そがの上野介殿右ノ左衞門也

右觀應ノ二通ハ、等持院殿○足利尊氏御代、此内假名ハ御自筆ノ寫也、

〔集古文書御教書十〕鹿苑院義滿公御教書○攝津國川邊郡多田院藏

寶篋院殿〇足利義詮御遺骨一分事、就往年之由緖、所致奉納當寺也、宜致不朽之勤行之狀、依仰執達如件、

貞治七年二月廿九日　右馬頭花押

多田院長老

〔花營三代記〕應安二年正月二日、楠木左兵衛督〇正儀依可參御方之由申之、被成御敎書畢、

〔集古文書〕十一〔御敎書〕鹿苑院義滿公御敎書　相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

安房國岩井不入斗半分大方殿分事、爲鶴岡八幡宮本地供々料、所被預置也、任例可有其沙汰之狀、依仰執達如件、

永和五年閏四月十三日　沙彌花押〇斯波義將

遍照院僧正御房

〔南山巡狩錄追加五〕通法寺藏古文書

河内國古市郡通法寺別當幷供僧等謹言上

欲早被弃捐丹生谷左近將監遠房所掠賜料所儀、且云源義建立伽藍、且任八幡殿御自筆寄進狀右大將家〇源賴朝御假名書御敎書〇中略如元令安堵佛燈油四町三段間事、

副進〇中略

一通　右大將家假名書御敎書正文〇中略

右當寺者、御先祖顯義御建立之御齋、右大將家御歸依之本尊也、〔中略〕被成下右大將家假名書御敎書、堅被定置四町三段之免田、〔中略〕

永德三年四月日

〔建內記〕正長二年〔永享元年〕七月十一日、大乘院僧正使者侍從法眼濟俊入來、被送書狀、豐田中坊與井戶確執事、先日蒙仰之趣、雖緊加下知、猶以不被用之由被申之、使者云、被成下御敎書於兩門跡、可加制止之由、被仰下歟之由被存之、先日仰者、不及上裁、爲門跡、先可被加制止哉、各門下也、何可及異儀之由、有其沙汰者也、〔中略〕參室町殿申入、大乘院僧正被申趣、御敎書事、被成下者可承引哉之由有仰、予〔藤原時房〕申云、不可不應上裁、縱雖及異儀、雖何度被仰下之條可然事也、仰曰、管領可成御敎書歟、可爲予下知哉、予申云、村傳奏可成御敎書之由、彼使存之歟、仰云、時房可書出之、

〔集古文書十一御敎書〕慶雲院義勝公御敎書〔細川本藏〕

太宰少貳敎賴治罰事、各被成御敎書畢、次豐後國殘黨事、子細同前、不廻時日可被加退治之由、所被仰下也、仍執達如件、

嘉吉元年十月十四日　右京大夫

大內新介殿

〔增補筒井家記乾〕筒井家三老臣

同〔天正元年〕十一月三日、毛利家兩川〔吉川元春、小早川隆景〕ガ計ヒトシテ、〔中略〕兵船二百餘艘ニテ、義昭公ヲ迎ヘ、毛利家ノ領內ニ請ジ奉リ、先備後ノ深津ニ御所ヲ營ミ、尊敬無限、後ニ同國柄浦ニ改メ移リ、柄ノ公方ト號ス、義昭公後年ニハ、折々藝州ヘモ下向アリ、兩川ト內謀アリテ大坂ノ上人、若江ノ三

御判敎書

好、其外諸國ノ諸將ヘ、密ニ御敎書ヲ賜リ再ビ歸洛ノ促シ頻リ也、

〔成氏年中行事五月〕十七日御的アリ、〇中略御的之射手兼日被仰出、領掌ノ上ニテ、御敎書ヲナサレ御的ノ賞ヲ被下、

〔和簡禮經五〕一御敎書事

請上意諸事、從官領被書出ヲ御敎書ト申也、〇中略依于事號御書御敎書、直ノ御判アル事モアリ、〇中略

一御書御敎書、御判御敎書ト申ハ、件留ニシテ、年號月日書續ケ、御文章ニ被遊候ヲ｜｜御敎書ト申也、

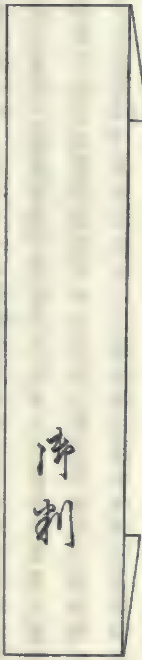
〔貞丈雜記九書札〕御內書も、御敎書も、公方樣の御書也、〇中略御敎書の古き案文左の如し、

於結城中務大輔館致合戰、親類被官人等或ハ討死、或被疵之條尤神妙、彌可勵軍功之狀如件、

永享十一年八月廿八日御判

岩城左京亮殿

又ハ御諱



上下なひれらす只なし折也

〔吾妻鏡八〕文治四年五月十七日壬子、今日被定云、御怱劇之時御敎書、不可被載御判、可爲掃部頭〇藤原親能判、若故障之時者、可爲盛時〇平判之由云云、

〔集古文書十御敎書〕相摸國鎌倉相承院藏

判

鶴岳八幡宮寺供僧職事

權律師良喜

右人爲彼職一口、宜令致天下安全御祈禱之狀如件、以補、

建久三年七月廿日

〔吾妻鏡 二十一〕建曆三年〇建保元年五月三日癸卯、義盛〇和田絕粮道、疲乘馬之處、寅剋横山馬允時兼引率波多野三郎〇時兼聟横山五郎〇時兼甥以下數十人之親昵從類等、馳來于腰越浦之處、既合戰最中也、〇中略辰剋、曾我中村二宮河村之輩、如雲騷、如蜂起、各陣于武藏大路及稻村崎邊、自法華堂御所、雖有恩喚、義兵有疑殆之氣、無左右不能參上、欲被遣御敎書之比、數百騎之中、波多野彌次郎朝定、乍被寵應此召、參石橋之砌、書之、彼御敎書〇被載將軍〇實朝御判者、以安藝國住人山太宗高爲御使被遣之、軍兵令拜見之、悉以參御方、　九日己酉、爲廣元朝臣奉行、被送御敎書於在京御家人之中、相州〇北條義時大官令〇大江廣元連署、又被載御判云云、是在京武士、不可參向於關東者、令靜謐畢、早可守護院御所、又謀叛之輩、廻西海之由、有其聞、可致用意之由旨、被仰佐々木左衞門尉廣綱云云、

〔集古文書 十 御敎書〕等持院尊氏公御敎書 出雲國出雲郡日御崎社藏

出雲國大野庄內國守名地頭三崎三郎次郎政高、於御方抽合戰畢之條、尤以神妙、於京都可有其沙汰之狀如件、

建武三年三月五日　判

〔建武以來追加〕一常在光寺、與朝倉六郎繁清、檜葉近江守滿清、相論近江國田上內堺湯起請失事、

右湯起請失之淺深者、依牓示奸曲之多少者歟、〇中略如明德之御判之御敎書者、論所之山在之歟、然者任彼御敎書之旨、可有御成敗歟、

永享十一年六月八日

滿親在判
爲種同
增悅同
之忠同
元尙同

廻文敎書

〔源平盛衰記二十〕佐殿大場勢汰事

兵衛佐〇源頼朝謀叛起シ、兼隆判官討レヌト聞エケレバ、伊豆國ニハ、工藤介茂光〇中略驅參、相模國ニハ、土肥次郎實平〇中略等馳集ル、廿日〇治承四年八月兵衛佐彼輩ヲ相具シテ、相模ノ土肥ヘ越給、此ニテ軍ノ談義アリ、實平申ケルハ、軍ハ謀ト申ナガラ、イカニモ勢ニヨリ侍ベシ、先廻文ノ御敎書ヲ以テ、御家人ヲ召ルベシト、進メ奉ケレバ、然ルベキトテ、藤九郎盛長ヲ使ニテ、院宣ノ案ニ、佐殿ノ施行書ヲ副テ、方々ヘ觸遣ス、盛長是ヲ給テ、先相模國住人波多野馬允ニ觸ルニ、良案ジテ、是非ノ御返事申サズ、源平共ニ兼テ勝負ヲ知ザレバ、後悔ヲ存ズル故ナリ、同國懐島ノ平權頭景義ニ相觸タリ、〇中略同國山内須藤刑部丞俊通ガ孫、瀧口俊綱ガ子ニ、瀧口三郎利氏、同四郎利宗兄弟二人ニ觸タリ、〇中略三浦介義明ガ許ニ相觸タリ、折節風氣アリテ、平臥シタリケルガ、佐殿ノ御使ト聞テ、悅起テ、白キ淨衣ニ立烏帽子著テ出合タリ、廻文ノ御敎書トテ、出サレタリケレバ、手洗嗽ギナンドシテ、御衣披キ、老眼ヨリ涙ヲハラ〳〵ト流シテ申ケルハ、故左馬頭殿〇源義朝ノ御末ハ、果給ヒヌルヤラント、心憂ク思ヒツルニ、此殿バカリ生殘オハシマシテ、七十有餘ノ義明ガ世ニ、源氏ノ家ヲ起シ給ハン事ノ嬉シサヨ、唯是一身ノ悅ナリ、子孫催シ聚テ、御敎書拜ミ奉ベシトテ、三浦別當義澄、大田三郎義成、佐原十郎義連、和田太郎義盛、同次郎義茂、同三郎宗眞、多々良三郎義春、同四郎明季、佐野平太等ヲ始トシテ、郎等雜色ニ至ルマデ催集テ、是ヲ拜シム、各聞給ヘ、義明今年七十九、

老病身ヲ使シテ、餘命旦暮ヲ待ツ、今此仰ヲ蒙ル事、老後ノ悦ナリ、我家ノ繁昌ナリ、略○中イカ様ニモ悦ノ御使ナレバ、祝ヒ奉ベシトテ、酒肴尋常ニシテ、馬一疋ニ太刀一振相副テ引、參上仕ベキトテ、内々御用意アリ、略○中其ヨリ下總ニ越テ、千葉介ニ相觸タリ、院宣ノ案御敎書披見テ、此事上總介ニ申合テ、是ヨリ御返事申ベシトテ、盛長ヲ返ス、千葉介ガ嫡子小太郎ハ、生年十七ニ成ケルガ、折節鷹狩ニ出テ歸ケルガ、道ニテ盛長ニ行合タリ、互ニ馬ヲ控テ、對面シテ、如何ニト問フ、盛長シカジカト答タリ、小太郎心得ズ思テ、盛長ヲ相具シテ、館ニ歸リ、父ニ向云ケルハ、恐アル事ニ候ヘ共、院宣ノ上御敎書成侍ヌ、先度ノ御催促ニ參上ノ由御返事申サレヌ、其上上總介ニ隨タル御身ニモ非ズ、彼ガ參ラバ參ラン、參ラズバ參ラジト仰候ベキカ、全御下知ニ依ベカラズ、只急度參ベキ由、御返事申サセ給フベシト云ケレバ、賢々シク計者哉ト思テ、實ニ然ベシトテ、參ベシト御返事申ケリ、其ヨリ上總介○平廣常ニ相觸ケレバ、生テ此事ヲ奉ル身ノ幸ニアラズヤ、忠ヲ表シ名ヲ留ン事、此時ニアリトゾ申ケル、

○按ズルニ、源頼朝當時流人タルヲ以テ、其書ヲ御敎書ト稱スベキ理ナシ、蓋シ頼朝後年征夷大將軍ニ補セラレタレバ、後ヲ以テ前ニ及ボシ、之ヲ敎書ト稱セシナラン、

〔吾妻鏡〕三十八 寛元五年六月廿七日戊申、今日以大納言法印隆辨、被補任鶴岡八幡宮別當職、即被送遣彼御敎書於件宿坊、平左衞門尉盛時爲御使云云、

〔太田康有記〕建治三年六月十七日、爲諏訪左衞門入道奉、被仰云、陸奥左近大夫將監○北條時村所被加評定衆也、可書進御敎書云々、

〔古備雜纂〕卯 宗像大宮司職事、爲異賊防禦、可被還補之由、被申入本所畢、且任先例、相從本所之務、且可致軍忠之狀、依仰執達如件、

正安三年十二月十六日　　相模守花押○北條師時

吹擧敎書

武藏守花押(○連署北條時村)

宗像大宮司殿

〔太平記十〕大佛貞直幷金澤貞將討死事

金澤武藏守貞將モ、山内ノ合戰ニ、相從フ兵八百餘人被打散、我身モ七ケ所マデ疵ヲ蒙テ、相摸入道(○北條高時)ノ御座ス東勝寺ヘ打歸リ給タリケレバ、入道不斜感謝シテ、軈テ兩探題職ニ可被居御敎書ヲ被成、相摸守ニゾ被移ニノレ、貞將ハ一家ノ滅亡日ノ中ヲ不過ト被思ケレ共、多年ノ所望、氏族ノ規摸トスル職ナレバ、今ハ冥途ノ思出ニモナレカシト、彼御敎書ヲ請取テ、又戰場ヘ打出給ケルガ、其御敎書ノ裏ニ、棄我百年命、報公一日恩、ト大文字ニ書テ、是ヲ鎧ノ引合ニ入テ、大勢ノ中ヘ懸入、終ニ討死シ給ケレバ、當家モ他家モ、推雙テ感ゼヌ者モ無リケリ、

〔太平記三十八〕畠山兄弟修禪寺城楯籠事附遊佐入道事

去年ヨリ畠山入道道誓、舍弟尾張守義深、伊豆ノ修禪寺ニ楯籠テ東八ケ國ノ勢ト戰ヒケルガ、兵粮盡テ落方モナカリケレバ、皆城中ニテ討死セシトス、左馬頭殿(○足利基氏)ヨリ使者ヲ以テ、先非ヲ悔テ、子孫ヲ思ハヾ、頸ヲ延テ可降參由被仰ケルヲ、誠ゾト信ジテ、道誓ハ禪僧ニナリ、舍弟尾張守ハ、伊豆國ノ守護職還補ノ御敎書ヲ給テ、九月(○康安二年)十日降參シタリケルガ、道誓ハ伊豆ノ府ニ居テ、先舍弟尾張守ヲ、鎌倉左馬頭ノ御座スル箱根ノ陣ヘゾ參ラセケル、

〔相州兵亂記下〕景虎小田原ヘ寄來事

永祿四年三月、上杉景虎八ケ國ノ軍兵ヲ催シ、(○中略)小田原ヘ發向ス、(○中略)其年五月北國ヲ通リ上洛シテ、京ノ公方光源院殿義輝公ヘ出仕ヲイタシ、關東管領ノ御敎書ヲ賜リ、朱柄ノ唐笠同御紋ノユタンヲ御免アリ、御諱ノ一字ヲ被下、輝虎ト改名シテ、アジロゴシ、狀ノ裏書ヲ御免アリ、

〔沙汰未練書〕一官途事

安堵敎書

地頭御家人等不帶關東吹擧御敎書者不可成之、於自任官者有其科、又自由出家事同前、

〔宮寺舊記〕一關東右大將家御吹擧狀云

成淸法印申

一寶塔院莊之事

一彌勒寺事

右兩條任道理可有御沙汰之由先日被仰下候了、神社事殊可被行善政候也、自然默止不便事候、以此旨可令披露給候、恐惶謹言、

元曆元　十月廿八日　頼朝判

進上　大藏卿殿

八幡別當成淸申寶塔院領事、以前被下宣旨院宣之由申候、其理候者可令申達給候歟、恐惶謹言、

建久元　十二月十四日　頼朝

三位殿

〔太平記六〕赤坂合戰事附人見本間拔懸事

去程ニ、次ノ日〇元弘三年二月三日、軍ノ最中ニ、平野入道高櫓ニノボリテ大將〇阿曾時治ノ御方ヘ申ベキ子細候、暫ク合戰ヲ止メテ聞召候ヘト云ケレバ、大將澁谷十郎ヲモテ事ノ樣ヲ尋ヌルニ、平野木戸口ニ出合テ、楠和泉河内ノ兩國ヲ平ゲテ、威ヲ振ヒ候シ刻ニ、一旦ノ難ヲ遁レン爲ニ、不心御敵ニ屬シテ候キ、此子細京都ニ參ジ候テ、申入候ハント仕候處ニ、已ニ大勢ヲ以テ、被押懸申候間、弓矢取身ノ習ヒニテ候ヘバ、一矢仕リタルニテ候、其罪科ヲダニ、可有御免ニテ候ハヾ、頸ヲ伸テ、降人ニ可參候、若叶フマジキトノ御定ニテ候ハヾ、無力一矢仕テ、尸ヲ陣中ニ曝スベキニテ候、此樣ヲ具ニ被申候ヘト云ケレバ、大將大ニ喜テ、本領安堵ノ御敎書ヲ成シ、殊ニ功アラン者ニハ、則恩賞

ヲ可申沙汰由返答アリテ、合戰ヲゾ止メケル、

〔太平記三十六〕清氏叛逆事附相模守子息元服事

將軍ノ執事細川相模守清氏、其弟左馬助、猶子仁木中務少輔三人、共ニ都ヲ落テ、武家ノ怨敵ト成ニケリ、事ノ根元ヲ尋ヌレバ、佐々木佐渡判官入道道譽ト、細川相模守清氏ト、内々仇ヲ含ム事有シニ依テ、終ニ君臣豺狼ノ心ヲ結ブトゾ聞エシ、先加賀國ノ守護職ハ、富樫介建武ノ始ヨリ、今ニ至ルマデ、一度モ變ズル事無シテ、而モ忠戰異他、成敗依不962、恩補列祖ニ復セシヲ、富樫介死去セシ對、其子未幼稚也トテ、道譽尾張左衞門佐ヲ聟ニ取テ、當國ノ守護職ヲ申與ントス、細川相模守是ヲ聞テ、サル事ヤ可有トテ、富樫介ガ子ヲ取立テ、則守護安堵ノ御教書ヲゾ申成ケル、○中略次ニ備前ノ福岡ノ庄ハ、頓宮四郞左衞門尉ガ所領ナリ、然ルヲ頓宮ガ軍忠中絕ノ剌、赤松律師則祐○是ヲ申給ル後、頓宮細川ガ手ニ屬シテ、忠有シカバ、細川是ヲ贔屓シテ、安堵ノ御教書ヲ申與フ、

〔氏鄕記上〕諸大將追討事

去程ニ、飛脚到來シテ、御妹聟近江國北ノ郡ノ守護淺井備前守長政、心替ノ由申ケレバ、先淺井ガ一黨ヲ退治シテ、當國ヲバ靜ムベケレトテ、越前國金崎ヨリ引返シ、上洛シ給ヒケリ、是ニ依テ、淺井ガ一黨、佐々木ガ殘黨蜂起シテ、近江國ノ通路不穩ケレバ、信長公江州ヘ下向有テ、國中ノ城主大名共ニ、被下仕置ノタメ、數多催詑レケリ、又當國ノ住人幕下ニ屬セシ輩ニモ、本領安堵ノ御教書ヲ被出ケルニ、此時蒲生父子ニ、爲加增被下シ御教書ニ云、

倾中方目錄

一　一千石　吉田分
一　四百石　赤佐分
一　八百石　安部井分

御感敎書

一五百石　河井分
一三百石　大塚分
一貳百石　橫山分
一貳百五拾石　栖雲分
一三拾石　梅若大夫分
一三拾石　交山分
一貳千石　小倉越前守分同右近大夫分共ニ
已上五千五百拾石
此外
市原四郷一職ニ加之
右所〻宛行也、全領知不ㇾ可ㇾ有二相違一之狀如ㇾ件、
元龜元年五月十五日信長御朱印
蒲生左兵衞大夫殿
同　忠三郎殿

〔吾妻鏡三十七〕寛元四年三月廿日己酉、有二臨時評定一、市河次郎左衞門尉搦二進强盜海賊等一賞事、及二度度高名一畢、有二御感一之由、可ㇾ賜二御敎書一、且御恩沙汰之時、載二加注文一、可ㇾ被ㇾ申旨云云、

〔太平記十九〕靑野原軍事附嚢沙背水事
顯家卿〇源、中院、五月〇元弘三年、廿二日、和泉ノ堺安部野ニテ討死シ給ケレバ、相從フ兵盡ク腹切、疵ヲ被テ、一人モ殘ラズ失ニケリ、顯家卿ヲバ、武藏國ノ越生四郎左衞門奉ㇾ討シカバ、首ヲバ丹後國ノ住人武藏右京進政清是ヲ取テ、甲太刀刀マデ進覽シタリケレバ、師直是ヲ實撿シテ、疑フ所無リシ

カバ、抽賞御感ノ御敎書ヲ兩人ニゾ被下ケル、

〔頼印僧正綸詞〕白旗一揆、南大將ニモ案内セズ、鷲ノ外城ニ責入テ、挑戰事數廻、ツヒニ外城ヲ攻メ落ス、今日六字法中日ニアタルトテ、御方貴賤上下、法驗ヲ悅ケル、御感ノ御敎書ヲ被成テ云、

當六字經修法中日、鷲城沒落、冥感令然者也、殊可被抽丹誠之狀如件、

永德元年十一月十八日　氏滿在判

遍照院僧正御房

〔武家名目抄 文書二〕按、御感御敎書とは、感狀を御敎書の式になされしものをいふなり、頼印僧正綸詞に載たるは、常の御敎書にはあらで、丹州書札式に、所謂御書御敎書といふものなり、

問狀敎書

〔御成敗式目〕一帶問狀御敎書致狼藉事

右就訴狀被下問狀者定例也、而以問狀致狼藉事、姧濫之企、難遁罪科、所申爲顯然之僻事者、給問狀事、一切可被停止矣、

〔新御式目〕諸人訴訟問狀事正應三十九評

訴狀爲非據者、不可賦之由、可被仰問注所歟、尋明可成御敎書之旨、可被仰五方引付奉行人歟、

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年六月十一日丁卯、雜人訴訟事、相分國々、被付奉行人、而度々雖被相觸、不事行之時、申御敎書之間、尫弱訴訟人、數反往還、經日月事不便、自今以後、不可申成御敎書、以奉行人奉書、可加下知之旨被仰出、

〔吾妻鏡 三十九〕寶治二年九月廿日甲子、東中務入道素暹可成問狀御敎書之由、伊勢前司行綱、大曾禰左衛門尉長泰等、爲奉行傳仰、素暹申領狀云云、

○按ズルニ、問狀ノ事ハ、法律部中編訴訟文書篇ヲ參看スベシ、

召文敎書

〔吾妻鏡 三十五〕寬元二年六月十七日丙戌、於遠國訴人者、西收以前、不可被成召文御敎書之旨被傳

法云云、

裁許敎書

〔寶簡集十九〕六波羅召文御敎書案

高野山金剛峯寺衆徒申、和泉國麻生五郎入道并舍弟信家以下輩、號御家人、打入近木庄、抑留年貢致條々猥藉由事、重訴狀如此、來廿日以前可被催上也、仍執達如件、

永仁六年九月三日

右近將監在判〇六波羅探題北條宗方

前上野介在判〇六波羅探題大佛宗宣

品河刑部左衞門尉殿〇淸宗

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年二月廿六日甲申、廣澤三郎兵衞尉實能與同彌次郎依郎從事及訴論、今日被召決是非於御前、實能直蒙裁許、從伴士以下者、可相從之由云云、滿定於當座書其御敎書、前武州加御判之後、自令授實能給云云、

追放敎書

〔細川勝元記〕文正元年、武衞義敏走北國、伊勢守貞親賜追放御敎書、一家沒落、義視逃細川勝元家、義政遣告文、請和還住本所、

請文

〔和簡禮經一〕一御敎書御請事押紙云

七月十三日御敎書、今月七日到來、畏拜見仕候、抑――――發向事被仰出候、不日馳向彼館、可致忠節候、此等之趣宜預御披露候、恐惶謹言、

永享六年八月七日　　但馬守國成上判

進上　御奉行所

上文字ハタテマツルト讀、判形ハ上文字ノ左ノ脇江ヨセテスユル、上包ニモ月日ノ下ノ如ク面ニ書テ、裏ニ名字ヲ二字書、

右之分、式正之時也、

雜載

又云、上文字計ニシテ、其通ノ紙ノ裏ニ判ヲスユル事モアリ、

一右之趣ヲ少略シテ書時ハ

――――事、此等之趣、宜預御披露候、恐惶謹言、

八月七日　國成判

――殿ウハ巻ニ留ニ名宗計、ウラニ名字宜、

〔太田康有記〕建治三年十二月十九日、御寄合、山名殿相太守、城務康有、被召御前、奥州被申六波羅政務條々、○中略御敎書案草進了、付島田六郎云々、

〔太平記十六〕將軍筑紫御開事

建武三年二月八日、尊氏卿兵庫ヲ落給、○中略筑前國多々良濱ノ湊ニ著給ケル、○中略宗像大宮司使者ヲ進テ、御座ノ邊ハ、餘リニ分内狹テ、軍勢ノ宿ナンドモ候ハヂバ、恐ナガラ此弊屋へ御入有テ、暫此間ノ御窮屈ヲ息ラレ、國々へ御敎書ヲ成レテ、勢ヲ召レ候ベシト申ケレバ、將軍軈テ宗像ガ館へ入セ給フ、

〔太平記三十〕高倉殿京都退去事附殷紂王事

同二〇觀應年七月晦日、石塔入道、○賴房義桃井右馬權頭直常二人、高倉殿○直義足利へ參テ申ケルハ、仁木、細川、土岐、佐々木、皆己ガ國々へ逃下テ、謀叛ヲ起シ候ナル、○中略宰相中將殿○義詮足利ノ御敎書ヲ以テ、勢ヲ催スカニテゾ候ラン、○中略勢モ少ク御用心モ無沙汰ニテ、都ニ御座候ハン事如何トコソ存候へ、○中略先北國へ御下候テ、東國西國へ御敎書ヲ成下サレ候ハンニハ、誰カ應ジ申サヌ者候ベキト、又諫儀モナク申ケレバ、○下略

〔親元日記〕寛正六年四月十八日乙未、細河殿ヨリ御使、寺町三郎左衞門就奥州之儀、近國江御敎書御奉書事、連々令申畢、不日被仰付候樣、明日未後有御披露者、同日野殿江可有御申之由被仰之、必可被掛

御意云々、

〔文明一統記〕一政道を御心にかけらるべき事

何事を申ても、おちふす所は、たゞ政道を正しく行はんにはしくべからず○中略一方むきのさたは、奉行披露にまかせて、御教書に御判をするゐられん計也、

下文

名稱

下文トハ、將軍ノ令ヲ奉ジテ、政所ヨリ下ス書ヲ云フ、其料紙ハ鳥子、杉原等ヲ用キル、後鳥羽天皇ノ建久元年、源頼朝右近衞大將ニ任ゼラル、依テ政所ヲ置キ、政所ノ下文ヲ以テ天下ニ令ス、蓋シ中古以降行ハルヽ所ノ院廳幷ニ攝關大臣ノ政所ノ下文ノ名ヲ襲ヒシナリ、而シテ其下文ニハ、別當、令、知家事、案主等、必ズ列署ス、後ニハ執權、連署之ニ署シ、足利幕府ニ至リテハ、必ズ將軍ノ判ヲ加ヘテ下スコトヽナレリ、

下文制

守護地頭等ヲ補任スル爲メニ下スヲ補任御下文ト云ヒ、勳功ヲ感賞スルノ爲メニ下スヲ恩賞御下文ト云ヒ、本領ヲ安堵スル爲メニ下スヲ安堵御下文ト云フ、而シテ詐テ下文ヲ申請シ、又下文ヲ帶シテ施行ノ輩、本主ト故戰スレバ、罪ヲ科シタリ、

詐申請下文

〔運歩色葉集〕久下文(クダシブミ)

〔貞丈雜記〕九書札一御下文(クダシブミ)は、政所より書き下す狀也、文言の始終に下と云字を書ゆへ、くだしぶみと云也、

〔沙汰未練書〕一御下文トハ、將軍家御恩拜領御下文也、

〔御成敗式目〕一雖帶御下文、不令知行、經年序所領事、

右當知行之後、過二十箇年一者、任右大將家之例、不論理非不能改替、而申知行之由、掠給御下文輩、雖帶彼状、不及叙用矣、

〔御成敗式目追加〕一三島社領伊豆國糠田郷富士左衞門入道行阿、北條入道殿御時、掠給御下文、及九十餘年之處、西大夫盛繼訴申子細之刻、被止行阿之押領、當時盛繼預御下知畢、奉行三島左衞門尉、

誤下下文

〔建武以來追加〕一寺社本所領事 應安元六十七、右筆彈正大夫入道昌椿奉行之、○中略

以本所領、誤被成御下文地事、被充行替之程、先本所與給人各半分可爲知行、不可有守護人之綺矣、

戰帶下文者

〔侍所沙汰篇追加〕一合戰咎事 觀應三九十八、右筆飯尾大和守貞國、

帶御下文施行之輩、尤可相待使節遵行處、恣亂入所々之間、本主依支申、多及合戰之由有其聞、甚不可然、自今以後者、不論理非、至故戰之輩者、悉可收所帶、亦於防戰之仁者、可分召所領半分、但非領主者、可准故戰也、

下文式

〔和簡禮經〕五一御下文事

發端ニ下ト云字ヲ書出ス、此時ハ必御袖判也、其人之名字官實名マデ御文言ニ被書入也、然間奥ニ宛所ナシ、年號月日書續ル也、假令バ、

御判 袖ニアリ

下

曾我左衞門尉師助 此仁太平記ニ見ユ

可令早領知周防國與田保事

右爲勳功之賞所宛行也者、守先例可致沙汰之状如件、

觀應元年十二月廿七日

字クバリ不違、下ノ字右ノ字ヨリタカシ、

右等持院殿〇足利尊氏御代

上古ニハ、直ノ御判、不ㇾ限ㇾ仰之旨ヲ書出時ハ、知ㇾ此下文ニ相調申トミエタリ、近代斷絶ナリ、

〔吾妻鏡一〕治承四年十月十六日乙未、今夜至相模國府六所宮、於此所被奉寄當國早河庄於宮根權現、其御下文相副御自筆消息、差雜色鶴太郎、被遣別當行實之許、〇中略御下文云、

奉寄　宮根權現御神領事

相模國早河本庄

於宮根別當沙汰、早可被知行也、

右件於御庄者、前兵衛佐爲源頼朝沙汰、所寄進也、全以不可有其妨、仍爲後日沙汰、注文書、以申、

治承四年十月十六日

〔吾妻鏡一〕治承四年八月廿四日甲辰、實平云、世上屬無爲者、永實宜被撰補宮根山別當職者、武衛〇源頼朝亦諾之給、〇中略謂此行實者父良尋之時、於六條廷尉禪室〇源爲義并左典厩〇源義朝等、聊有其好、因玆行實於京都得父之讓、念補當山別當職、下向之刻、廷尉禪室賜下文、於行實、偏東國輩行實若相催者可從者、左典厩御下文云、駿河伊豆家人等、行實令相催者可從者、然間武衛自御座于北條之比、致御祈禱專存忠貞云云、〇下略

〔吾妻鏡七〕文治三年十一月廿五日壬戌、有但馬國住人山口太郎家任云者、弓馬達者勇敢士也、而屬木曾左馬頭、爲近仕隨一也、被誅亡之後、在豫州之家、豫州逐電之刻、同横行處々之間、北條殿令生虜之、所被召進也、仍仕于兩人、由緒被尋問之處、申云、家任譜代源氏御家人也、就中父家修者、仕六條廷尉禪室〇源爲義、輸忠、拜領數箇所、平家執天下之時、悉以牢籠、左典厩〇義仲入洛最初、壽永二年八月、適令安堵畢、爲酬其德、一旦雖列門下、於關東不插異心、又屬豫州之條、人之爲虚訴歟者、六條殿御下文、于今令帶否、被尋仰之間備進之、二品洗兩手、令拜見之給、邦通讀申、保元三年二月日御

下文也、爲内舍人筆跡也云々、優此御下文、他事不及糺明沙汰、可安堵本職之旨、直被仰含云云、被重餞時之趣、諸事如斯云云、

〔吾妻鏡二〕治承六年(壽永元年)〇八月五日癸卯、鶴岳供僧禪育捧訴狀云、長日不退御祈禱、更無怠慢之處、於恩賜田畠、准平民、被充催公事、愁訴難堪云云、仍則停止萬雜公事之由被仰下、召禪育於御前、直賜御下文、

下

可令早停止若宮供僧禪育在家役幷自作麥畠壹町地子事

右件人、爲若宮供僧、長日之御祈無懈怠、而在御令住房、准於土民、懸萬雜事、令煩之條、不穩便事也、於自今已後者、云萬雜公事、云垣内畠、可令停止其煩之狀、所仰如件、以下、

治承六年八月五日

〔集古文書(十二下文)〕源頼朝卿下文 相模國鎌倉鶴岡八幡宮社司藏

判

下　相模國中坂間郷

可早免除　若宮相撲字新三郎家眞給田畠在家等事、

田壹町　畠壹町　在家壹宇

右件給田畠在家免除畢、地頭名主等、不可云煩之狀如件、

壽永三年六月三日

〔吾妻鏡 六〕文治二年十月一日甲戌、賀茂別當領出雲國福田庄、石見國久永保、參河國小野庄等、成御下文、被進社家、當宮事、二品〈〇源頼朝〉御歸依異他之故也、此外院宮貴所以下、權門領事、爲被停止地頭新儀、先日自公家、被下目錄訖、仍連々被尋究子細、成御下文、今日被進京都云云、

其詞云

先日所下給候御下文書内、神社佛寺御領者、去比令沙汰進候了、其外院宮貴所、及諸家諸司諸國

季御讀經御祈用途、便補任等事、

下文二百五十二枚、書狀二通、相具本文書並目錄、一々所令成敗進上候也、於武士之押領不當者、善惡尤可被仰下事候、然者隨御尋任所行之旨、可加其誡候、此外事等少々相交候、不知子細候之間、難不能計沙汰候、於今度者、任仰旨、大略成下文進上候、凡者如此事、自今以後、令仰合攝政家御下于記錄所、可有御成敗候也、以此旨可令披露給候、頼朝恐惶謹言、

十月一日　　頼朝

進上　帥中納言殿

〔長門本平家物語 八〕のぶつらは、本所乘長右馬允たゞつらが子也、伯耆國にれいらくして、金持があたりにへめぐりけるを、平家めつぼうのゝち、兵衛佐頼朝是を聞給ひて、のぶつらは、さる者にてあんなり、さやうのものこそ、大せつなるべけれとて、かのくにの守ごに仰て、去文治二年に、關東へめし下されて、奉公をいたす程に、ずい分きり者にて、兵衛佐自筆のかなの下文にて、のとの國大屋庄〈與庄〉給をのぶつら給けり、はじめけるよりして、その後庄ゑんあまた給て、大名にてぞありける、

〔吾妻鏡 七〕文治三年十月廿九日丙申、常陸國鹿島社者、御歸敬異他社、而每月御膳料事、被充于當國奥郡、今日令加下知給云云、

政所下　常陸　奥郡

可令早下行鹿島毎月御上日料籾佰拾石事

多賀郡　十二石五斗

佐都東　十四石

佐都西　九石八斗

久慈東　三十六石一斗

久慈西　十四石三斗

那珂東　十三石九斗

那珂西　十九石四斗

右件籾、毎年無懈怠、可下行之狀如件、

文治三年十月廿九日

中原○光家

藤原○邦通

大中臣○秋家

主計允藤原○行政

前因幡守中原○廣元

○按ズルニ、文治三年、未ダ政所ヲ置カズ、蓋シ政所ノ下文ヲ用キルニ及テ、追改セシモノナルベシ、

〔吾妻鏡十一〕建久二年正月十五日甲子、被行政所吉書始、前々諸家人浴恩澤之時、或被載御判、或被用奉書、而今令備羽林上將給之間、有沙汰、召返彼狀、可被成改于家御下文旨被定云云、

〔吾妻鏡十二〕建久三年六月廿日庚申、美濃國御家人等、可從守護相摸守惟義下知之由、被仰下云云、是爲被鎭洛中群盜等也、

〃前右大將家政所下　美濃國家人等
可早從相摸守惟義催促事
右當國內庄之地頭中、於存家人儀輩者、從惟義之催、可致勤節也、就中近日、洛中强賊之犯、有其聞、爲禁遏彼黨類、各企上洛、可勤仕大番役、而其中者不可家人之由、在々早可申子細、但於公領者、不可加催、兼又重隆佐渡前司郞從等、催召可令勤其役、於隱居輩者、可注進交名之狀、所仰如件、

建久三年六月廿日　　案主　藤井〇俊長

知家事中原〇光家

令民部少丞藤原〇行政

別當前因幡守中原〇廣元

前下總守源朝臣〇邦業

散位中原朝臣〇親能

八月五日乙巳、令補將軍給之後、今日政所始、則渡御〇中略千葉介常胤先給御下文、而御上階以前者、被載御判於下文訖、被始置政所之後者、被召返之、被成政所下文之處、常胤頗確執、謂政所下文者、家司等署名也、難備後鑒、於常胤分者、別被副置御判、可爲子孫末代龜鏡之由、申請之、仍如所望云云、

〔壬生家文書一〕將軍家政所下　若狹國國富庄

仰拾陸箇條

一可早任前地頭時貞法師例、令耕作地頭佃事

一可令停止地頭定使月別入物事

一可任時貞法師例、致沙汰狩鮎河人夫事

一可令停止發養時狩仕百姓於地頭方事

一可同令停止監役事

一可同令停止地頭代官等所飼馬事

一可同令停止地頭苅取百姓麻事

一可同令停止除佃所當運上外京上幷木津越夫馬役事

一可令地頭得分內募牢分立用關東夫馬功米事

一可令停止女房幷代官兩人三方役事

一可令領家地頭等分逃亡百姓在家幷田畠等事

右件拾壹箇條、見去承元元年十二月日當家政所下文、可令停止新儀非法云々、而如建保四年正月日宮御新顯所官廚家圓宗寺庄解等者、在國地頭代官、一切不承引、追年張行非法云々、事實者、甚不穩便、爭背彼狀、可致新儀沙汰哉、早任先度御成敗狀、可致沙汰也、

一地頭代官有濫召取公文百姓令書起請文事

右如同解狀者、去承元元年企條條訴訟、蒙裁斷之間、雖不承引、成後恐、去承元三年二月廿九日、召籠公文家長法師幷百姓等、令責書起請文云々者、不召決兩方之間、雖糺眞僞、事若實者、甚不穩便、早可返與件起請文矣、

一臨時重役無其隙事

右如同狀者、閑院造替、關東御堂釘、正地頭宿所燒失之訪、叡山講堂材木引、八條御所用途、其外當國造八幡宮杣入之煩等公文、百姓等之勤已巨多也云々者、爲地頭職、何不下知雜事哉、但於過分不堪之課役者、早可令優土民矣、

一百姓依無實令行過料事

右如同狀者、雖無指犯過、觸事責取過料、剩其身幷緣者等、悉令引取云々者、罪科之輩出來者、糺決犯否、可致沙汰之處、觸事行過料於土民之條、甚不穩便、早可令停止非法矣、

一紙漉恒利依地頭責逃去事

右如同狀者、恒利非指百姓、以傾家之憐愍被召仕之處、地頭依令懸課役、逃去畢云々、如狀者已忘公平、如元可令安堵其身、且雖向後、可令停止非法矣、

一百姓字紀大男犯科間自餘輩欲令懸被管事

右如同狀者、件男企盜犯、令逃去之間、稱同意之由、不誤之輩、令引其身於地頭方畢云々者、犯人逐電之後、雖爲緣者、贓狀不露顯者、爭不糺犯否、猥可處罪科哉、證據不分明者、早可令安堵彼輩矣、

以前條々、且守先御下知狀、且任先例、可停止新儀非法之狀、所仰以下、

建保四年八月十七日

案主　菅野〇景盛

知家事惟宗〇孝實

令圖書少允清原判〇清定

別當陸奧守大江朝臣判〇廣元

大學頭源朝臣〇仲章

相摸守平朝臣判〇義時

右馬權頭源朝臣〇賴茂

左衛門權少尉源朝臣〇惟信

民部權少輔大江朝臣〇親廣

武藏守平朝臣判〇時房

書博士中原朝臣判〇師俊

信濃守藤原朝臣判〇行光

〔吾妻鏡四十一〕建長三年七月八日丙寅、將軍家〇藤原頼嗣令叙三品賜之後事更於政所成御下文云云、

〔忽那家古文書〕將軍家〇宗尊親王政所下 藤原於龜丸

可令早領知伊豫國忽那島内西浦總追捕使職并名田畠名字等載譲狀事

右任親父左衞門尉通重建長五年二月廿九日契狀可令領掌之狀、所仰如件、以下、

建長八年七月九日 案主 淸原

知家事淸原

令左衞門少尉藤原

別當陸奥守平朝臣花押〇北條政村

相模守平朝臣花押〇北條時頼

〔侍所沙汰篇追加〕

下

可早守宣旨狀令禁斷條々事

可令搦禁勾引人并賣買人輩事

右嘉祿元年十月廿九日宣旨狀偁、略人之罪、和誘科、章條差所、給恰不輕、兩事之禁、相犯之輩、時俗積習、今未懲改、偁仰京畿諸國所部官司等、可搦進彼輩、知而不糺同罪者、〇中略以前條々事書遣之、其間子細、所被仰含重家法師也、可被存其旨者、所仰如件、

弘長二年五月廿三日 武藏守〇執權北條長時

相模守〇連署北條政村

〔由良家傳記〕右大將源頼朝公より新田義重へ被進候御書寫

下 武藏國加治鄕百姓等

補任下文

定補郷司職事

新田入道殿

右人補任彼職、如件、百姓等宜承知、不可違失、故下

治承五年十一月十一日

源朝臣御判

〔吾妻鏡十二〕建久三年九月十二日辛巳、小山左衛門尉朝政、先年募勳功、浴恩澤、常陸國村田下庄也、而今日賜政所御下文、其狀云

將軍家政所下　常陸國村田下庄下妻宮等

補任地頭職事

左衛門尉藤原朝政

右去壽永二年、三郎先生義廣發謀叛、企闘亂、爰朝政偏仰朝威、獨欲相禦、卽待具官軍、同年二月廿三日、於下野國野木宮邊、合戰之剋、抽軍功畢、仍彼時所補任地頭職也、庄官宜承知、不可違失之狀、所仰如件、以下、

建久三年九月十二日　案主藤井〇俊長

知家事中原〇光長

令民部少丞藤原〇行政

別當前因幡守中原朝臣〇廣元

下總守源朝臣〇邦業

〔吾妻鏡十四〕建久五年九月廿三日庚戌、但馬國多々良岐庄者、源宰相領所也、而熊野鳥居禪尼〈故左典廐(源義朝)姉公〉日者强所望彼邊、事異他之間、被遣地頭補任御下文、但於有限領家乃貢課役等者、不可有懈怠之由、今日被遣御消息云云、

〔吾妻鏡十九〕承元三年十一月廿日庚戌、諸國守護人緩怠之間、群盗動令蜂起、爲庄保煩之由、國衙之訴出來、依之條々被凝群儀、於爲一身定役者、還誇故實、可有懈緩之儀、結番人數各相替、差年限可令奉行歟、不然者被尋聞食國々子細、可被改不忠輩歟之由、雖有其沙汰、未被一決、以此次、彼職補任本御下文等、可進覽之旨、先被仰近國、是自然恩澤、與勳功賞事、可有差別之故也、義盛、仲業、清定等奉行之、十二月十五日乙亥、近國守護補任御下文備進之、四年八月十二日丁卯、信濃國善光寺地頭職者、故右大將軍〈源賴朝〉御時、〈中略〉長沼五郎宗政申請云、吾身者先世非人也、爲値遇結緣、欲被抽補當寺生身如來地頭者、仍依請之由、賜御下文之後、歷年記之處、〈下略〉

〔吾妻鏡二十六〕承久四年〈貞應元年〉三月三日、相州〈北條時房〉賜伊勢國守護職御下文、是去年依合戰賞、拜領之處、彼狀燒失之由、依被申之、重所被成下也、

〔吾妻鏡三十〕文曆二年〈嘉禎元年〉七月七日戊辰、近江入道虛假、所賜之承久宇治河先登賞、被付神社等之間、今日有其替沙汰、被成御下文、依爲殊勳功、被載其詞、

将軍家政所下　　尾張國長岡住人

補任　地頭職事

前近江守信綱法師

右人承久兵亂宇治河鋒之勸賞豐浦庄之替、可爲彼職之狀、所仰如件、以下、

文曆二年七月七日　　案主左近將曹菅原

知家事內舍人清原

令左衛門少尉藤原(綱基)
別當相模守平朝臣(時○房)
武藏守平朝臣(泰○時)

〔太田康有記〕建治三年六月十三日、城務被通使者之間、罷向松谷別莊之處、被仰云、肥前肥後國安富庄地頭職、相大守可有御拜領之由、內々有御氣色、只今可被成進御下文者、可爲康有之奉書云々、仍書御下文持參山內、被以諏方左衛門入道申入之處、於明殿被召御前、被仰云、當庄事聊有子細言上處、申沙汰之條、所悅思召也云々、

〔沙汰未練書〕一安堵者、讓得父母所領田畠等、可知行之由、賜御下文事也、當世者、外。題。安。堵。トテ、讓狀袖所御判成也、

〔御成敗式目〕一讓所領於子息、給安堵御下文之後、悔還其所領讓與他子息事、
右可任父母之意之由、具以載先條畢、仍就先判之讓、雖給安堵御下文、其親悔還之、於讓與他子息者、任後判之讓、可有御成敗矣、

〔御成敗式目追加〕一御家人後家、任亡夫讓、給安堵御下文事、(暦仁元十二十六、評、)
此條平均之例也、爰於令改嫁者、可宛給他人之旨、被定置已來、爲免其難、或少年或無病之族、寄事於所勞、讓與子息親類、申給安堵御下文之後、及改嫁云々、甚以濫吹也、於自今以後者、不臨重病危急者、不可被許其讓矣、

〔新編追加(雜務)〕未處分所領相論配分事(建治二七二、評、奉行島田民部丞、)
云相論之是非、云得分之多少、始終於引付、可有其沙汰、其訴狀等者、安堵奉行人可賦之、同御下文施行事、以配分狀、可付安堵奉行人、御下文被成下者、安堵奉行可下于給人、

〔貞應弘安式目〕一(御內)安堵事

得本主讓之輩申安堵之時、成下文者定法也、本主存日之間、成安堵下文歟、自今以後、一向可令停止之、〇中略

弘安七年八月日〇中略

十一ヶ條新御式目

條々　弘安七八十七

一安堵奉行人事

稱召調訴陳狀、徒送年月之條、尤不便也、爲讓狀顯然者、早書上御下文、於有子細事者、卽可賦出引付、

〔御成敗式目追加〕安堵御下文事弘安七十廿九評、

右不可准御成敗、訴訟出來之時者、就理非可被裁許焉、

〔新編追加政所〕一質券賣買地事

右於向後者、不及沙汰、但被成安堵御下文并下知狀分者、今更不可有相違、

正安二年七月十日　陸奧守判〇北條宣時

相摸守判〇北條貞時

上總前司殿

〔建武以來追加〕被仰出條々文明八八廿四〇中略

一就當知行、申給安堵御判并奉書等事、

堅致糺明之、領知無相違之旨、召置訴人請文、可伺申之、若構謀略者、任先例可被沒收所領、無所帶者、可被處其身於罪科矣、

〔吾妻鏡二〕治承六年〇壽永元年六月五日甲辰、熊谷二郎直實者、匪勵朝夕恪勤之忠、去治承四年追討佐竹冠者之時、殊施勳功、依令感其武勇、給武藏國舊領等、停止直光之押領、可領掌之由被仰下、而直實此間在國、今日令參上、賜件下文云云、

下　武藏國大里郡熊谷次郎平直實所定補所領事

右件所、且先祖相傳也、而久下權守直光押領事停止、以直實爲地頭之職成畢、其故何者、佐汰毛四郎常陸國奥郡花園山楯籠、自鎌倉令責御時、其日御合戰、直實勝萬人前懸一陣壞、一人當千顯高名、其勧賞件熊谷郷之地頭職成畢、子々孫々永代不可有他妨、故下、百姓等宜承知、敢不可違失、

治承六年五月卅日

〔吾妻鏡十一〕文治六年〇建久元年七月十一日癸亥、土佐國住人夜須七郎行宗、可安堵本領之旨、賜御下文、是土佐冠者被討取給、于時不惜身命、討取怨敵蓮池權守以降、度々有勳功云云、

〔吾妻鏡十九〕承元三年十二月十五日乙亥、近國守護補任御下文備進之、〇中略小山左衛門尉朝政申云、不帶本御下文、雖祖下野少掾豐澤、爲當國押領使、如檢斷之事、一向執行之、秀郷朝臣天慶三年、更賜官符之後、十三代數百歲奉行之間、無片時中絶之例、但右大將家〇源頼朝御時者、建久年中亡父政光入道、就讓與此職於朝政、賜安堵御下文許也、敢非新恩之職、稱可散御不審、進覽彼官符以下狀等云云、

〔吾妻鏡三十三〕延應二年〇仁治元年四月十二日丙午、若狹前司泰村、河内前司光村、左衞門尉家村、資村、胤村、重村等、賜亡父義村遺跡安堵御下文、有進物等、兄弟各被列參御所幷前武州御方云云、

〔沙石集三〕忠言有感事

同キ〇北條泰時御代官ノ時、鎭西ニ父ノ跡ヲ兄弟相論ズル事有リケリ、父貧クシテ所領ヲウリケルヲ、嫡子カシコキモノニテ、マヅシカラヌマヽニ、是ヲ買テ、還テ父ニシラセケリ、カヽリケルホドニ、イカナル子細カアリケン、弟ニ跡ヲサナガラ讓ヌ、兄關東ニテ訴訟ス、弟召レテ對決ス、兄嫡子ナリ、奉公有リ、申所道理アレドモ、弟讓文ヲ手ニニギリテ申上バ、共ニ其イハレアリ、成敗シガタシトテ、明法ノ家ヘタヅネラル、法家ヲ勘ヘ申テイハク、嫡子也、奉公有トイヘドモ、父スデニ弟ニ

讓ヌル子細有ニコソ、率公ハ他人ニトリテノ事也、子トシテ率公ハ、至孝ノツトメ也、弟ガ申所道理ナリトテ、仍弟安堵ノ下文ヲ給テ下リヌ、

〔諸家文書纂十二〕出羽民部大夫政頼

可令早領知駿河國服織庄內安西鄉半分、甲斐國逸見庄內上大八田村下大八田村半分、夏燒村內狩倉、相摸國大井田鄉內霜窪村地頭職事、

右任度々外題安堵、幷亡父行貞文保三年正月十六日讓狀、可領掌之狀如件、

以下

建武四年三月七日

源朝臣（花押○足利直義）

〔伊達家文書一〕

花押（○足利尊氏）

下　伊達長門權守政長

可令早領知當知行地半分（除吉野新院朝恩拜得宗領）事

右人依參御方、所宛行也、早守先例、可致沙汰之狀如件、

建武五年後七月廿六日

〔大塔物語〕抑信濃國者、小笠原信濃守長秀親父長基祖父政長、代々爲補任守護職處也、長秀募由緖、經訴訟處、上裁既無相違、則賜安堵之御下文、應永七年七月三日、賜御暇、立京都、

〔建武以來追加〕一文書紛失輩訴訟事（貞和二閏九廿七評定）

可爲內談方所務之由、先日雖有其沙汰、於建武三年巳前分者、無事書之間、委細之旨趣、無據糺明歟、任先例、尋問當知行之實否、於有證人等者、須成賜紛失安堵御下文、至同年巳來分者、守舊規、於事書在所（恩賞方、安堵方、問注方、）可有其沙汰焉、（○中略）

御成敗條々(應永廿九七廿六、○松田丹後入道常誓奉行、○中略)

一紛失安堵事

雖帶文書案文、於年紀馳過者、不可有御許容、至帶當知行幷年紀未滿文書案文者、非制限焉、

右條々守此旨、各可申沙汰、若令違犯者、可被處嚴科也、

〔吾妻鏡二十〕建曆二年正月十一日庚申、御弓始也、○中略先召小國源兵衞三郞賴綱、是無雙精兵也、而不帶弓由申之間、被下鎭西以下諸國進納之荒木弓等賜之、一五度射之處、每度其弦絕訖、射藝又順可謂養由、將軍家(○源實朝)御感之餘、於當座賜越前國稻津保地頭職於賴綱、件御下文云、爲弦麻可令知行者、

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年(○建保元年)四月十五日丙戌、和田新兵衞尉朝盛者、爲將軍家(○源實朝)御寵愛、等倫敢不諍之、○中略將軍家對朗月、於南面有和歌御會、女房數輩候、其砌、朝盛參進、獻秀逸之間、御感及再往、又賜日來不事子細、公私互散蒙霧、快然之餘、縮載數箇所地頭職於一紙、直給御下文、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年七月一日甲寅、今日橘右馬允公高、幷本間太郞左衞門尉忠貞、小河左衞門尉、同右衞門等、去承久三年六月、勢多合戰、蒙勳賞之處、加相州(○北條時房)陣、勵軍忠、未預其賞之間、相州連々被擧申之處、猶依無許容、自分勳功之賞、伊勢國十六箇所內、辭四箇所、而令申與御下文給云云、

〔島津本吾妻鏡〕延應二年五月廿日癸未、有恩澤沙汰、人々賜御下文、佐渡前司基綱(○後藤)奉行之、御下文者、自御所分賜之、

〔參考太平記十四〕箱根竹下合戰附二條爲冬討死事

島津家、今川家、毛利家北條家、金勝院、西源院、南都本並云、○中略義貞勝ニ乘テ、鎌倉勢ニ向ヒケル時、村上河內守信貞、一族四十餘人、○註略都合其勢五百餘騎ニテ、義貞ノ勢ヲ追下ス、手負死人數百人ニ及ベリ、直義感ジテ、疊紙ニ、恩賞ノ下文ヲ書テ與ラル、信濃國鹽田庄○註略トゾ聞エシ云々、

別下文

〔梅松論 上〕敵數百人討取間、御かむ〇足利尊氏にたへずして、武藏の太田の庄を、小山の常犬丸〇常恐若誤に充行はる、是は由緒の地なり、又常陸の關の郡を結城に行はる、今度戰場〇建武二年十二月、竹下合戰、の御下文はじめなり、

〔御成敗式目〕一總地頭押妨所領內名主職事
右給二總領一之人、稱二所領內一、掠二領各別村一事、所行之企、雖レ遁二罪科一、宜レ給二別御下文一、雖レ爲二名主職一、總地頭若伺二庭弱之隙一、有レ限沙汰之外、巧二非法一致二濫妨一者、可レ給二別納御下文於名主一也、

〔沙汰未練書〕一名主庄官下司公文田所總追捕使〇註略以下職人等事
件所職等者、總地頭領家進止也、進止者進退事也但帶二各別御下文一者、有レ限公事課役之外、不レ可レ隨二地頭領家私下知一、

雜載

〔簡禮記 四〕御下文書式
一御下文ノ事　料紙ハ鳥子引合杉原等也

古事類苑

政治部五十三

下編

內書 公帖 併入

內書トハ、將軍ヨリ下ス內密ノ書翰ナリ、鎌倉幕府以來、御教書及ビ御下文ノ外、別ニ將軍ノ書翰ヲ以テ、下ニ令シ、又上奏スル毎ニ、必ズ將軍ノ親書ヲ用キタリ、之ヲ御書ト云フ、即チ內書ナリ、內書ハ將軍ノ自筆ヲ本トシ、或ハ家司ニ命ジテ、之ヲ書セシムルコトアリ、並ニ其判ヲ加フ、而シテ足利幕府ニ至リテ、義滿以來ハ、年首、歲暮、嘉節、及ビ物品ヲ進獻スルモノアレバ、必ズ內書ヲ賜フコト、ナレリ、

內書ハ鳥子、若シクハ薄樣引合等ニ書シ、月日ノ下ニ、將軍ノ名ヲ記シテ判ヲ加ヘ、或ハ只判ノミヲ加フ、而シテ之ヲ卷キ、懸紙ヲ加ヘ、兩端ヲ折テ、表書ヲ加フ、然レドモ或ハ封緘シ、表書ヲ加ヘザルコトモアリ、

足利幕府以來、公帖ト云フモノアリ、五山幷ニ大寺ノ住職ヲ任ズル時等ニ用キルモノニテ、亦內書ニ類スルモノナリ、

名稱

〔和簡禮經 五〕一御內書事

御內書ハ被レ撰二貴賤一被レ成候也、假令被二成下一候とても、表向ニテハナク、內々ノ御書トアル心ニテ、御內書ト申也、

內書式

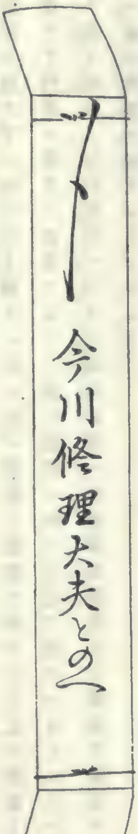
〔貞丈雜記 九 書札〕一御內書も、御教書も、公方樣の御書也、御內書と御教書のかはりめの事、書札條々

に云、御內書御教書のかはりめは、御內書は備中引合一重に書て封之、常の書狀の如し、御判御教書は、杉原一枚に書て封せず、表卷を只押折て墨を不引、又御內書は月日計也、御教書には年號月日をつゞけて書也、鹿苑院殿〇足利義滿勝定院殿〇足利義持兩御代に、日の下に御諱御判在之、御表卷に御諱計也、普廣院殿〇足利義教御時、御諱計、又御判計ある事あり、御表卷に御判を被遊也、御內書の古き案文左の如し、〇永正五年の御內書也

就遠江國守護職之儀、爲目萬疋到來候訖、目出候也、

七月十三日　御判

今川修理大夫どのへ



封め墨を長く引る也

御表卷は、常のひねり文の如くひねる也、〇中略

武雜書札篇に云、御判御教書と申は、杉原薄やうの半切に調進也云々、今の世には、御內書御教書のかはりめを知りたる人なし、俗說に、御內書は內々にて給はる御書也、御教書は表むきより給はる御書也など〻云はあやまり也、御內書も御教書も、表向より給はる御書也、御內書と云は、表卷の上下をひねり、如此して御書を內に封じこむる心也、御教書は、御をしへのふみと讀て、御內書よりも重き事に用ひらる、

〔簡禮記四〕御內書之次第

一御內書トハ、公方家ノ御文ヲ云、總別御內書ト可申事也、御內書トハ御自筆ニ被遊之、內々ニテ被下ヲ云ベキ事也、表向ニ、御右筆ニ、被爲調御判ヲ被遊タルヲ、御書ト可申ヲ、近代大名衆ノ文ヲ御書ト謂ナラハシタル故ニ、公方家ノ御文ヲ御內書ト申也、但御內書ハ竪文也、內御內書ト云時ハ小文ナリ、御自筆ノ御書ヲ御自筆ノ御內書ト申也、

一不依貴賤御內書ヲ被下御事ナリ、等持院殿樣〈○足利尊氏〉寶篋院殿樣〈○足利義詮〉御時マデ、陣中ニオイテ、如何成賤キ輩ニモ、依事被成下タル御事、每々ノ儀ナリ、鹿苑院殿樣〈○足利義滿〉以來、年頭、端午、重陽、歲暮、或ハ茶湯ノ道具、或ハ太刀刀馬鷹等、依獻上之物御內書被成下ナリ、如此ノ御用捨モ、事ニヨリ、時ニシタガフ御事也、

一料紙ノ事、鳥ノ子紙、或ハ薄樣、或ハ引合等ナリ、

三職ヘ被成下御文言、大方如此、是ハ上包上ノ捻ニ、引點有之ナリ、

改年之慶賀、逐日不可有怠慢、殊大番之出仕、嘉例式珍重候、恐々謹言、

正月三日　　　　　　　　　　　義敎御判

　　右京大夫殿

大名衆〈江〉ノ御文言、是モ上包ノ上ノ捻ニ、引點有之也、

改年之慶賀、雖事舊候、珍重々々、更不可有際限、猶期而候也、

正月七日　　　　　　　　　　　義滿御判

　　修理大夫殿

御相伴衆、又ハ五ケ番ノ頭衆〈江〉、如此ノ御內書ナリ、是ハ上包上下ヲ折テ、表ノ方ニ、充所ノミ有之テ、御諱ハ無之也、

爲內書之禮、太刀一腰、馬一疋到來、神妙候也、

月日御判

上野治部大輔どのへ

右條々、大方ノ趣ナリ、御內書トテ、淺々ト御詞少ニノミ被遊事ニテモ無之、依事事細カニ被遊モ、勿論ノ儀ナルベシ、

〔和簡禮經　五〕一御內書事

御內書ハ被撰貴賤被成候也、○中略年號ナシ、若ハ知行方ノ事、御文言ニ籠リ候ヘバ年號アリ、其時ハ御判ノ物ニ成テ御書御敎書、御判御敎書ナド申也、如此ノ時ハ賤キ輩ニモ被成也、御內書ハサマデハナシ、鹿苑院殿○足利義滿御代迄ハ前ノ御判、其以來ハ御下知ニナル也、

御內書ハ上古ハ引合一重、近代ハ鳥子ノ半切、表卷ノ上下不及、其儘押折テ置、日下御諱ニ御判ト、又御判計ト、表卷御諱アルト、ナクテ書下シト、差別被下候仁ニヨルベシ、御判　物ノ時ハ、必竪紙一枚也、

一御內書今度城都槇島已來、逐籠城、至于若江堺津所々令供奉、感悅不淺、本意之上可恩賞、彌可抽忠節事肝要候也、

十一月十二日　御判

曾我兵庫頭どのへ

右靈陽院殿○足利義昭御代

元龜之比、筆者本鄉下總守、

一御敎書事○中略

一御內書ハ內々ノ御書タルニ依テ、御文章不相構、間ニ假名ヲモ被相交、又御自筆モアリ、大形ホ、留感恐々謹言、又謹言、年號ナキヲ――ト申事、

〔丹州書札式〕御内書ハ、被撰被成候也、タマ〳〵被成候トテモ、表向ニテハナキトアル心ニ、御内書ト申候、内々之御書也、年號ナシ、殊成仁體、又別タル忠節ニ被下也、備中紙引合一重、常ノ狀ノゴトシ、但近代鳥子ノ腰文又表卷ノ上下不捻、日ノ下御諱ニ御判計ト、上卷ニ御諱アルト、御諱ナクテ書出スト、色々ノ差別、被下候仁ニヨルベシ、

〔伊勢貞助雜記〕一御内書に、御黑印おされ候事候哉、おもてむきの御内書に、朱印の御事不致覺悟候、又古符案にも不及見申候、

〔書禮袖珍寶　七〕奉書の時は、奉書と書出し、借御鷹と書也、鷹は何にても、たかの名は不書也、御内書にても、御書にても、發端に被成下と書申儀は、いかにも敬也、發端に御内書と書候得ば、可闕樣に無之、付而可闕ために、被成下と書也、

〔土岐家聞書〕一等持院殿(尊氏將軍)、寶篋院殿(義詮公)、鹿苑院殿(義滿公)三代將軍より、當家への御内書には、御名乘を遊されたるも有、御判計もあり、うは卷には、土岐入道殿とさしあげてあそばされ、御名乘を何もあそばさるゝ也、其御内書數通有之、近代は當方すたれたる故に、ケ樣の事なき體也、

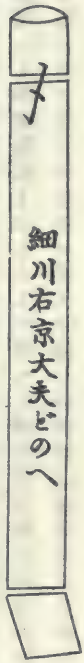
〔書札禮　三〕一女中方への御内書の事

知行などを御内書にて被下之事、昔も御座候段勿論也、御宛所之被遊樣は、御佐子(オサコ)之局へと有ニ御座候、御文言ニは何と申所知行あるべく候共、知行せらるべく共可被遊候也、大上臈へは、上らふの御局へと御座候、其も只上らふの局へと、御の字を略しても可有御座候、何も被召道上ニて大上らふは少々違有御座候か、將又中臈への御事は、左京大夫の局へと御座候、御文言は可被知行候と御座候て、知行すべく候とも、可有知行候とも可有御座候、女中がたへ、かなの御内書にも知行などの事被成候には、御日付の下に被居御判事勿論也、

〔年中定例記〕一御。吉。書。之。内。書。毎年細川殿へ被遣候、御使我等(伊勢守)也、やがて御禮に、細川殿御參、今

日は兩度御出仕也、御對面も在也、

〔澤巽阿彌覺書〕御内書御料紙引合一紙は上卷也、上下如常たゝみて折て、上に長々と、



新年嘉慶、雖事舊候、不可有際限候、祝儀期面候、猶貞孝○伊勢可申候也、

正月七日　御判

細川右京大夫どのへ

〔書簡故實〕一自公方樣當家へ御返札

爲代始禮、太刀一腰金覆馬一疋到來、目出候、猶貞孝可申也、

八月十日　御判計

小笠原大膳大夫どのへ

御内書、備中引合一重に、三行程遊、如常封候て、立紙にて、上、包して、上下折て封じ、五寸ほど引也、

〔和簡禮經要一〕御内書事并古法新法御請

太刀一腰、鬮光馬一疋鳳給之、悦入候、仍太刀一振、香合堆紅進之状如件、

二月九日　御判

左兵衛督殿

〔伊勢貞助雜記〕一御内書之事、條々口傳抄に在之、御料紙は檀紙たるべし、殊に半切之御内書、無口傳は、難致調進之由、被仰置訖、然ニ近代は、寸法以下の不及口傳調進、不可然之由、從古常被仰云々、

內書例

軍中之半切、一段の秘事也、分別之輩、稀なるべき也云々、

〔貞丈雜記書札九〕小文の御內書と云もあり、是も公方樣の御書也、書札條々に云、小文は半切鳥子又杉原也、其まゝ押折事は少慮外也、御內書には、御小文をばをし折候云々、小文の御內書は、上下ををし折て捻らざる也、

〔貞丈雜記書札九〕小文と云は、半切紙の狀也、書札條々に云、うすよう、杉原などを半切にして書くを小文と申候、是は立文を略したる物にて候、又云、小文は半切鳥の子又杉原也、(上包ノ上下ヲ折ル事也、其儘トハヒネラザル也、)其まゝをし折事は少慮外也、御內書には、御小文はをし被折候、書札秘傳抄ニ云、進上謹上書には、白紙一枚にて上を卷て、其上を立文にする也、此白紙を禮紙と申也、小文なども如此、其時は禮紙をも、其たけに切合て卷也、小文の時は、禮紙ひろさをば半分計につゝむ也、(小文の上卷へ、紙一枚をたてに半分に切て、其半分をば上卷に用ひ、又半分をに、それを小文のたけに合せて禮紙にする也、)

〔簡禮記一〕文相之差別

一料紙定法之事、三公以上ハ大高檀紙、三位以上ハ中高檀紙、四位以下ハ高檀紙、平人ハ杉原也、但御內書御教書ナドハ、薄葉引合等不同也、

〔吾妻鏡一〕治承四年六月廿二日癸卯、康清歸洛、武衛(○源賴朝)遣委細御書、被感仰康信之功、大和判官代邦道(○藤原)右筆、被加御筆幷御判云云、　廿四日乙巳、入道源三位(○賴政)敗北之後、可被追討國々源氏條、康信申狀、不可被處浮言之間、遂欲廻平氏追罰籌策、仍遣御書、被招累代御家人等、藤九郎盛長爲御使、又被相副小中太光家云云、　八月十三日癸巳、付定綱被遣御書於澀谷庄司重國、是則被恃思食之趣也、　十九日己亥、此間自土肥邊參北條之勇士等、以走湯山爲往還路、仍多見猥藉之由、彼山衆徒等參訴之間、武衛(○源賴朝)今日被遣御自筆御書、被宥仰之、世上屬無爲之後、伊豆一所、相摸一所、可被奉庄園於當山、凡於關東、可奉輝權現御威光之趣被載之、因玆衆徒等忽慰憤也、

〇按ズルニ、鎌倉開府以前ヨリ、教書及ビ下文ノ外、別ニ將軍ノ親書ヲ以テ、命令セシメタリ、而シテ將軍自ラ染筆シテ下シヽ書翰ヲバ、總テ御書ト云ヒ、又事ニ依リ、家司ニ書セシメテ、其判ヲ加ヘラレタルヲモ、御書ト云ヘルナリ、卽チ内書ナリ、而シテ御書トハ、將軍ノミナラズ、一般貴人ノ親書ニ對スル尊稱ナリ、

〔吾妻鏡二〕養和二年(〇壽永元年)十二月二日戊戌、就生倫申狀、被遣御書於太神宮禰宜達、同心賴朝之由、平家訴申事、驚思給者也、但神者納受道理、君モ遂然御歟、各不危、始終祈念給者、東國御領等、不可有相違之趣、可被觸申二宮也、謹言、

十二月二日

二郎大夫殿

〔吾妻鏡三〕壽永三年(〇元曆元年)五月廿一日戊申、武衞(〇源賴朝)被遣御書於泰經朝臣、是池前大納言(〇平賴盛)同息男、可被還任本官事、並御一族源氏之中、範賴、廣綱、義信等、可被聽一州國司事、内々可被計奏聞之趣也、大夫屬入道(〇三善善信)書此御書、付雜色鶴太郎云云、　七月十八日甲辰、伊賀國合戰之間事、被經其沙汰、可討亡平家隊逃之郎從等之由、被仰大内冠者、並加藤五景員入道父子、及瀧口三郎經俊云云、雜色友行宗重兩人、帶被御書等進發云云、　十二月廿六日辛巳、佐々木三郎盛綱自馬渡備前兒島、追伐左馬頭平行盛朝臣事、今日以御書褒御感之仰、其詞曰、

自昔雖有渡河水之類、未聞以馬凌海浪之例、盛綱振舞、希代勝事也云云、

〔吾妻鏡四〕元曆二年(〇文治元年)正月六日庚寅、參河守範賴(去年九月二日出京赴西海、)去年十一月十四日飛脚、今日參著、兵糧闕乏之間、軍士等不一揆、各戀本國、過半者欲逃歸云云、其外鎭西條々被申之、又被所望乘馬云云、就此申狀、聊雖敵御不審、猶被下遣雜色定遠、信方、宗光等、但定遠、信方者在京都、可相具之旨、被仰含于宗光、宗光帶委細御書、是於鎭西可有沙汰條々也、其狀云、

十一月十四日御文、正月六日到來、今日從是脚力を立とし候つる程に、此脚力到來、仰遣たるむね、委承候畢、筑紫の事、などか從はざらんとこそおもふ事にて候へ、物騒しからずして、能々國に沙汰し給べし、構へて〳〵、國の者共に、にくまれずして、おはすべし、馬の事、誠にさるべき事にてはあれども、平家は、常に傾城うかゞふ事にてあれば、もしおのづから、道にて押とられなどしたらん事は、聞耳も見苦しき事にてあらんずれば、つかはさぬ也、又内藤六が、周防のせいを以、しを〇しを二字恐顚倒さまたげ候、以外事也、當時は、國の者の心を破らぬ樣なる事こそ、吉事にてあらむずれ、又八島御坐大やけ、幷に二位殿、女房だちなど、少もあやまり、あしざまなる事なくて、向へとり申させたまふべし、かくとだに、披露せられば、二位殿などは、大やけをぐしまいらせて、向ざまにおはする事もあるらん、大方は帝王の御事、いまに始ぬ事なれ共、木曾は、やまの宮、鳥羽の四宮、討奉せて、冥がつきて失にき、平家又三條高倉宮討奉て、加樣にうせんとする事なり、されば能々したゝめて、敵をもらさずして、關に可被沙汰也、内府〇平宗盛は極て臆病におはせる人なれば、自害などは、よもせられじ、生どりに取て、京へぐして上べし、さて世のすゑにも、言傳てあらば、いま少吉事なり、返々此大やけの御事、おぼつかなきことなり、いかにも〳〵して、事なきやうに、さたせさせ給べし、大勢どもにも、此由をよく〳〵仰含られ候べし、穴賢〳〵、さては侍共に、構々心々ならずして、有べきよし、能々被仰べし、構々て、筑紫の者どもにも、にくまれぬやうに、ふるまはせ給べし、坂東の勢をばは〇は恐む誤ねとして、筑紫のものどもをもて、八島をば責させて、無念やうに、關に沙汰候べし、敵よまくなりたると、人の申さんに付て、敵あなづらせ給ふ事、返々有べからず、構々敵をもらさぬ支度をして、能々したゝめて、事を切せ給べし、猶々返々、大やけの御事、ことなきやうに、沙汰せさせ給べきなり、二月十日のころには、一定舟をば上するなり、佐々木三郎筑紫へは、下さがりたるによて下しさ〇さ下恐脫ま字備前兒島をば、

貴落たるなり、構々て、いかにも物騷しからずして、閑に軍ゑおほすべし、侍どもの非、是によりかれによりなどして、さゝやきなどして、人に見うとまれ給べからず、又路々の間、兵粮なくなりたるなど、京より方々にうたへ申せども、さほどの大勢の軍粮料にて、上らざりしかば、爭かは、さなくて有べきとおもふなり、坂東にも、其後別事もなし、少も騷事候はず、委は此雜色に、仰含候ぬ、恐々、

千葉介、ことに軍にも高名してけり、大事にせられ候べし、

正月六日

蒲殿

三月七日庚寅、東大寺修造事、殊可抽丹誠之由、武衛被遣御書於南都衆徒中、〇中略 御書云、

東大寺事

右當寺者、破滅平家之亂逆、逢遇回祿之厄難、佛像爲灰燼、僧徒及沒亡、積惡之至、比類少之者歟、殊以所歎思給也、於今者、如舊令遂修復造營、可被奉祈鎭護國家也、世縱雖及澆季、君於令施舜德者、王法佛法、共以繁昌候歟、御沙汰之條、法皇定思食知候歟、然而如當時者、朝敵追討之間、依無他事、若令遲遲候歟、且又當寺事、可致丁寧之由、所令相存候也、仍勒狀如件、

三月七日　前右兵衞佐源頼朝

〔吾妻鏡六〕文治二年五月廿九日丙午、美濃藤次安平、濫妨美濃國石田鄕之由、領主刑部卿典侍訴左典厩、〇能保 典厩又被執申之間、早可停止之趣、今日被遣御書於典厩云云、〇中略 於東海道者、仰守護人等、被注其國總社幷國分寺破壞、及國尼寺顚倒事等、是重被經奏聞、隨事體、爲被加修造也、爲善信、俊兼、邦通、行政、盛時等奉行、今日面々被下御書云云、　六月廿九日乙亥、成勝寺興行事、被申京都、〇中略 成勝寺修造事、可被急遂候也、若及遲怠候者、彌以破損、大營候歟、就中被修復當寺者、定爲天下靜謐

之御祈歟、然者圖ニモ、被充課候ナ、急御沙汰可候也、以此旨、可令申沙汰給候、賴朝恐々謹言、

六月廿九日　　　　賴朝裏御判

進上　帥中納言殿〇藤原經房

七月一日丙子、以平六傔仗時定、可被任左右兵衛尉之由、被申京都、是依有度々勳功也、又伊勢國林崎御厨、被止地頭職訖之由事、今日所被仰遣左中辨光長之知行、爲奏聞也、

大神宮御領、林崎御厨事、可令停止武士之知行之旨成下文、謹以進上之候、恐々謹言、

七月二日　　　　御判

謹上　頭左中辨殿

〔新田由良家傳記〕右大將源賴朝卿より、入道殿幷御嫡子太郎義兼公へ被進候、御直封の御書、由良の御家に五通御座候、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年〇建保元年五月三日癸卯、相州〇北條義時大官令〇大江廣元承仰、被發飛脚、遣御書於京都、兩人連署之上、被載將軍家〇源實朝御判也、是義盛雖令伏誅、餘黨之分散、未知其存亡、凡京畿之間、有骨肉、不日無覊索之儀者、難斷後昆猥歟也、御書之樣、

和田左衛門尉義盛、土屋大學助義淸、橫山右馬允時兼、すべて相摸の者ども、謀叛をおこすといへども、義盛殞命畢、御所方別の御事なし、ゝかれ共、親類多きうへ、戰場よりも散々に成よし、きこゝめす、海より西海へも、落行候ぬらん有範廣綱、おの〳〵そなたざまの御家人等にこの御ふみの案をめぐらして、あまねく相觸て、用意をいたして、打とりて、まゐらすべき也、

五月三日　　　　酉刻　　　　大膳大夫

　　　　　　　　　　　　　　相摸守

佐々木左衛門尉殿

十月三日己亥、今日以御書有被仰于大宮大納言殿方之事、自公家被課西國御領等、臨時公事也、一切不可及御沙汰之由、如廣元朝臣雖申之、仰曰、於一向停止之儀者不可然、至向後者、楚忽事者、非雜掌等之所堪、假令兼日相可被定仰之旨可載之者、仍前大膳大夫於宿館書整此御書、遠江守親廣爲御使、數度往還、親廣申請御判、即爲京進被下藤民部大夫行光云云、

〔梅松論下〕正月〇建武三年廿七日辰刻に、敵二手にて、河原と鞍馬口を下りにむかふ所に、御方も二手にて、時を移さず、掛合て、入替て數剋戰しに、御方討負て、河原を下りに引返しければ、敵利を得て、手重く懸りける、〇中略細川の人々、いそぎ桂川を馳渡て、亥剋計に御陣に參て、京中の敵追拂ひたるよし申されける間、即打立て、七條を東へ入らせ給ひしに、同河原にて、夜あけしかば、廿八日なり、さしも御方の大勢洛中を引退しに、細川の人々相殘て、敵を打散しければ、御感再三也、されば忝も御自筆〇足利尊氏の御書を以、錦の御直垂を、兵部少輔顯氏に送給也、弓矢の面目、何事か是にしかんとて、見聞の輩、彌忠を盡し、命を輕くしけるとかや

〔明德記上〕播磨守滿幸、〇山名、中略今度宮內少輔時熙以下退治ノ後ハ、四ケ國ノ守護職ヲ持テ、權勢氏族ニ越エタリ、〇中略サレバ分國四ケ國ノ內ニ、出雲國ノ横田ノ庄ハ、仙洞ノ御領ニテ、手サス者アルマジカリシヲ、近年押領シケル間、數通ノ御敎書ヲ成下サレ、度々御內書ヲ以テ、渡申スベキ由、仰下サレケレドモ、曾テ承引セザルニ依テ、上意ニ背ク由シ聞エシカバ、〇中略修理大夫〇山名義理ハ、一家ノ親方ニテ、毎年穩便ノ沙汰ヲ致ス仁ナレバ、一往御書ヲ以テ、御尋アルベシトテ、十二月〇明德二年廿四日ニ、御力者ヲ下サレケリ、其御書ニハ、面々一家ノ者共同心シテ敵ニ成リ、近日京都ヘ責上ベキ由風聞耳ニ滿リ、事實タラバ、抑是マデノ所存、何事ゾヤ、訴訟有バ、何度モ歎キ申ベキ條、勿論也、只今ノ振舞ドモ、更ニ其心ヲ得ズ、急彼等ガ反逆ヲ可止由、敎訓スベシ、若承引セズシテ、合戰ニ及候者、御分ノ進退ハ、一家ニ同心カ、又御方ニ參ズベキカ、分明ニ御返事ヲカギルベシト、御

自筆ニアソバシテゾ下サレケル、〇下略

〔花營三代記〕應永卅一年二月五日、鎌倉左兵衛督持氏、與京都(勝定院殿足利義持)〇御和睦落去畢、管領以下御太刀進上也、甲斐信乃駿河討手共、被召返云々、幷方々へ御内書被下也、

〔建内記〕正長二年七月廿九日、大館送使者、早可參上、可被仰談之子細之旨示之、仍參室町殿、只今大館片時退出云々、勸修寺中納言、(經成)新中納言、(親光)參會云、只今有被仰談事、可被遣安。堵。(門跡領安堵事也)御。書。於三寶院准后、(前大僧正滿濟、本解二條家門庶子、今小路也、而鹿苑院殿(足利義滿)御猶子也、)御書樣事、可爲如何哉云々、〇中略爰大館歸參、面々所存尋示、准三宮異于他事歟、誠恐謹言、三寶院殿可然歟、爲安堵御書者、與可爲御判、表可爲御名字之由申入了、大館退出、示聞食之由、被用此分云々、

嘉吉元年六月十八日癸未、小倉宮御重書、

鹿苑院殿御内書二通、(一通所々國衙事、一通十万疋事、)幷千貫所納狀、(誰人哉、文字不見、)

先年披露之後、未被返下之、今日給御消息、可渡此使之由承之、仍渡御使了、

〔集古文書〕(八御内書)普廣院義敎公御内書(相摸國藤澤山淸淨光寺藏)

絹二十疋、蠟燭五百挺到來候了、悅喜候、金襴盆遣之候也、敬白、

四月廿七日　　華押(〇將軍足利義政)

他阿上人〇中略

慈照院義政公御内書(湯川某藏)

畠山尾張守事、既於河州令出張候之間、此時可加退治候、

就其玉置山本以下申合、於紀州、一段抽忠節者、如望可有恩賞候、各心中趣、具可言上候、別而遂入候、爲其以自筆申遣候也、

十一月十二日　花押〇將軍足利義政

湯川どのへ

〔澤巽阿彌覺書〕御内書之事

越前國凶徒、甲斐八郎以下沒落云々、連々計略、合戰尤神妙、彌殘黨等、可加誅伐候之也、

八月十五日　御判

朝倉彈正左衛門尉どのへ

越前國凶徒甲斐八郎以下沒落之由、併忠儀神妙候、猶以殘黨等、不日可被加誅伐候、仍被下御内書候也、恐々謹言、

八月廿二日　細川殿勝元御判

朝倉彈正左衛門尉殿

〔畠山記〕義材公北國落之事

畠山中務少輔政光、先公方〇足利義澄ノ御供申、筒井城マデマヰリ、爰ニテ公方敵陣ニトラレ給ヘバ、無力落テ、石丸ガモトニオハシケルガ、石丸モ自害アリケレバ、公方ノ御跡ヲシタヒ、山口ヘ下リケル、公方御感ノ餘リ、自筆ノ御書ヲアソバシ、政光ニタマハリケル、

〔和翰集要七〕一軍中御内書之趣

十月五日、信太城合戰之時、遊佐九郎次郎、平三郎、其外數輩討死之注進、去月卅日到來畢、言語同斷、且忠節、且不便、雖然諸件無異儀相踏候由、先以大慶候、彌成敗可爲肝要候、仍細河式部大輔不存疎略之通神妙候、佐々木中務大輔内書之事則遣候、猶致進義隆可申述候也、

惠林院殿(足利義稙)御自筆　御判

十月十七日

畠山尾張守殿

(瓦林政頼記)去程ニ、御所樣(○足利義稙)ヲバ、大内左京大夫義興猛勢ヲ引率、御舟ヲ出サレ、永正五年ノ春ノ末ニハ堺ノ津ニ著岸アリケル、近日御上洛可有由聞エケル間、義澄將軍同四月十六日夜、江州ヘゾ沒落有ケル、然間高國家督可爲由ノ御内書頂戴シテ、堺ヘ御迎ニゾ下向アリケル、

(本滿寺文書)足利義晴御内書

就山科退治之儀加下知之處、於新日吉口及合戰、殊數多討捕之由、尤無比類候、彌勵戰功者可爲神妙、猶高信可申候也、

八月(○大永七年)十七日　義晴(花押)

本滿寺

(大館常興日記)天文七年九月朔日、城州(下五郡)田畠段錢、爲右京兆被相懸之間、被成御内書、殊諸奉公輩知行分儀、太不可然、堅可停止之段、可被下知候由、被仰哉否御事、此段ハ各忝可奉存候、雖然以六角霜臺被仰出候、御返事いまだ不被申候間、其返事により可被成敗、然ば御文言之事も、依其樣體の御事たるべき哉之由、各言上之日、行事手日記に如常加證名也、　八日、早朝ニ、日行事(豆州)來臨、就反錢之儀、右京兆へ之可被成御内書、只今常興可致調進候由、被仰出之、御案文被出之、仍豆州待せ申て、則書進上申也、

城州段錢之儀、無其謂候、殊諸奉公之輩知行分、尤以不可然、所詮堅可停止旨可被下知候、猶晴廣

高助可申候也、

九月八日

右京大夫どのへ

右御料紙、引合御立文也、

十年十一月廿九日、勢州より以六郎左衛門尉方、澁川殿へ御太刀幷可被成御内書之段狀如件と御ざあるべき哉、たゞ也とめ可然候歟、談合之由承之、何も無子細歟、但也とめ猶可然候哉旨申之也、

〔武隆叢話〕謙信御暇下され、越後へ歸らるゝ時、公方義輝公へ、密に申上られけるは、三好松永が謀反の相見え候、若逆心の氣色候はゞ、早々御内書下さるべし、輝虎罷登り、誅伐仕るべしと申上らる、〇中略長慶逝去の事、公方御聽に達する、義輝公大和兵部御使にて、越後へ遣はされ、長慶死去候間、謙信早々上洛し、三好松永を退治致べしと御内書也、

〔集古文書八御内書〕光源院義輝公御内書 横瀨家藏

就禁裏御修理之儀、對關東諸侍中申遣之間、急度於馳走者、尤可爲忠切候、仍三條大納言下向候、猶申含候、あら〳〵、

二月十九日　花押

横瀨雅樂助どのへ

〔總見記十七〕信長依大忠賜御感書歸國事

今日十月〇永祿十一年廿四日、御能並御仕置ノ御沙汰畢テ、將軍家〇足利義昭ヘ信長ヲ被召、歸國ノ御暇給テ上意誠ニ懇歎ナリ、今度大忠ノ戰功ニ依テ、逆臣不日ニ令退治、五畿内安全公方家ノ再興、是偏ニ信長一人ノ忠功ナリ、天下ノ大器武門ノ棟梁、何物カ是ニシカンヤ、恩賞トシテ今度討取ル近

江、山城、攝津、和泉、河內ノ國々、望ミ次第可知行由、先日ヨリ度々御使ヲ以テ被仰下トイヘドモ、堅ク辭シテ不受之、今以上意ニ隨ヒ拜領仕ルベシト有ケレドモ、信長彌辭退ヲ固クシ、一國ヲモ拜領シ給ハズ、皆々公方家忠勤ノ族ニ配當シテ、只泉州ノ堺、江州ノ大津草津バカリニ代官ヲ付置ル丶マデ也、然レバ今度勤功ノシルシナキコトヲ、將軍家思召シ煩ル丶ニ依テ、古今無雙ノ御感狀トシテ、三通ノ御內書ヲ書キ下シ給ハリ、今日ニモ早々罷歸リ、在國休息可仕由被仰下、信長謹テ御禮申上ラレ、今度戰伐勝利ノ事、公方ノ御威光ヲ以テノ事ナリ、聊信長ガ手柄ニアラズ、御內書ノ儀ハ難有奉存候間、家ノ面目ニ頂戴仕リ可罷歸候、其餘ノ恩賞ハ更々申シ受クベカラズ、天下イマダ一統ナラズ候間、一人成トモ公方へ忠節申ス者ニ、皆々拜領イタサセ申シ候ベシ、但シ御內書三通ノ內モ、一通ハ公方家御自筆ニ被認候由、是信長ナイノ者拜領可仕物ニ非ズ、是ヲ拜領申スナラバ、却テ不肖ノ身ノ冥加ニ盡申サントテ、御自筆ノ一通ハ被返進、殘テ二通ヲ頂戴シ、禮儀殘ル所ナク御調有テ、御暇乞申シ奉リ、清水寺ニ歸ラレケリ、其狀ノ文言、御父ノ文字、殿文字、何レモ希有ノ事トゾ聞ヘシ、其狀ニ曰ク、

今度國々凶徒等、不歷日、不移時、退治之條、武勇天下第一也、當家再興之大忠、不可過之、彌國家之安治、偏賴入候之外無他事、猶藤孝惟政可申候也、

永祿十一年十月廿四日　御判

御父織田彈正忠殿

又一通者

今度依大忠、紋桐引兩筋遣之、可受武功之力祝儀也、

永祿十一年十月廿四日　御判

織田彈正忠殿

〔信長公記十二〕天正七年九月廿一日、信長公京都より攝州伊丹表に至て、御馬を出され、其日山崎御泊、廿二廿三兩日雨降、御滯留、爰にて北畠中將信雄卿へ、被仰出趣、上がたへ無御出陣、私之御働不可然之旨、被成御内書、其御文言、

今度於伊賀堺、越度取候旨、誠天道もおそろしく、日月未墜地、其子細者、上がたへ出勢候へば、其國之武士、或民百姓難儀候條、所詮國之内にて候へば、他國之陣依相遁、此儀尤と令同心、ありあり敷云へば、若氣故實と思、如此候哉、さて〳〵無念至極候、此地へ出勢は、第一天下之爲、父へ之奉公、兄城介大切、且者其方爲、彼是現在未來之可爲働剩始三郎左衛門討死之儀、言語道斷、曲事之次第候、實に於其覺悟者、親子之舊緣、不可許容候、猶使者可申候也、

九月廿二日　　信長

北畠中將殿

〔集古文書九御内書〕織田信長公御内書家臣久德高矩藏

舊冬廿七日、高宮已下、其表へ卒人數、取懸候處、及一戰、高宮同名與助數輩討捕注文加披見候、廣討捨等之事、尤心能候、當春早々可令退治候、又又無油斷馳走候間、御安候、猶木下藤吉郎可申候、謹言、

正月二日　　信長花押

久德左近兵衛尉殿〇中略

太閤秀吉公御内書 那須家藏

爲音信太刀一腰馬代銀子百兩到來候、遠路の情悅入候、東八州奥兩國置目等、近日可申付候條、可成其意候、猶増田右衛門尉可申候也、

十月十六日

那須太郎どのへ

〔武家嚴制錄四十九〕公帖幷御由書之次第〇中略

禁裏江御内書

爲年頭之御祝儀令言上候、仍御太刀一腰、御馬一疋幷蠟燭千挺進上之候、此旨宜被達叡聞候、謹言、

正月九日　秀忠

廣橋大納言殿

勸修寺中納言殿

院中江御内書

爲年頭之御祝儀令言上候、仍御太刀一腰、御馬一疋幷蠟燭五百挺進上之候、此等之趣よろしく預奏達候、謹言、

正月九日　秀忠

秋篠彈正大弼殿

岩倉木工頭殿

〔光臺一覽〕一月末○正月に從關東年頭之御上使高家衆二人參洛有之、○中略御内書御返答文言、

御内書之趣、謹而早披閲候畢、禁裏彌御機嫌能被成御超歲、珍重被思召、則以大友少將、織田侍從、御太刀一腰、御馬壹疋被成御進獻候也、疾々遂奏達、備天覽候處、叡感未斜御事候、猶以女房奉書之旨、宜有言上候、恐々謹言、

二月幾日　資廉

保春

土屋相模守殿

小笠原佐渡守殿

秋元但馬守殿

本多伯耆守殿

大久保加賀守殿

井上河内守殿

請文

〔常照愚草〕一被成下御内書候に、對其御使、御請申上事勿論也、然に御文箱へ御請をば不被入之、御文箱は別に返上被申、御請をば其まゝ、御使へ被渡申也、御内書不限、高家の衆へは如此なり、

〔和簡禮經〕一御内書御請事

就―――――――儀、被成下御内書、忝謹致頂戴候、被仰出之段奉存其旨候、此等之趣宜預御披露候、恐惶謹言、

公帖

月　日　　名乘判

名字官殿

上古ハ甚謹致頂戴候トモ有之(押紙云)

一御內書御請文之事

去月十九日御內書、今月廿三日到著、謹而頂戴仕候、抑――――――發向事被仰出候、不日馳向彼館可

勵戰功候、此旨宜預御披露候、恐惶謹言、

十月廿三日　　加賀守眞吉上

裏判

進上御奉行所(細川讚州ハ上文字ノ傾テ左ニ列被居)

表卷(ウハマキ)ニ面ニ日ノ下ノ如ク書候テ、ウラニ名字計書之、

右式正之時如此

(押紙ニ云)一同御請之事

被成下御內書忝謹而致頂戴候

抑――――――事宜預御披露候、恐惶謹言、

十月廿三日　　眞吉判(又實名右ノ脇ニ上文字なも書之、左ニ列テ加、)

櫻井周防守殿

右略シテ書之時如此

御內書御請書御請、何も同前也、

○

〔貞丈雜記 九 書札〕一公帖(クワウテフ)と云は、五山派(禪宗也)臨濟派(同)の僧、官位に昇る時、公方家の許狀也、首座(禪家ノ私ノ官也)以上に授ら

る、是又室町家より始る例なり、

〔武家厳制録四十九〕公帖并御内書之次第

公帖

公帖とは、五山等大寺の住持職など被任候時、將軍家より是を下さる書物なり、料紙六折にして書なり、

〔和簡禮經九〕一公帖事

南禪寺　可被執務　道號｜｜和尚

平五山　可被執務　諱｜｜西堂

十刹　可令執務　諱｜｜西堂

諸山　可執務　諱｜｜首座

一南禪寺、并平五山之公帖ハ包紙アリ、上ニモ御判、

一十刹之公帖、同包紙有之、御判同、

一諸山之帖ハ、十刹ノ内ヘ一ツニ包、

一諸山之帖計ナレバ包紙ナシ

一御官高ケレバ御官計ニ御判アリ

一御位高ケレバ御位計ニ御判アリ

今ハ從一位

元和六七以來其以前ハ御官

元和六年ヨリハ從一位

南禪寺住持職事、
任先例可被執務之
状如件、
慶長十三年十月三日　内大臣御判
天倫和尚

上包同紙　天倫和尚内大臣御判

大高ヲ二ツニ折テ、サテ三ツニタヽム、カタ〳〵ニ、表ニ二行裏ニ三行アリ、表巻ハ大高ヲ二ツニ折テ横紙ニツヽミ、上下押折テ置御判アリ、

五山南禪寺、幷平五山ノ公帖包紙アリ、上ニモ御判アリ、

相國寺住持職事、
任先例可致執務之
状如件、
元和七年正月廿七日從一位御判元和六七年以前ハ内大臣
承良西堂

建長寺圓覺寺住持職事、是文右之文章同前、

十刹　上包御判、右同、元和六七以來ハ從一位ト調之

眞如寺住持職事
任先例可令被執務之

狀如件、

慶長十三年五月廿八日内大臣（御判）

宗松西堂

〔鹿王院文書二〕

天龍寺住持職事、任先例可令執務給候、恐惶謹言、

（永德二）閏正月廿三日　　華押（足利義滿）

普明國師禪室（○中略）

相國寺住持職事、有執務、可被致造營沙汰之狀如件、

永德二年十一月十八日　　華押（足利義滿）

普明國師禪室（○中略）

寶幢寺可令爲十刹（座位等持寺下、普門寺上）也、將亦未來住持職事、以鹿王院（開山塔頭）吹擧可有補任候也、恐惶敬白、

（至德二）十月廿三日　　華押（足利義滿）

普明國師禪室

〔蔭凉軒日錄〕寬正五年十二月九日、臨川寺等因西堂、安國寺昌源西堂公文、御判（○足利義政）被遊也、

奉書

奉書トハ、上ノ命ヲ奉ジテ、下ニ令スル書ヲ云フ、鎌倉開府以來、諸方ノ頭人及ビ奉行人等、將軍ノ令ヲ奉ジテ施行スル書ヲ奉書ト稱シ、以テ敎書及ビ下文ニ別ツ、而シテ政所及ビ侍所等ノ奉書ニハ、執事一人署名スルアリ、或ハ寄人連署スルアリ、奉行人ノ奉書ニハ必ズ其奉

行署名スルナリ、足利幕府ノ時ニ至リテハ、之ヲ下知狀トモ云ヘリ、蓋シ鎌倉幕府ノ下知狀ト、其名同ジクシテ、其實異ナリ、宜シク下知狀篇ヲ參看スベシ、

奉書ハ杉原ニ書ス、而シテ竪紙ニ書スルアリ、或ハ折紙ニ書スルアリ、並ニ懸紙ヲ加ヘ、兩端ヲ折リ、表書ヲ加ヘテ之ヲ下ス、若シ奉書ニ違背シ、及ビ詐テ奉書ヲ申請スレバ、罪ヲ科ス、

德川幕府ノ時ニ至リテモ亦奉書ノ名アリ、但シ文尾ニ執達如件ト記スルモノヽ外、大名等ニハ恐々謹言ト記シテ下ス例アリキ、

名稱

〔運步色葉集〕保奉書

〔沙汰未練書〕奉書トハ、諸方頭人奉行奉書也、

〔貞丈雜記〕九書札 奉書と云は、公方樣の上意をうけ給りて記す故、奉書之末奉行の名の下に、奉の字を少く書也、たとへば駿河守義村奉などゝ書也、奉の字うけたまはるとよむ也、

〔武家名目抄〕文書二十一 按、奉書は上の仰を奉りて下に下知する文書なり、吾妻鏡建久二年十二月十九日、同三年三月四日に、當時が書を裁たるに、其書法は同じ式にて、一は御教書といひ、一は奉書といへりされば鎌倉殿のはじめつかたは、御教書ともいひしなるべし其後は執權管領の書出さるゝを御教書といひ、頭人奉行人の書出すを奉書といふなり、

奉書制

〔建武以來追加〕違背御下知御教書幷奉書等、不渡下地、輩事、康永二四十一、御沙汰、

或被裁許、或被成奉書之後、雖申子細、依無其理、不被許容之輩、尙以押領下地、成煩云々、於如然之族者、可被處于違背咎之上、付惣別、永不可被聞食訴訟也、〇中略

一寺社本所領事文和元十一十五、御沙汰、〇中略

施行事、於初度者、雖爲向後、可爲御教書、至重催促者、遣奉書、可縣次第沙汰之條同前、

〔豐記抄〕一領地被下時、御書調樣之事、公方樣之儀、奉行人奉書にて被仰付候、又御判之物、御内書な

ど被下事も候、普通の儀は奉書にて候、

許申請奉書

〔建武以來追加〕條々文明九八廿七、予時公人奉行松田丹後守秀興奉行之

一成懸御教書并奉書等事、不及伺申、調遣之段、先規勿論也、雖然於訴人掠申之儀者、可有御糺明、若不實令露顯者、任先例可被沒收所領、無所帶者、可被處其身於罪科矣、○中略

一就當知行安堵御判并奉書等申給事

若有掠申之儀者、可被處御罪科之旨、堅召置訴人請文、雖伺申之、猶有掠申事歟、任先例一段可有御罪科矣、

奉書式

〔夜鶴書札抄〕奉書トハ、上意ヲ請テ、時ノ役人等ノ方ヨリ、依仰執達如件ト書ヲ云也、可有年號、又年號ナクバ、如件トハ不書、所被仰出也共、又上意ニテ候共書也、

〔家中竹馬記〕一連判并裏判之事、連判は奥を上判とす、上判の人の名乘をうは書に書也、但奉行之奉書などは、本奉行書あけて、日の下に判をする也、此時はうは書にも、本奉行の官名字を書也、事に依て准之儀も有べし、又宛所を二三人へも書時は、前は上也、奥は次第に下也、又裏判を連判にするには、是はおくは上判也、裏の時奥と云は、裏よりすかして見れば、文のはしの方也、

〔和簡禮經五〕一奉書ノ下狀事

　　爰ニ在判

下　吉田社領酒戸土沼河鑄等郷住人等定補田所職事

　　大舍人忠恒

右人任父成恒之讓、所定補也、早如先例、郷務事可致沙汰之狀、所仰如件、不可違失、故下、

　　文永二年十二月　日

上古ハ直ノ御判不限、仰之旨ヲ書出時ハ、如此下文ニ相調申ト見エタリ、近代斷絕也、○中略

一感狀事付奉書ノ感狀事

當月ニ被書出ニハ、日付計或月ヲ隔テ、月ヲ加ヘ、其次ニ國所、其次ニ軍功ノ品ヲ書之、○中略

今度於上州佐野庄羽織原、被致忠節之條、誠以感思召候、向後彌可被抽戰功之旨被仰出候也、恐々謹言、

十月五日　　越中守敦次判

野澤左衛門尉殿

右奉書之感狀也○中略

一神馬奉進之時奉書事

御神馬一疋鴾毛御鞍置、可奉進之由所被仰出也、仍執達如件、

――年正月十一日　　伊勢守判

石清水八幡宮御師

諸社皆以同前、表卷上下不捻、押折ヲ置之、總別ハ御厩別當書下也、

攝津播部頭　京中地ノ奉行也

二階堂　公方樣御記錄ヲ預家也

伊勢守　政所細下等ノ役也

町野　問注所、天下諸公事之落居ヲ注置家也

〔曾我流書札法式〕奉書御下知トモ觸狀御請事

去五日之御奉書御觸狀今日十五辰剋到來、令頂戴候、抑、、、、、、儀、被仰出之趣、委細奉得其意候、此旨可然樣御披露所仰候、恐々謹言、

月日　　名字官　實名判

奉書例

名字官殿

〔吾妻鏡 七〕文治三年七月廿八日丁卯、善光寺造營間事、令下知信濃國御家人給之上、被仰當國目代云云、其奉書云、

善光寺造營之間、國中さう〳〵をいはず、人夫をいだして、力をくはふべきよし、御下よみたび候ぬ、もとの所知など、ゑらせ給候て、與力せさせ給候べし、このたび不奉加の人は、所知をゑらざりけりとおぼしめさんずるに候、あなかしこ〳〵、

七月廿八日　　　　僧

信濃御目代殿

〔吾妻鏡 十一〕建久二年正月十五日甲子、被行政所吉書始、前々諸家人、浴恩澤之時、或被載御判、或被用奉書、而今令備羽林上將給之間、有沙汰、召返彼狀、可被成改于家御下文旨被定云々、

〔吾妻鏡 二十一〕建曆三年(〇建保元年)四月四日乙亥、陸奧平泉寺塔破壞之事、可勵修復之旨、今日以相州(〇北條義時)奉書、被仰郡內地頭等、　廿八日己卯、相州參御所給、即廣元朝臣等、有被仰合事、又爲御祈禱、於鶴岡可轉讀大般若經之由、被仰供僧等、此外勝長壽院別當法橋定豪大威德法、小河法印忠快不動法、淨遍僧都金剛童子法、天地災變祭親職、天曹地府祭泰貞、屬星祭宣賢等奉之、則以廣元朝臣奉書、被觸仰之、山城判官次郎基行、橘三藏人惟廣、宮內兵衞尉公氏等爲御使云云、

〔吾妻鏡 四十八〕正嘉二年八月六日壬午、日向前司祐泰、可加布衣人數之旨、被仰下之間、武藤少卿景賴、遂奉書於越州云云、

〔太田康有記〕建治三年六月十三日、城務(〇藤原泰盛)被通使者之間、罷向松谷別莊之處、被仰云、肥前肥後國安富庄地頭職、相大守(〇北條時宗)可有御拜領之由、內々有御氣色、只今可被成進御下文者、可爲康有之奉書云々、　七月十九日、未時被行御評定者、相太守、武州(〇北條宗政)駿州(〇北條義宗今日初參)越州(〇北條業時)前

武州〇北條宣時城務、佐對〇源氏信佐中書〇藤原業連玄番〇三善倫經三ケ條御沙汰之後、書進奉書、以武州城務爲御使被進御所、可施行之由、即被仰下了、

〔御成敗式目追加〕一元亨二年正月十二日、右臨西收之期者、致急速之沙汰、翌年二月、可令皆濟、縱又雖未進、不可過六月、若抑留之由、雜掌訴申者、遂結解、可辨償之旨、可被下奉書云々、

〔太平記 三十九〕神木入洛事附洛中變異事

尾張修理大夫入道道朝ハ、將軍〇足利尊氏御兄弟合戰ノ時、惠源禪門〇足利直義ノ方ニ屬シテ、打負シカバ、鬱胸ヲ散セズ、暫クハ宮方ニ身ヲ寄セケルガ、若將軍義詮朝臣ヨリ樣々幣禮ヲ盡シテ、連リニ招請シ給ケル間、又御方ニ成、〇中略去程ニ越前國ハ、多年ノ守護ニテ一國ノ寺社本所領ヲ牢濟シテ、家人共ニゾ分行ケル、其中ニ南都ノ所領河口庄ヲバ、一圓ニ家中ノ料所ニゾ成タリケル、此所ハ毎年維摩會ノ要脚タルノミニアラズ、一寺ノ學徒、是ヲ以テ朝三ノ助ヲ得テ、僅ニ飡霞ノ飢ヲ止、夜寫ノ燈ヲカヽゲテ、聚螢ノ光ニ具、然ルヲ近年ハ、被押領ニ依テ、諸事ノ要脚盡ク闕如シヌレバ、維摩ノ會場ニハ、柳條亂レテ、垂手ノ舞ヲツラネ、講問ノ床ノ前ニハ、鶯舌カハツテ、綴聲ノ歌ヲトナフ、是一寺滅亡ノ基、又ハ四海擾亂ノ端タルベシ、早ク當社押領ノ儀ヲ止テ、大會再興ノ禮ニ令復給ベシト、公家ニ奏聞シ、武家ニ觸訴フ、然共公家ノ勅裁ハナレ共人不用、武家ノ奉書ハ、憚テ渡ス人ナシ、依之嗷儀ノ若輩、氏人ノ國民等、春日ノ神木ヲ奉餝、大夫入道道朝ガ宿所ノ前ニ奉振捨、

〔大乘院寺社雜事記 一〕長祿三年六月五日

一京都御奉書到來、則越智方ニ下之、

箸尾知行分和州佐味事、越智彈正忠及違亂云々、太[illegible]闕、分領以下如元不可有相違之趣、御成敗之上者、速可被止其妨、若倘令違背者、可有異沙汰之由、可被加下知之旨、可被申入院家之由

被仰出也、仍執達如件、

長禄三　六月三日　之種判

之清判

大乘院家雜掌

〔親元日記〕文明十年七月九日己巳、江州岩室三河守、〈家俊〉貴殿〈○伊勢貞宗〉へ鮎荒巻千三百疋進候、就自守護沙汰遣候、沙汰合力御奉書等事申候、乍御禮也、

十七年六月廿八日丁未、定光坊納錢一衆に被召加之、頭人御奉書、

政所納錢一衆事、被召加衆分之由被仰出候、納下之儀、嚴密可被致其御沙汰也、恐々謹言、

〈文明十七〉六月廿八日　貞―

定光坊

〔官地論〕長享元年甲戌秋八月上旬之候、忝被下高賴追討之宣旨、將軍家〈○足利義尚〉奉勅發向江州南郡、〈○中略〉去程一揆若者共、替々爲警固、不捐晝夜、去從臘月、當年五月迄、前餅相挂、兩陣之際、纔二十餘町也、角送日次處、越兩國頂戴御奉書之上、急打立、可富樫於合力之由、其聞無隱、

〔武家嚴制錄十八〕福島左衛門大夫領國被召上候時御制法部

一左衛門大夫〈江〉奉書

就國替之儀、爲上使、牧野駿河守、花房志摩守被差遣候、上意之趣、委細兩人可爲演說候、恐々謹言、

〈○元和五年〉六月九日　安藤對馬守

板倉伊賀守

土井大炊頭

本多上野介

酒井雅樂頭

福島左衛門大夫殿〇中略

一同斷

定

一諸侍妻子幷諸道具、何之地江成とも存分次第可引越事、

付リ、自然可遣之令氣遣不能許容之者、從兩人切手可遣事、〇中略

六月廿二日

〔武野燭談十六〕將軍家御不例之事

諸司代奉書返簡之事

君臣合體之御代トハ何ツハアレドモ、第一寬永慶安ノ間ナルベシ、一年、家光公御食傷ニテ絕入マシ〳〵、一晝夜御正氣付セ玉ハズ、依之急ヲ告ル脚力、諸國ヘノ早打、頻リニ往來スル程ニ、天下ノ周章ニナンアリケル、京大坂ニハ殊ニ町中騷ギ立テ、此事色々ニ巷說シケルトカヤ、江戶柳營ノ官醫等秘劑、次ノ日御快驗マシ〳〵ケル程ニ、定テ京都ハ可騷動、早々御機嫌能段申遣セトノ仰ナレバ、奉書次飛脚ヲ以テ馳ケル、凡廿四時ノ飛脚ハ平生之事、此節ハ成次第急セケルニ、十八時程ニ京著シケルガ、其御請留々ニテ遲クナレバ、重テ以奉書彌御本復之趣申遣シタルニ、請ノ書漸ク江戶ヘ著シケリ、而モ御夜詰前ナリケレバ、月番ノ老中ヨリ是ヲ達御本丸、中根壹岐守宗鑑披露之、京都騷動之由ハ見ヘナガラ、此御請文ノ遲カリシヲ、下ニテモ上審シケルニ、其御請文ノ詞ニ、兩度之奉書一所ニ拜見仕タル由ニテ、二通ノ御請東テ一紙ニ認タル文言ニテ、此間泊應野ニ罷出、御請延引仕タルトノ端書アリ、此泊應野之事ヲ被聞召、扨ハ京都能々騷動シケルト見

ヘタリトノ上意也、讃岐守其夜思案シ明テモ不得其意、〇中略 讃岐守〇酒井 退出之時、袖ヲ扣ヘ、只今ノ上意、貴公ノ御請、如合符節候、夜前モ右之上意有之、某一夜思案仕候ヘドモ、其理通ジ不申、誹リ候ト申セバ、讃岐守打笑、京都町人共、何ト制テモ合點スマジ、諸司代ガ優長ニ遊テ見セザレバ不成也ト云捨テ被通トカ、

〔武家嚴制錄十九〕在番衆江奉書

一筆令啓上候、公方樣倍御機嫌克被成御座候間、可被心易候、將又京極丹後守義、此事付被願、重疊不屆ニ付、元領知被召上之候、依之爲上使從是元青山大膳亮被遣之候、爲城地請取松平若狹守、松平主殿頭、小出伊勢守被仰付之候、四萬石之假積を以被致用意、大膳亮上着次第令相談、於件地可有勤仕候、恐惶謹言、

寛文六年五月十日

板倉內膳正
土屋但馬守
久世大和守
稻葉美濃守

水谷左京亮殿

九鬼長門守殿 是ハ在江戶故奉書なし

政所奉書

〔武政軌範政所沙汰篇〕式日內評事

先條日、爲政所廻折紙相觸之、其書樣如前、無著到、孔子之役、執事代以下參著、則執事出座、寄人著座、上首次第披露公事、於意見者、上首發言、以衆議被決斷之、次奉書事、或執事加判、或寄人兩判、隨于事體、聊有差異乎、

〔建武以來追加〕一洛中洛外土倉質物事

於絹布類者十二ヶ月、至武具者廿四ヶ月之由、所被定置也、若過彼數月、不請出者爲流物、可致計沙汰之旨、可相觸諸土倉之由、所被仰下也、仍執達如件、

永享三年十月十七日

大和守 飯尾貞連

備中守 伊勢貞國 于時政所

一衆中 中略

一洛中洛外諸土倉利平事、近年任雅意、致其沙汰云々、太不可然、所詮於高利者、爲衆中定置、嚴密可被相觸之、若有異儀在所者、隨注進可被處罪科之由、被仰出候也、仍執達如件、

長祿三

十一月二日

之種 飯尾肥前守 于時左衛門大夫

之清 飯尾加賀守

忠行 二階堂山城守 于時政所

〔政所內評定記錄〕寬正二正廿六日

新加奉行人事、頭人有御伺之、被成御奉書如此、

被召加政所寄人者也、早可被參勤之由、被仰出候也、仍執達如件、

付年號月日 諱

此分永德比、照禪御奉書、大概如此、

〔庭訓往來〕侍所奉書者規模也、且嘉例且先規也、可被申沙汰、

〔侍所沙汰篇〕一奉書事

頭人奉書者、一判也、寄人之奉書者、或一判、或兩判、可依其事哉、

一赦沙汰事 中略

至大赦者、召返流刑人、放免囚獄者、仍每度執行內談、召出流帳獄記、勘辨其輕重、被赦免之、流人者對

頭人、成奉書、禁獄者對所司代遣奉書、令下知之、是則爲開闔之所役乎、

〔吾妻鏡十三〕建久四年九月卅日癸巳、依御堂供養事、爲警固可參上之旨、被廻奉書於近國御家人等、梶原平三景時〔○侍所司〕右京進仲業等奉行之、

〔花營三代記〕應安七年十一月十九日、元寄〔條佚中務入道〕可有上洛之由、雖成侍所奉書、同廿四日、自在國直可下向遠江國之由被仰之、

小侍所奉書

〔吾妻鏡四十七〕康元二年〔○正嘉元年〕十一月廿四日乙亥、明年正月御的射手等被差定之、越後守〔○小侍所別當〕〔北條實時〕被下奉書云云、

〔吾妻鏡四十三〕建長五年正月十六日乙未、掃部助實時爲小侍別當、

〔吾妻鏡五十〕文應二年〔○弘長元年〕十一月廿六日甲申、明年正月御弓始事、有其沙汰、被差射手等、相摸太郎殿〔○北條時宗〕越後守、被下連署奉書云云、

〔北條九代記下〕文永元年甲子〔二月廿八日改元〕

時宗〔○中略〕　文應元年二月、爲小侍、

引付奉書

〔武政軌範〔引付内談篇〕〕諸國御年貢事

任例可被成御奉書焉、

堅紙書之、但奏事詞等、依時有相替事歟、

〔建武以來追加〕諸國守護人事〔建武五後七廿九、御沙汰、奉行諏方大進房圓忠、〕

右被補守護之本意者、爲治國安民也、爲人有德者任之、爲國無益者可改之處、或募勳功之賞、或稱請第之職、押妨寺社本所領、管領地頭、職預置軍士、充行家人之條、甚不可然、固守貞永式目大犯三箇條外、不可相綺、爰近年不叙用引付等之奉書、不及請文、經旬月、多累催促、越怨之甚、不可勝計、政道之違亂、職而斯由、仍就違背之科條、須有改定之沙汰矣、

〔武政軌範 地方沙汰篇〕一奉書事

地方奉書

頭人寄人連署也、而近年以頭人之一判成遣之、背舊規乎、且可謂右筆之越度歟、雖然近日被載一判事、爲多分之例歟、

○按ズルニ、コレハ地方頭人ノ奉書ナリ

〔常照愚草〕一守護奉書之文言

奉行奉書

御即位要脚、何國段錢事、早守事書之旨、相照之、來何月何日已前、嚴重可被致執沙汰之由、所被仰下也、仍執達如件、

書て、如例式、年號月日付ありて、國分の奉行日下ニ官と判とを仕て、其時の御即位奉行三人も四人もあれ、加判也、如此之時は、評定衆之内一人、同奉行を仕也、縱令攝津二階堂等之類也、如此輩も奉行のをくに、加判之時の頭人も是を申也、

〔吾妻鏡 三十八〕寶治元年七月廿四日乙亥、可被移御所於他御地之由、有其沙汰、來十月十四日、可始土營之趣、爲被催仰諸御家人、今日所被成被奉書也、筑前前司行泰、大曾禰左衛門尉長泰等、爲奉行云云、

〔政所賦銘引付 二〕一山徒法花院承舜申狀 濟泉州 文明五九廿

安堵奉書

江州志賀郡南庄内名田四段、爲大師入講料所奉行職、永代買得相傳證文有之、當知行之上者、安堵御奉書事、被成御奉書畢、頭人御加判、〇中略

一山徒靜住房岩千代丸代ㇼ同前 濟泉州 〇文明六十廿

江州今堅田上乘職、號番屋六頭事、楞嚴院慈惠大師御廟爲燈明料、永代買得於奉行職者、可致其沙汰之由、任買券之旨、可被成下安堵御奉書云々、〇中略

一松平遠江入道道慶 同前〇飯加州 〇文明十七九十同日

所々永代買得屋地安堵御奉書事

一所三條坊門室町與烏丸間三丈九尺、奥江三丈三尺、

代三貫五百文、賣主廳司中將伊春、賣券

一所綾小路猪熊與五條坊門間東頰、

代百貫文、賣主吉見右馬頭家仲、賣券長祿三四廿一、

○按ズルニ、安堵奉書ヲ下スハ、安堵奉行ノ職掌ナリシガ、室町幕府ノ中葉ニ至テ、其奉行ヲ置カズシテ引付ヲシテ掌ラシムルコトヽナレリ、官位部足利氏職員編諸奉行篇ヲ參看スベシ

〔沙汰未練書〕一安堵事

於關東有其沙汰奉行人三方也、隨思々申之、先本御下文并手繼讓狀、先祖相傳系圖等、如此具書調、本奉行所可上之所、申無子細者、其國守護、或一門親類等、以奉行奉書、被尋問當知行之有無也、是問狀奉書云

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年六月十一日丁卯、雜人訴訟事、相分國々、被付奉行人、而度々難被相觸、不事行之時、申御教書之間、尫弱訴訟人、數反往還、經日月事不便、自今以後、不可申成御教書、以奉行人奉書、可加下知之旨、被仰出云云、

○按ズルニ、コレハ問狀奉書ニシテ、引付ヨリ下シヽナリ、而シテ問狀奉書トハ、訴訟ニ依テ、被告人ヲ尋問スル奉書ナリ、

〔新御式目〕弘安七五廿七、評、

一召文問狀事

引付頭人可下奉書

〔武政軌範引付內談篇〕問狀奉書

花山院家雜掌元徵申、美作國某庄領家職事、解狀具書如斯、近年混于地頭職濫妨云々、甚不可然、早退被妨沙汰、付下地於雜掌、可被執進請取狀、若又有子細者、無偏頗可被注申之狀、〈或被起請詞〉依仰執達如件、

明德二年某月某日　左兵衞佐

守護

〔政所賦銘引付〈四〉〕一〈在野州〉壽福寺雜掌〈文明十四六卅〉

寺領所々西七條散在右田等內、爲一代住持沽却、方々違亂之間、去寶德二年被成問狀奉書、〈住持永祥、〉

〔親俊日記〕天文八年七月廿三日戊午、東福寺春蹊庵與大同庵相論之儀付而、對大同庵被成問狀奉書處、住持江州在國云、最前於寺家相果候云、旁爲案內先申入由、於取信州申置候、

召文奉書

〔吾妻鏡〈三十九〉〕寶治二年五月廿日丁卯、就雜務等事、有被定下之篇目、雜人訴訟事、雖下度々奉書、論人不叙用、自今以後、召文三ヶ度之後者、今度令違背者、可有後悔之由、差日數、以國雜色可被下遣召文也、

〔武政軌範〈引付內談篇〉〕召文奉書

前大膳大夫代申、備前國某庄地頭職事、訴狀具書如此、不日可被參決之由候也、仍執達如件、

明德二三月十一日　實名

備後前司殿

先代時者爲頭人遣召文、或爲六波羅被遣之、或又奉行人之書下也、令違參者及三箇度相觸之條、古今之通法也、凡如斯奉書御敎書等文體、先代當御代大概是同、然而隨于事依于時、聊有異同乎、巨細不能注之、

遣使奉書

〔武政軌範〈引付內談篇〉〕遣使節奉書

青蓮院門跡雜掌良綠申、越前國某鄉領家職事、雜掌解具副書如此、守護被官輩押妨云々事實者、甚不可、然、早和泉源左衞門尉、相共莅彼所、沙汰付雜掌、可被申左右、使節令緩急者、可有其咎之狀、依仰執達如件、

明德二年月日　　左近將監

出羽新藏人殿

請文

〔慣習例〕奉書渡請書

被下銀請取帳江認候

一松平伊豆守樣御一名之御奉書壹通、右御渡被成、奉請取候、以上、

寬政四年丑二月八日　　山門松禪院代僧　實境坊

雜載

〔明良洪範續篇四〕慶長八年、家康公將軍宣下有シ後、永井右近大夫直勝ニ命ゼラレ、將軍家ノ書式法令等ニ、故實ヲ存ジタル人關東ニ之無故、時ノ故實者タル細川玄旨法印ニ付テ、室町將軍家ノ儀式作法ヲ問セラレ、當時有職ノ聞ヘ有ニ因テ、曾我又左衞門助興ヲ召出サル、德川家ノ禮法ヲ潤色シテ、御內書御奉書ノ令式、其外將軍家ノ法令ヲ定メラル、

下知狀

下知狀ハ、奉書ト同ジク、將軍ノ命令ヲ下ニ傳フル書ナリ、而シテ鎌倉幕府ノ時、下知狀ニハ、執權連署共ニ署名シテ下シ、政令ヲ傳達シ、訴訟ヲ裁許スルコト等ニ用タリ、室町幕府ニ至リテハ、奉行人之ニ署名シテ下シタリ、依テ之ヲ奉書トモ云ヘリ、宜シク奉書篇ヲ參看スベシ、而シテ又此下知狀ニハ、御教書、奉書等ト同ジク、其文末ニ執達如件ト云フ語アルモノ多

名稱

シ、故ニ後世之ヲ執達狀トモ呼ビシガ如シ、德川幕府ニ至リテモ、亦下知狀アリ、老中又ハ奉行ノ連署ヲ以テ下ス例ナリ、

〔沙汰未練書〕御下知トハ、就訴論人相論事、蒙御成敗下知狀也、又裁許云也

〔和簡禮經五〕一御教書事

一御下知幷奉書ト申ハ、奉行書出スヲ申也、○中略

一御下知事奉書共云

御賦ヲ請取テ奉行人調之、則奉行之名判也、

竪紙ニハ大和守藤原朝臣判又受領計ニ判ニテモ、但其時ハ上包ニ受領ノ下ニ名乘ヲ加、

橫紙付年號ノ時ハ、實名計ニ判形也、

假令

知行分駿河國沼津鄕事、就葛山押妨、被成奉書之條、無相違之處、號代官職進而可入部云々、事實者言語道斷次第也、所詮早任御成敗之旨、退違亂之族、彌可被令領知之由所被仰下也、仍執達如件、

文明十四年七月十九日　　加賀守判

大和守判

曾我上野介殿

右常德院殿義尙御代也

右官判形ヲ年號ノ通一行ノケテ書事モアリ、心持有之限下知狀制札、

惣領職幷知行分諸國所々目錄在別紙事、早任去年七月十三日同名平次讓狀之旨、可被全領知之由所被仰下也、仍執達如件、

永正五年十二月廿三日　　下野守判

曾我又次郎殿

左衞門尉判

右惠林院殿義稙御代（號島ノ御所）

侍ニ對シテハ大半堅紙也、凡下ニ對シテハ必折紙也、

下知狀制

〔建武以來追加〕一棄捐御判幷御下知等事（永享十三）

被成棄捐者、盡未來際、不可有改動之、曾不取上者也、各守此法可申沙汰哉、

〔建武以來追加〕條々（永正六五九○中略）

一雖被成御下知、不能承引、剩致彼在所訴訟事、可爲違背之咎矣、

評申請下知狀

〔吾妻鏡三十六〕寬元二年六月十六日甲寅、今日有評定、筑後國御家人吉井四郎長廣、與同御家人矢部十郎直澄、相論當國生葉庄內得安名屋敷田畠事、稱當知行、掠給御下知、奸謀之間、召返彼狀、任眞應御成敗、可爲本所成敗之由云云、

下知狀式

〔沙汰未練書〕一御下知被成事

以評定落居事書、奉行人書御下知案文、引付披露之、（是御下知案取捨云）案文治定之後、或當奉行或淸書奉行書上之、時探題（探題者、關東者兩所、京都者、六波羅殿云也、）兩御判被成、其手頭人封御下知裹、召一方得理訴論人於引付御座、直下給之、（以是事切御成敗云也）

○按ズルニ、鎌倉幕府ニテハ、裁許下知狀ニハ、執權連署及ビ兩六波羅探題、判ヲ加ヘテ下シヽナリ、

〔三內口決〕一御下知事

總別武家之下知、鹿苑院（○足利義滿）以來之事候、被准院宣之條、其源雖自公家出、近代之作法、一向無案內候、就諸事公之董可被得才覺歟、

〔簡禮記四〕御下知之法式

一御下知之事、奉行所ヨリ書出ス狀也、是ヲ奉書トモ云、然レドモ御下知ト云時、多ハ堅紙ナリ、奉書多ハ折紙ナルベシ、書留ハ所被仰下也、仍下知如件トモ、或ハ執達如件、執啓如件ナドモ可有之、堅紙ノ時ハ名字官、又ハ受領ニ氏朝臣、又ハ受領計ニ判アルベシ、折紙ノ時ハ官途實名、或ハ官受領ニ判形有之也、文言ノ趣、假令バ、

河內國茨田郡十七箇所御代官職事被仰付之上者、至于御貢物者、無懈怠可被運上之由、所被仰下也、被仰出者也、仍執達如件、

年號月日　前山城守藤原宗重朝臣判

治部少輔平朝臣氏宗判

某殿

右是ハ堅紙ノ樣體也、折紙ノ時ハ、

攝津彌三郎方知行分備後國重永事、任去八月廿七日御教書之旨、可被渡付彼代由候也、仍執達如件、

文明十三

十月五日　豐國

豐氏

太田切美作入道殿

右何レモ料紙ハ杉原一枚ニテ調之、上卷上下ヲ押折者也、如此狀ニハ大抵貴賤ノ人ヲモ打付書ニ調ベシ、但依人謹上書ニ調ル事モ可有之、又充所書ニテ調ル事モ有之也、其時ハ何々儀被仰出候、以此旨宜樣可被仰上候、恐々謹言ナド書留ル者也、總而奉書ハ常ノ消息ニ一位下ナ書之也、倘

下知狀例

口傳有之、

〔室町家御內書案上〕一奉行人無官之時者、御下知等ニ氏計認候畢、

一御下知加判事、上衆爲加判者、先判取、其後右筆仕候也、〔中略〕

一急事之時、由御下知認候ニ、自然其內之字ヲ摺事在之者、其字ノ裏ニ居判形儀在之、故實也

〔新御式目〕一淸書仁令書上御下知者、頭人封裏直事、

下訴人事、條々法事、所被書遣事、早守此旨、可被成敗之狀、依仰執達如件、

正安二年七月五日　陸奥守判〇北條宣時
相模守判〇北條貞時

上總前司殿

〇按ズルニ、頭人ハ引付頭人ナリ、

〔筑前國大悲王院所藏文書〕雜訴決斷所下島津上總入道道鑑所

筑前國雷山千如寺衆徒等申、當寺造營用途事、

右件造營用途事、任去二月廿九日當所評定目錄、可致沙汰之旨被仰下之處、于今無沙汰云々、太不可然、所詮來六月中、宜令究濟之狀、下知如件、

建武二年五月十九日　前筑後守藤原朝臣花押

中納言兼大藏卿左京大夫大判事侍從藤原朝臣花押　明法博士兼左衛門權少尉左京大進中原朝臣花押

修理大夫藤原朝臣　右衛門權佐兼少納言侍從藤原朝臣

正三位藤原朝臣　左少辨藤原朝臣

〇按ズルニ、此文書、文尾ニ下知如件トアリテ、後世ノ下知狀ニ似タリ、

〔島津本吾妻鏡〕曆仁二年五月三日壬申、國吉名事、惟重賜裁許御下知狀云云、

（住心院文書）鎌倉幕府執權下知狀

一　衆□□□□別當進退否事

右對決之處、如隆覺等申者、建久承久御教書者、被下寺僧等中畢、非別當進止之條明鏡也、當寺樂人舞人參拾陸人所帶者、寺家全不致其妨、至寺僧分爭可令進退哉、右大將家〇賴朝源御時、別當理乘房致非例之間、依衆徒之訴訟、被改易畢、代々別當不致濫妨之處、當時爲別當進退令宛行之條、無其謂云云、如榮賢申者、建久承久御教書事、或被止國中地頭之妨、或給衆徒身暇之由被載之、非地頭進止之由所見也、最初別當賢祐令寄進講田以來、無緣之衆徒歎申之時、爲寺中興隆寄置講田給田祭田事、及百陸拾町歟、是併寺僧之依怙、別當之進止也、被召出代々任符、不可有其隱、樂人舞人所帶事、自上令拜領之間、不足准據云々、隆覺申云衆徒所帶淸衡基衡秀衡之時有補任之供僧、又代々別當之時有寄附之料田、本新不各別、有其闕之時者、依衆徒之擧撰法器之仁、別當所成下知狀也、准恩顯不可號別當進退、不相論之外不成任符、如承久元年御下知者、中尊寺供僧四人、或本所兼帶之、或一向新供僧也、與別當遂對問、可安堵之由被仰下之上、不及子細云々、榮賢申云、右大將家御時爲沒收之地被補別當畢、本供僧一向進退之、況於新供僧哉、又相論之時、依法器任道理令裁許之條勿論也、又無相論之外不成任符之由令申之條無實也、可被問衆徒歟云々、爰如衆徒所進右大將家建久二年十月十日御下知狀案者、下陸奧國地頭等、可令早停止其妨、任先例致沙汰平泉寺領事、右地頭等寄事望彼寺領致妨事、可令停止也、縱於堂塔者爲荒廢之地、雖無佛聖燈油之勤、至地頭等者可令停止押領云々、如建久十年三月廿九日政所下文者、下陸奧國伊澤郡、可早以日高林內中尊帝尺堂寺田參町勤行佛事等事云々、如信濃守六月廿五日（不記年號）奉書者、當國中尊毛越寺僧訴訟事條々聞食披畢、別當職以他人可被改補也、寺僧等歸寺、如本可令安堵云々、如同書允清定承久元年六月十八日奉書者、平泉中尊寺住僧四人、依別當法橋之訴訟遂對決之處、無指罪科之間、給身暇所被下遣也、如元可

令安堵云々者、建久御下知者、被止國中地頭之妨、承久御敎書者、衆徒無罪科之間、可令安堵之由被載之歟、次樂人舞人等所帶非別當進止、寺僧分相同之由衆徒雖申之、樂人舞人者自上拜領之、寺僧等分者、或淸衡等之時寄附之、或前々別當立置之間、寺僧等令相論之時、別當成裁許狀、兩方申狀無相違歟、但相傳師跡之時、先例不取別當任符之由、衆徒申之、而兩方可被問衆徒之由雖申之、爲寺務之仁、爭不成任符哉、然者寺僧則可相從別當之成敗、別當又不可致新儀之沙汰矣、次別當取見參料事、兩方共以雖申子細、所詮得別當任符時令沙汰任料否、可被問先例之由雖申之、沙汰之趣頗非正義、自今以後可令停止也矣、○中略

以前條々、依將軍家仰下知如件、

文永元年十月廿五日

左馬權頭平朝臣華押○時宗

相模守　平朝臣華押○政村

〔御成敗式目追加〕一田河左衞門尉隆村與爲胤相論伊勢國麻生浦事、爲周防兵衞大夫泰忠之奉行、弘安八年二月廿八日、如爲胤所給御下知者、隆村帶貞永、嘉禎、正應、仁治、建長、正嘉、關東六波羅御下知等、知行經年序之間、如式目者、雖難被改替、以非據領掌、寄事於年紀押領之條、頗難被許容之間、所被停止隆村領地也云々、

〔後鑑十二〕豫州松山舊記載

伊豫國檜生鄕西方地頭職內俁□□事、爲御祈禱並勳功之賞、所被充行也、守先例可致沙汰者、依將軍家仰下知如件、

建武三年四月十五日

兵部少輔

阿波守

菅生寺衆徒御中

〔建武以來追加〕禁制

一俗人ノ法師ナリ、同カサヲキル事、付法師ノボウシニテ、面ヲカタクス事、

一バタエキノ事 付スダ六

一ヤクヲコボチウル事 付車イケ前買、四條町ノ立ウリ、

一セイガウノ大口、オリモンノ小袖、ケラ具足ノ金銀ノタグヒ、色カハノシタウヅ用事、

一中間凡下輩、エボシカケ、キヌゴシ、ヒタヽレノキヌウラ、同大口刀ノカヘラギ金銀、但メヌキヲ除事

右條々、カタク可被止也、若違犯ノ輩アラバ、可處罪科之狀、依仰下知如件、

應安二年二月廿七日　左馬助源朝臣判

〔御產所日記〕天文四年十二月十九日、就御產所御祝方御用途之儀、被成御下知國々細川右京大夫殿、河内、能州、若州、越前等也、

御下知

御產所御祝要脚事、來年二月以前、任先例、可被致其沙汰之由、被仰出候也、仍執達如件、

天文四年十二月十九日　前丹後守晴季

中務大輔有泰

諸國同前、但細川、河内折紙也、

〔親俊日記〕天文八年十一月廿日甲寅、八幡德政之儀ニ付而、重成懸御下知、自社家被申請之訖、公方御料所丹州桐野河内事、今度小田宗椿對勢州、雖有申子細、貢于他、依爲御料所、被止彼競望上者、供御米以下無相違候樣、早可被加下知之由候也、仍執達如件、

天文八

十一月十九日　茨木長隆

波多野備前守殿

公方御料所丹州桐野河內事、今度小田宗椿對勢州依有申子細、波多野備前守雖押置之、被止綺上者、供御米以下、如先々早可致沙汰由狀如件、

天文八
十一月十九日　長隆

當所名主百姓中

公方御料所桐野河內之事、只今被成御下知上者、如先々年貢等儀、堅可被申付候、仍狀如件、

十一月十九日　波備
秀忠

荒木新兵衞尉殿

〔集古文書三十二下知狀〕天正十一年下知狀

此狀前田玄以法印也、コレヨリ以下天正十二年卯月七日ノ帖四十通皆玄以ノ下知狀也、

禁裏御料所十一ヶ鄉御百姓中、吉祥院北條庄屋幷定使職事申付候、然上者禁裏樣御料所分如先々堅可申付候、若於無沙汰ハ可爲曲事候、將又當聞書分ハ、此方ニ可有納所候、恐々謹言、

天正十一　三月十五日

薮田新丞殿

〔武家嚴制錄十七〕同日〇元和二年七月五日下知狀

定

一年貢米升目之事、從當納壹俵に付而、三斗七升に金をはらひ可相納事、

一年貢米壹俵ニ付而、口米目籾共に壹升宛可納事、

一鐚之儀ハ、百文ニ付三文宛之口鐚可取納事、

右之條々、御領所幷私領之百姓等至迄堅可被申觸者也、

元和二年七月　對馬守

大炊頭
備後守

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年〈○寛元元年〉五月廿三日戊戌、今日於左親衛〈○北條經時〉御亭、攝津前司〈○中原師員〉若狹前司〈○三浦泰村〉等參會、諸人訴論事及沙汰、次親衛被遣御書於加賀民部大夫〈○三善康連〉許、評定是雖事終、書遲々之時、諸人歎申事也、向後付奉行人等、引合事書與御下知草案、加內評定之後、可下清書之由云云、

〔太田康有記〕建治三年十二月十九日、御寄合〈山内殿〉、相太守〈○北條時宗〉、城務〈○藤原泰盛〉、康有、被召御前、奥州〈○北條時村〉被申六波羅政務條々、〈○中略〉
一下知符案事書開闔事五ヶ條、備後民部大夫可奉行云々、

古事類苑

政治部五十四

下編

施行 遵行 打渡 併入

施行ハ上ノ命令ヲ奉ジテ下ニ施行スル義ナリ、而シテシギヤウト呼ブハ、セギヤウニ混ゼザル爲ニシテ、セギヤウハ、乞食等ニ、物ヲ與フルヲ云フナリ、而シテ鎌倉幕府以來、之ヲ文書ノ稱ニ用キタリ、高倉天皇ノ治承四年、源頼朝以仁王ノ令旨ヲ奉ジテ、關東諸國ニ施行ス、爾後勅命及ビ院宣ヲ奉ジテ、施行セシコトアリ、又守護等、敎書及ビ下文ヲ受ケテ、下ニ傳フル書ヲモ、施行ト云ヘリ、足利幕府ニ至リテ、敎書及ビ下文ヲ下スニハ、管領ヨリ之ヲ施行スベキ由ノ書狀ヲ副ヘテ、守護ニ付ス、之ヲ施行ト云フ、守護之ヲ受ケテ、守護代ニ傳フル書ヲ遵行ト云ヒ、守護代ヨリ之ヲ郡內ニ下ス書ヲ打渡トモ、渡狀トモ云ヘリ、

施行以下ハ多クハ杉原ニ書シ、懸紙ヲ加ヘ、兩端ヲ折テ表書ヲ加フ、但シ打渡ニハ、宛名ヲ加ヘズ、又施行等ヲ延緩シ、及ビ之ニ違背スレバ、罪ヲ科ス、

名稱

〔類集文字抄文筆〕施行(シギヤウ)

〔庭訓往來〕將軍家之御敎書、執事之施行、侍所之奉書者規模也、且嘉例、且先規也、可被申沙汰、

〔壒囊抄七〕施行ヲシ行共ヨムハ何事ゾ

施ノ字ニ於テ、二ノ心有、乞丐人等ニ、物ヲ與ルヲセ行ト云ホドニ訓也、下知ノ狀ノ時ハ、施(シ)行ト云ン、施ノ字ヲモ、ヲコナフトヨム也、施ハ卽行ノ義也、仍テユクトモヨム、又第二ヲコナイモテユク

施行制

心也、文選云、何施而臻此乎ト、鈔云、施行也ト云々、當時ハ、管領ノヲ施行ト云、守護ノヲ遵行ト云、守護代ノヲ渡狀ナンド云歟、

〔沙汰未練書〕一施行トハ、御使副狀也、

〔和簡禮經 五〕御敎書事

押紙云（中略）

施行事、御敎書ニ雙テ從管領守護江被付ヲ施行ト云、

〔建武以來追加〕一本所寺社領事

方々施行停滯、頭人幷奉行緩怠、空經廿ケ日者、任本條宜經直訴、嚴密遵運（○遵運二字恐遵行誤）行之、可申左右之由、差日限可仰本引付方、但有限日數已前、諸方雜掌、亦猥及濫訴者、暫可被閣彼訴訟也、（中略）

一寺社本所領事（觀應三八廿一、御沙汰、○中略）

重施行事、面々雖訴不可有盡期、無殊子細者、毎度難成御敎書、先召出守護專使等代幷當參論人、兩奉行人加問答、尋究遵行難澁之旨趣之後、尙可施行哉否、可有其沙汰矣、

（等持院殿○足利尊氏御判）

一恩賞合給地事（觀應三九十八、評定右筆飯尾大和守親國○中略）

一合戰咎事

帶御下文施行輩、尤可相待使節遵行之處、恣亂入所々之間、本主依支申、多及合戰之由、有其聞、甚不可然、自今以後者、不論理非、至故戰之輩者、悉可收公所帶、亦於防戰之仁者、可被分召所帶半分、但非領主者、可准故戰也矣、（中略）

一寺社本所領事（文和元十一十五、御沙汰、○中略）

施行事、於初度者、雖爲向後可爲御敎書、至重催促者、遵奉書可經次第沙汰、（中略）

御成敗條々（歷應永廿九七廿六松田丹後入道常實奉行○中略）

一諸人安堵事

就當知行、被下安堵御判者、普通之儀也、望申御施行之條、以文書私曲歟、儀可被停止也、

〔和簡集要一〕一施行事

奉上意、從管領其國ノ守護江被出書ヲ施行ト云、我國江申遣ヲ云也、

曾我上野介敎祐申、江州野州爾保莊事、度々雖被仰候、守護遵行難澁上者、早任去年十月十六日遵補之旨、可被沙汰付敎祐代々之由所被仰下候也、仍執達如件、

寛正六八月十三日　尾張守判

佐々木大膳入道殿

右管領者畠山尾張守也、佐々木六角入道也、

又云、十月十六日遵補之御判之旨、可致沙汰付敎祐代々之由、所被仰下也、

年號月日

完所宛

曾我奥太郎時祐申、駿河國沼津（工藤左衛門尉ナリ）事、任去二月八日御下文之旨、可被沙汰之狀、依仰執達如件、

建武三年十月十五日　武藏守判

四郎入道殿

右尊氏公御代也、是者御下知なれ共、右施行之本文を慥にしらせん爲、爰に記もの也、

〔源平盛衰記十三〕頼朝施行事

去程ニ、兵衛佐殿（○源頼朝）ハ、別シテ令旨ヲ賜ケル間、國々ノ源氏等ニ施行セラルル、其狀云、

被最勝親王〈○以仁王〉勅命、併召具東山東海北陸道堪武勇之輩、可追討清盛入道幷從類叛逆輩之由、廻宜二通如此、早守令旨、可有用意、美濃尾張兩國源氏等者、勸催東山東海便宜之軍兵、可相待北陸道勇士者、參向勢多邊、相待上洛、可被供奉洛陽也、御卽位無相違者、誰不執行國務哉、依廻宜之狀、執達如件、

治承四年五月日　　前右兵衞權佐源朝臣

トゾ書レタル、係ケレバ國々ノ源氏、背ク者一人モナシ

〔吾妻鏡　一〕治承四年八月十九日己亥、兼隆親戚史大夫知親、在當國蒲屋御厨、日者張行非法、令惱亂土民之間、可停止其儀之趣、武衞〈○源賴朝〉令加下知給、邦道爲奉行、是關東施行之始也、其狀云、

下　蒲屋御厨住民等所

可早停止史大夫知親奉行事

右至于東國者、諸國一同莊公、皆可爲御沙汰之旨、親王宣旨狀、明鏡也者、住民等存其旨、可安堵者也、仍所仰、故以下、

治承四年八月十九日

〔源平盛衰記　二十〕佐殿大場勢汰事

廿日、〈○治承四年八月〉兵衞佐〈○源賴朝〉彼輩ヲ相具シテ、相摸ノ土肥ヘ越給、此ニテ軍ノ談議アリ、實平申ケルハ、軍ハ謀ト申ナガラ、イカニモ勢ニヨリ侍ベシ、先廻文ノ御教書ヲ以テ、御家人ヲ召ルベシト、進メ奉ケレバ、然ルベキトテ、藤九郞盛長ヲ使ニテ、院宣ノ案ニ、佐殿ノ施行書ヲ副ヘテ、方々ヘ觸遣ス、

〔吾妻鏡　七〕文治三年十一月五日壬寅、鎭西守護人天野藤內遠景申云、浴恩澤所住人等事、任御下文旨、去八月十八日加施行畢云云、

○按ズルニ、此文ニ依ルニ、守護人等、御下文ヲ受ケテ、下ニ傳フル書ヲモ、施行ト云ヒシモノヽ如シ、

〔吾妻鏡十七〕正治三年○建仁元年二月廿二日癸卯、今日改元詔書到來、去十三日改正治三年、爲建仁元年云云、大夫屬入道○三善善信持參彼書於御所、即可令施行之由、所被仰也、

〔六波羅御下知〕守護代眞々部左衞門尉施行、關東御敎書六波羅狀以下證文多之、而雜掌致濫妨狼藉之條無道也云々、○中略

正安元年十二月廿三日

右近將監平朝臣判

前上野介平朝臣判

〔光明寺殘篇〕足利殿御敎書幷吉見殿施行案

伊勢國凶徒對治事、事書一通進之候、守此旨可令致沙汰候、恐々謹言

元弘三年五月廿四日

前治部大輔高氏判

謹上　吉見殿

伊勢國可令對治凶徒由事、今月廿四日御敎書案文遣之、守御事書之旨可致其沙汰、來月三日以前、小河可令馳參給候、於緩怠之儀者、關東同心之由可注申也、仍執達如件、

元弘三年五月卅日

圓忠判

三重郡地頭御家人中

〔太平記二十五〕持明院殿御即位事附仙洞妖怪事

主上○光明モ上皇○光嚴モ、此明淸ガ勘文、御心ニ叶ヒテ、ゲニモト被思召ケレバ、今年大嘗會ヲ可被行旨、武家へ院宣ヲ被成下、武家是ヲ施行シテ、國々へ大嘗會米ヲ充課セテ、不日ニ是ヲ責ハタル、

〔太平記三十六〕仁木京兆參南方事附太神宮御託宣事

延文六年三月晦日ニ、康安ニ改ラレケル、其夜四條富小路ヨリ火出テ、四方八十六町マデ燒失ス、改元ノ始ニ洛中加樣ニ燒ヌル事、先不吉ノ表示也、此年號不可然ト被申人多カリケレドモ、武家既ニ宣下ヲ承テ、國々ヘ施行シヌルヲ、イツシカ又改元アラン條、無其例トテ、終ニ此年號ヲゾ被用ケル、

〔花營三代記〕應安元年三月一日、齋藤四郎右衛門尉可參侍所之由被仰出之、改。元。吉。書。施。行。(武藏、相摸、伊豆、)持參之、齋藤四郎右衛門尉(于時政所執事代)同日被仰關東了、　十一月廿二日、御恩沙汰、御吉書座席、御座、執權、禮部、武庫禪、中書禪、石清水八幡宮御寄進、以越中國姫野一族跡、御奉寄之、彼御寄進狀、於當座禮部渡進執權、其時分自餘之人々退出云々、於別座施行判畢、同夜被召八幡御師(善法寺)御寄進狀幷御施行被仰渡畢、

〔親元日記(武家名目抄文書二十一所引)〕施行案

伊勢國朝明郡小向鄕名主山本兄弟等(交名在別紙)跡散在名田畠屋敷山林以下事、早任御判之旨、可被沙汰付下地於伊勢與一貞弘代之由、所被仰下也、仍執達如件、

寛正六六十七　管領畠山　尾張守在判

一色左京大夫殿

〔集古文書(十七列物)〕就家施行狀(畠山家臣也)

河内國觀心寺之領内相國寺分、同和州宇治郡内木原(西方三郎知行)幷段錢以下臨時課役、同檢斷等、其外候々事、任延德三年十二月六日御判之旨、可被全寺家領知之由候也、其旨可申付之狀如件、

延德三年十二月廿四日　就家(花押)

中村五郎左衛門尉殿

○

〔類集文字抄 文筆〕遵行（ジユンギヤウ）

〔壒嚢抄 七〕當時ハ管領ノヲ施行ト云、守護ノヲ遵行ト云、守護代ノヲ渡狀ナンド云歟、遵ヲバシタガウトヨム、說文ニハ循ニ作レリ、循ハ行順也トテ、是行ナヒ順ガフ心也、廣韻ニハ遵ヲ行ニ作レリ、然ニ說文ニ遵ヲ循ニ作テ、行順ト云ヘバ、今ノ義モ叶ヘリ、ヲコナイモテユク、施行ニ付テ行ナヒ順ガフナレバ、遵行ト云心モ當レリ、

〔類聚三代格 一〕太政官符

應以大社封戶修理小社事 四箇條之初條

右撰格所起請偁、〇中略 望請以無封苗裔之神分付有封始祖之社、則令有封神主鎭無封祝部、然則社有修播之勤、國無祟咎之兆、右大臣宣、奉勅依請者、事施一國、遵行有便、伏望下知四畿內及七道諸國者、中納言兼左近衞大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

〔簡禮記 四〕遵行之大法

遵行ノ事、施行ヲ受ケテ、守護方ヨリ守護代ヘ附ル狀ナリ、料紙ハ施行ヨリ輕キ紙ニテ可調之、或ハ同樣ノ紙ヲモ可用歟、授上卷アリテ、宛所ヲ書者也、

〔建武以來追加〕一諸國守護人以下使節緩怠事 康永三七四、御沙汰、

或可沙汰付下地之旨被仰下、或可催上論人之由、觸遣之處、遵行遲引之條、甚以不可然、向後於難澁使者者、須被收公所帶矣、〇中略

諸國狼藉條々 貞和二十二十三、沙汰、〇中略

一亂入他人所領致非分押領輩事

不帶補任裁判公驗、不待使節之遵行、無左右致亂入狼藉之條、造意之企、太以無道也、不可不誡、向後

堅可停止、此儀若有違犯之族者、云本人、云與力人、可收公所領三分一、無所帶者、可處流刑也、○下略

〔和簡禮經五〕一遵行事

其國之守護施行ヲ從官領請取テ、守護代ニ被付ヲ一ト云、今世ノ家老又代官タルベシ

假令バ

曾我上野介敎助申近江國野洲郡邇保莊事、任去八月十三日施行之旨、可沙汰付敎助代之狀如件、

寬正六年十月四日　沙汰判
六角殿家來

今江彈正左衞門入道殿

江邊喜左衞門殿

遵行之詞爲證據左ニ注之

御札委細承候了、抑與田保事、御書御敎書拜見候き、就其遵行申候了、御代官下着剋可致遵行之沙汰之處、從去五月以外相勞事候而、遲々非本意候、其段申御使候了、他事期後信候、恐々謹言、

八月九日　大內殿也、義弘ノ親父、沙彌道晴大內介弘世、法名道賢、號延壽院、

謹上　曾我美濃入道殿御返事

御札委細令拜見候了、抑與田保事、遵行申候間、御代官方被請取候訖、當知行人千萬雖申子細候、落著候間、先以恐悅候、定從御代官方巨細可被申歟、他事期後信候、恐々謹言、

永和四年之比
八月十日　大內殿也　散位義弘判

謹上　曾我美濃入道殿

大內義弘香積寺、應永六年十二月廿一日卒、

〔寶簡集二十八〕備後國太田庄內桑原方六ヶ鄕地頭職事、去月五日御敎書如此、早任被仰下之旨、可被打渡高野山西塔雜掌之狀如件、

應永二年四月十五日　　基之花押○細川

上野八郎殿○中略

備後國太田庄内桑原方六ヶ郷地頭職事、任去四月十五日之遵行之旨、早可被打渡高野山西塔雜掌之狀如件、

應永二年五月三日　　氏時花押

山河左衞門三郎入道殿

〔簡禮記四〕打渡之大法

打渡ノ事、遵行ヲ受テ、守護代ヨリ地下ヘ下ス狀ナリ、料紙ハ杉原ヲ用ユ、但遵行ノ紙ニ可遠慮、勿論上卷アッテ、宛所ハ不可有之、

〔貞丈雜記九書札〕一打渡(ウチワタシ)と云は、知行所を拜領したる人江、其地所を引渡したるといふ證據の狀なり、古き案文左のごとし、

打渡

陸奥國岩城郡中平窪上田彥四郎入道跡事

右彼所者、飯野八幡宮御寄進狀之旨、伊賀三郎左衞門尉盛光代官打渡之畢、仍渡狀如件、

奧州岩城殿

康永四年七月廿七日　　出羽權守親胤判

〔和簡禮經五〕一打渡之狀事

從守護遵行ヲ守護代受テ、庄園之百姓等ニ新附之地頭ヲ被付、山ヲ言遣ル狀也、

又訴訟人之下代、或新給主江之事狀ヲモ打渡と言也

出狀
周防國與田保武者六郎入道跡地頭職爲料所被預置曾我左衞門尉師助由事、任去貞和三年十二月二

名稱

日御教書之旨、莅彼所、沙汰付下地於師助代、候訖、仍所打渡之狀如件、

貞和四年三月晦日　左衞門尉定盛判

〔集古文書 三十三 打渡〕康永四年打渡 所藏未詳

打渡

八幡降人所領半分事

右陸奧國岩城郡國魂村田畠在家等、爲中分、任將軍家御下文幷御施行之旨、取沙汰、付于國魂太郎兵衞尉行泰也、坪付有別紙、仍渡狀如件、

曆應二年三月廿三日　法眼行慶花押

沙彌勝義花押

〔應仁私記〕圖牢人沒落、仕久兆輩相屬同類寄合寄除、令蜂起、○中略御教書、御奉公、國遵行、郡代ノ渡狀、奉行折紙等分明也、

召文

召文ハ、一ニ召符トモ云フ、將軍ノ命ヲ奉ジテ、諸人ヲ召喚スル書ナリ、鎌倉幕府以來、御家人等ヲ徴召スル書ヲ召文ト云フ、又訴訟ニ依リテ、被告人ヲ召喚スル書ヲモ亦召文ト稱ス、又執權之ニ署名シテ下スヲ召文御教書ト云ヒ、奉行人之ニ署名シテ下スヲ、召文奉書ト云ヘリ、宜シク御教書篇及ビ奉書篇ヲ參看スベシ、而シテ召文ニ違背スレバ罪ヲ科セリ、

〔庭訓往來〕執筆書與問狀奉書於訴人之時、及兩度無音、仰使節被下召符、

〔節禮記 四〕一召狀之事、○中略是ヲ召文トモ召符トモ云、

召文制

〔倭訓栞中編二十六米〕めしふ　庭訓往來に召符と見ゆ、訴狀を上るにより、相手の方を召の狀也、

〔吾妻鏡四十一〕建長三年七月廿日戊寅、諸國民間訴訟於出來者、西收以前、召符不可下之旨、今日政所問注所等被仰云云、

〔式目抄追加坤〕一問注所難澀ノ輩事

右於遠國者、被下召文之後、無故至于五月十日百五不參對者、就訴人申狀、可有其沙汰也、〇中略仍執達如件、

建長七年三月廿九日　相摸守〇執權北條時頼

〔新御式目〕條々

正安二七十九　但馬前司渡之

一召文事、止問狀御使催促、其可爲三ヶ度事、

一召文事、停止困難色、可被仰當國守護幷隣近地頭御家人等事、

〔建武以來追加〕條々永正六五九

一召符事

有訴人申旨者、雖不伺申之、任法可遣召文、但依時宜可得上意矣、

違背召文

〔御成敗式目〕雖給度々召文不參上科事

右就訴狀遣召文事、及三ヶ度不參決者、訴人有理者、直可被裁許、訴人無理者、又可給他人也、但至所從馬牛幷雜物等者、任員數被糺返之上、可被付寺社修理也、

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年五月廿日丁卯、就雜務等事、有被定下之篇目、雖人訴訟事、雖下度々奉書、論人不叙用、自今以後、召文三箇度之後者、今度令違背者、可有後悔之由、差日數、以國雜色可被下遣召文也、

召文式

〔吾妻鏡 四十〕建長二年二月五日辛丑、諸國守護地頭御家人等、背六波羅召符由事、有其沙汰、向後於如此之輩者、可被處罪科之由、被仰出云云、　十二月七日戊戌、召文違背罪科事、有其沙汰、三箇度不叙用者、以御使可催促之、猶於令難澁者、隨注申之、可有罪科、左右之旨所被觸三番引付以下方也、

〔簡禮記 四〕一召狀之事、訴目安時、奉行對充所路次ノ遠近ヲ勘ヘ、何月何日前可到著者也、若及遲參バ不論理非、越度ニ可被仰付トモ、可申付トモ書出ス狀也、是ヲ召文トモ、召符トモ云、問狀召狀等モ、奉書ノ意得ナリ、故ニ如件カ、者也留ニテ充所アルベシ、依充所而謹言トモ、恐々謹言ナドモ可有之、日ノ下ハ、大方御奉行所各ナド可有之、依時宜各加名判事モ有之也、

召文例

〔和簡集要 一〕一召文事

御手前被官出入付而、從羽田但州目安到來候、継紙二枚、條數都合七箇條也、各加裏判進之候、於理有之者、來ル九日巳刻以前、御口上等可承之候、如御法、雙方當人一人宛、可有御參出、恐々謹言、

月日　　奉行 但シ下ニ判形ナシ

誰殿

右文言之事は、子細ゟ色々有べし

〔吾妻鏡 十一〕文治六年〇建久元年正月七日壬戌、去年奥州囚人二藤次忠季者、大河次郎兼任弟也、頻不背物議之間、已爲御家人、仍有被仰付事、下向奥州、於途中聞兼任叛逆事、今日所歸參也、是雖爲兄弟、全不同意之由爲顯眞心云云、殊有御感、早馳向于奥州、可追討兼任之旨被仰含云云、忠季兄新田三郎入道、同背兼任、參上云云、彼等參上之今、始依聞食驚之、可被發遣軍勢之由及其沙汰、盛時行政等書召文、被下于相模國以西御家人、存征伐之用意、可參上之趣也

〔政所內評定記錄〕寬正三年十二月八日 六日分延引

披露條々

一拾河三河國三橋鎮屋與新善法寺雜掌相論關國稻東平尾內貢物下地事、於當知行在所者、不可有相違之由、被成御奉書、有子細者、訴人以參洛可申上之、

此一ヶ條者、依爲社家奉行飯左太被成召文、其後被執合間、不能銘者也、

〔親俊日記〕天文七年十一月十六日丙戌、富田莊新右衞門入道召文ヲ問狀懇望、諏方折紙被出候間同心候、則被露、

〔北條五代記十〕秀吉公關東發向附豆州山中落城の事

氏直〇北條上洛すべきよし、富田左近將監、津田隼人正以て度々使者を下さるゝ、氏直是を聞、思ひよらざる召文哉、我國においては、秀吉より恩賞にもあづからず、先祖尊靈早雲、いやしくも武勇の家に生れ、弓箭を帶する身とし、武略をもつて、伊豆相摸を切て取、其後東八ヶ國を靜謐に治る事、氏直まで五代也、然といへども、普天の下王地にあらずといふ事なし、勅命においては、參內申べし、偖又氏直も天下の望み兼ては有といへども、使札にては取がたし、關東望みにましまさん人、誰には限るべからず、武勇をもつて取給へ、たがひに勝負を決し、運命をば、天にまかすべしと返答せり、

〔東遷基業十一〕石田三成擧兵附大谷吉隆對談の事

三成は五千餘人を引卒して、佐和山を發して、長束正家と前田玄以を誘引して、大阪に赴けり、かくて石田は大阪に至り、先秀賴公へ目見えをとげ、增田長盛が宅に至りて、評議を極め、西國への召文を遣し、尤是より先に秀家卿へは、內々申合する如く、一日も早く御登り在て、諸方の御下知有べしと、ゐんぎんに云遣しけり、

散狀　達書　添狀〔附入〕

名稱

散狀トハ、諸人ノ姓名ヲ一紙ニ列載シテ、廻達スル書ヲ云フ、蓋シ散狀ハ、中古以降、朝廷ニテ用キラレシ文書ノ稱ナリシヲ、鎌倉幕府以來之ヲ襲用セシナリ、而シテ奉行人散狀ヲ調進スレバ、將軍必ズ之ヲ叡覽シ、可ナレバ其狀ノ端ニ判ヲ加ヘテ返下シ、所司ヲシテ、之ヲ藏人ニ廻達セシメタリ、而シテ散狀ハ、多ク將軍ニ供奉スル人員等ヲ定ムルコト等ニ發セシナリ、又一事ヲ二人以上ニ廻達スルヲ廻文トモ、廻狀トモ云ヒ、或ハ之ヲ觸狀トモ云ヘリ、而シテ足利幕府ノ時、觸狀ハ、總テ折紙ニ書セシヲ以テ、之ヲ觸折紙トモ云ヘリ、

〔貞丈雜記九書札〕一散狀と云は、廻文の事也、今時廻狀と云なり、

〔官位稱籍雜抄〕散狀　記人交名、得下知、以其中人定其事也、記其交名狀、謂之散狀、

○按ズルニ、散狀ハ、中古以降朝廷ニ於テ用キラレシ文書ノ稱ナリ、其一例ヲ擧グレバ、江家次第卷十二關奉幣使ト串儀ノ條ニ、上卿著仗座、召外記、被問使等散狀、ト見エテ、奉幣使等ノ姓名ヲ、一紙ニ列載セルヲ散狀ト云ヒシナリ、而シテ鎌倉幕府以來、其稱ヲ襲ヒシナリ、

散狀例

〔島津本吾妻鏡〕安貞二年十二月廿九日戊辰、將軍家〇藤原賴經明年二所御參詣之事、有其沙汰、供奉人散狀并御神物員數注文、及披覽、助教師員奉行之、〇中略供奉人散狀者、給侍所之司、可加催促之旨、被仰下云云、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年〇曆仁元年二月十六日壬辰、今日將軍家〇藤原賴經御逗留野路驛、明日御入洛之間、依被定隨兵已下行列也、小侍所別當陸奥太郎實時、注供奉人、被持參之、匠作京兆於御前令定左右給之後、被返奉行人云々、所被載將軍家御判於件散狀端也、

〔新編追加雜書〕一鈴鹿山并大江山惡賊事、爲近邊地頭之沙汰、可令相鎭也、若雖停止者、改補其仁、可有際計也、以此趣、相觸便宜地頭等、可被申散狀者、依仰執達如件、

延慶元年七月二十六日

前武藏守泰時判

修理權大夫時房判

相摸守殿

越後守殿

〔吾妻鏡三十六〕寬元三年十一月四日乙未、入道大納言家〇藤原頼經明春可有御上洛事、被經御沙汰、供奉人數五十三人被定之、既被下其散狀於侍所別當陸奧掃部助實時

〔吾妻鏡四十二〕建長四年七月十四日丙申、來月放生會御參宮供奉人散狀廻之處、悉以有進奉、但大藏少輔朝廣、阿波前司朝村兩人許申障云云、又御拜賀供奉人事、同以被相催之、來八月可有御拜賀、各如法卯刻以前可被參勤之狀、依仰所廻如件者、所被載散狀奧也、　八月十四日丙寅、放生會御參宮供奉人散狀被覽之、然有御惱、被召出之、被下御點云云、　十一月十八日戊戌、來廿一日於新造御所依可有御的始、今日被催其射手、陸奧掃部助實時奉行之、

武田五郎七郎　眞板五郎次郎　早河次郎太郎　佐々木左衞門四郎

桑原平內　山城三郎左衞門尉　土肥左衞門四郎　工藤右近三郎

二宮彌次郎　佐貫彌四郎　同七郎　藤澤小四郎

薩摩十郎　平井八郎　布施三郎

右來廿一日、可有御弓場始、各爲射手、可被參勤之狀、依仰所廻如件、

〔吾妻鏡四十三〕建長五年正月二日辛巳、明日依可有御行始于相州〇北條時賴御亭、今夕被催供奉人、是以元日著庭衆、所被撰也、小侍所司平岡左衞門尉實俊、令朝夕雜色等廻其散狀云云、　七月八日甲申、來月鶴岡八幡宮放生會、將軍家〇宗尊依可有御參宮、於小侍所書整供奉人交名等、所謂可著布衣之人、有可著直垂帶劍之壯士、又有可爲隨兵者、今日先廻布衣散狀、其中於宿老之可然者、可參候宮

廻文

寺廻廊之由云云、　九日乙酉、隨兵事、今日被廻散狀、書樣、

右來八月放生會、可有御社參、各帶布衣、可致供奉之狀、依仰所廻如件、

右來八月放生會、可有御社參、各爲隨兵、可致供奉之狀、依仰所廻如件、

右來八月放生會、可有御社參、各兼可致參向廻廊之狀、依仰所廻如件、

〔吾妻鏡四十六〕建長八年〈○康元元年〉七月廿九日丁巳、放生會御參宮供奉人事、廻散狀之、其狀兩樣也、所謂一通方、各著布衣可供奉之由云云、一通方著直垂可供奉之由云云、其體點爲兩樣、於散狀者、數通書分之被相觸云云、　八月廿日戊寅、新奧州〈北條政村〉〈元右馬權頭〉奉執權事之後、將軍家〈○宗尊〉始可有入御于彼御常葉別業之由、日來有其沙汰治定、既依可爲來廿三日、今日被催供奉人、其散狀被覽之後、於御前故障之替已下、有被相加事、

足利次郎　　遠江次郎　　佐渡五郎左衞門尉　　可催加之者

上野次郎兵衞尉〈中務之由、以善次郎左衞門尉、可爲其替者、〉

〔吾妻鏡五十〕文應二年〈○弘長元年〉正月四日丙寅、七日供奉事、以御點人數召進奉、而最明寺殿〈○北條時賴〉公達御事、有可被載于如散狀之次第、所謂相模太郎、同四郎、同三郎、同七郎、如此、是禪室內々所思食也、當時書樣頗違御意云云、工藤三郎右衞門尉光泰得其趣、告事由於越州云云、越州報云、於今度散狀者、人々既進奉訖、此上今更不能書改歟、直承存之後、可改向後轍之由云云、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年四月一日庚戌、二所御參詣供奉人事、以先度進奉散狀被催之云云、

〔類聚文字抄文筆〕廻文(クワイブン)

〔本朝文粹十三廻文〕勸學院佛名廻文　　慶保胤

夫佛名懺悔者、其來尙矣、便是一院之舊跡、多年之恒規也、下帷之士不窺其園、希張鳥羅於煙郊、閉戶之生、不出其閫、誰弄魚竿於月浦、然而照書之寓、多積丹鳥之愼、披帙之處、自致紙魚之愁、飛沈伏

走之群、胎卵濕化之類、或傾一旦之命、或樂千歲之生、延促長短不同、大小各異、受生惡死、彼此同一者也、況復春苑鳴優、以花稱雪、秋離染筆、假菊號金、妄語之咎雖逃、綺語之過何避、誠是樂遊宴於下士之性、何恐遺罪累於上天之眸、是故卷書帷而禮佛、掃文場而迎僧、先生有餘之罪、願消禮拜之頭、今生無量之禍、願開懺悔之掌、一從先達得羽化於鳳掖之雲、滿堂宏才、致鱗飛於龍門之浪、善根之地、布施是勝、蒐集輕財於同心、招厚福於合力、所課有例、諸君勉焉、

年月日

〔空穗物語嵯峨院〕三十人のものどもこそは、たゞいまの一もちには侍るなれ、これらは、うちのめしならでは、たはやすくまかりありかず、さりとももとののめしには、まゐりなん、それにみなめぐらしぶみをつくりて、つかはさん、中略こゝにさきころべんのきみ、めぐらしぶみつくりて、ざえどもめしあつむ、

〔平家物語六〕めぐらしぶみの事

義仲中略やがてむほんをくはだつ、先めぐらし文候べしとて、信濃の國には、ねの井の小彌太しげのゝ行親を語らふに、背く事なし、是を初て、しなのゝ國の兵共みな随ひ付にけり、

〔簡禮記五〕廻文并觸狀

廻文ノ事、大方折紙ナルヘシ、依時宜竪文モ可有之ナリ、口傳、

今度伊豫國河野之一族、就逆意、彼一黨爲退治、令出馬候訖、各不移日時、可有出陣者也、仍執達如件、

年號

月日　　日ノ下口傳

宛所口傳

〔御成敗式目追加〕一對決難澁事

不依御沙汰延否、兩度難澁之時、第三箇度目不及出廻文、以一方可有沙汰之由、被治定之後、貞治以來、堅守其法、申沙汰畢、

〔源平盛衰記二十四〕頼朝廻文附近江源氏追討使事

源氏追討ノ爲ニ、東國ヘ下リシ討手ノ使、空シク還リ上リテ後ハ、東國北國ノ源氏等、イトヾ勝ニ乘間國々ノ兵日ニ隨テ、多ク靡キ附ケレバ、國近キ近江國山本柏木ナド云源氏ナヘ、平家ヲ背テ、人ヲモ通サズト聞エケリ、斯リケル程ニ、兵衞佐頼朝ノ廻文トテ、披露シケル、案文云、

被最勝親王〇以仁王勅命、偁、召具東山東海北陸道堪武勇之輩、可追討清盛入道幷從類叛逆輩云々、早守令旨、可有用意、美濃尾張兩國源氏等者、催勅東山東海之軍兵、可相待北陸道勇士者、參向勢田之邊、州待御上洛、可供奉洛陽也、御卽位無相違者、誰不執行國務哉、依親王御氣色、執達如件、

治承四年十一月日　　　前右兵衞權佐源朝臣在判

トアリ、平家是ヲ見テ、コハ如何ニ、親王トハ、何レノ事ゾトテ、騒合クリ、

〇按ズルニ、コノ廻文ハ、施行篇ニ載セタル、此年五月、高倉宮ノ令旨施行ノ文ト、大同小異ニシテ、疑ハシキモノナレド、姑ラク掲載シテ參考ニ供フ、

〔機嫌治要〕簾中より政務をおこなはるゝ事

鎌倉の右大將〇源頼朝の北の方、尼二位政子と申しは、北條の四郎平の時政がむすめにて、二代將軍〇源頼家及實朝の母なり、大將のあやまりあることをも、此二位の敎訓し侍し也、大將の後は、一向に鎌倉を管領せられて、いみじき成敗ども有しかば、承久のみだれの時も、二位殿の仰とて、義時も諸大名に、廻文をまはし、下知し侍りけり、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年〇文應元年七月六日壬申、去年八月、放生會御社參供奉人間被仰下兩條、

一阿曾沼小次郎隨兵役以子息令勤仕申事
右所勞之由、押紙于廻文之間、言上子細之處、以光泰實俊、度々有御尋子細、可令勤仕之由、被仰下訖、更非自由之計候、
一大須賀新左衛門尉、同五郎左衛門尉等間事、
右於大須賀新左衛門尉者、被下隨兵御點歟間、催促候之處、所勞之由、押紙于廻文之間、注申此旨候之處、現所勞之間、御免訖、次於五郎左衛門尉者、本自被下直垂御點候之間、勤仕訖、此兩人事、同非私計候、以前兩條如此之由覺悟候、〇中略

七月六日　　　　平時宗
　　　　　　　　越後守實時

進上　和泉前司殿

〔鎌倉大草紙上〕去ほどに、駿河國に、今川上總介範政京都へ注進申ければ、不日に禪秀一類幷新御堂殿持仲公、可追討のよし、御敎書を給、上總介關東の諸家回狀をいださる、
今度關東御開事、先以驚入存候、仍事子細、如風聞者、右衛門佐入道依構逆心候と承る、京都上聞、致如此沙汰之由、披露之由訖、左樣之篇、面々被成與力候由聞候、一端者雖無誤似候、有名無實之至、誠狂惑之次第候、就中風渡當國へ御移之條、希代未聞也、上意以御合力之儀、諸人に被成御敎書、可致忠節之旨被仰下剋、既御幡下著候上者、不承上命之事明白候哉、抑如此上意嚴重候之間、自是重而被成御敎書候、雖然都鄙背貴命、而強叛逆之輩へ被致同意者、且先祖普代忠勤失此時、子孫之後跡、永被成他人拜領地事、爲君似不忠、爲家似無撫育、所詮者、觀應年中に、曾祖父心省、祖父範氏等、於當國由比山抽忠節、並關東諸人降參儀、被申沙汰、並天下靜謐歸基事、舊例勿論也、此上者知非而早改、屬理致忠節者、云彼云此、順儀也、若不可然者、早速仁被馳向當陣、被決雌雄事、尤

所望也、以此兩條、一途被致返報、一儀仁被定事可然候哉、恐々謹言、

十二月十〇(年應永)二十五日　今川上總介

〔政所内評定記錄〕寛正四年四月

一對決(四月廿一日)如内談兼日證人奉行事、以公人相觸、回文書樣例式折紙、

明日(廿一)午剋、於政所武田大膳大夫被官與一色左京兆被官負物相論對決、爲證人奉行可有參勤之由候、

齋藤四郎右衛門尉殿

齋藤五郎兵衛尉殿

〔政所賦銘引付〕一内〇談〇回〇文(折紙)

明後日(一日)午剋、政所内評定被執行、可有參勤之由候、

飯尾ミ――殿

齋藤ミ――殿

ミ――

ミ――

ミ――

以公人相觸之、於引付衆者、以使者相觸之、

一對〇決〇回〇文(折紙)

明ミ日(ミ日)、、剋、於政所、、與、、算用對決、爲證人奉行可有參勤之由候、

ミ――

ミ――

觸狀

兩人、但依事三人也、以公人相觸之、〈兩人者一人爲右筆也〉一人致算用者、御倉兩所ヨリ算置二人召出之、置合算也、以公人召之、

〔和翰集要　二〕一廻文之事

明智日向守光秀構謀叛、去朔日之入夜、號西國立身寄、軍兵引卒、究竟之者共、信長公花路之御座之館〈江〉二日之卯剋押寄之處、五三度程は雖被軍、御勤座、爲叶不給、其後御父子共被召御腹候畢、誠に一萬下之消燈四海迷惑闇夜、失道上下悉愁歎而已、御分國之忠臣等承之屆聞及、洛中洛外より馳集、五日之午剋織田七兵衛殿令被害、十三日には又明智踏殺、其次而相殘り御分國逆徒等一々申付、悉に次男三男之御若子達を取建申所也、仍下知如件、

天文九年六月十五日　　羽柴筑前守秀吉

宛所

〔東遷基業　十一〕石田三成擧兵附大谷吉隆對談の事

扨大谷〈○吉隆〉は、佐和山に二日逗留して、萬事三成に云合せ、諸國の味かたを招き集る廻文を認て、其身は越州敦賀に下りけり、其文に曰、

自古至今、見國家興亡、皆是森人之所行也、爰源家之末流德川家康出於三州、直領掌八州、依宜祿而勢若飛雲、亡古法蔑諸人、誰敢不惡之、則三成吉隆代幼君秀賴公欲亡彼、企相談所相觸也、各從指揮、而可勤軍役、若於不承引者所居於大阪之妻子、悉可令繋獄者也、何遑不誅無道、治國安民之謀、有此一擧、急揚橅馳參于大阪、守護幼君、指圖相待可申也、依廻文如件、

慶長五年六月廿七日

〔簡禮記　五〕一觸狀ノ事、折紙ニテ可調之、主人貴人ノ仰ヲ受テ書出ス、文言タトヘバ、

御用之儀有之候之間、不移時剋、可有參勤之由、被仰出候也、

月日　　伊勢守

某殿

某殿

〔和簡禮經五〕一觸。折。紙事宛所奥端上下ノ品有之ベシ

從主人仰ヲ奉テ書出狀なり

假令來五日大進物可有之、爲討手可被參勤之由候也、

日付ヨリ少奥ヱヨセテ相調ル、人ノ名乘ヲ書列形アルベシ、常與說

來十五日御用之子細候、各可被參候由被仰出候恐々謹言、

又巳上共

急度申トアル事ニハ名判アルベシ、カリソメノ事ニハ名字官計ニテ候、

正月十日　名字官名乘判

一　一某殿奉　名乘ナシニ、名字官判ナシニモ、受領計ニテ判ナシニテモ、

三　二某殿奉　巳上三色ナリ

五　三某殿當病

四　四某殿奉

二　五某殿當病

上中下ノ品數多有之

觸狀ニ我同名ヲ調事ナラバ、總テノ人數ノ跡ニ可書、名字官途如常從御前フレ候時ハ、殿文字不可有之、私ヨリフレ候時ハ殿文字可加也、

次第不同トロニ書テ

五某殿

四某殿

三某殿　如此書時ハ奥ノ端アガル也

二某殿

一某殿

明日於殿中御用被仰出候、午剋已前可有御參候、恐々謹言、(充所ノ仁ニヨリ御字アルベシ、參勤之由候也共、此時ハ恐々ナシ、)

正月十五日　伊勢守

各御中

文體ヲ書其上ニテアテ所ヲ書ト、先アテ所ヲ書テ、其後文體ヲ書ト二色ノ樣アリ、文體ヘ近キヲ上首トセリ、

觸折紙ニ點ヲカクル事、貴人ヨリノ御觸ニテ有マジキ事也、吾名ノ下、少脇ヘヨセテ奉(ウケタマハルトヨムナリ)ノ字ヲ一字可書、(私サマニテハテンヲカケテ合點スル也、常ハ奥ノ既ホウヲ仕候ト云、テンヲカケル心ナリ、)

〔丹州書札式〕觸折紙、從主人仰ヲ奉テ書出狀也、

來十五日御用之子細候條、各可被參候由、被仰出候也、恐々謹言、

正月　楠兵衛政行判

某殿

某殿

〔道照愚草〕殿中より觸折紙備上覽、相觸には殿文字不書之、然間奉(ウケタマハル)と書之私より相觸には、點をかくる、てんをかくる事は、事により自由の儀なりと云々、

〔伊勢加賀守貞滿筆記〕一觸折紙に點をかくる事、常之儀也、敬かたへは、てんを懸はらうせきなり、

我が名の下に奉と可書之、又女中よりの御ふれにはかしこまりてうけたまはりぬ、又はうけ給りぬ、位により如此も、

〔曾我物語 八〕はたけ山うたにてとふらはれし事

その日もすでにくれなんとす、はたけ山どのは、ほどちかくましませば、きやうだいのありさまをつく〴〵と御らんじて、いまゝでほんいをとげざるぞや、あはれへいけの御代と思はゞ、などかや、一門とぶらはざらん、たう君の御代には、かやうの事もかなはず、しげたゞもわかき子どもをもちぬれば、人のうへとも思はずして、まことはむざんにおぼえたり、かぢはらふれぢやうには、みやうにちかまくらへいらせ給べきなれば、こよひうたでは、かなふまじ、このよししらせんと思ひ給へども、人々あまたありければ、うたにてぞとぶらひたまひける、

○按ズルニ、後拾遺和歌集雜五ニ、みゆきとか世にはふらせて今はたゞ木のまのさくらちらすなりける、ト見エ、又金葉和歌集戀ニ、つゝめども涙に雨のしるければ戀する名をもふらしつるかな、ト見エタレバ、觸トハ廣ク告グル義ニ用キシ語ナルヲ、轉ジテ文書ノ稱ニ用キルコトヽナレリ、

〔吾妻鏡 四十〕建長二年十二月廿七日戊午、近習結番事治定、自今已後、至不事懃者、削名字、永可止出仕之由、嚴密被觸廻之云云、○中略

定結番事 次第不同

一番 子午　備前前司　遠江左近大夫將監 ○中略

二番 丑未　遠江守　相摸式部大夫 ○中略

三番 寅申　相摸左近大夫將監　武藏太郎 ○中略

四番 卯酉　宮內少輔　上野前司 ○中略

五番　辰戌　北條六郎　尾張次郎（○中略）

六番　巳亥　陸奥掃部助　陸奥四郎（○中略）

右守結番次第、一日一夜無懈怠可令勤仕之狀、依仰所定如件、

建長二年十二月日　相模守　陸奥守

〔武政軌範引付內談篇〕一內談始行事

兼日開闔遣折紙、相觸衆中、

明後日十二午剋、於殿中一方內談被始行候、可參勤給之由也、恐々謹言、

二月十日　實名判

某殿

〔武政軌範政所沙汰篇〕一式日內談事

先兼日爲政所廻折紙相觸之、

〔政所內評定記錄〕政所內評定始著到（寬正二年正月廿六日）（○中略）

相觸折紙書樣（以公人相觸之）

諏訪信濃守殿、松田丹後守殿、飯尾加賀守殿、（此三人依爲引付衆、以私使者觸勒之、）

明後日廿六日午剋、政所內評定始被執行、可有參勤之由候、

齋藤三郎兵衛入道殿（奉、依歡樂、雖無參勤、爲年始之間被奉云々）

飯尾左衛門大夫殿（奉）

治部河內守殿（奉）

齋藤四郎右衛門尉殿（奉）

淸式部丞殿（奉）

齋藤大藏丞殿奉

齋藤五郎兵衛尉殿奉

清四郎左衛門尉殿奉

諏訪左近將監殿奉

飯兵太、當年始而爲寄人、當日相定之間、衆日不加之、仍中遣折紙書候樣、

今日午刻、政所内評定始被執行、可有參勤之由候、恐々謹言、

政所代

――諱

飯尾兵衛大夫殿

〔澤巽阿彌覺書〕一御供衆御觸折紙

次第不同

細川右馬頭殿

畠山次郎殿

大館兵庫頭殿

細川九郎殿

一色下總守殿

細川駿河守殿

伊勢備中守殿

伊勢左京亮殿

來五日晝時分、私宅へ御成御座候、可有御參勤之由、被仰出候、

七月廿九日　　伊勢守

〔大館常興日記〕天文九年正月十日日行事佐方より、各御供衆中へふれ折紙あり、明日十一御普請始、未明に、若黨一人づゝ、未明に可被進之由候也、

〔立入左京亮入道隆佐記〕天正九年辛巳正月十八日に、江州於安土御爆竹を信長させられ、諸大名をよせ、金銀をちりばめ天下に其聞無隠事候、〇中略就中惟任日向守〇光秀へ、正月廿三日に、御觸状を被出、五畿内を被相觸候、觸狀如此候、

先度は、爆竹諸道具拵らへ、殊きらびやかに相調、思ようすの音信、細々の心懸神妙候、然者京にては、切々馬を乗可遊候、自然にわかやぎ、思々の仕立可有之候間、其方事者不及申、畿内之直に奉公之者共、老若共可出候、其方請取、可申觸之候、於京都陣参、被仕公家衆、又只今信長に扶持を請候公方衆、其外上山城奉公者共、不殘内々可用意旨可申聞候、於大和者、筒井順慶、其外國持取次直参いたす者共、可用意事尤候、津國にては高山瀬兵衛、池田、是は子共兩人、親者伊丹城之留守居たるべく候、從多田者鹽川勘十郎、同橘大夫、是兩人、河内にては、多羅尾父子三人、池田丹後、野間佐橘、同與兵衛、其外取次者、結城安見新七郎、三好山城、是は安波へ遣候間、其用意可除之、但於望者、覺悟次第可乗候、和泉にては、寺田又右衛門、松浦安大夫、沼門任世、同孫、其外直参之者共、根來寺連判扶持人共、其外杉坊佐野一流之者共、可用意、次大阪在之五郎左衛門蜂屋かたへも、其用意可申送候、若狭よりは、武田孫太内藤、熊谷、粟屋、逸見、山縣下野可出候、是は五郎左衛門可申遣候間可申候、六十餘州へ可相聞候條、馬數多可仕候、其外手寄之あとに、可乗もの在之者可申付候、長岡父子三人、但兵部大夫は、丹後に在之候、よく候、兄弟二人、一色五郎、これも可乗旨、可申送候也、

二月二十三日　　御朱印信長

惟任日向守どのへ

〔天正記二〕閏正月〇天正十一年上旬、秀吉又安土にいたり、國々の諸侍禮義を調、もつはらそんかうす、あたかも將軍〇織田信長御ざいせの時のごとし、誠に君臣のれい、しよ人のかんずる處なり、あづちに十餘日とうりうじ、其後又山ざきへ打歸り、諸國の陣ぶれをなし、ぐんびやうながはまによせきたる、

〔武家嚴制錄十八〕一同時〇福島正則國替時方々御觸狀

今度國替之めん〳〵、百石付壹人壹疋宛出之、從郡山大阪まで可相送、并奉公人之義、不依上下、國替之所まで令供、主人相對之上可令歸國、主人又逢亂可逃遣之、右之趣かたく被仰付候間、被存其旨可申付之候、恐々謹言、

元和五年七月廿二日　土井大炊頭

板倉伊賀守

本多上野介

酒井雅樂頭

水野河内守殿

間宮三郎右衛門殿

〔武家嚴制錄三十五〕御朱印被下之時御觸

覺

一壹万石已上之面々、領地御朱印被下付而、土屋相摸守、本多淡路守奉行被仰付候事、

一御代々御朱印所持之面々は、御朱印に寫を差添、右兩人御朱印拜見之寫を可被相渡は勿論、國郡鄕村高辻帳面可被差上之、又御朱印無之衆之國郡鄕村領知之高、委細書付注之、兩人江可被渡候事、

一御朱印之外、御加増拝領等御朱印、在々にて所替之面々等、御朱印高之內、領知分候面々、其旨趣具書注之、兩人まで可被差上之事、
右之外可被相伺儀者、御兩奉行江可被承之者也、
子〇貞享元年三月廿二日

〔御觸書集覽一〕天保十二丑年五月廿二日

町々年番
名主共

享保度被仰出候御趣意、幷寛政度厚キ御趣意を以、町々觸渡有之、町役人共一統相辨居可申儀に候得共、年數相立候に付テハ、自然御觸面取失候廉々不少相聞候、此度重テ被仰出有之候に付、追追可觸示儀に候得共、諸事近來之仕癖相改享保寛政度之御趣意に不違樣可相心得候、
右之趣町中一統不洩樣、早々可申通候、
右之通、矢部左近將監樣御立合被仰渡奉畏候、仍如件、
丑五月廿二日

組々
年番名主壹人宛

〔文格例書〕觸書之部
三千石以下知行所高手當物 朱書
追而此觸書早々相廻、宿村承知之旨、別紙受書相添、宿村送を以、下野役所江可相返候、
中根榮之進知行、常州茨城郡本鄕村誰を目籠ニ入、右村方より差越間、不取逃樣食事等之儀も手當いたし、宿村送を以、下野役所江可差出候、尤江戶着前日止宿場所より、宿村次を以可致注進者也、
未〇安政六年九月日

石見
下野

左近
飛騨
主膳

何州何郡何者ゟ
何州何郡何村迄
右
宿々
村々役人共

触書
日光道中千住宿ゟ
常州茨城郡本郷村迄
宿々
村々役人共

○

〔代官触留 四〕御触事其外都而御達物之儀に付、奉行衆ゟ之御廻状、兎角末々迄達方不行届哉之旨、奉行衆ゟ御沙汰有之候間、以来者御支配向之分并御手附御手代に至迄、不洩様早々御触達可被成候、此段御心得に御達置申候、以上、

正月十一日　後藤一兵衛

達書

〔慣習例〕諸向ゟ達書

一節下ゲ札紙品并認振

一ヒレ札張方

一在平居越幷遠島出帆之義、町奉行より廻狀ニ而申來候節取計、

一兩奉行方ニ而寺社呼出候段申來候節之事

〔書禮秘訓抄〕御添狀と云事、縱令御內書相添給候を申候也、三職をも其外をも如此之時は、御添狀と云也、ケ樣成時、文言以下常之狀とは可相替、何も口傳おほし、能々可分別也、

〔南路志 三十〕蹔跪御綺金剛福寺造營以下事、御敎書政所御下文等如此、可被存此旨之狀如件、

正應二年六月二日　　親高（花押）

院主大輔御房

〔親元日記〕寬正六年三月十五日壬戌小野寺隱岐守舊多御馬進上之、御返事御書幷御副狀、

公方樣御馬三疋（月毛、黒精毛、鹿毛）進上之旨卽令披露畢、仍御書幷御劍一腰（吉眞）段子一端（白）御盃一枚（紅地）（桂櫂）被下之候、御祝著察存候、次馬一疋（黒精毛、雀目結、印）賜候、尤以恐悅之至候、仍太刀一腰（持）香合一、（金蒔）盃一枚（紅地）進之候、併御禮計候、

十一月廿八日　　伊―

謹上　小野寺へ

已上此色々以宗茂、寺町三郞左衞門方江渡遣之、

六月二日戊寅、上相戶部江御副狀御判出候、

就被仰下上進之御馬二疋（月毛、青毛）、去十二月廿日京都著也、卽令披露畢、早々御進上目出候、仍被下御書候、猶以以前被仰下分者、至大長御馬事候、涯分早々御尋進候者可然候、委細猶加藤方可被申候、次馬一疋（月毛）拜領、祝著之至候、恐々、

五　廿七　　伊―

謹上　上相民部大輔へ

名稱

擧狀

擧狀ハ、素ト薦擧ノ書ナルヲ、後ニ轉ジテ下ノ言ヲ上ニ傳達スル書ニ云ヘリ、鎌倉幕府以來守護地頭等、事ヲ朝廷ニ奏スルニハ、必ズ將軍ノ擧狀ヲ發シ、又人民事ヲ幕府ニ申達スルニハ、必ズ領家ノ擧狀ヲ副進ス、又事ヲ吹擧スル爲メニ發スル敎書ヲ吹擧敎書ト云フ、敎書篇ニ載ス、又訴訟擧狀アリ、法律部中篇訴訟文書篇ニ詳ナレバ、此ニハ只其一斑ヲ示スノミ、

〔庭訓往來〕訴訟若有悠々緩怠之儀者、御在洛費也、可被用意活持之計略、先被進擧狀於代官者、

〔簡禮記四〕一擧狀ノ事、是ハ權門ノ狀ヲ申請、充所ヘ付テ、其權威ヲカリ、願處ヲ相達ス狀也、亦頭人支配ノ狀ヲ取テ、上ヘ訴、其願相達狀ヲモ擧狀ト云、

〔丹州書札式〕擧狀從古今以申鳴シ候心得也、爲昇進申擧狀事、不論貴賤、一向可停止之、（從關東擧狀ニテ申請、上洛シテ昇進ヲ可望候也、）此以洞見則、須以常ノ事也、

擧狀式

〔沙汰未練書〕一擧狀書樣事

何國何所某申何々事、以代官某令言上候、以此旨可有申御沙汰候哉トモ、又可有御披露候哉トモ、

恐々謹言、

何月日　　某裏判

進上　御奉行所（擧狀ニハ年號不書之）

〔營社御造替日記上〕御擧狀案

若宮太刀辛雄遷宮雜事、常住注進如此候、具子細後面候、以此旨可有御披露御集會候、恐々謹言、

應永十四年十月廿三日　　祐光

任官擧狀

共目代殿

〔尺素往來〕武家人令競望官位事、於八省輔、諸寮頭、諸職大夫、及四品等者、爲高官上位之故、尤可申請將軍之御擧狀、(○狀字原本作達、今據貞永式目抄所引文改)至諸寮助、諸職亮、諸國受領幷叙爵已下者、爲微官淺位之上者、敢不可及武家之御一行哉、

〔御成敗式目〕一官爵所望輩申請關東御一行事

右被召成功之時、被注申所望人者、既是公平也、仍非沙汰之限、爲昇進申擧狀事、不論貴賤、一向可停止之、但申受領撿非違使之輩、於爲理運者、雖非御擧狀、只有御免之由、可被仰下歟、兼又新叙之輩、巡年遐來、浴朝恩者、不在制限、

〔細川家書札抄〕受領任官所望之時書出様事

近江守所望事、可擧申公家之狀如件、

年號月日

家人受領官途望時任候也と認候て、宛所ニ今任候受領官途を書候て、遣之候、又詞にても申遣事も可在之、是又其家々の例もあるべき歟、

一受領官途所望事、可擧申京都狀如件、

如此も候哉、此段不分別候、御沙汰有つけられ候やうにあるべし、

訴訟擧狀

〔沙汰未練書〕一地頭御家人ノ外ハ、不可及直訴、名主莊官以下者、帶在所地頭擧狀及訴訟也、但於西國所務代官者、雖不帶擧狀、及直訴也、依所務代官之科者、正員雖不存知之、懸其科之法也、

〔建武以來追加〕條々(文明九八廿七、于時公人奉行松田丹後守秀興奉行之○中略)

一就訴人申狀、爲權門被執申事、急度給置擧狀、可伺申之、若有掠申儀者、對被執申仁體、可有御糺明矣、

義詮

〔後愚昧記〕貞治二年七月廿日丁亥、早旦行算向大樹〈〇足利義詮〉許幷七條大夫入道〈執事也〉許、兼書幷擧狀所持向也、各不被逹歸了、

古事類苑

政治部五十五

下編

制符

制符トハ、將軍ヨリ發スル制書ナリ、蓋シ制符ト云ヘルハ、官符ノ稱ニ準據セシモノナラン、而シテ足利幕府ノ季世ヨリ以來、之ヲ掟、又ハ定ト云ヒ、或ハ法度書トモ云ヘリ、又條款ヲ別チテ事ヲ一紙ニ掲載シ、以テ之ヲ朝廷ニ奏シ、或ハ之ヲ下ニ令スルヲ事書ト云ヒ、又之ヲ篇目トモ、條目トモ云ヘリ、其他式目、式條等アリ、並ニ法式ノ條目ヲ記セル文書ノ稱ナリ、

制符ヲ發スルニ、執權連署及ビ管領之ニ署名シテ下シタルヲ御敎書ト云ヒ、或ハ下知狀トモ云ヒ、又奉行人之ニ署名シテ下シタルヲ奉書ト云フ、宜シク御敎書、下知狀、奉書ノ諸篇ヲ參看スベシ、

掟、法度、條目、式目、禁制等ハ將軍ノ外、守護又ハ大名、諸役人等ヨリ發スル事モ亦多シ、今本篇ニハ其例ヲモ加ヘタリ、

〔侍所沙汰篇 追加〕一以田地所領爲雙六賭事

右博戯之科、禁制惟重、而近年非啻背制符、剩以田地爲賭之由有其聞、自今以後、可被停止、若猶令違犯者、早可被處重科、可令沒收其賭矣、

寛喜三年六月六日　武藏守泰時〇北條
相模守時房〇北條

制符例

禁制
捉書
定書

駿河守殿〇北條重時
掃部助殿〇北條時盛

〔吾妻鏡四十〕建長二年十一月廿九日庚寅、鷹狩事、諸人已背嚴重制符、以之爲日次之業、所々喧嘩猥耕、職而由斯、仍可停止之由、被仰諸國守護人等、

〔御成敗式目追加〕一質券賣買地事
右以所領、或入流質券、或令賣買之條、御家人等、侘傺之基也、於向後者、可被停止、至以前沽却之分者、本主可令領掌、但或成給御下文、又下知之狀、或知行過廿箇年者、不論公私領、今更不可有相違、若背制符、有致濫妨之輩者、可被處罪科、次非御家人、凡下之輩質券得地事、雖過年紀、賣主可令知行、

正安二年七月五日　相摸守判〇北條貞時

上總前司殿

〔吾妻鏡三十三〕延應二年〇仁治元年三月十八日壬午、關東御家人幷鎌倉祗候人々、万事停止過差、可好儉約條々事、日來有沙汰、今日被造其制符、自來四月一日、固可禁制之云云、

〔新御式目〕一止山野江海煩可助浪人身命事
諸國飢饉之間、遠近侘傺之輩、或入山野取薯蕷野老、或臨江海求魚鱗海藻、以如此業支活計之處、在所之地頭、堅令禁遏云々、早止地頭制止、可助浪人身命也、但寄事於此制符、不可有過分之儀、於此旨、可致沙汰之狀、依仰執達如件、

正嘉三年二月九日　武藏守〇北條長時
相摸守〇北條政村

駿河守殿

〔和簡禮經八〕一禁。制。　禁ハ止也、制ハ令也、總而制札ハ押下而書之、其故ハ中人以上ハ札ニ不及令

ヲ知リ、中人以下ニハ事ヲ爲令𪜈知、札ニ書テ路頭ニ打ツ、

一將軍家御成敗之外、守護國司等爲私國郡ニ被打事アリ、大半同前、制禁之詞ヲ札ニ書テ、公界ニ打ヲ制札ト申也、

一右將之下知　旨奉之下知兩樣事

右將ハ直ノ仰也

旨奉ハ奉行ノ判形也

一右將ノ下知ニハ用令字、旨奉下知ニハ去令字加被字、日下像將ノ座ナレバ、恐テ判ヲ不居、一行奥ヘヨケテ奉行判ヲ居ル也、

又之說、官氏尸書ニ判形アレバ、月日ノ通リニ一行ニ不被書事モアリ、依之一行奥ヘヨケテ書之トモ云ヘリ、

一右將　旨奉トモニ三ケ條ニテ定レル法也但付書ハ各別也

漢高祖約法三章　本記　府

一禁制之二字ヲ則主君之位ニアツ、己ヲ責、禮儀ヲ正シテ、人ヲ罰スルハ君子之德也、故我身ニ令ヲ正タ行テ法ヲ犯マジキト云心也、

一禁　右之二字ノ頭ヲ二文字ト、事書ノ闕ノ間ノ通リニ筆ヲ立ル、

一所付之事、其國ニ在テハ國ヲ不書、他國江遣ニハ國ヲ書入也、幷禁制之通リヲ半行左ヘヨケテ筆ヲ立ル、

一年號ハ右之字ノ通リ一字下テ書之

一竪紙ハ書下シ、年號モ書メレド是テ云折紙ハ付年號、

一書下シ年號ノ時ハ官氏朝臣ト書、但限制札也、御下知等モ同事ナレドモ、若シハ氏實名朝臣ト

モ書、位署書ノ時ハ實名加之、〔委見ニ五卷〕

一付年號ノ時ハ實名計書之、御下知等之事也、〔但可依于事口／學年號也〕

一制札并書紙ノ御下知等ニ實名不載之〔但御下知上也ニハ、本奉行一人受／領ノ下ニ書加之、折紙ハ各別也、〕

一尸書之事、非朝廷之臣者不書之云々、雖然率土之人民孰無非王臣云々、此謂歟制札御下知等ニ非四品而奉行、與朝臣稱之、〔官　氏　朝臣〕氏ニ依テ朝臣宿禰眞人ト書也、

一件留　者留之事

件ハ品也、クダリト云字儀モアリ、又紛レナシト云心アル故ニ、人ニ从牛ト書ケリ、〇中略

一急劇之時分御制札、御判ヲ以、五山其外諸寺社家ヘ被成事モ有之御事候、御文言如常少シ手ニ葉可有相違、御判計也、鳥子ヲ四半ニキル、

禁制　攝津國何郡――寺

一軍勢甲乙人濫妨狼藉事

一伐採竹木事〔付――〕

一非分課役事

右條々堅被令停止之訖、若有違犯之輩者、速可處嚴科、〔者也、仍下知如件、／旨所被仰下也、仍下知如件、〕

右二行書〔右ノ方ハ右筆ノ下知／左ノ方ハ旨奉ノ下知〕也〇中略

一掟。事

天下之儀以下被相定事ヲ、以一書被注置儀候、下々擧之而後々迄不改替事ハ紙ニ書テ、其家々ニ被置ヲ申也、但神前佛前其外事ニ依テ、若シハ板ニモ書之、

押紙云

何々社頭掟事

一社內納物事
一社頭金物事
一馬場掃除事
右一月ニ十五日、社人爲順番可成之、若於懈怠之輩者、可改所帶者也、仍如件、
延德五年八月十五日　在判

一定。書事
物ノ品ヲ分テ、善惡ヲ取交テ書之、又ハ於市町ニ、米錢等ノ定、於郷里稻田增減以下之定可書之、是ハ板ニモ書、紙ニモ書之、掟ノ心ノアサキヲ申候也、

押紙云
定
一不可押買狼藉事
一國質所質禁制事
一不可有喧嘩口論事
右條々定置訖、諸商人等守此旨、於當市場可致商賣、若至違犯之輩者、可處罪科者也、仍如件、
應永七年三月十日　左衞門尉判
近江守判

〔書禮秘訓抄〕禁制
一軍勢甲乙人濫妨狼藉之事
一陣取付放火等之事
一相懸兵粮以下之事

右條々堅令停止畢、若有違犯之輩者、可被處嚴科也、仍掟如件、

年號月日　　官途判

無官之人は氏に名乘也、受領之人は官の所に受領を書て、判なり、奉行の札なり、又禁制と年號と同通也、條書之項より一字可下、此札之書樣は伊勢駿河守之義なり、

定

一盜賊人之事

一放火人之事

一喧嘩口論之事

右彼條々於有注進者、別而可加褒賞者也、仍如件

年號月日

三ノ判

二ノ判

一ノ判

是者横板之札也、條書は何ケ條も書故に、横板長仕なり、常之掟是也、候と云字は不書者也、

きんせい

一おしがいの事

一ふつうにこし、ようきやく、せいせんの事、

一こうろんの事

一かたきうちの事

一しせんたうぞく有べきをかくし可徵事

右でう〳〵、一事たりといふとも、いはいのともがらあらば、かたくせいくわせらるべきもの

なり、仍下知如件、

年號月日　　某判

是は日市杯の時、誰々もよみ能様、假字に書事一の故實なり、人に寄、朝臣と不書て、官受領計判有人も有故、故實口傳、

一受領前の守之事、五年過而可書を、中頃より三年被縮歟、當代只今受領而、其座より前と云字を書交不可然候、縦介親の受領相續候共、如何に候哉、況前之と書事、謂難意得候、程を不經而我が前の次第は、更不可立候へばとの事を、前成て昔戀敷心歟、諸人の可為嘲也、

〔集古文書〕三十八 掟　室町家掟書　蜷川某藏

殿中御掟

一不斷可被召仕輩、御部屋衆定詰同朋已下、可為如前々事、

一公家衆御供衆申次御用次第可有參勤事

一惣番衆面々可有祗候事

一各召仕候者、御縁罷上儀、為當番衆可被下旨、堅可被申付、若於用捨輩者、可為越度事、

一公事篇内奏御停止事、○中略

永祿十二　正月十四日　彈正忠信長（織田）

〔信長公記〕八　天正三年九月十四日、信長豐原より北莊迄、被納御馬候、○中略

掟條々　越前國

一國中へ非分課役不可申懸、但差當子細有て、於可申付者、我々へ可相尋、隨其可申出事、

一國に立置候諸侍を雅意に不可扱、いかにも懇にして可然候、さ候とて、帶紐を解候様には、有ましく候、要害彼此機遣簡要候、領知方嚴重に可相渡事、

一公事篇之儀、順路憲法たるべし、努々贔屓偏頗を不存可裁許、若又雙方存分不休においては、雑掌我々に相尋可落着候事、

一京家領之儀、亂以前於當知行者可還付、朱印次第たるべき事、但理有之、○中略

一雖事新き子細候、於何事も、信長申次第に覺悟肝要候、さ候とて無理非理之儀を心におもひながら、巧言不可申出候、其段も何とぞかまひ有之者、理に可及聞屆、可隨其候、とにもかくにも、我我を崇敬して、影後にてもあだにおもふべからず、我々あるかたへは、足をもさゝざるやうに、心もち簡要候、其分に候へば侍の冥加有て、長久たるべく候、分別專用に候事、

天正三年九月日

〔太閤記〕十筑紫陣御觸之事

明れば天正十五年正月、元旦之出仕など、亂世に事かはり、式掌の沙汰に及で、物ふりてけり、○中略

九州御出勢に付御掟之條々

一兵粮并馬之飼料、九州之地、令參著之日より可被下行之事、

一別紙出勢之日次、二月十日より無相違立出、泊々不指合やうに、宿奉行次第可守於其旨之事、

一喧嘩口論仕出來候はゞ、雙方其罪遁まじき事、

一追立夫、をしかひらうせき等有まじき事、

一奉公人先主に暇をもこはず、主取を仕有之處、先主見付候て、理不盡に成敗仕候はゞ、却て可爲越度、見付次第、當主人に相理り、其上を以、急度可申付、又屆有之奉公人をにがし候はゞ、其主人越度たるべき事、

一城を打圍む事、相定る攻手之外、一切令停止事、

一合戰に出立、先陣後陣之儀、軍奉行次第下知を相守可申之事、

右軍法を背き、自由のかけ引有之においては、可被處嚴科者也、依如件、

〔敎令類纂初集三十七〕寛永九壬申年六月十六日、肥後國之御制法、

掟

一寺社方幷町人百姓以下如前々之可居住事

一人賣買停止之事

一肥後國中におゐて無主人抱置べからざる事

一竹木濫に剪採べからざる事

一押買狼藉すべからざる事

一未進方棄破すべき事

一未進方に取つかふ男女未進同前可棄破事

一家僕之儀、主從相對次第事、

一在々所々欠落之百姓、送迎幷宿を借し候事、國中之儀は不及沙汰、隣國にも抱置べからざる事、

右可相守此旨もの也、仍執達如件、

寛永九年六月十六日

伊丹播磨守

稻葉丹後守

石川主殿頭

內藤左馬助

水野日向守

法度書

〔和簡禮經八〕一法度書事

大牢制止之旨趣相籠リ候、禁制書ハ一篇ニ制止之旨也、法度書ハ是非相兼而書之、依之禁制ヨリ

も輕キ事ニ書申也、

〔武州文書〕北條氏條目

永代法度之事

一當年改而申出候、いか樣にも兵粮を嗜、自然に籠城つゝき候やうに可致覺悟、當意市町にてかい、其日々々仕候儀かたく法度に候、兼而兵粮致支度、寄親之藏へ入可預置候事、

一朝夕も又正月も、一騎合乘は、白衣に而もくるしからず候、冬はかみこ木綿こそで可然、夏は布かたびら、又はたふかたびらもくるしからず候、總別衣羽衣たくいくつつい入義無用候事、

一一騎合乘何もきうせん三ヶ一の馬を乘べし、たかき馬一圓無用候、只今持候馬之取べきはくるしからず候、左候とて馬やせ候事有間敷候事、

一武具は、てかい、はいだてまで、いたすべし、中間小者迄忠可致事かんよう也、具足は雨風に當候てもそんじざるやうに可致候、はおりも黑木綿可然候、されば小旗さい鍵法度事、

右法度書は、陣番普請しげく候間、如此被仰出、朝夕見ぐるしき爲體くるしからず候、又黃金代物支度候者有之候はゞ、おんみつにて可申上、則可御褒美候也、仍如件

天正十八年三月廿日

逸見與八郎殿

〔香取文書五〕法度

一喧嘩口論之事

一押買狼藉之事

一盜賊等之事

右於違犯之輩者、可加成敗者也、仍如件、

天正二十年卯月五日　花押

〔御成敗式目〕一猥藉時不知子細出向其庭輩事

右彙日於同意與力之輩者、不及子細、至其輕重者、彙難定式條、尤可依時宜歟、〇下略

式條

〔吾妻鏡二十八〕寬喜四年〇貞永元年九月十一日、武州以五十箇條式條、相副和字御書、被送遣于六波羅、

〔吾妻鏡三十〕文暦二年〇嘉禎元年九月十日庚午、鎭西有强盜人、彼所領被召放者、可賜之旨、義村註上覽狀申之、不可叶、未斷闕所之趣、近年雖被載式條、爲評定衆今及此義、人以不甘心云云、

式目

〔吾妻鏡二十八〕寬喜四年〇貞永元年八月十日、武州〇北條泰時令造給御成敗式目被終篇、五十箇條也、今日以後、訴論是非、固守此法、可被裁許之由被定云云、〇下略

〔御成敗式目追加〕一嘉禎三年八月十七日評定云、或構謀書、被押領之由訴之、或掠賜御下文、知行之條、不可依此式目之旨、欝申輩、雖其數在、不論理非之詞、已相叶此儀歟、自今以後、雖有文書之訛謬、過廿ヶ年者、守式目之趣、不顧理非、就知行之年紀、可有御成敗云云、

〔武家名目抄文書三上〕按、凡條々書立たるものを條目といふなり、然るを後代專法令をさして、いふが如くなり行しは、法度のことは、多く條目書にするが故なるべし、

條目

〔侍所沙汰篇追加〕一爲守護人號犯科跡沒收所領田畠事

此條目、大將家御時、至于當時御式目、守護成敗條々仁雖不被載之、勵令沒收事、云本沒收、云新沒收、其訴訟連々出來候歟、〇下略

〔武家嚴制錄十七〕一上總介忠輝朝臣領地被召上候時の條目

條々

一喧嘩口論堅令停止之訖、若有違犯之輩者、雙方可令斬罪、万一令荷擔者、其咎可重於本人事、

一不可押買狼藉、幷不可伐採竹木事、

一今度在番中、人通之儀停止之事、
一其所之者、其所にて留之、但主從相對次第可任覺悟事、
一未進方又は、年季差置候男女等申合棄破之上者、其所に可相留事、
右之條々、可相守此旨者也、
元和二年七月五日御判

篇目

〔武家名目抄文書三上〕按、篇目は、猶條目といふがごとし、凡箇條書は、一條ごとに、某事々々と記すが故に、或は又事書ともいふなり、

〔吾妻鏡八〕文治四年二月二日戊辰、所々地頭等所領已下事、自京都、或屬强緣、或獻消息、愁申人々多之、仍有其御沙汰、而處廷尉公朝、自去年多在鎌倉、近日可歸洛之間、得其意、爲令披露彼訴條々、載篇目於一紙、可與公朝之由云云、

〔吾妻鏡五十二〕文永三年三月十三日丙午、就諸人訴論事、有被定篇目等、所謂、
一御評定日々當參奏事
當日可被付名目於勘解由判官

事書

一事書事
御評定之後、執事之仁令進草案事書者、被加一見、理致無相違者、可被付對馬前司也、

〔庭訓往來〕就先度御事書、藝才七座之居、諸國商人旅客宿所運送賣買津、悉令進行候、

〔庭訓往來〕奉行人令取捨事書、於引付寬御評定異見所令成敗也、

〔武家名目抄文書三上〕按、一ヶ條にもあれ、數ヶ條にもあれ、某書とかゝげて書が故に、事書といふなり、法令掟等の事書をば、法度書とも條目ともいひ、雜事なるをば、篇目などもいふなり、

〔太平記十五〕三井寺合戰幷當寺撞鐘事附俵藤太事

抑金堂ノ本尊ハ、生身ノ彌勒ニテ渡セ給ヘバ、角テハ如何トテ、或衆徒御首計ヲ取テ、藪ノ中ニ隠シ置タリケルガ、多被討タル兵ノ首共ノ中ニ交リテ、切目ニ血ノ付タリケルヲ見テ、山〇法師ヤ仕タリケン、大札ヲ立テ、一首ノ歌ニ事書ヲ副タリケル、

〇按ズルニ、事書ハ、公文ノミニ限ラズ、條款ヲ別チテ、事ヲ列載セル私書ヲモ亦事書ト云ヒシナリ、

〔沙汰未練書〕一事書取捨事

以引付落居趣、奉行人書事書之符案引付披露、是取捨引付云、

一評定沙汰事

關東者両所、京都者両六波羅殿、五方引付頭人衆中皆参之時、於評定所有其沙汰、先以孔子定意見之次第、其後其開闔一人、合奉行一人、(又開闔奉行云)以文書参評定所、向御前、(各敷圓座)引付勘録事書讀上、是讀進云、〇中略

一同評議綺移後、事書之頭、是非被書付、(是頭書云)〇中略

一御下知被成事

以評定落居事書、奉行人書御下知案文引付披露、(是御下知取捨云)

〔新御式目〕一政務事〇正應六五廿五、評、

一庭中事

被召先事書并本奉行、當日可有御沙汰、〇中略

正安二七十九　但馬前司渡之〇中略

一評定事書頭付并総目封事、當日可令申沙汰事、

〔常照愚草〕一諸侯知行分、或京済、或免除之在所、古今有之、然者奉行より、其守護へ御下知を成すに、

事書を一紙相添なり、其事書に、

御即位要脚（御即位ニカギラズ）　何國段錢事（年號月日）

以彼要脚、被附其足畢、早除三社領、幷北野社領、諸五山諸塔頭、等持寺、等持院領、以下先々免除京濟之地、令支配壹段別五十文宛於公田、來何月十日以前、可被究濟之、若難澀之在所者、爲有其沙汰、云領主交名、云土貢員數、共以可被注申之矣、

封此認て、うらに國分の奉行二人判を仕也、是をうらを符すると云也、名乘も不書して、たゞ判計也、さてくる〳〵と卷て、上書には、さし上て、事書と二字書也、

〔吾妻鏡　四〕元曆二年（○文治元年）五月廿五日丁未、被差遣雜色六人於典膳大夫近藤七等之許、是畿內雜訴成敗之間、久經三人、國平三人、可召仕之由、所被仰付也、以此次京畿之間可致沙汰條々、被遣御事書、其間久經不可耽人之賄、國平不可現僻事之趣、被載加之云々、

〔吾妻鏡　八〕文治四年二月二日戊辰、所々地頭等、所領已下事、自京都、或賜強緣、或獻消息、愁申人々多之、仍有其御沙汰、而延尉公朝、自去年冬、在鎌倉、近日可歸洛之間、得其意、爲令披露、彼訴條々、載篇目於一紙、可與公朝之由云々、彼公朝下向之次、消息等、所有其沙汰也、

寶殿（御事書云）

越後國奥山莊地頭不當事

修理大夫家

尾張國津島社板垣冠者不辨所當之由事

右衞門佐御局

信濃國四宮莊地頭不進辨年貢幷領家得分由事

大宮御局

一伊勢國志禮石御厨字輪田右馬允不當事

賀茂神主

大夫判官搜求之由事

高雄上人背宣旨押領神領由事

新中將殿

伊賀國若林御園內七町九段妨由事

公朝

備前國吉備津宮領西野田保地頭職貞光事、任道理停止論人之妨、如本無相違欲令知行事、

已上所々、尤可有御成敗之處、凡如此之訴訟者、觸來者全不可致沙汰法也、善惡於御定者、不能左右事也、以緣々令沙汰者、世間人定似偏頗之由令存歟、仍今度無御沙汰也、

三月十七日癸丑、東大寺材木、周防國出杣之處、十本引失訖、仍被宛諸國者、還可爲懈緩之間、被宛諸大名者、存結緣可沙汰進歟之由、雖有院宣、御家人趣善緣之類少者歟、有難澀思者、大功難成歟之由、今日被進二品（○源頼朝）請文、次付莊々有被申條事、先々雖令申給、未無左右仰云云、仍重被整事書云云、

一陸奥白河領（元信頼知行、後小松內府領）事

此所不輸知行候、但未辨本家、若爲院御領歟、可濟年貢候歟、將又隨時可挙御大事候歟、可隨仰候、

一私寄進神社領事

爭爲朝家御祈禱所寄進也、但濟本所年貢者、早可加下知候、

一下野國　中泉　中村　鹽谷等莊事

件所々、雖不入沒官注文候、爲坂東之內、自然知行來候、年貢事地子、（同前）

一常陸國、村田、田中、下村等莊事、

成安樂壽院領云云、或八條院御領、年貢可沙汰何倉候哉、

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年九月九日庚申、古莊左近將監能直、自陸奥國進使者、注進兩州輩忠否幷衆任伴黨所領等、仍爲盛時奉行、被賞罰條々、被經沙汰、被下事書於能直云云、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年六月廿三日丙子、去十六日相州〇北條時房武州〇北條泰時飛脚、今夜丑剋到來鎌倉、合戰無爲、天下靜謐次第、披委細書狀、公私喜悅、無物取喩、即時有卿相雲客罪名以下、洛中事之定、大官令禪門〇大江廣元勘文治元年沙汰先規相計之、整事書、進士判官代隆邦執筆注文云云、　廿四日丁丑、今日寅剋、安東新左衞門尉光成、帶昨日事書、出關東上洛、　廿九日壬午、子剋安東新左衞門尉光成、著于六波羅、洛中城外謀叛之輩、可被斷罪條々具申之、相州武州披關東事書、如駿河前司毛利入道、有評定云云、

〔新編追加政所〕一凡下輩不可買領買地事　延應二四廿五

右以私領令沽却事、爲定習之由、先度雖被書載、自今以後者、縱雖爲私領、於賣渡凡下之輩幷借主等者、任近例可被收公彼所領也、又雖爲侍已上、非御家人者、不及知行、又以山僧爲地頭代官事、可被停止之由、被載事書畢、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年〇寛元元年九月廿五日戊辰、諸人訴論事、有評定、事書入見參、可施行之由、被仰下之、御處、御成敗遲々、尤以不便、自今以後、付奉行人、註事書、早々可成御下知、又御下知與事書、於問注所可令勘合、事書無相違者、可下之由、依仰加賀民部大夫、

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年〇寶治元年六月五日丙戌、被進飛脚於京都、進御消息二通於六波羅相州〇北條重時一通奏聞、一通爲令下知近國守護地頭等也、又事書一紙、同所被相副也、〇中略

事書云

一謀叛輩事

爲宗親類兄弟等者、不及子細、可被召取、其外京都雜掌、國々代官等事者、雖不及御沙汰、委尋明、隨注申、追可有御計者、

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年後十二月廿三日丙寅、今日雜人訴訟事、被定其法、其事書樣、

雜人訴訟事

百姓等與地頭相論之事、時有其謂者、於妻子所從以下資財作毛等者、可被糺明也、田地齊令安堵、其身事者、可爲地頭進止歟、

〔吾妻鏡四十〕建長二年十二月廿日辛亥、御所中頗無人、自小侍所頻雖被加催促、似無其詮、仍伺申相州間、可令披露之旨、就令返答給、今日有其沙汰、於不法輩者、被止出仕、加多年勤厚人於其闕、始可令結番之由被定之、淸左衞門尉讀申彼事書云云、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年(○文應元年)正月廿三日辛酉、(○推前後干支、酉恐卯誤、)可禁遏殺罪輩之由、有其沙汰、被定事書云云、

一六齋日幷二季彼岸殺生事

右魚鼈之類、禽獸之彙、重命遁山岳、口身同人倫、因茲罪業之甚、無過殺生、是以佛敎之禁戒惟重、聖代格式炳焉也、然則件日々、早禁魚網於江海、宜停狩獵於山野也、自今以後、固守此制、一切可隨停止、若猶背禁遏、有違犯輩者、至御家人者、令注進交名、於凡下輩者、可加罪科之由、可被仰諸國之守護幷地頭等、但至有限神社之祭者、非制禁之限矣、

〔光明寺殘篇〕伊勢國凶徒退治事、事書一通進之候、守此旨、可令致沙汰給候、恐々謹言、

元弘三年五月廿四日　前治部大輔高氏判

謹言　吉見殿

〔建武以來追加〕一寺社幷本所及武家輩所領等事

事書一通遣之、早守彼狀、當國分來月十日以前、嚴密可遵行、將又土貢以下、令先納者、悉可糺返之、若猶遲怠者、任被定置之旨、可處罪科之狀如件、

建武五年後七月廿九日　御判

播磨國守護 諸國同前

近國十日以前　中國廿日以前　遠國來月中

〔建武以來追加〕一寺社本所領事 觀應三八廿一、御沙汰、

違背先日事書、不應使節遵行、空令馳過當年西收之由、多以訴之、造意之企、難遁其咎、於如然之族者、可處所當罪科之上、縱雖立忠功、永可止恩賞、○下略

〔花營三代記〕貞治七年○應安元年六月十七日、寺社本所領事、依勅許所被定下也、早分國之所々守事書、嚴密令遵行、來月中可被申左右、更不可有緩怠之條、依仰執達如件、

應安元年六月十七日　武藏守判

佐々木大夫判官入道殿

寺社本所領事 應安元六十七、右筆正大夫入道奉行也、

禁裏仙洞御料所、寺社一圓佛神領、殿下渡領等、異他之間、曾不可有半濟之儀、固可停止武士之妨、其外諸國本所領、暫相分半分、沙汰付下地於雜掌、可令全向後之知行、此上若半分之預人、或違亂雜掌方、或致過分之掠領者、一圓被付本所、至濫妨人者、可處罪科也、將又雖爲本家寺社領之號、於領家人給之地者、宜准本所領歟、早守此旨、云一圓之地、云半濟之地、嚴密可打渡于雜掌矣、

次自先公御時、本所一圓知行地事、今更稱半濟之法、不可改動、若令違犯者、可有其咎焉、

次以本所領誤被成御下文地事、被宛行替之程、先本所與給人、各半分可爲知行、不可有守護人之綺矣、

次月卿雲客知行地頭職事、爲武恩被補任之上者、雖混所領可停止半濟之儀焉、

〔建武以來追加〕一万壽寺兩班座位事、布施彈入奉行

万壽寺兩班座位事、可爲五山列之由、去貞治二年裁許事書被定下之處、于今不及遵行之條、太不可然、仍重所被仰也、所詮守先度事書之旨、彼寺々之舊例、參暇之時、當寺之座位任名字、敢以不可有違亂、今度猶云住持、云大衆、及異儀、於背上裁者、須被聞寺訴之上、就張本可處罪科之狀、依仰執達如件、

應安五年九月四日　　武藏守判

南禪寺長老 自餘五山、文章同前、○中略

一關東五山事 應安六十九、布彈入奉行、

於住持職者、自京都被定下之條、不及子細、其外細々事、向後可爲關東御沙汰也、且規式條々守曆應康永御事書、五山一同不可有改動、寺家違犯之儀者、嚴密可有誡沙汰矣、

〔豐臣太閤御事書〕覺

一殿下陣用意、不可有由斷候、來正二月比、可爲進發事、○中略

右條々被仰合西尾豐後守候之條、可被得其意候也、

五月十八日　　秀吉朱印

關白殿

〔和簡禮經八〕一壁書事

奉行所ヨリ事始リタル儀候、諸人ニ知セン事ヲカベニ押付テ、

壁書

富永石見守時行申、――國――庄事、有致訴訟輩者可申出、可尋承子細者也、仍壁書如件、

年號月日

押紙云

壁書

一博奕一切停止事

一野心二心之輩、見聞之趣可申聞事、

一有思達子細之時、不依仁不肖申存分者、可為忠節事、仍壁書如件、

天文十三年正月　日

右上古之風也、是ヨリ人ニ知セン事ヲ、板カベニ押付テ置申也、世俗禁制ノ事ノミ、壁書ト申ナラシ候、存知誤ル歟、又アナガチ知行分之事計ニモ不限、昔ク人ニ知センコトヲ、板壁ニ書付置申也、別ニ書様故實ノ沙汰ナシ、

〔貞丈雜記(九 書札)〕(へキシヨ)壁書の事、書札條々に云、存分を書て、奉行所に壁におしてをくをいふ也、武雜書札籍に云、壁書之事、

壁書

安永左衛門尉宗行申

備中國鴨莊之事、有致訴訟之輩者、尋承爲子細猶申披、壁書如件、

永正六年五月日

〔政所壁書〕洛中洛外酒屋土倉(付地下人等)條々(永享二 九 廿)

一酒屋土倉關所事

若有如然關所者、可被付納錢方焉、○中略

一作替借書事(文正元 五 廿六)

於借錢者、不可過一倍之段、雖為先例、近年依為有名無實、去永享年中重堅被定置訖、然號作替、以利平書加本錢、恣錢主等改借状云々、政非正義所詮、遂一倍勘定、弃破彼状、可被返附質券地以下

於本主向後有背制止之族者、可被處罪科、次借物方事、不帶政所之賦、被及訴訟儀、太不可然、自今以後、堅被停止之上者、奉行人各可令存知候、

已上十二箇條政所壁書

〔大內家壁書〕御判

安藝國西條鏡城法式條々

一當城衆當番以名代不可勤事

一當城普請每日不可懈怠事

一縱雖爲城衆知人不可入城內事

一借兵粮無爲之時不可配當城衆事

一博奕堅固可停止事

以上

右於背此旨之輩者、可致御成敗之由所被仰出也、仍壁書如件、

文明十年六月廿日

〔豐太閤大坂城中壁書〕御掟

一諸大名緣邊之儀、得御意、以其上可申定事、

一大名小名等、令契約誓紙等、堅御停止之事、

一自然於喧嘩口論者、致堪忍之輩、可屬理運之事、

一無實之儀申上輩有之者、雙方召寄、堅可被遂御糺明事、

一乘物御赦免之衆、家康、利家、景勝、輝元、隆景、並古公家、長老、出世之衆、此外雖大名若年之衆者、可爲騎馬、年齡五十以後之衆者、路次及一里者、駕籠之儀、被成御免候、於當病者、是又駕籠御免之事、

右條々於違犯之輩者、可被處嚴科者也、

文祿四年八月三日

隆景

輝元

利家

秀家

家康○御掟追加略

押書

〔大内家壁書〕定

條々

赤間關　小倉　門司　赤坂のわたりちんの事○中略

就右御定法、赤間關地下人押書案文

赤間關わたしもりの事、御せいさつより外に、くわんたい仕もの候はゞ、聞たて候て、則可申上候、少も無沙汰申候はゞ、やがて御ざいくわに相可申候、恐惶謹言、

文明十九四月廿日

太左衛門

次郎左衛門

次郎三郎

看板

〔公裁秘錄 一〕評定所始幷看板之寫

寛永十二年乙亥十一月十日、評定所被相定、同年十二月十二日ゟ寄合始ル、

一看板之面、寛永十二年亥十二月二日　酒井讃岐守　土井大炊守

右看板當時之御文言

一寄合之式日、毎月二日十一日廿一日、諸奉行之立合、四日十三日廿五日、但公儀之御用於在之者、

可ㇾ爲二延引一事、

一寄合所江評定衆卯刻半時致二出座一、御用隙明次第可ㇾ爲二退散一事、

但此出座刻限之儀、式日ハ前々之通御座候、寄合刻限ハ享保七寅年伺之上、辰刻半時揃寄合候筈ニ極候、

一評定所江役人之外一切不ㇾ可ㇾ參、勿論音物停止之事、○中略

一裏判井召狀を請遲參之者ハ、其所之遠近を考、日數を積り、輕重ニ應じ可ㇾ爲二過料一事、

右之條々、可ㇾ被二相守一者也、

年號月日

老中　伊賀
　　　左近
　　　和泉
　　　山城

〔慣習例〕芝口掛看板

一芝口掛看板、行倒其外變死之類出ル、

一掛看板出ル節、小撿使持參懸ㇾ之、七日之間八日目、小撿使はづしに罷越候、

但芝口月行事江渡、はづし候節にも、月行事ゟ受取持歸候事、供人持夫等ハ小撿使之方ニ傳達有之、

昨朔日六半時頃、谷中門通り道左之方堀際ニ、六拾歲餘ニ相見へ候道心者體之男中せいにて、面體長く、色白き方、鼻筋通り、眉毛濃く、歯並揃ひ、月代厚き方、上に古黒麻衣を著し、下に白色木綿單物を著、古黒木綿頭巾をかむり、白木綿下帯を〆、鼠木綿細帯ニ而首縊相果居候心當り之ものハ脇坂淡路守方江早々可二申出一也、

掛札

十一月二日

右御名ハ一體之文字ゟ餘程大く認可ﾚ申也、大體一行ニ、

脇坂――守方江

と右之通に可ﾚ認

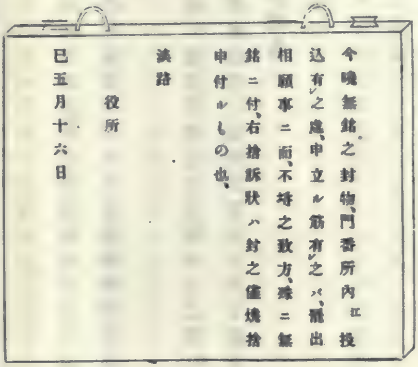
一外奉行所ニ而ハ可ﾚ申出ﾚもの也、與認候得共、寺社奉行計ニ而ハ可ﾚ申出ﾚ也と前ニ認、ものハ除申候、

〔慣習例〕捨訴掛札

一西ノ内ニ認、松板ニ張付、表門番所憲格子江掛ル、

但小撿使江渡、夫より小頭江渡、立合ヒ掛候、尤掛候日より三日之内朝六半時掛、夕七半時外し候、且朝夕懸外し、御門小頭爲ﾚ取計ﾚ候、

常時ハ懸札板ハ厚サ八分程、樅板ニ而、裏ニチキリ木入候事、



張文
張紙

○按ズルニ、巳トアルハ寛政八年ナリ、

〔慣習例〕口達之覺

一假訴所別々席別席總席之事

但懸札張札之事

訴所ハ御玄關之最寄ニ而、假ニ一ケ所御補理可被成候、餝置候道具其外之儀ハ、小撿使中江

小撿使共々御傳達可申候、且總席別席十疊位之所二タ間無之候而ハ不相成、右別席之內江

貳疊程衝立等ニ而隔をいたし、別々席補理置可申候、尤總席別席は續候處宜候、

但追而其席直ニ本席ニ御用ひニ相成候ハヾ、疊數等其節御談可被成候、

〔吾妻鏡九〕文治五年十月一日丁亥、於多賀國府、郡鄉莊園所務事、條々被仰含地頭等、就中不可費國

郡煩土民之由、御旨及再三、加之被置一紙張文於府廳云云、其狀云、

以莊號之威勢、不可押不肖之道理、於國中事、任秀衡泰衡之先例、可致其沙汰者、

〔慣習例〕屋鋪帳張紙

一張紙は小美濃紙ニ細字ニ認申候、上包み等左之通、

但御同役樣方江之御配は、屋數改より御返書來り候上、差出御仕來なり、

尤御內寄合之節、御持出御配之事、若內寄合相止候ハヾ、奉札を以て御配也、



上紙大半紙當時ハみの紙壹枚の時は右之通、貳枚よりは何枚と認申候、ヒレ札御名等無之、

制札
高札
建札

但壹枚ニ而も、壹枚ニ認候様極ル、

〔里見九代記二〕一高札。。ハ其時ニ當テ急ニ法度ヲ出スベキ事ヲ書シルシ立ル者也、急度可相守、若背輩ハ重科タルベシ、若又相止テ可然法度有ル時ハ指加テ可然、落書ニテ可申上、作去人名指テ惡口ヲ書キ候ハヾ、譬ヘ有事ヲ書タリトモ重科タルベシ、相手有テ申旨アラバ、評定所ヘ可申出事、

〔和簡禮經八〕一高。札。事

大形制。札。之外、押並而札書ノ總名之樣ニ上古ハ存成候處、近代ハ微細之事ヲ書顯シ、市町ニ打ヲ耳、名付申ト相見候、是ハ賣物買物ニ付而、可致沙汰樣ヲ書付、板ニ書テ、路頭ニ打ヲ高札ト申也、又如此モ書之、

定　在所

一樂市たる上は、諸役有べからざる事、

一諸商人に關渡有べからざる事

一質券之男女、賣借之米錢等、鄉質所質以下之違亂煩有べからざる事、

右條々、有違背之族者、可處嚴科者也、仍如件、

年號月　日　判形

端作ニ是モ定トモ、又ハ高札トモアルベシ、

〔書禮秘訓抄〕一制。札。之事

禁制　市町

一盜賊狼藉之事

一放火人之事

一博奕之事

右之條々、堅令停止者也、仍如件、

年號月日　　某判

禁制

一甲乙人等亂入之事

一諸人推て居住之事

一竹木伐採之事

右條々、若有違犯之族者、可被處嚴科者也、仍下知如件、

年號月日　　山城守平朝臣判

右始文ハ、禁制と條書之間一行退ニ可書、是ハ守護之札なり、奉行所ハ一文字と條書之間、一字闕書也、問注所ハ一文字ニ續る事書を出也、年號ハ一文字と同通也、官領職之者、制札共書也、又次ケ様之制札ハ、名乘ハ不書、守受領判形可書、無官之人ハ、氏名乘可有之、禁制と年號ハ同通也、條書之頭に一字可下、奉行之札也、何人も判形有ハ、與上事也、何も理同也、能々可被相心得者也、

〔享保通鑑 一〕享保三年七月

先年被仰出候高札ニ此度御書添之趣、○發砲禁止令 關東八ヶ國知行有之面々建可被申候、尤其所々總百姓共ニ名主讀聞之、承知仕候ものも、名主手前より地頭方之證文取置可申候、重而鳥見并野廻之者共廻り候節相改可申候、已上、

戌七月

〔代官觸留〕寛保二戌年二月

右書付、二月三日、松平左近將監殿御渡被成候、

總而宿々建來候高札之內、文字消候儀有之旨相聞候、右體之高札者、屆之上追々塗入可被申付候、

以上、

〔大乘院寺社雜事記〕明應二年二月廿八日

一制札到來

禁制　　大乘院門跡別當大和國安位寺

一軍勢甲乙人等亂入狼藉事

一伐採竹木事

一相懸兵粮事

右條々、堅被停止訖、若有違犯之輩者、可處罪科之由、所被仰下也、仍下知如件、

明應二年二月廿七日　　對馬前司平賀朝臣判

筑後前司清原眞人判

〔諸國高札〕一日本寺

制札

一御所總構之內江人馬入事

一木草切刈事

一松杉等苗木損亡事

右之旨於相背者、可爲曲事者也

元和第三丁巳年十一月十五日

〔憲敎類典四ノ七高札〕享保七壬寅年二月

評定所前箱之際建札

毎月貳日訴狀箱出し置、書付入候筈之處、去月廿一日箱出し不ㇾ申前、此所へ書付はり置候者有ㇾ之、不屆ニ候、向後右之通り之儀有ㇾ之候ハヽ、早速役人封之儘燒捨可ㇾ申者也、

寅二月

〔公裁秘錄〕日本橋、淺草橋、常盤橋、芝車町、糀町、筋違橋、各六ケ所高札、文言左之通、

定

一親子兄弟夫婦を始、諸親類ニしたしく、下人等ニ至迄、是を可ㇾ憐、主人有ㇾ輩者各其奉公ニ精を可ㇾ出事、

一家業を專ニし、懈る事なく、万事其分限に過べからざる事、

一いつわりをなし、又は無理を云、總而人の害になるべき事をすべからざる事、

一博奕之類、一切禁制之事、

一喧嘩口論を愼、若其事有時、猥ニ出合べからず、手負たる者隱置べからざる事、

一鐵炮みだりに可ㇾ打からず、若違犯之者あらば可ㇾ申出、隱し他所ゟ顯に於てハ、其罪重かるべき事、

一盜賊惡黨之類あらば可ㇾ申出、急度御褒美可ㇾ被ㇾ下事、

一死罪に行ハるゝ者ある時ハ、馳集るべからざる事、

一人賣買かたく停止、但シ男女之下人、或者永年季、或ハ普代に召置事ハ、相對に任すべき事、

附、普代之下人又ハ其所ニ住來輩、他所ゟ罷越妻子をも持、在付候者、呼返すべからず、但シ罪有者ハ制外之事、

右條々可ㇾ相守、若於ㇾ相背者、可ㇾ被ㇾ行ㇾ罪科ㇾ者也、

正德元年五月日　　奉行〇中略

火附訴人之事高札此高札、十月ゟ三月迄相建候、日本橋へ計り、

覺

一火を付ル者召捕、町奉行へ可ᵥ來事、

一火を付ル者之在所を知らば、早速可ᵥ訴出事、

右之品々在ᵥ之バ、爲ᵥ御褒美ᵥ此銀子三拾枚可ᵥ被ᵥ下候、縦同類と云共、其科をゆるし、御褒美可ᵥ被ᵥ下候、惟敷者ハ不憶ニ候者ニ候共、召つれ來るべし、若火を附る者見のがし、聞遁しニ仕、追而相知候ハヾ、其科重かるべき者也、

寅〇天保十三年十一月　奉行

〔憲敎類典四ノ七〕高札天和二壬戌年十一月

吉〇原〇大門〇口〇江出る高札之寫

何者によらず、馬乘物、醫隱の外、一切無用たるべし、

附鑓、長刀、門内江堅停止たるべき事、

戌十一月

天和二壬戌年十一月

吉原大門口江出る高札之寫

此以前より制禁之通り、江戸町々端々に若遊女ばいた隱し置かバ、早々番所江可ᵥ申出ᵥ候、身のまになし可ᵥ遣者也、

戌十一月

〔憲敎類典四ノ七〕高札万治元戊戌年十月

一雜〇事〇高〇札〇

定

一人賣買一圓停止たり、若狠之ともがら於有之者、其輕重を分ち、或ハ死罪籠舍、或ハ過錢たるべき事、

　附口入同罪之事

一男女抱置事、十ヶ年を限るべし、過十年バ可爲曲事事、

一いにしへより其領內に在來輩たりといふとも、他所ヱ相越、久しく在著、妻子をも令所持、其上科無之者ハ呼返儀可爲停止事、

一手負たるものを不可隱置事

一江戶より品川へ駄賃錢一駄に付四拾文、無荷物之乘合ハ廿四文、歸馬之駄賃同前たるべし、但夜通し急相通輩ハ、荷なしに乘といふとも、夜三分ハ一駄荷之積りに駄賃錢可取事、

一御傳馬幷駄賃之荷物、一駄四十〆目たるべし、但四拾貫目より重キ荷物ハ秤にかけ、おもき分可除旨、荷主ヱ申斷べし、除まじきと申輩あらバ幾度も申斷、其上にも承引無之においてハ、馬を不可出事、

一人足之荷物壹人ニ付五貫を限るべし、其貫よりおもき荷物ハ、荷主へ斷之、重き分可相除之、自然除まじきと申においてハ、先條之ごとくたるべし、人足賃ハ馬の半分たるべき事、

　附、人馬之御朱印を傳馬次之所に於て拜見いたし、御書付之外一疋一人も多く不可出之事、

一宿賃之事、薪代ともに一人ニ付て錢十六文、馬にハ十文たるべき事、

一人馬之賃宿賃以下御定之外、まし錢を取ものの在之ば、三十日籠舍たるべし、幷其町之年寄過料として五貫文、其外ハ家一軒ゟ百文ヅヽ可出之事、

一御傳馬駄賃之荷物馬を持次缺可出之、但し駄賃馬多く入時ハ、其町より在々所々へやとひ、荷

物置ニ無之様ニ、雨風の時も可出之事、

一往還之ともがら、高札之面を相背、理無盡之儀不可申懸之、又往還之者ニ對し、其所之族、非分申におひてハ可爲曲事事

右可相守此旨者也、仍執達如件、

万治元年十月　　奉行

〔憲教類典四ノ七高札〕元祿三庚午年五月

東海道添高札

一近年道中宿々令困窮ニ付て、此度駄賃錢一割半增し候間、品川より江戸へ駄賃錢一駄ニ付七拾二文、乘懸荷ハ人ともに同前、荷なしに乘ハ四拾七文、人足賃ハ一人にて三十二文、川崎江一駄ニ付八十五文、乘懸荷ハ人共に同前、荷なしにのらバ五拾六文、人足賃ハ四十三文可取之、但し泊々ニ而木賃主人壹人廿七文、召仕壹人十三文可取之、馬壹疋ニも廿七文可取之者也、

元祿三午年五月　　奉行〇中略

元祿三庚午年五月

天龍川高札

條々

一役船、前々のごとく彌無懈怠出之、晝夜可相勤事、

一往還人多時ハ、よせ船を出し、人馬荷物等無滯入精可渡之、奉公人之外、舟賃出す輩ハ、人壹人十二文、荷物一駄三拾文、乘懸荷ハ十九文可取之、此定之外賃錢多く取べからざる事、

一荷物つけながら馬を船にのすべからざる事

右之條々、於令違背者、後日相聞といへども、せんさくの上可被處嚴科もの也、

元祿三午年五月　　　奉行

〔憲教類典四ノ七高札〕年號無之

辻札。

此土手水放不崩様に掃除いたし、相定のごとく芝をおかるべし、勿論ちりあくた捨べからず、

右之通相背於有之ニおひては、近所辻番之ともがら見出し次第、其者に申斷之奉行所江可訴之、自然於隠置ハ、可被行同罪者也、

巳十月　　　奉行

右者年號不詳候間、取調相知れ候ハヾ認入可然候、

〔憲教類典四ノ七高札〕正德二壬辰年八月

浦々添高札

前々より浦々高札相建

公儀之船ハ申ニ不及、諸色廻船共、猥なる儀無之様被仰付候處、難風ニ逢ひ候節も、所之者ども、船の助けにハ不相成、却て破舟之様にいたしかけ、荷物をはねさせ、あるひハ上乘船頭と申合、不法之儀ども有之様に相聞へ、不屆ニ候、御料者御代官、私領ハ地頭より常に吟味をとげ、毛頭不埒不仕様に急度可被申付候、若此上不埒之儀於有之者、後日ニ相聞へ候とも、其者ハいふに及ず、所之者まで可被行重科、其上其所之御代官地頭迄可爲越度事、○中略

右之條々、急度可相守、若違犯之輩於有之ハ、詮義之上可被行罪科、不吟味之子細も候ハヾ、其所支配之御代官、又ハ地頭まで可爲越度もの也、

正德二年辰八月

〔武家嚴制錄二十五〕一長崎制札

禁制

肥前國長崎

一伴天連日本江乘渡事

一日本之武具異國江渡事

一奉書船之外、日本人異國江渡海事、

附日本住宅之異國人同前事

右條々、於違犯之族之者、速被處嚴科者也、仍而執達如件、

寛永十一年五月廿八日

奉行

〔諸國高札五〕豐前國宇佐社領町々建置候高札寫〇中略

右四枚之奥書

忠孝高札奥書之覺

右之趣被仰出之訖、宇佐神領御朱印所依爲領内相渡之間、堅可相守之者也、

松平主殿頭判

右同斷略之

毒藥高札奥書之覺

右同斷略之

きりしたん高札奥書之覺

右同斷略之

捨馬高札奥書之覺

右同斷略之

以上

右ハ拙者領分村々井浦方字佐八幡神領ニ

公儀高札受建置候、文言之寫如斯御座候、

一往古ゟ建置候高札、且又御關所領内ニ無御座候、以上、

正德三癸巳年十二月　松平主殿頭

上申狀

下ヨリ上ニ旨ヲ通ズル文書ノ種類甚ダ多シ、款狀、申狀、目安、言上書、解文、送文、注進狀、進達書等是ナリ、今之ヲ總稱シテ上申狀ト云フ、款狀トハ下ヨリ上ニ申訴スル書ナリ、蓋シ款ハ誠ノ意ニシテ、之ヲ文書ノ稱ニ用ヰシハ、誠款ヲ吐露スル義ヨリ出デシナルベシ、中古以降、官人以下庶民ニ至ルマデ、事ヲ官司ニ申達スル書ヲ款ト云ヘリ、鎌倉幕府以來、守護、地頭等、將軍家ニ申訴スル書ヲ款狀ト云ヘルハ、其稱ヲ襲ヒシナリ、申狀トハ、諸事ヲ幕府ニ上申スル書ヲ云フ、而シテ申狀ニハ、陳乞ト申報トアリ、又條目ヲ分チテ事ヲ列載シ、以テ申達スルヲ目安ト云フ、而シテ目安ハ、觀覽ニ便ナラシムル義ヨリ出デタルナリ、尙ホ申狀、目安ノ事ハ法律部中編訴訟文書篇ニ在レバ、宜シク參看スベシ、

鎌倉幕府以來、朝廷ニ貢進スル物品等ヲ、一紙ニ列載シテ、申送スルヲ解文ト云フ、又送物ノ品目ヲ注載シテ、送達スル書ヲ送文ト云ヒ、足利幕府ニ至リテハ、之ヲ送狀ト云ヘリ、而シテ解文ト稱スルハ、中古以降、朝廷ニテ制定セラレシ解ノ稱ヲ襲ヒシナラン、

注進狀ハ、諸事ヲ注記シテ、送進スル書ナリ、鎌倉幕府以來將軍ヨリ事ヲ朝廷ニ報ジ、又守護

地頭、及ビ社司、寺僧等ヨリ、事ヲ幕府ニ注進シ、又將軍ヨリ部下ニ報ズル書ヲ、並ニ注進狀ト云ヘリ、而シテ西國ノ雜務ニ關スル大事ハ、六波羅探題必ズ之ヲ書ニ錄シテ、幕府ニ注進スル制ナリ、而シテ又進達書ハ、德川幕府時代ニ云フ所ノ稱ニシテ、披露狀等ノ類ナリ、伺書ハ事務上ノ疑ヲ問フモノニシテ、請文ハ謂ユル事物領含ノ義意ヲ通ズル文書ナリ、

德川幕府ノ時、官吏同僚互ニ協議シテ事ヲ定メ、之ヲ認メテ後日ノ備忘ニ供スルモノヲ申合書ト云ヒ、其協議ノ際、往復スル文書ヲ相談書ト云フ、又公文ノ文體、用紙、書損ニ關スル法令ヲ發セシ事アリ、而シテ其事多クハ下ヨリ上ニ進スル文書ノ制ナリ、並ニ今篇末ニ附載ス、

款狀

〔吾妻鏡四〕元暦二年〇文治元年五月廿四日戊午、源廷尉義經如思平朝敵訖、剩相具前內府〇平宗盛參上、其賞兼不疑之處、日來依有不儀之聞、忽蒙御氣色、不被入鎌倉中、於腰越驛徒涉日之間、愁鬱之餘、付因幡前司廣元、奉一通款狀、廣元雖披覽之、敢無分明仰、追可有左右之由云云、彼書云、

左衛門少尉源義經、乍恐申上候意趣者、被撰御代官其一、爲勅宣之御使、傾朝敵、顯累代弓箭之藝、雪會稽耻辱、可被抽賞之處、思外依虎口讒言、被默止莫大之勳功、義經無犯而蒙咎、有功雖無誤、蒙御勘氣之間、空沈紅涙、倩案事意、良藥苦口、忠言逆耳、先言也、因茲不被糺讒者實否、不被入鎌倉中之間、不能述素志、徒送數月、當于此時、永不奉拜恩顏、骨肉同胞之儀、既似空、宿運之極處歟、將又感先世之業因歟、悲哉此條、故亡父尊靈不再誕給者、誰人申披愚意之悲歎、何輩垂哀憐哉、事新申狀、雖似述懷、義經受身體髮膚於父母、不經幾時節、故頭殿〇源義朝御他界之間、成孤被抱母之懷中、赴大和國宇多郡龍門之牧以來、一日片時、不住安堵之思、雖存無甲斐之命、京都之經廻難治之間、令流行諸國、隱身於在々所々、爲栖邊土遠國、被服仕土民百姓等、然而幸慶忽純熟、而爲平家一族追討、令上洛之手合、誅戮木曾義仲之後、爲責傾平家、或時峨々巖石策駿馬、不顧爲敵亡命、或時漫々大

海、凌風波之難、不痛沈身於海底、懸骸於鯨鯢之鰓、加之爲甲冑於枕、爲弓箭於業、本意併奉休亡魂憤、欲遂年來宿望之外無他事、剰義經補任五位尉之條、當家之面目、希代之重職、何事加之哉、雖然今愁深歎切、自非佛神御助之外者、爭達愁訴、因玆以諸神諸社牛王寶印之裏、不插野心之旨、奉請驚日本國中大小神祇冥道、雖書進數通起請文、猶以無御宥免、我國神國也、神不可稟非禮、所憑非于他、偏仰貴殿廣大之御慈悲、伺便宜、令達高聞、被廻秘計、被優無誤之旨、預芳免者、及積善之餘慶於家門、永傳榮花於子孫、仍開年來之愁眉、得一期之安寧、不書盡愚詞、併令省略候畢、欲被垂賢察、義經恐惶謹言、

元曆二年五月日　　左衛門少尉源義經

進上　因幡前司殿

〔類聚三代格七〕太政官符

應修理官舍事

右撿案內、太政官去延曆十九年十月三日、下五畿內七道諸國符偁、得東海道問民苦使式部大丞正六位上紀朝臣廣濱等解偁、上總國諸郡百姓欵云。計帳之時、狩追人夫、修理正倉、男女老少、悉皆赴役、而時當六月、食物絕乏、空腹馳駈、無粮涉旬、望請當此之時、被給公粮者。〇中略

弘仁二年九月廿四日

〔三代實錄七清和〕貞觀五年八月十七日丁丑、无姓安岑恭岑等二人賜姓有良朝臣、貫附左京、安岑等自欵云。安岑等故從四位上橘朝臣淸野男安雄之子也、安雄剃髮爲沙門、安岑等被編伯父從五位下橘朝臣廣雄戶籍、承和十二年、氏人等稱有嫌疑削籍不當、今請賜姓定居、爲編戶民、許之、

〔東大寺要錄七〕東大寺

請被特蒙天裁任僧綱擬補以階業大法師道算補任攝津國講師仁仟秩滿替令修造爲雷火燒

損大佛右方頭光狀、

傳燈大法師道算（年七十一、臘五十七）三論宗專寺、

右得道算今月七日款狀偁、住寺送年漸載七十三星霜、禮物過日、既積五旬之夏臈、（○中略）望請特蒙

天裁、被補任件闕、將令修造大佛御光矣、今錄事狀、謹請處分、

寛弘二年三月八日　都維那從儀師傳燈法師位（○以下人名略）

〔吾妻鏡十七〕正治三年（○建仁元年）五月六日乙卯、昨日佐々木中務入道經蓮、以子息高重、捧一通款狀（去月廿一日狀）今日遠州（○北條時政）以善信令披露彼狀給、是於身雖無所犯、依傍人之讒、蒙御氣色之條、令愁訴云云、其旨趣初謝無科之旨、後載數度勳功、去年七月致用心事、大和國賊首等企謀叛、群集王城之由、就諸方之告、召聚淡路、阿波、土佐、三箇國御家人等、頗可謂忠節歟、隨當彼時、號圓識法師者、巧叛逆、縡顯露之間、爲伊賀新平內被虜、令怖畏經述之用心、不達宿望之條揭焉也云云、

〔吾妻鏡十八〕元久二年九月廿日癸卯、首藤刑部丞經俊捧款狀、是去春比、伊勢平氏蜂起之時、依無勢、爲聚軍士、暫通其國之處、差遣朝雅、被誅平氏之間、以經俊所帶伊賀伊勢守護職、被充朝雅之賞、而於時進退、兵之故實也、強雖被處不可歟、就中對治朝雅之謀叛事、諸人雖有勳功之號、正加誅罰、獨在恩息持壽丸之兵略也、件兩國守護職、適日來朝雅之所帶也、且經俊本職也、任理運依忠節、可返給之趣載之云云、但無御許容歟、隨而此所、先之補帶刀長惟信者也、

〔吾妻鏡十九〕承元三年五月廿三日乙卯、左衞門尉義盛上總國司所望事、以前者內々望也、今日已付款狀於大官令、（○大江廣元）始載治承以後度々勳功事、後述懷所詮一生餘執、只爲此一事之由云云、

〔吾妻鏡二十二〕建保二年十二月十二日壬寅、諸人官爵事者、家督之仁存知、其宮仕勞、可執申之、於直進款狀者、奉行人不可及披露之由、被仰定之、廣元朝臣奉行、昔相觸之云云、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜四年（○貞永元年）十二月五日、故入道前大膳大夫廣元朝臣存生之時、執行幕府巨細、

申狀

之間、壽永元暦以來、自京都到來重書并聞書、人々款狀〇中略等文書、隨公要、依賦渡右筆輩、方散在所處、武州〇北條泰時聞此事、令季氏、淨圓、圓全等尋聚之、整目錄、被送左衛門大夫云云、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年九月三日戊子、信濃國住人奈古又太郎者、承久三年大亂之時、乍施勳功、漏其賞之由、頻雖愁申之、依無便宜之地、空送年序訖、但猶雖有如此不幸之類、於奈古軍忠者、勝其中之間、相構可被行賞由、故匠作時氏遺命也、仍左親衛〇北條經時爲不違其趣、今日執彼款狀、加別御詞、被仰遣恩澤奉行人師員朝臣之許、

〔吾妻鏡三十八〕寬元五年〇寶治元年九月十一日辛酉、筑後左衛門次郎知定捧和字款狀、是愁漏合戰賞事也、先考義景家勳功之上、勘例云、朱雀院御宇承平二年己亥、平將軍〇將門於東國反逆之間、同三年正月十八日、參議右衛門督藤原忠文、蒙征夷大將軍宣旨、賜節刀、下向關東、而未到以前、同二月廿四日、爲藤原秀鄕、將門被誅之間、忠文自途中歸洛、三月九日、秀鄕、貞盛等被行賞之處、忠文同可蒙其賞之由就申之、小野宮殿〇藤原實賴申云、賞疑不行云云、次九條殿〇藤原師輔被申云、下著以前、逆徒雖令滅亡、隨勅定之功、何被棄捐乎、刑疑不行、賞疑聽云云、然而就先意見、無其沙汰、忠文喜恩言、進富家領券契狀於九條殿訖、至卒逝之期、奉怨小野宮殿云云者、左親衛數返披覽之、知定已述雙瞬一句、何無其沙汰哉、仰勳功奉行人等、究淵源之後、可被露評定次之由、直令示付諏方兵衛入道給云云、

〔類集文字抄文字〕申狀(マウシジヤウ)

〔享祿本類聚三代格二〕太政官符

應以園成寺、爲定額、修仁王三昧安居講經并請三會聽衆事〇中略

右得權律師法橋上人位叁信申狀偁、叁信於件道場、奉爲聖朝、相率門徒、奉祈仙齡、伏望以堪讀之僧十二口、六年籠寺、日夜勤修仁王三昧、滿限之年、即敍滿位、相續補入、不斷令修、若有修學者、課試各宗經論、爲階業之一〇中略謹請恩裁者、左大臣宣、奉勅、依請、

寬平元年七月廿五日

〔簡禮記 四〕一公方家江申上ルヲバ、申狀ト云リ、總而事ヲ主君ヘ狀、發端ニハ、畏而言上、謹而言上ナド、書出ス者也、

謹而致言上候、抑御代替、千秋万歲目出度被存候、仍爲御祝儀、御太刀一腰、銘口 御馬一疋、銘口 進上仕候、此等之趣、宜預御披露候、恐惶謹言、

月日　官途名乘判

某殿

或ハ畏言上ナド書出シ、次ノ行ヨリ、子細ヲ書事モアル也、留端ニモ可然樣言上所仰ナドモ有之也、上﨟以下口傳、

〔丹州書札式〕目安事、申狀共、具書共云、申狀ハ目安ノ子細ノ淺キ也、

〔伊勢加賀貞滿筆記〕一申狀之事、杉原の端に、たとへば

三上因幡守謹而言上

右子細何々、此段爲預御沙汰、粗言上如件、

永享三年三月日

御奉行所とも、又奉行の名をも書事在之、

大内殿より被申上候寫

左京大夫雜掌言上

一申狀ハ、人によりて、某代謹而言上と書事在之、如此代書事例式也、諸侍は不書之、通職の心なり、

如此被申上たる事も在之

〔書札集〕申狀調事、杉原一枚ニ書之、秋田出羽守家次謹言上、右子細云々、被成下御下知者、忝可奉存者也、仍粗言上如件、延德二年八月日、奥ニ御奉行所共、又充所不書事も有之、是を申狀共訴狀共、目

安其申之、

〔書簡故實〕一主人に官を申上候時、認樣之事、杉原壹枚を能程に折、申と云字を書、其下に右京大夫、其次に細川民部少輔、其次に高國計也、一枚に能程に引亂て書也、是は民部少輔殿にて、右京大夫之官を御申候時也、上裹立紙にして、笞上下可折、

申　右京大夫

細川民部少輔

高國

無官之人は此分に相調候、但伊勢七郎と申時、此のごとく被申上候、

申　兵庫助

伊勢七郎

貞孝

〔書札作法抄〕一申狀幷目安ノコト、申狀ヲ略シテ目安ト云也、目安ニハ年號ナシ、但當時ハ年號ヲ書人モアリ、所詮イヅレモ子細ナシ、又目安ニハ、謹ガシ申ト計書テ、小狀ハナシ、又申狀ノ小狀ニ、置字カヽズ、但於ト云字許ハ苦シカラズ、總テ申狀目安ニハ、候ト云字カヽズ、○中略

一申狀目安以下ノ書札ニハ、置字至極ノ大事ノ物也、○中略抑兼又、將又、凡、粗、頗、聊、併、只會、如此ノ字ヲアシキ處ニオケバ、其文章ミダルヽナリ、

〔夜鶴書札抄〕之ノ字事、由、旨、間、候、加樣ノ所之字アルベシ、又清書ヲスルニ、之ノ字行リノ頭ニナラバ、其ヲバカヽヌ也、但下知折紙、申狀、目安、和與ノ狀、目安、加樣ノ、書ノ事之ノ字不可書、又候ト云字、申狀目安ニ、日カヽヌ也、

〔吾妻鏡二〕治承五年〇養和元年四月廿日乙丑、小山田三郎重成、聊背御意之間、成怖畏籠居、是以武藏國多磨郡內吉富并一宮蓮光寺等、注加所領之內、去年東國御家人安堵本領之時、同賜御下文訖、而爲平太弘貞領所之旨、捧申狀之間、糺明之處無相違、仍所被付弘貞也、

〔吾妻鏡八〕文治四年七月廿八日壬戌、式部大夫親能募武威、貪他人領所、抑留乃貢之間、雖預勅問、失陳謝之由、依其議出來、二品〇源賴朝令尋親能給之處、不能委細言上、只去六月已捧狀訖、案文獻上之、若此事候歟之由申之、此由訴之歟之由、二品令感給云云、

謹請

院宣二箇條事

一駿河國蒲原御莊御年貢事

右件御莊、大外記師尙依相親令託付之間、以內儀令致沙汰之處、文治元二年者、令究濟預返抄畢、可被召尋彼師尙朝臣歟、去年分、去四月令積載令解纜畢、

一越後國大面御莊御年貢之事

右件御莊、文治元二兩年分、運上領家中納言入道之旨、沙汰人所申上之由、若有御不審者、進雜掌於寺家可申散狀歟、去年分早米者進納領家、後米者或雖令積載、未承著否、或令納置莊庫云云、依院宣被止莊務之故、依召上沙汰者、不遂積載之由所申上也、以前兩條、謹言上如件、親能誠惶誠恐謹言、

文治四年六月十一日　散位藤原朝臣親能

請狀申狀之事

〔南禪寺文書〕江富鄉等百姓請狀

一風損時、國中平均隣鄕ひつかけとあるべく候、次に濱添鹽入三鄉之事、近所のひつかけとあるべく候、其餘に申まじく候、

目安

一當年水入河押の事、上使けんはうに見わけられ可預御成敗候、雖水入候不損さる在所におきて掠公方申べからず、次に諸政所江無理なる訴訟申公事坊士留事、於向後あるまじく候、及大訴者、寺家江歎申べく候、

一寺領御年貢元は糠米壹石の分、榛原以九合本米八斗分雖致沙汰、依地下之侘事、嘉吉三年より上使寮江本米榛原以九合漆斗宛にて如其納上候、若水損入事候者、堅可預御罪科者也、

右條々於守護所落居候上者、子々孫々ニいたるまで不可有異篇之儀候、仍請狀如件、

文安二年八月十六日

江富鄉分（連署 十二人）　吉永分（連署 十人）　藤平鄉分（連署 十二人）　江尻分（連署 五人）

上江富分（連署 三人）

以上

文安二年八月十六日

〔運歩色葉集 目〕目安

〔夜鶴書札抄〕目安申狀折紙ニハ、年號ノ下ニ、何月日ト書也、

○按ズルニ、沙汰未練書ニ、目安者、訴陳狀之内、肝要之段々目安云也、トアレバ、鎌倉幕府ノ時ニハ、訴狀陳狀ニ、條款ヲ別チテ、事ヲ列載セルヲ目安ト云ヒシナリ、

〔和簡禮經 五〕一目安事（但公方へ申狀共云、具書共云、申狀ハ目安ノ于細證物也、）

料紙ノ事、公家門跡ハ引合、武家ハ杉原、但三職其外國持之衆ハ、若ハ引合ヲ被用事モ候也、

晴光

大形古案如此

紙ノ端ヨリ書出ス

常興（又云某代謹而言上ト書事も有、代書ハ位ニ用ル、例式ノ諸侍ハ代書有ベカラズ、代官トハ訴訟アル人ノ家人ノコトゾ、）

松田豐前守定行謹而言上

尾張國海東郡者、定行爲相傳之知處、假尾大和守申掠、今度被成御下知段、致迷惑候、所詮任證文、明鏡之旨、被成返御下知候之樣、可預御披露候、仍目安之狀如件、

月　日（又年號なし書無、日ナバいくかとは不書シテ、其月日ト計書事、毎々之儀也、常興說）

右如此計ニテ名字官名乘何も無之、充所も不書也、料紙ハ杉原一枚竪ニ可書也、タル〳〵ト卷テ上包有之、然ヲ奉行請取、銘ヲ加ル也、其書樣ノ事、永祿九九廿四、如此加之、年ノ字月ノ字ノ書程アクル也、又ハ（永祿九九廿四）如此モ書之、

又書樣

名字官名乘謹言上

（端ニ）右意趣者　右子細者　右旨趣者トモ書出

知行分備中國水田庄事、爲勳功之賞拜領以來、帶代々御判當知行無相違者也、　然處――――如此モ書出シ申候也、

爲預申御沙汰、粗言上如件、

此等之趣、可預御披露之狀如件（共）

始ハ猶重而可申事アル時ハ、粗ト云字ヲ書、及兩度ノ時ハ、重而言上ト書也、

〔諏訪部文書〕目安

諏訪部三郎入道信惠申、屬當御手、去正月一日、令發向越前國金崎城、度々致軍忠間事、

一正月十八日、御合戰之時、攻寄大手城戸口、致合戰忠之條、山口入道見知事、

一二月十六日、後責凶徒等合戰之時、罷向山手、致軍忠畢、此段高井左近將監、多胡彌太郎等見知畢、

一三月二日、又於大手城戸口、抽軍忠之條、中澤神四郎、多胡四郎等、令見知畢、
一同三日、夜責合戰、於大手致軍忠之條、山口三郎見知畢、
一同五日夜、攻入大手矢倉下、終夜致合戰忠之條、片山孫三郎、中澤神四郎等、令存知者也、然間攻入城内、自身致疵（左足被射）畢、仍爲山口三郎、佐々布七郎入道奉行、被遂實撿畢、然早爲下賜御證判、恐々言上如件、

建武四年三月日

承了（高越後守師泰判）

〔集古文書（二十四目安）〕中村貞行目安（下野國喜連川處士三浦某藏）

中村彌次郎貞行申軍忠事

右者八月廿六日、武州岩波山御合戰之間、令國道中村安藝守、馳參最前、屬當御手、致戰功之剋、右膝被切之條歷然也、然早賜御證判、爲備向後龜鏡、恐々目安言上如件、

貞治二年十月日　　花押

承了

〔島津文書〕島津大隅前司入道々意申

薩摩國凶徒等澁山四郎入道子息兄弟、同一族以下、並古木彥五郎入道子息兄弟以下一族等、率數多勢、同國伊佐莊内中原、構城郭立籠間、以去六月十一日、押寄彼城、責落城郭、御敵等古木彥五郎入道、澁山十郎入道、同彥六以下、依令打捕數輩御敵等、被疵若黨交名注文、

一人　上原中務丞爲職（左股射疵）
一人　鎌田孫次郎長正（左膝切疵）
一人　右馬七郎入道々本（右膝射疵）
一人　山田彥太郎忠行（左股射疵）

賞上書

一同國阿多郡高橋松原合戰事

御敵鮫島彥次郎入道、伊集院助三郎、谷山五郎左衛門入道、市來太郎左衛門入道、鹿兒島郡司、知覽院又四郎、光富又五郎入道、石堂彥次郎入道、秋次三位房、岔山新次郎、古木三郎入道、以下凶徒等、率數千騎軍勢、以去七月廿七日、寄來之間、下向子息親類若黨等、高橋松原口致合戰、依令打捕數輩凶徒、被疵若黨交名注文、

一人　英禰次郎成時 右肩先射疵

一人　葛部孫四郎久喜 左肩左股二所切疵

一人　西郷九郎秀範 左膝射疵

一人　三原滿兵衛尉重吉 左股射疵

一人　山崎右衛門五郎祐範 左目上切疵

右致度々合戰上者、爲賜御一見狀、且目安如件、

建武四年八月三日　　承了判

○按ズルニ、目安トハ、事ヲ目安ク記シテ、親覽ニ便ナラシムル義ヨリ出デタルモノナルガ、當時カタノ如キ文體ヲモ、亦目安ト云ヒシナリ、

〔大塔物語〕愛村上大文字一揆之人々、憚虎口之讒訴、捧目安狀、注進合戰次第、

〔寶簡集十九〕高野山雜掌良海言上書案

高野山金剛峯寺雜掌良海謹重言上

爲和泉國麻生五郎入道西入、彥太郎、高志四郎親藤子息等、稱御家人、拆事於御德政、於當山天野社領同國近木庄、苅取作毛、責取諸料地利、剩率人勢、帶甲冑兵杖打入當庄、致打擲蹂躙、抑留年貢、令悩亂人民間、就訴申、仰御使品河刑部左衛門尉宗清、被成下御教書處、親藤者乍進請文、不能參

洛、自餘交名人等者、不及請文散狀間、兩度仰御使雖被成下御敎書、交名人等一切不令叙用上者、以違背篇被令御沙汰、於請料地利年貢作毛者不日被糺返、至其身者、欲被行所當罪科子細事、

副進

一通　傍例御下知案　永仁五年十二月十二日

一通　御敎書案　同六年三月十八日

一通　高志四郎親藤請文案　同年四月廿一日

一通　御使品河刑部左衞門尉宗淸請文案　同年月廿八日

一通　同御敎書案　永仁六年七月十七日重仰御使宗淸被成下之

一通　同御敎書案　永仁六年九月三日重仰同御使被成下之

已上具書先進之間略之

右子細度々言上畢、件輩或乍進請文、不能參洛、或一向不及請文散狀間、兩度仰御使雖被成下御敎書、一向不令叙用上者、早被令御沙汰、於所訴申者、一々蒙御成敗、至交名人等者、爲傍輩向後、爲被行所當罪科、重歎子細、言上如件、

正安二年後七月　日

〔光明寺舊記一〕光明寺雜掌行直言上

爲黑法師太郎家助、乍構作當寺修理料、神主德足戶十三條矢田里廿一坪、田地一段、送多年、不辨濟有限所當米間、連々依經訴訟、前々總官御時幷神宮御裁判雖令備口往年相積分、幷延元四年以後所當米于今未及一度進濟條、云傷物抑留罪、云與奪所御成敗、忽諸科無據于遁上者、至彼戶田者下地共一向全寺家領掌、可致修理合期勤之由、蒙御裁許子細畢、

然早於修理料矢田里神主德足戶田者、永寺家全領掌、可致修理合期勤之由、爲蒙御裁許、言上如件、

康永二年八月　日

〔島津文書〕島津上總入道々鑒代得貴言上

欲早被經急速御沙汰、被引合譜代相傳重書等案文、被校正間事、

副進

一卷　譜代相傳文書等案

右道鑒、自右大將家（〇源頼朝）以來迄于今、代々相傳文書等、九州御管領御下向之上者、正文等可持下之處、路次難儀之上者、被校正案文等、被封次目、被順正文於鎭西、爲被經御沙汰、恐々言上如件、

康安元年六月日

〔寶簡集十九〕丹生社神主恒信言上書

高野山丹生社神主恒信謹言上

欲早被經御奏聞、任沙彌道阿等寄進狀、于今知行上者可成安堵思□

下賜綸旨、專祭禮社領和泉國麻生鄉事

副進

一通　沙彌道阿等寄進狀案

一通　令旨案（可致東夷征罰御祈禱之由事、元弘三年閏二月十日）

一通　當社靈瑞注文（依蒙古討伐奇瑞、和泉國近木鄉被寄附事）

一通　夢想記并飛神火注文（裏書）奏聞了（花押〇高倉光守）

右當鄉者、去元弘元年十一月十六日、沙彌道阿等、自令寄進當社以來、爲社領知行無相違之處、去年三月比、竹院慶性房號賜宮令旨、致亂妨狼藉之間、神用忽以及闕如之條、神慮難測者哉、就中於宮令旨者、可被棄破之由、被定仰出上者、何限當鄉、可及亂妨哉、凡當社御祈禱事、雖無退轉、別去國二月十日、被下懇懃令旨之間、寤寐凝丹誠畢、而大師影向、神明奇瑞、日々夜々示之、古今奇特、超過餘社者也、蒙古降伏御祈禱之時者、以和泉國近木鄉被寄進畢、今度尤便宜之地、可有御寄附之處、適於道阿高

野居住之仁、自日來、令寄進之間、爲社領知行無相違之處、彼慶性房動擬及亂妨狼藉之條、希代珍事也、所詮被經御奏聞、下給安堵綸旨、彌爲抽御祈禱忠、恐々言上如件、

〔類集文字抄 文筆〕解文（ゲブン）

〔吾妻鏡 六〕文治二年十月三日丙子、貢馬并秀衡所進貢金等、所被貢進也、主計允行政〇藤原書解文云云、

進上

御馬五疋

鹿毛駮

葦毛駮

黒栗毛

栗毛

連錢葦毛

右進上如件、

文治二年十月三日

〔吾妻鏡 十〕文治六年〇建久元年十一月十三日癸亥、新大納言家〇源頼朝御別進、以伊賀前司仲教、被付御解文、入被封之 於戸部、戸部又付左大丞、定長被奏覽云云、

進上

砂金八百兩

鷲羽二櫃

御馬百疋

送文

右進上如件

建久元年十一月十三日　　源頼朝

如此被載之、此外御馬十疋所被進禁裏也、

〔消息耳底秘抄〕送文事〇中略

解文モ禮紙ナシ重紙許也、敬時ノ立文ノ書也、〇下略

〔消息耳底秘抄〕送文事。。

禮紙ナシ、二枚ヲ引重可書也、〇下略

〔常照愚草〕一送狀認事。。

送進納中　御用脚事

合千疋者

右爲被成下安堵御判、御禮物所奉進納之狀如件、

年號月　いく日　　伊―　右京亮貞―

御奉行所　總ては官名乘書つゞく事も在之、

名乘のかたに官を事書も不苦候

〔吾妻鏡六〕文治二年十月廿七日庚子、信濃國伴野莊乃貢送文到來、二品〇源賴朝則副御書、令進京都給、

〔吾妻鏡十一〕建久二年十一月廿二日丁卯、多好方等欲歸洛之間、自政所賜餞物、行政、仲業、家光等奉行之、其上有別祿、馬十二疋云云、〇中略

公文所送文云

好方給

馬五疋內

一疋黒河原毛あかくらを、ひ　一疋かげ、黒ぬりのはりかは鞍、
一疋あをさぎかすげ　一疋くろ
荷鞍馬五疋
一疋あしげ　一疋をなじ
一疋くりげ　一疋かげ
一疋かげ
むかばき一懸、くまのかわ、くつ、てぶくろ、ながもち一合、おゝい、だいゆたんあり、とのゐ物
一領、めつはしのこん小袖七、白　すいかん袴一具、水干　こんくずばかま、いとくず、うすぎぬ二、白
又こんの御こそで二、
ひたゝれ十二具内
こん一具　あいずり六具
しろき二具　かき三具
上品絹十疋　いろ〳〵の布三十段
そめぎぬ十切　いろがわ十五枚
ゑぼし二頭　ぬのさしなは七方
白布二百段
好御
馬三疋
一疋つきげ、まきゑ、鞍　一疋くろ河原毛
一疋かげ

むかばき一懸　なつげ、くつ、てぶくろ、
のや一こし　ゆみ一張
もへぎのいとおどしのはらまき一領
府生
公秀
馬二疋內
一疋かげ、くろぬりのはりかは鞍、　一疋かげ
むかばき一懸、なつげ、
むかばき一懸、なつげ、くつ、てぶくろ、
同守正
馬二疋內
一疋くりげ、くろはりかは鞍、　一疋にげ
むかばき一懸、ふゆげ、くつ、てぶくろ、
助直（備中國吉備宮淸目勤仕子）
馬二疋內
一疋かげ、くろ、はりかは鞍、　一疋かげ
むかばき一懸、なつげ、くつ、てぶくろ、
建久二年十一月日
おくりぶ廿一人
〔吾妻鏡十二〕建久三年十二月廿日戊午、澀谷黨者、偏備勇敢、尤相叶御意之間、爲慰公事勤役、以彼等

領所相摸國吉田莊地頭被申請領家圓滿院爲請所御倉納物所被贖其乃貢也、

前右大將家政所

進上　相摸國吉田御莊御年貢送文事

合進布陸佰七拾肆段貳丈内（加六十一反先分料、）

見布貳佰陸拾七段

染衣五切　代百文（各廿文）

上品八丈絹六疋　代百廿文（各廿文）

納布九反内（上二反 中七反）　代

藍摺准布卅反　代六十文

紺布二反（無文）　代四文

率駄二疋　代四十二文

持者七人　代五十二文、二丈、

例進長鮑千百五十帖

移花十五枚

染革二十枚

右付夫領助弘、進上如件、

建久三年十二月廿日　平盛時（御判）○

〔親元日記〕寛正六年正月廿五日癸酉年始諸社御神馬御送狀數通整之、

〔大館常興日記〕天文十年十一月四日、御料所若州安賀莊當御公用之内、且万疋只今到來、則御倉へ納申候由、飯尾大和守方より被申之、仍御代官熊谷彈正大夫送狀（今月一日附也）進獻之、然間則宮内卿

注進狀

御局へ申入候也、使也〇松平此送狀飯和へ則遣候也、

〔書札作法抄〕一當時ノ消息ハ、〇中略注進狀ナドノ書事ノ多キニハ、紙ヲツギテ書ナリ、〇下略

〔源平盛衰記三十五〕高綱渡宇治河事

源太〇梶原景季佐々木〇高綱鎌倉ヘ早馬ヲ立、何レモ劣ジ負ジト馳テ行、源太ガ早馬ハ、先立タリケルガ、如何シタリケン、足柄ノ中山ニテ、高綱ガ早馬先立ヌ、三日ト申ニ馳著テ、高綱宇治川先陣ト申タリ、同時ニ梶原ガ使又來テ、景季先陣ト申ケリ、右兵衛佐殿〇源頼朝ハ、安立新三郎清恒ヲ召テ、佐々木梶原生タリヤト問給ヘバ、共ニ候ト申、其後ハ尋給事ナシ、後日ノ注進ニ、宇治川ノ先陣ハ高綱ト注サレタリケルヲ見給テコソ、言バト心ト相違ナシトハ宣ケレ、

〔吾妻鏡十九〕承元四年十一月廿四日戊申、駿河國建福寺鎮守馬鳴大明神、去廿一日卯剋託少兒、酉歳可合戰之由云云、別當神主等注進之、今日到來、相州〇北條義時披露之、

〔吾妻鏡五十一〕文應二年〇弘長元年正月五日丁卯、來九日可有御鞠始之由云云、而懸一本枯間、爲被仰下可注進交名之旨、行方傳仰於平岡左衛門尉實俊、仍注進之、其中被下御點訖、

〔新編追加雜務〕一西國雜務事、注進狀繁多相積之間、雖有御沙汰、自然依經年月、令爲煩敷者、然者於自今已後者、殊重事外、不可注進、直可令尋成敗、狀依仰執達如件、

正元元年六月十八日

武藏守判〇北條長時

相模守判〇北條政村

陸奥左近大夫將監殿〇北條時茂

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年九月十九日乙巳、平氏一族、去二月被破攝津國一谷要害之後、至于西海、掠虜彼國云云、〇中略

讚岐國御家人

注進平家當國屋島落付御坐給、參源氏御方事、京都候、御家人交名事、

藤大夫資光　同子息新大夫資重

同子息新大夫能員　藤次郎大夫重次

同舍弟六郎長資　藤新大夫光高

三野三郎大夫高包　橘大夫盛資

三野首領盛資　仲行事貞房

三野九郎有忠　三野首領太郎

同次郎　大麻藤太家人

右度々合戰、源氏御方參、京都候之由、爲入鎌倉殿御見參、注進如件、

元暦元年五月日

〔吾妻鏡六〕文治二年三月十二日庚寅、關東御知行國々內、乃貢未濟莊々、召下家司等注文、被下之、可加催促給之由云云、今日到來、

注進　三箇國莊々事下總、信濃、越後等國々注文

合

下總國　三崎莊殿下御領　大戶神崎〇中略

信濃國　伊賀良莊尊勝寺領　伴野莊上西門院御領〇中略

越後國　大槻莊院御領　緜雄莊上西門院御領〇中略

右注進如件、

文治二年二月日

廿七日乙巳、北條殿〇時政、已欲進發關東、仍爲警衛洛中、撰定勇士、被差置之、其交名注載折紙、所付進

帥中納言○藤原經房也、

注進　京留人々

合

平六傔仗時定　　梓の新大夫

野太の平二　　やし原の十郎

桑原の二郎　　肥前の江次○中略

已上三十五人

三月二十七日　　平判

七月廿七日壬寅、因幡前司廣元、去十九日注進沒官京地目六、今日二品○源賴朝所經御覽也、

注進

沒官家地成敗事

左馬頭三箇所内

信兼家地一所　楊梅

友實家地一所　仁和寺

平家領一所　正親町富衞前領○中略

已上十箇所

在判廣元

〔吾妻鏡十七〕正治三年○建仁元年五月十四日癸亥、佐々木三郎兵衛尉盛綱入道使者參著、捧一報狀、義盛○和田持參御所、善信○三善行光○工藤於御前讀申之、其狀云、日來城小太郎資盛、欲奉謀關東、構城郭於越後國鳥坂、近國之際、存忠直之輩、然雖來襲、還悉以敗北、爰西念可發向之由、蒙嚴命、件御敎書、去月五日到著于西念之住所上野國礒部鄕、仍不廻時刻揚鞭、三ヶ日之中、馳下鳥坂口、則遣使者於資

也、相觸御敎書之趣間、答早可來城邊之由、因茲發勇志等、于時越後、佐渡、信濃三ヶ國輩、爭鋒競集、西念息子小三郎兵衛尉盛季、欲先登之處、信濃國住人海野小太郎幸氏、拔於盛季之右方欲進出、爰盛季郎從取幸氏騎轡、此間盛季如思遂先登射一箭、其後幸氏又進寄、相戰之間被疵、資盛已下賊徒飛矢石、不異雨脚、合戰之間、彼及雨時、盛季被疵、郎從等數輩、或殞命或被疵、又有資盛之姨母、今號之坂額御前、雖爲女姓之身、百發百中之藝、殆越父兄也、人挙謂奇特、此合戰之日、殊施兵略、如童形令上髮、著腹卷、居矢倉上、射襲致之輩、中者莫不死、西念郎從、又多以爲之被誅、于時信濃國住人藤澤四郎清親廻城後山、自高所能見之發矢、其矢射通件女左右股、卽倒之處、淸親郎等生虜、疵及平愈者、可召進之、姨母被疵之後、資盛敗北、出羽城介繁盛（資盛[illegible]）自野干之手所相傳之刀、今度合戰之剋紛失云云、

〔吾妻鏡十八〕建仁四年（〇元久元年）七月廿六日丙戌、安藝國壬生莊地頭職事、山形五郎爲忠、與小代八郎等相論之間、就守護人宗左衛門尉孝親注進狀、今日於御前被一決、遠州（〇北條時政）幷廣元朝臣等被候御前、是將軍家直令聽斷政道給之始也、

〔吾妻鏡三十五〕寬元二年六月十七日戊戌、新田太郎爲令勤仕大番在京、是爲上野國役之故也、而稱所勞、俄遂出家、但不相觸事由於六波羅並番頭城九郎泰盛等之由、依有注進狀、今日評定之次、被經沙汰、任被定置之旨、可被召放所領之由被定云云、

〔東寺百合文書〕

御判

□日三時千手供僧交名

大法師堯寶　禪佛

源聰　朝惠

右注進之狀如件

建武三年十月日

〔上杉憲實記〕安房守〇上杉憲實ハ、思ノ儘ニ、兩君ヲ生捕、上杉兵庫頭カ〇清角ト申セバ、急ギ此由京都ヘ注進ス、義教大ニ悅バセ、春王安王ヲ無生捕事、莫大ノ勳功ナリ、堅ク誡、京都ヘ可差上トノ仰ナリ、〇中略警固ノ武士ハ、長尾因幡守ヲ始、百餘騎ヲ添、京都ヘ上セラル、〇中略日ヲ經テ、美濃國青野ガ原ニ著給時、京都ヨリ急ノ飛脚、注進狀ヲ持、因幡守ニ渡ス、若君御覽ジ、京ヨリノ注進狀ハ、定テ路次ニテ害セヨトノ事可成、兄弟互ヒニ、最後ノワルビレヌ樣ニ、辭ヲカハシ給フ、

〔親元日記〕寬正六年五月朔日丁未、昨日之仲親申狀幷注進狀等、傳奏江爲御使親元持參之、於巨細者、今朝於殿中直有御申云々、

〔上杉輝虎注進狀〕一乍恐謹而言上、抑某去十日、於信州河中島、甲州武田與令參會、一合戰仕、甲州勢致敗北候趣、

一輝虎事、以御厚恩、居關東管領職候上者、私之備、弓箭先切隨東國、令上洛候半與存念ニ付、村上義清ニ對、爲申分、輝虎義淸同道仕、去八月八日、越後國春日山打立、信州ヘ致著陣候事、〇中略

右之條、蓋委細之段、雖似無禮、誠無道之輩者、對天下不忠節也、何可殘心底乎、此等之趣、宜樣寬御氣色、不淺御披露奉賴候、輝虎恐惶謹言、

管領上杉不識庵謙信

九月十九日　輝虎

大舘伊豫守殿

〔德川禁令考十九 㒵書文格〕天明七丁未年月日闕

遠國狀幷進達書用紙書式ノ儀ニ付達

遠國狀、且又諸向より差出候諸書物、進達書等ニ相用候料紙之儀、先年も相達候處、今以宜き紙を

相用候向も有之候、以來紙を吟味いたし候ニ不及候間、可成丈麁紙を相用可申候、認方等も、遠國狀其外、至而細字に認候向も有之候得共、書面も程能可相認候、遠國狀も事書紙ニ不限、其所之相應之紙何紙ニ而も相用可申候、書面を強而致吟味候而者、其場所々々之不辨ニ相成、却而御用向手間取候樣にも可相成候、尤遠國役人者、當地ニ詰合候者より相達候樣可被致候事、

御書付留ヲ按ズルニ、天保十二乙丑年十二月、更ニ前條ノ令文ニ末文ヲ附シテ布達アリ、卽チ左ニ附記ス、

右之通、天明七未年相觸置候處、遠國狀幷諸向より差出候諸書物、進達書等ニ相用候料紙之儀も、いつとなく宜敷紙を相用、且認方等も遠國狀其外、至而細字楷書樣ニ認候向も有之候間、天明度相達候趣、無違失相守、向後は成丈麁紙を相用、認方等細字ハ勿論楷書樣ニ無之樣ニ、和樣ニ而不敬ニ不相成樣ニ、相認可申候、

〔諸例類纂 四〕御內々伺書

松平榮翁殿卒去之節、松平美濃守ゟ忌服御屆、直屆ニ而榮翁死去と認、

美濃守直屆ニは死去と認、家來ゟの御屆ニは卒去と認候、其據不詳候、

同時阿部能登守殿ゟ、卒去死去兩樣御屆書相認、御執政松平周防守樣御用人迄及間合候處、死去之方差出候樣御さし圖之由、

〔諸伺下知留〕安永七戌年七月　柴村藤三郎出ス

桑原能登守掛

一甲州九瀧村圓光寺再建立之伺

書面、圓光寺之儀、寺社奉行江掛合、再應相糺候處、元祿之改ニ洩候寺號故、再建ハ難成候間、其旨九瀧村之もの共江申渡、證文取之可被差出候、以上、

申合書　相談書

戊七月

〔慣習例〕文政八年酉六月廿四日伯耆守殿廻し

申合書　　脇坂中務大輔

昨廿五日立合之處、兩本願寺使僧江御内書御渡ニ付、拙者儀登城いたし、相摸殿、大炊殿ニハ不快ニ而不被罷出、下總殿ニハ未初月番前ニ付、兩奉行江申談候處、去ル申年二月十一日式日、石川主水正病氣ニ付、出席無之、曾我豐後守初月番前ニ候得共、月番心得出席幷注進狀名前書加相濟候而、同人申聞候間、右例を以、下總殿月番相心得出席幷注進狀名前書加候積り、一昨廿四日出羽守殿江大澤彌三郎を以入御聽置、其通相濟候事、

右天保二卯年六月申合候事

文政七申年二月十一日、式日公事方御勘定奉行兩人之內、曾我豐後守屋敷普請中ニ而、未初月番不相勤處、石川主水正病氣ニ付、差掛出座斷來、同評議之上、豐後守月番心得を以、注進狀ニ名前書加候事、

〔書留〕半切　御相談書　　何之誰

御相談書雛船

何之誰御代官所當分御預り所奧州村々、當何御年貢江戸御廻米積舟破船一件、別紙御屆書案例書相添、及御相談候、以上、

何何月　（但例書ハ末ニ有之、尤御屆ニハ例書無之、）

袋ノ上書

何之誰御代官所當分御預所

何州村之當何御年貢米積船破船一件御屆書　　　　　　　　　　　　　飛驒守

主膳正殿

肥前守殿

左近將監殿

下野守殿

公文類例

〔德川禁令考十九 五十 書文格〕寬政二庚戌年正月十一日

越中守書取

近年應對并書面文通等、格別ニ崇敬致候樣相成候、右體者、其程々ニ隨ひ候儀ニ可有之處、格別ニ而者、却而不敬ニも至候、登城前逢ニ被罷越候人も、始終平伏被致候樣ニ相見候、輕き御役たり共、仕宜等被致候外者、面體見へ候程ニ可有之儀ニ候、并老中等江被申聞候書面ニも、奉入御覽候、又者被遊御渡候、奉畏候抔申文言も有之候、掛御目候、又者入御覽候、御渡被成候、奉承知候、又者承知仕候抔申程ニ可有之哉ニ候、安否被尋候ニも、機嫌被尋候樣成儀も折々有之候、縱御目見以下ニ候共、機嫌可被尋儀ニ者有之間敷候、雖有抔申儀も、上江拘はらざる事ニ者申間敷儀ニ候、同輩文通等も近年者餘り丁寧を盡し、却而敬禮ニ相違致し候ニも至り、人情輕薄ニ流候儀ニ候間、此旨を被相含、寄々可申合候、

但右之通ニ候とても、文言等俄に改候ニハ不及候、御用多之中ニ而、文言をも其度々改候者、又々繁雜之基ニ付、是迄之通り出來候ハヽ、其儘ニ而可被差出候、一體之處如此ニ被心得、追連相直候樣可被心掛候、

右之趣、御役人之面々江、口上ニ而可被申達候、○中略

安政二乙卯年十月十二日

文詞節略、麁紙相用不ㇾ苦旨達、

諸向より差出候書付類、麁紙相用候樣、前々より相達置候得共、此節柄之儀ニ付、猶又有合之何紙ニ而も相用、且又文體文言等の儀も、如何樣共相略し、趣意而已相分候樣認差出候而も聊不ㇾ苦候段、向々江可ㇾ被ㇾ達置候事、〇中略

慶應三丁卯年八月十六日

諸願伺屆及評議書用紙ノ達

諸向より差出候諸願伺屆等料紙之儀、是迄半切紙ニ認差出候處、以來長文ニ相成候分ハ、勘辨いたし、美濃紙帳ニ相仕立差出候樣可ㇾ致、向々評議書之儀も、同樣相心得可ㇾ申旨、先達而相達候處、長文ニ無ㇾ之分も、美濃紙帳ニ仕立差出候向も有ㇾ之、却而不都合ニ付、長文ニ無ㇾ之分者、前々之通半切紙ニ相認、格別長文ニ相成候分ハ、美濃紙ニ不ㇾ及、半切帖ニ仕立差出候樣可ㇾ被ㇾ致候、評議書之儀も同樣可ㇾ被ㇾ心得候、

右之通、諸役人江可ㇾ被ㇾ達候事、

〔德川禁令考十九書文格〕〇寬政三辛亥年八月闕日

諸書付類書損有ㇾ之共、差扣伺ニ不ㇾ及旨達、

諸役人より差出候諸書物之內、聊之書損有ㇾ之候而も、差扣伺差出候事も候得共、以來ハ月日附等之書損之類、或ハ落字幷全く之書誤りニ而、別ニ品も無ㇾ之重き御品ニも無ㇾ之者、右書損仕候段、不調法之儀ニ存候旨、向々より口上ニ而申斷候迄ニ而、差扣伺書ハ差出ニ不ㇾ及候、

右之趣ニ相心得候樣、寄々諸役人江可ㇾ被ㇾ相達事、

古事類苑

政治部五十六

下編

上書

鎌倉及ビ室町幕府ノ時、上書ニ關シテ殆ド記スベキモノアラズ、唯文覺ガ消息ヲ源賴家ニ送リテ治道ヲ述ベシガ如キ、是圓ガ、足利尊氏ノ諮詢ニ答ヘテ、建武式目十七箇條ヲ言上セシガ如キ、熊谷某ガ、諫書ヲ足利義政ニ上リテ罰セラレシガ如キ、一二ノ例ヲ見ルノミ、德川幕府ノ時、其政治上ノ可否ヲ局外者ニ諮ヒ、若シクハ局外者ガ、上書シテ時政ノ得失ヲ議スルガ如キハ、其欲スル所ニアラザレバ、隨ヒテ上書ニ關スル規定ノ如キ、曾テ之レアラズ、貞享四年、熊澤了介ガ封事ヲ上リテ政治ヲ議シ、爲ニ禁錮セラレタルガ如キ、以テ其一端ヲ見ルベシ、寶永正德ノ頃、新井君美屢、封事ヲ上リ、時政ヲ論ジタルコトアレドモ、其實自家ノ知過ヲ受ケタル執政者ヲシテ、時弊ニ注意セシメ、若シクハ其諮問ニ答ヘタルニ過ギズ、直ニ政府ニ對シテ上書シタルモノ、殆ド之レアラズ、然ルニ八代將軍吉宗、入リテ宗統ヲ繼グニ及ビテハ、鋭意治ヲ圖リ、旁ク下情ヲ聞カント欲シ、享保四年、諸司ニ令シテ政務ノ得失ヲ論ゼシメ、同六年、高札ヲ建テ、庶民ニ求言ノ意ヲ公示シ、目安箱ヲ設ケテ隨意ニ封書ヲ投ゼシム、爾來邦家事アル毎ニ、士庶人ノ上書シテ政要ヲ論ジ、時政ヲ議スルモノ漸ク多キヲ致セリ、サレバ文化文政ノ交、露人頻リニ北邊ニ寇スルヤ、憂國ノ士競ヒテ海防ノ方策ヲ獻ジ、嘉永安政ノ間、米使數、開港ヲ強求スルヤ、上下騷然、書ヲ當路ニ上リテ、外交ノ利害ヲ論ズル

求書見

モノ、勝ゲテ數フベカラズ、而シテ德川幕府三百年ノ治政ハ、終ニ王政復古ノ上書ニ由リテ畢ヌ、蓋シ外交海防等ニ關スル上書ハ、今其一二ヲ擧グルニ過ギズ、宜シク外交部露西亞篇、合衆國篇等ヲ參照スベシ、

〔建武式目〕鎌倉如元可爲柳營歟、可爲他所否事、

右漢家本朝上古之儀、遷移多之、不遑羅縷、迄于季世、依有煩擾、移徙不容易乎、就中鎌倉郡者、文治右幕下〇源賴朝始構武館、承久義時朝臣幷呑天下、於武家尤可謂吉土哉、爰祿多權重、極驕恣欲、積惡不改、果令滅亡畢、縱雖爲他所、不改近代覆車之轍者、傾危可有何疑乎、夫周秦共宅崤函也、秦二世而滅、周闗八百之祚、隋唐同居長安也、隋二代而亡、唐興三百之業矣、然者居所之興廢、可依政道之善惡、是人凶、非宅凶之謂也、但諸人若欲遷移者、可隨衆人之情歟、

政道事

右量時設制、和漢之間可被用何法乎、先逐武家全盛之跡、尤可被施善政哉、然者宿老、評定衆、公人等濟々焉、於訪故實者可有何不足哉、古典曰、德是嘉政也、政在安民云々、早休萬人愁之儀、速可有御沙汰乎、其最要粗註左、〇中略

以前十七箇條、大概如斯、是圓雖受李曹之餘胤、已爲草野之庸愚、忝蒙政道治否之諮詢、所摭和漢古今之訓謨也、方今諸國干戈未止、尤可跼蹐歟、古人曰、居安猶思危、今居危盍思危哉、可恐者斯時也、可愼者近日也、遠延喜天曆兩聖之德化、近以義時泰時父子之行狀、爲近代之師、殊被施萬人歸仰之政道者、可爲四海安全之基乎、仍粗言上如件、

建武三年十一月七日　眞惠
是圓

〔德川禁令考〕十九〇雜令享保四己亥年五月廿七日

政務ノ可沿革廉ハ上申ス可キ旨達

一前々より被仰出候御法度之儀ニ而も不相應と存候儀者、早速可申上事、

一諸役所前々より之格を以勤來候事共之内、不可然と存候儀者、其旨を達し可相改事、

一新規之儀何ニ而も可然と存付候儀、早速可申上事、

右少々之儀ニ而も存寄於有之ハ、無遠慮申出候樣ニ、急度可相心得候、以上、

五月

按ニ、敎令類纂ニ、享和四年(文化元年)四月廿六日ノ令ヲ載ス、乃チ左ニ附記ス、前文ト參照ス可シ、

諸向之御役所共、都而之取扱、新規之趣ニ相成候儀ハ勿論之事、前々之仕來りハ、聊摸樣替之儀迄も、其趣一應被申聞候上ニ而取計可被申候、譬ハ御都合ニ可然筋ヲ先試ニ取計、彌宜候ハヽ追而其段可被申聞など申類も間々可有之哉、右等之類迚も、先其段最初ニ被申聞候而、取計有之候樣可被致候事、

〔有德院殿御實紀附錄三〕享保六年閏七月廿五日、廣く言路を開き、下の情を通じさせ玉はん事を思召し、農工商賈は更なり、醫卜巫祝の徒にいたりても、上に聞えあげむと思ふ者は、少しもはゞからず申出べしと、日本橋の邊に札を立らる、〇中略同じ年八月よりして、毎月二日十一日廿一日と定めて、評定所の門前に匭函(目安箱といふ)を置れしかば、やがて訴狀封事などことゝなくかきつけて、此中に投せし者少からず、此函は鎰せしまゝにて、申次の衆みづからもちいでゝ、御覽に備ふ、小性鎰をひらき、其中にある封事を封のまゝ奉りて、御みづからひらかせ玉ひて御覽あり、訴への旨により、それ〱の奉行に仰下され、御裁斷を加へ玉ふ、これ下に寃獄あらむかとうれひ玉ひての御事とぞ聞えし、同じき十九年五月、諸局の有司に仰下されしは、さき〱より定りし事たりとも、今の時宜に應せざるは速に改らるべし、さればむかしより習ひ來りし事にても、さる

まじきことゝ思ふ旨あるか、または新に議せんとおもふよしあらば、事の輕重にかゝはらず聞え上べしとなり、これも下問をこのみ時弊を矯玉はんとの御旨なるべし、言路を塞ぎ擁蔽をこと〻する世とは、天淵のたがひなりき、

〔太平策跋〕右太平策は、松平美濃守〇柳澤吉保家臣荻生捴右衞門物部茂卿、享保年中、依台命上書する處の書也、享保年中、將軍家天下の儒者に台命有て、天下の政事に付て存旨有者は、其旨を上書すべきのよし命ありしに、政事を談じ上書する者、凡二十餘人、茂卿も此太平策を著して奉る、其後又候台命ありて、政談十卷を記して奉る、天正より以來政事を談ずる者少からずといへども、茂卿がごとき者いまだ曾てなし、誠に眞儒といふべし、〇中略于時寛政三年の冬、醫師中山元享より乞得て寫之、後に思旨を記畢、

寛政三辛亥年十二月　　土井主稅利往

〔德川禁令考十九雜令〕寛政三辛亥年二月閏日

敎諭稟答之式、越中守口達、

口上之覺

御役人向、總而表勤之者、御前江被召出、御直尋等有之候處、何事も丶か〳〵不申上樣ニ而、たとへバ相替事なき哉と御尋有之候へバ、相替儀無之旨のみ申上、平伏いたし罷在候間、おのづから御咄も難被遊候、表向之御尋などゝハ違候事故、存寄一盃聊相つゝまず、有體御答申上、たとへ御役外之事たりとも、心付候事ハ十分申上、御尋有之候儀ニ而も、御咄同樣ニ申上候樣、幷始終平伏いたし候ニハ不及、頭をあげ候而、隨分氣丈ニ御咄ども申上べく候、前後をのみかへりみ、樣子よきやうの事のみ申上候儀ハ、御きらいニ被爲在候旨、御直御沙汰ニ付、御前江可被召出向々江者、よりより可被咄置候、尤御意之品うかゞひ兼候事候ハヾ、うかゞひ返し無間違御答可申上候、

〔諸家策論 天〕嘉永二己酉年五月五日、於御部屋阿部伊勢守殿、牧野備前守殿、左之面々江御直渡御書付、

初席

寺社奉行 脇坂淡路守
同 本多中務大輔
同 土屋釆女正
同 松平紀伊守
同 太田攝津守
町奉行 遠山左衞門尉
同 牧野駿河守
御勘定奉行 池田播磨守

二席

大目付 堀伊賀守
同 池田筑後守
御目付 遠山半左衞門
同 石谷鐵之丞
同 三宅市右衞門
同 戸田能登守

三席

大目付 深谷遠江守
御勘定奉行 石河土佐守
同 松平河内守
御目付 本多隼之助
同 戸川中務少輔
御勘定吟味役 佐々木修輔
同 羽田龍助

四席

長崎奉行 井戸對馬守
浦賀奉行 淺野中務少輔

覺

近來異國船渡來いたし候處、昨々年は西北海、對州、南部、津輕、都而奥羽之間、松前邊、夥敷通船いたし、折々は上陸等も致し候得共、指而之義不申出、薪水食料等乞候迄ニ而致出帆候事ニ候得共、其度々沿海諸家ニおゐては、人數等指出し此表之屆等、雜費も少からざる趣ニ相聞、比年諸家勝手向江も相響キ可及困窮、左候而者、守衞之義等閑ニハ難相成事ニ候へども、追々ニ相成候ハヾ、自然賦斂も重く可相成事ニ而、終ニハ領分疲弊ニも至り、上下不和合之基ニ相成候得共、不容易事ニ候處、今年ハ長崎表江も亞墨利加船渡來、松前より送りニ相成候漂流異人共請取、歸國候へども、定而右御禮抔ト唱へ、猶又渡來可致も難計、又此程は浦賀表江者、暎咭利船渡來致し、右者外趣意も無之、此地江見舞罷越候趣、和語ヲ以申聞、其外申出候口上も、殊之外輕蔑侮慢之情態ニて有之由、其上薪水等相與候處、受取出帆之上、猶又下田表へ罷越、上陸測量いたし候趣ニも相聞、大島

へ者亞墨利加船ニ候哉罷越、是又上陸いたし候由、夫のみならず、沖合ニは類船も相見候由、打連沿海處々乘步行、測量等致シ候事も可有之哉、風說ニは候得共嘆咭利船中ニ者、日本人唐人抔も乘組居候哉ニ相聞、旁以當時之成行ニ而者、其儘指置候ハヾ、彌蔑視いたし、驕恣傲慢之所業ニもおよび可申哉、左候時者、御國體ニも拘り候義、何分其儘打捨可置筋ニも無之候間、文政度之如く、猶又打拂之義ニ被仰出可然ト存候、乍去先年打拂之義相止、格別之御仁恤之御處置可有之旨被仰出候段、阿蘭陀加比丹江被仰渡、西洋諸國へも演達有之事ニ候へ者、唯今彼國々より廉立格別之不義非道も無之處、俄御改革有之候も、却而爭論之端ヲ拔キ候樣ニも可相成、又夫ニ付而は、第一先此沿海之守備不相整候而者、萬一此後夷賊戰艦等ヲ以、及渡來候節は、攻擊防禦之術行屆申間敷ニ付、先此義ヲ可仰出候、乍去機會時勢抔とて、何迄も此儘差置候ハヾ、彌輕蔑侮慢超過致し、御國威ニも拘り、且諸家之難澀、沿海のみならず、御國事疲弊衰耗ニも至り候得者、實以不容易事ニ而、深く痛心いたし候事ニ候條、御處置之計畫利害之當否、後弊等無之、永久御安心可相成樣、各各存寄ヲ不殘、此度之義は銘々各通ニ而可申聞候、尤聊忌諱嫌疑等之顧念無之、存意一抔可被申聞候、唯今之時勢ニ而者、先達而も申達候通り、一月後レ候得者一月丈ケ、二月後レ候得バ、二月丈ケ之御油斷ニて、萬一其內又候渡來等度々ニおよび候得者、夫丈ケ之御損ニ相成、御國威ニも拘り、諸家之難澀ニも相重リ、万一夷賊共より不法ニおよび候得者、差誤有之間敷とも申がたく、左候時者、尙又御失策ニも可相成事ニ付、篤ク勘辨之上、早々可被申聞候、右者畢竟此節之時勢ニ於ゐて、御國計大切之義與存候得者、寤寐反側ニもおよび候程之義ニ而、是ヲ氣運ニ託シ、時勢ニ委ヲ、恬然拱手して、居ながら御國地之衰弊ニモ可相成ヲ、度外ニ置キ候樣ニ而ハ、何とも恐入候事ニ存候、各ニおゐても同樣之事ニ可有之候間、篤與勘考窮考之上、忌諱不敬ニ當り候事たりとも、聊無遠慮、了簡之趣早々可被申聞候事、

〔德川禁令考入國事〕嘉永六癸丑年六月廿七日

亞墨利加船入港ニ付、徵諸言達書、〇中略

浦賀表江渡來之亞墨利加船より、差出候書翰之和解寫二冊相達候、此度之儀者國家之御一大事ニ有之、實ニ不容易筋ニ候間、右書翰之趣意、得と被遂熟覽、銘々存寄之品も有之候ハヾ、假令忌諱ニ觸候とも不苦候間、聊心底を不殘、十分ニ可被申聞候事、

別紙書取

此度亞墨利加人持參之書翰、於浦賀表請取候儀者、全一時之權道ニ有之候間、右ニ不相泥、存寄之趣可申聞候事、

右於御白書院溜詰御杉戸際、老中列座、伊勢守〇老中阿部正弘申渡之、

〔開國起原下〕安政五午年六月廿二日、亞米利加訂約の事を、大老老中より所司代を以て、傳奏衆ニ達せしむ、其文に云、〇中略

又萬石以上之面々へは、左之通相達、其書付に云、

アメリカ條約之次第、朝廷へ御伺ニ相成候處、深く被惱叡慮候御次第被仰進候段御尤之御義ニ付、再應各赤心御尋ニ相成、今少々ニ而存意書も揃候間、其上篤と御勘考之上、御決心可被極思召ニ而、精々御差急被爲在候折柄、今度オロシヤ、アメリカ、當國之船渡來申立候趣は英佛之軍艦近々渡來可致、尤清國に十分打勝、其勢ニ乘じ押懸候事ニ付、應接方甚御面倒ニ可相成と御案思申上候、併假條約之通御承知ニ相成、調印も相濟候はゞ、英佛えは如何樣ニも申諭し、御迷惑ニ成不申樣取計可申旨、亞墨利加使節申立候ニ付、御勘考被遊候處、如何樣御迷惑相成候共、朝廷江御申上濟ニ相成不申候而は、御取計難被遊、乍去忽爭端を開き、萬一清國之覆轍を踏候樣之義出來候而は、不容易候義ニ付、井上信濃守、岩瀬肥後守、神奈川ニ於而調印致し、使節え相渡候、右は誠ニ無御據御

場合ニ而、右樣御取計ニは相成候得共、朝廷ニ而御配慮之段は、實以御尤之御義ニ付、此後之御取締方、沿海御手當等、御充實ニ相成、被爲安叡慮候樣可被遊思召候、此度之御一條、不取敢先宿次奉書を以、京都え被仰進候、委細之義は、追々被仰進候事ニ付、此後之御處置ニ付、存意も有之向は、無腹藏可被申聞候、

〔嘉永明治年間錄十三〕元治元年七月十一日、國家ノ爲ニ建言スル者ハ、今ヨリ評定所ヘ出ヅベキノ達、

和泉守殿○老中水野忠精渡書付　近年國家の大事、建白を名目に致し、老中並諸役人宅へ罷越、自己の榮利を謀り候輩有之、以の外の事に候、實以御爲申上度存込候者ハ、以來評定所へ可申出候、尤頭支配有之向ハ、其頭支配を以て可申立候、

右之趣、向々へ可被達候事、

〔澀柿〕文覺上人消息

殿○源頼家の御身は、日本國の大將軍にておはします、されば祈申さん者も、廣大正直の心を以、努々千秋万歳して空ぼめし奉らぬ、無雙の强者の、しかも慈悲あらんが、御祈の師には可相應候也、總ては君を守たてまつり、御身を祈んとおぼしめさば、先國土を祈、万民を祈らせ可給候、祈は人の分際による事にて候、威勢世に蔑らしめず、人にも用られずさる樣なる者こそ我身を祈事にて候へ、此道理をしらずして、近代は、君も臣も、唯身をのみ祈らせ給へば、はか〳〵敷事候はず、佛神の冥慮にも不叶、蒼天の照覽にもたがひ候也、返々も鎌倉殿の御恩にて、無道の歎なげきもなく、邪の禍にもあはぬぞと、万の人に思はれ願まれんとおぼしめせ、左だにも候はゞ、別て御祈候はずとも、伊勢太神宮、八幡大菩薩、加茂春日皆々嬉しと思召、諸佛諸聖諸天善神必々守まいらせさせ給べき也、○中略然ば先御身ををさめて、政を能々調て、其上に御祈候はゞ、響の音に應ずると申

たとへの如く、混柄ヒヤエの能にて有べく候、さても近代の様、人の作行功德も祈も、人目計にて候、眞實の底には國の費、人の歎のみにて候へば、佛も神もうけさせ給はず候也、佛神は偏に德と信とを納受して、物により寶を悅ばせ給はぬものと可₂知食₁にて候也、かやうの事の謂を御意得候て、武家を治、帝王の御守と成、諸人の依怙とならせ給候はゞ、恥もあしく腹ぐろく思まいらせん者をば、日本國三世の敵にて候はんずれば、其身自然に可₂滅候、如₂此委様をも申開らかずして、處仰を悅として、御氣色をよからんとのみ思ひて、佛神の御心をばかへりみおもはず、たのもしげに申なして、御祈申候はん事は、田地の費と成、庫倉の物のみうせて、御爲も一切其益有まじく候、却て御怨にて候也、文覺も罪業を受べく候、さる御損をばいかゞとらせまいらせ候べき○中略さて御身だに治候ぬれば、兎あれ角あれとの御いましめもなく、御下知もなく、御教書も候はねども、あなおそろしとて、自然に國土はをだしく候也、かく目出度時に當て、古今の間に惡黨なきにはあらず、身ををさめ世を救はせ給ての上に、わろからんえせ者を失はせ給候はむ事は、菩薩の大行にて候べし、世も靜り候べし、御教書も重く候べし、御罪にも成まじく候也、全仰忝候へば、かやうに所存の趣重て申候也、故大將殿○源頼朝は、文覺をば、ひたロの強きものとおぼしめして候し也、殿には別て奉公も候はぬに、是程まで申候事、恐存候、御許候へ、殿は若より樂たうとくて、人の歎、民のくるしびをえらでやましまさんと、淺ましく痛しく思ひまいらせ候間、いづくへなりともまれに流しまいらせて、暫わびしき目をみせ參らせ給へ、それぞいとをしく思給、至極後の御樂にて候べきと、故大將殿には内々申て候し也、京中の者申合候なるは、いたく狩を好て、人の歎をえらせ不₂給、世の費をもかへりみさせ給はぬ、すべていさむる事をきゝ入させ給はず、彌御前あしくなる故に、人皆口をとぢて、唯目出度おはしますとのみ申をきゝて、すべて御身の咎をば一つもきかせ給はず、しらせ給はぬとさゝやきて、笏申げに候也、若左様におはしまさば、いかでかお

やの御跡を續て、帝王を守まいらせ、國土の固とはならせ給べき、それを押直させ給ての上の御祈にて可ㇾ有候、夫をなをさせおはしまさずば、いかに祈參らせ候とも、えるし有がたく候、まして文覺などは叶ふまじく候、あるまゝのことを、心にまかせて申候へば、一定うとまれまいらすべく候、それくやしく思まじく候也、能てもよくおはしませとてこそ申事にて候へ、物知たる人々の本文を引て申を承れば、爲ㇾ君爲ㇾ世、よき事を只一言に申出したるは、千兩の金をまいらせたるにはゝるかにまさり候と、明王、は定をかせ給ひて候なるに、げにも殿の御身には、金をば何にかせさせ給ふべき、君に黄金をまいらせさせ給はんよりは、國土をしづめて米穀を多くなし、民を豐かに成て進せさせ可ㇾ給候、それぞ大きなる御忠にて候べき也、いかにも〳〵我御身の咎を聞せ給へ、過をきかずして、國土を治んとするは、病をいとひて藥をにくむが如くの事と承候なり、咎をきくには色代せざらん忠誠の人、宗徒は御臺所にて有べく候也、混口の茂〇茂、一作こきく、一本法師に御目をみせて、やはら密々申させて聞召、謗まいらすればとて、いかにも御腹立候な、能々念して聞召、あつきやいとを堪てやけば、病はいゆる也、所詮此御代は、何事もめでたし〳〵と色代申さむ者に過たる毒は有間敷也、我咎をいひ知する者に過たる忠はなしと、深く可ㇾ思召候、御心に叶ひていとをしくとも、是はえせ者と知にくゝ、見たがらず思召とも、是は能者と思召、世を治する謀には、唯此事第一の最詮至極にてありげに候也、重々御文給はり候事悉候へば、恐々申候也、恐恐謹言、

正月廿三日　　文覺

鎌倉殿御返事

左衛門督殿頼家、于時左近衛中將　正治元年十二月之比、被ㇾ進御敎書於文覺云々、同二年正月、此御返事被ㇾ申候云々、

〔平政連諫草〕條々

一可被興行政術事

右獻諫於君上、可依其臣下、所謂位貴之人、寄重之仁等也、而叔向曰、大臣重祿不極諫、小臣畏罪不敢言、此患之大也、是則雖隨諫諍之主事歟、如唐大宗者、大臣小臣以諫以諍、凡厥人臣忠直、以諫言爲重、可違貴命之故也、政連疎遠微弱之身、庸瑣愚鈍之性也、雖然念々欲報恩德、度々有獻諫言、雖無賞翫、不違賢慮歟、仍不殘鄙底、重所言上也、夫就內外典籍、撿國家治略、佛陀之出世也、爲濟生以說法、聖主之在位也、爲利人以行政、云震旦、云日城、佛法不流布之昔、王化多森羅之代、未有王法陵替之時、佛道修行之世、就之謂之、佛事縱雖退轉、政道不可陵遲者乎、是一　因玆禪閤御在俗之時、專扶霸業、御出世之今漸疎政要、此條評定裁判、任兩國吏、引付採題委七頭人、功成名遂、歸眞趣實、時時有偃息之志、日々雖接政務之由、被思食歟、彼兩箇者、猶細務也、天下珍事、國中大體、併在成敗、可無怠慢、隨又評定大事、猶待御出仕歟、是二　而命之長短在天運、國之治亂因時代歟、一生無端、徒自癈政事、餘算有限、不如催歡宴相存歟、此條全不接公庭、偏以卜隱居儀也、一向無御綺者、萬機任何仁乎、如當代者無其人歟、就此理愁位管領之心、忘彼實爭及緩怠之儀、是三　且聖人爲世出、賢者爲民生、禪閤元當其仁、諸人皆知此理、總以無退屈、猶可有勸厚、不然者出世之本懷相違、爲民之先言可空、是四　隨可行人不行、謂之不可、不可行之人強行、又謂之不可、若有自謙、猥稱他仁、御不可令兼二歟、是五　爰爲世不出、爲民不生之由、有御返答者、所立支證也、方今禪閤、都鄙之間令行大事、貴賤之中不可少諍、兼德仁、豈非爲民之生、蓋尊利國之道、是六　菩薩之行、捨頭目以施巨益、仁君之功、忘寢食以行善政、何況每月御評定間、五ヶ日御寄合、三ヶ日奏事、六箇日許不闕有御勸仕之條、強無窮屈之儀歟、是七　抑君者至賢也、僕者劣士也、不恐違御意之後勘、無顧立微質之先途、下愚之士、爲人歷獻捨身命之讜言、上聖之君、爲世何懈竭筋力之善行、是八　就中先祖右京兆員外大尹〇北條義時

者、武內大神再誕、前武州禪門〇北條泰時者、救世觀音轉身、最明寺禪閤〇北條時賴者、地藏薩埵應現云々、倩思、貴下在生之作法、同爲振上大聖之塵化歟、大悲代苦之誓不飯、萬歲聞政之心莫懈、是九加之□□□□臣下功利相積之人者、子孫長久之儀也、於積善之家有餘慶之理、天經之文、人倫之鑒也、尤奉爲子葉孫枝之繁華、可積種德樹功之餘薰矣、是十

一早相止連日酒宴、可被催暇景歡遊事〇中略

一可被省略禪侶屈請事〇中略

一固可被止過差事〇中略

一可被造營勝長壽院事〇中略

以前五ヶ條、言上如件、抑政連、更無加松容之仁、又雖非材力之身、擬抽忠正、頻進抽言、今度預不次之賞、向後開至諫之道、木從繩則正、后從諫則聖、早以此趣可令洩〇洩上恐脫無字達給、政連誠惶誠恐謹言、

八月日〇德治三年　　　　出雲介父云々　筑前權守政連上

進上　長崎左衞門殿

〔續視聽草三集一〕成島司直上書

老のくりこと

堯舜など、申大聖至聖の上にても、敢諫の鼓を設置て、下々の言葉求られ候、後の世にも、漢の文帝、唐の大宗など、申、名高き大賢英主たちは、皆下々の申言葉をよく聞れてこそ、今の世迄美名芳績を顯さるか、乍恐當御代〇德川家慶の御仁心厚くおはしまし候事は士農町人、其外陪臣共、皆々御噂申上候、こゝは聖人の威格と申所にて、自然と御德義の下に通り候、神明不思議の場にて候、是全く御美質の處は申上候迄もなく、數十年來聖人の道を御耳に留られ、御心に御熟し遊し候

御光り、外へあらはれ候義と雖、有存上候、然るに昔禁中にても、白河院、鳥羽院など、専ら仙洞にて御政事の御せわましまし、武家にても足利義滿義政など、隱居して後専ら政務を差圖致され候故、其間は下々も皆隱居の政事とのみ心得候所、その隱居終られて後、その家の威光俄に衰へ候事もまゝ御座候、是は當主其時の心得宜しからぬ故にて候、權現様〇徳川家康台德院様〇徳川秀忠いづれも御隱居後、萬事の御世話遊ばされ候、是は御當主様御孝心の厚く候故、万事御差圖を受させられ候事にて候、當御代も亦此御摸様に候へども、天下の人今日迄も萬事西丸より出候御政事とのみ存候處、當上の御仁惠の威格の德にて、いつとなく下々恐察し、あわれ當上の御自身の御政務とならば、いかばかり有がたからんと、大旱に雨を待心にて、さゝやき居申候、左候へば唯今よりの御政事を、天下萬人目を付て罷在候所ゆへ、こゝの御手始には、是非一應の御仁政を施され候こ、困窮難義の事を御救ひ遊ばされずしては、かなはぬ御場合に御座候、その御仁政の遊しかたは、年寄共初、夫々其筋の役人へ仰付られ候て、何程も是有べく候、宮室を卑して、力を溝洫に盡すは、仁政の第一に候、然るに當御代には、前々より御一身の御榮耀を少しも御好なく、只々御慈悲を第一と遊し候へば、はや自然と聖人の大德御身に備り給ひ、此上もなき御事を、天下一統ありがたがり罷在候、然しながら餘り細に御世話御座候へば、差支多く相成、萬事滯りて、政務の害に罷成候、古人も、天下を治始るは、小鮮を烹る如しとたとへ申候、小魚を鍋に入置て、その烹加減を試致し度存、度々鍋の內へ箸を入動かし候得ば、その魚皆潰れ申、天下は廣きものに候得ば、自身壹人にて、瑣細の事迄行屆世話をせんとすれば、心計り疲勞し、果には精神盡て大病を引起候、其節は先祖兩親へ不孝に相成、天下もその苛政にくるしみ、衰頽をいたし候、秦の始皇、隋の文帝抔、皆その身の才智に任せ、大臣等を疑ひて、瑣細の小事迄も自身骨を折て、終に病を起し、子孫また衰へ申候、天下の君は、寛仁大度を體に備へ、英明獨斷の用ならでは、一日も安く經べからず

候、寛仁とは廣く慈悲を施し、大度とは、小事にかゝはらず、それ〳〵役人に申付、手をおろさず、英明とは、臣下の善惡を見分る事に候、獨斷とは、決斷の場に至て、衆人の詞に不迷、定め申候事に御座候、此四德備らざれば、慈悲も仁政も姑息と申ものに成て、婦女の小兒を哀憐する如く相成候て、廣く及び不申候、又晉の代には、兄弟多く、大國の大名に取立置申候、此大名にも、いづれも我等は先帝の御子なりと申て、我意我儘を振舞、銘々權威をあらそひ、終に晉の世は兄弟の爲に亂申候、是全天子の權威うすく相成故の事にて候、台德院樣には、能此所を御心得遊し、越前越後兩家をはじめ、恩を以て御なつけ、威を以て御伏し遊し候、一門は他家の手本にて、一門亂れては法令も立不申候、又三年の間、父の道を改めずと申は、衆人の難儀にも、天下の害にもならざる事は、成べき程は、父の致置たるは、先其儘差置宜と申事にて、天下衆人の害に成事は、即日にも改め候が孝道にて御座候、文昭院樣には能此所を御心得在らせられ候ゆへ、常憲院樣〇德川綱吉御棺前におゐて、御自身御斷被仰上、殺生禁制御免し、并十文錢通用停止仰出され候、誠にケ程なる處が、英明獨斷に御座候、兎角上の權下々江移は、下の威權強く相成候へば、壅蔽と申て、下々の事、中途に留りて上へ通せず、權臣權を專らに仕候ば、上の思召下へ屆かず、天下逆亂の基に御座候得ば、權は下へ移らざる樣に、政事を執行ひ申べき事に御座候、畢竟ケ程の事、上には能元來御心得の事には候へども、此節分て御大切の御時節と存候へば、恐れもかへりみず、御かたはらまでもふし上候、老のくりことに御座候、あなかしこ、

天保十二年春、大御所〇德川家齊かくれさせ給ひし比、圖書頭司直朝臣の、將軍家〇德川家慶へ密に奉られし上書なりとて、ある人の書寫せしを見るに、こは外へもれいづべきものにもあらねば、いとゐぶかしく思ひ侍りしが、一日かの朝臣に直に眞僞をとふ人ありしに、淺ましくもいかにして世に洩ぬるにや、まがふ事もなき予が奉りしものなりとて、傳寫の誤りをみづから筆

とりて亂しあたへ給ひしを、さらにこひかゝりて再びくり返しうち見るに、努々人に見すべきものにあらで、いかにせんすべは知らねど、しきりに感涙のすゝむまゝに、硯にむかひて薄葉のにじむも覺えず、夜ふかき閑窻のもとにうつし終れるも、唯かくし置てしみのすみかになし果るは、また本意なきわざならんか、

三間矩愛誌

〔幕末事情雜纂 入〕中納言齊昭卿上書七ヶ條

あしびきの大和だましゐあらむものは、朝となく夕となく、津の國の難波おもはず、世のため國の爲、よしあしを沙汰する道に、人をも用ひ身をもつとむべくなむ、そも〱このふみ、はじめは吾嬬の左のおほいまうち君にさゝげんとて書つれど、世をのがれたる身には、今更に役なしとおもひなされ、はた祖宗の尊き御敎訓の筋を述んも、時にあはざらんには、なか〱にかしこきわざと、ふつとおもひとゞまりぬ、されど是を丙丁童子にあたへむも本意なければ、いさゝかことばのてにはをかへて、子孫に傳へしめすになん、

源朝臣齊昭

目錄

一仁心を本とすべき事

一奢侈を禁すべき事

一諫言を用ゆべき事

一刑は刑なきに期すべき事

一治に亂を忘るべからざる事

一佛法を信ずべからざる事

上書論時政

一爽秋に近くべからざる事〇本文略

右從三位前中納言齊昭卿御抄、弘化乙巳〇二年八月廿日、伊勢守阿部正弘朝臣を以て大樹〇德川家慶へたてまつられ、及び和泉守松平乘全朝臣よりも西城の君へまいらせらる、何れも御感悅のよし、閣老おの〳〵より申こしぬ、

〔折たく柴の記 中〕これよりさき二月〇寶永六年二日に、大赦の事につきて封事を奉たりき、其大要は、古にいふところの赦は、其犯す所の罪、或は過誤に出、或は不幸に出し所を赦し、後世の事のごとくに、已發覺、未發覺、已結正、未結正、罪大小となく、こと〴〵くこれを赦除するにはあらず、近例を見るに、大法會行はるゝ事ある時に、犯云ゝものゝ親戚等歎申す所を、その道場において帳に云るして奉る、これを赦帳といふ、其帳をもて奉行所に下され、赦すべく赦すべからざるかを議せしめられ、赦すべきものどもをば、法會の場にめし集て其事を行はる、されはたとひ赦に遇ひて赦すべきものといへども、其親戚の歎申すべきものあらざるは、死に至るまで恩に潤ふ事あたはず、それもなほ奉行所において其罪を決せしものども也、其餘天下の諸大名御旗本の家々において沙汰せし所のものは、此事にあづからず、しかるを稱して大赦行はるゝ抔申すは、たゞ故事によりて其例を擧られしのみにて、實に其恩ひろく天下に霑るゝにはあらず、これまたいかむぞ古にいはゆる欽恤の意たるべき、某〇新井君美近く前代〇德川綱吉の時の事を觀しに、法を奉ずる人々務めて苛察を以て相尙び、一禽一獸の事の爲に、身極刑に陷り、族門誅に及び、その餘流竄放逐、人々生を安くせず、其父母兄弟妻子流離散亡、凡幾千万人といふ事をしらず、今にをよびて天下に大赦せらるゝにあらずんば、なにをもてか万姓來蘇の望をば慰せらるべき、また倭漢の故事を按ずるに、赦は必らず國家變革と嘉慶の事あるに遇ふ時に行はる、近代のごとくに、凶爽等の事のために行はれし所にあらず、今の例のごとくならむには、凡天下の罪あるもの、ひそかに

望むに、國家凶喪の御事を以てせむ歟、古の諺に一祝万祖に勝へずといふ事あり、もつともこれしかるべからず、しかりといへども、此例また遽に變ずべからず、さらばまづ御中陰の御法事にをいて、例によりて常赦を行はれ、將軍宣下の儀行はれし時に當りて、天下に大赦せられ、舊弊改るべき術をなさるべき歟、管仲のいひし、赦者小利而大害也、孔明のいひし、治世以大德、而不以小惠、某此等のことを聞ざるにはあらず、荀悅またいひし事あり、赦者權時之宜、非常典也、天下紛然、百姓無邪、如此之比、宜爲赦矣、某が議申すところ、實にこれに取れりと申たりき、聞き四日にまた封事奉りて、大赦の事を議す、これ審かに問はせ給ひし御事あるが故なり、

〔今昔珍說落穗集〕享保六丑年中、浪人山下廣內上書之寫、(本ノマヽ、誤書錯落文等多ク、不分明ノ場所多シ、)

乍恐奉言上候事

恭曰、天下之武將と備らせ給ふ御大將は、古より悉く奉撰將器、別段之明術を以、名將愚將の境、明ニ記錄して、武門の家々に留め、末世の鏡となし、尤異國(江戶)事に觸ては渡り候なれば、御身持御政道御恥ヶ敷御事候、然に權現樣以來、珍敷も當將軍樣(〇德川吉宗)自然と御名將ニ御機備らせられ、先以天下の萬民、欽之色をなす、此時ニ御座候、依之乍恐一書を奉獻上、猶以當時世上之風聞を詳に奉書上、御心得の端にも罷成候得者、少しの義にて一天下之審になる御事ニ御座候、尤隱し御目付等數多御出し被遊、世上之風聞上聞に達候と、是又風聞仕候得共、有之儘に不被申上候歟、又者面々身を大切にかため候心故に、細なる事は御目付來も不被存候と相見へ候、恐多申上事ニ御座候得共、下拙申上候趣、一度御耳だに奉達候得者、天然自然之道理を以、天下國家之御爲とは、其儘罷成候事、具ニ御威味可被遊候、

諸人奉譽候品々

一紀州より御供之面々へ、過分之御加增不被下候事、

一法外之御物入御停止并御役人私欲不成事、

一猥りに人を御殺し不被遊事

一賄賂けいはく御嫌ひの事

一下々奉公人請人繼判御停止の事

一諸國水損にて田畑永荒之場、國主地頭之力ニ難及普請之場有之、訴出候得者、上よりも御力を御添可被遊趣之事、

一御目見以下之御家人與力迄、金銀を以家督明渡し、入代り難成事、

一今度新規ニ御定被遊候御高札之事

一近代打絶候日本之武機御目付被遊候事

右之趣、當御代之珍寶と奉稱候、扨此上にも御爲と成候筋可申上と、無我之御思召、万民世々ニ難有御事ニ御座候、御爲と申は、天下國家之爲を御爲とは可申候、當時通言に御爲と申は、金銀の御德用と成候ヲ、御爲と存込罷有候者多御座候、至而下賤之口號ニ而、大夫以上之御耳ニも不入事ニ御座候、下揣言上之御爲と申上候は、畢而金銀之御爲にあらず候、天下國家万民之御爲、萬民不易之御寶を奉獻候間、彼金銀之御爲と御くらべ、御感味被遊候而已他事無御座候、

一右體之御器量に渡らせられ候得共、乍恐武門大道之御守行、未だ得與御熟得不被遊候歟、御政道思召儘ニ行届候、是而已ニ御苦勞被遊候、御工夫御思案止時なし、是全天下を掌に治給ふニあらず、先初に御心を案じ、能々御心之治たる後ならでは、天下は全く治らざる物と承申候、當時泰平の御代ニ御座候得者、事不動せば能治りたる御代と可被思召候得共、四海泰平と申は、天下之萬民内外能服し奉たるを、全御代之治たると申候、上部は御威勢に恐れ服し顏にもてなし、心底には不奉服、縦ば竹を撓て我に隨ふといへ共、撓の戻候時は元一倍なるが如く、何之

用ニ立物ニ無御座候、

一虚智思辨ヲ以、御治可被遊と被爲量候者、御守行御不足成證據ニ而御座候、人才之知惠を離れ、生得照命の儘ニ而、全く天下國家治り、万民毛毹を脫て服し奉るの法、其道理御座候、則武門之大道と申は、與にあら〳〵申上候、此義者不及申上、被爲在御存知候御事ニ御座候得共、御守行之厚薄、今又其流善惡御座候得者、乍恐盲蛇ニ不恐の行、唯天下國家之御爲、萬民を安からしめんとの大願方寸之中ニ滿、いやしき文辭を奉捧公聞候は、其罪不少奉存候得共、万士万民之爲奉言上候き、良藥口ニ苦き習に御座候得ども、彌恐を不顧申上候、依而唯今迄御政道之衆許を可申上候、總而虛知思辨方便計り事を以而せる事ニ者、是非之差別御座候、御登人之非は天下の困、天下の困は日本之歎、日本之歎は大內への御不恐、大切至極之御事ニ御座候、

衆人奉評品

一金銀出入之者共、公事御取上無御座候を、天下の德政と被仰出と心得、一切借り方之者共、大名小名下々ニ至迄、返辨不仕候付、追而德政にては無之と被仰分候樣に可被遊事、

一天下之御觸事ニ、間違之義少も御座候はゞ、御役人德なきと可申乎、おのづから上之御歎となり候事、○中略

一右之被仰分にても、金銀之公事御取上無御座上者、曾而返辨金は不仕候、依之新キ貸り金仕候者無御座候、日本之寶すくみと成、困窮之種と罷成候、○中略扨一旦借シ人共德を失ふといへ共、法の爲に亦貸手のなきに困窮し、或は國主郡主も惡事の報は頭をめぐらさゞる習に御座候得者、國の風雨旱損之難義、年月を經ずして大損を仕候事、最早御心當りも可有御座候、結句天下德政之被仰出も御座候て、跡は金銀之通用自由なる物に候、又重而も德政と申迄者、大分之年數ニ御座候事故、德政の道は心安キものと承傳候、且今いつとなしに、金銀出入之公事御取

上納之と御極メ被成候者、日本困窮之元と成候、かゝる事をも委細に申上候御役人衆も無御座候、異ある人を御好不被遊と、世以愚察仕候處ニ御座候、當分金銀之御徳用付候事を申上るが御爲と存、亦は上にも夫を尤と思召候は、大き成御違ニ而御座候、將軍様之御始末被遊金銀御溜メ被遊候得者、一天之萬民皆々困窮仕候、○中略

一神佛をおろそかに被遊候様ニ申候、乍恐國家を御保被遊候道具一部ニ而御座候を、御心得不被遊と相見申候、士農工商の四民を以て國の機として、神佛儒醫の四道を以て國の慣として、天下は治るものにて御座候、其眞理が御守行の上にて明に知申事御座候、機慣全甲乙なく、機はざれば國病難治、片荷を以馬の如く、釣合ざるものにて御座候、○中略

一金銀箔類御停止之趣、乍恐御器量せまく、別而日本衰微之元ニ而御座候、如件義奉察入候ニ、世上奢候故困窮仕たると被爲思召、無益之子供手遊等之箔ヲ遣候義、金銀をついやし候と一途に御了簡被遊と奉存候、ケ様なる無益之品調申ものは、貧賤之ものニ而無御座候、何も大身歟、内福者之持遊物之御座候、溜りし金銀を出させ、小身なる細工人等之金銀をはぶき、費を以賣の通用と罷成候段者、水道をさらへる如く、全費の様ニ而會而費とは成不申候、取も遣も同じ日本の中を廻り候金銀ニ御座候得者、更ニ無益の者あらず候、箔ニなる金銀はおしき事の様ニ御座候得ども、天運は是に限らず、西へと入る日月とおもへば東に出る、人間も人の人をうみ晝夜をわかず流るゝ川水つくる事もなし、一秋の五穀は一年ニ喰仕廻候得ども、不足もなく餘りて捨る事もなし、金銀も土へ落捨れ共又土より出る、とかく世界は車の輪之如く、愛をとゞむれば出る方よわし、是天道の運御律義なる御粧ニ而御座候、然るに右之被仰出ニ而、諸職人諸商人何を仕り候ても賣れ不申、其日を過し兼申候、扨こそ内福者之金銀動不申、すくみ候故、自ら世上困窮仕候、着と申は

下を困メ、上たるもの、、遊逸遊興を悉く仕るを奢ものとは申候、金銀澤山に持たる者之、高直なる物を調申候を、奢とは不申候、貧なるもの、其日を暮し兼たる歎キ悲しみ莫大之事ニ而、有福なる者の手遊結構なるもの無御座とて、用事は曾而無御座候、然れば何成共珍敷事を仕出し、内福者之貯置候金銀出させ候が、通用自在之元ニ而候、○中略

一天下をしろしめす御大將者、御好嫌之知れざるを以て用とし、細なる事に御心を寄られぬを以て大とし、愛を以名將之御機と奉存候もの尤御座候○中略彼慮知思辨より出る方便を以不参候、假ば滿月の光のごとく、至極照かゞやき候も、日の光りには不及、しかも月には滿月闕あつて、一方よければ惡敷方御座候、此一條乍恐綻奥御感味可被遊候、○中略

右之品々御感味の上、御用捨之二ツ御決定可被遊事ニ御座候、誠哉天ニ無口人ヲ以云シムニナ御座候得者、諸人ノ口ハ天ノ口ト可被思召候、以上、

享保六丑年十一月　　山下廣内

〔物價論〕口上

山下幸内の上書かり出し候間、爲御心得入御覽候、右は有德院樣へ差上候由、實事の趣に御座候、さて時勢と申候はかはり候物にて、一際目附を被差止候類等、當時に符合の事も多く御座候、大に心得に相成候哉、金銀のすくみ不申樣にとの儀は、大道術にて面白き事に御座候、金銀かりかし出入不取上旨、御代々被仰出、三年程過にて、前之通御取上に相成候旨、御觸書に相見候へば、彌差支申候事哉と奉存候、右に付猶思召も候はゞ承知仕度奉存候、

寛政二年戊正月五日　　越中守○松平定信

伊豆守樣

和泉守樣

彈正大弼樣　伊豆守

御答

山下上書甚面白き御事に御座候、時勢出合候義不審成程に奉存候詠歌の趣あまり信向も無之物と奉存候へ共、上書の儀、其前後甚尤に存候、當時も心得に相成候事多く相見え申候、猶御考合も可有之、愚案も候はゞ追々可申上候、

正月五日〇中略　和泉守

御答

上書一覽、格別之卓識と存候、儒者にては有之間敷候へ共、何れ修行仕候者と相見え候、米穀を重んじ候義、專ら心を用ゐ候處など、卓量に御座候、明君家訓は水府黄門公の作とたしかに存罷在候ひき、此家訓は別書に候哉、不審に奉存候、猶考へ候義も有之候はゞ、可申上候也、〇中略

右上書、此節世間に流布は不仕候や、唯々御懷に仕置度事に奉存候、口佞の輩、又々此書に付て樣々の説をも可申、夫れも無構事に候へ共、御政事は下より不被測の處あるも、又可然事に御座候哉と奉存候、

正月六日　彈正大弼〇中略

御答

山下幸内上書一覽仕候、彼は越後流の軍學者と承り傳へ申候、文面所々越後流の唱へ相見え申候、金銀すくまざる樣に融通の義、尤の事に御座候、穀を重んじ金銀を次にいたし候意、是亦尤に奉存候、儒者にてはかし借の用に不立趣、尤の事に御座候へ共、是も治する方劑、急に功驗あらはれ候やうには、むつかしく可有之奉存候、〇中略

正月九日

口上

幸内の上書御廻し仕候趣意は、兼て最初より御政事伺候私見込は、彈正殿御書面の如く候處、幸内書面は、先表裏同樣の事故、別而私義見込違に候、時分宜候共夫だけの御損に成候事、只々恐入、御廻し仕候處、御論談の趣にては、私見込も符合仕、安心仕候に付、一體見込通りの處、左に逸々認め申候、

米穀金銀御たくはへは、是非相應には可有義に御貯へ有之候も、おのづから天下の金不殘流れの基に相成申候、享保の度、米穀御蓄へ有之故、西國虫付の節、西國を御救せ有之、人命を被為救、西國大名屈服仕候、幸内の見込の如くに候はゞ、其節御手もつかせられ候事と奉存候、聚斂いたし吝嗇こそいかゞに候へ共、御入用を節せられ、御出入を平らかに被為成、御遣ひ拂の餘、いづれ不時凶年に備へさせられ候程に無之ては不相濟義、論に及ばず被存候、

金はくり廻し宜敷候へば、おのづから御道理合よき御政事も出來いたし候、御約倩をも不被為遂候間、天下の金銀上のものと相成候譯に有之候事、

金氣上に歸し又生じ候義、彈正殿御答の如く、日本の地下はかりめぐり居候義には無之、其證據には、異朝にも、漢の世金銀多く出、其後は彼地にても代々金銀出る事不多候由衍義補に有之樣に、覺え申候、萌蘖の口口材木にても、無制度伐出し候へば、蜀山兀として牛山濯々たりと申類に至り申候、奢侈を禁じ町方不繁昌と申義は、彈正殿御論に盡候へども猶々一體見込の事故相認め申候、士農工商の四つは、釣合よろしく致し候義、永久の基に候、當時は士農おとろへ、工商さかんに相成候、古しへより末を抑へ本をすゝむと申候は、古來治術の目當にて、奢侈の者を翫び候は、富家ばかりには無之すべて富家の者は、却て右樣の事は不致ものにて、世の中きそひて奢侈に至り候へば、借金致し候ても奢り候ものにて、金あり候が故に奢り、金なき

ものは倹素に致候と申義は、理窟ばかりにて、左様に参り候へば申分無之、治安も難かるまじくと奉存候、

伊豆殿御書取中に、三百匁百五十匁の事、地合疎薄ゆゑ、今のかた華美にあたり候との説有之由、是は不辨人と奉存候、享保の頃の紗綾縮緬の地は能く候ても、直段は今の方一倍も高く御座候、織手間、幷に絲、又は筆紙墨も、享保の頃よりは高く候へば、同様の事に御座候、唯綸子三百匁、ふくさもの百五十匁は、あきなふものも實は其心得の樣にて、享保の頃もその口口出候事に御座候、彌下にてわきまへかね候はゞ、呉服師共へは、町奉行より猶心得たがひ無之樣にと、申聞せ候ても可然哉と奉存候、

幸内至ておもしろき人物と奉存候、第一直言諱憚る所なきは珍らしき人物、末の歌も言外無名のところをよみ候ものにて、禪家の歌に近く、一書の論も至理至誠にもとづき、可感義に御座候、右體理窟口ごはに申し、直辭不憚ものは、三奉行其外大目付か目付などには、多く有之樣にいたし度義に御座候、書餘の義は、いづれも尤の難心得になり候事ども多く御座候、長文御面倒、御消閑の爲め入御覽候、

正月十六日　越中守

〔有德院殿御實紀附錄三〕享保七年十一月、伊奈半左衛門忠逵が隷する、角田川小梅村の農民庄藏といへるもの、匭函に三冊の書を投じて、民間の利病、代官の得失を獻言したり、次の日御覽ありし後、勘定奉行等をみな御前に召て、庄藏が獻言せしあらましをかたらせ玉ひ、さて仰有しは、去年よりこのかた評定所にこの匭を出し置てみれば、くさ〴〵の事を申出る者あり、政の可否、各の言行をも議する事少からず、ゑかし賤しきものどもが申事を取あげて、汝等を疑ふにあらず、取捨はわが胸中にあれば、かならず憚ることなく萬づ公平に沙汰すべし、近頃節倹を專ら令す

るといへどもこれも急にすれば下にくるしむもの多からむ、とにかく末〻く行はるゝやうにはからふべきなりとて、農商のたぐひの匭函に投じたる訟状ども、あまたとり出て見せさせ玉ひしかば、いづれもおほやけなる盛慮を感服してまかでしとなり、さて半左衛門を召て、汝が支配所の民、こたび匭函に投じて献言せし事あり、其書の尾に、三日の間は府内にあるよしあれば、いまだ家にはかへらじ、速に汝がもとによびて、よくも神妙に聞えあげたるよし褒詞を加ふべし、あなかしこ、あら〳〵しくないひそとのたまひしとなん、この庄屋つねに神祇のことをまなびいと篤實のものなりき、同じき十二月にも、關東の農民某、民政の得失を漢文につゞりて奉りしものあり、勘定吟味役辻六郎左衛門守參、少しき文才あるものにて、御前にてこれをよみ、奉行等にも講じて聞せしに、其時も下賤の者共の申す事なれば、可否はまひて論ずるに及ばず、上の政をとやかくと批判する中には、大に心得となる事も有ものなり、この後もかくはゞからずいはしむるやうにこそあらまほしけれと宣ひしかば、いづれも感涙を流しけり、

〔見聞雜錄　一〕平治仁政記

遠き慮なき時は是近き憂あり、奉恐入候得共、万民之歎きは天下之御爲に罷成不申候ニ付、心附候趣書面に相認、天下之御老中江奉言上候、賤きもの丶天下之御爲奉存候義、恐多儀に候得共、世上困窮仕、我々式の者、今日露命つなぎ兼申候、依之世の困窮之儀奉訴候者、御仁政にて困窮も豈に成可申と奉存候ニ付、委細書面に相認差上申候、乍恐天下之於御裁許所御披見被下置候者、難有仕合奉存候、

一天下之御定法にて、拾七歲以下ニ而逝去之處、跡式御立不被遊候、乍恐是者三ヶ年過候はゞ、跡式御立被遊、半知者本知に御返し被下候者結構に奉存候、其故者親類者心に御恨を存、家中之面々は大勢浪人及難儀、右體之諸浪人世上徘徊流浪及困窮候、自然と世上に惡業之類も出來

可仕候、天下を可奉御恨哉と奉存候、是又幼少之諸大名は類み少く可奉存候、依之三ヶ年過、跡式御立被遊候者、御代々天下之御定法相立、當時天下之仁政も相立、天下之御厚恩之程を可奉仰候、天下之御姫樣方御縁組被仰出候節、諸大名江御道具獻上被仰出候、乍恐此儀者大名心付次第に被遊候はゞ結構に奉存候、文王者聖人之德を以、普請自然と出來仕候、當時天下之御仁德を以、被差上候者御受納可被遊候御儀奉存候、如斯諸大名之物入を御用捨被遊候はゞ、御仁政と奉存候、

一諸大名江不時之大役等被仰付候、其領分之町人、幷百姓江金銀を被申付及難義可申候、依之壹万石高に金五百兩程之御積を以、御用被仰付候はゞ、傷にも成り不申候、御仁政に罷成、天下之御用相勤不首尾成も有之御事に御座候、ヶ樣之義は御手傳之結構出來仕に御めんじ被遊、家來等之無念、又者不調法之義は、其分に御咎不被遊候而、厚御褒美之上意被成下候者、御仁政に御座候、總而頭支配之御役人自分壹人之勤功を存、組下支配之難義をいとはず、公儀御用を相働輩は、當時御家風に入可申候得共、天下之御爲に成不申候、依之頭支配者仁心有之を御見立被仰付候はゞ、御仁政に御座候、是者當時諸大名方困窮に御座候而、不時之大役被仰付候得者、領分之町人、百姓をしぼり不申候而者、右御用相勤不申候、其外出入町人等に拂不致、天下之町人をたほし、諸大名之困窮ニ而、世上を衰微に爲及申候、如斯ニ而國々在々までも困窮仕、百姓之衰へ候者、本之枯ると申ものにて御座候、國々本かれ候はゞ、天下之御爲に成不申候、御政道に相こもり、是を以諸大名之御役等御勘辨有之、御仁政御施御座候はゞ、結構成御政道と可奉仰候、御權威にかなひなびき候より、御仁心になびき候者、天下之御爲に相成候、

一當時天下に專御儉約御用被遊候、依之世上困窮、天下之御儉約之義者無御座候御事に乍恐奉存候、儉約者限り有知行故、又者貧家ニ而用候物に奉存候、尤有德院樣〇德川吉宗御代御用ひ被遊

候得共、是者天下に不足被遊御座候哉、諸大名に百分一米被仰付、そのうへ御法事等に至迄、五千部に被仰付、如此被遊候ニ付、不足計に相成可申哉與奉存候、

御先代より三ヶ年過候而、御倹約を御用捨被遊、無勿體儀に御座候得共、以後者御法事等万部に被仰付候者、結構成御義奉存候、是者御先祖様天下泰平之御治世、四海静謐ニ而、代々太平之御治世故、万民も安穏に罷成候者難有事奉存候、依之万部御執行被遊候者、天下之御孝心にて、万々年天下御治世之御政と乍恐奉存候、當時天下之御威光十分ニ而、御權威には万民之恨多きものニ而御座候間、乍恐諸事御用心、御政道可有御座義奉存候、如斯恐多き御義、賤きもの之言上仕候義は無御座候得共、書物之儀御座候間、御赦免可被下置候、

一江戸近在以之外困窮仕、一同之難儀之內、御拳場村々は別而難義仕候、其故者先以地面御縄詰り御年貢等之儀者、遠國よりも高免に相聞申候、御鷹御用之人夫夥敷相懸り、尤骨折申候御用には米五合を被下置候得共、其壹人之難儀者、三升程之困窮に相成候、置籾等も百姓困窮に御座候、如此之義、是又麥作雁に給られ、年々夫食等不足仕候、ケ様之筋ニ而困窮取續難く御座候故、御年貢等取立に、名主年寄骨を折候へ共、難取立様に相成候、置籾被仰付、御米下直ニ付、御米圍被遊候思召と乍恐奉存候、右之通被仰付、米高直にも成可申候、總而商賣相場之義、高下は御座候、高直ニ而悦輩も有之、難義成も可有御座候、一同ニ悦候之様には成申間敷候哉、是を御裁許被遊候へば、壹人は悦び壹人は恨る輩も出來可仕候、又其分に被差置候へば、天地自然之道理ニ而御座候間、天下を君子之あやまちに成不申候、たとへ米下直に御座候得ば、諸大名以下末々迄も、御奉公之筋御用捨御座候はゞ、武士も困窮之後仕能御座候、乍恐御仁政を御施被遊候は、堯舜之御代と可奉仰候、乍恐

天が下幾代々君の惠みにて民はゆたかに煙立けり

右之趣、乍恐奉御訴候、以上、

寶暦四甲戌年七月下旬

武州豐島郡代々木村
水呑百姓　文八郎

〔植崎氏上書〕

高四拾俵二人扶持小普請組永井監物支配

植崎九八郎

乍恐奉申上候、東照宮様御威徳を以、二百年來之御治世、和漢古今未曾ニて有之、御静謐申も中々愚成御儀に御座候、然る處近來田沼主殿頭權柄を振ひ、仁道を妨、公事を忘れ、自分之私曲ニまかせ執行候ニ付、國司、城主、外様、御普代、諸大名、其外御旗本、御家人、都而士農工商之輩に至るまで、心中に歸服不仕候得共、時の勢に依て、是非なく面々媚び諂ひ、自分金銀賄賂輕薄の世に成行、實徳なしと云へども、當時の阿諛の意にさとき者は昇進仕せ、實徳有之候而も、あとふの意におろか成る者は、無益の者と用られず、賞罰不正、諸事穩便を宗とす、頻に似候得共、御政道之筋難立、都而恨を含候者多く出來候様ニ相成候、有徳院様〇徳川吉宗御定被為置候御倹約は物の費を省き、至極結構成儀は、申も奉恐入候、是又程を過省略に相成、なくて不成事を省き、唯省も御入用金出不申を第一のつとめと仕候得ば、諸役人各々互に相爭ひ、御益と號して聚斂を以、御爲の御奉公と存、又さまで不存者も、己が立身の爲、末々の痛をも存ながら、其場にての省略取立嚴敷仕、其手柄に依て轉役いたし、御役は誠に己が立身の蹈臺と心得、御忠節之本意は無覺束事御座候、是畢竟人柄を用にも、唯依怙贔屓金銀賄賂、又は知行高に拘り、譬器量之者にても、御足高多き者は用ひず、器量なく共、御切米御足高ニ不得者は用られ、或は在番等は、持高多ニ依て省き、兎角米金の算用ニつゐて、人をも遣ひ候得者、御用立候者も不用ニ相成、一同難有存候儀薄く成候より自分御忠節の御奉公少く、偏に運上上納を事とし、民の歎き大方ならず候得者、其中ニて輕薄者は其列に隨ひ、餘人を苦るしめ、己が利欲の爲、御益と願出れば不叶と云事なく、餘人の苦は十分恨歎ヶ共、

時の勢ひ是非なく、信ニ其儘に随ひ、彌道理は絶はて、天人一致と承候得者、左せんと陰陽不調、凶作打續、或は山崩川溢、大水抔にて國用不足に成行、毎に上下の奢は日々月々に増り、人々本を捨末に至り、武士は町人に似せ、町人は武士に似、百姓耕作を嫌ひ、田舍を厭ひ都に出る者多く、いつとなく田畠荒損し、天下に食者多く、耕作之者少成行候上は、水理ニ逆ひ、難成就新田新地ニ人力を費し、古田の障礙敷、御益と心得候事は、却而天下の損毛と成候事、大小難勝計候、當年飢饉に米穀高直、壹升三百文に至り、其外諸色同樣、相應之直段無之、萬民之困窮甚敷、道路ニ餓死人相食、騷動ニ及専慮を被爲凝候折柄、恐ながら卑賤の愚意をも不顧、左ニ奉申上候事、○中略

右之趣、寛善の御尊德にすがり、愚意之一慮申上候儀恐多、且私儀四月下旬、養母方叔父能勢兵五左衛門儀ニ付、差樣之程奉伺候處、御番遠慮格被仰付候内に御座候得者、別而奉恐入候得共、差當存念早速不申上候得者、却而不忠に可有御座候、不顧身命奉申上候、下賤微細之儀は、御尋被下置ば、愚意之趣委細可申上候、支配々差上可申儀ニも可有御座候得共、白地に申上筋には無之儀と奉存候間、内々書付ヲ以申上候、身不肖之者、相應之御咎謹而奉待尊命候、以上、

　天明七丁未年七月　　植崎九八郎

〔栗山上封〕一御代々御當家の天下を御治被遊候ニ者、御文德より者御武威をおもしと被遊候事ニ御座候處、近來下之者、御武威を恐れ奉り候事は、昔より日増に甚しく罷成申候へ共、上之御威光の正味は、乍恐日々虚に相成申樣奉存候、○中略

一大名貧乏仕候事は、有德院樣○德川吉宗別して御苦勞ニ被爲遊候而、鎌倉時代の如く、五年に一度も、五十日計の江戸逗留ニて、參勤仕候樣ニ可被仰付哉抔と、室新助へも御尋被遊候事も相見申候、五年に一度ヅヽ參勤の事は、熊澤次郎八と申者、大學或問と申書に記御座候、是は當分大名の身體の爲ニは相成可申候へ共、誠に新助申上候通り、始終天下の御爲に不宜筋も御座候樣奉存候、○中略

一御治世久敷續申候へば、天下一同安樂の餘り、人々惰弱ニ相成、唯珍味を給、美服を著用仕、隙にて寐居度との工夫を仕候間、次第に奢り長じ申候で、分限不相應に上の眞似を仕候間、昔は小給の者も、相應に潤澤に暮し候處、近來は高知の者の身上、不足仕候樣に成行申候。○中略婚禮、嫁取、法事、弔ひ、音信、贈答、振廻、饗應迄も、それ〳〵の身體に而相調候樣に、急度格式を御立被遊候はゞ、人々是より上は相成不申ものと相心得、夫々の分限相應にて、上の眞似を仕不申、自然と奢りも相止可申と奉存候。○中略

一米直段下直ニ御座候事は、武家の困窮のみに無御座、是又天下一統の困窮にて御座候、元は米直段下直に御座候へ者、諸色も下直ニ相成可申筈に御座候處、諸式の直段、前に少しも違ひ不申候。○中略

一大名國替と申ものは、手柄功業を相立候而、大國を被下候とか、又は重き御咎御座候而、知行高御削被成、惡地へ被遣候とか、又姫路小田原等の御番所御場所柄の所は、幼少ニては持れ不申とか、其品ニ寄可被仰付筈ニ奉存候處、近來御役義相勤、御首尾宜しく候へば、宜しき國を被下置、御役上り候とひとしく、又直に外へ國替被仰付、よしもなきに五年十年の內に、彼方此方へ國替被仰付候故、大名殊の外難義仕候。○中略

一大名江戶地廻り供の者大勢召連候事、戰國の餘風にて、御膝元を步き候にも、すはと申さば直に備も相立、一軍可仕と申樣なる風義に御座候、太平の御時節ニは無益の者にて、勿論是には少く譯も有之事に候へ共、先は供に召連候家來は、乘類腰の物等見苦敷無之樣に爲仕候程の手當も遣し申候間、是に付餘程失却御座候、是は減少被仰付候て、殊の外大名勝手ニ相成可申と奉存候。○中略

一御旗本遊興ニ耽り、風義不埒に有之と申候も、畢竟隙ニて御座候故なり、是を文武の二ッを以

て、御引立被遊、際に無之様御政道被仰出候はゞ、自然と風義も直り可申と奉存候、○中略

一御當代に御記録所と申もの無之故、一ッの御損に御座候、先第一御政務の古格と申もの知れ兼申候、第一には御役人中名譽を勵し不申、○下略

〔折たく柴の記〕中二月○寶永六年三日、召しにしたがひて參れり、詮房朝臣して仰下されしは、○中略前代○徳川綱吉に國家の財用、加賀守忠朝○大久保つかさどりし由なれども、眞實は近江守重秀○荻原一人に任せられしかば、重秀、美濃守吉保、對馬守重富○稻垣等と相はからひし所なり、されば加賀守も其詳なる事をばしらず、ましで其餘の者どもの相あづかれる所にはあらず、今重秀が議り申す所は、御料すべて四百万石歳々に納らるゝ、所の金は凡七十六七万兩餘、○此内長崎の運上といふもの六四万兩、酒運上といふもの六千兩、これら近江守行ひしところなり、中略此内夏冬御給金の料三十万兩餘を除く外、餘る所は四十六七万兩餘なり、しかるに去歳の國用凡金百四十万兩に及べり、此外に內裏を造りまゐらせらるゝ、所の料、凡金七八十万兩を用ひらるべし、されば今國財の足らざる所凡百七八十万兩に餘れり、たとひ大奥の御事なしといふとも、今より後に用ひらるべき國財はあらず、いはんや當時御急務御中陰の御法事料、御靈屋作らるべき料、將軍宣下の儀行はるべき料、本城に御わたましの料、此外內裏造りまゐらせらるべき所の料猶あり、しかるに只今御藏にある所の金、わづかに三十七万兩にすぎず、此内二十四万兩は、去年の春、武相駿三州の灰砂を除くべき役を諸國に課せて、凡百石の地より金三兩を徵れしところ、凡四十万兩の內、十六万兩をもて其用に充られ、其餘分をば城北の御所造らるべき料に殘し置れし所也、これより外に、國用に充らるべきものはあらず、たとひ今これを以て、當時の用に充らるゝとも、十分が一にも足るべからずといふなり、加賀守をはじめて、皆々大きに驚きうれへて、かさねて近江守に議らしむるに、前代○徳川綱吉の御時、歳ごとに其出るところ入る所に倍增して、國財すでにつまづきしを以て、元祿八年の九月より、金銀の製を改

造らる、これより此かた、歳々に収められし所の公利、總計金凡五百万兩、これを以て常にその足らざる所を補ひしに、同じき十六年の冬、大地震によりて、傾き壞れし所々を修繕せらるゝに至て、彼歳々に収められし所の公利も忽につきぬ、そのゝち又國財たらざる事、もとのごとくなりぬれば、寶永三年七月、かさねて又銀貨を改造られしかど、なほ歳用にたらざれば、去年の春、對馬守重富がはからひにて、當十大錢を鑄出さるゝ事をも申行ひ給ひき、此大銭の事は、近江守もよからぬ事のよし申せしと〇中略此なり、今に至て此急を救はるべき事、金銀の制を改造らるゝの外、其他あるべからずと申す、〇中略四日には申すべしと仰下さる、〇中略四日には申すべしと思ひし事のありしに、又此事を承りしかば、夜一夜此事を議し申す事を玄るして、夜あけぬれば、封事二通を袖にし、詮房朝臣して奉れり、此事議し申せし所の大要は、敬事而信、節用而愛人、使民以時といふは、論語の一書、孔子政をする事を説き給ふ事を玄るされし第一義にして、大學の書には、生之者衆、食之者寡、爲之者疾、用之者舒、則財恒足矣とも見え侍り、すべてこれらの事ども、年比御講究の所なれば、今はた論ずるに及ばず、今より後、其道によられなむには、國財ゆたかにたらむこと、數年を出づべからず、されば金銀の制、かさねて改らるべきの議をしりぞけられし御事、實にこれ天下の幸甚とこそ申すべけれ、人々の議し申さるゝ所、御中陰の事より始て、御靈屋をつくらるべき事、また將軍宣下の御事等のごときは、たとひ國財つがざる所ありとも、これをとゞめらるべき所にあらず、たゞすみやかに前代の御座所をこぼたれて、新たに御所を作り出され、御移りあるべき由の一事に於ては、たとひ國財ゆたかにたれりといふとも、猶是親子の情にありて、忍びざる所あり、凡當時の大議は、皆これ大廣間御書院等において行はるゝ御事なれば、いかなる大儀といふとも、只今迄のごとくに、かしこにわたらせ給ひて、其禮を行はれ、國財もやゝつぐべき日に至て、御座所を改造られ、御移りあらむ事しかるべき御事也、又當時國財の急なる

事に至ても、近江守が申す所心得られず、其故は、彼申す所による時は、今歳の國用にあつべきもの、わづかに三十七万両のあるのみ也、これしかるにはあらず、彼申す所の去年用ひられし所の國財は、卽是去々年の課税なり、されば今年の國用となさるべき所は、たとひ彼申す所のごとくたりとも、去年納められし所の七十六七万両と、今ある所の金三十六七万両とをあはせて、總計一百十餘万両もあるべし、また當時の急に用ひらるべき物も、各色まづ其價を給らざれば、其事辨せずといふにもあらず、其事の緩急にしたがひ、一百十餘万両の金をわかちて、或は其全額をも給り、或は其半價をも給りて、來年に及びて其價をこと／＼く償はれんに、その事辨得ずといふ事なかるべし、また前代の御時に、國財つがざるために、いまだ其價を償ひ給ざる物共をば、これより後或は六七年、或は十數年の間を以て、その全價を償ひ給らむに、なに事か候べき、さらばこれらの事ども、御心を苦しめらるべき所にはあらず、むかし後漢の馮異、願くは國家無忘河北難と申せし事ありき、某また願ふ所は、今日の御事を忘れさせ給ふ時なくして、天下のために財用を惜ませ給はゞ、實に大に四海に責せさせ給ふ所なるべしと申たりき、此封事御覽の後、悦ばせ給ふ事大かたならず、同六日に參りしに、前代常の御座所、すみやかにこぼたれん事しかるべからず、また金銀の制改むべき由の事、かさねて議し申すべからざる由を仰下されたりしと承る、これ天下の大議をもて、某に下し問はれし御事の始なりけり、

〔有德院殿御實紀附錄三〕府内の處士二人投書し、上總下總の國にあらきばりすべき荒地ありと申せしものあり、代官池田喜八郎季隆、荻原源八郎乘秀に命せられて、これをたゞされしに、はたして東金のほとりのみにても五万石ほどの荒地ありければ、速に新墾を命せられしとぞ、

〔壓塚談下〕薩摩芋の事、日本には寶永元申年より、琉球芋薩摩ゟ種來る、長崎にて專ら種たるよしなり、靑木文藏名敦書、號昆陽、當時百五十俵、靑木岳太郎祖父か、曾祖父なるべし、蕃藷考といふ書を著し、享保二十年乙卯

二月十五日上書す、書中に薩摩よりも蕃藷種殖の法を上書せし事を載たり、最初唐土より琉球へ渡り來り、琉球より薩摩へ渡りて、三十四五年程に相成よしに見へたり、同年三月、文廟に植立候樣被仰付、○下略

〔濟田海困窮建白〕乍恐奉申上候、○中略

官庫既ニ充實ノ上ハ、別ニ與ベキノ御國益二ケ條御座候、此亦賤人ガ祖父以來ノ工夫ニテ、其一ハ下總ノ國葛飾郡堀江村ノ海岸ヨリ、上總ノ國天羽郡周准郡ノ海岸ニ至リ、二十餘里ノ干潟ヲ遠淺百町ヅヽヲ埋テ、開作場ト爲ストキハ、年々三四十萬石ノ米ト、二百萬石許ノ鹽ヲ生ズベク候、抑此內洋ノ潮水ハ、年々南ニ退クノ常勢アリテ、古來其ノ證明カナリ、賤人ガ祖父不味軒ガ、享保元年ノ測量ニ、當年ヨリ千四百年過ルトキハ、猿島ヨリ北ハ河水ノ流而已ニ可成ノ考ニ御座候故ニ、此開作ハ至テ出來易シテ、印旛沼ノ大關系モ御座候、開作圖ニ說タル如ク、先ヅ百町沖ニ表ヲ立テ、其ノ處ニ勢子石ヲ數多居置トキハ、沖ヨリ猛風ノ時、荒浪ニテ砂ヲ打寄セ、人力ヲ用ヒザル以前、兩三年ノ間ニ六七分通リハ埋ルベシ、又大石ヲ持運ニモ、樽ヲ浮カシニ用ヒ、風ニ引セテ運送スル事ニテ、甚ダ無造作ナル仕法ニ御座候、又埋土ハ、御府內外堀川川、新斗根、大川等ノ泥土、出洲、仲洲、其ノ外加奈川、羽根田、品川邊ノ海岸埋リタル土砂ヲ浚ヘ、土船ヲ風ニ引セテ運送スルモ、亦甚ダ便宜ナリ、平準館ヨリ年々三四萬金ヅヽ、御仕入被成候ハバ、十年程ノ間ニハ、大低成就スベシ、○中略

右條件ハ、私家祖父以來之宿志ニ候得共、可奉申上之時節無御座候ニ付、七十六歲ニ老朽仕候迄、徒ニ懷ニ致シ罷有候、然ルニ當上樣○家慶德川御英明之御仁政難有奉存、年來蓄念罷有候數十條ノ中ニテ、其大意書拔奉申上候、以上、

天保十三年九月十二日　佐藤信淵

〔環齋記聞〕小石川養生所一件之事

養生所の義、享保七寅年正月、麹町十二丁目三郎兵衛店町醫師小川笙船と申者、施藥院被仰付度もくろみ申上候ニ付、同二月廿日、有馬兵庫頭殿被仰聞候は、笙船存意之通にも難相成可有之候間、篤と致相談、仕形共追而可申上候與力を掛候而なりとも、勤方諸事書付差上候樣にとの御事ニ付、同廿一日、兩組與力被申渡、委細吟味の上相極候事、

小川笙船書上の寫

施藥院被仰付候はゞ難有仕合可奉存候、町々極貧之病氣を奉伺候に、不便千萬之仕合共御座候、武家方よりも奉公人大病ニ付、請人方江返し候處に、請人も親類にても無御座候者は、散々に看病仕候不道人も多く御座候、其外無緣の者、或は妻子等無御座候貧窮人の煩候には、見殺しに仕候事共おほく御座候、院料之儀は御當地町々の名主、御停止に被仰付候はゞ、名主料金を以て町より被召上、院料に被仰付候はゞ、御足金少々の儀にて相濟可申哉と奉存候、左候はゞ施藥院御普請料計之儀ニ而可相濟と奉存候、此儀も少々は御物入に足金愚意に存當り御座候、名主諸役之儀は、町々家持どもへ廻り名主と申事ニ被仰付候へば、御公用辨申儀、唯今まで之通相替儀御座ある間敷と奉察候、町人共は名主料を御公儀樣江差上候而も、其外の名主へ壹ヶ年中に遣し申金子多御座候を申が、德分ニ而御座候間、悅可申と奉存候、名主共の儀は御政道をたすけ候を、當時之名主共は欲心おごりのみにて、却て御政道之妨に相成候事共も仕出し申候、此義御尋に御座候はゞ、町御奉行所江口上にて可申上候、

此ヶ條之儀は、江戸中ニ施藥院壹ヶ所御建、便なき病人入置、御扶持人醫者衆之內、代て療治致し、看病人は老衰致し、便なき男女可有之候間、其者共を施藥院江入置申候はゞ可然旨申聞候、名主共の儀相尋候處、外に變り候處も無御座候、支配之者江名主料之外入目を掛候ニ付、町々

風紀意見

の物入多候の由、笙船申候、然者只今急に名主揚相止候ても難仕可有御座哉、家持共へ廻り名主可申付處も如何可有之哉ニ奉存候、笙船兎角名主相止可然旨申聞候、

寅正月廿一日

右は小川笙船書上之内を書抜出す也

施藥院出來之上は、參り候病人、町々に罷在候極貧にて藥も給兼候者、或は獨身ニて相煩、看病人も無之者計療治被仰付候、且又病人江夏帷子壹ッ、冬布子壹ッ、御仕着幷鼻紙被下、夜著蒲團蚊屋も相渡候、

此小川笙船、養生所發端願出たる御賞恩として、赤阪一木町ニ而、貳百九十七坪之屋敷被下置候處、住居なり兼候ゆへありてひたすら願上、下谷長者町にて濱立院上り屋敷被下置、勤仕するとなり、まことに御代御仁恩の廣大無極、鰥寡孤獨の窮民まで御恩澤に浴くせざる事なし、泰平萬萬世たるゆへんなり、

〔有德院殿御實紀附錄四〕非人乞丐の類、年を逐て制禁を犯し、良民にまぎれんとして、美服を著し綺羅をかざること限りなし、これあるまじき事とて、みな髻を切て束る事を得ず、良民にわかたしめらる、これは享保の初、盜賊追捕の事奉りし、先手頭山川安左衛門忠義の建白せし事とぞ聞えし、

〔親聽草四集二〕乍恐以書付奉申上候

一近年諸國一統困窮仕候ニ付、東國筋百姓町人ニ至迄、御救之由御慈悲御座候段、難有奉存候ニ付、乍恐愚意左ニ奉申上候、○中略

一江戸寺社門前、幷武家方拜領地ニ、賣女差置候儀多ク御座候ニ付、折々御吟味ニて、けいとう申儀ニ而賣女之分召捕、新吉原へ被下候て、地面御差上ゲニ相成候儀、難有御政道と乍恐奉存

候、然ば請負人右地面上納にて、順賣女差置、おもてはれ候體ニ相成候故、所々賣女多相成候ゆへ、町家之手代共も、主人江損毛かけ候儀數多ニて、町人も自然とおごり强相成、家業おこたり候樣ニ相成申候、近所ニ右體賣女御座候而者、衣裝等も花美を見習ひ、輕き者之女房娘までも、衣裳はでに成り、町中賣女之風ニ相成候故、次第に困窮仕候間、自然と賣女之利にも無理成事出來仕候、尤賣女も新吉原計ニ而不行屆候はゞ、今壹ヶ所片端にて賣女屋御免被下候て、町中に賣女屋無之樣ニ相成候て、町人身持も宜敷相成可申候、近所ゟ三丁出候と、はや賣女屋御座候樣ニも相成候故、子ども行儀仕付も風儀惡敷、唯おごりのみ長じ候樣ニ御座候間、寺社門前上ゲ地初メ、御上納地にても、賣女出し置候事きび敷御法度ニ相成、壹丁限り町人共へ吟味被仰付候はゞ、賣女差置候者も有之間敷ト奉存候、名主行司抔へ賣女屋相應之禮物を差出し候へば差置候ト申、世間之噂も御座候、ケ樣之儀嚴敷相止候て、右御免之場所計ニ候はゞ、人々家業怠り無之樣ニ相成可申候町家妻女下女ニ至迄、其行義亂候も、賣女多故と奉存候先年賣女屋少キ時節之樣相成候はゞ、自然と男女共ニ行義宜敷相成、下女半下ニ至までも主從之行義正敷、夫々之家業第一に相成可申奉存候、兎角物之亂は女色盛ニ相成候て、前段も申上候通り、陰氣盛ニ成候て、陽氣衰へ候て、陰陽和合片落ニ成候故、天地之氣候も不順ニ成候樣奉存候、ケ樣之儀、今度困窮御救之序ニ町御奉行所江も被仰渡候て、御改被下候はゞ、町人共廣大之難有事ニ奉存候。○中略

天明七未年六月十七日　　　　糀町十三丁目家主五兵衛店
　　　　　　　　　　　　　　　鍛冶屋甚兵衛

〔嘉永明治年間錄八〕安政六年八月廿七日、江戸市中密賣婬ヲ搜索ノ建白、

近來震風火三災これあり、市中一體疲弊仕候へ共、當月より貿易御開に付ては、一際人氣引立候間、金銀融通も無之候ては、仕法も相立申さず候に付、市中潤澤筋の儀、町奉行より別紙之通

相伺候、無餘儀事情も有之候間、一應勘辨致し可被申聞候事、

遠々賣女屋ども御取拂相成候後、市中、の模樣左に申上候、

市中住居の女は、圍妾とか唱へ、月々金三兩位より五六兩迄手當取候者は、其圍主一人にて古來有來の處、近來安圍と唱へ、或は三分一兩位手當うけ候圍者は、圍主三四人づゝも有之、賣女同樣の所業に及び候者、追々數多相成候に付、煮賣屋同樣の小料理見世にては、女子共抱置き、酌取に出し、酒食に罷越候客の身分次第にて密通致し、右手當には無之候へ共、衣類小遣等貰うけ、右を稼に致し候者多く有之候由、古來有來の夜鷹と唱へ候辻賣女の外引張と唱へ、裏店其日稼の妻娘など、夜分往來に彳居り、客を勸め身賣致し候、市中の風儀宜しからず候、御改革以前迄は、寄せと唱へ候渡世にて、女淨瑠理歌舞妓狂言に紛らしき儀不相成事に付、更に右樣の類無之處、是又近來猥に相成り、淺などゝ唱へ、女淨瑠理相催し、馴染の客は、右女子共の送り迎ひ致す者、武家にも有之、歌舞妓狂言の儀も、何連などゝ唱へ、男女打交り、寄興行致候由、男女の内ひゐきと唱へ、自然亂淫の所業に及び候も有之由、市中湯屋二階番と名付け、衣類番致し、茶菓子商ひ候儀、前々より有之候處、近來二階番の者婆（バヽア）と申者、童の内抱置き、二階へ參り候客へ、茶の給仕致させ、右女子夜分は親元へ立歸り候ニ付、懸意の客等女の宅へ罷越し、密通に及び候、是又一度何程と申す金子受候儀には無之、全く相對密通の姿にて、衣類小遣等貰請候由、

右は當時の模樣有增申上候、以上、

巷說、此頃賣女の外、場所取建を內願する者あり、事務官吏賄賂を取て、外場所免許の媒とならんため、彼是と手配り、市中圍妾など穿鑿致し、或は媚諂の餘り、貿易御開き相成り、市中一際人氣引立候など建白致せり、是市中の爲にはこれなく、己が意を大にせんとの謀略なりと云、

防火意見

〔有德院殿御實紀附錄三〕評定所の匭函に投じたる封事ども御覽せられし中には、壁廬にかなひ御用ひありしことも少からず、〇中略火災をさくるため空地を設け、茅屋をとゞめて瓦屋にせよとふれられしなどは、赤坂にすめる處士伊賀蜂郞次といふもの建言せし事といへり、其頃天野丹後守昌年が父、彌五右衞門長重があらはせし忠思集の中にも、春秋傳に大屋徹之、小屋塗之といへるを本據として、とかく火を防ぐは、空曠の地をあまた設け、市人の居宅を塗籠につくるにしく事あるまじと申たりし、かれこれをあはせて仰出されしとなん、

海防意見

〔視聽草九集八〕平山潛上書

北闕書

臣恭惟、雖當今清平之世、政令休明、決無可議者、而使因流言浮說之不實者而默言、則或有可譏其萬一者也、猶唐虞之世、使匹夫匹婦鳴諫鼓擊謗木也、此臣所以擧唐堯虞舜之治、而望于當今清平之世也、頃嘗聞之於流言、縣官有准醜虜通商之請、臣恐竊謂、縣官必無有此失策、而至愚之性、信疑相半、胸中交戰、未能自安、竊尋其說之所由起、六月十九日邊報云、醜虜歸所抄掠之我吏士、附之於書曰、其國聽我通商、則收軍而退、若不聽通商、則再連戰艦數百、以兵力決可否、信斯言也、其所以要我者尤甚矣、玩侮輕慢其謂之何、我邦開闢以來、所未嘗聞、夫人誰無羞惡之心、聞之者眦裂髮衝、扼腕慷慨、無不欲揮戈北向、與虜一戰而死者矣、往者縣官、以通商不便于國、斥其貢物、絕其通信焉、可謂廟堂之略、深得其道矣、是以天下智計之士、未嘗不同口而嘆稱也、今以醜虜豕突、北陲沸騰、遽許其通商矣、何前日得計之如彼、而今日失計之如此也、是示之以弱、而自取其侮也、雖其利害得喪、懸絕如天地、而唯如國體何、廟謨果出于此、外議必謂、朝廷無人、恐怖醜虜、不翅虎狼、倉惶錯愕、拱手無策、或適有所建白、而惰悍臆膽、委靡不振、皆出于誤計左畫也、此臣所不忍聞矣、夫匹夫匹婦、賤而愚者也、猶死而不受如此輕侮矣、況我邦以神武立國、勇威冠于宇宙、安有如此、堂々方五千有餘里之國而受此輕侮、聽命于醜虜者

乎、雖賤陋呈露肺腸、嘔盡心血、敢干不測之誅、竊爲明主論處置醜虜之大計、並擧大義不可安于隱忍、國耻之不可置于度外、質之天地鬼神、而獻之闕下、伏冀明主照鑒、夫夷狄者非人類也、何者不知古聖帝王所立之道者、雖形狀類人、而亦禽獸也、故其心貪殘無耻、可以威服、而不可以德懷也、宋儒胡致堂曰、人主以二帝三王孔子爲法、修吾德政、內安中國、而外固邊圉、不與交通、息其謀夏之心、又安有結親之辱、和好之耻乎、此特爲賓重于夷、求援于虜者而言之也、然非後世人主處置夷狄者之所當深察乎、願君上內安中國、外固邊圉、而審知爲結親之辱、和好之耻、而與異類殊族斷絕交通、則正以二帝三王孔子爲法也、誠如此、則國是立、人極定、天下方向不惑、而上自王侯卿士、下至愚夫愚婦、斷然知犬羊之不可交、腥羶之不可親矣、其浸潤之所及、浹洽之所極、普天之下、率土之濱、莫不往而然也、蓋守禦之要、以人和爲本也、蕞爾城堡、雖如彈丸、而人心一和、則其守必固、環而攻者、智勇共困、解圍而去者、往々有焉、而神州六十有餘國、方五千有餘里、上下一德、貴賤同心乎、四夷八蠻復追忽必烈之蹤、引進天之船而犯我四裔、亦何畏之有、如夫魯西亞、彼哉々々、陳亮有言、曰、一日之苟安、數百年之大患也、豈非智言乎、若談言於不傷人不殺民、而姑息以自處、則輕侮我者、豈唯魯西亞而已哉、四方夷賊、朶頤於我者、拔武而起矣、雖有智者不能善其後、加旃、我邦州牧侯伯、輕侮國家之意、自此而生、至其所極、將有不可言者焉、蓋勢之所必至也、不可不愼其機于此矣、夫成湯之放桀於南巢、平定天下者、如疾風拂枯葉、何其容易、不知其所基、安在其能以爲一童子復讐而得四海之心也、若無此義擧、則雖以成湯之聖、而未能遽至于此矣、小吏戶田某者、爲醜虜所害、雖微賤如彼、而我吏士也、孰與以黍肉餉之童子也、若無復讐之義、則國體不立、威權沮喪、況於聽通商容要約乎、所謂以神武立國、勇威冠于宇宙者、索然而無餘矣、然則大義泯沒、人心解體、而土崩之勢、胚胎于其間焉、竊爲明主憂之、伏冀君上赫然震怒、堅持尙議、不惑輿論、精選一英將威望素著、謀略優異者、而專任之以殺生之權、使之無縻軍牽制之患矣、熊羆數萬、旌旗掩天、鼓行長驅、我武以張、電擊夷舟、風摧虜氣、誅其害我吏士、傷我赤子者、梟其首於蝦夷北陲、而

後已、臣不堪慷慨壯志所激、欲飢餐戎肉渴飲虜血、而不能自止、亦不自知其開口觸諱也、叨忘其賤、敢獻其愚、此亦微塵增嶽、涓流益海義也、干冒天威、罪當萬死、小臣平山潛誠惶誠恐、頓首謹言、

文化四年丁卯秋七月

〔蒲生君平遺稿上〕上國老書

下野布衣蒲生秀實再拜頓首謹奉書於參政沼津侯從五位閣下、蓋聞之、一治一亂、自古其常、然自天地之剖分、而神州有天子之受天命焉、而傳祚長久、無有窮極、雖世有盛衰、道有汚隆、而皇天代佐之以賢宰良將、不喪其神器、不墜其民命、不卑其國體、未嘗有禽獸橫虐人類、未嘗有夷蠻戎狄侵寇中土、奈之何乃至於今、可獨堪夫魯西亞豺虎之暴於北邊哉、是天下忠義慷慨之士、人人所以切齒扼腕而憤也、自我東照神祖之輔王室、靖天下之難、而爲征夷帥府於江戶、率諸侯以鎭海內、至於今二百年之治、赫赫其盛、於是方有邊寇、國始洶洶、夫無貴賤、生在今日、孰不蒙其德澤樂其太平、苟有人心而願之乎、其宜致身盡忠以報萬一、凡有謀略、堵犯嚴威以獻良策焉、凡有材武者、蒙矢石以建忠功焉、凡其有貨財者、擧家產以資軍興焉、夫然後天下之患可以除攘矣、嗚呼自弘安有蒙古之猖獗西邊、五百年之後、今方復有夫魯西亞之暴於北邊矣、夫魯西亞者、不猶鑑蒙古嘗溺其水軍十萬波濤之怒乎、神州固天命之所全福、宗廟及山川百神百祀、起烈風怒波濤、而天下忠義慷慨之士、奮而作氣、一可以敵百、十可以敵萬、既而有一捷、當進兵走舟直衝穹廬、以斬其王、屠其種、而無噍類矣、不然宗廟及山川百神百祀有羞、而天下忠義慷慨之士、食不知其飽、寢不成其睡、死不安其鬼、且以爲凡變之起、必先有其徵矣、惟豪傑之士、固識之於數十年前、而預爲之備、事至而不怪、衆人及其變之始見形焉、而畏怖狂惑、不知所爲、妖言從而造、姦民亦乘以媒孽凶禍、此誠可畏也、夫今日之變、京師已見其徵於明和庚寅、〇七年 日、其秋七月二十八日夜戊刻、北方氣如赭須臾彌漫東西、中有白氣數十道、森森上衝、皆頭尾尖銳、而其色乍濃乍淡、參差隱見不定、其長者有及紫宮垣外、丑刻漸皆移進至中天、則色亦漸微而消散、此蓋兵之

衆、北虜當時始有圖南志矣、距今實三十八年前、而後有林子平者、慷慨之士也、憂北虜、竊持其所著兵談、與人言感泣十餘年、及年老、念空終牖下、而上之人莫已知、乃上其書木以露之於世、其志蓋由此身坐於妖言而死於刑、不憾、當殺身以警朝廷、果罹辜幽死、後數年而官家用其言有事於蝦夷、又十餘年而有今日之變焉、變之起、豈夫一朝一夕之故哉、官家先今日有事於蝦夷、則慮其變也、而幽死林子平之冤、天下忠義謂之何、其宜祭其墓而謝其靈、授之以勳位、可以徵勸天下忠義、而用其言矣、今如秀實一介書生、性極狂躁、於兵何知、然竊嘗識天下三弊、謹獻三策、以致愚忠、幸其見裁擇、則庶乎有微効矣、爲君爲邦、敢犯萬死、不暇自顧、謹陳其情、不任戰戰惶懼之至、〇又見海防彙議

〔極論時事封事〕謹按、神祖而來、賢子肖孫、繼々承々、以迄殿下、〇德川家齊十有一世、黔黎乂安、夸豐帖服、旣冠二百、而未嘗有風塵之虞、金甌之安、譬諸泰山、而四維之張、實振古之所未有、西土之所絕無、可謂盛矣、殿下承緖之重既如彼、守成之烈又如此、一夫不獲其所、尺地非其有、臣庶將爲殿下恥之、況甚焉者乎、乃者醜虜猖獗、因逞其蛇豕之心、丙寅〇文化三年之秋、入寇唐狄、焚絕積聚、鹵略戍人、前二年夏、再破蝦夷諸島守吏、望風而遁、軍資器械委棄如山、悉爲彼所竊有、去年〇文化五年秋、又以計掩襲崎陽、出我不意、不勞寸兵、不費一鏃、劫發邸質、人多抄略畜獸而歸、以至長崎鎭撫使以瀆事自殺、肥前侯以大國之君杜門禁錮如俘囚、曾不能奪敵之一旗、殺敵之一卒、以雪祖宗之深恥、社稷之大辱、何以加茲、臣〇尾藤二州私心竊以爲天下之事既已至此、意朝廷之上、必應有請纓之士、封疆之臣、必應存襄元之志、如之何、外之諸侯鎭撫使、不能率勵士馬、以敵王所愾、內之公卿貴臣、不能有所建明措置、以遏天下之勢、下逮百司庶職之賤、皆存偷惰苟安、容身保家之計、無一人爲國家盡忠赤展報効者、置宗社之孔恥、國家之鉅變於度外而不問、賴殿下偏英武特出、懷大有爲之責、亦不能有所更張正改、以幸天下、苟安晏安、以趨過目前、臣不知天下之禍、終何所底止也、臣嘗歷覽史籍、古來大亂之作、未始有不出於至盛太安之時者也、蓋承平日久、綱維素亂、譬諸強健之人、生平閨房失度、肥美過饜、偶稍栽脾、然後發爲瘡疽之患、敗

爆四瀆不可救藥、故梁武帝雄據江南、國家全盛五十年、卒招侯景之禍、唐明皇在位四十年、開元之治比蹤貞觀、而終致安史之亂、建中宜和亦爲趙宋郅隆之日、而女眞飲馬于汴河矣、今國家治平之久、雖宋越唐、未始數梁、臣大所以寒心惕惧也、其所謂安史女眞者、時邊鄙一將、塞外小吏、制之宜易々、尙猶如此、今鄂羅斯、土地之廣袤、三十倍於我、人衆之夥多、三倍於我、此其備禦、豈不毫々乎難哉、夫賈生事孝文之君、丁盛漢之隆、猶其所上治安策、有云、今天下之勢方病瘇、又苦蹠盭、又云、措火於積薪之下、火未及然、因謂之安、天下之勢奚異此、卒之果有七國之亂、賈生之言未爲過甚、智士慮事不當如此乎、今强虜陸梁、大邦爲隣、火已燃矣、群下尸素、百姓離心、病已深矣、使賈生生于今之時、臣恐其不止於痛哭流涕長大息也、臣誠憤懣之至、內切于心、不自揆其疏賤、敢以策十事爲言、此皆書生常談、未必適于用、殿下不以人廢言、且有所去取於其間、而施于行事、則幸甚々々、臣不任激切屛營戰惶待罪之至、

一曰、開言路以防壅蔽、○中略　二曰、講武事以振士氣、○中略　三曰、修火器以奪虜長、○中略　四曰、習水戰以補武備、○中略　五曰、嚴軍法以作士氣、○中略　六曰、省冗員以贍國用、○中略　七曰、愛百姓以絕怨萌、○中略　八曰、封諸侯以守北陸、○中略　九曰、致蝦夷以省戍守、○中略　十曰、論和親以定猶豫、○下略、又見海防彙議補一、

〔獻芹微衷〕自敍　四十餘年來、本邦邊海ヘオロシヤ、イギリス二國之船度々渡來仕、近年者別而伊豆七島相州浦賀邊、右船往來仕ニ付而ハ、海岸通夫々御備向嚴重ニ相立、今更卑賤凡愚之私式ニテ、猥リニ申上候モ何共恐多儀ニハ奉存候得共、年來外國之義ニ付、愚衷存付候趣、別紙書冊ニ相認メ、全ク御取用ニ不相成候迄モ、獻芹之微衷一途ニ存込候儀ニ御座候、乍恐當中納言樣○德川齊昭へ奉入御覽候御儀ニモ相成候者、寔ニ以冥加至極難有仕合奉存候、此段御推擧ヲ以、私念願之通相叶候者、年來之微衷相達、大幸至極ニ奉存候、以上、

酉○天保八年　九月廿五日

千人頭志村又右衞門組同心組頭　松本斗機藏

〔佐久間修理上書〕一天保十三年壬寅十一月、松代侯臣佐久間修理上書之寫、
乍恐謹而奉申上候、近來公儀ニテ、邊防之御武備厚被用御心、御上〇老中真田幸貫ニモ海岸御掛リ被蒙仰候事ハ、定テ去ル亥年巳來、イギリス夷唐山と亂ヲ構ヘ、頻ニ及戰爭候趣風聞モ仕候儀ニ付、遠ク被運御思慮、萬一之義御座候節、諸方無狼狽御手配御座候儀と奉存候、〇中略堂々タル神武ノ國ヲ以テ、是迄久敷御拒絶御座候ヒシイギリスニ、此度ノ兵勢ヲ御憚レ、交易ノ儀御座候ハヾ、春秋所謂城下ノ盟同樣ニテ、公義ノ御恥辱此上有ベカラズ、依之天下ノ剛大正直ノ氣モヌケ、神國尙武ノ御威光モ衰弱仕リ、始終外夷ノ輕侮ヲ來シ候ハヾ、其弊舉テ不可言ニ至リ可申ト奉存候、〇中略右ノ次第ニ御座候ヘバ、兎ニ角イギリス交易御免ノ義ハ、相成申間敷儀ト奉存候、左レバ迚一槪ニ御拒絶御座候ハヾ、必爭亂ニ及候迚モ、我勝算多御座候得者、深恐ルニ不足候得共、當今ノ形勢ヲ以思量仕候ニ、此儘ニテハ我勝算至テ乏敷候樣奉存候間、此節如何ニモ被盡御國力候テ、御備御嚴重被爲張、自然ト虎狼闚覦心ヲ消シ、永ク生民塵爛ノ禍ヲ免候樣御計策有御座度奉存候、儌賤之私義、公義御廟堂之御大計ヲ彼是ト申上候ヘバ、實以恐入候義ニ御座候得共、外寇ノ儀ハ國中之爭亂共相違仕候事勢ニ依テハ、世界萬國ニ比類無之、百代聯綿トオハシマシ候皇統ノ御安危ニモ預リ候事ニテ、獨徳川家ノ御榮辱ノミニ拘ハリ候義ニ無御座候、〇中略右ニ付熟考仕候ニ、兎角ニモ先達テ條陳仕候八策、

其一、諸國海岸要害ノ處、嚴重砲臺ヲ築キ、平常ニ大炮ヲ備置、緩急ノ事ニ應ジ候樣仕度事、

其二、阿蘭陀交易ニ銅被遣候事、暫御停止ニ相成、右銅ヲ以テ、西洋製ニ倣ヒ、數百門ノ大砲ヲ鑄立、諸方ニ手配有御座度事、

其三、西洋製ニ倣ヒ、堅固ノ大船ヲ作リ、江戸御廻米難破船無之樣仕度事、

其四、海運御締之義、御人撰ヲ以テ被仰付、異國人ヨリ通商ハ勿論、海上萬端ノ奸猾、嚴重御糺有

御座度事、

其五、西洋製ニ倣ヒ戰艦ヲ作リ、專ラ水軍ノ駈引ヲ爲習申度事、

其六、邊鄙ノ浦々里々ニ至リ候マデ、學校ヲ設興シ、敎化ヲ盛ニ仕、愚夫愚婦迄モ忠孝節義ヲ辨ヘ候樣仕度事、

其七、御賞罰彌明ニ、御威恩益顯レ、民心遂固結仕候樣仕度事、

其八、貢士ノ法起度事、

右之通ニ有御座度奉存候、就中近日蘭人ヨリ申上候趣承知仕候テハ、右八策ノ内、尤御急務ト申ハ、西洋製ニ倣ヒ數百ノ火器ヲ御作リ立候ト、間戰艦ヲ仕立、水軍ヲ習セラレ候トノ二事ト奉存候、先此二事ヲ御起シ被遊候節ハ、餘時之分ハ隨テ擧リ候儀モ可有之候、然處西洋製ノ戰艦御造立ト申義、是迄公儀ノ重キ御規定モ御座候ヘバ、容易ナラザル義ト奉存候ヘ共、右ノ外寇防禦ノ策ニテ考候ヘバ、假令是迄如何樣重キ御規定ニテ、輕ク不相成筋ニ御座候共、天下之安危ニハ難替義ト奉存候、略○中御制度ヲ改ラレ候ハヾ、爰ニ一策有之候、此策御用ヒ御座候ハヾ、イギリス唐山ニ志ヲ得ル得ザルヲ論ゼズ、本邦ヲ覬覦仕候念ハ、自然ト推縮可仕奉存候、其策ト申ハ別儀ニテモ無之、略○中先蘭人エ被仰付、軍艦ヲ二十艘モ御買上被遊可然ト奉存候、阿蘭陀頃ジヤガタラニ多ク海船ヲ仕立候場所御座候由ニ承候得バ、不日シテ御用相成可申、軍艦ノ代料トテモ、大小ニモ依リ可申候得共、通用ノ者ハ大抵五千兩位ノ者ニテモ候ヤ之樣子、飜譯西洋書ニ見ヘ申候、左候得バ、二十艘被仰付候テモ、大略拾萬兩ニ可有御座候、扨又和蘭ヨリ水軍ノ法ニ鍛錬仕候者、測量ニ長ジ船扱候者等二十人モ船大工十人、大小ノ鐵砲ヲ造リ候職人幷陸戰ノ陣法ニ習候者各五人ヅヽモ被召呼候テ、御旗本衆御家人之内ヲ以テ、水軍數十隊ヲ御擇ミ、右ノ水軍ニ鍛錬ニ仕候事ニ敎授被仰付、船持ノ御大名方ニモ、軍役ノ内ニテ人數ヲ定メ、家來ノ者差出シ、其法ヲ學

パセ候樣被仰渡、船ノ製作等ハ、伕船ヲ數百十艘御造立有之、火器ノ作法ハ、諸國ヨリ其人ヲ撰ミ、其法ヲ爲習、許多ノ鐵砲ヲ作リ出ダシ、陸戰守禦ノ法ヲモ、御旗本衆御家人ハ勿論、諸大名ノ家來ニモ、人ヲ撰ミ稽古仕候樣被仰付候樣奉存候、是等ノ人數和蘭ヨリ被召呼候事モ、格別ノ御入箇ハ有御座間敷候、〇中略恐多キヲ不顧、右ノ次第謹ヲ奉申上候、愚衷ノ程何分ニモ御明察被成下、唯空文ト不被成下、御覽被成下候樣奉願上候、以上、

天保十三年寅十一月　　佐久間修理〇又見海防叢議

〔諸家建白集上〕水野大監物家來鹽谷甲藏上書海防一覽

海防之義ニ付、僭越之罪をも不顧、乍恐言上候、

夷賊は道具をつくし、大精巧に拵、人力を多勞せずして、勝利を取る工夫を專一と仕候處、皇國之風は、人々力を碎き、道具立を餘り不好戰略に御座候へ者、如何成勇士も得手之氣風にて、彼が堅船に向候節者、多分犬死を可仕、誠に可惜事に御座候、往きに至而者、迚も彼が堅船大砲に向ては不叶義と臆し罷在、逃支度のみ仕候、此節士氣之振ひ兼候者、唯太平之餘習のみに無之、一ツ者道具立ニ不及故ニ御座候、其上岸上之防計ニ而者、味方諸太刀ニ相成候間、假令賊を引付、我が長ずる處を以て勝を取候心組ニ而も、岸防敗れ、賊兵ひた〳〵と登候勢ニ相成候而者、第一氣後れ仕、其場に至り奇正變化之業も大將之心に任せ申間敷、且又賊より定て伊豆諸島を奪取り、舟掛り可致候處、軍船無之候ては、其島を取戻し樣無御座候、左候へば必勝之算は、唯西洋製の軍船を造り候に止り申候、〇中略扨又其國益ニ相成候ヶ條者、左之通ニ御座候、

一諸侯方御國元より、米穀其外國產、幷家中百姓拂米も下積ニ致し、江戸江相廻候節は、萬事都合宜敷、武家農家迄に豐富ニ相成可申事、

一諸侯方參勤交代、海邊ニ領分有之分者勿論、其外ニ而も、鄰境より乘船ニ相成候節は、供方三分

之一も減じ、雨具一切用意ニ不及、食物等は國元より積込、或者湊ニて用を辨じ、於船中臺所相立候時は、道中入用莫太相減可申候事、

一京、大坂、堺、長崎、伏見、山田、駿河府中等、遠國夫々江之御役人、航海往來ニ相成候節者、道中何程も路費無御座候ニ付、御暇之節拜領物過半減少可被仰付候事、

一公家衆江戶御下向之節も、大阪より航海ニ相成候時者、道中御費用乍恐多分相減可申候事、

一諸侯方江戶江國產會所御立ニ相成候時は、品柄諸色宜敷、物價下直ニ相成可申候事、

一百姓拂穀、江戶江出候便利宜敷候時は、其所々町家江拂候事少く相成べく、左候へば町人より農家江手を下げ、拂米求候樣に相成、百姓之釜々富み可申候事、

一百姓富み候時は、年貢諸役無滯、武家彌蕃昌可仕候事、

一難風ニ逢ひ、荷物刎候惡弊相止可申候事、

一破船無之を年分に積り候時は、人命夥敷助り可申候、尤積荷損失無之義は勿論ニ御座候、

一外國へ漂流船も稀ニ相成可申候事

一酒醬油之類、是迄水を交へ俵物者拔候處、武家廻船之分、其弊透と相止可申候事、

但商人之荷物も、最寄々々にて武家廻船下積を許候時は、船頭其姦曲を働候義出來申間敷候、

一於洋中是迄折々海賊ニ荷物被奪候事有之候由之處、其患者相止可申候事、

但武家廻船、外海を廻候分者、大砲仕掛候義御免可有御座哉、江戶江入候節は浦賀御番所江卸し可申候、

一助鄕ニ而、道中筋百姓難儀仕候處、其苦を免候事、

一急便之御飛脚、蒸氣船御用ニ相成可申候事、

一道中人足餘り候分者、當分房相御備場之夫ニ可被召遣候事、
一諸國一方凶作之節、一方豐作之國より致廻米、在々救合可申候事、
一凶年ニ餓死壹人も無之樣相成可申候事
　但享保癸丑、西國之飢饉ニは、餓死十七萬人有之、天明丙午年、奧羽凶作三十萬人餘、天保癸巳之歲は、奧羽四十餘萬人餓死と承り申候、廻船自在ニ相成候時は、廣大之御仁德行はれ可申候、
一凶年ニ御救米御手當、公領私領共、多分に相減可申候事、
一諸侯方參勤御禮四季之獻上物等、總て品物ニ而獻上被仰付、其品御用ニ相成候時は、諸色御買上と申事相止、御入用御減方相附可申候事、
　但享保中、諸色御買上之弊を備者申上候由承及候間、其義は委敷申上候ニ不及、渡海自由ニ相成候時は、御停メ方可有御座候、
一異國之仕方ニ倣ひ、大船ニ而遠沖江乘出し、鯨を取候時者、船一艘漁夫十人計ニ而濟候由、是迄鯨一匹ニ付舟十艘、漁夫數百人掛り候處、其弊多分相減可申候事、
　但捕鯨船者、軍船とは製作異り候へども、既ニ異國製の大船御免ニ相成候上者、此船も製造被仰付べく候、尤捕鯨之漁夫は、房相御備場之舟方ニ當分可相遣候、〇中略
右者軍艦之義、海防第一之器械ニ御座候間、何卒是非共御製作ニ相成候樣仕度、身分之程をも不相顧、言上ニ及候處、重々恐縮至極ニ奉存候、以上、

水野大監物家來
甕谷甲斐謹上〇又見諸防禦議

〔諸家建白集上〕江川上書
一此頃近海御手配無之而者不相叶御時節ニ候處、當今玉藥僞ニ御畜へ、大砲御鑄立ニ相成、諸向

調練仕、諸大名夫々合戰之手配可仕候へども、三百年近き太平ニ而、不習之事共多く、中々兩三年ニ者十分に手當相成間敷候、然る上者異國多年之願望、御聞屆ニ可相成歟、此節渡來之アメリカ人は、共和政治國にて、獨立之強國ニも無之由、夫を今度優待を以て願筋御聞屆ニ相成候而者、ヨウロウハ諸州之強大獨立之諸國侮慢募り、如何樣の難題可申出哉も難計、其節ニ至り、彼を免し是を免さずとは被申間敷候、さればとて戰鬪に及候はゞ、必然の御勝算如何可有之哉、乍然萬一御勝利無之候とも、願筋御聞屆ニ相成、行々の後患ニ御座候へ者、一時之御患與奉存候、一ト度御合戰ニ相成候へば、本邦は、海內無類勇壯之氣ニ御座候へ者、一時之敗は候へども、行々の御勝利は必然ニ可有之、何れ願筋御聞屆無之方上策と奉存候、併彼も國費を不顧、遠路罷越候義ニ付、尋常之策に而は、品能く歸帆仕間敷、其節內海江乘入候而者、江戶表之混雜如何可有之哉、定而大事ニ及び可申候、五艘十艘ヅヽの異船の爲に、江戶表騷動仕候而者、第一御威光ニ障り可申、外國江之御外聞は勿論、本邦之人心、士崩瓦解之場合ニも至り可申歟と奉存候、就而は鐵砲一發も不仕候而者、近海江不入工夫第一と奉存候、其儀浦賀表江戶ニ大臺場御取立ニ相成候樣仕度、左候へば內海江乘込不申、相房之浦々江取掛可申、其節者海岸之防禦御引上げ、異人之上陸を待ち、手詰之接戰ニ及候はゞ、勝算多しと奉存候、若し不得止事、船軍に相成候はゞ、小船ニ而乘付壹人ニ而取扱候程の小砲ニ而、便利第一と仕、ボンベンとか唱候火器を小く拵へ、幾百共無之彼船江打込候外、良策は有之間敷候、此上大軍船御出來相成候はゞ、無此上候得共、其儀兩三年ニは相成申間敷、就而者大臺場御築立、如何ニも急速ニ有之度候、其趣意者異船近々渡來も難計、夫迄ニ廣大之御臺場出來候はゞ、武備嚴重之御威光を示し、異人之目を驚し可申、合戰は敵之氣を奪候事、專要與承り及候、先以諸事御捨置、浦賀江御臺場御取立、其後近海之御手當、緩々被仰付候て不遲事と奉存候、大臺場御仕方は、富津富岡杉田兩所より築立喰違ニ仕、其間日本船通路之爲め、貳丁程も

明置候事可然、本牧江御臺場房州近邊乘り通り候節、鐵丸届申間敷、打掛候共、當り之所無覺束、前條之仕方ニ候はゞ、砲聲一發不仕候共、異船乘入候事、相叶申間敷候、尤御臺場表者石垣築立、裏面者土手ニ仕、中腹より以下平垣之場を設け、諸家陣小屋置て、其下へ軍小船繼ぎ付置申度候、房州鋸山は石山と承及申候、其外豆州よりも切出し候はゞ、如何樣之大石も可有之、運路近き場處より取寄、夫ニ而も埋石不足ニ候はゞ、江戸表幷近郷々々より取集メ等者、夏島烏帽子島を初め、相州二總房州之山々取崩し候はゞ、十分ニ可有之、御入用金の儀者、近頃鍋島侯願候て築立に相成候御臺場、横三町長三里、其入用三拾萬兩餘与承り及申候、此度之御臺場者、洲之上江築立候へば、御手輕可有之、併不容易御入用者申迄も無之候、江戸市中之人數六拾万餘と承り及申候、右壹人ニ付百文ヅヽ上納仕、其上富優之町人共は、分限に應じ上納仕候はゞ、江戸中ニ而も餘程の上納金ニ可相成候、尤三百年近き太平に樂み候町人共に候へ者、國家の大事と申諭し候はゞ、難有上金可仕、其上江戸近海へ異船乘入、御手合ニ相成候はゞ、妻子離散難計、萬一自燒等致候時ニ相成候はゞ、類燒にて難澀可仕、其段不便ニ思召、異船不乘入、江戸町中安穩ニ御取立ニ相成候御臺場之理解有之候はゞ、傾產ニても上金可仕義と奉存候、其上御不足之分、大坂、奈良、堺等江被仰付候はゞ、又々四五拾万兩者出來可仕、御臺場御取立之殘金ニ而小船御拵候はゞ、千艘位は出來可仕、土石竹木運送仕候者、近海相房の漁船は勿論、江戸舟乘渡世仕候者共、ハシケニタリ家根屋形之遊山船ニ至迄、屋根を取捨御用可相勤、次ニ御譜請方、町方與力同心、江戸名主共人數引纏、貳拾万人も一時ニ取掛り、晝夜相勤候へ者、壹ケ月位ニ者手堅出來可仕、尤江戸中出火相守候儀者、夫々被仰付、御旗本幷武家火消實意を以て、無油斷市中相廻り候樣仕度、右御普請中、近郷市中騷動可仕候へども、右者壹ケ月も過ぎ御出來に相成候はゞ、江戸は一ト先安穩と相成、萬民安心可仕、異船內海江乘入候騷動ニ比候へば、雲泥之相違と奉存候、尤右御臺場出來之後、內海江乘入候儀者

安心と奉存候、其上ニ而外海ニ而濱々浦々江上陸候儀者、前書之通り短彼に在て、長此方に御座候義與奉存候、臺場之儀御手延ニ相成候へ者、兎角御入用之沙汰ニ及び、姑息之御說ニ拘はり泥み仕候而者國家一大事ニ及可申候、呉々急卒ニ仕度、萬一内海ニ乘入り、三百年來之御威光ニ障り候而者、幾百萬之御金御座候而も、人心者金にては買得間敷、萬々一御武備之爲め御勝手御不廻りに相成候而も、人心不動ニ候はゞ、御治世者萬々年と奉存候、併し御武備御國政之外者、無益之御費は省き度事と奉存候、萬々一異人願筋御聞屆ニ相成候得者、尙更此御臺場無之候而者不相成事と奉存候、

江川太郎左衛門○又見ニ海防彙議

〔嘉永明治年間錄 二〕嘉永六年六月十日、水戶齊昭卿、不可和之十箇條ヲ建白ス、

御別紙一昨八日の箇條へ註致候樣に御申聞も有之候故、拙老拙閙取置き、昨夜腐眼にて認候故、御見せ申候、尤消書の間も無之、下書の儘にて候へば、追て御返し可給候、御存寄も候はゞ承度候、猶又西城上金云々の事も、昨日申進候處、今日御用の透も御座候はゞ、御一同へ御達被成、御了簡振承度存候、十日 福山殿○老中阿部正弘 御許と有、

海防愚存、和戰之二字御決著、廟算一定、始終御動無之儀、第一の急務と存候事、本文和戰の利害、戰を主と致し候へば、天下の士氣引立、假令一旦敗を取候共、遂には夷賊を逐退け和を主と致し候得ば、當座は平穩に服し候ても、天下の人氣各々ゆるみ、後には滅亡に至り候儀、漢土歷史の上に明證有之、古今識者の確論有之候へば、委細は申に不及候へ共、今試みに其大略を論候に、和すべからざるの筋十ヶ條有之候、抑神國は幅員廣大ならず候へ共、外夷にて恐れ候は、畢覺往古神功皇后三韓御征伐、中古弘安の蒙古御退治、近古文祿の朝鮮征伐、慶長寛永の切支丹御禁絕等、御明斷御武威海外に振入居候故に有之、然るに此度渡來のアメリカ夷、制禁を心得

ながら浦賀へ乘入、和睦合國に自旗差出し、推て願書を奉り剩へ內海へ乘込、空砲を打鳴らし、吾儘に測量迄致し、其驕傲無禮の始末、言語同斷にて、實に開闢以來の國恥共可申候、城下の盟は國の恥と承候處、右の通り御制禁を犯し、大城程近の內海へ乘込、我を刼し彼を要し候夷賊、御退治無之耳ならず、萬一願の趣聞濟に相成候樣にては、乍憚御國に於て相濟申間敷、是決て和すべからざるの一箇條に候、切支丹宗の儀は、御當家御法度の第一に相成、國々末々迄も高札建置候處、夫にてさへ御仕置に相成、邪教の毒蔓に御油斷は不相成候、況アメリカを新に御近付相成候はゞ、何程御制禁有之候ても、自然右宗門再起し、勢必然の儀、乍憚祖宗の神靈に被爲對、御申譯無之、決て不可和之二箇條に候、我金銀銅鐵有用の品を以、彼の羅紗硝子等無用の物に換候儀、大害有て小益無之候、和蘭の交易さへ御停止にても可然時勢に候、却て和蘭の外に又々無用の交易御開に相成候はゞ、神國大害此上は有間敷、是決て不可和三箇條に候、ヲロシヤ、アンゲリヤ等、先年より交易を望候得共、御許容無之候處、アメリカ夷へ許容被遊、萬一ヲロシヤ等より願候はゞ、何を以て御斷可被遊候哉、是決て不可和の四箇條に候、異國人は其外に恩無之、交易さへ御許容有之候はゞ、何等の次第無之旨、世話に申候へ共、初は交易を以て因を求め、遂には邪教を弘め、又種々の難題申懸候儀、彼等が國風に有之、遠くは寛永以前邪宗門の憂、近くは清朝鴉片烟の類、前車の覆轍にて、是決て不可和之五箇條に候、萬國形勢往古と相違いたし候處、我神國已に鎖國の趣意を守り、大海に孤立いたし候儀、始終無覺束候間、矢張外國へ往來いたし、廣く交易の道を通じ候方可然との說、蘭學者流などひそかに唱へ候哉に候へども、神國の民心固結、武備充足、中古以前の國勢にも回復いたし候はゞ、外國へも押渡り恩威弘め候事に相成可申候へ共、當時太平遊惰の風俗、外國より僅に數隻の戰艦渡來候てさへ、人心恐怖致し候て、彼に要せられ候て交易始候樣にて、外國へ渡り遠略を施候事抔、眞に席上

の虚論、是決て不可和の六箇條に候。彦根會津等へ守衛被仰付、既に此度などは會津家來共炎天を犯し七八十里の遠路、日夜兼行馳付候由、其外内海警衛被命候大名、速に人數繰出しの向も相聞、奇特の事に候處、夷賊内海へ乘入、我儘に測量等致し候ても打拂の儀不相成、諸國の士民虚く奔走にのみ疲れ候樣にては、人々解體可有之、是決て不可和の七箇條にて候。長崎海防、黑田鍋島へ被仰付候儀、清國和蘭へ御手當のみには無之、惣て外夷の御手當等に可有之處、浦賀近邊にて、外夷の願書御受取に相成候樣にては、間道の往來を御許し、右兩家は無用の御關所番に被仰付置候姿に相當、兩家の氣受如何に可有之哉、是決て不可和之八箇條に候。此度夷賊の振舞、眼前一見致し候もの、匹夫にても心外に存より、かく迄無禮の夷賊御打拂も不被爲遊候ては、御臺場御備は何の御入用に可有之哉と、内々相歎候もの有之由、實地にて夷賊驕傲の振舞を見ては、いか樣右樣被存候、若小民ながらも、さすが御國恩に沐浴いたし居候故と、實に頼母敷事に候。無智の匹夫さへ右樣相歎き候、打拂の處御決定に不相成、餘り寛宥仁柔の御所置にては、下々にては御懷合は不分候故、奸民共御威光を不恐、異心を生じ候も難計、是決て不可和の九箇條に候。夷賊打拂の儀は、祖宗の御明論、殊に文政の度重ての被仰出候儀に候得ば、御懷合は固より戰の方に御決定に相成候て、何を申すも太平打續き、武備御備兼候故、容易に夷賊は氣傲候はゞ、其禍難計、其節に至り不得已和議御取結に相成候樣にては、益御威光を損候故、先々當節は枉て御恩夷賊の氣をも御なやし被差置、其内專ら武備御世話被爲在、追て御手當御全備の上、彌舊法の通嚴重可被仰出と申も、尤の論に候へ共、當時宴安姑息の人情、朝暮御勵しに相成候てさへ、必死の人氣に相成兼候、況上より武事を御示不被成候はゞ、幾年を歷候ても、諸家の武備相整候儀何共無覺束、既に寛政蝦夷騷動御武備御世話御座候へ共、御行屆に不相成、又去る寅年打拂御宥豫被仰出、畢竟先外夷の氣を御寛め、其内武備御調の御趣意

と相見候へ共、十二ヶ年の間、諸家の武備格別に行屆候とも不被存、此度夷賊渡來に付猖獗致し、夷船滯留中、少々本氣に相成候ものも有之候へ共、歸帆に相成、平日の通心得候樣被仰出候へば、一統又々無事安じ、俄に相集り候武器も直樣散失致すべく風情、假令ば椽の下へ火の遁り居候に不心付、火防の手當も忘れ居候同樣の姿にて、實に淺間敷士風に候、廟堂にても聊も和議の御含有之候へば、日々御弛に相成候ても人氣引立不申、從て臺場其外の手當も、皆文具にて軍用に適し申間敷、今日にも彌打拂の方に御決定被成候得ば、天下の士風十倍致し、武備は不令して整候儀、影響よりも早く可有之、左候へば征夷の御大任にも被為叶、諸國一統武家の名目にも相當可致候、是決て不可和の十ヶ條に候、尤肝要の急務に候、〇下略

〔嘉永明治年間錄十〕文久元年十二月十六日、長州侯開鎖論ヲ建白ス、

近年外國より種々難題申立候趣相伺、不虞の變も出來、內外とも御煩慮の御時節と奉恐察候、勿論廟堂の御籌略は、外向より可奉伺樣も無之、御歷々御評議御遺策可有之とは不奉考、彼是以事ヶ間敷申立候ては、越俎の御譴責奉恐入候得共、當時勢皇國の御榮辱に相拘り候儀も、可有之哉と奉存候に付ては、區々の鄙衷日夜難忘、不得止事無根之世論を以て心を留め、迂僻の議論を取、御政體にも相拘り候儀申立候ては、猶更恐懼の至に御座候得共、右鄙誠の處被聞召、不惡御取計被成下候樣奉願候、右申上度旨趣は、先年以來、度々申立候通、討異の御良策は、公武御一和、叡旨御遵奉に基き可申、數年相含候鄙見に御座候處、去午〇安政五年以來、公武の御間御議論齟齬の儀有之、於世上奉伺、種々雜說紛興仕、段々御手煩も指起、餘程御配慮にも相成哉と奉伺候、竊に事の所由を愚見仕候處、先年外國へ和交御差許、條約御取替に相成候儀は、素より無御據御場合有之候ての儀に候得共、癸丑〇嘉永六年甲寅〇安政元年以來、大猶激の人氣一旦屈撓仕り、偸安の人情一日の無事を貪り、終に一統退縮の世風に相成、御國體更張の期無之樣相成可申

哉、氣節を負ひ慨歎を抱き候者、外威の威力に壓れ、安を偸し、戰を忘れ候俗情より、斯樣相成候儀と存詰、猥に公儀の御處置を如何敷批判仕り、叡慮の旨は、鎖國の御舊規を御確守被遊候樣相唱へ、破約戰爭の義を主張仕り、壯年血氣者の憤言激行を釀成し、且又彼我形勢を考へ、彼の巧利技術を味候者、開國の說を主張仕、猥に我國の正氣を折き、商賈貪亂の風より、染漬の諸論紛々兩端に分れ、一旦攻擊の形をなし、人心恟々、土崩瓦解の勢とも可申哉、天下の勢ひ、合へば强く離れば弱し、此支離解散の人心を以て、夷虜に御當り被成候ては、御心遣の儀と奉存候、然る處に、右鎖國開國と申候は、征夷の御大體關係重く候得共、其根本より見候得ば、是等枝葉の說とも可申、公儀の議論、草野の可伺知事には無之候得共、斯枝葉の是非を以て、御違却の儀出來仕候筋には有之間敷哉と奉存候、其故は能可守して是を攻、能可攻して守る者、兵家の常典、鎖す事能はざれば開くべからず、不能開ば鎖すべからず、御國體不相立、彼が凌辱輕侮を受くるは、鎖も眞の鎖に有ず、開も眞の開に無之、開鎖の實は御國體の上に在べし、御國體相立候得ば、開鎖和戰は時の宜に隨ひ、守株膠柱の儀は有之間敷、然るに又御國體を相立候基本と申候へば、大倫大義を明らかにし、天下の議論統一、人心和洽の御處置に可有之哉、右物議紛々相起候本意を熟考仕候にも、公武の御間、純然御合體にて、御國體相立候外有之間敷、種々雜說御手煩も差起り候は、其末弊に可有御座候に付、其源を塞ぎ、其流を御治被成候は、御鎭定强て手間被爲取候儀は有之間敷候、往昔草昧の世と違ひ、當御治世以來、厚き御世話を以て、文教大に開け、理世の時にて、君臣の道を可崇事は、三尺の童子も口に藉候樣相成候に付、是迄とても聊無御疎遠御事には候へ共、天下の大經を被爲立候儀は、万々御厚重に被爲在度事に付、此時勢に當り候ては、今一際天朝を御崇奉し、御取扱振世上へ相顯れ候はゞ、天下の人心感服仕、右物議御鎭靜、容易に御整、御國體の基本も相立可申哉、右基本被爲立候上は、和親を被差免候は、乍恐

枝葉の御處置共可申哉に付、速に大國の御大規摸被相立、御國體嚴然と相立候樣、御國論を被相立候事と奉存候、左候ては、御手を下し候處は、武備益々御張擴にて、航海の術廣く御開き、人人心膽を練り、智識を發明する道に向ひ、諸藩夷情熟知の上は、彼を恐るゝに足らざる處を知り、我も恃むべき良策も相立可申、此非常の時に當り、中興の御大業も被為立候事には候へ共、人心の折合方深く御案じ被為在候由、過る巳年御沙汰の趣も有之、制度御改め、航海の術御開き等の儀は、疾に御評決被為在、今更當否利害等不及申上儀に可有之、其後追々御沙汰の趣も奉伺候て、乍憚御趣意筋奉恐察候、然る處、今以御國內一統、耳目一新仕候樣御沙汰無之候ては、何か御深謀被為在候事可有御座哉の段、可奉伺筋に無之候へ共、宇內の形勢は年序を追て相開候に付ては、今日の如く御國論御變革の機會に臨み候も、自然の勢ひに可有之、若舊習に泥み、漸く時勢被押移、無據御變革相成候ては、御手後に相成のみならず、却て人心の折合にも相拘り可申哉と、深く奉恐入候儀に付、右御國論速に御決定相顯候儀に御座候、右之通り御合體の御取扱、顯然と相成り、天下の人心感服、御國體嚴然の御國論被相立候はゞ、定て叡感も可被為在、素より開鎖の體へ御泥み被為在候儀に有之間敷候に付、何卒叡慮より被為起、右御國定の旨、勅諚を以て被仰出、右を御遵奉被遊、台命を以列藩へ御沙汰相成候はゞ、義理判然、人心感服仕、退縮の氣一旦進張に相改り、偷安の陋習も奮發仕り、神州億兆の人心、一國の正氣に相成り、前後種々の物議も氷解仕り、毫末內顧の御患無之、御國威凛然と五大洲へ相振候御大業も成就可仕哉と、迂僻の私見に御座候、右は御廟議の上に於て、大海の涓滴にも相成度心懸候にも無之候得共、數代無限御寵命を奉戴、御國澤に溢れ居候に付、兼々報效の心得に罷在候、不圖時勢感發仕、不顧僭妄申立候は、唯々食芹の味進獻仕度、區々鄙誠、不惡御亮察被成下、不都合の儀も御座候はゞ、御開捨被成下度、重疊奉願候、委細の儀は、演說書を以可申上候、以上、

松平大膳大夫〇毛利慶親

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年九月、松平容堂王政復古ノ旨ヲ建白ス、

誠惶誠恐謹テ建言仕候、天下憂世者、口ヲ鉗シテ敢テ言ハザルニ馴候ハ、誠ニ可恐ノ時ニ候、朝廷、幕府、公卿、諸侯、旨趣相違ノ狀アルニ似タリ、誠ニ可恐ノ事ニ候、此ノ儀ハ我ガ大患ニシテ、彼大幸也、彼ノ策於是乎成候ト可謂候、如此事態ニ陷リ候ハ、其責畢竟誰ニ歸スベキヤ、併既往ノ是非曲直ヲ喋々辨難ストモ何ノ益カアラン、唯願フ、大活眼大英行ヲ以テ天下万民ト共ニ、一心協力、公明正大ノ道理ニ歸シ、万世ニ亘テ不耻、万國ニ臨テ不愧ノ大根柢ヲ建ザルベカラズ、此旨趣、前月上京ノ砌ニハ、追々建言仕候心得ニ御座候ヘドモ、何分阻當ノ筋而已有之、其內不圖モ舊疾再發、不得止歸國仕候以來、起居動作ト雖ドモ不隨意ノ事ニ成至リ、再上ノ儀暫時相調不申候ハ、誠ニ殘憾ノ次第ニテ、唯管此事而已、日夜熱心苦志罷在候、因テ愚存ノ趣、一々家來共ヲ以テ言上仕候、唯幾重ニモ公明正大ノ道理ニ歸シ、天下万民ト共ニ、皇國數百年ノ國體ヲ一變シ、至誠ヲ以テ万國ニ接シ、王政復古ノ業ヲ建ザルベカラズノ大機會ト奉存候、猶亦別紙得御細覽、被仰付度、懇々ノ至情難默止、泣血流涕ノ至ニ不堪候、

慶應三丁卯年九月　　松平容堂

宇內ノ形勢、古今ノ得失ヲ鑑シ、誠惶誠恐頓首再拜、伏惟、皇國興復ノ基業ヲ建ント欲セバ、國體ヲ一定シ、政度ヲ一新シ、王政復古、万國万世不愧者ヲ以テ本旨トスベシ、奸ヲ除キ良ヲ舉テ、寬恕ノ政ヲ施行シ、朝幕諸侯、齊ク此大基本ニ注意スルヲ以テ、方今ノ急務ト奉存候、前月四藩上京仕リ、一々建白ノ次第モ有之、容堂儀ハ病症ニヨリテ歸國仕候以來、尙又篤ト熟慮仕候、因テ早速再上、右ノ次第、一々不及ナガラ建言仕候志願ニ御座候處、今日ニ至リテ病症難澀、不得止微賤ノ私共ヲ以テ、愚存ノ趣旨乍恐言上爲仕候、

一天下ノ大政ヲ議定スル全權ハ朝廷ニ在リ、乃我皇國ノ制度法則、一切万機、京師議政所ヨリ出ベシ、
一議政所上下ヲ分チ、議事官ハ、上公卿、下陪臣庶民ニ至ルマデ、公明純良ノ士ヲ撰擧スベシ、
一庠序學校ヲ都會ノ地ニ設ケ、長幼ノ序ヲ分チ、學術技藝ヲ敎ザルベカラズ、
一一切外蕃トノ規約ハ、兵庫港ニ於テシ、新ニ朝廷ノ大臣ト諸藩ト相議シ、道理明確ノ新條約ヲ結ビ、誠實ノ商法ヲ行ヒ、信義ヲ外蕃ニ失セザルヲ以テ至要トスベシ
一海陸軍備ハ一大至要トス、軍局ヲ京攝ノ間ニ築造シ、是ヲ朝廷守護ノ親兵トシ、世界比類ナキノ兵隊ト爲ス事ヲ要ス、
一中古以來、政刑武門ニ出、洋艦來港以後、天下紛紜、國家多難、於是政權稍動ク、是自然ノ勢也、今日ニ至リ古來ノ舊弊ヲ改新シ、枝葉ノ小條理ニ止マラズ、大根基ヲ建ルヲ以テ主トス、
一朝廷ノ制度法則、從來ノ範例アリト雖ドモ、方今時勢ニ參合シ、或ハ當然ナラザル者アリ、宜ク其弊風ヲ除キ、一新革メテ、地球上ニ獨立スルノ國本ヲ建ベシ、
一議事ノ士大夫ハ私心ヲ去リ、公平ニ基キ、術策ヲ設ケズ、正直ヲ旨トシ、既往ノ是非曲直ヲ問ズ、一新更始、今後ノ事ヲ視ルヲ要ス、言論多ク實効少キノ通弊ヲ踏ベカラズ、

右之條目、恐クハ當今ノ急務、内外ノ至要、是ヲ捨テ他ニ求ムベキモノハ有之間敷ト奉存候、然バ則職々成敗利鈍ヲ視觀シ、一心協力、万世ニ亘テ貫徹致シ候樣有之度、若或ハ從來ノ事件ヲ執リ辨難抗論、朝幕諸侯、互ニ相爭フノ意アレバ、尤然ルベカラズ、是則容堂ノ志願ニ御座候、依テ愚昧不才ヲ不顧、大意建言仕候、就テハ乍恐是等ノ次第、空ク御捨相成候テハ、天下ノ爲ニ殘懷不少候、猶又此上寛仁ノ御趣意ヲ以テ、微賤ノ私共ト雖モ、御親問被仰付度、奉懇願候、

慶應三年丁卯九月　　　　松平土佐守家來　神山佐多衞

福岡藤次

後藤象次郎

寺村左膳

〔開國起原〕下藝土藩士之上言

今般幕府政權を朝廷江奉還仕候次第、誠以復古之御大業、數百年之英斷ニ御座候、御國體御變革、宇宙之間御獨立可被遊御基本御座候得ば、微賤之私共迄も、深く天下之爲ニ奉恐悅候、付而は衆庶議事之意を以、諸藩士共被召出、廉々御下問被仰付之議、謹而奉言上候

一德川家取扱掛之廉々、當時伺出之通被仰付置、召之諸侯衆議之上、御確定被遊可然と奉存候、

一脫走之公卿方、近々上坂之聞有之候趣御座候得共、推而右等之次第ニ相成候儀は有之間敷、召之諸侯會議初發ニ御裁斷被仰出、長防御處置同時相成可然と奉存候、

一外國取扱之儀は、暫時致し方之宜被聞、召之諸侯會議之上、皇圖一體を以、朝廷之御條約可被爲結換、尤兵庫開港之處は、今般大改革を以、國體變換之次第談判ニ及び、被差延候而可然哉と奉存候、

右之件々、當時在京仕候三藩之者共、同意仕候ニ付、乍恐連名ニ而申上候、書外尙又口上を以言上可仕候、誠恐誠惶、頓首謹言、

卯〇慶應三年　十月

松平修理大夫內　關山紀

松平安藝守內　辻將曹

松平土佐守內　後藤象二郎

上書請宮家取立

〔折たく柴の記〕中廿七日〇寶永六年正月に參りし時に、また封事を奉る、其事の大要は、わが神祖天より勇

智を錫らせ給ひ、奄に天下をたもたせ給ひし御事、并に是祖宗累世の德を積せ給ひし所によられて、子孫萬世の業を創め給ふことを得られき、されば男女の御子も多く、それが中にはさきだち給ふもおはしませしかど、大國に封せられ給ひし所、今も其後の榮給ふ四人までおはしませり、第二代の御子、國に封せられ給ひし所、駿河殿御事ありし後、今はたゞ會津殿の御後のみおはします、第三代の御子の封につかせ給ひし所も、二人までおはしましき、第四代〇德川家綱に至らせ給ひ、御世繼るべき御子おはしまさず、かくれ給ふべきほどには、御連枝も前代〇德川綱吉のみわたらせ給ひければ、御養子の議ありて御世を讓らる、前代のその御世を繼れし初には、若君わたらせ給ひしかど、いくほどなくてかくれ給ひ、そのゝちは御子も出來給はざりしによりて、當代〇德川家宣の御事をこそ御養子ともなされたりけれ、されば第三代より此かた、天下の大統の繼給ひし事、すでに二たびに至り給ひぬ、神祖の御功德をもて、いまだ百年に及ばずして、その大統のかくおはします事、必らずそのいはれなきにもあらじ、ましてや當時は、前代の御子とならせ給ひし御事なれば、某〇新井君美ひそかに憂思ふ所淺きにあらず、此時にあたりて、天其禍を悔て、其命維新ならむ事は、神祖の御德を繼れんにしくべからず、但しそれらの御事は、某二十年がほど進講せし所なれば、今はた申すにも及ばず、それが中、議し申べき一事の候は、元弘建武の間、皇統すでに南北にわかれ、南朝はいくほどなくて絶させ給ひぬ、北朝はもとこれ武家のためにたてられ給ひぬれば、武家の代の衰をも、ともにせさせ給ふべき御事なるに、應仁の後、世のみだれ打續て、武家すでに衰給ひにし上は、朝家の御事は申すに及ばず、當家の神祖、天下の事をしろしめされしに及びてこそ、朝家にも絶たるをも繼ぎ、廢れしをも興させ給ふ御事共はあるなれ、しかはあれど儲君の外は、皇子皇女皆々御出家の事においては、今もなほおとろへし代のさまにかはり給はず、凡匹夫匹婦の賤しきも、子を生ては必らず其室家あらむ事を思ふ、これ天下古今

の人の情なり、また今農工商の類だにも、男には其資財をわかち、女には其婚嫁をもとむ、ましてや士より以上、こと〳〵くみなえからざるはなし、かゝる世のならはしとなりて、年久しければ、朝家には今まで申させ給ふ御事こそなからめ此等の御事ねがはせ給ふべき所とも思はれず、たとひ又朝家には申させ給ふ御事こそなからめこれらの御沙汰なからむ事、上につかふまつらせ給ふ所をつくされしとも申すべからず、當時公家の人々家領のほどもあるなれば、皇子立親王の事おはしまさむにも、いかほどの土地をまゐらせらるべき、皇女御下嫁の事おはしまさむにも、いかほどの國財をか費し給ふべき、この國天祖の御後のかくのみおはしまさむに、當家神祖の御末は、常磐堅磐に榮えおはしまさむ事を望まむは、いかにやはさふらふべき、されど某が申すごとくならむには、これより後、代々の皇子皇女、其數多くおはしまさむに至ては、天下の富もつがせ給はぬ所ありぬべしなど申す事も候はん歟、古より皇子皇女數十人おはしませし代々もすくなからねど、それらの御後今に至り給ふは、いくばくもおはしまさず、天地の間には大算數といふものゝある也と、古の人は申たりき、これ等の事は、人の智力のおし量るべき所にあらず、唯理の當否をこそ論じ申すべけれ、或は又皇子の御後多からむには、つひには武家の御ため、不利の事ども出來ぬべきなど申す事もあるべきにや、高倉宮の令旨によりて、諸國の源氏起りし事もあれど、これは平相國入道のひが事のみ多くして、家滅びぬべき時にあたれるなり、もし此等の事を以て誡とすべきも、高時入道滅びし時に、令旨なされしは、梨本の御坊にはおはしまさずや、さらばたとひ御出家の御身といふとも、それらの事あらじとは申すべからず、これらはたゞ武家御政事の得失にこそかゝり給ふべけれ、すべて此等の事よく〳〵御心せさせ給ふべき所也と申せし也、此封事御覽の後、仰下されし事、ふたゝび三たびののち申所そのことはりあり、されどこれ國家の大計也、よく〳〵御思惟有べしと仰下されしに、やがて今の法皇〇東山

の皇子秀の宮〇直仁、閑院宮始祖、とか申す御事、親王宣旨あるべき由を申させ給ひたりけり、其後また前代に皇女御誕降の事をも仰定られき、これらの事ども、我此國に生れて、皇恩に報いまゐらせし所の一事也、されど我ひそかに憂思ひしごとくに、前代のかくれ給ひて、つひに天下の大統絶させ給ひし御事は、人力のよくすべき所にもあらず、されどまた我これらの事ども申せし事もあれば、萬歲の後の御事ども、深く遠くはかりおかれしごとくに、當代御繼統おはしませし事、これまた天下の大幸とこそ申すべけれ、秀の宮の御事、やんごとなき人の、むかしより親王家たゝせ給ふ事は、難き由なのたまひとゞめ給ひしかど、用ひさせ給ふ事なくて、公家に申させ給ひしと聞ぬ、誠にありがたき御事也、されど此事まさしく未に御聞かせ給はぬ所なれば、本文にはしるさず、此封事には倭漢古今の事共をあはせ論じたりければ、文殊に長く、また其事淺學の人の、こと〴〵くにさとりわきまふべき所にもあらねば、こゝにはたゞ其大要をのみ志るしたり、此封事は、將軍宣下の事にあづかれる事のあれば、此時に奉りしなり、

〇按ズルニ、閑院宮ノ事ハ、帝王部皇親篇世襲親王條ニ在リ、參照スベシ、

上書請學校創建

〔春葉集附錄〕謹請蒙鴻慈創造國學校啓

荷田東麻呂誠惶誠恐頓首頓首、謹聞、伏惟、神君勃興山東、奇功一成、平章天下、尊上之風、毓德君子之志、維新之化、始建弘文之館、盛矣且富、又何之加、明君代作、文物愈昭、光烈相繼、武事益備、濟濟焉、藹藹焉、鎌倉氏之好儉、庸何及于斯乎、郁々乎、斌斌乎、室町氏之尙文、豈同日之談哉、應此昇平之化、天生寬仁之君、以其天縱之資、圖晃不嚴之數、野無遺賢、做陶唐之諫鼓、朝多直臣、擬有周之官箴、上尊天皇、專不諱之政、下懷諸侯、而來包茅之貢、道齊有暇、則傾心於古學、敎化不周、則深治於先王、購奇書於千金、天下明達之士嚮風、探遺篇於石室、四海異能之客結軾、臣嘗遊都下之日、幸蒙射策之挽、忝不顧謭劣之義、偶有校書之命、浴于忘布衣之恩、誰爲爲之、孰令聽之、于遷氏之言、深有取焉、雖有智慧、不如待時、鄒孟子之意、良有以也、當時旣有意於顯幕府之威靈、起此大義、借大樹之庇廕、遂臣素願而不敢者、私心竊以、遂少不已、歲竄千里、犬馬之年、未滿六十、今日之美、安知不爲異日之醜、後進之知、豈謂不如先

輩之能、恐而自用、難免蟷斧向車之誚、賤而自專、似忘燕石街人之羞、有志而不逢、千里遲遲歸、豈圖卒有採薪之憂、騏驥徒伏槽櫪之間、何意、爲造化小兒苦鴻鵠長繫樊籠之中、口不能言、同陳仲子之居於陵、脚不能行、似卞和氏之在楚山、爲世廢人、噬臍何及、遇時窮阨、嚬眉獨泣、天之將喪斯文也命也、天之未喪斯文也時也、時之不可失、不敢不告也、今也洙泗之學、隨處而起、斷壘之教、逐日而盛、家講仁義、步卒廝養、併言詩、戶事論經、閭童壺女讀談空、民業一改、我道漸衰、紀士州管嘆焉、田園競捨、貲產傾盡者相公深痛矣、臣竊以、是亦足以見太平日久之象、唯有爲可痛哭長太息者、在我神皇之教、陵夷一年甚於一年、國家之學殆僅存十一於千百、格律之書泯滅、復古之學誰云闡、詠爵之道敗闕、大雅之風何能奮、今之談神道者、是皆陰陽五行家之說、世之諷詠歌者、大率圓頓四教儀之解、非唐宋諸儒之糟粕、則胎金兩部之餘瀝、非鑿空鑽穴之妄說、則無證不稽之私言、曰秘曰訣、古實之眞傳何有、或進或奥、今人之僞造是多、臣自少無寢無食、以排擊異端爲念、以學以思、不興復古道無止、方今設非振臂張膽、辨白是非、則後必至塗耳塞心混同邪正、欲退則文已漂已晦、欲進則老且病且傭、猶豫無所決、狼狽失所爲、伏此請望、或京師伏陽之中、或東山西郊之間、幸賜一頃之閑地、斯開皇國之學校、然則臣自少所蓄、秘籍奥牘不少、至老所訂、古記實錄亦多、盡皆藏于此備他日之考索、僻邑之士、爲絕難及者、或有寒鄉之客、有志而未果者間多借之讀之、才通一書、百王之澆醨此知、洞覽千古、萬民塗炭可拯、幸有命世之才、則盡敬王之道不委于地、若出琢玉之器、則柿本氏之教再奮於邦、六國史明、則豈翅官家化民之小補乎、三代格起、則抑亦國祚悠久之大奎哉、萬葉集者國風純粹、學焉則無面牆之譏、古今集者諷詠精選、不知則有無言之誡、夫本邦設施學校、權輿于近江朝廷、主張文道、濫觴於嵯峨天皇、菅江家有分彰院、源藤橘和繼起、太宰府有學業院、足利金澤延及、然所藏三史九經、陳俎豆於雍宮、其所講四道六藝、莫蘋蘩於孔廟、悲哉先儒之無識、無一及皇國之學、痛矣後學之鹵莽、誰能歎古道之瀆、是故異教如彼盛矣、街談巷議無所不至、吾道如此衰矣、邪說暴行乘虛入、憐臣愚衷、創業於國學、鑑世倒行、垂統於萬世、

首創難成功、非經國大業邪、縱績易用力、眞不朽盛事哉、臣之至愚、何之知、不敢自讓者、語釋也、國字之多、紕繆、後世猶有知之者、典籍猶存、古語之少解釋、振古不聞通之者、文獻不足、國學之不講、實六百年矣、言語之有釋、僅三四人耳、其爲巨擘、新奇是競、極無超乘、骨髓何望、古語不通、則古義不明焉、古義不明、則古學不復焉、先王之風拂迹、前賢之意近荒、一由不講語學、是所以臣終身精力、用盡古語也、伏以、斯文之興之與廢、固在此擧之取之與捨、願閣下留意幸察、臣東麻呂誠惶誠恐頓首頓首謹言、

〔玉手箱九〕大人嘗て國學校を創立する志ありて、上書して執事に啓するに、未報あらずして歿せり、其志は遂ざれども、其言は傳べし、時人傳に、國學の學校を京師に開かむとて、官の許をうけ、既に地を東山にトするに及びしが、病に罹りて年を經、癒らずして終れり、惜むべし、今の東本願寺の墓地の邊とぞ云へり、本文に云へるとは異なれども、總じてかゝる事はも、まづ執事に就て内啓し、自から此所をと思ふ場所を見て、請白す事にし有れば、内々は其指揮をも受られけむが、未その說立たる命を承らぬ間にぞ歿られけむ、故にかゝる說は有るにこそ、

上荻原近江守書

〔折たく柴の記中〕九月〇正德二年十一日、荻原近江守重秀、其職を奪はれて召籠らる、世の人大きに悦びあへれども、其故をばしらず、實は此年の春三月より、昨日の十日に至りて、我封事を奉りし事三たびに及びしが故なり、其由は事ながければ一二をばこゝにしるしぬ、前代〇德川綱吉の御時に、重秀天下の財賦を掌れるよりこのかた、祖宗の良法ことごとくやぶれて、士民の怨苦しきりに生せし事ども、世の人あまねくしれる所なれば、今はたいふにも及ばず、〇中略朝鮮の聘事をも、重秀仰を蒙りて其事にあづかれり、申行ひし事ゞも、國體においてしかるべしとも覺えぬ事どもなり、客使迎送の料の較媾の一事は、某議し申す事あるが爲に、前例によられて、諸國大名の役には仰下されたりける、〇註略そののち月を追ひて改造りし錢の事ども、世の人申す所ありて、諸物の價も平ならず、此事は過にし營造の御事と、朝鮮の聘事によれりとぞいふなる、古には三載功績を考るなど聞えしに、御代つがれし後すでに三とせに及べども、天下の事體初政の御時にかはりぬとも見えず、此年の三月これらの事どもを論せし封事まゐらせし時に、才あるものは德あ

らず、德あるものは才あらず、眞材誠に得がたし、今に至りて天下の財賦をつかさどらしむべきもの、いまだ其人を得ず、年比重秀が人となり、しらざる所にはあらずと咨仰らる、古より此かた、眞材の得がたき事は申すにも及ばず、重秀がごときは、才德二つながら取べき所なし、しかるをなほ德あらざれども、其才ありと思召れん事、もつとも然るべからざる事ども論じ申て、かさねて又封事奉りて、勘定所吟味の役といふ職おかれん事を申せし事、前に見えし事の如し、此ほど御料私領の者ども、爭論の事に就て評定所に召決する事あり、重秀一人私領のものども皆々其罪ありといひしによりて、衆中敢て論じ辨ふる事なくして事決せず、又此ほど評定所に仰下されし事共をも、衆中にむかひて、仰の旨しかるべからず、論じ申べき事ありといひしにつけて、かかる姦邪の小人、用ひさせ給ふ事の御あやまり十條をしるして、九月十日に封事を奉る、我言の激切なるを聞召驚かせ給ひ、明れば十一日の朝に、詮房朝臣仰を奉りて、重秀職奪はれし由を告給ひたりけり、○中略此人すでに黜けられ、いくほどなく身もまた死したりけれど、其餘毒天下に流及びし事いづれの世に除き盡すべしとも覺えず、中にも軍國の備、その備足らず、財貨の利、其用行はれざる事のごとき、公私の弊害、いかにともすべからず、天地開闢せしより此かた、これら姦邪の小人いまだ聞も及ばず、これらの事ども三十餘年の間、六十餘州の中、しらざる人もあらず、されど兩代の際、當家譜代の御家人など聞えし人々も多かれど、上の御ため身を出して論じ申されしは一人もあらず、我わづかに一臂をふるひ、數寸の管を提げて封事を奉る事やまず、既に三たびに至りぬる際に、たち所にこれを決し去り給ひたりき、後代の人主にはありがたかるべき御事也、その明けの月にはかくれさせ給ひたれば、もしなほ緩々の御沙汰もあらんには、後代には論じ申事もありなまし、あやうかりしほどの事也、古の人、舜の功二十が一に居れりなどいひし事もあれば、その時の詮房朝臣の奉書と、我前後の封事の草をば、我後に傳らんもあしか

らまじ、また我後の人々も、當時君臣の際會をば、思ひわかつべき事なり、

〔續觀聽草三集一〕成島司直上書

根なし艸

乍恐不才淺學之私、老年及格別之御厚恩奉蒙、存附候義不申上候而は、不忠に御座候故、不顧恐憚申上候、かけまくもかしこき大神君御遺訓にも、一人權を執て百事を行ふ時は、年を追て邪曲多くなり、諸人疑ひ恨むる故、主人の威薄くなり、遂には天下國家滅亡のはしとなるとの上意、又たとひ禮法に少々鯱き事有とても、古法を改むる上に付て、多くは禍の出くるものなりと、上意ありしは、ひたと聖人の道に御叶被遊候御敎訓にて、書經に、崇信姦回〔邪曲之臣ニ政なまかせると申事〕屏棄典刑〔代々の規定法度な諸侯事〕と申候は、卽ち此事に御座候、漢武帝は高祖の法を改め、國々に騷動起り、元帝は宣帝の政を改て、漢の代終に衰へ候、か樣の類數々御座候中にも、宋の神宗と申天子は、隨分と政事に心を勵申候良主に御座候處、王安石と申候者一人に國柄をまかせられ候より、安石自分の氣に合候者計をよく取成て、良臣とも申取立、己が氣に不合ざるものは悉く邪佞と申て、追退候故に、呂惠卿李定鄧館など丶申候姦人ども、安石に取入、靑〔〇恐下脱苗字〕保甲免役など丶申、種々の新法を工み出して、大祖太宗の古法を改申候、夫を不可然事と諫言申候者は、政事のさまだけに相成候とて、司馬溫公范純仁など丶申名賢をば、皆退役又は遠國役人に仕退け申候、扨其新法は、悉く民を苦しめ四民いたみける故、韓琦と申賢人身命を拋て强く諫め候故、神宗も心付、新法を相止可申と內評有之候を聞附、安石立腹仕、病氣を申立引込申候、此時新法を止め、安石が執政の役を召放し候て、宋の代彌太平に有之可申所を、趙朴と申候隨分正直成者に候ひしが、彼是と其事を取扱ひ、評義に日數重ね、決斷仕兼候內、王安石出勤致し、新法を愈堅く施行仕候得ば、天下萬民皆怨みはて丶、終には宋の代衰へ、大亂の基と相成申候、當時水野越前守取行候、上地其外御料所改革、

上書受賞

大坂上納金等は、衆人万民苦しみ候由、世上專ら風說仕候、既に上地之御沙汰は相止、武家農商迄一同厚思召難有奉存候、何卒外貳ヶ條も、御沙汰止候樣仕度奉存候、先日越前守申達候書面に、御由緒御座候とも、先祖武功にて拜領之地所も、加削は當時之思召次第之儀と申候は、全く御惡法にても改候と申趣にて、甚如何に相聞え申候、王安石常々祖宗之法恐るゝに足らず、人言厭ふに足らずと申候は、能くも似寄候儀と奉存候、同人是迄氣に應じ取用候、井上備前守、根本善右衛門、羽倉外記、篠田藤四郞、曾根轟右衛門などゝ申人物、全く安石が用候呂惠卿李定等之類と相見へ申候、此節越前守引込候を承り、百姓町人共ははや退役仕候と心得、一同誠に雀躍仕、歡聲閭巷に溢れ候、か樣に衆人に怨惡まれ候者は、一日も早く御取退御座候方靜謐にも相叶、御太平長久之基と奉存候、安石引込候節之如く、同席共評議手間取候內万一出勤も仕候て、一同心服不仕、後には四民共騷立、騷動を引出し可申も難計奉存候、古人の詞にも古より君たるの道は、人心を失ひては、治る事を圖るべからずと申候、こゝは威勢にても辨說にても、押付には不相成候、折かくの上の御仁心を、中にもさまたげ候者は、早く御取退御座候樣奉存候、か樣の儀差出がましく奉申上、恐入奉存候得共、御爲と奉存、赤心を申上候、幾重にも恐入奉存候、敬白、

成島圖書頭司直上

天保十四卯年閏九月

〔續視聽草三集一〕成島司直上書

老のくりこと

有德院樣〇德川吉宗御代、山下幸內と申浪人者、御政事を批判し、存意を申上しとき、年寄共は一統に、浪人の身にて、ケ樣なる無禮の義申上候事不屆なれば、御咎被仰付べきにやと申上ければ、たとへ下賤の身にて、無用の事申上たりとも、上の爲にと存、申上たる志しをば、稱美すべしと仰ありて、御褒美に白銀を下さる、是等を昔夏の禹王、善言を聞たびに拜されしと申聖人の振舞と、千古

上書訴狀

同轍の思召にて、難有御事と奉存候、

〔今昔珍說落穗集〕享保六丑年中、浪人山下廣內上書之寫〇本文略

右靑山住、久保町之浪人也、捧書入評定所箱、書類武門大和大乘と云謙信流の軍學者のよし、信用に足らす候得共、申度事少しも無遠慮申上候、然處御黑書院溜の間へ御老中御列座にて、寺社、勘定、町奉行、其外諸役人被爲召、被仰渡候者、廣內は輕き者に候處、奇特に被思召候、ケ樣之義御聞被遊、御機嫌ニ被思召候、各事は其役人に候處、終にケ樣之義不申上候、夫に付廣內諫言も爲御見被遊候よし、三奉行方には寫置よしに候、扨々上之御度量廣き事、乍恐奉感候、皆承者さへ推參之申樣など、不快に見へ候處、一向に無御構、却而御機嫌に被思召旨、御老中諸御役人に被仰渡候事、中々凡慮難計事にて、諸人奉感候、廣內に者御褒美として白銀を賜ふよし、

〔有德院殿御實紀附錄〕三評定所の匭函に投じたる封事ども御覽せられし中には、叡慮にかなひ御用ひありしことも少からず、〇中略留守居島田彈正忠政辰が配下の山本庄右衞門某といへる老人、御家人の困窮を救はれん事を其司によりて聞えければ、目付木下淸兵衞信名をもてこれをたゝされしに、申所ことはりにかなひしかば、やがて褒美を賜はりけり、

享保七年十一月、伊奈半左衞門忠逵が隷する、角田川小梅村の農民庄藏といへるもの、匭函に三册の書を投じて、民間の利病、代官の得失を獻言したり、〇中略さて半左衞門を召て、汝が支配所の民、こたび匭函に投じて獻言せし事あり、其書の尾に、三日の間は府內にあるよしあれば、いまだ家にはかへらじ、速に汝がもとによびて、よくも神妙に聞えあげたるよし褒詞を加ふべし、あなかしこ、あら〱しくないひそとのたまひしとなん、

〔應仁記〕一熊谷訴狀之事

其比近江國鹽津ノ住人、熊谷ト云奉公ノ者アリ、智仁勇ノ三德ヲ兼備ヘテ、文武ニ惑ヲ不懷者ア

ヲ、當代ノ御政道ノ不正事ヲ愁テ、密々諫言ヲ綴テ、目安ノ狀ヲ進上ス、義政將軍被御覽、金言忽ニ逆耳ニヤ、大ニ瞋リ、其諫ル處ハ一トシテ雖不違道、非其司ニシテ法ヲ行ヒ、諫言ヲ納ル、條猥藉是也、史記云ク、其人ニアラズシテ其官ニ居ス、是謂亂天下トテ、所領ヲ沒收セラレ、熊谷左衞門、其身ヲ追放セラレケルゾ淺間敷ケレ、

〔熊澤了介先生事跡考〕憲廟〇德川綱吉又先生の經濟に長せし事を聞しめさられしにや、日向侯〇古河侯松平日向守信之に命有て、先生を古河に召しめたまふ、貞享四年丁卯秋八月、先生古河にゆく、侯の敬禮登篤し、同年冬十月、江都に封事を奉り、海內の政務を更始せんとす、大に旨に忤ふこと有て禁錮せらる、

嘗世天和二年、堀田備中守正俊大老たる時、先生を江戶に召したることありといへど、內密の事なるにや、此書には見へず、貞享二年、先生池田綱政朝臣を直訴せしことあり、又此封事を取次し事に付き、大目付田中孫十郞友明、貞享四年十二月九日、御役召放さる、是は先生の門人也、同役河野權左衞門も、同日御役召し放たり、此封事は、今の世に行はるゝ大學或問のこと也と云ふ、

〔先哲叢談三〕熊澤伯繼、字了介、介或作助小字次郞八、後更助右衞門、號蕃山、又號息遊軒、平安人、仕備前侯、〇中略

明石侯本師尊蕃山、禮遇甚厚、後侯移封古河、蕃山從移之、未幾遂以言獲罪大府、乃被幽于古河、

〔有德院殿御實紀附錄三〕かく下言をもとめられしかど、令にそむき罪せられしものも亦多し、深見新右衞門玄岱儒役が子某、才學あるものなりしが、封事をかの匭函に投じて獻言したるに、凡家人たる者は、おもふことあらば、其司につきて聞え上べき事なり、農商とひとしきふるまひせるはひがことなりとて、重き御咎を蒙り、〇下略

雜載

〔植崎氏上書〕右植崎氏之上書、天明中、白川侯執政之時ニ建言シ、又白川侯退職ノ後ニ建言シ、遂ニ罪ヲ得テ片桐侯ニ幽セラレ、文化四年ニ泉州小泉ニテ物故セリ、政府殊更ノ採用ナシトイヘドモ、後來ノ政治、植崎氏ノ言ヲ用ヒ玉ヒシコト少ナカラズ、　大塚靜識

〔鳩巢小說上〕一權現樣〈○德川家康〉御時、誰ヤラン存寄書付候テ、一封ヲ御前江持參アリ、內々申上度義共書付申候、御覽遊サレ被下候樣ニト申候ヲ、御開被遊候テ、夫ハ某ヲ諫メ申趣ニ候哉、唯今夫ニテ讀候得ト被仰候、其時其人封ヲ切テヨミ申候條每ニ、何ノ事ト申時、必一ケ條〳〵ニ御手ヲ組レ候テ、尤成事ト御感被成候、夫ヨリシテ奇特成事過分ニ思召候、其書付此方エト被仰候テ、御取被成候、其節本多佐渡守モ侍リ、聞被申候、右ノ人立テ後佐渡守ヘ如何存候哉ト被仰候得バ、アノモノニハ相應ニ御座候、ヒトツモ御用ニ立申儀ハ無之候、モトヨリ其節被仰候ハ、イヤ〳〵左樣ニテハ無之候、元ヨリ才ノ及ザル所ハ無是非候得共、多年此方爲ニ可申ト存候テ、ケ樣ニ心ヲ附候事、此方承候得バ、大ニ感ジ不申候テハ叶ヒ不申事ニ候、夫ヲ左樣ニ何ノ用ニモ立不申抔トハ、申間敷候ト仰ラレケル

〔東照宮御實紀附錄十九〕江戶へうつらせ玉ひし頃、〈○德川家康〉角田河邊へ鷹狩をさせられしに、北條が頃より江戶に住居せし處士何がし、御路の傍に進み出て、己が意見かきし申文を捧たり、これを御覽ありて何とも宣はず、されど御前を憚らざるとて、囚人の事司る石出帶刀が屋敷の內にいましめおき、日數經て後、その者いかゞせしと尋玉ひしに、しか〳〵のよし申上れば、かれ刑法を犯せしといふにもあらざるを、永く囚獄せしむるは不便のことなり、速に放ち出すべし、かれ我治法の北條が時と變りてよからぬよし、數ヶ條書連ねたれども、一條として用ゆるに足らざれば、申文もたゞそのまゝに捨置しなり、何ぞ一條もその中に用ゆべき事あらば、はめて遣さんとおもひしに、えうなき事のみかいたるはとて、ほゝゑませ玉ひしとぞ、

古事類苑

政治部五十七

下編

印

印ハ後ニ印形、印判、又ハ判物トモ云フ、判物ニ朱印アリ、黑印アリ、印肉ノ色ニ依リテ其名ヲ異ニスルモノナレドモ、希ニハ華押ヲ以テ黑印ト稱シ、此ヲ朱印ヨリモ重シトスルコトアリ、加判、奧判等ハ、專ラ他人ノ行爲ヲ證明スル時ニ捺印スルモノニシテ、繼印、割印ハ豫メ文書ノ錯誤ヲ防グニ用ヰル、

爪判ハ又拇印ト云フ、拇頭ニ墨ヲ塗リ、爪ニ係ケテ之ヲ印スルモノニテ、專ラ書ヲ解セザル人ノ間ニ用ヰヲル、血判ハ小刀又ハ針ヲ以テ指ヲ刺シ、其血ヲ以テ書券ニ捺スルモノニテ、手印ト等シク之ヲ盟約ニ用ヰタリ、印ノ事ハ尙ホ上編印篇ヲ參看スベシ、

〔書言字考節用集器財七〕印(イン)、判(ハン)、印章(インシヤウ)、漢官儀二千石以上銀印、其文曰章、

〔書言字考節用集器財七〕黑印(コクイン)、朱印(シユイン)

〔名物六帖器財一印章符牌〕紅印(シユイン)正明宗律　黑印(コクイン)上同

〔安齋隨筆前編十四〕一朱印と今時いふは誤り也、古は印は皆朱印也、黑印は近代の事なり、黑印といふ事出來たる世に至て朱印といふ詞あり古は印とさへいへば、いづれも朱印也、されば古書には印とばかりあり、朱の字は無之、金澤文庫、佛書には朱印、儒書には黑印なり、黑印も近代に非ず、

〔萬金產業袋印一例〕朱印肉もぐさ拾匁五度計煎じ、日にさらし、くろみをとりて、本朱、入來おらんだ蝋、味噌少ごまのあらし

ぼり壹合、鱗と油と一所にせんじ、もぐさ朱をいれ、よくつくべし、　黒印肉もぐさ拾匁、木ゆゑん五分、さらし蠟貳分、ごまの油壹合五夕、かたべに貳分、調合、右朱印肉同斷、

〔機務寛要　二〕寛政十二申年八月二日

一宗對馬守ヨリ御目付松平田宮江問合之由、持傳之印形靑肉用候而も不苦候哉之旨、定ニ而も有之哉之旨、答、靑肉之儀御定と申儀者無之候得共、公邊ニ用候者、黑肉之方ト存候、

右之通存寄無之哉と自分相談、有合河内守佐渡守へも見せ、存寄無之旨及挨拶、

〔信綱記〕一家光公御代、俄に御朱印押候事有之砌、總じて御朱印を押候には、紙の下に木綿わたを敷、押申ねば印肉付にくし、然ども俄に木綿わた無之故、已に町へ可申遣處に、松平伊豆守殿○信綱聞之被申候、御納戸に長崎より來り候御道具につめたる木綿わた可有、是を取出し候樣にと有之て則たづね、たくさんに持來、是を敷、朱印押候へば殘所なし、

〔甲斐國志百十九附錄〕西郡加賀美村法善寺所藏、他寺社所藏御判物者多カラズ、尋常所賜ハ福德御朱印、但取次人名ナキ者ハ稱之御直判ナリ、諸士ニモ賜之、

甲斐國法善寺領加賀美内九拾八貫六百文、寺部内壹貫文、藤田内壹貫百廿文餘、加賀美中條内壹貫五百文等之事、

右所令領掌不可有相違者、守此旨被可抽國家安全之精誠之狀如件、

天正十一年四月十九日　家康押花

法善寺

〔寺格帳上上〕高九千四拾石御朱印物　内貳百石御靈屋料

同高千五百石　方丈領

同高貳百石　隱居領

增上寺大僧正

南禪寺 京五山ノ上 東山 深雲友

〔寺格帳下〕高八百九拾貳石餘 御直判

〔伊勢貞助雜記〕一御内書に御朱印おされ候事候哉、おもてむきの御内書に、朱印の御事不致覺悟候、又古府案にも不及見申候、琉球國へ御朱印をおされ候御事は、勘合と申て各別の御儀にて候、大唐琉球高麗此三ヶ國へは勘合と號して、彼三ヶ國より調進申、其をおされ候事候、下々にわりふなど丶申やうなる儀候、此勘合法住院殿樣〇足利義澄御代に紛失仕たるによりて、式々の唐船無渡海候、然を大唐の勘合ばかり大内義興再興被申、其勘合は大内家に被預置訖、是は各別之儀候、御内書に被捺御朱印儀は、面向に如何と不審候、自然之御用ニ、御印をば慈照院殿樣〇足利義政代に渡唐船の時、大唐にて調進候を貞宗致進上たる旨注置訖、御内書に被捺段は不相見候也、

〔幕朝故事談〕公方家大名在所への御奉書は、老中連印かき判なり、人楽を出し候得との御掟は御黑印也、御黑印と云は花押の事也、文字は御名乘なり、御三卿樣御領地被下の節は御黑印なり、御黑印が御朱印より重し、

〔印章私記〕晉閣嘉祥寺古文書二年七月〔品三年口月〕有用墨印者、按唐六典、左藏令掌邦國庫藏之事、凡出給先給、先勘木契、然後錄其名數、及請人姓名、著印送監門、乃聽出、若外給者、以墨印印之、疑用此製者矣、

〔甲陽軍鑑品第二十七〕古信玄公廿三歳の御時、駿州より山本勘介を、百貫の知行と定てめしよせられ、御對面の其座にて、二百貫の朱印を被成下、

〔甲陽軍鑑十九品第五十〕天正元年五月より、其年中に諏訪富士戶隱を始、五ヶ國の諸社諸寺へ、勝賴公繼目の御朱印出る也、

〔大友記〕石松源五郎立花ノ城ニ參ラル丶事附戶次道雪御老中へ申遣ル口上書之事

宗麟公御上洛ナサレ、秀吉公ニ御目見ナサレ抑大友ハ、代々九州ノ探題職ニテ候ニ、此八九年ガ

間、龍造寺秋月等ソレガシヲ背キ、己ガホシイマヽニ所領ヲ妨グ候、其外ノ諸侍、朝ニハ秋月ニ組シ、夕ニハ龍造寺ニコヽロヲアハセ、其身耻ヲモカヘリミズ、表裏バカリニテ侍ノ義理ヲシラズ候中ニ、立花ノ城主戸次道雪、高橋紹運ト申者、名ヲ惜ミ義ヲ專ニシテ二心ナク數箇年籠城仕候、ハデアル侍ニテ御座候間、殿下ノ御家人ニモ被成ベク候ヤラント仰アグラレケレバ、關白ヤガテ可被召出トノ御朱印ヲゾナシクダサレケリ、其後宗麟公御下向マシ〳〵テ、道雪紹運ヘ彼御朱印ヲゾ下サレケリ、誠ニ弓矢取身ノ面目カナト、皆人ゴトニ羨ミケリ、

〔古文書類纂上御朱印并御判物〕慶長十三年加藤清正領知宛行狀肥後北里文久太郎所藏

宛行所領之事、全城郡赤見村之内を以、百五拾石遣之候、全令所務可抽忠勤之狀如件、

慶長十三年八月廿六日　　清正黑印

北里左馬殿

〔古文書類纂中解〕後水尾天皇元和元年江州諸浦總代願書近江滋賀郡堅田漁士共有

乍恐申上候

一信長樣御代より、御公儀御役儀仕候ふねは、みなとへつきに着次第、荷物積候へと被仰付、御朱印被成下候御事

一太閤樣御代にも、如先例御朱印被下候御事、

一御次目の御朱印之儀、先年石見殿迄申上候へば、御氣嫌次第可被仰上とて相延申御事、○中略

右條々被仰上、御次目の御朱印被成下候はゞ、忝可奉存知候、以上

卯七月日　　江州諸浦總代堅田村花押

進上御奉行樣

〔武家嚴制錄一〕新院御所御條目○條文略

承應四年正月十一日御。黑。印。

〔伊達家文書〕被仰付御法度之覺〇中略

右之通之仰渡、慥ニ承申候、此組中ニて、右之御法度相背申者御座候者、則可申上候、爲其連判仕、書物上申候、以上、

明曆貳年

二月十四日　　紺野半十郎黑。印。花押。

松木正九郎黑。印。花押。〇以下二十四人略

堀越甚兵衞殿

柳生權右衞門殿

〔享保集成絲綸錄十三〕寛文五巳年三月

覺

一御當家御三代之御朱印所持之寺社之輩勿論、御兩代之御朱印頂戴之分迄、不依寺社領之高下ニ、繼目御。朱。印。可被下之事、

一御一代之御朱印頂戴之寺社領者、先五拾石以上之分、御朱印可被下候事、

一寺領無之、境內計之御朱印雖在之、於一宗之本寺は、繼目御朱印可被下之事、

右之通被仰出候間、面々領分在之寺社之輩、今年六月中、江戶江先御代之御朱印持參候樣ニ可被相觸之候、紙面之外者重而可爲御沙汰之間、不及參府之旨、堅可申渡之者也、

三月〇中略

寶永七寅年十二月

覺

一萬石以上之面々江、領知之御判物御。朱。印。被下付而、安藤右京進、〇寺社奉行松平備前守、〇奏者番可相改

旨、被仰付候事、

一御代々之御判物御朱印所持之面々者、御判物御朱印に寫を差添出之、右兩人御本書拜見之上、寫を可留置候、勿論國郡鄕村高辻帳面可被差出之、御朱印無之面々者、領知之高、國郡鄕村委細書注、兩人江可被相渡之事、

一御加增拜領、或所替之面々、或御判物御朱印高之內、領知分候面々、其旨具書注、兩人迄可被達之事、

右之外可相伺儀者、兩人江可被承合候、以上、

十二月○中略

寬保元酉年九月

御勘定奉行江

淺岡彥四郎御代官所
信州水內郡西條村百姓

銀拾枚　安之丞

判物所持罷在候由ニ而、此度差出候權現樣御朱印ニ付、公儀ニ被留置候、依之白銀被下之候、

松前隼人知行所
武州兒玉郡兒玉村

銀拾枚　平野治左衞門

判物所持罷在候由ニ而、此度差出候台德院樣○德川秀忠御黑印ニ付、公儀ニ被留置候、依之白銀被下之、○中略

右之者共、當地江呼寄可被申渡候、松前隼人知行所之者は、隼人方江可被達候、尤御納戶頭可被談候、

九月

寛保三亥年十月

松平大和守　松平秀之助　土岐丹後守　牧野備後守

酒井雅樂頭　榊原小平太　松平越中守　太田攝津守

黑田大和守　松平鍋次郎　戸田大炊頭

右之面々、領知御。朱。印。改可被下候間、郡村相改書付可被差出候、

一右之外々も、村替等ニ而、御朱印改可被下面々有之候ハヾ、人別書立可被相伺候、

十月

上州緑川　永德寺

〔寺格帳上天台〕

御朱印高五拾石ト申傳、地面ハ有之候得共、御朱印寛永十二亥年、自火ニ而燒失無ニ御座候、其後御書替相願候得共、御書替不被成下候、天和二年、又々自火ニ而燒失故、留帳等無ニ御座候、御書替願候節之譯不相知候、御朱印

高五拾石

〔甲州巨摩郡若神子村正覺寺御朱印燒失一件〕口上覺

一大猷院樣　御朱印

一御代々樣　御朱印

都合九通、高五石、

右者甲州巨摩郡若神子村正覺寺儀、去十月六日夜七ッ時頃大雨中、何ニもの之所業ニ候哉、同寺庫裏裏江建置候寶藏之壁伐破り、内江火を附逃去候ニ付、住持禪峯折節病氣ニ有之候得共、早速心附、御朱印等持出度與存、火煙之内江駈入探鑿仕候得共、猛火一面ニ相廻り氣絶仕、前後不弁、漸被引出、終ニ寶藏燒失仕候ニ付、近末擅中拙代壁村役人一同立會、燒失之品々取調仕候處、燒殘之品茂有之候得共、第一頂戴仕罷在候御朱印之儀、二重箱ニ御納、大切ニ守護仕置候得

共御箱之儘所在一切無御座、乍恐燒失ニ候哉、紛失ニ候哉、何ニ共難決、深恐縮仕罷在、禪峯儀者、素々病氣之處、大切之御朱印、右樣之次第ニ付、心痛之餘り、病氣差重り狂氣同樣之姿ニ罷成、無餘儀、代兼末寺惣代同國同郡穴平村見明寺等、甲府御代官加藤餘十郎殿江、別紙寫之通御屆申上候處、御朱印之儀者、早速日限尋方被申付候段、國録廣嚴院大泉寺江屆出候間、右住持禪峯儀者、深愼申付置、右當寺ゟ別紙寫之通役僧を以、國録共心得方伺出、拙寺共ニおゐても深恐入候儀ニ奉存候、依而篤与糺明仕、御屆可申上儀ニ御座候得共、遠路懸ヶ隔旁急速行屆不申、御屆向延日仕候而者、別而奉恐入候間、此上如何指揮仕候而宜敷儀ニ御座候哉、何卒格別之以御慈愛、御指揮之程奉願上候、以上、

亥〇文久三年十一月

富田　大中寺

寺社御奉行所御役人中〇中略

御答附之儀

元加藤餘十郎當時福田下總守御代官所
甲州巨摩郡若神子村　曹洞宗正覺寺

禪峯

右天保四巳年、間部下總守寺社奉行之節、伺之上御答申附候、

御朱印地豆州伊豆權現別當古義眞言宗般若院大空儀、伊豆權現御朱印、幷關東古義眞言宗ニ被下置候御條目、前々ゟ預居候者、大切ニ守護いたし、火之元之儀も精々入念候樣可申付處、內佛ゟ及出火、殊ニ御朱印御條目等迄、不殘燒失いたし候次第ニ相成候段、病中とハ者乍申、右始末不埒ニ付、三十日逼塞申付候例ニ見合、三十日逼塞与御答附仕候、

子〇元治元年七月〇中略

乍恐以書付奉嘆願候

一甲府御代官御支配所、同國巨摩郡若神子村曹洞宗正覺寺蘿峯奉申上候、拙寺儀、寛永十九年、同國同郡同村之內高五石、大猷院樣ゟ御朱印奉頂戴、其後從御代々樣、如先規御書替被成下、都合御朱印九通頂戴仕、乍恐御武運長久國家安穩、長日御祈願無怠慢勤行仕、難有仕合奉存候、右御朱印之儀者、桐武重箱幷納置長持之內江奉安置、尤同長持之內江寺附大切書類共入置、兼而土藏之內江入奉守護置候、然ル處去ル春中ゟ、拙僧儀病氣ニ而引籠、藥養罷在候折柄、同十月六日夕刻、用事有之、隨侍之僧燈灯持參ニ而、土藏內江出入仕候節、火氣散居候哉、同夜七時頃、右土藏中ゟ及出火、乍病中驚入、早速ニ寺內之者呼立、土藏伐破り、寺中人數取掛り、防方仕候得共、折惡烈風ニ而防兼、乍恐御大切成御朱印九通不殘奉燒失、恐入罷在候、早速右之段、御支配御代官所幷國錄所江相屆、其上國錄添簡を以、觸頭大中寺江、相屆、同寺ゟ添簡ヲ以、御用番松平攝津守樣江御屆申上、尤燒失之砌拙僧病氣ニ付、代同州同郡穴平村見明寺僧道、末寺揔代清泰寺本曉、村役人揔代名主藤吉、右三人出席仕、於御同役樣、右始末御糺中、拙僧於國許御墨印幷寺附隨意會免牘共燒殘形、灰中ゟ見出候ニ付、乍病中押而出府仕、右品形ヲ以、御屆申上置候處、追て御吟味中、御同役樣被爲遊御退役候ニ付、當御奉行所ニおゐて、右始末再應御吟味之上遂塞被仰付、深相愼罷在候處、去九月十二日御免被仰付、難有仕合奉存候、右御朱印御書替御下ヶ之儀御願奉申上候茂、深奉恐入候得共、拙僧儀拙寺開山以來先代歷住、豎末代迄之不幸、此上茂無御座候、向後寺務相續茂難相成、拙僧儀も多病ニ御座候得者、餘命難計、旦夕種々心痛仕候ニ付、不顧恐多奉願上候、何卒格別之以御慈悲、高五石御朱印御書替頂戴被爲仰付置候樣、偏ニ奉願上候、前條之始末柄被爲聞召譯、以御憐愍何卒御書替頂戴被爲仰付被下置候樣、幾重ニも奉歎願候通、御聞濟被成下置候はゞ、生々世々、廣大之御仁惠如何計歟難有仕合奉存候、以上、

元治元甲子年十二月

甲府御代官御支配所
甲州巨摩郡若神子村曹洞宗正覺寺

禪峯印

寺社御奉行所御役人中○中略

同○慶應元年二月廿七日

一今日釆女殿内寄合江出席可致處、於増上寺有章院様御法事ニ付、同所江相詰候ニ付、左之申渡、表以手紙頼遣ス、

訴訟

若狹守掛

一　普門寺

甲州巨摩郡若神子村
曹洞宗正覺寺病氣ニ付代

出席　富田
大中寺

去亥十月中、自坊土藏より出火之節、御朱印燒失ニ付、御書替被下候様仕度、願之儀ニ付、御老中（朱書）江伺上、追而御序之節、可被下置、

掛（朱書）り出席無之ニ付、其旨掛江可届、

（駿河國西伊太村靜居寺御朱印染汚出來候一件）子十二月廿一日

一左之通持參　可睡齋

役人請取置

奉伺口上書之事

一拙齋支配下、駿州志太郡山西伊太村靜居寺儀、去十一月廿八日寅之上刻頃、本堂誦經中、何ものの歟忍入、方丈之床ニ置候御朱印箱持出し、御本紙取散し、内壹通御當代様御分染汚相出來、奉恐入候段、別紙書付之通届出申候、

右者不容易御品ニ付、如何取計仕候而可然哉、乍恐御伺申上候、何卒宜御指揮奉願上候、以上、

元治元甲子年十二月　　遠州　可睡齋印

寺社御奉行所〇中略

同〇慶應元年六月廿七日

一左之通、於評席直申渡、畢而於證文取、役人出席、請證文爲讀聞、印形取之、

申渡　　駿州西伊太村　靜居寺　天威

其方儀、於本堂讀經中、何ものニある哉、居間床上ニ差置し御朱印持出し、絲染汚出來る次第ニ至ル段、畢竟心附方等閑故之儀、右始末不埒ニ付、急度叱り置、

但御朱印者、其儘大切ニいたし置べし、

右申渡之趣、證文申付ル、　　遠州可睡齋代　龍昌寺　大宗

右之通申渡ス間、得其意、證文江奥印いたすべし、

實印

〔德川禁令考六十戸籍〕人別送之事〇中略

本文名主共、實印可仕儀ニ御座候處、一體是迄他國之者共、御當地地面所持致候者も有之候間、他國江追々數通印形差出置候儀、何共追年心配仕、殊送書ハ當人相渡差遣候儀ニ付、可相成候ハヾ、押切印形仕置申度、一同再應勘辨仕候上、此段御聞濟奉願上候、

六月　　組々名主共

下ケ札〔書面申立候趣一應尤之筋にハ候得共、在方免許、狀等之見渡も有之候間、實印之方可然候、〕

加判

〔御定書百箇條〕寬保三年極追加 御料一地頭地頭違出入幷跡式出入取捌之事

一加判人有之、徧成讓狀、幷加判人無之候とも、當人自筆にて、印形無相違、書面怪敷儀も無之にお

ゐては、讓状之通、跡式可ㇾ申付、尤格別之筋違に候はゞ、吟味之上、筋目之ものえ可ㇾ申付事、

〔享保集成絲綸錄四十四〕元祿十四巳年九月

覺

一家屋敷書入之儀、名主、五人組加判無ㇾ之、相對之證文ヲ以、手付金請ㇾ取之ニ付、二重に書入候も有ㇾ之、旁不實に相聞候間、向後名主五人組加判無ㇾ之、相對之家質證文之類は、公事相ニ成候共、裁許及間敷事、〇中略

右之趣堅相守之、令ㇾ違背ㇾ候はゞ可ㇾ爲ㇾ曲事者也、

九月

〔明良洪範九〕台德公〔德川秀忠〕御代ニ、公家衆參向ノ事アリ、御馳走人ハ山崎甲斐守ニ仰付ラル、此甲斐守ハ、至テ正直成人、心ニ思フ通リヲ辭ニ述ケル故、人ニハ一コク者トイハレケル人也、此度御馳走役相濟ンデ、右入用ノ帳面ヲ御勘定方ニテ仕立テ、山崎甲斐守ニ印形押レヨト云、是ハ先例ナル由、然ルニ甲斐守答テ、御馳走役ハ上意ニ付相勤候へ共、其入用御帳面へ吾印形ヲ押ス事ハ仕間敷候ト云、御勘定方色々申サレケレド、一向承引ナク、入ル出ルノ儀ニ與ル役ハ、我仰付リシ事ナシト云、御勘定方モセン方ナクシテ歸リケル、甲斐守立腹ノ餘リ、卽時ニ老中土井大炊頭方ヘ行キ、右ノ始終ヲ語リ、右ノ儀ニ付、我等印形仕ラズト、立腹ノ餘リアラヽカニ云ヒ、張ヒヂシテ大炊頭ノ顏ヲ見詰テ居ル、此時大炊頭至極落付キ、靜カニ答テ、甲州ノ申サルヽ所至極尤也、上樣ニモ左樣ナル儀ヲイカデ貴殿ヘ仰付ラルベキヤ、夫ハ貴殿方ノ用人ニ印形致サセ然ルベシト云、甲斐守モ心解シ樣子ニ、成程左樣ニコソ有ベキ事ナレト、帳面取寄セ、用人ヲ呼寄セ、印形致サセケル、其時大炊頭再ビ曰、貴殿ノ用人ハ陪臣ノ事故、貴殿奧印有ベシト云、甲斐守、御尤也トテ、奧印シテ相濟ケル、其時大炊頭落付テ靜カニ答シト、又答ノ初ノ辭ニテ、甲斐守ガ立登リタル心モ

奧印

代判

鎮リテ、カク滯リナクコト濟シト也、是ハ土井ガ用人大野甚兵衞其座ニ居テ聞シト話サレシ、

〔德川禁令考後聚五 制禁布令〕元文五申年

年貢諸役村入用等帳面印形可取置旨之儀ニ付御觸書

一諸國村々大小之百姓共、年貢幷諸役懸り物、或村入用等に至まで、毎年名主組頭、念入帳面にしるし、總百姓立合、勘定無相違においては、銘々印形取置可申、尤名主組頭も右帳面ニ奥判可仕事、

一右者定りたる事たりといへども、端々には年來之仕くせを以、毎年勘定帳面、總百姓印形をも不取置、出入に及び候儀、間々有之候條、自今以後、此旨急度可相守事、

右之趣、知行村々江可相觸候、若此以後出入におよび候節、遂吟味、件之觸書不致承知村方有之候はゞ、地頭可為越度候、以上、

九月

右之通可被相觸候

〔大坂堺問答乾〕一出入中異變之事

一相手代判付之者ニ候處、代判致病死、跡代判無之內、及出入候時は、跡代判極次第願出候樣申渡、出入中代判致病死候ハヾ、出入引上代判極候上可願出旨申渡候、

此儀訴狀差出候處、相手代判致病死、跡代判未極旨斷出候ハヾ、對決差日迄ニ跡代判極候樣申渡、代判人極候ハヾ、訴狀帳取替遣、其儘爲請申候日切中押込中ニ致病死候ハヾ、右切日迄ニ代判極候樣申渡、極候ハヾ、殘日數濟方申付候、都而出入中、代判致病死候節は、本人病死いたし候節取計同樣ニ御座候、○中略

一代判ニ而之願付有之、其者身分ニ付、外吟味筋有之、入牢所領等相成候而も、自分之願同樣前ヶ

依之通可申付候、

此儀代判ニ而も無差別前ヶ條同樣ニ御座候、

但出入中之方、代判人之身分取引銀出入ニ而吟味筋之方は致代判罷在候家ニ付候儀等ニ候ハヽ、其品ニ寄、御書面之通於當表同樣取計申候、

〔大坂要用錄五〕病身ニ付代判附願一件

乍恐口上

何町
何屋誰

一私儀町内にて住宅名前之家屋鋪何ヶ所所持仕罷在候處、近來打續病身ニ付、月行司ニ相當り候節難相勤候ニ付、此度親類共相談之上、名前其儘差置、親類續之もの或は別家手代何町何屋誰と申もの代判ニ仕、万事爲相勤申度奉存候ニ付、乍恐奉願上候、何卒右代判附之儀御聞屆被爲成下候ハヽ、御慈悲難有可奉存候、已上、

年號月日　誰

代判人　何屋誰

右之通相違無御座候ニ付、乍恐倶々奉願上候、已上、

年寄　何屋誰

御奉行樣

右御月番地方御役所江願上候處、御聞屆被爲成下候、

〔德川禁令考後聚十二行刑條例〕人別帳にも不加、他之もの差置候御仕置之事○中略

比例罪

安永二巳年御渡

縫印割印

大坂町奉行伺

養父を殺し附火いたし候一件之内

長堀茂左衛門町備前屋長左衛門家守錢屋□助幼少ニ付代判次兵衛

〔名物六帖 器財一印章符牌〕全印 半印ワリノインスミヤキヒノイン 共同上○ 角印 明律正宗○ 縫印ツギメノイン 未信編、夾入寘收、粘連成卷、向下鈐用縫印、收貯備考、律例類抄、其據紙、兩用縫印、鈐蓋 面印オモテノイン 仕學大乘、點者例八內、一面印、一背縫印、 背縫印ウラノツギメノイン 見上

〔室町家御內書案 上〕一加賀國石河郡——事 校正事

天文十二年十二月二日　左衛門尉 在判

大和守 在判

高木民部丞殿

校正事、裏ノ續目ニ判形在之、爲兩人可然上未次第也、就之兩樣アリ

〔徂徠集 十五 紀行〕峽中紀行下

十五日、○寶永三年八月 五更發取道板墻、當過惠林寺、訪鹽山上天目也、○中略 僧語、此地爲牧莊、或號馬城、始爲源道蘊邑、世所稱二階堂出羽入道者也、道蘊請疎石開山、務室前心字池、卽國師遺蹟、往視右二點、爲沙土埋所沒矣、及機山時、從正法請快川來住持、在永祿六年、而封劵署七年、請出觀之、其文詞極恭、量田帳籍心縫處、印福祿二字、圓徑八分許、總計處精字、亦圓一寸二分、蓋當時鄉有司所用官印、皆色朱、今俗間所罕見也、

〔知行所申渡條目〕定

一百姓面々作り前之年貢、又ハ小作前之年貢、庭帳ニ其納候分ハ、其所々ニ而、其百姓ニ判形いたさせ、名主組頭方よりも、其小百姓方へ度々に請取いたし可相渡候、庭帳之とぢ目にハ、役人幷

封印

名主組頭、其日出合申五人組、内外に急度押切判可仕候事、○中略

寛保三癸亥年四月

武州入間郡鹿下村○以下三村略　同國男衾郡甘粕村○以下二村略　右村中

鮎瀬登與次○以下二人姓名略

〔地方凡例錄 七〕一諸帳面寸法之事○中略

一御勘定帳 竪壹尺四分 横七寸六分 綴目外七分　紙厚程村、袋綴、

但綴目御老中御調印有之に付、平生綴目切付張にて、綴目不高樣に致す、

〔紀侯言行錄 中〕小笠原右近大夫忠政より、壺胡籙贈られし事

御約束ニ而、小笠原右近大夫忠政より、壺胡籙矢榥など箱ニ入、封印して被進上、

〔勸契備忘記 中〕正德五未年

元方拂方御金藏役人納拂等勤方定書○中略

一御金藏納拂定日者勿論、臨時納渡有之節も、御金奉行相揃可有出勤候、元方拂方共に御藏開候度々、同役立會、封印改之上開可申候、壹人して開間敷候、御用相濟候はゞ、同役中申合、萬事念入申付、御藏幷總圍之門封印共、前々之如く、元方御金奉行、拂方御金奉行立會、念を入相封致置可申候、○中略

一御藏金銀包紙、又者上箱封印損候節、包改直候事、後藤幷大黑屋長左衛門等御藏へ呼出、於御藏包直、封印をも仕直候樣致、少にても爲包改之、町人共へ渡置候儀堅可爲停止事、

〔二條在番中手留〕文政三庚辰年十一月廿二日

一今日御金藏封印切替候に付、出雲守同道にて、直に同人小屋江罷越、平服に被成候、無程御門番頭御藏奉行御殿番重野長左衛門、同見習三輪市十郎被參候間、先江罷越候樣申達候處、御門番幷御藏奉行には殘り被居候、我等共御門番衆連印之封、扣共四枚、我等方にて認持參致し候に

血判

付、各調印致し候、

〔書言字考節用集 九言辭〕血判（ケツパン）神文所用

〔貞丈雜記 九書札〕一後代世の風俗惡く成りて、僞あるゆゑ、世の人物事うたがひふかくなりしに依て、名ばかり判ばかりにては證據にならずとおもひて、判の上に名乘を書せ名乘の下に判をかかせて取る也、今世にてはそれにても猶たらずとおもひて、名乘と判との傍に印をおさせて取る也、それにても猶たらずして、誓詞起請文には、名乘判印の上に血を出してぬる事になりたり、

〔要筐辨志 二〕諸家の規則

一御代替之節、諸大名誓紙之儀、御老中御役宅、萬石以下評定所、大名衆誓紙之節、右以前ニ公用人、塗置ニ沺杯持出之、水手を遣ひ候樣申候、夫より直ニ誓詞之事、是被取込候節、血判不成衆杯多ある事也、依而血出易を以、如斯せらるゝ也、〇中略

右何も自分差料之小柄ニ而、誓詞被致候事、

〔甲子夜話 六〕誠嶽君 諱誠信 肥前守 淸〇松淸ニ語ヒ給ヒシハ、我ハ御代替ノ誓詞ヲ、兩度マデ老職ノ邸ニテ爲タリ、其時坐席ニ小刀ヲ用意シテアルガ、其小刀ニテ指ヲ刺セバ、出血コヽロヨカラズシテ、血判アザヤカナラズ、因テ大ナル針ヲ能ク磨キ懷中シテ、是ニテ其事ヲ遂タリ、又豫メ膏藥ヲ懷ニシ、事畢レバ乃コレヲツケタリト八給ヒタル故ニ、淸モ嘗御代替ノ誓詞ノトキハ、諭ノ如ク針ヲ以テ指ヲ刺タルニ、快ク血出テ血判ノ表モ恥シカラザリシ、其席ヲ退キテ血流止ラザリケレバ、、卽諭ヲ以テ用意シタル膏藥ヲ疵口ニツケタレバ血止リヌ、慈敎カタジケナキコト也、

〔淺野家文書 增眞書〕信孝樣信雄樣江從秀吉樣披露狀之寫

去八日之御書、今日十八日午剋謹而〇而下有二脫文一

一柴田與我等 〇豐臣秀吉 間柄、何と哉覽可被成之由、忝奉存候、乍去一ツ書幷誓紙血判之筈、相違入申

間敷と存候事、○中略

岡本次郎右衛門尉殿

齋藤玄蕃助殿

〔甲斐國志附錄一〕天正十七丑年、神祖御國中御法度被定、○中略是年伊奈熊藏九筋ノ撿地ヲ被命、百姓ニ渡タル起請文一通アリ、一條一蓮寺ニ藏セル紙ハ、牛王寶印ノ裏ニ書シ血判ナリ、

〔伊達日記下〕一秀吉公御違例ニ候處、次第ニ重候故、諸大名衆ヲメサレ、御病氣ツヨク候間、御他界モ候ハヾ、秀頼公ニタイシ、逆意存マジキ由誓紙仕ルベキ由、被仰出候ニ付、熊野牛王ニ血判イヅレモ被成候ヲ、大峯ニヲサメ可申由御意ニテ、聖護院殿山伏多被召連御登山ニ候、

〔御當家令條三十四〕公事裁許役人起請文前書

一奉對兩御所様○徳川家康其子秀忠御後闇儀毛頭不可存事、○中略

慶長十九年二月十四日

酒井雅樂頭

酒井備後守

土井大炊頭

安藤對馬守

水野監物

井上主計頭

米津勘兵衛

島田平四郎

各血判

〔大君言行錄下〕一大猷院様○徳川家光御他界の砌、頼宣君は、熊野牛王の裏に起請文を御書、御血判を

被成、黒うるしの宮に納、日光御寶殿に竊に被納置、公方様江奉對、未來に至までも、不忠不義の御心有間敷との御文言也、是を誰も知ものなし、萬治二年の春の頃、日光社僧中、松平伊豆守信綱に不斗物語有しかば達上聞、御老中相談に及、日光より江戸江取出し披見有、公方様江對、不忠不義の御振舞有間敷との御誓納の起證文なりければ、公方様は不及申、御老中も扨て大納言殿○綱宣のヶ様の御心入にて候を、今迄疑申候事愧敷事哉、古今無類の御忠節にて候と奉感、其年在江戸拾年目に御歸國の御暇被進けるなり、

〔柳營秘鑑脱漏十二〕正德六丙申年五月廿一日、御譜代之面々登城、於二之丸御目見、

一六月十一日、今度御代替○德川吉宗ニ付テ、於御老中宅、各起請文血判被仰付、

〔兼胤公記〕寬延三年六月廿五日、未剋過、著布衣、奴袴、同役同道向豐後守役宅、先達而雜掌持誓書、參被役宅相待、於廊下取誓書雜掌進之入懷中、座定之後、御附田中出羽守、山本筑前守候末座、予進出、取出誓書、附豐州、豐州披見、了返之、次硯并宮蓋等を持來、置予前、予摺墨、點筆、披誓書、表包置傍、開書展付疊上、日付三字、名字等書加、次取針、在硯宮中、左手無名指爪ノ上方以針差切皮、名字ノ下ニ加血判、加血判之前、所設之蓋ナ置前、其上ニ居誓書、加血判、乍載宮蓋取廻進豐後守、次附表包、豐州披見訖持入奥ノ方、此間撤硯并蓋等、豐後守還出、逃賀詞、申畏存候由、起座歸華之後、向柳原亭、謝同伴之儀、○中略

誓書調樣紙、以同紙爲表包、折かけ　豐後守より至來之案文之紙之寸法之通ニ調之、表包も同至來之寸法之通ニ調之、

就傳奏之役儀勤仕、公家武家御爲、聊以疎略存間敷候、公武御用之儀付而、相役中惡不仕、諸事申合、依怙贔屓無之、礼善惡正路可致沙汰候、次御用之儀、各被相尋、子細有之節、不貽心底可申者也、

右於致違背者、可蒙梵天帝釋四大天王總而日本國中大小神祇御罰者也、

寬延三年六月廿五日　兼胤血判

堀田相模守殿〇老中正亮

酒井左衛門尉殿〇老中忠寄

本多伯耆守殿〇老中正珍

松平右近將監殿〇老中武元

松平豐後守殿〇京都所司代資訓

爪判

〔牢獄秘錄〕爪判之事

一町奉行所にて委細白狀に及び、口書差上候時、爪判致候者有之、又強盛にて委細に不申上故、吟味所にて拷問にあふ事也、右拷問にて委細白狀に及び、彌右之口書は相違無之哉と吟味役ゟ申候時、科人相違無之と申時は、右口書相認メ、其末に、只今迄御公儀之御仕置を遁んと存、申陳じ候得ども、此度白狀に及び候通、少も相違無御座候と書、年月日の下へ名を認メ、此下へ爪判(手鎖之儘にて、おやゆびの爪を押也、)押し候事なり、

〔撈海一得 下〕林冲ガ休書(サリジヤウ)ヲカタニ、印ヲシタル上ニ、又摸印ト云事アリ、岡島ガ譯水滸傳ニモ解セズ、水滸傳ノ解ニモナシ、近藏晉叔ガ元曲選ヲ閲ニ、鎖胗兒ト云女ガ、男ヲタブラカシテ、休書ヲ取タルニ、男覺リテ奪ヒ返サントテ曰、夫休書ハ上手摸印五箇指頭、那裏四個指頭的是休書ト、是ヲミレバ休書ニハ五指頭ヲ印シテ證トスル事トミヘタリ、今ノ爪判ノ如ク也、一丁ヲシラヌ者モ、休書ハカヽ、デ叶ヌユヘニ、指頭印ヲ彼證トスルニヤ、

手印

〔吾妻鏡 四〕元暦二年(〇文治元年)七月十五日丙申、神護寺文學房、以關東潤色、得院奏之便、去正月廿五日、捧緣起狀、申下御手印之後、爲寄附寺領於近國、令煩庄園之由有其聞、二品(〇源賴朝)殊依驚思食、稱門人爭現邪狂哉、早可停止如然濫吹之由、可令下知給云云、俊兼奉行之云云、

〔吾妻鏡 六〕文治二年七月廿四日己亥、爲仙洞御願、爲被宥平家怨靈、於高野山被建立大塔、自去五月

印章押併用
以印代章押

一日、被ㇾ行二嚴密御佛事一、而供料所以二備後國大田庄一、加二御手印一、今日所ㇾ被二寄附一也、

〔白峯寺緣起〕翌年〇建長五年松山郷を寄られ、御菩提のため、十二時不斷の法花の法をはじめおかれ、廿一口の供僧勅請として、各廿一通の御手印の補任を下さる、

〔武家嚴制錄〕一條々

一女上下出入の事

一權大納言、衞門のすけ兩人の手。判。に、あまのぶせん守、大はし越後守うら判にて、出入申付べき事、〇中略

右のむねをかたく〳〵あひ守べし、つぶさなる事は、ほう書に、仰出さるゝ者也、

寬永三年十月四日御黑印

〔大報恩寺文書〕尙々散々眼病故、印判を以申候、可ㇾ被ㇾ成二御免一候、以上、

七月十六日　　板伊賀守勝重㊞

知積院御同宿中

〔伊達家文書〕蜂須賀光隆書狀〇文略

二月〇明曆三年五日　　松平阿波守光隆黑印（判中故印判御免可ㇾ被ㇾ成候）

松平陸奧守樣人々御中

〔公用雜纂〕一伯父相續願〇但繼添願、中略

天明六丙午年十一月　　本多作左衞門印（手掛ニ付印判計用申候）

酒井石見守殿〇以下宛名略

〔氏家叢書十九〕一文化七午年七月朔日、井上美濃守樣江持參、以二御用人一差出候處、御附札にて小島義右衞門を以被ㇾ成二御渡一候、

丈三郎儀、當午十二歳罷成候、御用召之節御請書江印形相用候方可然哉、書判相用可宜哉、御内意相伺度、此段申上候、以上、

七月朔日　　太田丈三郎家來　海津審人

別紙

中川万之助儀、御十二歳に而御書判被成御用候、若年と唱候儀、戸田采女正樣御當番之節、御差圖御座候之樣

松平金次郎樣御十二歳に而御幼少と唱御印形被成御用候よし、丈三郎義、當午十二歳罷成候、唱方如何相心得可申哉之事、

御附札

十一歳迄を幼少と唱
十二歳より若年と可相心得候
中川万之助例之通、書判可被相用候、

〔諸例集五〕天保十三寅年六月

御鹿野美濃守答

幼年ニ而家督仕候得者、幼年中御請書類書判不仕、印形計相用申候、○中略
右之通ニ御座候處、拾五歳ニ相成候得者、其段御屆申上、都而兩判相用置、直印之證文ニ而差出申候、然ル處拾五歳以下ニ而も奉願御目見、相濟候節者、御屆申上、都而兩判相用、直印之證文ニ而差出候而不苦儀ニ御座候哉、兼而相心得罷在度、此段奉伺候、

六月二日　　有馬備丸家來　牧中殿平

附ケ札

書面之通相心得可然存候

造印

〔萬金産業袋一印判〕印判の形、字の體には、さして極りたる定法もなければ好にまたがふ。繪入。あるひは十二支入、から草入等はつまり安く、押すによろしからず、すき透水牛を以て製すべし、もし又社家、寺がた、醫師などの包紙の封印等は判形大きければ、多くは黄楊の木口彫也、尤水牛も有べけれども、大略は木印也、その外儒家釋家に用ゆる印ども品々多し、判形大きなるにまたがひて、黄楊または櫻にても用ゆる也、

〔桂林漫錄上〕龍虎之印附小西行長印

武田信玄ノ龍ノ印ハ、後藤黎春ガ著ハセル古今沿革考ニ載セタルモノヲ寫セリ、未眞物ヲ見ザルヲ憾トス、虎ノ印ハ予ガ弆藏ノ北條氏政ノ文書ニ踏タルナリ、眞物ヲ歩ルコトワヅカニ一紙ヲ聞ルノミ、行長ノ印ハ、浪速ノ中井氏秘藏ノ珍器ナリ、天野行藏ナル者ヨリ印紙ヲ得タリ、蓋大明ヨリ豐公ヲ日本國王ニ封ズル時、贈レル物ナリト云フ、印材ハ象牙ヲ用フ、鈕ハ詳ナラズ、

〔北條五代記十〕三浦三崎寶藏山舊跡の事

天正四年の比ほひ、三官と云唐人、氏政の虎の印判をいたゞき、もろこしに渡り、三年目の戊寅七月二日に、黒舟三崎の湊に著岸す、

〔續南行雜錄〕信長欲彫印、而請其文於澤彥、澤彥呈布武天下之四字、公賞之賜二百貫文之領知、及古法眼所畫秋野百菊屏風一雙、

○按ズルニ、造印ノ事ハ、文學部印章篇ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

改印

〔地方拾集錄義〕改印御屆書

私印形欠損候ニ付、改印仕候間、別紙印鑑七枚相添、此段御屆申上候、已上、

辰九月七日（天保十五年）　勝田次郎

程村（竪五寸壹分 横貳寸八分）

印鑑
（　）
御代官 勝田次郎

中村源右衛門殿

拙者改印いたし候ニ付、印鑑壹枚相違申候、

辰九月日　　勝田次郎

〔公務手當向扱方〕慶應元乙丑年十月小印相改候節屆書

小印相改候ニ付御屆申上候書付

右是迄用來候小印、欠損候間相改申候、依之小印相添、此段御屆申上候、以上、

丑十月　　藪内於菟太郎（〇御鑓奉行尚役）

小印
○
藪内於菟太郎

本紙圖ノ内半切八ツ切

是は定役元〆近藤與兵衛殿江差出

僞印

〔名物六帖 器財一 印章符牌〕僞印（ニセイン）唐律、以僞印印文書施行、會典、撿僞造寶鈔及僞印者具奏陛用、　假印（ニセイン）明律 類抄

〔御當家令條三十一〕覺

一印判はらせ候儀、外之印判之押領にてほり候事、彌堅停止可仕候、繪本之樣に書候而印判あつ

印判師

らへ、其ごとく少も相違無之ばはり申間敷候、何文字を何分四方になど、誂申分は勿論不苦候、是は若印判をすき寫候而あつらへ似せ印判不仕爲に候間、其旨相心得、疑敷儀を誂候はゞ、一切仕間鋪者也、

戌○元祿七年十月　日

○按ズルニ、僞印ハ又謀判ト稱ス、謀判ノ事ハ、法律部中編及ビ下編ノ詐僞篇ニ詳ナリ、

〔人倫訓蒙圖彙〕三印判師　水牛をもつてこれを作る、又繪畫跡の印は、石をもつて是を彫、又韻經を考、字を反して、名乘をあらためてもほるなり、野人小兒これを調法とす、京極通二條上ル町井上大和、其外所々にあり、大坂は堺筋平野町にあり、江戸京橋四丁目、銀町、乘物町、

〔渡邊幸庵對話〕一昔芝に印判屋の庄三郎といふ者あり、前には道具屋を渡世にせしが、夫もはかどらず、故に細工能印判を彫て職人と成る、しかも上手也、

〔萬買物調方記元祿五年板〕京之分

印判や　寺町さはら木より五條迄

同　四條坊門寺町下ル丁

同御小細工所　寺町二條上ル御ふた引　井上大和

同　四條ぎをん町　山口市郎右衛門

同　せいぐわん寺御かう町　塚本六郎右衛門

同　二條寺町　湯淺嘉右衛門○中略

江戸之分

印ばんや　京ばし南四丁目　小林近江

同　同所　清左衛門

雜載

同　かん田のりん物丁　作兵衛

同　銀町　今津丹後

其外日本橋通町南北にあり〇中略

大坂之分

印判屋　かうらいばしさかいすぢ　細字十兵衛

同　ふんきいばし　井上作兵衛

同　ひらの町さかいすぢ

同　同三丁目

〔古文書類纂上條目〕後陽成天皇文祿五年、石田三成條目、近江國伊香郡古保利村字東柳野弓削善次郎所藏

伊香郡〇近江國之内東柳野村掟條々

一千石につめ夫壹人とあひさだむる也、此外つかふ事あらば、此印判にて、いくたりいだし候へと申つかわすべく候、然者奉行人を申付おくべき間、十二月廿日に、當村之年中の印判の書物あつめあげ可申候、すなはちはん米をつかはすべき事、〇中略

文祿五年三月朔日　治部少花押

〔明良洪範十七〕紀伊大納言賴宣卿、御内用ニ金子御入用ノ節ハ、硯箱ヨリ御判ヲ御出シナサレ、鼻紙ヘ押シテ御側ノ者ニ持セ遣ハサレケレバ、金奉行金子ヲ渡シ越ス也、或夜マタ金子入用ノ事アリトテ、例ノ通リ硯箱ヨリ判ヲ取出シ、鼻紙ヘ押シテ側ノ者ニ持セ遣ハシケルニ、金奉行見テ、是ハ御判相違致候ヘバ金子渡サレズト云、御使ニ來タル御側士不審シ、イツモノ御硯箱ヨリ御取出シ、御判ニ相違ハコレ有間敷ク、ヨク見給ヘ、變リタル形チハナシト云、金奉行イヤ形チハ變ラチド、中ノ文字イツモノ文字ニ非ズト云、御側士ハ文字ニ心付ザレバ、左樣カナト云テ持歸

華押圖

り、其趣キ申上ケレバ、頼宜卿御手ニ取テ御覧ナサレ、成程イツモノ判ニ非ズ、夜分ノ事故取違ヘタリトテ、押シ直シテ遣ハサレケル、其後頼宜卿御雜談ノ節、其事ヲ仰出サレ、奉行ヲモ勤ル者ハ、左様ナケレバ成ラヌ筈也ト仰セラレシ、其時御判ヲ間違ヘテ押シ遣ハサレシハ、實ハ奉行ノ心ヲタメシ見給シナラン、其後アゲ用ヒテ政事職ニ加ヘラレ給フト也、

〔甲斐國志二國法〕御。印。判。衆。ト云ハ、武田文書ニ間々見エタリ、朱印押ス事ヲ司ル役人ナルベシ、天正壬午時、織田家ヨリ出セル禁制書ニ、御。判。錢。取次錢、筆耕料、不及出之ト銘々書添アリ、諸家共ニ時ノ風ニテ、毎事ニ役錢ヲ采ルト見ユ、御印判衆モ其類ナルヤラン、

附華押

華押ハ後世書判若シクハ判形トモ稱ス、固ヨリ手書スベキモノナレドモ、後ニハ木ニ彫リテ用キルモノアリ、而シテ其字體ノ如キモ、多クハ下ニ一ノ字ヲ加ヘテ之ヲ割符様ト稱ス、古ハ官府、社寺等ノ外ニ、印ヲ用キルコトヲ得ザリシカバ、華押ノ用、頗ル廣カリシガ、後ニハ濫ニ私印ヲ用キ、華押ノ外ニ印ヲ用キルコトモアリテ、印ノ用益、廣ク、華押ヲ用キルコト漸ク稀ナルニ至レリ、

〔書言字考節用集八言辭〕書判(カキハン)本名花押、又近世下加一文字形者、謂之割符樣、

〔秉燭譚五〕花押ノコト

今時ノ人、花押ノ上下ニ一文字スルコト、明ノ太祖ヨリ始ルヨシ、先人常ニ物ガタリアレドモ、何ニ出ルト云コトヲカタリオカズ、近比群談採餘ヲ見レバ、第二卷ニソノ事アリ、國朝押字ノ製、上下多用一畫、蓋取地平天成之意ト云々、コノ外ニモマタ本書アルベシ、

〔甲子夜話五〕昔ノ花押ハ、人々異體ニシテ、イカニモ五雲體ノ起本ヲ失ハサリシガ、偃武ノ御世トナリシヨリ、下ニ必一字ヲ引コト法ノ如ク成シハ、列祖ノ御押ニ效フヨリ防レリ、因テ世ニ其形

ヲ徳川判ト稱ス、後水尾帝ノ御押二樣アリ、内一ツモ正シク徳川判ナリ、當時ノ主上マデ、御家ノ御風ニ倣ヒ玉ヘバ、ソノ以下ハサアルベキコト勿論、コノ一ツニテモ、鳳膽ノ大ナルヲ見ルベシト林氏話、

〔康富記〕文安六年四月二日壬子、後聞、是日自室町殿伊勢因幡守爲御使被仰下云、今月可有御判始、然御判事、御名字草被書成之儀有之、或又以別字被作候儀有之、以何字可被用哉可撰進之由被仰之、雖然先々此事不蒙仰歟、不注置也、若又記傳儒など被撰進歟、被仰合傳奏者可然歟、只亦就使可還進之由、重可被仰下歟、可有御計之由返事被申、其後未無被仰出之旨云々、鹿苑院殿〈○足利義滿〉普廣院殿〈○足利義教〉兩代者、義字也、勝定院殿〈○足利義持〉御判者、慈字也、

〔柳葊雜筆四〕武家にては鎌倉右大將頼朝卿の消息に、かく遊ばされたり、〈○消息略〉草名は頼字の扁と、朝字の旁とを合せたると見ゆ、鶴岡にある頼朝卿の草名、金剛峯寺杵築社等に傳はるものを見て考ふべし、

〔常山紀談十〕朝鮮より諸將連判の書を太閤に奉る時、清正〈○加藤〉の花押、殊に筆畫かさなりや、ひまいりしかば、福島正則笑ひて、病重くなりて遺言の時の狀あしからんといはれしに、清正我はさは存せず、戰場に屍をさらすとも、きたなく逃て海の上に死んとは思ひ設けず候、されば遺言狀何かし候べきと答られしかば、正則詞なかりけり、

〔明良洪範十〕神君ノ御花押ニ、のノ字ヲ書セマシマシケル、或人ノ曰ク、モトノ字ニシテ、始ト同ジ凡書ヲ繼グモノハ、辭氣書ノ難ニ象ドル、春秋傳項氏家説ナンドニモ、サマザマノ字法アリ、尤モ目出タキ字ナリト語ラレシナリ、此ノ説ハ、モト本據ヲシラズシテ附會ノ談ナリ、夫レのノ字ノ御判ハ、元來御家ニ傳來ノ字大黑トテ、一筆ガキノ天神ノ書畫アリ、神君ソレヲ摸セラレ、御花押トナシ玉ヘリ、ソノ繪樣ハ今以テ尾州家ニ有リトイヘリ、

判

〔翁物語 前集 三〕或人ノ物語ニ、淺野彈正判形ノ物ニ、穿鑿ノ子細有ケル時、手跡ヲヨク似セ、判形モ無疑、淺野彈正越度ニ可極ト、太閤モ被思召ケルニ、彈正、此判ヲ見テ、是ハ我判ニアラズト云、其證據ハトタヅチ玉フニ、此判ハ我心覺ニ、大ノ月ニ仕ル判也、大小ノ月ニ依テ點格アリ、我手形ノ物數多集テ見玉ヘ、大小ヲワクリナ、其證據ヲミセ可奉ト、大小月ノ判形數多引合、無據理ヲ立、點格ヲ顯スニ依テ、申分立テ、運ヲ開ク、是判形ノ心持ノ能證據也、近代モ、武功之大將ハ其心入有ニヤ、陸奧守正宗ノ判形ヲ見ルニ、中々似セル事ニ非ズ、作文之計策ハ、如何ニモ成間敷事也、少モ物ノ顛ヲシ、又ハ役人ニ成ル人ハ、大小共ニ分別工夫ノ入所ナル、

〔吾妻鏡 一〕治承四年六月廿二日癸卯、康清歸路、武衛〈〇源頼朝〉遣委細御書、被感仰康信之功、大和判官代邦道右筆、被加御筆幷御判云云

〔源平盛衰記 十九〕文覺入定京上事

佐殿〈〇源頼朝〉ハ、我軍ニ勝テ日本國ヲ手ニ把バ、一國二國ヲモ乞ニ依ベシト宣ヘバ、文覺ハ手ニ取得ツレバ必惜事也、ナキ物ハ惜カラズ、國モ廣博也、唯所知ヲ十餘所寄進シ給ヘトテ、紙硯取向テ、丹波國ニハ、新莊、本莊、雀部、宇津、繩野、播磨國ニハ、五箇莊、土佐國ニハ、高賀茂鄕ヲ始トシテ、十三箇所ヲ撰出シ、ソレ〱ト云ケレバ、佐殿爲ウソヤギテハ被思ケレ共、寄進狀ヲ書、判形ヲ加テ文覺ニ給フ、

〔源平盛衰記 二十七〕周武王誅紂王事

越前國ニハ平泉寺長吏齊明威儀師、稻津新介、越中國ニハ、野尻、河上石黑黨、加賀國ニハ林富樫ガ一族ヲ始トシテ、寄合々々評定シテ云、〇中略急ギ木曾殿ヘ參ラント議シケレ、此儀尤可然トテ、三箇國ノ兵、皆我モ〱ト馳參ズ、木曾ハ各參上ノ條神妙々々、但召サヌニ參事大ニ不審、平家ノ方人シテ、義仲ヲ計ラン爲ニモヤ有ラン、誠ノ志御座バ、義仲ニ腹黑アラジト、起請文書ベシト宣ヒ

ケレバ、命ニ隨テ起請狀ヲ注シ、判形ヲ添テ奉ル、

〔吾妻鏡　六〕文治二年十月一日甲戌、賀茂別當〇當恐雷誤領、出雲國福田庄、石見國久永保、參河國小野庄等、成御下文被遣社家、當宮事、二品御歸依異他之故也、此外院宮貴所以下權門領事、爲被停止地頭新儀、先日自公家被下目錄訖、仍逐々被尋究子細、成御下文、今日被進京都云云、

其詞云〇中略

十月一日　賴朝

進上　帥中納言殿

私啓

造大神宮御遷宮、明年歟、明後年歟、無其要候ヘドモ、可承事候テ所申候也、可仰給候、兼亦遼遠之間ニテ候ヘバトテ、如此奏覽狀ニ判ヲシテマヒラセ候、而廣元盛時ガ手跡ニテ候ハザラン時ハ、判ヲ可仕候也、是一筆ニテ候ヘバ、今度ハ判ヲ仕ラヌニ候、恐々謹言、

〔吾妻鏡　八〕文治四年五月十七日壬子、遠景已下御使等、渡貴賀井島、遂合戰、彼所已歸降之由所言上也、而宇津宮所衆信房、殊施勳功云云、爰信房近江國領所者、去比被付非違別當家領訖、就此大功可返給歟之由言上、次鎭西庄者、成勝寺執行昌寛眼代成妨之間、召昌寛返狀雖下賜、猶以不靜謐、企濫行之趣訴申云云、仍彼是有沙汰、大理者依爲寵臣、不限件庄、可止地頭之旨、被下綸旨之間、關東爭被泥申哉、執行眼代事者可被加判、但雖再三訴申之、於關東國不可成自由勸發之由被仰云云、今日被定云、御忿劇之時、御教書不可被載御判、可爲掃部頭〇中原親能判、若故障之時者可爲盛時〇平判之由云云、

〔吾妻鏡　二十一〕建曆三年五月三日癸卯、巳剋被遣御書於武藏以下近國、有被仰下可然御家人等事、相州、大官令、連署之上、所被載御判也、

〔吾妻鏡三十八〕寬元五年〇寶治元年六月十日辛卯、今日被召戰士等勳功賞所望款狀、相積而及數十通、又此程致警衞勤之士、面々注著到就令獻覽之、左親衞〇北條時賴加判形被返本人云云、

〔融通念佛緣起繪下〕去正嘉のころ、疫癘おこりて人おほく病死にけり、其時武藏國與野鄕に一人の名主ありけり、年來念佛信心の人にて、世間の疫癘をのがれんがために、家うちの老少をすゝめて、明日より別時念佛をはじむべきにて、番帳を書て道場におきけり、その夜の夢に異形の者ども、その數むらがりて行たるが、此家の門のうちへいらんとしけるを、あるじ出むかいて云、是は家中の男女心をひとつにして、別時念佛を始べきにて、結番してすでに彼番帳を佛前にをきたり、亂入する事なかれといふ、こゝに疫神のいはく、汝がいふことまことにしかり、然ば番帳を披見すべしといふ、主すなはち是を見するに、疫神隨喜せる氣色にて、結衆の名字の下ごとに判形を加てけり、〇中略其夜あけて番帳をみれば、實に名字の下ごとに判形あり、いろはの字を書損せるがごとし、其色燒繪をしたるに似たり、

〔薩戒記〕應永三十三年三月廿七日辛酉、內府〇藤原滿季中文被用判、定有所存歟之間撰入了者、予〇藤原定親曰、此事有例、判者草名字也、仍不為難出見舊記者、後日大內記爲清朝臣來臨、談曰、內府申文加草名事、右府〇藤原泰〔家〕被仰云、宿德大臣間有例、故成恩寺殿〇藤原經嗣准后之後、一度有此儀、而今內府者可極相國之人歟、然者內大臣又爲二位、年齡四十未滿、三十也只今如此之儀不甘心事也者、後日大外記師勝朝臣同示此旨、

〔大館常興日記〕天文十一年二月十二日、攝州來臨、伊勢太神宮御近所之寺之事、御奉加帳御判申之、御代始にも被成之候、然共御判かわり申間、又申請度候由申之、可爲如何哉之由、御內談衆に被尋下之云々、更不苦事存候、いかにも重而御判を被成て、可然御祈禱と奉存候由申之、各其分也、仍證名いつものごとくはへ申也、

〔光源院殿御元服記〕一天文十五年十二月二十日、新將軍義藤若君御評定始御判始等有之、○中略

一其後又各々如元著座有テ、御判始有之、○中略御判スヱラレ畢テ、管領蓋ニ入、貞孝ニ被渡之、

〔甲陽軍鑑十下品第三十五〕源藤齋申は、信玄様萬事御念入候間、口上ばかりをもつてはいかゞに御座候、信虎様御一筆を被進之候様にと申、信虎公被仰は文にていふならば、其方をよぶべきか、必書物は大事の儀にせぬ物をと被仰、源藤齋申は、さらば信虎公御判を一ツ御すゑ被成被下候はゞ、それを御目にかけ、證據にいたし、御懇意申上べく候、我等諸國へ御使に參候へ共、何たる御行の御吉事にも、信玄公はふまへ所のなき事をば、少もまことになされず候と申上るにより、そこにて信虎公御直判を、日向源藤齋に御渡し被下候、

〔甲陽軍鑑十二品第三十九〕信玄分別の事は、總別五年巳來より、此類大事と思ひ、判をすへおく紙八百枚にあまり、可有之と被仰、御長櫃より取出させ各へ渡し給ひて、仰らるゝは、諸方より使札くれ候ば、返札を此紙にかき、信玄は煩なれ共、未存生ときゝたらば、他國より當家の國々へ、手をかくる者有まじく候、某の國取べきとは、夢にも不存、信玄に國とられぬ用心ばかりと何も仕候へば、三年の間、我死たるをかくして國をしづめ候へ、跡の儀は四郎むすこ信勝、十六歳の時家督なり、

〔渡邊幸庵對話〕一權現樣は無筆同事の惡筆に候、○中略夫故御判もきたなき御判にて御座候、

〔槐記續編〕享保十八年三月廿三日參候、入道殿ヘノ御話ニ、日本ニテ誰ノ御判ト書コトイカヾナリ、尤判ハ連判ト云コトモアレドモ、ソレハ今云判形ノコトニアラズ、幾人モナラベテ書トキ、面面ノシルシヲ書コトヽ云ノシルシ也、判ニアラズ、唐ニテモ判アリ、華押叢ニモ出タリ、天子ノ御判ニハ御押ト書テアリ、太上天皇御押ト書テハ、イカヾアルベキヤト仰ナリ、入道殿カシコマリテ、御尤サモアルベキニテ候ト申サル、日本ノ書ニイマダ其例ヲミズ、押ト書タルコト稀ナリ、判トハ度々出タリ、然レドモ判トアルハ近代ノ書也、古キ書ニハイマダミズ、定家時代ノ書ニハ毎

袖判

毎出タリ、御前ニ御押トアソバサレンニ、何條コトノアルベキト申上ラル、今ノ世、武家方ニ判形ノ上ニ實名ヲカクコトハ、全クナキコトナリ、判ハ實名ノシルシ也、名乘アレバ判ナク、判アレバ名乘ナキ筈也、仙臺中將ヨリ獻上ノ文ニハ、終判ハナシ、名乘バカリ也、イカサマニモ家柄ニテナサスガ也ト仰ラル、

〔柳亭記上〕袖判　奉書附手紙

文書の紙の前後白く書殘したるを袖といふ、門の左右を袖塀といふ類なり、そこへ印を押たるを袖判といふ裏へ押すを裏判といふ意に同じ、袖判は前のところへ押ものとぞ、

〔和簡禮經三〕一御下文事

發端ニ下ト云字ヲ書出ス、此時ハ必御袖判也、○中略

一御判物事

御袖判之時ハ宛所ヲ不書、名字官名乘、悉文章之内江書載申候、御下文モ袖之御判ナレドモ、ソレハ書様替也、

　　假令　御判受ニアリ

武藏國富久庄事、所宛長谷中務少輔清長也者、守先例可致沙汰之狀如件、

　應仁元年十一月十五日

〔吉川文書一〕

　　御袖判

下播磨國福井庄住人

　補任地頭職事

　　藤原經兼

日下判

右人可ㇾ爲二彼職一、但於二庄務及年貢課役一者、不ㇾ成二濫妨一、可ㇾ致二沙汰一之狀如ㇾ件、以下、

正治二年正月廿五日

〔古文書類纂上御判御教書〕後小松天皇應永八年足利義滿御判御教書京都八坂神社所藏

袖判義滿

祇園社御師職、幷執行以下所職所帶等事、任二顯深法印讓與之旨一、顯範領掌不ㇾ可ㇾ有二相違一之狀如ㇾ件、

應永八年十月四日

〔古文書類纂上補任下文〕稱光天皇正長元年補任下文山城國葛野郡川島村革島瀨左衞門所藏

袖判

下　山城國革島南庄

補二任下司職一事

愛玉丸

右以ㇾ人所ㇾ補二任永代彼職一也者、本家御教書如ㇾ此、有ㇾ限御年貢以下御公事、不ㇾ可ㇾ有二懈怠一之狀如ㇾ件、

庄家宜承知敢勿二違失一、故以下、

正長元年九月三日

〔蔭凉軒日錄〕長享二年三月十六日、文首座話云、大內左京大夫息次郎、當年十二歲、以二先規一白名乘見書義與之二字、袖御判有ㇾ之、

〔和簡禮經五〕一御判物事

日之下御判事

宛所アレバ御判必日下也、文體ニ名字官已下不ㇾ被ㇾ載ㇾ之、兩御判共ニ年號月日書續ル也、

武藏國比企郡事所ㇾ宛行一也者、守二先例一可ㇾ致二沙汰一之狀如ㇾ件

應仁元年正月廿八日御判

左衛門佐殿〇中略

一兩判事、右筆之仁必日下判形タルベシ、上卷ニモ右筆ノ名乘モ可書也、〇中略日下者兎角右筆也、連判之衆中讓人モアレ、位高クトモ、日下右筆之判形タルベシ、御下知狀ニモ本奉行入日ノ下、則上包ニモ本奉行官名乘ヲ書也、

〔宗五大草紙〕下書札之事

一兩判のとき表卷には、等輩の時は右筆の人位高く共、日の下に名をかくべし、一方上衆ならば、表卷には上衆の名を書べし、縱ば奉行と評定衆の時、表卷には評定衆の名を書べき也、自餘准之、又連判は何十人もあれ、奥次第あがり成べし、

〔家中竹馬記〕連判〇連判之事、連判は奥を上判とす、上判の人の名乘をうは書に書也、但奉行之奉書などは、本奉行書あけて、日の下に判をする也、此時はうは書にも、本奉行の官名字を書也、事に依て准之儀も有べし、又宛所を二三人へも書時は、前は上也、奥は次第に下也、又裏判を連判にすることには、是もおくは上判也、裏の時奥と云は、裏よりすかして見れば、文のはしの方也、

〔和簡禮經〕五一連署連判事列判共云〇中略

連判ハ名乘ヲ書、肩ニ稱號官ヲ書付、則表ニ判形仕候、是ヲ連判ト申候、

連署連判共以奥アガリ也、畢竟判形表ニアラバ連判也、判形ナク有トモ裏ナラバ連署ト云ベキ也、式正之時、無稱號、無判形、實名列形同意之故歟、

或說ニ、充所多テ連署ト云、列形多テ連判ト云、此儀不宜、

〔御成敗式目追加〕一常在寺與朝倉六郎繁清、楢葉近江守滿清、相論近江國田上內堺潟起請失事、〇中略

裏判

永享十一年六月八日　満親在判
為種同
増悦同
之忠同
元尚同

〔大内家壁書〕定
條々
赤間關、小倉、門司、赤坂のわたりちんの事、○中略
文明十九年四月廿日　大炊助判　弘―
近江守同　房行
沙彌同　宗音
彈正忠同　弘規
大藏少輔同　弘胤

〔甲陽軍鑑十七品第四十七〕長沼長八是を聞き、○中略必ず各々歸り給へ、歸りましまさずば、此敵討を思ひとゞまり候べしといひければ、四人の者共懐より連判の起請を取りいだし、其方兄弟がさやうに申すべきと思ひ、如此誓紙を仕たりとて、兄弟の者に見する、

〔宗五大草紙下〕書札之事
一文書のうらに判形を居る事、半程より下へさげて、可然奥端へ寄たる見惡き也、近代如此、但實共故有べし、又合とある文書には、其下にさげて判をする也、

〔家中竹馬記〕連判並裏判之事、○中略裏判を連判にするには、是もおくは上判也、裏の時奥と云は、裏

よりすかして見れば、文のはしの方也、

○按ズルニ、裏判ハ紙背ニ華押ヲ書シ、又ハ捺印シテ證トスルコトニテ、德川幕府ノ時、目安裏判等ノ名アリ、事ハ法律部下編訴訟文書條ニ載ス

〔和簡禮經〕一御内書御請文之事

去月十九日御內書、今月廿三日到着、謹而頂戴仕候、〇中略恐惶謹言、

十月廿三日　　加賀守眞吉上

裏判

進上御奉行所細川讃州ハ、上文字ノ傾テ左ニ判ヲ被居、〇中略

一御敎書御請事

七月十三日御敎書、今月七日到來、畏拜見仕候、〇中略恐惶謹言、

永享六年八月七日　　但馬守國成判上

進上　御奉行所〇中略

又云、上文字計ニシテ、其通ノ紙ノ裏ニ判ヲスユル事モアリ、

〔吾妻鏡六〕文治二年八月五日己卯、親能中納言奉書被進御請文、是新日吉領武藏國河越庄年貢事、并長門國向津庄狼藉事等也、平五盛時染筆云云、六月一日御敎書、七月廿八日到來、謹以令拜見候訖、〇中略頼朝恐惶謹言、

八月五日　　頼朝裏〇ニ〇御〇判〇

〔吾妻鏡八〕文治四年九月三日丙申、宮內大輔重頼不法事、就被下院宣、早可被停止之由、被仰遣重頼、又勸願寺領年貢濟否事、雖被尋、面々地頭請文等、遲々之由同所被申也、

若狹國司申、松永宮河保地頭宮內大輔重頼、不隨國命事、可停止非法之由、成下文令進上候、〇中略

右件事、いかにも御定可ㇾ有候也、〈中略〉頼朝恐々謹言、

九月三日　頼朝〈在ニ裏判一〉

〔浅間神社文書〕甲州社人一宮二宮神座山八幡窪八幡、大御所樣御目見ヘニ參罷歸候間、上下拾九人分御裏判被ㇾ成可ㇾ被ㇾ下候、但内貳ハ山伏以上、

十二月〈〇年代未ㇾ詳〉十九日　島清左衛門　□□〈花押〉

日半兵衛　□□〈花押〉

本上野殿

成隼人殿

安帶刀殿

〈裏ニ〉右無ㇾ相違ㇾ可ㇾ被ㇾ相通ㇾ候、以上、

安帶刀黒印

成隼人黒印

本上野黒印

人留御役所中

〔京都御役所向大概覺書二〕京都馬借馬持人數次飛脚幷拜借之事

御次飛脚之譯〈〇中略〉

一道中五拾三次宿々江御傳馬人足爲ニ御用ㇾ米五千俵、寛永十酉年ゟ毎年被ㇾ下來候、京都之分貳拾七石九斗八合、兩奉行裏印ニテ、小堀仁右衛門ゟ相渡リ候、

〔人見私記〕寛永十五年九月廿日、關東中在々所々、野山相論有ㇾ之旨、目安差上ル所々ノ儀、番頭組頭逢ㇾ穿ㇾ鑿可ㇾ相ㇾ濟之、若滯儀有ㇾ之バ、目安致ニ裏判ㇾ、今度被ニ差遣ㇾ候、檢使ノ衆ヘ可ㇾ相ㇾ渡之旨、遠江守對馬守

申渡、

〔寶曆集成綜鑰錄二十五〕寶曆四戌年二月

御勘定奉行江

高家衆

長崎奉行

右御足高御役料、只今迄、各裏印ニ而相渡候得共、向後直判手形ニて受取候樣申渡候間、得其意、其段書替奉行へ可被申渡候、

木刻華押

〔同文通考三〕押字

チカキホドハ、世ノ人事グサシゲクナリユクマヽニ、ミヅカラ判ヲ署スルニ堪ズシテ、多クハソノ形ヲ木ニ刻ミテ用フル事ニナリタリ、此物モトミヅカラ署スル事ヲ得テ、其信ヲ示スベキ所ナルニ、カクソノ本ヲ失ヘル事、クダレル世ノ俗、誠スクナキガ故ニヤアルベキ、サレドモカヽル例、異朝ニモアリシ事ナルベシ、此事輟耕錄ニ見ユ

〔輟耕錄二〕刻名印

今蒙古色目人之爲官者、多不能執筆花押、例以象牙或木刻而印之、宰輔及近侍官至一品者、得旨則用玉圖書押字、非特賜不敢用、按周廣順二年平章李穀以病臂辭位、詔令刻名印用、據此則押字用印之始也、

〔古今要覽稿姓氏〕草名刻木

判を木にえりて用ること、今は盛なり、西土にては、元の時よりありとみえたれども、皇國にては實に近世のことなり、判の本意は、前文はたとひ代筆を用るとも、これのみ眞蹟を以信を示すことなれば、意得あるべきことなり、新井君美の引し輟耕錄、後周の李穀が故事を以、權輿とすれど

も、これはその由來を尋しのみにて、誠の花押にはあらず、只名を刻し印のことなり、
〔柳亭雜筆四〕木を以て押字を彫て、墨にて捺たるも、古河の御所高基朝臣の狀に見えたれば、文明の末、天文の前に起れるにや、
〔憲法類編印章二十二〕戊辰〇明治元年十一月廿八日、諸侯へ御沙汰、
花押ハ自書之證ニ有之候處、文飾之弊習ニ仍リ、往々彫刻之分ヲ相用候事、其主意ヲ失ヒ、無謂次第ニ付、向後花押ヲ相用候書類、凡テ自筆ニ相認可差出旨、御沙汰候事、

改書押

〔氏家叢書十七〕一天保七申年三月十一日、御用番水野越前守樣へ差立之、
私書判此度相改申候、此段御聞置可被下候、以上、
三月十一日　堀田備中守〇中略
天保九戌年十月廿三日、宗門御改、土屋紀伊守樣江、宗旨借文ニ添差出ス、
拙者儀、書判相改申候、此段申入候、以上、
十月廿三日　毛利讚岐守
右書判相改候ニ付、御用番樣、并大目付樣、御目付樣、共一切取計向無之、文政二卯年、家ニ例有之、

僞書押

〔明良洪範二十二〕紀伊大納言賴宣卿ノ御身近ク召仕ハレシ者有ケリ、賴宣卿ノ御袖判ヲ寫シトリ似セヲ拵ラヘ、金銀ヲ借リ取ケリ、

判形吉凶

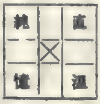
〔柳亭雜筆四〕寛永十三年刻本節用集に、判形吉凶を論ず、木性は穴數八つ三つ吉、四九五十凶、火性は穴數二つ五つ七つ十は吉、一四六凶、土性は穴數五つ十は吉、三凶、金性は穴數四つ九つ吉、水性は穴數一つ六つ吉と見ゆ、蓋五行生數成數に依て云ごとく知るれ共、當時世に用ふる人も無りしにや、水戸の中納言光圀卿は、寛永五年戊辰に誕生まし〳〵木性なるに、御花押は四穴なり、四は凶と云を用ひ玉はず、尾張の中納言綱誠卿は、承應元年壬辰に誕生まし〳〵水性なり、御花押

は四穴なり、髙松少將賴重朝臣は壬戌水性なり、花押は四穴を用ふ、同少將賴常朝臣は壬辰水性なり、又押字四穴なり、世に用ふる說ならんには、件の方々態と凶と云數を用ひ玉はんや、福島左衞門大夫正則は辛酉木性にて、押字三穴吉と云に協へども家を滅し、蒲生忠鄕癸卯金性にて、押字四穴吉といへども、身早世して子孫斷絕せり、然らば押字の吉凶は論に足らず、去共判兵庫とて判の吉凶を論じて、武田家に仕し者もあれば、寬永比に起れるにはあらず、〔海錄九〕

韻鏡歸納例

舜典曰直而溫

直溫切純（トンスミ）



直　父　火

溫　母　土



歸納純子三穴

土性人火生土

相生故大吉也

應（或ハコノ應需ナキモ可也）需

文政　月日

考（或授與）

〔明良洪範四〕綱吉公御若年、萬治ノ頃、判ノ兵部トテ、印判ノ吉凶ヲ見ル事神ノ如シトテ、大小名カレガ判談ニ因テ印判ヲ定メラル、、或人此旨申上ケレバ、仰セニ、夫ハ信ズルニ及ザル事也、假令甲府殿御見セ有共、我ハ見セ間敷也、幸ヒ、今年日光參詣ナレバ、神慮ニ任セ、御鬮ノ上ニテ極ムベシトテ、御判三ツ居ラレテ、神慮ニ任セ御定メ有シト也、

〔紀侯言行錄中〕賴宣君御判ト者占ひし事

山崎之普明院とて、暦道之名師、亦判の占の妙を得たるもの有、紀州より御使に京へ參るものに、御家老番頭の判形、左に賴宣君の御判を取ませて持せ遣し見せけるに、普明院曰、此判は出家ならば大僧正か國師判、俗ならば貴人高位の判也、但其本人の居たる直判にあらず、賤敷もの、寫シ居たる判也、然共こと外に貧なる判也と占、彼御使京より歸り、此段申上ルに、殿之御判形を貧なる判と占たるは、占の相違也と笑ふ、賴宣君のいはく、占は上手也、此判は近習小野木長十郎に寫させ直の判にてなし、亦貧なる判と占ふ事、猶以占の當りたる也、我身東照宮之御子に而、數箇國を可領知身が、僅に五拾萬石餘不足の祿に而居るは貧なる所也、普明院は占の名人哉と被仰ければ、聞人感じけり、

○按ズルニ、判形吉凶ノ事ハ、方技部觀相篇判占條ニ在リ、

〔古今要覽稿姓氏〕草名具名

西土にては、書牘の類に名を書し、終に押字をのするよし癸辛雜識見えて、宋人佛光國師、名の下に花押を書る、花押藪にあり、皇朝にては、古よりもあることにて、押字考に引たる古文書、幷に承久元年、弘安九年、正和二年の度牒、又長寬元年在地署判、攝津國島上郡眞上村の文和四年の文書等多くの連署、皆花押の上に名を具せり、是平生の例にはあらずして、たま〳〵あることなり、思ふにその名と判と具すること、名はもとより識すべき所以、判は後代の證となるべき爲に用ること

ならんか、然るに今のごとく當座の書札に用ることとも、京都將軍の比よりあることにて、伊勢貞丈の書狀にも見えたり、さて名と判と具する時も、必別に制するにあらずして、草名にて用らるるもあり、別字にやと思はるゝもあれども、南嶺が、草名の外に判と云ものありといへるは、通論にあらず、後代の證の爲に判することは、消息耳底抄、弘安禮節問答等に見えたり、南流別志、同文通考、押字考等に、近代のことにて誤のよし見えたるは、考索の委しからざるなり、弘安禮節問答に、公家にはなきことなりと見えたるは、古をうかがふことの廣からざるなり、花押藪、古押譜載る所、名と花押と具せる數多あり、枚擧にいとまあらず、慶長以後に至ては、武家はことごとく名と花押と具せり、これは此に云所の證にはなりがたし、されども今は又風俗となれるなり、

〔柳葊雜筆 四〕京都將軍家にも、草名の上へ又御名字を題さるゝこととなし、是は他に混るべきに非ればなり、管領も又姓名を記すこととなし、管領の名を記すは、細川勝元朝臣より起るか、（花押藪に、義持と名を記して、草名を題せしを載れども疑ふべし、）但法師は姓なく官なければ、名の下に押字を記して證となすこと、日蓮上人、大乘坊、玄證、蘭溪、道隆、竺僊、梵仙、みな名と押字と併せ記せり、但出家ならでも、官位なき人は、姓草名のみにて證と爲べきにあらねば、姓名を記して押字を題せしなり、鹿島の寶庫の文書をみても知べし、然るに享德の亂より、京鎌倉和せず、應仁の難に至り、英雄一隅に割據し、地を爭ひ堺を侵し、勇士を招ぐに重聘を惜まず、死士を養ふに厚祿を以てす、是に於て感狀證文の體一變して、將帥の名と押字とを幷せ題して、以て勳功を證するに至る、

〔花押藪 一 凡例〕一凡此書、上自天子下至連歌師、分類立部、各以年代爲次第、或一家同部者不拘年代、聯次出之、以便觀覽、

一凡此書姓名旁、註其家號、下註其父名及其官位卒年、以便考證、

一凡此書所載花押、皆臨其眞跡、或雖有傳寫、其原本有來歷、不涉疑似者也、坊間刻一本名曰判鑑、其

所載皆中古將士之花押也、今以眞跡質之、其狀皆異、蓋輕薄之徒、巧僞妄作、以眩俗眼焉耳、今悉不取、

〔刊謬正俗〕簽押顚

今人或署押、而又下印、漢亦有其法、代醉編引雜誌曰、王文恪留守西京日、長水縣申請買木錢數百千、王視其狀、卒呼吏作敕下縣令、追買木一工人械送府、既至皆以屬吏、吏問其故、王曰、凡公文皆先書押而後印、故印在書上、此乃先印後書、必有奸也、鞫之果重疊冒請、盜印爲之者、洛人服其精明、

〔細川頼之記〕丹波丹後若狹ノ國ノ動亂止事ナシ、丹波ヲバ山名治メタリケレドモ、國人山名ガ成敗ヲ不請、依之山名郡近キ國ナレバトテ、將軍ヘ歸シ奉ル、武州〇細川頼之是ヲ請取テ、故將軍尊氏、直義、義詮御敎書ノアル所領ヲバ皆返シ與フ、御敎書ナク師直ガ私ノ狀ノ有シヲバ沒收シテケリ、三代ノ將軍ノ御敎書有テ、雙方ノ論所ナルヲバ、先判ヲ破テ後判ニ歸シテケリ、サレドモ忠節ト其品トニ依テ用ヒザルモアリ、又後判ヲ破テ先判ヲ立モアリ、理ノマヽニ行ヘリ、

〔武家厳制錄二十〕一萬事兩樣之仕成にて、文書に先判、後判之出入可有之、先諸商賣借物、其外受當之義は、前判可爲道理、又師匠父母之讓狀などは後判を用ゆべし、〇中略

年號月日

〔撰要集法度〕文久二戌年十一月

町中素人ニ而、奉公人之受ニ相立候儀、親類同國好み之外、一切不相成、假令親類同國者たりとも、拾人より多く受判致間敷旨、前々より度々相觸候處、近來兎角番組人宿其外散判、陰判と唱、組合等ニも無之、多人數奉公人之受ニ立、人宿ニ紛敷、自儘之渡世致候もの有之、不埒之事ニ候、〇下略

〔慣習例〕當用便覽

違圖印狀。

一紙品幷認方等之事
附調印之事
一右印狀差出方之事
一答下ゲ札紙品幷認振之事

古事類苑

政治部五十八

下編

使者

鎌倉開府以來、事ニ臨ミテ主命ヲ奉ジテ諸方ニ使スルモノヲ、總テ使者、使節、又ハ御使ト稱ス、而シテ足利徳川兩幕府時代ニ在リテハ、將軍家ノ使ヲバ、特ニ上使ト稱シタリ、蓋シ上使ノ名ハ、南北朝ノ頃ヨリ見エテ、朝廷武家ニ通ジタル稱ナリシヲ、後ニハ專ラ幕府ノ使ノミヲ謂ヘリ、

軍中ニアリテ使命ヲ行フモノヲ軍使ト云フ、戰國時代ニハ、使番、使役等ノ稱モ見エタリ、而シテ使番ハ、徳川幕府ノ時ニ至リテ常設ノ役名トナレリ、其他使ニハ檢使、檢見使、内檢使、檢注使、巡檢使等ノ名アリ、此等ハ多ク鎌倉足利幕府時代ニ見ユル所ニシテ、徳川幕府ニ至リテハ、巡檢使ヲバ多ク巡見使ト書シタリ、即チ將軍代替ノ時、使ヲ諸國ニ遣シテ、地方政事ノ良否民衆ノ休戚等ヲ糺察セシムルヲ常トセリ、

名稱

〔易林本節用集志人倫〕○使者

〔書言字考節用集四人倫〕使价使者義同 使節 使令 使僧 信使文選註、誠信之使也、指南、使二異國一曰二信使一、 正使義同上 從事外國信使一等

〔俚言集覽志〕使者 使者は、俗につかはしめと云事を使者と云、鳩を八幡の使者といふ等也、行人を使者といふは去聲也、つかはしめの使者は如字也、○中略 論語三、使者出、子曰使乎使乎、

〔武家名目抄職名三十三上〕按、使者といへるは、もと定まれるつかさにはあらず、事に臨みて主家の命をうけ給はり、他方に使するもの、總名なり、されば侍雜色の分別なく、事の大小に隨ひて、使節をつとむることとなる故に、時にとりて人がらの尊卑はありけるなり、幕府より大名小名に至るまで、何れも使者といふ唱はありけるなれど、幕府の使節をば、御使上使などよべるが、大かたのならひなるよしは、前の按中○使番條に辨ずるが如し、もとより使命をはづかしめざらん爲に、其人しなをばえらばれしとみゆ、はじめは大名諸家なべて臨時の職掌なりしを、使番を定置ならひとなりし頃より、この使者の職をも常に設置ことゝなれり、但使番たるもの常非常の差別なく使をうけ給はる家もあり、また兩職を並置て、常と非常とをわかち命するかたもありしなり、其由は既に使番の條にのべたり、

〔甲陽軍鑑品第十七入〕武田法性院信玄公御代總人數之事
諸國へ御使者衆四人　一日向源藤齋　一秋山十郎兵衛　一西山十右衛門　一雨宮ぼんてん
○中略　御使いたすは、大方むかでの衆也、

〔明良洪範十三〕土岐山城守ハ相撲好ニテ、關西ニ名ヲ得シ伊郷十郎右衛門ト云拘ヘノ相撲有シカ、追々年ヲ取リシカバ、今ハ家士トナシ、使者役ヲ勤メ居ケル、

〔易林本節用集人倫〕○使節(シセツ)

〔倭訓栞中編十一〕しせつ　使節と書り、節は節刀の節の如し、符節の義也、庭訓に入部使節と見ゆ、

〔庭訓往來〕被仰下條々具以承候畢、○中略　抑御下文御教書嚴重之際、入部使節無異儀、莅彼所、令運行候訖、

〔貞丈雜記四役名〕一使節(シセツ)と云ふも使者と云事也、使者といふよりは使節と云は、少賞翫のよし、貞衡說也、

定使

〔運歩色葉集 知〕定使

〔易林本節用集 知人倫〕定使

〔松屋筆記 九十〕定使

俗に定使といふものあり、常使とかけり、盛衰記十八廿三丁オに定使と書たり、

〔源平盛衰記 十八〕文覺淸水狀天神金事

領送使國澄モ、今コソ始テ貴キ人トモ思知ケレ、常々對面シテ物語シケル中ニ國澄問云、抑當時世間ニ鳴渡雷ヲコソ、龍王ト知テ侍ルニ、其外ニ又大龍王ノオハシマス樣ニ仰候ツルハ、イカナル事ニテ侍ルヤラントイヘバ、文覺答テ云、此等ニ鳴雷ハ、龍神トハ云ナガラ、底弱ノ奴原也、アレハ大龍王ノ邊ニモ寄ツカズ、履ヲ取マデモナキ小龍メラナリ、○中略タトヘバ諸國ノ人民百姓ガ許ニ、職士定使トテ、底弱ノ奴原ガ、家國ニ鳴廻レバ、怖恐テ相構テ僻事ヲセジ、理ヲ失ハジトテ、所ヲ治メ家ヲ治ムレドモ、實ノ十善ノ君ノ玉ノ臺、日ノ御座ニ御渡アルヲバ、下臈ハ知リ進セヌ定也、○下略

〔新編追加 雜務〕一諸國庄公預所、地頭相論之時、糺定兩方之處、於地頭非法者、被處罪科、至預所定使者、雖有非據、不及別沙汰之間、依無所恐、國々所務啾々之間、異論連々不絶歟、然者爲絶向後濫訴、預所定使等、有非法之時者、可被改易彼職之旨、可被仰下之由、可被言上二條中納言家之狀、依仰執達如件、

文曆二年七月廿三日　武藏守 判

相摸守 判

駿河守殿

掃部助殿

〔經厚法印日記〕天文元年十月廿四日、岩滿ガ家沽却ニヨリテ、買得ノ主、請足地子錢等ノ爲ニ、丈數ヲ可定由申之間、以定使筑前打之、

專使

〔源平盛衰記十九〕兵衞佐催家人事
去程ニ、北條ヲ召テ平家追討ノ院宣ヲ給リタレ共、折節無勢也、イカヾスベキト宣ヘバ、時政悅申ケルハ、(○中略)千葉介經胤、三浦介義明ハ、其性有義不戾、其心有信不頑、爲一族之長、巳爲梟兵之頭、何奉背眞實之主、豈可與違勅之賊乎、早被遣專使、院宣之趣ヲ可被仰合、(○下略)

〔建武以來追加〕一國司領家年貢對捍地事(貞和二十二十三、沙汰、)
就貞永式目有其沙汰、(○中略)次非分押領輩事、載其名字難成施行歟、領主治定之程、先仰專使令撿納、有限年貢、可勒渡本所雜掌矣、

兩使

〔梅松論上〕後醍醐院逆鱗にたへずして、元弘元年の秋八月廿四日、密に禁裏を御出有て、山城國笠置山へ臨幸あり、卿相雲客少々供奉、畿内の軍兵等を召れ備さるゝの間、天下のさはぎ申も愚也、(○中略)同年關東の兩使上洛して、今度君に與力し奉る卿相雲客以下、與黨の罪を糺明して、所犯の輕重にまかせて罪名を定て、(○下略)

〔光明寺殘篇〕條々　元弘元年八月
八月廿五日、主上御座山門之由、被聞食定之旨、以兩御使(北方高橋孫五郎、南方糟屋孫八、)被申關東云々、　廿九日、以兩御使御雜色合戰之□□被申了、御使(雜賀隼人佑、相田十郎、)以兩人被申關東云々、

〔太平記十六〕將軍筑紫へ御開ノ事
將軍(○足利尊氏)纜ヲ宗像ガ館へ入ラセ給フ、次日大貳入道妙惠ガ方へ、南遠江守宗繼、豐田彌三郎光顯ヲ兩使トシテ、恃ムベキヨシ、ヲ宣ヒ遣サレケレバ、(○下略)

〔成氏年中行事正月〕一同六日、從管領御引出物、以兩使進上、

制度
使者緩怠

（甲陽軍鑑九上品第十八）正月〇天文七年廿日に板垣信形をもつて、信虎公より嫡子晴信公へ仰せつかはさる、〇中略重而飯富兵部〇飯富一本作板垣、兩使にて、信虎公仰らるゝ趣は、〇下略

（建武以來追加）一諸國守護人以下使節緩怠事康永三七四、御沙汰、
或可沙汰付下地之旨被仰下、或可催上論人之由觸遣之處、遁行違行之條、甚以不可然、向後於難澁使者者、須令改公所帶矣、〇中略
一寺社本所領事觀應二六十三、御沙汰、〇中略
次使節事、守御敎書日限、沙汰付下地、可執進請取狀、令遲怠者、於守護人者改補其職、至御家人者可被分召所領三分一矣、〇中略
一寺社本所領事文和元十一十五、御沙汰、
嚴密可遵行之子細、去七月以來載兩度事書之上、就面々訴訟被成御敎書、寄事於世上物忩云、守護云使節、尙緩怠之間、多以不事行云々、

使者事書

（室町家御内書案上）一爲御使某遠國へ下向之時ハ、事書相調之、其裏ニ加判、下向人へ渡之、近年不及其沙汰、

（室町家御内書案上）一御元服要脚、越前國段錢事、爲使節令下向、守事書之旨守護使相共相懸之、來二月中、嚴密可被致執沙汰之由所被仰下也、仍執達如件、
天文十五年二月廿三日　掃部助　大和守
前丹波守　攝津守
松田對馬守殿

使者作法

（今川大雙紙上）太刀等に付て式體之事
一他所他家へ御使に參候時は、若太刀有ば、事の子細をよく〱申上て後に進上可申也、若又同

道来有ば、参る時次第に参りて、歸る時は下座より立ものなり、○中略

躾式法の事

一主君の御使を申時は、能々心をしづめて仰を聞べし、我なまぎゝ成る事をば、押返して不審を申物也、又奏者として、我が主人の名乘官名などを申上たるに、縦御對面有とも、主人の名をば申べからず、又人に物を申候時は、片膝を少たて、人の顔に息のかゝらぬやうに出合て、少かたむきて物を云物也、就中夏などは、ふわ〳〵として人前に出合事有べからず、

一主君の御使に家へ行て、相構て主人の官にても、又名乘にても、努々正印などゝはいはぬ物也、又大人大名、又は主君の一族、殊更賞翫の御方へ参りては、直に物を申さぬなり、奏者を持て申上る物也、但又直に御尋有時は、申上ても不苦也、扨又歸る時も、貴人を先だて申て、其後歸ると也云云、

〔宗五大草紙上〕使節可心得事

一今川貞世書れたる大雙紙と云ものに、餘所へ遣候使節の可心得事、詞たしかにてうしをも聞しり可然仁を可用なり、先よく〳〵主人の仰を、心をしづめて承りて、一事も不審の儀をば返して尋申、心得すまして可勤、主人の詞を申おとさじと、口移しに申よりも、義と理と心根とたがひ候はねば、詞は替ても苦からず、先人して申て對面あらば、中座へ出て、片膝を立て、畏て可申候、返事など久しければ、夫は居なをりても承り候、是も不審あらば返して尋申て、義理を慥に可心得、うか〳〵と人のかほまもり、又座鋪見めぐる事不可有之、又状あらば文箱より取出して、うはがきをうへになして、名乘の方を人にまいらすべし、封付たらば箱ながらまいらすべし、又小者中間は封不付共、箱共に出べし、

一餘所よりの使兩人ならば、必こなたにも兩人して可承候、但一人して聞事も候、又兩人の内、い

ひ口は前より定まるべし、當座にあなたこなたと有べからず、一人は申おとす所を可申也、又公方様より諸家へ被仰出候事、さとしたる事には、奉行兩人に伊勢名字壹人そへられ候、猶かど有ことには、伊勢守そへられ候、其時も申口は奉行人なり、常は奉行兩人又三人の事もあり、

(家中竹馬記)一諸家へ御使に參ては、先御使之旨を奏者して申入て、見參もあれば、其禮の後、又奏者に始て伺候仕候御禮を可申由を云て、自分の太刀を奏者に可渡、馬太刀なる事も有べし、其由を披露して、又對面有也、今度自分の太刀をば直に進ずる人も有べし云々、前は公方様へ諸家御太刀進上有時、直に御進上あり、然上は諸大名へ對して、他家の宿老衆直進べき事、尤之儀也、但尋常は奏者に渡も、猶慇懃の禮か、さるに寄て、奏者もたゞ直にと云えしやくをする也、か様のよりのぎは、又自然の程々に寄べし、凡先此趣なり、總じて公界の儀は、斟酌のあるは越度すくなし、但斟酌が越度に成事も有べし、

一兩使三使にて物を申時は、申し口を先定めて、扠申時同道の人に一往禮をして云べし、他家などへ出て、傍輩の中、申口をゆづりあひて、つかゆる體成は不可然、兩使三使の出る次第は、常の前後の次第にて、申口は其中に功者などにいはすべし、又兩使三使來時は奏者も二三人出べし、一しては不可聞、

(德川禁令考十四殿中禁令條目)寛永元甲子年五月廿五日

條々

一殿中祗候之輩、不形儀之體有之砌、御尋ニ被遣候御使之者、其座之親類知音好之者之儀たりと云共、依怙贔屓なく有體ニ可申上事、

一御使ニ被遣候者、其座之體有様ニ於不申上者、科之輕重ニより、其當人よりも可爲曲事事、

一御使之者、其座之儀を不存様ニ於有之者、一座之者ニ被成御尋、有體不申上者、一座之者可爲曲

事事、

一一座之内ニ存候通、有樣ニ申上者有之處、相殘輩申かくすにおゐては、別而可爲曲事事、

一御使之者、其座之樣子乍存、不存樣ニ於申上者、其一座之者ニ被成御尋、御使其座之體存候を有樣ニ可言上之、申掠におゐては、猶以可爲曲事事、

右之條々可相守之、自然令違背輩あらば、科之輕重をたゞし、或は其年之知行切米被召上、或は御改易流罪、又は死罪ニ可被仰付者也、

〔諸使者奏者之次第〕一使者奏者上中下ノ事、第一上官ノ使者ノ時ハ、太刀折紙ヲ渡時、奏者ヨリ使者ヘ御持參ト云事モ有之、時宜有、使者御取次ト云、其時奏者太刀折紙ヲ請取、脇ニ置、各々字ヲ問ナ後、御待候ヘ、御使者ノ通可爲申聞ト云、使者ヲ請ジ罷立、主人ヘ右ノ通申上ル、主人對面有之時、偖太刀折紙ヲ持出候、主人ソレ中位ナレバ、座敷ヲ少下リ使者ト互ニ居テ、中ニテ太刀折紙ヲ奏者ヨリ請取、戴納ル也、但使者自分ノ禮ヲ仕ラバ立退キ、奏者ヘ太刀ヲ渡ス、右ノ如ク自分ノ禮ヲ打下リ御禮申也、

一右名代ノ禮ノ時、奏者取不次シテ持參ノ禮、口傳有之、右是ハ一段上官ノ使者也、

一第二、同輩ノ使者ノ事、太刀折紙ヲ右ノ通請取、座敷エ出、敷居ノ內ヘ入、太刀ヲ持ナガラ、使者ヲ敷居ノ內ヘ入、偖太刀折紙ヲ行ニ置退ク、主人ト太刀ノ間近ク置、此時主人ニヨリ被戴事モアリ、御手許掛ラルヽ事モアリ、戴ク中ニモ上中下有之、偖退キ自分ノ禮右同前、

一第三、下輩ノ使者ノ時ハ、太刀折紙ヲ請取、太刀ヲ主人ノ前ニ置、偖使者ヲ呼出ス也、太刀折紙ノ置所モ事ノ外下テ置也、自分ノ禮右同前、上中下口傳有之、

〔使者談 一〕使者常例談

一、使者は上下を着用す、

使者擇器

二使者は必馬に乘、鎗を持する、

三使者を勤之時、先樣屋敷之門前に至り、十間計り手前に而馬より下り、潜りより入主門内江從へ入者は、若黨草履取計也、

四雨天にも他の門内は草履をはき、手傘をさし、雨衣は門外にて取る、

五式臺へ上る時、押捲之上にて刀を取り、若黨に持せ置候、

六式臺を上り、使者間江行とき、廣間番の侍中へ時宜する事無之、出入ともに同じ、

七口上を述る時、儐者ニ向て先樣主人の名を申し、次に我主人の名をいひ、扨口上を演說す、

八口上を述終る時、儐者使者の名を問、使者も儐者の名を問也、

當時武家何れの使者も、必此八條を不離、

〔人倫訓蒙圖彙一〕使者役は、公界に出す第一の面道具なれば、其器量をえらび、發明にして辨舌あざやかにて、禮式をしり文字をしりて、片言をいはざるを上とすべし、奏者又同じ、

〔使者讀八〕使者問答八條中略〇

七問て云、使者儐者之爲人を擇ぶに、早く近くいはゞ何を以て肝要とせんや、

答て云、使者儐者に肝要と云は、辨舌爽にして、口上分明に聽分、文字能知り、特に記憶の切なる、實に其任に堪たりと謂つべし、猶又顏面容貌の不賤、威儀公望の嚴なる又可取なり、

按するに、此に容貌の美を云、李白これを聞ば、凡市不擇其香味と云んか、良將の取人や、必在智而不在貌に、昔し孫臏魏に刖られしも齊王これを用ひて元帥とし、遂に馬陵の功あり、然れども使者は至而晴業なり、男振よく辨舌よく仕成よければ、八難を蔽すと云、此言甚だ俗見といへども又理也、

八問て云、譬へば世上に技藝者を擇ぶには、先其技を試み、能其任に堪たるを以て、而して後職に

既因て其事に當て、自由を得、能其業を辨ず、今使人の如きも、應作進退法なきに非ず、然るに其法を討論する者少く、又其器を擇ぶにしも非ず、然れば先にしては如何計の君命を辱じむも知べからず、されども先は稍埒の明が如きを見れば、使者は十歳の童子も可成ことに被存候、答て云、以今時平にして、使事皆平易の所作也、一旦の應弔禮謝の如きは、誠に十歳の童子も容易に似たり、凡そ武家の兒は、幼より君臣禮義の郷に長じて、使事の進退應對生れながらにして習熟す、是を以て使事に應ず、到る處宜きを得ずといふ事なし、然れども多くは是碌々たる凡庸所謂因人成事と云もののみ也、若夫賢者は錐の囊に處が如し、一言の應對穎脫未見必人の聞を聳ん、子曰、使乎使乎、誠に使价の本志をいはゞ、晏子が器、子產が博物なくんば不能、藺相如が完璧、申包胥が哭於庭、可謂誠に使節の主意を得たりと、張騫、蘇武が奉使也、執節沒身不屈王命、雖古之膚使、其猶劣らんや、諸夫子云、誦詩三百、使於四方、不能專對、雖多亦奚以爲、十歲の童子豈特能之乎、

〔建武年間記〕雜訴決斷所

一反坐事

誣告之反坐、文法已稠、重宜任本條、被加嚴禁、當所并國司守護上使等挾私緯參差者、其科同前、

〇中略

一違背勅裁、拒捍國司守護上使等、構城郭及合戰擾事、

守先度御事書、固可有遵行之沙汰、〇中略

建武元五十八治定畢

〔建武以來追加〕一寺社本所領事觀應三八廿一、御沙汰、

違背先日事書、不應使節遵行、空令馳至當年西收之由、多以訴之、造意之企巨遁其咎、於如然之族者、

可處所當罪科之上、縱雖立忠功、永可止恩賞、〇中略

等持院殿御判〇中略

一不應御教書輩事

背被仰下之旨之由、使節令注進者、準御定違背咎、可被召所帶三分一、次對使節致合戰輩事、可准故戰矣、

〔花營三代記〕永和五年〇康暦元年八月廿三日、門眞奉行、日吉祇園北野神輿造替要脚事、就綸旨重所有其沙汰也、所詮以諸國之段錢可造畢三社之神輿云々、此上仰使節召出國々大田文、段別叁拾文〇註略嚴密可檢納之、若令對捍者相處罪科云、交名云、在所可注申之、次先度難澁所々事、守護使相共遂入部、令譴責可究濟之條同前、

〔武家名目抄〕職名三十三上按、御使といへるは、もと一職の名にはあらず、使命をうくるもの、貴稱なるよしはいふもさらなり、されど鎌倉右大將家、武家を創業ありしよりそのづから御使といふひとつのつかさいできたり、これ後にいふ目附使番など兼たるごとき職掌にあたれり、たとへば其所役の內、追討使と共に軍陣に臨み、又は諸國の形勢を監察し、將士の居動を推知するなどの類、皆目附の職掌なり、又ひとへに君命を傳ふるのみの所役は、卽使番のつかさなり、鎌倉殿の時にも、始のほどは、人がらの尊卑を定められしことも見えざれど、中頃より後は其しなやや定まれり、同じ非常の事にても、文官の所作たるべき御使は、大かた奉行人に命せられ、あるは北條家の家令などうけ給はることもあり、又武事を專とすべきことには、其事に堪たる人をもて差充られしさまなり、足利殿の時にも、御使は大かた奉行人の內を用ひらるゝことなりしが、天文弘治の際にいたりては、職員備はらずなりしかば、御使をうけ給はる人がらも、一樣ならざりしなり、さて鎌倉足利の兩家ともに、事だちたる時は、必御使二人を差充らるゝならひなりけ

れば、常の辭には兩使とのみもいふことといできたり、何れにもこの職あづかる所は、目附使番を合せたる程の職掌なり、もとより臨時の所役にして、定日設置れしものにあらず、(但假そめなる使者なりとも、御使といひしことなきにあらず、それは近臣もしくは同朋などやうの人を用ひられしなり、)

〔吾妻鏡三〕壽永三年(〇元暦元年)二月十八日丁丑、武衞被發御使於京都、是洛陽警固以下事所被仰也、

〔吾妻鏡四〕元暦二年(〇文治元年)三月四日丁亥、爲鎮畿內近國狼唳、以內膳大夫久經、近藤七國平、爲御使、被差遣巳訖、而猶在洛武士、現狼藉之由、依令聞及給、爲散叙疑之恐、被言上其子細云云、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年(〇建保元年)四月廿七日戊寅、宮內兵衞尉公氏、爲將軍家御使向和田左衞門尉宅、是義盛有用意事之由依聞食、被尋仰其實否之故也、

〔吾妻鏡三十〕文暦二年(〇嘉禎元年)五月廿三日乙卯、石淸水八幡宮寺、與興福寺有確執及喧嘩等之間、可計沙汰之旨、被下院宣之由、自六波羅被馳申、是薪、大住兩莊、用水相論之故也云云、仍被經其沙汰、差遣御使、遂實撿、就左右可有議定之趣、今日所被仰遣也、

〔新編追加雜務〕地頭等可存知條々

一給分所知之外、任自由近鄕地領押領、可停止之、次地頭者、守本地頭下司之跡、可致沙汰也、但本下司得分、無下爲之少之所者、隨御使之注申、可令計御下知也、御成敗以前、不相待御計、領家預所鄕司得分、令押領之輩者、可處咎事、(〇中略)

一新地頭補任莊園、公領本地頭下司得分、爲御使沙汰、可令注進之、

一未被補地頭沒收所々、爲御使沙汰可注進事、

如風聞者、去年兵亂之時、相從京方輩之所職所領、大略雖注進、猶爲守護代等隱籠庄公多之云々、而在廳官人等、恐守護代、詳不注進歟、憶任實正、可注申之、若又本下司雖無其咎、沒收之內(仁)注申之所所有之者、委尋明可注進也、

右條々守仰旨可令下知、若猶背禁制之旨、自由張行自由非法之輩者、云守護人云地頭職、可被改易也、可存此旨之狀、依仰下知如件、

貞應元年四月廿六日　　　　陸奥守平　判

〔康富記〕寶德元年八月十日戊午、參局務文簿、官務參會、(有盞)一局務令語給云、昨日瑞春院殿御逝去、就之室町殿御服假、幷御禁忌事、如何樣可有御沙汰哉、可被計申之由、自室町殿以御使(布施民部大夫、飯尾左衞門大夫、)被仰出傳奏中山宰相中將之間、爲申其御返事、武家近年先例可注給、且可奉意見之由、自傳奏以使者(伊賀)被示局務之間、注進之云々、　三年九月八日壬寅、是日自武家被遣使節於南都、依神木入洛之有聞也、管領畠山左衞門督入道御敎書數通被成之、同被成遣綸旨者可然之由、武家就御申沙汰被成下綸旨於寺門社家等云々、御使奉行飯尾美濃守貞元、同左衞門大夫爲數、松田主計允、是三人也、

〔天明年中行事(正月)〕晦日關東御使

是は年始御祝儀御使として、高家肝煎三人の内上京あり、參內の日限仰出され、御使所司代衣冠にて同伴、唐御門より參內、諸大夫の間より昇殿、鶴の間に著座、傳奏出座、御口上申達有、兩卿言上の後、御對面有べきのよし仰出され、淸涼殿御上段へ出御、兩卿誘引、布障子邊に列座、御進獻之御太刀折紙傳奏披露、御使中段において龍顏を拜せらる、次に亞相公御進獻の御太刀折紙披露の次第前に同じ、次に貫首中次にて、御使所司代自分の御禮、御太刀折紙壹人ヅヽ、御中段へ持參有、ひさしにおいて龍顏を拜せらるゝ、次に天盃下され、中段にて一人ヅヽ頂戴畢て鶴の間へ退き御禮申退出也、

〔孝亮宿禰記〕元和十年正月廿三日戊寅、武家年始之御使上洛、今日參內、大御所御使織田兵部少輔、(白銀百枚御進上有之云々)大樹御使吉良佐兵衞督、(御進上物同、大御所云々)

上使

○按ズルニ、毎年幕府ヨリ年頭ノ御使ヲ朝廷ニ上ル事ハ、歳時部年始祝篇ニ詳ナリ、

〔武家名目抄〕職名三十三上 按、上使は即御使の事なり、されど鎌倉殿の時に此名稱あることをきかず、室町殿の時にいたりては、上使とも御使とももとなへたれど、上使といへるは、公方家の使者に限れる名となり、御使といふは、大名諸家にも相互によべるならひなりき、但元龜天正の頃にいたりては、諸家にても、内々には、主人の使者を上使とよべることもありしなるべし、職掌等の事は御使の按中にのべたり、

〔東寺百合文書〕タ一ノ四 裏書 建武元年

注進　備中國新見庄東方地頭御方損亡撿見幷納帳事 ○中略

一散田分 ○中略

六斗六升四合　國司上御使入部ノ時雜事下行之、結解狀別紙在之

一斗一升五合　宗道井料下行之、寺家上御使四郎共出返抄畢、

貳斗二升　爲宗井料、同上御使返抄在之、

三斗八升五合　横見井料、同上御使下行之、返抄在之、

〔大乘院記錄〕建武應永引付 春日御社領亂入河口御庄、○越前坂井郡 致惡行狼藉交名人事、

一上御使　熊谷　片山兵庫助　子息孫次郎 ○中略

右大概注進之狀如件

建武二年正月廿六日

〔松田系圖〕義通 波多野次郎(中略)嘉應元年二月十五日死、六十二歳、——實方 廣澤——實高——實村 廣澤新三郎、備後國上御使、

——實綱 十郎、同御使

〔鶴岡事書案〕佐坪書下案 就當年所務、上使兩人被著下候條々、申含子細等候、年貢等急速加催促、可被皆濟之旨、

被申付候、

一兩使在鄕之間、厨雜事百姓中事者、雖同扁候、可致其沙汰候、於堂被分者、壹遍可勤其役候、

一兩使上用送事、一人分壹結宛、合貳貫文、爲兩村役可致其沙汰候、

應永二年閏七月五日　　法印在判

佐坪鄕政所殿

〔建內記〕正長二年○永享（元年）七月七日、欲馳參室町殿之處、別當僧正（一乘院顯僧正也）注進狀（略○註）到來、與福寺良方者豊來等有確執事、及合戰之企、於寺門有人々籌策之子細、万一不靜謐者、其時重可注進、早被下上使於寺門、可被加制止之由也、

〔南禪寺文書〕請狀申狀之事

一風損時、國中平均、鄕鄕ひつかけとあるべく候、次に濱森竪入三鄕之事、近所のひつかけとあるべく候、其餘に申まじく候、

一當年水入河押の事、上使けんはうに見わけられ、可預御成敗候、雖水入候、不損ざる在所におき、掠公方申べからず、次に諸政所江無理なる訴訟申公事坊士留事、於向後あるまじく候、及大訴者、寺家江歎申べく候、

一寺領御年貢、元は糠米壹石の分、榛原以九合本米八斗分、雖致沙汰、地下之侘事、嘉吉三年より、上使寮江本米榛原以九合、漆斗宛にて如其納上候、若水榛入事候者、堅可預御罪科者也、

右條々於守護所落居候上者、子々孫々ニいたるまで、不可有異篇之儀候、仍請狀如件、

文安貳年八月十六日

〔康富記〕寶德二年七月廿五日丁卯、飯尾與三左衛門尉（之種）今晚令下向美濃國、爲段錢上使者也、吉田社之造營料被寄之國也、

(親元日記)寛正六年三月廿六日癸酉、就一色兵部少輔殿御所望之御狀整之、以蜷播部申之、御案有之、

越中國新河郡布西保就申分之儀、自兵部少輔殿被下上使候、自然之時、宜可有存知由候、恐々謹言、

貞

今日

蜷川越中入道殿

(應仁記 一)武衛家騷動之事附畠山之事

次ル年文正元年ノ夏ノ比、頻リニ貞親申ニヨリテ、義廉無罪而出仕ヲ可被停止剰ヘ勘解由小路ノ家ヲ義敏ニ渡スベシトノ上使頻波ナリケリ、

(齋藤親基日記)文正元年十二月廿日午剋、自右京兆門前在家出火、○中略爲御倉(根井相國寺儀守之東)警固所集御所中、外様衆被差遣之、爲上使布野州、并親基罷向、依加成敗無爲、

(親長卿記)傳奏奉書案

當社領越中國倉垣庄上使職事、中村氏人景定之處、百姓等令同意、有限去年月宛神事定等、號損免不致沙汰云々、爲事實者、太以不可然、就中同庄田四ヶ村之内白石名事、氏人景盛本役事年々一向不及其沙汰、抑留之條、言語同斷次第也、各放氏人職可處罪科、若有子細急度令參洛可明申之由可被下知給之由、被仰出之旨候也、恐々謹言、

十月十○文明五年六日　親綱判

鴨禰宜三位殿

(大内家壁書)堺目相論之時餘地并餘得之事

諸人知行分、堺目相論、自地內及御沙汰、以上使被撿地之時、各所給之地過分限、有分土餘地并餘得

事者、此餘地餘得之事、以中途之儀可爲公用之由御定法也、諸人爲存知壁書如件、

延德三年九月十三日

〔經厚法印日記〕天文元年十一月十一日、就一向堂年貢米之儀、高畠與十郎被官內田、柳原源七郎衆、彼百姓ヘ使ヲ入、林垣幷一向堂又太郎所へ付之云々、昨日自彼上使共爲案內來了、

〔駒井日記〕文祿二年十二月二日

一尾州國中八郡、太閤樣御知行被遣、並關白樣御添上使被遣出立、○中略

一爲郡奉行御上使被遣事、○下略

〔長曾我部元親百箇條〕掟○中略

一御上使、幷御下代御下國之時、馳走之儀、可竭精魂御振舞、送馬其外念を入令奔走、於拙餘仁者、可加褒美、付、其時案內者相添者、申次第萬可氣遣事、○中略

慶長貳年三月廿四日　盛親在判

元親在判

〔柳營秘鑑〕一上使之次第

一御三家方御參府之節、上使老中被遣之、御暇之節も同斷、

但賜物無之、爲御禮登城之時分、於御前御鷹御馬被遣之、但御嫡子方右同斷、始而御暇被遣時は、御履物被進之、

一國持大名參府之時、上使右同斷御暇被下節同然、白銀卷物被下置、爲御禮登城之節、於御前御馬拜領、但陸奧佐竹は馬所ニ而御馬獻上候故、拜領無之、歸國之上、爲御禮使者を以、御樽肴等獻上之、右使者登城之節、謁老中退出する也、同御暇被下之節も、於殿中奉書被相渡之、使者江卷物被下置之、準國主之面々の使者も同然也、外之使者は、謁奏者番衆退出す、奉書は月番老中宅ニ而

被相渡、勿論使者賜物無之、○中略

一準國主之面々參府御暇、共ニ上使奏者番被遣之、

一宗對馬守は雖爲國持、參府之時分、上使御奏者番被遣、御暇之節者老中被相越、古來之爾上使ニ而有之を、中興家臣柳川豐前守訴論之事有之より、上使之品を被貶之、參府は御奏者番被遣之由、

長刀御免者、文昭院様○德川家宣御代之初、朝鮮人來聘之砌御許容也、

一國持は四品といへ共、上使老中被遣之、但家々之格ニより未任侍從内は、上使御奏者番被相越事も有之歟、

一國持之隱居參府御暇之時、上使御奏者番被遣之歟、勿論家々之格例ニ而違有之、

一越中富山城主　松平出雲守利隆

高拾万石　從四位下菅原姓本氏前田

嫡子

右出雲守　松平大和守　松平左兵衛督

此三家は、參府御暇之節、上使御使番被遣之、白銀卷物等被下之、御禮之時分、於御前御馬拜領之、

一松平肥後守　松平讃岐守　松平下總守　松平但馬守　松平左京大夫

右參府之節、上使御使番被遣之、御暇之時者、其前日奉書を以召之、於殿中被仰渡之、尤拜領物有之、嫡子ニ者上使無之、

一上使を以、御暇被下面々之拜領物は、上使之家來暫先達而持參之、○中略

一御三家御鷹場江之御暇之内、兩番頭之内を以爲上使、御菓子被進之、

〔德川禁令考前集十八〕延享四丁卯年四月達

上使ニ相越候節唯今迄熨斗目袷著來候得共、常々服紗小袖ニ而相越候分者、向後服紗袷著用之事、

右之趣、大目付御目付江相摸守、水野壹岐守口上ニ而申聞、上使相勤候向々江可被達置旨申渡、御本丸大御所樣、大納言樣御側衆江一通宛、奧向江も一通宛添候而、相摸守渡之、

〔武家嚴制錄十八〕一領主所替之時、上使御下知條々、

條々

一今度所替ニ付而、百石に壹人壹匹出之、二日路可相送事、

一種借之儀、自藏出之、借付儀於無疑者可返辨事、

一借物は可爲證文次第事

一年貢未進可棄捐事

一未進方に取つかふ男女之事、所替之地迄送屆、其上本國江可返之、但過廿箇年者可爲譜代事、

附譜代に出し置男女之事、於無其紛者、譜代勿論之事、

右之條々、依仰執達如件、

寛永十九年八月十四日　對馬守

豐後守

伊豆守

上使中

〔上使勤方先々手續記〕天保七年申二月六日　上使松平金之丞　松平加賀守

御廐之鶴一

一門地覆外ニ家老出居、玄關前下座敷之處迄、先立致案內、

一加賀守玄關敷臺中程迄出迎、著座ニ付、鳥渡下ニ居致會釋、夫ゟ先立被致案內、歸之節も敷臺迄、

一刀取家來、板緣ゟ疊緣江移候處にて出居、刀相渡、

　但座敷ニ刀掛有之、次之間床ニ刀ハ差置候、

一熨斗家來持出

一多葉粉盆、薄茶出候而、加賀守出候而挨拶有之、被引候而椀盛菓子出、夫ゟ吸物膳引替、酒一獻有之、加賀守自身肴持出、挾ミ被呉候而引取申候、獻付致銚子入、濃茶菓子吸物膳ト引替、濃茶出、呑、仕舞、薄茶菓子引替候而薄茶出候、右膳椀等引候而、御先手會釋致候得バ、加賀守出御請被申聞、候而罷立、

　但次之間下座ニ而、椀盛菓子吸物酒御先手相伴被致候、銚子入候ト、次之間外入側ニ出被居候、濃茶菓子渡、薄茶菓子等ハ相伴無之、

一取持御先手荻野源左衛門

一加賀守盃事有之候由ニ付、斷申度段、坊主衆ニ申聞置候、盃事ハ不致候、

一挨拶、太刀馬代金壹枚、

〔職掌錄〕御使番

御鷹の鳥被下の節上使を勤む、其外大名の家格によつて參勤、御暇之節に上使を勤む、○中略御三家方在國の節、臨時上使勤む、　城請取の上使、兩番の內一人差添勤む、其外地方の事は御代官差添勤む、先早朝其城へ入見分あり町宿へ下り請取渡の人數相揃、上使出て大手前に床凡に腰懸、請取方の大名も大手前に陣す、大手の門開くと段々に入替る、入者は門の左、出る者は右也、一人出れば一人入る、鑰鍵其外飾道具、右之通に立替る、外の番所より入替、段々內の番所へ入替る也、

替り仕廻、案内次第上使入城、臺所前の床几に座す、但御使番計也、其外は數革を用ゆ、請取方の大名、其所に敷革を設け座す、夫より盃出、上使より始て、城請取の大名へ指し引渡出、盃事終て其所に罷立る城主は臺所口より入、上使は玄關より入、城主出迎て、書院へ通し、料理出る、御代官も同斷、幷供廻りへも料理出る、但料理は町宿よりの仕出し也、

〔幕朝故事談〕鄭士　侍御　侍中

老中病氣の節、鱚の生乾は、老中の書にて輕き御家人持參、其後鯛の味噌漬被下候節は、御小納戸上使也、左衞門佐は不送迎、親類酒井左衞門は對客の間迄出迎、西尾隱岐守は玄關迄出迎、子息は不出、公方樣より三十枚御臺樣より七枚、若年寄上使也、○中略

御老中樣方、國持へ上使の時は、主門闕之外迄出、門內に待居る、駕より出る時闕之外に出る也、仙臺などにても、家老の門外へ出る者もあり、又白洲にならび居もあり、諸大夫は留守居各披露をする、其時上使願柄する而已、送りの時も主人の出る處同じ、御刀は主人の家來持之、泉州樣、加賀守へ上使の時、加州病氣にて、分地の出雲守出迎、同じく門闕の外迄也、名代の貴賤にはよるべからず、又上使なれば老中上使にても、番頭にても、御使番にても皆主人玄關の式臺迄出る事なり、田安樣小次郞樣へ菖蒲かぶとを被下候時、大屋遠江守御小納戸頭取にて上使に來、其時田安樣式臺迄御出迎なり、其時下座筵の際迄草履をはき付候とて、わるく言たる事なり、御老中樣方は却て不然、四五間前より草履をぬぎ、腰をかゞめて御出被成候、此大屋遠江守、後に御家老に被仰付、是は竹口勘左衞門、御領地の御取箇を上ゲ、御領地の百姓騷動する故、御家老のかひなきゆゑなりと思召、御小納戸頭取より、大屋遠江來る、御輔佐時分の遠江是也、御三家樣方は、上使の節、御出迎は御ぬぐひ板迄、御送りは御式臺迄なり、○中略

諸侯

加賀守死去の節、御香奠銀五十枚、御悔の上使の節被下、上使は奏者番也、病中初の上使は奏者番、二度目の上使御小姓衆也、佐渡守は病中、奏者番の上使一度也、御香奠も又奏者番三十枚也、御譜は高家前田信濃守を償也、〇中略

雁被下、皆御使番上使なり、陸奧、加賀なれ共、御使番なり、御三家様は番頭なり、有鶴無雁、薩州にては、上使を鬮の上客にする、客付に上使徳永平兵衛様、勝手口松平加賀守殿と有之、〇中略

松平遠江守様、御方角御勤め、出火有之日、雁被下の上使有之時、若殿名代に上使を受、當主は火事場へ出候事、

〔類例略要集〕近年上使改替

伊達遠江守　安永十丑年四月御暇ヨリ老中、文政七申年ゟ参勤御暇共御老中、

南部大膳大夫　文化六巳年従御暇計御使番、夫ヨリ参勤御暇共御奏者番、同十二寅年ゟ参勤御暇共御老中、〇中略

津軽越中守　文化六巳年二月ヨリ御暇計御使番上使被ニ御出一、同十三子年ヨリ参勤御暇共御奏者番

松平越後守　元七十五萬又廿六萬又五萬復十萬石　中古御暇計御使番、文政元寅二ノ七ヨリ復古両度参勤御暇共御老中、

松平備後守　文政四子十二ノ廿七、両度御暇計御使番、

松平淡路守　文政七申十ノ廿六、参勤御暇共上使御奏者番被ニ成下一旨、羽州御宅御書付、

松平大和守　前々御暇計御使番、天保七申六廿五ヨリ参勤御暇共御老中、

松平左兵衛督　天保六未四ノ十三ヨリ参勤御暇共御奏者番

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年七月十六日、棚倉白川ト封地ヲ換ヘキノ上使ヲ川勝中務等ニ命ズ、

御使番川勝中務、御小姓組井上越中守組田中主計、　陸奥國白川城爲引渡被差遣候間、可致用意候、　御使番小出織部、御書院番土屋豐前守組川副征五郎、　同國棚倉城爲引渡被差遣候間、

可致用意旨、出雲守申渡之、

十二月廿五日、棚倉川越ト封地ヲ換ベキノ上使ヲ命ズ、

金二枚ヅヽ、御使番土方彦三郎、陸軍奉行並支配勤仕並間宮虎之助、　右は、武藏國川越城爲請取渡罷越候ニ付、御暇拜領物仰付らる、入念可相勤候、　御使番小出織部、陸軍奉行並支配勤仕並川副鉦五郎、陸奥國棚倉城爲引渡罷越候に付、拜領仰付らる入念可相勤候　右河内守申渡之、

軍使

〔武家名目抄職名三十三下〕按、軍使といふは、即使番のことにはあれど、前にものべし如く、家々の定にて、使番には常非常の差別あるも聞ゆ、殊に非常のかたは、軍務に熟せる者を以て、臨時に定めらるゝことなどありて、常の使番よりも、猶さら其器をえらばれしなるべし、且由良家傳記、見聞雜錄等に、目附横目の職たるものをも、軍使に補することあるを思へば、正しくなべての使番の一名とのみはいひ難かるべし、されど使番の内にて非常の務をうけ給はる輩は、軍使といへるに異なる事なし、又播州征伐記、惟任征伐記等にみえたる軍使は、首將の命をうけ給はり、一軍の部將たる人をよべるものにして、常の軍使の類にあらず、征夷使征東使などの使の意に同かるべし、但當時正しくしかとなへしにや、或は記者の筆すさみにや、はかりがたけれど、二書みな大村由己の筆記にして、共に其世のものなれば、必其稱なりしともいひがたかるべし、

〔由良家傳記武家名目抄職名三十三下所引〕軍使、是は不斷は、使番目付などゝ世上にて申候、此者は軍に心懸器用勝れ、健にして懸引物馴たる士の、無欲なる者可被仰付候、

〔甲陽軍鑑品第二十九十上〕晴信公軍中にて、御使の衆十二人は、むかでの指物しない也、白地には墨にてかく、黑地には朱にて書、黑地に金にても、青地に金にても、面々覺悟次第、此二十人は軍の時の御使衆也、

使番

〔荒山合戰記〕能州石動山軍附石動山燒失事
大衆等モ二王門ノ軍ニ皆被討取タリト聞エシカバ、其實ヤラン、又敵ノ謀ニヤ有ラン、實否ヲ極ント、軍使ヲ遣ントスル所ニ、軍兵共ハ此左右ヲ聞テ、元來落心ノ付タル者共ナレバ、ナジカハ少モ怺ベキ、吾先々々ト、四角八方ヘ逃散ケリ、

〔惟任退治記〕將軍者、相具信忠、於京都御動坐重而惟任日向守光秀爲軍使、早早令著陣、與秀吉可相談依合戰之行、可有御動坐之旨、嚴重也、

〔播州征伐記〕毛利輝元、小早川隆景、成可見續三木城之行、艤數百艘而夜中雖上明石浦魚住、軍使乃美兵部丞、兒玉內藏大輔、此外雜賀士卒成加勢、堅壘居陣、

〔武家名目抄職名三十三上〕按、使番といひて定置事は、もと將軍家にはじまりしにあらず、又古き世よりの所職にてもなし、これは應仁、文明の際より、天下の亂うちつゞき、諸家各戰陣の務を專とすることゝなりしより、才幹もありて、ことさら軍事に便なる者をえらみ、使番となして、軍中の使節を役せしむることゝいできたり、但甲陽軍鑑、淸正記などにみえたるごとく、家によりては、常の使番と非常の使番とを、分をけるかたもありしなり、今の世にも、常と非常とをわけ置家もあり、又分ざるもあり、もと此つかさは、鎌倉殿、室町殿の時、臨時の所職に御使とよばれし職掌の一端なる事は、既に御使の條に述たるが如し、猶使者軍使等の條をも合せ考ふべし、

〔明良帶錄後篇〕御使番千石高 若支 菊南御敷際
此場は、武功第一の場數覺の者の勤場にて、五の字の九四半幟に母衣を掛、敵陣に使して君命を辱しめざる主役也、夫ゆへ、當時も遠國の御使、御目付代、御代替り國巡見等、雁雲雀上使、御規式御成の節隨身の役、火事場出役、非常の節何にても出合なり、御番衔五十程有之、火口番御城番、御老中附など有り、此場御役替、正月十一日御吉例によりて被仰付之、

〔德川禁令考十七使番〕使番 累代武鑑ニ、慶長五子年、家康公關原御陣、同年秀忠公信州上田御陣、井慶長十九寅年、家康公大坂御陣、元和元卯年、同地夏御陣ト題シテ、毎陣ニ數名ヲ列ス、其末ニ曰、右之面々非ニ定役一、臨時其器量ニ依而被ニ仰付一歟、御目付上ノ役ヲ勤ルハ、軍中ノ職ト云、

〔別所長治記〕平山合戰
軍卒多ケレバ六カシトテ、武勇ノ者ヲスグリ七百餘騎、イサミニ勇ンデ押出シ、前ナル川ヲ打渡シ、鶴翼ニ陣ヲ取、シブマリカヘッテ備タリ、秀吉山ヨリ見下シ、敵ヨセ來ルゾ押出セヨト、以ニ使番一觸ラル、○下略

〔太閤記〕六丹羽五郎左衛門尉長秀志津嶽之城へ籠入事
秀吉公は夜の明るを待兼、木の本をまだほのくらきにをし出し、志津がたけ城の南に御旗を立させられ、弓鐵炮のかしら分共に、堀きりのこなたなる勢は、只今巳時ノ引取と見えしぞ、急ぎ走著、うたせよ／＼と使番母衣の者を以仰付られしかば、心得候といひもはてずひしと引附、○中略

北莊表被ニ寄ニ陣事
翌日廿二日、北莊へをしよせらる丶、勢之次第、堀久太郎を先として、其次取出々々、番手の次第に任せ打候へと定め給ふ掟之事、
一進退其外何事も、母衣之者幷使番次第可ニ守ニ其法一事、○中略
右條々、無ニ相違一可ニ相ニ守此旨一者也、と五六十通調させ給ふて、夜半以前にふれ給ふ、

〔板坂卜齋記〕慶長五年九月十九日、何方の人にて候や、可然武具かぶとはきず、黑き具足鹿毛の馬にのり、金箔おし候さいづちのさし物にて、御先へ被ニ參候衆と前後うちまじり通り候、先へ被ニ參候衆は、先年の大名衆の使番にてもあるべきかと、心をつけ候人もなし、家康公御乘物の内にて、間は廿町もあるべきに、金箔のさいづち光るを御覽じ、改候へと御意にて、改候へば落人也、

○按ズルニ、使番ノ事ハ、官位部德川氏職員編使番篇ニ詳ナルヲ以テ、此ニハ軍中臨時ノ使番

使役

ノミヲ掛グ、

〔落穗集追加四〕御使役の事

一問曰、以前の義は、御旗本に於て御使番御使役衆として、二段に在レ之義を申傳るは、いよ〱其通りに被二聞及一候や、答曰、其儀を我等承及たるは、台德院樣〔秀忠〇德川〕御代、大阪冬御陣の節より初りたる事にて候由、子細は、其比迄の御使番衆と申は、御譜代の御旗本衆の中にて、數度の御陣先に於て、走り廻りたる御奉公抔をも被レ致たる面々を、御撰らびの上を以被二仰付一、小栗又市殿抔の義は、御物頭衆にて有れ共、武功の人故、御使番役をも相兼勤候樣にと被二仰付一ける由也、左樣に有レ之を以、已前は老年の衆中計りの樣に有レ之、其上仲ケ間撰みを被レ致るゝに付同役少なに有レ之候ても、人數を御增し被レ成度も被レ遊がたく有レ之と也、依レ之其方共仲ケ間人少なに有レ之、當時寒氣之節を、老人抔は別て大儀と思召さるゝに付、諸番中より御ゑらみを以て、仲ケ間入被二仰付一候、然れ共御使番と有る義にては無レ之、御使役と被二仰渡一、伍字之指物之儀は御免被レ遊、母衣指物に被二仰付一るると也、何も左樣心得、諸事心付る樣に可二申談一旨被二仰渡一候となり、大猷院樣〔家光〇德川〕御代始の比迄も、右の古き御使番衆相殘り被レ居るゝなれども、左樣の衆中も、段々と死うせ引込抔被レ致るゝを以、向後の義は何れも御使番と號し、伍の字の指物の義は、一同に御免被レ遊るゝ旨被二仰渡一候となり、然ば御使番御使役と二段に有レ之たると申は、さのみ久敷間の義にては有レ之間敷と存候也、

〔別所長治記〕信長侍大將ノ内、西國退治ノ大將ハ、心カサ有テ、勇ニモ謀ニモ達シタル者ハ可レ爲二羽柴筑前守一、則被二仰付一、秀吉不レ及二辭退一、天正六年寅三月四日、爲二西國成敗一都ヲ立、同月七日、播州加須屋ガ館へ爲二本陣一、行列ノ次第盡レ善盡レ美、〇中略　大將秀吉、〇中略　次宿老使役人廿八　次斥候ノ役人、〇下略

檢使
實檢使

〔武家名目抄〕職名三十三下〕按、檢使は臨監望察をつかさどるものにして、今の目附職の一端なり、鎌倉殿の時より以來、此職號ありけれど、皆臨時の職掌にして、常に設置れしつかさにあらず、何

事にもあれ、非常の事あれば、其監察の爲に遣はさる、を本務とするものなり、鎌倉殿の世には、其人がらも定まらざりしを、室町殿の時に至りては、大かた奉行人たる輩、この役をうけたまはりしとみえたり、扠大名諸家にも幕府にならひて、事ある時は此職を設くること、なれり、事の大小に準じて、うけ給はる者にも階級あり、今の世大目附と目附とありて、實檢の事を役する類なり、鎌倉殿の時には、實檢使とよべるが常なりしを、室町殿の頃より、大かた檢使とのみいふこと、はなりぬ、

〔御成敗式目〕一改舊境致相論事

右或越往昔之境、構新儀案妨之、或掠近年之例、捧古文書論之、雖不預裁許、無指損之故、猛惡之輩動企謀訴、成敗之處非無其煩、自今以後、遣實檢使、糺明本跡、爲非據之訴訟者、相計越境成論之分限、割分訴人領地之內、可被付論人之方也、

〔新御式目〕隱田答事

遣實檢使、隱田致露顯者、年々隨無沙汰員數、早速可辨濟之、若猶令拘惜者、不論理非、於彼下地者可被沒收之矣、

〔康富記〕嘉吉三年四月十三日戊戌、昨日松尾國祭也、於東寺西邊神幸時、加與丁神人等及喧嘩、數十人手負、死人有之、依神輿或射立矢、血氣穢神輿、總而六基也、六基悉奉振弃路次田頭云々、言語同斷事也、然間今日奉行飯尾肥前入道永祥同加賀入道眞妙齋藤上野介賴基等、檢使參向、奉檢知了、三基觸穢之由、歸參申管領畠山殿云々、

〔太閤記十七〕秀次公御切腹之三使登山之事

夫惟るに、大かた識者は智深く、才足物なり、秀次公在世し給はゞ、增田石田が身の上あしかりなんと遠慮し、彌讒言止期なし、將軍もあら〳〵しく、長盛三成申しかば、げに左も有べしとおぼさ

れにけり、いたはしながら腹を切らせ候へとて、福島左衛門大夫、福原右馬助、池田伊豫守撿使。とし
して遣されけり、

〔駒井日記〕文祿四年四月一日　一伏見向島櫻木之儀に付、民法ゟ先剋返事、　一伏見向島櫻植木之かこひとして、京之總廻土居之枯竹被爲伐旨、令存知候、何も境を極、其勝手之所には預け置せられ候間、撿使を出、伐せ運上可申候哉、但以上使可被仰付候哉、御諚次第之旨、可預御取成候、恐々謹言、四月朔日、民部卿法印、駒井中務少輔殿、御返報

〔家忠日記追加十九〕慶長十四年八月四日、松平忠一本姓中村去夏卒シテ嗣子ナキニ依テ、朝比奈源六郎、久貝忠三郎、弓氣多源三郎、撿使トシテ伯耆國ニ在リ、是ニ依テ下知狀ヲ賜ル、

條々

一寺社之輩町人百姓、對奉公人不可致非分事、

一猥不可伐採竹木事

一百姓以下他國へ於致欠落者、可爲曲事、但地頭代官非分之儀於有之者、上使并番頭、其國之年寄中へ可相届事、

右之條々於違背之輩者、可被處嚴科之旨、依仰下知如件、

慶長十四年八月四日　相模守

佐渡守

〔三宅土佐守家來渡邊登儀三州田原表おゐて自殺致し候檢使一件〕朱書丑十〇天保十二年十月十九日、越前守殿江御直上ル、同廿二日、越前守殿黒澤正助を以、御書取御添取付候樣被仰聞、御渡、

三宅土佐守家來

渡邊登自殺仕候ニ付、見分之者差遣候儀、奉伺候書付、

書面伺之通、與力二人、同心三人、死體爲見分差遣候樣被仰渡、奉承知候、

丑十月廿二日

遠山左衛門尉

三宅土佐守家來
渡邊登

右登儀、去々亥年、先役大草安房守御目付佐々木三藏立合吟味之上、同年十二月十八日、安房守病氣ニ付、筒井紀伊守方ニ而一件落著、申渡、登儀者、主人家來江引渡、於在所蟄居申付候處、兼々癪氣之持病ニ而、差起候節者、襖等建切、靜坐いたし居候儀毎々有之、當月九日頃より又々右持病差發、一ト間江引籠罷在、同十一日晝九ツ時頃、附ケ置候もの共食事持參候處、登居間ニ相見へ不申、便所江參候哉と存見合候得共、不立出候間、不審ニ存じ、同所其外見廻候處、家續別家之內ニ而自殺いたし、最早事切罷在、全癪症ニ而差迫り、致自殺候儀にて有之旨、附置候もの共、幷親類共申出候段、從在所表申越、自殺と而已ニ而、巨細之儀不相分候ニ付、猶疵所等之樣子得と申越候樣、急飛脚を以、申遣置候得共、先右之趣相屆候旨、土佐守ゟ以使者申聞候、依之先例相糺候處、相當之例相見不申、寬政四子年、小田切土佐守町奉行之節、松平陸奧守家來林嘉膳同居之弟林子平儀、兄嘉膳江引渡、於在所蟄居申付候處、病死之節撿使者不差遣儀と相聞、當留無之候得共、右登儀者、無人島渡海相企候一件江引合、不容易吟味筋之ものニ而、殊ニ右體變死仕候上者、撿使差遣候方と奉存候間、猶例相糺候處、天明七未年、山村信濃守町奉行之節、御目付井上助之進立合吟味被仰渡候、元御勘定組頭、當時富士見御寶藏番之頭土山宗次郎引合之者ニ而、御普請役石田儀右衛門儀、堀田相摸守領分下總國佐倉城下ニ而自殺致し候見分、町方組與力同心御徒目付御小人目付被差遣候例、幷四年以前戌年、評定所一座掛織田近江守家來吟味一件ニ付、丹波國栢原ニ罷在候同人家來菅谷格馬儀、呼出之儀相達候處、於彼地自殺いたし候ニ付、先役筒井紀伊守組與力同心、御徒目付、御小人目付、彼地江罷越候例有之候得共、いづれも吟味中之儀ニ付、今般之見合ニ者難相成、十二

年以前寅年、大目付村上大和守、筒井紀伊守、御目付本目帶刀立合、於評定所御詮議被仰付候御書物奉行天文方兼高橋作左衛門一件ニ引合、長崎奉行ゟ請取永牢申付候上、岩城伊豫守、前田大和守、上杉佐渡守江御引渡ニ相成候、阿蘭陀大通詞馬場爲八郎外二人病死之節、大久保加賀守殿江伺之上、紀伊守組與力二人、同心三人、岩城伊豫守外兩家之在所江差遣候例ニ見合、今般登死骸爲見分、組與力共之内、同人吟味筋取扱見知罷在候者二人、同心三人、三宅土佐守在所三州田原江差遣候樣可仕候哉、此段奉伺候、

朱書 本文死骸爲見分差遣候ニ付而者、御證文御扶持方等之儀者、先格之通可申上候、

以上

丑十月　遠山左衛門尉

朱書 水野越前守殿御渡候御書寫

覺

伺之通、與力貳人、同心三人、死體爲見分差遣候樣可被致候事、〇中略

朱書 此書面番方ニ而出來申上ル

遠國撿使御用被下物之儀、奉伺候書付、

年番

此度三宅土佐守領分三州田原江、撿使爲御用罷越候與力同心被下金、并路用其外員數之儀左ニ申上候、

與力一人江

一被下金拾兩

一路用一日金三分宛

一宿代壹ヶ月金壹兩貳分宛
一御扶持方拾人扶持一倍
　但勤日數を以被下
同心一人江
一被下金三兩
一路用一日金壹分宛
一宿代壹ヶ月金二分宛
一三人扶持一倍
　但勤日數を以被下候
右之通可被下置候哉、奉伺候、
朱書
但九年以前巳年、向方御掛永牢被仰付、御引渡相成、上杉佐渡守領分羽州米澤表江遣置候、元阿蘭陀小通詞吉雄忠次郎死體爲見分罷越候與力同心江被下もの、員數本文同樣ニ御座候間、書面之通申上候、尤御扶持之儀者、歸府之上被下候、
以上
　丑十月　　東條八大夫
　　　　　　松浦榮之助

大檢使
小檢使

〔土浦大檢使〕所化僧拾壹人於日本橋晒之上本寺觸頭江引渡一件
二月〇嘉永四年六日　　所化僧拾壹人
右之者共、及女犯候ニ付、於日本橋三日晒之上、本寺觸頭江夫々引渡相成候、趣、明日御裁許相濟可申候之間、町御奉行遠山左衛門尉樣江御引渡相成候付、兩檢使ニ而召連罷越候樣、寺社役より達

有之候、其後左衛門尉樣より明日者御出役之儀有之候間、五時御引渡有之候樣申來候由、猶又寺社役より通じ有之、右ニ付供揃五時之旨申付置候、尤初而之儀ニ付、御師範樣江武左衛門爲間合罷越候、○中略

同　七日

一前書女犯僧、夫々御裁許相濟、證文等も相濟ニ付、直供人呼出、四時前出門ニて、町奉行遠山左衛門尉樣江爲撿使ニて召連罷越候、

継上下、騎馬　　大撿使　福島武左衛門

羽織袴無之　常出役之服　　若黨貳人

同心貳人

羽織袴塗笠　　小撿使　佐藤善作

羽織袴無之　常出役之通り　　刀持壹人

同心貳人

小頭壹人

右之外、供人例之通故略之、尤武左衛門供廻り之者、都而塗笠平看板之事、○中略

御省略ヶ條

伊勢守殿江直達

御駕籠訴之もの御引渡之節、取計方之儀ニ付申達候書付、

寺社奉行

一御手前樣方より、御駕籠訴之もの御引渡有之候節、爲請取是迄大撿使小撿使、幷小頭一人、同心六人差出候處、以來大撿使壹人、小頭一人、同心二人差出、小撿使幷同心四人相減可申と奉存候、

撿見使

右者追々被仰出候御趣意も有之候ニ付、仕來ニ不拘、前書之通省略可仕と奉存候、依之此段申上置候、

月

〔武家名目抄〕職名三十三下〕按、撿見は實撿に相似たる所役にはあれど、實撿といへば、むねと撿察をつかさどり、撿見といふ方は、さばかり大事ならぬ事をも監察する職掌なれば、其人がらをもことさらには撰ばれざりしなるべし、但事の大小に準じて、其使の階級はありしとみゆ、もとより臨時の所役にして、平常設置れしつかさにはあらず、大追物の役人の中にも撿見といふ職掌あり、

〔義經記〕八〕秀平が子共判官殿にむほんの事

あだちの四郎きよたゞをめして、此二三年知行をいくま見たるらん、けんみに罷り下るべきよしおほせいださるゝ、承候とて清忠おくへぞ下りける、

〔松屋筆記〕百十七〕吟味、撿見、閲

稻の善惡を見定るをケンミといひ、撿見の字面を書けり、これも撿の一字にてケミなるを、見の字を加て書くは、ケミをケンミと訛れるより、聞推に撿見の二字をば用し也、撿は音、見は訓にて、音訓まじりの湯桶讀に心付ざるを、このものゝしいでたるわざ也、

〔吾妻鏡〕十〕文治六年建久元年二月五日己丑、被遣雜色眞近、常清、利定等於奧州、是於三方依可遂合戰、爲其撿見也、恐凶徒之蜂起不拘御家人等之武勇者、爲令發向給、可申其左右之趣、所被仰遣千葉新介胤正以下御家人等之中也、

〔吾妻鏡〕三十六〕寛元二年六月廿日己丑、今日落合藏人泰宗、并市河女子藤原氏等、見吾妻鏡四七箇日參籠荏柄社壇、可書進起請之由、爲對馬前司河勾平右衞門尉等奉行被仰付之、此上平右近入道寂阿、鎌田三郎入道西佛等、爲御使可加撿見之由云云、是市河掃部允高光法師法名見西訴申藤原氏云、密通泰

内撿使

宗之由云云、女論申之間、及此儀云云、八月三日辛未、市河女子藤原氏事、於荏柄社不審通落合竊人秦宗之由書起請文、令參籠之間、以御使寂阿西佛被加撿見之處、七日七夜無其失之由各申之、○下略

〔新編追加雜務〕一可被崇敬佛神事

九州爲宗寺社、破壞以下所遂撿見、且可令注進損色之由、所被仰使者也、但於遠所者、使者撿見爲難治者、可計沙汰、○中略

寛元三年十二月十六日　武藏守判

備前守殿

〔東寺百合文書む二十一ノ二十七〕一日面謁之時、委細令申候了、抑恒枝保内太良庄仁押領之條、坪付注文令進之候、彼田地者、若狹次郎○忠時替代之時、爲御内御領之、竹向殿御領知之剋、撿見之使節武士道心房、誇彼權威、去正安年中ニ被取入太郎庄内之候畢、就是連々雖令申子細之、于今令延引之條、愁鬱不少相存候、所詮彼田地者、恒枝保代々知行之、取帳目錄分明之上者、如元當保領知無相違之樣に御披露候て、可返給候也、事々期面謁之時候、恐々謹言、

建武元　三月廿日　源信康花押

〔信長記一下〕芥川小清水瀧山城開退事

角テ信長卿ハ清水寺ニ在々ケルガ、於洛中洛外上下ミダリガハシキ輩アラバ、一錢ギリト御定有ッテ、則柴田修理亮、坂井右近將監、森三左衛門尉、蜂屋兵庫頭、彼等四人被仰付ケレバ、則制札ヲゾ出シケル、○中略加之觀察使撿見等ヲ出サレ、誡制法正シカリケレバ、近里遠境穩ニナッテ、罪ヲ犯ス者一人モナシ、

〔武家名目抄職名三十三下〕按、内撿使は、實撿使の如く、鬪爭以下非常の大事にあづかり、糺斷のこ

となど行へる職にはあらず、秋獲の時節、年の豐凶を巡察すべき爲に遣はさるゝ使の名にして、今いふ撿見使のたぐひなり、さるは中比より、内撿といへば、必撿田の事にのみいふことゝなりし故なり、これも臨時の所役にして、常には設置れざりし職なり、

〔吾妻鏡十八〕建仁四年〇元久元年四月一日甲午、駿河武藏越後等國々、重依可遂内撿可被下遣宜衡仲業、明定等之由有其沙汰、廣元朝臣、淸定爲奉行、　十六日己酉、駿河以下三箇國内撿事、先日雖令治定、重有其沙汰延引、是去年御代始故、〇去年源實朝爲征夷大將軍依可有撫民御計有限乃貢猶被減員數訖、今年於被遂其節者、民戸定難休歟、然者如不被行善政、暫可被閣之由云云、

〔神護寺文書〕神護寺領播磨國福井庄西保沙汰人口地頭非法條々〇中略

一蟲損事

右經光法師不覺悟之由令申之處、如覺嚴法眼申者、如此之損亡者、令遂行撿注之時、任見損除之、不然之時者、全不及其沙汰云々者、可依内撿使之裁許矣、〇中略

以前拾壹箇條、且任關東去四月十九日御教書之旨、且就東保地頭所務之例、下知如件、

天福元年九月十七日　掃部助平時經花押〇

駿河守平重時花押〇

〔親俊日記〕天文十一年九月廿日丁卯、桐野河内へ爲内撿上使、淵田與三左衛門河内斎左衛門、中間二郎兵衛田見之者一人下之、　十月二日戊寅、公方御料所丹州桐野河内村事、損免之儀乍望申、不可遂内撿云々、言語同斷次第也、併寄粹於當免供御米等、可令難澀爲造意者歟、所詮於當毛苅取者、堅可有譴責、若猶有及異議族者、不日可注進候、然者重被差下上使可被仰付由狀如件、

天文十一　九月廿九日　長隆

當所名主百姓中

〔武家名目抄〕職名三十三下 按、撿注使といふは、田地を撿勘して、町段の數を改正する職掌にて、後の世に繩打竿入などいへる所役の類なり、注とは、町段の多少、又は剩田の有無をも注記するこころなるべし、鎌倉殿室町殿の兩代、いづれも諸國一圓に撿田せし事なく、公家にて設置れし法制に準じて、兵粮米をもめされし故に、國ごとに撿注使を遣はされしことと聞えず、大かたは守護地頭などより、撿田の爲に遣はすものを撿注使とよびしと見えたり 國司より遣はす使をも、しかよびしこともあるべけれど、それは公家の事なる故に、爰にはのせず、 足利殿の季世にいたりて、大名諸家私に撿田する時に、撿地の奉行などいひしもの即この流なり、

〔吾妻鏡二十三〕建保六年三月廿三日甲午、今日常陸國志筑鄕内願成寺住僧等有參訴事、撿注使以新儀可入勘寺領之由張行云云、仍可停止之趣、右京兆下知給之云云、

〔常陸國大田文〕吉田文書 〇略缺

四、　二反大　□直□

五、　一反小　□平二案主□

六、　小　守直

七、　一反小　三寶名主 〇中略

幷田二十二町三反

右酒戸吉沼田撿注地文段町、注進如件、

安貞二年十一月

目地頭代 在判

社田所權祝大舍人 在判

撿注御使紀 在判

〔神護寺文書〕神護寺領播磨國福井庄西保沙汰人□地頭非法條々 〇中略

一地頭代損田事

右如同申狀等者、撿注使之任意也云々者、可止自由之輩矣、

一公文竿失同例損、並下司損田事、

右如同申狀等者、爲領家預所之進退云々者、可依撿注使之免許矣、○中略

以前拾壹箇條、且任關東去四月十九日御教書之旨、且就東保地頭所務之例、下知如件、

天福元年九月十七日

掃部助平時經花押○

駿河守平重時花押○

〔後愚昧記〕永和三年十二月十六日、自畑飛脚到來、守護使下向之由、有英注進之、使男所 法色井庄但州也、而守護使爲撿注令下向者、自但州可越畑之旨、兼仰含之故也、

〔武家名目抄職名三十三下〕按、巡撿とは、其所々をめぐりて、萬事を監察する事にて、巡撿使とよべる時は、大かた國中を巡りて、民間の苦樂を察し、年の豐凶を撿する使者をいへるなり、室町殿の世には、これを上使といふが常の辭となりて、巡撿使といひし事いまだ見る所なし、されど大名諸家にも猶其稱のこりて、今の世にも巡撿といふとなへのあるを思へば、室町殿の時にも、必其稱の絶たりしにはあらざるべし、

〔吾妻鏡四〕元曆二年○文治元年六月十六日丁卯、與膳大夫近藤七等爲關東御使、帶院宣巡撿畿內近國、成敗土民訴訟、然聞當時其誤不聞、

〔吾妻鏡十一〕建久二年正月十七日丙寅、民部丞盛時、武藤二郎貴頼等、奉仰遣使者於伊勢志摩兩國、又出納和泉掾國守相副之云云、是平家沒官地、未被補地頭、所々相交之由、依聞食及、爲巡撿之也云云、

〔吾妻鏡十五〕建久六年九月十九日庚子、新藤二俊長、小中太光家等、爲御分國巡撿使也、是不熟損亡

巡見使

之故也、

〔新編追加雜務〕一諸國新補地頭沙汰事

右停止非法之由、度々雖被仰下、猶以不相鎮歟、尤不便也、（中略）自今以後、若以少事、令追捕民烟、及亂罰之地頭者、随領家預所住民等之訴、可被改補所職、縦雖為先祖之本領、亦雖為勲功之勧賞、永不可被充行其替、然者兼可令思慮也、普先可令觸廻給也、且為糺明犯否、來秋冬比、被差遣巡撿使、其以前訴訟出來者、尋決兩方、可被注申之、罪科無遁者、可有殊沙汰之狀、依鎌倉殿仰執達如件、

寛喜三年五月十三日　　武藏守　判

相模守　判

駿河守殿

掃部助殿

〔朝倉敏景十七箇條〕一年中に三箇度、計器用正直ならん者に申付、國をめぐらせ四民諸口㗛を聞、其沙汰可被致候、少々形を引替て、自身巡撿も可然事、

〔有可勤仕儀〕御使番

一御代替に國々の巡見使之事、御使番一人、兩番之内二人差添、五畿七道、幾組にも分て廻る事也、

一道中御定連人三十五人、小荷駄十四疋人足十人ツヽ、御朱印之定め也、折々領分之野境へ、名主迎に罷出、一騎一人づゝ、駕籠の棒端に立、尋に依て應對する事也、

一大名之領分境に至れば、使者并道中案内、一頭に壹人ヅヽ、騎馬之侍差出之、使者口上述る則道案内、家來壹人宛差添行に付、御用之品可被仰付由申達す、

〔職掌儀〕御使番

諸國巡見使は、御使番一人、兩番二人、差添、五畿七道幾組にも分廻る事也、道中定式の人數三十五

人也、各人足十人、馬十四疋の御朱印を給ふ、所々領分界に名主出迎、一頭一人づゝ、駕籠の棒鼻に立、尋に隨て應對す、別案內者也、大名領分界に至ては、使者幷爲案內、每頭一人騎馬之士差圖し、使者口上を述、案內として家來一人づゝ差添、御用之品々可被仰付旨申述、幷在國の面々よりは城下御通行の時、下屋敷御立寄、逐對面度由申越、對面する事もあり、又は急候よしにて斷に及ぶ事もある也、又城主の了簡次第、町口へ出向、逐對面事もあり、馳走はすべて斷也、泊に着、案內の名主、其を呼、領分の事共尋る事也、右案內の士、騎馬にて一人づゝ、三頭の先に乘事也、其外重き頭役の士一人、總勢を押へて乘る、都合四人也、先に領分界にても又右の如し、西國筋巡見は大阪より乘船也、筑後久留米より迎船を出す、一頭に五艘づゝ也、巡見使之座船は、六十四挺立之大船也、船頭一人、水主六十四人、梶取十四五人にて梶を取る也、外に乘替の舟一艘、供舟一艘、水船一艘、小早船一艘づゝ、都合十五艘也、大阪を乘出すと、道筋所々の大名より見廻使者、小早船に乘來り、船中ゟ口上申達す、右舟路豐前小倉を通越、筑前若松浦へ著船、夫より所々巡見、肥前鳴子江著、夫より乘船舟は佐賀より二頭分、唐津より一頭分の船を出す、此より壹岐へ渡海、此海上三十五里、壹岐を經り同國勝本浦に著、此所にて日和を見定、對馬へ渡海、此海上四十八里、但對馬一路は六十六町一里也大隅薩摩巡見、都て薩州領を通行する事、都合十九泊なり、右入口は兩方山中を切通し、其間に五六間の長屋あり、此內を通りて入る事也、此所兩方に番人あり、各鐵炮に玉を込、切火繩を挾み置くこと也、

〔東職記聞二〕使番〇中略

元寬日記曰、元和元年十一月、兩將軍家命曰、自今以後、可使目付每三年巡諸州而監察諸侯之政道也、有司奉命、則遣豐島主膳、永田庄左衞門等與州會津、而令監蒲生飛驒守封中之政也、諸州亦如此也、如今世、則當職每三年無巡諸州之事也、

〔大猷院殿御實紀二十二〕寬永十年正月六日、この日諸國巡使等に每國を分命せらる、溝口伊豆守

善勝、使番川勝丹波守廣綱書院番牧野織部成常は五畿南海、小出大隅守三尹、使番永井監物白元、書院番桑山内匠貞利は關東、小出對馬守吉親、使番城織部佑信茂、書院番能勢小十郎頼隆は九州、市橋伊豆守長政、使番柘植三四郎正時、小姓組村越七郎左衛門正重は中國、分部左京佐光信、使番大河内平十郎正勝、書院番松田善右衛門勝政は奥羽及び松前、桑山左衛門佐一直、使番徳山五兵衛直政、書院番林丹波勝正は北國なり、

〔教令類纂初集四十四〕寛永十癸酉年正月六日

諸國幷浦々巡見被仰付時之御條目覺書

條々

一今度國廻之剋、以御威光、何事によらず奢仕間敷候、勿論召連候下々迄、堅可申付事、

一召列下々喧嘩口論仕ニおゐては、雙方可誅罰之、令荷擔ものは、本人可爲同前事、

附、所之者と申事仕ニおゐては、其領主幷代官等相談之上、理非をわかち、有様ニ可申付事、

一竹木一切不可伐採事

附、不可押買狼藉事、

一駄賃宿賃、御定之ごとく急度可相渡之、代物不出之人馬つかふべからざる事、

一國々所々ニおゐて、何ニよらず馳走を一切請べからざる事、

右可相守此旨もの也

寛永十年正月六日

御黑印

寛永十癸酉年

諸國巡見使覺

五畿內四國紀伊伊勢　溝口伊豆守　川勝丹波守　牧野織部

東海道従美濃國、安房上總下總　小出大隅守　永井監物　桑山內匠

陸奥従常陸國出羽　分部左京亮　大河內平十郎　松田善右衛門

北陸道佐渡共　桑山左衛門佐　德山五兵衛　林丹波守

中國隱岐共　市橋伊豆守　柘植平右衛門　村越七郎左衛門

九州二島共　小出對馬守　堀織部　能勢小十郎

右は寛永十癸酉年被遣之〇中略

寛文四甲辰年八月七日

關東中巡見被仰付候刻御書付

覺

一今度關東國廻被仰付之間、往還不自由ニ無之樣ニ、道橋可申付之候、耕作收納之時分候間、掃除等は可為無用事、

一音信物一切仕間敷候事

一國廻之面々、泊々ニ而、春米大豆以其所之相場、買候樣ニ可申付事、

附、商賣物、常々之直段にうらせ可申事、

一泊々之宿所作事等申付候儀、可為無用事、

一御朱印之外人馬は、御定之通、駄賃取之、人馬可出事、

以上

八月

寛文四甲辰年八月十二日

今度關東中國廻之衆被遣候ニ付、御條書別紙ニ書立遣候間、此旨堅可相守候、泊々之宿所、湯殿雪隱無之においては、輕く可被申付候、桶、手洗、鍋、釜杯無之所は、用意仕置候様にと、是又可被申付候、此切紙順見之上、納所より此方江可被相達候、以上、

八月十二日　　妻　彦右衛門

岡　豐前守

伊奈半左衛門殿

寛文七丁未年閏二月十八日

諸國巡見就被仰付御書付

覺

一今度諸國巡見業被仰付之國絵圖城絵圖無用之事、

一人馬家數改無用之事

一御朱印之外之人馬は、御定之通駄賃錢取之、人馬無滯可出之事、

一何方を見分仕候共、使者飛脚音信物一切可爲無用、但案内之もの入候所は、其断可有之事、

一掃除等可爲無用、但有來道橋往行不自由之所は格別之事、

一泊々之宿所、作事等可爲無用、并茶屋新規作之申間敷之事、

一國廻之面々、泊々ニ而舂米大豆、其所之相場を以可買之、其外買物常々其所之直段ニ買可申事、

右條々國主領主御代官江、先達而可被相觸者也、

寛文七年閏二月十八日　　御老中六人

岡野孫九郎殿

井戸新右衛門殿

青山善兵衛殿

寛文七丁未年閏二月

覺

一宿々疊之表替無用、古候とも不苦候事、

一湯殿雪隱若無之處は、成程かろく可被致之事、

一たらひ、柄杓、鍋釜、古候而も不苦候、若無之處は、かろく可被致支度事、

一宿ニ可成家、一村ニ三軒無之處は、寺ニ而も又は村隔候而も不苦之事、

一其處ニ無之賣物、脇より遣置之、うらせ申間敷之事、

以上

閏二月十八日

寛文七丁未年閏二月十八日

諸國巡見被仰付御書付、陸方衆江、

覺

一御料私領共ニ、町在々所々仕置之善惡可被承之事、

一吉利支丹宗門之仕置、常々無油斷申付候哉、幷盜賊等之仕置、其所之者存知候樣ニ相尋之樣子可被承之事、

一何ニ不寄、近年運上ニ成、其處之諸色高直ニ而迷惑仕候儀有之候歟、可被承之事、

一公儀御仕置と替たる事有之候哉、可被承之事、

一買置いたししめうり仕候もの有之歟、可被承之事、

一金銀米錢相場、可被承之事、

一公事、訴訟、目安、一切被請取間敷之事、
一高札之寫不立置之所は、向後は立置之、文字不見節は、又改可立置之旨、家數多所々にて可被申渡之事、
以上
閏二月十八日
寛文七丁未年閏二月十八日
諸國巡見就被仰付御書付海邊巡見衆江
覺
一公事、訴訟、目安、一切被請取間敷之事、
一諸浦仕置之善惡、幷困窮之郷村於有之は、子細可被承之事、
一浦方船役運上役之儀、可被承之事、
一吉利支丹宗門之仕置、常々無油斷申付候哉、幷盗賊等之仕置、其浦々之者存知候樣ニ相尋之、樣子可被承之事、
一浦々湊々ニおゐて、此案文之通重而高札可被立之間、堅可相守之旨、御料私領共ニ、庄屋五人組船主船宿等ニ可被申付事、
一浦々船數水主數、可被承之事、
一其所より江戸大坂江之船賃、可被承之事、
一買置致シしめうり仕候もの有之歟、可被承之事、
一遠州御前崎之山と、豆州小浦之湊之山と、此兩所ニ燈明を立可然候哉、可有見分之事、
一公儀御仕置と替たる事有之候哉、可被承之事、

一浦々湊々ニおゐて、彌博奕總而賭之諸勝負不可仕、幷遊女一切抱置間敷旨、庄屋五人組船宿等
に堅申付、手形いたさせ可被申事、

以上

閏二月十八日

坂井八郎兵衛殿

伴作平殿

右者從江戸大坂迄之浦々巡見

高林又兵衛殿

向井八郎兵衛殿

右從大坂中國四國九州巡見、仍遠州御前崎之ヶ條除之、

寛文七丁未年閏二月十八日

浦々巡見使覺

攝津、播磨、備前、備後、備中、安藝、周防、長門、豐前、豐後、筑後、肥前、肥後、大隅、薩摩、日向、伊豫、讃岐、鹽飽島、
小豆島、

高林又兵衛

向井八郎兵衛

武藏、相摸、伊豆、駿河、遠江、三河、尾張、伊勢、志摩、紀伊、和泉、攝津、安房、上總、下總、

坂井八郎兵衛

伴作平

寛文七丁未年閏二月十八日

諸國巡見使覺

山城、大和、和泉、河内、紀伊、攝津、伊豫、土佐、讃岐

伊豆、駿河、遠江、尾張、伊勢、伊賀、志摩、近江、美濃、飛驒、甲斐、信濃、

但馬、丹波、若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡

筑前、筑後、久留米ハ除之豐前、豐後、肥前、肥後、日向、〇日向下恐脱二大隅二字一薩摩、壹岐、對馬、

播磨、備前、備中、備後、福山ハ除之安藝、周防、長門、石見、出雲、隱岐、伯耆、因幡、美作、

陸奥、出羽、松前

御使役 川口源兵衛
内藤若狹守組 藤堂庄兵衛
石川美作守組 堀八郎右衛門
御使役 溝口源右衛門
田中大隅守組 堀主膳
大久保出羽守組 川勝孫四郎
御使役 甲斐莊喜右衛門
青山丹波守組 神保四郎右衛門
松平縫殿頭組 鳥居權之助
御使役 岡野孫九郎
三枝攝津守組 井戸新右衛門
大草主膳正組 青山善兵衛
酒井伊豫守組 德永頼母
御使役 稻葉淸左衛門
大久保山城守組 市橋三四郎
御使役 佐々又兵衛
武田越前守組 松平新九郎
松平監物組 中根宇右衛門

二月廿五日國廻り被仰付候間、支度可仕旨被仰渡、同二月八日、人數組合被仰渡、同十八日國分

被仰渡、

一坂井八郎兵衛、伴作平、江戸ゟ大坂迄陸地を行、浦々致見分、大坂ゟ大廻り船ニ而可罷歸候、

一向井八郎兵衛、大坂ゟ西國筋浦々見分可仕旨、

人數

一千石ゟ千百石迄	三拾人
一千五百石ゟ千九百石迄	三拾五人
一貳千石ゟ貳千四百石迄	四拾人
一貳千五百石	四拾五人

覺

一爲伺御機嫌、領主被參候者、何方ニ而も致面談、御機嫌能被成御座之由可被申達事、

一國主領主自身被罷出、振舞度之由被申候共、馳走にあひ申ましきこと、いづれも申合候旨、斷可申事、

一人馬之御朱印之寫、先達而可被通筋江可相觸事、

一國廻之先々ゟ注進狀之事、廿日卅日に一度程宛、但大成城下罷通候時分は、家老ニ申達狀あつらへ越可申事、

一三人之内相煩候時分見合、先江可罷越候、たとひ兩人煩候はゞ、壹人成共先江可罷越事、

一下々煩候はゞ、其所之家來代官江申達、可殘置事、

一下々欠落いたし候刻は、領主之家來、又は代官江申達、早々追手を懸べき事、

一下々敷多煩候歟、又は致欠落、差當り事をかき候刻は、其所之家來代官江申達、召抱候歟やとひ候而可召連事、

一下々背法度、其儘難差置事候はゝ、何様ニも可申付事、
一船ニ而參度所於有之は、領主江申達、かり可申事、
一今度浦廻り被遣候所は、見分可為無用事、
一乘物雖成山中抔ニ而、上馬駕籠乘物、領主よりかり可申事、
一川水増候時分は、川越之者出させ、下々之者あやうく無之様ニいたすへし、川越之者何程出候共、何ニ而もとらせ申間敷事、
一切支丹幷盗賊之訴人有之ニおゐては、領主之家來代官迄穿鑿候様ニ可申渡之、但事之品ニ寄、直ニも可致穿鑿事、
一萬事不慮之儀有之候はゝ、其所々致逗留、様子可致注進事、
一古城之跡不及見分、但名城之跡は可致見分、道筋ゟ遠所は見分可致無用事、
一相定木錢はたご錢之外、宿江何ニてもとらせ申間敷事、
右覺書之通可然候、乍去事之品ニ寄、相談之上勝手次第ニ可被仕、尤此外輕儀は、猶以了簡有之而、可被致沙汰候、以上、

未三月廿五日

寛文七丁未年
一今度諸國巡見之面々江、先規巡見之道筋、幷泊休付等書付、右巡見之面々江被差出候様ニ、萬石以上之衆江可被相達候、
一船路有之分は、先規之通乘船被出候様、其面々江可被相達候、

以上

〔西海道巡見志〕伊豫國

御預所　松平隱岐守

御代官所　小島孫右衛門（略○中）

右松平隱岐守御預處、小島孫右衛門御代官所、幷九人之領分、海邊部付村付、流傳海路之法、申渡仕入津湊之直法、御高札立所、遠見番所、舟番所、燈明臺立所、湊之善惡、地高、家數、船數、加子數、淵、瀨、島、有所申候仕所、左ニ記之候、

島洲瀨碆之分如此

四月晦日

讃岐堺與木崎ゟ七町

宇摩郡

一余木村　御預所是ゟ松平隱岐守

一片濱

一高三十九名

一家數十軒

一舟數十艘獵舟

一加子數二十人（略○中）

右七箇村河野江村ニ而申渡仕候（略○中）

御覺書ニ而御渡被成候品々所々ニ而相尋、所之者申口留書、別帳に相認差上ゲ申候、

寬文七丁未年四月晦日ゟ五月十三日迄ニ見分仕候

〔憲令類纂初集四十四〕寬文十庚戌年正月十二日

覺

一當年爲關東中國廻可被遣御撿使之旨、去年被仰出訖、然ば御代官所之儀は、給所方掟ニ成候條、諸事入念、正路ニ可被申付事、

一御代官方私曲雖無之、手代之輩仕置惡ニおゐては、越度ニ可成之條、無油斷遂吟味、急度可被申付事、

一近年御藏入御所務令減少、百姓又困窮いたしたる樣ニ取沙汰有之間、向後諸事入念、百姓前無高下樣ニ遂僉議、追々百姓身上もつのり、御所務上り候樣に仕置可被申付事、

右條々可被相守之、此外從御勘定頭書注之趣、急度可被申付之、國廻り之面々見分之上、非儀私曲有之御代官方者、隨科之輕重、急度曲事可被仰付候也、

戌正月十二日

〔教令類纂初集四十四〕天和元辛酉年

諸國巡見使覺

山城　大和　河內　和泉　久留島庄兵衞

一攝津　紀伊　播磨　但馬　永田孫左衞門

丹波　丹後宮津領除之　猪飼五郎大夫〇中略

以上

亥五月

〇按ズルニ、延寶八年七月、德川綱吉、征夷大將軍ト爲ル、是歲諸國ニ巡見使ヲ發遣セシハ、蓋シ其代替ナルヲ以テナリ、

〔徵古文書乙集駿河〕中村文書富士郡今泉村中村芳清藏

德川綱吉直書

駿河國富士郡今泉村農民五郎右衛門、父母に孝を盡し、行跡宜敷其上村中之助をなすの由、今度國廻之輩演說之、依之其所作來田畑九拾石事、永代五郎右衛門下授之條、全可收納者也、

天和二年三月廿二日

御朱印〇德川綱吉

〔教令類纂初集四十四〕寶永六年十月廿三日

來春國々江爲御目付被遣面々

御使番　宮崎七郎右衛門

小田切靱負

黒川與兵衛

梶四郎兵衛

島田藤十郎

細井權右衛門

角南主馬

御小姓組酒井因幡守組　山本八右衛門

同川勝能登守組　筧新太郎

同皆川山城守組　土屋數馬

同井上讃岐守組　岩瀨吉左衛門

同松平壹岐守組　田中市右衛門

大岡土佐守組　高井作左衛門

稻葉紀伊守組　北條新左衛門

戸田肥前守組　永田彌左衛門
御書院番伊澤播磨守組　大久保平左衛門
同永井備前守組　堀八郎右衛門
同同人組　筧助兵衛
同阿部遠江守組　永井監物
同三浦肥後守組　森川六左衛門
同大久保豐前守組　新見七左衛門
右同人組　川口茂右衛門
同間野備中守組　本多清兵衛

右爲支度被仰渡之、

○按ズルニ、寶永六年四月、德川家宣征夷大將軍ト爲ル、

〔一話一言　一〕同年○正德元年御觸二條○中略

一諸道順撿使言上之趣に就て、國郡の治否悉く御聽○將軍德川家宣に達する處に、御料私領の間、其善政特に著はれ聞ゆる所なく、大抵風俗衰へ、政事煩しく、四民一つに困窮に及ぶ由被聞召、御憂慮尤淺からざる所也、雖然御代始の日猶近く、且は思召御旨有之によりて、いまだ御糺問の事あらず、自今以後、御料の御役人、國郡の諸領主、凡大小の政事、自ら懈る所なく四民各其生を遂しむべし、若他日に至て、舊弊猶改る事なきに於ては、嚴に其沙汰を經らるべき由被仰出者也、

正德元年辛卯八月十五日

〔享保集成絲綸錄　二十三〕正德二辰年八月

一今度國々御料所村々巡見被差遣候付、右面々相通り候道筋、掃除幷道橋一切作り申間敷候、馳

走として送り迎之者出候儀、可為無用事、

一右之面々、御朱印員數之外人馬入候はゝ、其所定之駄賃錢有之ば其定之通、定無之所は近邊之御定之割合を以駄賃錢取之、人馬可出候、御朱印之外に賃なしの人馬一人一疋も不可出之事、

一巡見通り候道筋にても、百姓農業之儀、少も無遠慮いとなみ候樣ニ可被申付事、

一私領村々に若巡見合旅宿候とも、少々の小屋掛取繕は不及申、疊替可為無用、古候而も不苦候、賄道具等も有合候を借可申事、

一旅宿ニ可成家、一村ニ三軒無之所は、寺又は村を隔候て成共不苦事、

一泊晝休の場所にて、入用之飯米鹽噌薪并酒肴油野菜等は、其所の相場次第賣候樣に可被申付事

一其所に無之商賣物、脇より遣候賣せ申間敷候、衣類諸道具は勿論、酒肴ニ而も持寄賣候儀、堅可為停止事、

一右面々金銀米錢衣類道具は不及申、酒肴菓子等迄、一切受用不申筈ニ候間、内々にても堅ク音信不仕樣ニ、知行所之者共江可被申付候、若内々にて音信仕旨相聞候においては、可為曲事候間、其旨急度可被申付事、

一何方見分仕候とも、私領方よりの音物等も一切受用無之筈ニ候間、音物は不及申、使者飛脚被出候儀も、堅可為無用事、

一右面々家來下々迄、在々において衣類道具等は買不申候樣ニ申渡候間、得其意商賣不仕樣に可被申付事、

一野道の馳走として、新規に茶店等作り候儀、堅可為無用事、

右は今度、御料所國々江巡見被差遣候付、往來之道筋は、私領村々をも可罷通候間、書面之條々、先

違而地頭より、領知村々江申觸、無相違樣ニ急度可被申付候、以上、

八月

〔德川禁令考 二十八 諸使令條〕正德二辰年

巡見之者江御勘定奉行申渡候書付

一給所ニて、目安訴訟一切取上ゲ申間敷候事、

一御代官所公事、一切取上ゲ申間敷候事、

一便有之候ハヾ、十四五日程間置、何方迄致巡見候段可申越、自然急に注進仕候ハで不叶儀候ハ
ハ、宿繼以御證文可申越候事、

一三人之内相煩候ハヾ、一兩日も見合、兩人ハ先々見分可仕、煩候ものは致本復次第先ニ而出合
巡見候樣ニ可申合、若兩人相煩候ハヾ、見合可申事、

一下々相煩候節、召連がたき程の病人ニ候ハヾ、殘置養生致させ可申候、次ニ差當不入物ハ、一切
調申間敷候事、

一主人煩候儀ハ不及申、下々煩候共、給所城下など近所ハ不苦候間、醫師頼可申事、

一召仕煩多ク候而不自由ニ候ハヾ、當座の雇ニ其所之百姓を召連可申事、

辰八月　御勘定奉行

享保集成絲綸錄 二十三 享保元申年八月

覺

一今度諸國巡見之面々江、先規巡見之道筋幷泊休附等書付、右巡見之面々江被差出候樣、万石以
上之分江可被相達候、

一船路有之分は、先規之通乘船出候樣、其向々江可被相達候

以上

八月

○按ズルニ、享保元年七月、徳川吉宗征夷大將軍ト爲ル、

〔有徳院殿御實紀附錄二〕御代替の例により、諸國に巡見使を下されしが、おの〳〵かへり來りて、國々政事のよしあし、民間の利病など、とり〳〵聞えあげぬる中に、關八州の事奉りし使番荒川内記定由、小姓組御手洗新太郎正矩、書院番富永彌右衞門記豊、八州の地いづくもおきて正しく、恩澤に浴し、苦みうつたふる者なきよしを申ければ、みけしき惡く國々に使するは、民の患をのぞき、政のよしあしをもきかむがためなり、たゞ舊例にまかせ、無事のみ申すは、使にさゝれしかひなきものどもなりとて、三人ともひとしく職うばはれしとなり、

〔甲子夜話五〕神尾若狹守春央ハ、享保中ノ勘定奉行ニテ、人トナリ才智アリテ、威嚴ナリケレバ、國用ヲ辨ズルニオヒテハ、功績多カリシトナン、一年諸國ヲ巡見セルコトアリシニ、ソノ威名ヲ聞傳ヘテ、イカナル苛刻ノ事モアランヤト、土民ドモ安キ心モ無リシニ、道スガラ輿中ヨリ見渡シタル計ニシテ經過セリ、然ルニ隱田アル所ハ自ラ訴ヘ出、沃土ノ免低カリシハ、自ラ免ヲ上ゲテ申出ケルニゾ、多クノ國益トハナリケル、若州嘗テ堀江荒四郎ヲ薦テ、コレニモ所々巡察セシメ、賦税ヲ增益セルコト多カリシトカヤ、其頃中國ニテカクゾ落首シケル、

東からかん(雁)(神野)の若狹が飛で來て野をも山をも堀江荒しろ(四郎)、此荒四郎ハ農民ヨリ出テ御徒組ニ入、遂ニ御旗本ニ列セシト云、

〔寶曆集成綸錄二十一〕延享二丑年十月

御代替ニ付國々巡見

御使番　戸川又左衞門

御小姓組水野越中守組
一天野傳五郎

御書院番石川備中守組
一諏訪右近

御使番
一島田庄五郎

御小姓組内藤出雲守組
一中野勘右衛門

御書院番高力攝津守組
一瀬名傳右衛門

御使番
一大久保江七兵衛

御小姓組大岡土佐守組
一山岡五郎作

大納言様御書院番板倉筑後守組
一筑紫宇兵衛

御使番
一稲生左内

御小姓組阿部伯耆守組
一神保宮内

御書院番松平日向守組
一岩瀬吉左衛門

御使番
一小幡又十郎

御小姓組久世長門守組
一板橋民部

大納言様御書院番柴田但馬守組
一伊奈兵庫

御使番
一富永靭負

大御所様御小姓組佐野右兵衛尉組
一酒依清十郎

御書院番大久保對馬守組
一神谷左内

御使番
一徳永平兵衛

大御所様御小姓組仙石丹波守組
一夏目藤右衛門

御書院番皆川山城守組
一小笠原内匠

御使番 山口勘兵衛
大納言様御小姓組丹羽近江守組 神保新五右衛門
御書院番青山信濃守組 細井金五郎

右之通被仰付候間、如先格國割等致可被書出候、尤來春より相廻り候間、可被得其意候、

延享二丑年十一月

御勘定奉行江

御代替ニ付御料爲巡見、御勘定支配勘定被差遣候、如前々可被書出候、

延享二丑年十二月

御料所々國々巡見

山城、攝津、河内、
和泉、丹波、播磨、
近江、大和、
　御勘定 藤浪源左衛門
　支配勘定 倉橋幸助
　御徒目付 加藤與市郎

美作、播磨、伊豫、
備中、讃岐、直島、
鹽飽島、小豆島、
　御勘定 三橋權九郎
　支配勘定 清水彌八郎
　御徒目付 大石忠右衛門

筑前、日向、
豐前、豐後、
肥前、肥後、
　御勘定 大井十右衛門
　支配勘定 近藤與左衛門
　御徒目付 伴勘七郎

越後
佐渡
　御勘定 多田與八郎
　支配勘定 本多市郎右衛門

播磨、但馬、備後、
備中、美作、石見、
丹後、隱岐、
　御勘定 佐久間吉左衛門
　支配勘定 野呂吉十郎
　御徒目付 山田幸右衛門

美作
伊勢、遠江、
三河、駿河、
　御勘定 風祭甚三郎
　支配勘定 杉浦彥五郎
　御徒目付 木室庄左衛門

能登
越前
飛驒
　御勘定 白戸彥八郎
　支配勘定 服部藤九郎
　御徒目付 窪田忠藏

下野、常陸、
陸奧、出羽、
　御勘定 鶴田乘助
　同斷 長谷部安五郎

信濃 御徒目付 村上與左衛門
武藏、相模、 御勘定 大森與兵衛
伊豆、甲斐、 支配勘定 小笠原久左衛門
御徒目付 荻田仁右衛門
武藏 御徒目付 小知藤右衛門
上總、下總、 御勘定 増田左平太
下野、上野、 支配勘定 鹽助八郎
安房、常陸、 御徒目付 小尾元次郎
武藏 御勘定 近藤平十郎
下總下野上野 支配勘定 西村總左衛門
常陸 御徒目付 鈴木市十郎

右之通可ㇾ被ㇾ申渡ㇾ候、來春出立候樣可ㇾ被ㇾ申渡ㇾ候、

十二月

○按ズルニ、延享二年十一月、德川家重征夷大將軍ト爲ル、

〔天明集成絲綸錄三十三〕寶曆十辰年八月

御勘定奉行江

覺

今度諸國巡見之面々、道中御扶持方之儀、先規之通、召連候人數、一日壹人百文ヅヽ、一倍之積被ㇾ下之候、但錢は金壹兩ニ付四貫文替之積を以、金子ニ而御金藏ゟ可ㇾ相渡ㇾ候間、發足前請取度而面、日數之儀、五畿內東海道關東筋は百日分、中國北國四國筋は百五十日分、九州奥州筋は二百日分、歸府以後日數極次第、手形引替候積、御勘定奉行以ㇾ裏判ㇾ可ㇾ被ㇾ請取ㇾ候、以上、

八月

右之趣、巡見之御使番御番衆江相達候間、被ㇾ得ㇾ其意ㇾ可ㇾ被ㇾ談ㇾ候、○中略

寶曆十一巳年正月

御勘定奉行江

御料所國々巡見ニ罷越候御勘定御徒目付江差出候訴狀之分、封ニ而差出候訴狀ハ、不殘其儘ニ而可差出候、不封訴狀者致披見、御代官取計非分等之儀、其外如何敷品認候訴狀之分者差出、其外常々何も江申出候類之諸願之分者、訴狀差出ニ不及候間、訴狀之趣を以、夫々相糺、常々取計之通可被致候、

正月

○按ズルニ、寶暦十年七月、德川家治征夷大將軍ト爲ル、

〔天明集成絲綸錄三十三〕天明七未年四月

御勘定奉行江

諸國御料所巡見之儀、五月末ゟ出立相廻候様、先達而相達候得共、五月末ゟ出立ニ者不及候、當年ゟ來年江かけ、追々出立候様可被致候、

四月

天明七未年八月

御勘定奉行江

諸國御料所巡見之儀、當年ゟ來年江懸、追々出立候様相達置候得共、當年は出立ニ不及候、來年ゟ來々年江かけ、追々出立之心得ニ而可罷在之候、

八月

○按ズルニ、天明七年三月、德川家齊征夷大將軍ト爲ル、

〔天保集成絲綸錄六十三〕寛政五丑年三月

巡見出立之節、見立ニ被相越候儀、幷諸向ゟ附使者等之儀堅及斷候、押而被差越候得ば、返答申達

指戻可申候、尤晝休江使者等之儀は、猶又及斷候事、

〔諸御役代々記十 御使番〕木下左兵衛 利亮 改内記

天保八酉七月十六日、國々巡見御用被仰付、相使石尾織部、筧新太郎、同十亥二月廿六日、巡見先家來共鎭方不宜、且於佐州訴狀差出候者有之候處、右之取計方不行屆相聞候、此段可申聞旨御沙汰ニ候、肥後守殿於御宅、同十三寅十一月日死、

大久保甚右衛門 忠行

天保八酉七月十六日、國々巡見御用被仰付、同九戌二月三日、病氣ニ付巡見御免、

諏訪靱負 頼母 改継殿助

天保八酉七月十六日、國々巡見被仰付、相使竹中彦八郎、石川大膳、

平岩七之助 親仁

天保八酉七月十六日、國々巡見御用被仰付、相使大久保勘三郎、近藤勘七郎、同十亥二月廿六日、國國巡見留守中家事不宜、河内守殿於御宅、小普請入差扣被仰付、

曾我又左衛門 [illegible]

天保八酉七月十六日、國々巡見御用被仰付、相使片桐靱負、三枝平左衛門、

松平金之丞 近直

天保八酉七月十六日、國々巡見御用被仰付、

黑田五右衛門

天保八酉七月十六日、國々巡見御用被仰付、相使中根傳七郎、黑田右近、

山本七郎左衛門

天保九戌二月三日、國々巡見御用被仰付、相使三宅三郎、市岡内記、

○按ズルニ、天保八年八月、徳川家慶征夷大將軍ト爲ル、

〔徳川禁令考〕二十八 諸使令條 安政元寅年十二月十八日

巡見使猶預之儀ニ付御書付

大目付江

伊勢守殿御渡

去年〇嘉永六年御代替ニ付而ハ、諸國巡見之面々、御先格之通、可被差遣之處、當時海岸御備御手當向、片時も難被差延候時節、諸家ニ於ても、防禦手當向專務之折柄、入費も不少、就而ハ去丑年より五ケ年之間、嚴敷御儉約被仰出、諸家之失費を御厭被遊、且又万石以下之面々、輕きもの迄も厚被仰出之趣有之、夫々武備調練等一圖ニ相勵候儀ニ候、然ル處諸國巡見、御先例之通、近々被差遣候而ハ、諸家一般莫太之失費も彌相增、當時專務防禦御警衞、自然と御手薄に成行候而ハ、以之外之事ニ有之、其上不時之變災にて、諸國地震或ハ津浪等ニ而、居城其外住居向、幷在町等迄、及大破候向も不少哉ニ相聞、是又莫太之失費ニ而、銘々可爲難儀と被思召候ニ付、諸國巡見之儀ハ、來ル巳年迄も御猶豫被遊、午年より被仰出ニ而可有之候、就夫而ハ諸家之面々も、一際質素儉約を相守、自國海岸防禦筋ニ至迄、愈手厚ニ行屆候樣相心得、尤今年ハ度々地震等ニ付、多分之破損所有之向も、取繕方手當向、銘々厚相心得、聊も等閑ニ不相成樣可被致候、尤追而巡見之面々差遣候節ハ、自國海岸手當向之厚薄、幷地震津浪等ニ而、夫々破損所取補理出來方迄見分爲致、其品に寄候而ハ、御沙汰之次第も可有之哉ニ付、前條之段厚心懸、取計候樣可被致候、

但巡見之面々、旅宿等之儀ハ、諸事手輕ニ取計可申と之儀ハ、前々より被仰出も有之候得共、當時格別諸家之失費を御厭被遊候折柄ニ付、巡見ニ付而、國ニ寄新規ニ旅宿小屋掛等取建、或ハ道橋等取繕候先格之向も有之候ハヽ、今般之儀ハ先格ニ不拘、省略方專一ニ相心得、小屋掛等雨露を凌候迄之心得ニ而、如何樣見苦敷相見候とも、少しも不苦候、其外諸事一際手輕取計候

ニ相心得、省略方別段申聞候ニも不及候、銘々勝手宜様取計可申候、

右之通、向々江可被達候、

○按ズルニ、嘉永六年十月、徳川家定任夷大將軍ト爲ル、

〔徳川禁令考二十八 諸使令使〕安政三辰年九月廿六日

巡見使御猶豫之趣再御觸

伊勢守殿御渡　大目付江

御代替ニ付、諸國巡見之儀、来巳年迄も御猶豫被遊、午年より被仰出ニ而可有之旨、去々寅年相達置候處、去卯年稀成地震幷今般之大風雨津浪等ニ而、居城其外住居向在町等迄、及大破候向も有之哉ニ相聞、可爲難儀と思召候ニ付、諸國巡見之儀、猶又来々午年より戌年迄、五ヶ年之間御猶豫被遊、亥年より被仰出ニ而可有之候間、破損所取補理方、武備手當向等、諸事先達而相達候通相心得、意等閑無之様可被致候、

右之通、向々江可被相觸候、

安政五午年十二月八日

巡見使御猶豫之趣御書付

備後守殿御渡

御代替ニ付、諸國巡見之儀可被仰出之處、先達而天災打續候ニ付而ハ、諸家之入費も不少、可爲難儀と思召候ニ付、當年より来ル戌年迄、五ヶ年之間御猶豫被遊、亥年より被仰出ニ而可有之旨相達置候、今般御代替ニ付而も、右年限中御猶豫、来ル亥年より可被仰出候間、諸事先達而相達候通可被心得候、

右之趣、向々江可被達候、

守護使

○按ズルニ、安政五年十月、徳川家茂征夷大將軍ト爲ル、

〔栗山上封上〕一只今上の御爲に萬民を治め申候は、御代官ニ而御座候、御代官と申者は、隨分支配之村里、風義も律義に、盜賊溢れもの少々にて、萬民上を不奉怨樣に仕候が、御役目の第一にて御座候處、只今の御代官は、御年貢を取納の事を、御役目の樣ニ覺居申候、其譯は御年貢を一粒も餘慶に取立候が、働に相成候間、御役替等も被仰付、其外の風義盜賊抔の事は、一向御上にも御構無御座候故に而御座候、○中略

一御代官の心得違と申候者、右に申上候事ニて御座候、何卒此以後御代官被仰付候節者、上ニ申上候通三千石以上の大身の者へ被仰付、右の譯を篤と被仰聞、村里の風義律義に、盜賊博奕打無御座、百姓の難義不仕など丶申類の事一々ケ條ニ書被仰渡、其上にて一年に二度程ツヽも、御番衆之内にても、御使番之内にても人物を御撰び被遣、御代官領を巡見に被遣、若其支配の内、盜賊多く、風義惡敷、百姓共難義仕候事も御座候ハヾ、其御代官急度御叱りをも蒙り、御役をも被召上候樣に被仰付候ハヾ、殊の外百姓の潤にも相なり、天下の御基、彌丈夫に相成可申と奉存候、

御巡見被遣も、被遣樣惡く御座候へ者、却て民の難義に相成申候、其時分に、御詮義あらせられ候て、利害を御考被遊候樣仕度奉存候、

〔武家名目抄職名二十九下〕按、守護使は、守護職の使節たる者をよべる唱へなり、もし其國に田畠を撿地すべきこと、又は年貢の不納などあるをりには、家人の內、事にたへたる者を遣して、撿注究濟せしむ、又非常の事いできたれる時にも、これを遣して沙汰せしめ、おりにふれては、撿断などの事にもあづからしむるものなり、勿論臨時の所役にして、平常設置る丶つかさにはあらず、もとより守護の私に定むる所司にて、おほやけにかゝはれるものにあらず、この故に別に名稱

をも設けずして、ひとへに守護使とよべる成べし、さるべき神社佛寺の領地、又堂上地下の庄園にても、由來ある所領には、此使の人部して撿注することを禁ぜらる、これを守護使不入地、又守護不入地ともいへり、慶長よりこなたには、守護の名目絶たれども、古例によりて國主領主の綺をゆるされざる寺社領をも、守護不入と稱すること、猶古きに異ならずとぞ、

〔神護寺文書〕可早停止守護所使入部丹波國上林庄事

右任度々下知狀、停止彼使入部、謀反殺害輩出來之時者、爲庄家之沙汰、可召渡守護所之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

寛喜九年四月十日　武藏守平（花押）〇泰時

相模守平（花押）〇時房

〔賀茂別雷神社文書〕□茂當社領石見國久永□守護所使入部、幷高野山流人雜事間事、社解具如別書此子細狀、所詮如承元二年十月十五日關東御下知狀案者、故右大將殿御時御寄進之後、一向社家進止之地也、停止守護所之沙汰、於大番侍者、隨先例之勤、可有左右、至于其外課役者、可令免許云々者、承元二年被下御下知候、後無被毀破之狀者、任彼狀之趣、且停止使者入部、且可免許流人雜事之狀如件、

寛元二年六月三日　相模守（花押）〇北條時房

守護代

〇按ズルニ、守護使ノ事ハ、官位部鎌倉職員編守護篇ニ詳ナリ、

〔日光雜話神祕卷〕東照大權現日光山下野國社領事

目錄在別紙

都合五千石

撿斷使

右件之所々拾七ヶ村、奉寄進之訖、殊者就于東照大權現勸請當山、衆徒社家門前屋鋪地子等、悉令免許之、(各宜承知、)幷永代可停止撿斷使、若於背國法輩出來者、可爲各別者也者、守此旨、佛法興隆、嚴密可被沙汰之狀如件、

元和六年三月十五日　御書判(○德川秀忠)

天海大僧正御房

〔御當家令條〕六(一)下野國日光山東照大權現宮領壹萬石、大猷院殿領三千六百石餘、都合壹萬三千六百石餘(目錄在別紙)事、寄進之訖、永不可有相違、勿論可爲撿斷使不入之地、但背國法輩者非制限也、(○中略)

明暦元年九月十七日　右大臣源朝臣御判(○德川家綱)

日光一品法親王

〔建武以來追加〕諸國狼藉條々(貞和二十二三、沙汰、○中略)

一亂入他人所領、致非分押領輩事

不帶補任裁判公驗、不待使節之遵行、無左右致亂入狼藉之條、造意之企、太以無道也、不可不誡、向後堅可停止、此儀若有違犯之族者、云本人、云與力人、可收公所領三分一、無所帶者可處流刑也、縱雖不遵奉書、未及喧嘩、先驅向其場追出彼輩、沙汰付本知行、後可注進子細之旨、可仰守護人焉、次使者遵行地事、本領新恩不可差別、嚴密可致其沙汰之旨趣同前矣、(○中略)

一合戰咎事

帶御下文施行輩、尤可相待使節遵行之處、恣亂入所々之間、本主依支申、多及合戰之由有其聞、甚不可然、自今以後者、不論理非、至故戰之輩者、悉可收公所帶、亦於防戰之仁者、可被分召所領半分、但非領主者、可準故戰也矣、

〔康富記〕嘉吉二年十月七日甲午、飯尾美濃守(貞元)布施民部大夫(貞基)松田八郎左衞門尉(秀等)、爲使

節下向伊勢國云々、國司被打入神三郎、又神人與神役人右一族確執弓矢事、可和睦之由、管領被仰之歟云々、

〔武徳安民記十五〕村越直吉奉鈞命至于清洲附軍議之事

係ル處ニ同日〇慶長五年八月十九日江府ヨリ村越茂助直吉、台命ヲ蒙ブリ清洲ニ著ス、則井伊兵部大輔直政、本多中務大輔忠勝、茂助ニ謁シ、アラカジメ御使ノ趣ヲ尋ケレバ、茂助ガ曰、公ノ仰ニハ大小名其他ニ在陣誠ニ辛勞ノ段察シ玉フ處也、同クハキット一戰ヲ遂テ、敵味方ノ手ギレノ證ヲミセラルベシ、若仕損ゼラルト云トモ、跡ノ合戰ハ心安カルベシ、此段相達ベキ旨命ゼラル由答ヘケレバ、直政、忠勝頭ヲ振テ曰、大小名無二ノ忠志既ニ明ニシテ、シカモ御著陣ヲ待屈スル處ニ、此御諚甚ダ齟齬セリ、相カマヘテ明朝諸將參扣フ席ニ於テ、此御諚述ルコト勿レ、唯々近日江城御首途ノ催シアル由ヲ達シ、諸將ノ心ヲ宥ムベシ、後日ニ其段台聞ニ及ビ、御咎メアラバ、御邊ノ越度ニナスベカラズト、直政、忠勝堅クコレヲ留メタル由、急度申分ケナスベシト、深ク是ヲ制シテ後、大小名明朝清洲ノ城ヘ來會アルベキ旨、兩將方ヨリフレ促ス、然ルニ村越其夜熟案ジケルハ、兩將ガ遠慮モ最モ其理ハリ有トイヘドモ、カヤウナル大切ノ使節ヲバ、思慮深キ勇士ニコソ命ゼラルベキコトナルニ、卒爾シゴクノ我等其撰ニ當ルコト、尤モ其故有ベシ、所詮仰セフクメラレシ趣、有ノマヽニ述ベシト思惟シテ、翌朝既ニ群參ノ面々ニ對シ、御諚ノ通リ有ノマヽニ風情ニ過テ申ケレバ、井伊本多ハ興ヲサマシ、惘然トシテ片唾ヲ呑、既ニ滿座ノ諸侯モ口ヲ噤テ未ダ言ヲ出サヾル處ニ、福島左衛門大夫正則ツク〲〵ト思惟シテ、忽チ扇ヲ以テ席ヲ礑ト打テ被申ケルハ、誠ニ列坐ノ大小名、徳川殿ニ先達テ上リシ甲斐モナク、此所ニ在陣シ、空シク日ヲ送ケルガ大ナル誤リ、尤公ノ賢慮耻ルニタヘタリ、早速兵ヲ發シ、犬山歟、岐阜ノ城ヲ拔テ忠志ヲアラハサント云レケレバ、諸將皆是ニ同ズ、〇下略

古事類苑

政治部五十九

下編

出仕

鎌倉幕府以後、吏員ノ幕府ニ出勤スルヲ出仕ト云ヒ、勤番ト云ヒ、或ハ登營若シクハ登城トモ云フ、鎌倉幕府ニ於ケル吏員執務ノ時間ハ、史籍ノ徴スベキモノ無シ、足利幕府ノ頃モ、詳ナルコトハ知リ難ケレド、建武式目追加正長二年八月ノ奉行人伺事規式ニ依リテ之ヲ考フルニ、巳刻ヲ以テ定刻トシタルガ如シ、德川幕府ニ於テハ、其職ノ繁閑ニ依リテ一定セザレドモ、奏者番、勘定方、大目付、町奉行等ノ吏員ハ巳刻以後ニ登城シ、未刻以前ニ退出セシメタリ、

鎌倉、足利、及ビ德川幕府ニ於ケル執務ノ方法ハ、各、其職ニ依リテ之ヲ數番ニ分チ、當番非番ノ別ヲ立テ、其勤ムベキ期日ト姓名トヲ番帳ニ記シテ、所定ノ職務ニ從ハシメ、若シ疾病事故アリテ出仕スルコト能ハザルトキハ、同僚相互ニ助勤シ、事務ヲシテ澁滯ナカラシメ、若シ故ナクシテ不參スルモノアルトキハ、或ハ名字ヲ削リ、或ハ出仕ヲ止メ、或ハ過料ヲ科シ、以テ缺勤ナカラシム、又德川幕府ニアリテハ、皆勤、上勤上、上勤等ノ區別ヲ設ケ、十年ヲ一期トシ、其等第ニ依リテ褒賞ノ途ヲ開キ、以テ奬勵ノ一端トセリ、

名稱

〔易林本節用集〕志言辭 出仕(シユツシ)

〔吾妻鏡〕八 文治四年十二月十七日戊寅、式部大夫親能男一法師冠者能直任左近將監之由、參賀營

中、是無雙寵仁也、○中略今日始出仕云云、

〔太平記十〕安東入道自害事附漢王陵事

イザヤ人々、トテモ死センズル命ヲ、御屋形ノ燒跡ニテ、心閑ニ自害シテ、鎌倉殿ノ御耻ヲ洗ガントテ、被討殘タル郎等百餘騎ヲ相順ヘテ、小町口ヘ打莅ム、先々出仕ノ如ク、塔辻ニテ馬ヨリ下リ、空キ跡ヲ見廻セバ、今朝マデハ奇麗ナル大廈高墻ノ構、忽ニ灰燼ト成テ、須臾轉變ノ煙ヲ殘シ、○下略

〔太平記二十六〕直冬西國下向事

紀州靜謐ノ體ニテ、直冬被歸參シヨリ後、早人々是ヲ重ジ奉ル儀モ出來リ、時々將軍ノ御方ヘモ出仕シ給シカ共、猶座席ナンドハ、仁木細川ノ人々ト等列ニテ、サマデ賞翫ハ未ダ無リキ、

〔東山殿年中行事三月〕二日、將軍家御裝束同前出御于御對面所、御供衆申次御禮如常、當番申次出于閫際、吉良殿、澀川殿、石橋殿ト、一同ニ披露シテ、後順々入于閫中御禮、次伊勢、仁木、上杉、一人宛拜台顏、○中略則入御于常御所、此方之節朔ニハ無登營、上杉事、亂前者五月五日出仕也、今ハ正月四日御禮ト云々、

〔玉露叢三〕慶長十九年九月十六日ニ、松平筑前守利光參府、則チ台聽ニ達シ、上使アリ、午ノ刻登營、御座ノ間ニ於テ拜謁、

〔家忠日記追加十二〕天正十九年辛卯正月廿二日、大神君○德川家康今日之御上洛、故有て御延引有、依之諸士登城すべき旨を鈞命有に依て、松平家忠城に登て大神君に謁す、

〔敎令類纂和集十九〕元和四戊午年正月朔日

壁書○中略

一御だい所仕置之儀者、天野孫兵衛、成瀨喜右衛門、松田六郎左衛門、兩三人一日一夜ヅヽ、可爲勤番、諸事善惡之儀、沙汰を以申付べし、

〔寶曆集成綠綸錄十六〕延享二丑年正月

於紅葉山八講御執行ニ付、御規式中勤番

右晝夜詰切、下御供所其外、御山下夜中與力同心相廻候樣可被致候、每日勤番名前、追而書付可被　御先手一組宛

出候、〇下略

番

詰番

〔倭訓栞中編二十〕ばん　番は匡謬正俗に、今の宿衞人、及于官曹上直、皆呼爲番とみゆ、

〔梅松論上〕隱岐國にをいて、守護人淸高、去年〇元弘二年の春より一族等詰番して、御所を警固し奉る所に、〇下略

〔天明集成綠綸錄二十二〕天明七未年十二月

正月十四日御年越ニ付、詰番當番之面々、熨斗目麻上下着用候樣可致候、尤以來右之通候間得其意、向々江可被達候、

當番

〔吾妻鏡脫漏〕元仁二年〇嘉祿元年十二月廿一日丁未、東西侍御簡衆事有其沙汰、若君〇藤原賴經御幼稚之間、就御所近々、東小侍可著倒之由、御下向之始、被定上者不及子細、但西侍無人之條、似背古例乎、仍相州以下可然人々者差進名代、門々如警固之事、連日夙夜可令致其勤也、遠江已下十五箇國御家人等、十二箇月依彼分限多少而可差宛、雖爲自身出仕之日、可進名代於西侍〇謂之大番之由議定畢、是右大將軍〇源賴朝之御時、稱當番、或亘兩月、限一月、長日每夜令伺候之也、次同所始被置定番人也、例所謂櫻井次郎、安部光高、今泉太郎、大宅政光、八町六郎、橘以康、市三郎、平重遠、長田太郎、藤原維定、飯田太郎、物部忠重、阿美小次、伴範兼已下也、

〔吾妻鏡五十〕文應二年〇弘長元年三月廿五日丁亥、近習人々之中、以歌仙被結番、各當番之日、可奉五首和歌之由被定下、冷泉侍從隆茂、持明院少將基盛、越前前司時廣、遠江次郎時通、壹岐前司基政、播部

本番

助範元、鎌田次郎左衞門尉行俊等爲二其衆一、

〔大舘常興日記〕天文十一年卯月廿日富森八郎源介松平兵番事申レ合之一云々、仍今日は則八郎當番分也云々、　廿一日、今日當番源介也、　廿二日、今日當番松平兵也、

〔集古文書三十七〕室町家掟書蜷川家掟書

殿中御掟

一間二申次之當番、毎事別人不レ可レ有二披露一事、

永祿十二年正月十四日

〔落穗集追加九〕酉の年〇明曆三年大火事の事

一公方樣〇德川家綱にも、彌々御立退可レ被レ遊かと有レ之、前方に御徒目付衆一人百人番所へ御老中方御差圖にて、此御番所へも、定て火の粉可レ參候間、組の同心衆へ下知被レ致候、隨分御ふせがせ候へとの義に候と御申候處に、其日は横田次郎兵衞殿御當番故、御番所の前に居申候が、是を御聞、件の御徒目付衆へ御立向、昨今兩日の大火、只事に不レ有と存じ、我等組の同心共には、御預の鐵炮に火繩を掛させ、あの如く御門をかため罷在候に付、火の粉抔を拂はせ申者とては無レ之に付、左樣には不二罷成一候と御申候へば、御徒目付衆御聞、松平伊豆守殿〇信綱御差圖に候と御申候へば、横田殿御聞、御老中をも被レ成候へば、左樣な馬鹿成る事を御申有レ之可レ能ものにて候や、伊豆守殿は扨置、たとへ上意にもいたせ、此次郎兵衞に於ては、左樣は不二罷成一と被レ申しに付、御徒目付衆も不興の體にて立歸り、横田殿の申分の通りを、有りのまゝに申達せられければ、側に阿部豐後守殿〇忠秋御居合、當番は誰にて候やと御申付、横田次郎兵衞當番と相見へ、右の申分に候と答へければ、豐後守殿御聞被レ有候て、次郎兵衞ならば左樣にも可レ有との義にて、御笑ひ候と也、

〔御隨身三上記〕永正九年六月八日八幡へ御社參、〇中略御出前に五ヶ番共に晝夜如二本番一祗候可レ申

之由被仰出候、當番は二番也、一番と三番と又四番と相副て、常の御所と御庭に各夜に相替祗候候也、八日は闕取にて、夜御庭に四番五番御宿直申候、

〔落穗集追加九〕酉の年〔○明曆三年〕大火事の事

一淺野因幡守殿其節の屋敷は、霞ヶ關只今の安藝守殿の向屋敷にて有之候が、右火事の節、〔○中略〕大勢の供廻りにて、外櫻田御門へと、馬を早めらるゝ處に、〔○中略〕掃部頭殿〔○井伊直孝〕には、澁手拭の鉢卷にて、供の侍十人計を馬の側に御立候迄にて、因幡守殿へ御向被成、只今は不輕大火に、其元は何方へ御越候哉と有之に付、因幡守殿には、御本丸御類燒と承り候に付、御機嫌相伺申度奉存罷出候と、返答被申ければ、掃部頭殿御聞候て、御尤至極の事共也、御城内御殿向不殘御類燒候へ共、公方樣〔○德川家綱〕には一段と御機嫌能、西の丸へ被爲成、御安座の御事也、其元には外櫻田御門迄御越、御尤に存候、本御番は相馬長州にて、岡野權左衞門を加番に被仰付、詰被居候間、權左迄御機嫌相伺はれ可然候、〔○中略〕と御申有り、

〔德川禁令考二十番士〕寬文五巳年七月

火事之時御供番寄場江罷出候覺〔○中略〕

一本番、當番之時、火事出來之時分、忌ニ而御番ニ不罷出候共、御城江出可被申候、御夜詰過候而ハ、寄場江出、被申、御供番之番頭組頭差圖を請可被申候、進物番共右同前之事、

〔御當家令條二十五〕覺〔○中略〕

一病後本番計相勤、御供番斷之衆、五ヶ月過候而者致番詞候樣可申渡事、

寬文七年未十一月　日

〔敎令類纂初集三十九〕寶永七庚寅年四月十五日

二丸御留守居

加番御免被成候間、前々之通可被勤候、

〔落穂集追加九〕酉の年(○明暦三年)大火事の事
公方様(○徳川家綱)にも追付西の丸へも被為成候との事に候間、拙者(○横田次郎兵衛)義大手の番には候へ共、久世三四郎組之者を召連、下乘迄相詰罷在候間、御門外は三四郎へ相渡し、手前義は蓮池の御門へ加番に罷越、御成先を固め候ては如何御座可有候哉相伺候間、(○下略)

副番

〔御随身三上記〕永正九年三月十四日、十三日夜副番ニ祗候仕、十四日朝御馬責申候也、　閏四月一日不申出仕、二日三日不參、三日は副番なれども、歡樂により不參、副番はじまりて、三日不參の始也、

相番

〔大館常興日記〕天文九年七月七日、日行事(豆州)より、各へ折紙在之、二番衆以申狀言上、相番中島千世知行分士御門野畠事、小田小五郎申給候由風聞、驚存候旨種々被申之、　十月廿日、御太刀一腰持河原大藏大輔(二番衆也)當年御禮に進上之、仍以佐申入之也知行分無正體由被申也、播州云々、相番沼田三左、取次て被申之、

〔坂井家日策〕天保八年正月二日、朝六ツ半過ゟ越中殿初、相番、親類年始相勤歸宅、

助番

〔敎令類纂(初集四十六)〕萬治二己亥年九月五日
定(○中略)
一當番煩之時者、急度助番可仕事、

〔舊經錄七〕助之部
(助先、御使先ニ而も、段々相障、心得之仁無之節は、其段當番江申遣、詰合衆中、宜被御合被下候様、申遣候事之由、)
一新役二度目御番不相勤内、助江不加事、
一忌明後、助順ハ第二番目ナリ、
一加役月番者、助不相勤事、

西丸御番も同斷○中略

寶暦九卯七月廿四日被仰合

一兩御丸助番幷添、同日相勤候刻、助順之上ニ而添相勤、助順之次ニ而助相勤候事も有之、區々ニ付、以來何レ之助ニ而も一ニ相立、添ハ何レ之添ニ而も二ニ相立、助順操可申旨、今日被仰出候（助一添二）

同役殿へ申合候

○按ズルニ本書ハ奏者番ノ職務ニ關スル事ヲ記セリ、

〔奏者番留書〕助番之部

一本助一、西助二、本中之間助三、西朝助四、添五、御使六、但御使先、御名代杯之節、難相勤候段、達も有之には格別なり、

一助番前之節は、八時比迄は先は在宿、遠方へ無據儀ニて罷越候節は、次助番之者へ可申談候事、

當番格は、當番之次助番へ手紙ニて申遣候得共、近例は次助番へ申談候事、

一御用日にても、御奏者方不殘差合、急助入候はゞ、寺社奉行月番之外之衆は、御老中江伺ニ不及、助被勤候樣可申談旨、寶永五子年九月、大久保加賀守殿被仰聞候事、

但近例は、寺社奉行衆月番は除之、其外は助順に立番、

代番

〔教令類纂初集四十一〕寛文七丁未年六月十六日

本所夜廻初而十二人一年代ニ被仰付ニ付、御書院番ゟ六人、御小姓組ゟ六人、○中略

一煩廿日過永引可申體ニ候はゞ、代人出し可申事、

一忌二七日ゟ上者、代人出可申事、

〔享保集成絲綸錄十五〕元文二巳年二月

所々御門番之面々、御作法御成之刻も、病氣に候而も、近來は不及交代相濟候得共、向後前々之通當番之節、病氣差合ニ而不被相詰時者、前夕相番と可有交代候、急病氣等ニ而、至當日ニ難相詰時

者、家來は相代候ニおよばず、非番之主人計可ㇾ被ㇾ相詰ㇾ候、

番替　〔舊經錄七〕都而御番之事○中略

一一通り之御番替不ㇾ苦、三方替は不ㇾ仕候事、

長番　〔吾妻鏡二十一〕建曆三年○建保元年四月十五日丙戌、和田新兵衛尉朝盛者、爲將軍家御寵愛、等倫敢不ㇾ諍之而近日父祖一黨、含ㇾ恨忘ㇾ拜趨、朝盛同抛ㇾ夙夜長番、令ㇾ蟄居、

〔折たく柴の記下〕詮房朝臣○間部は、むかし藩邸の御時○德川家宣より、夙夜に公にのみさふらひて、家に歸る事は一年がほどを過れども、わづかに三五度には過ぎずまして前代かくれ給ひ、上○德川家繼いとけなくおはしましゝかば、老中の人々だに、一人づゝ、宿直せられし事なれば、此五年がほど、またばしも家に歸られしこともおはせず、

朝番　〔御當家令條二十四〕覺○中略

一朝而申渡候通、朝番之刻請取御番衆五六人も被ㇾ罷ㇾ出候迄は、常之處に着座被ㇾ仕、人少に無之樣に可ㇾ被ㇾ致事、○中略

萬治二亥年八月六日

壺番　〔新編追加侍所〕一傍例紀伊七郎左衛門尉重經所領、丹後國之地頭得分物、以ㇾ闕所領、夫令ㇾ運ㇾ上鎌倉之處、件夫丸下ㇾ著鎌倉、於米町之邊、見ㇾ付彼侍逃夫丸、擬ㇾ召ㇾ捕之處、夫丸逃走之間、重經下人追懸之刻、入ㇾ將軍御所御壺所、重經下人、猶以追懸之間、壺番以下人々群集、云ㇾ重經下人、云ㇾ夫丸、召ㇾ取之、申ㇾ事由之間、御尋之處、子細無ㇾ相違、但主人重經雖ㇾ不ㇾ知ㇾ此子細、追ㇾ入御所之條、緯巳爲ㇾ勝事之間、主人猶難ㇾ逃ㇾ其科之由、有ㇾ御沙汰、即被ㇾ召ㇾ重經丹後所領畢、

此事寛元年中之比、武藏前司殿御時事歟、云ㇾ所領主名字、云ㇾ年月、委可ㇾ尋ㇾ記也、

〔吾妻鏡五十〕文應二年○弘長元年五月十三日甲戌、今日壺番之間、於ㇾ廣御所、佐々木壹岐前司泰綱與ㇾ澀

谷太郎左衛門尉武重及口論、

〔德川禁令考二十七〕寛文四辰年十二月十四日

火事幷病者有之時之覺

火事之節見舞候之覺〇中略

一當番ニ而晝番之時分火事出來寢番時分迄燒候者、斷次第寢番に出間敷事、

〔駿府政事錄〕慶長十九年二月十五日、自今夜近習輩御夜詰御赦免云々、

〔泊御番心得〕正月朔日より七日迄は、御夜詰迄は熨斗目麻上下之事、

一正月三日夕御謡初相濟、泊御番御夜詰に罷出候節、長袴著替、半袴に而、御夜詰に罷出候、兩番頭組頭衆は、長袴計にて罷出候、此方は麻上下著替可申候、

一五節句御夜詰迄、麻上下之事、〇中略

一五ッ時打候はゞ、躑躅之間又は御茶部屋江罷出候、諸向罷出五ッ二三寸廻候節、菊之間江罷出、其節番頭衆菊之間方江可被罷出候間、其跡ニ付罷越、刀後ロに差置致著座、五半時御目付衆被參、番頭衆前にて、御夜詰引候段被申聞、此方江も時宜被致候事、〇中略

一御夜詰之節、夏は菊之間御椽頬御障子之方に計罷在候、

但御椽頬江罷出候儀、番頭衆見合可致同様候事、

一御夜詰引候而部屋江罷越、用事仕廻次第、菊之間江罷越相休可申候、

〔信綱記〕一家光公御在世之時分、家綱公御幼少にて少々御病氣に被成御座候而、御老中壹人宛御城に御泊り有之て、其刻さる人豆州〇松平信綱へ、別而代々此人に念比成筋目有之人あり、此人比三十計にて在りし、御前近く御奉公被相勤候人也、其人少用有之而、奥より表へ通被申候刻、豆州御夜詰之内かたはらに眠り被居候、御近習衆へ被申は、御用にて被罷通候哉、又は自分の用にて

明番出番

通られ候哉とたづね給ふ、〇下略

〔教令類纂初集四十六〕元祿十五壬午年二月十五日

向後御番所明不申樣ニ詰切、當番明番代り合可相勤候、

御持之頭

二月十五日

右之通、於桔梗之間御支配方御列座、對馬守殿此書付御渡、向後如斯可相勤由、被仰渡候、

〔坂井家日策〕天保八年正月廿四日、今日明番出番ニ付早朝退仕、二月十八日、朝出番ニ而御城早く退出致ス、三月朔日戊寅、朝出番ニ而歸宅、

非番

〔成氏年中行事正月〕一正月朔日、〇中略然間朔日早旦御祝ノ始、勝栗昆布ニテ御酒アリ、其時番ニシコウアル奉公中、御酒ヲクダサレ、御扇一本ヅヽ、拜領、御近邊ニ宿所アル人ハ、雖非番ニ參、御祝ニアヒ申方アリ、

〔建武以來追加〕伺事條々永正八十二六

一非急事者、非番之輩可斟酌仕、於被仰出之子細者、不及是非事、

〔教令類纂初集四十三〕寛文元辛丑年六月十三日

御城近所火事之節覺

一御本丸〇火振、當番非番之番頭家來之者ども、御本丸江出候間、櫻田御門筋違之御門番頭斷次第可相通事、

一非番之御番衆ハ、番頭指圖次第、御本丸江可被罷出之事、〇中略

寛文元年丑六月十三日　大久保右京亮〇以下四人略

出仕制

〔吾妻鏡四十一〕建長三年八月廿三日辛亥、評定衆中所勞於不參勤之輩、不可乘著到之由、有其沙汰、

不令許其乘之程者、不可書乘之旨被仰出云云、

〔建武式目追加〕奉行人伺事規式正長二八廿

一出仕事

各守結番之次第可令參勤、但於急事者、雖爲非番可申之矣、〇中略

伺事條々永正八十二六

一守結番之次第、各可令參勤也、訴陳之儀爲巡番、先一ヶ條可伺申事、但訴陳之儀有子細、多逗留者、自餘之伺事可斟酌仕、

一非急事者、非番之輩可斟酌仕、於被仰出之子細者、不及是非事、

一被仰付御返事等、非指急事者、當番可伺申事、

〔殿中申次記〕定申次御法條々

一依歡樂不參之時者、兼日以誓文狀可被申之、然者度數次第可有合力、度數爲等同者、可爲遠近次第、後日ニ參勤之時、可被合度數事、

一着到前日七時以前ニ於無到來者、不可承引之、然者可爲重役事、

一或者公儀、或者於被下暇者、度數不可及返勤事、

右條々違背之方在之者、爲總堅可被申之、若於無承引者、可被達上聞者也、仍衆議如件、

〔御當家令條二〕諸公家法度〇中略

一晝夜之御番、老若共無懈怠相勤、其外正威儀相調、伺候之時刻、如式目參勤仕樣可被仰付事、〇中略

右之條々相定所也、從五攝家幷傳奏、其屆有之時、從武家可行沙汰者也、

慶長十八年六月十六日　　家康公御判

板倉伊賀守どのへ

〔武家嚴制錄三十一〕殿中御條目

一御給仕幷御取次之當番人、御かげの御事公令油斷に付而は、可致言上事、

條々〇中略

附、當番之者、長袴を爲持可相詰事、〇中略

慶長十年八月十日

〔憲教類典御番二ノ九〕元和八壬戌年十一月十五日

定

一當番不參之事、可爲改易、

一番明卯刻以前退出之事、其年之知行召上べし、

一寢番之ともがら、酉之刻以後出仕之事、過料銀貳枚、

一他番と請取渡之事、相手替たるべし、同番之内是又同前之事、

一參勤之刻限遲參之輩過料銀貳枚、

一當番之輩、用事なくして他之座敷に有之事、過料銀壹枚

一當番之面々差あたり急用有之時、番頭横目に不申斷罷出事、改易たるべし、

一紙燭之事、過料銀壹枚、

一夜詰以後有明之外燈立置事、過料銀貳枚、

一楽書之事、おとなは死罪、少人は流罪、本人しれずば其座敷之當番過料銀拾枚、但番衆多少によるべし、

一不依何事御法度を相背、幷不行儀之もの、或は死罪、流罪、又は過料、科之輕重によるべし、

一番頭組頭無念にて不申付、もし脇之輩於有之者、頭中より過料可出、但事により可爲重科事、

一於城中又若黨幷小者、不依何事背法度不行儀者之事、本人は成敗、若見遁候はゞ、其所之番衆可

為越度、過料銀貳枚、

一諸々條之內、不申上して不叶事をば、不依何時可令言上、必每月晦日、諸法度善惡之儀、披露すべし、但依時分年寄共までも可申達事、

右之條々、堅可相守此旨者也、

元和八年戌十一月十五日　　御黑印

加賀爪民部どのへ

石川八左衞門どのへ

永井彌右衞門どのへ

渡邊半四郎どのへ

豐島主膳どのへ

牧野淸兵衞どのへ〇以上皆目付

一此度御法度被仰出候御黑印之寫進之候、被相守此旨、御番所諸事御油斷有之間敷候、以上、

十一月十五日　　松平右衞門大夫〇正綱

太田采女正〇資宗、中略、

寬永九壬申年五月七日

條々

一於殿中喧嘩口論在之、則其番切に可相計之、他番之輩は、其番所に在之而、御側近面々幷番頭組頭可隨差圖事、

附、火事之時可為同前事、

一結徒黨之儀、為御停止之間、彌守其旨、一味不可仕事、

一番中之面々、善惡之儀無依怙、有様に可致言上事、
一番代之儀嚴密に可致事、
一當番不參、可爲曲事事、
一何事によらず相背御法度、幷不形儀之ともがら、或は死罪或は流罪、又は改易、又は過料可隨科之輕重事、
右條々堅可相守此旨、御法度之趣違背之族見遁聞遁於令用捨は、番頭組頭可爲曲事者也、
御黑印

寬永九年五月七日

(御當家令條十四、條々

一萬事御法度之趣、於御本丸度々御條目之趣、不可違背、就中喧嘩口論、且又衆而如被仰出、彌以堅可相守事、
一御番請取渡之儀、幷參勤刻限明番時刻、御本丸可爲同前事、
一御番頭組頭、幷御目付之面々申渡儀、聊以違背不可仕事、
一番所之外御用なくして他之座敷江參べからず、自然不叶用事於有之は、傍輩中江相斷可罷越事、
一異様之風俗をなし、不行儀之體致べからず、刀脇指衣類以下、諸人之目に不懸之様に可相嗜之、勿論召仕之輩に至迄堅可申付事、
一殿中ニ而不及沙汰宿所寄合企惡事、一味仕べからざる事、
一御直參之輩者不及申、諸家中之者たりといふとも、若乘道之儀堅く爲御停止之條、其間之使をも一切仕べからざる事、

附、家々において諸家中之輩と寄合、惡敷儀に一座仕べからざる事、

一御內々之義、不依何事見及聞及儀、猥ニ不可致沙汰事、

一當座之御慰被仰出候時分、其座之義、以來遺恨ニ不可存、自然於申掛者、可爲曲事事、

右條々可被相守之、若違背之輩於在之者、糺咎之輕重、可被處嚴科者也、仍執達如件、

慶安三年九月十八日

右は大納言家綱公、西御丸御部屋住之節也、

〔嚴有院殿御實紀 一〕慶安四年四月廿七日、夜中震災等あらば宿老并に直日の輩のみまうのぼるべし、今まで近習の輩は、非番にも內人番所まで出しが、このゝちは出べからずと仰下さる、

〔御當家令條 二十四〕覺

一跡々ゟ被仰出候御條目之通、洞他番と請取渡之刻、相手替嚴密に可被仕候、尤同番之儀、是又可爲同前事、

一兼而申渡候通、朝番之刻、請取御番衆五六人も被罷出候迄は、常之處に著坐被仕、人少ニ無之樣ニ可被致事、

一於御番所並居猥ニ無之、作法能樣に、相番中互に可被申合候事、

一朝番衆之內、三之鬮取候兩人之衆明不寢之衆と替御番所可被相守事、

一他番衆と他之御座敷ニ而出合被申間敷候、若急用之儀者、番頭組頭江斷、用事可被相叶事、

一湯呑所江一度ニ大勢不可參、二三人宛も可被參候、勿論於彼所長座有之間敷事、

一高雜談并御夜詰過候刻、聲高ニ無之樣ニ可被致事、

一辨當遣ひ被申候刻限、九ッ半打初七ッに仕舞可被申候、尤火之元入念可被申事、

一御供番之刻、殿中並御供之先にても、無作法無之樣ニ可被致事、

萬治二亥年八月六日

〔教令類纂初集二十〕萬治二己亥年九月五日

定

一御賄組頭壹人宛一日一夜可相勤、御酒奉行、御肴奉行者貳人宛、進物奉行本方拂方共ニ貳人ツヽ、是又一日一夜ツヽ可勤之、御春屋奉行壹者三人、從者貳人に而可勤仕事、

附、木具奉行、諸道具奉行、進物奉行、薪奉行、鹽噌奉行一人宛泊番いたし、面々役儀念入、火之用心堅可申付候、御春屋奉行者、品々御用繁候間、別而火之用心可申付之、自然此役々之内、煩差合有之時者助番仕、無懈怠可相詰、組頭之内煩差合之時者、隔番ニ罷出候、泊番者相止、早朝より酉之刻迄可罷在事、○中略

一御臺所方御番之儀、四番にいたし、組頭共に一日一夜宛、無懈怠相勤、煩差合等有之者、組頭者不及申四組之内より助番仕べし、但組頭共六人有之者不及助番、二人より不足之時者可致之、組頭者隔番之時者不泊番、早朝より罷出、晩之料理過迄可相詰事、○中略

萬治二年九月五日

〔御當家令條二十四〕覺

一御番所人少ニ無之様ニ致され、辨當遣ひ被申候時分も、如前々半分御座敷ニ殘り、急用無之候はヽ、右之人數之通可被相詰候、當番之人數其日之詰番衆江申通候事、

一於御番所、晝夜共ニ被致高聲候は、他番之番頭ニ而も、有合候者御番所江可申通旨、同役中申合候事、

一御夜詰過給物之事、あんどんを遠のけ目ニ立無作法無之様に可被致候、御夜詰過候而御目付衆通被申前後、番頭組頭風と廻り申筈ニ申合候事、

以上

寛文二年寅四月八日

〔德川禁令考番二十七〕寛文四辰年十二月十四日

火事幷病者有之時之覺

火事之節見舞候之覺

親子　兄弟　舅　聟　小舅　伯父　伯母　甥　姪　祖母　從弟　孫

一當番之時、其身屋敷火事出來候はゝ、夜中にても御番所出し可申候、父之屋敷に火事出來、其身一所に在之候共、妻子無之衆は、出申間敷事、

一御番之刻、其仁屋敷幷近所に而申來候者、斷次第、番頭組頭何へも申斷可出事、其頭不有合候者、組中江申斷可罷出候、晝以後夜中は近所之分にては、一切出す間敷事、

一當番ニ而晝番之時分火事出來、寢番時分迄燒候者、斷次第、寢番に出間敷事、

〔嚴有院殿御實紀三十九〕寛文九年十一月十五日、この日奥高家一人づゝ、直日を定むべき旨命せらる、

〔吏徵別錄上〕高家

寛文九年己酉十一月十五日、御近習之高家之面々、向後一人充、殿中可相詰旨被命、

〔德川禁令考番二十七〕元祿十六未年十二月

病後月額之事

一未十二月、秋元但馬守殿被仰渡候ハ、唯今迄者、御番衆病後之節、長髮ニ而御番ニ罷出候得共、向後者、月額仕候而御番ニ可罷出旨被仰渡候、尤番頭組頭宅迄ハ、長髮ニ而可罷越候之事、

〔寶曆集成絲綸錄十六〕享保二十卯年九月廿七日

前々より相違候趣も有之候處、御城部屋々々江食物酒等持參、外々江も振廻候由相聞候、於殿中猥成儀に候、依之向後左之通可被心得候、

一殿中に晝計相詰候面々は、於御臺所御料理被下候事ニ候間、部屋々々江食物等持參之儀、可爲無用候、

一晝夜御料理不被下面々、一分之辨當持參は可有之事ニ候、外江振廻候樣に用意は、可爲無用事、

一泊番相勤、御夜食被下候面々之內にも、用意之爲、一分之辨番持參は勝手次第之儀、且又組頭江振廻候儀は格別、其外江振廻候樣に持參候儀可爲無用事、〇中略

右之通、自今急度可被相心得候、

〔青標紙後編〕殿中之部

一當番不參可爲改易事

一當番之面々、差當急用有之時、番頭組頭江不申斷罷出候者、可爲改易事、

一當番之輩、他番衆と御座敷內にて出會被申間敷候、若急用事之事有之候はゞ、居合の組頭江相斷、用事可被達候事、

附、湯呑所江壹兩人之外に參間敷候勿論彼所においても長座有之間敷事、

一他番請取渡之事、可爲相手替、相番內是又同前之事、

一寐御番之輩、無斷酉刻以後出勤、過料銀三枚之事、

一部屋內にて、晝夜共高聲雜談可被相嗜事、但辨當遣候刻限、九ッ時ゟ七ッ時限に仕舞、無沙汰無之樣入念、下々江無怠慢可被申付事、

一樂書之事、おとなは死罪、少人は流罪、本人不知ば、其座敷之當番過料銀拾枚、但番頭衆多少によるべし、

一殿中喧嘩口論有之砌、其番切に可相計之、他番之輩は、其番所に有之、御側近面々、幷番頭可有差圖事、

附、火事之時、可爲同前事、

出仕時刻

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年十二月十三日丙寅、六波羅御沙汰之間、問注奉行人緩怠遲參之由依有其聞、定時刻令著到之、毎月可進關東之旨、被仰相州〇北條重時之許云云、

〔建武以來追加〕奉行人伺事規式 正長二八廿

一時剋事

可爲巳剋、猶以後者可令略矣、

〔早雲寺殿廿一箇條〕寅の刻に起、行水拜みし、身の形儀をとゝのへ、其日の用所妻子家來の者共に申付、扨六ッ以前に出仕申べし、

〔大猷院殿御實紀十九〕寛永九年三月廿八日、月次朝會あり、今より後朝會かならず巳刻に出仕すべき旨令せらる、

〔享保集成絲綸錄十八〕正保三戌年五月

一御奏者番、幷御勘定方四人之役人、大目付、町奉行、右之面々、日來御奉公之義、朝四ッ以後登城、晩は八ッ以前に退出仕候事、不應貴命候之間、自今以後、可相嗜之旨、上意之趣、酒井讃岐守傳之、

〔奏者番留書〕當番勤方幷心得

一五半時登城、部屋へ罷越、若年寄衆非番登城に而、中之間へ罷越、當番座ニ罷在、老中衆へは會釋有之候間、致時宜候、

〔文昭院殿御實紀五〕寶永七年二月廿五日この日土屋相摸守政直、政閑無事のときは、未刻をまたず、心のまゝに退出すべしと仰下さる、

○按ズルニ、此文ニヨリテ考フルモ、未刻ヲ以テ退出ノ時刻トセルコト明ナリ、

〔德川禁令考後聚二法吏憲務〕法吏憲務規則

評定所之面々江被仰渡候御書付

一寛永以後御代々被仰出候評定所法式、評定衆卯半刻より會合候而、申刻退出し、其日決難き事候ハヽ、翌日再會候而、猶又決斷及難き事ハ、老中に申言上すべき由ニ候、○中略

正德二年辰九月五日　評定所一座

奉行中

〔勘契備忘記上〕享保八卯年

御勘定奉行ゟ組頭江相渡候書付　御勘定所勤方之覺○中略

一各御殿江被參候儀、月番之外、諸帳面方ゟ壹人、御代官伺書改方壹人宛、四ツ半時ゟ御殿江被參、月番兩人ハ、九ツ時ゟ御殿江罷越、殘兩人御勘定所ニ罷在、御勘定衆支配衆品々御用改方、無油斷樣可被致候、○中略

卯八月

〔勘契備忘記中〕享保十九寅年

淺草御藏役人勤方納米改方等之定書

一御藏奉行組頭御藏奉行、何れも毎日五ツ半時御藏江出役可致候、御藏奉行壹人宛泊番相勤、翌朝出役之者と代合可致退散候、但御藏奉行煩差合等ニ而御人少之節ハ組頭も泊可申事、

〔寶曆集成絲綸錄十六〕寶曆三酉年二月

御殿組頭貳人　御勝手方組頭貳人　右吟味役壹人

御取箇方組頭三人　右吟味役壹人

伺方組頭三人　右吟味役壹人
帳面方組頭貳人　右吟味役壹人

右之通、吟味役掛分年番相極、御勝手方江相懸り候吟味役ハ、御殿江罷出、御取箇方伺方帳面方江相懸り候吟味役ハ、日々朝五時下御勘定所江罷出、諸事組頭吟味之趣立合承之評議之上相定、九時御殿江罷出、其趣御勘定奉行江申達候樣可被致候、

一向後ハ御勝手方御勘定奉行一人宛、日々朝五時下御勘定所江罷出、吟味役組頭共御用向取計之趣承屆、九時御殿江罷出候樣可被致候、○中略

二月

〔天保集成絲綸錄七十四〕寛政二戌年二月

三奉行江

評定所出座刻限之儀、五時出座可致候間、其趣被相心得、向々江通達有之樣可被致候、

戌二月

日勤

〔明良帯錄前編〕御側衆

君邊第一之勤にて、人品高邁ならざれば成がたし、御老若方御退出後は、殿中非常之事に關る、本番詰番加番伺出とて、大抵日勤之場也、

御三殿御附家老

御屋形向御取締、御入用筋御領知之事迄關り聞、日勤之場にて骨折場也、

結番

〔貞丈雜記四役名〕一五ヶ番と云は、殿中に番を勤る人々を五番にわけて五ヶ番と云也、○中略萬拔書條々云、五ヶ番御通り之事、昔は其番々ニテ承替りたる事候、然ば番頭先祇候にて、大方家々の次第にすゝみ被申也、

〔年中恒例記〕正月四日

惣番衆參次第事、一番より始て五番まで、番次第に御目にかゝる也、昔は少々うらうちの衆もありし也、又就御祝儀、御太刀など時々參候時は、當番より始て、御太刀進上之由也、假令晦日などに御太刀參候共、先五番衆、次一番衆、二番衆、次三番衆、次四番衆、如此なるべし、自餘以之しるべし、朔日より六日迄は一番衆御番也、七日より十二日迄は二番、十三日より十八日迄は三番、十九日より廿四日迄は四番、廿五日より晦日までは五番衆勤被申也、〇下略

〔吾妻鏡十九〕承元四年六月十三日己巳、駿河國以西海道驛家等結番夜行番衆、殊可致旅人警固、將又丹後局參向之時被盜取之財寶等、可尋出之由、今日被仰守護人云云、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年〇建保元年二月二日癸酉、昵近祗候人中、撰藝能之輩被結番、號之學問所番、各當番日者不去御學問所令參候、面々隨時御要、又和漢古事可語申之由云云、武州被奉行之、

一番	修理亮	伊賀左近藏人	安達左衛門尉
	島津左衛門尉	江兵衛尉	松葉次郎
二番	美作左近大夫	三條左近藏人	後藤左衛門尉
	和田新兵衛尉	山城兵衛尉	中山四郎
三番	安藝權守	結城左衛門尉	伊賀次郎兵衛尉
	波多野次郎	内藤馬允	佐々木八郎

〔吾妻鏡二十六〕貞應二年十月十三日、爲駿河守奉行、撰可祗候近々之仁被結番、號之近習番、

一番	駿河守	結城七郎兵衛尉	三浦駿河三郎
二番	陸奥四郎	伊賀四郎左衛門尉	宇佐美三郎兵衛尉
三番	陸奥五郎	伊賀六郎右衛門尉	佐々木八郎

四番　陸奥六郎　佐々木右衛門三郎　信濃二郎兵衛尉

五番　三浦駿河二郎　同四郎　加藤六郎兵衛尉

六番　後藤左衛門尉　島津三郎兵衛尉　伊藤六郎兵衛尉

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年十二月廿九日壬午、被定若宮〇藤原頼嗣御前御方祗候人數、結六番、御撫物御使、幷御格子上下役悉被分置之、所被撰將軍御方之體也、陸奥掃部助奉行之、

〔吾妻鏡四十七〕康元二年〇正嘉元年十二月廿四日甲辰、當參人數之中、或可然之仁、或撰要樞之輩、始被結番廂衆、此事以仙洞之儀、被摸關東之條、頗可有其憚歟之由、被仰合于相州禪室、就被答申之篇、以內藏權頭親家、遠江十郎左衛門尉頼連等、爲御使、內々被窺叡慮之處、有勅許、亦侍之參昇可爲何樣哉之趣、同申之、於其境、至被撰思食侍者、人數定不足歟之旨、被仰下之云云、雖已嚴重之間、以近衛將以下等爲番頭、故染御震筆、令書御簡、御料紙所被用唐紙也、此間有珍事、頼連爲使節、可被載名字於番頭脇、不然者無所望由、頻訴申之、有沙汰被閣之、次伺見參結番事、雖被定置之、此一兩年其來自然解緩之間、今日更被撰勤厚族、被定之云云、

定

廂御所一日一夜結番事

一番子午

一條少將　相摸式部大夫　上總三郎　大隅修理亮　陸奥六郎　備前三郎　出羽次郎左衛門尉　筑前三郎左衛門尉　壹岐三郎右衛門尉　城五郎

二番丑未

阿野少將　相摸三郎　武藏五郎　後藤壹岐前司　薩摩七郎左衛門尉　式部太郎左衛門尉　小野寺新左衛門尉　城四郎左衛門尉　鎌田三郎左衛門尉　一宮次郎左衛門尉

三番寅申

中御門少將　尾張左近大夫將監　遠江七郎　新田三河前司　刑部權大輔　出羽三郎左衞門尉　和泉三郎左衞門尉　常陸兵衞尉　出羽七郎　平賀新三郎

四番卯酉

冷泉少將　越後右馬助　新相摸三郎　武藏八郎　足利三郎　佐渡五郎左衞門尉　壹岐新左衞門尉　加藤左衞門尉　城六郎　大泉九郎

五番辰戌

二條侍從　陸奧七郎　內藏權頭　前采女正　武藏左衞門尉　隱岐二郎左衞門尉　周防五郎左衞門尉　上總三郎右衞門尉　武藤右近將監　土肥四郎

六番巳亥

刑部少輔　武藤左近大夫將監　遠江七郎　秋田城介　上野太郎左衞門尉　伊勢次郎左衞門尉　肥後三郎左衞門尉　駿河藏人次郎　下野四郎　大曾禰左衞門太郎

右守結番次第、一日一夜無懈怠可勤仕之狀、依仰所定如件、

正嘉元年十二月日

定

伺見參結番事

一番子午

城四郎左衞門尉　周防五郎左衞門尉　鹽谷周防四郎兵衞尉

二番丑未

隱岐三郎左衞門尉　上總太郎左衞門尉　太宰肥後三郎　式部左衞門尉追加

三番寅申

小山七郎左衛門尉　押立藏人大夫　土肥四郎

四番卯酉

城六郎　式部太郎左衛門尉　薩摩七郎

五番辰戌

後藤壹岐左衛門尉　武藤左衛門尉　狩野左衛門四郎

六番巳亥

幸島小二郎左衛門尉　加地五郎左衛門尉　牧左衛門二郎　波多野兵衛二郎

右守結番次第、無懈怠可勤仕之狀、依仰所定如件、

正嘉元年十二月日

〔新編追加侍所〕一近日出羽陸奥國夜討强盜蜂起之間、往還之輩有其煩之由風聞、尤不便、是偏郡鄕地頭等背先御下知、無沙汰之所致也、甚无其謂、早柴田郡内知行宿々造宿直屋、令結番、殊可令警固也、且籠置惡黨之所々、不可見聞隱之旨、可被召沙汰人等起請文者、依仰執達如件、

正嘉二年八月廿日　武藏守判

相摸守判

阿波前司殿

〔吾妻鏡四十九〕正元二年〇文應元年二月廿日戊午、廂御所結番更被書改、行方書之、

定

廂御所結番事〇中略

一番自一日至五日

一條中將　越後守　尾張左近大夫將監　新相摸三郎　武藤八郎　武藏少卿　佐渡五郎左衞門尉　出羽三郎左衞門尉　小野寺新左衞門尉　上總太郎左衞門尉　鎌田三郎左衞門尉

一宮次郎左衞門尉〇自二番至六番略

右守結番次第、五箇日夜無懈怠可令勤仕之狀、所定如件、

正元二年二月日

〔太田康有記〕建治三年九月四日、依召參山内殿之處、以平金吾被召御前、〇中略武州一番頭、前武州二番頭領狀に言上之處、仰云、武州者元三番頭也、相率三番衆可轉一番也、越州者元一番也、其衆相共可遷三番、可相觸其旨云々、

〔大猷院殿御實紀二十〕寛永九年五月九日、此日御談伴は、交番して出仕すべしと命ぜられ、その交名を注し下さる、一番は高力攝津守忠房、松平右衞門大夫正綱、牧野内匠頭信成、加々爪民部少輔忠澄、今大路延壽院道三親昌、岡道琢孝賀、二番は松平大隅守重則、秋元但馬守泰朝、伊丹播磨守康勝、杉浦内藏允正友、半井驢庵成近、吉田松庵某、三番山口修理亮重政、板倉内膳正重昌、堀式部少輔直之、内田平左衞門正世、田村安栖長有、山川撿校城管なり、

〔東武實錄〕寛永九年、是年由良市兵衞貞長、御書院番松平伊賀守御前ニ於テ獻物ヲ持チ損ジ、御機嫌宜シカラズ、其後御花畠御書院番兩御番勤番ノ士八十餘人ヲ撰ビ出サレ、毎日登營シテ獻物ヲ御前ニ持出ルコトヲ習フ、八十餘人ヲ日々ニ減ゼラレ、其殘ル者僅ニ貳拾九人ニ、御近習ヨリ島田刑部少輔ヲ加ヘラレテ、統テ三拾人、〇中略此面々ヲ召テ、城ニ登ル老臣等列座ニテ、三拾人ノ輩各進物御番ヲ仰付ラルヽノ間、三十人ヲ二番トシテ勤ムベシ、夜番ハ御免ノ間、日中御營中ニ相詰テ是ヲ勤ムベキ旨、台命ノ由ヲ傳ル、勤仕ノ事ニ付テ願アルニ於テハ、言上スベキノ旨也、依テ三拾人ヲ三番トシテ勤仕スベキ事ヲ願フ、此由台聽ニ達シ、願ニ任セラル、是進物御番ノ始メナリ、

番帳

〔奏者番留書〕御番割之部

一御番割は、毎月廿八日之當番、翌月之御番割相調、於御城廿八日仲ヶ間中へ遣之、同役中增減在之時、御番割中途に割替候時も、右之御番割相調候仁、是を認置候、首尾に依而、其日當番之仁認候事も有之候也、

〔簡禮記〕番帳之書式、申次番ノ次第、書様一遍ナラズトイヘドモ、大概ノ趣、タトヘバ、

申次御番之次第

一番　細川丹波守

二番　伊勢但馬守

三番　細川刑部少輔

右辰剋以前有伺公、酉剋可有退出之由、所被定置仍如件、

年號月日

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年十二月八日辛酉、小侍所番帳更被改之、毎番堪諸事藝能之者、一人必被加之、手跡、弓馬、蹴鞠、管絃、郢曲以下事云云、諸人隨其志、可始如此一藝之由被仰下、是於時依可有御要也、陸奥掃部助被相觸此趣於人々云云、

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年〇寶治元年六月五日丙戌、泰村以下爲宗之輩二百七十六人、都合五百餘人自殺、此中被聽幕府番帳之類二百六十人云云、

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年十二月十九日甲午、諸方番帳等被加清書、依爲歳末也、於廂御簡者、隨例仰秋田城介、於御所令清書之、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年〇文應元年七月廿三日己丑、小侍番帳更清書之、雖被仰中山城前司盛時、依申所勞之由、佐藤民部大夫行幹又奉仰所染筆也、是以和泉三郎左衛門尉行章、被下廂御簡於小侍所、

廂與小侍每其番(自一番至六番)不參差、爲同日之様令結番之、可書改之由、依被仰下、如此云云、且淸書仁以前兩人可然之旨、爲相州禪室御計云云、　廿五日辛卯、小侍番帳事、有其沙汰、於書様雖爲次第不同之儀、何無所思哉、聊立次第可書改之由被仰下云云、和泉前司行方、武藤少卿景賴等爲奉行也、是日來結番之體、不云官位、不論嫡庶、且依宿老、且隨勤否被書云云、

〔花營三代記〕應永卅年五月三日、畠山中務少輔(自去月十八日籌持寺ニ來七日迄御座)等持寺へ被召、御方番衆御所北面小門中宿直スベキ由被仰下也、番帳アリ、

〔親元日記〕文明十五年六月廿日辛巳、以調阿彌陀佛昨日被仰出之間被觸申分、長谷御所御番衆也、此次第御番帳をもつて、自調阿方被進之了、○中略

一番

三淵伊賀守殿　此次第御番帳をうつして自調阿方被進之了、

本庄能登守殿　此御折以御中間被賦之、中頃桂中務、

佐脇三河守殿　如此被相觸之由、調阿方へ被仰遣了、

二番

久世大和守殿

小田上野介殿

飯河中務丞殿

三番

本郷與三郎殿

三浦次郎殿

(左馬助代)富永式部丞殿

自來廿四日、邊御物少々可被運渡候、然ば非番而御番衆東山殿ロ有祗候、可被警固御物之由被仰出候也、

六月廿日　伊――

〔落穗集二〕御城内古來家作の事

一問曰、其元御申の通りにては、御旗本諸御番方の衆中、遠近知行所より通ひ勤と有之は、太義なる事の樣に存候、此段はいかゞ候哉、答曰、其儀をも承り及候は、其節御當地(江戶)にて御城近き所の町家に御番の定宿と申て、いかほども有之知行所の遠近によつて、其町家に幾日も逗留被致、我が番他の番と申義もなく、毎日出勤被致、御番帳面へは、名判さへ致し置候得ば、一ヶ月分二ヶ月分の勤も相濟候如く被仰付候を以、(下略)

番文

〔吾妻鏡四十一〕建長三年六月五日甲午、有評定、(中略)次五方引付更被結番之、爲六方、秋田城介義景輕服之後始出仕、奉仕此事云云、其番文云、

一方

前右馬權頭政村　常陸入道行日　大曾禰左衛門尉長泰　山城前司俊平　新江民部大夫以基

二番

武藏守朝直　大田民部大夫康連　武藤右衛門尉景頼　中山城前司盛時　山名進二郎行直

三番

尾張前司時章　對馬守倫長　清左衛門尉滿定　長田兵衛太郎廣雅　越前四郎經成

四番

攝津前司師員　出羽前司行義　伊勢前司行綱　山名中務俊行　皆吉大炊助文幸

五番

伊賀式部大夫入道光西　秋田城介義景　伊豆前司行方　明石左近將監義綱　内記兵庫允祐村

六番

信濃民部大夫入道行然　筑前前司行泰　甲斐前司泰秀　越前兵庫助政宗　太田太郎兵衛尉康宗

〔常照愚草〕一番文之事、是は五方引付の番文也、それには土岐、佐々木、伊勢、大和をも被入候、又攝津二階堂、波多野、町野など事も番文に入候、正頭權頭とて、二人は一段賞翫也、第一をは正頭と云也、至近代は、正頭と申かた〳〵は、吉良殿、石橋殿、山名殿、一色殿、細川奥州など也、畠山匠作被召加し事も在之云々、次に權頭には、攝津二階堂、伊勢波多野、佐々木加賀などにて候つる、第一に正頭の人を書て、其次に權頭を書候て、其外は位階次第にも記し候哉、又は舊參新參の差別も可在之、此外右筆輩數多書加候、此番文と申事、昔は其時代之公人奉行一代に必申沙汰仕て、人數を注たる事也、近代は無沙汰云々、古は天下之諸公事を、此五方の頭人令存知、評定を成し、理非を分申定畢、應永年中まではさやうの事も有之、其後は五方の人數計は、公人奉行も書立候得共、不及其沙汰なりはてし也、

番桁

〔明良帶錄前篇〕寄合肝煎

肝煎方にて、早出遲出と番桁を立て世話あり、

當番書

〔泊御番心得〕一當御番前日之朝、泊介之桁ニ而當番書相認、詰番衆江手紙相添遣候事、

以手紙致啓上候、今日者御詰番御太儀奉存候、然者明幾日拙者泊御番ニ付、當番書差出申候、今晩泊之御方江御渡可被下候、奉賴候、以上、

月日
詰番兩名樣
何之誰

何月幾日
當御番
何之誰

番伺

〔齋藤親基日記〕寛正六年十二月十一日、二番伺事申之、玄良豐基等也、貞秀者依レ爲二由奉幣神事一、殿中參候斟酌也、　十七日、番伺事、忠郷、貞有、爲脩、但貞有伺申已後、蔭凉軒被レ參二御前一之間、爲脩令二斟酌一了、
文正元年二月廿九日、番御伺事始玄良貞秀、
二年二月廿三日、伺事、番次第、文正二廿三

一番　齋藤遠江入道　治部河內守國通　齋藤民部大夫親基　飯尾四郎左衞門尉爲信
二番　飯尾下總守爲數　清和泉守貞秀　清式部丞秀數　布施彈正忠英元
三番　諏方信濃守忠郷　飯尾兵衞大夫貞有　齋藤五郎兵衞尉豐元
四番　松田丹後守秀興　飯尾大和守元連　飯尾左衞門大夫爲脩
五番　飯尾肥前守之種　齋藤加賀守種豐　飯尾隼人佑任式後改二任連一

定番衆

〔憲教類典〕二ノ九御番 寛文九己酉年十月十五日

覺

一本番拾ヶ年皆勤、同御供番十ヶ年皆勤之面々を、十組をよせ一帳に可レ被レ書候、幷夜廻にても進物番にても、十年皆勤之面々、同事に可レ被レ書之事、

一本番十ヶ年皆勤、御供番は九年皆勤、殘壹ヶ年上勤、幷御供番十年皆勤、本番九年皆勤、殘壹ヶ年上勤、
一本番夜廻ともに十年皆勤、御供番煩有之面々、
一本番八年皆勤、殘二年上勤、御供番は皆勤又御供番八年皆勤、貳年は上勤、本番十年皆勤、
右之品々、拾番を寄、一帳に可被書注之事、
一本番上勤、御供番上勤、
一九年皆勤壹ヶ年煩等まで有之面々は、拾ヶ年にりうやういたし候得ば、煩壹つ定被成候積にて被成御用捨、上勤同前に被仰付候、但十ヶ年之内三年を皆勤、五年を上勤、殘二年に煩五つ有之面々も、可為同前事、
一九年皆勤に、壹年に煩十一十二有之面々は、十年にりうやういたし、一年に壹つヅヽ御用捨之上、十ヶ年に煩二つ可為御用捨、但十年之内三年は皆勤、五年は上勤、殘ル貳年は煩七つ有之面も、可為同前、但シ本番十年上勤、御供番十年上勤之外に、煩十二御用捨にては無之事、
右三ヶ條之品相改、十組を寄、一帳に可被書注之事、今程御用にかゝり有之面々は其御用相濟候上、可為御沙汰候間、右之帳面には可被除之、但當分之御用掛り早速隙明候面々は、帳面に可被載事、
一駿府在番中、彼地にて之御番割をもつて改可為同前事
以上
酉十月日〇中略
寛文九己酉年十月
閏十月十八日、被為召御金被下候、

何年皆勤　皆勤　金五枚
本御當　何年煩十二　上勤上　同三枚
上勤　同貳枚

右之勤之衆は、別紙に調願申筈に申合候、本番にて十三煩有之衆、又本番十壹、御供番にて二年上勤にても不能成候、

御供番　九年皆勤　一年上勤
本御番　八年皆勤　二年上勤
右者上勤上
本番　九年皆勤　一年煩二日
右者上勤上に出入張紙仕候筈に申合候
（朱書）右者被仰出候御書付とは不被存候間、取調之上可相認候、
〔享保集成絲綸錄十八〕享保五子年十一月

覺

一當子年迄十ヶ年御番皆勤之分、當年中書付可被差出候、
一丑年迄十ヶ年御番上勤上之分、丑年冬中書付可被差出候、
一寅年迄十ヶ年御番上勤之分、寅年冬中書付可被差出候、以上
十二月
〔憲教類典二ノ九御番〕享保五庚子年十二月朔日
石川近江守殿御渡

覺

一御納戸衆、當子年まで十ヶ年御番皆勤之分、當年中書付可被出候、

一丑年まで十ヶ年御番上勤上之分、丑年冬中書付可被出候、

一寅年迄十ヶ年御番上勤之分、寅冬中書付可被出候、以上、

子十二月

〔椽下錄〕一勤役　拾ヶ年一度程づゝ、（五年以來又は四年以來と勤改被仰出候）

皆勤金五枚　（五年之内頃一つ）上々勤金三枚　（五年之内頃三つ）上勤金二枚

右兩御番より大御番迄如斯

小十人組皆勤三拾兩　上々勤二十兩　上勤十兩

〔明良帶錄 餘篇〕御小性 頭書

千石以上以下共、一ヶ年皆勤、御手自時服二被下之、右は一日引込ニ而も不被下事、但忌中產穢は無構、　同半年皆勤、但以前は時服十二之處、當時は金拾兩ト時服二、右は七月盆前被下之、但引込御番三十迄は被下之、御番數三十一ニ成候得ば、不被下候事、

〔御成敗式目追加〕式目抄所引追加

遲參

一京都大番事、被定月宛之處、替番衆遲々之間、前衆勤越之條尤不便也、一月令遲參之輩者二箇月可勤入也、守此率法可令精好給之狀、依仰執達如件、

文暦二年七月廿三日　　武藏守判
　　　　　　　　　　　相摸守判

駿河守殿

掃部助殿

一京都大番衆事、適有限之番事於左右懈怠之輩者、假令一箇月令遲參者、爲其過怠可被宛未作番

不巻

用途鍵十貫文、其以下日數者以之可被仰宛之狀、依仰執達如件、

仁治三年十一月廿八日　　　　前武藏守判

相摸守殿

〔憲教類典二ノ九御番〕元和八壬戌年十一月十五日

定〇中略

一參勤之刻限遲參之輩、過料銀貳枚、

〔大猷院殿御實紀二十一〕寛永九年、是歲先手頭加藤喜助正重、御出城ある日出仕遲刻して、番所明たるにより、采邑の半を削らる、

〔常憲院殿御實紀三十一〕元祿八年三月七日、けふ令せられしは詰衆、奏者番、寺社奉行、詰衆並之輩今より後、朝會の日病あるか、又喪制にてまうのぼらざるは、直月の老臣へ其旨告べし、

〔天保集成絲綸錄七十四〕寛政二戌年十二月

月並其外出仕之節、布衣以上以下御役人、病氣差合等ニ而登城不致候節ハ、大目付御目付江相屆可申旨、元祿八亥年、御書付を以被仰渡候處、近頃不相屆向も有之候間、以來病氣差合等ニ而、登城無之節ハ、御同役を以、拙者共江御屆可有之候、依之申達候、以上、

十二月十四日　　　　桑原伊豫守

〔德川禁令考十九疾病忌服〕寛政十戊午年七月十二日

忌引中ニテモ月次出仕斷ハ、別ニ可差出旨達、

月次等出仕斷屆申聞候面々之內、忌差合之儀、何ハ幾日迄と申屆有之候得者、右之內ハ出仕日ニも別ニ出仕斷者不致向も有之候、以來者出仕日之度每、縱忌差合ニ候共、出仕斷者有之樣ニ可致旨可被達候事、

〔幕制彙纂二〕天明八申年七月廿八日松平上總介様御登城之節、途中ゟ御不快ニ付、御供頭取計左之通、

私儀、今日登城可仕と、途中迄罷越候處、俄腹痛難儀仕候、依之今日登城難仕奉存候、此段以使申上候、

右之通口上ニ而御刀番之御仁壹人、御用番松平伊豆守様江被相越、御取次江被申達、尤途中ゟ罷越候間、口上ニ而申上候、後刻以書面御屆可申上候旨被申達候由、今壹人御刀番は、御城江罷出候而、御出入御坊主衆江申込御同席中様江右之趣御頼、口上ニ而被申述相濟候由、御歸宅後左之通、

私儀、途中ゟ腹痛難儀仕候、依之今日登城難仕奉存候間、此段以使者申上候、以上、

七月廿八日　　松平上總介

右書頭ニ相成候而、伊豆守様江御留主居持參、

無故不參

〔吾妻鏡三十三〕延應二年〇仁治元年三月十二日丙子、當番無故不事輩五人、被止出仕、所謂宇都宮五郎左衛門尉廣澤三郎兵衛尉、鹽谷四郎兵衛尉、結城上野十郎、海老名左衛門尉等也、陸奥掃部助奉行之、

〔吾妻鏡三十七〕寛元四年九月十二日丁卯、被結番近習人々六番、其番帳者左親衛被染自筆、無故不參及三箇度者、可被處罪科之由、所載于右狀也、

〔吾妻鏡四十〕建長二年十二月廿七日戊午、近習結番事治定、自今已後、至不事輩者、削名字永可止出仕之由、嚴密被觸廻之云云、彼番帳中山城前司盛時所加淸書也、

〔吾妻鏡五十二〕文永二年閏四月廿日戊子、御所無人之由依有其聞、先可注進當番不參衆、可被處罪科之旨、左典厩今日被遣御使於小侍云云、

早退

〔大館常興日記〕天文十一年二月四日、常興祗候、依所勞氣、やがて退出仕候也、　五日、昨日祗候仕候、

祝著忝存候、依所労早出いたし候由、宮内卿御局へ以書狀申入之、則御返書在之、上意御懇之段蒙仰候、忝畏存知也、

〔幕制彙纂 二〕一寶曆三酉年三月二日、內藤左京亮樣御登城、就御不快御退出御例、

右同日御登城被成候處、於殿中大目付樣江御斷被申述、勅使御對顏以前被致退出候、依之御用番本多伯耆守樣江、以使者御屆左之通、

今朝就御對顏、私義登城仕候處、風邪氣ニ不快ニ御座候間、石河土佐守江相斷退出仕候、此段爲御屆、以使者申上候、以上、

三月二日　　　　　　　　　　內藤左京亮

右留守居持參差出候處、後刻可申聞旨挨拶有之、此外勤向無之候、

〔幕制彙纂 二〕一安永五申年正月二日、松平內膳正樣御登城被成候處、御不快ニ付、御屆向左之通、

御目見前俄に衄血ニ而著座難相成候付御同席樣方御賴被申、御坊主部屋江退去、右衄血ニ而今日御目見難相成、直ニ退出之節、御出席御目付樣江、御同席樣ヲ以御賴被成御屆被成候事、尤出御前故、大目付樣江御屆不被成候、

一四時過歸館之上、左之通御用番松平周防守樣江御屆、留守居勤御落手被成候事、

私儀、今日登城仕候處、於殿中逆上强衄血仕候、依之大目付中江申達退出仕候、此段御屆申上候、以上、

正月二日　　　　　　　　　　松平內膳正

〔幕制彙纂 二〕一寬政六寅年六月十六日、御用番戶田釆女正樣江左之通御屆、

私儀、今日就嘉祥御祝儀登城仕候處、俄逆上仕候付、大目付中江申達退出仕候、此段御屆申上候、以上、

六月十六日　　松平源三郎

右者御目見前に相成御逆上ニ付、俄に御退出被成候後御屆也、

〔有徳院殿御實紀 四〕享保二年三月十六日、宿老土屋相摸守政直、衰老して足の痛たえがたきよし聞召、職事閑暇の時、かつ風雨寒暑の日は、常參をゆるされ、二三日に一たび出仕すべしと面命せらる、

許隨意出仕

〔德川禁令考 十九 疾病忌服〕享和二壬戌年三月十六日

風邪流行ニ付演達

當時一同風邪殊之外流行致し候ニ付、長髮ニ而罷出候而も不苦候、尤供廻り格外ニ減少致候而も不苦候、且又詰合候者之内ニも、風邪之者有之候ハヽ、致退出候而も不苦候旨、攝津守殿被仰渡候、

一殿中詰合之面々、風邪之者ハ、勝手次第可致退出旨、尤日々別段相達不申候間、當分右之通相心得候樣、攝津守殿被仰渡候、

雜載

〔殿中申次記〕正月朔日　長祿二戊寅御對面記

一公家　大名　外樣少々　御供衆　御部屋衆　申次番頭　番方節朔衆之事也　走衆

右各出仕

〔親俊日記〕天文七年正月朔日丙子、貴殿御出仕、御烏帽子、　細川殿御出仕、御供藥師寺與一、

〔大館常興日記〕天文七年九月朔日、今朝參賀衆、勸修寺殿、藤宰相殿、其外御供衆細川典廐伊勢守以下少々、其外申次衆已下出仕也云々、

〔家忠日記 一〕天正六年五月一日壬子、城出仕之儀、端午近日候間、無用之由、平岩七之助所より申越候、

〔敎令類纂 初集十一〕延寶八庚申年十二月

覺 ○中略

一元日御本丸江出仕之面々、同日西丸江登城、太刀目錄者、三日午刻以後、以使者西丸江獻上之、但在國之名代使者ハ長袴、在江戸使者ハ、可爲半袴事、

〔吉川政太郎家督一件〕

寶子總領 吉川政太郎 申歲十八 ○中略

高百俵

同○安政七庚申年二月十五日、五本入御扇子二箱獻上仕、於西丸山吹之間、繼目之御禮申上、先代之通、年始五節句月並總出仕之節登城仕、寄合並罷成候、

〔梯下錄〕御勘定衆の每日之出勤も、先年は極月廿五日より翌三月五日迄休、知行所へ參休候事も有之、御番方に同じ、年中の式日立會內寄合、合百八日、 極月より三月五日迄の日數七十日 兩樣にて百七十八日、半年の休日にて候、三年に一年づゝ之御番方之三分一休と同事に候、近年は右之休潰し誠の每日出に罷成候、御勘定衆百五十俵、支配衆百俵、八十俵、七十俵、右之面々每日絹以上の衣類を著、上下にて、本所、麻布末、巢鴨牛込末、四ッ谷青山櫻田原、此外遠方より大手櫻田四十五、六町餘之處を日參勤にて、衣類計の物入も限りある御事に候、恒の產物不足故、色々の宜からぬ節も出來申御事に候、家中方にては物頭杯ども上屋敷江通ひ候者は、道中は殊の外かろく仕屋敷江參、衣類を著かへ候、上屋敷に居候者は、居ながらの勤に候、惣て此儀に不限、御旗本と家中方の勤役は同じ樣成事にて、夥敷違有之御事に候、

先年は御勘定大手櫻田より二十五町迄之處にて、御屋敷被下候、日參と申御事に候哉、御供有之御番方は、三十四五町迄も御屋敷被下候、是より遠方は不被下候、

〔天保集成絲綸錄 七十四〕寬政二戌年五月

老中之嫡子、只今迄詰日相勤候處、以來詰日不相勤候間、可被得其意候、

五月

〔德川禁令考二十七〕文化六巳年十月廿八日

非常之事有之時、勤方之儀ニ付御書付、

堀田攝津守殿御渡

西丸御書院番松平外記、相番共を及刃傷候始末、被遂御詮議候處、相番共常々嘲哢ケ間敷仕成儀有之ニ付、差迫致亂心候樣子ニ相聞、變事之期ニ至リ候而者、相番共立向候者も無之段、不覺悟之事共ニ候、御番勤之作法、組中申合之儀等者、度々被仰出候趣も有之處、兎角心掛等閑ニ相成、古番之者ハ權高ニ我意を立、新規之者を爲致迷惑候儀、組之風儀之樣ニ成行候而者、如何之次第ニ候、向後御番方ハ不及申、何れ之向々ニ而も非常之事有之時、勤方相立候樣申合、一同相互ニ和熟いたし、御奉公筋專一ニ心掛可申候、

右之通、向々江可被相達候、

十月

宿直

鎌倉幕府及ビ足利幕府ニ於ケル宿直ノ詳ナルコトハ知リ難ケレド、各、結番ニ依リテ宿直シ、各員退出以後ノ事ハ、宿直ノモノ之ヲ掌レリ、德川幕府ニアリテハ、宿直ノモノハ、申刻ニ登城シテ、用務ヲ結番ノモノヨリ受ケ繼ギ、翌朝ハ早參ノ詰番ニ引キ繼グヲ例トシ、宿明ノモノ、若シ用務アリテ未刻マデ在城スレバ、其刻限ヲ目付衆ニ告ゲテ退出セシム、又番頭組

頭ノ許可ヲ得ズシテ退出スルモノハ改易ニ處シ、宿明ニシテ卯刻以前ニ退出スルモノハ、其年ノ知行ヲ召シ上ゲ、寢番ニシテ酉刻以後ニ出仕ノモノハ過料ニ處ス、宿直ノ事ハ倘ホ出仕篇ヲ參照スベシ、

〔書言字考節用集八言辭〕宿直トノヰ文選註、直謂宿於禁中以備非常也、 侍宿同万葉

〔吾妻鏡十四〕建久五年九月十一日戊戌、永福寺內新造御堂宿直人事、今日被結番之云云、結城七郞、畠山二郞、和田左衛門尉等、在其人數云云、

〔太平記一〕賴員回忠事

去程ニ、明レバ元德元年九月十九日卯刻ニ、○中略時綱只一騎、中間二人ニ長刀持セテ、忍ヤカニ土岐ガ宿所ヘ馳テ行、門前ニ馬ヲバ乘捨テ、小門ヨリ內ヘツト入テ、中門ノ方ヲ見レバ、宿直シケル者ヨト覺テ、物具太刀刀枕ニ取散シ、高鼾カキテ寢入タリ、

〔教令類纂初集三十九〕寶永七庚寅年四月十五日

百人組之頭
御持之頭
御先手
西丸御裏門番之頭

御番詰切候儀、御免被成候間、前々之通可被勤候、泊番之儀者、七半時ゟ可有出勤候、

〔教令類纂初集二十〕萬治二己亥年九月五日

一 定 ○中略

一御賄頭支配於御臺所食被下候儀、六尺等に至迄、其日之當番之內、泊番之者計可給之、其外一切停止之、○下略

〔德川禁令考番二十七〕天保十三寅年四月十七日

燒火之間番頭江御書付○中略

一其方共泊番者無之候間、下部屋不相渡候事、

○按ズルニ、此文ニ據レバ、宿直アル吏員ハ、下部屋アルコト明ナリ、

〔有司勤仕錄〕御側衆

一御側向之事司之、三番に泊り番有之、晝過ゟ登城泊番を勤、明日非番之人、四ツ時分登城し、泊り番之人替りて退出し、其日休息す、非番之人は、其日之泊番出て退出する也、

本泊 加泊

〔明良帯錄後編〕御目付

登城は桔梗之間出席、本泊、加泊とて兩人なり、御夜詰後、殿中見廻り、別條無之段、夫々ゟ申達す、

泊介

〔泊御番心得〕一泊御番、俄引込之節は、右當人ゟ泊介之者江通達有之候はゞ、詰番ゟ不申越候得共右泊介之方ゟ當番書早々詰番江可差出事、

泊明

〔勤契備忘記中〕享保十九寅年

淺草御藏役人勤方納米改方等之定書○中略

一川通御成之節は、御成以前組頭一人御役所江罷出、泊明之御藏奉行と兩人相勤、晝時組頭一人幷其日泊之奉行一人罷出、代合還御迄相詰可被申候、

居殘

〔泊御番心得〕明和二酉年五月廿五日、淺野隼人於宅寄合之節申合

一泊御番病氣ニ而引込之節、居殘詰番ゟ直に泊御番相勤候ハヽ、右病氣之者出勤之節、泊之術江割入、居殘詰番共前々申合之通相勤可申候、○中略

詰番

一六時之御供揃にて御成之節は、御門明之儀、居殘ゟ泊江可申達候、

〔敎令類纂初集四十〕元和九癸亥年五月十日

不寢番

覺○中略

一寢番之輩、酉刻巳前に可㆑罷出、但番替之儀相手替たるべし、○中略

寶永元甲申年正月十五日

覺

一御番衆服有之面々、當番寢番ニも不㆑罷出、自今以後服と當番日不㆑罷出候者は、家來を壹前々組頭宅江付置、差圖を可㆑被㆑得、左右次第寢番に罷出可㆑被㆑相勤㆑候、以上、

中　正月十五日

〔校合雜記三〕慶長十三年五月、是月權現樣駿府御座之時、旗本の健士等日暮候へば、多くは阿部川の遊女町へ參り、よもすがら酒宴して遊びけるよし相聞、急度御停止も仰出され候樣にと、御老中がた言上に及ぶ、其時上意に、旗本の悴どもに、阿部川へ不㆑寢の番に參る樣にといひ付たらば、小言をいひ腹を立べきぞ、かれらは譜代のもの共にて、何事ぞといはゞ則驅出、一方は防ぐべきぞ、しかればよき不㆑寢の番を置よふな者ぞと、笑わせ給ひしとなり、

〔御當家令條十五〕條々○中略

一表之御番衆より二人宛、裏御番衆より二人宛中ニ而出合候樣ニ、不㆑寢之番を可㆑被㆑仕事、○中略

慶長十四年七月十七日

右四人○青山、安藤、土井、酒井、在判

松平丹波守殿

山口但馬守殿

宿直制

〔太田康有記〕建治三年十二月十九日、御寄合山内殿相大守、城務、康有、被㆑召㆑御前、奥州被申六波羅政務條々、○中略

大樓宿直事、當時者、如㆑前々兩人可㆑致㆑沙汰㆑也、追可㆑有㆑御計、

〔大內家壁書〕殿中見物御禁制之事

殿中見物仁之事、堅固御禁制之處、動知番之族、以私々令許容、至常御座鋪邊之條、以外之次第也、於自今以後者、雖爲御庭、不入見物之者也、縱爲出仕祗候之人、於外樣衆者不可見其若於背此旨者、可有殊御成敗之由、所被仰出也、仍壁書如件、

延德元年十二月十九日

〔文昭院殿御實紀 一〕寶永六年三月九日、けふ仰せられしは、○中略 本城上直の人々まうのぼる事おそく、衙局を空曠する聞えあれば、その〳〵心して疾くまうのぼるべしとなり、

〔泊御番心得〕元祿五壬申年十一月十五日、於山吹之間、秋元但馬守殿、米倉丹後守殿、詰番井上內記、保科主税江、今夕ゟ壹人宛泊御番仕候樣被仰渡候事、

初而泊御番　　淺野伊左衛門

右に付伺書差出候趣、左に記、

一今度泊御番被仰付候寐番之者、詰番無構、御門明キ次第退出可仕哉之事、

御附札　詰番と可代候

一泊之節部屋ニ、侍兩人程差置申度奉存候事、

御附札　無用に候

〔泊御番心得〕泊御番三好勝之助登城被致候處、萬次郎樣御玄關江被遊御出候ニ付、暫控罷在候處御間有之候ニ付、中ノ口ゟ登城被致、御目付衆江屆可申候、得共、未被遊御入候ニ付屆延引被致候之處、荒川助九郎可被致對談旨被申越候ニ付、被致面談候處、助九郎被申聞候は、中之口ゟ登城致候ハヾ御徒目付當番所江家來申遣、其上ニ而登城可致處、如何有之候哉と被申聞候ニ付、去ル戌年四月八日、稻生野州江櫻井監物詰番之節聞合せ、當番所江は申遣候儀は無之由、勝之

助致對談候得共、以來は未被遊御入候內に候ハヾ、坊主衆を以、御目付江屆、遲刻之段申達、其後直に相屆候之樣、助九郎被申聞候、此段亥七月廿日、詰番戶田彌十郎、中山勘解由ゟ部屋張紙被差出候事、

一泊御番其他登城并退出之節、御臺樣御表出御、表向奥メリに相成候得者、御玄關ゟ罷出候儀相成不申候間、中ノ口ゟ罷出可申候、勿論登城之上、坊主衆ヲ以、早速當番御目付衆江右之趣、遲刻之段申達置、入御相濟候ハヾ致直談可申候、右ニ付先年萬次郎樣御玄關江被遊出御候節之儀、稻生野州江櫻井監物懸合相定候事、

一泊御番伐引込之節は、右當人ゟ泊介之者江通達有之候ハヾ、詰番ゟ不申越候得共、右泊介之方ゟ、當番書早々詰番江可差出事、

一泊御番之者七時御城江罷出、當日之御用向并申送等有之候はヾ、詰番之者ゟ承り置、翌日之早出詰番江可申送候、尤翌日之當番書請取、居殘詰番ゟ代り合可申候、且御禮日并總出仕之節は、例刻ゟ早め罷出候事、

一泊御番之者、御用有之八時過迄御城に罷在候はヾ、刻限斷、御目付衆江書付差出可申事、

一御鷹野御成之節、泊御番之者八時登城可致候、還狀後還御に候はヾ右還御之刻限、泊御番之者日記江留置可申事、○中略

一玄猪熨斗目長袴、泊御番之者計御祝儀頂戴事、

但御夜詰之節者、麻上下著替候而罷出候、

一五節句御禮日、泊明朝之內平服に而、御臺所江罷越候、

但五節句八朔は、近例當服半上下之由、

一御禮衆登城之節は、著替可申候事、

一節分泊御番熨斗目半袴、正月節分有之時も同斷、燒火之間に番頭一所に相詰、御老中方御退出を御目に掛申候、享保十一午年正月三日、泊御番高力平八郎節分之夜、御謠初相濟、肩衣著、右之通掛御目ニ候事、○中略

一夜中被仰出候事、御用筋同役江致通達候儀有之候ハヽ、部屋差置候足輕江申付、挑灯爲持可申候、尤御目付衆江御門斷書付差出可申候、致通達候儀は、當日詰番遠方に候ハヽ、御城近邊之先當日詰番江可申遣之事、詰番無之方江申遣儀は時之次第可寄候哉、同役內江申遣通達有之候樣可致候、尤詰番御城近所に候ハヽ、直に其方江可申遣候事、

一泊御番幷詰御番之節、火事沙汰有之、御目付衆ゟ御櫓江罷越候樣被申候ば、晝の內は家來召連、御長家御門外殘置、尤刀爲持置、此方計御櫓江罷越、尤御夜詰前は、晝之通相心得、御夜詰後は刀帶、御櫓江罷越候間其節家來は部屋江差置候、當時は家來部屋江不遣、尤侍壹人草履取壹人挑灯爲持召連、御長屋御門外に差置候、御櫓御徒目付罷在候間、方角等大概承置可申候、尤火鎮候ハヽ、御目付衆江火氣相見不申段申遣、返答次第引、御目付部屋入口迄罷越、只今引取候段相屆可申候、

但御夜詰過は、出火之節、火之摸樣に寄、上下著用之節は、火事羽織著用にも見計可致候、當番御目付をカチに著替可申候、

一火事之節、御殿江罷出候段詰番日記江附置可申候、夜中に候ハヽ、泊御番之者日記江附置可申候事、

但御城ゟ御使に參候儀、晝夜共早出詰番居殘詰番初可參候、其後は御城出之順に可參候、且御城風筋惡敷節は、御供番ハ御使不參候間、泊御番其外心得可有之候、當時御城出之內、減口ニ而參ル、

一泊御番之者、人馬夜中出火之節、火事場最寄大手櫻田下馬江罷越、登城之同役江賴、其段爲知候樣、可申付置候事、

　但右之節、泊御番之者、大手櫻田下馬之內江罷出候段書付、同役衆江直相賴可申候

一泊御番致登城候後、留守江御支配方御達書致到來候節は、右御使江家來請取書認、尤致印形相渡候、右之內泊御番ニ而御城罷在候間、早々持參可仕旨、書加可申候事、

一右御奉書御城部屋江持參候樣可致候、左候ハヽ、右御請書相認、且用人江添手紙認、御用番江以使者差出可申候、尤當日詰番江手紙遣候、明々ニ而御役當之節は、明日御役當立替候樣、其段も可申遣候、尤翌日早出詰番方江、明朝御支配方江爲御請罷出候間、御門明出勤給候樣、是又可申遣候事、

一泊御番之者、泊江罷出候後、產穢忌中相成候節は、御城江不申遣候樣、家來江可申付置候、留守ゟ家來翌朝之早出詰番之方江、夜中ニ而も罷越、其段申達候樣、可申付置候事、

一泊御番之者、家來部屋江差出候部屋附之道具、前々有來候は勿論、新規出來之道具無據損候ハヽ、年番之者方江可申遣候事、

一朝六時部屋江參用事相達、朝御臺所申來候ハヽ、當番書持參、躑躅之間江罷越、御目付衆罷出被申候ハヽ、當番書相渡、御目付衆御臺所江被參候其跡に付罷越、御臺處相濟部屋江罷越、當番書上包江請取被申候御目付衆之名前相認、部屋狀差江指置可申候事

一泊明御先番割出候節は、早出詰番御門明登城代り合可申候、泊明江防割出候節も、右同樣之事

　但五時前壹人ニ而、御納戶構相勤可申事、

一早出詰番出勤候ハヽ、代合退出可致候、夜中御用向幷申送等有之候はヽ、申談退出可致候事、

〔泊御番心得〕一泊御番之節、御城部屋に夜中家來差置申度段、同役相談之上、元文五申年八月二日、

石丸藤藏、加藤左兵衞番〇使以書付申上候處、願之通可致旨、本多伊豫守殿被成御附札、同三日詰番仙石次兵衞、戸川内藏助江被成御渡候、右爲上候書付兩通左之通、

口上之覺

私共當番之節、家來差戻、部屋之口夜中錠おろし差置候、然ル處近頃同役共之内、兩度迄夜中部屋之錠前打明ケ、部屋に差置候狹箱、是又錠おろし置候處、同樣に仕入置候火事羽織、其外衣類等不殘紛失仕候、右之内御用之書物等有之候、是又紛失仕、夜中出火等之時分萬一如何樣之儀御座候共、差懸り御用之御間欠ケ可申と奉存候、其上書付等落散り、後日に外ゟ出候節、私共麁末に仕候樣被思召候ては迷惑仕候、依之此段申上候、以上、

八月二日

私共當御番之節、出火等之ため、部屋に夜中家來差置申度段、先達て奉願候處、難相成旨以御附札、被仰渡奉承知候、然ル處委細書付を以申上候趣に付、何卒夜中家來差置申度奉願候、以上、

八月二日

一此度部屋夜中家來差置候ニ付、あかり等之儀、能勢甚四郎江致對談候處、甚四郎方ゟ伊豫守殿江被相伺候由、是又願之通あかり差置候之樣可致旨被仰渡候由、同月五日詰番金田采女、本多大學江、甚四郎被申聞候、此節ゟ初而、部屋下之燈行燈請取候事、

一此度部屋夜中家來差置候に付、由緒在之共、決而部屋江入候事、一切無用可致旨申合候、

一御夜詰以後部屋江罷越用事相達次第、隨分早ク罷出可申事、

一御夜詰菊之間江罷出候節、尤唯今迄之通、刀持參罷出候儀、一同可仕事、

一夜中家來一切差出申間鋪、尤聲高ニ無之樣、堅ク可申付置事、

一家來兩人不寐爲致可申事

一御用ニ付足輕使差遣候節は、常とは違候間、挑灯爲持候樣可申付事、

一銅壺之火、明ケ之者家來消置、附道具等は、早出詰番家來江引渡可申事、

一部屋附道具等損候節、決而申送間敷段、兼而申合候得共、近頃左樣無之衆も在之候間、向後は甘而損候物有之候ハヽ、請取申間鋪事、

一家來火事道具爲持可申候、尤挑灯貳張持參可申事、

一釣臺等持候者、法皮爲著可申事、

右之通、仙石治兵衛於宅同役寄合申合候、以上、

元文五申年八月廿日　戸川内藏助
仙石治兵衛〇以上二人使番、中略、

一寬政三亥年五月七日、於桔梗之間、安藤對馬守殿詰番堀三左衛門江被仰渡候之趣、各方當御番之節、菊之間江相休候事ニ候處、折節部屋江休候事も有之由、已來者前々之通、菊之間江可相休候、

〔大猷院殿御實紀二十二〕寬永十年正月十八日、土圭間番履物持五隊に分ちて宿直すべしと命せらる、

〔嚴有院殿御實紀二〕慶安四年十二月八日、二丸番屬吏のみつかふまつりしが、今日よりして、官長も宿直す、

〔嚴有院殿御實紀四十一〕寬文十年七月廿二日、中奧小姓小出彌三郞守里、渡邊半七郞綱高、船越百助景通、朝岡權三郞直國、松平半十郞勝郷、柳生又右衛門宗在、いまよりのち、三番に分て中奧へ宿直すべしと命せらる、

〔文昭院殿御實紀二〕寶永六年四月廿六日、中奧番二人づゝ、本城山吹の間に宿直すべしと仰付ら

る、

〔有徳院殿御實紀三〕享保元年九月五日、目付これまで本城に宿直するもの四人の定限なりしが、このゝちは二人宿直すべしと仰下さる、

〔有徳院殿御實紀五〕享保二年七月廿日、目付の輩に令せらるゝは、今より後目付毎日四人本城に宿直すべし、一人は二丸に晝夜あるべし、一人は西城に直すべし、二丸に渡らせ給ふか、また長福君〇徳川家重本城にのぼらせ給ふとき一人供奉すべし、たゞし長福君渡らせ給ふときは本城上直の中より供奉すべし、

〔吾妻鏡二〕治承五年〇養和元年四月七日壬子、御家人等中、撰殊達弓箭之者、亦無御隔心之輩、每夜可候于御寢所之近邊之由被定云云、

江間四郎　下河邊庄司行平　結城七郎朝光　和田次郎義茂　梶原源太景季
宇佐美平次實政　榛谷四郎重朝　葛西三郎清重　三浦十郎義連　千葉太郎胤正
八田太郎知重

〔吾妻鏡九〕文治五年八月九日丙申、親能猶子左近將監能直者、當時爲殊近仕、常候御座右、而親能兼日招宮六傔仗國平談云、今度能直赴戰場之初也、汝加扶持、可令合戰者、仍國平固守其約、去夜潛推參二品〇源頼朝御寢所邊、喚出能直、〇上略相具之、越阿津賀志山攻戰之間、討取佐藤三郎秀員父子〇國衡郎等畢、

〔吏徵別錄上〕御側衆
承應二年癸巳九月十八日、久世大和守、〇小性組番頭牧野佐渡守、〇書院番頭内藤出雲守土屋但馬守、〇以上二人連小性組番頭只今迄之御番頭御免、御前へ晝夜相詰候樣被命、四人之内一人宛、御次の間に泊番勤む、此爲御側衆始、

〔白石紳書下〕一嚴有院殿〇徳川家綱の御代の比までは、御座の間の下の間の次に、今もあゑ九尺に二間の間を九疊敷といひて、其次の間の襖障子を開けば、則今の桐の間といふ所に、今も有る夕顔の板戸たちし椽がはに、毎日老中は伺候せられし也、〇中略其頃は御側衆と申も只三人ありて、一人ヅヽかの九疊敷に伏して宿直せられき、今壹人は巳の時に出仕し、今一人は午の時に出仕せし人宿直す、

隔夜宿直

〔嚴有院殿御實紀一〕慶安四年四月廿八日、今夜より松平伊豆守信綱、阿部豐後守忠秋、日をへだてゝ宿直すべしと命せらる、

臨時宿直

〔嚴有院殿御實紀二〕慶安四年十二月廿七日、今夜節分によて、西城に御止宿あり、酒井讃岐守忠勝はじめ、老臣西に宿直す、よて本城は松平伊豆守信綱、二丸は内藤志摩守忠重留守命せらる、

免宿直

〔大猷院殿御實紀二十一〕寛永九年十一月五日、小姓島田刑部少輔直次、花畠書院番兩番士三十人をはじめて進物番とせられ、宿直をゆるされ、三番にさだめ、日々營中に伺公せしめらる、

〔有德院殿御實紀二〕享保元年七月九日、致仕醫員井關玄悦祐甫、さきに多病にて隱居せしかど、快により奥醫に起復して尙藥命せられ、常の宿直をばゆるされ、時々出仕すべしとなり、醫員岡道溪壽詮、月光院殿〇德川家繼實母後閤の宿直をゆるされ、これも時々いでゝつかふまつれとなり、河野良以通休、あまねく療養を施すにより、おなじく宿直を許され、めさるゝときのみ出仕すべしとなり、十九日、けふより二丸に火消役の宿直することをゆるされ、又同所張番をも廢せられ小普請にいれらる、

賜酒食

〔大猷院殿御實紀二十〕寛永九年八月晦日、この夜宿直のともがらに饗膳を賜ふ、

〔有德院殿御實紀一〕享保元年六月廿日、上直の群臣にたまはる厨膳の制を定めらる、獻の間、一の間、二の間は、故事のごとく一汁五菜、三の間は一汁四菜、四の間は一汁一菜、評定所にては、上二汁

五楽下一汁五菜にかぎるべしとぞ、又厨膳たまはる諸臣に、日々酒をも下さるべし、其制限は、宿老少老御側は、杯三巡に限るべし、献の間、一の間、二の間、三の間縁頬にいづる者には、朝夕二巡づつ賜はるべし、評定所式日立會の時も、二巡たるべし、四の間は、歳首五節慶會の時のみ、朝夕二巡たまはるべし、賜酒の時は、賄頭はさらなり、臺所目付酒役の者等は、よく〳〵査撿して、杯數を踰ざるやうあつかふべし、これはこたびの新制なり、

行賞

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年十二月五日戊午、北條武衛自前武州令拜領一村給、是御所中宿直祗候事、勤厚之故云云、凡前武州現所勞之外、毎月六箇日夜當番、自壯年于今所令致勤節給也、

處罰

〔吾妻鏡 二十〕建暦二年六月七日辛巳、丑剋於御所侍所宿直田舍侍、起鬪亂、即時死者二人、刃傷者二人也、鎌倉中鼓騷、御家人等馳參、佐々木五郎搦進之、和田左衛門尉率數輩子孫僕從等令參入搜求與黨之處、糺斷其罪違也、　八日壬午、其夜鬪亂者、宿直之間、起於枕相論刃傷二人者、伊達四郎、萩生右馬允等也、死者兩方郎從也、今日各配流、伊達佐渡國、萩生日向國云云、御所中狼藉、殊依有其咎及急速沙汰云云、

〔日用集〕慶長二年十二月十日、予〇前水兄赴伏見、今日有節和尙亦被赴伏見、一昨日献、醫者衆五員御折檻也、竹田、驢庵、祐乘、盛方、祐庵、今度太閤〇豐臣秀吉御病中晝夜欠番之咎也、

〔文昭院殿御實紀 五〕寶永七年三月九日、目付平岡市右衛門資明、加藤右近明敎、牧野傳藏成隣、朽木五左衛門定盛、昨夜宿直の折から過失ありて、御前をとゞめらる、

〇按ズルニ、處罰ノ事ハ、出仕篇出仕制條ヲ參看スベシ、

宿直闕罪

〔吾妻鏡 八〕文治四年八月廿三日丙戌、波多野五郎義景與岡崎四郎義實、於御前遂對決、是相摸國波多野本庄北方者義景、累代相承所領也、而稱在京之隙、義實望申之、歸參之後義景申云、當所者保延三年正月廿日、祖父筑後權守遠茂、讓與二男義通云云、〇中略御成敗云、當所進退宜任義景意、義實造

意尤不當也、依其科百箇日之間、勤仕鶴岡幷勝長壽院等之宿直云云、

〔義貞記〕一事公用意事

一御宿直事、百日ノ非番ヲ勤タリ共、一日ノ當番闕如アラバ不法ノ儀ナルベシ、但雖去事ニテ酒醉タラン時ハ、當番ナリトモ莫參勤、千日ノ闕如ハ價事有共、一度ノ不覺ニハ長夕證途ヲ失フベシ、去バ御宿直ノ時ハ、努々打解テ寐ル事ナカレ、眠ニ不堪時ハ恥辱ノ出來ラン相ト思ベシ、恥ト眠ヲバ爭可比之哉、

休假

鎌倉幕府及ビ足利幕府ニ於ケル休假ノ制ハ、詳ナラザレド、總テ幕府ノ許可ヲ得ルニ非ザレバ、他ノ地方ニ出ヅルコトヲ得ズ、而シテ其期日ノ數日以上ニ涉ルモノハ、之ヲ日數ノ暇ト云ヘリ、德川幕府ニ在リテハ、常假ハ事務ノ繁閑ニ由リテ一定セザレドモ、日勤ノ職ニ在リタハ、一箇月ニ或ハ兩三日、或ハ四五日ノ休假ヲ與ヘ、疾病ニテ不參ノモノハ缺勤十二箇月以上ニ涉ルトキハ、小普請役ニ入レ、看病ノ爲ニ假ヲ請フモノハ、父母妻子等ニ限リテ之ヲ許シ、墓參ノ爲ニ假ヲ請フモノハ、距離ノ遠近ニヨリテ、一代一度、或ハ數回之ヲ許シ、領地ニ赴カントスルモノモ、其距離ノ遠近ニヨリテ、度數ヲ定メタリ、又家族及ビ近隣ニ、疱瘡麻疹等ノ流行病アルトキハ、遠慮ト稱シ、數日ノ間出仕スルコトヲ得ズ、

〔大內家壁書〕身暇日數之事

在山口衆之內、少分限之仁事、年中百ケ日可給身暇由被相定畢、但隨當用不時之儀可被任申請旨事常之篇也、然處不申上御暇、以密々或歸宅或他行、有造上聞事者、十箇日に壹貫文爲過怠可被掠

仕也、百箇日者可ㇾ爲拾貫文、若此御成敗至ㇾ難澀之族ㇾ者、可ㇾ被ㇾ沒收恩給地也、仍壁書如ㇾ件、

文明十七年十二月廿六日

〔有德院殿御實紀 四〕享保二年三月廿一日、火消役故事のごとく、四月朔日より八月にいたるまで、三日をへだて休息すべしと命せらる、

〔諸實備忘記 上〕享保八卯年御勘定所勤方之部

一御勘定組頭、御用透見合、壹ヶ月二三日、御勘定一ヶ月四五日相休候樣被ㇾ致可ㇾ然事、○中略

御勘定所勤方之儀ニ付御書付○中略

御勘定奉行ゟ組頭江相渡候書付

御勘定所勤方之覺○中略

一各儀、御用透見合、一ヶ月三日宛可ㇾ有ㇾ在宿ㇾ候、其節ハ勿論、御用ニ而在宿有ㇾ之節も、前日可ㇾ被ㇾ申聞ㇾ候、

一御勘定衆在宿之儀、内寄合日共ニ、壹ヶ月五日之積、人數割合、在宿候樣可ㇾ被ㇾ致候、勿論御用差湊候節ハ、休日相止可ㇾ被ㇾ申候、

但在宿幷煩等有ㇾ之候分、人別書付、一ヶ月に一度づゝ可ㇾ被ㇾ差上ㇾ候、○中略

右ハ此度御勘定所勤方之儀相改、水野和泉守○中略者書付を以被ㇾ申渡ㇾ候に付、猶又委細可ㇾ有ㇾ吟味ㇾ趣如ㇾ斯候間、可ㇾ有ㇾ其心得ㇾ候、○中略

卯八月

〔德川禁令考 三十二 京都〕明曆二申年四月一日

二條在番中條目

定○中略

一二條殘候人替、江戸江參著被致、翌日より五日休、役儀請取可被申候、被上候衆ハ、江戸にて休十五日、上著被致上方にて之休日五日ニ相定之事、

〔御當家令條二十四〕覺

一二條大坂御番ニ被登候衆道中ハ不及申、二條大坂江參著候共、御城中入替之日限前ニ被致病死候ば江戸江申越人代を登せ申べく候、御城内江入候而被相果候衆、代人を出し申間敷候、但組頭衆之内、右之樣子ニ候とも、是ハ役人ニ候間不及代人事、

附、路銀之差引一日路成とも被出候ハヽ、代人江不及差引候、江戸ニ而被果候ハヽ、代人ニ路銀渡可被申、右代人ニ被參候者五十日休候事、

萬治二年四月廿七日

〔德川禁令考二十七〕寬文七未年三月

御番衆諸向勤方之覺

覺○中略

一日光江被爲成御供之衆休候事、四月朔日より御番始申筈事、○中略

一遠國江御使被參候衆之休、參著明日より之事、○中略

一御預之仁死去之時分、撿使ニ被參候衆休事、五日路より遠所江參候者、休之日限十日、五日より近所江參候者、五日之日數休之事

〔舊經錄仁〕上使歸　參勤　病後　忌明　御番入之事

一遠國上使、歸著、御目見相濟候日ゟ御番一順廻り申候而出番之事、

例

元文二巳八月、淸涼院樣三十回御忌ニ付、紀州江御名代松平伊賀守罷越、八月廿三日歸府、同廿

四日御目見相濟、同廿九日出番、

定省假

〔武家嚴制錄〕一女院御所御條目

條々〇中略

一らく中におやきやうだいこれある女は、日がへりにいとまを正五九月出すべき事、〇中略

右のむねをかたくあひ守べし、つぶさなる事は、ほふ書に仰出さるゝもの也、

寛永三年十月四日

御黒印

病假

〔官中秘策〕二十三病氣斷之事

一五節句式日其外登城前、晩者未の刻より酉の刻迄之内、病氣ニ付明幾日登城不仕旨、御用番迄御斷申上候、口上書認持參夜中より病氣は、當日之早天に御斷申上候、每度年寄へ爲御知有之、無之もあり、

〔幕朝故事談〕公方家

御小性御小納戸衆、病氣誓紙は、若年寄御側衆の充所、

〔白石紳書〕下一大猷公〇德川家光の時、誰歟御小姓衆御番忘れしを御尋にて、急病の由申、さらば誓紙させよと有しかば誓紙さすべしとの時、板倉防州のむこなりしが、誓紙有べからず、眞直に言上し給へと申切る、其所へ猿樂頭出て、尤にて候とて、御前へ出て昨日何某登城の時、某が所へより候て、今暫し語り候へと申うちに、御門〆りて某かたに居候ひしと申せしかば、夫ならば登城は之たり、よし／＼と仰られて事すみしと也、按るに此頃迄は、酒井は今の二ノ丸に住居したりき、

〔憲教類典〕三ノ十四病氣慶安五壬辰年

御番衆煩之時、組頭より斷狀、猶々御供番に可罷出體に御座候はゞ、御左右可申上候、以上、

一筆致啓上候、私儀明日之御番に可罷出候得共、何煩氣にて、本日之處御番可相勤體に無御座候間、御斷申入候、氣色本復次第、勤番可仕候、恐惶謹言、〇中略

慶安五壬辰年

長病にて小普請出候事

一長病小普請に出し申候儀、十二月皆煩、未だ御番難罷成體に候はゞ、小普請出し可申候、但皆煩にても、十三ヶ月より氣色よく、自今以後御番可相勤體に候はゞ、出し申間敷事、

一時々御番に罷出候節々相煩候はゞ、三年之御番相改、三分一より上之煩に候はゞ、四年目に小普請に出し可申事、

一病者に候まゝ、小普請に入申度由被申候はゞ、樣子承、其上以誓紙小普請出し可申事、

一小普請出し申候以後、被致養生本復に候間、元組江入御番仕度由被申候はゞ、御老中江申達御番に入可申事、

一病後御番計相勤、御供番斷之衆、五ヶ月過候はゞ、爲致誓紙候樣に可申渡候事、

〔德川禁令考後聚二注家事〕明和五子年十一月十二日

病氣中式日立合日江不致出座儀申合書

評定所一座

一式日又者立合之日、病氣ニ付不致出座候得者、注進狀端書ニ其段認候事故、出勤致し候得者、町奉行御勘定奉行者、出勤御屆申上來候處、寺社奉行ニ而者、式日ニ而も立合に而も、一度病氣ニ而不致出座、翌日出勤いたし候得者、不及御屆ニ罷出、たとへば二日四日兩度共病氣ニ而不致出座、五日ニ出勤致し候得者、御屆申上候仕來ニ付、以來町奉行御勘定奉行ニ而も、式日立合之

內、一度病氣ニ付不致出座、翌日出勤致し候得者不及御屆積、

〔憲敎類典三ノ十四 病氣〕安永四乙未年二月廿日

病氣にて出勤難成節、幷致快氣出勤之節共、以來其度々御用番若年寄衆も御屆可有之候、尤御禮其外にて登城被致候節も、難罷出候はゞ、其段御屆可有之候、

右之趣、拙者より御達申候樣、石見守殿被仰渡候に付申達候、

二月　　水野要人

〔天保集成絲綸錄七十四〕天明八申年六月

御目付江

寄合衆之內、年頃ニ相成候而も、病氣之由ニ而御目見不相願面々も有之候、無據儀とは乍申、見合候も程之有之儀ニ候得ば、少も快候はゞ、早々相願可被申候、且又病氣ニ而年來引込、月次等不被致出仕面々も多分有之、如何之事ニ候、是以程合も有之儀ニ候、若又難治之症ニも候はゞ、了簡も可有之事候、右之趣、能々相心得、出精相勤候樣心掛可被申候、

右之段、寄々可被相達候、

〔德川禁令考十九 疾病忌服〕文久元辛酉年三月廿八日

病氣引込期限ノ達

諸向より申立候小普請ニ入候儀、御番方之面々ハ、別而十三ヶ月を限り相願候、十三ヶ月之分一兩月も病氣保養候はゞ、罷出相勤候儀、罷成候病氣ニ而も、其程ニ定有之候樣ニ而者、無是非願之儀申出候輩も可有之候間、頭支配方心得ニ而、十三ヶ月之外、五六ヶ月も保養候而出勤罷成候樣子ニ候ハヽ、見合願差出候樣ニ、向後可被心得候事、

右之通享保三年被仰出候處、近年右之月數より多く引込罷在候ものも有之幷內實者死候而

小普請入相願、病死屆延引いたし候類有之哉ニも粗相聞、如何之事ニ候、享保之度被仰出候者、實ニ病氣ニ而不得止事節之儀ニ有之、且又死去を押隱し、御宛行頂戴罷在候者、御後闇儀ニ而、先年御仕置被仰付候儀も有之、旁向後心得違無之樣可被致候、

右之趣、天保十二丑年相達置候處、兎角心得違之ものも有之哉ニ相聞、以之外之事ニ候、此以後布衣以上以下御役人御番方等、前々定之月數より多く引込罷在、又者病死屆等延引及ひ候もの有之ニ於てハ、急度御沙汰之品も可有之候條、遺失無之樣可被心得候、

右之通、向々江可被達候、

三月〇中略

文久二壬戌年九月二日

病氣幷產穢忌服屆方改正ノ達

是迄諸役人病氣引込之節、於御城申聞候向々有之候得共、產穢忌中者、以使者宅江相屆、病氣快產穢忌明出勤之節ハ、宅へ相越候仕來ニ候處、以來右之廉々者、總而於御城御同朋頭を以、申聞候樣可被致候、

但御清之節、產穢忌中相成候ハヽ、唯今迄之通可被心得候、

右之趣、向々江寄々可被相達置候事、

九月

病後御禮

〔官中秘策二十三〕病後御禮之事

一快氣之節、御年寄江御案内申自身罷越懸御目、御内意伺之、御用番へ罷越、懸御目、御禮之義奉願候、或者心易旗本衆を以、年寄へ御内意伺之、御差圖に任せ、嫡子は病後御禮之並承合、其通申上、その後御用番へ申上、明幾日何時登城、病後之御禮可申上旨、御連名之御切紙來候御請使者を以申

上候、當日刻限より以前登城、月代を剃、常服着、獻上箱肴先達留守居持參、御支關より上候、目錄無之、御禮相濟退出、御老中初如例等御禮參上、

〔幕制彙纂五〕一天明七未年二月八日、御用番鳥居丹波守〇忠意樣江御內伺御勝手江罷出、御用人江懸合候處、御受取被置、九日夕御呼出、御書面之趣にては、御病後御禮御願之筋と、御內御指圖有之、依之同十一日御對客江御出勤居、并御病後御禮願御直達にて、同十五日御病後御禮相濟候、

御內伺左之通

佐渡守〇秋月種穎義、去十二月朔日以前ゟ少々不快にて、十二月朔日登城御斷申上候處、追々快氣に付、同月廿五日出勤其節御用番樣江御直勤、直に歲暮御祝義迄勤被仕候處、翌廿六日御用召之節、又候不快にて名代差出夫ゟ今以出勤不仕候所、此節快方ニ付、一兩日中出勤之心得に御座候、去十二月朔日ゟの日數に仕候得者、來ル十日迄にて百日相成候間、十日前出勤仕候はゞ、病後之御禮願申上候に及申間敷哉、乍然登城ゟ登城迄之日數にて御座候得者、來ル十五日月次登城百日餘に相成候、去ル十二月廿六日、御用召登城御斷申上候ゟ之日數に仕候得者、來ル十五日登城も百日內御座候付、病後之御禮願有無、御內々相伺候、以上、

三月八日　秋月佐渡守家來　簗瀨斧右衞門

〔天保集成絲綸錄七十七〕文化五辰年六月

病氣百日內ニ而、其後忌中ニ相成、頌日數共百日ニ及候共、忌明出勤いたし候はゞ、御禮申上ニ不及候事、

一忌中前後共、病氣ニ而百日ニ及び候は、御禮可申上事、

一忌中ニ相成、忌明出勤無之病氣候はゞ、忌明より之頌日數を以、御禮可申上事、

右之趣、爲心得相達置候事、

請假赴溫泉

文化五辰年六月

書取

病氣御禮之儀、向後は頒百日內ニ而出勤致し候はゞ、御目通は無之候共、御禮ニ不及候、頒百日ニ及候はゞ、御禮可申上事、

右之趣、寄々可被相達置候事、

〔官中秘策二十三〕湯治御暇同歸府之事

一心得旗本衆を以、病氣に付何方之湯へ入湯仕度旨御年寄へ御內意奉伺之、任御差圖御用番へ同人參上申上候、何方へ極り入湯仕度旨御聞屆、御中ケ間中へも被仰談方御挨拶有之、追而御用番へ留守居被召呼、（病氣之品により當人御知）順之通湯治之御暇被下候、勝手次第可參旨被仰渡、御切紙御添相成相達候、爲御禮名代嫡子歟一門中を以、（病氣之品により自身參上）御老中より若年寄迄參上、三廻り迄は何方へも不及斷、其外日數入湯之時は、三廻り之日數と同以連書願申候、又此湯不相應、彼湯へ罷越度時同斷、此湯不相應之節は、彼湯へ入湯可仕旨、初願之節申上而可也、脇湯へ打越候節は、何方之湯へ今日打越候旨、以飛札申上、右之願年寄迄留守居罷越候上にて申上而可也、御番勤掛り候節は、月番之御留守居衆へ、以使者御斷申入候、發足之節年寄御用番案內申上、湯元より到著爲御禮使者御連書、（獻上物無之）外は口上計也、御出頭御連書、若年寄中各狀、其外之勤在所留守居同じ、歸府之節、病氣快は如例參府、自身御老中へ廻勤、重而御用番へ罷越、歸府之御禮之義奉伺之、不便之節者、卽刻使者を以案內申上、重而快氣之節、御用番へ罷越御禮之義奉伺之、明幾日何時登城箱肴を以、湯治歸之御禮可申上旨、御切紙來、御請使者遣之、當日刻限之已前登城、（常服中禮）留守居先達而獻上物持參、御玄關より上候、目錄無之、御禮相濟如例爲御禮參上以後、御老中出頭土產遣之、

〔幕朝故事談〕鄕士　侍御　侍中

奥の者は湯治願は御返し被成、思召を以被遣と云なり、表勤の者は勝手次第なり、○中略

諸侯

御旗本、熱海伊加保の湯治を致し候上にて、平愈不致候につき、有馬へ參り度と申でなければならぬなり、直に有馬へはならぬ事なり、

〔文昭院殿御實紀五〕寶永七年二月廿五日、奥にて猿樂あり、致仕大久保忠朝入道杢入、牧野成貞入道大夢、幷に老臣の嫡子等皆みることをゆるされ饗を給ふ、○中略又大夢は浴湯のいとま、幷領地に立よるべき御ゆるしあり、

請假赴領所

〔吾妻鏡十五〕建久六年七月十日壬辰、北條殿、江間殿被下伊豆國、是輕服之故也、又今度御上洛之間、供奉御家人等、多賜身暇之歸國云云、

〔大館常興日記〕天文九年正月十日、治部大輔今日伯州へ下向、知行星川庄事可申扱ために、日數暇お申詫下云々、來四五月之間に可令歸參云々、　十一年二月十三日、細播州分國泉州くるい候間、成敗の爲御暇被申下國之由、風聞有之、慥不存知之也、

〔憲敎類典二ノ九御番〕寛文二壬寅年四月八日

御番衆春秋知行所御暇之覺

一一日路有之知行所江は、御番間々二度も三度も可遣事、

一二日路三日路在之知行所江は、其番壹つかき可遣事、

但御番かき申事如何、御番間に參度と被申候衆は、二度も可遣事、御番欠參候衆有之候はゞ一人宛可遣之、但御番衆揃人多時分は、二人宛も可遣事、

〔憲敎類典二ノ九御番〕一御番合に參候衆は、一度に三人程可遣之、程遠く候とも、不叶子細など在之衆は、番頭、組頭、相談之上可遣事、

請假赴他所

朱書
右は年號月日無之候得ども、寛文之頃被仰出候御書付と被存候間、寛文之御書付へ認加置候、

〔德川禁令考卷二十七〕寛文七未年三月

御番衆諸向勤方之覺〇中略

一知行所江御暇之儀、如御定春秋兩度ニ遣可申事、

〔大館常興日記〕天文八年七月十八日、佐夜前方違仕候つきて、昨日一夜御暇を申、今朝八瀬へ令歸參云々、　十一年卯月廿七日、富森源介暇お申、宇治へ明日罷越候、明後日可歸來由申也、取次むこ千世也、　五月四日、奥山孫五郎明日在所のまつり候間、明日暇之事申之間、心へ候由申也、申次むこ千世也、　六日、奥山孫五郎及晩來、

〔幕制彙纂五〕一寛政三亥年七月、大目付樣ゟ御老中樣江御伺被成候處、同八月、御指圖相濟候御請書寫、

一遠方之神社等江參詣、幷下屋敷罷在候一類共方江罷越候義、心得區々ニ御座候間、他人ゟ承合候義御座候節、挨拶一同不仕義も可有御座と奉存候付、以來之義伺置候樣仕度、左ニ申上候、

一明和二酉年、別紙之通、御書付を以被仰渡候處、江戶內外之處、是迄と申場相知兼候義故、心得區區ニ相成候、差當引當可申御定も相見へ不申候、依之凡御曲輪內ゟ四里內外之處、江戶內之心得ニ而、御屆ニ不及罷越候樣可仕候哉、

但右里數之內ニ而も、船渡御座候場所者、御屆申上罷越候樣可仕候、尤里數ゟ相延候場所者、江戶外と相心得、御書付之通、相願罷越候心得ニ御座候、

右之通奉伺候、以上、

七月　大目付

御請書左之通

書面右里數之内ニ而も、御關所有之場所、船渡等有之所者御屆申上、其外伺之通、相心得可申旨、

被仰渡奉承知候、

八月十一日　　桑原伊豫守

　　　　　　　中川勘三郎

一寛政十午年七月廿八日、大目付松浦越前守樣江差出候處、御用人三浦東兵衛を以被仰出候者、是迄萬石以上之御方樣、右樣之御規式之義も無御座候ニ付、御用番太田備中守樣江被相伺、御掛圖を以被及御挨拶候旨被申聞候由、左之通、

一遠方之神社寺院江致參詣候義、大凡御曲輪内ゟ四里内外之處、江戸内と相心得罷在候、尤右里數ニ而も、御關所又者船場有之場所者、致遠慮候心得ニ御座候、

御附札「書面之通、可相心得候、

一江戸外ニ而も、卽日立歸ニ相成候場所、罷越候而も不苦可有御座候哉、

御附札「書面之通者、御願之上、御越之義と存候、○中略

一寛政六寅年三月、御用番安藤對馬守樣江、子年之例を以、御屆被申上、參詣被致候事、諸事先格之通、

口上覺

武州橘樹郡川崎領大師河原江、今日相越候、六郷川船渡も御座候事故、此段御屆申上候、以上、

三月十日　　有馬左兵衛佐

右之通、被差出候處、御承知被成候旨、被仰出之外、取計向無之、

〔教令類纂初集四十一〕寛文八戊申年二月廿日

看病假

一御番衆江申渡覺

一御番衆一組三分一、三月朔日ゟ一年爲休可申事、○中略

一當年休候類火ニ逢候衆之內、差替申度と申人候はゞ、其子細承屆望可叶事、○中略

番頭自分之覺

一無足衆者類火ニ逢候とも、休み申間敷事、○中略

寬文八申年二月廿日

〔的例問答二〕類燒休日取之事

文化八未年閏二月七日、表御右筆衆ゟ御目付衆江類燒休三十日は類燒之日ゟ三十日は取宜候哉之旨問合候處、左之通ニて宜旨答有よし、

〔武家嚴制錄一〕女院御所女中御下知條々

定○中略

一親子兄弟煩候時の事、大事に及候時は出すべき事、

右此旨を相守らるべし、仍而執達如件、

寬永三年十月五日

信濃守在判 ○以下三名略

〔憲教類典三ノ十四 病氣〕正保三丙戌年九月朔日

親子妻

右之族煩にて斷於有之は、縱御夜詰過候共、宿所江出可被申事、

戌九月朔日

〔德川禁令考二十 番七〕寬文四辰年十二月十四日

火事幷病者有之時之覺○中略

親類煩にて御番斷覺

親子　兄弟　祖父　祖母　孫　甥　姪　舅　妻

右之分、煩大切にて、別に親子兄弟も無レ之病人に而候はゞ、御番所出し可レ申候、其内親子は格別之事、

以上

〔憲教類典 三ノ十四 病氣〕寛保二壬戌年七月廿九日

西尾隱岐守殿御渡

看病斷之義、父母妻子之外は、斷不二相立一候乍、然兄弟姉妹伯叔父母、其外近續之者も無レ之族には、其節相達候上之義たるべく候、

右之趣、寄々可二相達一候、最西丸御目付へも可レ有二通達一候、

七月

〔的例問答 二〕父母之外看病斷之事

文化十四丑年九月、御使番大草主膳ゟ問合答之趣、

祖父母之看病相成候哉、内藤隼人正江問合候處、寛政二戌年御申付之通、父母妻子之外は難二相成一乍、併外ニ看病致候もの無レ之候得ば、願之上可二相成一外ニ無レ之哉被レ尋候處、右看病斷候者之妻子も有レ之候旨申候得ば、外ニ看病人無レ之とは難レ申候間、難レ成旨隼人正被レ申候由、

〔幕朝故事談〕諸侯

忌中にて引込候と、父母の看病引とにて引候分は、皆勤の御褒美被レ下之、律には不二相成一候、父母の看病引は十日也、妻の看病引も十日なり、是は皆勤の筋に不二相立一也、御小姓衆にても、父母妻の看病引十日は相叶なり、然共皆大方は死する程の大病でなければ不レ願也、

〔後有院殿御實紀五十九〕延寶七年十月五日、駿府定番天方主馬供通大病により、その子小姓組三郞兵衞致通看侍のいとまたまふ、廿一日、相馬出羽守貞胤大病により弟東采女昌胤看侍のいとま下さる、願によりてなり、

〔文昭院殿御實紀二〕寶永六年四月十三日、本多能登守忠常封地にて大病により、その子信濃守忠直、こふま丶に看侍のいとま下されて、醫員河野松庵通休に治療のこと命せらる、

〔幕儀彙纂五〕一天明三癸卯年七月九日、大坂御加番中、御養父能登守様御病氣、從大坂表急飛脚を以被差越候、然處最早御死去に候得共、差越候を其儘差置も如何に付、御用番田沼主殿頭様御勝手にて、御用人中迄、家來名之書附添差出候、

養父能登守、先月廿七日ゟ中暑に相障候て、追々申越、其後草臥强、食事も減、大切に相煩候段、以飛脚申越、承知仕候、依之出府看病之義奉願度奉存候得共、右樣之義にて、御加番中相願候義は難相成奉存候得共、遠國に罷在重き容體承知仕候ては、安心不仕、誠に當惑仕候、若御賢慮之上、可相成筋も可有御座候哉、内々奉伺度、此段申上候、以上、

七月四日大坂日付

松平河内守

右者、追て御呼出、右御内伺之趣、御同列樣御一覽被成候處、〔言〕尤之義思召候、御書付御落手被置候由、〇中略

一天明五巳年、御用番水野出羽守樣江御伺、

當六月在所江之御暇被下置候以後、病氣に付奉願滯府仕罷在候、然所雲巖島中屋敷に住居仕候養祖母義、久々病氣に罷在候處、老年之義無覺束體に御座候、依之乍病中、此節可相成義御座候ば、押て罷越對面仕、樣子次第止宿仕度奉存候、此段奉伺候、以上、

八月廿七日

朽木伊豫守

右同日夕御附札にて、伺之通御指圖相濟、

別紙

靈巖島中屋敷に罷在候、養祖母義は實方養母に御座候、私幼年ゟ相養厚恩罷成候義故、本書之通奉伺候、此段申上候以上、

八月廿七日　朽木伊豫守

〔大館常興日記〕天文九年十月八日、細川豆州より各へ折紙在之、防州に候老母、去月被過候間、日數之暇を申候、可預御心得候由也、

喪假

〔官中秘策二十三〕忌中斷之事

一誰死去忌幾日何月何日迄服幾月迄書付、御用番へ使者を以御斷申上候、年寄も爲御知申上、出仕日前晚、忌中登城不仕候旨、同前御斷申上、妻服之親類死去穢之樣子書付差出也、御門番棒振之御成之節相番人御成還御之御機嫌窺不勤候、御成之節、屋敷縣ヶ戶仕、手桶挑灯不出候、忌明之前日御年寄へ使者を以、今日迄忌明朝より忌明キ申候、罷出可申哉御內意奉伺之、任御差圖、忌明候朝月代剃御用番へ罷越候、外之御老中へ罷越も可也、三節句獻上物者、忌中は差上不申候、御用番迄御斷申上候、例月之獻上物斷無之差扣、忌明上ゲ申候

○按ズルニ、喪假ノ事ハ、禮式部服紀篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

忌日假

〔武家嚴制錄一〕中宮御所女中御下知條々

定

一女中上下共に、親の正忌日には、御所中を出、下やしきに可在之事、○中略

右此旨をあい守らるべし、仍而執達如件、

寬永三年十月五日、　信濃守在判○以下人名略

掃墓假

〔憲敎類典三ノ十五服忌〕寶曆十一辛巳年六月三日

攝津守殿御渡

先祖之年回等ニ付、江戸之外菩提所參詣之儀、近例は無之候得ども、向後右之通之儀相願候者も有之候ば、其身一代に一度は可相濟候、

右之趣、頭支配之面々江寄々可被達置候、

六月三日

明和二乙酉年二月十日

信濃守殿御渡

先祖之年回等に付、江戸之外菩提所江參詣之儀相願候者も有之候はゞ、其身一代に一度は可相濟旨、先達而江戸之外にても立歸之場所は、其身一代一度に不限、年忌等之節に參詣致度旨相願候はゞ、是又可相濟候、

但江戸之外立歸にて無之場所は、先達而相達候通に候、

右之趣、頭支配之面々江寄々可被達置候、

疾病遠慮

〔憲敎類典三ノ十四病氣〕慶安三庚寅年十月四日

疱瘡麻疹數いも遠慮之覺

一手前に抱置候孫子親類、疱瘡數いも相煩候に付て、三度湯かけ候ば、御番に出し可申候、組屋敷之内を借り罷在候親類緣者右之煩有之時、構を仕切居住候はゞ不苦御番に出可申候事、

一自身疱瘡相煩候はゞ相見へ候日より七十五日過候はゞ、御番可出事、

御目見之者、百日除候事、

一自身疹數いも相煩候はゞ見へ候日より三十五日過候はゞ、御番に出可申事、

御目見之者は、七十五日除申候事、
一疱疹相煩候看病人、見へ候日より五十日御目見不レ仕候に付、御供番、右之日數除候事、勿論當番之節御目見不レ仕事、
一疹計いも相煩候看病人、見へ候日より三十五日御目見不レ仕候付て、御供番、右之日數除候事、勿論當番之節御目見不レ仕候、
慶安三年十月四日
〔德川禁令考二十七〕寛文七未年三月
御番衆諸向勤方之覺
覺〇中略
一自身疱瘡之時、日數七十五日過可二罷出一事、
〔享保集成絲綸錄十七〕延寶八申年十一月
疱瘡疹水痘遠慮之事
疱瘡
一病人は見候日より三十五日過候而罷出、御目見仕候、
一看病人は三番湯懸、罷出御目見仕候、
一病人果候ば、看病人忌明候而罷出、御目見仕候、
疹
一病人は三番湯懸、罷出御目見仕候、
一看病人同斷
一病人果候時は、疱瘡同斷、

水痘

一疹と同前

右は御側之面々計、外樣之輩は御構無之候、以上、

十一月〇中略

寶永七寅年正月

疱瘡麻疹

右相煩候者、御側向、幷奥向、其外御廣敷向へ相詰候面々、七十五日過罷出可相勤候、右看病人は、三番湯懸り候以後、罷出可相勤候、

水痘

右相煩候者、御側向幷奥向、其外御廣敷向へ相詰候面々、三番湯懸り候以後、罷出可相勤候、右看病人ハ、病人一番湯懸り候以後、罷出可相勤候、

一疱瘡麻疹水痘病人有之ば、同屋敷之内ニ而相煩候共居處を隔候而病人一切見不申候はゞ、差扣候ニ不及候事、

一右相煩候面々より、獻上物仕候儀、三番湯懸候以後は不苦候事

一若君樣方へ相勤候御醫師、疱瘡麻疹水痘相煩候者方へ見廻候儀、可爲無用候事、

右之外、表向は子八月極り候書付之通り、可被相心得候、以上、

正月〇中略

享保元申年八月

疱瘡麻疹水痘病人看病人、二丸長福樣〇德川家重幼名御座所へ不罷出品、〇中略

一御醫師疱瘡水痘之病家へ見廻療治仕候はゞ、當日は御目見遠慮、翌日ゟ不及遠慮、

右之通、二丸長薙様御座所へ遠慮可仕候、且又御本丸之儀は不及遠慮、

但長薙様御本丸へ被為入候節、御目通へは、御定之日數之通不可能出候、

八月

〔幕儀類纂二〕一寛政六寅年正月廿三日、御用番戸田采女正様江伺、翌廿四日御附札、

私伯母本多伊豫守妻、従此間私方江逗留仕候處、疱瘡相煩申候、依之西丸詰番之外登城之儀如何可仕候哉、尤看病は不仕候得共棟續御座候間、此段奉伺候、以上、

正月廿三日　　土井大炊頭

御附札　詰番之儀は不及遠慮候、出仕之儀は、三番湯相濟候迄可在遠慮候、

三分一休

〔椽下録〕一御番衆三分一休（是は御番衆五十人を三ッ割十七人、壹ヶ年宛休申候、人馬をへらし音信贈答不仕候間、殊之外勝手に罷成候、何卒手細候へば、續き休拵も、頭の心入にて申付候、御番衆之甚勝手に罷成、知行近き者は知行所に參休息仕候、拖屋敷など有之者は、屋敷江引込候間、別て勝手に相成申候、）

〔官中秘策九〕御番頭之次第

一大御番頭　二御書院番頭　三御小姓組番頭　四新御番頭　五小十人頭

同組頭之次第

一御書院御小姓組頭　二新番組頭　三大御番組頭　四小十人組頭

一御小姓組（御花畑とも云）　二御書院番　三新御番　四大御番　五小十人

右兩番之面々三分一も可爲休息旨、寛文八年二月被仰付、新御番小十人も、同十二年二月、右之通被仰付、

〔就令類纂初集四十〕寛文八戊申年二月廿日

御番衆江申渡覺

一御番衆一組三分一、三月朔日ゟ一年爲休可申事、
一休之内は番頭組頭江付届無用之事、若自然之用所之時は可爲格別事、
一御番休被申内は、大火事出來候共、番頭宅江人を付置被申事、可爲無用事、〇中略
一休之内湯治御暇之儀被申候は、日數常之如く、但斷之樣子により、五廻り六廻りも、又は再篇も遣可申事、

申二月廿日

寛文八戊申年二月廿日

知行所江參候ニ相極候時之覺

一休之内知行所より江戶江被參候者、早速案内組頭方江可被申候、又知行所江歸り被申刻も案内可被申事、
一知行所江は、逗留之内に見積り、知行之爲ニ罷成候普請等被申付候はゞ、外々之百姓むさと不召仕、いたまざる樣ニ用捨可有之事、
一休之内知行所ニ在之、其所より湯治被致度仁、番頭組頭江斷被申越、差圖次第可被仕、但常々之如く五廻りも六廻りも、又者再篇も遣可申事、

番頭自分之覺〇中略

一自分知行、親兄弟之知行、妻子引越度と被申候とも、遣し申間敷事、
一當年休被申御番衆は、類火に逢被申衆、三分一より多候共、翌年江闕取ニ而くりこし遣し可申事、乍去一兩人多分は當年休之内江入、類火に逢、當年休之人數三分一より少くは、休内ニ而闕取仕度可申事、
一申之年は、休之刻先條之趣は用可申事、

一酉之年は申之年之殘ニ、知行取御切米取闕取ニ而一所ニ分、其内ニ而戊之休闕ニ而可相極事

一無足衆は酉之事御切米被下候分者、戊之年休せ可申事、知行取御切米取打込三分一人數多候共、二三人之分者休候方江付可申事、

寛文八申年二月廿日

〔憲教類典二ノ九御番〕寛文九己酉年三月三日

御番衆三分一休之儀、親子一度被休候事無用ニ可仕旨、御老中被仰付定書、

一當酉之年、親子一度に休候ゆへは、親夜廻進物御番に候はゞ、親休子御番相勤候樣に可仕事、

一子無足にて、戊之年休候衆之親は、夜廻にても當酉年休せ可申事、親子ともに夜廻り進物番にても無之衆は、親子勝手次第休被申候樣に可仕事、

一休之人數、其年之勤番之人數より不同有之候て不苦事、

一親方與方之組勤之人數多かた之組にて休せ可申事、

寛文九年酉三月三日○中略

元祿三庚午年二月十九日

覺

一御番衆三分一之休、向後相止、此以前之通、常勤可仕之旨、上意之趣於殿中老中列座、大御番頭、御書院番頭、御小性組番頭、新御番頭、小十人番頭江演達之、

元祿三年二月十九日

古事類苑

政治部六十

下編

戸籍上

戸籍ノ制、鎌倉足利兩幕府時代ニ在リテハ殆ド定リタル規定ナキモノヽ如ク、其材料甚ダ稀ナリ、降テ德川幕府ニ及ビ、其初世ニハ未ダ戸籍ノ制アラザリシカド、寛永中島原ノ役アリシ後、天主教ノ禁ヲ嚴ニシ、天下ノ士庶ヲ擧ゲテ、悉ク之ヲ佛敎ノ僧徒ニ委ネ、僧徒ヲシテ其檀徒ノ士庶ニ就キテ、異敎ニアラザルコトヲ證明セシム、之ヲ寺請證文ト云フ、而シテ當時又天下始テ平定シ、諸家ノ遺臣幷ニ大坂逃亡ノ士各地ニ潛伏シ、殊ニ慶安中、由井正雪ノ事アリシヨリ、幕府ハ大ニ浪士取締ノ必要ヲ生ジ、彼此相待テ漸ク戸口調査ノ端ヲ啓クニ至レリ、然レドモ其初ハ單ニ寺請證文ニ依リテ人別帳ヲ造ルノミニシテ、其人別帳モ極メテ疎漏ノモノナリシナラン、享保以降、幕府大ニ意ヲ戸口ノ事ニ注ギ、其十一年始テ全國ノ人口ヲ統計ス、實ニ男女合計二千六百五十餘萬人アリシト云フ、爾後若干年ヲ隔テ、屢〻此擧アリ、而シテ人別帳ノ事ハ、天和以來ノ制、略〻之ヲ徴スルヲ得ベシ、卽チ當時ハ毎月五人組ニテ之ヲ改メテ屆ケ出ヅルノ制ナリシガ、寛政以降、毎年二回ノ屆出トシ、且ツ其書式ヲ定メテ、毎町ニ人別臺帳、幷ニ出人別帳、入人別帳等ヲ備ヘ、定式ノ事項ヲ記入セシム、

勘當、久離ハ、子女ノ不良ナルモノニ對シテ、父母其他尊屬親ヨリ之ヲ追放スル私刑ニシテ、久離ハ、一ニ舊離ニ作ル、終身復歸ヲ聽サヾルヲ謂フナリ、共ニ其地ノ人別帳ヲ削ル、而シテ

勘當ハ鎌倉幕府時代ヨリ之アリ、義絶ハ、素ト肉親ニアラザル者ニ對シ、親族ノ義ヲ絶ツノ謂ナレド、鎌倉幕府以降ノ例ハ必シモ然ラズ、不通路ハ、互ニ相往來セザルノ謂ナリ、共ニ其由ヲ官ノ帳簿ニ記入スルモノトス、

逃亡ハ、德川幕府時代ニハ人別帳ヲ除キ、士分ニ在リテハ出奔ト云ヒ、平人ニ在リテハ欠落ト云ヒ、其衆人相共ニ逃亡スルヲ逃散ト云ヘリ、而シテ其事利財ニ出ヅレバ、重罪ヲ以テ問ハレ、其父兄親族ニ捜索ヲ命ゼラレ、且ツ其近親ハ連累ヲ免レズ、

浪人ハ士分以上ノ、其主ヲ失ヒテ祿俸ナキモノニテ、一種ノ無籍者ナリ、然レドモ人別改ノ行ハルヽニ及ビテハ、其居處ニ編貫シテ其地ノ住民ト爲セリ、

妻、及ビ連子ヲ離緣スレバ人別帳ヲ除カル、而シテ士分以上ハ幕府ノ許可ヲ經テ之ヲ行ヒ、其持參金ハ之ヲ返付ス、養子、養女モ亦然リ、其篇ニ詳ナリ

妾ハ奉公人ノ類ニシテ其人別ハ主人ニ屬シ、子ヲ生ムノ後ト雖モ、其子ニ對シテ母タルノ資格ナシ、

奴婢及ビ雜人ハ鎌倉足利幕府ノ時代ニ在リテハ、古來ノ習慣ニ從ヒテ、專ラ富家ニ使役セシモノニシテ、當時之ヲ賣買シ、若シクハ良民ヲ勾引シ、又ハ賣入シテ奴婢トナスコトハ、嚴ニ之ヲ禁斷セシモ、諸國往々此ニ從事スル商人アリテ、其禁容易ニ行ハレザリシモノヽ如シ、而シテ德川幕府時代ニ至リテハ、之ヲ禁ズルコト益、甚シ、然レドモ猶ホ或ハ子女ヲ賣買シ、又ハ質入シ、若シクハ女衒ナド稱スルモノアリテ、其賣買ヲ業トスルモノアリキ、

雇人ハ即チ出替奉公人ニテ、足利幕府時代以前ニモ之アレド、德川幕府ニ至リテ益、多ク行ハレ、其制度亦隨テ備ハレリ、出替奉公人ノ人別ハ、其奉公中ハ主家ノ人別ニ屬ス、奉公ノ年季ハ大抵半年若シクハ一年ニシテ、十年ヲ過グルヲ得ズ、之ヲ過ギテ永年ノ約束ヲ爲スハ、

人身賣買ノ據アリト爲シテ禁ゼラレタリ、雇人ハ請人ヲ要ス、請人ナキ雇人ヲ使用シテ、其雇人ニ惡事アルトキハ、却テ主人ノ過失ト爲ス、而シテ請人ニハ最モ嚴重ナル制裁ヲ加ヘ、雇人一切ノ責ニ任ゼシメ、雇人ノ欠落スルヤ、其主家ノ損害ノ如何ニ由リテハ、請人亦死ヲ免レザリキ、又請人ノ外ニ、人主ト下請人トアリ、共ニ雇人ノ身元ヲ保證スルモノナリ、此他人宿ハ雇人ヲ止宿セシメテ其周旋ヲ爲シ、且ツ多ク其請人トナルモノナリ、又素人宿ト云フモノアリ、素人ニシテ人宿ト同一ノ事ヲ爲スモノナリ、

鰥寡孤獨ハ、古代ハ戸籍上ニ之ヲ認メテ、憐恤ヲ加ヘシト雖モ、徳川幕府時代ハ更ニ此事ナク、學者或ハ之ヲ昭代ノ闕典ト爲セリ、サレドモ三子同生ノ如キハ之ヲ賞スルノ例アリキ、

〔天保集成絲綸錄 六十二〕寛政四子年閏二月

分知有之分

人別表紙之裏

去午年、人別帳差出候以後、何之年何之誰江何國何郡之内ニ而何程致分知候、

代替之分

一人別帳表紙名書之肩書ニ

去ル午年、父何之誰何役寄合何御番誰組小普請誰支配之節差出候、

支配代之分

一人別帳表紙名書之肩書ニ

去ル午年、何役何御番誰組小普請誰支配之節差出候、

右之譯有之分は、書面之通書入可被差出候、尤此段急度相觸候ニ者無之候、爲御心得申達候、以上、

閏二月　神保四郎左衛門〇目付

〔德川禁令考 六十 戸籍〕寛政八辰年四月

人別書上改正申渡幷書上書式

町々人別之儀、前々より度々町觸申渡等有之候處、末々ニ至リ候而ハ、別而不行屆、增減之改方不取締ニ而、徒者等も時々有之趣ニ相聞候、依之毎年四月町。年。寄。役。所。江。差。出。候。人。別。高。書。上。同月。名。主。方。江。取。置。候。人。別。帳、且又以來增減分月々相調候出。人。別。扣。帳、入。人。別。扣。帳、右四通リ雛形相渡、左之通申渡候間、向後入念可相改候、

一町年寄役所江人別高書出候儀、毎年四月入念巨細ニ相調、雛形之通帳面ニ仕立可差出候、

一人別帳之儀、是又同様巨細ニ相調、雛形之通帳面ニ仕立、印形揃、四月廿五日限リ、名主方江納置、尤此帳面之儀は、題帳ニ居置可申事、

一出人別帳入人別帳之儀ハ、四月より翌年三月迄之分、一回宛ニ手輕に半紙竪帳ニ拵、壹枚毎ニ名主押切割判致置、毎月廿五日より晦日迄之内、一町限月行事江申渡、家主共寄合、其月增之分は入人別帳江相記、生國、宗旨請人、家業も記し、家族召仕共ニ相記、印形取之、減之分ハ出人別帳ニ相記、右者家主一店限入念相調、增減無之節者、其斷書右帳面ニ相記、家主共印形爲致、翌月朔日を定日に定め、名主方江爲差出可申候、

一右之通、人別月々相改、店主ハ不及申、出居衆、懸リ人等、其渡世向相調可申候、家業體不見屆、又者人別外之者、決而等閑ニ差置申間敷候、若未熟にいたし置候歟、又者人別增減之出入調方等閑ニ相心得候家主ハ、名主方より地主江申談、早々家主爲取替可申候、幷家持ニ而直家守いたし候分ハ、名主より申立候共、其節違背無之段、證文名主方江取之、名主共入念相改可申候

一右之通家守共儀、町内朝暮心付、幷店々之者も其一店限、又者一地面限リ等ニも世話役相立、店中公私共ニ用辨いたし、萬端不取締之儀無之樣、名主共儀も一ケ月一兩度宛も、支配町裏々迄

相廻り見屆候樣ニ可致候、

但都而壹人暮之者、尼、老人、其外盲人等之者ハ、其家主にて格別可心付事ニ候得共、猶又隣家幷本人店世話役之者、一同心付可申候、

一右壹人暮之者、外出いたし候節者、家主江相屆、家主又者店内世話やき、或ハ隣家の者ニ宅火之元改貫相頼外出可致候、尤世話役之者家業ニ不相障樣、家主共勘辨いたし可申候、畢竟其店内ニ子細有之時ハ、相店之者共家業も相濟、迷惑致候儀ニ付、相互ニ篤と申合致和融、毎物行屆候樣可致候、

一家主共儀、多人數ニ而何れも小給に相當り、外渡世も有之ニ付、自然平生町用取締方不行屆趣も有之由ニ相聞候、申合打はまり可出情候、何れにも深切ニ心掛候上ハ、不行屆と申事ハ無之筈之儀ニ候、若又差支之筋等有之趣申候分は、其場所限可申立候、自己之我意等申拒、町入用等差支させ候者も有之候ハヽ、是又可申立候、調之上急度可及沙汰候、

附、町々書役共不取締之趣相聞候、畢竟町内ニ而給分相渡候上、名主方江請狀取之、町用乍仕不束之節ハ、組合名主相談之上取替、萬端未熟之儀無之樣可申合候、

右之通申渡可爲取計旨、從町御奉行所被仰渡候間、町々名主共篤と相心得、支配家持、家守地借、店借、厄介人、召仕等迄も、不洩樣申聞、向後未熟之儀無之樣可致候、若等閑之儀も相聞候ハヽ、急度被仰付候間、無違失相守可申候、

辰四月

人別高書上、每年四月町年寄役所江爲ニ書出可申案文、

人別高書上　何町

年號四月

公役之外、御國役等之分ハ、何御國役、又者御年貢地之譯、向後改爲ニ書出ニ可ﾚ申候、

一何町家數何百軒
　内　明店何軒
　　　公役何人役

一總人數何百何拾何人
　内

一男何百何拾人　但十六歳以上男何人
　　　　　　　　　十五歳以下男何人

一女何百何拾人　但十六歳以上女何人
　　　　　　　　　十五歳以下女何人

此譯
　家持　何人
　家守　何人
　地借　何人
　店借　何人
　父母妻子　何人
　但家持、家守、地借、店借共、
　掛り人　男何人
　　　　　女何人
　出居衆　男何人
　　　　　女何人
　召仕　男何人
　　　　女何人
木戸番人共

但

御當地出生　男何人　女何人

何國出生　男何人　女何人

右人數ニ洩候者無御座候、尤御支配違之者相除申候、以上、

年號四月

何町

月行事　誰印

名主　誰印

町年寄衆

御役所

支配限人別寄高

何番組何町

名主誰支配分

總人數何千何百何拾人

内

一男何千何百何拾人　但十六歳以上男何人　十五歳以下男何人

何番組

名主誰支配分

何町

何町

何町

一女何千何百何拾人　但十六歳以上女何人　十五歳以下女何人

此譯

家持　何人

家守　何人

地借　何人

店借　何人

父母妻子　何人

但家持、家守、地借、店借共、

懸リ人　男何人　女何人

出居衆　男何人　女何人

召仕　男何人　女何人

但

御當地出生　男何人　女何人

何國出生　男何人　女何人

右之通、別紙人別高書上何冊相添、此段申上候、以上

年號四月　名主　誰印

是迄毎年名主方江取置候人別帳案文

但以來帳面ハ其儘ニ据置、別段ニ新規出入帳相仕立、月々増減相記可レ申積、

人別帳

何町

何町

一生國何郡何村（何宗何所何寺 家守請人何町誰店誰）　家守　誰　歳　印

一生國御當地（宗旨寺右同斷）　妻　たれ　歳

一生國何國何郡何村（宗旨何所何寺）　家持　何家業　誰　歳　印

一生國御當地（宗旨寺右同斷）　妻　たれ　歳

一生國同斷（宗旨寺右同斷）　悴　誰　歳　印

一生國御當地（宗旨寺右同斷）　地借　何商賣　誰　歳　印

一生國（何國何郡何村 御當地）（何宗何所何寺 地請人何町誰店誰）　召仕　誰　歳　印

一生國、、（宗旨 請人）　何商賣　懸り人　親類名目　誰　歳　印

一生國、、（何宗）　店借　何商賣　誰　歳　印

一生國、、（何宗 店請人）　出居衆　何商賣　誰　歳　印

何宗請人

右之通、一ト地面限相調、合冊ニ仕可申候、

右何町一町

都合人數何百何拾何人　内男何百何拾何人　女何百何拾何人

拾六歲以上男　何百何拾何人

拾五歲以下男　何百何拾何人

但

拾六歲以上女　何百何拾何人

拾五歲以下女　何百何拾何人

此內譯

家持　何人

家守　何人

地借　何人

店借　何人

父母妻子　何人

但家持、家守、地借、店借共、

掛リ人　男何人　女何人

出居衆　男何人　女何人

召仕　男何人　女何人

〆何百何拾人

內

御當地出生　男何人　女何人

何國出生　男何人　女何人

何國出生　男何人　女何人

如此出生國分、以來爲書出可申候、

右之通、店々巨細ニ相改相違無之、勿論前書人別ニ洩候者壹人も無御座候、

一切支丹宗門之儀、博奕之儀、隠賣女之儀、嚴重相改、其外不見屆者ハ勿論、家業向無之不慥成者ハ等閑ニ不差置、店中人別外之者ハ不及申、請合人無之者、逗留不致樣致し、月々人別増減之分別帳面ニ不怠樣書出可申候、爲後日仍如件、

年號月日

何町　家主　誰　印

同　誰　印

同　誰　印

名主　誰殿

年號四月　此度新規ニ仕立可申帳面案文

出人別帳

何町

何町

長四月分

一此者何町誰店江引越申候　　誰店　誰

一此者暇遣し請人何町誰店誰方江引渡申候　　誰召仕　誰

一此者何町誰店誰方江縁付申候　　誰　誰店様　たれ

右之通、相違無之、其外出人別無御座候、以上、

辰五月朔日　　家主　誰印
　　　　　　　同　誰印
　　　　　　　同　誰印

名主
誰殿

辰五月分

一改方毎月右同断

右之通、月々相記、家主共印形為致可申候、

下ケ札

人別之儀、毎年三月町中相改、為書上、人別帳仕立、名主方江取置候儀ハ、仕来之通為仕、四月廿五日限、名主方江為差出、右之外、此道新規ニ出入帳等二冊相仕立、名主方ニ押切致置、店々人別増減改方之儀ハ、月々家主共入念相調、此帳面月末ニ至り、名主より月行事江相渡候ハヽ、家主共銘々店内増減扣持寄、如本文此帳面ニ相記、一町家主共不残致印形、翌月朔日を定日と定、名主方江差出置、如斯月々出入相改、四月改より翌年三月迄を一冊ニ綴、名主方江取置、尚又年々四月改置帳之儀ハ、仕来之通為取置可申候、

一辰六月分出入人別減無御座候、以上、

辰七月朔日　　家主　誰印

同　誰 印

同　誰 印

名主
誰殿

年號四月
此度新規ニ仕立可〆申候雛形案文

入人別帳

何町

何町

辰
四月分

何町誰店より引越來申候

一生國何國何郡何村　　誰店 何家業　誰 印 歳

何宗何所何寺
店請人何町誰店誰

生國、、　　妻　たれ

宗旨

生國、、　　悴　誰 印 歳

宗旨

生國、、　　召仕　誰 印 歳

宗旨
請人

何町誰方より娶申候

一生國、、　何宗　誰店誰妻　たれ歳

何町誰方より養子ニ引取申候

一生國、、　何宗　誰養子　誰印歳

何町誰店ニ罷在候處、出居衆ニ罷成申候、

一生國、、　何宗請人　何商賣　誰出居衆　誰印歳

何町誰店ニ罷在候處、店仕廻厄介ニ致候、

一生國、、　何宗　何商賣　誰場　誰印歳

右之通相違無御座、其外入人別無御座候、以上、

辰五月朔日　家主　誰印
同　誰印
同　誰印

名主
誰　殿
○中略

右者寛政八辰年四月廿五日、樽與左衛門殿ニ而、掛肝煎江被申渡候、且支配限人別寄高、去年書上人數高見競、付札之儀ハ、是迄之通可取計旨通達、

〔守貞漫稿 四人事〕京坂トモ戸籍（俗ニ水帳ト云、御圖帳ノ假字也、東ハ人別帳ト云、江戸モ此二名ヲ云、）上疏（訴狀願書等ヲ云、）ノ書法左ニ

某町幾町目某屋某（自地住居町人如此、）某町幾町目某屋某借屋某屋某（他ノ家宅ヲ月數ヲ以テ借屋スル者如此、）某町幾町目某屋某（家守名也、）ノ支配借屋某屋某（家守アル家宅ヲ假居スル者ニ記ス、）ト署ス、若戸。主。幼稚或ハ病者或ハ婦女ニハ皆必ラズ傳ヲ備テ補佐之、其傳ヲ代判某ト云、（借屋人モ幼主病主ハ許之、婦女ノ戸主ヲ許サズ、自地ノ家ニハ許之、若病疾アル者及ビ疾病アル時代ヲ用フニ、某病氣ニ付代判某、某病氣ニ付代某ト記ス、江戸ニテハ煩ニ付代某ト云ガ如シ、）戸主ノ妻ヲ女房某（今俗三都トモニ妻ヲ女房ト云、業ハ女房ト云ハ、大内以下官女ヲ云、今戸籍ニ女房ト云ハ上方ミ、江戸ニテ妻ト署ス、）ノ男子ヲ悴（本字伜也、セガレト訓ズ、）女子ヲ娘某ト書奴僕ヲ下人某、妾婢ヲ下女某ト署ス、

江戸戸籍ハ各上ニ生國某國某郡某村、（此帳ニ細書シテ、戸主ニハ地受人、某寺、某寺宗旨某ト記ス、奴婢ニモ生國宗旨寺等ヲ記シ、請人某ト細書ス、）戸。主。ニハ某町何町目家持某、（自地住居ノ者ナリ、）某町幾町目家主某店某、（月數ヲ以テ借地借宅ニ住ス者、此ノ如シ、戸籍上疏トモニ屋號ヲ記サズ、上疏時ニ應テ或ハ屋號ヲ公ニス、蓋三都トモ苗字御免ノ者ハ、名ノ上ニ苗字ヲ書ク、）妻ハ妻某、男女子トモニ子某娘某、僮僕妾婢ハ男女トモニ召仕某ト署ス、又戸主等疾病或ハ幼稚或ハ女主ニハ傳ヲ附シ、或ハ代人ヲ用フ、代判ト云ズ、某頼ニ付後見某ト書、（女主幼稚ニモ聞之、蓋江戸ハ借地借宅ニモ女主ヲ許ス、）

〔牧民金鑑 十三〕弘化元辰年十二月七日申渡

人別帳之儀、支配替之節、前十ヶ年分而已、是迄引渡候趣ニ候得共家數人別之增減ニ而、其村前前より之盛衰も相分、夫々取計方之心得ニも可相成儀ニ付、人別一村限帳之儀も、其以來年古キ分をも不取捨、場所替最寄替等之節ニ、跡支配へ引渡候樣可被致候、

右之趣、奉行衆被仰渡候、

十二月七日

〔小普請世話取扱書抜〕人數帳書損

不念書、

佐橋鎌太郎印

私儀、當八月中差出候知行所人數帳之內、算當相違之廉有ㇾ之候ニ付、御下ゲニ相成、右者全ク書損仕候處、不ㇾ心附差出候段、不念之至奉ㇾ恐入候、則相改差出申候、向後右樣不行屆之儀無ㇾ之樣、精々心附可ㇾ申候、此段以ㇾ書付申上候、以上、

子〇嘉永五年十月　　佐橋鎌太郎印

〔人別省略方書留〕市中人別、年々四月取調、美濃紙帳面江認、去ル卯年以來、兩御番所江壹通宛差上、支配名主共方江壹通差置、都合三通宛相認メ來リ、九月者增減而已取調書上候得共、四月者美濃紙ニ諸狀認メ、町入用等多分ニ相掛リ候ニ付、向後御隔年ニ御一方之御番所江而已壹ト通書上致、名主方江壹通差置候ハヽ、差當リ壹ト通相減、其上以來美濃紙ニ而書上候ニ不ㇾ及、半紙ニ而も不ㇾ苦、成丈ケ麁紙を相用認メ候ハヽ、町入用格別ニ相減可ㇾ申旨、厚御沙汰被ㇾ爲ㇾ在候間、是迄書上候美濃紙幷岩城大半紙市中直段取調候處、左之通、

濃州

一美濃紙　壹帖四拾八枚切　拾帖壹束ニ付　銀二十匁　但壹帖ニ付銀貳匁、拾枚ニ付銀四分

一リ六毛六糸、壹枚ニ付銀四リ一毛六糸餘、

奧州

一岩城　壹帖貳拾枚切　拾帖壹束ニ付　銀四匁八分　但壹帖ニ付銀四分八リ、拾枚ニ付銀貳分四リ、壹枚ニ付銀貳リ四毛、〇中略

右御尋ニ付、此段奉ㇾ申上候、以上、

巳〇安政四年年七月　　人別掛名主共

〔例書三〕一野州都賀郡間々田宿眞言宗醫王院義、御朱印地之義故、右宿宗旨人別帳初江、右寺院且家之百姓共名前ヲ出、醫王院外寺院之初列ニ、寺印押不ㇾ申候而者難ㇾ成由、寺印及ㇾ難澁候而宗門帳

村役人共連差出及延引候段訴之、依之寺院呼出し及吟味候者、貴僧何之比、右寺江被致住職候哉、相尋候處、三四年以前入院仕、右寺住職候由申候ニ付、左候者、去年迄者、宗旨人別帳百姓共席順名順を以、帳面ニ寺印を出候所、去年迄往古之通、百姓席順名順之通、其寺院旦家之者共之寺印被致、當年ニ限、如何之譯ニて、右體寺印難澁被致候哉、右宗門帳之義者、何國ニ而も、寺江附候帳面ニ而者無之、百姓共江附候帳面ニて、平分之百姓、寺格無之寺院之旦家ニ而も、草分ケ故、初筆ニ帳面ニ載せ、又中興之百姓ニて、旦那寺者、寺格宜敷キ寺院ニ而も、右百姓家柄中興故、帳末江出申候、全百姓共、御法度之宗門有無之糺之爲、銘々旦那寺ニ印形致させ候事ニて、百姓共一己之身分ニ拘り候宗旨人別帳ニ而、寺格ニ拘り候宗門帳ニてハ無之、百姓共本人ニて、寺院ハ拙寺旦家ニ紛無之と申證據之判ニて候と利害申含、寺院屈伏致シ、寺印出ス、御料ニて取計候節者、寺院不得心之節者、御勘定奉行江申達、夫より寺社奉行所江申達ス

〔政音集坤〕神道人別帳振合之事

當御領分何國何郡何村

吉田殿
白川殿　歟配下

八幡神主

山邊越中守　何ノ何拾歳

實子惣領　同　肥後正　何ノ何拾歳

〆貳人

一神道自身葬祭

右者前々被仰出候切支丹宗門ニ決而無御座候、神職正派之父子跡職可仕、實子惣領者、神道自身葬祭仕候、其外家内次男以下神職無之ものは、當村ニ禪宗歟何寺宗判引導相受申候、尤家來召抱候節ハ、銘々寺請狀取之可申候、爲後日仍如件、

年號月日　　山邊越中守印判書判

何之誰樣御役所

前書山邊越中守并悴同肥後正儀、宗旨致改成候、改候處、切支丹宗門之者ニ曾て無御座候、爲其奥印仕差上申候、以上、

村役人　三判

〔德川禁令考後聚行刑條例十二〕寛政十二申年八月九日

小田切土佐守掛

一人ニ而兩所人別帳ニ加り候者咎附

松平阿波守領分阿州板野郡大松村百姓ニ而下槇町茂兵衛店市之助方ニ致ニ旅宿ニ候　唯助

右之もの儀、阿州大松村人別ニ入罷在、商賣之爲メ村役人江斷度々御當地へ出入、尙又御當地へ住居致し度候ハヽ、其段村役人江も相屆候上可引移處、兩人別之儀不心附、夫まで之通商ニ出候由計相斷、御當地へ出、本材木町五丁目江店持、其後四町目へ轉宅致し、右體村方人別も不除身分ニ而、去年十二月迄、本材木町之人別ニ罷在候段、不埒ニ付、急度叱り、

御咎附

右寛政二戌年十二月、根岸肥前守御勘定奉行之節伺之上御咎申付候、常州甘田村百姓勘兵衛、加茂左衛門、十右衛門親代より之仕來ニ候迚、如何とも不心附、兩村人別ニ加り罷在候段、不束之至り、市之丞ハ地頭ニ而一旦宿預ケ申付置候上者、地頭ニ而外宿へ止宿之儀申渡頃、委細之譯可申立處、無其儀段、別而不埒ニ付、市之丞ハ過料錢三貫文、加茂左衛門、十右衛門ハ、急度叱り置候、右加

茂左衛門、十右衛門ニ見合急度叱リ

〔德川禁令考後聚四十寛政刑典〕人別帳ニ不加他之者差置候事

一人別帳にも不加他之者差置候者、當人幷置候もの共所拂、名主重キ過料、組頭過料、

〔德川禁令考後聚十二行刑條例〕人別帳にも不加他之もの差置候御仕置之事

寛保二年極

一人別帳ニも不加他之ものを差置候もの　當人幷差置候もの共ニ　所拂

名主　重キ過料

組頭　過料○中略

正德三巳年六月申渡

一下總國當代島村甚右衛門、五郎右衛門儀、弟靈仲事、幽靈と申出家、五年以來、甚五右衛門方ニ爲致住居候處、當分罷在由僞、宗門人別帳ニも不載、右御代官申付を背、不屆ニ付、

甚五右衛門

五郎右衛門

江戸在所追放

比例罪

安永二巳年御渡

大坂町奉行伺

養父を殺し附火いたし候一件之内

長堀茂左衛門町佃屋長左衛門家守

錢屋嘉助幼少ニ付代判

次兵衛

右之者儀、借屋之内佃屋長左衛門養子傳吉、無人別ニ相成有之候儀、吟味之節迄不心附、數月無人別ニ而差置候段、不埒ニ御座候間、重キ過料、

人別改

此儀吟味書之趣ニ而ハ、長左衞門住宅之家屋鋪ハ彌助懸ケ屋敷ニ而、錢屋伊兵衞家守勤候內、去八月傳吉を致養子ニ引取候得共、心底見屆候迄、暫弘メ不致由、長左衞門相屆候旨、伊兵衞申聞候ニ付、當分同家人之積致し置候後、伊兵衞致病死、其後彌助直持ニ成候得共、數月無人別にて差置候趣ニ相聞、人別帳江も不加、他之もの差置候もの、當人幷差置候もの共ニ所拂、名主ハ重過料、組頭過料之御定有之候得共、養子ニいたし候段者、長左衞門相屆、他之者ニ而無之、品輕キ方ニ而、殊ニ懸ケ屋敷之儀ニも御座候間右御定より輕ク、過料錢拾貫文、

評議之通濟○中略

享保元酉年十月廿三日
小田切土佐守掛

人別帳ニ不加ものを差置、其もの盜賊相顯れ、召連訴出候もの咎附、

飯倉町五丁目平七店
猪之助

右之者儀、初五郎ハ無宿ニ候處、其儀ハ不存奉公稼いたし度旨申聞候迚、知人ニも無之、請合人ハ勿論家主江も不申聞、手前ニ差置、殊ニ同人盜いたし、卯兵衞方江之質通帳を持出し、卯兵衞方江質入いたし候儀も不存罷在、其後右之趣相顯れ、召連訴出候儀ニ者候得共、右始末不埒ニ付、急度叱り、

〔享保集成絲綸錄四十〕正德三巳年三月

一町々出居衆片付之儀ニ付、町切ニ出居衆書出シ候樣ニ、先達而相觸候所、右人數書付も不差出以前ニ、近在向寄之方江段々爲引越遣候段相聞不屆ニ候、男女共ニ奉公ニ出候はゞ格別、諸職人等の出居衆に至迄、猥ニ他國近在江差遣間敷候、斷相立候者は、何方江も可差遣候間、吟味不相濟候以前ニ、支配違江も不遣候樣ニ申渡候上者、他所江指遣候儀、堅ク仕間敷候、此方ゟ差圖無之內、外江遣し候はゞ、吟味之上、家主名主迄急度可申付候、尤出居衆人數書付、明日中ニ可差

出事、

右之段、可々早々可觸知候、以上、

三月

（武州文書）北條氏條目

一當鄕人改之儀候、信玄相豆武之間ニ出張候者、遂ニ可遂一戰事、人數ニ相極候間、御扶助之□

悉一頭ニ可被召仕、其時者三ヶ國之城々留守可爲不足、此度可爲是非弓箭間、御出陣御留守

番其撲寄之城爲可被仰付候、在城之間者兵粮可被下候、御國ニ有之役一廻可走廻事、付此度

帳面御披見上有御指引撲樣は、重而以御印判可被仰付事

一さかしく走廻者候者、隨望何樣之儀成共可被仰付事、

一當鄕ニ有之者一人も隱置、此帳ニ不付者、後日聞出次第、小代官名主可切頸事、

一若し此帳ニ不載者、申出者大忠也、何にても永代望之儀可被仰付候、田地成共可被下、又者當

分御褒美成共可被任望事、

以上

未三月七日　（北條氏虎朱印）

安藤豐前守奉之

富部兩分小代官名主

（牧民金鑑十三）享保六丑年六月廿一日御書付

諸國領知之村々田畑之町歩、郡切ニ書記、幷百姓、町人、社人、男女、僧尼等、其外之ものニ至迄、人數都

合、但領分限ニ書付可被差出候、奉公人并又ものハ不及書出候、總而拜領高之外、新田等高ハ不及記、町歩計可被書出候、但無高ニ而反別計之新田も可爲同前候、右書付之儀ニ付難心得事候ハヽ、御勘定所江可被聞合候、書付は下之御勘定所江可被出候、

右之趣、萬石以上并老中、若年寄中支配江可被相觸候、以上、

丑六月

（德川禁令考六十一戸籍）寬政元酉年二月

人別改方等

町方人別改方、天和年中之町觸と當時相替候儀無之候哉、當時改方之儀御尋ニ付、左ニ申上候、

一當時町々人別改方之儀ハ、例年四月九月相改、家持家守、地借店借、父母妻子、掛り人、出居衆、召仕、并町内書役、番人迄、生國、宗旨、寺請人等相改、書記印形取之、一ヶ年兩度名主江取置、總人數高ハ兩度書上申候、

但先年ハ人數高書上候儀無之候處、享保六丑年十月十八日、當御掛りにて、以來人別高每年四月九月兩度御三ヶ所江壹冊宛差出候樣、尤今年ハ十一月中ニ差出候樣、名主共江被仰渡、其後年々其通にて仕來候處、同十三申年三月十九日、御配符にて、向後ハ人別書上壹冊差出候樣被仰渡、其後每年四月九月、御月番江計壹冊差上申候、

一天和三亥年九月廿七日御觸書之内ニ、店借之者も五人組相定、互ニ致吟味、不見屆者有之ハヽ、家主江申聞、御訴可申上、一町人別帳を以互ニ相改、每月御三ヶ所江御屆可申上旨、御觸御座候間、同年十月より享保六丑年六月迄、每月徒者連判壹冊、御三ヶ所之内江差出申候、然ル處同年七月廿八日、當御掛りニて、自今每年三月御月番江壹冊、八月ハ外番所江壹冊宛、一ヶ年ニ都合三

冊可差出旨、名主共江被仰渡、徒者連判之御文言御改被成當時右之通徒者連判差出來申候、

一右御觸書ニ有之店五人組之儀、當町人數等極有之候所も無御座、地借之者共、店内之儀ハ、一月

申合居候迄ニ而、町役等拘候御筋ニ而ハ無御座候、

但別段ニ町銘有之、拜領町屋敷幷少々之寺社門前町屋敷等ニ而、地守壹人ニ而地守ニ五人

組無御座候間、右體之所ハ地借店借之者順番相立、五人組ニ仕、町役幷自身番等爲相勤候所

も御座候、

右者當時人別改方ニ御座候、年久敷儀故、天和年中、人別改方ハ如何御座候哉〔巨〕細之儀ハ相知不

申候、

右御尋ニ付、此段申上候、以上、

年番
名主共

寛政元酉年二月

右者奈良屋市右衛門殿より尋候ニ付、二月十一日差出ス、

〔牧民金鑑十三〕文政八酉年八月

欠落勘當舊離帳外、幷歸住等、毎年十二月、公事方月番江屆差出候樣、文化九申年、相達置候處、屆方

區々ニ而年を越、程を經、屆差出、又者欠落帳外等無之ハ、屆不差出向も有之候故、是迄者其都度ニ

呼出相糺候得共、左候而者手數も相懸、且者見切之際限も無之候間、以來右書付、先達而相達候振

合を以、不洩樣相認、且可屆分無之、只其譯とも毎年六月廿五日迄ニ、公事方月番江相屆、京大坂長

崎等、其筋江屆差出候向も、寫を以同樣可被相屆候以上、

丑八月

曾　豐後守

石　主水正

惣廻狀

〔牧民金鑑十三〕天保十二丑年五月十九日

豊田藤之進　關保右衛門　篠田藤四郎　小笠原信助　篠本彦次郎　北條雄之助　小田又七郎　森新之助〇以上八人代官

諸國人別之儀、追年相增候得共、國柄ニ寄、享保之頃ニ見合候得者、過半人數減少いたし候場所も有之、御府內人別も次第相增候得共、多分者他國出生之ものニ付、寛政以來、御入用をも不被爲厭、歸農之儀厚御世話有之候得共、兎角近國之內ニも人數減少、荒地多き場所も有之、御府內之人別者、次第相增候ニ付而者、生者寡く、食者衆く相成候故、自然と凶年之御救等も莫大之事ニ至り、往往御世話行屆兼可申哉難計事ニ付、戸籍之儀篤と評議いたし可申上旨、越前守殿御沙汰も有之候間、在々人別增方、御府內人別減方取締之儀見込之處、無腹藏取調、銘々印封を以早々可被申聞事。

丑五月十九日

〔市中取締類集九ノ百八〕甲斐守殿江相談もの

天保十三寅年十月廿六日、越前守殿江御直上ル、

人別改方之儀ニ付、御書取之趣評議仕申上候書付、

遠山左衛門尉

鳥居甲斐守〇二人江戸町奉行

御當地人別戸數相增候ニ付、在方ゟ出稼之者歸農之儀、御沙汰之趣を以、再應取調申上候處、御書取を以、左之通被仰渡候、

一歸農之儀は、先其儘差置可申候、御府內人別改之儀、兩三年之內市中改革行屆候上、程合見合之上、取計候方ニ可有之との儀は、時節之見極も無之、自然取締相弛ミ候場合ニも至可申哉ニ付、市

中取締之程合、兩三年を不ㇾ期可ㇾ成丈速ニ行屆候樣猶人別可ㇾ相減仕法精々取計、人別改方之儀、此節ゟ取調可ㇾ被ㇾ申候、

一在方ゟ新ニ江戸人別入之儀、以後決而不ㇾ致樣可ㇾ被ㇾ申付事、

此儀在方ニ而身上を仕舞、御當地江出稼、向後決而不ㇾ相成、困窮等ニ而取續相成兼候者は、村役人共厚く世話致し、其上にも難ㇾ行屆候はゞ、領主地頭江申立村方人別不ㇾ相減樣取計、大工木挽杣其外全職分ニ付、出稼之者は月限、奉公稼ニ出候ものは年限を以村役人ゟ御代官領主地頭江相願、村役人連印、御代官手代地頭家來奥書印形之免許狀相渡、出府之上何方ニ奉公住致し、又は出稼中何方ニ罷在候旨、其當人ゟ村方江書通を以爲ㇾ相屆、年限期月ニ至候はゞ、一旦村方江立歸、何ヶ度出府致し候共、右同樣之手續を以、總而手重之仕法相立、右許狀所持不ㇾ仕ものは、何方ニ而も不ㇾ差置、御規定之旨、諸國一統江御觸有ㇾ之、若右之者、期月年限を過ぎ、無沙汰ニ不ㇾ立戾候はゞ、領主地頭ゟ町奉行江申達候得者、直ニ當人呼出し引渡置候積、且又於御當地者、右免許狀を目當ニ奉公人之受人ニ相立、又者當座出稼之者江店貸遣をば、同居等爲ㇾ致、許狀所持不ㇾ致者は、身分之世話、決而致間敷旨取極、奉公人召抱候節は、主人方江右免許狀預り置、當人生國村名歲附等迄受狀江屹と認入取之置、其段家主江相屆、人別帳江出入貫、其外當分出稼之者江店貸候節、店受狀認方も右ニ准、身寄知人因を以、同居等爲ㇾ致候はゞ、是又急度家主江相屆、右何レも當人所持之免許狀者、店借幷同居人共、家主江預り置候積、

一御當地之者、店替致し候節者、是迄人別送り等無ㇾ之候得共、以來居町名主ゟ先方支配名主江達書差遣候積、

一廻國修行、六部順禮等ニ罷出候もの、是迄は村役人幷菩提所寺院より勝手に往來手形差出候得共、以來者村役人ゟ御代官領主地頭江相願、前書當分出稼之振合ニ而、期月を以承屆、許狀相

渡候積、尤於御關所も、許狀無之廻國六部順禮等相通し申間敷旨、改而被仰渡御座候方可然奉存候、

一僧侶之儀者、四民之外ニ而、御年貢夫役を被免、遊食之者ニ付、容易ニ人別相増候儀は不可然筋之處、別段御制度無之、勝手次第出家致し候間、戒行不全もの而已多、古來ニ見合、右人別夥敷相増候儀ニ可有之處、右等は不耕而食候ものニ而、生者寡ク、食者衆場合ニ相當可仕哉ニ付、向後出家致し度存候ものは、在方者御代官領主地頭、町方は町奉行所江相願、吟味之上出家承屆候旨之證狀相渡候樣相成候はゝ、猥ニ出家致し候者相止、自ラ戒行堅固之僧も出來、御當地人別相減候基ニ相成可申と奉存候、○中略

人別改之義、當分之内は一ヶ年兩度ツヽ可改事、

此儀、先達而も申上候通、人別帳之儀前々一ヶ年兩度之改之處、寛政度より年々四月一ヶ度ニ取極有之候間、書上之儀は、其通ニ居置、以來御役所江一ト通ツヽ、町々名主江者、是迄之通扣ニ取置、改方之儀、家主共方ニ而、店子之者家族召仕、同居之者ニ至候迄、生國宗旨菩提所年附等迄巨細ニ相記し、名主方迄差出、猶壹人別名主方ニ而精細ニ取調、店主判元見屆、人別帳江調印爲致候上、町年寄江差出、兩御役所之分は、町年寄ゟ差出候積、

但名主方江取置候人別帳江は、改後之存亡、嫁娶之增減者勿論、同居人差置候はゝ、身分受合人名前等、月々斷書爲致置、不時ニ奉行所ゟ尋有之候節、聊差支無之樣取計候積、

一兩組ニ而人別掛與力同心掛り申付、改方引受無油斷爲取扱候積、

一年々九月ニ至、右人別掛りの者ゟ、町々名主呼出し、四月差出し候人別帳下ケ、增減共、斷書爲致候樣相成候はゝ、町々費用も薄く、一ヶ年兩度之改ニ相當可仕候、

一四月人別帳差出候はゝ、右掛り之者江相渡、前年之人別帳と突合爲取調候積、

一右人別改方之儀者、元來町役人共、大切之主役ニ候處、等閑ニ心得居候段は、不埓ニ付、若以後紛敷取計有之候はゞ、名主家主共、役儀取放可申旨、改而觸置候方可然奉存候、

〔牧民金鑑十三〕天保十四卯年三月　水野越前守殿御渡

諸國人別改方之儀、此度被仰出候ニ付而ハ、自今以後在方之もの身上相仕舞、江戸人別ニ入候儀決而不相成候間、領分知行所役場等ニ罷在候家來より、精々勧農之儀申諭、成丈ヶ人別不減樣取計、且職分ニ付、當分出稼之もの、幷奉公稼出府致候もの共は、村役人共連印之願書爲差出、右願之趣承屆候旨、右役場ニ相詰候家來奥書印形致し相渡、小高之分知行所ニ家來不差置、遠國ニ而當地江願等手重之向者、創元役之もの、奥書印形致候積、其外出家致し候者之儀ハ、無由緒者雖有弟子之望、猥不可令出家、若無據子細於有之ハ、其所之領主代官江相斷、可任其意旨、寛文五年、諸宗江御條目を以被仰渡候處、近年亂方等閑之向も有之哉ニ相聞候間、以來者出家相願候者ハ、人柄幷子細等、領主地頭ニ而、得と吟味之上、寺社奉行江申斷、聞置之挨拶有之之上ニ而可差免、幷廻國修行、六十六部、順禮等ニ罷在候もの、前書出稼之もの同樣ニ取計、尤出家願等仕來ニ而、添簡等致し向ハ、其通ニ可致、諸藩中無據子細ニ而出家致候分ハ、是又寺社奉行江可相斷、且吉田、白川、陰陽師、神事舞太夫等より許狀申請候もの共も、其度々添簡又者前同樣願書江奥書致し可被相渡候事、

一近年御府內江入込、妻子等も無之、裏店借受候者內には、一期住同樣之ものも可有之、左樣之類者呼戻、在方人別不相減樣取計可申事、

右之趣、在方ニ罷在候、家來江精々可被申付候、

三月

右之通可被相觸候

在方之者、當地江出居馴候ニ隨ひ、故鄕江立戾候念慮を絕し、其儘人別ニ加り候もの追年相增、在

方人別相減候趣相聞、不可然儀ニ付、今般悉く相改、不發歸鄕可被仰付候處、商賣等相始、妻子等持候者も一般ニ差戾ニ相成候而ハ、可致難澀筋ニ付、格別之御仁惠を以、是迄年來人別ニ加り居候分ハ、歸鄕之御沙汰ニハ不被及、以後取締方左之通被仰出候、

一在方之もの身上相仕舞、江戶人別ニ入候儀、自今以後決而不相成、大工、左官、木挽、杣共外職分ニ付、當分出稼之ため出府いたし、同居又者店持或ハ奉公稼ニ出候ものハ、月限年限等を以、村役人江申立、御代官領主地頭江願出候得バ、村役人連印、御代官所ハ手代、私領ハ家來、奥書印形之免許狀相渡遣候間、出府之上、家主或ハ人主江差出、且何方ニ同居幷奉公濟いたし候旨、村方江通達ニ及び、期月年限ニ至候ハヾ、右同樣之手續ニ相心得可申候事、

但在方より人別入手重ニ相成候由を申唱、職人賃銀を增し、奉公人ハ給金せり上候儀等決而致間敷候、以來男奉公人之分ハ、武家方中間、町方下町共、金貳兩貳分より金三兩迄、女ハ壹兩貳分より貳兩を限り、年若幼弱之ものハ其限り無之候間、何程も給金引下ゲ奉公濟可致候、若相背、主人方相對之上、給金增之取扱いたすにおゐてハ、吟味之上、急度咎可申付候、

一廻國修行、六部、順禮等ニ罷出候もの、是迄ハ村役人共或ハ菩提所寺院江相對之上、往來手形受取候由之處、以來者村役人共より御代官領主地頭より願出、前條之振合を以、許狀相渡可申事、

一出家致し候者共之儀、以來無遺失所役人より御代官領主地頭江相願、聞濟之上、添簡又ハ奥書可申請、且吉田白川家、陰陽師、神事舞太夫より、新規門下ニ相成、又ハ百姓町人ニ而身分相應之許狀請候者は勿論、縱令前々より配下ニ而、神道葬祭、或ハ續目許狀請候節も、其度々支配領主等江相願、添簡又ハ奥書を以、其筋より許狀可申請事、

一在方人別改方等閑之趣相聞候、向後死亡出生嫁娶奉公稼之もの共巨細ニ相改、當人印判取之、印形改候ハヾ其段斷書致し置、職分ニ付出稼奉公稼之もの、期月期年ニ不立戾候ハヾ、其段御

代官領主地頭江訴出可申事、

一近年御府内江入込、裏店等借請居候者之内ニハ、妻子等も無之、一期住同様之ものも可有之、左樣之類ハ早々村方江呼戻可申事、右之趣村役人共厚相心得、勸農之趣意深切ニ申諭、村方人別相減不申樣、精々心附可申候、若人別改方等閑之取計致すニおゐてハ、村役人共役儀取放之上、急度曲事可申付もの也、

右之通可被相觸候

三月

〔徳川禁令考屋敷三十七〕文久三亥年九月廿三日

屋敷内ニ差置候者取調方之儀御書付

有馬遠江守殿御渡　　　大目付江

萬石以下屋敷内長屋、其外貸置候もの、并由緒不知浪人、又ハ慥と致し候請人も無之中間小者等、一切差置間敷候、右ニ付而ハ、何れも組支配之者江急度申渡、銘々厚世話致し、此節も厳敷相改候樣可被致候、若胡亂之者差置候段、外より相顯候ニおゐてハ、急度可被及御沙汰候條、可被得其意候、

右之通去ル酉年相達候處、今以内弟子等之名目にて、由緒不知浪人もの等、同居爲致候族も有之候哉ニ相聞、以之外ニ候、御目見以上以下共、頭支配より夫々申渡、長屋ニ差置候者ハ勿論、地借之者迄も、壹人別ニ相改、身元不慥成體之もの、一切差置申間敷候、若由緒有之候歟、又ハ身元等慥と相分居、地面内江差置、又ハ同居等爲致候ハヽ、生國并名前歳附等相記、有無共、頭支配より、早々大目付御目付江相達、自今以後、毎年四月書出可申候、尤此度御番方江、御府内晝夜廻り被仰付候間、胡亂成もの見懸次第召捕、又ハ討捨、時宜ニ寄、疑敷場所於有之ハ、踏込、遂穿鑿候筈ニ候間、頭支配にて、精々世話致し、取締行屆候樣可致候、若隱置候もの於有之ハ、急度御沙汰可被及候、

〔飛州志一精選〕元祿五年、略○中此國官治ト成テ、略○中元祿七年甲戌ヨリ八年乙亥迄、家士ヲ遣シテ戸籍ヲ改メ、石計四萬四千一百五石餘ト成レリ、

〔草茅危言四〕戸口之事

一天下之戸數口數ハ、先聖王ノ重ズル所ニテ、孔夫子モ負版ノ者ニ軾シ玉フト見ヘタリ、故ニコノ改ハ大切ノコトナルベシ、本邦大寶令ニモ、戸令アリ、戸口帳籍ノ條目嚴重ナルコトニテ、京師國郡夫々官司アリ、下ハ坊長里長ニ及マデ、皆ソノ人ヲ選ンデ、法制モ亦委曲ナルコト也シ、ソノ已來世ノ盛衰治亂ニ隨ヒ、諸事ノ張弛沿革モ有ベケレドモ、戸籍バカリ、慶元御治世マデモ、サシテ替リタルフシモ有マジ、タヾ寛永中、天主教ノ一亂ヨリ事一變シ、邪宗ノ禁ヲ嚴重ニセラル、ヨリ、天下ノ人貴賤尊卑ヲ問ズ、佛氏ニ歸依不歸依ヲ論ゼズ、ナニナリトモ佛氏ノ一宗ニ托シ、必ズ寺ヨリソノ宗門ニテ邪宗ニ非ル趣、證札ヲ出サセ、左驗トシ、又西土ノ愚民ノ迷溺ノ深キハ、諸寺ノ碩學ニ命ジ、ソレ〲ノ地方ニ下シ、敎化シテ其宗ニ歸セシメ、夫ヲ用ヒズ、邪宗ニ隨フ者ハ、皆嚴科ニ處セラレシ故ニ、天主敎永ク殄滅セリ、一時ノ權宜ニ於テハ、サモ有ベキ御事也、サリナガラ、夫ヨリシテ僧寺ハ戸口版籍ヲ掌トル官司ノ列ニ入タルヤウニナリ、大ニ權柄ニ乘ジ、又民間ニテハ、坊長モ唯寺ヨリ出セル一紙ノ宗旨證文ヲ集メテ、人別帳ヲ編立ルコトニナリ、別ニ口數ヲ改ムルコトナク、一切寺任セ也、爰ニ於テ天下戸口ノ權ハ、悉寺僧ニ歸シタルハ、大ニ國體ヲ失ヒタルコトナレドモ、最早百數十年常事トナリタレバ、誰一人怪シト思者ナシ、享保御明君ノ御時、明鑒ヲモテ、四海ヲ照サセ玉ヒ、此弊ヲ厭ハシク思召シタリシニヤ、寺請證文ノコトヲ改メサセラルベキノ御事有シヲ、廟堂ニテ因循ノ議アリテ、其儘ナリシト云事、愚積善○中井ハ幼ヨリ是ヲ先人ノ膝下ニ仄聞セリ、果シテ然シヤ、實ニ惜ムベキ機會ナリ、總ジテ一時ノ權ハ格別ノコト、何分世ヲ棄テ家ヲ出タル身ニテ、國家戸口ノ公務ヲ司ドルヲ以テ、永久ノ掌事トスルハ、大ニ事

體ヲ失タルモノナリ、ソノ上年經タルコトユヘ、宗旨ハ文具ノミニテ、唯切要トスルハ人別ノ事也、今日ノ弊ヲ論ズルニ、都會ノ地ハ寺町モ大抵町ヤニ續キタレドモ、寺僧ハ平日檀越ノ家ニ往來スルモノニ非ザレバ、家内ノ大數イクバク有モ一向知ベキ樣ナシ、タヾ家富タル者ヨリ書付ヲ遣マヽニ、證文ヲ出シ、坊長里長モ何ノ改モナク、唯一紙ノ證文ヲ目當ニスルノミナレバ、名アリテ人ナキモ有、人有テ名ナキモ有、又他國ヨリ都下ニ來リ住スル者、必其地ノ寺ヲ頼、宗札ヲ受コトニナレバ、既ニ國ノ宗旨人別ニ入、又都下ノ宗旨人別ニ付バ、是一人兩宗兩名也、譬同宗ニテモ、二寺證文ニ入バ、一人ニテ二人ト成ニ同ジ、又奴婢ハ家長ヨリ一々宗旨證文ヲ取置テ、宗門色色有ヲ、家長ノ寺號上下何人皆我宗門トシテ證札ヲ出スハ、往々一人兩宗也、親元ノ人別ニイリナガラ、又主人ノ方ノ宗旨ニ入バ、是又往々一人兩名也、混雜ノ甚敷者也、坊長里長ハ何ノ糺モナク、其儘戸籍ヲ編テ官ニ獻ズルハ、總計ニテ萬人有中ニテ、二千三千ハ必重複セル虚數ナルベシ、大切ノ戸口ノコトニ於テ、斯亂雜ニハ有マジキコト也、必竟ハ何ノ辨モナク、糺シモナキ僧寺任ニスルヨリ起リタルコトナルベシ、實數ヲ改ムルハ、面々一分切ニスルヨリ慥ナルコトハナクレバ、何卒享保中ノ上意ノ如ク、寺ヨリノ證札ト云コトヲサラリト止メ、借ヤハ家主ヨリ改メ、家持ハ坊長里長ヨリ改メ、主人タル者ヨリ自分ニ證札ヲ出シ、邪宗ニ非ル旨述ベ、頼寺ハ何處何寺院ト云コトヲ乾度顯シ、其同居人并ニ下男下女ノ名元ノ肩書ニ、何宗々々ト一々ニ記シ、人別多少相違ナキ旨ヲ認メ差出サセ、坊長里長ノ手ニテ、前年ノ戸籍ヲ按ジ、ソノ家ノ死生嫁娶等ノ增減ヲ正シテ後獻ゼシメバ、寺ヨリ人ノイヒ次第ニ、人別ノ多少ヲ記シ、主人同居下男下女マデ皆一宗トスル妄リナル證札トハ雲泥ノ違ナルベシ、奴婢ハ他國當國トモ、親元カ主人ノ方カ一方ノ人別ニ入テ重複ナキ樣ニスベシ、他國ニ徙リ住スル分ハ暫クニテモ又ハ終身ニテモ、ソノ國所ヨリ送リ證文ヲ渡スベシ、終身ノ分ハ本國ノ人別ヲ削リ、暫クノ分ハ先存置、人數ノシメ高ニ

戸口數

テ引去ヲ付ラ算スベシ、ソノ徙リタル國ニテハ送リ證文ヲ受取テ人別ニ入ベシ無證ノ分ハ逃戸ナレバ、人別ニ入ベカラズ凡是等ノコトハ、坊長里長ヨリ一町切一村切ニ取計ラヘバ、常事ニテ、何ノムツカシキコトナク、寺院ニテハ決シテ出來ザル事ナレバ、從來宗旨證文ノ疎鹵ハ知ヘキノミ、右ノ條目ヨク行ハレバ、事甚著實ニナルノミナラズ、又浮屠ノ權ヲ奪フコト國家ノ大益ナリ、平日浮屠氏ノ宗旨證文ノニトヲ鼻ニカケ、世ニ横行スルハ洵トニ憎ムベキノ甚キ者ナレドモ、一世恬然習テ常トスレバ、是ヲ憎ム者ヨク幾人ゾヤ、是モ又歎ズベキ識ア、

（吹塵錄、五人口及國高）享保十一年ヨリ弘化三年迄子午改全國人口

享保十一年丙午
一諸國人口貳千六百五拾四萬八千九百九拾八人

享保十七年壬子十一月改
日本國中五歳以上人別
一都合貳千六百九拾二萬千八百拾六人
　内　男千四百四十萬七千百七人
　　　女千貳百五十一萬四千七百九人
　内三拾七萬貳千八百十八人　去ル午年より増

（此壹年は石川壯次郎より得たるものなり、一本に武林隱見錄によるとありて、諸國人別と記せり、其人員符合せり）

寛延三年庚午十二月改
一諸國人口貳千五百九拾壹萬七千八百三拾人
　内　男千三百八十壹萬八千六百五拾四人
　　　女千貳百九萬九千百七十六人

寶暦十二年壬午改
一諸國人口貳千五百九拾貳萬千四百五拾八人
　内　男千三百七十八萬五千四百人
　　　女千貳百拾三萬六千五拾八人

明和五年戊子改
一諸國人口貳千六百貳拾五萬貳千五拾七人

安永三年甲午改
一諸國人口貳千五百九拾九萬四百五拾壹人

安永九年庚子改
一諸國人口貳千六百壹萬六百人
天明六年丙午改
一諸國人口貳千五百八萬六千四百六拾六人
寛政四年壬子改
一諸國人口貳千四百八拾九萬千四百四拾一人
寛政十年戊午改
一諸國人口貳千五百四拾七萬千三拾三人
文化元年甲子改
一諸國人口貳千五百六拾貳萬千九百五拾七人
弘化三年丙午改
一諸國人口貳千六百九拾萬七千六百貳拾五人
内　男千三百四拾貳萬七千貳百四拾九人
　　女千貳百拾九萬四千七百八人

文化元甲子年
諸國人數調
内　男千三百八十五萬四千四拾三人
　　女千三百五萬三千五百八拾貳人

一諸國人數之義、御料は御代官、私領は領主より、去ル午年〇寛政十年之通、當子年相改、春中より十二月迄、書付差出、集之壹冊に成候事、
一男女人數拾五歳迄之内、領主ニ而相改候格例を以、改出候付、年齢不同有之候事、
一御朱印地除地之寺社領人數も、諸國人數之内ニ籠り候事、
一江戸、駿府、京、大坂、奈良、堺、伏見、大津、長崎等之町屋地子免許之場所、幷諸國城下町地子免許之地之人數も、勿論總人數ニ不漏事、
一朱書を以記候高者、元祿年中國所より差出候鄕帳を以、相記候事、
一向後も相觸候ニ不及、子年と午年ニ前々之通相改、差出候積之事、
一武家方奉公人幷又者は、諸國人數之内除候事、

大目付
神保佐渡守
御勘定奉行
石川左近將監

山城國　高貳拾貳萬四千貳百五拾七石餘〇原書朱書、以下同、

一人數四拾六萬九千五百拾九人御料私領〇原書朱書、以下同、

内　男貳拾四萬貳千九百貳拾人　女貳拾貳萬六千五百九拾七人

大和國　高五拾萬四百九拾七石餘

一同三拾四萬七百六人同

内　男拾七萬四千七百六拾七人　女拾六萬五千九百四拾人

河内國　高貳拾七萬六千三百貳拾九石餘

一同貳拾壹萬四千九百四拾五人同

内　男拾萬九千九人　女拾萬五千九百三拾六人

和泉國　高拾六萬千六百九拾貳石餘

一同貳拾萬貳千貳百八拾三人同

内　男拾萬三千百九拾三人　女九萬九千九拾人

攝津國　高三拾九萬貳千七百七石餘

一同七拾八萬九千八百五拾七人同

内　男四拾壹萬九百六拾六人　女三拾七萬五千八百九拾一人

伊賀國　高拾萬五百四拾石餘

一同八萬百九拾六人皆私領

内　男四萬六百九拾七人　女三萬九千四百九拾七人

伊勢國　高六拾貳萬千貳拾七石餘

一同四拾七萬六千五百人御料私領

内　男貳拾三萬七千八拾三人　女貳拾三萬九千三百拾七人

志摩國　高貳萬六拾壹石餘

一同三萬七千八百七拾五人皆私領

内　男壹萬八千五百四拾四人　女壹萬九千三百三拾壹人

尾張國　高五拾貳萬千四百八拾石餘

一同六拾萬五千六百八拾六人同

内　男三拾萬五千百九拾六人　女三拾萬四百九拾人

三河國　高三拾八萬三千四百拾三石餘

一同四拾貳萬六百九拾七人御料私領

内　男貳拾萬七千四百六拾六人　女貳拾壹萬三千二百三拾壹人

遠江國　高三拾貳萬八千六百五拾壹石餘
一同國三拾四萬貳千三百九拾八人
内　男拾七萬三千五百四拾八人　女拾三萬八千八百五拾人

駿河國　高貳拾三萬七千八百三拾七石餘
一同國貳拾五萬貳千七拾貳人
内　男拾三萬千百三拾人　女拾貳萬九百四拾貳人

伊豆國　高八萬三千七百九拾壹石餘
一同國拾貳萬五千五百五人
内　男六萬三千九百三拾人　女六萬千五百七拾五人

甲斐國　高貳拾五萬三千貳拾三石餘
一同國貳拾九萬七千九百三人
内　男拾五萬貳百七拾貳人　女拾四萬七千六百三拾壹人

相模國　高貳拾五萬八千貳拾六石餘
一同國貳拾七萬八千六拾八人
内　男拾四萬七千九百貳拾七人　女拾三萬百四拾壹人

武藏國　高百拾六萬七千六百六拾貳石餘
一同國百六拾五萬四千三百六拾八人
内　男八拾九萬八千八百六拾四人　女七拾五萬五千五百四人

安房國　高九萬貳千八百八拾六石餘
一同國拾三萬貳千九百九拾三人
内　男六萬八千四百四人　女六萬四千五百八拾九人

上總國　高三拾九萬千百拾三石餘
一同國三拾六萬四千五百六拾人
内　男拾八萬七千四百三拾五人　女拾七萬七千百貳拾五人

下總國　高五拾六萬八千三百三拾壹石餘
一同國四拾七萬八千七百貳拾壹人
内　男貳拾五萬貳千五百拾貳人　女貳拾貳萬六千貳百九人

常陸國　高九拾萬三千七百七拾八石餘
一同國四拾八萬五千四百四拾五人
内　男貳拾五萬九千五百貳人　女貳拾貳萬五千九百四拾三人

近江國　高八拾三萬六千八百貳拾九石餘
一 同五拾三萬貳千九百六拾八人（同）
内 貳拾七萬千貳百九拾八人 男
貳拾六萬千六百七拾人 女

美濃國　高六拾四萬五千百壹石餘
一 同五拾六萬六千三百五拾五人（同）
内 貳拾九萬千四百三人 男
貳拾七萬四千九百五拾貳人 女

飛驒國　高四萬四千四百六拾九石餘
一 同八萬千七百六拾八人（皆御料）
内 四萬貳千五百四拾人 男
三萬九千貳百貳拾八人 女

信濃國　高六拾壹萬五千八百拾八石餘
一 同七拾四萬八千百四拾貳人（御料私領）
内 三拾八萬八千八百五拾九人 男
三拾五萬九千貳百八拾人 女

上野國　高五拾九萬千八百三拾四石餘
一 同四拾九萬七千三拾四人（同）
内 貳拾六萬六千貳百七人 男
貳拾三萬八百貳拾七人 女

下野國　高六拾八萬千七百貳石餘
一 同四拾萬四千四百九拾五人（同）
内 貳拾壹萬八千百六拾三人 男
拾八萬六千三百三拾貳人 女

陸奥國　高百九拾貳萬千九百三拾四石餘
一 同百六拾萬貳千九百四拾八人（同）
内 八拾四萬六千七百五拾八人 男
七拾五萬六千百九拾人 女

松前箱館蝦夷　高無之
一 同四萬五千四百拾七人（同）
内 貳萬三千三百八拾三人 男
貳萬貳千三拾四人 女

出羽國　高百拾貳萬六千貳百四拾八石餘
一 同八拾七萬百四拾九人（同）
内 四拾六萬七千三百七人 男
四拾萬貳千八百四拾貳人 女

若狹國　高八萬八千貳百八拾壹石餘
一 同七萬八千七百拾五人（皆私領）
内 三萬九千七百六人 男
三萬九千九人 女

越前國　高六拾八萬四千貳百七拾壹石餘

一同三拾五萬四千三拾八人　御料私領

内　男拾八萬三千百七拾壹人　女拾七萬八百六拾七人

加賀國　高四拾三萬八千貳百八拾壹石餘

一同拾九萬六千七百貳拾五人　皆私領

内　男拾萬貳千六百六人　女九萬四千百拾九人

能登國　高貳拾三萬九千貳百八石餘

一同拾六萬七千五百三拾四人　御料私領

内　男八萬五千五拾四人　女八萬貳千四百八拾人

越中國　高六拾壹萬千石餘

一同三拾四萬五千四百拾九人　私領

内　男拾八萬千貳百貳拾貳人　女拾六萬四千百九拾七人

越後國　高八拾壹萬六千七百七拾五石餘

一同百七萬貳千九百四人　御料私領

内　男五拾五萬三千四百七拾七人　女五拾壹萬九千四百貳拾七人

佐渡國　高拾三萬三百七拾三石餘

一同九萬貳千四百拾人　皆御料

内　男四萬六千九百拾七人　女四萬五千四百九拾三人

丹波國　高貳拾九萬三千四百四拾五石餘

一同貳拾八萬貳千四百九拾三人　御料私領

内　男拾四萬六千七百八人　女拾三萬五千七百八拾三人

丹後國　高拾四萬五千八百貳拾壹石餘

一同拾四萬七千四百三人　同

内　男七萬四千八百五人　女七萬貳千五百九拾八人

但馬國　高拾三萬六百七拾三石餘

一同拾六萬七千五百四拾九人　同

内　男八萬七千貳百五拾三人　女八萬貳百九拾七人

因幡國　高拾七萬七百貳拾八石餘

一同拾貳萬八千六百四拾三人　皆私領

内　男六萬八千三百貳拾九人　女六萬三百拾四人

伯耆國　高拾九萬四千四百拾六石餘
一同（同）拾六萬九千五百七拾人
内　男九萬四百四拾貳人　女七萬九千百貳拾八人

出雲國　高貳拾八萬貳千四百八拾九石餘
一同（同）貳拾七萬九千百七拾七人
内　男拾四萬六千百貳拾貳人　女拾三萬三千五拾五人

石見國　高拾四萬貳千四百九拾九石餘
一同（御料私領）貳拾四萬五千貳百三人
内　男拾貳萬八千百六拾三人　女拾壹萬七千四拾人

隱岐國　高壹萬貳千百六拾五石餘
一同（皆御料）貳萬千六百六拾人
内　男壹萬八百八拾貳人　女壹萬七百七拾八人

播磨國　高五拾六萬八千五百拾七石餘
一同（御料私領）五拾九萬九千四百壹人
内　男三拾壹萬四千四百九拾人　女貳拾八萬四千九百拾壹人

美作國　高貳拾五萬九千三百五拾三石餘
一同（同）拾五萬三千三百九拾七人
内　男八萬五千百八拾八人　女六萬八千貳百九人

備前國　高貳拾八萬貳千貳百貳拾四石餘
一同（皆私領）三拾壹萬八千貳百七拾三人
内　男拾五萬貳千貳百人　女拾四萬六千七拾三人

備中國　高三拾貳萬四千四百五拾五石餘
一同（御料私領）三拾貳萬八千四百八人
内　男拾七萬四千九拾七人　女拾五萬四千貳百拾壹人

備後國　高貳拾九萬五千六百七拾八石餘
一同（同）三拾壹萬八千五百七拾七人
内　男拾六萬五千九拾六人　女拾五萬三千四百八拾壹人

安藝國　高貳拾六萬九千四百七拾八石餘
一同（皆私領）四拾九萬九千八拾壹人
内　男貳拾六萬三百拾貳人　女貳拾三萬八千七百六拾九人

周防國　高貳拾萬貳千七百八拾七石餘
一同（同）三拾五萬八千七百六拾壹人
内　男拾五萬八千五百七拾三人　女拾七萬百八拾八人

長門國　高拾六萬六千六百貳拾三石餘
一同（同）貳拾四萬七千拾貳人
内　男拾三萬三百三拾七人　女拾壹萬六千六百七拾五人

紀伊國　高三拾九萬七千六百六拾八石餘
一同（同）四拾七萬七千三百六拾壹人
内　男貳拾四萬五千六百貳拾四人　女貳拾三萬千七百三拾七人

淡路國　高七萬四百貳拾八石餘
一同（同）拾壹萬貳千四百四拾九人
内　男五萬八千九百貳拾六人　女五萬三千五百貳拾三人

阿波國　高拾九萬三千八百六拾貳石餘
一同（同）四拾貳萬五千三百四人
内　男貳拾貳萬百五拾七人　女貳拾萬五千百四拾七人

讃岐國　高拾八萬六千三百九拾四石餘
一同（御料私領）三拾九萬五千九百八拾人
内　男貳拾壹萬百八拾七人　女拾八萬五千七百九拾三人

伊豫國　高四拾四萬貳千百六拾三石餘
一同（同）五拾貳萬九千八百貳拾九人
内　男貳拾七萬九千六百八拾七人　女貳拾五萬百四拾貳人

土佐國　高貳拾六萬八千四百八拾四石餘
一同（皆私領）四拾萬九千四百拾三人
内　男貳拾貳萬千四拾九人　女拾八萬八千三百六拾四人

筑前國　高六拾萬六千九百八拾壹石餘
一同（御料私領）三拾壹萬三千四百貳拾人
内　男拾七萬八百三拾貳人　女拾四萬貳千五百八拾八人

筑後國　高三拾三萬千四百九拾七石餘
一同（同）貳拾七萬七千五百七拾九人
内　男拾貳萬五千七百貳人　女拾壹萬貳百四拾八人

豐前國　高貳拾七萬三千八百壹石餘
一同（同）貳拾三萬五千九百五拾人
　內　男拾貳萬五千七百貳人　女拾壹萬貳百四拾八人

豐後國　高三拾六萬九千五百四拾六石餘
一同（同）四拾六萬六千百六人
　內　男貳拾四萬四千貳拾三人　女貳拾貳萬貳千八拾三人

肥前國　高五拾七萬貳千貳百八拾四石餘
一同（同）七拾壹萬貳千六百五拾四人
　內　男三拾七萬三千六百八拾壹人　女三拾三萬八千九百七拾三人

肥後國　高五拾六萬三千八百五拾七石餘
一同（同）六拾七萬千三百拾六人
　內　男三拾四萬六千五百七人　女三拾貳萬四千八百九人

日向國　高三拾萬九千九百五拾四石餘
一同（同）貳拾三萬七百八拾三人
　內　男拾貳萬五千八百五拾六人　女拾萬四千九百貳拾七人

大隅國　高拾七萬八百三拾三石餘
一同（皆私領）拾壹萬四千百六拾六人
　內　男六萬千七百貳拾壹人　女五萬貳千四百四拾五人

薩摩國　高三拾壹萬五千五石餘
一同（同）貳拾三萬八千四百九拾三人
　內　男拾貳萬五千六百四拾七人　女拾壹萬貳千八百四拾六人

壹岐國　高壹萬八千七拾貳石餘
一同（同）貳萬五千三百六拾八人
　內　男壹萬三千四百七拾八人　女壹萬千八百九拾人

對馬國　高無之
一同（同）壹萬三千八百六拾貳人
　內　男八千百三拾四人　女五千七百貳拾八人

高合貳千五百七拾八萬六千八百九拾五石餘
諸國人數、都合貳千五百六拾貳萬千九百五拾七人

内 千三百四拾貳萬七千貳百四拾九人 男
千貳百拾九萬四千七百八人 女

附言、此國高本文を以てすれば、合高にあたり難し、又人數にも計算あたらざる所あり、いづれに誤寫ありや知るべからず、すべて原文に從ふ、

〔江戸人口小記〕享保より天保迄子午改

江戸府內人別書拔

御府內人別

享保六丑年改（諸國人數調の初年）	一五十萬千三百九十四人
同十一午年改	一四十七萬千九百八十八人
同十七子年改	一五十三萬三千五百十八人
元文三午年改	一四十五萬三千五百九十四人
延享元子年改	一四十六萬百六十四人
寛延三午年改	一五十萬九千七百八人
寶暦六子年改	一五十萬五千八百五十八人
同十二午年改	一五十萬千八百八十人
明和五子年改	一五十萬八千四百六十七人
安永三午年改	一四十八萬二千七百四十七人
同九子年改	一四十八萬九千七百八十七人
天明六午年改	一四十五萬七千八十三人
寛政四子年改	一四十八萬千六百六十九人
同十午年改	一四十九萬二千四百四十九人

文化元子年改　一四十九萬二千五十三人
同七午年改　一四十九萬七千八十五人
同十三子年改　一五十萬千百六十一人
文政五午年改　一五十二萬七百九十三人
同十一子年改　一五十二萬七千二百九十三人
天保五午年改　一五十二萬二千七百五十四人

右者御城下、豐島荏原葛飾三郡、町奉行支配場町人、寺社門前町々共、地借、店借、召仕、當歳迄の人數、尤他支配之町人、能役者、幷町宅にても、武家家來之分ハ、右員數之外に候也、

正德より弘化迄　江戸町數人口戸數

正德三年癸巳改
一江戸町九百三十三　内六百七十四町奉行支配、二百五十九御代官支配、

享保七年壬寅三月改
一町數千六百七十二町　一家數十二萬八千五百七十五軒　一人數五十二萬六千二百十一人、内男二十二萬五千七百人、外に沙門三萬六千九十六人、修驗者六千十五人、社人九百三人、盲人千人、

享保八年癸卯五月改
一町數千六百七十二町、一戸數十二萬八千五百五十五軒、
一人口五十二萬六千三百十七人、内男三十萬五百十人、女二十二萬五千八百七人、

享保九年甲辰七月改
一町數千六百七十二町、一人數五十三萬七千五百三十一人、

外に沙門二萬三百九十人、修驗者四千二百七十五人、比丘尼五千八百三十六人、

社人九百三人、大神樂荒神拂神子共六千七百二十三人、

新吉原八千六百七十九人、内男二千九百十八人、女千八百五十四人、遊女小女共三千九百七人、

○中略

弘化二年乙巳五月改

一人口五十五萬七千六百九十八人、内男二十九萬三千三百五十一人、女二十六萬四千三百七人、

附言、江戸町數戸數人口、享保十六年及び元文二年のものは、勘定所より得たり、其餘は好事家の記錄より取れる也、併せて年次を以て之を列記す、故に書式一ならず、精粗同じからずといへども、享保以來調査の大樣は左の如し、

一町奉行支配場の町人、寺社門前々共、地主、地借、店借、召仕、當歳までの人數を擧たる事、

一他支配の町人を除きたる事

一能役者を除きたる事

一武家及武家家來を除きたる事

一僧尼、修驗者、社人、盲人、巫祝の類ひ及び新吉原遊廓を員外に置たる事、

右數條に注意し、首尾通覽せば、梗略を案ずるに足らん、

〔享保通鑑三〕享保八癸卯年

一當七月改武家之外

江戸町數　千六百七十六町　家數　拾貳萬八千五百五軒

男女人數　五拾三萬千四百人　内二十二萬五千七百人男　三十萬五千百人女

出家　二萬六千九十七人　山伏　六千七十五人　禰宜　九百三人　神主　千七人

吉原人數　八千百六十一人 女八百六十一人

都合五十六萬五千四百八十二人、

〔京都御役所向大概覺書〕二洛中家數人數之事

一家數合三萬七千五百五軒　但正德五未年改

内

壹萬九千百五拾六軒　上京

壹萬八千三百四拾九軒　下京

一人數合貳拾八萬貳千七百拾九人、但右同斷、

内

拾三萬貳千四百六拾八人　内 男六萬九千四百九拾六人 女六萬二千九百七拾二人　上京

拾五萬貳百五拾壹人　内 男八萬二千六百貳拾六人 女六萬七千六百貳拾五人　下京

外ニ

家數合貳千百四拾四軒

内 千貳百軒 西本願寺寺内 九百四拾四軒 東本願寺寺内

人數合貳萬三拾六人

内

九千九百九拾三人　内 男五千三百四拾九人 女四千六百四拾四人　西寺内

壹萬四拾三人　内 男五千四百拾貳人 女四千六百三拾壹人　東寺内

洛中町數　千六百拾五町

洛中家數　三萬九千六百四拾九軒

洛中人數　三拾萬貳千七百五拾五人

　内

　男拾六萬二千八百八十三人

　女拾三萬九千八百七十二人

正德五未年人數高
男女合三拾五萬九百八拾六人

享保元申年人數高
男女合三拾五萬三百六拾七人

　未年人數ニ六百拾九人減

享保貳酉年人數高
男女合三拾五萬三拾三人

　申年人數ニ三百三拾四人減

享保三戌年人數高
男女合三拾四萬六千四百三十一人

　酉年人數ニ三千六百貳人減

享保四寅年人數高
男女合三拾四萬千四百九拾四人

　戌年人數ニ四千九百三拾七人減

四年之減九千四百九拾貳人〇中略

洛外町續町數幷寺社門前堀内家數人數之事

一町數貳百貳十八町

一家數五千貳百五拾八軒　但正德五未年改

一人數四萬千六百貳拾四人

　内　男貳萬千百四拾七人
　　　女貳萬四百七拾七人

出產届

〔小普請世話取扱書抜〕孫出生

孫出生御届書　八木忠三郎

覺

一私總領八木龍五郎妻儀、今三日卯中刻出產、男子出生仕候間、此段御届申上候、名附候者、猶又御届可申上候、以上、

子〇嘉永五年十二月三日　八木忠三郎

孫名附御届書　八木忠三郎

覺

一孫　私總領八木龍五郎總領　八木熊次郎

右此度出生之孫、書面之通名附申候、依之此段御届申上候、以上、

子十二月　八木忠三郎

〔例書四〕一越後國三島郡出雲崎町百姓六郎治と申者之女房、男子三人出產致候ニ付、申立候處、從公儀銭五拾貫文被下之、

但被下銭五拾貫文、御金藏ゟ御代官請取、手形ヲ以請取、御勘定仕上之村方受取書ヲ以、御勘定仕上致候事、外ニ御證文取不申候、

〔民事慣例類集出產〕出產アル時、借地借店ノ者ハ地主、家主（此家主ハ今ノ地所差配人ノ名稱ナリ）ヘ届ケ、地主家主ヨリ其所支配名主ヘ届ケ、名主方ニテ人別帳ヘ記入ス、（人別帳ハ今ノ戸籍）借地借店ニ非ル地主ハ、直ニ名主ヘ届、人別帳ヘ記入ス、維新後ハ區務所ヘ届ケ、戸長ニテ戸籍ヘ記載スルコトナリ、（武藏國豐島郡）

出產ノ節ハ、即日親戚ヘ吹聽シ、七八日間ニ其町名主ヘ口上ヲ以テ届ケ、寺院ヘモ届クルコトナリ、其小兒三歲ニナル三月十日迄ニ、（町村）人別改簿ニ記載シ、毎年（出生死亡）差引總計簿ヲ綴リ、三月

十日ヨリ四月三十日迄ニ、御代官所ヘ屆出ルコトナリ、甲斐國山梨郡
若シ三子出產スル時ハ、速ニ屆ケ出テ、町會所ヨリハ筋ヲ經テ藩廳ヘ上申シ、藩廳ハ相違ナキヤ否ヲ認メ、其出生ノ子女ヘ年齡十五歲マデ扶持米ヲ賜フ、一日玄米五合ゾヽ、三人壹升五合ナリ、加賀國石川郡、

(大江俊矩公私雜日記)文政七年十二月廿二日壬寅、橋本安藝來談、民衞事并肥前ゟ伊豆死去屆、禁中番頭ヘ可出哉否之事、昨日申遣故、今日刑部少輔被聞合云々、

(公用雜纂六)嫡孫承祖病死繼御屆

(朱書)文化三寅年正月十九日、堀田攝津守殿江專阿彌を以進達、

攝津守殿

御屆　　大久保大隅守

新御番大久保勘右衞門組
小長谷勘左衞門 寅六十歲

右勘左衞門嫡孫承祖小長谷錄之助、病氣罷在候處、養生不相叶、去十二月廿六日病死仕候旨、忌服屆申聞候、勘左衞門儀六十歲に罷成候處、外男子無御座候間、追而相應之養子爲相願候樣可仕候、依之申上候、以上、

正月十九日　　大久保大隅守

(坂井家日策)天保八年五月廿一日丁酉、塚原ゟ急使參ル、參リ候處、母公以の外不快ニ而候處、酉中剋養生不相叶、御死去被成候、　廿二日戊戌、大河原江屆振合問合致ス、　廿三日己亥、晝前十左衞門殿江病死屆差出候處、振合不宜ニ付、加筆致參ル、認直し差出候處、又々不宜ニ付、晝後一寸歸宅致屆書認直差出候、落手有之候、右ニ付塚原江參ル、大河原江屆書扣差出ス、　廿四日庚子、朝大久保勘三郎、小普請左衞門江病死屆扣差出、　六月八日甲寅、晝時十左衞門殿江叔母病死屆出ス、

行路病死人

〔民事慣例類集（死去）〕死去スル時ハ、即日寺院ヘ届ケ、親戚伍組名主ヘモ、口上ヲ以テ届クルコトナリ。（甲斐國山梨郡）

〔例書一〕一病死人引取人も無之、何方之者ニ候哉不相譯ば、死骸假埋ニ致置、人相年齢著服、幷相果居候始末月日等、委細認、村外れ往還杯江建札いたし置、其旨を以可相伺事、尤右之外、子細有之分は、是迄之通可相伺事、

〔三秘集七〕寛政七卯年六月、村送病人相果候ニ付、御用番安藤對馬守樣江伺、

私領分、備後國深津郡坪生村と申所江、去四月十八日晝九ッ時頃、旅人之病人たくらと唱候釣臺樣之者ニ乘せ、村繼ニ而送來候ニ付、同村役人共相改候處、阿州板野郡宮川村ゟ之送り添狀ニ而送り來り、領分品治郡雨木村百姓要藏と申者ニ而、四國順禮ニ罷出候由、右ニ付村繼ニ致し、領分安那郡上升田村江送り屆、同村役人共相改候處、右病氣之樣子ニ者相見候得共、差而氣遣敷儀も不相見候ニ付、食物等も手當致し、人足利兵衞、長十郎と申者ニ相渡、領分下竹田村江送り遣候途中、はこうしと申所ニ而病氣差重り相果候ニ付、人足之内上竹田村江罷歸り爲知候ニ付、同村役人罷越、はこうし村役人共、一同立會相改候處、病氣ニ相違無御座候、外ニ怪敷儀無之旨相屆候ニ付、郡中江相掛り候家來罷越、見分仕候處、右旅人年齢廿五六才ニ相見へ、疵所無之、著類、上ニ淺黄形付木綿單物、間ニ空色木綿裏淺黄木綿布子、下ニ水色紺竪縞木綿單物著し、白木綿下帶をメ、鼠木綿形付帶壹筋腰ニ有之、紺木綿胸掛壹ツ、幷所持之品左之通、（但此品書略之）

右往來、本地郡新居村大防、幷庄屋七左衞門と申者、奥印有之、一札所持仕罷在候ニ付、雨木村役人呼出相糺候處、右要藏と申者、雨木村之者ニ無之、尤及見聞候者ニも無之段申候ニ付、本地郡新居山村眞言宗福盛寺住持大防、庄屋七左衞門呼出相糺候處、右之通切手差出候も無御座、尤印形幷郡村名一體認方相違致し候段申立、雨木村庄屋七左衞門ニ奥印致し候哉と、是又相糺候處、名前

は相違不仕候得共、奥印致し候儀無御座、印形も相違仕候旨申立候ニ付、右死骸假埋ニ致し置候段、在所家來ゟ申越候、此上如何取計可申哉、奉伺候、以上、

六月十五日　阿部伊勢守

御附札

死骸最寄寺院江假埋申付、人相年齢著服、相果候始末月日等巨細ニ認、村外江往還端抔江致建札、六ヶ月見合、尋來候者無之候ハヽ、建札取除、死骸者其儘土葬ニ爲取置、雜物者右死骸取扱候者江爲取可申候、

(三秘集十二)享和三亥年五月、無宿體之者を雇置、急死ニ付、石川左近將監樣江問合、

秋元但馬守領分武州比企郡中山村百姓善右衞門宅江、太七と申者、去ル十八日ゟ罷越居候、右太七義者、行歩不叶候而、傘張を職ニ仕、近在所々膝行候而、右手業ニ而相暮申候者之由、右善右衞門方江相頼、十八日ゟ同廿日迄差置、傘爲張候處、同日夕、七半時頃、細工致し掛、氣分悪敷趣ニ而打倒候ニ付、早速同村醫師比企道作と申者、療養相加候處、甚樣子不宜候ニ付、生國居村相尋候處、言舌一向不相分、翌廿一日朝六時過、相果申候段訴出候ニ付、早速役人共差遣、死骸見分仕候處、両腰痩細、両股江附伸不申體ニ相見申候由、全急病ニ而相果候體ニ而、何之疑敷儀無之由、其節紺木綿襤褸竪縞單物著し、木綿眞田三尺帶、木綿白下帶仕、相果申候、太七所持之品、鼻紙入壹ッ、楊枝入一ッ、川越町伏見屋平兵衞請取書貳通、煙管袋一ッ有之、右之外、古紺木綿縞袷壹ッ、小倉帶壹筋、硯箱壹面、傘張道具箱ニ入、伏見屋平兵衞通帳二冊、右更紗風呂敷に包有之、太七儀出所居宅相尋候處、不相知候ニ付、近在ニ而相頼候細工先等問合候處、何方ニ而も出所存不申、無宿體之者ニ御座候由、依之同村正泉寺江假埋仕置、年齢著服其外所持品、相果候月日委細認、村外往還端ニ致建札、六ヶ月見合、尋來候もの無之候はゝ、其儘土葬ニ取置可然哉、此段御問合申上候、以上、

轉居移住

秋元但馬守家來
菅沼治兵衛

七月廿六日

但 御附札を以、伺之通可取計旨被仰聞之、

〔大坂要用錄諸四 斷書〕三日肆相濟候斷

乍恐口上

一私軒下ニ、當月幾日何時頃、年齢何歳計之男行倒相果候ニ付、御斷奉申上候處、御撿使被爲成下、同幾日ゟ死骸三日肆被爲仰下奉畏候、然ル處、今日四日目ニ相成候得共、右親類幷知逵之もの等も尋不參候ニ付、乍恐死骸片付之儀、被爲仰付被下候はゝ難有可奉存候、以上、

年號月日　何町 何屋誰
年寄 何屋誰

御奉行樣

一右最初御斷申上候御當番所江可申上、於御前假片付被仰付、

一右行倒もの他國之者にて、往來切手致所持候はゝ早速飛脚を以申達、申分無之候はゝ、其趣庄屋年寄ゟ一札を取可歸候、品ニより御召も可有之事、

但寺送り手形所持之者は、申達候ニ不及候、

一久離之もの、行倒病氣或者手負候節は、養生中親類江引取養生可被仰付候事、

〔御當家令條二十三〕覺

一御料幷私領百姓之事、其代官領主依有非分、所を立退候ニ付而、たとひ其主ゟ相屆候而も、猥不可返附事、

一年貢未進等有之者、隣郷之故を以、於奉行所、互之出入令勘定、相濟候迄、何レ成共可居住事、

一地頭之義申上事、其郷中を可立退覺悟ニ而可申上之、左もなくして地頭之身上直目安を以申上義、御停止之事、○中略

慶長八年三月廿八日　　内藤修理亮

青山常陸介

〔德川禁令考知行三十七〕慶應四辰年二月七日

御旗本御家人家族土著可被仰付旨

壹岐守殿御渡

覺

御旗本御家人家族之分ハ、勝手次第知行所江土著可被仰付候間、相願度面々ハ其段可申聞候、

但知行所無之向ハ、百姓地買受或ハ借受土著致し不苦候事、

右之趣、向々江可相達候事、

二月

〔大坂要用錄一〕引越斷之事

一町人勝手ニ付、他國江引越候節、於當地預ケ金銀賣懸ケ買掛一切懸り合無之旨、年寄町人連判にて願出候節は、於公事場直ニ可聞屆候間、其趣總代江申付、證文爲認本人幷年寄五人組印形取置可申事、

〔大坂要用錄四〕他所江引越願之事

乍恐書付を以奉願上候　　何町何屋誰借屋

何屋誰

一此度私儀、何ノ何之守様御領分、何州何郡何村江引越申度奉存候ニ付、乍恐奉願上候、尤於御當地買懸り買懸り、其外都て諸掛り合之儀、一切無御座候間、此段御聞届被爲成下候はゞ、難有可奉存候、以上、

年號月日　誰

右願之趣相違無御座候、尤諸懸り合之儀、一切無御座候段、町内江證文取置申候間、右他所引越之儀、乍恐倶々奉願上候、以上、

家主　何屋誰

五人組　何屋誰

年寄　何屋誰

御奉行様

一右者御月番御當番所江可願上、於御前御聞届之上、御請證文可被仰付候事、

但右願上候以前、本人幷請人を取、町内江一札可取置事、

〔續百一條〕覺

一日野中納言家來　藤井正助（實ハ嘉壽院様御借宅也）

只今迄東堀川上長者町上ル町平野屋三郎兵衛家ニ借宅仕候、此度中立賣通堀川東江入町醬屋七三郎家江致借宅罷越候、爲御屆如是御座候、以上、

享保十二年丁未正月十九日

〔民事慣例類集住所〕居住ノ地所又ハ抱地所ヲ買得ルトキハ、寛政度町法改正申渡板刻ノ通所有主ヨリ地所伍人組名主ヘ弘、全町内ヘ歩一金ヲ出シ、代替譲渡モ弘向ノ成規アリ、（武藏國豐島郡）

寄留　逗留

他所ヘ住居ヲ移ストキハ、其所伍組名主ヘ屆、町村ケ宗旨人別改帳ヲ除クコトナリ、〇甲斐國都留郡中略轉居ノ節ハ、五人組年番ノ者ヨリ人別送リト唱ヘ、一戸ノ人別書、及旦那寺ノ書付宗門人別帳ヲ受ケ、何町誰地、又ハ誰借家ヘ轉居ノ趣ヲ記シ、支配町代ヘ差出セバ、町代ニテ扣置キタル人別帳ト引合セ、無相違ニ於テハ之ヲ年寄ヘ差出シ、年寄ニテ裏書押印ノ上返付ス、之ヲ轉居先ノ組合、及地主ヘ持參スレバ地主ヨリ其地ノ町代ヘ差出ス例ナリ、〇越後國蒲原郡中略

移居轉籍手續ハ、出產婚姻ニ同ジ、借地借店ノ者タリトモ、元地ヨリ現住ノ地ヘ人別送差出シ、現今ノ送籍加除取計フコトナリ、又現今新開町屋ノ分借地借店トモ敷金ト唱ヘ、借主ヨリ前金ヲ出サシメ、追テ轉居ノ節渡スベキ旨證書相渡、預リ置ク場所モアルナリ、武藏國豐島郡

移居ハ本人ノ意ニ任スト雖、容易ニ轉籍スルコトヲ許サズ、信濃國佐久郡

元住所ノ名主ヨリ送籍持參ノ上、移居ノ町村ニ身元引受人ヲ立、其所ノ籍ニ入ルコトナリ、信濃國佐久郡

〔京都上京文書一〕禁制　上京室町頂壹丁

右被停止寄宿之訖、若有違犯之輩者、速可被處嚴科之由、所被仰下也、仍下知如件、

弘治四年六月二日　左衛門尉平花押

大和前司三善朝臣花押

〔諸例集七〕嘉永三年十月三日、戸田山城守殿〇老中高木幸次郎を以御下ゲ、

覺

娘兩人有之、何も他江嫁、右姉女里方同姓幼少ニ付爲養育、同姓方江逗留致し居候處、右姉女方江妹女相越、逗留いたし不苦哉之事、

但姉妹共後室ニ候事

御書面之趣、一覽仕取調候處、相當之書留不₂相見₁候間、篤と勘辨仕候處、姉女里方同姓幼少ニ付、爲₂養育₁逗留之上者、姉女右江罷越、逗留仕候義、時宜ニ寄、苦かる間敷哉ニ候得共、一體後室他江止宿之儀、不₂容易₁筋ニ御座候間、可₂然とは難₂申上₁奉₂存候、私共同役一統評儀仕、此段申上候、

十月

堀伊豆守〇大目付

長谷川甚兵衛〇御目付

同居

〔柳營諸舊例的七同居屆〕文化二丑年八月六日

同居御届

寄合 駒井半藏

小普請組西郷寄宮支配

從弟達 本多直橘

右直橘居屋敷家作大破ニ付、普請出來仕候迄、當分之內、私方江同居爲₂仕候、此段御届申上候、以上、

八月六日　駒井半藏

同年八月廿九日

同居御届

寄合 三枝主計

小普請組酒井但馬守支配

分知 三枝金彌

右金彌儀、勝手ニ付、私居宅之內江同居仕度旨申聞候間、當分之內、私方江同居爲₂仕候、此段御届申上候、以上、

八月廿九日　寄合 三枝主計

同年三月廿九日

御届　寄合 奥田主馬

御月番立花出雲守殿御届

同姓　　　　寄合　奥田八十郎

右八十郎儀、私方江同居爲仕候段、寛政十三酉年正月、御月番京極備前守殿江、私父松山御先手相勤候節、御届申上置候處、故障之儀出來仕候ニ付、此度小普請組久貝忠左衛門支配村田長庵儀、八十郎小舅之續を以、同人屋敷江拜領屋敷普請出來仕候迄、當分之內同居仕候ニ付、今廿九日引移申候、依之此段御届申上候、以上、

三月廿九日　　　寄合　奥田主馬

〔的例問答〕一養子實家江同居養家一宿之事

有馬左兵衛佐養子、肥前守、中屋敷住居之處、類燒之上、屋敷手挾、下屋敷無之、依之御届申上、松平薩摩守下屋敷實父榮應方ニ、當分同居致し居候處、屋敷違ニ付、式日抔者上屋敷江止宿登城仕度旨、問合候處、一通り申上置候得者宜敷候間、用事有之節者、致止宿候段、御届可然旨挨拶有よし、

〔諸例集五〕天保十三寅年七月

神尾山城守答

直九下屋敷家作無御座候ニ付、假普請出來迄、親類共江同居被仕候段、御用番様江被相伺候節、父隱居大藏儀も、同道同居仕候段、御届歟、又者伺等、矢張直九より申上候儀ニ御座候哉、別段隱居之儀者伺ニ及不申儀ニ候哉、

書面之趣者、當主より以名代被相伺、父隱居より者、別段伺等ニ者不及儀と存候、

一伺濟引移被仕候得者、翌朝御届、矢張名代を以、申上候儀ニ御座候哉、

書面之御届伺事等者、一類又者同列を以、被差出候方可然存候、

右之通、差掛り心得方奉伺候、以上、

七月十四日　長澤直丸家來　中島玄之丞

〔德川禁令考三十七屋敷〕文久三亥年九月廿三日

屋敷內ニ差置候者取調方之儀御書付、

有馬遠江守殿御渡　大目付江

萬石以下屋敷內長屋其外貸置候もの、幷由緒不知浪人、又ハ慥と致し候請人も無之中間小者等、一切差置間敷候、右ニ付而ハ、何れも組支配之者江急度申渡、銘々厚世話致し、此節も嚴敷相改候樣可被致候、若胡亂之者差置候段、外より相顯候ニおゐてハ、急度可被及御沙汰候條、可被得其意候、

右之通、去酉年相達候處、今以內弟子等之名目にて、由緒不知浪人もの等、同居爲致候族も有之候哉ニ相聞、以之外ニ候、御目見以上以下共、頭支配より夫々申渡、長屋ニ差置候者ハ勿論、地借之者迄も壹人別ニ相改、身元不慥成體之もの、一切差置申間敷候、若由緒有之候歟、又ハ身元等慥と相分居、地面內江差置、又ハ同居等爲致候ハヽ、生國幷名前歲附等相記、有無共、頭支配より早々大目付御目付江相達、自今以後、毎年四月書出可申候、尤今度御番方江、御府內晝夜廻り被仰付候間、胡亂成もの見懸次第召捕、又ハ討捨、時宜ニ寄、疑敷場所於有之ハ、踏込遂穿鑿候筈ニ候間、頭支配にて精々世話致し、取締行屆候樣可致候、若隱置候もの於有之ハ、急度御沙汰可被及候、

九月

〔德川禁令考後聚十六行刑條例〕

一貸金出入　緣正町家主彌兵衞方同居さん煩ニ付代　願人　右彌兵衞

南部丹波守家來　相手　金井庄司

右出入、捕者方江願出、追々取調中、去戌年十一月、相手庄司儀、不宜風聞有之候間、役儀取放、在所江可差遣旨御沙汰之趣、土屋紀伊守より申渡有之候ニ付、○中略

出居

亥五月

〔享保集成絲綸錄四十〕寛文六午年十月

一町中ニ人請ニ罷在候者之手前ニ、今程出居衆奉公人差置候はゞ、家主五人組立合相改、今月中ニでい衆壹人も不殘拂可申候、若でい衆出入候而、他所ゟ理有之者は、一口二口之出入之儀者、其出居衆之宿請人ニ申付、埒明させ、でい衆者早々拂可申候、出入三口有之でい衆、其樣子御番所へ訴訟可申上候、

右之趣、少も違背申間敷候事、

十月〇中略

寛文八申年正月

覺〇中略

一町中借屋店がり地かり候者共方ニ、でい衆と名付、徒者數多抱置、人請其外出入出來候間、前方相觸之通ニ、でい衆差置候はゞ、家主方江斷申、出居衆ゟ直ニ店請手形家主方へ取置、店衆致同前差置可申候、自然家主ニかくし出居衆差置者於有之は、急度曲事ニ可被仰付之事、

正月

〔天保集成絲綸錄百六〕寛政三亥年十二月

町觸

國々ゟ江戸表江出居候もの在所江立歸度存候はゞ、可願出旨、去戌年相觸候處、願出候もの少く候、畢竟江戸之自由なる風俗ニ迷ひ、故鄕之事をも忘却いたし、一日々々と打過候故ニ而可有之候、總而近來在方ゟ江戸江出候もの多く、在方人別相減じ、農業難行屆、困窮之國々もすくなからず、江戸表江出候者も、次第ニ人別相增、おのづから諸商賣薄く相成、是又難儀ニ及び候故、銘々在

寄子

所ニ罷歸り候樣申觸たる事ニ而、願出候もの者、路銀等御手當被下、夫々片付相成事ニ候間、心得たがひなく願可申候、且又近年者、奉公人も一體多く、一倍差支多く相聞候、取留候商賣も無之もの、幷厄介之類、可成だけ奉公ニ出可申候、在所ニ可立歸ものも、其期を過し、年盛の者も、奉公稼を嫌ひ、利潤薄き商ひ等をいたし罷在、次第困窮を重ね、ついには飢寒に迫り候事、其身之不覺よりとは乍申、不便之事ニ候得者、町役人能々心を用ひ、利害を申聞せ、右兩樣とも厚く世話いたし可申候、世話行屆候町々者、追而糺之上可及沙汰もの也、

右御觸之趣、町中家持、借屋、店借、裏々召仕之もの共迄爲申聞、町役人ども常々心掛ケ、右體之者厚く世話可致候、此旨町中不洩樣可相觸候、

亥十二月

〔書言字考節用集 四人倫〕寄子ヨリコ

〔新編追加 雜事〕一所當公事對捍輩事

右支配寄子等之處、對捍之間、惣領動人之訴申之時、有其沙汰、或以一倍令辨償之、或依時儀雖被棄許、所詮於前々分者、以一倍可致辨、自今以後、其未濟之條無所遁者、以被所領可被分付惣領、但惣領寄事於左右致煩者、可被仰付穩便之輩也、依仰執達如件、

弘安七年十月廿二日

左馬權頭平朝臣

陸奧守平朝臣

〔增善寺文書〕北條氏政下知狀

就蒲原在城申付寄子貳拾騎預ケ置候、急度可相尋候、扶持之儀をば、彼人衆出來之上、披露次第可遣、彼廿人之者、弓鐵炮致者を可被集候、依人步侍、依其身馬上可然候條、扶助者、人之可爲善惡次第者也、仍如件、

永祿十二年己巳
七月十九日　　　　　　　　　　　　　山角刑部左衞門尉奉之

江戸十里四方追放

布施佐渡守殿

○按ズルニ、右ノ年號ノ上ニ、北條氏ノ虎ノ朱印アリ、

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事〈○中略〉

一〈從前々之例〉寄子數ニ欠落ニ參候儀存候得共、證人と不レ存宿致し、雜物質置主に成、世話致遣、配分は不レ取者、

〔德川禁令考後聚〔四十〕寬政刑典〕奉公人給金濟方之事〈○中略〉

一人之仕業と相見候寄子之變死を、不存分ニ致候者所拂、

但人之仕業と不相見寄子之變死を、不訴出候はゞ叱り、〈○中略〉

一寄子之内、欠落及數度不尋出候はゞ、請人江戸拂、

〔家忠日記追加〔十八〕〕慶長七年十一月八日、松平三郎四郎〈于時十一才、後ニ越中守ト號、〉遠州掛川ゟ江戸ニ來て、本多佐渡守正信を以て上聞に達す、召て、西の丸ニ登て大神君〈○德川家康〉ニ謁す、寒天の參府御感の仰を蒙、本城ゟ來れる者の誰かあるの由御尋の所ニ、青山七右衞門候す、卽青山を召て、鈞命ニ曰、隱岐守定勝が三男遠州ゟ來て、台德院殿〈○家康子秀忠〉ニ仕んと欲、是卽我寄子なるの由を命有て、同朋善阿彌を相副られ、青山七右衞門と共ニ本城ニ登て、大久保忠隣を奏者として、三郎四郎始て台德院殿ニ謁す、

〔天保集成絲綸錄〔百六〕〕寬政二戌年八月

組合人宿共儀、銘々寄子ども之奉公先江召仕を代ニ差出し、代印も爲致、用向辨候儀者、格別ニ候處、右召仕どもを、品川、千住、板橋、内藤新宿等之口々江差出置、國々ゟ江戸稼ニ出候もの共を見掛候得者、寄子ニ可致旨、自分之方、品々勝手宜敷樣成事共取飾申聞連參、寄子ニいたし、其もの若し

部屋子

病氣等之節者、非道之取扱いたし候ものも有之由相聞、不埒之至ニ候、以來右體口々江人差出置候儀者勿論、僞ヲ以自身之寄子ニ引入、其上不仁之取扱致候儀相聞候はゝ、急度相糺、嚴敷咎可申付候條、一同兼而其旨可相心得候、

戌八月十二日

〔記事條例十六〕文化五辰年八月九日

一南紺屋町善右衛門店一番組人宿善藏申上候、三十間堀四丁目喜兵衛店五番組人宿半助下受人ニ取、私寄子長八と申、四十一歳罷成候もの、御書院番頭戸田和泉守殿御屋敷江中間奉公ニ差出置候處、暇出候間、引取候樣申來候ニ付、當月三日、私幷右半助一同御屋敷江罷越、引取罷歸候途中、長八義致欠落候、然ル處同人雜物之由ニ而青梅袷一、木綿縮單物一、木綿襦袢一、右御屋舗井上宇八と申仁ゟ被相渡候得共、私ども見覺不申品ニ付、則持參爲御訴申上候由、右之善藏煩ニ付代惣八、家主善右衛門、五人組善兵衛、名主源太郎煩ニ付代利八、幷右半助召連申來ニ付、右品取上、以來右之もの見當候はゝ召連可訴出旨申付之、

〔寶曆集成綜論錄二十九〕寛延三午年四月

武士屋敷輕奉公人、部屋子與申、傍輩ニ無之者ヲ差置候、其内ニ者、外屋敷取逃欠落致候もの、又は奉行所ゟ尋之者茂有之、右體之者部屋々々ニ罷在、博奕等茂致候旨相聞候ニ付、向後武士方屋敷屋敷部屋々々遂吟味、不召抱者は一切不差置筈ニ相成、屋敷々々ニ而嚴敷吟味可有之候、町方ゟ差出候奉公人共、他之者一切部屋ニ差置申間敷候、

右之趣、先年相觸候處、又々猥ニ罷成、右體之儀有之由相聞、不届ニ候、向後は奉公先ニ而、傍輩ニ而茂無之者ヲ決而差置間敷旨、組合惣人宿ども幷其外身寄ニ而請人ニ成候素人宿ども、寄子共江急度可申聞置候、以後主人方役人江押隱シ右體之者差置候はゝ、當人は勿論、他之者差置候奉

公人之諸人共迄、重ク咎可申付候、

右之趣、急度可相守候、此旨町中可觸知者也、

四月

送籍

古事類苑

政治部六十一

下編

戸籍中

〔例書六〕一先年被仰出候有之候、御府内ゟ田舍江、養子亦者婚姻致候節可届處江不届、且又支配役所々々江尋候處、田舍ゟ嫁、又者罷越候ニも、不届越相開候、男女ニ不限、江戸者田舍江罷越候得者、江戸人別帳除、田舍者江戸江罷越候者、其村之人別相除候事ニ候得者、可届處江急度届、宗旨人別帳除候樣可致事ニ候、尤奉公稼等之儀、男女ニ不限、田舍者江戸江罷出奉公稼仕候者、其向々支配領主地頭江届置而在所江歸候迄も、其村之人別帳を除き候樣、御料者御代官、私領者領主地頭ニ而可被取調候旨申渡有之、

一御料之百姓他村江奉公稼ニ罷越候者、勤候內者、其村人別を除、先村ニ而者人別帳江加候樣、尤奉公勤仕退候而在所江引込候節、其村之人別江加可申事、

一田舍ニ而他村江養子又者娘嫁候者、奉公人同樣歸住不致事ニ者候得共、右ニ準じ人別除キ、先村ニ而者人別帳江加候樣可致候、

〔德川禁令考六十戸籍〕人別送リ案文

割印　一生國何國何郡何村

何宗何町何寺　店請人何町何町誰店誰

何渡世

何町誰店

誰　何何歲

一生國右同斷

妻

誰　同何歲

一生國右同斷

伜 誰 何歳

右之者、此度何町誰店江引越候ニ付、元町人別帳相除候間、此段申送候、以上、

年號月　　　何町名主 誰

何町名主

誰殿

下ケ札

> 此割印ハ名主扣人別帳と送書とへ、名主方押切印判致候ヲ、轉宅先名主方江差遣し候積リニ御座候、

右之外奉公住并縁付候類案文略

右者北御番所江伺御下知有之候事〇中略

御當地出生之者、他國江養子又者養女等ニ差遣候節、右村方ニ人別送リ左之通相認、差遣申度事存候、

人別送之事

一生國御當地

宗旨何宗

右誰儀、其村方百姓誰方江養子ニ差遣候旨申出候間、當町人別相除候儀、相違無御座候、其村方人別江御差加可被成候、

江戸何町誰店 誰 何何歳

年號月日

何渡世 何町誰店 誰印

家主 誰印

五人組 誰印

前書證儀、町方人別除帳致候、以上、

名主　誰印

何國何郡何村

村役人中

本文名主共實印可仕儀ニ御座候處、一體是迄他國之者共、御當地地面所持致候者も有之候間、他國江追々數通印形差出置候儀、何共追年心配仕、殊ニ送ﾘ書ハ當人相渡差遣候儀ニ付、可相成儀候ハヽ、押切印形仕置申度、一同再應勘辨仕候上、此段御聞濟奉願上候、

六月　組々名主共

下ケ札　書面申立候趣一應尤之筋ニハ候得共、在方免許狀等之見渡も有之候間、實印之方可然候、

右之通西之內堅紙ニ相認、京大坂ハ勿論、諸國共右准、人別送差遣し申度奉存候、

一在方之者、御當地町人共江養子又者養女等ニ貰請候節、右村方より其町名主宛ニ人別送書差越候節、右人別送請取書名主共實印ニ而差遣可申旨申越候村方も有之候得共、人別送之儀ハ、其當人村方除帳ニ相成候、當人持參致候上、家主江相預候間、右請書ハ其町家主五人組之者より差出申度奉存候、

下ケ札　書面送り書之儀ハ、是迄迚も同樣之儀ニ而、當人持參候儀ニ付、其家主心得を以、請取差遣候ハ格別、別段連印之書面等不及差出候、○中略

右廉々奉伺候、以上、

卯（天保十四年）六月　人別掛名主共

右之通北御番所江伺候處、七月朔日御付札を以被仰渡候、

原編

〔大坂要用録三證文〕人別送り一札

一町内何屋誰借屋何屋誰、并女房誰、同悴誰、右何人此度勝手ニ付、其御村方何屋誰方江引越申候ニ付、以來町内人別相除キ申候間、其御村方人別ニ御加へ可被成候、尤宗旨之儀者、何宗ニ御座候、右何人共於當地ニ諸掛り合等一切無之候、爲後日人別送り一札仍而如件、

年號月　　大坂何組何町

何州何郡何村

御村役人中

〔地方凡例録七〕一勘當舊離帳外之事

附り

一義絶之事

一帳外者は不行跡ニ而、親類村役人種々異見等加へ而も惡事不相止、外ゟ度々難題申來ルニ付、村方宗門帳ニ加へ置候へば、如何樣之災難可致出來も難計故、親類村役人申談、地頭江願、帳外ニいたし、村方追出ス事あり、是も親類承知ニ無之、村役人計ニ而は帳外難願、尤親類無之者は、五人組村役人申談相願事也、〇中略

一勘當舊離、其外共帳外者之儀、御代官承屆帳外申渡、其段御勘定奉行ゟ相達れば、奉行ゟ町奉行江使者を以相屆町奉行所より書替とて、使者口上を書寫相渡ス、尤年號月日計ニ而名印等なし、町奉行之日記之寫與見へたり、右書付を御證文同樣取置、若後年ニ至、帳外者歸村願儀有之時、右書替差出歸住被仰付、若書替無之帳外者は歸住伺不相成、大切成書物也、依之場所替最寄替ニ而、村方引渡せば、右書付も跡御代官江引渡事也、私領ニ而も頭支配有之面々は、帳外申付たる趣、頭支配は相屆れば、頭支配ゟ町奉行江達書替取置由なり、諸侯方之分は直ニ留守居之者書付ニ而、町奉行所江持參差出書替取置、歸住之節は同然なり、

〔記事條例二十六〕明和九辰年十一月朔日

一西丸御書院番頭小笠原越中守方ゟ断、私組伊奈兵庫知行所、武藏國足立郡花栗村百姓藤助妻きよ、四十八歳、同人次男清次郎與申拾六歳罷成候もの共、當二月廿三日欠落致し候ニ付、所々相尋候得共、行衞相知不申候、右體之不埒ものニ御座候得者、先々おゐて如何樣之惡事仕出可申も難計候間、向後妻きよ儀者離緣致し清次郎儀者久離仕、村方人別帳相除キ度旨、右藤助幷村役人一同相願候間、願之通申付候旨兵庫申聞候、爲後日相達候由、使者佐野五兵衞申來候、

〔氏家叢書三〕一文化三寅年二月九日、遠江守領分、上總國長柄郡本鄉村百姓長八と申もの、三ヶ年以前、江戸奉公稼罷出、其後致歸村候へども、身持不宜、丑春中致欠落、行衞不相知候旨、屆出候ニ付、三十日切尋申付候へども、不尋出候間、叱之上、願之通親類久離帳外申付候處、○下略

〔小普請世話取扱諸控〕地頭帳外

知行所百姓除帳御屆　　森精藏

覺

大和國添下郡高山村百姓　仁兵衞　寅四十九才
右同人悴　爲藏　寅二十二才

右私知行所大和國添下郡高山村百姓仁兵衞幷同人悴爲藏儀、同村庄屋作兵衞其外之百姓共相手取、當二月中出府、右相手之者共呼下シ、取調具候樣、兩度願出候得共、追々農業專ら之時節、殊ニ近年不作、村方困窮之折柄、多人數遠路失費、自然村方衰微ニ茂至り候故、呼下シ候儀を取上不申、し知行所之内、丹波國船井郡四和歌村取締役申付置候井尻新七儀者、帶刀格式等茂差免、理非相辨候者、殊ニ高山村ゟ者程近之儀ニ茂有之候ニ付、地頭ゟ茂下知致候間、同人方江罷越取調請候樣申渡候處、何等之故與申廉茂無之、右申渡候趣違背致候而已不成、仁兵衞儀、去月六日、阿部伊勢

勸當

守殿○老中登城之節、懸籠訴致、御引渡相成、右は不容易致方ニ付、去月十九日御屆申上候通、家來上橋眞兵衞右兩人之者召連、彼之地江差向取調可申間、道中其外心得違等不仕樣申渡、同日出立、東海道吉原宿迄召連罷越候處、川支ニ而同宿江逗留中、去月廿四日、右兩人共逃去候故、早速相尋候得共、行衞相知不申旨、家來眞兵衞罷歸申聞候、右者不屆之致方、此上何樣之惡事仕候哉茂難計、且向後之取締ニ茂拘り候儀ニ付、右仁兵衞爲慶兩人共、知行所村方人別除帳仕候、右之趣、上奉行衆江御達被成下候樣奉願候、依之此段御屆申上候、以上、

亥○嘉永四年四月　森精藏

〔下學集態藝下〕勸氣カンキ　勸當カンダウ爲君父所譴之義云云

〔新編追加侍所〕一放埒輩令安堵事侍例

苹名遠江前司子息次郎左衞門入道法名忍性御勸氣之時、同道于樣摺、諸國流浪之後、令入院壽福寺畢、子息宮鶴丸、同子吸食號越一房、而敵仁舍弟三郎左衞門尉、彼忍性出放埒、乞食之間、不可爲御家人領之由、訴申之處、爲四番御引付雜賀彌四郎入道奉行、被沙汰之、依勸氣諸國流浪之間、放埒之條、非沙汰之限、將亦壽福寺入寺事、彼寺者爲將軍家御願之間、被准御家人之條、被封佐之上者、不及子細、仍忍性父子共預御裁許畢、加之修行雖遁之時、憑諸人之愛顧助身命者通例也、而無左右稱乞食非人之條、惡口咎依難遁、三郎左衞門尉被召籠之、三郎左衞門尉子息企越訴、爲御宮入道奉行御沙汰最中也、

〔源平盛衰記三〕小松大臣敎訓入道事

小松殿○平重盛此事ヲ聞給テ、イソギ入道ノ許ヘ參ジ申サレケルハ、御報答ノ仰、努々有マジキ事ニ候、重盛ガ子共、平殿上人ニテ、殿下○藤原基房ノ御出ニ參會テ、致無禮コソ尾籠ニ侍レ、縱越前守コソ若者ニテ、骨法不知トモ、相具タル侍共ガ、不思議ニ覺候、彼等ヲコソイカニモ可有御勘當事ト覺

ユレ、賞盛全耻ニテ侍ルマジ、誠ニ武士ナンドニ合テ、題目ニ合タラバ御感深カルベシ、上下品定マレリ、不及敵論、○下略

〔吾妻鏡　四〕元暦二年○文治元年五月廿四日戊午、源廷尉義経如思平朝敵訖、剰相具前内府○平宗盛参上、其賞兼不疑之處、日來依有不儀之聞、忽蒙御氣色、不被入鎌倉中、於腰越驛徒渉日之間、愁欝之餘、付因播前司廣元、奉一通歎状、廣元雖披覧之、敢無分明仰、追可有左右之由云云、

彼書云

左衛門少尉源義経、乍恐申上候意趣者、被撰御代官其一、為勅宣之御使、傾朝敵、顕累代弓箭之藝、雪会稽耻辱、可被抽賞之處、思外依虎口讒言、被默止莫太之勲功、義経無犯而蒙咎、有功雖無誤、蒙御勘氣之間、空沈紅涙、○中略

元暦二年五月日　　左衛門少尉源義経

進上　因幡前司殿

〔例書　一〕一出奔、欠落、勘當、舊離之事、○中略

勘當之事、同居之忰難見居、追出し候を勘當と云、弟子を追出し候も同様ニて候、但同居之忰不埒有之致欠落候者、其時者勘當ニ而者無之、舊離にて候、其驗者勘當不致内、自分ゟ欠落致候得者、最早後難を為不受計ニ而、久離にて候、

〔例書　一〕一勘當者勘當請候者、心體直り候得者引戻し、人別帳江加申候、又舊離は引戻難成、一度舊離致候得者、其者一代在處町所江歸り候事難成候、

一舊離、勘當、義絶致度願者、子、妹、弟、甥、姪之類、願出候者、何故舊離歟、又者勘當、拙者義絶致候哉、且勘當請候ものは、未親之許に居候哉、又外江所帶を持罷在候哉、勘當ニ而も、舊離ニ而も、請候者之居處ヲ願書ニ為認可申候、

〔例書三〕一勘當致候悴、他所江罷越致惡事、其上首縊候ニ付、其處ゟ右悴親元江相斷候由、依之右之親悴變死を爲見屆、親罷越候處、首縊方襟元ニ而咽を廻し、繩ニ而〆、誠ニ〆殺し候體ニて、心得難き縊方之由、不承知之旨申之、依之首縊人私領所ニ付、勘當致候節、村役人連印ニて願書差出候處、地頭役人願事不取上候得共、村方人別帳者、村役人共、右悴五ヶ年以來人別帳ヲ除置、右人別帳ヲ年々地頭所江差出置候、於然者、地頭所ニ而者、願書不取上候得共、人別帳を除、差出置候得者、右首縊人者、其村之者ニては無之候、首縊人之親、人別帳ヲ除有之を乍存、彼是申出候筋無之、畢竟首縊人自滅致候得者耐、右自縊方不宜趣申之候と存候、若首縊人他所にて惡事致候段、他村ゟ其村江申遣候者、其節者此方勘當致置候事ニ候得者、親元ニて構申筋無之旨可申答事ニ候、首縊方彼是及難澁候者、五ヶ年以來人別帳ニ、其方悴除キ可置筈無之候、今更種々申出候者、不屆至極ニ候旨、及吟味候得者、一言之申披キ無之旨、口書差出、右之一件首縊而已ニ而事濟、

〔例書六〕一相州愛甲郡煤ヶ村傳兵衞悴傳吉儀、同村九兵衞方江養子ニ五六ヶ年以前遣候處、實父傳兵衞、右傳吉心ニ不應義有之由にて、右悴傳吉を勘當致度旨願出、依之申聞候者、右傳吉儀、一旦九兵衞方江養子ニ遣候上者、傳兵衞宗旨人別帳ニ者、五六ヶ年以前相除、養父九兵衞宗門人別帳ニ傳吉名前出候上者、勘當仕度とは心得違ニ而、信用致難事ニ候、尤實父之事ニ候得者、義絶等者各別之事ニ候、利解申聞候處、左候者辭合不奉存、最初之通御願申上候得共、全義絶仕度段願直候ニ付、尙亦申聞候者、其方悴傳吉ヲ義絶致候迚、九兵衞方人別帳を九兵衞不願ニ、傳吉帳外ニ者難成事ニ候段申渡し候所、九兵衞方ニ而者、一旦傳吉養子ニ貰請候處、實父傳兵衞義絶致候得者、若傳吉不縁之節者傳吉を引請候者無之候而者、其節取計致兼候間、傳吉江申聞候者、傳兵衞其方事構申間敷、其方引受候者、誰ニ而も指候樣申聞候處、傳吉實母方之叔父、同村作兵衞と申者引受候由ニて證文極メ、其趣ニて九兵衞方納得致候段、九兵衞申出候ニ付、右一件落著致、傳兵衞義、一旦

傳吉事、九兵衛方江養子ニ遣候得共、右傳吉取戻度存念ニ而、右之通願出候趣意、九兵衛方ニ而も察し、九兵衛方ニ而諸事穩便ニ取計候旨申之、

〔公事取扱〕跡式養子離別後住幷引取人〇中略

一闕落の届致置候といへども、勸當の届無之、外江可引渡者於無之者引渡之、

〔例書〕〔一〕一出奔、欠落、勸當舊離之事、〇中略

舊離之事、兄姉ハ弟妹、伯叔父母者甥姪を舊離と唱候事、

〔地方凡例錄〕〔七〕一勸當舊離帳外之事

附リ 一義絶之事

一舊離は兄姉伯叔父母等目上之者ゟ、弟甥等目下之者を、難見届時相願致舊離、目下ゟ目上を舊離與云事は不成、又致欠落行衛不知者、先々ニ而悪事等仕出シ、親類に難儀可掛も難計、舊離致時、親類之内目上之者壹人加り、夫に差添るは弟甥從弟等も一同に舊離仕度與相願而も不苦、若欠落者舊離帳外願ふ時、目上之親類無之、其帳外計可願なり、舊離與は不成、從弟等ニ而も、本家ゟ分家を致舊離は不苦、分家ゟ本家舊離致事は、目上たり共不相成事也、親類不和ニ而中を差ふ與云事あり、内證ニ而中差ひ、相互に因を斷事は勝手次第、公儀領主地頭江願可致舊離は右之通なり、勿論内證ニ而因を切たり共、何ぞ親類ニ可掛ル罪科、或は欠落者等、又年貢等之儀、表向に成たる時は、内證之舊離は申立には不相成、外親類並違背は難成なり、〇中略

一村方等ニ而は舊離さへ致せば、其者悪事仕出るも、難儀は不掛事與心得居れば、一通之事は舊離帳外致たる方へは掛ざれ共、其者至而重罪有之時は、縱離舊帳外致たる者ニ而も、親類江尋等被仰付事有之、さすれば致舊離たる共、血筋は難遁、さつはり與御構無之與は申がたし、村役人も帳外致たる者故、不構與申儀は不相成、併御咎を蒙る節過料は手鎖に成、手鎖は急度叱り

抔、一等輕くは相成レども、役人一向無御構ニは不相成由也、

〔天保集成絲綸錄九十九〕寛政八辰年七月

町方ニ而久離差出候もの共數多く候、親子兄弟之敎等等閑ニて、多くハ幼少之時分より我儘に育、終には親兄弟等之手にも餘り候あふれ者ニ成、其時ニ至り久離帳外ニ成候へば、多くは眼前ニ無宿飢渴にも及び、或者惡事をいたし、重刑に行はれ、又者乞食非人と成り、一族も耻辱を受候事ニ候間、久離帳外之事、人倫ニおゐて不安事ニ候條、一族は勿論、所役人等精々心を附候て、子弟其外身代不持者ども、邪路に不入樣に敎育を盡し可申候、其上ニも不得止事不久離して難儀は一族幷所役人迄も相揃訴出可待差圖候、筋ニより不得止事は尤聞屆可遣候、

一是迄家出又は闕落もの、出先ニ而如何樣之惡事可致哉難計由ニて、久離帳外願候得共、此儀者猶更不容易候、兼而之儀は、等閑ニ致し置、右之節ニ至り、役難を存じ、久離候類は不埒ニ候條、是亦吟味之上聞屆可遣候、

一父母幷一類共ニ久離可致心底者無之處、所役人共後難を量り、一族江も申勸、久離願わせ、不承知ニ候はゞ、家明可願旨申渡候類は、所役人共心得違成筋ニ候、一族銘々者勿論、所役人等も一同其旨を存、猥に者久離不致事分計り可訴出、左候はゞ猶利害之申聞方も可有之候、尤糺之上、品ニ寄久離も聞屆遣ニ而可有之事、

右之趣、町々不洩、其方共ゟ可申聞候、

〔例書〕一舊離勘當欠落者有之候得共、町奉行月番江相屆、書付差出ス、右月番町奉行ゟ、別段右趣意書譯候而書替出、右之書替を非番町奉行所江差出、別段右之趣意相認、月番寺社奉行幷月番公事方御勘定奉行江壹通可差出候事、

〔大坂要用錄四諸斷書〕久離願一件之事

一札

一私忰誰と申、當何ノ何歳ニ相成候もの、近年身持放埓にて、親兄弟幷親類之異見をも不相用、不孝之致方、剰何ノ何月ゟ家出仕候程之不所存者ニ付、此上如何體之惡事等可仕哉、後難之程難計候ニ付、此度親類共一統相談之上、久離ニ願上度候、左之連判之外諸親類壹人も無御座候、勿論右誰江常々久離之儀申聞置候間、右願書ニ奧印被成下度御願申入候、尤此外ニ親類抔と申違亂妨等申者有之候はゞ、此連印之もの罷出急度埒明、御町内江少も御難儀懸ケ申間敷候、爲後日一札仍て如件、

年號月日

誰父　何屋誰
同母　誰
何町 同伯父　何屋誰
何町 何屋誰同家 同伯母　何屋誰

右之通相糺候處、相違無御座候、以上、

家主　何屋誰

年寄　何屋誰殿
五人組中

〔記事條例十六〕天保四巳年五月廿七日、麹町拾貳町目半兵衞店庄藏欠落帳付壹通、幷右庄藏を同居之母きのより、久離帳付壹通、向方ニて聞濟帳面江記候旨屆出候間、欠落久離同日ニ者聞濟可成旨、右町名主與兵衞後見茂左衞門代佐市江申渡、向方江差遣候處、欠落者帳面江記、久離之方は追而願出候樣下知有之候間、尙申來欠落帳面江記遣候事、

〔小普請世話取扱諸控〕家來忰勘當

私家來忰久離勘當御屆　馬場錠三郎

覺

私家來用役
柴田勝右衛門忰
柴田啓次
巳歳二十七

右啓次儀、常々身持不宜、其上家内衣類、其外等持出賣拂遣捨候間、親幷親類共一同相寄、度々異見等差加候得共、一向取用不申、彌增長仕候上、當六月十六日家出仕、行衛相知不申候段申聞候間、尋方申付候處、今以行衛相知不申、右體不埒者ニ御座候得ば、於先々何樣之惡事仕出申候哉、後難之程難計奉存候ニ付、此度久離勘當仕度段、親勝右衛門幷親類共ゟ申出候間、猶亦相糺候處、相違も無御座候ニ付、右之段三奉行衆へ御達被成下候樣仕度奉存候、依之親幷親類共連印之願書寫相添、此段御屆申上候、以上、

巳〇安政四年　七月　馬場錠三郎

〔公事取扱〕跡式養子離別後仕幷引取人〇中略

一久離帳ニ付置候といへども、久離被致候もの之子、引取人無之ニおゐては、久離の無差別、其親類へ預ケル、

〔德川禁令考〕四十七諸法度　慶安三寅年

不孝之子取計之事

覺

一親ニ不孝仕、其上不屆物とて、親子之きうりを切追出、御帳に付申候、就夫被仰出候、左樣之者於有之ハ、御番所江召連可罷出候、籠舍被仰付、心直候ハヾ召歸し、其忰養育可仕事、

寅十一月十四日

〔依田豐前守覺帳十六ノ百十八〕一向後御組之者久離帳附ニ、譬爲ニ者甥、譬爲ニ者從弟抔与有之候はゞ、別々ニ書上ニ記候樣ニ可仕候、屋敷方帳附之儀者、唯今迄之通ニ可仕候、

右之通、三好助右衞門を以被仰渡候、以上、

但同心江者、年番ゟ直ニ當番之物書江申渡候事、

亥〇寶暦五年十一月六日

〔棠蔭秘鑑利〕久離可被免ため、親宅江參、可致自滅与申威候もの御仕置之事、

寬保元酉年十一月、御仕置之例、　武州西ヶ原村　藤七

此藤七儀、不行跡ものニ而致出奔ニ付、親始親類共致久離處、被免候樣致度存念ニ而、親八右衞門并同村姉聟吉左衞門方江參り、脇差を拔可致自滅旨申威し候仕形、不屆ニ付、輕キ追放可申付哉与相伺、其通被仰渡候事、

〔記事條例二十六〕一文化五戊辰年八月十二日、井上美濃守江問合、九月廿一日附札濟、

久離仕候者之悴を、嫡孫承祖ニ仕、其後久離差免同居罷在候內、右悴出奔仕、行衞相知不申候內、病死仕候段、嫡孫承祖之者、他ゟ承知仕候節者、親之忌服受候儀ニも御座候哉、且出奔仕候得共、病死後故、屆書等差出候而も不苦候儀ニ御座候哉、此段奉伺候、以上、

八月十二日　稻垣若狹守家來　根尾助左衞門

附札　書面之通者、父死去候旨告來候はゞ、聞付ル日ゟ忌服五十日、服十三月ニ而候、久離致し候者之悴を、嫡孫承祖ニ致し候儀者、御家ニ無之儀ニ付、難及挨拶候、

但死後屆方等之儀者、服忌外之儀ニ付、別紙を以可被御問合候、

○○○○

〔公用雜纂五〕家來悴久離差免　何役何之誰家來

右謹儀、不行跡ニ付致久離、何年何月何日御届申達候處、當時何方ニ罷在、心底相直り候ニ付、右謹始親類一同久離差免度旨相願候ニ付、願之通申付候、依之御届申達候御帳面御消可被下候、則先達而之御書付進達仕候、以上、

何之誰伜　何之誰

月日

何之誰使者　何之誰

〔大坂要用錄四諸願書〕久離之もの赦免願之事

乍恐口上

一私同家實子誰儀、身持不行跡ニ付、親類之者連印を以、何ノ何月幾日久離之儀奉願上、御聞届被為成下難有奉存候、然ル處右謹心體相改、親兄弟之交仕度段、日々相詫申候ニ付相糺候處、是迄惡事等も無御座候趣ニ付、何卒久離之儀、御赦免被為成下候樣乍恐奉願上候、御聞届被為成下候はゞ、御慈悲難有可奉存候、以上、

年號月日

何町　何屋誰

親類中

家主

五人組

年寄　連印

御奉行樣

〔赦書集乾〕舊離帳外之者差免候節之事

一文化十四丑五月八日、舊離帳付願置候御書院番安藤出雲守組久貝文三郎知行所、上總國夷隅郡刈谷村百姓庄吉弟清藏御免願例書左之通、

筒井伊賀守　　駒木根大内記

文化十四丑五月十八日、御書院番頭安藤出雲守方より断、私組久貝文三郎知行所、上総國夷隅郡刈谷村百姓庄吉弟清藏与申貳拾七歳ニ相成候もの、同村百姓幸助方へ聟養子ニ差遣候處、常々身持不宜候ニ付、度々異見差加候得共不相用、去る十一月朔日離縁請候而、翌二日闕落致候間、追々尋申付候得共、今以行衛相知不申候、右體不埒者ニ付、此上於先々如何樣の悪事可仕出も難計候間、兄庄吉并叔父忠藏、次郎兵衛始、諸親類舊離致し、村方人別帳相除キ申度旨、組合村役人一同相願候ニ付、願之通申付候段、又三郎申聞候、爲後日以使者相達候、

安藤出雲守使者　古橋左仲

右清藏儀、此節心底相直、舊離差免度段、同人實母さよ相願、尤先達而帳附相願候節、右さよ名前書加江不申段者、不調法之旨申立右さよ願之通申付候旨、又三郎申聞候、依之使者を以相達候、

駒木根大内記使者　笠原半次郎

右之通、文政十一子十一月廿四日、三奉行所江使者を以口達致し、相濟候事、

〔氏家叢書三〕一文政三辰年六月廿四日、町奉行榊原主計頭儀、御書替添差出候處、死失之者を御帳消之義、御尋候間、田沼玄蕃頭樣ニ而之御例手扣差出候處、御書替江書継有之、御渡被成候、夫々荒尾但馬守樣江も罷出、御帳消相濟、

小出信濃守家來中山覺之進次男　中山八太郎　當辰三十二才

右八太郎義、覺之進致同居罷在候處、兼々不行跡御座候而、度々異見相加候へども、兎角不相用、末々難見屆御座候間、覺之進初諸親類共、致久離度旨相願候ニ付、願之通申付、文化十酉年六月廿七日、御帳記置申候處、右八太郎其後心底相直、今更後悔致候旨ニ而、信濃守家來白木五八と申者を以、度々相詫候ニ付、久離差免申度旨、覺之進相願候間承屆、其段御帳消之義、御達可申と

義絶

存居候處、八太郎義致病死候、右之通ニ而、八太郎存生之内、久離差免度、親之進相願候間、願之通申付候、御帳消可被下候樣致度、此段以使者申達候、以上、

六月廿四日　小出信濃守使者　堀井忠左衛門

略○下

〔草茅危言五〕久離願之事

一世ニ不肖ノ子ヲ官ニ告テ放逐スルヲ、久離ヲ切トイヒ、親族一統連判ニテ願ヒ出テ、官許アルコト也、カヽル者百人ニ一人ハ改メ悔テ、願ヒ戻スモアルベケレドモ、大方ハスグニ惡友ニ從ヒマス〳〵頑凶トナリ、竟ニハ刑辟ニ觸ルヤウニナルベシ、不便ノコト也、父子天性ノ愛ナルニ、其マヽオケバ家ヲ亡シ、父母ヲ殺スベキ故、止コトヲ得ズシテ放逐ヲ願ヒ出ルハ尤ナリ、タヾ官ニテソノ處置ノアルベキノミ、敗子ノ罪ヲ正シ、重キハ遠遷ニ從ヒ、輕キハ徒罪ニ入ベシ、徒罪ノ年限滿タラバカヘシツカハシ、改メズバ又ツレ出ヨト命ジ、重子テ願ナバ、又年限ヲ益テ後ニユルシ、三度ニ及ビタラバ遠遷カ、又ハ終身ノ徒罪カ、其品ニテ定ムベシ、モシ亡命セバ、捕ヘテ絶島ニ從スベシ、是ニテ大惡ヲ仕出シ、死刑ニ陷ルヲ免カルベシ、恤刑茅議ニ、カノ永牢ノ所ニコノ條ヲ載タリ、左ニ錄ス、

恤刑茅議ニ曰、亡頼子弟ヲ親族ノ訴ヘ出テ籍ヲ除ク有、スベテ受ニ入テヨシ、(永牢ナイカヾ也)人ニ隨ヒ年限アルベシ、心ダニ改マラバ、籍ヲ除クマデモナシ、限ミチテ親族ニカヘシ與フベシ、改ラズバ終身モヨシ、凡カヽル類ノ者、親族ヲ離レテ何ヲスベキカハ、願ノマヽ籍ヲ除キ、追拂給フハ、偏ニ盜ミヲセヨ、火ヲ付ヨト敎ヘ給フニ有ラン、イタマシキ敎也、

〔南留別志二〕一義絶といふは、夫婦君臣にいふ詞なるを、父子に用ゆるは大きなる誤りなり、

〔南留別志の辨〕義絶はやまとからともに、もはら夫婦にいへり、令に妻を弃るに義絶、淫佚、惡疾を犯すといふ事あり、義絶のしなもくはしくみゆ、

〔地方凡例錄七〕一勘當舊離帳外之事
附り
一義絕之事

一義絕トいふは、百姓町人にはなし、武家計也、百姓町人にては舊離、武家に而は義絕トいふ、仕方は前條舊離同然、義絕も目上之もの、且本家を分家ゟ義絕は不成、勿論他人を義絕ト云事なし、隣家等親類同然致心安たる處、何ぞ子細有之、不和に成、互に出入等不致共、夫迄に而義絕ト申筋には無之、舊離は目上之親類不加しては難成けれども、義絕は從弟同士に而も、本家末家之無差別、共義絕いたし、相互に頭支配江屆相濟、雙方勤仕之身分に而も致義絕事有之なり、

〔御成敗式目〕一讓與所領於女子後、依有不和儀、其親悔返本作遷否事

右男女之號雖異、父母之恩惟同、爰法家之倫雖有申旨、女子則憑不悔返之文、不可憚不孝之罪業、父母亦察及敵對之論、不可讓所領於女子歟、親子義絕之起也、既教令違犯之基也、○下略

〔紀事條例二十六〕文化十三子年十二月廿四日、御坊主良務を以達ス、

永田備後守

久離、義絕唱之儀者、都而目上之者ゟ目下之者江因を絕候を久離と唱、對々之續合之者は義絕ト唱候儀、古來ゟ之仕來ニ而、者家ゟ目下之ものを義絕、對々之者を久離ト斷有之候節者、仕來之通認直し、書替相渡候儀ニ御座候、且忌服請方之儀者、久離義絕之無差別、忌服請候心得ニ御座候、乍併右者町奉行所之心得迄之儀ニ付、取極候而者、御挨拶仕兼候間、忌服請方之儀者、其筋江御問合御座候方ト奉存候事、

同月　布施三平を以出ス

御番方
與力

久離義絕ト唱方、并久離仕候者服忌之儀ニ付申上候書付、

親族之內、目上之者ゟ目下之者を追出、又者通路を絶候を久離与唱、對々之續合之者は義絶与唱候儀、元極幷久離之方ニ而者忌服無之、義絶之方ニ而者忌服受候定も有之候哉、兩樣共取調可申上旨御尋御座候、

此儀、久離義絶之唱起立之儀者、確と相分り兼候得共、都而目上之ものゟ恩儀を絶候を久離と唱、對々之續合之もの者義絶与唱候儀、兩御役所共、古來ゟ之仕來ニ而、右之通取扱來、御役人方其外諸家ゟ目下之者をさし義絶与唱、對々之ものを久離と斷來候類者、御役所仕來之通ニ相直、書替相渡し候定例ニ有之、且久離致候もの、病死致し候節者、服忌令ニ義絶之親類服忌無差別与申御ヶ條之通ニ、久離之親類も同樣、忌服受候心得ニ御座候、乍去御役所ニ書留無御座相分兼候ニ付、他向之振合相調候處、別紙之通ニ付、則奉入御覽候、

右取調候趣、書面之通御座候、依之申上候、以上、

文化十三子年十二月　　御番方　與力

〔的例問答〕一義絶者問合之事

文化二丑之年三月、本多氏被問合候處、左之通下札答有由、

覺

一養父方　私伯母死聟何某隱居總領　何某

一從弟　右同人次男　何某　兄手前ニ罷在候

一從弟女　右同人娘　何某　右同斷

一同　同斷　何某

但右從弟女之儀者、他家へ嫁申候、私存寄無御座候、

右從弟女幷伯父死聟隱居之義、拙者存寄有之候ニ付、義絶致度存罷在候、然處右義絶之義者、寛政

三亥年七月、御書取之趣も相心得罷在候得共、不得止事時宜ニ相成候者、義絶可致哉と存候、左様之節等御届等如何執計可申哉、

一右他家江嫁申候従弟女義者、拙者存寄も無之候間、義絶致兼候得共、右之もの兄姉等義絶致候ニ付而者、右ニ准じ存寄無之迚も義絶可致義ニ候哉、

右之趣、兼而相心得居申度候間、御問合申候、

答

書面従弟従弟女伯母死聟とも存寄有之、不得止事時宜ニ而被及義絶候義ニ候得者、其趣を以御届有之、且他家江嫁候従弟女義、存寄無之候者、義絶致し候ニ不及、通路可被致候段、御届有可然哉与存候、

右長屋長三郎答被申由也

〔諸例集三〕天保五午年十月

須田大隅守挨拶

父死去後、継母里方之兄より継子江筋合不宜儀申募り候節、継子者勿論、外親類之者も、一統存意ニ叶不申候得ば、譯柄ニ寄、継子より継母之里方及義絶候而も不苦儀ニ御座候哉、

一継母儀、常々継子与不和ニ有之候處、父死去後別而相募、継母之始末不宜、家内和熟不致由相聞候節者、主人より右継母儀、里方江差戻候様申付候而も不苦儀ニ可有御座候哉、且又前文之趣ニ付、親類之者より主人江相願候得者、願之通継母儀、里方江差戻候様申付候而も不苦儀ニ御座候哉、

右二ヶ條之趣、兼而心得罷在度奉存候、此段御問合申上候、以上、

中川修理大夫家来
曾我平馬

十月廿日

書面之通は御家ニ無之事ニ付、難及挨拶候、

〔吾妻鏡六〕文治二年六月十五日辛酉、安樂寺別當濫望人義絕狀

爲安樂寺別當濫望、背氏擧、依起大衆義絕事、

右背父命者非子道、背氏擧者非氏人、然者在般〈在瓦子〉不可爲子也、嚴實〈是綱子〉不可爲氏人、天神御起請有限任氏擧、次第所補任也、今背氏擧、起大衆之輩、公家可禁、別氏人可儀絕之狀如件、

〔吾妻鏡十〕文治六年〈○建久元年〉七月廿一日癸酉、信實遂出家逃亡云云、可召進其身之旨、雖被仰盛綱、更無所于求之、仍永令義絕訖、不可讓與立針地之由言上、仰曰、信實雖爲廿未滿小冠、難知祐經所存、早向祐經、可謝此趣者、盛綱報申云、於祐經、兼不挾宿意、唯臨時信實現奇恠思、其不義不能左右、然而盛綱爲彼父、令陳謝之條、頗非勇士本意、爲上計可被宥仰歟者、聊相叶理致之由、依被思食、以邦通爲御使、被仰曰、盛綱已令義絕信實訖、於其向後不可有所存者、祐經申云、思事濫觴、信實道理也、隨而小冠所爲更無確執、況於盛綱、不存異心畢云云、

〔吾妻鏡二十〕建曆二年五月七日辛酉、相摸次郎朝時主、依女事、蒙御氣色、嚴閤〈○北條義時〉又義絕之間、下向駿河國富士郡、彼傾公、去年自京都下向、佐渡守親康女也、爲御臺所官女、而朝時耽好色、雖通艶書、依不許容、去夜及深更、潛到彼局、誘出之故也云云、

〔春日神社文書二〕春日御社執行正預從四位上中臣能基、次預從四位下中臣能行義絕中舍兄前正預能淸子息權預能繼、同舍弟散位能綱、同三郎能近、同四郎能兼等身事、

右能淸、能基、能行、身體髮膚共禀父母、前進後昇、同爲祠官、付內付外、或親或疎、而近年彼等之行、於事現不當之上、爲能基能行、付內外致腹黑之間、遠近之聞非穩便、言語道斷、未曾有之行儀也、證據證人子細多員、不遑毛擧、貴賤皆以所知食也、加之雖此所他鄕、猶以定致猥藉歟、倩思事情、彼等更不可有一門之儀、仍令義絕畢、然者乘御遺迹、蒙賜五師三綱御證判於此狀、欲備向後證驗而已、謹處分

仁治三年七月　日　　次預從四位下中臣能行

執行正預從四位上中臣能基

儀絕狀明白也、仍五師所署判、

法橋上人位在判　法橋上人位在判　大法師在判　大法師在判　大法師在判

儀絕狀明白之上、五師所加判、仍三綱與判、

權都維那法師　都維那法師　都維那威儀師　都維那威儀師　權寺主大法師在判　權寺主大法師在判　權寺主法橋在判　寺主法橋在判　寺主法橋在判

〔明良洪範續篇七〕寬永年中ノ事也シ、小幡勘兵衛景憲、實子ナキ故、何某ノ二男ヲ養子トシケル、其頃御旗本ノ若輩ナル面々、丹前風迚、髮ノ結樣ヨリ大小衣類等ニ至ル迄、異樣ナル風俗也シ、小幡ガ養子モ、若年ノ事故、其風ヲ學ビテ、鏡二面ヲ用ヒテ、髮ヲ結ケルヲ、父景憲見咎メテ申ハ、若輩ナレバ迚武ノ家ニ生レシ身トシテ、二面ノ鏡ヲ以テ形ヲ改ル事、遊女野郎ノ所行也ト立腹シ、義絕ニ及ビ、其後橫田次郎兵衛ガ子ヲ育ヒケル、

〔柳營諸書例的八〕文化二丑年十二月五日

義絕和談御屆

寄合　谷主計

菊之間縁頬詰　山口修理亮

右修理亮、祖父藏人死從弟之續御座候處、存寄御座候ニ付、義絕仕候段、元文年中、藏人儀、御書院番神尾大和守組相勤候節、大和守江相屆申置候處、右書面、此度雙方熟談之上、和談仕、周防守方江以來通路仕候、依之此段御屆申上候、以上、

十二月五日

寄合　谷主計

〔三秘集十一〕寶曆七年二月八日、逆離之事ニ付久離通路之譯、

町奉行所書替　但是者御月番ニ而認、御非番御奉行江相廻、寫之上相下候事、

一堀田出羽守方ゟ断極者家來長瀬和田八實父原田十兵衛與中、六拾貳歳罷成候者、主人暇差遣、浪人ニ罷在候處、常々不覺悟者ニ付、末々如何樣之義仕出可申茂難計御座候ニ付、向後右和田八始親類共不殘、久離申付候、爲後日相違候由光賀源藏申來候、

右體之振合、安永三午年三月已前者、久離屆ニ而相濟候得共、假令主人ゟ申付候而茂、逆離之事ニ付、以來者久離之屆者不承屆、通路致間敷候旨申付候、屆者帳面ニ記候ニ相極候、尤右年月後、父母其外目上之者を通路致間敷旨申付候屆者數名有之候事、

〔記事條例二十六〕文化元子年七月五日、戸田采女正殿江御直上、即刻近藤吉左衛門を以御下、則承付いたし、同八日同人を以返上、

西丸御書院番頭山口和泉守問合挨拶之儀ニ付、奉伺候書附、

書面、野澤義一郎與、同人忰通路之儀、楠山晦翁ゟ差留候者、右忰兩人共、無辨幼年者之儀、殊ニ無據始末ニ付、伺之通挨拶仕、以來之儀も、忰共右樣之儀ニ而、無據譯も有之候ハヽ、右義一郎ニ見合取計可申旨被仰渡、奉承知候、

子七月五日　　小田切土佐守

西丸御書院番頭山口和泉守與力楠山文左衛門從弟
元同人與力當時浪人
野澤義一郎

右義一郎儀、文左衛門父楠山晦翁甥ニ有之候處、常々身持不宜、度々異見差加候得共不相用、不所存ものニ而、末々難見屆候ニ付、晦翁者久離いたし、文左衛門儀も致義絶、尤義一郎幼年之忰兩人文左衛門方江先達而引取置候ニ付、右忰兩人共義一郎と通路之儀、晦翁ゟ差留申度段相願候由、願之通承屆候而も可然哉之段、山口和泉守問合申候、依之先例相糺候處、父母ゟ忰を久離いたし、又者兄ゟ弟を久離致候節、久離被致候ものゝ弟忰等江通路を右親兄ゟ差留候旨申立承屆候、先

例者口々有之候得共、此度之晦翁と義一郎者、伯父甥之義、文左衛門も従弟之續ニ付、久離義絶仕候共、文左衛門手前ニ差置候義一郎伜者晦翁又甥ニ有之候間、父義一郎江通路之儀、大伯父之晦翁ゟ差留候儀者、右例共譯違、容易ニ承屆候儀難仕哉ニ奉存候、然共右體不所存成ものニ、幼年之もの共を差添置候者勿論、通路等爲仕候而者、成長之上之成行無覺束存候も、於人情無餘義筋御座候間、父子之儀とは乍申、義一郎江伜ゟ之通路、義一郎伯父晦翁より差留候儀、前文先例ニ准、晦翁願之通承屆候而も可然旨、和泉守江挨拶可仕與奉存候、尤相當之例無御座候儀ニ付、評定所一座江も申談候處、一同可然段申聞候、以來之例ニも相成候儀ニ付、此段奉伺候、以上

子七月　　小田切土佐守

〔柳營諸例的八〕文化二丑年十月十二日

通路不仕候御屆　　寄合　本多又三郎
朝比奈河内守組　本多金之助

右同姓金之助儀、私父兵庫存寄御座候ニ付、通路不仕候、依之私儀も同様通路不仕候、此段御屆申上候、以上、

十月二日　　寄合　本多又三郎

〔氏家叢書三〕一文化八未年九月、根岸肥前守様御組與力生田祐九郎江、板倉荒之進様御留守居柏原庄助殿ゟ問合、

目上之者不行跡ニ而、目下之者より以來通路不致候段、主人迄申出候はゞ、承屆候上、御屆申上候而も宜敷筋ニ御座候哉、又は不致通路候段、目下之者ゟ相願候と申義は不相成、主人ゟ以來通路致間敷旨申付候はゞ、其段申上候義ニ御座候哉、

附札

逃亡　逃散　逐電　出奔　欠落　家出

御書面之通、目上之者不行跡を、目下之者ゟ致、通路致間敷段御届は、見當り不申、主人ゟ以來通路致間敷段、申付有之旨御届向は、毎以御座候、以上、

〔例書一〕一出奔、欠落、勘當、舊離之事、

家出之事、親子兄弟其外其家ニ同居可致筋之者、心ニ不應義有之、其家を出候而、親類縁者好身之者抔之方江參居、不立歸を家出と唱候事、

立退候事、不身上ニ而、妻子養育難成、立退、身を隱候を家出と云、同居之者立退候者欠落ニて有之候、立退とは詞ニ而名目ニ而者無之候、

逃散之事、御取箇筋、其外諸拜借等之義、總而百姓之心ニ不任義有之、其村中亦者貳ヶ村三ヶ村申中合、田畑家屋敷を捨、其處を立退候を逃散と相唱、勿論逃散者妻子を連立退候を逃散と云、欠落出奔

逐電之事、欠落は出奔を略しての名目ニ而候、逐電者大勢群候中ゟ引はづし、行方不知ヲ逐電と云、當時者無之事、

〔記事條例十七〕一諸家家來之内、徒士以上出奔與唱、足輕以下欠落與唱來候事、

一御目見醫師帳附、當人病氣ニ而名代弟子召仕等罷出候節、番所江申立候ニ付、書替相渡、非番江可相廻、右弟子召仕者、御目見以下之者召仕同樣可取扱事、

〔貞永式目〕一百姓逃散時、稱逃毀、令損亡事、

右諸國住民逃脫之時、其領主等稱逃毀、抑留妻子、奪取資財、所行之企、甚背仁政、若被召決之處、有年貢所當未濟者可致其償、不然者早可被糺返損物、但於去留者宜任民意也、

〔信玄家法上〕一逐電之人々田地、取借錢之方者、年貢公事以下地頭へ速可辨濟之事、

〔法隆寺衆分成敗曳附并諸證文寫〕天正三年九月朔日、於垣内藤次郎ト云物、家ヲ開令逃亡、彼屋宅之儀者、貢錢へ質物ニ入置、期限以相過故、可然本方へ可被進退存分之處、爲寺役者既ニ被撿封候、

依及申事、集會評定曰、盗人生捕事者、爲聞實否也、仍一旦被撿封儀者、掟法之旨雖爲尤、實晉進退之事、證據多々在之上者、理不甚被撿斷事、布而無其謂者歟、自然別ニ存知之體雖在之、其家寺令逃毀、次第早速ニ被沒收者、向後借屋幷家質等沙汰不入物類若其儀者要旨乍立號開家、無理ニ被沒收者、侘傺之族、逃毀不期何時條、兼而兩對ヲ申乞、其借主可尋之間、門戸ヲ可閉置歟、若無其償者、庶本ニハ手ヲ可被空者哉、所詮寺家之科人幷理手無之家分者、撿斷勿論也、萬一爲其家之主申理體有之而證文無隱者、其主可爲進退旨、一味同心條、其通ニ取置了、

一別逃亡人之開家撿封後、卅日之間被相待、其内ニ不令還住、兎角申子細無之者、寺家へ可被沒收旨、評定如件、

天正三年乙亥九月廿六日　　公文代

沙汰衆

〔享保集成絲綸錄 三十九〕寛文十三丑年三月

一町中ニ而借屋、店借り、地がり之者欠落仕候はゞ、其家主ゟ早々名主江相斷、家主五人組立合、其者之諸道具以下、紛失無之樣ニ相改、其品々を書立、御番所江可申上候、屋守家主ゟ不埒成儀有之由ニ候間、自今以後、念を入可申候、若不沙汰ニ仕候儀、脇ゟ相聞候はゞ、家主五人組者不及申、名主ニ御懸り可被成候間、無油斷念を入可申事、

三月

〔地方凡例錄 二〕一欠落百姓跡株之事

欠落百姓有之段訴出る時、家族有之者は、家族幷親類五人組村役人呼出、欠落いたしたる始末、巨細遂吟味、若不埒之筋等有之歟、或は喧嘩口論等ニ而、人ヲ痛メ立退きたるか、其子細ニ依て掛り合之者共、夫々呼出、遂吟味取計、時宜ニ隨ひ、口書等取極、御奉行所江伺べし、左も無之、身上不如意

ニ而、年貢等ニ差詰候か、又は借金多く、返濟之方便無之、無是非、妻子田畑等を捨致欠落、無罪之者か、得と致糺明、掛り合之者口書取之、定例之通、御勘定所江相屆、何れも定法之通、三十日宛六限ニ尋申付、百八十日相尋、不尋出時は、尋方等閑之趣、親類村役人叱置、請證文取之、永尋伺差出す、永尋之上、相續人無之者之跡株は、親類引請可致相續、若親類無之は、村中好身之者致吟味引請さすべし、好身も無之跡株相續人於無之は、建家家財は致入札相拂ひ、年貢未進等有之ば、村役人方へ請取、未進等無之節は、拂代金は差上ニ致し、田畑は村總割ニ申付、年貢諸役相勤させ、種肥代等作方之費用引之、餘分有之ば是又御料者御代官、私領は領主地頭へ相納、後年ニ至り、欠落人立戻、科於無之は、元地主へ被下之、又罪科有之者は勿論、上へ對し罪科無之共、村方ニ而不埒不屆有之、居住難成致欠落たる趣、吟味之上露顯ニおゐては、妻子共夫々相應之咎も付事ニ而、田畝欠所か、又は相續人無之は、取上御拂に致ス事也、

〔民事慣例類聚失踪〕滯金公裁中ニ非ルモ、失踪後貸主ヨリ地主家主へ屆アル分、又ハ全戸失踪ノトキハ、即日建家家財闕所トナリ、人別除帳スルコトナリ、（武藏國豐島郡）

失踪者アル節ハ、近邊心當リノ所々相尋ネ、知レザルトキハ五七日ヲ過ギ、伍組并名主へ屆ケ、夫ヨリ書付ヲ以テ、支配所へ屆出、三十日限リノ尋方申付ラレ、六ケ月ヲ過ギ、猶行衞知レザルトキハ、永尋申付ラレ除籍スルコトナリ、（甲斐國山梨郡）

百八十日ノ尋方ヲ爲シ、終ニ行衞知レザルトキハ、戸主ナレバ其家祿ヲ沒シ、家族ナレバ其戸主ヲ罰スルコトナリ、（甲斐國山梨郡士族例〇中略）

失踪者アルトキハ、親族組合ニテ心當リノ所ヲ尋ネ、終ニ知レザル時ハ、組頭へ口上ニテ屆ケ、組頭ヨリハ其戸主、（若シ戸主失踪スレバ、其戸主ニ代ルベキ者、）組合、親族、組頭、連印ノ屆書ヲ以テ、直ニ撿斷へ屆出ヅ、撿斷ニテハ、右組合親族ノ者共呼出シ、事故相尋ネ、猶又嚴重探索スベキ旨申付ル、（日限ノリナシ）家親

族組合、其外從前目明（ノアカル）ト唱ヘタル捕亡役ノ下使抔頼ミ、遠近村落ハ無論、他領迄相尋子、且ツ行先止宿ノ處ヨリ證文受取來リ、彌行衛知レザレバ、又更ニ右證書相添、失踪ニ相違ナキ旨、前段ノ手續ヲ以テ屆出レバ、（屆書中除帳被下度旨記載ス）右屆書ヘ撿斷添書ヲシテ、町奉行ヘ出ス、失踪屆濟ノ上ハ、宗門奉行ニ於テ格帳（戸籍ノ類ナリ、是ハ失踪者追放者等、都テ處刑ノ者ヲ記載ス、）ニ記載シ置キ、二月ニ至リ宗門改ノ節其名ヲ除ク、拔參宮（無斷伊勢參宮スルモノ）ノ屆モ前ニ同ジ（羽前國置賜郡）

失踪ハ即日ニ屆ケズ、精々探索シ、終ニ行衛知レザルニ至リ、頭役ヘ書面ヲ以テ屆タルコトナリ、但除族ノ制アルヲ以テ、窃ニ疾火ト唱ヘ隱居セシム、（疾火ハ狂ヲ云フ、行衛知レザルモ親族ヨリ隱居ヲ願ヒ、失踪セザル體ニナシ置コトナリ、）其頭役タル者モ亦恕シテ之ヲ詰責セザル慣例ナリ（羽前國置賜郡士族例○中略）

遺留セシ地面建家資財トモ、事故ナケレバ家族ヘ下付スレドモ、書入質等ノ證據分明ナルトキハ、其貸主ヘ渡ス例ナリ、家族活計ナリ難キ者ハ、親戚地受人等ノ内ヘ附託スルコトナリ、（武藏國豐島郡）

遺留財産ハ其家族ニテ管理シ、若シ老幼ノミニシテ、管理スル能ハザル者ハ、伍組、親戚、村吏等ニテ差配シ、追テ本人立戻ルカ、又ハ戸主定ル節、計算シテ之ヲ返附ス、又財産モ無ク老幼ノ家族ノミニシテ、活計立難キ者ハ、親戚及伍組等ニテ扶持ス、（甲斐國八代郡）

〔御定書百箇條〕欠落者之儀ニ付御仕置之事。。

一（從前々之例）請合人も無之欠落者圍置候者　過料
　名主役儀取上　過料五貫文

延享元年
同二年　極

一（欠落もの欠所可成家屋敷なとに於隱置候には）　家主　重過料
　五人組　過料

家出いたし候月ゟ、十ヶ月過候はゞ可縁付旨可申渡候、

寛保四年追加　一　夫家出いたし行衛不相知候者の妻、外江縁付度旨於願出は、

〔享保集成絲綸錄　四十〕寛文六午年十一月

一人請ニ立候而、方々ゟ居有之者、又手鎖ニ而願候者、遂穿鑿候處、大形不殘屋守屋敷ニ候、自今以後欠落者之居有之ば、屋守早速內所ニ而可相濟候、若兩番所へ斷有之ば、請人をば手鎖をおろし、總店之者ニ預ケ、毎日封印を改めさせ、屋守をば籠舍ニ可申付候、但內所ニ而不相濟分有之者は格別之事、○中略

右之通、來月朔日ゟ可申付候間、家守之もの共ニ可觸知者也

十一月

〔記事條例　七〕寛政十一未年四月、中西千左衛門を以上ル、根岸肥前守殿江御相談相濟、同年七月十八日御下ゲ、翌日承附致返上、

請合人不取置者之儀、其外品々奉伺候書付、

書面伺之趣、御附札之通相心得可申旨被仰渡奉承知候、

續附

未

七月十八日

中島三郎右衛門
藤田六郎右衛門
廣田清六郎

島　喜太郎

中島三郎右衛門

藤田六郎右衛門

廣田清六郎

家守請人幷店請人不取置、又は一旦請合人取置候得共、當時家守請人店請人無之者駈落いたし、帳付願出候節、帳付願當人御咎之儀取調候處、以前者都而過料被仰付候處、天明之頃ゟ以來は、最初ゟ請人取置不申者、其店江引越候節ゟ駈落致候迄之日合無數分は、多分札不被仰付、直ニ急度御叱、或は御叱り被置候ものも有之、稀々ニは過料被仰付候儀も有之、且亦最初は請人取置候得

共、當時無其儀ものゝ之儀も、年月之程合ニ寄、御叱又者御咎無之儀も有之例、區々相見申候、右は近來之御振合に候はゞ、日合何程は過料何程以下は叱度御叱りと御極可被成候哉、乍去事體町法を背候ものゝ之儀ニ付、一統過料可被仰付候哉、

下ゲ札
書面家守請人幷店請人不取置、又は一旦取置候得共、當時家守請人店請人無之者脈落いたし、帳付願出候節、其願人御咎之儀者、最初ゟ請人不取置候ものは、日數無拘ニ別過料被仰付可然候、且請人死失又は落脈落候後、跡請人不取置者は、日數を定置、譬十五日內は御沙汰ニ不被及、其餘は一統御叱り可被置候哉、

但店子欠落いたし候ニ付、店請人方江申遣候處、店請人も先達而致死失候歟、或は脈落致候旨、其家主申之、初而右之趣致承知候ニ付、是等は御咎ニ不及、店請人方之家主ゟ死失欠落之儀不為相知不念ニ付、店請人之家主呼出、御叱可被置候哉、併是者店請狀取置候節、先方家主江相斷置候義を不為知節之儀ニ有之候、萬一店請狀致し候砌店請人之家主江斷不置候はば、通法ニ背候間、其家主を御叱り可被置哉、乍去右體巨細ニ相成候はゞ、却而向後手重ニ相成、如何可有御座候哉、此儀兩端ニ而治定難仕候、

朱書
本文之通、請人無之、家守店子欠落致し、帳付願出候節は、是迄追而御沙汰可被及旨御下知申渡、吟味方ニ而口書取調申候、

本文之通、此方ニ而も是迄御同様ニ御座候、然れども、急度叱りニ可相成ものニ候はゞ、右申渡は御番方ニ而取調不申、掛り江相渡、取調之上ニ而之儀ニ御座候、

此儀最初ゟ店請人も不取置家主共は、別而不埒ニ付、日數之無差別、一同過料三貫文、一旦店請人有之候得共、其者死失致候後店請人不取置類は、三十日以上は一同急度叱り、其以下は咎之不及沙汰、

御附札
書面最初店請人不取置家主共は、日數無差別過料三貫文申付、一旦店請人有之、店借置候もの、三十日以上は急度叱り、三十日以下は不及咎之沙汰、

但聊ニ而も吟味筋有之者は、吟味方江可相廻事、

一請人不取置奉公人欠落致し候帳付、右主人御咎之儀も、區々御座候處、是亦右ニ准シ、以來御極可被成候哉、

但出居衆請人不取置類も、本文同前與奉存候、且懇意又は同國者之好身ニ而、手前ニ差置候もの、儀は、欠落帳付ニ付、前々ゟ御咎付候義は相見不申候、

下ゲ札
書面請人不取置、奉公人欠落帳付、其主人願出候節、御咎之[illegible]舊請人無之、家守幷店借之もの欠落帳付御咎同樣奉存候、○中略

一迷ひ子捨子を養子ニ貰ひ、又は預り居候もの、右小兒を召連欠落いたし候旨訴出候得ば、是迄右欠落もの、家主江尋被仰付候儀も有之、又は尋不被仰付例も有之、兩端ニ御座候得共、右は捨子迷ひ子共拾歳迄の內、違變有之候得ば、訴出候事ニ御座候間、以來尋被仰付候方ニ可有御座候哉、

下ゲ札
書面迷ひ子捨子を養子ニ貰ひ、又は預り居候もの、右小兒を召連、欠落致候段訴出候節、小兒拾歳迄は尋之儀勿論之事ニ候得共、日限尋には及申間鋪、最初より無日限尋被仰付候方可然與奉存候、

〔紀事條例二十四〕享保十一午年十一月

科有之、逐電欠落致候もの尋申付候儀、主人を家來ニ、親を子ニ、且又兄を弟ニ、伯父を甥ニ尋候樣ニ申付候事者有之間敷儀ニ候間、向後者其心得ニ而可有作略候、以上、

十一月

右御書付、午十一月廿六日、於御列座松平左近將監殿御渡被成候、
〔憲教類典出奔四ノ二十四〕寶暦二壬申年二月廿七日
出奔之儀ニ付御定
親子兄弟出奔之儀相尋候節、他江罷越候共、御定之日數延引候はゞ御咎可有之候、其外之親類他江罷越候分は、御定日數延引候共御咎ニ不及、
但手前ニ罷在候親類は、續遠候共、御定之日數延引候はゞ只今迄之通御咎可有之候、
右伺之上極ル
申二月
〔憲教類典出奔四ノ二十四〕寛延二己巳年五月
小普請組川勝左京支配
佐野又兵衞
實子總領
同 千太郎
右又兵衞妻、先年致離縁候處、此度出奔ニ付、又兵衞離縁之妻には候得共、先達而御書付之趣も有之候ニ付、千太郎家督相續之儀如何可有之哉と伺候ニ付、伯耆守殿江相伺候處、千太郎義、家督相續は難成候、向後右之通相心得候様被仰出、右之通候間、此以後ヶ樣之伺出候節、書面之趣可及挨拶事、
〔寶暦集成綠綸錄三十〕寶暦四戌年七月
悴出奔仕候節、父遠慮之儀、只今迄不相伺者も有之候、御奉公相勤候悴致出奔候はゞ、向後父差扣伺可申候、
右之通、寄々可被達置候、
七月

〔憲教類典 四ノ二十四 出奔〕寛保三癸亥年三月

松平左近將監殿、板倉佐渡守殿、御口上ニ而被仰渡候、

叙度御書付ニ而無之、物語之由、能勢甚四郎被爲見候、

親子兄弟妻、其外近き親類致出奔候ニ付、屆延引之事如何ニ候、向後は見合候共、三十日迄之内ニ屆可有之事、

但御扶持御切米等被下候者、并無足ニ而も御目見仕候者は、十日迄之内ニ屆可有之事、

三月

右之趣、寄々可被達置候、尤西丸御目付江も可有通達候、

〔寶暦集成綸錄 三十〕寶暦四戌年四月

出奔屆日數延引無之樣、彌可被心得候、萬一相尋候儀も有之、御定之日數ゟ延引之儀も候はゞ、其段一應相屆置、其上ニ而顯吟味相屆候樣可被心得候、此段支配之者共へも可被申聞置候、

〔記事條例 十七〕明和八卯年正月十三日、牧野大隅守ゟ來候書付、

評定一座評議之上極候書付

出奔者屆之儀、三年以來は帳面ニ記、四年以前者帳面ニ付不申候段、申聞十二月十九日、御一同評議之上相極申候、併帳付屆之儀は、年數相立相屆候とも、人々之心次第可有之哉、既久離屆之儀は年數之無差別、屆來次第、帳面ニ相記申候ニ付、出奔屆之儀計、四年已前之分は帳面ニ不相記與申儀如何ニ可有之哉、依之尙又及御相談候、

寅十二月

右明和八卯年正月十三日、一座評議之上、以來出奔もの、屆來次第年數無差別、帳面ニ記候筈ニ極ル、

〔大坂要用錄四諸斷書〕家出斷之事

乍恐口上

一私同家(は兄弟從弟或は下人下女)誰と申、當何何歲ニ相成候もの當月幾日ゟ家出仕行衞相知れ不申候、依之乍恐家出御斷奉申上候、尤右誰儀諸掛り合等一切無御座候、以上、

年號月日

何町 何屋誰

家主 何屋誰

御奉行様

一右家出仕候日ゟ、三日見合不立歸候はゝ、四日目ニ御月番之御當番所江可相斷、若日限延候はば、遠方ニ心當り有之相尋居候内、御斷延引仕候段書込可申事、

家出之者立歸り候節斷之事

乍恐口上

一私同家(は兄弟從弟或は下人下女)誰と申、當何ノ何歲ニ相成候もの、何月幾日ゟ罷出歸り不申候ニ付、同幾日家出御斷奉申上候、然ル處、今朝罷歸り候ニ付、相尋候處、心願有之、何方江參詣仕、道中にて足痛仕漸罷歸申候、勿論先々にて惡事等も不仕候段申之候間、何卒失人御帳面御消被為成下候様乍恐奉願上候、尤右誰儀病氣に御座候ニ付、召連罷出不申候、以上、

年號月日

何町 何屋誰

年寄 何屋誰

御奉行様

右最初願上候御當番所江可相斷事

〔記事條例十四〕欠落者言上帳付願之部

一欠○落○者○帳○付○願○　（朱書）日数三日内ニ候はゝ帳面ニ記申間敷候

帳付願人幷家主、五人組、店請人、家守請人、或者請人等連印致し、名主奥印致し候訴状ヲ持、連印之者共、奥書之名主共、一同罷出候、

但欠落者奉公人ニ而、請人在方ニ候得者、加印者勿論、帳付之節も不罷出、

右願書一通り之事ニ候はゝ、番所ニ而承届、夫々下知申渡、言上帳江記候上、非番之方江可相廻事、

但子細有之儀ニ候はゝ、訴状ヲ以申聞候上、取計可申候、

一家持ニ而子細無之候はゝ（朱書）下知帳面ニ記家屋敷幷家財共妻子江為取遣

（朱書）前々家屋敷者取上来候処、寛政三亥年町法改正之節、妻子江為取候事ニ極ル、

一右出入事有之候歟、独身ものに候はゝ、（朱書）下知帳面ニ記遣、家財者組合名主立合売払代金銭可納、地面は追而可及沙汰、

但家屋敷之儀者、年番江相渡為糺候上、落着之趣意言上帳末江可記候、

一地借ニ而子細無之候はゝ（朱書）下知帳面ニ記建家幷家財者妻子江為取遣ス

一右出入有之者ニ候はゝ（朱書）下知帳面ニ記家財ハ組合名主立合売払代金銭可納、建家之儀は追而可及沙汰、

右之通

但家蔵書入出入有之候はゝ、訴状を以可申聞、家蔵者取上、書入金之儀者、證文糺之上、貸主幷親類等相対次第ニ可致旨申渡、家財妻子江為取遣ニ而可有之候、

（以下朱書）此儀前々ゟ取計区ニ付、寛政十一未年七月十八日、於内寄合、墨書之通評議極ル、

右但書之家蔵書入出入有之者、以来は外出入有之者同様、家蔵幷家財とも欠所申付候筈、文化六巳年四月十八日、内寄合おゐて評議決、但相談書後ニ記之、

〔氏家叢書 三〕一文政元寅年九月廿七日、町奉行永田備後守樣江差出、御書替御渡、岩瀨伊豫守樣江持參、御帳附濟、

拙者家來高橋直右衞門死娘みよ江猶加與申もの聟養子いたし、未婚姻相整不申候處、右みよ義、當寅十六才に罷成、兼而身持不宜、其上當七月廿七日致家出、行衞相知不申候、右體不所存者之義、於先々如何之義仕出可申も難計候間、此段御帳江御記置可被下候、以上、

九月廿七日

阿部鐵丸家來
加藤瀨左衞門〇下略

〔記事條例 二十四〕六ヶ月尋日數之事

一先ッ二三日申付ル、尤證文取候ニ不及、日限尋ニ相成、證文取候事、

一五日限六切

一十日限三切

但品ニ寄、最初ゟ十日限申付候事も有之候、

但最初ゟ十日限之節者、三切相定、三十日限申付候

一三十日限四切

貸金出入ニ付尋之事

一先ッ二三日尋申付候上、三十日限三切申付ル、

但評定所ものは、六ヶ月尋申付候事、

奉公人給金出入ニ付尋之事

一最初二三日尋申付候上、三十日限三切申付ル、

但取逃致候奉公人之尋者、六ヶ月尋申付候事、

尋月切之節申渡

其方儀（同組出奔、或同家來欠落、）何之誰尋申付置候處、月數相立候ニ付、此上永尋申付ル、

何之誰（組家來）
何之誰

右之通、申渡相濟候上、尋帳末江證文取可ㇾ申事、

何町誰店
誰

其方儀、欠落誰尋申付置候處、永々不ㇾ尋出段不埒ニ付、過料三貫文申付候上、永尋申付ル、

〔例書一〕一欠落者訴出候節、日限證文訴狀江繼添、又者日限通訴狀を以訴出候節、先達而繼添、跡江亦候訴狀を繼添、其跡江亦々日限證文取ㇾ之段尋申付、百日尋申付候而も、不ㇾ出節永尋申付、是は別段證文取ㇾ之、

〔例書四〕一欠落人、村方ゟ訴出候は、吟味之上、平生稼方不ㇾ宜歟、日雇稼致居候得共、其村近郷共困窮村々ニて、其上何月幾日之大雨洪水ニ而、相雇候者も無ㇾ之間、自然日雇稼も無御座候故、飢可ㇾ及手段無ㇾ之無餘義欠落致候哉と奉ㇾ存候段、親類幷村役人申ㇾ之ニ付、村方注進書を以、公事方御勘定奉行江欠落屆書差出、但右御屆書ニ日限尋申付候旨書載、六月切尋申付候處、不ㇾ尋出候者、永尋伺差出シ、御證文取ㇾ之、尤歸住致度者、舊離帳外屆差出、町奉行ニも、右之趣屆書を差出候得者、非番之町奉行所江書替渡り、非番之方江持參屆シテ相濟、右書附持歸、寺社奉行江も屆書持參、但是も月番計江差出ス、

○按ズルニ、日限尋永尋等ノ事ハ、法律部下編追捕篇捕逃亡者條ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

〔憲敎類典（四ノ二十四）出奔〕延享三丙寅年六月十四日

出奔之儀ニ付定

寛保元酉十月

小普請組大岡忠四郎支配
父伊右衛門
惣小納戸

四百石　　山田熊五郎

右熊五郎義、同二日夕出奔仕候段、同十一日屆出ル、尋ニ不及、同廿日地方屋敷家作共上リ候段申渡候、

同二戊四月

四百俵　　向井牛四郎

右出奔ニ付、不及尋、御切米家作屋敷共上リ候段申渡候、

〔公用雜纂三〕〔朱書〕當主。出。奔。
寛政六寅年十月十八日、戸田釆女正殿江進達、

出奔御屆申上候書付　　堀田主膳

堀田主膳支配次男建領
拝領屋敷北八丁堀金六町、當時麻布長坂御書院番
諏訪若狭守組加藤傳左衛門屋敷内借地住居仕候、

高貳百俵　　島田東雲

右東雲儀、去ル十日暮六ツ時頃、家内之者用事御座候而、居間江參リ見候處、不罷在候ニ付、小用ニ而も參リ候哉與、暫相待候得共相見不申、何方江罷越候哉存候者無御座候ニ付、家内者勿論、屋敷内相尋、親類共方江も早速申通、手分仕相尋候得共、今日迄一向行衛相知不申候段、一昨十六日、私組頭青山三郎左衛門方江、東雲兄島田東伯、幷御書院番中坊近江守組、繼母方由緒覚太郎助相屆候旨、三郎左衛門申聞候、隨分相尋候樣申渡置、東雲宅江私組頭青山三郎左衛門、月番組頭榊原數馬差遣、東雲母桑松院、幷兄東伯、其外召仕男女、東雲從弟達大御番本多肥後守與力大谷木與右衛門御先手松平左金吾組與力木村銀助相尋候處、常々家内不和成儀も無御座、何之心障も無之書置等も無御座候旨、銘々以書付申聞候、太郎助儀者、病氣ニ而罷在不申、幷東雲弟勝馬儀者幼年ニ

付相尋不申候、猶又私宅江右之面々召呼、月番南部主税、山口勘兵衛、私共組頭とも立合再應相糺候處、以書付申聞候通相違無御座、所々相尋候得共、行衛相知不申候段、猶又書付ニ而申聞候間、此上無油斷相尋候樣申渡置候、依之御申上候、以上、

寅十月十八日　　堀田主膳

〔諸例集下〕一惣領出奔ニ付御屆等取計之事

元文元丙辰年八月、西丸御書院酒井出雲守組、酒井市之丞養子惣領酒井市十郎義、七月廿一日之夜致出奔候旨、同廿七日、市之丞方ゟ書付を以申聞候ニ付、御帳書兩人差遣市之丞一類中、幷家來共迄、委細相尋候處、右之通相違無之旨申聞候間、八月七日、御月番小出信濃守殿江罷越、御屆申達候、右書付如左、

高四百五拾俵　　西丸御書院番酒井出雲守組　酒井市之丞

御目見未仕候　　父酒井與一郎次男養子惣領實弟　酒井市十郎　辰二十四歲

右市十郎義、近年心立身持等不宜義も御座候ニ付、度々異見仕候、然ル處、右之譯ニ而も御座候哉、去月廿七日、市十郎出奔仕候旨、市之丞書付を以申聞候、尤市之丞一類共幷家來共迄、相番を以相尋候處、市之丞申聞候通、相違無御座候旨申候、此已後市十郎行衛相知候はゝ、早速申聞候樣申渡置候、依之御屆申上候、以上、

八月七日　　酒井出雲守

右之通、出雲守廻狀有之候、

但家督之者出奔之時者、十日之內ニ申上候、部屋住者三十日之內ニ申上候、部屋住ニ而も御目見仕候者は十日之內ニ申上候樣ニ近年は御書付出、御定有之候、

〔諸例集下〕一出奔致候者立歸候節取計御屆等之事

寶暦二壬申年六月廿五日、御書院番阿部周防守組、一色源五郎弟同悦之助、周防守方江参、願書持参、尤あやしき體故、留守分ニ致し、與頭榊原市郎右衛門方江申遣候而者、手間取候故、直ニ御帳書和田五助、松平勘太郎呼寄見せ候處、紛无無之由ニ付、最初出奔も子細无無之事故、源五郎方江御帳書ヲ添送り遣シ、取逃シ不申候様ニ申付遣ス、尤駕籠ニ而遣、與頭江も申達、同廿八日、御用番若年寄松平宮内少輔殿江御届書進達如左、

見出し　阿部周防守

御書院番阿部周防守組　一色源五郎

高千石

弟　一色悦之助　申歳十八

御目見未仕候

右悦之助義、去未七月十三日之夜出奔仕候、其節源五郎義者、石川備中守組、駿府在番殘水野山城守組江預りニ而罷在候ニ付、山城守江申聞候間、親類共幷家來之者迄相尋候處、右之通相違無御座、尤常之心障之義も無之旨申聞相尋候得共、行衛相知不申候段申聞候付、此以後行衛相知候はゞ、申聞候樣申渡、其段山城守ゟ御屆申上候、然ル所右悦之助義、去ル廿五日私方江願書持参仕、去七月中、兄源五郎方を與風出奔仕候處、渡世難義ニ付、助命仕候樣相願候付、源五郎方江申達、猶又吟味仕候處、相障義も無之段申聞候付、則悦之助義源五郎江相渡遣候、尤出奔仕候者之義ニも御座候間、此上如何可申付候哉奉伺候、以上、

六月廿八日　阿部周防守

卽日御付紙

押込置候樣可被申渡候

右ニ付同役江爲知廻狀出ス、右之段周防守宅江與頭立合、源五郎呼寄、御帳書も壹人呼可申渡處、外御用向有之候故、市右衛門宅江源五郎呼、御帳書和田五助立合せ申渡ル、

見出し　阿部周防守

私組一色源五郎弟悦之助義、押込致候樣可申渡旨、昨日伺書ニ御付札を以被仰渡候旨、則其段
源五郎江申渡候段御屆申上候、以上、

六月廿九日　阿部周防守

源五郎　圍江悦之助入候段、周防守江相屆候、御帳書も折々見廻心付候樣ニ申渡候由承之、

〔民事慣例類聚失踪〕失踪人立歸リ、ソノ旨訴出デ、子細ナキ分ハ、直ニ人別記入セシ舊法ナリ、同居人召仕等ノ失踪取計モ亦同ジ、武藏國豊島郡

失踪人歸來ノ節、數年ヲ經レドモ、其子孫相續シ居ルトキハ、親族協議ノ上、再ビ戸主トナルコトモアリ、甲斐國山梨郡○中略

失踪人歸來ノ節ハ、早速組合ヨリ口上ヲ以テ組頭ヘ屆ケ、組頭ヨリ屆書ヲ以テ撿斷ヘ屆出ヅ、撿斷ヨリ何方ヘ罷越居リ、何々ノ事故ニ付、此度歸參セシ段、添書ヲ以テ町奉行ヘ屆出ヅ、又當人直ニ町奉行ヘ駈込自首ノコトナリムトキハ、直ニ入牢申付、短キハ三日、長キハ七日位ニテ出牢ノ上撿斷ヘ預ケラレ、短キハ十日、長キハ三十日位ノ慎申付、赦免ノ上、其家ノ宗門帳ニ加入スル例ナリ、羽前國置賜郡○中略

失踪セシ者歸來スレバ、罪ノ有無ニ關セズ、家祿沒收シテ、一族ノ附籍トナリ、相續ノ權利ヲ失ヒ、嫡子ナレバ相續ノ權利ヲ失スル例ナリ、加賀國石川郡士族例

失踪セシ者歸來スルトキハ、年ノ長短ニ關セズ、藩廳ニ於テ犯罪ノ處分ヲ受テ後、元籍ヘ編入ス、且失踪中遺留物ノ賣拂ヲナストモ、其價ヲ求ムルノ權ナキ慣例ナリ、加賀國石川郡○中略

戸主相續ハ、成丈ケ本人ノ歸來ヲ待ツ、七年或ハ十年ノ後、村中協議シテ、彌々本人見當ラズ、止ムヲ得ザルノコトアレバ、除籍ノ上、其男女子ヲ以テ相續、或ハ聟養子トスル慣習ナリ、コノ相續人定マリシ後ハ、本人歸來スルトモ、再ビ戸主トナルノ權ナシ、又失踪セシ嫡子二三男ノ進

直ハ、實父母ノ存意次第ナリ、(筑後國生葉郡)

〔政談一〕欠落逐電ノ類、近年ハ相知レザルコトニ成行、大形ハ永尋ニナリ、奉行替レバ果ハ無沙汰ニ成、其節ニ至テハ、復御當地へ出テ、人並ニ店ヲ持、或ハ奉公ヲシテ居コト、其數ヲ不知夥コト也、公儀ノ御尊者サヘ如此、增テ其外ノカケ落逐電ハ、ヤハリ其砌ヨリ御當地ノ內ニ罷在、只其町屋敷ニテカケ落チク電ト云計也、如是法不立シテ兇人ノ樂ナル世界成コト、御政務不宜第一也、此趣ヲ考ルニ、元來制度不立故也、去ドモ昔ハ欠落チク電ノ者抔ハ其儘ニ不差置、尋出シテ成敗シ、見當リ次第手討ニモ爲コト、武家ノ風俗也、諸國ナレバ急ニ追駈討留ト成故武士ハ常ニ打替袋ニ米ト錢ヲ入、草鞋ヲ括付、不斷ノ居間ニ掛置ヲ心懸善キ士ト爲ハ、左様ノ時、急ニ追駈ン爲也、御城下ナレバ、箱根笛吹へ人ヲ遣ス様成コト、某覺候テモ、寬文ノ頃迄ハ、武士ノ風俗猶如是ニ候キ、

〔書言字考節用集四人倫〕浪人(ラウニン)(文苑彙雋、踪迹無定止之人也、出柳文、)

〔倭訓栞前編三十七〕らうにん　浪人也、又流浪とも、浮浪とも、國史に見えたり、古へ遊士とも間士ともいふ、晏子春秋に出たり、遊間公子も同じといへり、浪人の字唐書に見ゆ、文苑彙雋に、踪跡無定止人也といへり、

〔吾妻鏡三〕壽永三年(○元曆元年)二月廿五日甲申、朝務事、武衞注御所存、條々被遣泰經朝臣之許云云、其詞云、

言上

條々

一朝務等事

右守先規、殊可被施德政候、但諸國受領等、尤可有計御沙汰候歟、東國北國兩道國々追討謀叛之間、如無土民、自今春浪人等歸往舊里、可令安堵候、然者來秋之比、被任國司、被行吏務、可宜候、(○中略)

壽永三年二月日　　　　源頼朝

〔康富記〕享德三年八月十九日戊戌、畠山彌三郎、去四月三日夜落行、不知行方之處、細川京兆方被留置之、其外被官人牢人等多、彼方并山名方被隱置云々、此五日十日之間、畠山伊與守勢多落失逃入山名方云々、

〔大乘院寺社雜事記〕延德四年二月六日

一御教書到來、去月廿五日書上之、去年日付云々、

義就子息次郎基家、并越智古市以下與力之輩被官牢人等事、令往還徘徊者、隨見合或討捕之、或被搦進之者、尤可爲忠節、若令同意、於隱置在所者、被沒收之、至其身者可被處罪科之由、所仰下也、仍執達如件、

延德三年十二月卅日　　前對馬守判
　　　　　　　　　　　沙彌判

興福寺雜掌

〔御當家令條二十一〕京都町中可令觸知條々〇中略

一武士之浪人不可隱置事

右侍之輩、以前重々堅御法度候、尙以可存其旨、於隱置者、宿主之儀はいふに不及、町中可爲曲事、嚴密可致其沙汰事、〇中略

寬永六年十月十八日

〔京都御役所向大概覺書三〕浪人改之事

寬永十一年板倉周防守觸書、左之通、

一京中浪人頰養生、并緣者親類好を以、何時によらす出入有之者、名苗字書付可差上候浪人に少

茂御構無之候、書付指上候以後、何方江奉公ニ罷出候共不苦候、京都江出入仕、浪人之人數相知れ候ためにて候間、右之通可相觸者也、

一天和三亥年、京都住居之浪人之儀可相改之旨、稻葉丹後守殿被申渡、前田安藝守、井上志摩守相改、先知茂有之浪人、或者由緒有之浪人親類書取之、輕キ浪人者、旦那寺之請合證文を以、在京致免、但親類書は住所之町中宛、右無相違之段町中致奥書、奉行所江指出申候、洛中洛外幷山門三井寺領茂相改、奉行所江書付取之申候、大津居住之浪人は、彼津御代官ゟ京都奉行所江書付指出申候、尤每年增減相改申候、右改帳所司代江茂遣置候、

正德五未改

親類書出候浪人　五拾四人

寺方請合輕浪人　七拾貳人

〔明良洪範 四〕慶安四年、由井正雪御仕置後、十二月ニ至テ、江戸中ニ浪人置ベカラズ、殘ラズ追拂フ申ベキニ極マラントスル所ニ、忠秋〇老中阿部曰、天下ハ天下ノ人ノ天下也ト云リ、上一人ノ爲ニ萬人ヲ苦メン事、仁政ニ有ズ、其上浪人共ノ一揆ヲ恐テ、江戸中ヲ拂ハレシナド、世ノ嘲哢トナランニハ、後代迄ノ御恥辱也、又江戸中ヲ拂共六十餘州ノ中何レニカ居ルベシ、惡事ヲ企ントノ御苦勞ハ、同然ナリト申サレケレバ、井伊直孝モ、浪人ヲ恐テ江戸ヲ拂ンコト、御仕置ノ手薄ニ似タリ、是迄ノ通リ差置レテ然ベシトテ、夫ニ定マレリ、是忠秋ノ仁心ヨリ出テ、大勢ノ浪人安堵セル也、

〔憲敎類典 五ノ二十一 浪人〕承應元壬辰年

牢人改之覺

一抱置候牢人之本國幷親類兄弟古主名書出し可申事、

一何方江も有附候哉、又は宿替仕候はゞ、其段番頭組頭へ相斷消し可申事、

一向後新規ニ被召抱候牢人、番頭組頭江相断帳ニ書載可申事、

一自身ニ被相抱候牢人之外、家来之者之親類長屋ニ抱置候をも書出し可被申事、但長屋之内抔ニ而、元主人呼出し不申候而抱置候ものは、格別ニ候之間、書出し候におよばす候事、

一番頭組頭抱置候牢人と、組中と一帳載置可申事、

右五ヶ條相觸申事は、公儀より出候書付与覚書と貳通相闕、銘々ニ相渡し可申事、

〔憲教類典五ノ二十一 浪人〕承應元壬辰年十月廿八日

覚

一今度諸牢人宿之儀、御改ニ付、自然氣遣ニ存義も可有之候、聊以御咎之子細無之候、又所を構之儀ニ而もなく候、宿主にも御構無之候間、如前々宿借可申候、然共面々在所、當所は町奉行、寺社方は寺社奉行、江戸廻り御代官は其代官、其給人之帳ニ付、宿借可申候、以来新規ニ借し候共、右之如夕帳面ニ付、借し可申候、諸奉行手前ニ抱置候牢人も、其筋之支配方之帳ニ而可差置事、

〔享保集成絲綸錄三十九〕明曆三酉年十二月

一從跡々浪人ニ宿借申候而、于今其浪人ニ宿借置申候はゞ、何方之浪人并知行取り中小性歩行之者迄茂致穿鑿、書付を以兩御番所江家主五人組宿主参御帳ニ付可申候、

一右之浪人有付候者何方江有付申候と、其段御帳ニ付可申候、此頃宿借申候者、前方之宿主と、只今之宿主并家主五十人組同道仕、御帳ニ付可申事、

一從前々被仰付候通、若町中ニ手負候者など於有之者、早々御番所江可申上候、勿論一夜之宿茂借申間敷事、

十二月

万治二亥年七月

一浪人ニ宿借候はゝ、慥成請人を取、宿借シ可申候、其上両御番所江御断可申旨被仰出候間、左様ニ相心得可被申候、勿論むさと致たるものニ宿借シ申間敷候、

七月

〔御當家令條二十一〕浪人宿之事

一從先年御制禁之旨、度々相觸候處、令違背、猥ニ宿借候者有之者、如例可令牢舍幷手負等於譴責者、穿鑿之上、或者死罪、或者牢舍可申付候事、○中略

年號月日　　隼人

丹波

両奥九中江

申渡

〔享保集成絲綸錄三十九〕享保三戌年八月

一今度御拳場廻り浪人御改ニ付、只今迄住居之浪人店を追立、又者店望候浪人江も店借シ不申由風聞有之、不届ニ候、向後故なく店を立申間敷候、自今店望候浪人子細於無之者、店借シ可申旨、端々町々名主共江可申渡候、

八月

〔憲教類典五ノ二十一浪人〕享保十六辛亥年六月五日

一近頃浪人者之由ニ而、先主之名を申、武士方町方ヘ參り、錢を貰、途中におゐても往還之もの江物を貰候由相聞候、此以後宅江參り候はゝ勿論、往還ニ而も右體之儀有之ば、其所に捕置、月番之奉行所江召連可罷出候、彼者申旨に任せ、内證ニ而錢其外之品遣候儀は、堅無用ニ可仕候、

右之通可被相觸候

六月

〔天明集成絲綸錄四十九〕明和六丑年六月

近年浪人抔と申、村々百姓家江參、合力を乞、少分之合力錢抔遣候得ば、致惡口、或は一宿を乞泊り、病氣抔と申四五日茂致逗留候內ニは、品々難題を申かけ、合力錢餘慶ニねだり取候段粗相聞、不屆之至ニ候、以來右體之者罷越候はゞ、其邊之穢多非人ニ爲召捕、早々公事方御勘定奉行ニ可致注進、勿論何樣ニ申候共、決而止宿など不爲致、苗字帶刀いたし候もの江は、壹錢之合力茂致まじく候、若相背候はゞ可爲曲事者也、

右之趣相守、觸書寫取、村はづれ幷村役人共之居宅前抔に張置可申候、

右之通、關八州幷伊豆國甲斐國村々江可被相觸候、私領は村方江、其最寄御代官ゟ不洩樣可觸候樣可被致候、

〔憲法部類乾〕江戶五里四方御拳場ニ、前々ゟ住居之浪人所之者由緒有之差置候哉、左候はゞ、何方ニ相勤候處、浪人いたし、何年以前ゟ罷在候哉、人別ニ證文取之、吟味可仕候、尤向後浪人差置候はば、右之通吟味仕、度々ニ御鷹御用懸之御目付迄可相達、由御料私領寺社領共、最寄之御代官ゟ相觸候間、可被得其意候、

右之通、享保二酉年相達候得共、近來者右之屆無之向も多候間、向後者前ニ浪人住居仕候節差出、最寄之御代官所、其外武士屋敷寺社等迄、浪人差置候はゞ、前々之振合證文取之、御目付江可差出旨、先格之通、御代官ゟ相觸候樣可被申渡候、

明和九辰四月

〔天明集成絲綸錄五十一〕安永二巳年三月

都而物貰致渡世候類、刀は勿論、脇差ニ而茂帶候儀は有之間敷處、近來刀脇差抔帶、浪人體ニ取拵、

物貫候類間々有之由、紛敷相聞、不埒之儀ニ付、右體之者刀脇差共ニ向後一切帶間敷旨、乞胸頭江申付候、縱浪人等ニ而も、物貫致、袖乞等候身分にて、刀脇差等帶候者有之候はゞ、乞胸頭方ゟ訴出候筈ニ付、若此以後、右體之族於有之は、吟味之上、急度咎申付ニ而有之候、此旨可相心得候、

右之趣、町中可觸知候、

三月

〔五人組帳〕差上申一札之事○中略

一諸浪人を差置候儀、親類縁者、又は不通者ニ候はゞ、其品名主年寄五人組江爲申聞、合點之上、請人を立、手形取之、早速申上、御役所御帳ニ付、差置可申候、勿論他所江宿替申候はゞ、其段申上御帳を消可申候、無其儀宿仕候はゞ、何樣之曲事ニも可被仰付候事、○中略

天保十二辛丑年三月　　御領知方　御役所

〔明良洪範〕十二其頃○延寶年中ハ浪人甚ダ多クシテ、諸侯方ヘマデ合力ヲ乞ニ出タリ、或日井伊掃部頭直澄居屋敷ヘ、浪士一人來リテ、永々浪人致シ、既ニ渇命ニ及ビ候間ダ、切腹仕度候、介錯ノ士ヲ仰付ラレ下サルベシト云、直澄聞レテ、其浪士ハ、吾家ニ抱ヘラレ度キ望ミカ、或ハ大分ノ合力デモ受ダキ望カ、内心ニ在ランナレド、左樣言ハズシテ、ワザト切腹致タクト言フナラン、其言フ所ニ任セ、切腹サスベシト云、是ニ因テ、食物ヲサセ、切腹致サセケル、アトデ直澄後悔シケルト也、又神田橋御殿ヘ浪人推參シ、飢ニ及ビ候間ダ、御合力下サルベシ、左樣ナクバ御門内ヲ汚シ申サント云、此時詰居タル者ハ、大久保新藏、伊奈傳兵衞ナド、名高キシレ者バカリ詰合居タレバ、幸ヒ也、新身刀ノタメシニコヤツヲ切テ見ンナド云ケルヲ、其浪人モレ聞テ、忽チ逃去シト也、是ヨリ諸侯方ヘ浪人ノ推參スル事止ミケルト也、

〔明良洪範續篇〕一元祿十一年十一月、建部内匠頭政吉伏見ノ總司ヲ仰付ラレ、芙蓉ノ間詰ノ上座

無宿

ト成ル、扨伏見ハ浪人多ク居ル所ナレド、イツノ頃ヨリノ定メニヤ、主人無キ者ハ大小指ス事ナラザル定メ故、浪人モ此地ニ居ル者ハ、町人同然無腰ニテ往來ス、建部此地ヘ移リテ浪人ヲ殘ラズ呼ビ出シ、各士ノ身ニ在ナガラ、町人同然ニ無腰デ居ル事、サゾ本意ナク有ルベシ、サレド主人無キ者帶刀ナラザル御定メナレバ是非ナシ、夫ニ付我等ヨリ少々ナガラ飯米合力スベシ、然レバ我等家來同然ナレバ、帶刀シテ苦シカラズ、去ナガラ各方ノ中ニハ、大家ノ浪人モ有ルベケレバ、今小身ノ我等ガ家來同然トナル事ヲ嫌ハルヽ者ハ、隨意ナルベシト云渡シケルニ、一人モ違背スル者ナク、忝シト答ヲシテ、其意ニ隨ヒケル、建部又云ケルハ、飯米合力スルトモ、五節朔望ノ禮ニ及バズ、又他國ヘ行クトモ屆ケニ及バズ、去ナガラ火事地震其外スベテ非常事アル節ハ、早速相詰メベシ、是ハ上ヘノ御奉公也ト云渡シ、夫ヨリ三人扶持、五人扶持、其人ニ應ジテ與ヘラレケル、是治ニ居テ亂ヲ忘レザル所也、

〔牧民金鑑二十一〕延享二丑年六月廿九日御書付　本多中務大輔殿

道中宿々之儀者、往來者ニ紛レ無。宿。體之者集り候茂難改筋も可有之事ニ候、左候得ば右之内には盜賊火附等之惡黨者も可有之候得共、宿中より召捕訴出候事、殊之外稀成事ニ候、是者惡黨をとらへ御代官江差代し候而も、吟味に付、宿中度々呼出され、若は江戸迄も召呼、逗留雜用錢等相懸候儀難儀ニ存、召捕候儀一向不心懸、盜人追拂候得者、事濟候樣心得候由相聞候、向後者其所御代官所ニ而、吟味手間不取樣ニ取計ひ、宿中困窮不相成樣ニ可致旨、御代官江申渡候事候間、怪敷もの及見及聞候はゞ、早々召捕へ、其所御代官役所江可訴候、尤捕違等有之分は少も不苦候間、得其意召捕可差出候、如斯相觸候上ニ、宿中物入等をいとひ追拂事濟候體之儀有之、追而相知候はば可爲曲事候、

右之通、寄々可被相達候、

丑六月

安永七戌年四月

近年御當地幷近國共、無宿○。數多致徘徊候故、火附盜賊も多、騷敷儀共、世上一統之難儀ニ相成候、畢竟右者一二度ヅヽも無宿共を留置、宿等致し候者有之候故、無宿多致徘徊、不屆之至候、依之町方者勿論、近在共、町役人村役人共町方村方遂吟味、前々掟ニ有之候通、一夜たりとも身元不慥成者留置不申樣申付、在町共無宿共見掛候はゞ召捕、町方者月番之町奉行江召連可出候、關八州在方者、村役人等差添候ニ不及、村繼ニ致し、月番町奉行江送越候樣可致候、元來無宿共之儀は、百姓は農業怠、町人者夫々之渡世を不致、身持放埒ゆへ無宿ニ相成、彌給續兼候節者、火附盜賊をも心掛候者共有、こらしめのため、此度無宿共嚴敷召捕、佐州江差遣候間、在町共、無宿召捕訴出候而茂、後日ニ仇等致し候儀者、決而不相成候間、見掛次第召捕可訴出候、若見遁ニいたし置候はゞ、急度咎可申付候、

右之通可被相觸候○中略

文政九戌年十月日　伺出與一右衞門

今般關東在々ニ而、長脇差を帶、歩行候者共者惡事之有無、有宿無宿之無差別、死罪其外重科可被仰付旨、被仰出候趣承知仕候、右ニ付、私御代官所當分御預所飛驒越前、美濃國村々百姓共、自用有之、他國出いたし候節、万一長脇差を帶關東筋江可罷越儀も難計、殊ニ平日慎方心得ニも相成可申儀ニ付、左之通申觸候樣仕度奉存候、

一近年無宿共長脇差を帶、又者鐵砲等持歩行、於在々所々及狼藉、且右を見真似百姓町人共之内ニも、長脇差を帶、同樣之所業およひ候もの有之、是迄追々御仕置ニ相成候といへとも、猶不止致增長、黨を結、押歩行候趣も相聞、不輕不屆之至候、依之以來右體鐵砲等携候者は勿論、長脇

差等を帶、亦者所持いたし步行候者共者、惡事之有無、有宿無宿之無差別、死罪其外重科ニ被行間、其旨相心得候樣、關東在々高札場幷村役人宅前ニも張置可申候、

一無宿者勿論、百姓町人等、長脇差を不帶樣、御代官領主地頭ニ而厚世話いたし、若違背之者有之ば、罪科之有無にかゝはらず召捕、公事方御勘定奉行江可被差出候、

右之趣、今般關東在々、御料私領江も被仰渡有之ニ付、於其村々も右ニ准相心得、自用商方ニ而、他行又者上方關東、其外都而旅行之節は勿論、平日よりも長脇差も帶候儀者堅可爲無用、萬一此後長脇差を帶候者於有之は召捕、急度逐吟味候條、小前末々迄、心得違無之樣、村役人共精々可申諭候、尤右申渡之趣、小前連印請證文可差出候、

右之通相認不苦儀ニも候はゞ、早速郡中江申觸候樣仕度奉存候、

戌十月

御附紙　書面伺之通たるべく候、

戌十月

但外關外御代官江も、與一右衛門取計伺濟之趣を以取計候樣、石川主水正申渡候樣達有之、

天保十三寅年十一月　水野越前守殿御渡

近年無宿幷野非人共多く、御府內徘徊致候、右之内ニ者、品々不屆之及所業候類不少、依之今般御府內立廻り候分は、於町奉行所召捕、糺之上男女舊里江歸鄉申付、御料者其所之奉行所又は御代官、御領所役人、萬石以上者、領主家來、萬石以下知行給知且寺社領之分者家來幷村役人等呼出可引渡遣間、全帳外迄之もの、或者格別之罪科ニも無之分者村役人幷身寄之者共江引渡可成丈改心歸農爲致、又者山海之稼、其外人夫ニ遣候ものとも、勝手次第都而舊里を不離樣取計可申候、尤右之內、所役人共申付も不相用、手餘り候歟、幷舊里ニ而手放難差置、惡黨或者度々出奔等致候も

の者、公儀ニおゐても、京大坂其外奉行所有之場所者勿論、御代官御預所等江新規寄場取立差置、夫々相應之手業爲致、又は荒地起返等、其外夫々役ニ遣候とも、是又勝手次第之旨申渡候間、私領ニおゐても、同様相心得、万石以上者、一領毎ニ牢體之園を補理、万石以下知行給知之分者、最寄奉行所、或者御代官御預所之寄場江引渡、其外寺社領分者、附屬之有無ニ隨ひ、其領主之園、又右寄場江入置候積相心得、且私領ニおゐて、領分拂、村拂等ニ相成候ものも、其品ニ寄、同様引渡可遣間、万石以上之分者、是又右園へ入置、不斷敎諭致し、右之もの共、都而心底を改、歸農を遂候而、園外之住居差免候儀者勿論、往々身分有附方をも厚世話致し遣、若又右園内逃去候歟、又は盗其外惡事致し候類者、罪之輕重ニ隨ひ、死罪其外之仕置をも申付候間、其段兼而諭置、尤女者別園ニ致し差置候様取計、且此度引渡候ものゝ内、其以前牢抜又者罪科顯然し者は、直ニ入牢申付、猶吟味之上、夫夫仕置申付候様可被致候、いづれも其度々伺届等ニも不及候、

但引渡候ものゝ内、歸農致し候歟、又者家業等有附候歟、或は出奔病氣死シ候歟致候ものゝ候はば、急度申出候様、兼而村役人共等江申渡置、一ヶ年限、奉行所々可相届候、尤村役人共等取計方行届、本心ニ立歸り候もの多有之候得ば、其品ニ應じ、夫々襃置、若心得方等閑ニ而、度々出奔等爲致候類者、相當之咎可申付候、

一穢多非人之類者、其所之頭穢多江引渡、手放難差置分者、別段園補理差置、手業等爲致、萬石以下者、最寄奉行所又は御代官御預所之寄場江差置候儀、都而前條之通りたるべく候、

一右引渡候無宿共、可成丈相應之百姓ニも相成、身分有附出來候様ニとの御趣意ニ候條、村役人共等、平日厚敎諭を加へ、歸農之儀行屆候様、精々可被申付候、

右之趣、萬石以上以下領分知行給知有之面々、幷寺社之面々も不洩様可相觸候、

一十一月　略○中

天保十四卯年四月

無宿幷惡黨共、關東筋在々多く徘徊いたし、山寄村々ニ而者白晝も及亂妨、村々難澁之趣相聞、關東取締出役之もの江召捕方爲致候處、右風聞相響惡黨共關外へ逃入候由相聞候ニ付て、銘々無油斷遂穿鑿、召捕方手配可有之者勿論之事ニ候處、他之引合有之分等差出方手數も相懸候儀ニ付、自然忽ニ致置候向も有之哉ニ相聞、如何之事ニ候、右は關東最寄國々ニも不限、此上無宿惡黨共猥ニ徘徊いたし候樣ニ而者、百姓共及難儀、其上不宜風儀押移、おのづから良民之害可相成基ニ付、國々一致ニて被遂穿鑿候條、品ニ寄、最寄奉行所組與力同心ども、又は御代官手附手代等踏込召捕候儀も可有之候間、領主地頭ニおゐても彌嚴重遂穿鑿、惡黨共召捕候樣可被致候、尤萬石以上以下共、自分仕置難相成、他之引合有之分者、是迄之通、奉行所吟味之儀被申立候事ニ候得共、左候而者、彼是手數も可相懸儀ニ付、此節限り他之引合有之候共別段被申聞候ニ不及、關外は最寄奉行所、亦者御代官江引渡、關內は關東取締出役之手附手代、亦者最寄御代官陣屋江引渡候歟、或者其品ニ寄、寺社領者月番寺社奉行、其餘之分者公事方御勘定奉行江村役人共差添、召連訴出候而も不苦候條、可被得其意候、

右之趣、萬石以上以下領分知行給地有之面々、幷寺社領共不洩樣可被相觸候、

四月

右之通可被相觸候、尤右之趣相心得、是迄之手筈等ニ不拘、手早く取扱候樣、御代官江も可被申渡候、

〔德川禁令考後聚二十三行刑條例〕享保十三申年八月

松平伊豆守殿御差圖　大岡越前守掛〇中略

無宿浪人
赤川大膳

此もの儀、先年不屆之儀有之候ニ付、主人方にて門前拂ニ相成、夫より所々ニ而人殺之上盗賊いたし、其上當時無宿實澤と申合江戸江出、公儀を僞り、多ク之金銀を欺取候段、重々不屆至極ニ付、町中引廻し之上、於品川獄門ニ行ふもの也、

町奉行
池田筑後守懸
無宿
喜兵衞
○下略

(撰述格例初篇二ノ九十二)寛政三亥年十二月

戸田采女正御差圖

一無宿喜兵衞盗致し候一件

(的例黄紙之寫)下手人

安永三午年十二月、周防守殿御下知、

一武州西新井村金藏變死之儀ニ付、無宿吉五郎外壹人吟味一件、

手限
太田播磨守懸
無宿
吉五郎
同
傳次郎
○下略

古事類苑

政治部六十二

下編

戶籍下

娶妻

〔享保集成絲綸錄 一〕慶長廿卯年七月

武家諸法度〇中略

一私不可締婚姻事

夫婚合者、陰陽和同之道也、不可容易、睽曰、匪寇婚媾、志將通、寇則失時、桃夭曰、男女以正婚姻以時、國無鰥民也、以緣成黨、是姦謀本也、〇中略

右可相守此旨者也

慶長廿年卯七月日

〇按ズルニ、娶妻ノ事ハ、禮式部婚嫁篇ニ詳ナリ、

〔氏家叢書 二十〕一文化十一酉年九月、御用番土井大炊頭樣江、御先手樣を以進達、無滯御請取被成候、

有馬玄蕃頭叔母、私江文化九申年八月廿七日、緣組願之通被仰出候處、此度雙方申合、同氏織部正方江引取置、追而婚姻相整候樣仕度奉存候、此段奉願候、以上、

九月　木下佐渡守

例書

松平因幡守養方伯母、私江文化六巳年九月廿二日、緣組願之通被仰出候處、此度雙方申合、祖父右京亮方江引取置、追而婚姻相整候樣仕度奉存候、此段奉願候、以上、

閏二月十八日　秋月佐渡守

右之通、文化八未年閏二月十八日、御用番牧野備前守殿江差出候處、御付札を以、願之通被仰出候由ニ御座候、以上、

九月　木下佐渡守

〔民事慣例類集婚姻〕婚姻ノ事、媒介ヲ以契約確定ノ後、親戚幷伍組ヘ吹聽シ、婚禮セシ後、其町名主ヘ口上ヲ以屆ケ、寺院ヘモ吹聽ス、他町他村ニ嫁スル時ハ、兩三月間ニ送籍スルコトナリ、甲斐國山梨郡〇中略

婚姻屆書個ノ如キハ、宗判ノ期ニ先ダチテ、村町前年ヨリ嫁娶ノ總數ヲ一帳ニ記載シ、緣談願ト號シ、宗門奉行ノ許可ヲ得テ宗帳ニ加ヘ、幕府領ハ直ニ之ヲ加フ、信濃國佐久郡〇中略

町家相互ノ婚姻ハ、出產同樣願通帳ニ記載シ、總町年寄ヘ出ス、村在ヨリ娶ルトキハ、雙方ヨリ立紙ノ願書ヲ以テ、其都度願ヒ出ヅ、願書ニハ必ズ媒介人ノ姓名ヲ記載ス、送籍ハ檀那寺ヘ宗門ヲ送ル、ヲ送籍トス、是ハ婚姻願書ト共ニ、町會所ヘ差出スコトナリ、備前國御野郡

婚姻願書願書ハ總テ立紙ナリハ雙方連名連印ニテ、其雙方村方ノ名主ヘ差出シ、名主調印ノ上、大庄屋ヘ差出シ奧書ヲ受ク、大庄屋ヨリ郡奉行ヘ差出シ、奉行聞屆ケノ上、人馬帳ニ登記ス、郡奉行ハ一大郡ハ二人、小郡ハ二郡ヲ兼管ス、送籍ハ寺證文ニ、名主ノ檢印ヲ受ケ、之ヲ先方ヘ送ルヲ例トス、備前國上道郡

持參金

〔御當家令條二十二〕江戸町中定〇中略

一夫婦之出入離別之女、先年如書出、鋪銀衣類等早速可戾之、令難澁者可爲曲事、女相果跡敷銀等之出入、前廉如書出可致沙汰事、〇中略

明暦元年十月十三日

〔公事取扱〕跡式養子離別後住幷引取人○中略

一妻の諸道具持參金相返候上者、離別儀は夫の心次第、

〔公事取扱〕跡式養子離別後住幷引取人○中略

一忰相果候ニ付、嫁を差歸候類、持參金の不ㇾ及ㇾ沙汰、諸道具は可ㇾ差ㇾ戻之、

〔公事取扱〕跡式養子離別後住幷引取人○中略

一離別之證據無ㇾ之、女房親元へ參居相果候といへども、諸道具持參田畑不ㇾ及ㇾ返、夫の心次第たるべし、

〔大坂堺問答坤〕一妻離緣、夫之心次第申付、持參金諸道具共可ㇾ差ㇾ返候、

此儀於ㇾ當表○大坂も、同樣取計申候、

〔民事慣例類集婚姻〕嫁資トシタル動產不動產ハ、夫家ニ於テ之ヲ恣ニ處置スルヲ得ズ、離緣ノ時ハ婦家へ返スベキ者トス、信濃國佐久郡○中略

本人ニ屬スル衣類諸道具、夫家へ持來ルモノ、若シ離緣ニ至ル時ハ、本人持歸ルコト固ヨリ通例ナリト雖モ、若シ本人死去スルトキハ、出生ノ男女子アルモノハ、遺物ハ其實子へ附與シ、若シ實子ナキモノハ、本人親戚ノ卑族へ分與スルノ慣習ニテ、或ハ旦那寺へ納ムル品等、養實兩親ノ協議ニ出テ一定ノ例ナシ、筑後國御井郡

〔大坂要用錄三諸證文〕女房式銀手形之事

一此度其元依ㇾ御媒、何屋誰殿息女誰、銀子何程幷ニ何町家屋敷何ヶ所相添、我等妻取申候、若不緣ニ而親元江罷リ候共、假令何ヶ年過、又者子供出生仕候上ニ而も、右添來リ候銀子幷家屋敷無ㇾ相違、急度返辨可ㇾ申候、爲ㇾ後日之一札仍而如ㇾ件、

年號月　　　　　　　　　　　　何屋誰

何屋誰殿

〔輯古帖〕檜垣貞宗請取狀

一此度貴樣御妹於六女郞を申給祝言仕候ニ付、けわい預金小判三拾兩慥ニ請取申候、仍爲後日如件、

寛文九年正月廿四日　　　　　　　檜垣庄左衞門 黑印

貞宗 花押

藤原三郎右衞門殿 まいる

〔賤のをだ卷〕一翁○森山孝盛が姉なる人、大久保伊兵衞五百石、大御番酒井飛驒守組と云人の許へ婚姻ありしに、道具の日の役違並婚禮の日の腰迎、御先手青木右京腰おくり、兩番奥原加藤傳左衞門の作法、聟入舅入の時、太刀馬代の取かはし、彼是中々當時小身物にて、其位の婚禮は絶てなし、久しく聞も及ばず、扨一年ばかり有て、彼大久保氏、吉原の遊女を連來りて、長屋に圍ひ置たり、此事に依て、夫婦の中も睦しからず、終に此方より姉を取戻されたりしが、道具はいふに不及、土產金六拾兩、耳を揃へて使者をもてかへしたるに、仲人は父の甥なり、依田四郞左衞門とて、大久保氏相番なり翁が爲には從弟なり、此時二條の取人に登りて留守なりけり、此使者への挨拶に、父の申さるゝは、此金子に於ては、仲人依田四郞左衞門在江戸に候はゞ、御挨拶の申分も可遣之候へ共、仲人留守のことに候儘、先預り置候と申やられたり、此事日記にしるして今に有、其比はかやうにこそ有つれど、今の緣組は先家筋よりも、緣女よりも、土產金の多少を論じ、又離緣の時も、始より彼金の無相違戻らんことを氣遣ひ、聟の方にては戻さゞらんことを工夫することになりぬ、昔とは大なる違ひにて、恥かしきことなり、

去妻

〔政談四〕婚姻ニ金ヲ取コト當時ノ風俗ナリ、由是女多ク持タル者ハ身上惡クナル、金ヲ望ムユヘ相手有難ク、男女トモニ年舊マデ獨身ニテ、子孫ノ乏キ類モ多シ、又不相應ナル人ノ女ヲ、取親ヲシテ妻トスル類モ多シ、獨身ニテ久ク居ル故、傾城町ヘアルキ、金ヲツカヒ、惡疾ヲ受、又ハ妾ヲ置樣ノ惡事是ヨリ出ル、總ジテ堂上方又田舍ノ百姓ハ、大方二十歲ヨリ內ニテ婚禮スルユヘ、子孫多キ也、旁惡キコトナレドモ、內證ノコトナレバ、ス可樣ナシ、武家ヲ知行所ニ置タラバ、自ラ此惡風ハ止ベシ、左無クバ當分緣組ヲ司ル役人ヲ立テ、願ヲ用ヒズ、上ヨリ極被仰付バ此風可止、

〔武家嚴制錄二十〕一女房離別之儀、大かた三ケ條之罪科においては死罪、依刑離別之間可任科輕重、女房嫁入之節、金銀諸財雖持參、以科令離別、其財寶做盡も女房に不可宛遣、若又女年久懸辛勞令勘忍、彼所夫企他犯、又は不謂義申懸於離別は、女ばう持參之財寶は不及申、其家內之貴財、女房何なりとも、女房納得仕程持運可令退出、次ニ女房無子內ニ令死去、女房之持參諸財衣類悉親所江可返之、無父母於有親類者、早速其所に可返之事、

〔民事慣例類集婚姻〕離緣ノ節ハ媒介人之ヲ處置シ、親戚伍組ヘ吹聽シ、其町名主許ヘ屆ケ、兩三月間復籍スルコトナリ、甲斐國巨摩郡○中略離緣ヲナスニハ、親戚ハ勿論、懸意ノ者ヘ協議ヲ盡シ、雙方熟談ノ上、媒介人ノ處分ニ任セ、其旨趣該町名主ヘ屆出、其後五人組連印、名主奧印ノ書面ヲ以テ、町方役所ヘ願ヒ、人別帳ヲ除クコトナリ、信濃國埴科郡

〔諸例集下〕一妻致離緣候時、娘を添戾候例、幷兩人之娘壹人は留、壹人は戾候例之事、
寶曆二申年十二月廿八日、小普請組支配橫山內記、西尾隱岐守殿江、於殿中順阿彌を以、御屆申上候書付如左、

見出し
離緣御屆　橫山內記

小普請組横山內記支配　堀江鐵之助妹

西丸御納戸　古部孫大夫　飯室三郎兵衛組　杉原小左衛門妻

右緣組、寛延元辰年十二月十九日、願之通緣組被仰付、同二巳年四月廿一日、婚姻相整申候處、此度不緣ニ付、雙方熟談之上離緣仕候、右妻ニ娘壹人出生仕候、右娘妻ニ差添引取申候段、鐵之助申聞候、依之御屆申上候、以上、

申十二月廿八日　横山內記

同年八月廿五日、同人松平右近將監殿御宅江持參、用人を以差出候書付如左、

見出し　離緣御屆　横山內記

寄合　山木筑前守娘

小普請組横山內記支配　三間大助妻

右緣組、寛保三亥年四月三日、願之通被仰、延享三寅年六月十一日、婚姻相整候處、此度不緣ニ付、雙方熟談之上離緣仕候、右妻ニ娘兩人出生仕候、壹人は大助方ニ差置、壹人は筑前守方江、妻ニ差添差遣申候、尤大助方ニ殘置候娘、筑前守方ゟ通路不仕候段、筑前守方ゟ申聞候旨、大助申聞候、依之申上候、以上、

申八月廿五日　横山內記

〔氏家叢書 二十〕一 明和八卯年

私妻田沼主殿頭養女、寶曆十二午年九月四日、緣組願之通被仰付、寶曆十三未年六月廿五日、養母方江引取置、同年九月四日、婚姻相整候處、不緣ニ付、雙方申談之上、此度離緣仕候、此段御屆申上候、以上、

大岡兵庫頭

十二月十九日

〔諸例類纂四〕姉離縁跡妹縁組

文化二丑年閏八月十七日、御用番土井大炊頭殿御勝手へさし出、九月四日御附札、

先達而私同姓因幡守養子修理へ、私妹縁組仕候、然處右修理妻病氣差發、至而六ヶ敷病症ニ御座候、命ニも拘候義者無御座候へ共難治之症ニ而、中々懷妊抔可有之様子ニ無御座候、元來修理へ縁組仕候義、何卒本家之血縁相續爲仕度、右之者離縁仕、私方へ差戻、何卒可相成儀ニ御座候ハヽ、又々私妹之内を再縁仕度旨、因幡守申付候、修理義も養家へ血縁相續ニ御座候得共、何卒右之通仕度旨御座候、然處姉死別之跡へ、妹差遣候儀者有之候様にも奉存候、姉離縁之跡ニ妹差遣候義は有之哉、疵と相辨不申候、尤子細有之離縁ニ御座候得共、雙方共貰ひ候譯も、遣候譯も無御座候得共、右之者病氣之儀ニ付、聊申分無之、熟談之旨及離縁候儀ニ御座候得者、右之妹差遣申度奉存候、右體之儀奉願候而も、不苦筋ニ可有御座哉奉伺御内意度、此段奉伺候、以上、

閏八月十六日　本多隱岐守

御書取、勝手次第相願候義可被致事、

〔諸例類纂四〕離縁

天保十亥年十月七日、松平右近將監殿御息女、松平伊豆守殿御嫡隼人正殿御縁組濟居、御婚姻無之候、故障之儀有之、御熟談之上、御離縁御屆書進達、

〔公事取扱〕跡式養子離別後住幷引取人〇中略

一女房添がたき子細相立、致家出においては、女の親元へ諸道具爲返之、

〔公事取扱〕跡式養子離別後住幷引取人〇中略

一養子合之女房、夫をきらい致家出、比丘尼寺へ駈入、比丘尼守三年勤暇出候旨訴出においては、

離別状

實父方へ爲引取之古例、

一夫をきらい、髪を切て成とも暇を取度よし、女房申、又は夫江申懸致類ひは、比丘尼に成し緣を切せる古例、

〔公事取扱〕跡式養子離別後住幷引取人〇中略

一先夫離別の事、僉ニ不承届、去狀も無之、親ども得心不爲致女と申合、理不盡ニ外へ引取ニおゐては、士は品により追放、

右女江離別候とも、自分として立退、親ども不得心ニ而家出いたし、去狀も不差越、内外の男を持におゐては髪を剃、親ニ渡し、以後外へ片付候事は親之心次第、不義男の方通路留之、

一右不埒の取持人は過料

〔公用雜纂三〕一妻出奔

(未書)
文化二丑年十二月廿日

岩田德五郎妻出奔御屆　朝比奈河内守

新御番朝比奈河内守組岩田德五郎妻りつ　丑三十五歳

右德五郎妻りつ儀、去月廿一日夜、德五郎當御番留守、何時罷出候哉不相知、翌日迄不被歸候ニ付、早速一類共申談、心當之處相尋候得共行衛相知不申候、當月九日、私組頭矢部主膳江、德五郎相屆候旨、主膳申聞候ニ付、隨分相尋候樣申渡置、德五郎家內之者家來共迄相糺候處、常々不和成儀も無御座、書置等も無之、持出候品も無御座旨、銘々以書付申聞候ニ付、此上無油斷相尋候樣申渡置候、依之御屆申上候、以上、

十二月廿日　朝比奈河内守

〔公事取扱〕跡式養子離別後住幷引取人〇中略

一離別狀不ㇾ遣といへ共、夫の方より三年已來通路不ㇾ致においては、外へ嫁入候とも、先夫の申分難ㇾ立、

〔公事取扱〕跡式養子離別後住幷引取人〇中略

一妻義、親元江歸居候義三四年過、夫於ㇾ訴出ㇾは、順後難ㇾ立、併去狀不ㇾ取義不埒ニ付、一應夫之方江呼戾させ候うへ、離別狀可ㇾ爲ㇾ相渡、

〔公事取扱〕跡式養子離別後住幷引取人〇中略

一去狀不ㇾ取替上は、又添の儀不ㇾ及ㇾ裁斷、

〔民事慣例類集婚姻〕離緣狀ハ必ズ受取ルベキ者トス、其故ハ夫婦間ニ和合スレドモ、舅姑ノ存意ニ協ハザルヨリ、離緣スルコトアルトキ、男女相戀フノ情深クシテ、內實交通シ、後日紛ヲ生ズル者 ルヲ以テ所役人聞込次第心付ケ、離緣狀受シムルコトナリ、武藏國豐島郡

離緣狀ハ卽時婦家ヘ媒介人ヲ以テ送ルヲ例トス、文面定則無シ、甲斐國山梨郡

離緣狀ハ三行半ニ書シテ、其夫ヨリ直ニ其婦ニ附スルコトモアリ、甲斐國都留郡

離緣狀ハ夫自ラ與ルヲ例トス故ニ夫逃亡失踪スルトキハ、父兄ト雖ドモ之ヲ出スヲ得ズ、三年ノ後モ尙他ニ嫁スルヲ得ザル者アリ、信濃國佐久郡

〔安齋隨筆後編六〕一妻を去る子事 今世の人、妻を去ることあれば、男子をば留て、女子をば妻に付て去ることあり、定法の如し、古書に其定法曾てなきこと也、奴婢の生たる子は、男女共に母に付て養はしむることは令に見たり、戶令

〔享保集成絲綸錄十八〕元文二巳年八月

緣組相願娘病氣ニ而婚姻難ㇾ調、離緣之儀相屆候以後、右娘病氣快、再緣相願候節は、何年以前離緣之屆仕候と申儀書付相添可ㇾ差出ㇾ候、

右之趣、頭支配其外之面々へも、寄々可被達置候、

〔公用雜纂 三〕聟養子致出奔候上ニ而被召抱御仕置相成、其娘他家ヲ再縁願、

（朱書）
享和三亥年八月

書付

飯室三郎兵衛

覺

私娘儀、瀬名源五郎次男瀬名源八郎儀聟養子奉願候處、享和元辛酉年十二月廿日、願之通聟養子被仰付候旨、井伊兵部少輔殿被仰渡、同月廿七日引取娘与婚姻相整候、然ル處同三癸亥年二月十八日、右聟養子飯室源次郎出奔仕、同年三月十七日、立花出雲守殿江御屆相成、同月廿一日、尋被仰渡、相尋候處、行衛相知不申、同年五月廿一日、永尋被仰渡候、其節私儀五十四歳相成、外男子無御座候ニ付、養子可仕、娘者年齡相應之者御座候ハヽ、早々聟養子可奉願旨申上候處、其段御用番京極備中守殿江、右養子年延之儀、御進達相成候處、同年六月十七日、妻男子出生仕候之間、右養子年延之儀御斷返相成、右出生之男子實子惣領ニ相成申候、其節娘儀、他家江再縁爲仕度旨可奉願候處、其砌者病氣罷在見合セ候內、右出奔仕候源八郎儀、同年八月廿四日、町奉行江被召捕、御僉議之上、同年十月廿三日、御仕置被仰付候、右之通御座候處、娘儀病氣も快、年若ニも御座候間、何卒他家江再縁奉願度存候、依之此段申上候、以上、

八月　飯室三郎兵衛

（朱書）
右ニ付、則願書上ル、左之通

再縁組願

新番頭
土岐信濃守

新御番土岐信濃守組
飯室三郎兵衛

右三郎兵衛娘儀、寄合瀬名源三郎次男瀬名源次郎儀、聟養子奉願候處、享和元辛酉年十二月廿日、願之通被仰付候旨、井伊兵部少輔殿被仰渡、同月廿七日引取婚姻相整候、然ル處、同三癸亥年二月十八日、右聟養子飯室源次郎出奔仕、行衛相知不申、同年五月廿三日、永尋被仰渡候處、同年八月廿四日、町奉行根岸肥前守方江被召捕、御詮議之上、斷罪被仰付、娘儀者御構無御座、三郎兵衛手前ニ罷在候、右娘儀、年若ニも御座候間相應之方江再縁爲仕度奉存候、三郎兵衛願之通被仰付被下候樣仕度奉存候、以上、

八月廿七日　　土岐信濃守

可爲願之通旨可被申渡候

〔柳營諸舊例的三〕文化二丑年正月十八日

再縁組願

寄合　屋代阿波守

再縁　屋代阿波守叔母

再縁　西丸御目付　細井豐前守江

右之通、再縁組仕度奉願候、以上、

四月廿一日　　屋代阿波守

取次　村上三郎

寄合　屋代阿波守

再縁組譯書

私養方叔母儀、明和八年十二月七日、小澤牛右衛門、御書院番齋藤伊豆守組之節、捴領八歳江縁組仕、牛右衛門方江遣置、追而八歳江婚姻相整申度段、亡父求馬寄合之節奉願候處、同月廿一日、願之通被仰付、牛右衛門方江差遣申候、然ル處、未婚姻相整不申内、不縁ニ付、雙方熟談之上、離縁仕候段、

天明八年二月十三日、御月番安藤對馬守殿江、亡父求馬持參御屆申上候、猶又此段再縁組奉ㇾ願候、以上、

四月廿一日　屋代阿波守

〔柳營諸例的入〕同年（○文化二年）十二月廿七日

娘取戻願

寄合　久永源兵衛

樺本喜内支配　松平甲之助養母

私娘甲之助養母儀、同人養祖父八郎左衛門御書院番勝田安藝守組相勤申候節、寛政十午年八月十八日、惣領吉太郎江縁組仕度段奉ㇾ願候處、同年九月廿八日、願之通縁組被ㇾ仰付、婚姻相整申候、其後吉太郎病氣差重り候處、男子無ㇾ御座ㇾ候ニ付、急養子奉ㇾ願置、吉太郎儀病死仕候、然處娘儀、未年若にも御座候間、追ては再縁も爲ㇾ仕度、雙方一類共熟談之上、娘儀私方江取戻申度奉ㇾ願候、以上、

十二月十一日　寄合　久永源兵衛

御附札
可ㇾ爲ㇾ願之通候

〔諸願屆〕養母差戻伺書

新見捴左衛門

大納言樣御小納戸　大河内善十郎姪

新見捴左衛門養母

右私養母儀、文政九戌年四月三日、西丸御書院番大久保豐後守殿組之節、養父勘左衛門江縁組仕度段奉ㇾ願候處、同年五月十六日、願之通縁組被ㇾ仰付、婚姻相整申、然ル處養父勘左衛門儀、御同人御組之節病死仕、跡式被ㇾ下置候、右養母儀、未年若ニも御座候間、雙方熟談之上、伯父善十郎方江取戻置追而再縁組も爲ㇾ仕度、同人ゟも願書差出申度段申聞候、依ㇾ之私儀も同樣奉ㇾ願候、以上、

十一月　新見捴左衛門

一十二月廿七日、右願之通、養母差戻被仰付旨、小笠原相模守殿御附札ヲ以仰渡候旨、新之丞殿御宅ニ而被仰渡候積り相心得候樣、翌廿八日御禮、小笠原相模守殿、小笠原長門守殿參上、新之丞殿御用捨、

繼子

〔例書三〕一獨身者之處江、知音之もの世話致し、妻を迎取候者有之候、然處右之妻男子壹人召連、再緣致し罷越候所、右男子成長之上、繼父江對し不孝ニ而、種々異見差加候得共、一圓不相用ニ付、無餘義勘當致度旨申之候得共、右繼子其家を出宅不致候、其譯一旦緣付參候節、男子有之候を合點ニて呼迎候、其砌之約束ニ者、成人之後如何樣之義有之候共、證文者無之候得共、見放申間敷趣、仲人を請人ニて相堅メ置候、依之決而立退義不相成由、繼子申之候ニ付、右繼父江相尋候者、繼子不孝之訴出候、如何樣之身持不埒成取計ニ候哉尋候處、繼父申候者、博奕を相好、其上遊所江罷越、平生酒を給、度々喧嘩口論を好候故、每度異見仕候得共、却而致敵對、種々雜言申候ニ付、其分ニ難差置、勘當之御願申上候段申ニ付、右之繼子早速入牢申付、右勘當受候得共、年月を經、親共訴詔致候得者、殊ニ寄御聞屆之上、奉行所之帳面を除、勘當被免候義有之候、强而彼是申募候得者、所拂、或者追放申付候樣相成候得者、二度町處江相歸候義難成旨、及利解候事、

畜妾

〔政談四〕妾。。。。。。。ヲ妻トスルコト不宜コト也、吾氣ニ入タラバ、家來ニ崇メサスルコトハ、非法ナガラモ左モ有ベシ、親類朋輩ニモ奥樣ト云セ崇メサスルコト、以ノ外ノ慮外也、如何成アツカマシキコトヤ、去ドモ世ノ風俗ト成タレバ、有可コトノ樣ニ、人々覺ヘ居ル、是皆禮法ト云コトハ無テ、唯傍ヲ見合セ、人ノスルコト成バ、何事ニテモ苦カラズト覺ル世ノ風俗ト成故也、妾ヲ妻トスルヨリシテ、妓女體ノ者ヲモ、遠慮ナク妻トシ、是ヨリ家ノ風惡ク成、武議ヲ取失ヒ、子ノ育樣モ惡ク、樣樣ノ惡事生ズ、第一妻ハ夫ノ身上同格成人ノ女ニテ、婚禮ヲ調來ル者成バ、禮式モ取調テ有、妾ハ召仕ニテ、何モ持ヌ者ヲ、俄ニスル故、妻ノ儀式ヲ調トテ、色々ニ新ニ拵ニ依テ、夫ノ身上ノ害ニ成、

大身小身如此、又其メカケノ親類下賤成ヲ取立、大身ニシ、國政ヲ亂ルモ多ク也、妾ヲ妻トスルハ、大形ハ其女ノ我ニ隨ヌヲ本妻トセント、兼テヨリ約束シテ、我ニ隨スル類多シ、是メカケヲ妻トスルコトハ成ラズト云法立テ無故、ケ樣ノ約束爲也、何ニ付モ禮法ト云コト無ハ悲シキコト也、

〔憲教類典三ノ十三 家督 妻子〕享保九甲辰年七月八日

妾を妻に仕候儀、猥ニ者有之間敷事ニ候得共、若品も有之、及其儀候はゞ向後萬石以上者、月番老中、其外者向々之頭支配江可被達置、無左候而者妻之忌服、又者養母等之忌服まぎらわしく候ニ付申通候、

右之通、寄々可被申通候、以上、

辰七月

〔享保集成絲綸錄十八〕享保十八丑年四月

縁組之願申上之、婚儀相調候外は、妾ニ仕儀向後可爲無用旨被仰出候事、

一先年申達候以後、屆置候而、妾を妻に仕候者、其通ニ候、以來之儀、此度被仰出候通ニ可相心得候、

以上、

四月

妾請狀

〔大坂要用錄三 諸證文〕妾奉公人請狀之事

一此證と申女、壹ケ年給銀何程ニ相定、二季御仕着之相對を以、其許殿江妾奉公ニ差出、我等請人ニ相立申候處實正也、然ル上者、假令御息方致誕生候上、御暇被下候共、極通給銀之外、何角與望事申掛申間敷候、

一御公儀樣ゟ被爲仰出候御法度之趣、急度爲相守可申候、宗旨者代々何宗ニ而、寺請狀此方ニ取置申候、勿論此女之儀ニ付、何方ゟ茂差構申もの無御座候、其外如何樣之六ケ敷儀出來仕候共、

何方迄茂罷出、急度埒明、少しも御難儀懸ヶ申間敷候、爲後日之妾奉公人請狀仍而如件、

年號月

請人 何屋誰

親 何屋誰

本人 誰

何屋誰殿

〔大坂要用錄三請證文〕茶立奉公人請狀之事

一私娘誰與申者、當何ノ何月より來ル何ノ何月迄、丸年何年何ヶ月、給金何兩ニ相究メ、則手形之上、右給金不殘先借り仕、慥ニ請取、其元殿江茶立奉公ニ差遣申所實正也、然ル上者、諸親類兄弟名附之夫、又者右主人抔と申、脇ゟ奉公之違亂妨申もの壹人茂無御座候、尤仕着之儀者、夏冬相應之品壹ッ宛、御著せ被成候約束ニ御座候、

一御公儀樣御法度之宗門ニ而茂無之、宗旨者、代々何宗何町何寺旦那ニ紛無御座候、若此者取迯欠落仕候はゞ、早速本人尋出し、失物之品々相改手渡仕、右極メ之通、年季無滯奉公爲相勤可申候、且亦如何樣之勝手成儀出來仕候共、此方ゟ無體ニ暇乞請申間敷候、猶又其元殿御勝手ニ合不申給金立替之、暇出候はゞ、右請人方江引取、何方同體之奉公ニ有付、其給金不限多少、有之儘無滯急度相立可申候、尤我々共印形入用次第、何方にて茂無異儀、繼替可申候、萬一病死頓死又者不慮ニ相果候共、其節御互ニ一言之申分無御座候、其外右誰儀ニ付、如何樣之六ヶ敷出入出來仕候共、我々共何方迄も罷出、急度埒明、其元殿江少茂御難儀懸申間敷候、爲後日茶立奉公人請狀仍而如件、

年號月

父 何屋誰

母 たれ

生児所属

請人　何屋誰

奉公人　誰

何屋誰殿

一札

一先年何屋誰方ニ私嫁付、誰と申女子出生仕罷在候而、其後私儀者、右誰と相對之上離縁仕、娘たれ儀残し置候處、右誰儀、身上不如意ニ付、給金先借り之上、其元殿江茶立奉公ニ差出候趣、承知仕候、然ル處、右誰、其砌家出仕、行衛相知れ不申、精々相尋候得共、今以罷歸り不申、生死之程無覺束、依之改メ私江印形致候樣被仰聞、承知之上印形継申候、然ル上者、右誰罷出候共、又者親類抔と申立違亂申もの有之候はゝ、我等罷出埓明、少も御難儀相懸ケ申間敷候、爲後日差入申成行一札仍テ如件、

年號月　誰

誰後父何屋誰

何屋誰殿

〔公事取扱〕跡式養子離別後住并引取人○中略

一懐胎候とも、離別之事は、夫より心次第、出産之上男子は夫之方へ爲引取、女子は妻の方江可差置、

〔諸例集下〕文化七年九月廿日、加藤遠江守家來ゟ問合、桑原遠江守差出、袋綴し、

御目見叙爵ニ而相濟候大名之嫡子病氣ニ而、種々療養仕候得共、御奉公も難相勤體ニ至り、相願候而、退身之上、同人奥方雙方熟談之上、離縁仕候而ニ而不苦筋ニ御座候哉、

一右之嫡子同斷之儀ニ付、在所表江爲療養湯治相願罷越候後、江戸表ニ罷在候奥方、雙方熟談之

上、離緣仕候而も不苦筋ニ御座候哉、

書面貳ヶ條共、勝手次第之事ト存候、

一右奥方離緣之砌、順月之經水留り罷在、萬一妊身之程も難計節は、其段夫方江相斷置、奥方里方江戾候後月相重り、彌妊身ニ相違無之候は、猶又其段相斷置、追而出產出生之子は、男女ニ不拘、夫方江相渡候筋ト存候、

書面之趣は、離緣之砌ゟ、妊身之樣子に候はゞ、妊身極候節御屆申上置、出生之節、猶又御屆申上候上ニ而、男女ニ不拘、夫方江相渡候筋ニ可有之ト存候、

右之通、兼而爲心得、各樣迄御內々御問合仕候、以上、

九月　　加藤遠江守家來　戸田勘助

最初之二ヶ條申上等致し候節は委細之譯者不認、離緣一ト通之申上ニ而可然ト、口上ニ而相達候、

〔諸例類纂 四〕文化十一戌年五月廿七日松平伊豆守殿へ伺

覺

一聟養子或者他へ嫁候女離緣之上、出生之小供、男子は父方引取、女子者母方ニ而養育仕候心得罷在候而可然哉之事、

一右同斷、子供出生後離緣仕候節も、前條同樣相心得可申哉、亦者男女子之無差別、父かたへ引取候義も可有御座哉之事、

一兩條共雙方熟談之上、男子を母方へ引取候義も、不苦義ニ御座候哉之事、

一右男子女子共何方へ引取候而も、一體之義者父ニ屬候義ニも可有御座哉之事、

右之通、兼而心得罷在度候間、各樣迄御伺申上候、以上、

五月廿七日　　相眞志摩守家來　菊地萬之助

御書取

妻離緣之義、出生之子は男女共夫之方江可引取筋ニ候得共、女子は妻之方ニ差置候共、相對次第ニ候、聟養子を差戻候はゞ、男子之子供者可連歸事ニ候、乍併熟談次第、養父之方ニ差置候共、男子は養家ニ而者他江養子之取組等不相成候、二ヶ條三ヶ條右ニ准じ可相心得候、且亦何かたへ引取候ても、父子之緣絶之譯ニ者無之候事、

〔新張紙留〕文化十三子年九月二日評定所江主計頭持參書面之通一座評決

御相談書　　榊原主計頭

高井但馬守知行百姓之聟養子、此度離緣いたし候處、右養子之悴引取方申爭候由ニ而、如何申付可然哉之段、別紙之通問合候處、百姓ニ者差當例相見不申、享和二戌年、御天守下番岡田吉十郎儀、熟談之上聟養子八次郎實方江差戻し、同人悴政之丞は、吉十郎方江留置度段奉願候處、吉十郎孫政之丞儀者養子離緣いたし候上、吉十郎方之厄介ニ而者、家相續は勿論、外江養子幷御奉公筋之儀は難相成候、尤養子之實方厄介ニ成候得者、追而者養子取組等之儀相願候而不苦候、但成人迄之內、吉十郎方ニ養育いたし置候段は、相對之上勝手次第之事ニ候段、備前守殿御書取を以、御留守居江被仰渡候儀有之候間、其趣を以、挨拶振先取調候得共、右は御家人之儀ニ而、百姓之養子は、身元至て薄ものも有之、素より相對而已にて養子取極離緣請候而も、年數等之極無之、直ニ又外江養子取組もいたし候身分故、相對之上は出生之子供何江附候とも、勝手次第之事ニ可有之哉、併及出入候はゞ、譬百姓之身分ニ而も、男女子之無差別、聟養子之方江附差戻候心得ニ而取扱ひ方ニ可有之哉、及御相談候、以上、

子九月

一高井但馬守問合　　榊原主計頭

拙者知行所百姓聟養子いたし、男子出生有之候得共、身持不宜、其上不孝ものニ付、此度致離緣候、然ル處、女之子は女之方江附、男之子者男之方江引取可申旨申之、雙方之媒共迄、右樣相心得申爭候ニ付、御定法之儀相伺、取計いたし度段、名主共申出候、如何申付可然哉、及御問合候、以上、

閏八月　　高井但馬守

榊原主計頭樣

御書面御知行之百姓聟養子、男子出生有之候處、離緣いたし候はヾ右男子之儀、成人迄之内、養方之宅ニ養育いたし置候儀者、相對之上、勝手次第之事ニ候得共、追而者右養子之實方江可引取筋と存候、以上、

子九月　　榊原主計頭

〔民家叢書二十〕明和八卯年、

一主殿頭樣ゟ差出候御別紙

拙者養女、明和四亥年十二月廿三日、太岡兵庫頭方ニ而出産、女子出生仕候、此度致離緣候得共、右娘儀は申談之上、兵庫頭方ニ差置申候、此段御達申上候、以上、

十二月十九日　　田沼主殿頭

〔太平記忠臣講釋〕第七

去られた夫をとがめはせぬが、出て行く氣なら、此子を連て行しやんせ、ヤア痴氣者、去たからは子でもないわい、イヤ〳〵男の子は男に付く世間の大法、水仕奉仕してなりと、お二人を養ふに、此子が有ては瘤になる、〇下略

〔民事慣例類集婚姻〕離緣ノ上ハ、出生ノ小兒男女共、父方ニテ養育スルコト勿論ナレドモ、或ふ

示談ノ上里方ヘ遣シ、手當金ヲ渡スコトモアリ、(武藏國豐島郡)

嫁資持參ノ分ハ差戻シ、不埒ノ所業ニテ離緣ニ及ブ節ハ、其時宜ニ因リ媒介人之ヲ處置ス、其他財產分割ノ慣例ナシ、子女養育ハ多クハ男子ハ夫ノ方、女子ハ婦ノ方ニテ養育スルコトナリ、(甲斐國山梨郡)

嫁資并持參ノ品ハ返戻シ、夫ノ家ニテ調成セシ物品ハ、其離緣スルノ原由ニ因テ差押ユルコトモアリ、子女ハ悉皆夫ノ家ニテ養育スト云ヘドモ、婦ノ望ミニヨリ其兒乳ヲ離ルヽマデ、婦ノ家ニ育ツルコトモアリ、(甲斐國山梨郡士族例)

鰥寡孤獨

〔政談四〕鰥寡孤獨ノ者ニハ、御扶持ヲ可被下事也、是ハ畢竟年七十ニ餘リタルモノヽ、誰モ養フ人無ヲ云也、田舍抔ニテハ、二三百石ノ村ニテモ、一兩人ナラデハ無之事也、江戸ハ、旅人ノ心儘ニ集リタルコトナレバ、箇樣ノ人多カルベシ、一卷目ニ云タル如ク、悉人返ヲシテ、餘ル人ヲ江戸ノ人ト定テ、其中ニテ下サレバ、多クモ有間敷、一人ニ米一俵ヅヽモ被下バ、彼等ガ爲ニハ大成コト可成、九十百ニ餘ル人々ニハ、一年ニ一度程家康公ノ御祥忌日抔ニ、餅ノ一重モ可被下、是亦養老ノ禮ニ可協、道心者ト云者ハ、畢竟鰥寡孤獨ナリ、都モ田舍モ下ニテハ、相應ニ鉢ヲモ入ル也、其心根ヲ聞ヘバ強チニ佛法ヲ信ズル計ニモ非ズ、鰥寡孤獨ヲ惠ム心ニテ取ナスコト也ト、下ニハ如此ナルニ、上ニテ其御沙汰無ハ如何ナルコトゾヤ、御代々ノ御忌日ニ、增上寺ノ裏門東叡山ノ裏門ニテ、公儀ノ御役人參リ、一人ニ一升宛成トモ鉢ヲ御入可有コト也、文王ノ政ハ善養老ト云ヘリ、是等ハ至極ノ御政道ニテ、上ノ御祈禱ニモ、是ニ過タルコトハ有間敷、御役人ノ文盲故、如斯コトハ取興サズ、一度ニ子三人生ミタル者ニ米錢ヲ被下抔ト云樣ナル、衰世ノ埒モ無キ故實計ヲ執行フコト詮モ無コト也、

〔代官觸留四〕御請

一鰥寡孤獨之者江、是迄者老養扶持被下來候處、向後九拾歲以上之者有之願出候共、御手當米不被下旨被仰渡奉畏候、依之御受申上候、以上、

七月十〇天保十四年

〔吾妻鏡四十三〕建長五年十月一日丙午、今日奴婢雜人事被定法、付田地召仕百姓子息所從事、雖經年序、宜任彼輩之意云云、

〔御成敗式目〕一奴婢雜人事

右任右大將家〇源賴朝御時之例、無其沙汰過十箇年者、不論理非不及改沙汰、

〔御成敗式目追加〕一奴婢雜人年紀之事、式目明鏡之上者、不及子細候、〇中略恐々謹言、

延應〇延應原作延慶、據一本改、元年三月廿四日

行定判

重佐判

實成判

〔新編追加雜務〕一雜人事

兩方御家人事者、如關東被定置、不論是非、限廿箇年可被成敗、一方京都、一方御家人事者、任道理可被裁許也、

一所從事十二月廿五日遣六波羅狀也　武藏前司入道殿在判

雖爲相傳、不知行方、無其沙汰過十箇年者、稱不可沙汰、又無指由緒召仕輩、經十箇年之後、相傳號經沙汰之條、不可然之間、自今以後不可及沙汰也、

〔新編追加雜務〕一奴婢相論事

右無其沙汰過十箇年者、不論理非、不及沙汰之旨、被載式目畢、而所領知行之間、召仕百姓子息、所從之後、稱過十箇年、永令進退服仕、或令他行之時、號所從相懸煩云々、事實者無其謂、付田地召仕百姓

子息所從等事、縱雖歷年序、宜任彼輩意矣

〔新加制式〕一譜代相傳被官人事

右無證跡證人者、何以決實否乎、但及十ヶ年致奉公者、可准譜代乎、

〔長曾我部元親百箇條〕掟○中略

一譜代者定事、男女共主從十ヶ年召遣、其中無理者可爲譜代、同子者有儘可爲譜代、男子者父方へ付、女子者母方へ可付、縱雖令折檻、相放と云證據無之者、他主不可取、若背此旨主取於仕者一往相屆、以憲法取戾、又可召遣歟、可行死罪歟、其段勿論本主次第也、若令逐電、行方不知者、雖爲何ヶ年、付屆之上を以可取歸事、付隣鄕に在之を知ながら、十ヶ年過迄不相理者、重而不可及沙汰事、幷知行に相付譜代之事、一度其地頭遂他國雖令歸參本知、於無知行者、譜代不可相立事、○中略

慶長二年三月廿四日　盛親在判

元親在判

〔御當家令條二十二〕定○中略

博奕堅令制禁事

一人賣買堅令停止之、幷年季ニ召仕下人男女共ニ十ヶ年を限るべし、其定を過ば可爲罪科事、

附、譜代之家人又者其所ニ住來輩、他所江相越有付、妻子をも令所持、其上科なき者を不可呼返事、

右條々可相守之、於有違犯輩者、可被處嚴科之旨被仰出也、

天和二年五月日

〔御當家令條二十二〕定

口入人同罪之事

一男女抱置、年季拾ヶ年を限るべし、過拾ヶ年者可爲曲事、〇中略

延寶二年二月二日

〔京都御役所向大概覺書七〕覺

一奉公人之年季、從前々十年を限候處、向後者年季之限無之、譜代に召仕候共、相對次第たるべく候由、從江戸申來候間、此旨洛中洛外可令觸知者也、

寅〇元祿十二年十二月日

〔新編追加政所〕一寬喜以來飢饉時養助事

無緣之非人者、不及御成敗、於親類境界、一期之間雖令進退、不及賣買、又不可及子孫相傳也、

〔新編追加雜事〕一飢饉春養、自寬喜三年至同四年秋、爲春養、

〔新編追加政所〕一人倫賣買停止事、云代々新制、云關東施行、已以重疊、而寬喜飢饉之境節、或沽却子孫、或放劵所從、宛活命計之間、被禁制者、却依可爲人之愁歎、無沙汰之、今世間復本之後、甲乙之輩依令違犯、云々、甚以無其謂、於自今以後者、早可令停止之、如延應元年六月廿日仰、當市庭立札、可令觸廻國中、若猶不拘御制者、可令注申在所幷交名之狀、依仰執達如件、

延應二年五月十二日　前武藏守判

修理權大夫判

和泉國守護所

一人倫賣買事

右人勾引幷賣買仲人之輩者、可被召下關東、被賣之類者、隨見及可被放免其身也、且以此旨可被觸路次關々也、

仁治元年十二月十六日　前武藏守判

相摸守殿

越後守殿

一人倫賣買事

守延應宣下状被停止也、去年重被仰下畢、然者不可違前前延應例也、自今以後、一向可被停止也、

〔公家新制四十壹ヶ條〕弘長三年八月十三日宣旨〇中略

一搦禁人勾引諸人奴婢賣買惡人輩事、可催勤獄囚米事

仰、已上兩條任舊符可遵行之、

〔新編追加政所〕一寛喜三年餓死之比、爲飢人於出來之輩者、就養育之功勞可爲主人之由、被定置畢、凡人倫賣買事、禁制殊重、然而飢饉之年許者被免許歟、而就其時減直之法、可被糺返之旨、沙汰出來之條、甚無其謂歟、但兩方令和與、以當時之直法、至糺返者、非沙汰之限歟、

正應元年四月十七日　平　判

散位　判

前甲斐守　判

前山城守　判

前大和守　判

沙彌　判

〔新編追加政所〕一人倫賣買事、禁制重之、而飢饉之比、或沽却妻子眷屬助身命、或容置身於富德之家渡世路之間、就寬宥之儀、自然無沙汰之處、近年甲乙人等、面々訴訟、有煩于成敗、所詮於寬喜以後延應元年四月以前事者、訴論人共以京都之輩者不能、武士口入、至關東御家人與京都族相論事者、任被定置當家之旨可被下知、凡自今以後、一向可被停止賣買之條、依仰執達如件、

正應元年五月一日　　前武藏守　判
修理權大夫判

相摸守殿
越後守殿○中略

一可令禁斷人賣事
右稱人商專其業之輩多以在之云々可停止之違犯輩者可捺火印於其面矣、

正應三年　　陸奧守　判
相摸守　判

出羽二郎左衞門尉殿○中略

一土民去留事
右宜任民意之由被載式目畢、而或稱逃毀抑留妻子資財、或號有負累以強縁沙汰取其身代之後、如相傳令進退之由有其聞、事實者甚以無道也、若有負物者遂結解、無所遁者、任員數致其辨、不可成其身以下妻子所從等煩焉、

〔新編追加侍所〕一勾引人事乾元二
爲賣買專其業之輩、准盜賊可有其沙汰、向後守此法可被施行、先日罪名分輩、惡黨殺害謀書以上重科之外、竊盜刃傷博奕謀略以下輕罪、不謂年紀之遠近、悉可被厚免歟、○中略

一可禁斷勾引人幷人賣事
件輩任本條可被斷罪、且人商人、鎌倉中幷諸國市間、多以在之云々、自今以後、鎌倉者仰保奉行人、隨注申交名可被追放、至諸國者、仰守護人可令科斷、

〔御當家令條二十九〕條々

一人をかどわかし、賣候ものは死罪之事、

一人を買取、夫ゟ先江賣候ものは百日之牢舍、其上過料、其分限に越て可申掛、若於不出者死罪之事、

一人賣買御制禁之上者、或は譜代或は我子たりといふ共、賣候價程、賣人買人從雙方可出之、則賣られ候者は取はなし、可任其身覺悟事、

一かどわかされ賣れ候ものは、其本主江返すべし、若主人なきものは、是も其身存分次第事、

一人商賣宿之儀、久敷仕候者は可被行死罪、但一夜之宿者、糺明之上依其過可爲曲事事、

一人之賣買口入之儀、かどわかし賣候時之口入は可爲死罪、若又譜代家子以下之口入は、其品をわかち牢舍又は可爲過錢事、

一長年季御停止之上、自然猥之輩は、其人々分限に隨而雙方ゟ可出過料事、○中略

元和五年未十二月廿二日

○按ズルニ、勾引ノ事ハ、法律部上編略人、中編盜犯、下編人勾引等ノ諸篇ニ詳ナリ、

〔新編追加政所〕一人倫賣買直物事寛元三二十六

於御制以前事者、本主可被糺返、至御制以後沽却者、不可糺返直物、但本主分直物者、可被付祇園清水寺橋用途、又於其身者、不可返給本主、可被放免也、○中略

一人倫賣買錢事、被寄進大佛畢、而自國々運上之事、有其煩之由、小卑申之、然者爲地頭之沙汰可送進之由、可令下知給之旨候也、仍執達如件、

建長七年八月九日

實綱判

勘甚判

寂阿判

太田民部大夫殿

〔沙石集六本〕身賣母養事

去シ文永年中、炎旱日久クシテ國々飢饉オビタヽシク聞エシ、中ニモ美濃尾張殊ニ餓死セシカバ、多ク他國ヘゾヲチユキケル、美濃ノ國ニ貧シキ母子有ケリ、本ヨリタヨリナキ上、カヽル世ニアヒテ、ウヘシヌベカリケレバ、忽チニ心ウキ事ヲミンヨリハ、身ヲ賣テ母ヲ助ケント思テ、母ニコノ様ヲ云ヒケレバ、只一人モチタル子ナリケル上、孝養ノ志シアリケレバ、ハナレン事カナシク覺テ、死トモ同所ニテ手ヲモトラヘテフシ、頭ヲモナラベテコソ死ナメ、イクホドモアルマジキ世ニイキナガラ、ハナレンモ口惜キ事也トテ、母フツトユルサヾリケレドモ、若イノチアラバ、ヲノヅカラ、メグリアフコトモアリナン、忽チニウヘシナン事モサスガ悲シク覺テ、母ハカク制シケレドモ、身ヲ賣テ、カハリヲ母ニアタヘテ、泣々ワカレテ、アヅマノ方ヘゾユキケル、三河國矢作ノ宿ニ相シリタル者語シハ、商人ノ人アマタ具シテ下クル中ニ、ワカキ男ノ人目モツヽマズ、音ヲタテヽナクアリケリ、人アヤシミテ、ナニユヘニサシモ泣ゾトトヒケレバ、美濃ノ國ノモノニテ侍ルガ母ヲ助ケンガタメニ、身ヲ賣ヂイヅクニトヾマルベシ共ナク、アヅマノカタヘ下リ侍也、母ノアマリニ、ワカルヽコトヲ悲テ、モダヘコガレ候ツルガ、日ヲカゾヘテコソ思オコスラメ、命アラバメグリアフ事モ有ナント、コシラヘヲキツレドモ、又フタヽビ、母ノスガタヲ見ズシテ、アヅマノ、オクノ、山ノオク野ノスヱニカサスラヒユキテ、ユフベノ煙朝ノ露ト消テ、又母ヲ見ズシテヤ、ヤミナント、クドキタテヽナキケレバ、見キク人モ、ソデヲシボラヌハナカリケリ、至孝ノ志マメヤカニ、昔ニハヂズ、有ガタク覺テ、返々モ哀ニ侍リ、

〔南路志十三〕古文書

アマ女讓與所従之事

合貳人者一人字ハツマ女廿四歳 一人子シヤカ鬼年

右侍所從者、アツマ女重代相傳所從也、然ニ子息專當兵衞允限二永代一讓與所事明白也、至二于後々將來一不レ可レ有二他人妨一、仍爲二後日沙汰一所二讓與一之狀如レ件、

康永貳年三月十日　　　　櫛アマ女

專當兵衞允

〔前路志十三〕ゆづりわたす下人の事

あわせて壹人者（はつ女がこしやかほうし丸 生れん十二さい）

みぎかのしやかほうし丸事は、はゝのおほせのまゝ、二郎ゑもんのせうにゆづりわたすところしちなり、たゞしせんしんの御ゆいごんにまかせてゆづりわたすうゑは、後日にひやうへのせうがしそんとして、いらんさまたげをいたすともがらあらば、このゆづり狀をもつて、くばうの御さたとしてもちいらるまじく候、よつてのちのためにゆづり狀如件、

おうゑい七ねん（かのへたつのとし）二月十四日　　せんだうひやうへ

ゑもんのせうかたへ

此間追々そせう申され候下人之事、りひにまかせてせんだう兵衞方へつれ候、仍後日爲狀如件、

應永九年二月九日　　賴道在判

せんだうがずんざの事、この間そせう申され候事、しさいあるまじく候、もとのごとくそのおやこふかいみなとりてつかはれ候べく候、もしおかの内きと申候はゞ、かさねてそせう申されべく、そのときこなたよりさた申べく候、この狀を御ちぎやうの間は、いづれもいづれもそむかれまじく候、後日のために狀如件、

應永八年十二月十九日　　賴道

せんだう兵衛

〔大乘院寺社雜事記 六〕文正二年正月廿二日

一小者愛滿丸父又四郎男ハ、立野之上田之被官也、千匹ニ身ヲ請拔了、其後自立野總領方煩有及違亂子細、以上田放狀令問答之間、重而不可有違亂之旨出書狀了、如此田舍方儀落居之後、御領中ニ住居在之間、隆舜法眼之參所之中間ニ成畢、又自然相應儀ハ立所用了、然而幷舜寺主昔代之由申懸之、方々質物ニ入之、令流之間、可成他人之被官云々、此條歎存之由申入之間、以總舜上座奉弘此間令問答幷舜了、申狀一向無其謂者也、向後ト云、以前ト云、不可有被官之由、以告文不去進者、幷舜可停止奉公之由仰了、

上田放狀云

鵜ノ又四郎ヲ十貫ニ賣申、鵜又四郎ニ賣申、更ニケマウアルマジク候、於永代賣也、

嘉吉三年癸亥六月廿八日　行春判

內カタ判

上書云　鵜又四郎賣狀　上田

廿六日

一又四郎進退事、幷舜寺主去狀進之、當月事告文之際入歟、仍來三日日付ニ書進上了、則給愛滿丸了、

敬白　天罰起請文事

右子細者、元興寺鵜之又四郎男父子又六幷愛滿丸等事、非被官人之處、入置借物等條、不可然之旨被仰出候、則幷舜之被官歟否事、蒙御糺明之處、非被官人之由一決畢、仍無一紙證文上者、入置借物之條越度至候、向後事堅非主從上者、於後兩三人者不可成綺候、公文云、舊借下只今云、妙德

院借下、雖入置彼體、無其謂上者、自幷舜方返辨仕可成敗候、更以彼兩三人之身上ニ始中終不可相懸候、若雖申方候、就幷舜可催促旨可有返答候、若此條僞申入候者、可蒙春日大明神、七堂三寶之御罰候、仍爲後日起請文如件、

文正二年丁亥二月三日　福智院因幡權寺主幷舜判

抑如此非被官人之由一決上者、近來自又四郎方、幷舜父子方へ米錢等引違分は加利平等、又四郎方へ可返辨條勿論歟、雖然於其段者不可有催促之由と、再不可成他人被官之由と、兩條幷舜方へ遣折紙了、〇中略

二月二日

一愛滿丸事、父又四郎進之、則給愛滿畢、

今度身上事申入候處、因幡寺主方ノ去狀咍方クダサレ條畏入候、就其ハ、又四郎又六兩人ノ事ハ、自餘ノ主ヲ相タノミ候共、愛滿丸ニヲキ候テハ、永代當御門主ニ進上仕候、更以兩人ノ進退ニハ混亂アルマジク候、仍爲後日進上之狀如件

文正二年丁亥二月六日　又四郎判
又六判

御判

就愛滿丸進退、父又四郎幷又六申狀如此、自是以後事ハ、進退一向愛滿丸可爲所存候、仍彼狀被遣候之由所也、

文正二年二月六日　愛滿古花押

御判

寛正二年十一月廿八日ニ、愛滿丸初參、因幡法眼召進之、主從義と被思召之間、雖召置御小者、

下地之住居ハ事不可有相亂之由、其翌日折紙一行を被遣法眼了、然而今度御糺明之處、捧晧文上者、其時御一行不可立用候、則晧文寫被遣候、正文ハ給又四郎了、後之爲相亂如此被仰出候也、

文正二年二月六日　　愛滿古花押

御判

又四郎者、立野之上田行春之所從也、然而去嘉吉三年以千匹其身を請拔了依、爲住屋御領內、爲自然福智院因幡法眼方ニ立入了、爲參所分立入許也、然而因幡寺主申趣ハ、自下地主從之由申懸之、入置借物等云々、此條又四郎歎申入之間、被經糺明之處、非主從之由晧文如此則被遣候、此分又四郎ニ可被申付候也、

文正二年二月三日　　愛滿古花押

晧文寫ハ、予ウラヲ封了、正文ハ又四郎方ニ給之、

〔香取神宮古文書纂〕依有ようゝゝうりわたし申男の狀之事、合ほんせん壹貫文者、

右かのおとこのあざな孫太郎生年卅二にまかりなり候を、明年きのへむまのとしよりはじめ候て、きたり候はんつちのへいぬのとしまで五箇年五つくりの間、壹貫文にうりわたし申處實正なり、もしかのおとこ、一日もてまひまをかり候はゞ、一日に廿文づゝのてまれうをさたいたすべし、此上もしいかなるけんもんせいけ、神社ぶつじりやうへにげうせ候とも、此狀を先としてめしとられ候はんに、その所の地頭政所、ましてゑんるいのいろい、一ごんもあるまじく候、仍爲後日狀如件、

文明五年みづのとのみ十二月廿三日

うりぬし香取津宮住人左近次郎花押

口入人とちくす花押

奴婢賣買

〔新編追加 政所〕一人質事、人倫賣買之御制以前、致訴訟於給問狀者、任證文可流質人也、次御制以前、雖入流之、御制以後、至經訴訟者、早致一倍之辨、人質事不可及沙汰、凡御制以後、入質事者、一向可從停止也、以此趣可令奉行給之旨、被仰下候也、仍執達如件、

建長六年五月一日　勸甚判　實綱判　寂阿判

筑前前司殿

太田民部大夫殿

一依不償負累、爲質物被押取子息所從等雜人事、

如式目者、奴婢雜人事、無其沙汰過十箇年者、不論是非不及改沙汰云々者、被押取質人之後不經訴訟、不致其辨、空過十箇年者、件質入可爲物主之進退也、不過十箇年之負物者、致一倍之辨、可被糺返質人歟、

〔新編追加 政所〕一質人事 永仁五 六 一 評、

於見質者、不及沙汰、至入質者、可依券契矣、

〔伊能文書〕新福寺村忠右衞門子息年季證文、

相渡申請狀事

一當午ノ御年貢ニ詰り、我等子供文四郎と申者、身。代。金。四。兩。請取預り申、午之極月廿七日より申ノ極月廿七日迄、中年貳年季ニ相定、御奉公爲致申所實正也、年季之内取逃欠落仕候者、其贓物は御勘定次第ニ辨、其上其身尋出シ、相渡し可申候、無恙御奉公相勤申候者、本金四兩之内貳分貳朱つぶし、殘而金三兩壹分貳朱返進仕候らはゞ、無相違御暇可被下候、

一宗門之儀ハ、留田村淨福寺旦那淨土宗ニ紛無御座候、若御法度之宗門と申者御座候者、何方迄も罷出御申分仕、貴殿ニ少も御難儀掛申間敷候、若又此方より御暇申請候者、本金四兩ニ又金四兩加、金子八兩指上、御暇可申請候、貴殿御氣ニ入不申候者、何時成共御心次第くりかへ可申候、此文四郎ニ付、如何樣之儀出來仕候共、少も御難儀申間敷、とさせ之儀御家口ニ被成可被下候、爲後日仍而如件、

元祿十五年午ノ極月廿七日　新福寺村　捴右衛門(印)

同村請人　二郎右衛門(同)

篠原村同　權四郎(同)

佐原村
伊能茂左衛門殿

○按ズルニ、前文身代金四兩トアル四兩ノ上、幷ニ中年二年季ノ二年ノ上ニ印アリ、

〔新編追加 雜事〕一越堺下人事、地頭等有不和之子細、年來於令拘留之輩者、不論年紀、今更非沙汰之限、自今以後、相互憖可令糺返也、但至百姓下人者、不可混地頭之所從、爲十箇年內者、准被定置之旨、可返與由可被加下知之狀、依仰執達如件、

寬元元年四月廿日　左近將監　判

加賀民部大夫殿

〔新編追加 雜事〕一死去事、付沙汰之後死者、當時實直可辨也、

堺越下人事、如去四月廿日御教書者、於地頭所從前々事者、不及改沙汰、自今以後、可令糺返之、至百姓下人者、爲十箇年內者可返與云々、而地頭所從與百姓下人令分別者、還有沙汰之煩、更無落居之儀歟者、云地頭所從、云百姓下人、前々事者、共以不及沙汰、至自今以後者、相互可令糺返、早守此旨可被加下知之狀、依仰執達如件、

奴婢生兒

寛元二年七月七日　　左近將監　判

太田民部殿〇中略

一令逃雜人咎分限事

右拘置人下人之所、本主人與雜人遂問注之日、地頭爲雜人方人、以代官雖遂對決、任相傳可召渡之由蒙御成敗、本主人行向欲請取之處、乍有其庭、自後圍彼奴令逃失畢、仍差日限不尋出于其內者、可有咎之由雖被仰含、于今不尋出之咎、分限傍例不審候、本主人有道理者、辨其代之外、不可有別科候、本主爲顯然之僻事者、不及沙汰候歟、

〔信玄家法上〕一奴婢之逐電以後、自然於路頭見合次第、欲糺當主人、本主私宅江召連事、非法之至歟、先當主人方江可返置、但依境遠、其理遲延之事、五七日迄者不可苦歟、

〔貞永式目〕一奴婢雜人事

右任右大將家御時之例、無其沙汰過十箇年者、不論理非不及改沙汰、次奴婢所生之男女事、如法意者、雖有子細、任同御時之例、男者付父、女者可付母也、

〔新編追加雜務〕一奴婢雜人年紀事、式目明鏡之上、不可子細候、件男子相論事、於先夫同家之子息等者、不開年限、男者付父、女者被付母之條、勿論之次第候歟、恐々謹言、

延應〇延應原作正嘉、據一本改元年三月廿四日　　行定判

重佐判

實成判

〔新編追加政所〕一人質事

奴婢爲質物令入置于人許事、不可有利平、但可依證文、於質所令生子者、辨錢令出其身之時者、彼子可爲主人之進退、

一為訴訟人所生男女子事

妻女懷孕之後、經三ヶ月令賣其父之後所生男女子者、被付父哉否事、懷孕實否、假令以着帶為此證歟、以三ヶ月之證據、為其父之由被定行之條、頗以為勞擬乎、

〔新編追加雜事〕一男女子息編○叔事

十歲內者可被付父母、十歲已後者任被定置之旨、就年紀可令成敗給也、但是為關東御家人之輩事也、於京都族者、不及口入之狀、依仰執達如件、

寬元元年十二月廿二日　　　　武藏守　判

謹上　相摸守殿

〔新編追加雜事〕一所從子息事、犯科以前生子者、任男女子之例可被付云々、

〔政談一〕譜代者ト申者、和漢共ニ是ヲ奴婢ト號シテ、古ヨリ有者也、士分ノ譜代ヲ、唐ニテハ部曲ト云、此方ニテハ家人トモ家ノ子トモ云テ、是ハ奴婢トハ別也、奴婢ハ奴婢ノ仲間ニテ婚姻ヲ通ジテ、平人ト婚姻不成、部曲ハ平人ト婚姻ヲモ爲コト也、然レドモ其主人ノ人別ニ付ケ置テ、子孫迄永々他ヘ離ルヽコトナラヌ者也、然ニ近年出。替。奉。公。人。盛ニナリテ、武家ニハ絶テ無之、田舍ノ百姓家ニモ此頃ハ絶テ少クナリタリ、其子細ヲ考ルニ、譜代ハ面倒ナル者也、家內ニテ生レ出ル者ナレバ、幼少ヨリ介抱ノ入コトナリ、成人シテモ衣食ニツキ諸事ニ付、押ヘ扣ヲシテ使フ故、世話ニ爲テバナラヌ者也、サテ我家ニ屬シタル者ニテ、外ヘ行可キ所ナケレバ、見放スコト成難キ主人ニ甘ユル者ナリ、惡キ人柄ニテモ無爲方（セン）バ切テ捨ルヨリ外ノ仕方ナシ、昔ノ武家皆々知行所ニ居住セシ時ハ、衣食住トモニ心安ク、田舍ノコトナレバ、惡キ物ニテモ其儘ニシテ許シ置コト易シ、然ニ武家皆御城下ニ居住爲コトニナリテハ、諸方ノ人込ナル故、下々ニ付出入ノ出來ルコトヲ慷ヲ心第一也、出替者ハ一年限ナレバ、惡キ者ニテモ一年ハコラヘ易シ、惡キコト有ヾ諸人

ニ渡シ遣セバ、手前ノ世話ニナサズ、諸事皆彼ガ自分ニテ爲バセワナシ、年々人ヲ置替レバ、新キ人ヲ珍ク仕故、氣改テヨシ、世間ニスレタル者ナレバ、供廻使等言付テモ利口ニテヨシ、如此ナル子細ニ依テ、人々皆出替者ヲ好テ、元ヨリ有來ル譜代ヲバ、後世ノ爲、慈悲之爲抔ニ托ケテヒマヲ出シテ、今ハ武家ニ絶テナシ、年久キ用足ナドハ、譜代者ノ様成ドモ、請狀ニテ置タル故、是譜代者ニハ非ザル也、田舍ノ百姓ヘモ御城下ノ風儀移リテ、面倒ナルコトヲ嫌ヒ、サツパリトシタルヲ好ム風俗ニナリ、譜代ハ損ナリ、出替リモノヨシト了簡シテ今ハ是モ譜代少キ故、大百姓モ、田地ヲ不殘手前ニテ作ニハ、作男ノ數モ入、切米ニ物入迚、多ハ入作ニシテ手前ニセヌコトニ成、是ヨリシテ小作百姓ノ方ニ姦曲出來シテ、百姓ノ身上惡成トモ、今ハ無爲方、不殘出替者ニ成タルニ、又浮氣成モノハ、釣鬢奴手振ヲ好ム故、供一邊ト云コト、中比ヨリ出來ヌ、昔ハフシン抔ヲ爲ニ、日傭ヲ雇コトナシ、皆手前ノ中間若黨ニ普請胴築ヲサスル、親類知人ヨリ家來ヲ借シテフシンヲサスル故、物入ナシ、大名ハ足輕中間幷ニ家中ノ家來ヲフシンニ使フ、公儀ノ御普請ニモ、御旗本ノ家來ヲ出シテ、日傭ヲ召使ワルヽコトナシ、某祖父ノ世代、又父ノ弱キ時ノ話ニテ承タリ、祖父ガフシン仕シ折ハ、細川玄蕃頭、有馬左衞門佐中間ヲ借ラル話、祖母ガ語リ聞セ候、又近比ハ中間ノ類、米ヲサヘ不舂、米舂ト云者御城下ニ出來ルハ、此二三十年以來ノコト也、其前ハ無コト也、又松平伊豆守、釐限ト云コトヲ拵出シテ、武家ミナ是ニ成シヨリ、奉公人引米ト云コトヲシテ、供先ニテ口ヲヌラス、夫ニテモ不足、博奕ヲ所作ニシテ、窮シテハ欠落ヲスル也、下々欠落ヲスレバ、間ガ缺ルヨリ、口入ト云者ニ、奉公人ヲ入サスル故、出入自由ニ成也、依之奉公人瑩惡クナリ、三月出替リノ時分ハ、五日ノ筈成共、一切ニ作法ノ様ニ成テ、四日ニ出ル、年季者無家ハ、男女トモニナク成テ、世事ニサヘ事カク有様成バ、遠テ人ヲ置付ル也、此機ニ乘ジテ、奉公人ノ給金次第ニ高直ニ成、此四五十年以前ハ、若黨ノ切米二兩計リ、中間ハ三分一兩、針妙一兩計リ、婢女一二分成シヲ、今

ハ若黨三四兩以上、中間二兩二三步三兩、鍼妙三四兩、婢女二兩位、其餘モ取コトニ成タリ、當時ニイタリテハ、武家ノ輩、奉公人ノミニ非ズ、其外ノ諸色迄、次第ニ高直ニ成テ下人ヲモ身上相應ニ持コトナラヌ樣ニ成タリ、元來軍役ト云ハ、譜代ノ家來ヲ、身上相應ニ持コトナル故、譜代ノコトヲ部曲ト云タルナリ、然ニ今ハ譜代ト云一人モナキ世界ニナリ、出替者サヘ持難ケレバ、精ヲ出シテ出替者ヲ澤山ニ置テ騒ヲ、軍役ノ嗜善ト覺ル、何ノ間ニカ風トナリ、昔ヲ知人ナキ故、當時ノ軍法者ノ備立ヲ見レバ、其主人主人計ヲ一面ニ備サセ、各鎗一本ノ役トシ、家來ヲバ其後ニ備テ胴勢ト號ス、去バ五十騎一備ソ士ノ内ニハ、二百石取モ有、三百石取乃至千石取モ有、肝心ノ時ハ、皆鎗一本ニテ步立ニ成ハ、步士五十人持タルト、何ノ替モ無ク、然バ高知ヲ士ニ與ルハ何ノ爲ニナル、元來軍役ト云ハ、譜代ノ家來ハ、其主人ト同ク備へ立ニ列スルコト成ヲ不知バ、世間ニ譜代絕テ、出替奉公人計ニナリ、其上大坂御陣以來、日本國中ノ諸大名ヲ御城下ニ被召置故、大名ノ家來モ御城下ニ入込ヨリ、御直參又者ノ差別ヲ立ルコト、世ニ連テ盛ニ成ヌルヲ、昔ヨリノコト、思ヒ、如右不埒ノ了簡ヲ、武道ノ師範ヲ爲軍法、ノ先生ト思ヒ、其法ヲ學コト、思慮可有コト也、御陣ノ御供ヲセン時、手形一枚ニテ召置タル出替者ヲ召連、箱根ヲモ笛吹ヲモ越タラバ、皆欠落可仕、是譜代ニ非レバ不忠證據也、

〔病間長語〕二、風俗婾薄にして、人々便利を事とする故に、鎌倉以降は、出代奉公と云ふことを設けたり、都下の諺に江戸中の白壁はみな旦那と云ふことあり、雜人ばらの詞とは云ひながらあまりに義を知ぬことなり、志あらん人は歎しくは思召さずや、馬は上等の馬に騎し、牛は中等の牛を用ひ、人は下等の人を使ふと、許魯齋の云はれしも、この時に思合せたり、六十六州を知しめす君の、六十六州の内の人を使はるゝにさへ、諸人のある奉公人ある世の中なれば、以下は云にも及ぬことなり、

（世事見聞錄 一）武士之事

下男の馴合書通の事は、武家におゐては深く忌嫌ふ事にて、厳禁に行ひ、男女とも打捨し事なり、是主人を濟むるの第一なれば、左も有べき事なり、然るに其後追々猶豫の沙汰に成て、首代りの過料金又は給金の出金を取立、武家奉公を構などいたしたるに、今は又夫も緩怠に成て、奉公を構ふ事希にして、本金を取立る事も彼是勘辨を付て、取立ぬ事に成、假令本金の沙汰に及ぶといへども、請人なるもの拒て容易に納めず、此納め方等閑なるとて計ひ方もなく、公邊江訴る事も前にいふ如く急に埒明兼るなれば、是又、無據曲げて用捨する事なり、又希に武家奉公を構ひたるとも、其咎を用ひず、他家にて是を糺すべくも、穩かならざる事にて、見逃し聞逃しに致し置、又侘來れば手輕に赦し遣し、又先主への問合抔來る迚も返事を遣し、子細有ものも、故障なき體に申遣すなり、是等も其奉公人へ對しては仁惠の沙汰なれ共、召抱る主人江對しては僞りの返事也、當時奉公人の遣ひ方、餘り緩怠過るゆへ、下人ども突上り、不奉公に成、殊に男女の間迄猥りに成ぬ、一體御治世の始め頃は、人の遣ひ方嚴敷により、君臣の禮甚厚くなりぬ、僕たりとも、主人には命を懸て奉公し、主君も又身命を抛て奉公する下人を惠む事厚かりし也、今は主從とも怠慢になりて、其實なく、寛永の頃、明の舜水なるもの、常陸の水府に有し時、彼家中にて、百石二百石の侍の、纔か一兩人を召仕奴僕等の、主人を尊敬する風情、また奉公の信實なる體を見て、大に感心し、我明朝も、かやうに君臣の禮あらば、北狄に犯されまじきものをと落涙せしと云、明朝の末、君臣の禮迄も亂れて、終に國を亡失せしが、當御治世の始寛永の頃は勿論、元祿前後の頃迄も、主從恩義厚情厚かりしと聞く、全體下郞は無禮過言不實不奉公あれば、卽座に打捨る程の威儀なくては叶ひがたし、全體本金を取立るなどの事は、利潤に據りし制度にて、主從の間にあるまじき事也、是君臣の道理に當らざる心得ゆへ、此法もいつとなく緩みて、此體になれり、打捨るものも、

本金も取立ぬ事になりしゆへ、段々不奉公に成、主人の遣方は追々緩く成て、彌增心を用る事になり行ども、夫に隨て下人の方は突上り、主人は能き程に誑し置ものと心得、如何樣の不埒をなしても、暇を出さる・迄にて事濟ゆへ、我儘のみに成行奉公に表裏多く、或は主家に居る内より、先主の事を嘲り、家の惡弊を世間に弘め、名は君臣なれども、寄合傍輩同樣の事に成行、主人の威年々に薄く成、奴僕の心月々に募り、或は武家奉公は樂をすべきものと成、或は奉公の數幾日など、極り、夫を致す事さほどには働かぬ事なども、怠慢の極り付、給金は已前より倍に、働は減少し、其體昔の十分一にも不及なり、依之百姓も田地を耕す苦勞をやめて、武家へ樂奉公に出、年々に荒地出來て、都會の遊民は段々に增す也、

〔新加制式〕一一季奉公雇事

右經歷諸方而致奉公之輩、當其月乞暇常習也、然不遂其月而猥令退出者、自由之至也、尤當季之主可任意、不可有他人妨、

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事

寛保二年極

一奉公人病氣ニ付、宿江下候處、致快氣候へ共不相歸、外江奉公ニ於出は、給金不相濟候はゞ　請人欠所 江戸拂　奉公人 同罪

追加

但給金相濟候共、請人過料、奉公人手鎖、

〔德川禁令考〕四十九 奉公人 寛文八申年十二月廿六日

一季居奉公人出替之儀ニ付傳達

一奏者御番　御留主居衆　大目付　町奉行　御作事奉行　諸番頭　物頭　御目付　御步行頭

右一同招之、來酉年一季居之者出替之儀被仰出之趣、老中申之所謂、

覺

一一季居之若黨小者中間、例年二月二日出替たりといへとも、先ヅ來酉年者、今年之請人手形ニ而、御旗本之分者、三月五日迄可差置之筈、及異儀族於有之ハ、其請人迄可爲曲事者也、

十二月廿六日

附記
寛文九酉年正月

舊多御觸之通、一季居之奉公人之事町人召仕も一季居之分者、同前之儀候間、左様相心得、先三月五日迄、去年之請人ニ而召仕尤ニ候、當春召抱一季居も勿論、來年三月五日迄之約束仕召抱尤ニ候、町中家持ハ不及申、借屋店かり等迄、此旨急度相守可申候、大名衆家來等も、江戸請人之分ハ、其趣相守可申候、御旗本衆計之様ニ相心得候もの有之由相聞候ニ付、重而如此相觸候事、

正月

〔享保集成絲綸錄三十九〕正德三巳年五月

一町々店借幷出店衆等、武家方江奉公ニ罷在候もの有之候ても、名主家主方ゟ差留候様ニ相聞候、定而最前番所江書上候内之者故、番所ゟ差圖も可有之哉與存違へ、差留候者と相聞候、曾而差留候譯には無之候間、武家方江奉公罷出候ものは不及訴、早々差出可申候、奉公に罷出候以後、何方江相濟候と申儀は、名主方ゟ番所江相屆可申候、右之趣町中可觸知者也、

五月

〔天明集成絲綸錄四十七〕安永六酉年五月

近來在方村々之もの共、耕作を等閑にいたし、却而困窮等之儀申立、奉公稼に出候者、多所持之田畝を荒置候類有之由相聞、不埒之至候、以來村高人別割合、何人迄者奉公に出候而も、殘人數にて耕作者勿論、村方之差支無之哉否、村役人共相糺、實ニ無據子細ニ而奉公ニ出度旨相願候もの有

之候はゝ右割合之人數迄者村役人共承屆年季を限奉公ニ出候樣可致候若村方之差支も不顧奉公ニ出持田畝を荒候儀等有之候はゝ當人は勿論村役人共可爲越度者也

右之通御料者御代官私領者領主地頭より可被相觸候

五月

右之通可被相觸候

〔天保集成絲綸錄百六〕天明八申年十二月

三奉行江

陸奧常陸下野國村々之儀御料私領共近年及困窮別而去ル卯年凶作以後者人數も格別ニ相減じ耕作も行屆兼候趣ニ相聞畢竟人少よりの事と相聞候間右三ヶ國之內人數不足ニ而手餘荒地等も有之場所よりは以來奉公稼等に不可出然共他國江奉公に出候而も其村人數不足にも無之耕作之障にも不相成分は御料は御代官私領者領主地頭江相願吟味之上承屆何國何郡何村誰儀奉公に出候儀差免候旨之添狀相渡し右添狀者江戶人宿江致持參人宿より町奉行江差出候積候間添狀之案町奉行被差出置候樣可致候尤御料私領共奉公ニ出ル人數壹ヶ年限改置何國何郡何村誰之儀奉公稼ニ出度旨相願候ニ付添狀相渡差出候段幷欠落いたし候者名前共取調翌春ニ至其御代官領主地頭より御勘定所江可相屆候

一御料所村々之內人數少ニ而手餘荒地等有之村々より他國江出致奉公稼等いたし候者は年季明之節は歸村爲致尤貧窮之者に而家業難成者は糺之上御手當被下候積且輕罪之者ニ而是迄其村々に不差置者之內にも其村々之害に不相成者歸村之儀村々一同相願候類者猶亦糺之上歸村爲致候樣ニ候間私領村々ニ而も右體之類歸村爲致度存候分者得と吟味之上御料者御代官私領者領主地頭江可願出候

右之通、陸奧、常陸、下野國、御料私領ニ而取計、右之趣、村々江も可ㇾ申渡旨、不ㇾ洩樣可ㇾ被ㇾ相觸候、

十二月　孫大夫

丹波

〔御當家令條二十一〕覺

一町人召仕候者、相布著申間敷事、〇中略

年號月日

大坂天滿

三鄕年寄中

〔御當家令條二十二〕一町人、下人を手討之事、尤主人無ㇾ構候、時宜により、親類又者朋友之下人に下知し討せ候而も不ㇾ苦、是者兼而之思慮無ㇾ之、當座之存寄にて、右之仕宜に及候時之義也、勿論早速奉行所江訴ㇾ之、帳に附べし、但常々可ㇾ行ㇾ死刑と企、武士之格に仕候者、町人之作法に無ㇾ之候、兼而左樣に存寄於ㇾ有ㇾ之者、公儀江訴可ㇾ請ㇾ差圖事、

一下女懷抱之事、夫有ㇾ之下女等主人不ㇾ圖懷抱之上懷妊など仕、訴出る者有ㇾ之とも、主人に御構無ㇾ之事、

〔三秘集七〕一召仕候者給金取立集、其外譯立候出入に而、右請人等其外家中江罷越、格外成理不盡、法外成儀申候節、無ㇾ據打捨仕候節、家中傍輩共、證人に而も相濟候儀と相心得罷在候、尤右打捨候跡ニ而、御屆者勿論、町役人共方江申達候而も不ㇾ苦儀と相心得罷在候、

御附札

書面請人等理不盡及ㇾ法外ニ候はゞ、捕置、吟味之儀、其筋江可ㇾ被ㇾ申立儀と存候、慮外致し、時宜に寄打捨候とも、御屆而已ニ而者相濟申間敷哉、是又吟味之儀、被ㇾ申立候筋と存候、證人等之儀者、

吟味次第之事ニ而、差極難及御挨拶候、

巳閏七月

右之趣、兼而相心得置申度、御問合申上候、以上、

〇寛政九年閏七月

但姓名闕文

〔三秘集 二〕下男を非道に折檻之儀ニ付安藤彈正少弼様江問合

伊豆守領分野州那須郡野上村百姓總内下男武兵衛、下女かや、日雇取藤藏と申者三人去ル七月廿四日朝、菜畑うなひ居小書時迄、藤藏、武兵衛、畑ゟ歸ル處、菜畑うなひ仕廻候哉と、總内相尋候處、武兵衛申候者、未少々うなひ殘候旨申候得ば、不働之段總内相叱、晝飯後又々うなひ可申旨ニ而、食ニ給掛り候處、總内表座敷ゟ武兵衛を呼候ニ付、參候得者今日之働不埒、其上先達而主人江も不申聞宿江罷越致止宿、農業忙敷節間を欠、常ニ不奉公致し、只今者晝飯等も我儘ニ給掛り、重々不屆之旨申之、總内納戸ゟ細引を持出し、武兵衛首へ卷付、座敷之内二三遍引摺候處、鼻口ゟ血を吐、氣絶致し候旨、武兵衛申之候、然處右痛ゟ大病ニ相成、最初は言舌分兼、追々療治相加へ、快方ニは候得共、快氣之所は無覺束相見申候、右折檻之節、武兵衛請人總内甥兵藏、日雇取藤藏居合候ニ付、始末相尋候處、前書之通、武兵衛不奉公致し候趣ニ而總内致立腹、細引を首に卷付、座敷二三遍引摺候內、武兵衛鼻口ゟ血出、氣絶仕候旨、兩人共ニ申之、總内も最初吟味仕候節は相陳、武兵衛農業不情ニ付、相叱候處、言過等致し候ニ付、不屆ニ存、おどしの爲、縛り候旨申候處、縛られ候覺無之候間、如何樣ニも致候樣申候ニ付、藁繩を胸板江被掛候處、たぶさを取ニ懸り候ニ付、身を沈メ仰向ニ伏候而、少々鼻血出、病氣之樣子見候付、有合之藥相用候之旨申候處、武兵衛、兵藏、藤藏申候とは相違ニ付、再三吟味仕候處、最初申聞候通、武兵衛胸板へ藁繩を引掛候と覺候得共、其節甚立腹仕、逆上仕候間、前後を忘れ、藁繩と存候得共、細引を用ひ、胸板と覺候得共、首筋へ掛、存之外強く痛

候義者存候得共、其節者取昇せ、始末之儀得と相覺不申、武兵衛、藤藏、兵藏三人之申口と相違仕恐入候旨申之候、醫師共相尋候處、外ゟ强くも痛候故を以、起候病ニ而、全内ゟ自然と發候病症とは不相覺旨申之候、右武兵衛儀、先達而暇をも貰不申、宿へ罷越致止宿候義も御座候得共、其節者請人兵藏、武兵衛母抔も總内方江罷越、武兵衛代り働申候、尤武兵衛去暮ゟ當春迄、給金貳兩三分ニ而相定、爲取替金貳兩壹分請取、殘金貳分有之候、同村之者ニ而、甥兵藏請人ニ立候ニ付、申談請狀不仕旨ニ御座候、總内儀、武兵衛折檻仕、大病ニ相成候處、翌朝迄醫師ニも懸不申、彼是不屆ニ付、吟味中入牢申付置候、然處武兵衛母若武兵衛相果候はゞ、下手人相願候旨申聞候、總内妻娘ニも相尋候處、妻すへは、前日ゟ親里江參り、當日は留守、一切存不申、娘いち義者、病氣ニ而、折檻致候始末得と相覺不申候由、下女かや義者、畑ゟ遲く罷歸、前後一向相覺不申旨申之候、武兵衛勤方之儀者、常ニ不奉公と申ニも無之、宿江罷越致止宿、不罷歸節者、其代ニ請人兵藏罷越相勤候旨申之候、右之通一件吟味、銘々口書取之置候處、武兵衛儀、未病氣不相勝候、當時は病死共相見不申候得共、急全快之程も無覺束様子ニ御座候、武兵衛初申口ニ而者、全總内非道之致方と相聞申候、武兵衛快氣迄、裁許相待候義ニ可有御座候哉、雙方相談内濟相成候はゞ、申付候而も苦ヶ間敷哉、仕置取計方相分り兼候ニ付奉伺候、以上、

十二月　御主人御名、家來姓名、并年號不ニ相知、但大久保伊豆守様か、

御附札

總内は主人之事故、縱武兵衛死候共、下手人之沙汰者有之間敷候、然共短慮之仕業ニ候間、相當之仕置は附可申候、先武兵衛療治御申付、相果候はゞ、此書面共被遣、其節御問合可然哉、勿論全快之上は、品ニ寄御聞屆候而も可然哉、武兵衛相果候而者、決而内濟は難御聞屆候節と存候、是迄之趣も、追而否御申聞候はゞ、可及御挨拶候、

日雇人

〔例書二〕一一季奉公人不勤ニ付、主人叱り候所、雜言申候ニ付、奉公相構暇差出候處、元主人之方濟不申内、外江濟込候ニ付、元主人ゟ、當時之主人方江右之者拙者方ニ相勤罷在候内、故障有之、奉公構暇差出候者ニ御座候旨申遣候、依之後之主人召抱候節、口入人有之、其上請人取置候ニ付、請人江掛り、給金実為返、暇出候處、請人奉公人奉行所江願出候者、一季奉公人之義、渡計之義ニ而、先々迄奉公被相構候而者、露命繋ギ方無御座、難義之旨願出候得共、畢竟主人を蔑ニ致、雜言申候故之事ニ候、其上元主人ゟ奉公相構置候を、元主人之方譯も不立、亦々外江奉公ニ出、不屆至極ニ候、何れニも元主人之方相濟し候樣申渡、無取上、

〔例書四〕一上州倉賀野宿出作百姓九郎兵衛訴出候者、私妻さく義、昨年同宿平内と申者方江奉公ニ差出候處、當三月出替時節暇願候處、平内方ニ而申渡候者、奉公人さく義、去年召抱、甚實體ニ相勤候間、當年者壘年申付候由、給金貳兩壹歩ニ去年相極候得共、當年者給金壹歩貳朱相増、貳兩貳分貳朱ニて重年仕候樣ニと申、然ル處、妻さく義、懷妊仕候ニ付、嚴敷相尋候處、主人平内義、私妻と密會仕、懷妊仕候得者、其分ニ難差置、所役人江相斷、兩人共刃傷ニ及可申旨申達候所、所役人申候者、百姓之身分として、右體及刃傷候而者、上江之恐有之候間、決而不罷成由、無據御訴申上候、何分平内義被召出、御吟味被下置候樣相願候、

右九郎兵衛義、女房を奉公ニ差出候上者、主人手を附懷妊致候迚も、扶助可致妻を奉公ニ出候者、兼而覺悟之事ニ候、奉公人之内者、主人任心之事ニ候得者、決而不義ニ者不立候、其家之主人又者據傾迄、不義ニ者不相成、右體訴出候而も、無取上、但次男ゟ不義ニ相立、

次男と下女密通、兩人とも討首、且下女夫無之ば、雙方とも引分非人被下、

〔塵巢手翰知〕一日傭之類多く成候事

日傭の者にも、其類あまた相わかれ有之候歟、御普請方の日雇之者、大名火消にやとはれ候處の

者、又道中上下の者之類、年々に多く成候者不及申、近年武家方不勝手に成來候而者、然るべき大身の人々も、足輕以下之者、日雇に仕られ候も有之、まして小身の衆中は、常々人を抱置候事難叶、步士若黨以下雇者共、供にも召連使にも遣候事に成候ニ付而、町々にも是等の請負仕候者出來、邊土の町々に者此等の輩猶々多く、殊かしこの辻番所にも、五人七人ツヽ寄宿仕候らはぬ所も無之候と承り候、然者是等の輩凡八萬を以かぞへ候程の事にも罷成候歟、近年奉公人之すくなく候と申も、皆々此類の者に罷成候而、世を心安く渡候故と存候、

(寛曆集成續編錄二十九)延享元子年九月

日雇座之者江請取來候日雇札役錢相滯、御用人足之差支ニ相成候ニ付、七年以前午年、町々日雇稼之者、人別帳爲差出候、其砌者、役錢之出方も相增候樣有之候處、其以後又候段々減少致、當時無札之もの多有之候、依之七年以前之人別帳を以、日雇座之もの、店々江相廻り、無札之者幷役錢滯候者相改候筈ニ候間、此段地借店借裏々迄可申聞置候、

一前書之通、札役錢相滯候もの多、日雇座之者御用人足勤兼、差支ニ相成候間、札役錢無滯處頭共江差出、處頭之者より早々日雇座之者江可相渡候、處頭之者方ニも滯有之樣ニ相聞、不屆ニ候、是又急度日雇座之者江可相渡候、

右之通、町中不殘可相觸候、

九月

延享二丑年八月

覺

一日雇座之者より相渡候札改之節、札持出不申、札頭之名計を申、宿ニ差置候抔申之、改方紛敷候間、前々ゟ相觸候通、稼ニ罷出候節者、札持出改請可申候、札持出不申、宿ニ差置候分は無札ニ相

立、吟味之上、急度可申付候、勿論月切札壹ヶ年通シ札共ニ右同前ニ候事、

一日雇座之者、札改之節、雜言抔申、其上手向等致候者有之由相聞江、不屆ニ候、左樣之者有之候はば、吟味之上、急度可申付候間、召捕可罷出旨、日雇座之者江申付候事、

一公儀御普請方幷諸人足請負之者、總而武家方諸日雇請負之者、幷火消方、家人足之分、入口請負之者共、無運滯日雇座江罷越、帳面ニ相附、自分之札をも請取、勿論無札之諸日雇相雇申間敷候尤十日雇廿日雇、月雇、武家方町方江罷出候者共、札請取候儀及運滯候由、不屆ニ候、無札之儀者不及申、日限過候はゞ、早々無運滯札引替所持可致候、

右之趣、前々も度々相觸候得共、今以不埒ニ候、無札之者有之、又は札役錢相滯候得ば、日雇座之者相勤候人足之差支罷成、御用之妨ニ相成候間、前書之趣、急度可相守候、若違背於有之者、急度可申付候、

八月

延享三寅年十一月

日雇座之者江請取來候日雇札役錢相滯、御用人足之差支罷成候ニ付、去ル午年、町々日雇稼之者、人別帳差出させ、其以後去々子年、右之人別帳ヲ以、日雇座之者、町々江相廻候處、其砌は無札之者無數役錢出方も相增候處、又候段々致減少、當時無札之者多罷成候、依之此度、家頭共ゟ日雇稼之者、人別帳爲差出、右人別帳ヲ以、日雇座之者店々江相廻、無札之者幷貸錢滯候もの相改候筈ニ候、此段地借店借裏々迄可申聞置候、

一前書之通、札役錢滯候者多、日雇座之者、御用人足勤兼、差支ニ罷成候間、札役錢滯無之、家頭共江差出、家頭之者は、早々日雇座江可相渡候、家頭之者方ニも滯有之樣相聞、不屆ニ候、是又急度日雇之者江可相渡候、

右之通、町中不殘可相觸候、以上、

十一月〇中略

寶暦四戌年閏二月

町中日雇札役錢、鳶頭共取集、日雇座江差出候得共子細有之、去年迄町々家主ども江取集、直納致候、此節も子細有之ニ付、當分は町々家主共江取集名主方江差出、名主ゟ奈良屋役所江可相納候、

鳶口　役錢三拾文宛　　車力　右同斷

入口　右同斷　　日雇月切　右同斷

駕籠舁　右同斷　但武家方雇六尺共

淺草御藏米揚日雇　同糀搗日雇　右同斷　　脊負輕子　同四拾六文宛

但下座見役錢は、只今迄二季ニ差出候間、先此度取集ニ不及候、尤日雇之分も取集ニ不及候、

右之通、急度取集、來月七日八日兩日之內可差出候、延引ニ及候而は、御用人足之差支相成候間、無油斷取集、日雇人別帳相添、急度可相納候、

一前々御觸も有之無札ニ而日雇稼候事は不相成事ニ候處、無札之者有之由、右は別而家主ゟ遂吟味、極り之役錢取立可差出候、尤日雇札者、只今之通、日雇座ニ而請取候樣ニ可致候段、去年中直取集之差も申渡候得共、役錢差出し候得ば、札は請取不申候而も不苦事之樣ニ存候哉、札請取候者無數候、役錢は差出候共札無之候而は、無札ニ相立候間、八丁堀新銀丁代地日雇座壹右衞門會所ニ而札請取可申候、

一去年中、直取集之差、先達而札頭方江役錢指出候由申之、紛敷筋も有之候、右體之紛敷儀無之樣致吟味、役錢取立相納可申候、

一當閏二月分迄滯役錢有之者も有之候得共、此度は右滯上不相構、來三月一ヶ月分取集メ相納

可ㇾ申候、尤右滯之分は、只今迄之通、札頭方江取立、日雇座江可二差出一候、

一日雇座之者ニ申付、無札之分爲二相改一候間、家主共入念致二吟味一、無札之者無ㇾ之樣可ㇾ致候、

閏二月

〔世事見聞錄 一〕武士之事

扨諸手の御門番、又は兩山始所々の防役を勤る迚も、羅紗猩々緋の頭巾羽織を著、看板法皮等の出立は見事なれども、徒士足輕小人等多く雇人にて、町人等の請負を以、或は欠付何程、役場迄到りて何程、手合何程、夜道何程など、、賃錢の次第ありて、皆賃錢と辨當等のみ心を入たるもの共にて、身を入て役を勤るものはなし、是等の事は、有廟〇德川吉宗の御代、右等の雇人を遣間敷旨、御制度出て止しと聞、其法崩れて今又雇人に定りし事に成ぬ、假令屋敷の見體惡敷、侍の風體見苦くとも、實正の人馬を高並相應にもちて、非常の節者實義に働くやうに有度事なり、是元不勝手より起りしなり、不勝手者表向を取飾奢侈より起りて、主從とも耻も義も忘れたるが故なり、

〔享保集成絲綸錄 四十〕承應二巳年正月

一若黨、中間、草履取、六尺以下、其外下女總而一季半季居之出替り之者、來二月十五日前に有附可ㇾ申候、十五日以後左樣之もの、宿仕候はゞ可ㇾ爲二曲事一候、若よしみのがれざるものは兩御番所江參り、帳ニ付、宿かし可ㇾ申事、

正月

〔享保集成絲綸錄 四十〕萬治二亥年正月

一一季居之奉公人之宿、二月廿日切ニ可ㇾ仕候、若日數過、宿仕もの候者、過錢十貫文、或は籠舍可ㇾ申付事、

正月

〔御當家令條二十八〕覺

一一季居之輩、如例年出替之節暇を出候ニおゐては、今度火事ニ付、先々ニ而爲迷惑候間、給分扶持方食物等不足候共、其儘堪忍すべきと申候はゞ可差置、勿論暇を乞候者可出候由、最前相觸候得共、當年者、一季居一切暇を不可出、去年之給扶持抔ニ而、前々之請人を以可立替と申候者可任其意候、但主人相對ニ而暇を出し候者不苦候、以上、

正月廿九日〇明暦三年

〔享保集成絲綸錄四十〕寛文元丑年六月

男女召仕之者抱置候砌、戌丑二月二日より寅二月二日迄、日切之請狀爲致抱候處ニ、翌年も又抱候約束ニ而、日限之外差置、受狀未取置內ニ取逃致欠落候輩、主人より右之請人ニ懸り候儀、理不盡ニ候間、左樣之出入訴候はゞ、必主人失墜ニ可被仰付之旨、御奉行所ニ而御定候、在々ニ至迄、其旨相まもり、急度請狀取置、召抱可申候、年季ニ置候ものも同前ニ候、但質物ニ差置、返金不濟故、日切之外抱へ候者致欠落候はゞ、可爲各別候、右之旨跡々より被仰付候得共、猥ニ候間、自今以後、堅可相守由被仰付候、已上、

〔世事百談〕奉公人出がはり

近世武家編年略に、寛文八年十二月十六日、新有命曰、舊例、江戶士民之家入仕之奴僕、以二月二日爲放遣之期、來年以後、須以三月五日爲期、又安齋隨筆に、江戶奉公人三月五日出代りの事、その前は二月二日に出がはりしが、明暦三年丁酉正月十八日、江戶大火事により、その年三月五日に出代りすべきよし仰せごとありて、夫より每年三月五日となりしよし見えたり、この說いづれか正しからん、むかし〳〵物語に、昔は家來の出がはり、二月二日なりしが、寛文八申年より、三月五日になるといへり、されども今にても越後あたりより、冬の入ころ、江戶へ奉公に出でくる

給金

を、世に多事公人といへり、これは春になれば、二月二日に一統國にかへれり、是のみむかしの名殘にはありけるなりと思はるゝを併せおもへば、編年略の說正しとすべし、再案するに、寬文八年二月一日、江戸大火あれば、安齋のいはれし明曆の大火は、寬文の火事をあやまり傳へしにはあらずや、そは二月一日大火あるによりて、二日の出がはりを、三月五日までのばしたるが、そのまゝ通例とはなれるなるべし、

〔享保集成絲綸錄 四十〕貞享四卯年三月

覺

一出替之奉公人、偏々と浪人ニ而指置申間敷候、來ル晦日前無油斷有付可申候、延々ニ仕候はゞ可爲不屆候、○中略

三月

〔飛州志 二〕奴婢事人期限

本土ノ民間ニ於テ、奴婢ヲ仕フノ期限アリ、各其期月ヲノス、益田郡ハ、二月二日ヨリ、同年ノ八月二日ニ至ル、又八月二日ヨリ、翌年ノ二月二日ヲ限リトス、是半季也、大野郡吉城郡ハ、十二月ヨリ、翌年ノ十二月ヲ限リトス、是一季也、大野郡國府高山町ハ、二月二日ヨリ、翌年ノ二月二日ヲ限リ、一季トセリ、

〔享保集成絲綸錄 四十〕寬永十六卯年二月

一中間小者草履取給分之儀、當年有度儀之旨達上聞、給分可相定由被仰出之、別錄記之、目付衆ニ有之、○中略

明曆三酉年十二月

一一季居之奉公人、當年之受人を立、給分同前ニ而、來年も召つかふべし、并札を不持して日用人

足ニ不可出、自然於相背は、穿鑿之上、科之輕重ニより可行罪科者也、

十二月

〔德川禁令考後聚行刑條例十九〕享保十一午年

奉公人給金出入、人主江濟方申付候儀ニ付伺書、

覺

一奉公人給金出入之儀、前々より請人計江申付、人主江ハ不申付候、若請人欠落いたし不能在節ハ、人主江も申付候、自今請人人主兩人江申付、濟方不埒ニ候ハヽ、兩人共身體限リニ可申付候、

一前々ハ、主人方江請人より相濟候出入金、人主江相懸リ度旨願出候得バ、人主江申付候處、去ル亥年御定書出候以後、下請懸リ之儀、相對ハ格別、御役所ニおゐてハ不申付候、向後前條之通罷成候ハヽ、主人方江請人濟候給金ハ人主江懸リ度旨願出候ハヽ、町方ニ而慥成人主を取置候分ハ可申付候、尤武士方奉公人など、人主ニ取置候分ハ、相懸らせ申間敷候、

右伺之通、向後可申付候、但武士方奉公人抔、人主ニ取候分も、自今右之通可申付旨被仰渡候事、

午三月

懸紙

奉公人給金出入取捌之事

諸奉公人致欠落、又ハ不居有之暇出候節、給金濟方之儀、組合人宿江給金ハ十日限ニ申付候、若不埒之人宿ニ而不相濟候得者、身體限可申付候、人宿奉公人之下請取置、立替金願出候得者、右立替金下請江三十日限可申付候、

一取逃金欠落もの之ハ、人宿江日限ニ而尋申付、不尋出候得バ、過料申付候、但給金ハ濟方申付、取逃之品ハ濟方不申付候、

一人宿之外、素人宿親類同國好身之もの抔人程迄ハ致請判奉公人致欠落又ハ不屆有之暇出し候もの、請人江給金濟方可申付候、請人濟兼候得バ、人主江も前條之通濟方可申付候、

（天明集成絲綸錄四十七）明和七寅年十月

暇差出候家來、勤候内之給金滯之儀申立、古主を相手取願出候分は、奉行所ニても不取上事候間、可被得其意候、

右之趣向々江寄々可被相達候、

（德川禁令考後聚四十寛政刑典）奉公人給金濟方之事

一奉公人給金滯十日限請人江濟方可申付、

但日限之内、半金も出候ハヾ十日之日延、其上ニ滯候ハヽ、身上限可申付、尤主人より請人人主江相懸候ハヽ、兩人江可申付、武士方奉公人も同斷、

一主人より請人之家主江相屆預り證文取置候以後、請人欠落致し候ハヾ、家主江給金濟方幷尋可申付、

但家主より、立替金、請人之店請人江、家主懸り候とも、申付間敷事、

一奉公人病氣ニ而宿江下ゲ候處致快氣候得共、給金不相濟、其上外江奉公於出ハ、請人欠所江戸拂、奉公人同斷（御定書ニハ、致快氣候得共不相歸、外江奉公ニ出候においてハ、給金不相濟候ハヾニ作ル、）

但給金濟候共請人過料、奉公人手鎖、

一取逃致引負候者、請人江引渡、請人より可相濟旨證文取置候上奉公人於致欠落ハ、取逃引負金共請人江濟方可申付、

但引請之證文於無之ハ欠落尋計可申付事、

一奉公人請人店請無之出入ハ、家主引請相濟、當人店立於願出ハ、當人ハ門前拂申付、追而住所見

居、家主願出候樣申付、願出候節身代限可申付、

一自分之名を替、奉公人之請ニ立候者、江戸十里四方追放、

但奉公人と馴合、判賃之外ニ、給金之内をも配分取、爲致欠落候ハヽ、死罪可申付事、

一人之仕業と相見候寄子之變死を、不存分ニ致候者所拂、

但人之仕業と不相見寄子之變死を、不訴出候ハヽ叱り、

一寄子欠落致變死候儀ハ存候得共、盗人を不存宿致し、雜物質置候世話致遣、配分ハ不取者江戸拾里四方追放、

一取逃之雜物を預置致配分、又者禮金等取之、當人を隱置候請人人主死罪、

一奉公人と馴合爲致欠落候請人重追放、

但二度以上者死罪

一寄子之内、欠落及數度、不尋出候ハヽ、請人江戸拂、

一組合人宿、寄子之内を、自分請ニ立置候奉公人欠落致し、主人より訴有之、奉行所ニ而給金濟方申付候處、其人宿も致欠落（候ニおゐてハ、給金濟ハ人宿組合可申付、致欠落候人宿之）等ハ、家主江申付、於不尋出ハ過料、

一組合人宿ニハ無之、好身之者ニ付、人主印形ハ有來之判を用、自分請ニ立出置候奉公人致欠落之處、主人方江ハ不相返、又候請ニ立、外江奉公ニ於出ハ、給金爲相濟候而、（御定書ニハ、給金不相濟候ハヽニ作ル、）請人欠所、江戸拂、奉公人同斷、

但給金相濟候共、請人過料、奉公人手鎖、

〔天保集成絲綸錄百六〕寛政二戌年十二月

大目付江

都而町方より召抱候奉公人不埒有之、暇差出し、又は欠落いたし候節、請人江給金返納等之儀申

付候處、彼是難澁いたし、不差出候旨有之哉ニ相聞、不届ニ候、右之通ニ而は、主人之申付不行届、奉公人之取締ニも不宜候間、右體之儀有之候節は、町奉行江可申断は勿論之儀ニ候得共、頭支配有之面々は、聊之儀頭支配江相達候を厭ひ、打捨置候向も有之哉ニ相聞、右も無餘儀事ニ候得共、左樣ニ成行候而は、彌請人とも心得違いたし候ものも多く可相成哉、一體之取締ニも不相成候間、以來は聊之儀ニ候共、無遠慮頭支配江可申達候、左候はゝ、其頭支配より月番之町奉行江相斷候樣可被致候、

右之通、向々江寄々可被達候、

十二月

寛政三亥年十二月

大目付江

一昨日相達候奉公人給金等相滯候節之儀、以來町奉行所江申出候節は、向寄御目付江も其段相屆尤落著之上も相屆候樣添書いたし、向々可被相達候

十二月十六日

〔新張紙〕文政六未年十二月

身代金滯出入取扱方相談書

御相談書

石川主水正〇忠房、勘定奉行、

武州上小合村八五郎相手同國古新田新五郎外三人身代金出入

右出入物、揃者方江訴出候ニ付、相糺候處、訴訟方八五郎、相手之内右新五郎請人同村庄右衞門、人主ニ立、庄之助を、去ル卯年十二月より翌年十二月迄、一ヶ年給金五兩ニ相定、請狀取極候節、

身代金五両相渡、其外下總國高塚新田新右衛門請人同國澤和田村庄右衛門人主ニ而、粂次郎儀も、去ル寅年十二月より去々巳年十二月迄、三ヶ年季ニ而、給金拾壹両ニ相定、是又請狀之末ニ、期月通相勤候はゝ、極通前段給金相渡、身代金は、其節差戻し候筈認有之處、庄之助儀、親病氣之由暇差出、身代金は請人人主ゟ日延相願候間、相待罷在候由之處、濟方も不致、粂次郎は病氣ニ付、療養差加候上、全快迄、請人方ゟ預度段任申、書付取置相待候得共、是又濟方も不致候間、右身代金相返し候樣致度由之訴狀ニ有之、勿論是迄給金身代金共兩樣之滯訴出候節は、取上吟味いたし候儀之處、身代金而已滯候趣之出訴、差當不相見、畢竟身代金之名目を以相渡候段、紛敷候得共、右は村方仕來ニ相聞、素身代金之儀、給金と差別いたし候而は相當いたす間敷候間、本公請狀取極候節、給金不殘相渡候趣意ニ付、給金と全高も凡同樣ニ候上は、則事實ニおゐて事差紙之初判可差出哉と存候、依之及御相談候、以上、

未十二月

右之通評決

〔市中取締書留十ノ七十八〕天保

徒足輕陸尺手廻り、其外日雇賃錢、當時引下ゲ直段御尋ニ付、左ニ奉申上候、

一徒井足輕一ヶ年抱切、又は月抱之もの、徒壹人ニ付壹ヶ年抱切、

一給金七兩貳分

一扶持方壹人扶持より貳人扶持迄

一鹽味噌薪油其外雜用代月々銀拾匁

同斷月抱

一給金三分銀五匁

一扶持方壹人扶持より貳人扶持迄ニ
足輕壹人ニ付一ヶ年抱切
一給金三兩貳分貳朱
一扶持方壹人扶持より貳人扶持迄
一鹽味噌薪油其外雜用代月々貳百文より三百文迄
同斷月抱
一給金拾九匁四分四厘
一扶持方壹人扶持より貳人扶持迄
一陸尺幷手廻り壹ヶ年抱切、又は月抱之もの、陸尺壹人ニ付一ヶ年抱切、
一給金七兩貳分
一扶持方貳人半扶持より三人扶持迄
一鹽味噌薪油其外雜用代月々銀拾五匁
手廻り壹人ニ付一ヶ年抱切
一給金六兩
一扶持方貳人扶持より貳人半扶持迄
一鹽味噌薪油其外雜用代前同斷
陸尺手廻り共
一部屋頭役勤増給金貳兩より三兩迄
一部屋頭羽織供ニ而被召連候御屋敷は、爲右代八兩より拾兩迄、
一定數之もの病氣差合之節、代り人爲手當壹人江壹兩宛請取申候、

一部屋膳椀其外諸道具為代、壹分より壹分貳朱迄請取申候、

但品御貸渡之御屋敷も有之候

一看板下馬著之儀は、壹ヶ年四度、木綿合羽、桐油合羽之儀は、一ヶ年壹度流切ニ相成申候、

但代金ニ而御渡し御屋敷も有之、一様ニ申上兼候、

一陸尺幷手廻り抱込之外、加人足留之儀は、壹人ニ付六匁より七匁五分迄請取申候、

陸尺壹人ニ付月抱

一給金三分

一扶持方貳人半扶持より三人扶持迄

手廻り壹人ニ付同断

一給金貳分貳朱

一扶持方貳人扶持より貳人半扶持迄

陸尺手廻りとも

一看板之義は、壹ヶ年兩度相流申候、

但御屋敷ニ寄、三度相流候分も有之候、

一雇陸尺幷手廻り日雇賃幷大中遠方増賃之儀は枠外立場越と唱へ、半人又は壹人増賃錢受取申候、

一火方仲間幷厩中間壹ヶ年抱、又は月抱之もの、火方仲間壹人ニ付一ヶ年抱切、

一給金貳兩

〔公事取扱〕質地小作買預米預金給金等都而本公事ニ可成部

一奉公人請狀文段不行届候得共、初判出、

貞元四

左近將監掛

一常州鳩崎村四郎兵衞、相手同國高岡村義右衞門外壹人給金出入、

是は戌十二月ゟ亥十二月迄極抱奉公人、請狀之文段ニは、重年申付候とも、此請狀ニ而相用、請

金ニ相立趣認無之處、右奉公人は、子年八月欠落致候得共、御奉行江伺之上、本公事卷日之初判

出ル、

〔坂井家日覺〕天保七年八月十三日、女子目見來ル、　十五日、女子引越ス、貳兩貳分之割ニ而取極、貳

分取替遣ス、

〔享保集成絲綸錄四十〕享保四亥年八月

五島、平戸、大村邊、他國之者抱候時は、奉公人之國許江相違、抱候樣ニ、去ル頃被仰出候、村こし奉公

人は、本國知れざる者之儀に候間、本國は糺に及ばず、大坂町奉行江別紙に有之通申渡候條、被得

其意、證文差出可申候、以上、

八月

大坂町奉行江申渡候書付

一村こし奉公人、兩國筋江遣候時は、其國之藏屋敷留守居之者證文差添、口入之者奉公人を召連、

役所江可罷出、其上ニ而役人、件之奉公人ニ彌奉公望候哉否之儀承屆、帳へ記置可申事、

一村こし奉公人、大坂地廻り何方にても奉公ニ出候儀止候ニは及間敷候、人を召抱候者之方ニ

而奉公人之出所致吟味候上は、村こし奉公人と存候而召抱候共、勝手次第之儀に候、但大坂御

城中へは、奉公人出す間敷旨、口入之者江急度申付置可申候事、

右之通りに相極り、大坂町奉行江申渡候間、可被存其趣候、以上、

八月〇享保四年

雇人欠落

右両通之書付松浦肥前守、大村伊勢守、五島近江守、五島兵部江達之、

〔御當家令條二十九〕條々○中略

一暇を不乞して欠落仕候者、當主人江相屆可召返之、但御陣御上洛御普請之時は令堪忍、罷歸候上可召歸之、并致曲事令欠落者は爲格別之條、其旨を主人江相斷、若於無承引は奉行迄可申屆、又は在々所々ニ引込有之ものをば、其所之地頭代官江相屆可召返事、

一欠落之者之請人は、右申定候切米之一倍、請人ゟ主人江可出之、但於不出者可爲牢舍、其上は主人心次第事

一御陣御上洛御普請之砌令欠落曲事也、然上は請人ゟ尋出し、主人方江可相渡之、若不叶ニ於ては、請人ゟ爲過料、右約束之切米一倍、主人方江出之べし、於不出は牢舍之上、主人次第事、

一欠落者に、他所に而取替金出すに於ては、其仁之損たるべし、請人なくして人を抱候事爲越度上、如此也、但請人於有之は、請人方ゟ取替程宛先後之主人江可出事、

一公儀御法度を相背令欠落重科之者之事、請人ゟ本人を尋出し、主人江可相渡之、於不叶は請人可爲死罪事、

右之條々、堅可相守者也、仍如件、

元和五年未十二月廿二日

〔町鑑秘錄二〕覺○中略

右之欠落者追々借金多く不及是非者も可有之候、又者銘々之存立にてあたはぬ買掛り仕、にはかに立退く者、自今以後、請人江懸り捕、急度可遂せんさく者也、○中略

明暦二年申極月九日

〔享保集成絲綸錄四十〕寛文六午年十一月○中略

一奉公人請人共ニ欠落候はゞ、家主手鎖をおろし、其棚中之者ニ預ケ、毎日封印を改めさせ、店請人ニ日切をいたし尋させ可申事、

右之通、來月朔日ゟ可申付候間、家守之もの共ニ可觸聞者也、

十一月

〔御當家令條二十三〕一武士町人等奴婢欠落之事、其段訴來候刻、帳面に記置之、重而右欠落者召返、如前々差置候哉、又は身代金取戻、暇遣候哉、事濟候旨趣以後申來候刻、右帳面之奥ニ書付點掛置候事、

附町人借宅之者致欠落候は、件之者殘置候資財雜物等委細書付、番所江持參仕候様、其所之家主五人組江申付遣、後日書付持參仕候節、月番之町年寄方江奉行所年寄同心差添遣、闕所帳ニ記し、町方闕所藏ニ納置候事、○中略

以上

〔御定書百箇條〕欠落奉公人御仕置之事

享保五年寛保元年極

一手元に有之候品を、風と取逃いたし候もの、

金子は拾兩以上、雜物は代金に積拾兩位ゟ以上は、　死罪

金子は拾兩ゟ以下、雜物は代金に積拾兩位ゟ以下は、　入墨敲

延享二年極追加

但入牢申付、取逃之品於償候ては、拾兩以上以下共、主人願之通、助命申付、江戸に不能在様に可申渡事、

寛保三年延享元年極

一使に爲持遣候品取逃いたし候者

金子は壹兩ゟ以上、雜物は代金に積壹兩位ゟ以上は、　死罪

金子は壹兩ゟ以下、雜物は代金に積壹兩位ゟ以下は、　入墨敲

請人 人主 下請人

延享元年極追加

但、先入牢申付、取逃之品於償候ては、壹兩以上以下共、主人願之通助命申付、江戸に不能在候樣に可申渡事、

從前々之例

一巧候儀も無之輕致取逃候者　敲

一同　給金請取主人方え不引越者　敲

一同　度々欠落いたし候もの　重敲

〔享保集成絲綸錄四十〕寛文五巳年十月

一人請ニ立候者、慥成人主幷下請人を撰、手形取置請ニ立可申候、若慥成人主下受人を不取、受ニ立候もの有之候はゞ可為曲事事、

一行衞不存もの、又は欠落人など請人宿虜江引込置、奉公ニ出すもの有之間、大屋家守切々相改、左樣之もの抱置候はゞ早々番所江召連可罷出候、若脇より相聞候はゞ、大屋家守可為曲事事、

十月

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事

享保四年極

一奉公人給金濟　十日限請人江濟方可申付

從前々之例 寛保三年極

但日限之節、半金も差出候はゞ、十日之日延、其上にて濟候はゞ身體限可申付候、尤主人方ゟ請人人主江相懸候はゞ、兩人江可申付事、

享保十一年極

一武士方奉公人を人主に取候分　右同斷

寛保三年極

但右同斷

寛保四年極

一給金出入、主人方ゟ請人之家主江相屆、預證文取置候以後、請人致欠落ニおゐては、家主江給金濟方并尋可申付

但右立替金請人之店請江家主懸り候共、申付間敷事、

寛保二年極
一 奉公人病氣に付、宿え下候處、致二快氣一候へ共不二相歸一、外え奉公に於レ出は　給金不二相濟一候ハヽ請人欠所
江戸拂
奉公人　同罪

追加
但給金相濟候共、請人過料、奉公人手鎖

従二前々一之例
一 取逃致二引負一候は、請人江引渡、請人ゟ可レ濟旨證文取置候上、奉公人致二欠落一におゐては、　取逃引負金とも、請人江濟方可二申付一、
但引請之證文於レ無レ之ハ、欠落尋計可二申付一事、

享保四年
寛保元年極
一 欠落奉公人　請人江三十日限尋申付、三切日延之上不二尋出一候はヽ過料、
但取逃いたし候者ハ、六切ゟ延尋可二申付一事、

享保四年極
一 取逃之品於二賣拂一ハ　買主ゟ爲レ戻
但金子抔ハ遣捨候事分明ニ候ハヽ可レ致レ捨（スタリ）に事

寛保元年
一 取逃之儀作レ存、奉公人計隱置候請人人主　江戸十里四方追放

同三年極
一 奉公人給金請人取替相濟候以後、下請人江懸り候儀ハ、　廿日限、濟方可二申付一候、

一 同 欠落奉公人を請人見出、當宿江於二預置一候は、　立替給金、當宿江廿日限、濟方可二申付一候、
但奉公人請人方江引取置候上、致二欠落一候ハヽ、請人方に罷在候內之雜用共、當宿江濟方可レ申付候、先達て下請人江立替掛り候におゐては、當宿江は過料可二申付一、尤儲成證文取レ之差置候ハヽ其下請之者に可二申付一候、欠落ものハ引返度旨請人相願候ハヽ爲二引返一可レ申事、

享保六年極
従二前々一ノ例
一 武士方町方共、欠落一通之者を尋出於二召捕一候は、　請人江引渡、心次第申付、主人請取度旨願候ハヽ主人江可二相渡一、
但欠落三日之內、他所にて致二惡事一候ハヽ、主人方江爲二引取一、欠落にハ立申間敷事、（中略）

享保六年
一 奉公人請人、店請無之出入家主引請相済、當人店立願出おゐては、　當人は門前拂申付、追て住所見届家主願出候節、身體限可申付、

寛保元年
一 自分之名を替、奉公人之請に立候もの、　江戸十里四方追放

但奉公人と馴合、判賃之外、給金之内をも配分取爲致欠落候はゞ死罪、

同
一 人之仕業と相見候寄子之變死を、不存分に致候もの、　所拂

但人之仕業と不相見致變死候を、不訴出分は叱り、

從前々之例
一 寄子致欠落参候儀存候得共、從人と不存宿致し、雜物質置主に成、世話致遣、配分は不取者、　江戸十里四方追放

寛保元年極
一 取逃之雜物は預置致配分、又は遣金等取、當人を隱置候請人人主、　死罪

延享二年極
一 奉公人と馴合、欠落いたさせ候請人、　重敲

但二度以上に候はゞ請人死罪

寛保元年極
一 寄子之内、欠落及七度不尋出請人、　江戸拂

追加
從前々之例
一 組合人宿、寄子之内を、自分請に立置候奉公人、致欠落主人方断有之、奉行所にて給金濟方申付候處、其人宿も於欠落致は、　給金濟は人宿組合償可申付、致欠落候人宿之尋は家主に申付、於不尋出は過料可申付、

寛保四年極追加
一 組合人宿には無之、好身之者に付、人主印形は有合之判を用、自分請には立置候、奉公人致欠落候處、主人方えは不相届、又候請に立外え於奉公出候は、　江戸拂（給金相濟不申候はゞ請人欠所）　奉公人　同罪

但給金相濟候とも、請人過料、奉公人手鎖、

〔德川禁令考後聚十九 行刑條例〕奉公人請人御仕置箇條之内

一 奉公人給金滯　十日限請人江濟方可申付

但日限之節、半金も差出候ハゞ、十日之日延、其上にて滯候ハゞ身體限可申付事、

一請人死失歟、於致欠落ハ、　　人主江右同斷

但右同斷

懸紙

但日限之節、半金も差出候ハヽ、十日之日延、其上ニ而滯候ハヽ、身體限可申付候、尤主人より請人人主江相懸り候ハヽ、兩人江可申付事、

朱書

是ハ先達而伺相濟候得共、給金濟方之儀、請人人主兩人江可申付旨、享保十一午年三月伺相濟候趣を以書加申候、且又欠に有之候請人死失歟、欠落等之節濟方之儀條ハ、

此儀條但書にて相濟候付、懸紙之通相除可申候、

一武士方奉公人を人主ニ取候分　　右同斷

但日限申付方右同斷、日延申付候上滯候ハヽ、其者衣類道具等、滯金之高ニ積可爲相濟事、

〔享保集成絲綸錄 四十〕享保四亥年八月

一諸奉公人欠落之儀、主人斷次第、給金濟方之儀、請人江急度申付候事、

但給金濟方、請人江申付候以後、若滯候ば、請人身體限可申付事、

一取逃引負等之欠落もの、主人斷次第、請人三十日切之尋申付、不尋出におゐては、過料可申付、若及數度候はヽ、曲事ニ可申付候、欠落者尋出候はヽ、取逃もの賣拂候とも、買主々爲戻可申、金子拵遣ひ捨候事分明ニ候はヽ、捨りニ可致候、尤請人過料は差免、給金計り濟方可申付事、

但請人奉公人之下請人取置候て、請人相辨候金子、下請人江懸度旨願出候得共、相對は格別、御役所々は申付間敷候事、

一總而取逃引負之儀、若請人兼々存候樣子ニ候はヽ、急度遂詮議、其上之落著次第、請人御仕置可申付候事、

一町人之召仕、欠落取逃引負等之儀も、右之通可相心得事、

一右之類若請人致欠落候而も、請人欠落以前に、家主江預置、其品御役所江も斷於有之は、請人可濟金過料共ニ家主江可申付事、

但家主欠落者之店請人江懸度と願出候共、相對は格別、御役所ゟは申付間敷候事、

一欠落者有之、主人より請人を預ケ候節は、家主方江召連參、預ケ可申候、主人方ゟ請人を呼寄候節、及數度不罷越儀も候はゞ、主人方ゟ奉行所江斷次第、吟味之上可申付候事、

一奉公人出入に付、主人ゟ斷有之候はゞ、請人之家主不及異議、急度預り置可申候、借金筋ニ付而は、店之者を預り申間敷候事、

一請人欠落以後、主人ゟ斷有之候共、取上申間敷候事、○中略

八月

〔德川禁令考後聚十九行刑條例〕享保十一午年三月、大岡越前守、○江戸町奉行諏訪美濃守○江戸町奉行伺、

覺

奉公人給金出入之儀、前々より請人計江申付、人主江ハ不申付、若請人欠落等致シ不罷在候節ハ、人主江も申付、自今ハ請人人主兩人江申付、濟方不埒ニ候ハゞ、兩人共ニ身體限りに可申付候、

一前々ハ、主人方江請人より相濟候出入金、人主江相懸り度旨願出候得バ、人主江申付候處、去ル亥年○享保四年御定書出候以後、下請人懸り之儀相對ハ格別、於御役所ニハ不申付候、向後前條之通罷成候ハゞ、主人方請人濟候給金、人主江懸り度旨願出候ハゞ、町方ニ而慥成ル人主を取置候分ハ可申付候、尤武士方奉公人抔人主ニ取候分、相懸せ申間敷候、

右之通仕候而ハ、如何可有御座哉、奉伺候、以上、

三月　大岡越前守

伺之通ニ向後可申付候、但武士方奉公人抔人主ニ取候分も、自今可申付候、武士方江御通達候上、右之通可申付旨奉畏候、以上、

諏訪美濃守

午四月十四日

大岡越前守

諏訪美濃守〇中略

自分之名を替奉公人之請ニ立候もの御仕置例

享保十一午年三月入牢

橋町二町目利兵衛門店

吉右衛門

此もの請ニ立、松島町家主不知甚兵衛下請ニ而、源七と申ものを、給金壹兩貳分貳朱取、馬喰町二町目四郎兵衛店庄兵衛方江年季奉公ニ、先月廿日差出候約束ニ而致請状候處、右源七儀、主人方江不引越、直ニ致欠落候ニ付、主人方より家主方江相斷候得ハ、請状ニハ、此もの儀名を替庄次郎と相認致請状候儀ニ付、主人訴訟申出ニ付、當月十二日、雙方召出令詮議、同日手鎖を懸ケ、家主五人組江預ケ遣、猶又今日召出し、請状ニ名書替候段、奉公人并人主と馴合候様ニ相聞候ニ付、穿鑿之内牢舍、

右之もの同八月十一日五十敲候上家主ニ渡ス、〇中略

一河野久四郎と西久保新平坂町六兵衛奉公人出入

元禄十五午年八月

久四郎儀、召仕彌平次煩ニ付、養生之内請人六兵衛方江遣置處不相返、儀外江奉公ニ出候段無紛ニ付、入牢申付、給金主人江爲濟候上、左之通、

遠島　請人　六兵衛

追拂　奉公人　彌平次

阿部川町吉左衛門店　八兵衛

享保十三申年五月十四日入牢

同町　新六店

庄助

右之もの共儀請人、人主ニ而、甚助と申ものを、淺草西仲町幸右衛門方江奉公ニ出置候處、先月晦日衣類品々六拾貳色致取逃候處、甚助より請人八兵衛江之書通を落し有之、八兵衛馴合候趣ニ相聞候由、幸右衛門訴訟申出候ニ付、雙方召出し、遂吟味候處、庄助儀、甚助ニ被頼、衣類品々同町加賀屋仁兵衛方江、五兩壹分之質物ニ差置候由申之、八兵衛儀も、同所萬屋八兵衛、伊勢屋甚兵衛、加賀屋仁兵衛方江、質物取次候由申之ニ付、兩人とも入牢申付、一通り吟味相濟候ニ付、出牢申付、兩人共ニ手鎖を懸ケ、家主五人組江預遣候處、右之もの共、銘々質屋方江之辨金申付、同九月手鎖赦免、

〔德川禁令考後聚十九刑律條例〕元文三午年四月御書付

奉公人下請武士方家來ニ而も奉行所江可呼出との事

武士方家來、諸奉公人人主下請ニ立候もの有之候ハヽ、奉公人出入之節、奉行所より呼出し候上、請人同前ニ、出入金可申付候間、主人江斷次第、右家來奉行所江無滯可被差出候、

右之趣、向々江可被相達候、以上、

午四月

右御書付午五月、奥津能登守より來ル、

〔德川禁令考後聚十九刑律條例〕寛保元酉年二月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守差上候御定書伺帳之内、御好之儀申上候書付之内、

第四、請人人主取逃之儀乍存、奉公人計隱置候ハヽ、江戸十里四方追放可然候、若取逃之者を配分致候歟、又ハ禮金など取候故隱置候ハヽ、請人人主可爲死罪哉、

（朱書）右御書面之趣奉承知候、請人人主取逃之儀乍存、奉公人計隠置候ハヽ、江戸十里四方追放可然旨御尤奉存、則帳面懸紙之通御仕置付幷罪銘とも書改申候、且又取逃之物を配分致候歟、又ハ謝金抔取候故隠置候ハヽ、請人人主可為死罪旨、是又御書面之趣御尤奉存候ニ付、帳面之内△印懸紙仕候ヶ條同様之儀ニ御座候間、御好之趣書加可然哉ニ奉存候故帳面懸紙之通、文言書改猶又奉伺候、

第五、奉公人と馴合不申候ハヽ、十里四方追放ニ而可然候、若奉公人と馴合、給金等配分取候ハヽ可為死罪哉、

（朱書）右御書面之趣奉承知、御尤奉存候、則自分之名を替、奉公人之請ニ立候ものゝ箇條、御仕置附相改、幷奉公人と馴合、給金等配分取候もの、御仕置之儀奉公人請ニ立候得ハ、為判賃と給金之内、何も請人配分仕候事ニ御座候得ハ、巧候仕形と申儀書入可然奉存候ニ付、其趣但書仕、帳面懸紙仕候、〇中略

寛政九巳年閏七月十八日

安藤對馬守殿御差圖
池田雅次郎掛

麹町平川町三丁目木挽町四丁目裏上納地替地善兵衛店十番組人宿久七寄子山田岩三郎事金八一件〇中略

谷中玉林寺門前家主
定八

此者儀、請判いたし、武家方中間奉公為致候金八儀ハ、中追放御構之者ニ有之處、其儀ハ不存候共下請人取置候とは乍申、得と身元も不相糺、請人ニ相立、武家方中間奉公為致候段、不埒ニ付、過料三貫文、

〔天保集成絲綸錄百六〕文政八酉年正月

武家ニ而在方之者ヲ請人ニとり召抱置、奉公人於屋敷内自殺いたし候節、他之引合等無之、全く亂心自殺ニ而、主人心障之儀も無之候とも、見分相濟、死骸引渡候得ば、於在方者、撿使等之差支候趣ニ相聞候間、以來在方請奉公人自殺之節者、全く亂心ニ而、他之引合幷主人心障之儀無之趣之屆書面ニ候共、其向江爲見屆御目付方支配向之者差遣し可申候間、見屆相濟候上ニ而、請人人主之內江死骸引渡候樣可致候、尤町方請ニ而召抱候奉公人は、是迄之通相心得可申候、

右之趣爲心得向々江無急度可申達旨、右京大夫殿被仰渡候ニ付、御達申候、以上、

正月　　神尾市左衛門

〔大坂堺問答抄〕一奉公人取逃引負等之欠落は、主人斷次第、請人江六ヶ月尋申付、不尋出候はゞ過料申付、取逃之品幷引負金銀は、本人不尋出、主人申口計にて、外ニ慥成證據無之候はゞ、請人江償之儀不申付、主人之可爲損失候、若及數度、取逃引負とも欠落人不尋出、請人に候はゞ、吟味之上相伺、御仕置可申付候、欠落人尋出候時は、請狀ニ取逃欠落致し候はゞ、取逃之品相辨、欠落人尋出可渡と有之候共、欠落人尋出來候上は、取逃物爲辨ニ不及、過料も差免、給銀濟方計請人江可申付候、尤欠落人は入牢等申付、吟味之上御仕置相伺、右取逃之もの賣拂之買主ゟ爲差出、主人方江爲戻可申候、萬一先々江賣遣候はゞ、買戻申付、其品取上、主人江相渡、代銀は欠落人ゟ最初買取候ものの可爲損失候、取逃物之內、金銀等有之、遣捨候はゞ、不及沙汰候旨可申渡候、

但取逃致引負候ものを尋出候歟、受人江尋申付候上尋出之節、取逃引負之品、請人ゟ相辨候樣ニ主人願出候共、本人尋出候上は、給銀以外は御役所ゟは不申付候、且又取逃之品內證にて請人ゟ辨置候後、本人立歸候歟、又は尋出候付、本人可相渡候間、請人相辨置候品差戻候樣、請人ゟ主人江對願出候はゞ、右辨候品爲差戻、本人は吟味之上、御仕置可相伺候、

此儀奉公人取逃引負欠落之尋、過料申付方、幷若數度および取逃引負等之欠落人不尋出、請人は、

吟味之上、御仕置相伺候儀等、當表も御同樣に御座候、欠落人尋出候時は、右取逃之品引負銀等、請人江償申付候儀は無之、主人ゟ請人相手取、給銀出入相願候節は、定例之通濟方申付候、併取逃引負銀ヲ、請人又は親類之者ゟ主人江相對ヲ以相辨候へば、取逃之御仕置宥免之沙汰有之、若償不出來候はゞ、夫々御仕置申付、取逃之品之儀は、御書面之通取計候、尤但書之儀、其節之仕儀にもより候儀ニ付、兼て難差極候、○中略

一取逃引負欠落もの、請人、自然致欠落候はゞ、主人見逢次第、本人召連可來候、本人ヲ尋出候はば、取逃物は前々條ニ有之通申付、右欠落は當宿有之店請人取置候はゞ、不憚成者之請ニ立、差置候品ヲ以、其店請人も不取立、引負候者は勿論、御仕置可申付候、

此儀取計御同樣ニ存候得共、其仕儀にも寄可申候、

〔政談〕一當時出代リ奉公欠落取逃多ク、人々難義イタシ候也、此三四十年前ハ、給金幷ニ取逃ノ品品引負ノ金高迄ヲ、請人ニ掛リ、其請人又欠落スレバ、請人ノ地主へ掛ルコトニテ有シ故、主人ノ爲ニハ善カリシカドモ、付送リナド申樣ナル悪事流行シテ、町ノ家持難義シタリシコト也、當時ハ請人ノ身代切ト云コトニ成タル故、請人奉公人ト申合、同時ニカケ落シ、請人ノ家内ノ物ハ兼テ外へ逃シ出シ、跡ニハ鍋一ツ、名號一幅殘シ置タルト申樣ナルコト也、夫ヲ請人ノ身代切ト云ニ捌テ、跡ヲ欠所スル時、其兒人ノ燒札ヲ入テ、殊ノ外下直ニ買取故、其身代切ト云ハ、僅ニ鳥目百カ二百ノ事ト成ヲ、其主人へ渡シテ、給金モ取逃モ皆損ト成也、惜請人何方ニテモ店持居タルヲ見レバ可申出、其節取立テトラスベシ抔ト、奉行ヨリ其主人へ申渡ス、總テ人召仕フモノ、其請人ヲ見知申スベキ樣ナキヲ知ツヽ、如是ニ奉行タル人ノ取捌クコトハ、有マジキコトナレドモ、唯取捌クニ困テノコトヽ見ヘタリ、請人ト云者ハ、其主人ノ兼テ知タル者ニテモナク、何ヲ慥ナルト思フトモナク、唯一枚ノ手形ニテ公法ヲ以召置コト也、手形ニ何町誰店ト有計ノ證據ナレバ、

其店ヲ欠落スル故可爲樣ナシ、此段元來制度ノ不宜故也、元來請人ト云コトハ、其初田舍ヨリ起リタルコト也、田舍ニテ請ニ立人ハ、百姓ニテ何村誰支配ノ者ト云コトタシカ成コト也、百姓ハ田地屋敷ヲ持テ居ユヘ、田地ヲ棄テ逃走ル者ニ非ズ、親類モ其所ニ充滿シ、先祖ヨリ代々其所ニ居住スル故、タシカ成コト也、夫故田舍ニテハ御當地ノ樣ナルコトハ曾テ無也、其法ヲ持來リ御城下ニテ執行フユヘ、行屆クベキ樣ハ無也、御城下ノ町人ハ、町々ニ人別帳アレドモ、店ヲ逐立、又自分ヨリ店替スルコト自由也、元來他國ヨリノ聚者ニテ、親類モ御當地ニナク、根本來歷ヲ知タル者モ無也、借奉公人ハ皆田舍ヨリ新ニ出タル者ニテ、請人トハ元來ノ知人ニテモナキニ、僅ノ判錢ノ遣取ニテ請ニ立コト也、夫故人主ヲ立レドモ、人主モ亦住所ヲ不定、或ハ名計有テ實ハ無類也、人召置者ハ、手形一枚ヲ證據トシテ、只何町誰店ト云バカリヲ目當ニシテ召置コト也、是元來其不慥ナルニ不構、唯公法ヲ以テ召置コトナレバ、御先々前御代ノ請人　家主ニ掛ルコト無理成樣ナレドモ、元來人召置者ノ目當トスル所如是ナル樣ニト法ヲ立タルナレバ、無理ト云難シ、サレドモ請人コソ請ニハ立クレ家主ハ不知コト也ト云處ヨリ見レバ、無理成樣ナレドモ、家主店賃ヲ取ベキ爲ニ元來不知者ニ店ヲ借ヨリ惡事モ出來スルナレバ、公法ヲ丈夫ニ立ル仕方ハ、家主ニカヽルコトヽモ云ベシ、去ドモ元來其公法ノ立樣不宜處ヨリ、種々ノ姦曲出來ル故、當時捌ヲ付替テ見レバ、家主ノ爲計ニ成テ、請人ノ姦曲ハ同事也、是皆不宜法ヲ其儘ニ爲置テ、其上ニテ種々ト捌ヲ仕替ル故、何程仕替テモ不行屆コト也、

(百一錄)御請狀之事

一此たねと申女、當三月より御奉公ニ被罷置候、我等よく存知、慥成者ニ候故、御請人ニ相立申候、
　尤何方ニ構有之者ニても無之候事、

一宗旨は代々禪宗ニ而、若狹喜運寺旦那にて御座候、即寺請狀、我等方ニ取置申候事、

一相勤之内、放埒之義いたさせ中間敷候、若如何樣の曲事出來仕候とも請人罷出、急度埒明ケ仕候て、其許樣江少も御難かけ申間敷候、仍爲後日御請狀如件、

寶永四年三月廿日　　請人今出川上ル竹屋町
若狹屋仁兵衛印
奉公人
たね印

石井主水殿

○按ズルニ、此請狀ハ神宮文庫所藏ノ本書原本寶永六年八月記ノ紙背ニ在リ、

〔享保集成絲綸錄三十九〕貞享四卯年正月

覺

總而人宿、又者牛馬宿、其外にも生類煩重候得ば、いまだ不死内ニ捨候樣ニ粗相聞候、右之不屆之族有之おゐては、急度可被仰付之密々にて箇樣成儀有之候はゞ、訴人に出べし、同類たりといふとも、其科をゆるし、御褒美可被下候、以上、

正月

〔德川禁令考後聚十九行刑條例〕享保十五戌年

人宿之儀ニ付御觸書

近年八木段々下直ニ候處、諸奉公人之給金ハ、前々之通高直ニ有之候、畢竟請人人宿共之仕形不埒ニ而、奉公人江無筋入用相懸り候故之儀ニ候、其上取逃欠落等も多く有之、旁不屆ニ候、依之今度吟味之上、人宿組合申付候間、其向寄ニ而三四拾人程宛組合、左之通急度相守可申候、

一徒若黨之衣服、布木綿取交可致着用旨、先達而御觸書出候間、其趣相守可申候、然ル上ハ、彌舊冬相觸候通、給金直ニ可相極候、此外之奉公人も右ニ准じ、給金引下ゲ可申候、且又主人より好有

之事公人之分は、給金相對次第之事ニ候、

一右之通ニ候得バ、判賃之義も、給金ニ應じ引下ゲ可申候、總而請狀之節、馳走ケ間敷儀ハ勿論、部屋入振廻等之儀、堅ク相止候樣ニ、請人より部屋頭江可申達候、其外請人方ニ而之雜用隨分減じ可申候、

一此以後新規寄子之分口入、請人ニ候共、其もの出所元宿承屆、下請人入念取可申候、欠落ものニ候ハヾ、元宿江相渡し、雙方より月番之番所江可訴出候、若欠落者之請ニ立、元宿見付訴出候ハヾ、急度可申付候、尤此度組合申付候外人宿いたし候儀堅ク無用可仕候、若組合之外內證ニ而請判いたし候者有之バ、致吟味、組合之者共可申出候、

但親類等ニ而、二人三人請ニ立候者共も、人宿共江申付候趣可相守候、此類ハ格別之儀ニ候故、組合ニ不及候、併家主名主迄屆置、判形可仕候、

右之趣相心得、一組切ニ名主共申合、吟味可仕候、若相背候ハヾ、請人奉公人ハ不及申、組合之人宿共迄急度申付、不吟味之筋も有之候ハヾ、名主共迄可爲越度候、

右之通、今度人宿共江申付候間、町々ニ而も此旨相心得可申者也、

月日

下ゲ札

此素人請人之儀無御座候而ハ、殊外差支罷成候間、書面之通ニ御座候、

〔天保集成絲綸錄百六〕天明八申年二月

組合之人宿、幷素人宿共、諸奉公人請ニ立候節、彌以入念欠落等無之樣吟味可仕候、當前之判賃取候事を專ニいたし奉公人出所幷欠落者之吟味も無之請ニ立差出候族有之ニ付、欠落等不絕候、畢竟請人共不埒故之事ニ候、前々相觸候通、欠落者四五人ニも及び、筋惡敷出入有之人宿之分は、其町々名主支配限遂吟味、書付封候而、月番之番所江可差出候、不埒之人宿有之、外より相知候は

ば、家主名主迄可為越度候、

一雇人宿共之儀、親類之外、一切請ニ立間敷候、縦親類たりといふとも、拾人より多く請ニ立候儀仕間敷旨、先達而申付候處、今以不埒之族有之由相聞、不届ニ候、若し此以後拾人之外請ニ立候歟、欠落者引込候もの有之、組合之人宿より訴出候はゞ、吟味之上、急度可申付候、銘々家主別而入念可相觸候、

一諸奉公人召抱候節、主人方より請人之家主名主方江相尋、請ニ取可申候、尤家主名主方ニ而所所より尋來り候節、雇人ニ而請ニ立候ハヽ相違無之旨、無滞可申達候

一總而供廻徒足輕風俗等不宜、がさつにて中間共も異風ニ取拵候、總體髪其外風俗等かふとふニ可仕候、奴どもも別而がさつ、供先ニ而口論等いたし、惡言等申もの有之ニ付、右體のもの有之候はゞ、急度可申付旨、先達而相觸、證文等申付候處、今以右體之もの有之由相聞、不屆ニ候、前々申付候通、異風ニ取拵へ、召仕盗人有之候はゞ、請人ども、其屋敷々々江罷越、町奉行所より被仰渡候趣も有之候段役人江相斷、右體之儀無之樣可致候、若相背候もの有之候はゞ、奉公人は勿論、請人共迄急度可申付候間、致口入候屋敷々々江、兼而心之段申達置候樣可仕候、

一陸尺共、前々より仲間と申儀は無之處、國もの又は知行抱陸尺共、總體供先ニ而門前込合候節、江戸抱之陸尺共、駕籠をならべ置入不申、惡言等申類も有之、不埒ニ付、如何樣なる陸尺ニ而も、互ニ除合門際まで駕籠入させ候樣、請人共より堅く可申付旨、先達而相觸、證文等申付候處、今以右之族有之由相聞、不屆ニ候、自今急度相愼候樣、陸尺共江申聞、若し相用ざるもの有之候はば、急度可申付候條、請人口入之者より堅可申付候、〇中略

一組合之人宿共より諸家江差出置候寄子ども、供先がさつに無之樣、度々申付置候處、近頃於供先、鎗幷長柄等投上、或は供立場廣ニ供いたし、往來之差障ニ罷成候段相聞、御年始抔者別而込

合候ニ付、右之通鎗長柄等投候儀、幷供立場廣ニいたし候儀、決而爲致間敷候、依之諸家江差出置候寄子共方江、早速相廻し、嚴敷可申付候、若右體之儀、幷がさつ成儀於有之は、急度咎可申付候間、其旨相心得、外組合宿共江も、右之趣不洩樣急度可申聞旨、先達而申付候通、彌堅く相守可申付候、

右之通、年々相觸候處、例年觸置候事と而已相心得候哉、觸書之趣不相聞、不屆之至ニ候、殊ニ毎月初旬組合申合、銘々寄子共江急度申渡候旨屆出候間、旁以可致忘却筋は有之間敷處、今以寄子共風儀不相直儀は、畢竟請人共等閑ニ相心得、例月番所江屆置候得ば、相濟候事ニ心得居候儀と相聞、旁以不屆成儀ニ候、向後は銘々寄子ども江、右箇條之趣、夫々急度申渡候樣可致候、若於相背は、番組人宿共は家業取放候上嚴敷咎申付、素人宿共も嚴敷咎可申付者也、

申二月〇中略

寛政十二申年七月

町觸

組合之人宿共、諸奉公人受ニ立候節、彌以入念欠落等無之樣吟味可致旨、其外品々先年より度々申渡候處、近年別而不埒之人宿ども多く、甚以不取締ニ而欠落者不絶、別而武家差支相成候趣相聞不埒之至ニ候、必竟欠落者を糺も無之引受、又は存ながら引込候人宿共も有之候故、行先差支も無之樣ニ相成、欠落者多有之儀と相聞、甚以不屆之事ニ候、仍之以來寄子共勝手ニ付、人宿替致候節は、元宿より送書付差出し引受候者は、右書付之上ニも、猶元宿幷下請人江も掛合候上致寄子、新規寄子之分は、猶又出所吟味いたし、下請人入念取置候樣可致候、一體總寄子共題帳を拵人別に生國幷下請人之名前、其外委敷相記、總寄子高何人內何程は孰江奉公ニ差出置候と申儀、明白に記置、何時改有之候共、不差支樣可致候、

一番組人宿共、大勢奉公人差出候場所を、互ニ縮合候心得ゟ人數を揃候とて、不相當之者を寄子にいたし差出、又は出所不正之者をも差出候故、是又無程欠落いたし候仕儀ニ及び不屆ニ候、向後組合限、年番月番を定、相互ニ仲ケ間致吟味、欠落者等引入候歟、其外前々申渡候趣ニ違ひ候族有之ば、早々可訴出候、尤總組合よりも、右之趣心付訴出候樣可致候、若相背等閑之儀有之ば、急度曲事可申付候、

一素人ニ而奉公人受ニ立候儀、親類之外一切受ニ立間敷、縱親類たり共、拾人より多く受ニ立候儀致間敷旨、先年より度々相觸候處、近年別而猥りニ相成、人宿組合江も不加、受人ニ相成り、大勢奉公人差出し候者共有之趣相聞、不埒ニ付、吟味之上、夫々咎申付、又は不埒も無之分は、此度人宿仲間江加入申付候も有之候趣候、然ル上は、拾人迄は名主家主共も、年屆請判無差支樣爲致、其餘は壹人ニ而も請爲致間敷候、家主共別而入念店內相改、奉公人出代り時節は勿論、常々共人別外之者も相見、拾人より多く受ニ立候樣子ニ候はゞ、早く可申出候、番組人宿共も右體之儀見聞及候はゞ、是又可申出候、若素人ニ而多く人數請判致度者は、町年寄樽與左衞門方江人宿株加入之儀申出候樣可致候、

一日雇月雇口入之者、又は道中通之日雇受負候者共、欠落奉公人を引込置候類有之趣相聞、不屆ニ候、右體之儀有之候而は、欠落者行先彌手廣相成り、甚不取締之儀ニ候間、別而入念相改、其筋江拘り候もの共、相互ニ致吟味、可訴出候、若し隱置候はゞ、嚴敷咎可申付候、勿論元宿よりも見當候はゞ早々可訴出候、

一右之外、前々觸書申渡之趣相守、聊違失無之樣可致候、

右之通、町中不洩可觸知者也、

申七月

〔市中取締類集九ノ百六〕陸尺共張訴之儀ニ付風聞書

定廻り

元番組人宿共之内、六尺宿屋共、内々組と唱、組合取極、品々不正有之趣、張訴致し候ニ付、風聞取調候様被仰渡候ニ付、承探候趣、左ニ申上候、

元番組人宿之内桜田鍛冶町武蔵屋　勘五郎〇中略

右之者共儀、元番組人宿之内、六尺受負致し、番組御停止以前は、番組宿屋之内、手廻り六尺、厩平人抔ゟ内組相分居候処、番組御停止被仰出候ニ付、当時者無之候由、併六尺宿ニ而手廻りは遣ひ衆、中間宿ニ而厩別当は遣衆候間、矢張是迄之姿ニ有之由、六尺之内、部屋頭若イ者、小若イ者、張紙仲間と唱候は、順々に出世致し、部屋頭迄相成候得ば、夫々給金も違候間、銘々出精之為メニ、名目付有之候由、尤当時は無之候得共、六尺之内ニも、世間手広之突合能キ男之分者、諸家ニ而相望候間、一人にて二三軒も懸持に致し候儀も有之候由、抱六尺を譜代に取立候屋敷も御座候処、右譜代之六尺と宿屋共仲合不宜儀、譜代と相成候得者、宿屋共之進退を不受、其上是迄給金之内、宿屋江被引落候儀等、心外候故、是迄子方之者も譜代に相成候得ば、横平に取扱候者抔も有之候間、万一暇に相成候節、宿屋共儀も遣ひ不申儀も御座候由、是以来は双方不宜儀に御座候得共、強而之儀には無之由、

一給金之儀者　陸尺一人ニ付　壹ヶ年七両位　右之内宿屋江壹両二分位引取候由

右之通引落候間、多人数差出候宿屋ニ而は、多分之徳用に相成候処、宿屋共出入屋敷役人江、夫々盆暮五節句遣ひ物致し候由、其屋敷々々ニ而少異は御座候得共、凡、勘定奉行二軒位　右下役二軒位　供頭二軒位〇中略

右之軒数へ遣ひもの

雜載

年始扇　三月干大根　五月かさご干物　暑中芋籠　盆素麵　九月干肴　寒中玉子

暮鹽引　參勤之節、風呂敷䑓、手拭貳筋位、

右入用一軒前壹ヶ年貳分壹朱位ツヽ相懸候由、其外參勤之節送り仰ひ等に出候入用等も相懸候ニ付、德分無數候處、譬ば拾人抱有之候得者、右之内二人位は差略致し、右給金宿屋共、德分ニ相成候由、尤國主方御抱ニ而、多分之給金出候は、宿屋共德分餘計に御座候由、〇中略

寅十〇天保三年九月　定廻り

〔撰要集法度〕文久二戌年十一月

町中素人ニ而、奉公人之受ニ相立候儀、親類同國好み之外、一切不相成、假令親類同國者たりとも、拾人より多く受判致間敷旨、前々より度々相觸候處、近來兎角番組人宿共外散判蔭判と唱、組合等ニも無之、多人數奉公人之受ニ立人宿ニ紛敷、自儘之渡世致候もの有之、不埒之事ニ候、急度も可申付處、此度之儀者令宥免、吟味之不及沙汰候間、右樣之渡世致し候ものは、早々相止、已來決て人宿ニ紛敷渡世不相成候、就而者、是迄受ニ立、諸家江差出置候奉公人之儀者、番組人宿共引受ニ申渡候ニ付、右之者共、此度改而下受ニ相成、人宿共之内江引送り、右人宿どもは、本受ニ相立、主人方差支無之候樣可致候、向後人宿ニ紛敷渡世いたし候はヽ、番組人宿共より訴出候筈ニ申付候間、町々家主共も、別而入念可申付候、萬一此上觸面之趣相背候もの於有之は、曲事ニ申付、家主五人組迄も越度に可申付候、此旨町中江可相觸候、

右之通、町方江相觸候間、諸家ニ而召抱置候奉公人之内、散判蔭判と唱、組合無之、人宿渡世致候ものゝ受ニ立居候分、番組人宿請ニ引替之儀、下方より申出次第、被届候樣可致候、

右之趣、萬石以上以下之面々江可被相觸候、

〔政談一〕當時箱根ノ手形抔モ女手形ノ外ハ埒モ無コト也、但シ戸籍ノ法サヘ丈夫ニ立時ハ、先ノ

行泊無故、此法ハ無トモ可也ニ事可濟カ、

右ノ如、戸籍ノ法ヲ立ル時、人ノ種品々アルニ依テ、指ツカヘ可有、浪人ト云者、元來ハ武家ニ奉公シテ、ソノ主人ノ人別ニ結アリシ處、今夫ヲ離ヌレバ、在付迄ハ何ノ町何ノ村ニ在ト云トモ、農商ノ外ノ離者ニテ、全體旅人ノ意ナリ、去ドモ返ベキ鄕里モ無レバ、亦旅人ニモ難属、唯浪人ト云テ、何方ニ在テモ店借ノ例ナルベシ、親類近付ノ請判ニテ差置コト、別ニ當時ノ仕方ト替リアルマジ、道心者ト云者ハ、頭モナク緒ノナキ者也、サレドモ是又鰥寡孤獨ノ類ニテ、畢竟窮民ナルモノナレバ、詮方モナキ者ナリ、剃髮ノ師ノ付屆ケヲ以テ、是モ常ノ店借同前ナルベシ、寺方ノ隱居、旅僧ノルイハ、寺社門前ニ限差置ベキ也、元來佛法ニモ、僧ノ民間ニ居住スルコトハ佛ノ禁戒也、代代ノ律ニモ制禁也、邪法ノルイモ、民間ニ混ジテ居テハ難知也、陰陽師、事觸、宮雀ノルイハ、小サキ刀一本ナルベシ、山伏ハ無刀ナルベシ、何レモ大小ヲ差、武家ニ混ズルコト謂レナシ、中比山法師、奈良法師、根來法師ノ類、太刀ヲ帯ビ、甲冑ヲ帯シタレドモ、今ハ皆眞ノ僧トナリ、山伏モ其時ノ風俗ノ殘タル也、山入ノ時、柴折利劍ヲ指ト云コト古法ナリト云、彌然ラバ山入ノ時計リ、古法ニ從フベシ、平生御城下又ハ田舍ヲ歩行ニハ勸進ノ爲ナリ、勸進ト云ハ、出家ノ法ニテ乞食ナリ、是忍辱ノ行ナルニ、大小ヲサスコトアルマジキコトナリ、田舍ナドアルキテ、女子計リ居タル所ニテハ、刀ヲ拔ナドシテ、怖シテ、無體ニ勸化ナドスル類多シ、又夜討強盜ヲスルコトマヽアリ、事觸ニモ、人ヲ怖シテ、無理ニ勸化ヲ入サスル輩ヲ多ク、花月ノ謠、又義經記ナド云雙紙ヲ見レバ、山伏ハ兒ヲ携テ僧ト異ルコトナシ、眞言天台ノ道場ニテ、僧ト一所ニ學文シタルコトナルニ、何ノ間ニカハ、僧トハ格別ノ者トナリテ、勤行ノ作法等モ、修法ノ體モ別ニナリ、唯眞言天台ニ屬シタル迄ノコト也、吉野ノ僧モ、中頃ハ皆妻帶成シカドモ、此四五十年以來、世文明ニ成テ、皆何レモ妻帶ヲ止テ、今ハ清僧ト成タリト云、山伏ナドモ、其本山ヨリノ倡ニ依テ、清僧トナルベキ仕方モ有ベシ、

寺ノ召仕ニモ刀指ヲ召置コト出家ノ供ニ刀指ヲ召連ルコト御門跡ノ外ハ院家タリトモ、禁制アルベキコト也、寺領ニ代官ヲ置コト、是又有マジキコトナリ、近村ノ御料私領ヨリ支配シテ、年貢計ヲ其寺ニ渡スベキコト也、寺社門前ヲ寺社奉行ノ支配トスルコト、是又一切ニ可奉行ノ支配ナルベシ、子細ハ殺生戒ヲ第一トシ、一大藏經ノ內ニ國ヲ治ル道ハ、一向ニ無之、公法ノ咎人ヲモ慈悲ノ爲ニ命ヲ貰ヒ或ハ構ヒ有之者ヲモ、詫言ヲスルコト出家ノ所作ナリ、土地ヲ持テ民ヲ支配スル時ハ、刑罰無テハ法ノ立ヌコト也、刀差ヲ召仕カラハ、事ニヨリ切腹ヲモ不申付シテハ不協コト也、帶劒ノ者ヲ供ニ連テ、供先ニテ何ノ用ニ立ベキ、是ニ依テ覺彥比丘ハ、一生ノ間、供ノ者ニ脇差ヲサヽセズ、是等ハタヾ武家ノマネヲスルト云者ニテ、全ク佛法ノ衰廢ナリ、佛法ヲ崇敬スル上ニテモ、是等ハ制スベキコト也、寺領ヲ寺ヨリ支配スル故、寺社領ニ惡人多隱居テ、田舍ニテモ寺社領ヘハ、守護ノ手入兼ル也、因之禍起リ、國主ノ政道モ不行渡也、兎角寺社領ハ近所ノ御料私領ニ預ケ、支配サスベキコトナリ、

古事類苑

政治部六十三

下編

相續上

鎌倉幕府以後ノ相續法モ、亦家名ヲ相續スルノ謂ニシテ、財産之ニ隨フモノナリ、通常之ヲ家督相續ト稱ス、然レドモ其間ニハ、單ニ家名ノミヲ相續シテ、財産ノ之ニ隨ハザルモノアリ、或ハ財産ノミヲ相續シテ、家名ヲ相續セザルモノアリ、而シテ當時相續ハ、親生ノ男子ヲ以テシ、男子ノ中ニ於テ嫡子ヲ以テスルヲ法トセシ事、前代ニ同ジ、又若シ子ナキカ、又ハ嫡子ニ異常アル時ハ、種々ノ相續法ヲ行フ事、亦前代ニ同ジ、而シテ鎌倉足利兩幕府ノ頃ニ、通常家督ト稱セシハ、大抵嫡家ノ相續者ニシテ、當時又總領ト云フ事モアリ、總領トハ蓋シ素ト領地ノ全體ヲ支配スルノ義ナリ、故ニ亦多ク嫡家ヲ稱スルノ語ニ用ヰ、遂ニ長子ヲ呼ブニ此語ヲ用ヰルニ至リシモノヽ如シ、

相續幷ニ遺産遺物ノ訴訟ハ、多ク讓狀若シクハ遺言狀ニ據リテ之ヲ決スル事、鎌倉幕府以來ノ例タリ、故ニ德川幕府時代ノ如キハ、其式最モ嚴ニシテ、五人組若シクハ證人ノ加判アル自筆ノモノタルヲ要シ、殊ニ士人以上ノ家督相續ハ、一定ノ成規アリテ、之ニ相當スル資格ノモノニシテ、倘ホ相續者ヲ指示セル願書ヲ上ルニアラザレバ、相續スルコトヲ聽サズ、爲ニ德川幕府ノ初ニ於テハ、堂々タル大名ニシテ、血食セザルモノ頗ル多カリキ、養子篇ト參照スベシ、

〔御成敗式目〕一讓所領於子息、給安堵御下文之後、悔還其(○其下一本有所字)領、讓與他子息事、
右可任父母之意之由、具以載先條畢、仍就先判之讓、雖給安堵御下文、其親悔還之、於讓與他子息者、任後判之讓、可有御成敗矣、

〔御成敗式目〕一讓與所領於女子後、依有不和儀、其親悔返(○返一本作還)否事、
右男女之號雖異、父母之恩惟同、爰法家之倫雖有申旨、女子則憑不悔返之文、不可憚不孝之罪業、父母亦察及敵對之論、不可讓所領於女子歟、親子義絶之起也、既致令違犯之基也、女子若有向背之儀者、父母宜任進退之意、依之女子者、爲全讓狀、竭忠孝之節、父母者、爲施撫育、均慈愛之思者歟、(○中略)
一得讓狀後、其子先于父母令死去跡事、
右其子雖令見存、至令悔返(○返一本作還)者、有何妨哉、況子孫死去之後者、只可任父祖之意也、

〔新加制式〕一雖爲父祖之讓狀、依事可有用捨事、
右或及末期、或受重病、无本性之時讓狀者、更不足信用、但雖爲末期幷重病、在手繼之證人者、可有擧用乎、

〔長曾我部元親百箇條〕掟(○中略)
一人之讓之事、實子たりといふ共、遂上聞可爲下知次第、私讓堅停止之事、附幼少名代是又可遂上聞事、(○中略)
慶長貳年三月廿四日　盛親在判
元親在判

〔憲教類典〕(三ノ十三家督繼十)寛永十九壬午年十月三日
覺
一實子惣領御番御奉公致し候にも、致御目見候にも、亦幼少ニ而御目見不仕候ニも、實子之分申

分無之ニは跡職不殘被下候事、

一知行御切米跡職被仰付候は丶、七月より末に相果候分には、捴領之知行ニ而も、御切米ニ而も、其年は被下之、翌年より差上可申事、

一兄弟在之者には、親之知行高により、次男にも似合敷程に分被下候も有之、致御奉公候者は勿論、御目見不仕候ものにも分被下候事在之、兄之拜領分を相應に被下儀も有之事、

一親之知行御切米は捴領に被下、二番目より御奉公仕候には兄之捴領分相應に被下候儀も有之事、

一拾年以前並之御加増も、去年ゟ本知並に被下事、

一親之知行と子之知行と同高ニ而候得ば、本知ニ而被下之、親之知行と替被下候樣にと申者には、替被下候儀も有之事、

一養子跡目之儀、前廉より番頭と頭江相斷見せ置候而は、實子並に被下候、但當暮より伊豆守、豐後守、對馬守、民部少輔に前廉養子見せ置候樣にと被仰出候事、

寛永十九年十月三日

〔勘契備忘記〕中 享保七寅年

跡目不被仰付內、御扶持方實子ニ者可被下御書付、

一御切米貳百俵以下ニ而、御扶持方有之面々令病死、跡式不被仰付以前、御扶持方計者、實子捴領之手形有來裏判ニ而渡候樣にと、御藏衆江添狀遣、養子之分は御前不相濟內者無用候、然共實子ニ而も跡目出入有之歟、又者其父御勘定等不相濟歟、兎角跡目可滯子細有之分、裏判無用候、若裏判被致、跡式不立候は丶、誤ニ可相成候、

寅七月

〔享保集成絲綸錄十八〕寬永二十未年十二月

大御番、御書院番、御小姓組之面々跡職事、只今迄者、當歳子ニ至迄、番頭被爲任言上之趣、雖被仰付之、自今以後者、面々番頭組頭連々其身之善惡、遂僉議可致言上、自然不覺悟之族於相果者、不可言上、縱雖申上之、御穿鑿之上、不屆族幷御奉公於不相勤輩者、跡職被仰付間敷之旨、大御番頭、御書院番頭、御小姓組之頭江、伊豆守、豐後守、對馬守、民部少輔列座有而、於竹之間傳右之趣、

〔享保集成絲綸錄十八〕元祿五申年六月

一御旗本之諸士、跡目願望之輩者、來廿日迄之內願出、御右筆方へ可差出旨、以書付大目付へ山城守申渡之、依之諸向へ大目付傳之、

〔教令類纂初集四十八〕寶永六己丑年三月

一亂心者之跡職之儀被仰出之、

酒井因幡守組
內藤縫殿

亂心以前之悴ニ候故、長次郎ニ跡式無相違被仰付之候、近年者跡式減候得共、向後亂心無紛、別條も無之、亂心以前之悴有之、跡式於被仰付者、無相違可被一旨被仰出之、

右御書付、丑三月十二日、大目付江　老中申渡之、

但相願候ニ者不及候

〔教令類纂初集四十〕寶永七庚寅年四月十五日

武家諸法度○中略

一繼嗣者、其子孫相承すべき事、論するに及ばず、子なからんものは、同姓の中、その後たるべき者を撰ぶべし、凡十七歳以上は、その後たるべき者を撰び、現存の日に及びて、望請ふ事をゆるす、或は實子たりといふ共、立べき者の外を撰び、或は子なくして、その後たるべき者を撰ぶのご

ときは、親族家人等議定之上を以、上裁を仰ぐべし、もし其望請ふ所、理におゐて相合はず、幷其病危急の時に臨みて、望請ふ所のごときは、其濫に望をゆるすべからず、しかりといへども或者父祖の功績、或は其身の勤勞他に異なるの輩におゐては、たとひ望請ふ所なしといふとも、別儀を以て恩裁の次第あるべき事、

附、同姓の中、繼嗣たるべき者なきにおゐては、舊制に准じて、異姓の外族を撰びて言上すべし、近世の俗、繼嗣を定むる事、或は我族類を問ずして、其貨財を論ずるに至る、人の道たるかくのごとくなるべからず、自今以後、嚴に禁絶すべき事、○中略

寶永七年庚寅四月十五日

右條々、舊章によりてこれを修飾す、すべて敎令の及ぶ所違背なく、よろしく遵行すべきもの也、

〔憲法部類乾〕母出奔いたし行衞不相知、其子部屋住ニ而罷在、たとへ幼少ニ而右譯不存候とも、家督相續之義者難成、尤他へ養子ニ遣候義も難成旨、延享四卯年相達候得共、向後母出奔致し候共、其子家督相續幷他へ養子ニ遣候義不苦候、

寶暦九卯年十一月

〔寶暦集成綸錄十六〕大目付江

母致出奔候共、其子家督相續不苦旨相達候ニ付、最前家督相續難成旨相觸候、以來母出奔いたし、其子家督相續難成相成居候者も有之候共、此度之觸書以前にても、其差別なく、一統ニ家督相續相成事ニ候、此段問合候者も候はゞ、右之趣可有挨拶候、

十一月〇寶暦九年

〔天明集成綸錄二十二〕安永二巳年十月

御目付江

佐々木勘三郎支配大筒下役組頭之儀、上下役にて家督も序にて相濟候、向後被仰付候はゝ、跡目も相立候由緒之者被仰付候はゝ、唯今迄之通候、跡目も不相立、由緒之者被仰付候節は、御徒組頭抔之通、其身一代切ニ候間、被得其意、跡目等相願候節、不紛樣心付、右之趣由緒書相調申聞候樣可被致候、

十月

御目付江

〔天保集成絲綸錄七十九〕寛政七卯年五月

一同跡目家督并隱居家督相濟候節者、是迄證文願差出候向も有之候得共、以來差出ニ不及事、

但家督一同之外、不時相濟候分者、是迄之通證文願可差出事、

五月

〔諸例集八〕柳生播磨守〇大目付答

父病身又者不行跡ニ而、相願退身致候者之實子江、跡式相續相願候節、承屆不苦候哉〇中略

右之趣、兼而心得罷在度、此段御問答申上候、以上、

三月二十一日〇安政二年

三宅對馬守家來　八木仙右衛門

書面之通者、病身ニ而退身致候者之忰跡式相願不苦、不行跡ニ而退身致し候者之儀者、其次第ニも寄候ニ付、差定難及挨拶候、

〔御定書百箇條〕御料一地頭地頭違出入并跡式出入取捌之事

一跡式又は養子等之出入は、他領懸り合訴出候とも、先方之地頭江可相願旨申聞、取上申間敷候、寛保二年極

若地頭之裁許不審之事も候はゝ、地頭江承屆候上、猶落著不致候はゝ可相伺候事、

一加判人有之、惣成讓狀并加判人無之候とも、當人自筆にて印形無相違、書面怪敷儀も無之にお同三年極追加

ゐては、讓狀之通、跡式可申付、尤格別之筋違に候はゞ、吟味之上、筋目之者江可申付事、

〔御當家令條 三十四〕公事裁許定

一町中跡職之事、存命之内、五人組江相斷、其上町年寄三人之所ニ而、帳ニ付置べし、其子於不屆者、重而可申斷之、及末期、筋目違たる遺言立申間敷事、○中略

寛永十年酉八月十三日

〔德川禁令考 四十七 諸法度〕慶安四卯年七月

町中跡式之定

覺

一町中跡式之儀、先年申付候ごとく、存生之内遺言狀致、諸親類名主五人組立合、早速町年寄三人之帳に付可申事、

一存命及煩候者、書置可仕、覺悟無之候ハヾ、諸親類組之者立會、煩候者申含、急度書置爲致可申事、

附、前方に遺言狀仕候輩ハ、死去以後うたがひ有間敷候、諸親類組之者、贔屓成儀不仕、有體之可及沙汰、末期におよび、筋目なき遺言ハ御立不被成候間、町中之もの、隨分吟味可仕候、遺言致候を油斷仕、町年寄帳に付不申、公事仕者於有之ハ、遂穿鑿、諸親類名主組中之者過料可申付候、頓死之者ハ、親類町之者立合、筋目に跡式相立可申事、

卯七月十八日

〔武家嚴制錄 二十〕一寺社平人百姓諸式出入之儀、法中之沙汰聊雖爲無案内、先大略者宜任師之仕置讓狀、譬ば閣師兄、對師弟遺跡雖讓之、師之讓狀之面なれば、難到計、先頓死無常之類にて、於無讓狀者、其寺僧沙汰訖、且者於緣者なきに、且那中之以相談可相定、至其時可相定也、社家、平人、町人、百姓等之儀も大概如此、譬雖爲嫡子、無父之免、又不孝之者のみにて、次男末子に成共於讓與は、宜任

讓狀之旨、更に閣親現在之讓狀、爭公儀之御沙汰可有之候哉、不爲是非顚、異變頓死無言之類にて相果候歟、於他國不慮に相果候者、讓狀無事も可有之、於如此は、先嫡子可相續、但可任母之心、若爲繼母は一門親類隣家之者誘合を以、遺帖可相定、雖爲百姓地頭代官之者、不慮相替儀候時は、遺跡之御沙汰、地頭代官も難義成事願、此上不相濟ば、可及公儀之御沙汰事、

〔公事取扱〕跡式養子離別後、後住并引取人、○中略

一重病の節、一判之讓狀は不取用、

一跡式相續の捴領を差置、外の悴へ跡式可讓との遺狀は不法也、然ども遺狀倦成においては、有金、家督の悴七分、外悴三分、家財、田畝等は、家督の悴可爲相續候、○中略

一讓證文計り所持いたし、沽劵所持不致、元地主願たりといへども、元金爲差出、讓證文と引替候上、家屋敷元地主へ爲渡之、

〔武家嚴制錄二十〕一萬事兩樣之仕成にて、文書に先判後判之出入可有之、先諸商賣借物、其外受當之義は、前判可爲道理、又師匠父母之讓狀などは後判を用ゆべし、譬師匠父母共に二ど雖定之、不屆之心中之子、紙面にて於僞返者、所持候をも、弟子と言、子と言、對師匠父母諍論不可然事、

年號月日

〔大坂堺問答〕一夫々極置候跡式ヲ、夫死後ニ後家心儘ニ外江讓筋無之ニ付、右之類は不取上候、此儀當表○大坂に的例不相見候得共、悴死跡後家ニ罷在候母方祖母差障候得共相續人之儀、彼等存寄次第ニ致度との儀は不及沙汰候、尤近キ血筋之者無之ニ付、一旦斷絶およひ候とは乍申、死式之元祖之血筋者、以死式相續之儀江戸表江伺之上、依御下知裁許申渡候書留相見申候、

〔御當家令條二十三〕定○中略

一百姓を追出、其跡之田地不可致持添、前々ゟ之百姓相果、跡目於無之者、其趣申聞、不依男女其筋

目之者を取立、從差圖、其跡無相違可渡之、無斷家をこぼち、取四壁を荒し、田地を持添、百姓を潰し候者可爲曲事、總而獨身之百姓相煩、無紛に於ては、五人組は不及申、村中之者相互助合、田地を仕付、身體持立候樣に致し、年貢等も收納候樣に可仕事、○中略

寛文六年午十一月十一日

〔民事慣例類集（家產相續）〕家督相續ハ、從前地主ノ分ハ劵狀譲書、寛政度仕來ノ通リ、町內へ公告ヲ爲セリ、維新後ハ地劵書替ヲ願フノミニテ、公告等ノ手續ナシ、（武藏國豐島郡○中略）

古來町奉行所ヨリ申渡ニテ、生前ノ日遺跡相續ノ者ヲ定ムルトキハ、町年寄方ニ設ケ在ル遺跡帳へ記載スベキ旨、享保六年町觸モアレドモ、中古以來遵奉スル者稀ナリ、（武藏國豐島郡）

家督相續スルトキハ、親戚五組へ吹聽シ、其町名主許へ口上ヲ以屆出ルコトナリ、（甲斐國山梨郡）

戶主死去スルカ、又ハ老衰ニテ隱居シ、其子弟ニ家產ヲ讓ルヲ相續ト云、聟養子ノ部中ニ記スルガ如シ、實子ハ別段吹聽屆ノ例ナシ、實子數名アリト雖ドモ、長男癈疾、或ハ白痴等ニテ、家政無覺束モノハ、二三男ヲ以テ家督相續スルモアリ、若シ實子ナキ時ハ、家族親戚合議ノ上、相續人ヲ取定ムルモノアリ、（甲斐國巨摩郡○中略）

近親中一人、組合中一人、家督ヲ讓ル本人、讓リ受ル本人、連印ノ書面ヲ以テ名主へ屆ケ、聞濟ノ上、軒帳（屋敷並ノ大略ヲ記シタルモノニテ、每町ニアリ、見圖帳ノ外ナリ、）ヲ書替、追テ名主ヨリ口上ニテ、町奉行へ申出、町奉行所ニアル、軒帳ヲ書改ムルヲ例トス、（陸前國宮城郡）

家督相續ハ、町會所ニ於テ、讓人ト相續人トノ連署ノ證書ヲ見屆ケ、然ル後戶籍ニ記載ス、親中

戶主ハ必ズ存生中、遺言狀ヲ組合へ差出シ置ノ慣例ニ因リ、家督相續ノトキハ、其遺言狀ヲ出シ、前主ノ遺言狀ト更換セシム、戶主死後ノ相續ハ、其存生中出シ置キタル遺言狀ヲ、肝煎（町役人ヲ云）ノ面前ニテ、親族及ビ組合頭立合ニテ披ヲキ、（方言之レヲ遺言披ヲキト云）肝煎之ヲ見屆ケ、万一不當ナル

トキハ、町奉行ニ屆ケテ、裁決ヲ請ルノ慣例ナリ、加賀國石川郡

相續ノ上ハ、其權ヲ有スル勿論ナレドモ、蓄財多分アル家ニテハ、養子實子ニ拘ハラズ、本人氣弛ナキ爲メ、當分父母親族ノ內ニテ、會計取計フ者モアルコトナリ、武藏國豐島郡

相續ノ權ハ嫡子ニアリ、嫡子不行跡カ、或ハ癈疾等ニテ、營業立ガタキトキハ、父母ノ意ニ任セ、次男三男、或ハ姉妹ヘ婿養子ヲシテ、家督相續セシムルコトアリ、甲斐國山梨郡

長男ハ家督相續ノ權ヲ有スト雖、父ノ意ニ協ハザルカ、或ハ二三男ヲ分家セシメテハ、若年破產ノ恐アルヲ以テ、長男ヲ分家セシメ、本家ハ父自ラ幼兒ヲ教育シテ、相續セシムルコトアリ、然ルトキハ其財產ヲ分割スル衆子ヨリ多キヲ例トス、信濃國佐久郡○中略

相續ノ權ハ嫡男ニアリ、嫡男死スルトキハ嫡孫ニアリ、若シ幼少ニシテ一家ヲ保チ難キ節ハ、伯叔父母ノ內相續シテ、其幼者ヲ順養子トナスコトナリ、但父隱居家督ヲ其子孫ニ讓リテモ、家財ハ悉ク讓ラズ、後日ニ至リ內證代身共讓ルヲ、鍵讓リト名付ルコトアル例アリ、羽前國置賜郡

家產相續ハ男女ニ拘ハラズ、初生ノ總領ヲ以テス、若シ總領早世スルトキハ、亦男女ニ拘ハラズ、第二第三ト順ヲ以テスルコトナリ、羽前國置賜郡

男子ノミ相續ノ權アリ、女子ハ總領ト雖ドモ、相續ノ權ナシ、若シ兄早世スレバ、二番ノ姉相續セズ、三番ノ弟相續ス、若シ先相續人ノ子アリテ幼年ナルトキハ、先相續人ノ姉又ハ妹ヘ聟ヲ取リ、幼者ヲ順養子トスルコトモアルナリ、陸前國宮城郡

名跡相續

〔關八州古戰錄〕三長尾景虎關東越山附平井城ヲ攻取ル事

北越ノ長尾景虎ハ、管領憲政入道立山叟杉○上ノ讓リヲ受テ、上杉越後守政虎ト改名シ、東國ニ越山シテ旗ヲ建ベシトノ大志ヲ發シ、旦暮ニ工夫ヲ凝サレクルガ、天文廿一年壬子三月二日、薙髮シテ不識庵謙信ト稱シ、○中略四月ニ至リ關東ヘ發向セラル、

〔關八州古戰錄 五〕北條氏康隱居附子息配立事

五男新四郎氏忠ハ、乘馬ノ達者ニシテ、後ニ左衞門佐ト號シ、相州足柄ノ城ヲ守ラレケルガ、佐野家ノ名跡ヲ受テ、後ハ野州ニ遷レリ、

〔諸家文書纂 九〕河口名跡之事、以先例就了懇望仕候、則宛行候、可存知其旨者也、仍執達如件、

天正五年閏月日　　義隆花押

庭田式部少輔どの

〔萱備集 五〕家名之儀達面之心望候條、契約候、爲自今之一筆遣シ候也、

天正拾九年正月廿九日　　源兵衛尉親昔

吉村新九郎どのへ

右高岡郡津野山中平村津野六右衞門藏、今按親昔者、津野家長津野藏人、首藤親房之子也、家名指津野氏、新九郎之子孫、至于今氏津野、

〔明良洪範 十八〕出雲寺少將京極若狹守病死セラレシニ、嗣子ナケレバ、所領ノ地ヲ除カルヽ事ハ、ソノカミノ制條ナレバ、今度トテモ、若狹守高實ガ領地ヲバ召上ラルヽトイヘドモ、名家數代ノ祀ヲ絕ン事ヲ惜マセ玉ヒ、高實ノ甥ト披露セシ刑部大輔高和ニ、家名相續ノ爲メ、大津ノ本領六萬石ヲ下シ置ルベキ旨ヲ評議アリシニ、酒井讃岐守聞テ申サレケルハ、高實ノ父高次ト、鳥居家トハ、トモニ慶長ノ役ニ籠城セシ人々ナリ、然ルニ壹人ハ城ヲ守リテ討死シ、壹人ハ城ヲ開キテ退ク、然レドモ京極家ハ忠信ト云ヒ、名家ト云ヒ、一ト方ナラヌ故ニテ、若州一圓ヲ下サレタリ、鳥居ハ御家御譜代ト云ヒ、伏見ノ忠死カタ〳〵思召アリテ、奧州ニテ廿萬石餘ヲ賜ハリシニ、伊賀守忠恒事早世シ、子ナキニ依テ、城地召上ラレシ故、父祖ノ舊功ヲ思シ召レテ、家名相續トシテ、忠恒ガ舍弟主膳正忠春ニ信州ニオキテ、三萬二千石下サレシ、然ルニ今京極刑部大輔ニ六萬石下

家督

サレ候事ハ、過分ナリト云ニ、一塵モ信伏シケルヲ、井伊左中將直孝聞テ、讃岐守ノ下サレ候如ク、大津伏見籠城ノ節、討死シタルト、開城セシト、何レ勝劣モアルマジキ家ナリ、又其家格ヲ以テ論ズレバ、京極家ハ近江源氏佐々木ノ一統ニシテ、御當家同州ノ大名ナリ、鳥居ハ三州御譜代ナリサレバ各我等如キノ家ハ、タトヘ子孫イカ樣ニ召仕ハレ、領地等召上ラレ、御扶持米計リ下サレ候テモ、何トモ異議ハ申シ上マジクノ處、御譜代ナレバ謹シムデナリ、然レドモ上ニテハ、父祖ノ功ヲオボシ召テ、彦右衛門ガ本領高程ヲ以テ、主膳ニハ賜ハリシ、京極家ハ秀吉公ヘハ重緣ナレドモ、夫ヲ捨テ一旦御味方申サレテヨリ、始終志ヲ變ゼズ、元ヨリ大津ノ六萬石、彼家ノ舊領ニシテ、當家ノ御恩ニハアラズ、愛ヲ以テ只今其本領ノ高ヲ以テ、京極家ヲ建置ルレバ、以來ハ當家ノ新恩ナリ、諸侯ト御譜代ト格式異ナル上、舊領ト云ヒ、誰カ批判申スベキト有ケレバ、何レモ尤モト評議一同シテ、言上シケルニ、各存寄ノ通リ思召ニ相叶ヒテ、播州龍野ニテ六萬石ヲ賜ハリケル、其後萬治年中、讃州丸龜ノ城地ヲ下サレシト也、

〔氏家叢書十六〕寬政元酉年三月十三日、御用番牧野備前守樣ヘ御屆左之通、

私四男勇次郎義、家督仕、同姓名跡相續申付召仕申候、此段申上候以上、

三月十三日　本黨大和守

例書

私實弟内膳儀、家來仕多賀之名跡相續申付候、此段申上候以上、

辰十一月十四日　本多伊豫守

〔易林本節用集人倫〕家督（一家總領云、嫡正也、）

〔例書四〕一大名方、御旗本、死後之家相續者、遺跡と唱、存命之内家相續者、家督と唱候事、

〔吾妻鏡十七〕建仁三年九月二日丁卯、今朝廷尉能員、以息女（將軍家〈賴家〉妾、若公母儀也、元號若狹局、）訴申北條殿、偏可

追討由也、凡家督外、於被相分地頭職者、威權分于二、挑爭之條不可疑之、爲子爲弟、雖似靜謐御計、還所招亂國基也、遠州一族被存者、被奪家督世之事、又以無異儀云云、將軍聽而招能員於病床、令談合給、追討之儀、且及許諾、〇下略

〔吾妻鏡二十二〕建保二年十二月十二日壬寅、諸人官爵事者、家督之仁、存知其官仕勞、可執申之、於直進款狀者、奉行人不可及披露之由、被仰定之、廣元朝臣奉行普相觸之云云、

〇按ズルニ、此ニ謂ユル家督之仁ハ總領家ノ事ナリ、次ノ吾妻鏡ノ一門家督、太平記ノ代々ノ家督、明德記ノ一方ノ家督、及ビ江濃記、東武實錄等ノ家督モ皆同ジ、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年七月廿四日己卯、南都騷動之間、在京人幷近國之輩、催具一族、可抽警衛忠之旨、被仰下先訖、一類不相從之由、近日自諸家、依其訴出來、向後大番以下如此役、早可相從一門家督之旨、今日重被定之、

〔菊地系圖〕武時菊地二郎

法名寂阿彌、實時隆ノ舍弟、隆盛ノ三男ナリ、時隆横死ノ間、家督ヲ相續ス、後醍醐院賜三ケ國ヲ、元弘三年三月十三日於博多討死、四十二、

〔太平記九〕足利殿御上洛事

相摸入道北條高時是ニ不審ヲ散ジテ、喜悅ノ思ヲ成シ、高氏ヲ招請有テ、樣々賞翫共有シニ、御先祖累代ノ白旌アリ、是ハ八幡殿ヨリ、代々ノ家督ニ傳テ被執、重寶ニテ候ケルヲ、故賴朝卿ノ後室二位ノ禪尼相傳シテ、當家ニ今マデ所持也、〇下略

〔明德記上〕抑此播磨守滿幸ト申、山名ノ左京大夫時氏ニハ孫、右衞門佐師義ノ末子也、舍兄讃岐守義幸病氣ノ後ハ、彼代官トシテ在京シ、一方ノ家督ニテ有ケルガ、今度宮內少輔時昭以下退治ノ後ハ、四ケ國ノ守護職ヲ持テ、權勢氏族ニ越エタリ、

〔家中竹馬記〕抑當家土岐殿者、満仲の長子頼光の苗孫にして、清和源氏の家嫡也、○中略伯州○土岐頼貞の長男頼宗は、伯州に先立て御早世あり、二男頼遠御家督になられける處に、不慮之横難に依て御生害あり、其時節頼宗の長男頼康、大膳大夫、法名善忠、號建德寺殿、御家督に御成あり、實子御座なくて、御舎弟頼雄の御子息を御猶子あり、康行と申是也、此時不忠の者有て、當家錯亂し、康行御敵になるゝによつて、頼宗の三男頼世、刑部少輔、法名眞兼、號禪藏寺殿、公方様御身方として御忠節あり、其時頼世の二男頼益、左京大夫、元美濃守、號興善院殿、悉皆軍忠を被抽て静謐せし間、鹿苑院殿○足利義満御感異にして、頼益御家督の御判を御頂戴あり、然間興善院殿を當家の中興と申儀は此謂也、○又見江濃記

〔秀鄕流系圖〕白川結城資永

政朝二男、號那須太郎、爲資親婿養子、後資親生男資久、欲令資久爲家督、遺言於大田原出雲守、其子備前守曰、我沒後必令資久繼家、○下略

〔東武實錄〕寛永元年正月十一日、阿部左馬助忠吉卒ス、五十五歲、其子豐後守忠秋、父忠吉ガ家督五千石ヲ賜ハリ、自ラノ領地千石、統テ六千石ヲ領ス、

〔舊經錄續〕一萬石以下も家督之御禮之分は、御取合有之、初而御目見之分、御取合無之、

元文六年四月四日

〔氏家遺書十九〕一天明六午年九月朔日、今日表出御無之、御目見不被仰付候、

御家督之御禮　松平丑之助樣

同　青木源五郎樣

〔吉川政太郎家督一件〕未○安政六年十一月十六日

神道方吉川富之丞代
小普請組奥田主馬支配

一左之通持參　逸見源三郎

役人請取證

奉願候口上之覺

私儀、當未四拾六歲罷成候處、久々胸痛疳症差發、其上中症相成、去月下旬ゟ以之外不出來ニ而、絶食罷成候間無油斷養生仕候得共、昨今ニ至、快氣難仕奉存候、若相果候者、實子總領政太郞儀、當未拾七歲罷成候間、跡式無相違被下置候樣奉願候、以上、

安政六己未年十一月　　吉川富之丞 印判

松平右京亮殿

松平伯耆守殿

松平伊豆守殿

水野左近將監殿 〇中略

同廿一日

一

吉川政太郞代
村山正八郞

右罷出吉川富之丞儀、今卯刻病死いたし候旨屆申聞、左之書付差出之、役人請取之、

父富之丞儀、病氣之處、養生不相叶、今廿一日卯上刻相果申候、依之此段御屆申上候、以上、

未十一月廿一日　　吉川政太郞 〇中略

服 未十一月廿一日ゟ 中十一月迄

右之通、定式之忌服請申候間、此段御屆申上候、尤忌明之節、猶又御屆可申上候、以上、

未十一月廿一日　　吉川政太郞

一右ニ付、左之小役同役衆江相廻之、〇中略

高百俵　　實子總領 吉川政太郞 中歲十八

拜領屋鋪本所押上住宅仕候

總領

當御代安政六未年、父富之丞病氣差重候ニ付、跡式之儀奉願置、十一月廿一日病死仕、同年十二月廿五日、父富之丞願之通、跡式無相違私江被下置候旨、於西丸四季之間、井伊掃部頭殿、御老中御列座脇坂中務大輔殿被仰渡、如父時神道方罷成、同七庚申年二月十五日、五本入御扇子二箱獻上仕、於西丸山吹之間繼目之御禮申上、先代之通、年始五節句月並總出仕之節登城仕、寄合並罷成候、

〔新編追加雜事〕一所當公事對捍輩事

右支配寄子等之處、對捍之間、總領勤入之、訴申之時、有其沙汰、或以一倍令辨償之、或依時儀雖被裁許、所詮於前々分者、以一倍可致辨、自今以後、其未濟之條無所遁者、以彼所領可被分付總領、但總領寄事於左右致煩者、可被仰付穩便之輩也、依仰執達如件、

弘安七年十月廿二日

左馬權頭平朝臣

陸奧守平朝臣

一所當公事對捍輩事

右公事等、庶子對捍之時、總領得入分以五十貫可分付田壹町之由、先日雖被定下、爲總領無其益之間、庶子依不憚難澀之科、急速公事及闕如歟、仍任舊例可致一倍辨之由可被裁許、令違背者可被分召所領也、且問狀一箇度之後、可被成一倍下知、其後令違期者、差日限可被糺返、猶令遲引者、可被收公所領之狀、依仰下知如件、

永仁二年七月五日

陸奧守平朝臣判

相摸守平朝臣判

〔吾妻鏡五〕元曆二年〇文治元年十月十一日庚申、今日佐々木三郎盛綱、號佐々木、本佐々木知行田地、如元可領掌之旨被書下之、但可從佐々木太郎左衞門尉定綱所堪云云、是雖非一族、佐々木庄總管領者定綱也、盛綱分在其內之故歟、

〔難太平記〕一今川庄をば、左馬入道の御時より、長氏の少年の御時、裝束料に賜ひしを、吉良庄總領可レ爲二進退一と沙汰ありし故に、基氏〇今川範國父不快になり給ひしにや、故殿〇今川範國の御代に、省觀上總入道合體ありて、父子の契約より違亂止き、了俊讓得間相續也、

〔鎌倉大草紙上〕一尊氏公の御母二位殿の御兄、上杉兵庫入道憲房、京四條合戰のとき、將軍の命にかはり討死あり、甥の伊豆守重能を養子として、惣領に被レ立、

〔土岐累代記〕濃州土岐氏守護起本之事

頼遠始ハ伯耆七郎ト號シ、父ト一所ニ高田城ニ在ケリ、其器量父祖ニ倍セシカバ、曆應ノ頃、惣領職ヲ賜リテ、美濃尾張、伊勢三ケ國ノ探題トナリ、父ノ家督ヲ繼テ、則隣郷大富ニ館ヲ構ヘテ仕シ給ヒケルガ、〇下略

〔結城小峯文書〕讓渡

爲二周防守貴直惣領分一可レ知二行所領間事一、下野國那須北條郡内、

一所　伊王野郷　　一所　五丁郷内野上郷　　一所　東茂木内小高倉郷

一所　原三ケ村　　一所　那須上庄小川郷内梅岡村

右代々手繼證文并安堵御下文、無レ所レ殘相揃而所二讓渡一也、但伊王野郷、野上郷、茂木小高倉郷内女子分、一期之間無二相違一可レ被レ取レ之、將又除分在レ之、守二其旨一不レ可レ有レ煩者哉、然則任二先例一可レ知二行之一狀如レ件、

康安二年四月十五日　　前遠江守貴高

〔古證文二所引後鑑七十〕香宗我部甲斐太郎申庶子等御公事對捍事、前々就二惣領支配一令二勤仕一之處、近年一向不レ應二催促一之由申レ之、爲二事實一者不レ可レ然、忩企二參洛一可二明申一、若猶不二承引一者、就二交名一可レ有二其沙汰一之狀如レ件、

應安二年八月十一日　　武藏守判

香宗我部一族中

〔明德記〕中略此伊與守、舍兄大膳大夫ノ代官ニ上テ在京シ、美濃尾張兩國ノ事共伺ヒ申シケル時分、内々一家ノ惣領ニ心ヲカケ、トヤセン、カウヤセマシト安ジ居タリシガ、所詮イトコノ宮内少輔ヲ讒シツメバ、甥ナレバ定康之是レヲ扶持スベシ、其時同罪ニ申沈メテ、家督ニ立ヌルト思立ケルコソ淺猿ケレ、

〔江濃記〕佐々木兩家わかりの事

京極家には、佐渡守入道道譽は、其頃關東に有て、尊氏卿御上洛の時、同責上り、其後尊氏の味方にて、一度も終に不忠の事なく、子孫皆足利殿の味方にて打死しけり、殊に惣領氏頼、遁世の志有、近江の國務の事、道譽老人計にて、惣領方をも万さし引しける、忝かも八十餘年長命して、尊氏卿義詮卿二代の將軍につかへ、武家の政道を輔佐し、子孫四職の其一に撰ばれ、京極殿と稱し、近江國十三郡の中、八郡を六角方知行し、五郡を京極方に支配す、明德年中より、京極殿又大名に成て、出雲隱岐、飛驒半國を知行し、其勢惣領家にまさりけり、中略

野羅田合戰事

爰に六角屋形義賢、是を聞て大にいかり、當家は頼朝卿の御代より、此方代々惣領の號有て、江州に冠長たり、然るに中古より京極家、上の寵臣と成て、四職の數に列なりて、惣領家をへしまして、雅意にまかすといへども、力なく數年をわたる處、天運循環して京極家滅亡し、其家來淺井等、當方の太刀影によりて、主の跡を押領し、威強大に成て當方に背事、誠以奇恠なり、其儀ならば不日に發向して誅戮すべしと、義賢自身打立給ふ、

〔三刀屋文書〕雲州飯石郡三刀屋鄕惣領分地頭職事、任明德四年正月廿四日安堵、并今月五日御施行旨、知行不可有相違之狀如件、

應永五年九月九日　　沙彌判

三刀屋三郎殿

〔建内記〕嘉吉元年七月一日乙未、畠山一流事、故左衛門督入道道瑞逝去之後、長子尾張守持國朝臣相續爲惣領、舍弟左馬助彌三郎、此兩人他腹當腹也、別家居住、惣領加扶持、多年無子細之處、被官人遊佐齋藤等令張行、内々伺時宜歟、於尾張守者惣領不可叶、退家宅可下向河内國、以舍弟左馬助可爲惣領之由被仰出之、是尾張守近年違時宜有形勢之間、爲一流安全之謀歟、若黨等如此令了見云云、

〔應仁略記上〕畠山方亂濫觴の事

御興宴と覺えしは、今次郎彌々若と呼れし童形十歳、親の音曲さる事なれば、早歌は定て歌らん、一曲と御所望有しに、花見の御幸と聞えしは、保安第五の衣更著と歌ひ出す、一座の興實、公方御氣色其頃の褒美、天下の沙汰此事なりき、深更に至つて還御、翌日御禮幷御裏様御成時に幸壽院殿御今参り、大御乳ノ人以下御雜掌とて、三日三夜の御會一事違亂なく調り畢ぬ、亭主入道〇畠山持國千秋萬歳喜悅の餘り、次郎を惣領の相續と契約す、

〔新撰長祿寛正記〕德本老後ニ至リテ、妾ノ腹ニ一子ヲ生ズ、今ノ義就是也、父德本實子有事ヲ悅、政長ヲ疎ジ、義就ニ家ヲ繼シメント、色々政長ニ惡樣ノコト多ケレドモ、政長無雙之仁者ニテ、孝行ヲ盡シ、家來長者ドモニ懇情ヲハゲマシ、殊ニハ管領細川勝元、是ヲヒイキシケレバ、皆人政長ヲ用ヒケリ、然リト云トモ、止ムコトヲ得ズシテ、去享德三年四月、德本、政長ヲ追出玉ケレバ、政長ハ勝元ノ館ヘ出ラル、、家人安富民部丞、神保宗右衛門、遊佐新左衛門ハ、山名右衛門佐之宿所ニ忍居ケリ、德本思ノマヽニ成、戸ニ義就ヲ惣領ニ立ラルベキ由、言上セシメントスル時節、義就、若輩ノ至リカ、以ノ外ニ荒キ振舞ニテ、殘ル家人皆立離テ政長ニ隨ヒケリ、

嫡子

〔諸家文書纂十五〕赤松惣領嫡流兩家之外、庶流之輩、彼家號猥自稱不可然思召候、向後全可令停止、有故御免許之儀格別勿論也、仍任先規者、下狀如件、

文明十二年十一月三日御判

赤松兵部少輔殿〇綜行

赤松次郎殿〇政則

〔阿州將育記〕義助〇足利義多の次男也、天文十年平島にて生、母右同、〇義親母、周防大内介女、義親早世ゆへ、義助惣領に立て、義多の家を繼、文祿元年七月二日、平島にて卒、同所に葬、年五十二歲、法名寶山、

〔公用雜纂五〕次男總領願布衣以上
（朱書）
寬政三亥年十二月三日、安藤對馬守殿江進達、御附札ニ而相下ル、

總領願

内藤加賀守

内藤加賀守次男
内藤德三郎
亥七歲

私總領幸太郎儀當七月廿日病死仕候、依之次男德三郎儀總領ニ仕度奉願候、以上、

十二月三日

中奧御小性
内藤加賀守

〔香取神宮古文書纂一〕大禰宜眞平讓渡相傳私領田畠等事

一大禰宜職事

件職三十五代嫡々相承、然者眞房依爲嫡子讓與者也、

一末社大戸宮社領一所事、幷件社家進止事、

件社領者親父助貞時、白河院御時、後二條長者殿下〇藤原師通申下宣旨、被定神戸田畢、二代令領掌所致御祈禱也、仍同讓與眞房畢、

一私領葛原收內以南織幡村壹所事
四至（限東海上木內堺　限南二重堀千田塚　限西細田相模堺　限北大田吉原大島堺）
件私領、先祖豊鄕以後、至于眞平十代相傳令領掌所勤仕神役也、仍相副本劵任先例同所讓與也、
一金丸犬丸兩名田畠事
件名田自往古依爲大禰宜口分田同所讓與也、（於坪付者在本公驗）

〔香取神宮古文書纂三〕關白前右大臣家（○藤原基家）政所下　香取社司等
可早依嫡嫡相承道理、且任亡父實政讓狀以下調度證文、且停止神主實秀非分競望、以大中臣實親、爲當社大禰宜職、恒例臨時社役致忠勤事、
右彼職者、實親嫡流相承之條、具于所進證文等、爰去正應元年實政罪科之由、自關東就有御注進、前御代御沙汰落居之處、暫被宿忩當職於神主實秀畢、而今以彼一旦被宿忩之御下文、實秀稱𠍱帶之職、及濫訴之條無其謂、且實親於關東中被亡父實政無誤之子細、賜御教書而令持參之上者、旁以叶理致者、早任嫡流相承證文道理、以實親爲大禰宜職、至于子々孫孫、領掌不可有相違之狀所仰如件、神官等宜承知、勿違失、故下、

永仁三年十二月　日　案主中原

別當權右中辨藤原朝臣（花押爲行）○　大從散位惟宗（花押）

〔鹿島社文書二〕讓渡　所領事
在常陸國鹿島郡南條治尾宿內田野邊四谷笠貫治大祓戶東濱、幷野及太宮棧敷一間以下地頭職事、
右所者、當太明神御敷地、沙彌本光重代相傳私領也、然間相副代々手繼狀幷安堵御下文等、任亡父廣幹讓狀、嫡子平次郞胤幹（仁）限永代所讓與實也、若胤幹擧有子供數輩、以一人可令相續也、至末子

女子等不可讓與所領於永代也、又永代不可沽却、於御公事任先例隨分限可令勤仕也、仍爲後代讓狀如件、

應安五年四月十七日　　沙彌本光花押

〔建内記〕嘉吉元年六月廿六日辛卯、今晩若君〈入道○足利義勝〉自伊勢守貞經宿所〈年來爲御所〉渡御室町殿〈上御所事也〉御繼家事、昨日諸大名定申故也云々、御舍弟六人同渡御、御同所也、〈日來右中弁資任朝臣宿所御兩所、南向御一所、朝日宿所御一所、左衞門督宿所御兩所、今一所御座也、〉但於御舍弟之若公者、内々自畫渡御歟、於御嫡子者先立夜渡御、畠山播磨許、爲御方違云々、自彼今晩渡御、其時諸大名供奉云々、昨日御衰日之間、今晩有此儀歟、

〔諸例集上〕寛政五丑年十月廿二日、戸田采女正殿江吉松次左衞門を以差上、松浦越前守差出代取廻し、

嫡子致承知可然御書付、并被仰渡事は、諸席共嫡子江も可致通達旨、以來都而廻狀嫡書江書入可申旨、尤御書付之趣ニ寄、諸席之嫡子承知不仕相濟候儀は、御書付ニ有之、席限嫡子之分江致通達候樣書付可申旨被仰渡、承知仕候、

十月十三日　　大目付

諸御觸事申達候節、廻狀面江嫡子江も可有通達旨、書入候樣には相成間敷哉之旨、御尋ニ御座候、右者先達而、松平遠江守方ゟも廻狀面江嫡子之名乘認入候樣致度旨、内々申聞候間、同役申談候處、嫡子之義は、人數之極りも無御座、其上嫡子致承知、入用にも有之候御書付、并被仰渡有之候節、嫡子名前廻狀江認入候樣相成候而者、認方兩樣ニ相成、御觸事折重り候節は、間違之基罷成候間、嫡子名前認入之儀者相斷申候、此間松平越中守ゟも、御譜代衆江廻狀差出候節、嫡子江も通達候樣にと認入候儀は、相成間敷哉之旨申聞候得共、是又御書付并被仰渡之品ニ寄、嫡子江も通達候樣廻狀ニ認入候而は、認方兩樣ニ有之、御觸事折重り候節者、間違之基ニ相成候儀、右同樣之趣

意ニ候間、及断候、勿論書入候儀相成不申筋ニは無御座候得共、是迄年來相濟候儀、殊ニ留守居宛ニ而相觸候廻狀之儀ニ候間、留守居共相心得罷在、嫡子致承知可然儀は、其度々申聞候樣仕候者、差支候儀は有御座間敷奉存候、尤是迄迚も玄猪揃刻限、月次御禮無之旨被仰渡候節、御能見物被仰付候御禮之儀等、前日御書付被成御渡候節者、通達觸ニ仕、席限兩人之名前宛ニ相認同席中不洩樣嫡子方江も可有通達旨、相認來候儀ニ御座候得共、總觸之節は、向寄分テ高顯諸席打込ニ割合セ、名前相認相觸候儀ニ御座候間、右文段ニ嫡子江通達之儀相認候樣相成候而は、御書付之品ニ寄、當主嫡子と廻狀兩樣ニ仕相違不申候而は相成間敷哉ニ付、左候而は、御書付數通出候節者、甚混雜仕、間違候基ニ御座候間、一向ニ彼是無差別、右文言書入候樣、又は都て御書付相觸候節、通達觸ニ仕、文言之内江嫡子江も可有通達旨認入候樣御座候得ば、差支候筋は無御座、混雜仕候儀も無御座候得共、前書之通、當主嫡子與仕分、廻狀差出候樣相成候而は、混雜仕、間違等も可有御座哉與心遣仕候間、可相成儀ニ御座候はゞ、是迄之通ニ居置候樣仕度奉存候、以上、

十月　大目付

〔的例問答〕妾腹男子次男ニ仕候事

寛政十午年六月八日、寄合肝煎永井左門ゟ羽太庄左衞門江問合、答如左、

妾腹之男子出生之砌、追而妻腹ニ男子出生候者、次男ニ仕候與申義者不申上、妾腹男子出生與計ニ通り御屆申上置、其後妻腹ニ男子出生候得者、右妾腹之男子、次男ニ仕候段御屆申上候義ニ御座候哉、又者別段御屆ニ及不申候哉、

但追而妻腹之男子出生候者、次男ニ可仕段御屆申上置、妻腹ニ男子出生候得者、右妾腹之男子次男ニ仕候段、御屆申上候ニ不及候哉、

答下ゲ札

妾腹男子出生之節、追而妻腹ニ男子出生候者、次男ニ可致旨届申聞、追而妻腹出生致候節者、一通之御届書ニ而も可然事、

一妾腹男子出生之砌、追而妻腹男子出生候者、次男ニ仕候段、御届申上置候得者、妻腹ニ出生無之砌、右男子總領ニ仕候段、別段御届申上候ニ者不及候哉、

答下ゲ札

此義者願候も有之、届ニて申聞候も有之、何レも一通り届ニ而者不相濟候事、

一追而妻腹ニ男子出生候を、次男ニ仕候與申義も不申上、妾腹男子出生仕候旨、一通り御届申上置、妻腹ニ男子出生不致候而も、別段摠領ニ仕候旨御届申上、摠領ニ定置不苦哉、又は妾腹男子摠領ニ仕候間、御届申上置候筋ニ御座候哉、

答下ゲ札

最前妾腹男子出生之砌、一通り届申聞候者、追而妻腹男子出生之節、妾腹之男子者、次男ニ仕候旨申聞候方ニ可有之候、勿論妾腹出生並之摠領ニ定候時は、前條同樣願届之內差出候筋ニ候事、

〔諸例類纂四〕一未十月十八日、御用番和泉守樣御登城前、御侍頭鈴木九大夫樣を以、左之願事所通差出之、

私嫡子久菊丸儀、去年十二月死去仕候ニ付、在所罷在候妾腹之六男鐐之助義、當未九歲罷成候、

此者嫡子ニ仕度奉願候、以上、

十月十八日　松平甲斐守

私在所罷在候妾腹之六男鐐之助義、嫡子奉願、右願之通被仰付候はゝ、未幼少ニ而旅行も無覺束奉存候間、今暫く在所ニ差置申度奉願候、已上、

十月十八日

御付札　可致勝手次第候

一同二十一日御用召ニ而、嫡子願之通被仰付、一通は同夕御用番和泉守様ゟ御呼出ニ而、御附札被成御渡候、

〔氏家叢書十九〕一享和二戌年八月十一日、御用番牧野備前守様ゟ、御先年武藤庄兵衛様を以、御進達召聞、御留守居御呼出ニ而、被成御附札、御用人を以被成御渡候、御承知之旨御挨拶御口上書、以御使者被差出、

先達御届申上候、私妾腹之忰新之助儀、當戌四才罷成、彌丈夫ニ相成候ニ付、嫡子ニ仕候、此段御聞置可被下候、以上、

八月十一日　脇坂淡路守

御付札　令承知候

右ニ付、水野出羽守様ゟ、左之通、御留守居使者を以さし出され、

嫡子仕候段、御用番讃殿ゟ御届申上候處、御承知被成下候間、以御付札被仰聞召候間、此段申上候、以上、

八月十一日　脇坂淡路守

右四五日以前、御用番様御勝手ゟ罷出入、御内覧、右相濟、大小目付御類之方江御手紙ニ被爲御知、御聞柄様江者同斷之事、〇中略

文化元寅年十月十八日、大目付井上美濃守様江さし出候處、御剿書面之通相心得候而宜旨、御用人以松本何右衛門御挨拶有之候、

豊前守嫡子三四郎儀、先年死去仕候、其後男子無御座候處、此度妻男子出生仕候、右は次男ニ而

御座候得共、三四郎死去後出生仕候事故、右次男友治郎儀嫡子願は勿論、御屆等ニも不ㇾ及、嫡子ニ相立不ㇾ苦儀與相心得罷在候得共、爲ㇾ念此段奉ㇾ伺候、以上、

十月十八日　　堀田豐前守家來　正木藤左衞門

〔三秘集十二〕文化二丑年十一月、幼少幼年之差別問合、〇中略

一嫡子死去ニ而、二男を嫡子ニ相願候得者、三男を二男と相唱、其餘者右ニ准じ相唱候義ニ御座候哉、矢張其儘之唱ニ而宜敷御座候哉、

一嫡子退身、二男病身ニ而、三男を嫡子ニ相願候得者、四男を次男と唱、五男六男を三男四男と唱致し候筋ニ御座候哉、爲ㇾ心得ㇾ奉ㇾ伺候、以上、

丑十一月

御附札

嫡子病死、二男嫡子相成候共、三男四男元之通相唱候事、

〔諸例集六〕同人〇堀伊豆守答

嫡子有ㇾ之、幼年ニ而致ㇾ病死、其後男子致ㇾ出生ㇾ候節は、不ㇾ奉ㇾ願嫡子と相唱、追而成長之上、其儘御目見奉ㇾ願候心得ニ而可ㇾ然哉、其次出生之男子者、三男與相唱可ㇾ申哉、次男與相唱可ㇾ申哉之事、

右之趣、兼而心得罷在度、御問合申上候、以上、

十月　　龜井隱岐守家來　千葉一郎

書面之通は、嫡子病死御屆申上候後、出生之男子者、嫡子にて有ㇾ之候間、別段嫡子願ニ不ㇾ及候、且其後之出生は次男之唱ニ有ㇾ之候、

〔諸例集五〕天保十四卯年十一月

岡村丹後守答

部屋住

市正嫡子滿之助、當二月死去仕候、在所江之御暇被下置候節、妾腹男子錄之助御座候間、假養子不奉願、追而妾男子出生候得者、右錄之助次男ニ仕候段、出生前申上置候、然ル處、此節市正妻出產、男子出生仕候、次男ニ御座候得ども、嫡子死去後出生之男子ニ付、嫡子と相心得、嫡子願者勿論、御屆等ニも不及、嫡子與相唱不苦儀ニ御座候哉、

松平市正家來　大原佐五右衞門

十一月廿五日

書面之通者、御聞置之儀被申上候方與存候、

〔甲子夜話七十四〕予〇松浦清ガ庶長子章、幼名太郎吉、母ハ本妻亮鏡院ノ侍女某ナリ、妻ニハ子ナク、又封邑ニ在リシ妾鐮奥氏父ノ名ハ了圓、初式部少輔光時ト稱ス、今ノ外山家ノ人ナリ、二子ヲ生ム、名ハ武、源三郎ト稱ス、蚤ク卒ス、其次ハ今ノ肥州ナリ、長子章ハ性虛弱、武ハ其器ニ堪タレバ、コレヲ嗣子ニ願乞ヒシニ、其頃ハ當政ノ御時ニテ、白川侯今ノ桑名老侯御補佐タリ、舅家豆州閣老タリ、婚家本多侯彈正大弼モ亦閣老、其下參政内官ニ婚族通家多シ、然ルニ讒訴ノ事アリテ志上ニ達セズ、殊ニ不審ヲ蒙リシコトアリテ、大目付松浦越前予ガ叔父大御醫橘宗仙院等ト屢々内談シテ、質問陳啓セシコトアリキ、サレドモ天色ハ固ヨリ蒼晴、截雲ハ覓ニ流散シ、衷思外願ヲ得テ、二男ヲ以テ嫡子ト爲ルノ允ヲ蒙レリ、然ルニ天道常無ク、コレモ又遂ニ泉下ニ歸ス、近頃ソノ時寬政五年癸丑ニ閣老豆州ニ呈セシ書ヲ、舊物ノ中ニ獲タリ、因テ來者ノ爲メニ既往ヲ說ケリ、

〔的例問答〕部屋住倅改名之事

享和三亥年閏正月十五日、寄合肝煎佐藤修理問合、答左之如キ由、

御目見相濟候部屋住之者改名致し候節、部屋住ニ候得共、御目見仕候義ニ付、父ゟ願御屆申上候義ニ可有之哉、又者御目見有無ニ不拘、部屋住之義故、御屆等不申上、改名致候而不苦候哉、

右之趣御問合申候

閏正月　佐藤修理

答下ヶ札

御目見相濟候部屋住之者改名之義者、改名致し候上ニ而、御月番御支配方江御屆申上候而宜敷候、

御目見未仕部屋住之者改名者、御屆ニ不及改名致し不苦候、

〔諸例集五〕天保十二巳年六月十九日

初鹿野美濃守答

父子勤仕罷在、右忰部屋住ニ而妻を持、出生之子供有之上者、他方親類之娘、忰之養女引取置、追而相應之緣邊も有之候はゝ、差遣申度段、右親之場合ゟ願書差出候はゝ、願之通相濟可申哉、又者親在勤ニ而者、忰之養女ニ引取度と申願者相成不申候儀ニ御座候哉、

右之趣、兼而心得罷在度、此段奉伺候、以上、

六月十九日　三宅土佐守家來　八木仙左衛門

書面、父子勤ニ而、部屋住之忰養女致し候儀者、親ゟ願候者相濟候儀と存候、

但親在勤ニ而も、本文同樣ニ存候、

天保十四卯年十一月

神尾山城守答

部屋住ニ而、下屋敷江住居中、親之方ニ用向有之、上屋敷江罷越候節、持病等差發、時宜ニ寄、止宿相成候而も不苦儀可有御座候哉、右樣之節者、御老中樣方江御聞置申上候心得ニ而可然哉、右之趣兼而心得罷在度、各樣迄及御問合候、以上、

十一月九日　南部信濃守内　駒嶺勇治

遺跡

書面之趣者、時宜ニ寄、止宿致し候而も不苦、尤御聞置申上候方と存候、

〔新編追加 雜務〕一御公事間事

勤仕之輩中於不被仰下各別者、付父祖之跡知行各寄合、随分限可被勤之、又雖非其跡、被充行勳功之所領已下、別御恩地者、相加可被勤仕之由所被仰下也、自今以後、有申子細之族者、面々可被仰含、

〔大館常興日記〕天文九年七月廿五日

一日行事 攝州 豆州佐本常来臨、御小者松若と才若相論亡父跡職事、近藤山城守 六角方被官也 も才若事を内々申也、仍御内談之、然に先日既右筆方意見被尋訪上者、以意見狀旨御成敗無別儀御事候由申之、各尤同心也、仍其分被申之也、

〔大乘院寺社雜事記 一〕長祿三年八月十八日、柚留木方ヨリ注進、寺門ニ被成御奉書、爲意得案文下之云々、

甲斐美濃入道遺跡事、八郎在陣之間、被仰付千喜久丁、諸篇不相替申談之、可致忠節之旨、可令加下知越州寺領之由被仰出也、仍執達如件、

長祿三 八月十三日 之種

之清

興福寺雜掌

〔家忠日記增補 二〕永祿四年六月廿七日、本多豐後守康孝、小牧山の砦を守て、東條の城を攻、富永伴五郎を擊て、戰功を盡す、大神君其功を賞せられ、貝福、駒場、永良の鄕を康孝に賜る、

今度於小牧、取出被成候儀祝著候、爲勳功富永伴五郎跡職并同心衆之跡共ニ如書立、永令領掌畢、

彼地誰人雖有申様、一切不可令許容、寺領に至迄、其方可爲計事、

無事之儀候共、以他之地相當程可進、總別彼地方に入組有之由、改次第可有所務之事、伴五郎同心衆之中、於津之平給分取置候旨、彼地へ出置之間、草賀次郎右衛門跡職程可被取之事、右代々依忠節、彼地進置上は、永不可有相違者也、仍如件、

永祿四
六月廿七日　元康

本多豐後守殿

〔北條系圖小田原北條〕氏信略○註――氏宗久太郎

母佐久間備前守安政女、寛永二年、以台德院殿秀忠○德川之嚴命繼氏信遺跡、時年七歲、大權現御誓書、傳來之神符、太刀等納于家、

〔寛政重修諸家譜松平宮石十六〕乘匡　初乘正　一郎兵衛　新平　致仕號正徹　母は昌之が女

萬治元年十一月十一日はじめて嚴有院殿家綱○德川に拜謁す、時に六歲寛文七年十一月廿一日、御書院番に列し、九年七月十日遺跡を繼、元祿二年三月十九日、桐間番にうつり、四月十四日、御書院番にかへされ、下略○

〔寛政重修諸家譜松平大給十三〕近朝　五百之助　市之丞

實は近苗が二男、母は某氏、近義の嗣となる、寛保三年十一月三日、遺跡を繼、小普請となる

二三男相續
庶子相續

〔御成敗式目〕一父母所領配分時、雖非義絕不讓與成人子息事、

右其親、以成人之子本有息字○下一分吹擧之間、勵勤厚之思、積勞功之處、或就繼母之讒言、或依庶子之鍾愛、其子雖不被義絕、忽漏彼處分、侘傺之條、非據之至也、仍刺今所立之嫡子分、以五分一可宛給無足之兄也、但雖爲少分、於計宛者、不論嫡庶、宜依證跡、抑雖爲嫡子無指奉公、又於不孝之輩者、非沙汰之限矣、

〔御成敗式目抄四〕所立之嫡子分トハ、弟ニ家ヲ繼シムルホドニ嫡子分ト云也、此分ヲ五分一ヲ

割テ、庶分ニ漏タル兄ニ充給ベシ、但シ父ノ存日ニ少分タリト云トモ、兄ニ計充ニ於テハ、五分一ノ義ニ及ブベカラズ、少分トハ五分一ヨリ少クアテガイ置トモト云心ナリ、然バ嫡子庶子ニイカホド丶云義ニ及バズ、其マ丶ヲクベシト也、證跡トハ計充タル證跡ノマ丶ヲタベシト也、○中略

追加　文永四年、不孝子預父母財事、

右雖行不孝、父不義絶者、猶可預遺財、服中不孝之子豈與財故也、又雖無不孝之行、令義絶者不可預財歟、

〔日野一流系圖〕資敬○註略
　├有光○中略
　└秀光（中略）本豊光、改家秀、閣令兄有光、為家督、依父公命也、永享四年六月一日薨、三十二歳、贈内大臣、號永享院、

〔續藩翰譜米倉十一〕忠郷男子一人あり鍋三郎といふこれはおと丶しの秋の頃、所領の地にて、おもひもの丶腹にもうけたり、いまだ嫡子ともさだめざりしが、思はずもいまはのきはに及びしかば、此子して家つがせられんことを望み申に、其狀にいかに心得しにや、ことし九歳とぞ申たる、かかりしかば、公の御不審かうむりて、一族及び家人等をも糺明せられしかば、此事忠郷が心にあらずして、家人どもがはからひによれる所分明なり、しかば、家人二人は、親族松平甲斐守吉里がもとにめしこめられて、忠郷が遺領は、事故なく鍋三郎に給はりぬ、

嫡庶之分

〔下學集下言辭〕嫡家（チヤクケ）

〔世鏡抄〕庶子親類之事

為惣領輩、庶子親類ノ依議論可用之、為庶子輩、一心一味ニ為惣領之進退者無是非、庶子也トモ、一毛一塵モ蟲才ノ儀アラバ、惣領モ又不用之、雖為庶子、配當之田地尫弱ニテ、妻子ヲモ養カネ、飢渴ヲ乍知、惣領無憐愍バ、二男三男ハ入他家致奉公トモ、是更ニ非科、所領モ巨多ニシテ、世路モ事闕

ザルニ、爲身立他家ニ出入リヲナシ、背法儀事ハ、自然ノ時、望所領、爲覆摠領ト心得テ、心中ニ思案ヲ深ク廻シ拔、彼等二心ナキ親類庶子ニ所領ヲ半分配當セヨ、尙以テ致存外末孫マデ誅之、

〔諸例集三〕天保三辰年七月

松平加賀守ゟ問合、村上大和守挨拶、

嫡。流。庶。流。之譯者、先祖之二三男被召出候得者嫡子之家筋嫡流与唱、右二三男之家之二三男被召出候得者、庶流与唱候事ニ相心得罷在候得共、先年林大學頭樣江御內々及掛合候處、嫡流者本家之嫡子別段ニ被召出、次男ニ而本家致相續候節、嫡子之家筋嫡流与唱、庶流者本家之次男以下別段被召出、別家ニ相成候家筋を庶流与唱候由承知仕候、前條之通相心得罷在候趣与者相違も仕候間、右等之處巨細ニ相調申度奉存候事、

七月

書面之嫡流庶流之譯、先祖之二三男被召出候得者、嫡子之家筋嫡流与存候、右二三男之家筋者庶流ニ而、二三男家之二三男被召出候得者、是又庶流ニ而、其外時宜ニ依而、嫡庶を立候も可有之候得共、是者別段之事ニ而差定難及挨拶候、

九月林大學頭江問合候處、下ゲ札ニ而挨拶差越候事、

嫡流庶流之譯者、先祖之二三男被召出候得者、嫡子之家筋嫡流与唱、被召出候二三男之家者、庶流与唱候心得ニ而可然哉之事、

林大學頭ゟ下ゲ札

嫡庶之差別、御書面之通ニ而、元ゟ宜御座候處、一時之權宜ニ依而、嫡子別家与成、次男ニ而父之遺跡を受繼候も有之、又其母たるもの妻妾之差等よりして、年齡之長幼ニ不拘、嫡庶を立候も有之候はゞ又別段之事ニ御座候事、

〔大猷院殿御實紀附錄一〕大猷院殿〇徳川家光いまだ竹千代君と申て、いときびはにおはしませし程より、天下を統御ましますべき規模そなはらせ玉ふとて、東照宮殊に御いつくしみ深くかしづき玉ひけり、御弟國千代の方〇忠長は、御幼稚並にこえて聰敏にわたらせ玉へば、御母君崇源院殿には、殊更御鍾愛ありて、衣服調度をはじめ、宮人等のつかへ奉る樣まで、此君よりはおさ〱立まされり、一とせ、東照宮駿府より御狩のついで、江戸に立よらせ玉ひ、久しく竹千代兄弟に對面せざればなつかしと仰られて、兩君御前に出玉ひしに、竹千代殿これへこれへと有て、御手を引て上段につかせたまひ、國千代の方もおなじくすゝませられしを、いな〱勿體なし、國はそれに居候へとて、下段に著しめられ、やがて菓子など供じ參らせしにも、先づ竹千代殿にまゐらせよ、次に國にもつかはせとて、殊更にけぢめ立て、御あしらひありしかば、これより宮人等の禮貌俄に改りて、公には正しく動なき儲の君にわたらせられ、行末天下を統馭なし玉ふべき御身にて、國千代の方とは遙に尊卑の別ある事を知るに至れり、是全く東照宮の御一言もて、嫡庶の分を正しうし玉ひしによれる所なりとぞ、

〔有德院殿御實紀附錄五〕嫡庶の名分をたゞさせ玉ひしこそ、あるが中にもいとかしこく尊き御事なれ、元文二年、浚明院殿〇徳川家治生れさせ玉ひし時、竹千代君と御名をまゐらせ玉はむやと、宿老等聞え奉りしかど、この御名は、東照宮の御をさな名なればとて、御辭讓しば〱なりしが、遂に群臣の請にしたがひ玉ひしとぞ、此君ことに御うつくしみあさからず、常にかきいだかせ玉ひ、おもたゞしくもてなさせ玉へり、これよりさき、竹千代君の御生母お幸の局、この君を懷胎せられしとき、公〇吉宗よりいはた帶を賜ひしが、その後又お千世の局、妊めることありしかば、惇信院殿〇家重より、こたびも帶を賜り玉はん事をねぎ奉られしに、竹千代を懷妊せし時は、嫡孫なれば我よりあたへしなり、こたびは庶孫のことなれば、我よりはあたふまじと仰あり、〇中略また竹

千代君いまだいとけなくて、本城におはしましけるころ、萬次郎〈○德川重好〉の方にも同じくおはしければ、常に同じ所にてむつれあそび玉ひけり、ある時山里の御庭にて、公、竹千代君をいざなひありき玉ふ御あとより、萬次郎のかたもおはしけるが、竹千代君いつものごとく御戯れのあまり、いつのほどにか萬次郎のかたをおしふせ、其上にまたがらせ玉ひ、馬にのるまねびし玉ひしかば、萬次郎のかたの人々見て、こはあまりなる御戯れかな、あはれ御叱あれかしと思ひゐたりしに、かへりて御けしきよく、落ざらむやうにのれ〳〵と仰られしかば、かのかたの人々案に違ひけるとぞ、これより先は、御ばらからのことなれば、かの方の人の中には、御嫡庶の名分をもわきまへず、事によりのりをこゆることもありしが、これより後、おのづから御嫡庶の分、かぎりあるもの也とぞ思ひわきまへける、

〔文恭院殿御實紀附錄四〕西城にて若君〈○文恭院德川家齊三子家慶〉誕生まし〳〵、御名をば政之助君と稱し奉る、その後思召旨やありけん、本城御逗留として呼迎へ玉ひ、常に御膝の上にかき抱き玉ひて、よろづうしろみ聞えさせ玉ふ、一日例のごとく抱き玉ひて、こゝかしこ御あゆみ遊ばしける、其時女房達、本城の御庶子御幼稚の方々を抱き、御側に侍りしが、やがて若君を御傅の女房に渡し玉はんと思召玉へども、御庶子方を慰め參らせ居て、その詞も終らざれば、少し御猶豫あり、やがて渡し玉ひければ、御庶子方抱へ參らしゝ女房も、同じく立て歩み出しを、とゞめさせ玉ひ、若君のおはすに、何とて子供を抱きて立歩行や、下に居よと御叱ありしとなむ、いにしへの賢王聖主といへども、やゝもすれば嫡庶の分正しからず、後世の議論もすくなからざるに、かく假初にも嫡庶の分を嚴にし玉ふ事、いかにもかしこき御事なりき、すべて若君の御爲には、御庶子方は常に臣下のごとく御わかちあそばし、朝夕のおものも、御一所にはまゐらせられず、若君の御膳徹して後、御また戴けと宣ひて、夫よりまゐらせらるゝとぞ、常の御遊びにも、御袴めされ、まづ若君の

御相手をなされ、其後御自分の御遊びあることとなるよし、

〔上杉系圖〕持朝
- 顕房 彈正少弼、修理大夫、康正元年正月二十四日爲二戚氏一於二由井一自害、長源院道光、于レ時年二十一、
  - 政眞 修理大夫、法名滿松院道光、文明五年十一月廿四日被レ誅、二十二歳、
  - 朝重
- 乘道 僧正、如來院、
- 定政 修理大夫

顕房政眞依二早世一繼二家督一、號二扇谷一、建二立建德寺一、明應二年十月五日死、五十一、

○按ズルニ、定政ノ家督セシハ、嫡子顕房、嫡孫政眞ノ早世スルニ由ル事ヲ云ヘルハ、卽チ嫡子故障アレバ、嫡孫之ニ次グノ例ナル事ヲ示セルナリ、

〔藩翰譜〕七上 堀 直寄六十三歳にて寛永十六年六月廿九日卒す、嫡子兵部大輔直次、廿九歳にて寛永十五年七月十五日父に先立て卒しければ、直次が子千之助直定は嫡孫なればとて、家を繼がしむ、千之助直定四歳にして祖父が家を繼ぎ、寛永十九年三月二日、七歳にして世を早うしければ家絶えぬ、

〔諸例集〕下 一總領御仕置ニ相成、孫御構無之ニ付、伺之上嫡孫承祖願相濟候近例之事、

寶暦二申年、御小性組市川出雲守組戸田八郎兵衞總領主馬儀、弟松平内膳不埒之儀ニ付、主馬儀改易被仰付候付、八郎兵衞差扣伺候處、御番遠慮可申渡旨被仰渡、同三癸酉年正月十八日、八郎兵衞御番遠慮御免之旨、松平宮内少輔殿被仰渡、則出雲守宅江八郎兵衞呼寄、與頭山本大膳立合ニ而申渡、御禮廻りも致候、

一同十九日、御用番板倉佐渡守殿江出雲守申上候は、戸田八郎兵衞儀、五十以上ニ御座候間養子之儀申上候、悴主馬儀改易被仰付候得共、主馬悴登儀は、何之御構も無御座候間、八郎兵衞嫡孫承

祖登候を願と可申哉と申達伺書且例書も添差出候處御請取追而可被仰聞由被仰候右書付如左、

見出し
養子伺書

市川出雲守
市川出雲守組
戸田八郎兵衛

右八郎兵衛義、昨日御番遠慮被遊御免、難有奉存候、御番遠慮被遊御免候付、八郎兵衛儀、實子無御座候間、養子之義爲奉伺度奉存候、嫡孫主馬儀罷在候得共、御仕置被仰付候者之忰故、上を奉憚嫡孫承祖奉願候義差扣罷在候、嫡孫戸田登義、父主馬御仕置被仰付候節、御構無御座候間、嫡孫承祖ニ奉願候様爲仕可申哉、別段ニ續之者養子爲奉願候様ニ可仕候哉奉伺候、以上、

正月十九日　市川出雲守

例書

享保廿一丙辰年二月、西丸御書院番三浦肥後守組永井傳右衛門忰權十郎、御仕置被仰付、其以後傳右衛門實子無御座候付、權十郎忰御座候得共、御仕置被仰付候者之忰故、嫡孫千次郎ヲ差置、傳右衛門相番逸見源兵衛弟捨五郎と申者、養子奉願候故、小出信濃守殿江書付致持參候處、信濃守殿願書御返シ被成、被仰聞候は、傳右衛門嫡孫千次郎義、父權十郎義御仕置被仰付候得共、千次郎儀は御構無之候間、嫡孫承祖之願苦間敷旨被仰聞候間、千次郎義嫡孫承祖仕度旨信濃守殿江願書致進達候處、同十九日、右願書ニ御附紙被成、嫡孫承祖仕候様被仰渡候旨、傳右衛門江右之段申渡候、此節傳右衛門義病氣ニ罷在候間、名代米津梅干之助、於肥後守宅、願之通千次郎嫡孫承祖可仕旨申渡候由御座候、以上、

正月十九日　市川出雲守

御付紙
嫡孫承祖爲願候様可被致候

一同二月五日、戸田八郎兵衛嫡孫之義伺書ニ御附紙被成、板倉佐渡守殿夫阿彌ヲ以、出雲守詰番之節、御渡被成旨、與頭山本大膳方江申遣、八郎兵衛嫡孫承祖願書差出候樣申遣候、

但伺書は御附紙ニ而御渡シ、例書は御留被成候、

一同七日、嫡孫承祖願書、御用番小出信濃守殿江進達、無滯御請取被成候、如左、尤八郎兵衛願書并寫も添差出候處、寫を御留、本紙は御返し被成候、

見出し　嫡孫承祖願

御付紙

願之通、登義嫡孫承祖致候樣可被申渡候、

高千六百石　市川出雲守組　戸田八郎兵衛　歳酉六十六

八郎兵衛惣領　戸田主馬　歳酉四十

主馬惣領　戸田登　歳酉十四

右八郎兵衛惣領主馬義、改易被仰付、男子無御座、主馬惣領登儀、嫡孫承祖ニ奉願旨申聞候、八郎兵衛願之通、登義嫡孫承祖被仰付候樣仕度奉存候、以上、

二月七日　市川出雲守

戸田八郎兵衛願書如左

上包上書　嫡孫承祖願

高千六百石　戸田八郎兵衛　歳酉六十六

八郎兵衛實子惣領　戸田主馬　歳酉四十

主馬實子惣領　戸田登　歳酉十四

右私實子惣領戸田主馬義、去ル申年十二月、改易被仰付候、主馬實子惣領戸田登儀、嫡孫承祖奉願候、以上、

寶暦三癸酉年二月　戸田八郎兵衛判

市川出雲守殿

山本大膳殿

〔憲法部類乾〕嫡孫承祖相願候節、嫡孫養子と相願候類も間々有之、已來者都而嫡孫承祖と相願可申候、

右之趣、向々江可被達置候、以上、

寶暦四戌年十二月

〔公用雜纂一〕養子惣領除

渡邊圖書頭養子惣領　渡邊鍋三郎　酉六十二歳

右鍋三郎實子惣領　渡邊主計　酉三十八歳

右同人次男　養父大久保平次郎死　大久保甲五郎　酉二十六歳

右之外、鍋三郎男子無御座候、

私儀、男子無御座候ニ付、寶暦九乙卯年十一月五日、板倉甲斐守三男板倉鍋三郎儀、養子奉願候處、同十庚辰年二月廿七日、願之通被仰付候、然ル處、鍋三郎儀、近來病身ニ罷成、痔疾度々差發、其上去冬以來小用繁、長座難仕、相勝不申候ニ付、栗本瑞見幷伊東高益藥服用仕、御番醫師村岡玄紀江も樣體爲見療治請、其外醫師等藥服用仕、色々養生仕候得共、今以同篇ニ而、痔疾相募、時々破血仕候、右體之病症ニ而者、往々全快可仕體無御座候旨、瑞見幷高益、其外醫師共申聞候之間、一類共江も遂相談候處、末々家督相續仕、御奉公可相勤體無御座候、尤鍋三郎儀も、同樣之存念ニ御座候、依之惣領相除申度奉願候、願之通被仰付被下候者、追而鍋三郎實子惣領主計儀嫡孫承祖奉願度奉存候、以上、

十月〇天明八年十八日　西丸御旗奉行　渡邊圖書頭

〔諸例集五〕天保十五辰年六月

私嫡孫承祖　松平榮太郎

右榮太郎儀、私後妻有之候處、嫡孫承祖ニ相成候ニ付、榮太郎親類書江祖母與認候哉、養祖母與認可申哉、此段御問合申上候、以上、

六月十三日　松平頼母

書面之通者、祖母與相認可然存候、

〔諸例集六〕弘化二巳年四月

稻生出羽守答

嫡子不束之儀有之、主人より咎筋ニ而、嫡子を相廢候、右嫡子之家續ニ相立度願出候節、孫ニ有之候共、其者之親を咎ニ而嫡子相廢候上者、嫡孫承祖之名目者難相立筋ニ可有御座候哉、矢張嫡孫承祖之名目ニ而苦カル間敷哉、若右名目難相立筋ニ候者、改而養子與名目可相立筋ニ可有御座候哉、此段御手前様迄御問合申上候、以上、

四月　丹羽左京大夫内　小澤長右衛門

書面之通者、咎之筋合ニ寄候儀ニ付、差定難及挨拶候、

〔諸例集八〕安政二卯年十一月

堀伊豆守答

一弟を致養子候後、出生之實子を、右養子之養子ニ致し候得者、養孫ニ相成候處、養子ニ致し候弟致死去候節者、右養孫元實子之儀ニ付、嫡子ニ相願候筋ニ御座候哉、

書面之通者、嫡孫承祖與相心得候筋與存候、

外孫相續

〔武德編年集成五十七〕慶長十四年十二月五日、美濃大垣ノ城主石川日向守家成、往年退隱シテ、其子長門守康通家督ヲ繼テ、去々年ノ秋死沒ス、是ニ依テ父家成再ビ大垣五萬石ヲ領シ、隱居料ノ采邑ヲ外孫大久保內記成堯ニ讓リ、石川氏トス、然ルニ當十月家成卒去シ、其嗣子ナシトイヘドモ、彼內記成堯ガ兄捴十郎忠總モ、慶長五庚子年ノ冬ヨリ、大久保ヲ改メ、母ノ姓ヲ冒シ、石川ト稱シ、主殿頭ニ任ズ、文武ノ才藝アルニヘ、神君渠ヲ以テ、外祖日向守家成ガ家督トシテ、大垣五萬石ヲ賜ラントス、忠總ガ實父大久保相摸守ガ曰、石川康通ガ子彈正十二歲ニテ大垣ニアリ、渠石川ノ嫡統タル由ヲ述ル、神君曾テ許シ玉ハズ、其故ハ康通淫行ニシテ、先年神君ノ侍女暇ヲ賜ハリケルヲ召抱ヘ寵愛シ、其腹ニ彈正出生スルユヘ、彈正ヲバ大垣ヨリ江府ヘ遣シ、主殿頭ニハ同ジク家成ガ孫女(堀尾忠氏ガ妹)ヲ娶セ相續アラシムベキ旨、嚴旨ヲ蒙ムル時ニ、忠總ハ祖父大久保忠世ガ弟權左衞門忠爲ヲ大垣ヘ携ヘ往シ由ヲ言上スル處ニ、忠爲ハ老功ノ勇士也、渠ヲ輔翼タラント欲スルコト甚ダ御旨ニ應ズト云、

〔岩淵夜話上〕一石川日向守殿病死の節、子息左京(江)定而家督被仰付にて可有御座と、本多佐渡守被申上候へば、其方は存まじく候、あの左京と言奴は、我ら側に召仕ぶ女を後に妻女に可致など言聞せて、密通致ごとくなる不行跡もの也、親日向聞候はゞ、定て勘當いたすか、又は急度申付るかにて有べし、それ共に只一人の男子の義なれば、年寄たる身にては、苦勞に存べきも、不便に思ふに付、今までは口外へ出さぬ義也、かゝり初にも主人の目をくらまし、後暗き所存の者は、何の用にたゝざるものなり、左京を日向が跡目にはおもひもよらぬ事なりと被仰候ニ付、佐渡守承られ、さて〳〵殿には御堪忍づよき御事也、左樣の義ならば御尤に候、然らば日向儀、外に世忰とても無御座候得ば、名跡は斷絕仕るゝと申ものにて候と被申上候得者、權現樣被仰候は、忠功有し日向が跡をつぶすべきやうは無之間、大久保相摸が二男主殿義は、日向が娘の子にして、孫の事な

伯叔父相續

れば、主殿を以、日向が跡目には言付るにて有べしとの上意にて、其通に被仰付候となり、右左京子に斎五郎と申て有之候を、台德院様〇徳川秀忠御代に至り、主殿頭御願被申上候ニ付、御旗本へ被召出、後信濃守と申候よし、

〔京都將軍家譜上〕義教 治世十四年

母同義持、應永元年六月十三日誕生、初入青蓮院門跡之室、剃髪號義圓、與南禪寺僧景南友善、其後爲門主、任大僧正、蒙准后宣旨、同二十六年十一月爲天台座主、正長元年正月十七日、管領畠山滿家參詣石淸水、於社頭取御鬮、而以義圓定爲柳營之繼嗣、翌日前將軍義持薨、　三月十二日還俗、號義宣、於是有陣座宣下、敍從五位下、行小除目、任左馬頭、時年三十五〇中略永享元年三月十五日、〇中略補征夷大將軍、改名義教、

〇按ズルニ義持ノ子義量、應永三十年征夷大將軍ト爲リ、三十二年薨ズ、義敎ハ叔父ヲ以テ其後ヲ襲ギシナリ、

〔諸例集上〕一相續之儀承合候義、左之通

延享五戊辰年六月十八日

小普請組大岡忠四郎支配　石原左門
石原左門伯父　石原八十郎

相續

右躑躅之間松平右近將監殿申渡

十九日

西丸御書院番水野越中守組　蜂屋七兵衛
蜂屋七兵衛伯父　蜂屋八三郎

相續

右菊之間松平右近將監殿申渡

若年寄衆　本　板倉佐渡守

月　番　酉　三浦志摩守○中略

水野越中守組蜂屋七兵衞相續相願候ニ付、三浦志摩守殿江進達、御請取候以後、七兵衞死去故、伯父八三郎江定式之忌服請させ可ㇾ申哉と、書付被ㇾ差出ㇾ候處、忌服之儀伺ニは不ㇾ及候由ニ而、書付御返シ、其後伯父甥之續之忌明キ候御屆ケ、越中守ゟ被ㇾ申上ㇾ候節、八三郎儀、月代致、明日御城江差出候樣ニと、志摩守殿被ㇾ仰渡、十九日罷出候處、願之通、甥之家相續被ㇾ仰付ㇾ候、右御禮ニ何方江も不ㇾ遣、御城ゟ八三郎直ニ罷歸り、其日ゟ五十日忌請也、忌明ケ候而相續被ㇾ仰付ㇾ候爲ㇾ御禮、年寄衆相廻り候、相續は總而如ㇾ此、但忌定式ハ候儀迄は、番頭申渡ス、忌中渡已後、小普請支配割入向方取計也、

〔公用雜纂一〕（朱書）伯父相續願　但組違願

天明六丙午年十一月、御目付牧野織部を以、御殿進達、中奉書上包みの紙、御扣と印候計、

家相續奉ㇾ願候覺

高貳千石　寄合　本多作左衞門　午六十九歲

家相續奉ㇾ願候者　實弟養方伯父　本多鐵次郎　午四十九歲　私手前ニ罷在候

右鐵次郎儀、實者弟に御座候處、私儀實兄養子被ㇾ成候に付、養方伯父之續に罷成候、然ル處、私儀明和三戌年四拾九歲に罷成候節迄、男子無ㇾ御座ㇾ候に付、養子可ㇾ奉ㇾ願候處、親類遠類續遠同姓之內にも、養子可ㇾ仕相應之者無ㇾ御座ㇾ候間、私儀病氣危急等之節者養方伯父鐵次郎江家相續奉ㇾ願度段、明和三戌年八月廿一日奉ㇾ伺ㇾ置ㇾ候處、同九月三日伺、願之通心得居候樣、松前主馬を以被ㇾ仰渡ㇾ候、私儀當月下旬ゟ、持病之疝積差發、寒熱有ㇾ之、色々養生仕候處、去月中旬ゟ塞强、食氣一向無ㇾ御座ㇾ、相勝不

申候に付、吉田元卓藥服用仕候處同篇に付、橘隆庵、大八木傳庵江轉藥仕候得共、兎角相勝不申、本復可仕體無御座候、依之若病死仕候はゝ、兼而申上置候通、養方伯父本多鐵次郎江家相續被仰付、跡式無相違被下置候樣奉願候、以上、

天明六丙午年十一月　　　手拇ニ付印判計用申候
本多作左衞門印

酒井石見守殿

太田備後守殿

安藤對馬守殿

酒井飛騨守殿

牧野織部殿

〔諸例集七〕嘉永三戌年

柳生播磨守答

萬石以上以下共叔父相續願者、病氣故障等之譯を以相願儀ニて、兼而相續ニ願立置候儀者、難相成筋ニ御座候哉、

右之通者、御定も御座候事哉、此段兼而心得置申度、御内々各樣迄御問合申上候、以上、

六月廿五日　　　松平駿河守家來
福田貢

書面之通者、兼而叔父相續之願者、難相成御定有之候、

〔諸例集下〕一大伯父を現在相續ニ相願候處、難成由被仰渡、心當ニは致置候事、

寶暦二壬申年八月十三日、御書院番久世長門守御用番小出信濃守殿江進達之書付如左、

相續奉願候覺

高三百俵　　御書院番久世長門守組　小林權藏　申歳四十八

御目見未仕候

大伯父　相續奉願候者　　父小林權藏死三男　小林源五郎　申歳三十四

實は弟ニ而御座候得共、私儀甥小林午三郎家相續被仰付ニ付、大伯父之續ニ罷成候、

私義當申ニ四十八歳罷成、男子無御座候ニ付、小林源五郎義、家相續被仰付、跡式無相違被下候樣奉願候、右之者之外、親類遠類幷同姓異姓之內、養子可仕相應之者無御座候ニ付奉願候、以上、

寶暦二壬申年八月　　小林權藏判

久世長門守殿

戸田庄右衛門殿

右書付ニ添願書親緣類書被差出、尤例書二通差出ス、

例書左のごとし

高三百俵　　西丸御小性組室賀下總守組　小林平三郎　子歳四十

伯父　　小林權左衛門　子歳四十

延享元甲子年八月廿四日、急養子願なり、文意略之、

高千百石　　御書院番安藤伊勢守組　牛込忠左衛門　辰四十二歳

弟　　丑年故名字改申候　鳥居織部　辰四十歳

養方ニ而は伯父之續ニ御座候

享保九甲辰年六月五日、急養子願なり、文意略之、

一同廿日、久世長門守詰番之處、小出信濃守殿御逢、小林權藏相續養子願、親遠類書添例書御返、御書付御渡被成候、左之通、

姪男相續

久世長門守組
小林權藏

右大伯父小林源五郎義、家相續ニ相願候、病氣等ニも無之相續願難成候、依之願書相返シ候、併實弟之儀ニも候間、權藏實子も出生不仕候はゞ、相續ニ源五郎を可相願候、兼而頭迄申達置候義は、勝手次第ニ候、尤病氣危急ニも及候節、又は他國江相越候時分、相續願ニは可相成事ニ候、右御書付之通、御口上ニ而も被仰聞候付、權藏義、當秋曾我伊賀守組江爲取人罷登候、其節者例格之通、假養子願、右源五郎相續奉願候、權藏五十餘ニ罷成候而も、病氣差重り候節は、右源五郎相續願可申上候、其節之御月番御方樣江、御手前樣被仰渡候旨も可申上と奉存候旨申上候處、御承知被成候、

同廿六日、長門守結番罷出候節、養子懸り奥御右筆上村政次郎江、此間相願置候權藏義、承合候處、當時伺不及、右御書付ニて相極候事ニ候得共、爲念伺置可申候はゞ、來酉暮明年五十歳ニ相成候段申上、其節伺候樣ニ可仕旨、小出信濃守殿、政次郎御內意伺候節、被仰聞候由、政次郎申聞候、右之通故、權藏男子出生致候歟、又は源五郎死去候はゞ、御居入可申由、長門守物語承之、

〔建武以來追加〕一雅樂修理亮持忠所領文書依爲甥可讓與小笠原備前守持長否事、

以叔父讓狀、持長可相續之條、不可有子細、亦不可依不知行者哉、

永享二年十一月九日

加賀守基貞
散位貞元
民部丞基世
大和守貞連
加賀守爲行
中務丞基宗

肥前守爲稱
和泉守秀定
越前守宗秀

幼年者相續

〔關八州古戰錄 一〕長尾一簾齋忠心附管領家一ッ感狀ノ事
此迚モ憲政三歳ニテ實父憲房ニ後レ、九歳ニテ養父憲寛ノ讓ヲ請ケ、何レヲ恐レ、誰ヲ耻ベキ者モナケレバ、我意ニ任セテ生立、文ニモ暗ク、武ニモ缺テ、タヾ歌鞠、茶ノ湯ノ道、亂舞酒色ノ戯レノミニテ、晝夜ヲ空シク暮シテ、家風モ是ニ漸々衰ヘテ、弓矢ノ業モ取失ヒ、簡次ヲ亂ス、〇下略

〔諸例集 五〕天保十三寅年六月
初鹿野美濃守答
幼年ニ而、家督仕候得者、幼年中者御請書類、書判不仕印形計相用申候、
一鐵砲證文、一類共之內、加印ニ而差出申候、
一宗旨證文、家來名前之證文差出申候、〇中略
六月二日　有馬満丸家來 牧中駿平
附ケ札
書面之通相心得可然存候

女子相續

〔禁裏向御法式〕禁中方御條目十七箇條〇中略
一養子者連綿、但可被用同姓、女緣者家督相續、古今一切無之事、〇中略
慶長二十乙卯年七月
照實　在判　二條關白
秀忠　在判
家康　在判

本家相續

〔公事取扱〕女之身分、相續人與申者不相當ニ有之、別而後家之身分ニ而は、相續之筋ニ無之、既ニ別紙之內、後家之分不殘相續人之名目無之目安も相見候上は、全夫之株相續人無之內、後家ニ而請持居候故、相續人を相手取候を、其儘目安ニ相成候樣ニ被存候間、相續人之名目は、以來相除候方與存候事、

申 八月

御書面、後家ヲ相手取候貸金出入目安之義、右後家へ貸候與、夫存生中之貸金ニ而、後家を相手取候由、差別不相分、ら目安糺之節相尋、借主死失後、後家江相懸候は、誰死失ニ付、跡相續人同人後家誰與申趣ニ、去未十月ら以來認候振合ニ而、敢而此節ら之事ニも無之、百姓は素ら女ニ而相續致候も有之事ニ候へ共、右之意味ニ而、肩書ニ而不相分、一通ニ而は不相當ニも相見候ニ付、夫存生中之貸金滯ニ而、後家を相手取候分は、其譯訴狀文段ニ相認、肩書は、一般ニ誰後家與計相認候樣可致與存候、被遣候一冊返却仕候、

申〇安永五年 八月　石川主水正

曾我豐後守

〔落穗集 八〕松平伊豫守殿、越前本家相續被仰付事

一問曰、寛永年中、松平三河守殿〇德川忠直亂心に付、豐後國荻原へ流罪被仰付、越前の本家斷絕に及節、御舍弟伊豫守殿〇忠昌へ本家相續の義被仰付思召、故中納言殿〇德川秀康へ權現樣より被遣候知行高の內減少候て、五拾萬石被下置を以て、伊豫守殿不足に被存、御城にて御請不被申上候て、退出被致候と有之儀を申傳へ、取沙汰仕るは、其通りの義と被及聞候や、答曰、時代隔る世上沙汰には相違なる事も有之筈の事に候へ共、就中只今其元の御申聞の趣は、大きに相違の事共也、右本家相續の義を、伊豫守殿へ被仰付候刻、松平出羽守殿〇直政同大和守殿〇直基同但馬守

殿〇直眞右三人の御舍弟達をも被召出、各分知を被下置候上に、伊豫守殿の身と致して、何の不足を可被存樣も無之、其節御用として被爲召、伊豫守殿の舍弟方同道にて登城可有之候へ共、何も被仰渡候と有る義も無之歸宅候に付、段々子細有之事に候、我等承り及たるは、右伊豫守殿と申たる御人の義は、故中納言秀康公の御次男にて、虎松殿と申、十一歳に御成之時、權現樣の上意を以て駿河へ被召呼、お梶殿と申女中へ御養子に被下、〇中略御諱字を被下、御腰物をも拜領被仰付、夫より伊豫守忠昌と申、大坂表へも御供に被出、〇中略御歸陣以後、姉ヶ崎一萬石を轉せられ、常州下妻に於て三萬石被下、其後信州城地十二萬石被下候、間もなく越後高田の城主になし被申、二十五萬石被下るゝと也、然る所に、舍兄三河守殿亂心故流罪被仰付、越前の本家斷絕に及を以て、伊豫守殿へ本家相續可被仰付との義にて被召しに付、登城候處に、御目見前御老中方何れも御申候は、三河守殿義は御大法に任せられ遠流被仰付候へ共、故中納言殿の義を思召に付、今日其元へ御相續の義被仰付るゝ、間追付御直に可被仰出にて御座候、先以て珍重なる御事共に御座候と御申候處に、〇中略伊豫守殿には難有存候と御申上の上へ、御前へ被爲召、本家相續の義、幷に二人御舍弟達を被召出、新知等を被下置候となり、

德院殿御實紀一有德院殿御諱は吉宗、はじめ頼方、御小字は源六君、また新之助君と申す、〇中略正德六年四月の半より、有章院殿〇德川家繼御心地例ならずおはしましけるに、三十日の夕つかた、御病重くわたらせ給ふよしにて、三家のかた〳〵へいそぎ參らるべしと仰つかはされしに、公には此とき赤坂の邸中岡山といふところに、弓を射ておはしけるに、とみの召あればいそぎ出仕し給ふ、有章院殿には御幼稚にて御世つぎなかりしかば、尾張中納言繼友卿、水戶中納言綱條卿、及び老臣等會議し、文昭院殿〇德川家宣の御遺命なればとて、卿に御うしろ見のことをすゝめ奉りしかど、御齡をもてすれば水戶殿、御宗籍についでをもてみれば、尾張殿こそ御後見あるべけれ

と、固辭してうけ玉はず、天英院殿（文昭院殿御臺所）にも後閤に招かせたまひ、前代の御遺命なり、天下萬民の爲に御政を攝したまふべしと、懇の御旨なりしかど、外殿にまかり、宗室老臣の公議にまかすべしと、辭して過ぎ給へり、さて三家諸老臣、いづれも推奉しまいらせ、群臣一決しければ、やむことを得ず遂に許諾したまふ、公にはまさしく東照宮の御曾孫なるがゆへに、尾張水戸兩卿にくらぶれば、御血統の近きによりし所とぞ聞ゆ、これしかしながら天意人望に應じたまひしものなるべし、申剋老臣阿部豐後守正喬先導して、奥の御座にうつらせ玉ひ、やがて二丸にうつりすませ玉はむとて、重ねて豐後守正喬御先を導き、少老森川出羽守俊胤、御側三枝攝津守守相、阿部志摩守正明をはじめ、あまたの人々供奉し、殿上の板緣より御乘物奉り、玄關前中の門細門を經て、二丸にわたらせ玉ふ、（中略）五月朔日には、御所の御病いよ〳〵いたく重らせ給ふよしなれば、萬石以上をはじめ、宗徒の御家人みな本城に出仕して、御けしきうかゞひしに、先代の御遺命のごとく、紀伊中納言殿を御後見として、萬機を攝せしめたまふむね、老臣仰をつたへけるが、かさねて御所には、昨夜遂に大漸に及ばせたまへり、御家人等いよ〳〵中納言殿を奉戴すべきむね、御遺命なりと傳ふ、けふ紀伊家の支封松平左京大夫頼致に宗家をつぐべき旨、中納言殿面命し給ふ、また紀伊邸の家司水野對馬守忠昭、水野丹後守忠知等をめして、紀藩の政事ども仰下されし、左京大夫頼致朝臣には、とく糀町の邸にうつりすむべしとなり、

〔諸例集　六〕天保十四年五月

實子無之者、病氣及危急ニ、同姓分知近キ續合之内ニも、養子可致相應之者無之節、叔父又は兄なぞ、目上の者を急相續ニ相願候義は、追々例も有之、分知ゟ本家江養子ニ相越候者、兼而實方之弟（則分知之領地を）假養子ニ相願置候處、病氣危急ニ及び、右假養子幼弱等ニ而、家督ノ勤覺束なく、故を以斷申聞、其外親類共ノ内、養子可相願相應之者も無之節ニ至り、分知之實父を其身之相續ニ相願

候儀は、倫理之大綱は勿論、服忌之御定等へ差障り候筋は無之候哉、篤與評議仕可申上旨被仰渡候ニ付、取調候處、本家を相續仕候共、子たるものゝ家督、父相續仕候儀は、前々ゟ無之事ニ御座候哉、私共方ニも書留不申候ニ付、勘考仕候處、實父を其身之相續ニ相願候儀は、續之名義如何ニも顚倒仕、倫理之大綱ニ相障間敷とも難申上御座候處、一體本家を相續仕候儀は、雙方共其家ニ取、素より當然の筋ニ有之、畢竟其身より實父を相續ニ相願候ニ付、父子之間柄ニ而、其儀を辨別仕候得共、人倫之大儀ニ相障候儀與相聞候得共、本末之間は、最厚キ筋柄ニ御座候得共、難默止場合ニ付、父子之倫儀は暫差置、全末家之因を以、本家を相續仕候儀、且又及末期ニ相願候譯ニも有之、養子之唱無之候得ば、敢而大綱を亂し候儀ニも有御座間敷哉、御法令ニも、養子は同姓相應之者を撰び、若於無之は由緒を正し、存生之内可致言上旨之御條目も有之、實子無之、病氣危急におよび、同姓分知近き續合の内ニも、養子可致相應之者無之節は、何共以無據筋ニ有之、父子顚倒之差障與も乍申、末家之因を廢捨致し、他ゟ養子仕候も本快ニ無之、論議兩端に相跨候得共、父子兄弟叔父甥等ニ而、目上之者ゟ相續仕候得ば、何れも續合前後ニ相成候間、右等ニ引競候得ば、目上之處は更ニ顚倒無之與申ニも無御座候ニ付、本家其身ゟ實父を相續に相願候共、外ニ親屬も無之上は、無謂所筋與も不奉存、服忌之儀も、養方ニ而は、親類一同悉續之銘儀相變候得共、重キ方之服忌請候事ニ而、父子之間は別段重キ續柄ニ付、外親類とは一樣ニ難相成、父子計は相互ニ實續之通、服忌請之、其外之親類は、養實の差別仕、服忌請候儀ニ而、御定等江差障候儀無御座候、勿論容易ニ可奉願儀ニ而は無御座候間、右樣之節は、先御內慮相伺、御糺之上、實ニ無餘儀次第ニ相聞候はば、御聞濟御座候而も苦カル間敷與奉存候、同役一統篤與評議仕、此段申上候、以上、

九月

池田筑後守

遠山半左衞門

石谷鐵之丞
本多隼之助

〔押山叢書一聞書〕大身之本家に嗣子なく、末家之小身ゟ末期之養子に成り、本家を相續する者之里附之家來之骨折者、格別之もの也、末家之小身者はあなどりて、家老共威勢强く、手に餘るもの也、其時に里附之家來身命を不惜働時者、末家ゟ相續之主人、政務等自由に成もの也、里附之家來爲差奉公もなく、家老任せにする時は、其主人一生掛人之如く成果、無念之事也、然聞有馬加納又者間部抔之功者莫大之事也、

〔廢絶錄中〕大猷院殿御代　寛永九年

一萬石　美濃　脇坂主水正安信

四月六日、池田備中守長幸病篤きに臨んで遺言し、三男三之助長純に過半に分知せんと、親類等を招き議す、親族みな其言にしたがふ、長幸が弟豐後守長頼ひとり是を肯せず、此故に、長頼を省きて、明日遺言書を奉らんと、親族等が計ひし旨、長頼聞て大に怒り、長純に疵付、姪佐渡守安經をも殺害す、安信長純が舅也も同疵うけて逃れ去りし始末により、封地を除かる、或は安信此時亡命すともいふ、男子三人あり、甚九郎安英、山三郞安正、久三郎安長といふ、

〔公事取扱〕評定物跡式出入ニ付、御代官江可、願旨申渡訴狀下演說書、

根岸肥前守 ○御勘定奉行

一相州上田村安五郞と相手同村三右衞門跡式出入

是は大貫次右衞門御代官所上田村安五郞分家又四郞致病死ニ付親類共相談之上近親類之内ニ而、相應之者相撰、跡式相續爲致候、積ニ候處、鈴木兵庫知行同村三右衞門三歲ニ相成候次男ニ相續爲致度段申候、差障候由申立、右安五郞訴狀差出候處、右者次右衞門御代官所之者之

廢嫡

跡式出入ニ付、同人方江可願出旨申渡、訴狀下ゲ遣候、依之及御演說候已上、

午〇寛政十年四月

〔押山叢書一聞書〕一光貞卿〇松平之御舍弟松平左京大夫賴純〇伊豫西條領主と申候御方之御嫡子山城守殿御事、左京大夫殿御心に叶不申候而、押込被差置候、然處吉宗公紀州御家督御相續被成候以後、氣之毒に思召、山城守殿を若山へ御引取、廣き屋敷を被遣候而、氣儘に保養被致候樣にと御懇に御いたはり被成候由、山城守殿にも甚忝被存候得共、父之勘氣を請候者は、日之影を拜し不申ものとて、差渡し六尺之笠を拵、御かぶり被成、屋敷之内を歩行被成候、平日法華經を讀誦被致候、病氣有之由、吉宗公甚御をしみ被遊候と也、

此山城守殿と申は、學文を好み被申、賢者ニ而、至て孝行なる御人にて御座候得共、御父左京大夫殿妾腹之子に、儀大夫殿と申を嫡子に可被成との結構に而、無理に押込被申候故、家老熱海甚五郎諫言申候へ共、御用ひ無之、其上甚五郎を手討に被致、山城守殿をば嚴敷押込被差置候、依之左京大夫殿之家督者、儀大夫殿御相續被成候、是則二代目之左京大夫殿ニ而、後に紀伊大納言家直卿と申候而、御長命也、

〔諸例集下〕一男子出生以後致離緣候妻致出奔候ニ付、右男子家督ニ難成例之事、

寶曆二申年、小普請組川勝左京支配佐野又兵衞離緣候妻出奔ニ付、差出候屆書如左、〇屆書略

右ニ付又兵衞總領千太郎家督相續之伺出ル、如左、

私先妻曾雌民部娘、去月廿八日、出奔仕、行衞相知不申候、私悴佐野千太郎義は、右先妻ニ出生仕候、私離緣仕候以後も、實母之義ニ御座候間、悴義は通路爲仕候、母出奔仕候得ば、其子家督相續不罷成旨、先達而御書付出申候、尤離緣仕候得共、悴千太郎實母之義ニ御座候間、悴千太郎家督相續相成申間敷哉、此段奉伺候、以上、

五月廿五日　　　　佐野又兵衛

右之口を以書付認、本多伯耆守殿江川勝左京相伺候處、千太郎義家督相續は不相成候間、其段可申渡旨被仰渡候、

〔氏家叢書十九〕一寛政元酉年三月廿一日、伊達和泉守樣御長病中、御嫡子御病氣ニ付御退身、御次男直松樣御嫡子ニ被成度段、御用番牧野備後守樣江、御先手長谷川太兵衛樣を以被成御差出、御差添南部内藏頭樣被成御出候、

私嫡子増之允儀、全體虚弱罷在候之處、去年ゟ持病之疝積差發、彌辨舌不自由御座候ニ付、山添照知院藥服用爲被仕、種々療治仕候得共、相望儀無御座候ニ付、當時桂宗仙院藥服用仕候得共、末々全快可仕體無御座候之由、醫師共申聞候、依之一類共相談仕、増之允儀退身爲仕、先達御屆申上候次男直松儀、當時分三郎與申、酉年十五歲罷成候、右分三郎義嫡子ニ仕度奉願候、以上、

寛政元酉年三月廿一日　　伊達和泉守印書判

松平越中守殿

牧野備後守殿

鳥居丹波守殿

松平伊豆守殿

別紙

例書

寶曆三未年十月廿一日、御用番松平右近將監殿と細井若狹守ゟ、左之通願書差出候處、御請取之由、

同姓靱負儀、全體虚弱罷在、持病之脚痛有之、長座難義仕、其上近年疝積強く、毎度眩暈仕難

養仕候、尤林玄伯、熊谷、其よ藥相用、種々療養仕候得共、相留儀無御座候、當時武田長壽院藥
服用仕、疳積眩暈は快氣も可仕候得共、脚病之儀は往々共全快仕間敷旨、御醫師中申聞候、
依之一類共相談仕、私負養退身爲仕、三男將監儀、當未拾四歲相成候之間、右將監儀、嫡子ニ
仕度被存候、此段奉願候、以上、

寶曆三未年十月廿三日　細川若狹守印書判

酒井左衞門尉殿三〇以下名略

一文化五辰年閏五月、御間柄松平伊豆守樣江罷出、公用方江出會、書面を以御內慮奉伺候處、御預
置、追而御呼出ニ而御書取被成、御渡候、尤大坂御定番與力右類有之付而也、

抱領病身ニ而抱領相除、次男江家督相續相讓、隱居仕候者右二男家督後多病罷成勤難相成、
親類共之內ニも養子可仕相應之者無之節、最初抱領相除候者病氣も快相成候得者右之者
家名相續申付候而も不苦筋ニ御座候哉、

一前文之趣不苦筋ニ御座候はゝ、右願は隱居仕候者ゟ相願候筋ニも御座候哉

右之趣兼而心得ニ相伺度奉願候、以上、

閏六月　本庄式部少輔家來　鈴木一作

御書取

病身等ニ而一旦抱領を除候者、追而快氣候共、家相續之儀者難成事ニ候、乍併御抱筋之者、頭限
ニ而抱替等致候類は、家督被仰付候者與は筋も違候事故、是等は其仕寄ニより、吟味次第之
儀ニ可有之候事、

（柳營諸舊例的一）文化二年六月廿一日

抱領除願　寄合　瀬名源太郎

廢嫡孫

高五百石　寄合　瀬名源太郎

御目見未仕候　實子惣領　瀬名新八郎

右新八郎儀、幼年より之持病、年毎ニ相募、積氣差發候節者、眩暈強、別而不出來之節者、前後忘却仕候ニ付、御醫師中川專自、内田玄勝、町醫師中山中島藥服用仕、種々養生仕候得共、全快之程難計病症ニ而御座候間、右何も申聞候、末々御奉公可相勤體無御座候間、一類共江も懸相談、尤新八郎儀も同樣之存寄御座候、依惣領相除申度奉願候、

六月廿一日　寄合　瀬名源太郎

御附札

可爲願之通候

〔幕制彙纂三〕六十歳餘ニ而嫡子死去之例

一享保十八年六月廿九日、阿部豐後守樣御嫡子御死去、五日過、御用番左近將監樣江被仰上候者、同姓隱岐守倅當年八歳罷成嫡孫御座候處、兼而病身ニ而、關甫庵、河野松庵、吉田玄宅藥相用候得共、生付虛弱ニ而、成長之程難計、中々用立申間敷旨、右三人之醫師申候ニ付、私弟同姓美濃守倅謙ニ御座候間、隱岐守娘江聟養子ニ仕度奉存候、隱岐守相果、忌中御座候得共、六十餘之私儀ニ御座候間、忌明ニ候得者、早速可奉願候、先此段御聞置被下候樣、左近將監樣江御先手樣を以、御書付被差出候處、御請取被成、追而御挨拶ニ御書付之趣、御尤思召候、忌明候者、早速相願可申候、何も無御聞置候間、相違有之間敷旨被仰聞候、尤重キ事故、御一類中樣を以、御禮被仰上候樣ニと有之、御同苗伊織樣を以、御禮被仰上候由、同七月十九日御忌明ニ付、同廿一日御願書被差出候處、廿三日被仰付候由、

〔德川禁令考三十七養子緣組〕安永二巳年十月

嫡孫除之儀御書付

甲府勤番入木丹後守支配
井出紀十郎

淺奉行
阿久澤專右衛門

小普請組牧野靭負支配
深津又太郎

右之面々、先達而嫡孫病身ニ付、除之儀相願、願之通相濟候、右嫡孫、以來病氣快相成候とも、御奉公筋之儀難成候、此段寄々可被達候事、

古事類苑

政治部六十四

下編

相續下

弟家督

〔新編追加 雜務〕一 遺跡相論時、非子息由稱申輩事、

雖被准惡口、自今以後者、不可有其咎歟、

〔沙石集 三〕忠言有感事

同キ 北條 泰時 御代官ノ時、鎭西ニ父ノ跡ヲ兄弟相論ズル事有リケリ、父貧クシテ所領ヲウリケル
ヲ、嫡子カシコキ者ニテ、マヅシカンヌマヽニ、是ヲ買テ、還テ父ニシラセケリ、カヽリケルホドニ、
イカナル子細カアリケン、弟ニ跡ヲサナガラ讓ヌ、兄關東ニテ訴訟ス、弟召レテ對決ス、兄嫡子ナ
リ、奉公有リ、申所道理アレドモ、弟讓文ヲ手ニニギリテ申上バ、共ニ其ノイハレアリ、成敗シガタ
シトテ、明法ノ家ヘタヅネラル、法家ヲ勘ヘ申テイハク、嫡子也奉公功有トイヘドモ、父スデニ弟
ニ讓ヌル子細有ニコソ、奉公ハ他人ニトリテノ事也、子トシテ奉公ハ至孝ノツトメ也、弟ガ申所
道理ナリトテ、仍弟安堵ノ御下文ヲ給テ下リヌ、泰時コノ兄ヲ不敏ニ思ハレケレバ、自然ニ闕所
ベシモアラバ申シアツベシトテ、我内ニヲキテ、衣食ノ二事思アテラレケリ、〇下略

〔關八州古戰錄 十〕千葉介胤宗始末事

扠モ此度簗田陣ニ討死セシ千葉次郎胤宗ト申ハ、武藏國豐島郡石濱ノ城主、次郎胤利ガ子ナリ、
元祖千葉介常胤ノ十四世五郎宣胤、享德四年八月十二日、十二歳ニテ早世シ、家中ノ面々據ヲ失

ヒニケリ、此弊ニノリテ五代以前千葉大炊介滿胤ノ庶長子陸奥守康胤、總州馬加リノ城ニ在リシガ、異母弟次郎惟胤ト家督爭ヒ、當家譜代ノ所從二ツニ分レテ、既ニ一戰ニ及バントス、康胤打勝テ竟ニ所領ヲ保ツ、

〔應仁記 一〕武衞家騷動之事附岳山之事

文正元年ノ夏四月ニ、武衞ノ義敏ト義廉ト家督ノ諍ヒ出來テ騷動ス、其故ハ、武衞總領千代德丸、長祿三年卯月、早世セラレシカバ、家督相續ノ息男ナクシテ、大野修理大夫持種一男義敏ヲ執立、任右兵衞佐、家督ヲ相續ス、然レドモ無程家老ドモト不和ニ成リ、甲斐、朝倉、織田ノ三人トモニ、新座ノ主ノ普代ノ家長ニ對シ、加樣ニワガマヽ有ベキ事ナラズ、是ニテハ武衞ノ家督三職ノ座ニ居エベカラズト評定シテ、伊勢守貞親ニ賴テ訴フ、貞親ノ妾ハ甲斐ガ妹ナリケレバ、內緣ヲ以テ頻リニ申シケル間、不移時日歷上聞、卽義敏ヲ令勘道、澁川治部少輔義廉ヲ取立テ、任斯波右兵衞督、居三職座ケリ、經五六年間ヲ、義敏ハ大內右京權大夫敎弘ヲ賴ミ、西國ヘ下向シテ居タリケル、其比伊勢守貞親ニ新造トテ、寵愛無雙ノ新女有リ彼ノ妾ト義敏ノ妾ト兄弟ナリシカバ、此內緣ヲ賴テ貞親ヲ賴ミケレバ、先ヅ義敏息松王丸ヲ鹿苑院ノ蔭凉軒眞藥西堂ノ弟子トシテ、此僧ヲモ賴ミケリ、貞親ハ公方ノ御童名ヲ奉付御父也、新造ヲバ御母トゾ申奉ケル、是程ノ遠慮ナシナレバ、一大事ニ可成事ヲ不顧シテ、彼ノ西堂トトモニ義敏赦免ノ事頻リニ被申ケル、貞親ノ子息兵庫頭貞宗ハ、父ニ向テ、義敏身上ノ事、專ラ御取持之事不可然存候、一大事可出來、然バ終ニ天下ノ騷動ト存候、無勿體ノ由被申シカドモ、承引ナク、結句ハ貞親ヨリ勘道セラル、誠ニ忠言逆耳、良藥苦口、且ハ清盛ヲ重盛敎訓セラレシヲ承引ナク、叡心ニ背キ、家ヲ亡サレシナリ、貞宗モ、君ノ爲、家ノ爲、カク被申ケルト、後コソ人ハ沙汰シケル、時節ノ梅花春風ヲ不待ト申事アレバ、不私天ノナス災ニ於テハ、不及カト云ナガラ、心ヨリ起ル災也、去程ニ義敏ハ赦許ニテ、寬正六年乙酉冬、西

國ヨリ上洛シテ、同十二月廿九日、父修理大夫入道道顯ト相伴ヒ、兩御所ヘ出仕申サレケル、大名マハリ禮儀如常、イツシカ人ノ心替リ、諸人義敏ヲモテナシケル、次ル年文正元年ノ夏ノ比、頻リニ貞親申ニヨリテ、義廉無罪而出仕ヲ可被停止、剩ヘ勘解由小路ノ家ヲ義敏ニ渡スベシトノ上使頻波ナリケリ、甲斐朝倉以下、抑是ハ何ノ緩怠モナク、面目ヲ失玉フベキ事無念ナリトテ、山名入道ハ義廉ヲ聟ニトルベキ契約ニテ、近日祝儀可有トノ用意有リケレバ、イソギ山名ニ此事ヲ告テ歎キケル、山名入道靜ニ聞テ、大ニ怒テ、奇怪也、於此儀ハ如何ニ難爲上意、我モトモニ義廉ガ館ヘ入テ、上使ヲ相待合戰アルベキト用意ス、巳ニ分國ノ勢ヲ催ケル、義廉ハ尾張ノ守護代織田兵庫助、其弟與十郎ニ軍副被召上、越前遠江ノ勢モ召上ラル、京都ニハ、甲斐、朝倉、由宇、二宮ノ被官共、多勢ト申ニ計ナシ、勘解由小路ノ屋形ニハ、所々櫓ヲ舉、搔楯ヲカキ相待ケル、建武以來都ニテ如此儀ナシトゾ申アヒケル、去程ニ敵ナモ味方トモ知ス、用心ノ爲ニ國方所領ヨリ軍勢ヲ召上ラル、

〔明良洪範　十七〕北條安房守、江戸町奉行ノ時、伯父甥ニテ家督爭ヒ有リ、甥ハ漸ク六七才ナレド、其家ノ從者ノ長、幷ニ親類ニテ、甥ニ家督サセント言ヒ、伯父ハ我家督セント言フ也、安房守兩人ヲ呼ビ出シ、先ヅ伯父ニ手ガチヲ掛ケ、次ニ甥ニ手ガチノ代リ紙ヲヨリテ手ヲ結ベバ、封印ヲ押シ、雙方ノ親類緣者、名主家守中ヘ兩人共ニ預ケ仰付ラレ、且兩人トモ封印ヲ少シニテモヨゴシ候ヘバ、預ケ候モノ共皆一同曲事タルベシト仰渡サレケル、然ルニ甥ハ幼年ノ事故、何事モ辨ヘ無ク、只泣クバカリナレバ、涙ニテ封印ヨゴシテハ相濟ズト、一同ヘ御預ケノコト故、雙方ノ者悉ク心配シ、頓テ雙方ノ者相談ニ及ビ、甥ニ家督サスル方本筋ナレバトテ、其趣キニ極リ、其段申上ゲ、翌日事落著シタリトゾ、是ハ奉行所ヨリ甥ニ家督ヲ申付ル時ハ、伯父ノ方ニテ自分ノ私慾ハ顧ミズニ、奉行所ノ沙汰ヲ依怙ノ沙汰也ト恨ミ思ハヾ、如何ナル巧ミカナシ、後日亦復訟ヘ出ル事

モ有ントト思ハレ、雙方熟談之上極ル様ニト、安房ノ守ガ頓智ヲ以テセシ事也、

〔公事取扱〕家督出入之部

跡式又者養子等之出入者、他領懸合訴出候共、先方之地頭江可ㇾ願旨申聞、取上申間敷候、若地頭裁許不審之事も候はゞ可ㇾ相伺旨、御定書ニ有ㇾ之候、

一其跡式等之家筋、何方ニ候はゞ、町奉行限ニ而可ㇾ致ㇾ吟味候、

一御料所之ものは、家筋ニ候はゞ、其場所支配之御代官江可ㇾ願旨可ㇾ申渡候、

但御代官吟味ニ而、御勘定奉行手限ニ而可ㇾ致ㇾ吟味候、

一私領之もの、家筋ニ候はゞ、其領主地頭江可ㇾ願旨申渡、不ㇾ相済段、領主地頭ゟ申聞候はゞ、奉行所吟味可ㇾ相願筋之旨可ㇾ及ㇾ挨拶候、

丑七月朔日

一相州岸渡内村左平太、相手同國東俣野村七歳、理不盡ニ家奪ひ取、家督故障申懸候出入、

是は相手方、地頭永井幸之助地知行之者、跡式之儀ゟ事起り候出入ニ付、定例之通、幸之助方ニ而吟味之積、雙方地頭江相達、尤右之趣訴訟方之者共江申渡、證文取ㇾ之、訴狀下ゲ遣候積、

永井幸之助殿　内田隼人正

御知行相州東俣野村喜助跡式之儀ニ付、加藤三左衛門知行同國岸渡内村左平太儀、右東俣野村七歳を相手取、訴狀差出候處、御知行之者之跡式出入ニ付、貴様方江可ㇾ相願旨申渡候間、御糺之上、若不ㇾ相濟候はゞ、其節御申聞有ㇾ之候様存候、依ㇾ之及ㇾ御達候、

駒木野大内記殿　内藤隼人正

御組加藤三左衛門知行相州鎌倉郡岸渡内村名主　左平太

右之者儀、永井幸之助知行、同郡東俣野村嘉助跡式之儀ニ付、同村七歳を相手取、訴狀指出候處、右

者幸之助知行之者跡式出入ニ付、同人方へ可相願旨申渡候間、右之趣三左衛門江御申渡有之候樣致度存候、依之及御達候、以上、

丑七月　請證文は日番ニ有之ニ付略

一寺社領之者、家筋ニ候はゝ寺社奉行手限ニ而、地頭之寺社存寄をも承り可致吟味候、

一遠國奉行有之町方之もの、家筋ニ候はゝ、其奉行へ可相願旨可申渡候、

但京大坂支配八ヶ國内ニ而も、町方與寺社領之者家筋ニ候はゝ、彼地町奉行江可願旨申渡、

御領私領村方之もの家筋ニ候はゝ、御代官或は領主地頭江可願旨可申渡候、

右之通取計、或は領主地頭等ニ而致裁許候後及出訴、地頭之取計不審之儀有之候はゝ、其領主地頭江懸合、承届難決候はゝ、伺之上初判可指出候、

右之通評議相決候事、　各別

生前不定嗣

〔大坂堺問答坤〕一當人相果跡式之儀、遺狀も無之、親類等不埒之於致訴論者相糺、伺之上公儀江跡式取上可申候、

此儀、當表〇大坂的例不相見候得共、跡式遺言書幷可致相續忌掛り親類無之名前之家屋敷も、實は餘人之飯料屋敷之由にて、月々之家賃請取度旨願出候もの有之、元來相果候もの及六十歳餘ニ、悴も無之處、跡相續人之遺書も不認置、右續合之者共儀も、血筋を大切に存候はゝ、當人存生中にも致相續可申處、無其儀不束之儀、飯料等申立候も、慥成證文等無之候付、御城代江伺之上、右跡式家屋敷者取上、衣類道具者、血筋之もの江配分之儀、裁許申渡候書留相見申候、

〔公事取扱〕跡式養子離別後住幷引取人〇中略

一當人相果、跡式之儀、遺狀も無之、親るい等不埒之義を訴論致ニ於は、公儀江跡式取上之、

分家分知

〔島津家譜〕一宗久〇六代目早世故、其弟師久、氏久兄弟有之候ニ付、父貞久、薩隅を兩人に守護を讓り、師

久は上總介、氏久は任越後守、陸奥守候、此時は戰國故領國他國之敵を攻討候付て如斯候、兩人共。七代之家督にて、兄弟共尊氏義詮將軍に相隨、所々之强敵を攻亡預御感候、

〔關八州古戰錄十〕里見義弘逝去附義賴家督相續事

同シ天正六年ノ五月廿日、房州ノ里見左馬頭義弘、上總國浦田ノ城ニ於テ病死セラル、兼テ遺言有テ、嫡子刑部六輔義賴（實ハ義弘父義堯子）ヘ安房一國幷下總ノ領内半分ヲ與ヘラレ、房州館山ニ在城有ベキノ旨也、次男梅王丸（義弘實子）ヘハ上總國ヲ讓ラレ、未ダ若年ノ義ナレバ、天羽郡佐貫ノ城主加藤伊賀守介輔スベシトナリ、扨又下總ノ領知ノ内半分ハ、末ノ息女ノ假粧田ト定ラレ、三ヶ國ニ散在ノ家人、二隊ニ分レテ奉公ノ忠勤ヲ抽ベキ由含メ置レケルガ、梅王丸妹君兩人ノ母堂ハ、上總千本ノ城主東平安藝守ガ妹ニテ、加藤ガ孫女ナル故、姫君モ幼ナケレバ、母堂ト共ニ佐貫ノ城ヘ移ラレタリ、然ルニ義賴家督ノ領知ノ不足ナルヲ憤テ、内々ニテ加藤伊賀守ニ相議シ、梅王丸ヲ房州ノ圓明寺ヘ招キ寄セ、押テ剃髮ナサシメ、春齋ト號シ、僅ニ二十貫文ノ厨料ヲ授テ、館山ノ城中ヘ押込メ、母堂及妹君ヲバ、上總國高瀧ノ琵琶ガ首ト云處ニ、幽ナル居宅ヲシツラヒ、是ヘ移サレケルマヽ、義賴ノ仁慈ナキ事ヲ母室甚ダ恨テ、瞋恚ノ炎ヲ燒シ、吾死セバ惡靈ト成テ當家ヘ仇ヲ爲サン者ヲト、常ニ齒咬ヲセラレシトゾ聞ヘシ、

〔慶長日件錄〕慶長十二年八月廿日、次息男鶴光丸二〇（舟橋秀賢男賢忠）爲別。家。可被召遣由勅約也、是又大慶也、廿一日、息男召連、女御殿ヘ御禮令申候、勅約之義忝由申入畢、次親王御方ヘ息男御禮申入處、孝經序高聲ニ可令讀書仰也、仍令讀畢、令退出之處、親王御方御服（俗生、乳母被持出、）被拜領、愚息始而令出頭之處、仕合大慶此事也、尤爲眉目者也、

〔舟橋家譜〕秀賢━┳━秀相
　　　　　　　　┗━賢忠（母佐々木義賢入道承禎女、大藏卿、從二位、庶流伏原祖、元號東高倉、）

〔東武實錄〕寛永元年正月、是月大久保荒之助忠當卒ス、六十四歲、忠當ガ遺領二千五百石ヲ、嫡子忠辰〈後荒之助ト號〉二千石、二男甚四郎忠昌ニ五百石ヲ分ケ賜ル、

〔憲教類典〕〈三ノ十三 家督養子〉寛永十九壬午年十月三日

覺〈中略〉

一兄弟在之者には、親之知行高ニより、次男にも似合敷程に分被下候も有之、致御奉公候者は勿論、御目見不仕候ものにも分被下候事在之、兄之拜領分を相應に被下候も有之事、

一親之知行御切米者惣領に被下、二番目より御奉公仕候には、兄之惣領分相應に被下候儀も有之之事、〈中略〉

寛永十九年十月三日

〔享保集成絲綸錄〕〈十八〉元祿十三辰年十一月

覺

嫡子之外忰御目見願之儀、以後分。知。をも可仕と存候者は、御目見相願候儀、勝手次第に候、分知をも仕間敷と存候者は、願無用候、御目見願被仰付候而も、不被召出候得者、右之者、以後御直參江之養子ニ遣し候儀者各別、家中等江之片付は可難成候間、其趣ヲ可存候、尤最前致御目見候共、分知仕間敷と存候者は、勝手次第相應にかた付可申候、以上、

十一月〈中略〉

正德六申年閏二月

條々

一惣領家所領之内を分知し、別御朱印は頂戴なき面々、惣領家を相續すべきものなく、其つゞき近きによりて、一子を以て本家之養子とすべき由を望申し、御恩許において、自分の家者養子

を以て相續に不ㇾ及、其身一代之後、其分知者本家へ還し可ㇾ被ㇾ附事、

附 息男多くして、一人を以て本家の養子とし、一人を以て自分の家を相續せしめ候は、其願に可ㇾ被ㇾ任事、

一前條の如くに、一子を以て本家を相續せしめ、或者老後に及び、或は病氣に至るといへども、其家を讓るべきものなき故によりて、隱居之願も難ㇾ申輩は、其旨を言上すべし、別儀を以て公儀之勤仕は可ㇾ有ㇾ御免許ㇾ事、

附 分知之所領は、其身一代の後に本家へ還し入ㇾ之候上者、常々召仕候家人等流浪無ㇾ之樣ニ、本家ニ於て扶助之事者勿論たるべき事、

一拋領家所領之内を分知して、別御朱印を頂戴し、其家相立候面々、拋領家を相續すべきものなきに依て、御恩許を蒙り、其一子を以て本家の養子に遣はすといへ共、既に本家の外に其家を被ㇾ立下ㇾ候上は、自分も又親族の中を撰び、其家を相續せしむべきにおいては、其旨を言上して上裁を可ㇾ伺事、

附 たとひ別に其家相立候共、其身本家を續ぎ候においては、此例ニ者可ㇾ不ㇾ准事、

右之條々、宜ㇾ得ㇾ其旨ㇾ候者也、

正德六年申閏二月

〔藩翰譜七上稻葉〕丹後守藤原直時、故丹後守直寄が二男、父が卒せし時、其所領分ち賜ふ、（越後村松の地三萬石、閑要の田なりしにや、）寛永十九年十二月叙爵し、明れば二十年二月廿九日卒、廿七歳、（これ家の説なり、世には千之助直定卒して家絶しかば、直時に三萬石を給ひしよし申なり、）

〔藩翰譜六柳生〕宗矩男子三人、嫡子十兵衛宗三、二男飛驒守宗冬、三男刑部少輔某、（右大臣家の御小姓）父卒して宗三（八千石）宗冬（四千石）に所領を分ち給ふ、宗三、慶安三年正月廿一日に死して子なければ、宗三に賜

ふ所を宗多に給ひ、宗多が領せし所を刑部少輔に給ひしに、刑部少輔も程なくまた卒し、是も嗣なくて家絶えぬ、

〔藩翰譜五阿部〕同じき八月〇慶安四年嫡男千勝、二男吉兵衛、父が遺領を分ち賜ふ、見に本領のまゝ九萬八千石、弟に新田の地一萬六千石、又重次が遺言に依て、その甥市正正能にも、重次が遺領を分賜へり、新墾田六千石

〔氏家叢書十九〕一享和二戌年三月八日、御目付松平田宮様ゟ伺、同廿八日御付札、

分知配當與御座候は一事ニ而、知行之内を分而、二男三男等江配當仕候儀ニ御座候哉、又は兩斷ニ御座候哉、分地は前文之通ニ而、配當與御座候は、知行等を子孫其外之ものたりとも分遣し、母方の名跡等を相續爲仕候を、配當與可申候哉、右之段奉伺候、以上

三月八日　脇坂淡路守家來　加集平右衛門

御付札

書面之通は、分知與配當與兩斷之義は無之候、己之領分を分與へる事をさして、分知配當與申事ニ候、

〔諸例集六〕十二月廿九日遠藤但馬守殿江御直ニ上ル、酉〇嘉永二年正月廿日錄助〇立田を以、御下承付

> 書面申上候趣は、御別紙御書取之通被仰達候旨承知仕候、
>
> 正月廿日　大目付　御目付

致し、同廿二日同人を以返上、

本家末家唱方之儀、領知之内分遣し、一家を立候を末家分家與唱、公儀ゟ別段領知等被下置被召出候家は、本家末家之筋者有之間敷、右唱方之儀、評議仕可申上旨被仰渡候處、先達而西丸御小納戸遠山三郎右衛門ゟ問合有之、同人家筋之起發者、遠山與惣右衛門爲庸與申候而、初代遠山三郎右衛門景政ゟ、三代目之者ニ有之、一旦家督相續仕候處、同人儀、別段高四百石被下置、別規ニ被召出、其身取來候高は、惣領源兵衛景忠江被下置、相續仕罷在候ニ付、右惣領家は、遠山初代三郎右衛

門ゟ引續罷在候家ニ而、本家ニ有之、當遠山三郎右衛門方は、遠山與惣右衛門之節、別段高を被下置、被召出候家ニ付、末家與心得可然旨及挨拶候儀ニ有之、右者別紙文化之度、松平加賀守ゟ問合有之候節、相答候見合も有之、右ニ基、前書之通挨拶仕候義ニ御座候、然ル處、御尋之趣御座候ニ付、猶取調篤與勘考仕候處、俸祿之內、分知配當致し候家は、分家末家之唱、最不勘義ニ可有御座候得共、二三男等別規ニ被召出、新規高を被下置候而も、一體身分之元は、其家より別れ候末流の儀ニ候得者、矢張末家之譯與奉存候、且松平加賀守末家前田丹後守方ニ而は、同人元祖前田大和守利孝は、加賀大納言利家之二男ニ而、元和元卯年、大坂兩御陣相勤、落去後同二辰年上野國七日市住居、壹萬拾四石餘拜領仕、當時加賀守方は本家與相唱候趣ニ有之、并松平隱岐守先祖隱岐守定勝長男信濃守定美、二男織部定之、三男源大夫定寛、貳人共、寛文五巳年七月十七日、兄弟一時ニ被召出候ニ付、右兩家共隱岐守方を本家與相心得候旨、隱岐守ゟ申聞候段、天保七申年六月、先勤共本家末家之儀取調申上候評議面之內書留相見、同年八月、伊勢守殿御先代被相伺候本家末家唱方之儀ニ付、別紙寫加賀守殿御差圖之趣も有、旁以本末之儀者、分知配當之筋ニ無之候而も、其身之出候處を家之祖ニ立、本家與相唱候而可然儀與奉存候、前書之見合も御座候ニ付、別段取調申上べく樣も無御座候、遠山半左衛門相除、私共同役一統評議仕候處、書面之通御座候、則被成御下ゲ候書面返上仕、天保七申年御差圖振寫相添、此段申上候、

十二月　　大目付
　　　　　御目付

但馬守殿御下ゲ之御書付　　大目付 御目付 承之

但馬守

遠山三郎右衛門江 達

本家遠山荘之助揚座敷江被差遣候處を以差扣之儀相伺候樣可仕候事、

文化十酉年閏十一月松平加賀守家來ノ問合

別紙例書

一本末續柄之儀、分知配當之家ニ無之候而は、本末與は難申候哉、

附ケ札 本末之儀は、分知配當無之候而も、其家より別段被召出候分は本家末家ニ而候、

一嫡子之家、藝等未熟ニ而家督不致相續、二男致相續、右嫡子別ニ召出候家筋ニ而は、同姓與申者ニ而、右二男致相續候家筋を本家與は難申候哉、

附ケ札 書面之趣、二男相續致し候而、相除候嫡子別段被召出候得は、二男相續之家は家元與唱候、

一子弟等召出候家筋ニ而は、本末與は難申、庶流與唱申候哉、

附ケ札 書面之趣、初ケ條同樣ニ而候、

右之趣、承知仕度奉存候事、

十一月　　岡田十郎左衛門

天保七申年

阿部伊豫守ゟ勝手ゟ差出候書付　　加賀守

私九代之祖備中守正次三男甚三郎正久、嫡子正吉之末、同姓惣三郎家は、正統ニ而、正久二男正弘之末同姓刑部左衛門家は、正久之庶流ニ付、是迄惣三郎家は刑部左衛門ノ本家家元與相心得罷在候處、刑部左衛門方ニ而は、私家を本家家元與唱、惣三郎家は、同姓與申唱方ニ相心得罷在候ニ付、以前ゟ唱來り候儀與相違仕候間、右之段奉伺候處、御書取を以、惣三郎刑部左衛門両家者九代

備中守正次三男甚三郎正久之惣領次男ニ而、兄弟一時ニ被召出、御切米被下候家筋ニ付、惠三郎刑部左衛門兩家取扱ニ、差別は有之間敷旨御差圖之趣承知仕候、然ル處、一體惠三郎家譜ニ、正吉繼目之御禮之儀相見仕、年月等不相知趣ニ御座候得共、繼目之御禮與書出候得は、正久之跡相續仕候樣ニ相聞、正弘は同時被召出候而も、矢張正久之二男ニ而被召出候儀故、惠三郎之家刑部左衛門より之本家家元ニ相當候儀與相心得罷在候處、御書取之趣ニ候得ば、正吉儀、正久之跡相續仕候儀ニも無之、兩家共一時被召出、御切米被下置候家筋ニ付、全同姓與申唱而已ニ而本枝之差別無之、私家右兩家家元ニ御座候間、兩家之取扱ニ差別無之與申御趣意ニ御座候哉、猶又此段奉伺候、以上、

八月廿日　　阿部伊豫守

書面、內意之趣は、最前も相達候通、惠三郎刑部左衛門兩家共、兄弟一時ニ被召出候家筋ニ付、相互ニ同姓ニ而本家與唱候共、伊豫守方ニ限候儀勿論之事ニ候、

〔政要集乾〕本家分家百姓出入之事

一本家與分家與之百姓出入、一段同樣ニ心得取計候も有之樣子ニ候得共、雙方役人申請可相濟儀者格別、無左候は、百姓同士之儀、本家分家之會釋ニ不拘、假令本家之百姓を分地之百姓ゟ相手取候共、支配之役可愼筋ニ者無之間、地頭も同樣ニ心得、其筋之奉行所江、定例之通、添簡を以可差出候事、

但內分ヶ分地者、格別之事ニ候へ共、下通之分地者、其領主地頭御奉行之品も有之、全別家之分者、本文之通可相心得事、

〔御成敗式目〕一未處分跡事

右且隨奉公之淺深、且糺器量之堪否、各任時宜可被分宛矣、

未處分跡

〔新編追加 雜務〕一未處分所領相論配分事

云相論之是非、云得分之多少、始終於引付可有其沙汰、其訴狀等者、安堵奉行人可賦之、同御下文施行事、以配分狀可付安堵奉行人、御下文被成下者、安堵奉行可下于給人、〇中略

一信濃國御家人赤栖三郎入道遺領事、子息孫太郎與孫三郎兄弟相論之時、被成未分訖、爰松鶴已下女子等、可預御配分之由令申處、依不與訴訟、被弃置、然而近年被破後悔法之間、皆預御配分者也、〇中略

一未所分跡御下文事 正應二三五

遺領配分之後、被返遺安堵奉行人之條不可然、自今以後引付奉行人可成御下文歟、

〔新加制式〕一讓與所領於子孫事

右以私領令讓與子孫者、可任父祖之意、父祖相傳之地、依令支配數多之子孫、其嫡家无佗傺、然則三代附屬之領知者、一切不可讓庶子、至新地者、可任父祖之意、猶讓與之時、究淵底可有其定乎、

〔集古文書 五十六 沽券〕沽却　地臺所事

在六角北油小路西面半許依東（口壹丈陸尺 奧伍丈漆尺）

右件地元者、內侍所女官三條之年來所從男行貞死去之後、有遺物沙汰之日、於藏人所依彼此訴天被對問天、半分各被分配了、委旨は兩方所分給宣下之狀顯然也、然者限直錢參貫文渡了、於于今者、質券一通幷宣下之狀一通仁相副新劵文所渡行也、仍不可有他妨、爲後日沙汰新劵文如件、

建久元年七月十四日

御藏惟宗（花押）

口入人雜色鶴重（花押）

〔吾妻鏡 十二〕建久三年十二月十四日壬子、一條前黃門（能保〇藤原）書狀參著、以亡室遺跡廿箇所讓補男女子息、爲塞將來之乖違、去月廿八日、申下宣旨訖、右中辨棟範朝臣、傳宣權中納言（兼光）宣奉勅云

云、是平家沒官領内、攝津國福原庄、武庫御厨、小松庄、尾張國高畠庄器所、松枝領、美濃國小泉御厨、惟庄、津不良領、近江國今西庄、粟津庄、播磨山田領、下端庄、大和國田井兵庫庄、丹波國篠村領、越前國足羽御厨、肥後國八代庄、備後國信敷庄、吉備津宮、淡路國志筑庄、已上廿箇所、先日被奉讓黄門室家、(村上家御妹也云云)

〔光明寺舊記 二〕永財沽渡進治畠地立劵文事

合百八十歩者

在下粟野村内字桑原畠者、本二段壹丈々申□付西□□□□

直錢貳貫百文請納了

右件畠地者、故親父領地也、而未處分死去之間、諸子等後家共分知行之處、敢無他妨、而今依有直急用、限上件直物、永相副次第手繼證文、所沽渡于物部子孫王丸如件、仍爲後代新立劵文以辭、

嫡子大中臣字藥王次郎

一女子同　字立與宮

後家山下氏子

〔吾妻鏡 二十六〕貞應三年(○元仁元年)九月五日、故奥州禪室(○北條義時)御遺跡庄園、配分于男女賢息之注文、武州(○北條泰時)自二品(○政子)賜之、遍覽方々各々、有所存者可被申子細、不然者可申成御下文之旨被相觸、皆歡喜之上、曾無異儀歟、此事武州下向最前、内々支配之、潛披見二品之處、御覽畢後、仰曰、大概神妙歟、但嫡子分、頗不足、何樣事哉者、武州被申云、奉執權之身、於領所等事、爭强有競望哉、只可省舍弟之由存之者、二品頻降御感涙云云、仍今日爲彼御計之由及披露云云、

〔濫觴〕明惠上人傳

義時朝臣逝去の時、頓死にてありしかば、讓狀の沙汰にも及ばざりし程に、二位家(○政子)の命にて、

泰時嫡子たる上は、分限少くては、いかにとしてか天下の御後見をもすべきなれば、皆を官領して、舍弟共には分に隨て少宛わけあたふべきよし承しかども、つら〳〵父義時の心をおもふに、我よりもはるかに此舍弟どもをば寵愛せられしぞかし、然ば父の心にはかやうにこそとらせたく思ひ給ひけんと推量りて、朝時重時以下に宗と多く分與て、泰時が分には三四番の末子の分限ほど少取き、ケ様にては何としてか御後見をもすべきとて、二位家よりも諫られしかども、今までは聊も不足とおもふ事もなし、如此萬小欲に振舞し故やらん、天下日々に隨て治、諸國年を逐て安穩也、孝のよろしきを見るはしげく、訴のゆがめるを聞はすくなし、是一筋に此上人明○惠の恩言によるなりとて、淚をぞ拭ひ給ける、

〔志賀文書下〕所領配分事

嫡男大炊助入道分

　相模國大友鄕地頭鄕司職

次男宇爲別當分

　豐後國大野庄內志賀村半分地頭職在別注文

大和太郎兵衛尉分

　同庄內上村半分地頭職在別注文

八郎分

　同庄內志賀村半分地頭職在別注文

九郎入道分

　同庄內下村地頭職但故豐前前司墓堂寄附院主職也

女子犬御前分

同庄內中村地頭職

女子美濃局分

同庄內上村半分地頭職（在同注文）

帶刀左衛門尉後家分（數子在之）

同庄中村內保多田名

右件所領等者、故豐前前司能直朝臣、賜代々將軍家御下文、無相違所知行來也、而尼深妙得亡夫能直之讓、賜將軍家御下文所令領掌也、依之任能直之遺言、爲子數子等如此所配分也、然者任均分之狀、無依違可令領掌也、但關東御公事被仰下時者、守嫡男大炊助入道之支配、隨所領多少、可致其沙汰也、仍爲後日證文、總配分狀如件、

延應貳年（○仁治元年）四月六日　　尼深妙（花押）

〔吾妻鏡三十三〕延應二年（○仁治元年）四月十二日丙午、故匠作（○北條泰時）遺領事、未分死去之間、任去々年十二月廿三日惣目錄、被支配子息等、又若狹前司泰村、河內前司光村、左衛門尉家村、資村、胤村、重村等、賜亡父義村遺跡安堵御下文、有進物等、兄弟各被列參御所幷前武州御方云云、

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年七月十日乙卯、雜務條々有其沙汰、親經等爲申云、所謂父祖入所領於質券、不致辨、令死去之時、令讓與後家幷子息舉、而得其所之仁、依爲親之出舉、平均可支配之由申之、自餘子息等差名字入質券之上、其所知行之仁、可致沙汰之由申、

〔公事取扱〕跡式養子離別後、後任幷引取人、（○中略）

一遺狀の通り、家屋舗讓分候而者跡式斷絶、或は母は妾に而外へ嫁入候由、親類申出るといへ共、忰無之相果候もの、家財は母の心次第たる上は、遺狀通り母にも跡式分之、

〔民事慣例類集（家產相續）〕地所財產ノ內、次男娘等ヘ讓渡スコトハ、生存ノ日ニ分與シ、成長後身

分片付ノ資本ト爲スベキ遺言狀ヲ發スヲ例トス、若シ然ラザレバ、戸主沒後ニ至リ、骨肉相爭フコト、往々アリトス、武藏國豐島郡

相續人ノ外、親族朋友ヘ家産ヲ分與スルコトアルトキハ、必遺狀ヲ以テスル例ナリ、甲斐國山梨郡〇中略

相續人ノ外、二三男、又ハ娘ヘ金銀田畠等ヲ分與スルトキハ、父存命中證書ヲ記シ、證人ヲ立テ村役人宛ニテ固封シ置キ、其父死後親族立合開緘シテ、證書ノ如ク處分スル例ナリ、但相續人ヘ家屋敷ヲ讓ルモ、必ズ遺書アルモノトス、和泉國大島郡

母遺産

〔光明寺舊記 二〕得子戸田貳段助則任職事、頼行兄弟姉妹等出證文、

二見乃石達德子戸授給田事

合宇津伊楯坪貳段者、但作人令行宛也、

右件戸田任職進、相共故母御處分之目錄之内仁入、男頼行之得分ニ永給事具也、但雖及末代、此子孫等之中、敢不可有相論狀如件、但助則請□□□雖然□於文書目錄者、封納之内ニ有事明白也、又男女子等之雖可連判を皆加取、依二人者遠所在永取狀如件、

建久九年十二月廿一日

二女子
一女子ふちはら
八男藤原
四男僧
七男藤原
三男藤原
二男藤原但改姓也

〔大湊太田文書〕永沽渡進屋敷事

合一杖卅步者

在所箕曲牌內馬瀨村云云

四至限東駒次郎屋敷、限南藏人殿地、限西高田松法師刑部田、限北左衛門次郎殿屋敷、

直錢一貫三百文請取畢

右件地者、自親母菊鶴女手處分給後、數年知行所也、雖然今依有急用、限上件直物、
永沽渡進處實正明白也、但親母死去時、言讓計仁天處分狀無之、雖然末代更ニ不可有相違者也、依
爲後代放劵狀如件、

康應二年庚午潤三月廿七日　　沽主大中臣安忠花押

祖母遺產

〔結城系圖〕賴朝——朝光○中略——時光二郎寒河彌四郎左衛門尉住下野州寒河莊、領祖母寒河尼遺跡、相伴最明寺時賴禪門、廻行郡國、兄弟三人也、建久三年壬子八月生、弘長二年壬戌六月廿八日卒、歲七十一、號法喜院淨心蓮智、

〔志賀文書下〕將軍家政所下　　藤原泰朗

可令早領知豐後國大野庄內志賀村半地頭職除舍弟分事

右任祖母尼深妙能直後家豐前守弘長二年八月六日讓狀、可令領掌之狀、所仰如件、以下、

文永元年三月廿二日　　案主　菅野

令左衛門少尉藤原　　知家事清原

別當相模守平朝臣政村花押○北條

武藏守平朝臣長時花押○北條

夫遺產

〔御成敗式目〕一讓得夫所領後家令改嫁事

右爲後家之輩讓得夫所領者、須抛他事訪亡夫之後世之處、背式條事非無其咎歟、而忽忘貞心令改嫁者、以所讓得之領地、可宛給亡夫之子息、若又無子息者、可有別御計矣、

〔御成敗式目追加〕一御家人後家、任亡夫讓、給安堵御下文事、暦仁元十二十六

此條平均之例(〇例一本作法)也、爰於令改嫁之輩者、可宛給他人之旨被定置已來、爲免其難、或少年或無病之族、寄事於所勞、讓與子息親類、申給安堵御下文之後、及改嫁云々、甚以濫吹也、於自今以後者、不論重病危急者、不可被許其讓矣、〇中略

一改嫁事 延應元九卅、佐竹別當入道後家沙汰之時被定云々、

右或致所領之成敗、或行家中雜事、於令現形者、尤可有其誡、此外至内々之密儀者、縱雖有風聞之說、非沙汰之限、次尼還俗改嫁事、雖有其沙汰、又不及記之由評定畢、

〔新編追加 雜務〕一關東御領知行後家並女子事 弘安七十一卅一

右後家女子令在京之條、不可然之間、向後可停止、若猶背制法者、可被收公所領也、

〔太平記 三十五〕北野通夜物語事附青砥左衛門事

西明寺ノ時頼禪門、密ニ貌ヲ窶シテ、六十餘州ヲ修行シ給ニ、或時攝津國難波ノ浦ニ行到ヌ、鹽汲海士ノ業共ヲ見給ニ、身ヲ安シテハ、一日モ叶マジキ理ヲ彌感ジテ、既ニ日昏ケレバ、荒レタル家ノ垣間マバラニ、軒傾テ時雨モ月モサコソ漏ラメト見ヘタルニ、立寄テ宿ヲ借給ケルニ、内ヨリ年老タル尼公一人出テ、宿ヲ可奉借事ハ安ケレ共、藻鹽草ナラデハ敷物モナク、磯菜ヨリ外ハ可進物モ侍ラネバ、中々宿ヲ借奉テモ甲斐ナシト侘ケルヲ、サリトテハ日モハヤ暮ハテヌ、又可問里モ遠ケレバ、枉テ一夜ヲ明シ侍ント、兎角云侘テ留リヌ、旅寢ノ床ニ秋深テ、浦風寒ク成儘ニ、折燒葦ノ通夜(ヨモスガラ)、臥侘テコソ明シケレ、朝ニ成ヌレバ、主ノ尼公手ヅカラ飯匙取音シテ、椎ノ葉折敷タル上ニ、餉盛テ持出來タリ、甲斐々々敷ハ見ヘナガラ、慰ル態ナンドニ馴タル人トモ見ヘネバ、不審

ク覺テ、ナドヤ御内ニ被召仕人ハ候ハヌヤラント問給ヘバ、尼公泣々、サ候ヘバコソ、我ハ親ノ讓ヲ得テ、此所ノ一分ノ領主ニテ候シガ、夫ニモ後レ、子ニモ別レテ、便ナキ身ト成ハテ候シ後、惣領某ト申者、關東奉公ノ權威ヲ以テ、重代相傳ノ所帶ヲ押取テ候ヘドモ、京鎌倉ニ參テ可訴訟申代官モ候ハテバ、此二十餘年、貧窮孤獨ノ身ト成テ、麻ノ衣ノ淺猿ク、垣面ノ柴ノシバ〳〵モ、ナガラウベキ心地侍ラチバ、袖ノミ濡ル露ノ身ノ、消ヌ程トテ世ヲ渡ル、朝食ノ烟ノ心細テ、只推量リ給ヘト、委ク是ヲ語テ涙ニノミゾ咽ビケル、○中略禪門諸國斗藪畢テ鎌倉ニ歸給フト均ク、此位牌ヲ召出シ、押領セシ地頭ガ所帶ヲ沒收シテ、尼公ガ本領ノ上ニ副テゾ是ヲ給タリケル、

〔御當家令條二十二〕江戸町中定○中略

一夫相果無相續之子、家財屋敷後家令進退、無程下人と密通、忘亡父之恩、不憚親類、女拂其町、夫之親類以相談、家屋敷可致相續事、○中略

明暦元年十月十三日

〔武家嚴制録二十一〕一無其子女人等夫死去之時は、雖爲壯年、於發其好之義は、無異儀其家ニ可令住居、死人後家雙方之親類、其町人隣家之者致話合、可然後夫相定、家屋敷無斷絶樣に令請合事肝要也、併後夫之事、可任後家之心ニ、然ば彼女令改嫁は、其屋敷并死人財寶之雜具は、後家構申間敷歟、但親類以諸人一ツの内可然人後家相續財寶雜具、不殘後住之者ニ可相渡歟、但可依時宜也、

〔大坂堺問答坤〕一夫死後、後家外江於嫁者、先夫之名跡之儀、可續之樣無之、家附筋目之內ゟ可相續、又送狀有之家屋敷讓分候以後、相續之悴死去、跡及斷絶、母者妻にて、外江嫁候由、親類申出候共、悴無之相果候もの、家財は、母之心次第たる上者、以遺狀之通、母江も跡式分遣候樣可申付候、

此儀夫死後、外江於嫁者、先夫名跡可續筋無之儀、裁許申渡候類例、當表○大坂ニ書留相見申候、其餘先例無之候、

〔公事取扱〕跡式養子離別後住幷引取人〇中略

一夫死後、後家之儀、外江於緣付者、先夫の名跡可差構樣無之、筋目のもの可爲相續、

〔新編追加雜務〕一所領配分事

二宮尼、依罪科被召所領畢、而尼死去之後、子息三郎入道申披無過之由、所返給也、爰二男左近入道可預配分由申之處、不相構訴訟之旨、三郎入道雖支申之、預配分畢、

〔新編追加侍所條例〕一武藏新羽鄕地頭大見肥後三郎次郞定村遺領事

定村嫡子又次郞賴村與後家平氏賴村繼母相論之時、賴村申云、定村之中陰、追出籠僧、打留念佛之條、逆罪也云云、平氏可被處惡口罪科之由、依令訴申、被付論所於氏女畢、

正應三　三番引付　奉行島田民部大夫行兼頭人遠江入道道四、條時章

〔鹿島社文書六〕鹿島社大禰宜賴親與舍弟七郞政家女子中臣氏相論、常陸國橘鄕內倉員村屋敷名田事、

右、如訴狀者、賴親父政親者、橘鄕給主也、於惣領職者、讓與嫡子賴親、於倉員村者、所讓二男政家也、而政家無男子之間、以賴親子息親俊爲養子、弘長元年六月一日讓與倉員村畢、親俊死去之後、政家悔返之、讓與女子子息朝政之間、任政親嘉禎狀、可宛給彼村之由、賴親訴申之時弘安七年所拜領也、女子非知行仁之上者、同可被返付云々、如陳狀者、倉員村者、亡父政家得父政親嘉禎讓狀、仁治元年給安堵御下文畢、政家寬元二年十一月、以屋敷名田讓給氏女之間、同十二月、被成御下文畢、政家之時、以賴親子息親俊爲養子、雖讓與倉員村、悔返之、所讓與朝政也、賴親掠給當村之後、剩背弘長元年六月一日連署狀、可宛給彼屋敷名田之旨、及濫訴之條無其謂云々、爰如賴親所進政親嘉禎四年八月狀者、橘鄕內倉員村事、所讓中臣政家也、舍兄失出來時舍弟可知行也、舍弟失出來時、舍兄可知行也、有男子者可讓也、全不可讓他人云々、弘安七年十二月御下知者、倉員村事、爲政家子息讓、得當村之

旨、朝政雖申之、爲外孫之間、難被用、政家男子之由、賴親所申非無子細、朝政不足當村知行仁之間、任本主政親嘉禎狀、可令賴親領掌云々、如中臣氏所進政家寬元二年十一月狀者、倉員村屋敷名田事、七月十二日臨時御祭、十二月日次御供料可勤仕也、自餘御公事、幷萬雜事一向不可有、以此讓狀備向後龜鏡、不可有他人之妨云々、如同年十二月安堵御下文者、下中臣氏(字光)日　可令早領知常陸國橋鄉倉員村屋敷名田事、任政家去月廿六日讓狀、可領掌云々、如賴親親俊等弘長元年六月二日連署狀者、屋敷名田等事、若女子不可知行之旨、稱申之、若論女子分、多少有限之神役之外、加催促、申煩女子、令致亂妨者、可有別御計也、仍於女子分者、永可停止違亂云々者、帶賴親弘長狀、可被停止彼濫妨之旨、氏女所申聊雖似有子細、就此狀不被成御下知、上、守政親嘉禎狀、可宛給之由、賴親所訴非無其謂、然者可令賴親領知者、依鎌倉殿仰、下知如件、

弘安九年七月廿九日

相模守平朝臣(花押)(貞時)○

陸奧守平朝臣(花押)(業時)○

〔東大寺文書 四〕播磨國大部庄公文孫九郎久忠後家性阿重辨申

同國佐谷六郎左衛門尉政尊擬令競望當庄公文職名田畠等、假老耄覺性名字、構出造沙汰、致無窮濫行上者、早被棄捐彼謀訴、欲被行其身於謀書重科子細事、

副進

二通　久祐久忠和與狀案先進了

三通　御下文案(先進畢)

一通　地頭宛文案(久忠知行所見)

此外覺性別々知行之旨狀跡在之、依事繁略之、

右所職田畠等者、如令度々言上、王九郎入道觀圓所帶也、而未分之間、子息久忠等者分配之條、和與

狀分明也、其後父久祐依無一子、與養子令相繼其跡、久忠共以一圓知行之條、世以無隱、代々安堵御下文明白也、案文進覽之上者、併仰高察、而今伺久忠逝去之剋、假老耄之覺性名字、政尊（覺性舅）構出造沙汰擬令競望件所職等之條、希代未曾有之濫吹也、爰如重謀訴狀者、覺性爲宛別數子之後室、帶德治貳年三月十三日親圓讓狀、進退領掌之條明鏡也、久祐久忠等依爲成仁之子息、就于預置、宛給御下知賊、於現不忠者、悔返致他計之條定法也（云々、取詮）、此條一々奸謀也、親圓讓于覺性由、事無跡形虛誕也、然則謀書之條無所遁者也、所以者何、久祐久忠等自親父親圓存生之時、爲成人上者、何闕現在成長當出仕之子息久祐久忠等、猥可讓于後家覺性哉、無極矯飾也、（是一）次親圓未處分聞、久祐久忠雖致遺跡相論、兄弟和平之儀致支配之條、和與狀分明也、隨而政尊妻女爲親圓息女之一分、相宛于彼分配畢、親圓於讓于後家覺性者、爭及未分沙汰、可致和與哉、（是二）○中略　抑至久忠跡者、後家性阿令管領可讓于女子之由、令遺言之間、令進覽陳狀之處、祖母敵對之旨令構申之條、全不存次第也、所詮早被停止政尊員外非分之濫訴、號親圓讓狀、至構出謀書者、爲上裁欲被加御炳誡矣、仍重披陳言上如件、

元亨二年二月　日

（光明寺舊記一）伊勢國住尼法宗申

欲早總官御在洛上者、任先規傍例、蒙御成敗、爲駿河國江尻住人定願（亡父阿久志左衛門入道々妙舍弟）并阿久志島住豐後房（不口實同道妙舍弟）等、抑留亡父道妙令出立船四艘、入于船用途口餘貫、稱可令配分、不沙汰渡于法宗（後家法名）條、猛惡奸謀無比類上者、於拘留錢貨并船等者、急速被糺渡、可口室、至其身者、相觸在所檢斷、欲被令處罪科子細事、

右於亡父道妙者、無一子、法宗同雖無子、令剃髮守志、而口在室之間、夫妻同財之故、彼遺財之船錢貨以下、法宗可令得分之條、尤法意之所推也、爰彼豐後房等、縱雖爲道妙之舍弟、閣後室、爭可致非分支配之藝行哉、雅意之企、猛惡之至也、所詮件四艘船頭之中、至麻生浦住人刑部太郎者、雖令死去、於泊

遺物處分

浦小里住兵衞太郎、道妙姫智、阿久志住九郎三郎、豐後房智、同住松法師三郎等者、令現存之上者、召寄彼船頭等被糺明之時、云錢貨云船等、爲道妙遺物之條、不可有其隱者也、然早至豐後房等者、相觸在所之撿斷、被令處罪科、於四艘之船幷千餘貫之錢貨者、急速被糺渡于後室、欲訪道妙之後生苦提矣、仍粗言上如件、

建武四年六月　日

〔諸家系圖纂藤原氏肅池〕武房
　├隆盛號西郷孫四郎、先父早世、
　└時隆次郎、於關東早世、十七歳、

貿隆盛嫡子也、祖父武房爲養子家督ヲ相續ス、武房死去時、伯父武本與時隆依遺領ノ相論、於關東指違死ス、

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年七月十日乙卯、次亡妻遺物事、有其子息者可進退之也、無一子之時者、夫不可進止之、可返妻祖家矣、

〔諸家系圖纂稲葉〕康盛右京亮、讃岐守、筑後守、從五位下、母石川助七郎女、法名定盛、自幼侍家康公左右、一日公以大久保石見守亡家之貨財分賜近習者、賴康盛曰、予年尙幼、意欲財物、而子者吾同族也、不可與汚物、而執腰底金扇賜之

〔台德院殿御實紀附錄一〕神君の御遺金をわかたせ玉ふとき、尾紀の兩卿はおの〳〵三拾萬兩、水戸の賴房卿へ拾萬兩遺はされき、御みづから秀忠徳川は天下を讓り受玉へば、外に何を求んとて、一品も御身に付させ玉はず、長久手の役にめさせられし御鎧は、名譽の御品なれば、これはいかにとうかゞひしに、それも御物には玄たまはず、これらについていと御廉潔の盛意はかりまゐるべきなり、かの御遺金あまた分たれ玉ひし餘なは三拾萬兩のこりしをも、御みづからの御費用

にはなされず、駿城の庫に納めてありしが、その後忠長卿駿河に封せられ玉ふに及んで、駿河殿預り玉ふもえかるべからずとて、久能山に納られぬ、是そのころに久能の御金といひしなりとぞ、寛元聞書

〔奥州相馬系圖〕義胤、(中略)寛永三年十月三日叙ニ從五位下一、同九年台德院(德川秀忠)御遺物、拜ニ受銀子五百枚一、

〔御當家令條二十二〕江戸町中定 ○中略

一讓ニ家財於惣領一、重而讓ニ與次男輩一、雖ニ兄訴訟一、父存命之内依レ有ニ誠意一也、後判所持者可レ任ニ父意一、但繼母之讒言ニ付、無ニ惣領不孝者一、可レ分ニ遣家財一事、○中略

明曆元年十月十三日

〔御當家令條二十一〕條々 ○中略

跡式幷親疎ニ不レ限、遺物配分等之事、

右者身堅固成内、町中年寄幷五人組ニ相斷、證文に載置べし、但其子不義之族有レ之者、重而可レ申ニ斷之一、及ニ末期一爲レ背ニ道理一、遺言相立間敷者也、雖レ父後家たるもの、家財遺跡之事、諸親類有レ之といへ共、其者不レ讓ニ與剰へ師檀と號する出家、私ニ申合祠堂之法例、且者背ニ敎經之道理一、自今以後、爲ニ後家者一、堅固成内ニ、一門幷町内義、以下相定證べし、不然たとひ雖レ有ニ寄進之證文一、不レ可ニ許容一者也、

一養子幷聟等之事

右遺物配分等之事、准ニ先條一、父母堅固成間に、諸事相定、證文取替し、町中江も同證文取置べし、及ニ末期一令ニ忘却一、其剰申といふとも、道理に背たる遺言立間敷もの也、○中略

明曆元年十一月廿六日　牧野佐渡守印

〔大坂要用錄三諸證文〕所務分請取一札

一札

處分狀
讓狀

一誰殿何月病死仕候處、存命之内書殘候爲遺物與銀何程、幷何々、此度我等方江被送下、慥ニ請取申候、尤其元名跡相續者勿論、諸事違背一切無御座候、爲其一札仍而如件、

年號月　何屋誰

何屋誰殿

〔坂井家日策〕天保七年三月十一日、石川々遺物。。分。として、香爐皿來ル、

〔光明寺舊記〕一〕永安一女子度會氏妙子得分讓渡屋地事

在字河邊、當時居住畠地壹處者、

立五間四面寢屋壹宇、

副渡親父一禰宜自筆假名讓文、（但有河邊、可令尋取也、）

右件居住畠地、幷寢舍一宇、殊依有所望、永定氏子得分所讓渡也、若至于末代、雖不慮之爭論出來、全不可令承引、和與一子之物、無悔返法之故也、仍明錄子細所注申也、兼又於故相可大夫口入神領口入料所當物等者、併固所讓進也、但彼起請之文等、皆以有河邊、同可令尋取也、尙以雖後代不可相違之狀、起請如件、

壽永元年十二月十九日　豐受太神宮權禰宜從四位下度會神主（花押）

相知わたらひのなかいしこ

〔光明寺舊記〕一〕永處分進三男子田畠事

合

寺田壹段半（但先祖相傳田也）　大藏一處

五間四面屋一宇（屋敷共）

右處分志者、世間人命依不定、當時存生之剋、三男字石王永處分進處也、然間件於田畠者、海眞實先

祖相傳之私領故、年來之間、敢無他妨、但如此雖令處分進、可依存生養幼者也、仍爲後日證文如件、

建保四年丙子年八月廿七日　　海眞正花押

〔光明寺舊記一〕嫡子物部弘房永處分充給少財物等事

合

一野畠四段内一段在度會郡湯田郷湯田野、但小俣前司殿沽地也、

四至 限東公道　限南同地破目
限西同地破目　限北同地破目

右件田畠等隨有員、男女子等所處分給充也、各止爭論可知行之状如件、但件地等雖男女子等處分渡、後家命之間可進退之状如件、以辭、

承久二年九月七日

親父物部貞弘在判
親母度會氏子在判
嫡子物部弘房在判
次男同清弘在判
五男同弘元在判
一女子同在判
二女子同在判

〔鹿島社文書六〕下　鹿島神領常陸國佐都東郡内大窪郷住人等、可令早停止地頭伊賀判官四郎代官光依新儀妨、就手繼讓状等、且任代々下文旨、可致神用物沙汰當郷同鹽濱事、○中略

嘉祿三年六月六日

武藏守平泰時在判 ○
相摸守平時房在判 ○

〔古文書類纂上島分状〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

姫君

尾張國大縣社（件庄、關東尼二品、承久大亂之時所志給庄內也、）

越後國白河庄

右件庄々所附屬如件、家領自元不幾、彼此相分之分間雖少、只志之至也、尙侍殿（〇四條院尙侍藤原全子）奉同宿、可蒙彼御扶持、一期後爲家長人子孫中有志之相計、可被讓與也、

以前條々所注置如右、但先年受重病時、楚忽分書處分、未加再治、自然送數年、爰前關白（〇道家長男敎實）有不慮事、太略如違背向後之進退、推而可量家門之孤害、子孫之障不可疑殆、仍所改直先度之處分也、偏守此狀不可違犯、於彼狀者破却、投火中旣畢、倩思先規、淸愼公（〇實賴）家領文書、三條關白（〇實賴長男賴忠）不傳之、順孫實資（〇齊敏子）傳之、法興院領、中關白（〇兼家長男道隆）粟田關白（〇兼家二男道兼）不傳之、御堂（〇兼家三男道長）多傳領之、法性寺殿（〇忠通）御領、六條攝政（〇忠通長男基實）一向傳領之、菩提院入道（〇忠通二男基房）不傳之、故禪閤（〇忠通三男兼實）以皇嘉門院御讓、次男相傳、今以之思之、洞院攝政（〇道家長男敎實）者家嫡也、右府（〇敎實子忠家）旣爲嫡孫、前攝政（〇道家三男實經）亦爲寵愛器量、尤足傳領之仁、所分與也、何況前關白於有不義哉、兼又宜仁門院田中薭尼尙侍殿所讓與庄々、一期之後可爲次第附屬、子細委載于右、於攝政幷右府子孫、遂前途爲家長者、相傳領掌勿論、若不登大位、混俗塵者、尊不足其仁歟、早返付家長者、可令抱領、但於別相傳之地者、非其限、曰記文書子細又同前、小僧（〇道家）萬歲後、若成妨碍者、更不可爲子孫、永可謂不孝者、若我生九品之淨刹者、以天眼照見、可加冥罰、若雖廻三有之故鄕、以肉眼照見、可與治罰者也、抑此家領內、自關東有傳領地、附屬子孫、尤可請彼處分歟、仍所謂證判也、先規不可求於外、鎌倉故右大將賴朝卿以後、以沒官領廿ヶ所傳與卿妹二位入道能保卿妻室、其後申下宣旨、附屬諸子、高能卿、幷嫡女（〇小僧母儀）花山院右府室、故西園寺入道室傳領、于今知行、入道大納言（〇藤原）以彼因緣、下向關東、繼其跡、件庄々、或尼二位（〇北條政子）義時朝臣、泰時朝臣等相計所志與也、何可有牢籠哉、近則故太政入道（〇公經）同有關東

傳領庄々、悉以處分諸子、尤足准據歟、爲後鑒粗勒子細而已、

予依手振假他筆、守此狀努々不可違犯、

建長二年十一月　日　　愚老在御判

〔光明寺舊記 三〕右家女財物一同仁隨有所分給也、背此旨於成違亂之輩者、可爲未敎之子、不可充得分、又殺生博奕等事一切可停止、忌日報恩隨堪各可相勵、故殿遠忌者四月十一日也、各同可致其營、氏子方之財物者、子細見于故吹上政所大夫廣光神主處分文也、其旨不可有違亂、抑雖可有後家分、他腹子息不相交之上、不可有改嫁之儀、然者存命之間、田畠舍宅所從財物、一向進退可被憐愍子息等、有不慮不當事之子息者、不可充得分、如此雖令分行、餘命猶殘、有所願果遂之事者、臨期可計行也、仍處分如件、

建長六年五月十二日　　豐受大神宮權禰宜正四位下度會神主雅継在判

〔徵古文府 一〕處分財物等事

合

一男信　得分

戸田百捌十歩　坂合部德仁子戸授給之內

所在宇治字鎌田

自餘舍宅田畠等略之

右所有財物等所分給也、守此旨可領知也、更不可有異論、仍爲後代分給之狀如件、

弘長參年癸亥十一月廿四日　　母度會氏子判

執筆僧在判

〔香取神宮古文書纂 三〕次第相傳證文等

右彼實政解狀俑件名田畠以下屋敷、代代蒙二御成敗一令レ進二退領掌一之處、實廣法師等、以二金丸犬丸名内之田畠屋敷一稱レ有二母堂之讓狀一、成二違亂一之條、無道之企、未曾有之結構也、夫實員讓二嫡子實澄一之上、實員實澄他界之後、同居嫡孫之祖母不レ相二觸嫡孫一、密密爭任二自由一、以後名田内可レ割二與庶子一乎、謀書之條顯然也、不レ可レ遁二申罪科一者乎云々、實廣母堂之讓狀有二疑殆一之上、實員讓二嫡子實澄一之條分明歟、早任二代代相傳證文一、停二止神主惟實妨一、以二大禰宜大中臣實政一可レ令レ進二退領掌件名田等一之、所レ仰如レ件、在廳官人幷香取社神官等宜承知、不レ可二違失一、故下、

文永八年二月日　　案主中原

別當權右中辨兼皇后宮亮藤原朝臣光朝花押○　　大從彈正少忠惟宗

右少辨藤原朝臣兼賴花押○

治部少輔藤原朝臣賴長花押○

〔志賀文書上〕讓與　相傳所領豐後國大野庄志賀村南方在家田畠等幷勳功賞事

一所泉名内大窪屋敷在田畠等

一所羽月屋敷在田畠等

一所朝倉名内吠迫屋敷在田畠等

一所津留屋敷在田畠等

一所定蓮房居屋敷付大竹屋敷田畠

一安岐鄕内菊善屋敷在田畠等

一筑前國三奈木庄内勳功地半分五郎兵衛入道給分

右件所領等者、所レ讓二與末子袈裟鶴丸一也、於二次第證文等一は、依レ爲二類驗一、所レ副二渡嫡子貞朝一也、公家關東御公事番役以下合戰事可レ付二惣領之手一、不レ可レ有二別儀一、蒙二勳功一之時者、當二配分一可レ令二知行一、不レ可レ背二嫡子之命一、

縱雖有可沙汰事、無左右不可及上訴、何度も可懇望也、於不背此儀者、觸事又捴領不可致違亂、雖載如此子細、嫡子又於不叙用者、可及上訴者也、然者相共に彌相忍、向後無相違、可令進退領掌、仍讓狀如件、

正安參年十二月廿日　　□彌阿法在判

〔集古文書五十讓狀〕嘉曆二年讓狀 尾張國中島郡妙興寺藏

任此狀、可令領掌之由、依仰下知、

嘉曆三年十二月廿日　　相摸守花押

讓渡 尾張國中島郡保々寺社領等內田畠屋敷等事

合

一所壹町玖段小　　朝宮保內藤三郎入道名

一所壹町伍段小　　同保內河原藤內名

一所壹町　　山口保內堤上田故新殿跡

右所々田畠等者、高階寔房爲舍弟之上、依有親子之儀、限永代所讓渡也、至子々孫々無相違可有知行者也、於領家年貢關東御公事等者、任捴領支配之旨、無懈怠可有其勤也、仍所讓渡之狀如件、

嘉曆貳年二月廿四日　　沙彌歸覺花押

〔香取神宮古文書纂三〕讓渡下總國香取郡金丸犬丸兩名內田畠屋敷等事

右田畠等者、先祖相傳私領也、仍帶代々御下文等、相傳知行無相違、而以彼名內田畠等、坪付注文貳通、別紙在之、二男實連限永代所讓與也、而爲存知調度文書案文等、道寂以自筆所書與也、相互任彼讓狀、不可有其煩、若嫡子實長子息有煩之時者、實連彼跡可令知行、又實連無男子者、實長子息可令領知、於女子者、田貳反壹期之程、嫡女一人可讓也、兩方相共不可有餘人絆、早任先例申給御外題、今而後相傳可

令知行領掌之状如件、

嘉暦貳年八月廿一日　沙彌道寂花押

〔朽木文書三〕讓與　女子松前

丹後國倉橋郷與保呂村内政所鹽名事

右當名一圓ニ所讓與松女也、一期之後者、可付子顯盛者也、仍讓状如件、

嘉暦三年六月十一日　散位宗度花押

〔攝津親秀讓状〕讓與

一惣領能直分

美濃國脇田郷、一色、三井、大幡、簗瀬、大島、土佐國田村庄、伊與國矢野保内八幡濱、備中國船尾郷、伊賀國若林御薗但下切尼公一期之間讓之　和泉國下條郷、上野國高山御厨領家職、武藏國重富名南北、加賀國倉月庄、但岩方村半分、北丘尼明丘一期之程可被知行之由、載別紙讓状、松寺村田内廿町方、女子伊呂一期之後者、阿古丸可知行之由載別紙讓状之間除之、同村十六町方内三分一、大隅五郎親秦讓與之間除之、近江國柏木御厨内木郷、

右所々者、爲能直惣領所讓與也、若無子而有早世事者、舍弟松王丸可知行之、委細文別紙注之、於訴訟未落居并讓漏地者、悉可爲惣領分、状如件、

暦應四年八月七日　掃部頭親秀判

一阿古丸分

上野國知須賀、羽繼、近江國柏木御厨内山三箇村、駿河國益頭庄但除焼津郷、加賀國倉月庄内松寺村廿町方、但女子伊呂一期之程可知行之

右所々者、所讓與阿古丸也、若無子而有早世事者、惣領能直可令知行之、委細口文別紙注之、仍如件、

暦應四年八月七日　　掃部頭親秀　判

一松王丸分

備中國隼島庄、武藏國小澤鄉、

右所々者、所讓與松王丸也、若無子而有早世事者、惣領能直可令知行之、委細□文別紙注之、仍狀如件、

暦應四年八月七日　　掃部頭親秀　判

一後家分

美濃國開發御厨、駿河國釜頭庄内燒津鄉、

右所々者、爲後家分所讓與也、一期之後者可讓與叶意子孫之中、狀如件、

暦應四年八月七日　　掃部頭親秀　判

一嫡女子幸王分

加賀國倉月庄内木越村、近江國柏木御厨内酒人鄉、

右所々者、女子幸王所讓與之狀如件、

暦應四年八月七日　　掃部頭親秀

一女子伊呂分

加賀國倉月庄内松寺廿町方

右所讓與女子伊呂也、一期之後者、阿古丸可知行之狀如件、

暦應四年八月七日　　掃部頭親秀

〔徵古文府一〕永犬一丸母滿子處分渡少財物事

合

田地伍枚　宇治郷内字東小島弘正寺領

田地百八十歩同郷内字東森河新開火打田

右件小財物等、隨有志所令處分也、相互無異論可令知行領掌、仍爲後代處分之狀如件、

貞和四年十一月十日　荒木田常安花押

〔結城小峯文書〕ひこ夜叉殿のゆづり狀

一石河内さわ井が郷

一よりこの内あゆ河の郷内上あゆ河、中あゆ河、

一たか野きた郷内大たは村、ふかわたゞぬまのさわ、

右此六ヶ所は、若實子出き候はゞ、かやうにわけゆづり申べく也、若實子もち候はずば、朝治が跡を一ゑんに、ひこ夜叉殿にゆづり進候べし、たゞし朝治ちぎやうの内に、上小ぬき村、たさきの村、いたくら山井内とつかの村、かた見に、ざい家二家これをば、朝治一期の後は、寺々あん〳〵へ寄進申べく候間、此五ヶ所はのぞき候所也、仍てゆづり狀如件、

永和三年霜月廿五日　朝治

〔大坂要用錄三諸證文〕讓り狀之事

一我等跡式之儀、居宅幷掛屋敷何ヶ所、勘定帳面銀高何程、幷商賣方之もの不殘惣領誰江(或者品々た書)讓り與申處實正也、然ル上者家業大切ニ相勤、我等死後猶々實體ニ仕、母誰江孝心ニ仕、兄弟睦敷永久相續可被致候、右讓り之儀ニ付、外より違亂申もの毛頭無之候、爲後日讓り狀仍而如件、

年號月　何屋誰

誰殿

〔大坂堺問答坤〕一跡式讓狀自筆無相違、印形等其外紛敷も無之候はゞ、加判人之有無ニ不拘、讓證

文通可申付候、乍去筋合等相振候はゞ、血筋之もの江可申付候、

此儀遺書之儀、當表にては年寄五人組之可致加判旨、先年觸書をも差出置有之候付、右加判無之遺書者取用不申候、依て裁許申渡候先例無之候、

〔徵古文府一〕永避渡今出戸授給內宇治鄉所在下田字稻月田地壹段事

右件戸田者、外祖父故昇蓮遺財內也、而自彼昇蓮之手令買得之後、令展傳領掌云々、爰件遺財者、雖有相傳知行之子細、依有難去之因緣、於彼壹段者、永所避渡僧衆詰也、自今以後、更不可有異論、仍爲後代避文之狀如件、

文永七年十一月廿六日　神祇權大副大中臣朝臣（花押）

〔香取神宮古文書纂四〕避渡條々

一實持實秋跡自作田并所務事

一夫雜役事

一諸神官訴訟散在地半分事、

一死亡逃亡跡事

一同行事職并良田町事

一地頭知行內所務者、任先例嚴密可令沙汰社家事、

右於國行事職者、避渡申社家者、向後不可成違亂煩候、仍避狀如件、

應安七年十月十四日　式部丞政氏在判

此避狀兩使封裏書銘了

右文書裏書朱書如此

關東奉行人安富大藏入道、山名兵庫大夫入道、應安七年裏封畢、

〔朽木文書一〕下　佐々木出羽守氏秀

可ㇾ令ㇾ早領ㇾ知近江國高島朽木庄内針畑ㇾ事

右任ㇾ舍弟五郎氏綱去月二日避狀ㇾ可ㇾ令ㇾ領ㇾ掌之狀如ㇾ件、

永和三年八月廿二日　花押

古事類苑

政治部六十五

下編

養子

鎌倉幕府及ビ室町幕府時代ニハ、養子ニ關スル制度十分ニ備ハラズ、サレド養子ハ同姓近親ヨリ爲スノ制ニシテ、已ムヲ得ザルノ事情アルニアラザレバ、他姓若シクハ他家ヨリ之ヲ迎フル事ナシ、而シテ女子ニ在リテハ、養子ヲ納レテ其家ヲ承ケシムル事ハ、法理ノ上ヨリハ、之ヲ禁ズベキナレドモ、鎌倉幕府ノ比ニハ、往々之ヲ聽セリ、足利幕府ノ季世ニ在リテハ、表面ニ養子ト稱シテ、其實ハ質子タルモノアリ、

德川幕府ノ時ニハ、大名幷ニ幕府家人ノ養子ニ關スル制度大ニ備ハリ、其養子ハ亦同姓近親ヨリ取ルヲ以テ法ト爲シ、其已ムヲ得ザルモノハ、他人ヲ養ヒタリ、而シテ家人ニ在リテハ、特ニ其身分家格ヲ選ベリ、タトヘバ陪臣浪人ノ子ヲ旗本家人ノ養子トセズ、或ハ御目見以上ノ家ニハ、以下ヨリ養子ヲ入レザル制ノ如キ類是ナリ、又部屋住ノ番衆幷ニ抱ノ者ノ如キ類ハ、養子ヲ爲スヲ得ザル等ノ事アリキ、且ツ大名家人ヲ論ゼズ、實子ナキモノ五十歲ヲ過グレバ養子ヲ爲スヲ得ズ、又假令五十歲以内ニテモ、豫メ養子ヲ爲サズシテ、急病ニ罹ル時ハ、俄ニ養子ヲ出願スルモ、之ヲ急養子ト稱シテ、許可セザル例ナルヲ以テ、若シ實子幷ニ養子ナキモノニシテ、一朝遠國出役等ノ命ヲ受クル時ハ、假養子ト稱シテ、一時ノ養子ヲ爲シテ出張スル等ノ事モアリ、或ハ實子尫弱ナレバ、已ムヲ得ズ養子ヲ爲シテ先祀ヲ存セ

シトスルモノモアリキ、而シテ嫡子ハ之ヲ他家ノ養子トスルヲ得ズト雖モ、分家ノ嫡子ハ、其本家ニ養子ヲ必要トスル場合ニハ、之ヲ本家ノ養子ト爲スハ、法例ノ聽ス所ナリキ、養子ヲ離緣スル事ハ、最モ之ヲ難シト爲シ、若シ實子ノ出生ニ由リテ、養子ヲ離緣シ、或ハ婿養子ヲ離緣シテ、其子ヲシテ祖父ノ家督ヲ相續セシムルガ如キハ嚴禁スル所ナリキ、既ニ離緣スレバ、養子ノ持參金ハ之ヲ實家ニ返付スル事、略、妻ノ離緣ニ同ジ、

〔新編追加政所〕一養子事、號進退者、不可及賣買、如本可爲養子也、

〔大內家壁書〕養子被改御法之事付長祿四年御法以次記之

諸人養子之事、養父存生之時、不達上聞仁者、於御當家爲先例之御定法、至養父沒後者、縱雖約之次第、自然雖令被露、不可立其養子也、病死之跡同前也、然間雖爲討死勤功之跡、以準據令斷絕畢、因茲被加御思惟之處、自然之儀者、猶爲御遠慮、先不被仰出是非也、爰於討死之跡事者、不可準常之篇、尤不便所被思召也、所詮於過去之儀者、不及致沙汰、至自今以後者、討死跡事者、以私儀雖令約諾、爲其支證明鏡者、可被立其養子被仰出者也、未及養子沙汰、至若年輩事者、其一家親類中撰器量、爲上意可被仰付也、此旨諸人爲存知、壁書如件、

明應四年乙卯八月日　沙彌奉正任
左衛門尉同武明

同長祿四年養子御法事

爲當方御家人之輩、以非御家人子、號養子條、太不可然、但有事子細、而於被御許者、非制限之旨、被定置、可被存知之由所被仰出也、仍執達如件、

長祿四年十一月廿五日　右衛門大夫判正安
主計允同武實

陶中務少輔殿弘房　內藤下野守　杉伯耆守殿重國
仁保加賀守殿盛安　問田掃部助殿弘綱　安藝國東西條御代官
飯田石見入道殿昌秀　朽網若狹守殿季綱　內藤駿河入道殿道國

右各一通宛

〔言玄家法上〕一他人養子之事、達奏者可申請遺跡印判、然而後父令死去者、縦雖不可實子不能叙用、但對繼母、爲不孝者、可悔返、次恩地之外、田畠資財雜具等之儀、可任亡父讓狀、

〔禁裏向御法式〕禁中方御條目十七箇條〇中略

一養子者連綿、但可被用同姓、女縁者家督相續、古今一切無之事、〇中略

慶長二十乙卯年七月　照實　在判　二條關白
秀忠　在判
家康　在判

〔享保集成絲綸錄十八〕寛永十九午年十二月

一養子跡目之儀、當年迄無相違被仰付候分、自今以後者、養父累年無恙御奉公相勤、其上養子之先祖等迄、御吟味可被仰付之、無筋目養子等於有之者、向後養子諸職相續被仰付間敷儀也、若又養父日來於不抽御奉公者、養子跡職一圓ニ者被下間敷由被仰出之、右之旨番頭中へ老中傳上意之由、

〔憲教類典三ノ十三家督養子〕寛文八戊申年八月廿八日

現在養子願之儀、只今迄者御定之外之者、養子ニ仕度と被申候仁有之候得者、其旨書付、直ニ養子願之儀申上候得共、向後者其定之外之養子願仕候はゝ、親類縁者御定之內養子可仕者無御座候段者、願之儀申上得御差圖を、其已後養子ニ仕度仁名書上候樣ニと、土井能登守殿被仰渡候、以上、

寛文八申年八月廿八日

〔享保集成絲綸錄十八〕正德五未年十一月

近年以來、養子之事、緣組之事、又者御奉公被召出候事ニ就而、親類續之儀申上に至而は、以之外ニ筋目違候事共有之候故、前御代御條目ニ此事を被載候といへども、其後も度々に及び、相違之事共有之、不可然候、自今以後支配有之面々、能々念を入れ可被遂吟味事ニ候、此上猶又如此之事出來候においては、事之體ニより、支配頭之面々、越度の御沙汰可有之候間、其旨可被相心得候、以上、

十一月

〔京都御役所向大概覺書七〕吉宗様御代始被仰出候武家諸法度○中略

一養子者、同姓相應之者を撰び、若無之においては、由緒を正し、存生之内可致言上、五十以上十七歲以下之輩、及末期雖致養子、吟味之上可立之、縱雖實子、筋目違たる儀不可立事、○中略

享保二年三月十一日

〔憲教類典三ノ十三家督養子〕享保三戊戌年八月廿三日

部屋住居之御番衆養子之儀、向後不被仰付候間、部屋住居へ養子願差出申間敷由、大久保佐渡守殿被仰渡候、

〔享保集成絲綸錄十八〕享保四亥年三月

覺

一養子願之儀、續無之候共、元來一家ニ而、當時取持も致候程之内ニ而、相應之者を可相願筈ニ候間、向後者、養子願之時、親類書差出候節、右一家之內、存寄之者無之においては、其品書加可申事、

一他人を聟養子ニ致候は、同姓之內可致養子ニ、相應之者無之時之儀ニ候間、同姓を差置、他人を聟養子ニ願申間敷候、然共同姓之內養子ニ可仕筈之者、病氣か又者何とか存寄有之において

ば、其譯を立、他人を聟養子ニ願候は格別之事、

一忽而養子之儀、同姓相應之者を撰び、若無之ニおいては、由緒を正し願候樣にとの事、御條目にも在之候間、右二ヶ條之趣彌相心得可申事、

三月〇中略

享保十七子年三月

部屋住ニ而罷在候者は、養子願之義差扣來候得共、向後者、部屋住之者も養子可仕、年比迄實子出生無之、筋目相應之者有之歟、又者娘等有之、聟養子願申儀可爲勝手次第候、勿論願之儀者親共ゟ可相願候、

三月

右之通可被相觸候

享保十八丑年四月

他人養子ニ仕候儀、陪臣浪人之子御直參ニ親類有之候共、御直參筋之者ニ而無之候はゞ難叶候、

右之通可被通置候

四月〇中略

享保十八癸丑年十月七日

續を以手前江養子ニ願候事

一陪臣浪人ニ而も、妻之從弟違、又從弟等者、養子願取上候事、

右之趣、頭支配有之面々江可有通達候、

丑十月〇中略

〔諸例集一〕寛政十三酉年五月八日、戸田采女正殿江尾島定右衛門を以、口上ニ而相伺候儀、井上美

濃守差出し袋廻し、

備前守殿、五月十八日御直上ル、同廿七日承附候様、尾島定右衛門を以、御下承附致し、翌廿八日、孫右衛門を親、定右衛門を以返上、

書面養子差遣候儀、其事届候節可間合、兼而挨拶ニ者難及段、挨拶可仕旨被仰渡、承知仕候、

五月廿七日　松平田宮

松平伊豫守家來本多内藏助二三男、幷厄介を内藏助ゟ續由緒等無之御直參之内江養子ニ差遣候儀、内藏助者家柄之者ニ茂御座候ニ付苦カル間敷哉、問合候向御座候、右者同姓又者續等有之候はゞ、不苦筋ニ可有之候得共、他人養子ニ差遣候儀者、家柄ニ而も、陪臣之儀ニ御座候間、不相成筋ニ可有之段、及挨拶可申奉存候、依之奉伺候、以上、

五月　松平田宮

〔享保集成絲綸錄十八〕元文三午年二月

御廊下番出之者之子を養子ニ願候節、親類ニ候はゞ可相叶候、他人ニ候はゞ相叶申間敷事、

右大目付松平右近將監御目付へ西尾隱岐守渡之

但御目見以上以下共ニ、右之通可相心得旨達之、

〔寶暦集成絲綸錄十六〕寶暦五亥年十一月

御目見以下之者、養子願之儀、常憲院様〇徳川綱吉御代以來、被召出候由緒之者、幷古三丸竹橋御殿、神田御殿、櫻田御殿にて被召出候由緒之者は、只今迄養子相濟不申候、

一有德院様〇徳川吉宗御代、紀州より御供仕候者之内、南龍院殿〇徳川頼宣御代被召出候者は、養子願相濟來り候、

右之通取扱來候共、向後者南龍院殿御代被召出候由緒之者たり共、御代近被召出候由緒之者、幷

古三丸竹橋御殿、神田御殿、櫻田御殿にて被召出候由緒之者、同樣養子被仰付間敷候、

十一月〇中略

寶暦八寅年二月

他人養子ニ仕候儀、陪臣浪人之子御直參ニ親類有之候共、願候當人之親類にて無之者難叶候段、享保十八丑年相達候、右願候當人之親類と有之は、又從弟迄之事候旨、元文元辰年相達候、右之通之續ニ候共、向後實母方之續にては、陪臣浪人者養子願難成候、

右之通去丑年相達候、此實母方と有之者、元妻にて、當時實母と唱候者之事に候、父繼組相願婚儀相整候、實母に候得者、其續之陪臣浪人者養子相願不苦候、父妻を妻ニ直し候て、母ニ相成候者は、養實之無差別、其母之續にて、陪臣浪人者養子願難成候、

右之趣、向々江寄々可被達置候、

二月

寶暦八寅年十一月

御目見以上之者江只今迄者、御目見以下よりも養子相願候得共、向後御目見以下よりは、親類之外、他人養子は難成候、

但右親類と有之は、又從弟迄之事に候、

右之趣、組支配有之面々江寄々可被相達候、

十一月

大目付江

〔天保集成絲綸錄七十九〕寛政三亥年二月

御目見以上江新規被召出候者、養子之儀忌懸候者、幷聟養子之外者不相調趣等、元文元辰年相達

置候得共、向後御目見以上江新規ニ被召出候者、他人養子ニ而茂可被仰付事、

但御目見以下養子不相濟由緒之者共ハ、御目見以上江御取立被仰付候節茂、右同様之事、

御目見以下ニ而茂、向後御譜代場江被召出候者、幷是迄養子不相濟由緒之者共茂、御譜代場江一旦役替被仰付候はゝ、養子願可相濟事、〇中略

亥二月〇中略

寛政四子年六月

大目付江

軽き者養子之儀、由緒之品ニより被仰付來候處、元來延寶以前御四代之内ニ被召抱候ものニ而、二半場と唱候向江役替仕、家督小普請入等も相濟候者は、右御代古く被召抱之故を以、向後養子も可被仰付候間、軽き者共支配有之向々江、寄々可被達置候、

六月

寛政五丑年二月

大目付江

惣而養子之儀者、大切成事ニ而候處、筋目之糺も不行屆、養子ニ取組、又者筋なきもの、所生を隱し候而、取拵候養子之願等いたし候者は、前々ゟ嚴重に御仕置被仰付、一類迄も御咎に有之儀ニ候、前々他人養子或續き有之ものニ而も、近來被召抱等之ものは、養子願難成分も、御譜代場江も被仰付候上は、養子之儀も可被仰付趣ニ被仰出候ニ付而者、御譜代之面々、軽キものニ至る迄、右養子之儀、厚く相心得候様、其向々江寄々可被相達候、

二月

〔國制記〕四 寛政度御教示之御觸〇中略

一惣而養子を致、或者婦妻を迎候儀は、不容易事候、養子たる者、先祖父母に孝養を盡し、家祿を相續いたし候者ニ候得共、篤實正路成ものを吟味致、婦妻之儀は、家內之事を取治メ、子孫相續之ためニ候得者、貞節を相守、父母夫に能事、女之仕業ニ達し候ものを吟味すべし、養子幷婦女とも、一度迎候而は、少々之事は相ゆるし、生涯睦敷可相交事ニ候、若難去離別ニ及候はゞ、大切成他人之子ニ汚名耻辱をあたへ候理ニ當り、大底成事ニ而者、差戾間敷事ニ而候、〇中略養子之儀は勿論、大切ニ心を用ひ、吟味すべき事ニ候間、人之父母たる者は、克々勤辨いたし、心得違無之樣、若輩之者江深切ニ敎導すべき事に候、〇中略

寛政十戊年四月

〔諸例集 五〕神尾備中守答

當主四拾歲ゟ四拾九歲迄ニ、男子無御座候者、其趣を以養子願仕候儀ニ御座候哉、

書面之通、可被心得候、

一長病ニ候得者、年齡ニ不拘、判取御見屆願仕、願書差出候心得ニ而可然御座候哉、

書面之通、可被心得候、尤年齡十七歲以下者、養子難相成筋ニ付、判取見屆不申候、

一同斷願濟之上、病氣快相成候はゞ、跡之年數多少ニ不拘、出勤仕不苦儀ニ御座候哉、

書面之通者、不苦義と存候、

右廉々奉伺候、以上、

天保十五辰年三月　毛利讚岐守家來　垣田八左衛門

右問合之趣、三拾歲以下ニ而者、病身ニ而末々出生無覺束歟、何れ之願之廉無之候而者難相成、三拾壹歲より者、一ト通リ之願ニ而相濟候由、養子掛り御右筆江問合候書留手留之內より見出候得共、右等之儀、餘り巨細ニ不答方可然存候間、附札之通取調候、

〔的例問答〕一丈夫屆間もなく養子願之事

實方ニ而丈夫御屆申上候もの、無間も養子もらひ度旨願候而も、苦ケル間敷哉、此段御問合申候、

六月

答、丈夫屆致候時ゟ、六月程相立不申内者、難相成義と存候、

〔諸例集八〕安政二卯年十一月

堀伊豆守答〇中略

一重罪之者之二三男幷輕罪之者之惣領二三男を、同志ゟ養子ニ願出候儀不苦儀ニ御座候哉、

書面之通者、當人江御咎無之候得者、主人存寄次第之儀与存候、

十一月

〔嘉永明治年間錄十三〕元治元年五月廿一日、御抱ヨリ御譜代ニ轉ズル者ノ養子規則ヲ達ス、

河内守殿渡書付　御目見以下養子の儀、向後御譜代場へ被召出候者並是迄不相濟由緒の者共も、御譜代場へ一旦役替被仰付候はゞ、養子可相濟旨寛政三亥年相達候以來、御譜代場相勤候者は、養子相濟來候處、去々戌閏八月、御抱の者御譜代場へ役替被仰付候共、改て御譜代の申渡無之内は、身分御抱と可心得旨相觸候に付ては、去々戌八月以後御譜代場へ致轉役候者、改て御譜代の申渡無之内は、養子願難相成候、尤御目見以上へ御取立相成候者は、養子可被仰付候、但し去々戌閏八月相觸候以前、御譜代場へ致轉役候者は、是迄の通可被心得候、

〔民事慣例類集養子〕大概婚姻ノ手續ニ同ジ、幼者ヲ養子ニ貰請ル時ハ、其養父ヨリ名主ヘ申出、人別帳ニ加ルコトナリ、聟養子ハ婚禮ノ翌日、養父又ハ親戚ノモノ差添ヘ、名主長百姓ヘ名刺ヲ出シ、其他知己ノ各戸ヘ目見トシテ、回謁スルヲ例トス、別ニ送籍ノ事ナシ、甲斐國山梨郡〇中略年齡五十歲以上ノ者ニ非レバ、養子ノ願ヲ許サヾルヲ例トス、然レドモ病身或ハ事故アル者

養子願書

ハ、其事情ヲ出願シテ、養子スルコトヲ得ルナリ、信濃國水内郡士族例

養子内約取結ベバ、組頭ヘ口上ヲ以テ屆出ヅ、組頭之ヲ撿斷ヘ屆ケ、雙方撿斷ニテ送入籍ヲ取計ヒ、毎年二月十日ヲ限界トシ、現員取調宗門奉行ヘ納ムルコトナリ、羽前國置賜郡〇中略

家女ヨリ年齡少キモノヲ婿養子ト爲スコト、他ノ長男ヲ養子ニ貰請ルコト、他國ノ者ヲ養子ニ貰請ケ、或ハ遣ハスコトヲ禁ズ、寺院互ニ取組スルハ、此限ニ非ズ雙方ノ父母親戚示談ノ上引移ル後、凡十ケ月以内ニ、村役人ヘ屆ケ、入送籍ノ次第ハ、概子婚姻ノ例ニ準ズ、加賀國河北郡〇中略

養子タル者、家督ヲ讓受ル後ハ、一家ノ事務ヲ經紀シ、動產不動產トモ質入賣買等ノ自由ヲ得ルト雖モ、父母存スルドキハ、指揮ヲ受ケ處置スルヲ例トス、養父若シ實子ヲ擧ル時ハ、其家產ヲ分配シ、分家スルコトモアリ、其權利義務實子ト異ルコトナシ、甲斐國山梨郡

〔諸家文書纂四〕養子願

上杉彈正大弼二男於在所出生
上杉春千代巳四歲

私儀、當巳四拾九歲罷成候、男子無御座候ニ付、右春千代養子仕度奉存候、相成儀御座候ば、被仰付被下候樣奉願候、以上、

元祿二己巳年八月廿九日

吉良上野介

大久保加賀守殿

阿部豐後守殿

戸田山城守殿

土屋相摸守殿

〔公用雜纂四〕五拾歲前繼願

大御番森川紀伊守組
佐橋三左衛門子歲四十九

右三左衛門儀、來丑年五拾歳罷成候處、養子佐橋榮之丞儀、去月病死仕、外男子無御座候ニ付、追而相應之者養子可奉願候得共、此段入御聽置申候、以上、

子〇文化元年 十二月廿二日　森川紀伊守

大御番水野遠江守組與頭　三輪十左衛門 子歳四十九

右十左衛門儀、來丑年五拾歳相成候處、未男子無御座候ニ付、追而相應之者、養子可奉願候得共、此段入御聽置申候、以上、

子十二月廿七日　水野遠江守

養子屆書

〔小普請世話取扱書抜〕家來之次男養子ニ遣

私家來之次男養子ニ差遣候御屆　細田猪之助

覺

私家來佐藤宇内次男　佐藤鉄藏 父手前罷在候

右鉄藏儀、此度御普請役田中廣三郎男子無御座候ニ付、續者無御座候得共引取養置、追て娘と婚姻相整候様仕度旨申聞候間、差遣申度段、右佐藤宇内願出候ニ付、取調候處、相違も無御座候間奉屆申候、依之此段御屆申上候、以上、

丑〇嘉永六年 四月廿一日　細田猪之助

養子證文

〔季連宿禰記〕元祿十二年十二月三日丁卯、今晝自有馬式部綏尚賜紙面、予又進一紙了、是民部予依舅甥之儀、令養子、可相續當家一流間事也、其一紙注左、

契約状

愚息民部 童名千代丸、當時呼名民部、舅甥の由緒によつて、壬生官務養子として、彼家相續せしむべき間の事、

一親族養育の事、無寒心の樣に秘計せしむべし、萬一相續之事、雖不及御沙汰、遺跡相續之仁體たる上は、互疎意之義を存べからざる事、
一文書記錄等の事、辭職の後讓與せらるべし、養父に告ずして、漫に書寫往反有まじき事、
一辭職之後、當知行高百石、（嵯峨村五十石、郡村五十石、）此內壹ヶ所養父母一期の中、隱居の料として可相分事、
一養父母敎命之旨、雖一事違背すべからず、但僻事歷然たらば所存を申べき事、
一相續之儀につきて、養子血脈（○脈恐脈誤）の事、公界より被尋問事あらば、廣橋家樞機の趣、彼家と相共に其斷を申べき事、

以前條々堅違變すべからず、就中朝廷拜趨局中雜務以下の事、緩怠有べからざるのよし、所令承知也、仍契約狀如件、

元祿十二年十二月三日　　　　有馬式部綏貞（此二字加署）

壬生官務殿

契約狀之事

御子息民部（廣橋大納言綏光卿御孫、故中納言殿貞光卿御舍兄之實子、）御事、就聟舅之由緒、公家江願申、以養子之儀、當家一流可令相續、退官辭職之後、一物已上可爲民部進止之上者、他妨不可有之、此後實子出生候共、可爲末子之間、養父母幷親族之輩、養育無愁鬱之樣、可令秘計給、仍契約狀如件、

元祿十二年十二月三日　　　　左大史判

有馬式部殿進之

〔大坂要用錄三諸證文〕養子證文之事

一我々實子或者娘何と申當何ノ何歲ニ相成候もの、此度何屋誰殿仲人ニ而、（爲惣代銀何程井別紙目錄之通、或者持參之品何々と此所江書加へ、）其元江養子ニ遣シ申候處實正也、然ル上者、以來其元御心任ニ御養育可被下候、

何樣之儀有之候共差障り等不及申、尤誰成人之上實親抔と申勝手ヶ間敷儀決而致申間敷候、勿論相互ニ無心合力等一切申間敷候、爲後日之養子證文仍而如件、

年號月

父　何屋誰

母　誰

仲人　何屋誰

何屋誰殿

養子貰人ゟ返り一札

一札

一右實子何と申當何ノ何歳ニ相成候仁、此度何屋誰殿仲人ニ而、我々養子ニ貰受申候處、或者持參之品何々請取申所實正也、然ル上者、我々實子出生仕候共、嫡子ニ相立、末々粗略無之樣可致養育候、勿論野良其外かしぎ奉公、又者賣女ヶ間敷奉公等決而爲致申間敷候、若疑敷奉公等爲致候儀相知れ候はゞ、早速致離縁差戻可申候、爲後日之仍而如件、

年號月

養父　何屋誰

養母　同　誰

仲人　何屋誰

何屋誰殿

不通養子證文之事

一我等實子何と申當何ノ何歳ニ相成候者、此度何屋誰殿仲人を以、其元ヘ一生不通之養子ニ遣し申候處實正也、（或ハ爲養育料銀何程、幷何々相添差出申候）然ル上者、以來其元御心任ニ御養育可被下候、尤如何樣之儀有之候共、通路仕候儀者不及申、成人之上實親抔と申、我儘勝手ヶ間敷儀、幷無心合力等一切申間敷候、爲後日仍而

如件、

年號月　　　　實親　何屋誰
　　　　　　　仲人　何屋誰

何屋誰殿

〔御當家令條三十六〕服忌令○中略

遺跡相續、或者分地配當之養子者、實父母之如し、同姓に而も、異姓ニても、養子之親類不レ殘實のごとし、相互ニ服忌可レ受レ之、實方之父母者、五十日、十三月之服忌可レ受レ之、伯叔父姑者、半減之服忌可レ受レ之、此外實方之親類相互ニ服忌無レ之、遺跡相續せず、或者分地配當せざる養子者、同姓ニ而も異姓ニ而も、養父母者定式之通服忌可レ受レ之、此外實の方の親類、相互に服忌無レ之、○中略

貞享三年丙寅四月廿三日○中略

追加○中略

一遺跡不二相續一、或分地配當せざる養子、養方之兄弟姉妹、他家江養はるゝ者ニは、相互ニ服忌無レ之、○中略

〔公事取扱〕跡式養子離別後住幷引取人

元祿六年十二月廿一日

一父養子いたし、跡式極においては、實子たりといへ共、跡不レ續レ之、○中略

一致二出家一、養父死後立歸り候養子は、跡式相續不レ成、○中略

一夫死後、後家江養子當り惡敷といへども、不埒成ニおゐては、後家心任せ外ニ可レ讓筋無レ之

〔大坂要用錄三諸證文〕養子家督讓り請一札

一札

一此度私儀、當家江入家仕候處、御親類中一統御承知之上、家督相續名前ニ御附被下候段、忝奉存候、然ル上者、家業大切ニ相勤可申候、

一御公儀樣々被仰出候御法度之趣堅相守、不實之思入商内等決而致間敷候、二季店卸勘定各方御立會之上掛御目申候、尤不行跡之儀有之候歟、各方御心ニ相叶不申候而、名前退キ候樣被申付候はゞ、其節一言之申分無之、早速名前相退キ可申候、何事ニよらず、御親類中熟談之上、御差圖ニ隨ひ、我意申間敷候、都而家風ニ不相背、大切ニ相續可仕候、爲後日一札仍而如件、

年號月　　家督讓り請主誰事名改　何屋誰

證人　何屋誰

何屋誰殿

御親類中

〔諸例類纂 四〕奉願候覺

私儀、先祖以來代々大國被成御預、官位も結構被仰付、難有仕合奉存候、然處、當職疱瘡相煩候以後、兎角相勝不申候ニ付、色々療治仕候得共、只今ニ至、甚差重、本服可仕體無御座候、私儀、當戌三拾九歳罷成申候、未男子無御座ニ付、若死去仕候はゞ、同姓中務少輔、當戌二十三歳ニ罷成申候、血縁之儀ニ付、此者養子被仰付、家督相續被仰付被下置候樣奉願上候、且亦中務少輔江も、內分三萬石、同人弟熊之丞、當戌十七歳ニ罷成候間、此者江唯今之通被仰付被下候樣奉願候、此段何分可然樣ニ奉願候、已上、

文政九戌年二月九日　　手判ニ付印形計相用　細川越中守

青山下野守殿

水野出羽守殿

大久保加賀守殿
松平和泉守殿

結番

一父　細川左京大夫
一妻　一ツ橋儀同殿　息女
一叔母　久我前內府方　簾中
一同　一條前關白殿　息
一甥　一條中納言中將殿
一同女　久我前內府方　息
一從弟　久我少將
一實方父　細川中務少輔大叔父　細川樂翼
一同叔母　難波侍從祖母　横軒院
一同甥　細川中務少輔
一同　細川熊之丞

以上

〔諸例集五〕天保十四卯年十一月

神尾備中守答

拙者儀、養父死去後、未家督不被仰付候處、追而忌明之上、家督無相違被下置候而、若當年內日合も無之儀ニ付、家督御禮不申候節は、右御禮以前ニ付、元日登城之儀、如何相心得可申哉、此段兼而心得罷在度、及御問合候以上、

讓遺産於養子

十一月　　高家 大澤右膳

書面家督御禮以前ニ而も、年始登城幷御太刀馬代被致献上不苦儀與存候、

〔集古文書 五十 讓狀〕大友貞親讓狀 肥後家臣志賀太郎助藏

ゆづりわたす

せんくま丸がところ

ぶんごのくに、なはかりがうのうかりにくだはんぶん、大くまのむら付くぼたのむら事、やうしとして
ゆづりあたふるところ也、關東御くうじいげいこくけいごの事、嫡家大友まご太郎さだむねが
めいにまたがいて、きんしすべきむやう如件、

延慶三年六月五日　　貞親 花押 中略 ○

〔集古文書 五十 讓狀〕嘉曆二年讓狀 尾張國中島郡妙興寺藏

任此狀可令領掌之由、依仰下知如件、

嘉曆四年五月廿日　　相摸守 花押

讓渡 尾張國佐斗原郷井散在田畠等事

合

一佐斗原郷四町五段
一迄秀七段
一重善壹町參段
一忠宗肆段
一江上參段

右所々者、宗順重代相傳所領也、而一宮中務丞親眞、依爲養子、限永代所讓渡也、除地頭方公事課役

同姓養子
異姓養子

等、至于子々孫々、無他妨可令知行之狀如件、

嘉暦二年十二月廿五日

散位宗顯花押

〔常陸國總社文書〕僧快智讓狀

養子德房田事

合田貳段者

右件田者、三郎丸名上車田壹町內下堺ニよせて貳段、快智重代相傳名田也、しかるをすぎ大夫殿しそくとくばうやうしのそくたるによて、永代をかぎてゆづりわたすところ實正也、たゞし快智がでしごとかうしていらんさまたげ候はゞ、ふしてきたいとして大掾殿□所殿申、同府中庄廰供僧ゐ披露申て、府中をつい出せらるべく候、仍後日ためにゆづり狀如件、

元德貳年大才かのへむま十月廿三日

快智花押

〔獻可錄中〕御國用之義ニ付養子之儀、最前も申上候處ニ、先日又愚見之趣彌御尋被遊候ニ付、重而申上候、○中略

養子之儀も、元來他人の子を養候て家をつがせ申義は、聖人の法に無之義に御座候、家を相續仕候義は、先祖の祭絕候義を難義に存候而、同姓の子を養子に仕候、同姓にて候へば、たとひ其續は遠く候ても、先祖より見申時は血脈一つ成故に而御座候、たとへば接木を仕候とも、同じ種類なればつき申道理に御座候、然る所に、他人の子を養相續仕候は、桃に栗を接申意にて御座候、木の血脈通じ不申候故つき不申候、夫を無理に接置申樣成物ニて御座候、何の益も無之事に奉存候、既に實子無之、同姓にも養申者無之候得者、是天命と申者ニ御座候、夫を人作ニ而無理に相續致させ申義は有間敷事に奉存候、其上古來聖賢の法に、他人を養申義はすきと無之候、同姓ニ無之候へば、家をたやし申事に御座候、然ば上より被仰付候も道理次第に被遊筈ニ御座候、御當代に

罷成候て、新座之御家人共、養子は被仰付間敷候事何も存罷在候、其故兄弟甥などを養子に奉願度と奉存候者共も、先危み候て見合罷在、安堵不仕候體に御座候、然ル處、從弟迄は可被仰付と有之候はゞ、何も安堵可仕候、扨又養子に可仕者無之、跡目斷絶仕候者をば、其妻子飢寒ニ及不申程御扶持を被下候樣に被仰出候はゞ、何れも辱事奉存候て可有之と奉存候、

一右養子の御作法は、勿論御譜代新座一統に被仰出可然樣ニ奉存候、去共御譜代は新座とは差別も有之義に候間、常憲院樣(綱吉○德川)以來被召出候者計り、先可被仰出候哉、其段は上の思召次第ニ奉存候、たとひ御譜代の者は格別被仰付候共、是以養子は慥成由緒有之候者に限り候て、他人の子を以養子に仕候義は、堅御停止被遊可然奉存候、又御譜代新參共に一統に從兄弟迄と申樣に被仰出候ても、一萬石以上の者は、家も重く、跡目斷絶仕候ては、家來も大勢難儀仕候事にも候間、是は一等結構に被仰付候て、たとひ從兄弟の外にても、同姓の內筋目さへ慥に候はゞ、順次第ニ可被仰付義に奉存候、一萬石以上位の御直參、又は家來の內ニ、同姓無之候と申義は無之候間、斷絶仕候事は有之間敷と奉存候、夫共に同姓の內に無之候はゞ、是を斷絶仕筈ニ奉存候、加樣之品も一概には難申上候、其段は御僉議被遊被仰出候樣に奉存候、右御加增跡目養子の格、早く御定不被遊候ては、難義成品も可有御座奉存候、此間彌料簡仕候處、私所存は右之外無御座候、已上、

正月十七日　　室新助

有馬兵庫頭樣

加納遠江守樣

〔政談四〕養子ト云コト、他苗ノ養子婿養子ハ古無之コト也、北條家ノ時、所領ヲ女子ニ讓ルコトヲ免サレタルヨリ、他苗ニテ相續スルコト起レリ、果ハ賴朝卿ノ後ヲ藤原氏ニテ嗣セ、天下ハ北條ノ手ニ入ル謀計ノ所爲ト可云、其後戰國ノ時分、人ノ國ヲ可取計策ニ、他家エ我子ヲ遣シ、亡家ノ

臣下ヲ懐ケンガ為ニ、其養子ト號シ、他苗ヲ名乗スル類有ヨリシテ、世ノ風俗トナリ、他名養子、婿養子ヲユルサデ不叶コトニ成タリ、古道ニ違フタルコトナレバ、制禁可有コト也、是ヨリシテ筋モ無者、金ニテ人ノ跡ヲ買ヒ、町人小普請、手代座頭ノ子ノ類、御旗本ニ混ズル類、其數ヲ知ラズ、先祖ノ奉公ニヨリテ賜リタル知行ヲ、外ノ者ニ遣サル可キ様ナシ婿養子ニ成ト云コト、元來男ドシノ所存アラン者ノスベキコトニ非ズ、武家ノ妻ニ法外ノコト有モ、婿養子ノ家ニアルコト也、但シ上ノ御取立ニテ立身シタルモノ、子無ク、同姓ノ親類モ無キニハ、先祖ニ對スル筋ニモ非ザレバ上ノ思召ニテ他名ヲ養子ニ下サルヽコトモ苦カル間敷也、其時ハ古例ニ任セ、苗字計養父ノ苗字ヲ名乘セ、姓ハ其者ノ本姓タルベシ總ジテ養苗ノ相續ヲ免サヌコトハ、聖人ノ法ニテ、深意アルコト也、國家ノ治ニ付テ、此ノ子細アルコト筆記シ難シ、

〔政談四〕奉公人ノ年ヲ偽ルコト、是亦定法ノ様ニ成テ、奉行御役人モ不怪、尤ノコトノ様ニ覺テ居ルコト有間敷コト也、御奉公ニ出ル最初ニ、先一番ニ偽リヲサスルコト、如何成コトゾヤ、是ハ實子無時ハ、必養子ニテ跡ヲ繼スルコトト立テ、夫ヨリ十七以下ニテハ、養子ナラヌト云法有ヨリ起レリ、迹ヲ可建家ナラバ、伯父ニ甥ノ跡ヲ嗣セテモ苦シカルマジ、其子細ハ、先祖ノ勳忠ニヨリテ、其家ヲ斷絶セヌ道理ナル故、其先祖ノ為ニ、子孫ナラバ、其死タル人ノ養子ニセズトモ跡ハ立ベキコト也、其死タル人ニ、勳功ニテモ有テ、跡ヲ立ベキ筋ナラバ、伯父ハ養子ニナラネバ立難也、當時十四五歳ニナル者ノ、未小普請ニテ御奉公モセヌ内ニ死タルガ、兼テ年ヲイツハリテ、十七歳ニ成タルハ、其人ノ伯父ノ有ヲバ指置、從弟違抔ノ二三歳ナルヲ、他名ヲモ構ズ、其年モ亦五六歳程ヅヽノ過ニ偽テ、養子ヲ願バ、願ノ通仰付ラルヽコト也、然レバ其先祖ノ御奉公故ニ迹ヲ立下サルヽニテハ無テ、其小普請ニテ、未ダ御奉公モセヌ十四五歳ニナル者ノ跡目ヲ立玉フヤウ成者ニテ、甚筋違也、是法ノ立様惡キ故、跡目ヲ立ラルヽ、本意ヲ忘レテ、例ニ拘ル故也、大名ハ家督

相續トテ、年ニモ不拘例ナレドモ、旗本支配スル輩、此例ヲ引ヌハ、弘ク例ヲモ考ヘズ、只我扱ヒ習タル仕癖計ニテ申立レバ、何ノ詮議モナキコト、是又當時ハ何モ彼モ願ト云コトハヤル故也、且又次男三男ヲ他苗ニテモ養子ニ遣度ト、人ニ望ヲ掛テ、其支配ノ頭ニ賴ム故、賴レタル人モダシ難クテ斯ノ如ク仕爲モ可有、是等ハ願ニ構ハズ、其支配同苗ノ親類ハ無カト吟味シテ可申立コト也、必竟文盲ナレバ、同苗ニテモ、他苗ニテモ、跡サヘ立バ同ジ事也ト心得ル故ノ事可成、

〔日本養子說〕たとへば、唐土の孔子を日本にて祭るは淫祀なれども、學脈を祭れば感ずるの理あり、況んや日本の人、其家をつぎ、其祿をうけ、恩澤身に潤ひ、其家の爲に孝心を盡さば、祭祀感格疑ひなし、然れども恩を忘れ義をわすれ、金銀を以て人の祿を買取たる如きは養ても益なし、養子たる者、恩を感じ義を重じ、其姓を大切にせば、實子に均し、養子をするものも、人をえらばず、金銀を貪り、他姓の人に祿を讓らば、賣物にしたるも同然にして、相續の道理なし、然れば養子たる者、養父へ不孝にして、家督相續する所の義を忘れ、恩を忘れ、養父へ睦しからぬは、天道に背き、神慮にたがふ、愼しまざるべからざるなり、政をする人も、臣下の筋目功業ある者に、同姓の者相續すべきもののなきとき、他姓の養子を許さずば不仁の政なり、然れば氏族辨證の說の樣に、一偏に同姓の外養ても益に立ずといふは非說なり、勿論同姓の近きをさし置き、遠き他姓を養ふは非禮なり、異國も禮記などに、爲人後者爲其私親降一等といふことあり、是養子養父といふ名は見えねども、人の家督をとりたるものは、吾が親類へは一等づゝ服もさげるといふ事なれば、天地自然養子のなくて叶はぬ道理もしれたり、さて世俗堯舜の事を養子といふは誤りなり、始終ともに堯は唐堯と云、舜は虞舜と云て、代の名もかはり、氏も別々なり、堯の血脈は丹朱がつぎ舜の血脈は商均が繼たるなり、舜の次禹につたへたるも同前なり、又古るき書に猶子とあるを養子といふも誤なり、禮記の本文より出て、兄弟の子は猶子といふ、かう云事なれば、猶子は甥のことな

り、諸書に誰を猶子とすとあれば、甥分にしたるといふ事なり、又同姓を娶らぬは周の世の法なり、周の世以前此禮なし、我國には本より同姓をきらはず、然れども上古のやうに、姉妹姨とも娶れば別なく禽獸に似むとて立たる法なり、西土も周の代此風ありたる故に、此法立たるなり、續きの遠き同姓はもとより其嫌なし、西土の風を以て概論すべからず、

享保壬寅歲十月日　光海翁○跡部良顯識

〔玉勝間四〕やしなひ子

あだし氏の人の子を子にして、家つがしむる事の、今の世のごとくなることは、皇國にも、もろこしの國などにも、いにしへはをさ〳〵なき事なりき、されば儒者などは、これをあるまじき事にして、大かた子といふものゝなきは、そのよつぎを天のたち給ふにて、せむかたなければ、さてやむべきに、よしなき人の子をとりてつがしむるは、すぢことなれば、いたづらわざにて、中々に天にもそむくひがことぞなどもいふめるは、いとかたおち也、やむことえずば、たとひそのすぢにはあらぬにても、つがしめて、氏門をたゝず、祖のはかどころをもあらさず、祭もたえざらんぞ、ひたぶるにたえはてむよりは、はるかにまさりてはあるべき、古は世中にさるならひのなかりつればこそあれ、今の世のごとくなりせば、周公孔子も、それあしとはいひたらじをや、然るを又あるしゆしやのいひけらくは、異姓の養子は祖を祭れども、そのまつりうくることなし、うみの子のまつりを祖のうくることはそのすぢなればこそあれ、すぢならぬものゝまつらんには、そのみたまの、うけに來ますべきよしなしともいふは、いと心得ぬこと也、世には人に深きうらみなどをのこしてなくなりたるものゝたましひは、其人に來よりつきて、たゝりをもなすにあらずや、さるは其人にはなにのすぢもあらざれども、たゞ一ふし思ひしめたるゆかりにだに、しかよりくる物を、ましてひたぶるに子とたのみて、よをつがせたるものゝ、祭をうけにはこざるべき

ものかは、

〔京都將軍家譜下〕義材任職四年、再任十四年、

延德元年四月、與義視共上京、義政養義材○義政姪男爲子、依義尙早世、

〔明良洪範一〕細川越中守綱利ノ臣、長岡帶刀ハ、綱利未六麻呂ト申シヽ時ヨリ、輔佐ノ臣トシテ、忠祖父ノ家訓ヲ傳ヘテ守立ケル、○中略後年綱利子皆早世シテ、未養子ノ沙汰ニ及ザリシニ、一家ヨリ養子ノ沙汰ヲ止テ、願職ノ中ヨリ養子スベキ內談有ト聞エケレバ、帶刀又出府シ、主膳頭宣紀ヲ猶子ニ定メケル、家ニ諫臣有レバ、其家榮フトハ誠ナル哉、

〔天保十一年武鑑〕光尙―綱利―宣紀實利重二男

　　　　　　　　　　└重利

〔勢州系圖〕貞昌兵部少輔

是人島津薩摩守家臣也、如芸爲養子、凡勢州家以他姓爲養子事、是始也、非家法者也、始ハ有川平右衛門ト云ナリ、

〔相州兵亂記四〕公方御他界之事附御臺所御歌之事

同○永祿二年七月、上州ヨリ飛脚到來シテ申ケル、長尾景虎上杉ニ成リ、養父憲政ヲツレテ、上州白井ヘ移ル、

〔明良洪範續篇十四〕黑田長政養弟ニ三左衛門一成ト云者有、父ハ加藤又左衛門、母ハ郡主馬良列ノ妹也、此加藤氏ハ伊勢國ノ住人加藤次景廉ノ後胤也、景廉ノ後孫、攝州ノ領地伊丹ニ住居ス、之ニ依テ伊丹ヲ稱號トス、右三左衛門如水ノ養子トナリシハ、荒木村重ニ信長公ヨリ攝州ヲ玉ハル、國中ノ諸士旗本ト成、伊丹兵庫頭一類トモ村重旗本ナリ、天正五年信長公中國ヲ伐從ヘン爲ニ、羽柴筑前守ヲ播州ヘ差下サル、其後荒木謀反ノ聞ヘ有シヨリ、秀吉公小寺官兵衛○黑田孝高ヲ使

トシテ、荒木ニ異見セラレケルニ、村重同心セズシテ、結句官兵衞ヲ押留禁籠ス、官兵衞不慮ノ難義イハン方ナシ、年久シク牢舍ニテ在シ、此時加藤又左衞門種々懇情有テ、官兵衞ヲイタハリ申サレケル、夫迄官兵衞此度ノ御芳情忘レ難シ、我君幸ヒ有テ歸國シナバ、御子ヲ一人申請、此程ノ恩ニ謝シ申スベシト有テ、其後荒木落城ノ時モ、辛ジテ遁レ出、歸國セシハ、加藤氏ノ力ナリシ、扨約束ノ如ク、加藤ノ一子國丸迚八歲ニ成シヲ養子トナシ、黑田國丸ト名乘セ、成長シテ三左衞門、後美作、老後ニテ睡鷗齋宗印ト云、

〔藩翰譜金吾十二上〕中納言豐臣秀秋は、小早川左衞門督大江隆景の世嗣なり、（隆景なば三原中納言と申せし也、公卿補任には隆景中納言に任ぜし事みえず、）實は木下肥後守家定が四男、豐臣太閤家北政所の御甥なり、初め北政所みづからの御子なき事を深く歎き給ひしかば、この中納言のいまだ幼き時、（童名は辰之助、）太閤の御養君となされ御寵愛淺からず、天正十九年の春、隆景が望み申すに依て、其嗣にはなされてけり、抑も隆景が此人を養て子とせしこと、其謂れありとぞ聞えたる、隆景が甥毛利右馬頭輝元が世嗣いまだ無かりし時、黑田勘解由孝高、生駒右馬頭親正二人は、毛利が家に親しかりければ、其世嗣の事を謀る、孝高計ひて、殿下に申て、御養君して、家繼がせたらんには、家の爲も國の爲も善かんぬと覺ゆと云ふ、親正も此事尤も然るべしとて、先づ左衞門督隆景の許に行て此由を告ぐ、隆景聞て、其事もし成りなんには、我等が家の幸にこそあんなれとばかり答て、生駒が歸るを待かねて、急ぎ施藥院の許に行向ひて、隆景、殿下の御恩に依つて、筑前の國を領するのみにあらず、筑後肥前の中にして二郡づゝの地を下し給ふ、吾が齡既に傾きぬ、此恩に報ひ奉らん日なし、秀秋に國讓り參らせ、隆景は山陽の內にして老い養ふべき程の地賜て、籠り居てさぶらはんには、何事の幸か是に過ぐべき、此由を以て內々御氣色を伺ひて給はるべしとぞ云てける、關白此由を聞召し悅び給ふこと斜ならず、隆景が請に因て其嗣とこそなされてけれ、其後隆景が計らひにて、是れも

有實子以厠人爲養子

又故陸奥守元就が孫なりける秀元して輝元が世嗣となす、〔輝元秀元は從弟也、精しきことは毛利が傳と合せ見るべし、〕隆景がかく謀りしは、輝元が家は嫡流にて、おのが家は庶子なれば、嫡流の種姓絶えなんことを哀みて、自ら其嗣に代りけるこそあはれなれ、文祿の初め、朝鮮の事起り、隆景彼國に渡て、王城の戰に、大明の李如松を打破り、又晉州の城を攻落す、其勸賞に從三位の中納言にて、慶長二年六月十二日、年六十三歳にて薨じぬ、秀秋隆景が家を繼て、中納言になさる

〔藩翰譜三松平久松〕越中守源定綱は隱岐守定勝の三男なり、慶長元年三郎四郎と申して、いまだ幼なかりし時、荒川二郎九郎が養子となる、同き四年十二月七日、荒川伏見の御館にて死す、荒川が家臣等荒川が一族して其家を繼すべきよしを頻りに訴へ申ければ、大方殿聞召し、荒川が三郎四郎を子として、既に四年を經たりしに、今に至て、家臣等がかく申こそ心得ねと仰ければ、德川殿、三郎四郎何ぞ荒川が世嗣たる事を願はんや、彼が成人の後は、彼の所帶よりは、猶あまたの地領すべきものなりと仰らるゝにぞ、大方殿の御心もとけにける、

〔秦山集雜著甲乙録一〕稻荷神主大山左兵衛無男子、同族議欲養同姓某爲子、與息女婚、〔左兵衛主、稻荷神主水垣、主水女、養子主〕大山翁同姓不可婚而不聽、予〇谷川語大山曰、不娶同姓西土之法也、然堯舜皆軒轅姓也、堯妻舜以二女、是亦爲天下婚同姓也、我國神武帝時、智臣有遠慮、人奏以事代主命女五十鈴姫立正妃、五十鈴姫自日神四代之庶流、神武帝自日神五代之正統、世遠族漸疏、則結婚復合族、是以天下泰平、當世與尾紀常三家婚、皆此意也、如不娶同姓則如周家、親族日疎、與小國婚、輔寡勢孤、而終爲他姓之天下、不可爲法也、且我國纂曰八十姓、今僅爲十餘姓、如固避同姓、迂恠亦多矣、大山不聽、遂去稻荷矣、秦姓爲彼神主幾千歳、大山去後、養子亦早世、秦氏竟不傳守、是乖於神慮也、

〔憲教類典三ノ十三家督養子〕享保十五庚戌年八月廿七日

實子有之處、衆面老中井頭支配〔江戶〕不相達置、當分養子等願之、追而實子有之由申聞候儀、近來間

間有之不都合成事ニ候旨御沙汰ニ候實子出生有之、病身等ニ而、老中并頭支配江不相達、家來等ニ遣し置、入用之節ニ至リ、俄ニ嫡子ニ仕度段相願候儀者難成候、右之通之品ニも候はゞ、病氣も快成候間、嫡子ニ可仕存候刻、前以老中并頭支配可被相達置候、尤末子ニ而も同樣之事ニ候、
右之通、可被相觸候、

戌八月

〔享保集成絲綸錄十八〕享保十八丑年十二月

幼少實子御奉公難成、病氣ニ而相續不成子細有之、前以頭支配へ相達候はゞ、各別、無左候而、實子病身之由ニ而養子願候儀は難成候、
右之通可被相觸候

〔諸例集三〕天保二卯年九月

一嫡男有之候處、病身ニ付、他家ゟ養子致し、右嫡男ゟ年增ニ付、兄弟唱方、外壹ヶ條、

石谷備後守挨拶

嫡男有之、病身ニ而、他家ゟ致養子候處、嫡男ゟ養子之者年增ニ而、兄弟之譯難決御座候ニ付、文化十一戌年相伺候處、嫡男ゟ養子之者年增ニ而も、弟ニ定候樣御差圖御座候ニ付、右之通、心得罷在候、然ル處、故有而兄之養子ニ相成候者、右養子以前、兄ニ男女子有之候得者、實甥姪ニ候之處、前條御差圖ニ隨ひ、年下ニ而も兄姉と相定可有御座候哉、〇中略

右之趣、御問合仕候、以上、

丹羽左京大夫内

小澤長右衛門

九月

書面、兄之養子ニ成候者、右養子以前、兄ニ男女子有之候得者、實甥姪ニ付、年之長少ニ不拘、養子之方實叔父ニ付、兄とも相定可然候、

順養子

〔播州姫路酒井家譜〕忠績

忠顯養子、忠績初忠順、分知同姓安房守忠誨ノ長男ナリ、忠顯ノ男稙若幼弱ニ因テ宗家相續ス、且忠顯家ノ儀ハ、實弟鎌四郎ヘ相續被申付、高五千石賜與セラル、仁之助ト稱ス、〇中略万延元庚申年十二月九日、忠顯願ニ因テ相續申付ラレ、遺領十五萬石賜與セラレ、溜ノ間詰ノ格申付ラレ、四品ノ格ニ可心得旨申付ラレ、海警、養父忠顯ノ通申付ラル、

〔憲法部類乾〕兄弟數多有之候もの、弟共を段々兄之養子ニ相願候節、向後左之通相心得可申候、

一弟を兄之養子ニいたし候節者、弟之續を以て養子ニ相願可申候、

一右養子ニ相成候もの、又候其もの、弟を養子ニ致候節者、實弟ニ候得者、養子ニ而者伯父之續ニ付、養子ニ者不相成間、相續ニ相願可申候、

一右相續ニ相成候もの、又候其もの、弟を養子ニ致候節も、實弟ニ候得ば、養子ニ而は右伯父之續ニ候間、養子ニ者不相成間、相續ニ相願可申候、

一右相續ニ相成候者、又候其もの、弟を養子ニ致候節者、最早養子ニ而續之名目無之候間、實弟之續を以養子ニ相願可申候、

右之趣、寄々可被達置候、以上、

寶暦四戌年六月

〔宗像軍記〕宗像大宮司氏仲ノ事附リ宋朝ヨリ石佛ヲ渡ス事

大宮司氏國ノ弟ヲ氏仲トイフ、氏國子ナキニヨツテ氏仲ヲ養ツテ子トス、建久九戊午ノ年、氏國宗像ノ社務ヲ氏仲ニ讓リテ上京ス、

〔吾妻鏡三十七〕寛元四年三月廿一日庚戌、武州〇北條經時有御病惱事、頗危急之間、及所療逆修等之儀云云、廿三日壬子、於武州御方、有深秘御沙汰等云云、其後被奉讓執權於舍弟大夫將監時頼朝臣、

是存命無其恃之上、兩息未幼稚之間、爲止始終牢籠可爲上御計之由、異實趣於御意云云、左親衞〇北條時頼即被申領狀云云、 廿五日壬寅、左親衞被參將軍家並入道大納言家兩御所、相續執權之由、依令賀申給也、 廿六日癸卯、左親衞依爲執權、今日令始行評定給、其業最例者、

〔吾妻鏡備考二〕時頼〇中略

寛元四年閏四月一日、讓得舍兄經時跡、

〔菊池系圖〕武士〇武重二郎二男

實寂阿十二男ナリ、舍兄養子ト而繼家督ヲ、任肥後守、奉屬一品式部卿宮、廿一歳出家、後遁世、

〔諸家系圖纂松平〕泰親太郎左衞門尉、依兄親氏遺言、而親氏子信光爲幼少之故、假續家督、信光成長之後讓之、永和九年丁巳九月廿日卒、號眞祥院、法名秀岸祐金、

〔結城小峯文書〕未無實子ニよつて申定狀の事

仍而それの御まそく御出き候はゞ、身のやうしとして、ことく諸事御はからいたるべく候、その間者、御舍弟を御代官ニなし申すべく候、もし御まやてい身のまよかんにもまたがはれず候者、御計にて御まんるいのうち一人、代官になされべく候、いまより後に出き候ても本知行當知行さをゐ〇相違あるべからず候、仍爲後日狀如件、

應永廿八年十二月十三日　　氏朝花押

小峯殿

〔島津家譜〕一十四代忠隆兄弟共致家督候、然ば忠治〇十三代ノ子早世仕候處、弟之忠隆致家督候得共、是も無繼子、二十計にて早世候、

〔足利季世記四三好記〕細川家傳ノ事

右京大夫頼之ノ御子滿元、右京大夫岩栖院殿執事ニスハリ、子ナクシテ御弟ノ持元ニユヅリ、是モ子ナクシテ御弟ノ持之ニユヅリ給フ、弘源寺殿是レナリ、

〔京都將軍家譜下〕義政治世四十九年

母同義勝、永享八年正月二日誕生、嘉吉三年七月兄義勝早世、乃續家督、時八歲

〔沙彌洞然長状〕一長頼御嫡子頼親從當郡在鎌倉之時、時之御將軍若宮八幡江御參詣候之砌、御前打候、於馬上被播希代之面目、被蒙諸侍之羨候、被遂御奉公、下國之時、若世上之習於存命之內、其身に可付塵之事、無念之次第とて、御子孫末年稚之條雖斟酌候、御舍弟三男頼俊江御家以讓與、御隱居候、直子者小名字被號永富(與)候、成功遂名身退、是天道也、

〔關八州古戰錄二〕房源里見家并上總萬喜少弼事

時ニ義實安西家ニ倚頼シ、小祿ヲ喰ミ、暫ク仕ヘケルガ、天然武ノ器有、有事則一方ノ武主ト成、士卒ヲ指揮シ、功ヲ得ル事數度成シ故、安西秘藏ノ侍トテ、愍情傍輩ニ過タリ、義實病死シテ息男左衞門佐義成、父ニ劣ラズ忠勤シテ終レリ、其嫡子上野介義通、家ヲ繼テ早世スルニ依テ、舍弟嘉太郎義豐、所帶ヲ讓リ受テ、左馬助ト改、安西家ノ長臣トナレリ、

〔諸例集八〕安政二卯年十一月

堀伊豆守答〇中略

一弟ニ而兄之養子ニ相成候節者、養父母看病相願可然筋(與)奉存候、

但他家相續之者(與)者違ひ、其家之儀ニ付、養方祖父母ニも、實父母之看病相願可然筋ニ御座候哉、〇中略

右之趣、兼而心得罷在度、此段御問合申上候、以上、

十一月　　　　龜井隱岐守家來　千葉一郎

〔藩翰譜十下片桐〕孝利卒して後、(卒せし年月いまだ詳ならず、寬永八年の年は三十八歲にて卒せし也、)嗣なし、舍弟半之丞爲元に別に所領の地給て、直盛が家つがせらる、(一万石)爲元年四十四歲、承應三年に卒す、其子助作父に繼ぐ、明

曆元年助作死し、舍弟又七郎を世嗣とす、所領の地大半を減せられぬ、(三千石を給ふ)

〔常憲院殿御實紀〕一常憲院殿御諱は綱吉、大猷院殿(○徳川家光)第四の御子にて、御小字徳松君と申す、正保三年正月八日、本城にて降誕まします、御母は藤原氏、光子といふ、二條家の侍北小路太郎兵衞宗正といふものゝ女なり、(○中略)さても延寶八年四月の初より、嚴有院殿(○家綱、家光長男、)例ならずなやませ給ひしが、やう〱御藥のしるしも見えず、御祈ども、殘所なく國々の諸社諸寺にて行はるゝといへども、さらに怠たらせ給はず、貴賤なべてなげき奉る中にも、いまだ御世繼の若君ましまさねば、いづれをか定め奉るべきと、宗室重臣等此事を議し申けるに、この公かねてより英明のきこえまし〱ければ、天意人望の歸する所をもて衆議一決し、かくと聞えあげしかば、御所にももとよりかく思召ところなればとて、速に召せらるべきの仰あり、これは五月五日の事なり、(○註略)かくて御病牀にわたらせ給ひ御對面あり、御枕もとに近くめされ、御養子とせられ、大任ゆづらせ給ふ旨を宣ひけるに、天下の大事一身のためならねば、あながち遜讓仕らんにあらねど、御病いまだ危篤と申にもなければ、日あらずして幸ひに御心地さはやかせ給ひて後、若君誕生し給ふ事もあるべし、其時は後見し奉るべしとこたへ給ひ、その夜はまづ神田の潛邸にかへらせ玉ふ、事ろなはてゝ後、忠清以下の老臣はまうのぼりけるとぞ、六日本城にわたらせ給ひ、御病牀にて御密話あり、其事は知るものなし、この日潛邸は徳松君相續せられ、封地家人もありしまゝたるべしと仰出されかへらせ玉ふ時は、(○下略)

〔享保集成絲綸錄十八〕元文三午年十二月

仁右衛門弟　小堀左源太
同伜　同　豐之助

仁右衛門病死ニ付而、豐之助幼少之内、左源太後見被仰付候樣願置候得共、如父相續キ御仕官可

被仰付儀無之故不及其沙汰候乍然前々ゟ禁裏御用も相勤且又代々無怠惰相勤候付而別儀ヲ以左源太事仁右衛門家督相續御代官被仰付候豊之助義者左源太養子可仕候

右之通申渡候間可被得其意候

十二月

〔例書三〕一武州都筑郡川尻村百姓七郎治と申者兄之悴幼少ニ付順養子之積兄ゟ家督讓受右兄悴七十郎成長之後家督可讓處七郎治悴出生致候ニ付七十郎幷親類江申出候者順養子之極ニ候處七十郎江家督讓不申七郎治悴七太郎江可讓向ニ申聞候間親遺狀之通七十郎家督受候樣被仰付被下度訴出依之相手方七郎治呼出シ及吟味候者讓狀差出爲見候樣申付順養子ニ候者甥七十郎成長も仕候へ者家督可讓處如何之譯ニて不讓候哉尋候處七郎治申候者御吟味御察當之通如讓狀私兄之悴七十郎最早家督相渡可申候得ども七十郎義身持惡敷ニ付家督相渡候後兄之株式相滅候而者兄ゟ私讓受候右株を跡形も無ク可致哉と奉存差扣罷在候尤兄讓狀ニも七十郎成長之後（コノ邊本ノマヽ）其方養子ニ致候節七十郎心底不埒ニて候はゞ幾重ニも異見を加へ正敷成候而可相渡候亦其方隱居者此度讓渡候內字五ヶ處高七十石餘之分尤別段ニ兄印形居候小前帳之通引分可申旨申送候且兄申置候ニ者其方悴出生致候はゞ其隱居免を以私悴家督相續可致旨遺狀ニ有之候得共私兄ゟ讓受候田畑之外八拾三石餘調置申候是者私隱居仕候節隱居免之方ニ持參仕候積り相答候ニ付何レニも其方兄ゟ讓受候分之內兄遺狀之通其方隱居免之分高七十石を引落殘高何程有之哉尋候處凡殘高三百石餘も可有御座段相答候ニ付其分者早速兄遺言之通甥七十郎江相渡七十郎家督相續可爲致旨申渡且七十郎江申渡候者家督讓請候者身持相愼家業大切ニ可致段親類共も隨分七十郎を見屆候樣可致追而七十郎身持惡敷ば得と異見を加能々異見不相用節者亦々可願出申渡ス又七十郎江申渡候者七郎治事其方伯父ニて

就中今度養父ニ相成候上者、以後七郎治申付ヲ不相背候樣、急度可相愼候、今般叔父を相手取、不埒ニ付、江戸宿預ケ申付、急度相愼可罷在候、

〔例書 六〕一訴訟人申立候者、私親三左衛門義、私伯父三四郎義、親三左衛門ゟ家督讓受、尚亦右三四郎ゟ私家督讓受候定ニ而、前々ゟ順養子ニ家督相續仕來候處、伯父三四郎子共澤山ニ御座候故歟、私江讓渡不申候間、伯父三四郎被召出、家督讓渡候樣被仰付被下度旨、親類差添訴出候ニ付、雙方幷村役人呼出及吟味候者、幾代先ゟ順養子相定、右順養子之儀、親三左衛門ゟ遺狀有之候哉、右順養子之儀者、是迄訴訟人之申通相違無之哉、村役人江尋候處、訴訟人三藏親類幷村役人共答候者、順養子之義者、五六代養子致し來、親三左衛門ゟ伯父三四郎江遺狀相渡候節、訴訟人三藏江も書付相渡所持仕罷在候、相手方三四郎江尋候者、其方義、訴訟人親三左衛門家者、順養子之定之由、何故三藏江家督讓り不申哉尋候處、答候者、順養子ニ而訴訟、親者私兄三左衛門ニ而家督相讓り、訴訟人三藏成長之上家督讓可申旨、私兄遺狀ニ而、甥三藏江家督相讓候積心得罷在候處、三藏義、殊之外身持惡ク、家督讓候而も、先祖ゟ持來候株式相失候而者難成奉存、是迄讓り渡不申候、此上身持相改、私江も相應隱居免引分候者、早速讓渡可申旨答候由、其方右體實氣ニ候者、是迄異見を加可申筈ニ而、尚亦家督讓渡し、迚も身上向取賄候家來江申渡置、甥三藏自由不致樣致方も可有之事ニ候、若遺狀ニ其方江之合力之義無之候者、諸親類打寄、其方隱居免も相應ニ附可申事、畢竟順養子極メ置候處、其定を可破ため右體取計候事と相聞得候、何分早速讓り渡候樣可致候、訴訟方江申渡者、相手方伯父隱居免之義、相應ニ可致遣事ニ候、尤三藏隨分身持慥ニ讓受候株式不取離樣、其方伯父江申渡候通、諸事取計可申旨申渡ス、但親三左衛門持高何程有之、伯父三四郎讓受候哉、尤遺狀有之可申候、若遺狀ニ無之候者、讓高別紙ニ有之候哉、亦は所持之高田畑共、名寄帳ニ有之候哉、但三四郎義、兄ゟ讓受候田畑之外持高聴シ候哉、右聴シ候分何程有之候哉、尤家內下女

下男何人暮し候哉、持地之內何程小作ニ出し、何程手作致候哉、
先祖代々順養子之由申上候得共、其時代ニ寄可レ讓弟無レ之義も可レ有レ之候、又讓り渡し候弟有レ之候而も、其兄之忰歟娘ニ而も無レ之節、且亦可レ讓弟も忰も無レ之節者、順養子と先祖ゟ定メ置候處、崩レ候樣ニ相成候、其節者如何取計候哉、
右貳ケ條、吟味可レ糺事、

年長養子

〔享保集成絲綸錄十八〕享保五子年四月
前々も急養子假養子等は、年增之者をも相願候得共、向後年增之養子願者難レ成事候間、頭々支配支配江此段寄々可レ被二申傳一候、

數人養子

〔東寺百合古文書一〕讓與　處分事
合嫡子藤原守弘所
養子四人內男子二人內重弘、吉弘、　女子二人內藥師佛、尼妙專房、
右件處分ハ、爲二養子男女等一少分ヅヽ、ワケアテヽ、ノコリ惣リヤウノ田畠ヤシキ、所從等ニヲイテモ、又チウシ院ノ□□□□カツラノ沙汰院領ノ沙汰、ミナコトゴトク嫡子藤原ノ守弘ニ讓與畢、努々不レ可レ有二他人妨一之狀如レ件、
文永六年十二月廿二日　沙彌妙善判

〔攝津親秀讓狀〕讓與
一惣領能直分〔○中略〕
一同古九分〔○中略〕
一養子宇都宮參河入道子息分、
相模國狩野庄內大和田大久畠〔但除二宿在家一〕

右所讓與也、但違惣領之命者、可申賜當所之狀如件、

曆應四年八月七日　　　掃部頭親秀

一養子佐々木中治五郎子息分

相摸國狩野庄內田地

右所讓與也、但違惣領之命者、可申賜當所之狀如件、

曆應四年八月七日　　　掃部頭親秀

〔柳營譜略 二〕東照大權現宮〇中略

御養女 實御姪〇德川系圖作家康妹、 保科彈正忠正直之女 母公多部方〇中略

御養女 實御姪、稱天姬、 松平因幡守康元之女〇中略

御養女 實御姪 松平因幡守康元之女〇中略

御養女 實御姪 松平越中守定綱之女〇中略

御養女 實御孫女、稱登久姬、 岡崎次郎三郎信康君之女 母公信長之女〇中略

御養子 實御孫、稱家晴、松平右京大夫、 奥平美作守信昌之男〇中略

御養子 實御孫鶴松、稱忠明、松平下總守、 奥平美作守信昌之男 母公龜姬君〇中略

御養女 實御曾孫女、稱萬姬、 小笠原兵部大輔秀政之女〇中略

御養女 實御曾孫女 本多美濃守忠政之女〇中略

御養女 實御曾孫女 本多美濃守忠政之女〇中略

〇按ズルニ、此他家康ニハ、實子ノ男女アリシ事勿論ナリ、

〔關八州古戰錄 五〕北條氏康隱居附子息配立事

次男由井源三氏照、後ニ北條陸奥守ト號ス、朝日將軍木曾義仲ノ後胤大石源左衛門定久ガ管領

家ヲ叛テ南方ニ降リシ時、氏照ヲ聟養子トシ、武州高麗郡瀧山ノ城ヲ讓リ、其身ハ入道シテ道俊ト號シ、實子播磨守定仲幼少タリシヲ相倶シ、同國戸倉ニ蟄居ス、

〔織田系圖〕信雄（幼名茶筌、後三之介、）永祿元年戊午、生尾州清洲城、同十二年己巳九月、爲伊勢五郡領主、住于小河内城、爲國司北畠中納言具教卿聟、被補國司職、

〔山内首藤系圖〕隆通（童名増法士、新左衞門尉、多賀山伯耆守、）從是山内血脈斷絕、爲他流云々、法名露休居士、一男也、豐通依無實子、嫁息女爲養子、（中略）天正四年十月十五日、行年五十七ニテ死、

〔大友系圖〕親盛（養統二男）〇爲田原近江守親賢入道紹忍之聟養子、稱田原民部大輔、或與兵衞尉、後號松野、法名半齋、有子孫、

〔大森葛山系圖〕賴忠（大森二郎入道）
- 盛忠（中略）〇
- 女子（無子、故妻甥爲養子、稱鳳三郎左衞門息也、）

〔諸家系圖纂〕（喜連川古川宮原）義氏（從四右兵衞佐、號古河）
- 氏女（無子、爲女子太閤秀吉惜於斷絕、建家嗣、）
- 國朝（左兵衞督、賴純子、依秀吉命娶氏女、爲妻、繼義氏家、文祿二年卒、）
- 賴氏（左馬頭、號喜連川、國朝弟、國朝卒後、秀吉命娶氏女、爲妻、令繼其家、寬永七年卒、）

〔勢州系圖〕貞勝（主殿助）
宗圓實子、祐怡弟也、因幡守入道友枕齋如芸之養子、卽爲聟家督讓與之、寬文元辛丑年極月廿四日卒、善德院法名貞齋、無後、

〔柳營諸舊例的二〕聟養子奉願候覺

高三千五百石

寄合　有馬左京

御小姓組番頭
小笠原若狹守次男
小笠原千之助

聟養子奉願候者

嫡無御座候

私儀、末男子無御座候ニ付、嫡者無御座候得共、小笠原若狹守次男千之助儀、私養女興年齡相應ニ付、聟養子仕度奉存候、右之外親類遠縁同姓異姓遠續之内ニも、聟養子可仕相應之者無御座候間、右千之助儀、聟養子被仰付被下候樣奉願候、以上、

文化二乙丑年十月廿五日　有馬左京印判

宛連名殿

〔諸例集三〕天保五午年四月

須田大隅守〇大目付挨拶

男子無之、幼少之女子貳人有之者、及大病、末期長女江聟養子仕、女子幼少之儀ニ付、追而成人之上、婚姻相整度旨相願候ニ付、願之通、家督相續申付候、然ル處、右長女年頃ニ者相成候得共病身ニ而、行々本復婚姻可相整容體無之ニ付、右長女者離緣厄介ニ仕置、血筋之儀ニも候間、二女江緣組婚姻爲仕度段、雙方親類共願出申候節者、願之通申付候而も不苦儀ニ御座候哉、右者聟養子之儀ニ付、二女者聟養子之爲、養方妹之續ニ御座候間、無據子細候共、二女江緣組之儀者、不相成儀御座候哉、左候得者、聟養子之者、生涯無妻ニ而、彌血筋も相絶候儀ニ付、病身之長女を離緣厄介ニ仕、又者親類等江預置、他より續合無之者、再緣組仕候儀者不苦儀ニ御座候、

一右者婚姻相整不申候而も、緣組者申付置候儀ニ付、何樣之子細候共、聟養子ニ而、妻離緣仕候上者、雙方再緣組者不相成儀ニ御座候哉、

右之通、爲相心得奉伺候、以上、

四月　　米津伊勢守家來 人見要

書面病身之長女、離縁厄介ニ致し置候儀者不苦、二女者養方妹ニ付、縁組難相成候、尤雙方共再縁組者不相成事ニ候、

〔諸例集 四〕家督之養子を子細有之、實方江差戻し、又聟養子之儀問答、

村上大和守〇大目付答

實父二郎
　聟養子
　　三郎
一郎
　妻
　　女子

右一郎先達而死去ニ付、養子三郎江名跡相續申付相勤居候處、病氣退身相願候ニ付、實父二郎方江差戻候、然處系引之通、三郎女子有之候、右者一郎實孫血肉之者之儀ニ付、此女子江一郎名跡相續候而も可然筋ニ可有御座候哉、尤一郎存生ニ而、三郎退身不縁ニ付、實家江差戻候者、實孫ニ而も養女ニ致し、聟養子相願候儀者相成間敷筋ニ御座候哉ニ候得共、一郎存生ニ無之、當人より退身候者之女子ニ付、前文之通孫女ニ養子相願候而も、可然筋ニ御座候哉、

但養女ニ不相願、孫女江養子相願候儀、苦間敷筋ニ御座候哉、

一三郎實方江差戻候上者、三郎女與夫妻之縁者絶申候ニ付、右之者へ又候聟養子相願候儀者可然筋ニ御座候哉、

右之趣、兼而心得罷在度、此段奉伺候、以上、

天保七申年五月廿八日　　本多上總介家來 坂根升

書面之通者、養父死去後家督相續之養子ヲ實方へ差戻候儀者、御定無之儀ニ付、難及挨拶候、

〔諸屆〕御目見未仕候孫聟養子奉願候者、續者無御座候、

細川渡次男
細川央 卯十四歳
細川能登守 手前罷在候

右央父渡義者、細川能登守養曾祖父細川先能登守死四男ニ御座候、尤是迄養子罷越候儀無御座、能登守手前罷在候、

私總領同姓令三郎儀、當卯四十一歳罷成候處、未男子無御座候ニ付、續者無御座候得共右細川渡次男細川央儀、私總領令三郎養女與年比茂相應ニ御座候間、孫聟養子仕度奉存候、右之外、親類遠類同姓異姓遠緣之者之內ニ茂孫聟養子可仕相應之者無御座候ニ付、右央儀孫聟養子被仰付被下置候樣奉願候、以上、

天保十四癸卯年十月　戸田又兵衛 書判

室賀美作守殿
柳澤伊三郎殿 ○中略

本紙六寸、日向半切、上包美濃紙壹枚折懸ヶ貳通、

養孫女歳附書付

一養孫女 實父內藤岩五郎、私次男總領、私嫡無ニ御座候、　戸田又兵衛

戸田令三郎養女 卯十三歳

右之通御座候、以上、

十月　戸田又兵衛

本紙上糊入裏白、上包美濃紙壹枚折懸ヶ三通、

內 名乘之例有之分 壹通　名乘書例無ニ認候分 貳通

婿養子

證判狀　内藤一學

一筆致啓上候、然者御手前様御總領令三郎様御聟養子細川渡殿次男細川央殿被成御願候旨、御尤奉存候、何之存寄無御座候、拙者次男内藤巳喜之丞弟内藤彌十郎儀者、存寄御座候ニ付、御養子之儀御斷申上候、右之段可得御意如斯御座候、恐惶謹言、

十月　内藤一學 名乘書判

戸田又兵衛様 人々御中

孫聟養子引取御屆書　戸田又兵衛

御書院番近藤石見守組 私次男總領戸田令三郎養子總領

一孫養子總領　戸田央

右央儀、昨十九日私方江引取申候、尤養孫女与婚姻之儀は、追而相整候節、御屆可申上候、以上、

四月廿日　戸田又兵衛

〔南留別志 二〕一聟養子をして家を相續するは、頼朝公より始まる、法家のゆるさゞる所なり、

〔公用雜纂 一〕聟養子。。。。三度願候例

聟養子奉願候覺　實子總領 神保佐渡守 丑五十七歲

高貳千石　先聟養子 御旗奉行天野近江守次男 神保與八郎

右與八郎儀、續者無御座候得共、聟養子仕度段、安永八亥年二月、御書院番深谷壹岐守組之節奉願候處、同年十月、願之通聟養子被仰付、娘与婚姻相整候處、右與八郎儀、私心底ニ應不申、始終熟縁も可仕體無御座候間、實方江差戻申度旨奉願候處、天明元丑年五月、願之通被仰渡、娘儀離縁仕、與八

郎實方江差戻申候、

先聟養子　牧野遠江守三男　神保左近

右左近儀、續者無御座候得共、聟養子仕度段、天明元丑年十月、御徒頭相勤候節、同年奉願候處、同年十二月廿七日、願之通聟養子被仰付、婚姻相整候處、娘儀天明五巳年八月、病死仕、其後左近儀、私心底應不申、末々熟縁可仕體無御座候付、雙方熟談之上、左近儀、實方江差戻申度旨奉願候處、寛政四子年五月、願之通被仰渡、實方江差戻申候、

次男　神保伊三郎　丑十一歳

御使番　朝比奈彌太郎次男　朝比奈安之丞　丑二十歳

右最前之養子與八郎左近儀、書面之通實方江差戻、私次男神保伊三郎儀は、聟養子被仰付候後出生仕候ニ付、總領不奉願、依之右朝比奈彌太郎次男朝比奈安之丞儀、續者無御座候得共、私娘與年齢相應ニ御座候間、聟養子仕度奉願候、此外親類遠類同性異性續遠同性之内ニも、聟養子可仕相應之者無御座候ニ付、安之丞儀、聟養子被仰付被下候樣奉願候、以上、

寛政五癸丑年月日　神保佐渡守　印　書判

安藤對馬守殿
井伊兵部少輔殿
京極備前守殿
堀田攝津守殿

〔柳營諸舊例的〕二文化四卯年八月

再聟養子願　寄合　鈴木伊兵衛

高七百石　寄合　鈴木伊兵衛

再聟養子奉願候覺

養子御書院番大久保豊前守組
鈴木次郎左衛門次男
鈴木小次郎

私儀、男子無御座候ニ付、右小次郎養子奉願候處、寛政九巳年十二月十三日、願之通養子被仰付候、然ル處小次郎、享和二戌年七月廿三日病死仕候、

右衛門督殿家老佐野豊前守惣領
二ノ丸御留守居佐野與八郎次男
佐野内藏助

再聟養子者續無御座候

右養子鈴木小次郎儀、書面之通病死仕候處、外男子無御座候ニ付、佐野豊前守惣領佐野與八郎次男内藏助儀、續者無御座候得共、私養娘(與)年齢相應御座候ニ付、再聟養子仕度奉願候、右之外親類遠類同姓異姓遠續之者之内ニ(實)聟養子可奉願相應之者無御座間、内藏助儀、再聟養子被仰付被下候様奉願候、以上、

八月三日　　寄合　鈴木伊兵衛 印 (與)

宛連名殿

〔諸例集 三〕天保二卯年十月

娘(江)聟養子ニ致し、出生も有之候處、不和ニ付、實家(江)差戻し、子供者養家ニ差殘置候等之儀、外壹ケ條、

石谷備後守挨拶

都而娘(江)聟養子貰、婚姻相整、出生も有之候後、養子不縁ニ付、雙方熟談之上致離縁、出生之子者不限男女ニ差殘し、其身計實家へ差戻し候得者、其家族を離候事故、夫妻之間分而不及離別之沙汰ニ、其後右娘へ再聟養子致し候而も不苦筋ニ可有御座哉、且又兩親相果候後抔不和ニ相成、無餘

儀近親之者ゟ實家江申談、納得之上離縁ニ相成類も同樣之譯合ニ可有御座哉、兼而爲心得此段奉伺候、以上

本多中務大輔内 坂根九五郎

十一月廿三日

書面之通娘江聟養子致し子出生後不縁ニ付、雙方熟談之上離縁致し、實家江差戻し、出生之子者不限男女ニ養家ニ差置候共、談合次第之事ニ候、其後娘江再聟養子致し候儀者不苦筋與存候、且又所親相果候後、不和ニ相成候與而、近親之者ゟ實家江差戻候儀者、御定ニ無之儀ニ付難及挨拶候、

入夫

〔諸家系圖纂 畠山〕重忠——重保

重晴 中根小次郎、元久元年重忠父子被誅トイヘドモ、重忠内室北條殿(時政)息女、本領安堵、子孫ハ繁昌也、

重勝 中根小太郎 高階豊嶋 諱合

重國 下野守

重長 江戸彦太郎、法名成佛、畠山重忠横死後、於名字内室賜之、北條殿息女タル故ニ、以源義純爲聟繼之、於家督ノ分ニハ重長繼之、一門棟梁タリ、所謂江戸、木田見、丸子、小日向、柴崎、飯倉、澁谷、高田所々知行、因茲如此ツリ畢、

〔北條五代記 五〕八丈島へ渡海の事

扨又男は女にかはり、色黒くすがたいやしきやせ人形に小袖をきせたるがごとくなれば、日本人も是にすこし心をなぐさみぬ、女房絹を織、北條家へ貢絹とておさむる故にや、むかしより家主は女にて、男は入むこなり、佛は五障三從と說給ひて、女に三ッの家なし、此島は世界にかはり、男に三ッの家なし、去程に女子を持ぬればよろこび、親の家財跡職をわたし、男子を持ぬればすてものに思ひ、入聟になす、萬事皆女房のさし引也、

〔萬年帳 二番〕入夫家守相續弘

婦人養子女

一銀貳兩目 貳本入臺付扇箱、此代壹匁七分、　名主殿江

一銀壹兩目づゝ　家主中江

并振舞壹人前四匁三分掛り

一錢三百文　書役江

一同貳百文　番人江

右弘有之候節、町内家主中ゟ遣し候進物肴一折、酒壹升代ニて遣候はゞ四百五拾文遣し可申候、○中略

右弘之義、家守新規弘肴物は前々ゟ仕來り之通に御座候、其外は是迄區々之義も有之候間、此度熟談之上、前書之通、品々相極申候、以來相違有之間敷候、自今以後右之趣違亂不致ため、惣家主連判致置申處、仍而如件、

天明四辰年十月

五兵衛印
安兵衛諸當時 五人組持 伊左衛門印
長七印
初五郎印
吉右衛門印

〔御成敗式目〕一女人養子事

右如法意者、雖不許之、右大將家〔源頼朝〕御時以來、至于當世、無其子之女人等、讓與所領於養子事、不易之法不可勝計、加之都鄙之例先蹤惟多、評議之處尤足信用歟、

〔御成敗式目抄〕一女人養子事○中略

寡婦ノ養子本條無節文トテ、法意ニハユルサズ、古法ハ如此ナレドモ、親類モナタ、タヾ獨リア

ル婦人ガ、養子ヲシテ所領ヲ讓リ、菩提ヲ訪ハレントスルハ其謂レアリ、令ニハ寡婦ノ養子ヲナサズ、其所トシテハカラヘドモ、婦人死シテ他人ガ財寶ヲ取ンモ由ナキニ似タリ、コレニヨテ右大將家以來女人ノ養子ヲユルス也、

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年七月十日乙卯、次妻養子事、凡女人者無自專法、養子者夫不免之外、女子養子所不免也

以嫡子爲他家養子

〔明良洪範續篇十四〕異說ニハ右衞門佐局、初メノ名ヲバ常盤井ノ局ト號シ、帝都上西門院ノ侍女ニシテ、水無瀨中納言從二位藤原氏信〇信原脫、今以意補、卿ノ息女ナリ、新上西門院ハ、綱吉公ノ御臺淨光院殿ノ御連枝鷹司關白房輔公ノ姬君ニテ、御臺ノ御姪女也、故ニ淨光院殿ヨリシテ、新上西門院ノ御方ヘ才智發明ノ女、式法ヲ篤ト存タル者ヲ、御所望ノ由仰遣ハサレシ時ニ、數十人ノ官女ノ內ヨリ御撰ミ出シ、關東ヘ差下サルヽ、其節名ヲモ右衞門佐ト改メ、淨光院殿ニ奉仕シ、奧表ノ女中ヲ支配シテ、名望甚シ、且其容顏モ甚ダ勝レタルヲ以、後ニ綱吉公ノ御目ニ入、淨光院殿ヨリ御讓ヒ有、老女ト成、出頭甚シ、惣女中ノ頭タリ、才智發明ノ人故、段々御取立之アリ、祿千石ヲ玉ハリ、其外諸大名ヨリ年中ノ音信等甚ダ多シ富貴並ブ者ナカリケル、其上名跡ヲモ相立申スベシトノ御事ニテ、此人ノ部屋子ニ利世ト云ニ取合セ、田中半藏ト云浪人ヲ養子トシ、桃井內藏介ト改號シ、召出サレテ、寄合ノ列ニ勤仕セリ、

〔憲敎類典三ノ十三家督養子〕享保十乙巳年六月

一惣領を養子ニ遣し候儀、本家杯江遣し候者格別、其外者一切有之間敷事候、願申出候共、取上申間敷事、

享保十巳年六月〇中略

享保十二丁未年十一月九日　伊豫守殿御渡

一惣領を養子ニ遣候儀、本家抔江遣候者格別、其外者一切有之間敷事ニ候、願中出候共、取上申間敷事、

一一子を無據子細ニ而本家抔江養子ニ遣し、實子出生候はヽ格別、養子者仕間敷旨申聞、其後實子出生いたし、其段頭支配江相屆置候はヽ、吟味之上、家督可被下候事、

右之通、向後可被相心得候、併只今迄一子を自分勝手ニ而高堵等江養子ニ遣置、當時實子出生候はヽ、家督之儀願出候者有之候はヽ、是は吟味之上、家督可被下候事、

右之趣、組支配有之面々江、爲心得寄々可被相達候、

未十一月

以養子爲他家養子

〔諸例集三〕村上大和守挨拶

聟養子致し、右養子を本家等江養子ニ遣候得者、離別ニ者無御座候得共、先養方服忌無之、他人之譯ニ候得者、右聟養子手前罷在候内、出生有之、右出生之男子、祖父之手前ニ差置候共、離別之養子同様、孫之緣者離れ候哉、然者實孫之續を以、祖父之名跡等ニ可相願筋目ニ者無御座候哉之旨、御問合申上候處、聟養子致し、右養子を本家等江相續之養子ニ遣し候而も、手前罷在候内、出生之男子、祖父之手前指置、追而實孫之續を以、名跡相續相成候、其譯御附札御挨拶御座候、前條同樣聟養子幷妻も他より貰請候上、本家等江養子ニ遣し、手前ニ罷在候内、男子出生有之、祖父之手前ニ差置候得者、孫之續を以、祖父之名跡相續相成候哉、又者養子幷妻共、他より貰請候ものニ而者、孫之緣者離れ候哉之旨、重而御問合申上候處、孫之續無之旨、是又以御附札御座候得共、名跡相成候哉否之儀者、分而御挨拶無御座候、此儀者其節伺方文面行屆不申故與奉存候、右孫之續者無御座候得共、元來本家相續養子ニ遣し候時者、孫も一集ニ本家江可指遣之處、手前ニ殘し置候者、全名跡相續爲致度所存ニ而殘置候事故、孫之續者無之共本家之外孫ニ相成候譯ニも候得者、右之者を

養子因辭他家養子

養子相願、外ニ身近キ續柄之者有之候共、無構可相願筋ニ候哉、又者孫之續離れ候上者、夫より近キ筋目之者有之時者、其者相願可申儀ニ御座候哉、

右之通、猶又相伺度事ニ存候事、

天保四巳年五月　　　松平加賀守内　青地信左衛門

書面之通者、時宜ニ寄、願可相濟哉ニ茂被存候得共、差定難及挨拶候、

〔明良洪範續篇 一〕山名信濃守義豊ハ、金田遠江守正勝ノ二男ニテ、山名主殿矩豊ノ養子ニ成タル也、生質敬義ノ人ニテ、聖賢ノ敎ヘモ敬ノ一字ニ歸ス、其アラハル丶所ノ跡ハ義也、故ニ敬義ハ二物ニ非ズナドイハレシ人也トカヤ、此義豊至テ美男ノ生レニテ、天和ノ末ヨリ御近習ニ召仕ハレケル所ニ、牧野備後守成貞ノ子美濃守成任、子細有テ自滅セシカバ、右信濃守ヲ養子ニスベシトノ上意アリケレバ、牧野備後守成貞ハ、ワガ養子ニセント云ド、信濃守義豊云ケルハ、上意ニ應ゼザル儀、何トモ恐レ多ケレド、我ハ一旦山名主殿矩豊ノ養子トナリ、山名ヲナノリ、又矩豊ノ豊ノ字ヲツイデ義豊ト申ケレバ、今更再ビ他家相續ハ仕難シト云、牧野備後守成貞ハ家筋ト云、當時御役柄トイヒ、カタ〴〵上意ニ應ゼズシテハ、宜シカルベカラズト申人モアリケレド、義豊一向承引セズ、之ニ依テ將軍家大イニ御立腹有テ、取アヘズ柳澤出羽守保明ニ御預ケ仰付ラレ、御評議ノ上遠島ニ極リシ所、牧野備後守成貞申上ケルハ、山名信濃守義豊事、上意ニソムキ候段ハ、何トモ申上ベキ樣之無候ヘドモ、養父ヘ義理ヲ立候バカリノ事ニテ、外ニ何一ツ罪ナキ者ニ候、養父ヘ義理ヲ立候事ハ、其本ハ孝心ヨリ起ル所ニ候ヘバ、カヽル士ヲムザ〳〵ト廢サセ給フハ惜シキ事ニ候、御仕置ノ段ハ、何卒御免下シ置レ候樣願奉ル所ニ候、又義豊彌遠島ニ仰付ラレナバ、我等モ生涯養子ハ仕間敷候、サスレバ我等家ヲユヅルベキ者モ無ク、老後ノ心痛此上無コトニ候ヘバ、何卒カノ者御免仰付ラレ、我等ニモ別人ヲ養子仕候樣仰付ラレ下サレナバ、有難仕合

與子於家臣等爲養子

醫術家養子

セニ存ジ奉ルト申上ケレバ、願ヒシ日ヨリ三日目ニ山名信濃守義豐御預ケ御免ニ相成リ、本ノ通リ勤仕仰付ラレケル、其後山名信濃守義豐願ケルハ、私儀ハ御高恩ヲ蒙リ叙爵仕リ有難存候、然ルニ養父同姓主殿儀ハ、未ダ無官ニテ罷在候ヘバ、何卒御取上ゲノ程、偏ニ願奉ル段歎願シケルニ、早速聞召シ入ラレ、養父主殿奥詰仰付ラレ、山名伊豆守矩豐ト成リケル、其後元祿七年ニ至テ、山名信濃守義豐御不審ヲ蒙リシ事アリテ、養父山名伊豆守矩豐ヘ御預ケニ成リ、伊豆守ニハ別人ヲ養子ニ願ヒ申ベシトノ仰出サレケル、其後信濃守召出サレ、新知五百石下シ置ル、此信濃守ハ生質廉直ナル儀者ナル故、讒者ノ舌頭ニカケラレ、兩度マデ御不興ヲ蒙リタレド、天何ゾカカル正士ヲ廢給フベキヤ、亦復召出サレタル也、

〔守國公御傳記三〕二三男ノ分家ハ、大超公ノ例ニ因テ、一人ハ時ノ衆議ニ任セ苦シカラズ、三男以下蕃中長臣ノ養子タルコト、圓鏡公ノ末男尊雄君ヲ、家族應助ノ養子トナシ玉ヒシ例ニ因テ、輕島ヲ主トシ、知行三百石與ヘ、總テ老臣嫡子ト異ナルベカラズ、面謁ハ其身一代居間ニ出、月番執政披露シ、一代限殿ト稱スベシ、傳者ハ諸士ノ内、輕キ輩兩三人ニ過ベカラズ、〇中略

右ノ條件必遵守シテ、踰越アルベカラズト示シ置キ玉フ、

〇按ズルニ、皇子ノ臣下養子ト爲ル事ハ、帝王部皇親篇ニ在リ、

〔御定書百箇條〕養娘遊女奉公に出候もの之事

享保十八年極

一輕きもの養娘遊女奉公に出候もの　實方ゟ訴出候共　無取上

但卑賤之者江養子に遣候は、實家にも其心得可有之事に候間、證文有之候とも無取上、然共養娘格別及難儀候事を養父母取計候はゞ、可遂吟味候、實子にても親之仕形法外之儀有之候はば、吟味之上、相應之御仕置可申付事、

〔新編追加雜部〕一醫師、有道輩、弃本道爲御家人養子、知行御領事、道陵遲之基也、自今以後可停止之、

建治二七二、評、本行嶋田民部丞、

〔憲教類典三ノ十三家督養子〕享保四壬寅年五月九日〇中略 牧野備後守殿被成御渡候御書付寫

御醫師養子願之儀、御目見醫師之悴、又者町醫師等を、相願候節者、右願之者家業專ニ致し、早速御用立候者可相願儀ニ候處、近年家業未熟、又者年若等ニ而、早速御用ニ難立者相願候〇中略有之候、以來御目見以下幷御目見醫師之悴、又者町醫師等を養子ニ相願候はゞ、家業專ニ致し、早速御用立候者相撰相願候樣可致旨、小普請醫師之面々江可被達候、

右之趣、小普請組支配江可被達候、

元文元丙辰年八月廿五日〇中略

一近年爲有之而被召出候者共養子是又右之通〇許血族者爲養子、及實娘爲聟養子、可被仰付候、尤家業可致相續ものを撰び相願事、

右何〇中略御目見以上之儀ニ候、御目見以下は只今迄之通候、〇中略

寶暦五乙亥年十二月二日

松平宮内少輔殿御渡

爲ニ而被召出候者、元文元辰年御定以前、御目見以上ニ成候者は娘無之他人養子も可被仰付候、但元文元年御定以前、御目見以上ニ罷成候共、役者ゟ出候者は娘無之他人養子者、只今迄之通被仰付間敷候、

右之通、寛延四年相達候得共、以來とも役者ゟ出候ものも、元文元年辰年御定以前、御目見以上ニ成候ものども、爲ニ而被召出候ものと同樣、他人養子も可被仰付候、且又役者出之者之子を養子ニ願候節、親類ニ候はゞ、願之通可被仰付候、他人ニ候はゞ相叶間敷候旨、元文三年相達候得共、是又右ニ准じ可被仰付候、

全養子

右之趣、組支配有之面々江可被通達候、

十二月

〔古筆了博養子願一件〕戊二〇年文久閏八月十六日

一左之書類持参

一私儀久々病氣ニ付、御用相勤兼候間、亡父了伴弟子御銀吹極所大黒作右衛門弟渦淺了悦與申者、古筆目利相應ニ仕、御用ニも相立可申者ニ御座候間、此度私養子ニ仕度奉存候、此段奉願候、以上、

古筆了博代
關八兵衛

戌閏八月　古筆了博印

寺社御奉行所

先例書

願父
古筆了意

一天明四辰年六月、養父了泉男子無御座候ニ付、養子奉願上候處、同月十八日、願之通養子被仰付候旨、寺社御奉行阿部備中守殿御申渡、同年七月十八日、養父了泉家業相續被仰付候、以上、

右之通ニ御座候

〔憲教類典三ノ十三家督養子〕慶安四辛卯十一月十一日

惣番頭、物頭、殿中江召、酒井讃岐守被申渡、

上意之趣、大猷院樣〇徳川家光御制法を取替、歳五十以下之者養子之儀、縦末期之遺言たりと言共、跡目御立可被成候、五拾以上者、末期之遺言被成、御立間敷候、

大猷院樣御制法被遊候儀、如何と上意ニ御座候得共、大猷院樣御在世之時も思召なをされ、か樣ニ可被仰付候由、上意之旨、老中中上候ニ付、右之通被仰付也、〇中略

慶安四辛卯年十二月十一日

諸大名、御旗本之番頭諸役人、諸頭不殘被爲召、老中列座ニ而被仰渡者、御家人之面々、五拾ゟ內は及末期養子願候はゞ、依其筋目跡式可被立候、又五拾歲以上ニ而及末期養子之願仕候はゞ、跡式被遊御立間敷候、上意之趣依仰達之、

〔御當家令條三十〕覺

一實子無之面々、急病之節養子願之儀、判取壹萬石以上者大目付衆、壹萬石以下頭無之衆者、御目付衆見被申筈ニ候、其心得可有之候、以上、

亥〇天和三年 二月日

〔享保集成絲綸錄十八〕正德六申年二月

五拾歲以後之面々、急養子之事、御許容無之は、御代々之御制條ニ候、然共五拾歲之後、其子たる者死去し、未だ養子あらざる間に、重病ニ臨み、病を扶けて其支配其頭之宅江罷越、對面之上、願書を相渡すにおゐては、五拾歲以後急養子之例に准せず、願申す所を御許容あるべし、もし其病危急にして、支配頭之宅江罷越すに不及して、願申旨あるにおゐては、御代々之御制條に被爲任御許容不可有候、然る上者、五拾歲之後遺跡を繼ぐべきもの無之面々者、早速其人を撰び養子之事可願申者也、

正德六年申二月

〔憲敎類典三ノ十三家督養子〕享保四己亥年八月朔日

五拾以上、拾七以下之急養子之願、判元見候儀可爲無用候、

但五拾以上ニ而も、悴相果候か、間も無之養子願申事ニ候はゞ可有格別候、

右之趣、頭支配有之面々江可相達候、

享保四己亥年八月朔日

急養子判元見分之事、右ニ付御渡し被成候書付、

覺

私共組五拾以上急養子願罷越、判元見申候儀、前々無御座候、御書院御小姓組兩御番之方ニ者、前方伺相濟有之、罷越判元見申候心得之由御座候、向後五拾以上之急病ニて、養子願之節、頭宅江罷越候程に而候は丶、呼出、判元見申候、其段難成急病ニ候はゝ、其者宅江罷越、判元見屆可申哉、奉伺候、以上、

二月

右之御書付、享保元申年二月廿四日、久世大和守殿江大久保淡路守、大島肥前守ゟ被差出候由、五拾已上拾七以下之者急養子願、判元見候儀可爲無用事、

但五拾以上にても、悴相果、間も無之養子願申事ニ候はゝ格別可爲候、

右御書付、享保四亥年八月朔日、戸田山城守殿ゟ中川伊勢守江被成御渡候

右は被仰出候御書付とは不被存候間、取調之上可相除候、○中略

天明四甲辰年九月十四日

酒井飛驒守殿御渡

急養子相願候節懷胎之婦人無之旨申聞置、其後懷胎之もの有之、著帶爲致、出生も有之處、虛弱ニ付屆不申聞、追而丈夫ニ相成候ニ付、屆申聞候儀は有之間敷事ニ候、急養子相願候節は、懷胎之儀不相知候故、懷胎之婦人無之旨申聞置候上者、懷胎に相決、著帶爲仕候與、幷出生之節も、虛弱たりとも可相屆、

右之趣向々江寄々可被達置、尤西丸御目付江も可有通達候、

九月

〔諸例類纂四〕一申〇文化九年二月六日、御用番大久保樣御退出江入、御内覽、直ニ御表江差出候、

養父主殿頭、病氣差重候ニ付而、去未十一月、私義急聟養子奉願候節、懷胎之婦人無御座候旨、御屆申上候處、同人妻壹人、此節ニ至り懷胎相決候間、此段御屆申上候、以上、

二月六日

小笠原謙之助

例書

亡父修理大夫病氣ニ付、當六月、私儀急養子奉願候節、懷胎之婦人無御座候故、御屆仕候處、修理大夫妻當月ニ至、懷胎相決候ニ付、此段御屆申上候、以上、

九月十三日

伊藤鎌五郎

右之通文化九申年九月十三日、御用番牧野備前守殿江御屆申上候由ニ御座候、以上、

二月六日

小笠原謙之助

〔諸例集〕堀伊豆守答

當主病氣差重候處、未男子無御座候ニ付、他家ゟ急養子奉願、願書御請取相濟候上、當主死去仕候ば、養父定式之忌服請候樣御達有之候儀與奉存候、右養子忌服請候而養家江引移候節、養家は嫡子乘輿鎗貳本爲持候家格ニは御座候得共、省略仕、實家二男之供立ニ而忍同樣引移候共、以後養家之家格ニ故障有御座間敷候哉、

右之段、兼而爲心得奉伺候、以上、

六月〇安政二年

有馬日向守家來
山内和十郎

書面之通者、養家之家格ニ差障候儀、素より無之事ニ候、

〔諸例集中〕一急養子願申上候以後、當人致本復、右願書取戻候義、申上候例之事

享保十二丁未年五月晦日、御小性組金田周防守組品川頼母、急養子ニ付周防守、幷與頭榊原庄五郎、且又御帳書井戸平三郎、本多左京、頼母宅江罷越、判元見屆同六月朔日、周防守、庄五郎御用番大久保佐渡守殿御宅江參上、急養子願書、幷添願書親類遠類願書致進達候處、同十二月朔日、頼母病氣快御座候間、致出勤候ニ付、同三日周防守儀、佐渡守殿江罷越、先達而致進達置候、頼母急養子願等御返し被下候樣ニ、書付を以申達候得ば、同日於御城佐渡守殿詰番近藤淡路守江、頼母急養子願書親遠類書、其外書付等御返し被成候、

急養子願書進達之後、病人快氣ニ付、取戻し之例、右之外ニ如左、

船越駿河守組　小栗十郎右衛門

松平肥前守組　中根金次郎

〔享保集成絲綸錄十八〕享保二酉年十二月

申渡之覺

御代官　平岡三郎右衛門

今度御代官所爲見分罷越於彼地、病氣附、俄差重候付而、養子願書差出候、於當地假養子願書可差出之處無其儀、其上去年中相願候養子與人も替り、旁以不調法之至ニ候、依之養子不被仰付候、

十二月

〔幕制彙纂四〕一寛保二戌年、弟兩人有之候處、差次之弟病氣ニ付、假養子不相願、其次之弟假養子ニ願候、然處右之弟病死ニ付、他ゟ假養子を願、後之本養子ニ致候例、

三代先　水野監物

弟　兵庫

玄蕃

一寛保二戌年六月、監物初而在所江御暇之時、差次之弟兵庫病身ニ付、玄蕃を假養子ニ相願申候、

然處延享三寅年八月四日、玄蕃病身ニ付、同十三日、酒井雅樂頭樣江、御先手小笠原縫殿助樣を以、玄蕃病死ニ付、假養子之事書付差出候處、御請取被置候間、御挨拶之由、縫殿助樣被仰聞候、

〔柳營諸舊例的一〕假養子奉願候覺

高五千石　寄合　松平清三郎

假養子奉願候者實方弟　對馬守嫡安藤長門守四男　安藤喜三郎

私儀、當秋駿府御加番被仰付候處、未實子無御座候間、若道中又者於駿府不慮之儀も御座候得者、右喜三郎儀養子被仰付、跡式無相違被下置候樣奉願候、右之外親類幷同姓異姓之內ニ茂可奉願相應之者無御座、尤歸府仕候はゞ、此願書御返被成下候樣仕度奉存候、以上、

文化二丑年八月十一日　寄合　松平清三郎

松平能登守殿

井伊兵部少輔殿

京極備中守殿

堀田攝津守殿

立花出雲守殿

〔氏家叢書十六〕文政十三辰年四月朔日、御用番青山下野守樣御勝手江罷出入御內談候處、同二日御呼出、公用人を以御書取被成御渡候、

私嫡子定太郎義病死仕候處、二男初之助御座候間、在邑罷在候得共、假。養。子。之。義。不。奉。願。候、此段御聞置可被下候、以上、

四月朔日　松平宮內少輔

〔藩翰譜三松平久松〕左少將兼隱岐守源定勝は、俊勝の三男なり、初め三郎四郎と申、（松平と稱する事は、上にみえたり、）

養女

天正十二年の冬、豐臣家德川殿の御子を養君とし奉るべきよし、望み申されしかば、此人を御子とし遣さるべしと仰せられしに、大方殿御母上傳通院殿と申せし御事なり深く歎き玉ひ、かれが兄源三郎、今川殿へ質とし、駿河國にありしを、武田がために奪はれ、かろうじて彼國を逃れ出て、深雪の中を蹈わけて手足の指みな落ちて、世に交るべき身にもあらず、今また此子都にまゐらすべしとも思はずと、泣きくどかせ玉へば、於義丸殿をぞ登せらる、

〔關八州古戰錄三〕柿崎和泉守景家金井左衞門佐ヲ討取ル事

其間ニ景虎ハ渡瀨川ヲ渡リ、佐野足利ノ境、岡崎山ノ腰ニ下リ、辨當ヲ遣ヒ、息ヲ休メテ、未ノ下刻ニ柿崎以下ノ侍ヲ待著ケ、切得タル首ヲ投捨テ、夫ヨリ佐野表ヘ兵馬ヲ早メラレケレバ、周防守昌綱迫間山ノ後迄迎ヒトシテ出向ヒ、打連テ杤木へ入城シ、叮嚀ノ饗應ヲナシ、申樂ヲ興行シテ暫ク逗留シケル故、景虎三日滯座シテ、平井ノ城ヘ歸ラレシガ、昌綱ガ弟綱千代丸ヲ倶セラレタリ、是ハ猶子ノ約アリト云共、實ハ人質ノ奧意ナリトゾ聞ヘケル、

〔御當家令條三十六〕服忌令追加○中略

一女子婚義以前より養れ、或入聟を取、家督相續之時は、養方之親類不殘實のごとく、相互ニ服忌可受之、○中略

貞享五辰年五月十日

〔三秘集六〕寬政元酉年七月、養女江聟を取、聟離緣、養女も里方江戻し、右ニ付聟ゟ相掛り候一件

根岸肥前守奉行○勘定樣江問合

領分町人之娘、他領町方江緣組之處、其夫致病死候ニ付、娘之實父ゟ娘引取可申哉ニ申遣候得共、舅方直ニ養女ニ貰受、右養女江聟を取候處、子供も有之候、右聟養父不熟ニ而致離別候、依之最初養女ニ貰請候聟を差出候間、雙方談合之上、實父方江差戻申候、其節養父方ゟ、此女ゟ何方ゟも何

之出入無之段、其方ニ而又々縁組等茂勝手次第可致樣之一札を引請申候、乍去差出候聟方ゟ離縁書も無御座候付、追而右聟之方ゟ、彼女子供も有之事故、此方江遣候樣、實父方江申參候得共、實父不致承知候、離縁書無之儀故、夫々縁は切不申者ニ御座候哉、右體之儀御座候はゝ、如何可仕候哉、此段奉伺候、以上、

七月二日　　戸田上總介家來　田口五左衛門

附札　御書面妻方江者離縁書不取置候共、養父致離縁、實方江差戻候上者、夫婦之間茂離縁ニ者無相違間、離縁之聟ゟ女之實方江彼是差障候共、右障者相立申間敷、併聟養子致離縁候上者、娘方江離縁狀不取置候者、養父不念ニ付、及出入候はゝ、其品ニ寄、養父者右不念之儀、輕咎可有之哉ニ存候、以上、

酉七月

〔柳營諸舊例的入〕文化二丑年二月十九日

養女御屆　　寄合　鈴木伊兵衛

私母方從弟達　中山吉次郎娘

右吉次郎娘儀、續之者ニ御座候間、此度私養女仕候、此段御屆申上候、以上、

二月十九日　　寄合　鈴木伊兵衛

〔諸例類纂四〕養母年若ニ付養女差遣、追而再縁願、

文政七申年四月廿三日、御用番青山樣江差出候處、即夕御附札濟、

右ニ付、御附札之御挨拶、兼而申附候趣立歸候而相勤、

但此願書青山樣御近親ニ付、兼而御內慮等相伺置差出候事、尤土井樣ニも御同樣、都而何事も申合罷勤、

土井錦橘養母は、私姪之續御座候、末年若之義ニも御座候得者、錦橘養祖母初親類共一同、再縁爲仕度申聞候、私儀も同樣之存念ニ御座候間、右養母儀、此度私養女ニ仕引取置、追而相應之再縁爲仕度此段奉ㇾ願候、以上、

四月十九日在所御付　岡部美濃守

〔諸例集五〕天保十三寅年五月

神尾山城守目付〇大答

家之娘江致二聟養子一、養父死去致、家督相續、婚儀不ㇾ整內、右之當主致二死去一候而、他江養女ニ遣置、其家子細有ㇾ之、斷絶可ㇾ申付ㇾ處、家柄等ニ而斷絶難ㇾ申付ㇾ候ニ[illegible]跡相續之儀申付、右相續之者江、血脈ニも有ㇾ之儀ニ付、兼而他江養女ニ遣置候家之娘を娶候儀者、不ㇾ相成筋ニ御座候哉、右之趣キ、兼而爲ㇾ心得御問合申上候、以上、

五月十七日　伊達紀伊守家來　齋藤東馬

書面之通者、他江養女ニ差遣置候家之娘を、實家江取戻し置、追而名跡相續之者と嫁合候儀は格別、名跡相續申付候上、右養女儀は養方姉妹ニ相成候間、配偶難ㇾ相成事ニ候、

〔諸例集七〕嘉永四年亥三月十九日、阿部伊勢守殿御下ゲ、了簡下ゲ札ニ而上ル

其身男子無ㇾ之、女子江聟養子致し、右死去之節者、猶又右女子江再聟養子相成、且惣領死去之節者、外ニ男子無ㇾ之候得者、右。惣。領。之。嫁。を。養。女。ニ。致。し。他より聟養子相濟來候、然ル處、後之養子よりは、先養子并惣領者、兄之續ニ相成候ニ付、嫂與配偶致し候筋ニ有ㇾ之、倫理之上ニおいて、如何可ㇾ有ㇾ之哉、篤と評議致し可ㇾ被二申聞一候事、

但男子無ㇾ之女子江聟養子致し、右養子差戾し候節者續もきれ候儀ニ付右女子江再聟養子相願候者不ㇾ苦候事、

御書面之趣、一統仕取調候處、女子へ聟養子致し、婚姻相整候上、養子死去ニ付、再聟養子相成、且實子惣領死去、外ニ男子無之ニ付、右娘を與養子ニ致し、他より聟養子相成候儀、兩樣共是迄諸向より問合有之候節、可相濟旨挨拶仕、又先年聟養子之子より、後之聟養子之子ニ者、相互異父兄弟相成候旨、是又挨拶仕來候、右等之趣合考之上、篤と勘辨仕候處、先夫之妻後夫ニ嫁合候得者、嫂と配偶致し候樣相聞候得共、右者養父之妻不養以前死去候得者、養母之名目無之准じ、養兄之唱も有之間敷哉ニ奉存候、既後夫より先夫之子者、養方ニ而者、叔父甥姪之緒可相成、且又嫡子之娘子與養子ニ致し候得者、右ニ而夫婦之緣切可申哉、左候上ニ而、聟養子與相願候儀故、是又嫂ニ者不相成儀と奉存候、就而者兩樣共配偶致候而も、倫理之上差障之筋有之間敷哉ニ奉存候、御但書文趣者、聟養子離緣之上者、素より續も無之ニ付、不苦儀と奉存候、私共同役一統評議仕候處、書面之通御座候、則御下ケ被下候御書面返上仕、此段申上候、以上、

四月　　深谷遠江守
　　　　大久保斎左衛門

〔大坂要用錄三諸證文〕娘遣し飯料金貰請一札

一札

一我等娘誰と申當何拾何歳ニ相成候者、此度其元殿江差遣し候處實正也、右ニ付我等爲飯料金何程被遣候相對ニ而、卽金何兩慥ニ請取申候、右誰儀、其元殿江差遣し候儀ニ付、脇ゟ名付夫抔と申違亂妨等申もの一切無御座候、若彼是申出候もの有之候はゞ、我等何方迄も罷出、急度埒明、其元殿江少茂御難儀懸ケ申間敷候、爲後日仍而如件、

年號月　　親　何屋誰
　　　　　證人　何屋誰

再養子

何屋誰殿

〔諸例類纂四〕一文政三辰年四月十二日、御目付森川金右衛門様ヘ伺候、

十四日御附札

養子不應心底致離縁候後、養子願之儀、何ヶ度迄者不苦義ニ御座候哉、且亦妻不熟ニ付離縁いたし候後再縁之願、何ヶ度迄不苦義ニ御座候哉、

御附札

書面養子不應心底致離縁候後、養子之義何ヶ度与申御定も無之候得共、離縁之時宜ニも寄て、申儀ニ付、前廣ゟ難及御挨拶候、妻之義も離縁後何ヶ度ニ而も再縁可相濟義と存候、

一病氣ニ而雙方申談候上離縁仕、或者病死等ニ御座候はゞ、養子願幷縁組願之義、何ヶ度も不苦義ニ御座候哉、兼而心得罷在度、此段奉伺候、以上、

四月　　黒田豊前守家來　大森惠助

御附札　書面之通は、養子病氣ニ而離縁又は病死等ニ候得者、是亦何ヶ度ニ而も願可相濟候得共、是以前條同様ニ付、前以取極難及挨拶候、縁組之義者、前段之事と存候、

〔諸届〕養子差戻一件

用紙程村、上包美濃紙貳通折掛、

上書　養子差戻奉願書　　赤井岩次郎

養子差戻奉願候覺

高三百石、　　赤井岩次郎　歳午

御目見未仕候再養子　　御鷹匠戸田五介組　水谷長兵衛四男

赤井金之助 歳午

私儀男子無御座候ニ付、右金之助儀、儀は無御座候得共、再養子仕度、小普請組久世伊勢守支配世話取扱相勤候節、文政十二己丑年十月廿九日、奉願候處、同年十二月廿六日、願之通被仰付候旨、大久保加賀守殿被仰渡候段、其節明支配ニ付、佐野豐前守申渡、同月廿九日、私方𧶠引取申候、然處右金之助儀、私心底ニ應不申、末々熟緣可仕樣子無御座候ニ付、養實一類共雙方熟談之上、實父水谷善兵衞方ニ差戾申度奉存候、依之奉願候、以上、

天保五甲午年何月

赤井岩次郎 書判

小笠原若狹守殿

石河喜左衞門殿

用紙六寸日向、上包美濃紙折懸貳通、

上書 書付

赤井岩次郎

先養子

仙洞附永井筑前守七男
永井鉞之進

私儀小普請組松平石見守支配世話取扱相勤候節、男子無御座候ニ付、右鉞之進儀、由緒も御座候ニ付、養子仕度奉願候處、文政二己卯年五月廿七日、願之通被仰付候旨、阿部備中守殿被仰渡候段、石見守申渡、同年六月五日、私方江引取申候、然處私心底ニ應不申、末々熟緣可仕樣無御座候ニ付、養實一類共、雙方熟談之上、實父筑前守方江差戾申度、本多大和守支配之節奉願候處、文政三庚辰年十月廿三日、願之通被仰付候旨、水野出羽守殿被仰渡候段、大和守申渡、同月廿四日筑前守方江差戾申候、

〔諸例類纂四〕一天保九戊年四月御用番

前田大和守養子私身内鉞七郎義、病身ニ付差戾之義、先達而大和守願之通被仰付候ニ付、私方へ

破談

引取申候、然處尙亦私弟錚八郞養子仕度旨、大和守申聞候、錚八郞義者、鉱七郞次之弟ニ而、大和守儀は同姓ニも有ㇾ之、旁不ㇾ苦義ニ候はヾ、任ㇾ其意、養子ニ差遣度奉ㇾ存候、依ㇾ之此段御內慮奉ㇾ伺候、以上、

四月　　松平出雲守

御書取、書面錚八郞義、前田大和守再養子差遣候ても不ㇾ苦候事、

〔例書三〕一高五千石之御旗本江、六萬石之大名養子ニ可ㇾ差遣ㇾ約束にて、持參金五百兩を付、可ㇾ差越ㇾ候處、右養子六萬石之養子ニて、右大名ゟ申越候者、右之養子ニ母を差添可ㇾ遣由、夫に而者最初之約束ニ而者致ㇾ相違、雙方緣談願書相濟候上、右體之儀申ㇾ之、旗本之方にても、最初約束通ニ無ㇾ之候而者承知不ㇾ致ニ付、及ㇾ破談ㇾ候、併一旦公儀江願書差出願相叶候上之事、公邊無ㇾ事故ㇾ相濟候上之義破談致候而者、六ヶ敷事ニ候、依ㇾ之右雙方最初之家來掛ヶ合、不行屆ニ付雙方願下ゲ之願差出候處、旗本之方遠慮申付、大名之方御目通遠慮、

離緣
離緣養子子女之分

〔享保集成絲綸錄十八〕享保七寅年五月

養子致候者、若養子を返し候儀有ㇾ之時、最前養子致候以後、實子出生候共、其實子家督ニ者被ㇾ仰付ㇾ間敷候間、又養子を可ㇾ奉ㇾ願候、然共右返し候養子、何とぞ行跡惡敷候品有ㇾ之候歟、病氣ニ而決而御奉公難ㇾ成儀ニ相極り、養子返し候はヾ、頭支配とくと承屆、實方へも相尋無ㇾ相違ㇾ候はヾ、可ㇾ相願ㇾ候、輕き病氣又者養父之心ニ叶不ㇾ申候一通之儀迄ニ而、養子返し候得ば、實子に家督は被ㇾ仰付ㇾ間敷候、但右實子御奉公被ㇾ仰付ㇾ間敷儀ニ而無之候、分知奉願候か、外江養子抔ニ遣し候儀は可ㇾ爲ㇾ勝手次第ㇾ候、以上、

五月

〔公事取扱〕跡式養子離別後住幷引取人〇中略

一離別之斷を受候女の親欠落、引取人於ㇾ無ㇾ之は、溜預ヶ、離緣之上、養子ㇾ同所にて同商賣於ㇾ致者養

父ニ對し不遠慮ニ付、養子所を爲立退ル、

〔民事慣例類集養子〕離縁ヲ受ケシ養子ハ、三年ヲ經ルニアラザレバ、再ビ人ノ養子トナルコトヲ得ザル法ナリ、信濃國埴科郡士族例

養子ヲ離縁スルコト三度迄ハ許セドモ、其後ハ許サズ、養父沒後ハ其家斷絶スルコトナリ、又戸主タリシ養子ハ、何等ノ事情アリトモ、離縁スルヲ許サヾル法ナリ、信濃國佐久郡士族例

養子相續後ハ、何等ノ事情アルトモ、離縁スルコトヲ禁ズ、故ニ家内不和合ナルトキハ、其財產ヲ引分ケ、別居スル慣習ナリ、加賀國河北郡○中略

養子離縁ノ時ハ、郡宰役場ヨリ下ゲ渡セシ暇證文ヲ返上シ、離縁願ヲ出シ、許可ヲ受ルコト、ス、阿波國名東郡

養子タル者ニ不品行ノ事故アレバ、名主ノ權ヲ以テ、離縁セシムルコトアリ、此時ハ兩親之ヲ拒ムコトヲ得ザル舊慣ナリ、此郷ノ舊例ニ名子下人等、郷中約定ニ觸ル、等ノ事アルトキハ、名主專斷シテ放逐スルノ權ヲ與ヘタル、舊藩制ナリ、阿波國美馬郡、○中略

聟養子ノ離縁ニ於テハ、別ニ離縁狀ト云フ者ナシ、唯媒介人立會本人持參ノ品物ヲ分割シテ、引渡スヲ以テ、離縁ノ證據トスルノミ、甲斐國八代郡

離縁ノ趣旨ヲ具狀シ、上申ノ後實家ヘ戻ス、其證狀ナシト雖ドモ、官ニ於テ十箇年間ハ、他家ヘ養子スルコトヲ禁ズルノ成規ナリ、養子家督相續ノ後ハ、何樣ノ事件ニテ、實家ヨリ破縁ヲ乞フトモ、官之ヲ許サヾルコトナリ、甲斐國山梨郡士族例

婿養子ナレバ、婿ヨリ其妻ヘ離縁狀ヲ與ヘ、婿養子ニ非レバ、養父ヨリ養子ヘ與ルヲ例トス、信濃國佐久郡

養子入家ノ時、實家ノ村吏ヨリ養家ノ村吏ヘ、村送狀ト唱ヘ、送籍證書ヲ受取リシヲ、離縁ノト

キハ之ヲ舊村吏ヘ戻スヲ例トス、若シ其書損壞遺失スレバ、當人歸籍ノ旨、舊村吏ヘ書面ヲ送ルノミ、別段養父母ヨリ離別狀ヲ與ルコトナシ、信濃國水內郡

〔公用雜纂一〕伯父聟養子差戻願

伯父聟養子差戻願

御使番　筑紫從太郎

津金銀十郎 申三十歲

御小姓組曾我伊賀守組津金孫之丞聟養子 御使番筑紫從太郎伯父

右銀十郎儀、安永七戌年七月廿三日、孫之丞願之通聟養子被仰付候、然ル處、銀十郎儀、近來養父孫之丞心底ニ應不申、始終熟緣之樣子無御座候ニ付、雙方一類共相談之上、銀十郎差戻度段申聞候、銀十郎妻離緣以後、妾腹之忰權之丞、嫡孫承祖願も難申上、右權之丞幷娘共附相戻申度旨申聞候、孫之丞願之通被仰付候樣於私奉願候、以上、

八月　筑紫從太郎

朱書 津金孫之丞ゟ頭江差出候願書、左之通頭ゟ御同番江差上候書面者不相知、

〔德川禁令考後聚八法曹事務〕寬政八辰年十一月

土佐守懸

神田佐久間町四丁目殘地家主平八母ます、相手武州與野町利右衞門外壹人離緣出入、〇中略

差上申一札之事

私共出入再應被爲遂御吟味候處、ます申立候者、養子平八身持不行跡ニ而養父より相讓候金貳千貳百五拾兩之內、追々ニ九拾四兩壹分餘遣捨、其上娘もや病中も、一向看病等も不致、差重り候砌、遊所ニ而髮を被切罷歸リ候事抔も有之、平八、利右衞門、仲人、一同相詫候得共、末年若成者之儀、此以後如何成儀致し、身上潰れに可及も難計、離緣致度旨申之、利右衞門、平八儀者、もや病中打捨

請候儀ニは無之候得共、遊所江罷越、髪を被切候儀等者無相違、讓請候金高も、右之内九拾四両壹分倅遊興ニ遣捨候儀も、是又相違無之候ニ付、右之分は、利右衛門より相償可申候間、何分熟縁爲致候樣致度旨申之候得共、平八身持不宜段者相違なく、養母ます心底ニ不應、熟縁之儀得心不致儀を強熟縁致度申之、利右衛門、平八申立者難立、此上平八彌心底相改候上、追々ます得心之上ニ候はゞ、再縁可致者格別、養母得心不致上者、平八儀は離縁事、兄利右衛門方江可引取旨被仰渡、一同承知奉畏候、若相背候はゞ、御科可被仰付候、仍御請證文差上申處如件、

寛政八辰年十一月十三日

神田佐久間町四丁目代地
家主平八母
願人　ます

野田文藏御代官所
武州足立郡興野村
百姓
相手方　利右衛門

同　右　平八

御吟味ニ付被召出候
神田佐久間町三丁目家主喜右衛門親
捴兵衛

右　喜右衛門

御評定所

〔公用雜纂　一〕聟養子取戻願

（朱書）
享和元酉年二月廿五日、御用番植村駿河守殿江進達、

聟養子取戻願

西丸小十人頭
江馬平左衛門

覺

西丸小十人
江馬平左衛門組

津田大次郎

小普請組堀田主税支配組頭堀助之丞聟養子

堀　喜三郎

一御目見仕候

一弟

右喜三郎儀、養父堀助之丞小普請組水野清六支配之節、男子無御座候ニ付、縁者無御座候得共、聟養子仕度段、天明三卯年五月奉願候處、同年九月十日、願之通聟養子被仰付、十月十三日、助之丞方江引取、娘と婚姻相整申候處、喜三郎儀、近來病身ニ罷成、末々家督相續可仕體無御座、其上助之丞心底ニ應不申候ニ付、養實親類共雙方熟談之上、助之丞娘と離緣爲仕、喜三郎捴領堀異太郎次男堀德之丞儀者、助之丞方ニ殘置、喜三郎儀實方江差戻申度段、助之丞奉願候、依之右喜三郎儀、大次郎方江差戻申度奉願候旨、去酉十二月、戸田采女正殿江元支配船越駿河守中上置候、然ル處、此度西丸小十人組江御番入被仰付、私組ニ罷成申候間、猶又奉願候段、大次郎申聞候、願之通被仰付被下候樣仕度奉存候、以上、

二月廿五日　江馬平左衛門

雙方熟談之通、養子喜三郎儀、娘と離緣爲致、實方江差戻候樣申渡候、且又喜三郎悴異太郎德之丞儀は、助之丞方ニ殘置候儀、勝手旨申渡候段、其段も可被申渡候、

〔柳營諸舊例的一〕文化四卯年二月五日

養子取戻願

寄合　金田猪之助

小普請牧野若狹守支配多賀左衛門養子金田猪之助之兄

多賀源之助

右源之助儀、寬政六年七月廿五日、多賀左衛門養子奉願候處、同年十一月十九日、願之通被仰付候、然ル處源之助儀養父左衛門心底ニ應不申、始終熟緣之樣子無御座候ニ付一類共相談之上、私方

江差戻申度、且源之助妻儀者、左衛門方ニ而離縁爲仕度、一同申聞、今日養方實方雙方熟談之上、源之助儀、私方江取戻申度、此段奉願候、以上、

二月五日　　寄合　金田猪之助

御附札

雙方願之通、源之助實方江差戻候樣申渡候間、引取候樣可被致候、

〔諸例集三〕村山大和守挨拶

娘江致聟養子、男子出生有之上、右養子を致離別、出生之男子者、養父手前ニ差置候得者、孫ニ者候得共、其家之相續ニ者難相立、且他江養子ニ遣候儀者、差支不申哉之旨、先達而御問合申上候處、聟養子之子、養子離別之後、養育之爲差置候共、祖父之家督相續は難相成、祖父之方ゟ他江養子ニ遣候儀ハ、難相成事ニ候間、御附札を以御挨拶御座候、右養子ニ男子出生有之、右男子之内、祖父ゟ他江養子ニ遣し候以後、右聟養子ヲ致離別候得者、右他江遣し置候孫者、實孫之緣者離候哉、

書面之通者、聟養子ニ男子出生有之、右男子之内、祖父ゟ他江養子ニ遣し候後、聟養子ヲ致離別候而も、孫之續相替候儀無之候、

一致聟養子、右養子を本家等江養子ニ遣し候得者、離別ニ而者無御座候得共、先養方服忌無之、他人之譯ニ候得者、右聟養子手前ニ罷在候內、男子出生有之、右出生之男子祖父之手前ニ差置候共、離別之養子同樣孫之緣者離れ候哉、然者實孫之續を以、祖父之名跡等ニ可相願筋目ニ者無御座候哉、

書面之通者致聟養子候、右養子を本家江相續之養子ニ遣候而も、手前ニ罷在候內、出生之男子、祖父之手前ニ差置、追而實孫之續を以、祖父之名跡相續相成候儀と存候、

一孫被召出置候者、其父致離別候共、右被召出候孫者、離別以前被召出候者ニ付、孫之續柄等相替

儀無御座候哉、又は右孫茂離別之趣ニ候哉、

書面之通者、孫被召出候者、父致離別候儀、御家ニ無之候得共、前同様ニ付、孫之續相替儀無之候、

右之趣承知仕度奉存候事、

天保二卯年七月　　松平加賀守内　青地藏人

〔諸例集四〕初鹿野河内守〇大目付答

某養女江聟養子相願、婚姻相整、其後某隱居、聟養子家督相續罷在候、然ル處、右夫婦不熟ニ付、養子得心之上、養女を致離縁、養父方江引取候上、右離縁之女、實方江差戻申候儀可相成候儀ニ御座候哉、

書面之通者、不苦儀与存候、

一右養女致離縁、實方江差戻候段、隱居養父ゟ屆伺仕候儀ニ可有御座候哉、且聟養子ゟ妻離縁いたし、養父方へ差戻候段、屆出候儀ニ可有御座候哉、

書面之趣者、養女離縁致し、實方江差戻可申旨、養父申聞候趣を以、當人ゟ相願、養女之實方よりも取戻之儀相願候儀与存候、

天保七申年七月晦日　　内藤因幡守家來　梅津善右衛門

〔諸例集四〕松平出羽守家來より問合

初鹿野河内守答

某何某娘を養育養女ニ致し、他江嫁遣候處、夫死去、先方難澁付而、右後家養育難相成、仍養育養女之親方江引請養育致し居候處、追而右後家之實親里江養育戻し致し候得者、右嫁先方之後家与申名目者放れ、縁も切れ、實親里之家内相成候哉之事、

書面幷別紙之趣者、養女を他江嫁候處、夫死去ニ付、雙方熟談之上、夫之母より及離緣、養家江差戻、其後養女之緣を切、實親方へ差戻候共、再緣取組結納相濟不申時者、姑娘之名義不相離候ニ付、後家之名目ニ有之候、

別紙御伺申上候主意者、他江娘を養育養女ニ致し、外方へ嫁遣し置候處、夫死去、跡家内脇手向難澁、右後家養育難相成付而、夫之母より後家之里方江差戻度旨、雙方熟談之上ニ而、則養育養女之親江引取養育致し置、其後又後家之實親里江談合之上、養女戻しニ致し候儀ニ而、夫死去、其母より差戻候儀ニ御座候得共、全離緣ニ御座候間、別紙御問合申上候趣ニ而、緣も切、後家と申名目も無之樣仕度奉存候間、其處御含、乍御面倒御取調被下候樣奉願候事、

天保八酉年

〔諸例集六〕弘化三年五月

稲生出羽守〇大目付答

一養子致し、追而右養子江、外ゟ妻を迎、男子之子供致出生候處、右養子身持不宜候ニ付、養父ゟ致離緣候得者、妻子共、養子之方江引取候儀ニ候哉又者妻者直ニ緣切レ養家ニ差置候御定ニ候哉、聟養子之者致離別候節者、直ニ緣切レ、出生之子供者養子之もの召連、實家江引取候御定之趣ニ候得共、前文之通り、養子ニ致し候上、追而迎候妻之儀ニ候得者、養子離緣之上者、妻子共召連、實家江引取候儀ニ可有之候哉、

書面之通者、妻子共召連、實家江立戻り可、然存候得共、妻離緣之儀者、其時之時宜次第與被存候

一右養子之妻、養家江差置候儀ニ候はゞ、追而養父養女ニ致し、聟養子致し候而も不苦候哉、

書面之通者、前條之次第ニ付、養子之妻離緣相成候上者、致養女ニ候而も苦カル間敷被存候

一右出生之男女、追而相應之儀ニ有之候はゝ、養子養女ニ差遣又者縁付ヶ候而も不苦候哉、

書面之通者、實家江連歸り候男女子、實家ゟ他家江養子養女ニ差遣し不苦候、

右之趣、兼而爲心得奉伺候、以上、

酒井若狹守家來
河合長左衛門

五月廿一日

遠藤但馬守殿

〔諸例集七〕堀伊豆守、遠山半左衛門評議申上、

實子無之者、他人を養子ニ相願、嫡孫ニ而出生候以後、右養子、養父之心底ニ應じ不申、實方へ差戻し候節は、嫡孫も養子江附、實方江相返し候、右養子ニ實方無之、他人を養祖父ゟ、孫養子ニ相願、以後養子心底ニ應じ不申、實方江差戻し候節、孫養子之方は、孫養子之實方江差戻し候方、相當之筋ニ可有之哉、又は養子之實悴共違候、且者心底ニ不應與申ニ而無之上者、養子計實方江差戻、孫養子者殘し置、追而嫡孫承祖ニ相願候而も苦カル間敷哉、養子も他人、孫養子ニ而他人之事故、右養子差戻ニ相成候上者、祖與孫與之名義難相立、嫡孫承祖ニは相成申間敷哉、得與了簡致し可申上旨、御別紙御書取を以、被仰渡候趣、取調候處、私共方ニも、右樣之書留相見不申候ニ付、勘辨仕候處、一體實子無之者、他人を養子ニ相願、嫡孫も出生仕候後養子病死仕候歟、病氣ニ而退身仕候共、右養子之悴、嫡孫承祖ニ相願候儀、論も無之候得共、養子出奔致し候得ば右養子嫡孫承祖ニ相願候儀難相成、又養子養父之心底ニ應じ不申、離縁候節は、嫡孫も養子江附、實方江差戻し、女子ニ候得ば、雙方熟談次第之儀與相心得罷在候、養子ニ實悴無之孫養子仕候節、願書は養祖父ゟ差上候共、此儀は畢竟家督之者ゟ相願候譯にて、祖父之養子ニ仕候儀ニは無之、養子之養子ニ相願、家督者當然之次順を以、養子ゟ孫養子之方江相讓り可申儀ニ御座候得共、親子之名義尤重ク、實悴ニ而も、養子ニ而も、系統之筋者差別ニ而無之與奉存候、且又服忌請方ニおいても、部屋住之者の養子相成候

者、養子部屋住之內致退身、右養子嫡孫承祖ニ相成候得ば、祖父母死去之節、五十日十三月之服忌ニ而、其外之親類忌服差別無之、尤養實之差別も家督相續ノ養子之通請候儀ニ有之、假令家督は祖父ゟ讓請候共、一旦其父ニ被養候得ばこそ、嫡孫承祖ニ相成、其家ヲ相續仕候事ニ候得ば、遺跡相續分知配當せざる養子之忌服請方與は譯も違矢張其家ニ而致出生候者同樣之恩義ニ付、養子與孫養子與之親儀は雖相離、父子之間は右樣重キ筋柄ニ御座候處、養子病氣ニ而退身致し候共、嫡子を除キ候迄ニ而、其家は離れ不申候ニ付、其養子たる者、嫡孫承祖ニ相成、養父母之服忌も實父母同樣ニ請候得共、養子儀、養父之心底ニ應じ不申、及離縁、實方江差戻候上は、養子與孫養子與之系統、其處ニ而相離、祖父與嫡孫與之名義は難相立候ニ付承祖ニ可相顯道理絕而無御座、然ル上は、不熟ニ而、養方實方江差戻し候節、孫養子も實方江差戻し候而、相當之筋與奉存候、私共同役一統評議仕候處、書面之通御座候、則被成御下ゲ候御別紙返上仕此段申上候、以上、

九月(嘉永三年)　堀伊豆守

遠山半左衛門

〔大坂堺問答(坤)〕一、夫死去、後家江養子に當り認數といふ共、不慥におゐては、後家心任に而可讓分筋に者不申付候、

但夫死後養子心ニ不應候共、後家之心儘にて離縁之儀者、容易ニ申付間敷候、

此儀當表(大坂)ニ的例不相見候得共、夫死後當時名跡相續之養子ヲ、養母心任ニ不應候付、離縁致度旨、養母并親類一同相願吟味之上、江戸表江相伺、依御下知離縁聞屆候儀、先例書留相見候、(中略)

一聟養子養父母不叶心ニ及離縁候後娘と夫婦之縁切候儀不得心申立、離縁狀不差越、又者再縁相妨、或右之娘ヲ誘引出し候旨、養父願出候節者養父母及離縁候上者、娘と夫婦之縁も相絕候段申聞、再縁等元養父存心次第ニ可申付候、

再縁

但養家は離縁請候へ共、娘者離縁不致差置有之候間、引取度旨、養子願出候共不取上、本文ニ准じ可取捌候、

此儀養父心底ニ不叶離縁、右養子差返候後、家付之娘江元養子ゟ手疵爲負候儀有之、離縁之妻江手疵爲負候御仕置には不相成候、先例在之候得共、其餘何れにも及裁許候書留相見不申候、○中略

一御代官所私領養子離縁出入者、跡式出入と違候付、於當御役所ニ取捌可申候、併養子ニ家名切替、商筋家財等相讓候後、離縁出入および候はゞ、跡式出入同前ニ、其支配之役所江願出候様可申渡候、何れにも養子離縁出入願出候時は、相手呼出、返答書爲差出候上、右之趣取計可申候、

此儀、於當表者、跡式又者養子等之出入者、他領懸合訴出候共、先方之地頭御代官江可願出旨申聞、取上申間敷候、若先方之裁許不行屆之事も候はゞ、地頭或御代官江承屆候上、猶落着不致候はゞ可相伺旨、寶暦五亥年、其節之御城代松平右京大夫殿御書付ヲ以被仰渡候付、支配國内にても、御代官所又は私領養子離縁跡式出入共取上不申候、尤養子ニ家名前相讓候以後、差別ヲ以取上候先例書留不相見候、

〔諸例集 三〕天保三辰年五月

村上大和守挨拶

實孫ヲ養子ニ致置、右之養女江聟養子婚姻相整、男子出生仕候、然ル處、無餘儀譯ニ而、右妻及離縁、養子者其家家督相續罷在、養女者雙方熟談之上、里許江差戻し申候、然ル上者、雙方共再縁仕不苦儀ニ御座候哉、

但右養女與養子與者、伯父姪之續ニ御座候得共、一旦婚姻相整候上者、相互ニ忌服不請儀ニ相心得罷在候、相互ニ再縁取結候者、服忌之差別有御座候哉、

右之趣、兼而心得罷在度、此段奉伺候、以上、

五月廿二日　　淺田近江守家來　秦彥右衛門

書面之通者、雙方共再緣組致し不苦儀と存候、且但書之趣は、服忌之儀ニ付、別紙を以可被問合候、

村上大和守挨拶

聟養子たるもの婚儀相整、家督相續之上、養父母死去以後、養父之娘不熟等ニ而、離緣致し候節、不埒有之方を再緣差留、雙方不埒筋ニ而離緣いたし候節者、雙方再緣差留候儀ニも可有御座哉、一通不熟之譯ニ而離緣仕候得者、雙方再緣不苦譯ニも御座候哉、且又再緣差留候儀者、離緣相濟ませ候節申付候儀ニ御座候哉、又者追而再緣願出候節、差留候儀ニ御座候哉、此段御問合申上候、以上、

天保四巳年七月廿六日　　松平和泉守家來　畑田八郎

書面、聟養子たるもの婚儀相整、家督相續之上、養父母死去以後、養父之娘不熟ニ而致離緣候儀、親類熟談之上ニ候はゞ、相濟候儀と奉存候、尤雙方共再緣之儀難相成筋と奉存候間、末々厄介ニ致し置候事と奉存候、

養子金

〔憲敎類典三ノ十三 家督養子〕享保十二丁未年三月十日

畔柳助九郎組御仲間高橋吉大夫事、實子有之處、金銀を以養子之契約いたし、不埒成仕方ニ付、御仕置被仰付候、御抱入之者は格別、輕き者ニ而も、御普代筋之者致養子候節、金銀を以契約仕儀有之間敷事ニ候處、末々ニ至りて、折節者不埒成養子取組候者有之事ニ候間、自今以金銀養子取組不仕候樣ニ、頭々兼而相心得、無油斷遂吟味可被申候、尤養子取組候儀者、親類之內、相應之者無之候はゞ、御直參之次男三男又は弟抔之内を、取組候樣ニ可申聞候、以上、

三月

（古張紙）寛政十午年六月四日

貸金銀出入取計申合之内、持參金、離緣後滯願出候儀ニ付、評議之事、

御相談書　　村上肥後守

一三十日限之上、切金ニ可成御定ヶ條之外、家質船床髮結床書入、奉公人給金滯、慥成質物を以、借候金銀、爲替金、并質地且買預米等之類者、御觸以前之分ニ而も取上可申事、

右之通有之候處、右三十日限之上切金ニ可相成ヶ條之内、持參金之儀、去巳九月以前金子差添、養子ニ遣置、九月後ニ相成、及離緣候處、右持參金養父方ゟ不相返候旨、里方之もの願出候は丶、取上裁許申付候方ニ可有之哉、最初養子ニ遣候は、九月以前之儀ニ而も、九月後ニ相成離緣およひ、持參金不相返候上者、其節借受金子同樣ニ相當可申、其上外貸金とも違、其もの之身分ニ付候金子ニ有之候間、旁九月後離緣および候共、持參金濟方願出候は丶、取上可然哉ニ存候間、此段及御相談候、

右之通一座評議極

（御觸御達留）養子取組之儀者、筋目等相糺候儀、勿論之事ニ候處、近年者持參金專ら拘り取組候儀も、間々有之哉ニ相聞、左樣ニ者有之間敷事ニ候、既ニ安永三午年、無急度相達候趣にも有之候處、年數も相立候儀ニ付、猶又右之趣相心得、女子緣組之儀も右ニ准じ心得違無之樣可致旨、向々江可被達置候、

右之通、天保七申年相達置候處、養子取組之儀、兎角持參金相拘り候流弊、今以相止不申哉ニ相聞如何之事ニ候、今度質素節儉之儀ニ付、被仰出も有之候折柄、旁養子緣組等之節、持參金之儀者、向後聊たりとも無之樣銘々厚相守可申候、若此度相觸候趣等閑ニ相心得、如何之筋も相聞候は丶、急度御沙汰之品も可有之候條、心得違無之樣可致候、

一養子致し候節、其家々之弟又は厄介之內、筋目有之者ニ而も、實ニ病氣往々御奉公も難相勤程之者、廢人ニ致し候儀無餘儀筋ニ候得共、左も無之者ニ而も、病氣等之申立ニ而相除候上、他へ養子相願類も、近頃追々有之、是以多く持參金ニ拘り候儀と相聞、養子之本儀を取失ひ候筋ニ相成、且者厄介一生之浮沈ニも相響、尤以歎敷義ニ候間、向後右體不都合之義は無之樣、其筋ニ而能々遂吟味、都而正路之取計候樣可致候、

右之通、向々江可被相觸候、

七月〇嘉永六年

〔公事取扱〕跡式養子離別後仕并引取人〇中略

一養父仕方惡敷よしニて、養子仕形穩便ニ無之實父方へ歸に於ては、持參金相對は各別、不及裁許、〇中略

一聟養子不縁たりといへども緣絕之證文も不取替、聟養子ゟ離別之狀も不取替、剩雙方外へ片付候うへ、及訴論類は、不埒の仕方ニ付、持參金公儀江取上ル、〇中略

一聟遺跡妻養子の氣ニ不入離緣之上は持參金は不及裁許、養子之諸道具は、去狀遣し候うへにて、可爲返之、

〔大坂堺問答〕一養子聟養家遺跡相續之處、妻儀右養子聟氣に不入、實方江罷歸離緣之上者、初養子持參之儀者不及裁許、養子之諸道具者、離緣狀遣候迄にて可爲返候、

此儀御同意には存候得共、於當表〇大坂及裁許候先例相見不申候、〇中略

一聟養子不緣ニ候共、離緣證文幷養子ゟ娘之方江離緣狀互に不取替、雙方外江片付候上、及訴論ニ候者、不埒之儀ニ付、持參金可取上候、

此儀、當地ニ及裁許候先例無之候、〇中略

一養子持參銀幷諸色、離緣之時者、金銀出入同樣可申付候、

但死罪之時は、相對次第申付候、尤離緣ニ候共、子供有之、養家江殘置、養父遺跡相續極置候ば、父子忌服血筋にて、互に請候事故、相對次第可申付候、

此儀養父ゟ致離緣候養子持參金者、金銀出入同樣ニ濟方申付、諸色者早々爲取戻候、且但書者取計御同樣に御座候、

猶子

〔御成敗式目抄持〕一女人養子事○中略

猶子ト云ハ、漢朝ニハ甥ヲ云也、

禮記ニ、兄弟ノ子ハ猶子ト云ゾ、日本ニハ、他人ナレドモ我子ニスレバ猶子ト云、コレモ我子ノ如シト云心ニ合ヘバ、其理アル歟、養子猶子モ字ノ心ハ替レドモ、我子トスル處ハ同キ也、

〔御成敗式目追加〕一他人和與領事同日、讓狀ニ、養子ノ字ヲ載ツレバ悔返ス、堅固外人ニハ和與ヲユルサレズ、法意ニ同歟、

右因子孫讓他人之條、結構之趣非無奸謀、不闕御恩私領、向後可被召彼和與地○地、一本作狀、也、但○但、一本作又爲字二兄弟叔姪之近親者、非禁制之限、又雖爲傍官幷遠類之子息、年來爲猶子、令收養者、不及子細矣、

〔御成敗式目〕一不論親疎被眷養輩違背本主子孫事

右爲人之輩、被親愛者如子息、不然者又如郎從歟、爰彼輩令致忠勤之時、本主感歎其志之餘、或渡宛文、或與讓狀之處、稱和與之物、對論本主子孫之條、結構之趣甚不可然、求媚之時者、且存子息之儀、且致郎從之禮、向背之後者、或假他人之號、或成敵對之思、忽忘先人之恩顧、違背本主之子孫者、於得讓之所領者、可被付本主之子孫矣、

〔吾妻鏡四〕元暦二年○文治元年三月三日丙戌、有左馬頭義仲朝臣妹公、是先日武衞御臺所有御猶子之契、而自美濃一村有御本、同、在國、上洛、○下略

〔諸門跡譜中〕三寶院

養弟
養孫

滿濟准三后

權大納言藤師冬卿男、權大納言基冬卿孫、征夷大將軍源義滿公爲猶子、○中略

政深權僧正

近衞後知足院左大臣房嗣公男、攝政右大臣兼嗣公孫、征夷大將軍義政公爲猶子、

〔近代帝王系圖〕伏見宮

榮仁親王號有栖川

應永五年五月廿六日出家四十八歲

貞成親王號伏見、後小松院御猶子、

應永卅二年四月十六日親王宣下、文安四年十一月廿七日尊號太上天皇七十七歲號後崇光院、

〔皇胤紹運錄〕後土御門院中略母嘉樂門院、內大臣信家猶子、實藤原孝長朝臣女、

〔阿州將裔記〕貴康○足利

多康二男也、但猶子にて信康○今康長男より年兄なるよし、號安宅河內守、淡州由良ニ居城す、

〔文久二年雲上明覽上〕御宗旨淨土、號華頂御殿、

知恩院入道尊秀親王十一

條品

今上仁孝御養子、大樹公德川家齊御猶子、實伏見入道禪樂親王御子、

○按ズルニ、皇族猶子ノ事ハ、帝王部皇親篇ニ詳ナリ、

〔享保集成絲綸錄十八〕元文元辰年八月

親類遠類又者由緖有之者ニ而も、養弟又は養妹にいたし候儀、向後可爲無用候、養はすして不叶子細有之者は、養子ニ可相願候、緣談取極候ニ付、養女ニ致し可願奧存候而も、養女難成年齡ニ候

補說

は丶何之續或は何之由緒有之、手前へ呼取、誰方へ婚姻相願候と願出可相認候、

右之趣可被相觸候、

八月

〔諸例集三〕天保五午年九月

初鹿野河内守挨拶

御問合　長井五右衛門

父も養子、其身も養子之時、養父之實方、親類書ニ相互ニ書載申候、養祖父養子ニ而、養父は實子、其身養子之時者、養祖父之實方遠類書ニ相除來候、右等之續者無續與相心得、由緒之心得ニ而可然哉、此段及御問合候、以上、

九月

書面之通者、大伯叔之唱者有之候得共、遠類書江不及書載候、

天保五午年八月　荒井三之丞ゟ問合

養子養祖父　實子養父　養子其身

（實家之兄弟養父ニ者實伯叔之續）

其身者、養父之方之大伯叔父之續ニ相成候哉、又者續無之書面ニは書出不申候哉、

下ケ札

書面之通者、大伯叔父之唱者有之候得共、遠類書江不及書載候、

〔例書六〕一上州村方之內、富家之百姓ゟ、悴を養子ニ遣候處、養父と實父不和ニ而、養難儀之旨訴出、養父呼出し、其方養子趣意有之間敷候得共、一旦實父方江相返可申候、實父方ニ而者、悴受取可申候、最初養子ニ遣候節、仲立何與申者ニ候哉、其者呼出、右之悴を貰請、其方子分ニ致し、養父方江其方悴ニ致し、養子ニ可遣旨申渡ス、〇中略

一養父權兵衛存生之內、實父八右衛門悴八之丞ヲ養子ニ貰受候約束致し置、弘メ者不相濟候得

共、約束致候證據者有之候、然ル所、養父權兵衞終命後、約束者致候得共、忰八之丞者養子ニ仕間敷と申、不埒成實父八右衞門申方ニ付、及出訴候、訴訟方尋候者、養父權兵衞存生之內、八右衞門忰八之丞養子ニ可致と申約束致候者、如何之譯ニ而其方承屆候哉、權兵衞親族者、其方外ニ者無之哉、訴訟人答候者、私儀者、權兵衞弟權助忰ニ而、權兵衞儀者、私伯父ニて、今般御訴申上候ニ付、諸親類共相談之上御願申上候、然處伯父權兵衞病中私を呼寄申聞候者、我等家督之義者、八右衞門忰八之丞養子ニ致、家督相續爲致候積、兼而八右衞門對談、外親類共江も及相談候處、何レも致承知候得共、就中其方引請世話致し吳候樣、權兵衞申置候段申ニ付、尋候者、權兵衞、八右衞門、私三人面會之上、規定者不仕候得共、權兵衞命終際任申口、右之段八右衞門江談候處、以之外相違成義ニ付、御願申上候義ニ御座候、依之權兵衞滅後に至、其方右養子之義取計可申、慥成證從有之哉尋候處、外慥成證據何ニ而も無御座候得共、先達而權兵衞方ゟ用立候金子有之候ニ付、權兵衞存生之內、右之金子者、忰八之丞養子ニ貰請候得者、右之金子者、我滅後ニ八之丞と申合、如何樣とも可相成事ニ候、幸我等家督相續致候者無之候間、始終其元手都合ニ茂宜有之候間、八之丞者是非我等養子ニもらひ度旨、權兵衞存生之內八右衞門と約諾仕候由ニ御座候、尤權兵衞、八右衞門申候者、我等甥姪共有之候得共、何も銘々其親ども家督相續候得者、八之丞養子貰請候儀者、權兵衞存生之內八右衞門と規定仕候義、權兵衞ゟ私江申聞候義ニ付、私儀者、伯父權兵衞存念相立申度、此段御願申上候、依之相手方八右衞門江尋候者、如何之譯ニ而權兵衞と約諾致置候忰八之丞を、養子ニ不遣候哉申聞候處、八右衞門申候者、權兵衞存生之內八之丞を養子ニ可遣段約束仕候得共、誠ニ內談而已ニて表立候事ニ而者無之候得者、同村茂八と申者江八之丞養子ニ可遣約束仕候、尤權兵衞方ニ者權助忰權次郎子供傜多有之候得者、權兵衞家督ニ者、右之者共之內養子仕、如何樣ニも權兵衞家督相續可相成義と奉存候、勿論權兵衞

ゟ借用金之儀者、當暮迄急度返濟仕申積、兼て心懸罷在候義ニ御座候段申上候處、扱人有之内濟仕候趣は、八之丞儀、最初權兵衞ゟ約諾仕候通、一旦權兵衞方江養子ニ遣し置、訴訟人權次郎弟權九郎を八之丞養子ニ致し、右家督相讓り置、八之丞義者、同村茂八方江亦々養子ニ罷越候而、右權九郎後見仕候積、權兵衞ゟ八右衞門江先達而借用金五拾八兩之義者、當時三拾兩差出、權兵衞家江相渡、殘貳拾八兩之義、當秋收納後十一月迄ニ返濟致候筈ニ而、雙方和談内濟仕候、

〔守國公御傳記　三〕凡ソ養子嫁娶トモ御譜代ノ諸侯タルベシ、故アル時ハ國主柄間モ緣ヲ結ブコトアルベシ、内規矩アリ尤其家風ヲ能々撰ブベシ、附ノ者ハ無キ方然ベシ、若シ有ルトモ一人ニ過グベカラズ、

右ノ條件必遵守シテ、踰越アルベカラズト示シ置キ玉フ、

〔小普請世話取扱書拔〕養子望無之

存念書

竹中金次郎

竹中正三郎

私共儀、筋目之儀にも御座候ニ付、錠次郎養子ニ可奉願候處、當家之家督、望無御座、他家相續仕度奉存候、其上弟定之丞儀者、亡父存生中ゟ錠次郎養子ニ取極、一類共一同熟談仕置候義ニ付、於私共も聊存念無御座候、御礼ニ付、此段以書付申上候、以上、

文久二年戌十一月七日

竹中正三郎印

竹中金次郎印

青木二郎兵衞殿

古事類苑

政治部六十六

下編

隱居

鎌倉幕府以後モ、老年若シクハ疾病ニ罹ル時ハ、仕ヲ辭シテ家ヲ相續者ニ讓ルハ、普通ノ例ナレドモ、少壯ニシテ隱居スルモノモ往々アリ、又罪過ニ由リ、隱居ヲ命ゼラルヽモノアリ、モノモアリキ、而シテ隱居後仍ホ職ニ從ヒ、若シクハ再ビ職ニ就キ、及ビ隱居ニシテ相續者ノ後見ヲ爲シ、見後見篇又他家ニ入リテ養子ト爲ル等ノ例モアリキ、鎌倉幕府時代ニ在リテハ、幕府ノ家人ハ、許可ヲ得ズシテ遁世スル時ハ、所領ヲ沒收スル制ナレドモ、正當ノ理由アル時バ然ラズ、德川幕府時代ニハ、幕府ハ家人ニ對シテ、間隱居料、隱居扶持等ヲ賜フ事アリキ、猶ホ罪過隱居ノ事ハ、法律部下編隱居篇ニ詳ナレバ、宜シク參看スベシ、

〔御成敗式目追加〕一不蒙御免許、令遁世後、猶知行所領事、仁治二十一十七

右或及老耄、或依病患、以所領所職讓與子孫、給身暇令遁世者、普通之法也、而未及老年、無指病惱、不蒙御免、無左右令出家、猶知行所領事、甚自由之所行也、自今以後如此之輩、處于不忠之科、可被召所領也、但兼日以子孫幷養子爲代官、於致奉公者、不及子細歟、爲遁世俄稱養子、至令吹擧者、不能叙用、兼又乍浴關東之御恩、居住京都幷他所、不致官仕者、同以不可領知其所、抑本自祗候京都之輩、預關東之御恩者、非沙汰之限、

在職中隱居

〔新編追加雜務〕一七拾已後讓事

不可有其難矣

〔建武以來追加〕一七十以後讓狀、可有許容哉否事、曆應

引勘之處、令條之文不分明、然而於祖父母父母讓者、數度雖改易已後狀可用之由、法家輩所勘來也、更無制禁、七十以後讓雖不可有其難之由永正二十一七被定置訖、然者旁無異儀哉、

〔信玄家法下〕一隱居之時、不可假其子之力事、碧岩曰、榔標横擔不顧人、直入千峯萬峯去、又云、犯是非來莫辨我、浮世穿鑿不相關、

〔憲教類典三ノ十三家督養子〕享保元丙申年閏二月○中略

一、前々之如くに一子を以て本家を相續せしめ、或者老後に及び、或は病身に至るといへ共、其家を讓るべきもの無故によりて、隱居の願も難申輩は、其旨を言上すべし、別儀を以、公儀之勤仕御免あるべき事、

附、分知之所領は、其身一代之後に本家へ還し入候上者、常々召仕候家人等、流浪無之樣に、本家におゐて扶助の事者勿論たるべき事、

〔德川禁令考十九隱居願雙制〕文久元辛酉年三月廿八日

布衣以上役人乍勤隱居願不苦旨達

大目付
御目付　江

布衣以上御役人之內、追々老衰および隱居仕度心底ニ而も、御役御免相願、一旦寄合相成候儀を殘念に存、身體不自由ニ而も、可也立居も相成候分者、取續御奉公相勤居候儀ニも可有之哉、右等之分は、向後布衣以上ニ而も、老衰および御役難相勤ものは、御役御免相願候に不及、乍勤

隱居可被仰付候間、右之心得を以可被相願候、尤老衰御褒美隱居料之儀者、都而前々之振合を以被下ニ而可有之候、

三月

右之趣、向々江寄々可被達候、

〔諸家系圖纂勢州〕貞經〇註略

抑足利ヨリ尊氏將軍ノ御供ニテ、貞經上洛シ給ヘリ、〇中略然處ニ自公方召テ貞經老後ニ至、政所職可致苦勞間、貞國家督可讓旨被仰出、即刻伊勢守ト號テ政所職ヲ請取御役ヲ勤ル、貞經ニハ爲隱居領ト、紀州ノ内吉野郡ヲ拜受仕リ、其ヨリ寺内〇眞如堂不殘總堂立直シ、寺内セバキニヨリ、後ノ河原ヲ眞如ノ内ヘ入進ル、則貞國知行ノ内也、

〔岩淵夜話中〕權現樣御隱居被遊候節、將軍樣〇秀忠ゟ本多佐渡守を以、御寵被遊義有之、御用相濟候已後、佐渡守ヘ被仰聞候、

〔藩翰譜一保科〕正光卒しぬれば、卒せし年月日未だ詳にせず幸松丸殿其家を繼、元服し玉ひて、從四位下肥後守正之朝臣とぞ申ける、〇中略寛文九年四月廿七日致仕、同き十二年の十二月十七日、六十四歳にて卒せらる、

〔進物獻上略記〕松平肥後守〇保科正之家

寛文九酉年五月十二日隱居之節

小脇差來國光代金百五十枚　御茶入信助　願書義經自筆　松平肥後守正之

御臺樣江　堤中納言集紀貫之連歌

〔柳營諸例的一〕隱居家督願　一、

隱居家督奉願候覺

寄合　山本豐前守

高三百石　寄合　山本豐前守 丑七十三歲

御目見仕候　實子惣領　山本喜平治 丑三十六歲

右之外男子無御座候

私儀、年來持病之腰痛仕罷在候處、老衰在候上、當春以來度々痛强、其上積氣ニ而相勝不申候ニ付、色々養生仕候得共、兎角同篇ニ罷在、此上全快仕、出仕等可仕體無御座候に付、私儀隱居被仰付、實子惣領喜平治江家督無相違被下置候樣奉願候、以上、

文化二乙丑年十二月三日　寄合　山本豐前守印判

松平能登守殿

井伊兵部少輔殿

京極備中守殿

堀田攝津守殿

隱居家督願　寄合　鳥居權之助

隱居家督奉願候覺

高千五百石　寄合　鳥居權之助 寅六十三歲

高三百俵　御小姓　養子惣領　鳥居越前守 寅二十九歲

外御役料三百俵

實父角南主膳正死、次男、寛政五丑年十一月十八日願之通聟養子被仰付候、

右越前守儀、寛政九巳年閏七月十七日、部屋住ゟ被召出、御小納戸被仰付、同年十月廿六日御小姓被仰付候、

右之外男子無御座候

私儀、御先手相勤罷在候處、就病氣、享和三亥年二月十三日、願之通御役御免、寄合被仰付、緩々養生仕、雖有仕合奉存候、然ル處、今以眩暈同篤ニ罷在、其上疝積別而相勝不申、此以後全快仕、出仕等可仕體無御座候、依之私儀隱居被仰付、養子惣領越前守江家督無相違被下置候様奉願候、以上、

文化三丙寅年八月廿一日　　寄合 鳥居權之助 印判

植村駿河守殿

井伊兵部少輔殿

京極備中守殿

堀田攝津守殿

疾病隱居

〔吾妻鏡 三十七〕寬元四年四月十九日庚申、武州(○北條經時)御不例事、危急之上、執權既及譲補儀之間、今日被落飾、(法名安樂)大藏卿法印良信爲戒師云云、

〔柳營諸舊例的 一〕文化二丑年三月七日

一隱居家督願　　寄合 大草織部

隱居家督奉願候覺

高三千五百石　　寄合 大草織部 丑四十一歳

御目見仕候　　養子惣領 大草主膳 丑二十一歳

實父(俗名丹波守久世一隅飛)四男、享和元酉年四月三日願之通聟養子被仰付候、

右之外男子無御座候

私儀、年來持病之痔病ニ而難儀仕候處、近來痔漏之症ニ罷成、逆上仕、取分差塞、眩暈強、別而相勝不申、此上全快仕出仕等可仕體無御座候、依之私儀隱居被仰付、養子惣領主膳江家督無相違被下置候樣奉願候、以上、

文化二乙丑年三月七日　寄合　大草織部印判

松平能登守殿

井伊兵部少輔殿

京極備中守殿

堀田攝津守殿

立花出雲守殿

寄合　近藤淡路守

文化三寅年三月廿一日

隱居家督願

隱居家督奉願候覺　寄合　近藤淡路守　寅六十四歲〇中略

高四千三百石

私儀、役々結構御役被仰付、冥加至極難有仕合奉存候、然ル處、去子年七月、御書院番相勤罷在候砌、病氣ニ付、御役御免奉願候處、同月廿五日、願之通御免、寄合被仰付、緩々保養仕難有仕合奉存候、其後同年十月、病氣快方ニ付、出勤仕、月並登城仕候處、去六月下旬より持病之疝積、其上足痛仕、色々養生仕候得共、今以同篇御座候ニ付、此以後全快仕、出仕等可仕體無御座候、依之私儀隱居被仰付、養子捴領左京江家督無相違被下置候樣奉願候、以上、

文化三寅年三月廿一日　寄合　近藤淡路守印判

松平能登守殿

植村駿河守殿

井伊兵部少輔殿

京極備中守殿

堀田攝津守殿

大御番頭　神保遠江守　名代米倉丹後守

實子迄領勤仕並　同　大和守

〔柳營御沙汰書 三〕慶應三年正月廿九日

病氣ニ付、願之通隱居被仰付、家督無相違、大和守被下之、

罪過隱居

〔明德記 中〕先年御所樣〇足利義滿ニ召仕レケル武田下條ト云者アリ、一旦昵近申サレケル間、上樣ノ御覺エ吉カリケレバ、賞ノ甚ダシキニ驕テ、意曲共出來シ間、御所樣御覽ジ限ラセ給ヒ、御追放有ケレバ、連々歎キ申セ共、終ニ御免モ無シテ、隱居シタリケルガ、〇下略

〔嚴絕錄 中〕嚴有院殿御代　寬文十一年

三萬石　奥州一關　松平陸奥守正宗十男伊達兵部少輔宗勝

四月三日、さきに宗家陸奥守綱宗行跡宜しからず、隱居せしめらるゝの時、宗勝、田村隱岐守宗良と後見いたし、家臣等と計り、陸奥守綱村を守り立べき旨仰出さるゝ、所、宗良と不和にて、國政正しからず、年々刑罪の者絕ず、家中安穩ならず、殊に今度原田甲斐不義の始末、畢竟宗勝等が不覺のいたす處、且宗勝は先代の事ども能存ながら、その計ひ不屆なりとて、松平土佐守豐昌に預らる、男市正宗興も小笠原遠江守忠雄に預られ、六月廿八日、三萬石地は宗家綱村に還附せらる、

〇按ズルニ、罪過隱居ノ事ハ、尙ホ法律部下編隱居篇ニ在リ、

〔鎌倉大草紙 上〕二月〇永德四年小山が鷲の城を攻らる、〇中略同〇十一月八日、小山義政方より禪僧を使として、愚息若犬丸に家を渡し、隱居可仕候間若犬丸を御免被下、小山を相續仕候樣にと降を請ける間布施入道得悅を御使として御免許あり、

事故隱居

〔應仁略記 上〕武衞方確執濫觴の事

當方錯亂時剋到來思ひよらざる事共出來せり、一番は織田の與次(敏廣)押領と成て、一錯亂終にして、彼が親の鄕廣越前にて生涯以來、甲斐入道が緩怠を改めんと、甲斐の近江安居の修理之進以下公儀に及て、對論の基となり、種々無量の申事出來す、彼等科なき旨、連々扶持を加ふといへども、其身々々の體果報なければ、所詮もなき事となれり、彼錯亂以後、内の者共二つに成て、快からざるの間、公方江訴訟のため、(康正二年十二月晦日)東山東光寺に移て、一年ばかり逗留ありし公方御口入によつて、ふたゝび立返らん事は、(長祿二年三月廿六日也)左かりといへども、三ケ國の分國は二ツ〳〵に成て、つゐには其身を分て、子息松王麿に去渡し、隱居分たるべき上意にて、西國へ下向し、大内を憑んで、在國有し、大内請取て子細もなかりし、

〔大乘院寺社雜事記〕文明三年八月七日、定淸擬講來對面、綠掌重藝注進、室町殿(○足利義政)可有御隱居之由、及御沙汰之間、毎事天下御沙汰事不及披露、隨而寺訴事無是非云々、又昨日烏丸儀同三司入道方より太閤ニ申入分、此事大略治定、御臺は北小路新造ニ遷給、御中不和故也、北小路殿へ公武不可立入、可及嚴密御沙汰之由御下知了、公方は細。川。之。新。殿。ニ遷給、御隱。居。用。云々、凡希代事云々、

〔京都將軍家譜 下〕義政

寬正三年十一月、將軍家倦政務、故遣使者召其弟淨土寺門主義尋曰、早可還俗、可以天下附汝也、義尋辭之、將軍家曰、他後我若生子則不脫緇褐而可爲沙門、家督不可違變也、十二月、義尋乃長髮改名義視、號今出川殿、以細川勝元爲執事、其餘近習外樣勤仕將軍家及今出川殿、號兩御所、然將軍家無老休之意、(○中略)

文明五年四月、將軍家讓征夷大將軍於義尚、(○中略)晩年於東山慈照寺內造東求堂居焉、蓄古器、求名畫、喫芳茗、以遣世慮、世稱東山殿、

〔大乘院寺社雜事記〕文明十三年正月十一日、石左衛門自京都下向、自隨門御文持來、京都無殊儀、但

去六日小川御所准后〇足利義政御隱居也、深可有御隱居分也、伊勢守ニ被仰付之云々、又九日夜、將軍權大納言殿〇義政子義尚被切御元鳥了、仍十日諸家參賀ニ不能御對面、各空退散了、准后御方エハ、御隱居之間、一向無參賀之儀者也、去年五月二日被切御元鳥了、比興中々不及是非、酔狂歟、

〔關八州古戰錄 三〕古河御所晴氏相州蟄居ノ事、

氏康情有ル人ナリシカバ、流石鎌倉公方　高家退轉ナサシメン事モ痛マシク、且ハ妹聟トシテ長男義氏出生アレバ、其好ミモ捨難ク思ハレケルニヤ、弘治二年ノ春ニ至リ、晴氏ヲバ隱居ナサシメ、義氏時八才二十ヲ家督トシテ、京都將軍義輝卿ヘ言上シ、左兵衛佐ノ補任ヲ申下シテ、鎌倉葛西ガ谷ニ亭ヲ構ヘ、御父子ノ安座ヲナサシメ申サレケルガ、其年臘月十五日、總州猿島ノ郡、關宿ノ城ヘ移シ、舊臣簗田中務大輔政信ニ介抱シテ、守リ立參ラセヨト、懇ニ申付送ラレタリ

〔江濃記〕淺井出身事

淺井休外齋入道橘高政は、朝倉教景の吹擧により、京極殿の一跡を給りけれども、國人おほく背けれは、伊勢の國司幷長野若狹守、關刑部大輔美濃土岐殿幷齋藤、其外朝倉より加勢を請ひ、北近江五郡をやう〳〵治めける、然而休外逝去の後、其子下野守久政の代に成て、武勇父にをとりけるにや、六角家にたより、佐々木定賴の幕下に屬し、子息備前守を前年より六角の家老平井加賀守が聟に定め、定賴の後猶義賢の代迄、南郡の下知にまたがひける、爰に備前守長政十六歳の時、家來に赤尾、丁野、百々、遠藤、安養寺等と評定して、父の下野守久政を隱居させ、萬事政道を改め、祖父高政入道のごとく、六角家の下風に立まじとて、平井加賀守が娘を送り返し、六角と無事をやぶり、手ぎれの軍可有よし、其用意有けり、

〔三好別記〕實休の舊臣篠原駒雲、才智あるゆへに、樂師といふ智者を崇敬して諸事を相談し、式目

を以訴訟を分、萬事にわたくしなかりければ、諸人うらみを不存、阿波讃岐淡路三ヶ國よくおさまり候由、しかるに長春の母儀小少將の御方、父篠原自遁に嫁してありけるが、胴雲と中あしくなりて、長春へざんげんし、胴雲すでに成敗におよぶ、胴雲せひなく、まづ勝瑞を引退、河島の上櫻へ隱居し、罪なき由なげき申けれども、承引なく、元龜三　ク十六日、木村飛驒、井澤右近阿波、淡路、紀伊國の人數をそつし討手にむかふ、胴雲防戰にもおよばず切腹也、

（東照宮御實紀附錄九）本願寺の光佐が、先妻の腹に設けし嫡子を光壽といひ、後妻の生みし次子を光照といへり、光佐が死せし後、豐臣太閤その後妻が美婦の聞たかきを聞及ばれ、めしよせて寵眷せられけるより、光照をもて光佐が嗣とし、本願寺を繼しめ、光壽をば早く隱居せしめ、眞常院とて、子院の住職となさしむ、光壽も我身犯せる罪もあらで、面目をうしなひしを、君にも兼てさるまじき事とおぼしめしけり、

私讓隱居

（小笠原秀政年譜乾）慶年十二年、是年公剃髮シ、私ニ家督ヲ信濃守忠脩公ニ讓リ、公ノ個分ハ二萬石ニ極メ給フ家老、犬甘半左衞門久和、小笠原隼人政直ヲ始、諸士大勢末々ノ者迄モ、是ヲ選テ忠脩公ヘ附屬シ給フ、公ノ家老ハ二木勘右衞門政成、春日淡路道次、小笠原主水政信或ハ政友也公隱居ノ事内證ノ儀ニテ、公義ヘ願ヒ給フ事モナキニ依テ、世間ニ是ヲ知ル人ナシ、公剃髮ノ事モ、當分ノ儀故、外向ニ聊知ル者ナシ、

（笠系大成八）秀政慶長十二年丁未十月十八日、秀政妻飯田逝、○中略　秀政剃髮追悼之、○中略　私讓家督於忠脩隱退、須屬奉蔵○中略　及諸士於父子間、○中略　然依不得公命不能顯露於世也、

不許隱居

（押山叢書附一卷）一松平安藝守吉長隱居願差出候處、上意有之候者、常憲院樣御一字名乘候大名も段々致死去、吉之一字名乘候ものは、公方樣と安藝守計に候處、安藝守致隱居候へば、上御一人に被爲成、御心細思召候間、御差留被成候旨被仰出候、併大義に可有之候間、參勤交代者、嫡子伊勢守

に爲勤候而、國政之儀者、年若にも有之間、伊勢守へ心付遣樣にと上意之由、

隱居從職

〔京都將軍家譜 上〕義滿

應永四年四月、御移徙於北山新造別業、其壯麗鏤黄金、(鹿苑寺是也、俗謂之金閣、)讓室町亭於義持、辭萬務、而事無大小、皆決於北山殿、

〔家忠日記增補 四〕元龜三年十月廿七日、遠州宇津山の砦は、當時武田が兵其邊に隙して通路を絕、大神君勇將をして、此砦を守らしめんと欲給、諸將猶豫す、於爰松平備後守清善、家督を嫡子清宗に讓て、近來隱居すといへ共、請て宇津山の砦に赴、

〔嘉永明治年間錄 七〕安政五年六月廿三日、太田道醇賚始、加判列並、年俸三萬俵ヲ賜フ、

高五萬三千石、遠州掛川太田備中守資功父、隱居道醇、御老中を命せらる、勤務中三萬俵を賜る、外國御用兼帶、道醇追て備後守と改名、

〔德川禁令考 十八 補規〕慶應二丙寅年十月九日

免職ノ者へハ、切米ヲ給與セザル旨達、(○中略)

一隱居ニ而御役相勤候もの、向後其場所高並之通被下候、御役料御役金も同樣被下候、

隱居後爲他家養子

〔鹿島當禰宜系圖〕甚兵衞(安西)

後隱居、如斯ト號、伯母聟之續ヲ以、安西彌右衞門方(江)養子遣、

○按ズルニ、甚兵衞ハ其兄胤保ノ下ノ註ニ據ルニ、享保年代ノ人ナリ、

〔大乘院寺社雜事記〕文明四年二月十六日、細川養子(野州息)遁世入道云々、不知子細、就中細川勝元隱居云々、出家歟、天下無爲計略ニ有子細哉、且如何、但諸事近日事ハ雜說也、

隱居剃髮

〔關八州古戰錄 五〕北條氏康隱居附子息配立事

小田原ノ氏康ハ、是歲(○永祿三年)四十六歲タリシガ、六月下旬隱居剃髮シテ、萬松軒ト稱セラル、病身

タルニ依テ、其儀ニ及ベル由披露アリト云ヘ共、實ハ當春、年齡沓ニ劣レル輝虎ノ爲ニ、城門ヲ馬ノ蹄ニ懸ケサセツレバ、華花ナル一戰モ遂ズシテ、弓矢ノ眉目ヲ失ハレシ事、花爽ノ人口塞グニ堪ズ、事ヲ所勞ニ寄ラレタリト、傍ニゾ罵リアヘリ、嫡子相模守守政、廿三歲、家督ヲ受テ、家事國務ヲ執行ハル、

〔例書〕一、一体家剃髮者無御構、無故後生之爲法體者御法度ニて、御旗本隱居剃髮者不苦、法體者除程功相立不申候而者不被仰付候、若心得違致し相願候得者、其家者、其子息限ニ而家斷絶致候事、

〔兼山麗澤秘策 知〕一、一昨十一日〇正德元年五月 新井氏江立寄候處、幸在宿ニ而、一時計清談仕候、〇中略 新井氏被申候は、〇中略 美濃守殿〇柳澤吉保 隱居は、常憲院樣〇德川綱吉 御他界之日ニ被仰出たる事承り及候、是等もはやき義ニ候、常憲院樣御他界之日、美濃守殿御前江被出、私事常憲院樣御厚恩之義ニ候へば、追腹も不仕候而者不叶者ニ候得共、御法度之義候へば、不及是非候、責而落髮仕度旨、直ニ願被申上候所、其方左樣ニ迄存之所、尤被思召候得共剃髮之儀は、先御代ゟ格有之儀ニ而候、奉公之品ニゟ、賤者迄も剃髮仕者は、定り可有之候、歷々其方抔左樣なる者剃髮と申義、終に御格無之儀ニ候へ者、此度此方代始に、御先代ゟ之格を御破り被成儀難被成候、御葬送も濟申候はゞ、早速隱居被致候而剃髮願之通に被仕可然旨、御意ニ候故、もはや美濃守隱居願不申候ては不成候、ケ樣之儀御はやき儀候、不動聲色して相濟申候、其後世上ニ而、美濃守事いろ〳〵申沙汰を御聞被遊、御笑被遊候て御座候、

〔公用雜纂 五〕隱居剃髮改名願
(朱書)
寬政二戌年七月、安藤對馬守殿ゟ進達御扣共、兩通御附札に成、靑阿彌を以、御渡被成候に付、御禮御同人計平服ニ而被越、

剃髮改名願

中奥御小姓
松平三郎太郎

私父因幡守剃髮仕、空山と改名仕度旨申聞候に付、此段奉願候、以上、

中奥御小姓
松平三郎太郎

七月五日

可爲願之通候

〔氏家叢書十九〕一享和二戌年十一月十一日、松平伊織様江御問合御附札濟、

陪臣致隱居剃髮、脇差計帶、外江罷出、若於途中異變有之節は、何之誰家來隱居之由申達候而も不苦儀に御座候哉、兼而心得罷在度奉存候間、此段御問合申上候、以上、

堀又七郎家來
潮田嘉内

十一月十一日

御附札
書面之趣、隱居剃髮、脇差計帶、外出候儀、剃髮に而も帶刀不致義は無之、銘々志次第之事候得共、於途中異變有之候節、誰家來隱居之由申達候儀不苦儀に候、

〔諸例集六〕伊達遠江守家來差出候問合書面江附札

剃髮少將之隱居式立候節著服

一道服　色紫指貫

但俗體、直垂著用之節、右之通致著用可然哉、

一十德　色紫切袴

但俗體、長袴、麻上下著用之節、右之通致著用可然哉、

右之通著用仕不苦哉、此段奉伺候、以上、

伊達遠江守家來
瀧本六郎

六月〇弘化三年

書面之通、被致著用不苦義と存候、

〔世鏡抄〕隱居分所領配當ノ事、適子ノ計ラヒタルベシ、但雖計之、大法之儀ハ、二親心安クスグベキ程可計之、所領依分限也、軍役諸公事アラバ百貫二十貫、千貫二百貫也、他ハ准之、無諸役ハ、依其世

隱居料
隱居扶持

帶可有評定也、

〔藩簡集殘篇三〕當地行之内北矢部并三吉名之事

右父玄忠爲隱居分、先年分度云々、然者玄忠一世之後ハ、元信可爲計、若弟共、彼隱居分付囑之時、雖企訴訟、既爲置附之地之條、競望一切不可許容、并弟兩人割分事、元信有子細、近年中絶之刻、雖出判形、年來於東西忠節、剩今度一戰之上、大高沓掛難令自落、鳴海一城相踏堅固、其上以下知相退之條、神妙至也、因玆本領還附之上ハ、任通法如前々陣番可同心、殊契約爲明鏡之間、向後於及異議ハ、如一札之文、元信可任進退之意之狀如件、

永祿三庚申年九月朔　氏眞判

岡部五郎兵衞尉殿

〔土佐國吾井郷岡崎孫六藏坪付武家名目抄所引〕岡崎忠兵衞給八ケ所、合田數壹町十二代三分、神田郷、右之在所爲隱居領云付候、彌奉公油斷仕間敷候、名改神役等、如有來可相勤者也、文祿四乙未年十二月朔日、岡崎忠兵衞尉親忠花押、

〔小笠原代々記〕慶長十四年、其後秀政公御隱居、忠脩公江御家督四萬石被仰付、殘る貳萬石は御隱居領なり、

〔東武實錄〕寛永三年、是年堀田若狹守一繼、願ニ依テ隱居ス、一繼ガ領地八千八百石餘之内、五千三百石餘ヲ嫡子兵部少輔ニ讓リ與ヘ、三千五百石ヲ以テ一繼ガ隱居領トス、（一繼卒後、隱居領三千五百石ヲ次男權右衞門ニ賜ル、）

〔天明集成絲綸錄四十二〕天明二寅年十二月

寺社奉行江

日光御神馬別當　若林半兵衞隱居

若林常閑

右老衰ニ付、願之通隱居仕候ニ付、隱居扶持之儀相願候、容易ニ難相成事ニ候得共、年寄候迄年久敷相勤、日光御門跡方も被仰立候事ニ付、格別之譯を以、隱居扶持貳人扶持被下候間、其段執當江可被達候、尤年久敷七拾歲迄も相勤候事ニ付、被下候間、一通之隱居之例ニ者不相成候間可被得其意候、

十二月

〔憲教類典二ノ四分限〕寛政二庚戌年十二月廿九日

松浦越前守達貳通

一隱居料被下候隱居有之候はゝ、右明細書を帳面之末ニ御張入候而、帳面表題ニ其段御認可被成候、張入無之候はゝ御認ニ不及候事、〇中略

十二月

〔公用雜纂四〕隱居料被下置候者病死申上

御小姓組山田肥後守組
長谷川主膳父
隱居料三百俵
元御鎗奉行
長谷川太郎兵衛

右太郎兵衛儀、昨七日暮六時病死仕候、隱居料被下置候に付、長谷川主膳御屆申上度旨申聞候、依之申上候、以上、

八月八日〇文政七年

林左京

〔小普請世話取扱書抜〕隱居料上り

書付　岩間重次郎

覺

一私祖父岩間久朝（俗名忠右衛門）儀、元二丸御留守居相勤、老衰仕候ニ付弘化四未年十二月十日、願之通隱居被仰付、私父岩間久左衛門、御書院番大久保因幡守組相勤頂戴仕來候、御切米三百俵爲隱居料被下置候旨、於菊之間御老中御列座、戸田山城守殿被仰渡候、然ル處、右久朝義今幾日病死仕候ニ付、此段書付を以申上候、以上、

亥（〇嘉永四年）三月幾日　岩間重次郎

〔德川禁令考　十九　隱居願並制〕慶應三丁卯年九月廿六日

隱居料改正ノ達

隱居料之儀、向後布衣以上御役二十ヶ年以上相勤、年齡五十歲以上之もの江者、怠勤不勤ニ不拘、年々金百兩宛被下候、尤是迄之隱居料、右被下候者江も、年齡勤年數、右之通之もの江者、以後可被下、只今迄取來候方とも、隱居被仰付候節之年齡、年數より不足之もの江者、以來不被下候條、得其意、元布衣以上御役相勤、隱居之面々、勤中之年數歲附、隱居被仰付候年月等、委細相認、早々御目付江可被差出候、

但勤仕並寄合者、勤之年數ニ可加事、

右之通、萬石以下之面々江可被相觸候、

九月

〔吹塵錄　三十一　德川氏〕慶應三年改革後、有司俸金總計豫算、

慶應三卯年十二月調（〇中略）

隱居料一ヶ年凡積　一金壹萬五千兩餘

右之通、御勘定所御勝手掛ニおいて、取調候ものに御座候、

〔政談　四〕隱居シタル者、其子或ハ孫ニ子無テ、跡目斷絕スル時、右ノ隱居天竺浪人ニ成類多シ、是等

ハ其身一代無恙御奉公ヲ仕舞タル者ナレバ、御扶持方可被下コト也、潰タル者ノ妻ニモ、御扶持方可被下コト也、是等ハ大名ノ家ニモ有コト成ニ、御家ニ其沙汰無ハ、不僉議トモ云ベシ、此御手當無故、彌下ヨリハ隱シテ成トモ、束モ無者也トモ養子ニシテ、後ヲ立テ家斷ノ路ニ迷ハン事ヲ謀ルモ、亦餘義ナキコト也。

〔例書 六〕一娘江聟を取養子致候處、其聟江跡式不讓内、男孫出生ニ而成長致候ニ付、祖父ゟ直ニ孫江家督を讓候を、是を承祖と云、然處右養子其節承知之上、承祖ニ而相濟候處、祖父死後、右家督我等身上ニて實子ニ難を附、身上取上可申旨、右聟及出訴候者、私身上ニ御座候處、養父ゟ遺言之由、私身上悴自由ニ可爲致旨、諸親類共申之候得共、私悴ニ而御座候得共、悉身持惡敷、度々異見仕候得共承引不仕、無據今度勘當可仕と奉存御願申上度、諸親類共江も及相談候得共承知不仕、無是非御願申上候、右悴儀、其分ニ差置候者、此後如何樣之儀可仕出も難計存候ニ付、諸親類共外被召出、銘々御吟味之上、悴勘當仕候樣奉願候段訴之依之尋候者、其方聟養子ニ而、先又四郎娘と夫婦ニ成、悴亦藏出生致候、然ル處、其方養父存生之内、何年以前養父ゟ家督讓受、養父者隱居ニ而も致候哉之旨尋候處、答候者、養父存生之内親類共、打寄家督相續之義相願候由、此段私ニ爲知不申、養父及末期諸事私江相讓候段遺狀者無御座候得共、口上ニ而申渡し候、尤私義養父家督相續爲可仕、父子之契約仕候義ニ御座候得者、縱家督可仕遺狀無之候迚も、私家督相續可仕義と奉存候、併悴亦藏相續仕候義、全否申上候筋無之候得共、諸親類共私江隱し養父と馴合、右體之取計仕、剩悴亦藏身持惡敷、私度々異見を加候得共、一向取用不申、不得止事、今般御願候段申ニ付、申聞候者養父命終之後、其方江家督讓り渡可申儀、實子と違ひ養子之儀ニ候得者、就中其方も諸親類立會之上、讓狀急度可取置事ニ候、亦相手方諸親類共、當亦四郎悴亦藏幷亦四郎妻ニて、亦藏母不殘呼出及吟味候處、諸親類共申候者、訴訟人申上候者、全僞にて御座候、右之者聟ニ參、先又四郎娘と娶合

候處、忰亦藏出生仕候而成長仕候ニ付、祖父亦四郎ゟ孫亦藏江家督相讓り、孫亦藏義、祖父ゟ讓證文所持仕罷在候、尤亦藏身持悪敷候段、當亦四郎申上候得共、全亦藏悪敷義無御座候旨申之、且當亦四郎先亦四郎ゟ家督讓受候事ニ候は、亦藏祖父ゟ讓狀亦藏江相渡候節、否可申事ニ候、家督相續之節、親類立合、亦四郎命終際、家督相續仕候得者、私相續仕候同前之旨、當亦四郎申之ニ付、右讓狀相改候處、相違無御座、勿論右讓狀文言之內、承祖之譯、其上祖父讓狀之內ニも、親亦四郎義者、其方父之事ニ候得ば、始終隱居免〻して、不自由無之樣、相應ニ宛行致候樣、勿論亦藏事心得違ニ而、父亦四郎江疵末等有之候者、諸親類立會家督滅却不致樣、孫亦藏江異見を加可申候、亦藏義、家相續致し、實父亦四郎を養育可申、若父子不和ニ成候而も、一旦亦藏江家督相讓候上者、亦藏得と異見を加、始終外親類とも不差障樣、全身分直候樣文言ニ有之、於然者、當亦四郎申立候處、甚不埒ニて、相手方申立分明ニ付、訴訟方亦四郎屹度叱り、

隱居所

〔駿府政事錄〕慶長二十年十一月廿九日、三島近邊、御隱居所可被爲建旨被仰出云々、

〔例書〕一一大名隱居之義者、住居都而上屋敷に住居可致筈ニて、譯無之候而者、下屋敷中屋敷江住居難成事、

女隱居

〔御老女衆記〕大奥女中分限〇中略

御方々樣附比丘尼隱居女中共御宛行

一御切米　一御合力金　一御扶持　一薪　一炭　一湯之木　一油

一五菜銀

賄料

〔享保集成絲綸錄十八〕享保十五戌年十二月

小普請內藤飛驒守組
百俵　古郡文右衛門

御勘定組頭養子
三百五十俵　同　孫大夫

内貳百俵御役勤候内被下

右文右衞門儀、隱居事願、且祖父孫大夫事、駿州富士郡加島新田高六千五百石餘、自分入用ヲ以取立候ニ付、御物成十分一、右高現米三百貳拾石餘取、年々永代ニ被下置之、富文右衞門迄相續被下置候處、相州江御代官所替被仰付候節ゟ相止候、依之如先規養子孫大夫ニ被下置候樣仕度旨相願候、孫大夫儀者、高增ニ付、文右衞門事、家督之願不申上候旨書付差出候、文右衞門願之通、隱居被仰付之、新田十分一、孫大夫ニ被下置候、尤願之通、永代被下候旨、可得其意候、文右衞門取來候御切米は可差上候、以上、

十二月

〔押山叢書一〈聞書〉〕一延享二丑年、御隱居可被遊候筈之旨被仰出候而、〈○德川吉宗〉京都へ御聞詰衆上使被仰付候、其時松平左近將監〈○老中乘邑〉心付候而、右松平安藝守へ上意之趣相考、上使差添之、高家長澤壹岐守へ内意申遣候者、御隱居者被仰出候共、御政務之儀者、御心付被成候樣、勅命有之樣に、御取計之儀、傳奏衆へ内意可申旨含、上京之處、壹岐守京著早々、京都に被在之候老母、病死忌中に成候に付、其内意、傳奏衆へ相達候事不相成候内、上使相濟候、依之禁裏にも何之叡慮も不被爲有候間、近日之内答次第と勅答可被仰出と、恐悅奉存候趣之書札、傳奏衆ゟ御老中連名到來に付、左近將監開封披見之處、壹岐守内意聞違候故、左近將監一名ニ而壹岐守へ申含候内意之趣返書に認、京都へ差遣候、御老中連名に候へば、傳奏衆開封被致候へ共、一名之奉書者、所司代立合開封被致候事故、所司代牧野河内守立合ニ而開封之處、件之儀有之、殊に連名之返事、一名ニ而申來候事共、傳奏衆披見之上、内意と申は、叡慮も不極内之事也、勅命も有之上者、奉對天子差圖ヶ間敷儀、不屆之至と傳奏衆立腹に付、河内守色々と相宥、此儀各方ゟ被仰立候はゞ左近將監儀、如何樣に可被仰付も難計奉存候間、何卒此書札私へ申請度、達而被申貰受、右之譯委細に相認、左近將監名を除き、

外御老中へ飛脚被差越、本多中務大輔〇老中忠良開封披見之上、同列へ爲見候はゞ、定而右大將樣之入御聽可申、左候而者、左近將監身上難立可有之旨被存、中務大輔一名ニ而返書差遣、上使下向迄者無沙汰に致置候、無程上使下向、公方樣御隱居被遊西丸へ御移り、大御所樣と奉稱、右大將樣、御本丸へ御移替、上樣と奉稱、其後左近將監御役御免、御加增御取上、佐倉之城被召上、隱居被仰付、嫡子和泉守へ羽州山形にて六萬石被下候、

〔諸例集 五〕天保十四卯年正月

神尾山城守答

隱居後、平日之持鑓當主同樣之鞘相用候而も色替り、或積毛を羅紗抔に包替相用ひ、其段大目付樣方江御屆仕候得者、苦ケル間敷哉、此段無急度各樣迄御問合仕候、以上、

松平阿波守内
集堂小平太

正月

書面之通者、不苦儀と存候、

〔諸例集 六〕弘化二巳年十二月十六日

御側衆より問合之趣を以、奧御右筆中村又兵衛より差越、土岐丹波守下札を以及答、

隱居ニ而總髮之者、著服如何可心得哉之事、

上下ニ而候

〔嘉永明治年間錄 一〕嘉永五年十月十七日、太田道醇、隱居後ノ品行ヲ褒ス、

攝津守父隱居太田道醇へ、隱居後、家政向幷行狀等宜敷趣、達御聽、御褒詞、

諸家隱居、謹愼アル可キノ旨台命、

一松平阿波守へ、阿波守養父松平尤香齋儀、隱居之事とは乍申常々如何敷身分之者抔多く立入、日夜酒宴遊興に長じ、其外他行等如何之趣にも相聞候、御自分には續柄之儀にも候得ば、

向後は相愼可然旨、各より噂有之段、能々心附候樣可致候、

一武田左京大夫名代土岐出羽守、柳澤攝津守へ、柳澤但馬守儀、隱居之事とは乍申、常々遊惰行跡不宜由、如何之趣に相聞候、何れもには續柄之事共候得ば、諸事相愼候樣各より噂有之候段、能々心附候樣可被致候、右於和泉守宅阿波守外二人へ書付渡

〔諸例集八〕安政二卯年十二月

隱居之妻を在所江差遣度儀ニ付問合

柳生播磨守〇大目付答

今度御觸達御座候隱居幷厄介男女子等、在所江遣置度向者夫々相伺候樣被仰出候處、隱居之妻儀者、右御書付面々顯れ居不申候得共、矢張籠居候儀ニ御座候哉、又者別段之儀ニ御座候哉、右趣相心得申度、此段奉伺候、以上、

十二月十七日　牧野豐前守家來　山本番右衞門

書面之趣者、被相伺候方與存候、

後見

後見ハウシロミト云ヒ、後ニ音讀シテ、コウケント云フ、女子若シクハ幼少ノ者ニシテ、獨立スルコト能ハザルモノヲ、監守スルノ謂ナリ、ウシロミノ語ハ、夙ク王朝ノ頃ヨリ見エタレドモ、確然タル法律上ノ規定ニ至リテハ、未ダ嘗テ無カリシガ如シ、其之レ有ルハ徳川幕府時代ニ始マル、此時代ニ於テハ、幼年者若シクハ女子ノ戸主タル時ニハ、別ニ男子ヲ以テ後見ト爲シ、之ニ家事ヲ託ス、而シテ男子ノ戸主ニ在リテモ、其身體虛弱ナル時ハ、後見ヲ置ク

名稱

事アリ、

後見ハ多ク尊屬ノ親及ビ親族、家臣等ヨリ之ヲ選ビ、其名稱ニモ種々アリテ、常ニ彼後見者ノ家ニ住スルモノヲ看防人ト云フ事アリ、而シテ德川將軍ノ後見ノ事ハ、官位部德川職員編大老篇ニ在リ、

〔倭訓栞中編三〕うしろみ　後見の義音をもてもよべり、人の後を監守することにいへり、よて阿衡をも、徒然草にみかどの御うしろみと見ゆ、

〔今昔物語二十二〕淡海公繼四家語第二

此ノ四家ノ流々、此ノ朝ニ滿チ弘ゴリテ隙无シ、其ノ中ニモ二郎ノ大臣ノ御流ハ、氏ノ長者ヲ繼テ、于今攝政關白トシテ榮エ給フ、世ヲ恣ニシテ天。。。。皇ノ御後見トシテ政ゴチ給フ、只此ノ御流也、

〔空穗物語忠こそ〕たゞこそおとゞの御めいに、あこ君とて、かしづき給しに、しのびてかよふ、この北方いとかしこく、こゝろつけて、おとゞのみえがたくし給に、いとうれしく見えたまへば、御かはりになんたのみきこゆる、御うしろみは、いとよくつかまつらんあだになおぼしそなどの給へど、しらずがほにてありふるほどに、〇下略

〔源氏物語一桐壺〕いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給けるなかに、いとやむごとなききはにはあらぬが、すぐれてときめき給ふありけり、〇中略ちゝの大納言はなくなりて、はゝ北の方なん、いにしへの人のよしあるにて、おやうちぐしさしあたりて世の覺え花やかなる御かた〴〵にもおとらず、何事のぎしきをももてなし給けれど、とりたてゝはか〴〵しき御うしろみしなければ、こと〻ある時は、なをより所なく心ぼそげなり、

〔澀柿〕明惠上人傳

尊屬親爲後見

義時朝臣逝去の時、頓死にてありしかば、讓狀の沙汰にも及ばざりし程に、二位家の命にて、泰時嫡子たる上は、分限少くてはいかにとしてか天下の御後見をもすべきなれば、皆を官領して、舍弟共には分に隨て、少宛わけあたふべきよし承しかども、〇下略

〔大乘院寺社雜事記〕延德四年八月十日

一御後見職事　申次召加事、坪江下鄕以下御給分事、河口庄幷長谷寺奉行事、合四通奉書、東林院憎正書、上使者良成也、淸圓寺主則參申、畏入付衣也、

〔民事慣例類集後見〕幼年ノ年齡ハ十歲迄ニテ、夫ヨリ小年弱年ト稱セシ慣習ナレドモ、從前名主役勤ムル者、十五歲迄ハ直勤ヲ許サヾリシニ付、凡ソ十五歲迄ヲ幼年ト唱ヘ、後見ヲ撰定スルコトナリ、武藏國豐島郡

戶主幼年ニシテ家產立ガタキトキハ、親戚伍組協議ノ上、親族ノ內後見致シ、廿歲前後ニ至リ、獨立營業出來ノ節ハ、諸務ヲ引渡スヲ例トス、幼年年齡ノ定メナシ、甲斐國山梨郡〇中略

地主又ハ地主ニ非ルモ、身柄ノ商人幼年後家寡シニナリ、或ハ幼年ノ子女ヲ別家セシムルトキハ、後見人ヲ定ムルコトナリシガ、維新後公然女戶主モ許サレシニ付、其便宜ニ任スルコトナリ、武藏國豐島郡〇中略

後見ニハ內外ノ二種アリ、內後見人ハ幼主ノ親分ニナリ、家事向專任スベキ權アリ、幼主二十歲ニ至レバ、家事向悉皆引渡シ終身其家ニ養ハレ、又ハ財產ヲ分チ別家セシムルモアリ、外後見人ハ平常ノ費用、及ビ金錢貸借ノコトハ、戶主ニ代リテ營ミ重大ノ事件アルトキハ、親族會議ノ上取計フコトニテ、持高ハ後見中賣拂ハザル慣例ナリ、丹波國何鹿郡

〔續藩翰譜一上越前〕左少將兼越前守源綱昌ハ、兵部大輔昌親の子、實は中務大輔昌勝昌親の兄の長子也、幼名は仙菊丸、寬文八年四月廿三日はじめて見參し、延寶三年十一月廿三日元服して、御諱の字を

賜り（備前則房の御刀を賜ふ）従四位下侍従兼越前守に任じ、明る四年の秋家をつぐ、（越前福井四十七万五千石）此時父昌親、よはひいまだ壯也けれど、病痾によりて致仕の事はこふまゝにゆるされしが、よろづ後見して政事沙汰すべしと仰下さる、綱昌年若かりし故とぞ聞えし（時に十六歳）

〔武德編年集成六十四〕慶長十九年三月廿七日、池田参議輝政ノ後室ハ神君ノ姫君ナリシガ、駿府ニテ薨ジ玉ヒ、先達テ其息左衛門督忠繼ニ備前ノ國ヲ封ゼラレ、幼稚ノ間ハ、長兄武藏守利隆ヲ以テ國務ヲ執ルコト、是輝政ガ訴望スル所也、然レドモ利隆ハ忠繼ト異腹ユヘ、母堂疑ヲ生ジ、今ヨリ國政ヲ忠繼ニ執ラシメンコトヲ願ハル、神君是ヲ許シ玉フ、

〔明良洪範二十一〕備前新太郎少將（〇池田光政）ハ、幼少ニテ家ヲ繼ギシカバ、家司日置豐前ト云者、國政ヲ預カリシ、武藏守利隆ノ弟、宮内少輔忠雄（〇光政叔父）後見セラレ、公邊ノ事ハ、加藤甲斐守ニ相談セラレケル、

〔穀藩翰譜七上前田〕參議加賀守菅原綱紀は、（はじめ綱利）少將光高の嫡子也、（〇中略）同き（〇正保）二年六月十三日、父の遺領を賜ひ、（加賀、能登、越中、近江等八十萬五千石餘、大奥において新藤五國光の御脇差を賜ふ）年纔かに三歳なりしかば、おほぢ利常沙汰してよろづ後見せよとぞ仰下されける、承應三年正月十二日、犬千代丸御所にまいりて元服し、正四位下左近衛權少將兼加賀守に叙任し、御諱の字賜はりて、綱利（のち綱紀）と名のる、（貞宗の御脇差をたまふ）萬治元年十月、祖父利常卒しければ、小松の城を合せ領す、

〔間敷地主印鑑〕一八官町（〇中略）

地主

右間敷之家屋敷、代金一百五十兩ニ賣券求之、

寛政九巳年十二月廿六日

瀧山町家持町醫橋爪中雄妹
地主　のぶ
後。見。　橋爪仲雄

親族爲後見

跡後見　　樋爪爲仲

仲雄勝手に付後見相離、跡後見に同く悴爲仲に致させ候旨屆有之、

文化三寅年正月廿四日

〔柳原系譜乾三代〕忠次○中略慶長十乙巳年、生于遠州横須賀、

同十二丁未年九月十一日、大須賀忠政卒于京都、于時忠次三歳也、則遠州横須賀城飼郡ニ而、家督

五万五千石被下置、

同十三戊申年四月、忠次依幼稚、秀忠公上意、大須賀五郎兵衛尉忠高○忠政父、註略、ヲ後見被仰付、

〔續兵家茶話上〕大須賀五郎兵衛高○忠ハ、五郎左衛門康高ガ甥ナリ、慶長七年壬寅十月二日被召出、

於伏見拜台顏、本知二千石、加恩一万二千石、都合高一万四千石ニテ、伏見御留守居被仰付、同十二

年丁未九月十一日、忠政早世故、同十一月、大須賀五郎兵衛ヲ召テ、於國次○忠幼少ノ間、入横須賀ニ

テ可爲後見トテ、七万石被下之、安藤帶刀兩人可取計旨也、

〔御當家令條三十五〕寛文十二年子四月三日

伊達兵部少輔、田村隱岐守評定所江被召之、被仰渡覺、

先松平陸奥守○綱宗儀一門中幷家老共依願、隱居被仰付之、當陸奥守○綱村依爲幼少、兵部隱岐守後

見仕、家中仕置等家老共遂相談、陸奥守可守立之旨被仰付候處、兵部隱岐守不和、畢竟原田甲斐不

義之仕合故、家中仕置不宜、毎年刑罰之族數多有之、家中不成安堵思儀、兵部事は前代之様子乍存

知、不屆之仕合被思召、松平土佐守江被成御預候、隱岐守儀は就病者、久々在所江も不參、家中仕置

等之儀隨兵部申付候條、閉門被仰付候旨、御掟之趣、戸田伊賀守申渡之、大岡佐渡守、渡邊大隅守、宮

崎助右衛門列座、

〔續藩翰譜七下伊達〕左近衛權中將兼陸奥守藤原綱村は、故陸奥守綱宗が子也、幼名は龜千代といふ、父

家臣爲後見

綱宗、万治三年八月御氣色かうぶりて、致仕僞居の身となりし時、（綱宗、正德元年六月四日、七十二歲にておはりぬ、）龜千代わづかに二歲なりしに、領國事故なく賜はり、（陸奧國仙臺の城、六十二万石）一族伊達兵部少輔宗勝、田村右京大夫宗良をめして、龜千代幼なきほどは、うしろみして國政を沙汰すべしと仰下され、龜千代の所領のうち（ヅヽ三万石）をさきて二人に賜りぬ、

〔續藩翰譜七下細川〕左近衞權少將兼越中守源綱利は、肥後守光高が嫡男也、幼名を六丸といふ、正保二年十一月十一日、三歲にして御所にまいり、初めて見え奉り、慶安二年十二月廿六日、父光尙卒しける時、六丸わづかに七歲なりしかば、光尙終りに臨みて、領國を公に返し入ん事を申置たりしに、明る三年四月十八日、遺領ことゆへなく六丸に賜る、此時家の老臣長岡式部同き勘解由を御所にめして仰下されけるは、光尙年わかくしてうせけること、不便におぼしめさる、肥後は西海の要地にして、ことに國も廣し、六丸いまだ幼弱なれば、他にうつさるべけれども、曾祖忠興よりこのかた、世々忠貞をあつくして仕へ奉り、且は光尙おはりに臨みて申せし所も奇特なるによりて、其まゝに賜りぬ、家人等心を同うして六丸をおふしたつべし、小倉侍從忠政（略○註）は隣國殊にうとからぬあはひなれば、より〳〵領國に行むかひて、家人等と事をはからへと仰下されぬ、また御使をも下されて國政を問はせらるべしなど、數々かたじけなき仰ごと有けり、

〔續藩翰譜一上越前〕千次郞家をつぎ、明年（○享保十年）八月十五日はじめて出仕し、同き十一年十二月十一日御前にして元服し、（青江次の御刀を賜ふ、）御諱の字賜りて宗矩と申す、從四位下侍從兼兵部大輔に任ず、十八年の冬、左少將になされ、寬延二年十月廿一日、三十七歲にして卒す、是より先、假に嗣子の儲せんよし聞えし時、もし不祥の事もあらんには刑部卿宗尹卿に仰付らるべうもやと、大御所（有德院殿（德川吉宗）の御事）にも思しゝかど、かの卿は辭し給ふ趣の有ければ、卿の御子の小五郞殿を養ふべき旨仰下されて、延享四年、小五郞殿嗣子となり、（於義丸と改む、）寬延二年十二月七日、遺領をたまふ、同き廿

二川、於義丸幼穉なれば、家老國政に心をつくすべし、自然心に及ばざる事あらんには、宗尹卿の旨を伺ふべしと仰下さる、

〔東照宮御實紀附錄八〕豐臣太閤既に大漸に及び、君と加賀亞相利家をその病床に招き、我病日にそひてあつしくのみなりまされば、とても世に在むとも思はれず、年頃内府と共に心力を合せて、あらまし天下を打平らげぬ、秀頼が十五六歳にならんまで、命ながらへて、この素意遂なんと思ひつるに、叶はざる事のかいなさよ、わがなからん後は天下大小の事は、みな内府に讓れば、われにかはりて萬事よきに計らはるべしと、返す〱申されけれど、君あながちに御辭退あれば、太閤さらば秀頼が成立までは、君うしろみ有て機務を攝行せらるべしといはれ、又利家に向ひ、天下の事は、内府に頼み置つれば心安し、秀頼輔導の事に至りては、偏に亞相が教諭を仰ぐ所なりとあれば、利家も涙ながして拜謝し、太閤の前を退きし後に、君利家に向はせられ、殿下は秀頼が事のみ御心にかゝると見えたり、我と御遠と遺命のむね、いさゝか相違あるまじといふ誓狀を進らせなば、殿下安意せらるべしと宣へば、利家も盛慮にまかせ、やがてその趣書て示されしかば、太閤も世に嬉しげに思はれし樣なりとぞ、

〔常山紀談附錄五〕青蓮院の宮にや、幼き宮方に、中院前内府通茂公御後見たりしに、或時將棊盤のあるを見て、家司坊官を呼て、何とてかやうのはしたなき物を置けるぞ、はしたなき業は本よりあしければ、たとひ有ても御年ゆきての後は、御心付て止事も有ものなり、是等はさして惡事にあらざれども、其事になれ、空しく月日を過し、御學問の御志怠るものなれば、あしきものなりと云れけり、誠に内府公の詞尤至極たるべきなり、又或時其宮へ出入する者、尺八の名高きを御目にかけたり、かゝる所へ内府公御入有て、是は誰が業ぞ、かやうのもの御目にかくる事やあると云まゝに、柱に打あてゝ碎かれけり、其後尺八の

主參りけるに、其由をかたり聞せ、返す〳〵實物打砕かれける事、第一の毒なりと坊官など云しに、尺八の主少も苦しからず、唯私の持たるを、内府公の聞し召れん事恐しく候、御聞なきは私の仕合なりと申けるとぞ、其子通躬卿も嚴なる人にておはしけり、人の後見にはか、る人をつけ度事なり、

女戸主後見

〔御觸書集覽〕右之通〇前文略被仰渡、奉畏候、仍如件、

天保十三寅年二月十二日、

三田寶相寺門前家持 甚助 〇中略

江戸櫻藏屋敷 佐太郎店ゆり後見 粂次郎

幼年名主後見

〔類聚撰要 四十九〕以書付申上候

一名主共儀、病身ニ而役儀御免御願申上、或者病死仕、實子養子等ニ而、跡名主役御願申上、尤幼年ニ御座候得ば、親類又は組合名主等後見相勤申度段、是又御願仕、前々被仰付無滯相勤來難有奉存候、然ル處近來ニ至而、幼年者ニ而者、跡役難被仰付御振合ニ罷成、此儀奉恐入候得共、右之趣御定ニ相成候様ニ而は、名主共一統差支、難儀至極仕候ニ付、何卒幼年之悴等ニ而も、前々之通親類幷組合名主後見仕、跡名主役被仰付被下置候様奉願候、此段御勘辨被成下、可然御執成被仰上被下置候様、名主共一統奉願候、尤人數多之儀ニ付、私共ゟ申上候、以上、

小口年番 名主共

天明七未年七月七日

右之通、奈良屋市右衛門殿江差出、

看防

〔例書 六〕一看防人者其家ニ居候而、其家の政事を執行ふを云、後見者其家ニ居候共、亦者外ニ居候共不苦候、尤兩様共、其家之主何歳ニ成候迄、後見看防共ニ、後々其家之主より之取計方、最初極メ、證文渡し置候とか、諸親類ゟ極メ、證文入置候者歟、亦其家之先主遺状ニ載せ置候とか、且亦後見幷看防人被賴候節、急度札置、雙方爲取替證文取置可申、

〔塩嚢抄　二〕常ニ禪院ノ留守ノ僧ヲカンハウト云ハ文字如何、看坊ト書也、强チ留主ニ不ㇾ限ラ、唯尋常ノ後見也、寮ノ時看寮ト云、世話ヲミサバクル也、

古事類苑

政治部六十七

下編

賤民上

我國中世以來、穢多非人等ノ一種族アリテ、嚴ニ良民ト區別セラレタリ、穢多ハエトリノ轉語ナリト云フ、エトリハ餌取ノ義、牛馬ノ肉ヲ屠リ、取リテ以テ鷹鷂ノ餌ト爲スヲ謂フ、素ト主鷹司等ノ賤隸ノ役ナリシガ、司ノ廢セラレシ後ニハ、官府ニ屬セズ、此ヲ以テ業ト爲スモノアリ、又古代ノ俘囚、若シクハ外國ノ歸化人ノ、屠肉製革等ニ從事セシモノヽ、子孫ナリトモ云ヘド、未ダ詳ナラズ、德川幕府時代ニハ、江戸淺草ニ彈左衞門ト云フモノ居住シ、源賴朝ノ許可アリト稱シテ、幕府ノ許可ヲ得テ、日本國内ノ穢多ノ棟梁トナリ、座頭、舞々、猿樂以下、數十種ノ賤業者ヲ管轄セリ、

非人トハ、其身ノ極メテ卑シクシテ、人ト齒スルヲ得ズ、人類以外ニ在ルノ謂ナリ、非人ニハ非人頭アリテ之ヲ監督ス、而シテ江戸非人頭ノ内、車善七最モ著名ニシテ、穢多彈左衞門ノ配下ニ在リト云ヘドモ、之ト相拮抗シテ、其權利ヲ爭ヒシコトスラアリキ、非人ハ平民ニ復スルヲ得ズ、サレド非人ト爲リテ十年ヲ越エザルモノハ、親族ノ保證ニヨリテ、平民ニ復スルヲ得ルノ例ナリ、而シテ罪人ヲ非人手下ト爲シ、及ビ之ヲ江戸淺草品川ノ兩溜ニ配置スル等ノ事ハ、法律部下編ニ載セタリ、

乞食モ亦賤民ノ類ナリ、古クハ、ホカヒビト、又ハカタヰト云ヒ、今コツジキト云フ、是其總稱

ナリ、諸國ニ於テ其種類名稱甚ダ多シ、其內乞胸、願人坊等ハ尤モ著名ナリ、德川幕府時代ニ於テハ、特ニ制度ヲ定メテ之ガ取締ヲ爲セリ、

穢多名稱

〔倭名類聚抄 二漁獵〕屠兒　楊氏漢語鈔云、○中略　屠兒和名恵止利　屠牛馬肉、取鷹雞餌之義也、殺生及屠牛馬肉取賣者也、

〔第五才子書水滸傳 七〕第二回

且說鄭屠開著兩間門面、兩副肉案、懸掛著三五片猪肉、鄭屠正在門前櫃身內坐定、看那十來箇刀手賣肉、大官人身分　魯達走到門前、叫聲鄭屠、大官人、時得快、人人皆大官人、彼亦居然大官人矣、儼然要叫一聲鄭屠、　鄭屠看時、見是魯提轄、慌忙出櫃身來唱喏、鄭屠出居　道、提轄恕罪、便叫副手掇條櫈子來、提轄請坐、

〔書言字考節用集 四人倫〕屠兒(エタ)　屠兒(エツタ)順和名、屠牛馬肉取賣者、居人居者並同、　穢多俗字

〔塵袋 五〕一キヨメヲエタト云フハ何ナル詞バゾ　穢多

根本ハ餌取(エトリ)ト云フベキ歟、餌ト云フハ、シヽムラ鷹等ノ餌ヲ云フナルベシ、其ヲトル物ト云フ也、エトリヲ、ハヤクイヒテ、イヒユガメテ、エタト云ヘリ、タトトハ通音也、エトヲエタト云フナリ、ニトリヲ略セル也、子細シラヌモノハ、ラウソウトモ云フ、乞食等ノ沙門ノ形ナレドモ、其ノ行儀僧ニモアラヌヲ濫僧ト名ケテ、施行ヒカルヽヲバ濫僧供ト云フ、其レヲ非人、カタヒ、エタナド、人マジロヒモセヌ、オナジサマノモノナレバ、マギラカシテ非人ノ名ヲエタニツケタル也、ラムソウト云フベキヲ、ラウソウト云フ、彌シドケナシ、天竺ニ旃陀羅ト云フハ居者也、イキ物ヲ殺テウルエタ體ノ惡人也、

〔高祖遺書 續外十八〕佐渡御勘氣抄

日蓮ハ、日本國東夷東條安房國海邊ノ旃陀羅ガ子也、イタヅラニクチン身ヲ、法華經ノ御故ニ捨進ラセン事、アニ石ニ金ヲカフルニ非ズヤ、各々ナゲカセ給ベカラズ、道善ノ御房ニモカツ

申聞セ進ラセ給ベシ、領家ノ尼御前ヘモ御文ト存候ヘドモ、先カヽル身ノ文ナレバ、ナツカシウヤオボサザルランド申スト、便宜アラバ各々物語申給ヘ、

〔玉勝間八〕ゑた

今の世に、ゑたといふものは、餌取を訛れる名也、穢多とかくは、俗のさかしらもじ也、和名抄に、屠兒和名惠止利、屠牛馬肉、取鷹鷄之餌之義也、殺生及屠牛馬肉、取賣者也、とあり、翻譯名義集といふ書に、旃陀羅、此云屠者、法顯傳云、名爲惡人、與人別居、入城市、則擊竹自異、人則避之、といへるは、天竺の國の事なるを、此方の今の世のゑたに似たることなり、

〔松の落葉三〕餌取

和名抄に屠兒惠止利と見えて、屠牛馬肉取鷹鷄餌之義也とあり、かゝれど牛馬の肉をみづからもくふものにぞありける、〇中略今の世にゑたといふは、このゑとりをいひあやまれるなるべし

〔老牛餘喘下〕俘囚

異名分類抄に屠兒をエタと訓をつけて、今いふ穢多はゑとり也と有、藤井高尚も其著せる書に、穢多は餌取とみゆ、古き職人盡の繪に、穢多の牛を殺所あり、かたはらに屠兒エトリと記せり、和名抄に、屠兒和名惠止利殺生及屠牛馬肉取賣者也とあり、此者は六國史類聚國史などに、俘囚また夷俘と有者にて、昔蝦夷人の皇國に仇せしを征てとらへしを、諸國に分ちおかれたる者どもの末也、

〔鹽尻三十九〕一屠兒を江多と呼ブ、牛馬の肉を屠りて、毎に穢わしきゆへに穢多と書といふ、是附會と覺へ侍る、江多は元は江とりと訓ズ、順和名抄に、取鷹鷄餌也と、江たは江とりの轉語也、とトたと通ず、りな略す也、

〔知足庵隨筆三〕穢多

一按ずるに、屠者エトリを今穢多と云は、唱へあやまりて、其まゝに字を付たる成べし、和名抄に、鷹隼の

爲に餌を取るこゝろなり、よりてえとりといふ、又諸國の鄕名の下に、餘戸といふもの有、今いふ出村のことにて、居者此出村にいたれば、此名を負はする者とぞ、（京東邊のあまべは、餘戸の略語かといへり、）按ずるに、えとりをえたといひける歟、又餘戸は、封戸の外の戸なるゆへか、出村といふはうけがたし、出村は所々に數多ありて、穢多にはあらじ、今の穢多は、畜獸の革を剝て渡業とする者なり、國史に、夷族の人歟本朝へ來る、國々に土地を與へて、住居せしむる氏族いやしき者也、此者の末苗、恐くは今のえたといふ者になれるにや、尙後勘あるべし、

〔賤者考〕屠者をゑたと今はいふ、○中略今昔物語、此持來たる物をくふを見れば、牛馬の肉なりけり、僧是を見るに、あやしき所にも來にけるかなわれは餌取の家に來しなりと思ひてとあれば、喰もしけるなり、（肉食の事は、すべておのれ別に稿をなして、肉食禁忌考にいへれば、これにはいはず、）されば、ゑたはゑとりの轉訛なり、昔は賤しきはさるものながら、今のやうにはなかりけむ、今の世におきては、賤者の中にも殊に別種として、際界甚しく見ゆる者は是なり、ゑたと訛轉したるは、いつ比よりなりけむ、七十一番職人盡歌合にゑたと出て、月の歌に、人ながら、如是畜生は、牛馬のかはらのもの、月見てもなぞとありて、河原者と云となへも見ゆ、（今俳優よりして觀物師の類をも、なべて河原者といふことなり、）塵添壒囊抄五に、河原者エッタといふは何ノ字ぞ、只エッタといひつけ來れり、常には穢多と書く、穢多き故といふを、古き物に餌取とかく、眞にはゑとりといふべし、餌とは鷹等の餌なり、それをひさぐ者なればゑとりといふ、タといふは同意なり云々、天竺に旃陀羅といふも同、餌取體の膩き者なりと見ゆ、此書は塵袋と合して、天文元年の書にて、本書壒囊抄は、文安三年僧行譽の作にて、古くその比より今の如く、エッタといひ、穢多とも書けるなり、今所によりて皮田ともいふは、京の悲田院は、前にいふ如く、むかしは、貧窮孤獨の世にたづきなき者を憐みておき給へりし制なるを、亂世に、その制もうせて、つひに餌取やうのものゝ、住けるよりして、今も悲田寺（寺と院とは、ひとしくかまへの地居をいふなり、佛寺に限りたる稱にあらず、今

（誤りて悲田院といふ人の如く思ふものもあり、）名といふにより、ヒデンを居者のごとく心得誤りて似つかはしき字をあて、皮田とも書しを、字によりて、又誤りよみ來れるなり、名稱の轉訛、すべて後世は此類多し、右のごとくにて、エタのタは取といふことの轉訛か、又おもふに、物をさして、タといふ一種の言あり、女を賤しめて、女ンタといひ、賣タといひ、材の丸木を丸太といひ、材實の赤きに對して、側への白き所を白タといひ、若山詞には物の用にたゝざるをば粕タといひ、（是は他にもいふかしらず、）前にいふ番タ、こゝにいふ穢タ、又上手に對して下手（上手の字に對して、下手とはかけども、へたのへは奥に對して邊といふ意にて、遠く口もとの意なり、タは手の意にあらぬか、次にいふ、）といふも、此例なるべし、尾張にては、材木の角物挺物など川邊にならべもし、積もしたるを、ゲンダといふも同じ類なり、（ゲンは何の意かいまだ考へず、）又やゝ古き淨るりなどの語に、人に屈して三拜すといふべき所を、サンタするなどあるも、是か、但もしこはかなにかきたれば、讃歎すといふ語かとも思はる、又江戸の俗言に、醉人を呑ダと體語にいひ、呑ダクレなどもいふ、（言たきまゝなる言ダクレ、心なく猥雜たる馬鹿者を猥ダクレなど、尾張邊にていへり、他にもいふかしらず、）前の番タを番太郎といふが、同じやうなるを思へば、此中にも、呑ダは呑太郎かとも思へど、飯はさもいひがたくひとつの語なれば、エタも此類なるべし、又下手といふ語にて、おもふに、すべて此類のタは手の轉語にて、城の一の手、二の手、追手、搦手、相撲の取手、船の綱手、寛平菊合に古手、商賣往來に考腹與本手、（本手は今もいへり、）伊勢人船の番手、金唐草に黑船手、挑手人形手（船來の藥種藥器などに此類多くいへり、）などいふ類多くありて、その筋其類といふが如くなれば、是より出たるなるべく、手とタと通ふは手枕、手綱、諸手船の類常の事なり、（但何とて手を下にいひて通ふ例には、下手の外いまだふとはおぼえず、掌は手之心の意、但は手寄手次の意、秩は手許の意、穢は手巻の意の爲も多くて定しがたし、）

〔本朝食鑑　十一獸畜〕膠（音交、和名爾加波、）

集解〇中略凡本邦屠牛馬犬豕者、俗稱穢多、皮剝、此是市中之下賤、至卑而乞食疲極之長也、故不能混神明高貴之庭壇、而士農工商倶嫌忌之、所以本邦爲穢忌之最、而不獨惡皮膠之臭矣、

穢多

〔秦山集 雜著 甲乙錄 二〕穢多蓋非異俗、只我民之業穢耳、神武紀有牛酒、今遠鄙民有食牛者、亦其類也、太古素尊且剝斑駒、況下民乎、（以上澀川春海說）重遠謂、穢多蓋蝦夷民也、人皇紀有分蝦夷於諸國之事、此蓋其子孫也、略謂蝦夷民曰穢多歟、

〔秇苑日涉 三〕屠兒 韋染家

屠者、俗謂之越多、以屠牛馬猪鹿消皮（消皮卽柔皮也、左傳莽苑曰、膿所以柔物者、今人用猪腦消皮是、也、古今穢死有柔皮法、通雅曰、鞣皆鞣、今消皮家亦曰鞣皮、此字見周禮、鮑人掌函鞼之事、欽其無蓋也、註謂革不韗、今凡韗皆鞼鞾、皆謂之韗、消此云那呼須、）鞾皷、（鞾鞁見南宋市肆紀、通雅曰、今人或作鞾底曰鞾底、釘鞁皮曰鞾鞁、）及皮鞋、水靴、釘靴、爲業、且行刑守尸、收不得良死者之屍、所謂伍作、（元文類、宋本工獄文曰、伍作、水治喪者、民不得其死、而訟者主之、是故常也、又作仵作、名物六帖引治罪錄曰、鄉以送喪爲業、世所謂仵作行者也、）劊子、（名物方言曰、刑人者曰劊子、）之類也、梵語謂之旃陀羅、（唐慧林藏經音義曰、旃陀羅此云嚴熾、謂屠殺者種類之名也、一云主殺人獄卒也、案西域記云、其人若行則搖鈴自標、建柱、破頭之竹、若不然、王卽與其罪也、）倭名類聚鈔曰、漢語鈔云、屠兒、〔中略〕越多卽越都利之轉訛耳、其種落謂之阿麻別、按倭名鈔所載、諸國鄕名、稱餘戶者、一國或及十餘所、餘戶此讀云阿麻別、蓋在昔王化之盛、唐土三韓之民來歸者、國史不絕記、姓氏錄所載蕃部氏族之繁、可以槪見已、其陋者、當時分置之諸國、各自爲鄕、不與土著者相雜、故謂其種落爲餘戶、大抵外國人、慣屠獸肉、故以屠爲業、後世佛敎盛行、人忌食獸肉、遂見屠戶、如非人類者、故鞔工靴匠、雖在市塵中、不敢通問、

〔物類稱呼 一 人倫〕屠兒ゑた（和名ゑとり）　近江にてくぼといふ、備前にてよつと云、薩摩にて人外といふ、東國にてがはだと云、上總下總にてかはぼうといふ、越後にてぶんじと云、同國長岡にてまなみといふ、奥羽にてかんぼうと云、（革坊なるべし）

〔慶長見聞書 四〕慶長十二年十二月十八日、今程太平の御代にて、關所も無御座、殊にかの月輪院と申て、山伏のつかさの院家もたゑて、今はかの跡よのつねの妻帶の山伏罷在候間、出家の方より役錢を出すべきやうなしと申候間、山伏負候て、玉瀧院勝に成申候、穢多共、寺方江參、弔の道具を取る事も、此僧正州（○關東山伏之頭、武州幸手月輪院僧正）子細委に致申達、穢多と申は、上宮太子の御時迄、日本に無なし、木のやにを以てねり候て、物をかく色惡しく、にかは唐より渡る重寶物と思召、小野妹子大臣を

穢多頭

御使にて、唐江被渡候て、初て穢多渡るにかはを作り、かわ具足を作る、太子御感被成、御秘藏有、其後程有、樂人渡る、又かはら燒も渡る、大工も渡る、但は大工は穢多より先に渡る、後に渡る者共、詞も日本に不通候間、かの穢多に、萬事おしへられ引廻されし故、今に音樂のやから、あをや、すみやき筆ゆひ迄、己が下と申ば此時より初る也、更に賴朝の御時の事にあらず、其後かれが子孫多くなり、社々寺々の掃除の爲に、山下に置て、寺の殘飯にて養ひ申候由、伊勢の間の山、高野に谷のもの、北野の宮地、祇園のつるめそう、ゑい山の犬神人、皆是寺方のさうじの爲也、然らば其寺江つねに出入、さうじなど仕候はゞ、とらせ可申候、左樣にも無之、他所より參候て、例にて御座候とて取可申候樣無之と申候間、自今以後、左樣の事不可有との儀也、公事は玉處院僧正執看中勝候、珍事に候間、此事書加置者也、右子細、いづれも證文之書物被出候也、いづれも是を歎敷也、佛道の故實、委細被申達候段、きどく成と、奉行中披露被申候也、

○按ズルニ、穢多ノ起原ニ關シテ、此ニ擧グル所ノ說、必シモ實トスルニ足ラザレド、姑ク揭ゲテ參照ト爲ス、

〔南留別志二〕一ゑたを長吏といふ、張里の誤なるべし、ばくらうといふも伯樂の誤なるべし、

〔燕石雜志四〕團頭(ダントウ)

穢多はゑとりのりを略し、とをたに通はしていふ也、和名鈔に、屠兒(和名惠止利)云々、屠牛馬肉取賣者也といへり、鎌倉將軍のとき穢多の長を長吏といひけり、徂來翁は張里なるべしと、南留敝志にいへり、唐山にて屠兒屠戶など稱するものは、こゝにいふ穢多の義にはあらず、獸を屠るを生活とするのみ、本邦の歐店の如し、宋の時團頭といふもの、この方の穢多非人長に似たり、名物六帖に、委巷叢談を引て、宋時、杭丐者之長曰團頭、雖富而丐者之名不除と見え、亦水滸傳卷之二十五、淫婦藥鴆武太郞といふ回に、金蓮西門慶王婆等相計て、武太を葬んとするとき、王婆道只有一件事

要緊、地方上團頭何九叔、他是箇精細的人云々といへるは是なり、又唐山の俗語に、物の圓きを亦團頭といふ也、水滸傳第八回に、一面七斤半團頭鐵葉護身枷といふは、まろき鐵の鐶鈕を打たる首枷なり、東涯先生團頭をヨジロと訓ズ、與二郎は京師の丐兒也、その圖說人倫訓蒙圖彙に見えたり、この團の字に暗合のことあり、その名おのづから團頭の團を象れるは頗奇なり、十人を火とす、五火を團とす、一團は五十人也、日知錄に見ゆ、又團は聚也、丐者一團の頭なればしかいふ、和名かたゐとは、かたよりゐるの義也、

○按ズルニ、長吏ハ本三井寺長吏ナドノ如ク、一寺ノ長タル僧ノ官ナリシガ、轉々シテ遂ニ穢多ノ長ヲ云フニ至リシモノヽ如シ、後文非人訴訟條ニ、長吏ニ關スル古文書ヲ引ケリ、參照スベシ、

〔見聞雜記二十三〕上州平野村長吏九郎左衛門訴申付而、太郎左衛門召出、遂糺明候處、捧覽申條、尤道理之旨裁許畢、然平野長吏九郎左衛門ハ類上州武州被拂上、若拘方在之者、急度可申屆、猶於無承引者、小田原江注進可申旨、依如件、

弘治二年正月十日　評定衆石丸

下野守判

長吏太郎左衛門

〔陰德太平記二〕尼子經久立身之事

然レ共鹽冶ハ、當國ノ守護職トシテ、兵卒多ク、勢ホヒ猛ナレバ、容易ニ難討兎ヤセン角ヤ有マジト、案ヲ續ケテ御坐シケルガ、急ト思案シ出シテ、輒チ當國ノ穢多ノ頭賀麻ト云者ヲ召テ、汝ガ如知、吾當國ヲ追出サレテ憤怒難休、〇下略

〔彈左衛門由緒書〕

淺草　彈左衛門

一私先祖攝津國池田より相州鎌倉え罷下相勤候處、長吏以下之者依爲强勢、私先祖に支配被爲仰付、賴朝公御證文は鎌倉八幡宮に奉納候、此書物之儀に付、則別當之書付等も御座候、依之任先例、於于今鎌倉八幡宮御祭禮、御神樂先立之供奉ニ、長吏共烏帽子素袍、或は麻上下著し相勤申候、

一寅年御入國之御時、私先祖武藏國府中より罷出、鎌倉より段々相勤申候由緒申上候得共、御役等長吏以下支配被爲仰付候、其節小田原長吏太郎左衞門、小田原氏直之御證文を以、長吏以下支配之儀奉願候得共、無御取上、其證文被召上、私先祖へ被下置候、其後元祿五申年、上州下仁田村馬左衞門長吏之論に付、甲斐信玄公御證文を以、論仕候處、其證文御評定所に而被召上、私へ被下置候事、

一御入國之御時、御馬足痛之踏摺皮被仰付、御馬之御祈禱猿引御尋之上、私先祖支配之猿引召連罷出候得ば、病馬快氣仕候、依之爲御褒美烏目頂戴仕候、爲其引例毎年正月十一日、御城樣御臺所にて烏目頂戴仕候、中古より西之御丸下從御厩御判頂戴仕候而、御納戸方ゟ御烏目頂戴仕候、

一御入國之御時格式にて、只今迄年始之御禮は、元日御老中樣え罷出、夫ゟ段々御役所樣え相勤申候、

一從先前手下之女御關所通り候節は、私一判にて、御留主居樣え申上御判頂戴仕候て罷通り申候事、

一私所持仕候印判は、濃州青野原御合戰之御時、私先祖え首御預之節、集方と申文字之印判爲割封被下候、此印判只今に用申候、

一九十年程以前燈心挽候者、御城へ上燈心細工仕候、御扶持方頂戴仕候、

一燈心商之儀、御仕置之者御役仕候由緒にて、瀬戸物町小田原町兩辻にて、役々之者六十五人之內、每日罷出、無地代にて商仕來候、淺草觀音市場何方に罷立商仕候共、是も無地代、每年十二月市場商仕候、却て燈心細工幷商之儀、從古來私一名之家業にて御座候事、

一御役目相勤候儀は、御廐江御用次第、御おひ綱差上申候、其外御陣太鼓、幷時々御太鼓御陣御用之皮類、御用次第差上申候事、

一御仕置物御役、晒もの、磔、火罪、獄門、鋸挽、文字彫、耳鼻剃、切支丹像銅等ニ御座候、六十四五年以前、石谷將監樣、神尾備前守樣御奉行之時、武州鴻巣村へ磔三人被遣候に付、御評定にて被爲仰付、御奉行被下置、撿使共、私先祖ニ被爲仰付候間、御傳馬申請、長道具爲持相勤申候、此外在々支配之內江、一代に壹度づゝ相廻り改候節も、長道具爲持申候事、

〔記事條例 六十七 下〕朱書弘化五申年二月四日、訴出ニ付、書上江記、久野十馬を以相伺候上、下知中渡候事、○中略

一淺草彈左衞門代長三郎奉申上候、往古私方ゟ相州極樂寺村長吏小頭九郎右衞門外壹人江預ケ置候賴朝公御墨付可奉入御覽旨、先達而右九郎右衞門江被仰付候に付、今日私ゟ右御墨付持參仕、且九郎右衞門引連、其段奉申上候處差上置、明日一同可罷出旨被仰付候得共、右被仰付之趣、彈左衞門江申聞、同人承知仕候上に無御座候ては、上置候儀乍恐奉差支候儀にて、最同人心得方不承罷出候段奉恐入候、何卒御聞濟之程奉願上候、此段乍恐以書付奉申上候、以上、

申　二月四日　　彈左衞門煩ニ付代　長三郎

御奉行所樣

一淺草彈左衞門奉申上候、昨四日、寺社御奉行本多中務大輔樣御屋敷江、賴朝公御墨付持參仕候處、尙又明五日持參可致旨被仰付候ニ付、則今日持參仕候處、御覽之上御差戾しに相成候、依之

之乍恐以書付末御訴奉申上候、以上、

申二月五日

淺草彈左衛門代
亦吉　印

訴之趣聞置

〔記事條例 六十七 上〕乍恐以書付御願申上候事

一三御番所樣江罷上り、格式役之者と私逆に罷成候儀者、渡邊大隅守樣、村越長門守樣、御代相勤申候、彈左衛門病身ニ付、名代にて相勤候砌、段々不身上故、平日御用之節は、召仕連申候儀も、名代之もの誤來、略儀ニ仕、候此儀自然と格式之樣に罷成申候、往古ゟ大御老中樣奉初、諸御奉行所樣江、刀上下にて今以相勤申候、御番所樣之儀、平日御用多御座候故、自然と略儀ニ仕候處、只今格式之樣に罷成候儀者、私方ゟ誤來候儀ニ御座候、此度奉願候上は、只今役之者差出御伺仕候儀も、向後私直に相勤可申候間、何卒古來之通御門內迄、刀にて出勤仕候樣ニ被仰付被下候はゝ、難有可奉存候、以上、

享保四年亥二月

淺草
彈左衛門

右御番所前迄、帶刀候儀、差免候段、彈左衛門江申渡旨、年番坪內能登守組小原六左衛門、中山出雲守組阿部查大夫、大岡越前守組植竹藤右衛門三人江同月廿六日申渡、但上下者不差免、最以美服著仕間敷段、是又可申渡旨、三人江申聞候事、

〔德川禁令考 五十 降衛者〕年號闕寅六月十日

在方長吏共、彈左衛門直支配ニ成候而も差支無之哉之旨尋、幷同人差出候書面、

淺草彈左衛門奉申上候、私支配相州愛甲郡古澤村長吏小頭太郎右衛門組下、同州三浦郡浦賀村長吏久兵衛儀、先達而右太郎右衛門組を離、私直支配相成候例も有之趣を以、外在方長吏共儀、私方直支配相成候而も差支無之哉之御尋ニ御座候、

此段在方長吏共儀ハ、其組下ニ而小頭方居村より、多分里數隔居候もの共、相互ニ難澁之場合も有之趣ニ而、雙方示談之上私方江申立、先年組分相成候類も御座候處、一體右長吏小頭と申ものハ、何れも其村方始り草分之者共ニ而、壹ヶ村限り致支配候小頭も有之、又者五ヶ村十ヶ村、或者貳拾ヶ村餘致支配候者共も有之、然ルを右體組分致候而ハ際限無之候、殊ニ草分小頭之詮無之候ニ付、其後組分新小頭之儀者不相成旨、改革申渡置、且又小頭共不埒有之小頭役取放、又者不居有之仕置請候小頭共ハ、右咎仕置等赦免相成候迄、其組下之内ニ而、實體成もの見立行事役と唱、其持村々差配爲致候儀ニ御座候、然ル處浦賀表御奉行所樣御掛囚人、諸仕置もの御用向之儀ハ、右浦賀村久兵衛相勤罷在候處、近年囚人入牢人多く御用多ニ而、死罪御仕置者等有之候節、同人儀者、私直支配ニ無之故、右小頭太郎右衛門方江申出、同人を以、猶又私方江訴出候儀ニ付、入用等も多分相掛り、殊ニ里數隔り、往返六十里餘之場所ニ而手重ニ相成、且太郎右衛門方より久兵衛江以書面申來候而相濟可申儀も、其時々古澤村江被呼出候故、失費多候而、其上浦賀表御用向ニ差合候儀有之、急御用之節ハ御差支ニも相成候儀ニ付、右久兵衛太郎右衛門組を放、私方直支配爲致御仕置御用向等差支不相成樣いたし度趣、右御奉行戸田伊豆守樣、淺野中務少輔樣より、去々子年中、北御番所樣江御掛合御座候由ニ而、私被召出、前書之趣被仰聞候ニ付、右體改革申渡置候儀奉申上候處、厚御利解も御座候故、追々御日延申上置、得と勘辨仕候處、右浦賀表之儀者、御奉行所樣附別而之儀ニ而、此上御仕置御用筋御差支相成候而ハ、於私も奉恐入候間、例ニハ不相成趣、私方取極、右久兵衛ニ限、古澤村太郎右衛門組を放、私方直支配仕候得共、外在方長吏共儀者前書改革申渡置候通致し度奉存候間、何卒御賢察之程偏ニ奉願上候、右就御尋乍恐以書付奉申上候、以上、

寅六月十日　淺草　彈左衛門印

〔賤者考〕世上に今二十八箇條といふ種類、或人の聞書をもて寫出す、攝陽落穗集には、藍屋辻實ろくろ師縫物師壹作せんそり、

長吏靈匠革職と●印十五と茶屋風呂屋はケイセイヤノ下。人形廻しは猿曳の下トアリテ、弾左衛門共ニ廿八條ナリ、

一弾左衛門　●二座頭　●三舞々　●四猿樂　五陰陽師　●六壁塗　七土鍋師　●八鑄物師　九辻目暗　●十猿曳　十一非人　●十二鉢叩　十三結揃　十四土器作　●十五石切　十六放下師　●十七笠縫　●十八渡守　十九山守　二十番屋坪立　●廿一筆師　廿二墨師　●廿三關守　廿四鋺打　廿五獅子舞　●廿六蓑作　●廿七傀儡師　●廿八傾城屋

右之外道々之者數多雖有之、盗賊類除之可爲弾左衛門下之由賴朝公御判有之也、其外茶屋風呂屋は傾城屋之下、人形廻し淨るり語は傀儡師之下に付、雪駄作、革細工、膠代仕候者廿八番之下たるべし、

右は享保七年寅年、弾左衛門と車善七と爭論あり、御吟味被仰付、弾左衛門方より右之目錄に賴朝公の御判有之書物差出候に付、諸事弾左衛門利運になり、善七は幼少故、弾左衛門へ御預け、善七に組仕候頭立候者七人有之を、弾左衛門心任に何樣共仕置仕候樣にと不殘被下之、尤七人之者家財共被下置闕所之上七人之者より御願申上公儀御仕置濟、鎌倉住人藤原賴兼と弾左衛門系圖にあり、右の記文も心得ぬ事どもあり、かつおのれ○本居内遠先年見たる一本には、髮結菓子屋堅木細工などありしを、これにはなし、結揃といふ者、もしは髮結の事か、土器作鋺打などあるは何故ならむ、その品は高貴の手にもふれ給へる物なるに、賤しかるべくは、人見和泉守など鋺つくりの受領あるもいかゞ、鑄物師と鋺打とを別に出せるもいかにあらむ、關守といふ名目もいかなる者をさせるにか、山守、渡守、笠縫、蓑作も、何故にかおぼつかなし、

〔德川禁令考五十六 第三帙 卷〕文政元寅年

穢多僧取扱榊原主計頭掛り松平越後守御預り所役人出

一穢多僧取扱方之儀伺

越後守御預所備中國阿賀部村尾村一向宗穢多寺永寶寺と申もの有之、尤本寺ハ攝津富田本照寺ニ而、是迄素人僧ニ御座候由、勿論是迄穢多呼出し候節ハ、先支配振合を以、白洲江差出申候、然ル處穢多僧之儀ハ、呼出之節ハ如何取扱候而宜候哉、此段奉伺候樣、國元役人共申越候ニ付奉伺候、以上、

文政元寅年十二月

書面穢多僧呼出候節ハ、砂利江可被差出候、右ハ寺社奉行中江懸合之上申達候、以上、

卯三月

穢多村

〔賤者考〕浪華には渡邊に穢多の群あり、名古屋には西に押切村にあり、その餘所々にあり、本國紀伊若山の邊には、岡島皮田、名草郡鳴神村の中に、有馬多田口本渡村のうち、貴志莊平井村のうち、西善光明寺村の中山、東莊口須佐村の杉の尾、岩橋莊のうち、木ノ本莊木本村のうち、松江村のうち、西莊村のうちにあり、海部郡加太莊加太浦のうち、濱中莊方村のうち、南のといふ者那賀郡田中莊下井坂村のうち、野上莊沖の野村の內、七山村のうち、國分莊東國分村の內、池田莊古和田村の內、小倉莊大垣內村のうち、釋迦堂皮田、粉川莊西ノ芝村、名手莊馬宿村のうち狩宿村、高野領調月村のうち、添田皮田等あり、伊都郡には、三谷莊皮張村のうち、平沼村のうち、官省府莊佐野村のうち、中飯降村のうち、高岸皮田、下ノ町村、渴の森皮田、端場村北名久曾村のうち、勢多莊移村のうち、東村のうち、筋違皮田、相賀莊岸ノ上村あり、在田郡藤並莊のうち二ケ所、南石垣莊庄村の西光寺皮田、廣莊廣村のうち、日高郡園莊園浦の內、財部莊島村のうち、矢田莊吉田村のうち、牟婁郡田邊莊湊村のうち、富田莊十九淵村のうち、血深皮田、周參見莊の大間地村のうち、奧熊野新宮上莊野地村のうち、有馬莊口有馬村の內、尾鷲鄉林浦のうち、野池村の內、相賀庄古本村の內、船津村のうち、河內村のうち、馬瀨村のうち、長島鄉二鄉村のうち等にあり、猶其餘いさゝかづゝある所は盡しがたし、一村す

べて皮田なるは、右のうち、岡島、本渡、狩宿、西之芝、岸、上端場等のみなり、京都には、三條通の東に連りて、天部邊とて、一構の地あり、千本寺、百万遍のほとりにもありとぞ、田中のゑたといふ、下鴨の北、其他にもあり、江戸には、隅田川のほとり、待乳山聖天の邊に、穢多頭彈左衛門總支配をなす、祖先は家系賤しからざりし者なりしが、故ありてかくなれりとぞ、

〔風俗見聞錄 五〕近江國彥根の領分に、野良田村と云穢多村有り、是は年老たる牛馬を國々より連來るを、纔の價にて買取り、毒を與へて殺し、皮を剝、毛を剃り、肉を炙りて膏を取り、煮皮を製し拵するなり、此所の穢多頭才次、才兵衛といへる二人有り、倶に三四十万兩の身上成りと云、扨牛馬は國民を助力するものなれば、老て役に立ざる迚捨殺は非道也、此業體停止して、宜敷追て考べき事也、是も昔は此所壹ヶ所なりしが、今は所々に出來たりと云、兎角善事は廢り安く、惡事は數多く成行也、

〔相州兵亂記 四〕景虎小田原へ寄來事

此日小田原ノ物見一兩人、一色ノ穢多村へ行、ツヤリタルモノヲ著テ、穢多ドモニマジハリ、敵ノモヤウヲ見ルニ、景虎ハ白布ニテカシラヲツヽミ、甲ヲヌギ郎等ニモタセ、黑馬ニ乘リ、諸手ニ乘リ込乘リ込手分ヲシテ陣ヲトラシム、〇下略

〔國制記 三〕穢多村御朱印之事

一御朱印高百九石七斗七升　穢多之長　下村勝助

三條餘部村　六條中島村　田中川崎村　東山瀧口村　蓮臺之村　北小路村

右六ケ村穢多共、藍染や紫や共、皆々穢多勝介支配いたし候、又毎月二條御城内掃除勤、右之通候處、寶永五年勝介病氣末期ニ家督願立不相叶、御朱印被召上、只今は御城内掃除相止可申候、六條村餘部村頭分牢舍勤之、

穢多服公役

一非田院手下非人　八千三百拾四人
一穢多村總人數　千七百廿壹人
　每年七月十六日、鳥目五匁、柴代二分、酒五合引、飯壹合、餅壹さし、牢舍之內廿一人江被下候、
〔雍州府志八古蹟〕愛宕郡　悲田寺〇中略　東三條南有天部村、此處與悲田寺爲一雙、然此處居人、而專剝牛馬皮爲革、以此張大鼓、又以此革縫革鞋底、每日出市中、據小宮、入鍼幷綵革補履破、此天部悲田寺共號穢多、元剝取牛馬皮故、觸穢多、因稱穢多、或號皮太、太字倭俗助語之詞也、其家富者多、然世人忌之不共家居、不同座席、兩村共建堂安彌陀像修念佛、又以蟬丸爲開祖、每年八月二十八日揭畫像修忌、相傳蟬丸在逢坂關、側往來之人、以此爲乞兒之祖者、與可笑而堪痛、
〔徳川禁令考五十降簡考〕嘉永六丑年九月
　領分之穢多武役其外ニ遣ひ候而も不苦哉之旨問合幷挨拶
領分ニ而穢多之もの共、武役其外用人足ニ遣候而も不苦儀ニ御座候哉、公邊御定も御座候哉、爲心得罷在度、此段奉伺候、以上、
　　　　　　　　　　　　　　　　　松平伯耆守家來
　九月廿六日　　　　　　　　　　　　原四郎兵衛
附札
書面穢多方之儀者、其品ニ寄、領主心得を以被遣候とも、差支之筋ハ有之間敷候得共、平人同樣之遣方ニてハ難相成ものニ有之候、
安政六未年
　下田表穢多非人之儀ニ付、同所奉行より問合
　　　　　　　　　　　　　　　　　　下田奉行
　町奉行衆
去々巳三月中、捕者共掛りニ而獄門御仕置申付候もの有之、其節晒小屋番人等御預所、豆州岡方村番非人金太郎江申付爲取扱候儀之處、其後同國之儀ハ、東海道三島宿長吏小頭三郎左衛門差配

場ニ而、死罪以上御仕置等有之候節ハ、右取扱方御代官陣屋等より、同人申付受取計來候ニ付、以來平常入牢人送迎繩取等ハ、前書金太郎江申付差支無之、死罪以上御仕置もの有之候節ハ、三郎左衛門江申付受度旨同人申立候、右者前書御仕置もの取扱而已ニ無之、自然穢多非人等吟味之上、相當之仕置可申付旨申渡可遣儀も可有之、就而ハ御仕置もの取扱、其餘右相當仕置可申付もの引渡方とも、前書三郎左衛門呼出申渡差支無之哉、彈左衛門御糺之上、否早々被御聞候樣いたし度存候、此段御問合およひ候、

未二月

御書面之趣致承知、穢多頭彈左衛門相糺候處、下田表御仕置もの、本文三郎左衛門江取扱被御申渡、且穢多非人等御吟味之上、彈左衛門方に而相當之仕置可申付旨被御申渡、三郎左衛門江御引渡相成差支之筋無之、尤其表より三郎左衛門居村迄ハ懸隔致し居候間、急御用等之節差支相成候而ハ如何ニ付、同人組下ニ而最寄椎原村長吏小組頭嘉左衛門と申もの江被御申付候得ハ、相辨候由、彈左衛門申出候、此段御挨拶およひ候、

未三月　町奉行

〔京都御役所向大概覺書六〕穢多靑屋勤方之事　享保貳酉改

一粟田口鋸挽御仕置　但生さらし晝夜三日番、三日目ニ磔晝夜七日番相勤、
一同所火罪御仕置　但晝夜七日番相勤
一磔御仕置　但晝夜五日番相勤
一獄門御仕置　但晝夜三日番相勤
一西土手斬罪御仕置もの有之節罷出候
一東西御仕置之場所掃除相勤

一二條御城之堀江身を投相果候者有之候時、奉行所ゟ指圖申付、千本通三條之辻ニ而三日さらし番申付、居住相知レ不申候得者、取片付させ申候、

一牢屋敷内外之掃除相勤

一牢死之者有之候得者、取片付させ候、

一京都出火之節、牢屋敷江人足召連相詰候樣ニ、延寶元年丑十一月ゟ被申付候、

一斬罪役之義、いつ比ゟ相勤候哉年數不相知候、

〔雍州府志 八古跡〕愛宕郡 悲田寺 凡所在洛内外之紺屋、以藍汁染衣服者號靑屋、又稱藍屋、如今紺屋爲染家之通稱、其中靑屋元穢多之種類也、穢多幷靑屋每有刑戮、此徒必出其場、預斯事、或磔尸、或梟首、凡穢多之始、吉祥院南小島爲本、此處有稱乃保里者、是有罪人懸道路時、紙旗記罪狀、書姓名、先以竿捧持此旗、以唱道路者也、斯徒每日輪次掃除二條城外之塵埃、是出自棄不淨者也、禁裏院中掃棄塵埃者謂濯、是丹波山國人、而京師與棄不淨之徒、其類同者乎、

〔鹽尻 三〕一今に島吉祥院の保里、是又悲田院の部類、刑罰の時、紙旗に罪狀姓名を書とる者、每日二條城外の塵穢を掃除するも、中世よりの風歟、

禁裏院中の御築地の塵穢を掃ふ者は、丹波國山岡より來り、是を己募志といふ、塵穢を覆ひ棄るの謂歟、

匿身分

〔諸例類集 六〕天保九戌年十二月九日、御付札濟、

穢多平人と偽、町方へ奉公ニ出居、其後相顯候はゞ、何程の咎申付可然哉、且穢多と不存受人ニ罷立候町人、是又何程の咎申付可然哉、爲心得此段奉伺候、以上、

十一月廿六日　酒井修理大夫家來　赤見五左衛門

付札

書面、穢多者急度叱程、受人は過料三貫文程ニ而可ㇾ然候、

（記事條例 六十七上）明和五子年六月八日言上帳書拔

穢多　彈左衞門申上候

一私手下、相州陶綾郡大磯宿小頭助左衞門手下、同國高座郡藤澤宿非人小屋主源左衞門抱非人權八と申五十二歳罷成候者、去亥年六月廿日夜、右源左衞門女房ねいを致二殺害一逃去候處同廿八日召捕、右助左衞門引連出候間、吟味仕候處、權八儀、ねいを殺害仕候儀相違無二御座一候間、同十二月廿五日、私方法之通、右權八を死罪ニ可二申付一旨奉二伺候得者、御伺申上候筋にては無ㇾ之候間、段々御評議之上、御届書にて申上候樣被二仰渡一候處、其通認直今日申上候得ば、前例有ㇾ之候間、被ㇾ御聞直、最法之通可ㇾ致旨被二仰付一候、爲二後日一申上候由、右之彈左衞門煩ニ付、代市右衞門申來候、

（諸御用秘鑑 二）穢多非人御仕置之部

一穢多非人等咎之儀、穢多頭江相渡候事、定法ニ付、中國筋之分も大坂江引渡可ㇾ然哉之旨、安藤彈正少弼々相談申來候ニ付、相糺候上御城代江も申上及二返書一候寫、

御切紙致二拜見一候、彌御堅固被ㇾ成二御勤一珍重奉ㇾ存候、然者穢多非人等不屆有ㇾ之、追放以下之御仕置ニ當り候得ば、其所之穢多頭江引渡、相當之仕置申付候樣御申渡被ㇾ成候事ニ御座候處、中國御代官所之穢多非人不屆有ㇾ之候節、穢多頭無ㇾ之候故差支申候由、尤中國御代官所ニ而爲二御糺一被ㇾ成、彌中國ニ穢多頭非人頭も無ㇾ之候はゞ、當表之長吏江爲二御引渡一可ㇾ被ㇾ成と思召候其節は中國筋御代官陣屋江當表之長吏參り可二請取一筋ニ候得共、遠方罷越候儀差支候はゞ、拙者共御役所江差出候樣被二仰渡一於二當表一長吏江相渡、相當之仕置申付候樣可二申渡一旨、其度之御懸合被ㇾ成候方ニ而も可ㇾ然哉、右之通、中國之穢多非人不屆有ㇾ之節、引渡相當之仕置申付候樣申渡、差支之筋無ㇾ之哉、長吏共相糺、猶又存寄も可ㇾ得二御意一旨、御紙面之趣、委細致二承知一候、都而當

表ニ而は、穢多と非人と者相分有之、非人之支配穢多ゟは不致候付、非人共ニ不屆有之節は、御代官江申達候上、長吏共江引渡、相當之仕置申付候樣申渡候儀、前々ゟ仕來ニ御座候、尤當表ニも穢多頭と申は無之、穢多年寄と申者有之候付、被仰聞候趣ニ而は、中國筋穢多ニ不屆有之節は、穢多年寄江引渡、非人ニ不屆有之候はゞ、長吏江引渡候方ニも可有御座哉ど存候、勿論中國筋之儀は、右之者共一向ニ手を離れ候場所ニ付、穢多非人不屆有之候節、當表ゟ穢多年寄又は長吏之內請取ニ遣候而は、召連歸候途中、手當不行屆儀も可有御座候ニ付、中國筋ニ而不屆有之穢多非人御引渡之節は、其向之御代官ゟ拙者共御役所江差出候樣被仰渡、其度々御掛合有之候樣致し度存候、且又右之通、當表に而は、穢多と非人相分り有之候得共、不屆有之候非人御下知ニ而穢多頭江引渡、相當之仕置申付候樣、可申渡旨被仰渡、右年寄江相渡候儀も御座候間、左樣御心得可被成候、此段久世出雲守殿江相達候上及御報候、以上、

五月　　　　神谷大和守

安藤彈正少弼殿宛

朱書
右は安永二巳年、西懸り盜賊方往復帳ニ留有之、

一都而穢多御仕置之儀、役人村年寄江引渡候而は、於右村咎も無之由、年寄共申立候、左候而は御仕置被仰付候詮も無之道理ニ付、安永三午年、於穢多村ニ石打有之咎伺候節、右之段朱書を以申上候處、右伺書江は是迄之通、穢多村江引渡、相當之仕置申付候樣、御差圖有之、猶又右ニ付別紙を以、被仰渡候趣有之に付、左ニ記、

致婚禮候と心得石打あばれ候一件

攝州西成郡穢多村新屋敷町
河內屋
七郎兵衛

百日手鎖

右同村拾軒町

當検屋
惣右衛門
外六人

五十日宛手鎖

朱書
右之者共儀、穢多之身分ニ付、穢多頭江引渡、相應之咎申付候樣可申付者と奉存候得共、先規ゟ當表に穢多頭と申者無之、穢多村年寄役相勤候者兩人有之候得共、御役所より引渡ニ成候者取計方定り候村法無之、是迄引渡候者共も、村方之外致徘徊間敷旨申付候迄ニ而、咎申付候程之取計仕候儀無之旨、年寄共申之候、然ル處、右村江引渡候而は、御仕置無之道理ニ相當り、其上輕キ者共之、輕く相濟候事之樣存候而は、如何之儀と奉存候間、貫紙下札之通相伺申候、

右は穢多村年寄江引渡、相應之咎可申付旨可被申渡旨、伺書ニ致附札候、右咎之儀は、書面之日數手鎖可申付當り之者ニ候間、穢多村年寄方ニ而、其通ニ可申付候、尤手鎖無之候はゞ繩手鎖ニ而不苦候、勿論封印いたし七郎兵衛は隔日、其外は五日目毎ニ封印相改候樣可致事、

〔延喜式三臨時祭〕凡鴨御祖社南邊者、雖在四至之外、濫僧屠者等不得居住、

〔陰德太平記二十二〕毛利元就誅井上一黨事

然ニ河内ガ嫡子井上源五郎就兼ニ奉公セシ中間ノ者、後ニ商人ト成テ居タリケルガ、吉田ノ市ニ於テ、他所ノ穢多ト聊ノ口論ヲシ出シ切殺サレニケリ、此時吉田ノ穢多豚田ト云者、奴ハ婢ヲ見テ慇懃ナレバ、他所ノ穢多ニ聊志アル體ニ見エタリトテ、井上ノ者共大ニ腹ヲ立、一門悉ク馳集テ二百餘人、豚田ガ屋敷ヘ押寄タリ、豚田モ一門廣ク、殊ニ富饒ナル者ニテ、下人數多召仕ヒ、軍陣ニ趣テモ敵ヲ切破事、數箇度ニ及ケル程ノ者ナレバ、一類下人共數百人ガ心ヲ一致ニシテ防ギケル故、井上等輙ク打果ス事ヲ不得ケリ、サレ共豚田熟ト思案シテ、吾一人命ヲ惜テ、子共一族等ヲ亡サンモ不便也、不如速ニ頭ヲ延テ多ノ者共ヲ助ケンニハト思、妻子眷族等助ケ給ハヾ、吾一人頭ヲ延テ討レ候ナンズト斷リケル故、源五郎左有バトテ、渠ガ望ニ任セ、豚田ガ頭ヲ刎、家ニ

火ヲ放チ鬨ヲ咄トゾ揚ニケル、

〔皇都午睡三編中〕武州在にて百姓の數年飼たる牛死す、主人彼牛を土葬にせんとす、日頃主と心易き者の云此牛迚も土中へ埋る者ならば、皮をはいで埋め玉ふべしとすゝむ、主同心して、彼牛の皮をはいで、其肉を土に埋む、其後江戸の穢多頭團左衞門、此事を聞て、畜類の皮をはぐは、我組下の職也、彼在の者我手下に付べしと、使を以て云渡す、在所中大に迷惑して、いろ〳〵と佗さまざまと扱へ共、聞入ずして、既に公儀へ訴ふ、團左衞門云、私先祖より持傳候賴朝公よりの御教書に認られ革をはぐ事、全く私手下に附申事に候間早々右の村手下に付候樣御取計下され度よしを願ふ、此事小笠原佐渡守畏つて、左候はゞ、某心の儘に裁斷仕度と有り、御老中成程其許心の儘に致し申べしと也、佐渡守殿、夫より團左衞門、彼百姓を私宅へ召寄られ、段々問屆其上にて百姓によく聞け、其法を知ぬとて、團左衞門が賴朝公の掟を以て法を立るゆゑ、其法は破られず、さあれば團左衞門が手下に附べしと有り、團左衞門大に喜び百姓は迷惑す、佐渡守重ねて申渡さるゝには、彼百姓は元來權現樣へ御奉公申上たる筋目なれば、外人と變り有る百姓を、團左衞門が方へ引取事罷ならず、團左衞門が黨を、彼百姓村の並びへ引越させ申べし、かくの如くすれば、賴朝公の掟も立、權現樣へ御奉公申たる筋目も立なれば、其通りに心得べしと申渡さる團左衞門、大に迷惑して、先達て申上候御願ひには、少々間違の所も御座候間、此度の義は、御免遊ばされ、彼願ひ御下げ下され候樣にと御詫申に付、其通り事濟しとなり、

〔駿國雜志六〕馬捨場　馬捨場は、有渡郡南安東村音羽山淸水寺眞言の山の右の方にあり、田間三十間四方計りの地を云、一名河原場と號す、此所を河原場と唱る事は、往昔志豆波多川此邊りを流れたり、故に此名あり、里人云、すべて牛馬の斃たるを捨る時、毛皮町の穢多に告れば、穢多來り其皮を剝ぎ、革(ナメシガハ)に制るの後、裏付雪駄一足宛を持來り、是其皮を得たるの恩を謝する也云云、

〔風俗見聞錄五〕一穢多非人の類、小屋もの番太など唱る者共、三都其外國々任々に增長し、人數も莫大に多く成りて、平人よりも奢り慢りたる行勢なり、先江戸の穢多頭團左衞門といへるは、凡三千石高程の暮し方を成し、非人頭松右衞門、善七などいへるも、夫に准ずるなり、其以下次第段段有りて、何れも放逸に暮すなり、上方筋は、別而穢多の增長せし事にて、大坂渡邊の穢多に、大鼓屋又兵衞といへるは、凡七拾万兩程の分限にて、和漢の珍器倉庫に充滿し、奢侈大方ならず、美妾又も七八人有りといふ、是に續きたる者段々有りて、豪福數十人有り、京都西本願寺折々大坂江勸化に下り候時、或ひは小判步判を枡に盛りて、幾枡も並べ、又は小玉銀を幾俵ともなく飾りて奉納すると云、全體世の交りを離れたる者故、年々金銀を取込計にて、出ス事迚は此本願寺江の奉納而已と云、實に佛道は強きもの也、

〔七十一番歌合中〕卅六番　右　穢多

人ながら如是畜生ぞ馬牛のかばらのもの、月みてもなそ○中略

右馬牛のかはら、ことによろし、可勝なり、○中略

皮かはふ

〔七十一番歌合上〕十番　右　かはかはふ

いけはぎの皮かはふ時ながむればあかはだかにもすめる月哉○中略

忍び妻たゝずむよひの門の犬えたに別の人をとがむる

朝かへる道行ぶりのかはかはふ我逢つると人にかたるな、

〇按ズルニ、かはかはふモ亦穢多ノ類ナラン、因テ姑ク此ニ附載ス、

非人名稱

〔嬉遊笑覽乞士十一〕非人はもと貧人と書り、非人とは惡行ありて人にあらぬ者の名なり、かたゐは路の旁に居て物もらふ故なりといへり、今病の名をもていふは、癩の一名を經治要決に害大風とあり、これをものよしといふは反語なり、物吉はもと祝詞なり、江家次第、被補次侍從事、元日節會

輔親朝臣、公則朝臣、参入着幄、稱云、元日奉拜龍顏、是物吉之事也、其後久無諸大夫着幄とみゆ、癩人にいふは、醒睡笑祝ひ過るもいなものといふ中に、或者正月二日の夜夢におもひよらず、我身に癩瘡いできたると見て、目さめて案ずるやう、かれをば物吉といふなれば、仕合なにはに物よからふといへる咄あり、西武獨吟百韻、まだよに古質のこるものよし、荷ひ賣行もかへるも二季のきはには、かならず初穂を、ものよしが取なれば、かく付るなり、

〔記事條例 六十七下〕非人名目幷書七起立御尋ニ付左ニ奉申上候

一非人名目之儀は、古代於京都悲田院御取建有之、飢寒病難貧苦之類御救被遊候砌、寄集り候者は、鰥寡孤獨之廢人に候儘、昔は悲田人と名付候趣、悲人とは右之略語ニも可有御座哉ニ而、尤三條之北に悲田院村とて、物を乞候者而已住居致候儘、悲田地とも相唱候趣に御座候、

但非人と書來候儀は、出所相別兼申候、〇中略

天保十亥年九月十七日　　車千代松印

〔四方の硯 六〕有勅賜非人逸勢男龍劒賓山等本姓聽入京、當時非人といふ濫觴なるべし、本刑餘の人を非人といふより、其子孫までも非人といふ、今の非人といふ者に、いかで勅あつて賜本姓あらんや、此載考證の一に備ものなり、

〔烹雜の記 前集上〕因にいふ、近ごろ四方硯とかいふ物を閲せしに、いと愛たき考多かり、そが中に、非人といふ濫觴なりとて、三代實錄を引て云、有勅賜非人逸勢男龍劒賓山等本姓聽入京、これ當時非人といふ濫觴なるべし、本刑餘の人を非人といふより、その子孫迄を非人といふ、今の非人といふものに、いかで勅ありて賜ことあらんや、こゝに載て考證の一に備るのみといはれしは、こゝろ得がたし、實錄に所謂非人逸勢の非は罪字の誤にて、印行のとき、剜を脱せしものなり、すべて印本の三代實錄は、脫文特に多く、誤字も又少からず、補任などの事、その餘許多

漏したり、これ善本を獲ずして刊行したれば也、むかし犯人を非人といひしこと、外に見及ばざることも也、文德實錄には嘉祥三年五月壬辰の條下流人橘朝臣逸勢とありさて今いふ非人は人にあらずといふ義にはあらず、非當作悲、彼等悲田院垣外の徒なれば、悲人といふなり、

〔享保集成絲綸錄四十一〕延寶二寅年十一月

一當年米高直付而、頃日非人少々相見候、町內は不及申、近所之河岸端廣小路ニ罷在候、非人名主月行事立會相改、非人之在所、同地頭領主幷年承屆ケ書付、明日明後日之內、御番所迄可致持參候、追而非人かたづけ樣可被仰付候間、夫迄は先其所ニ可差置候、もし六ケ敷存、他所江遣シ候はゞ、名主月行事急度可被仰付候間、其心得可有之候、以上、

十一月

延寶二寅年十一月

一今度町中ニ而改候非人儀、當分其所々ニ差置候樣ニ相觸候得共、最早埒明候間、如前々非人心次第何方をも乞食致させ可申候、但町內ニ罷在候而も障も無之者は、其通差置尤ニ候、以上、

十一月

〔半日閑話二〕一非人已來取〆方之書付、

一非人頭善七、松右衛門、善三郎、久兵衛手下小屋頭百廿九人者、役筋相勤候者ニ付、是迄之形ニ而、其外六百四拾五人之小屋頭共は、黑元結ニ而髮を結候事、

一非人共儀は、髮を束候儀一向不相成、斷髮ニ而手拭之義暑氣寒風雨之節、凌之爲被り候共、天窓江卷付、斷髮を不隱樣、丈八寸を限、手拭持候事、

一女非人之義、黑元結幷丈長紙黑染相用、髮を束、木櫛をさし候事、

一非人衣類之義、男女共ニ不限、布木綿之外、絹類一切著不致、たとひ木綿候共、目立不申品著し、抱

非人者古木綿著致候事、

一非人女の内、身賣致し、平人に立交り候事、決而不相成、着類之義、前書同樣にて、髮はたぶさを出し不申、草束に致し、木櫛をさし、寺社境内又は明地等之茶屋の内ニ而、淨瑠璃を語り、井町方門門に立候共、或は袖乞致し候者、私用ニ出る時、目立不申候樣致し、平人に紛敷致成し候儀、曾而不致候事、

一武士方寺院百姓町人江對し、不致不禮、物もらひ江出候とも、惡ねだり、又は惡口等致候義は、嚴敷申付置候事、

一紙屑拾ひ、非人共袋は、決而極不申、籠計持廻り、亦鍵を仕付候節所持不致、橋に而賣買いたし候はき物之義、捨るを拾ひ取候にも無之、捨度品所持不致候事、

一囚人往來之節、非人共權柄がさつ成義、曾而不致、馬籠駕ニ而も、往來の者を片寄させ候義者不及申、往來妨ニ不成樣致し候事、

但し道狹之場所、又は込合之場所ニ而、囚人大切之義ニ付、小荷駄馬車等にて怪我等可有之時節は、助合致候事、

一囚人有之節、時に寄、横目非人番所江來候節、勝手へ上り候義者不及申、權柄又はがさつ成義は曾而不致候事、

一堂宮地所江出候而、物眞似致候非人の内、牢内井縛方等之眞似者不及申、流行唱にても世間之時に拘り候儀、曾而不致候事、

右者近頃非人共不作法ニ相成候ニ付、已來取〆方取扱御筧可串申上候旨、御奉行樣ニ而、穢多頭彈左衞門江被仰付候ニ付、書面之通申候間、町中に而も承知仕罷在候樣、將與左衞門被仰聞候趣、御組合御同役中而々江御承知可有之樣ニ、各樣ニ而も御取計可被下候、

寛政八丙辰九月廿七日　　月番肝煎

右之通、明田捴治郎殿ゟ被申聞候段、左様御心得可被成候、以上、

〔記事條例六十七上〕物貰之非人共、悪ねだり等致し候儀、寛政八辰年、此者江申渡、委細書付差出候儀も有之候、然處當月子供髪置袴着有之候門々江罷越、祝義之儀ねだりヶ間敷義致候儀有之哉に相聞、右之内には、其家柄により、祝儀之定も有之様申成し、彼是不届之儀申候ものも有之候哉之風聞に候、且右祝儀に付、武家に不限、神社之参詣之女或は子供等之内江立並、相咎候得ば、悪口杯申候女非人杯も有之由、右體之者は非人頭共ゟ心付召捕、急度も可申付事に候哉之趣、善七松右衛門、其外之非人頭も急度可申渡候、若不埒之非人有之ば、男女にかぎらず、召連出候様、町方江も申渡候間、心得違無之様可申付候、

右之通、文化八未年申渡置候處、近來不相用、種々ねだりヶ間敷事共有之趣に相聞候、右様之節は、直に捕押候様、組廻り之もの江も申渡候間、猶又心得違無之様可申付候、

右之通被仰渡奉畏候、爲後日仍如件、

文化十四丑年十一月　　穢多頭　彈左衛門

〔朱書〕丑十一月四日

南御役所にて、彈左衛門江書面之通被仰渡候旨、年番方ゟ達シ、

右年番　名主共

〔天保集成絲綸錄百三〕文政五午年正月

江戸四ヶ所非人頭共、手下小屋持非人ども、古來ゟ銘々勧進場之内、日々相廻り施物を貰ひ、右助成を以、淺草品川兩溜預之者番、并國人送り迎、又は奉行所江も相詰、或は野非人共を狩込手下ニいたし、町々不浄物之取片付等をも可致儀之處、近來稼薄く、手下之もの共相減、野非人共之儀は

非人頭

寇り候ゆへ増長いたし、店前江立塞り惡ねだり致し、河岸抔ニ群居、場末ニは小屋を作り、大勢住居いたし候分も有之、右之内ニは無宿もの抔も入込、惡事致し候類も可有之哉、且町々往還之不淨もの等片付も、等閑ニ成行候ニ付、是迄祝日等ニ而遣し來候外、古來之ごとく町々表店之分計場所柄ニ應じ、日々隔日或は二日置位ニ、其所之小屋持共致勸進、施物乞受致、尤志無之者江は强而ねだり候儀ニは曾而無之旨、非人頭ども相願候ニ付、願之通聞屆候間、得其意、其方共より無急度申渡置候樣可致候、

午正月

〔市中取締類集 九ノ四十四〕天保十二丑年九月〇中略

一非人物貰之儀、町方祝儀佛事等之節、其當人共身上向厚薄ニ隨ひねだり候間、右を斷候得者、扣帳有之抔不當申、右帳面を持參致し惡ねだり致し、或は毎月朔日、十五日、女子非人大勢群參り、家前ニ立塞、中ニは雜言等申候者も有之、町人共商ひの妨ニ相成、迷惑致し候樣子ニ御座候、

〔記事條例 六十七下〕非人名目幷善七起立御尋ニ付左ニ奉申上候〇中略

一先祖善　儀は、三州あつみ村出生ニて、乍恐御入國之砌、淺草大川端邊に、小屋補理相煩罷在候處、慶長十三申年中、町御奉行米津勘兵衛樣、土屋權右衛門樣、御勤役之節、非人頭被仰付、淺草元鳥越ニて五百坪之居地被下置候處、其後御用地に被召上、寛文六未年十一月十八日、渡邊大隅守樣、村越長門守樣御內寄合江被召出、當時之地所九百坪爲替地被下置候旨被仰渡、町御年寄樽屋藤左衛門樣ニて、引料金三十五兩頂戴仕、其以來只今以永續仕候儀に御座候、右就御尋往古之書物取調候處、先年燒失仕候間、乍恐申傳奉書上候、以上、

天保十亥年九月十七日　車　千代松　印

〔記事條例 六十七上〕天保十四卯年十月廿九日

一淺草彈左衞門申上候、私支配品。川。非。人。頭。松右衞門手下初太郎儀、一昨廿七日紙屑拾罷出候途中、芝切通往還にて、人形衣裳之類、葵御紋附候品、取交せ三拾七、并箱ニ入候墨壹挺蓋無之箱に手遊之類七品入、捨有之候を、拾取持歸り申候、則持參爲御訴申上候由、右之彈左衞門右初太郎召連申來候、

〔非人頭假牢番非人內借願一〕弘化元辰十二月

品川非人松右衞門溜御入用金、拜借之儀に付申上候書付、

牢屋見廻

品川非人頭松右衞門儀、近年勸進貰錢、殊之外相減、難儀仕候ニ付、溜御賄金前借之儀、別紙之通願出、右者先例も有之、難澁之趣無相違相聞候間、前借可被仰付候哉、別紙願書相添、此段申上候、以上、

辰十二月

荻野勇藏

三村吉兵衞〇中略

〔朱書〕弘化二年巳四月十二日、高林忠大夫を以上ル、翌十三日申上候通り、御下ゲニ付承り付いたし返上、

非人頭松右衞門內借金之儀ニ付申上候書付

書面申上候通り、可取計旨被仰渡、奉承知候、

四月十三日

兩年番

當正月廿四日、青山邊ゟ出火之節、非人頭松右衞門勸進場所、過半類燒之上、手下小屋頭共、居小屋貳拾二軒燒失致し、貰錢等も相減じ、溜賄方差支、候付、御入用金百五十兩內借之儀、牢屋見廻り申上候書面、御渡被成候付、取調候處、御入用減方御伺申、去辰年正月ゟ同八月分迄、御入用渡り無之、賄方必至と差支候趣、同九月中申立、其節取調伺之上、金八十兩御役所二つ割を以、內借被仰付御入用渡り之節に、金五兩宛返納爲致、未殘金拾兩有之候得共、今般松右衞門願之趣、無餘義次第に

御座候間、両役所二ッ割を以、願之通り内借被仰付、前書返納残金拾両者、右内借金之内を以、此度皆納為仕、其餘者松右衛門申立候通り、御入用渡り之度毎、金五両宛返納為致候得者、御差支之儀も無御座候間、内借被仰付可然哉に奉存候、依之御渡被成候書付返上、此段申上候、以上、

巳四月

佐久間彦大夫
仁杉八右衛門
谷村源左衛門
都筑十左衛門

新非人取扱法

（徳川禁令考五十降箱者）寛政元酉年八月

素人より非人ニ成候者取扱方、其外弾左衛門より差出候書付、

一狩込無宿男女共非人ニ相成候後、身寄之ものより素人ニ引立度段、非人小屋頭共方江申来候節ハ、非人頭共より私方江申出候上、引立人より抱主小屋頭共方江證文受取引渡遣候、

但拾箇年以前、非人小屋ニ居候者ハ、素人ニ不相成定法候得共、類而引取度由相願候ものハ、素人ニ立戻候儀ゆへ、致勘辨為引取候儀も御座候、

一非人ニ相成候後、非人素生之女を妻ニ致し、子供出生致、夫素人ニ被引取候共、右妻子ハ為引取不申候、

但夫非人素生ニ而、妻狩込無宿ニ而、妻被引立候節も、夫井子供為引立不申候、

一非人素生之ものハ、素人ニ相成候儀決而無御座候、右就御尋乍恐以書付奉申上候、以上、

酉八月九日

穢多
弾左衛門印

（徳川禁令考五十降箱者）年號闕午十月十日

素人より非人手下ニ相成候節之事

一平人より非人手下ニ相成度旨申入候節、直ニ手下ニ申付候哉、又ハ其もの身寄等之存念相糺候儀ニ候哉之旨御尋ニ付、左ニ奉申上候、

此段私支配御當地四箇所非人頭より、日々非人制道廻り之者差出、無宿野非人共、捕押候節、當人心體承り、又ハ小屋頭江平人儀相便り、非人手下相成度段申候得ハ、非人頭共方江連參り、同人共方ニ而申口取調、御當地之もの親元親類等承り、懸合之上無構一札取之、万一差出者無之分ハ家主江相屆、其上口書取、且在方生所之ものハ、當人申口頭共ニ而入念取調、口書取、私方江引連候間、尙糺之上、非人掟申聞候上、非人手下ニ申付、前書非人頭共江引渡遣候得ハ、同人共方ニ而夫々小屋頭抱人別ニ致し、私方訴出候間、其段毎月二日兩御番所樣江御訴奉申上候儀ニ御座候、

右就御尋、乍恐以書付奉申上候、

午十月十日　淺草　彈左衛門

(評定所張紙)非人素人ニ成候儀ニ付、彈左衛門差出候書付、

一全體非人素性のものは、素人には不仕候往古より作法ニ而御座候、尤素人より、一旦非人ニ相成候ものも、十ヶ年相立不申候內者、其非人之緣者より引上申度段、非人小屋江申來候節、其趣非人頭共より、私方ヱ申出候間、證文を取、素人ニいたし候樣申付候、勿論十ヶ年相過候ものは、素人に不仕候作法ニ而御座候、然共非人より素人に相成候儀、出世に而御座候間、近來は年久敷非人に而も、其非人の緣者より引上申度段、非人頭共方江相賴候得ば、一應右作法之趣爲申聞、頻而引上申度段申候者江は、證文取、爲引上候得共、前書ニ申上候非人素性のものは、素人には不仕作法ニ御座候、

右之趣、御尋ニ付、乍恐以書付奉申上候、以上

非人訴訟

酉五月八日　　　　　　淺草 彈左衞門印

〔佐藤家所藏文書〕本寺奈良坂非人陳申

清水坂非人等條々虛誕子細狀

一彼狀云、相語當坂小法師原、打入當坂、令殺害長吏畢云々、

陳申云、不知子細申狀也、彼坂所住之非人等、吉野法師、伊賀越前、淡路法師等、無指過、爲長吏法師被追却之剋、奈良坂宿仁來歎申之間、播磨法師者、爲彼長吏法師奉功無雙者也、仍被追却之輩於欲令安堵、相具令上洛之處、背法相口之間、慮外仁被打取畢、即其奉功申候者、彼長吏法師爲同宿之阿彌陀法師被追出之時、頻相語播磨法師、依令大望故、故二條僧正御房寺務御時、令言上子細、如元令還著畢、而彼既忘此重恩、及鬪戰畢、更造意之至、非播磨法師之不知恩候者歟、

一同狀云、淡路法師者、播磨法師之姉聟也、乃至爲遂播磨與力宿意云々、

陳申云、妹聟也、有若亡申狀歟、都彼坂當長吏法師任貪欲之心、召集宿々非人等、下遣於當國中眞土宿、欲押領彼宿之剋、彼宿長吏眞土宿之長吏、近江法師兄弟二人之處、弟法佛法師申云、不背本寺云々、因茲去仁治二年七月九日、忽殺害法佛幷妻子合四人仕畢、凡巧非理之妨、剰守道理法佛法師等於殺害仕條、古今未曾有惡行也、罪過之甚、何事如之哉、所詮御治罰遲引故、令乘勝如此、構申無實也、狼藉之至、尤可有御禁罰候也、然者先男女四人張殺之體搦召、清水坂眞土宿兩長吏法師、爲向後尤可有御罪科者歟、

一同狀云、寺家龍東西南北於墓跡堂舍塔廟等云々、

陳申云、須彼寺之無道、結構四人殺害之時、任普通之儀、或差下小法師原速可追出候之處、依爲上御沙汰、成恐怖、于今不治罰候、何今及寺家堂塔之燒失哉、不足言申狀也、凡一々事可陳申彼狀之趣、頗以似物狂、依之所詮所言上候也、

抑當國七宿者、爲本寺奈良坂之末宿、既年序久積、而今乍爲非人之身、好猛惡構謀反之條、不當之間、淡路法師自然礼中如此之理非之故今敵淡路法師、忿怒之餘、忝如此任口牒申付無實者也、卽去仁治元年三月廿一日相語惡徒等、淡路法師ヲ令損害仕之條、四隣之諸人、皆以所見知仕也、以一察万、以之且可垂御景迹候也、彼等申狀返爲當宿喜也者、早任道理、且依四人殺害之罪、且依末宿押妨之過、召取彼等、欲可賜當宿、有御納受者、彌奉仰賢政之貴、仍披陳如右、

寬元二年三月　日

〔嬉遊笑覽乞十一〕經濟錄、享保中、諸乞丐人をば、皆醫を斷しめらる、是より平人と異なる誌出來て、混ずることを能はず、目出度政なりといへり、按るに、享保七年寅五月、年來善七彈左衞門手下にあらぬよし爭論せしが、此時善七方人ども負となりしことあり、醫斷しめられしは此時なるべし、

〔我衣〕享保七寅年四月廿八日、彈左衞門長吏長吏トハ手下有ナリ車善七及公事、非人マケテ、ソレヨリ後ザン切トナル始メナリ、所持ノ圖本ニアリ

〔德川禁令考後聚三十八例書〕非人法外之慮外いたし候節、打殺候もの之事、

延享元子年十月御仕置之例　　上州青梨子村百姓十左衞門

此十左衞門方江、同國金古村非人長助長八物貰に參候處、施物不足之由申ねだり候上、十手を以女房を打擲いたし、十左衞門江も打懸候故、有合候棒ニ而打拂候處、長助頭江當り相果候、打殺候心底ニハ無之候得共、當り所惡敷卽死仕候と存候由申之候、長助儀、不屆之致方ニ付被打殺候間、十左衞門御構有御座間敷哉と相伺、其通被仰渡候事、

〔向方御赦例書盲人非人〕

文化十酉年六月十一日　　非人頭善七手下元四日市町廣小路 非人小屋頭新四郎元抱非人ニ而欠落致し候

一敲之上江戶拂　　藤吉

右之もの儀、身持放埒ニ而、親元久離を受、其後新四郎抱。非人。ニ相成、稼難儀ニ存、致欠落、物貰致し歩行、當三月、兼而知人由藏と申もの、芝新網町市兵衛店願人喜山方ニ罷在候間、身分世話いたし可遣旨申ニ付、喜山方江罷越、由藏ニ面會致し度旨申候處、由藏と申者差置候儀無之旨申ニ付、由藏儀、參り可申哉と待居候砌、所持錢ニ而酒調給酔出、喜山儀、由藏を押隱し候儀と心外ニ相成、由藏を是非差出候樣申掛候處、喜山儀、取敢不申候迚雜言申、火鉢を投散し言曄、殊町役人ゟ尋候節、非人之身分押隱、無宿之由申不立去罷在候段、金錢等ねだり取候心底には無之候とも、右始末不届ニ付、敲之上江戸拂可申付處、非人之儀ニ付、相當之仕置申付候樣申渡、穢多頭彈左衛門江引渡、

〔記事條例 六十七下〕抱非人。。共、初て欠落咎入墨申付、貳度目輪入墨、三度目死罪可申付旨被仰渡、右以來別紙入墨形之通申付、三度目死罪申付候、此段就御尋乍恐以書付奉申上候、以上、

但惡事入墨者欠落、最初之入墨之通、右之手首江入申候、

朱書 文化十一年戌八月五日

淺草 彈左衛門 印

〔新張紙留〕車善七押込中溜預證文宛認方之事

一先年頭善七押込中、寺社御奉行樣御勘定御奉行樣方御預り、溜御預之もの有之候節、御證文宛名之儀御尋ニ御座候、此段寺社御奉行樣御懸り御預御座候節、右御用取次仕候中橋下横町ニ罷在候小屋頭次郎兵衛被遣、御召、御證文被仰付、宛名は善七押込ニ付、下代次郎兵衛と御認、印形御取、御預ケ被遊候、同人御呼出、御本紙宛名は、善七押込ニ付、同人組頭共と御認被下置候、御勘定御奉行樣方御掛り御預有之候節は、御本紙、宛名は善七押込ニ付、同人組頭共と御認被下置、御召出御本紙之儀も、右同樣ニ御座候、右就御尋奉書上候、以上、

車善七押込被仰付候ニ付 組頭 庄右衛門

文化十三年子九月四日

御勘定奉行 桑原伊豫守

穢多頭 弾左衛門

〔記事條例六十七上〕弘化二巳年五月十二日

一

右弾左衛門申上候、私支配野州芳賀郡七井村長吏小頭茂左衛門手下、同國那須郡森田村非人小屋頭辰五郎方江、去々卯年十二月中、非人之由申、吉藏と申者罷越候間、辰五郎抱非人に致し、其後暇遣し、辰五郎ゟ吉藏江、錢壹貫六百文餘貸遣し、返濟之替り、木綿繻半壹、風呂敷壹、同人ゟ辰五郎江預置、其後吉藏義、小屋江不立戻、脇差を帶、森田村にて、茂左衛門組下長藏行逢被咎候處、素々非人に者無之、同國宇都宮下河原町池田屋新兵衛忰にて、同所に伯父有之、同人ゟ借受候品故、來ル八九月迄に、伯父同道にて可參候間、夫迄預り呉候樣申候間、預り候得共、否無之候ニ付、茂左衛門長藏同道致し、池田屋新兵衛と申もの相尋候得共、右名前之もの無之、右脇差并預り置候繻半并風呂敷持参爲御訴申上候由、右之弾左衛門煩ニ付、代清右衛門右辰五郎長藏引連、同意申來候、

〔市中取締類集九ノ百十〕天保十三寅年十二月、淺草溜後江非人寄場新規取建ニ付、取計向書留、

朱書 寅十二月七日弾左衛門ゟ受取

甲斐守殿　　遠山左衛門尉

無宿非人寄場取立之儀、人別取調之伺江兼て申上置候處、右寄場之廉者伺濟と相心得、早々取立候樣、越前守殿被仰渡候、取懸次第雙方出役同心附切之儀者、猶追々可及御懸合候得共、先爲御心得此段及御達候、

寅十二月

一朱書人別調伺書面別ニ有之、右江非人寄場仕様帳、其外共入有之候、

安藤源五左衛門様

仁杉八右衛門様　　　　　　中島嘉右衛門

中田新太郎様　　　　　　秋山久蔵

佐久間健三郎様　　　　　　松浦栄之助

以手紙得御意候、然者浅草溜後江非人寄場御普請ニ付、今日別紙之通申渡相済候間、為御心得

申進候、猶追々御懸合可申候、右得御意如此御座候以上、

十二月八日略〇中

天保十四卯年十月、牢屋見廻申上候、非人寄場寒氣手當之儀伺調、

卯朱書十月十五日、三左衛門を以御下ゲ、　ヒレ付末ニ記

朱書同廿日内匠殿へ相談廻候、同廿二日ヒレ付ニ而返来ル、

非人寄場寒氣手當之義奉伺候書付

牢屋見廻

非人寄場入之もの共、寒氣凌為手當、別紙之通、非人頭千代松申立候ニ付取調候處、障子之儀は、溜ニ而も寒氣ニ相成候得者、十月中頃ゟ溜格子外江障子相建候間、千代松差出候直段積、右ニ見合候處、不相當之義も無御座、且手業場風除之義は少分ニ付、千代松自分入用を以、手當仕候旨申立候、

朱書此溜障子之義は、丈四尺五寸、巾三尺、壹枚ニ付代銀貳匁五分五里ニ而、三ヶ年程保候由、此度非人寄場障子は、丈六尺巾三尺、壹枚ニ付代銀三匁貳分相懸り、寸尺溜之方ゟは相延候間、代銀六

分五厘相増候義ニ而、其外上下仕付延張等之直段積、不相當之廉相見不申候、
火鉢暖補之義、火鉢は溜ニは無御座候得共、非人寄場之義は、手業仕候ニ付、手焙候而は手業相成
兼候ニ付、壹之内入遣度旨申立、差出候直段積、不相當ニも相見不申候、暖補は牢溜共入遣候儀ニ
而、德利新代其外共、牢屋敷本直段ニ見合
朱書 此暖補之義、牢之方は臨時御入用ニ相立、德利袋一式壹ツニ付代銀貳匁、新代壹ツニ付、一日湯
立候代銀四厘五毛相懸り、溜之方は千代松自分入用を以、前々手當仕來候儀ニ御座候、
直段積不相當之義無御座候、依之千代松差出候書面三通相添、此段奉伺候、以上、

卯十月　　荻野勇藏
　　　　　三村吉兵衛

ヒレ付 書面手業場江火鉢相用ひ候儀は、寄場人足振合御問合有之候處、業細工之場所江不相用仕
法之由、然ル上は、非人寄場細工場之儀も同様難相成、其外之儀は、伺之通被仰渡可然哉ニ奉
存候、

卯十月　　年番 市中取締懸

此ヒレ付 書面甲斐守殿御組類役共申上候通ニ而可然事存候、依之非人寄場入之もの、手業場ニ而火鉢
相用候儀は難相成候間、同所ニ而寒氣爲凌湯たんは相渡、其餘は伺之通可相心得旨、牢屋見廻
江被仰渡可然事存候、

年番 市中取締懸

（市中取締類集九ノ百十）弘化二巳年八月、寄場入非人共之内、手業出精致し候もの囲ゟ差出褒美
錢被下候儀ニ付、牢屋見廻伺調、
巳八月廿二日御下ゲ、同廿八日ヒレ付いたし、用人忠大夫を以上ル、

ヒレ付末ニ記

非人頭千代松申立候儀ニ付奉伺候書付

牢屋見廻り

淺草非人寄場入之もの共、手業出精仕候もの有之候ニ付、去辰四月中、非人頭千代松ゟ申立褒美錢被下置候後は、相勵日増ニ手馴、日課ゟ餘分作増候樣相成、出精仕候もの貳拾六人有之、右之内ニは、心底相改、實體ニ相成候ものも有之候間、御憐愍之御沙汰奉願候旨、非人頭千代松申立候ニ付取調候處、非人寄場入之内野非人源太郎、尾州小川村無宿非人佐市、信州小妻村無宿庄吉儀最初ゟ出精仕、心底も相改候樣見受候間、何卒條目通、寄場圍ゟ差出、先抱非人ニ仕、猶見屆候上、小屋持ニも仕度、外廿三人は、御賞美被成下候樣仕度旨申立候ニ付、勘弁仕候處、去々卯年寄場取建之節、千代松江被仰渡、并寄場條目之内ニ、心底相改、格別出精之ものは、圍ゟ差出役附候樣いたし遣、出精之次第ニ寄、褒美錢差遣候と御座候間、右源太郎、佐市、庄吉儀は、千代松申立候通、寄場差免、同人抱非人ニ可被仰付哉、外廿三人之もの共は、去辰四月中、褒美錢被下置候ニ見合、廿三人共甲乙も無御座候間、壹人江褒美錢三百文宛可被下置候哉、左候はゝ彌出精仕、且去々卯年去辰年兩度迄、圍内可逃去企いたし候ものも御座候間、前文之通、此度御憐愍之御沙汰御座候はゝ、銘々心底相改、逃去企候ものも有御座間敷、何れも實意ニ相成可申哉と奉存候、依之別紙非人頭千代松差出候願書壹通貳冊相添、此段奉伺候、

朱書
一去辰年四月、手業出精仕候野非人源太郎江褒美錢五百文、同斷尾州北川村無宿非人佐市外六人江、同三百文宛被下置候、

以上

巳四月　三村吉兵衛

荻野勇藏〇中略

非人寄場人足手業代相増、御入用御出方相減、非人頭取賄御入用出方仕法等之儀、再應取調之趣伺調、〇中略

朱書申〇嘉永元年九月廿八日

朱書伊勢守殿御渡

覺

書面非人寄場御入用之義、一體穢多非人共身分之進退、彈左衞門方ニ而取計來候義ニ付、狩込引渡遣候野非人不逃去樣、同人方ニ而取締可致は當然之儀ニ付、右等之次第、彈左衞門江得と爲心得、此上右寄場詰人江引渡遣非人共取扱方、都而手限ニ而爲取計候はゞ、善七よりは手廣之義ニ付、番人其外猶一段之仕法等相立、諸入用格別減少致し、手業代等ニ而取賄候樣可相成哉も難計候間、右之心得ヲ以、一應彈左衞門をも糺之上、猶得と勘弁いたし取調可被申聞候事、〇中略

嘉永元申年十月淺草溜出火之節、非人寄場人足切放、立歸赦免之儀、牢屋見廻伺調、

左衞門尉殿　　鍋島内匠頭

去ル廿四日淺草溜ゟ出火之節、非人寄場人足共切放遣候處、非人頭善七申付を相守、鎭火後早速立歸り候ニ付、慈悲願之儀同人ゟ申立候旨、牢屋見廻ゟ伺書差出候間、吟味方江相渡爲取調候處、伺之通申渡可然旨、別紙之通申立候、右者振レ候儀も有之間敷哉ニ付、貴樣御存寄も無之候はゞ、伺之通可及差圖と存候、依之右書類相添、此段及御相談候、

申十月

非人小屋

御書面之趣致承知、別紙致一覽候處、牢屋見廻伺之通御申渡有之可然、併初而之儀ニ付、一應申上置方と存候、依之書類返却、此段及御挨拶候、

申十一月　遠山左衛門尉

（朱書）下ゲ札

〔嬉遊笑覽 十一之上〕延寶三年卯二月廿六日、町御奉行宮崎若狹守殿被仰渡、柳原川端に罷在候非人共、頃日の雨にて數多相果候由を聞召、不便に思召候間、今日の雨にも痛可申候間、先今晩中にぬれ不申樣、早々取あへず小屋かけ入置可申候、此方三人共手代召連罷出、三間牢に十五間の小屋懸させ、日暮前に非人不殘小屋へ入申し、兩奉行同心壹人ヅヽ、名主三人罷出、廿七日、和泉橋と新敷橋の間に、貳間に貳十間の非人小屋三ヶ所可被仰付候間、早々入札爲致、非人小屋掛直出來、三月二日より、柳原非人共に施行被下候、〇中略 廿五日〇四月 よりもはや非人も無しに付、施行相止、小屋御崩し、車善七に被下候、

〔塵塚談 下〕寶永六七年の頃、青山火事といふて大火あり、傳通院最寄の者のいふに、大火の節は傳通院山内へ立退と、燒死の患なしと、かねがねいひ傳へしにより、人々山内へ逃入て皆々焚死せり、予〇小川顯道が祖父先考は、山内へ入らずして、虎口の難を逃れしと、茶話席上往々これに及べり、此火事に美談あり、山内に非人小屋あり、傳通院門前に、藥店大坂屋三右衛門といふあり、今も此家あり、右非人小屋に年來寄宿の非人有り、燒止りし翌朝、右の三右衛門方へ來り、旦那は山内に焚死なり、まづこれが氣遣ひと、金の入し財布を渡しけるとなり、非人にはいと難有き心ざし、士君子にもはづまじきなり、しかるに世に聞つたふる人のなきは不便なりと、父祖の折ふし語り給ふ、

非人雜載

〔塵塚談 下〕松右衛門といふ非人あり、江戸中武家町屋に、面々の持場有て、朔望五節句、其外吉凶の

家へ來りて、松右衛門に御祝ひ下されと錢を乞事也、其着服も、引にて、腰に鼻捻とて二尺計の捧をはさみ、めんつうといふ曲物を腰に提て、持場々々を日々の様に廻り歩行事也、此めんつうは、もらひし酒食を入る器にして、酒を入ても漏ずとかや、奇なる細工もの也、近頃は右のめんつう鼻捻りを持て歩行、松右衛門さらに見へず、一統に止めにせしと見ゆ、

非人にそくばくのたがひあり、人の一切しらざるの事也、或時非人に藥やりける所、藥取に女非人來る、その人品賤からず、容貌もよし、踊りし跡、居合せし人々、忩度女太夫なりと評判せり、其翌日は外の女來りしゆへ、きのふの女は女太夫かと問しに、女太夫に出ると、よき家へ縁組できずそのうへに人柄あしく成により、律義なる親は女太夫には決て出さぬといへり、非人に高下ある事を初てしれり、

〔一話一言 四〕江州非人

ある人、江州へ行き侍りしに、一の非人村あり、其所に橋の渡りぞめありしを、立止りて見侍りしに、非人頭とおぼしき者、圓座に座してありけり、村のものども、橋の渡りぞめの祝儀を持來る、其中より、痩て色悪き男一人、茄子三つ持來て、頭の前に進む、頭たるもの、是を見て、汝は頃日相煩ひ居ると聞しに、何とて此茄子を持來るやと問ければ、左様に候、永々の病氣、難儀仕候處に、此度橋の渡りぞめに付頭殿へ祝儀をいたすべきよし、小頭より申渡し候ゆへ、夜前他處の畠へ往きぬすみ申候と云ふ、頭の云、乞食は盗をせまじき爲也、盗をなせば乞食はせず、汝は村の住居はなるまじきと云て、小頭を召て、かれが快氣次第、村を拂ふべし、病氣の内は番を致すべしといひわたしけるとかや、下略 石田勘平都鄙問答に見へたり、

〔風俗見聞録 五〕非人の類も、上方筋は、何れも身上能々暮し、扉門玄關を構へ、突棒刺股捻十手捕繩棒杯掛並べ、彼役筋のものに、火附盗賊、其外悪黨を捜出し、又は搦捕抔する手先に仕ふ故、おのづ

から公儀の役人の如くなりて、ひたもの權威を振り、或は惡黨を搜すとの名目にて、町家へ案內もなく踏込み、左迄にもなき事を、六ヶ敷申掛て穿鑿する故、平人も怖ぢ恐る程の事也と云、逆樣なる事共也、是等も表向は、惡黨を搜し出ス體にして、內證物取りにて、又常に博奕の寺抔いふものを取り、又勾引夜盜抔の運上を取る也、國々の非人皆是に類し、又國に寄りては、帶刀をも致ス所有りて、皆優美に暮ス也、是等昔は其所の不淨ものを取捨る役に抱へ置れ、門々家々にイて食物を請、或は一錢一掴みと貰ひて、渡世の種とせしものなるが、今は其一錢一掴みも仕切と號して、一ヶ年分を一度に請取、手數も經ずして定式の收納に成り、其外吉凶ニ付、身も勞さず數多取込なり、當時は物を乞貰ふ體はなくて、取るべきものを取る如く、定祿の如くなる名は非人小屋にて結構なる住居を成し、絹紬繡を著し、或は悴娘抔の諸祝儀を始、婚姻聟取の式迄取行ひ、料理調菜主客の禮迄整へ、又物見遊山物參り抔、群集の場所へ出る時は、平人の如き體を成し、世間を憚らず、一體身力を勞さず、心安く取込たる金銀なる上に、奢りの外には一切出ス事のなき故、平人よりも酒食、其外に費る事、少も物を惜ざる也、兎角金銀は低に陷り、人非人なる所に懷き安きもの也、天理とは上下に違しものなり、扨又右の非人等が、寺社の境內、又は道辻にて踊り、狂言、物眞似、歌淨瑠璃抔仕組、見物人を集めて錢を取る事、段々大業成りて、彼芝居に似寄り、衣類其外花麗になれり、又妻娘なるもの、女太夫と號して、是又笠を被り、三味線を曳き、歌淨瑠璃抔諷ひて、一錢二錢を貰たるが、今は五十錢百錢も貰事有りて、花美に成り、棧留といへるを著、鼈甲の笄簪を飾り、朱檀棹の三味線に象牙の撥を持てり、是日本の品に有らず、皆異國の渡り物也、尤顏形變化粧も美しく艶にして、非人乞食の體は失せ果、並々の町人抔は叶ぬ出立也、昔鎌倉全盛の頃、御臺所〈政子御前〉鶴ガ岡八幡宮御參詣の時、玳瑁の笄簪を飾り給ふを、諸人群集して見物に出たりと云、又當御世も、國初の頃は、國主以下の妻女は、玳瑁などは絕てなき事也、今は右體非人の妻娘等が、常

夙之者僱用

に用る事になれり、是等全御治世の結構故といふべきなれども左にあらず、是天理に違ひて、世の衰へ廻り、國民の末に流れたる也、少シも善キ事に非らず、右等の費る所、外より出るに非ず、皆國家根本たる武家と百姓より出る也、依て當世士農は愈困窮する也、○中略又米を作る百姓は、米の飯は年内幾度ト、凡計へる程ならでは給べ兼るに、穢多非人は年中十分に、上白米の飯を食ふなり、今は武士よりも町人が能き米を食ひ、衣類酒肴茶菓是に準じ、其町人よりは、又穢多非人が緩怠に奢る也、世の結構段々末々下々で流行て、月雪花の樂にも、和漢古今の珍寶珍器も、山海の珍味も、美女美婦も下賤の翫事になり、衣類の上品、龜甲珊瑚の髮飾、草履下駄の類に至る迄、下賤の女が用る事に成り、驕奢安逸都而卑賤に有る也、武士と百姓は、其裏へ廻りて苦しむなり、尤右體下賤の者共の奢り誇る風情も、又利欲を奪ひ合、惡業も又穢多非人の結構も、是迄年々歳々に移り來り、今の常の風俗なれば、凡人の鑑定には、左迄不埒とも見へ渡らねども、天眼通に懸て見ば、片時も捨置れまじき事共なり、

〔德川禁令考五十 降賤者〕年號闕酉七月

夙之もの儀相糺候書付

菅谷彌五郎

中國筋に夙之ものと申者有之候由、穢多之類に候哉、身分如何樣之者ニ候哉、相糺可申上旨被仰聞候、

此儀、拙者支配内ニ、右名目之もの無之候間、陣屋元村役人呼出相尋候得共、是又辨へ不申候間穢多頭相糺候處、右夙のものハ穢多之手下ニ而、平日產業ハ、三味線鼓弓を引、小歌を謳ひ又ハ小芝居杯をいたし、近國を步行、女子共ハ草履鞋を作り商ひ、吉凶之家に施しを受、渡世いたし、播州路網干邊ニ罷在候由、中國之内ニ而も、他國ニハ一切無之由、尤產業之儀見届候儀ハ無之

候得共、前々より右之通及承候旨、穢多頭酒津村新八書付差出申候、

右相糺候趣書面之通御座候、以上、

酉七月

〔賤者考〕夙(シユク)といふ地、諸國にありて、本村なると、枝郷小名にてあると、くさ〴〵なれど、皆普通の里民より忌みて、婚を通せず、同火はいむ所忌まざる所ありて、何故に忌むといふことを知らず、夙は守戸の轉稱にて、卽昔の陵戸などの殘れるならむと或人のいへる、うべ〳〵しく聞ゆ、かくて此比藤堂侯の家士にて、大和の古市に事執り居たる北浦定政（儀助といふ）は、わが〇本居（内遠）教子なるが、此說にもとづきて、大和の國內の山陵の所々を考究する因に、その陵墓近きわたりに、思ひよせらるゝ事のあるを、書つけて見せにおこせたるを、爰に記す、高市郡畝火山の西八町許に坊城村といふが中に夙ありて、そこをハカマ坊城といふ、こは墓守(ハカモリ)坊城の略轉にて、畝火桃花鳥、檜隈、越知の邊の守戸なるべし、葛上郡玉手、掖上などの守戸は、長柄村といふ夙なるべし、城上郡押坂、山邊、道上などの守戸は、三輪町の東南松の本村金屋村といふ夙なるべし、又景行天皇の陵の地には、別所村といふ夙あり、添上郡田原陵の守戸は、白毫寺村といふ夙あり、此邊高田尾上の舊跡なり、又田原村の東に、北野村の內奧村といふ煙房あり、又佐保山、奈保山道の守戸は、今の奈良坂村なるべし、（奈良坂は、古の佐保山なり）添下郡狹城邊の守戸は、歌姬村といふ夙なるべし、葛下郡磐坏北陵の所には、築山村といふ夙あり、同南陵の地には池田村ありて、其中に良家村といふ煙房あり、良家は陵家かたゞらに陵戸の轉にも有べし、此外古塚ある邊には夙あり、山邊郡丹波市村の東八町許に古塚あり、其村を守目堂といふ、村中にカギ塚といふ夙あり、こはカギ塚は塚の名、守目は墓守部なりし轉稱なるべし、萬葉集に橘を守部の里とよめるは、此處なるよしいへり、崇道天皇の八島陵の地を島田といふ、此兆域に式內島田明神社もあり、此處十町許、西帶解のうちに、島田とい

ふ夙村あり、すべて夙村の者の言傳には、野見宿禰の末裔なりといへり、又伊賀國にて煙房をハチ。といひて、土師と書くなり、城上郡出雲村は土師部なり、紀に野見宿禰はじめて出雲國より率て來し土師部ならむか、又鏡作坐天照御魂神社ある地を城下郡八尾村といふ、其所ニも土師部ありて、紀に見ゆ、此二村共に夙ならぬは、もとより、土師部は守戸とかはりて賤ならずと見えたり、以上陵戸のいやしかりし事は、續紀、天平神護二年四月甲寅、大和國高市郡 登久美咩等十七人被諸陵寃枉爲陵戸、至是披訴得雪除陵戸籍等なとあり、以上前文のごとくにて守戸の穢多に轉じたるもあるべし、されど此紀の國などにてみれば、山陵とさすべきは、埀五瀨尊の竈山墓のみにて、名草郡神宮鄕和田村にあり、されとその道に夙などやうの者はなく、夙といふ名ある地は、安原荘夙村、（和田の瀧山墓より東口町許）名草郡には是のみなり、那賀郡名手鄕馬宿村の內狩宿村は皮田なり、山崎荘山村の小名に夙あり、高野嶺吉仲荘丸栖村小名に夙あり、伊都郡加勢田荘に下夙村あり、隅田荘に上夙村あり、（同郡に夙村二所ある故に、後に上下をそへていひわかちたるなり、慶長比には隅田荘の宿と書たり、）在田郡藤並荘に夙村、また小島村の小名に夙谷あり、日高郡岩內鄕門前村のうちに夙あり、南部荘に山內村の小名夙浦あり、牟婁郡に熊野田邊荘湊村（即田邊の町なり）の小名に今は敷と書けども、舊くは夙と書たり、凡此十ケ所のみなり、此中に名手の狩宿村は、皮田なれば、別にて餘の九ケ所は、何れも婚を結ばず、只同火はせざる者もあれど、さのみは忌まず、さて安原荘の夙村は、竈山墓よりや、隔たれども、其守戸の轉せるともいはゞいふべし、又隅田荘の上夙村は、今加勢田荘古佐田夙（今普通には橋本驛と云）の北の山に陵山と呼ぶあり、何人の塋なる事をまらず、もしは此守戸の轉じたるか、上夙と陵山との間、凡口町許も隔つべし、此陵高さ四五間許丸く墳をなして、樹木茂り、所々に石を覆へり、環りに堀あり、巾三間許、巡り一町半もあるべし、里傳には坂上田村麻呂の塋といへど、田村麻呂は京にて薨じ給へれば、此地にあるべきやうはなし、さいふは、此郡中には坂上姓の舊家多きなどよりいひ

出せるなる心し、其餘の夙は、陵墓に考へあつべき由を得ざれば、守戸の轉稱ともさだめがたし宿とも書くによりて、假にしひて考ふるには、今神地などにては、婦人經行中、又は忌服觸穢の人など、火を別にして棟をへだてゝ居るを他屋といふ事の如く、昔は穢を忌むとて、諸郡中、便よき所に、一二ヶ所づゝ設け置て、穢中は其所に移りて、別火をし、假に宿せしより宿といふ名は起れるならむ、その制亂世より行はれずなりても、しかすがに穢らはしき所故に、良民は住まずなりて、浮浪の者穢者の類、幸にそこに宿り來れるより、今の如く忌み來れるなるべし、さればそのある所郡界郷界などに多くありと思はるゝなり、猶他國にある所々をも考へ合すべき事なり、又サ。ン。ジ。ヨ。と唱ふる所ありて、大抵忌む所夙に同じ、伊都郡相賀莊野村今陰陽師あり、同郡官省符莊淨土寺村今巫村なり、日高郡美木村のうち、などをいひて、他村より婚せず、サンジヨは產所の意にて、昔產婦はこゝに出て產し、穢中を過して、本村に歸りしなりなどいへれば、夙の所にいへる意に同じ、是も後には陰陽師巫女など移り住みしなるべし夙よりはいさゝか勝れる如く、他村にていへども、同火を禁せざるのみにて、婚を忌めば、同事なり、永承三年關白賴通公高野參詣記に、刀禰散所と出たるは、いかなる者なりけむ、或說にサンジヨは山陵などの轉稱ならむといへど、此紀の國に掲焉き山陵は無ければ、此說はとりがたし、もしは山作所墓所の事といへりの轉じたるといはゞさもいひつべく、皇子諸王大臣公卿などの墓の守戸は、以前は多くありもすべければなり、○中略前の夙伊○紀の條に記しもらせる事あり他國はしらず、本國にては、此の夙の者、產業に多く竹籠の類を造り出す、さる故に、市中にも籠細工を忌む人もあり、もしはそれも夙などよりもと移住せし者か、はかりがたし、さればにや府下にも町はづれなる所にのみ籠細工はありて、よき所の町にはなし、又日高郡□□莊丸山村のうち、堂。兎。といふあり、同。兎。ともかく、實はいかなる故かしらず、口稱にのみいへば、文字ばかりに充たるなりといへり、夙と同じといへり、按するに、もと三昧堂などにつきたる兎田などありて、そこに住

犬神人

居せるより、人も忌み、又堂免といふにやあらむ、煙房などの裔の轉じたるならむもはかりがたし、又海部郡加田浦木本村、西ノ莊村、名草郡松江村のうちなどに、風呂。といひて、いやしむる一種ありて、夙と同じ、その者を風呂統の者といひ、居る所の邊を皆風呂垣内といふ、其由詳ならねど、里人の傳には、昔村中觸穢の者の爲に、傍に別居をつくりて、其所にて異にし、穢日を盡して、風呂を建て浴し清めて、本村にかへりしが、終に穢者の居所となりたるなりといへり、前條夙にいへる考と偶中したり、さて此風呂も同火はすれど、婚はせぬを、たま〳〵平民の乏しきは、ひそかに緣を結ぶもあり、さる家をさして、半風呂。といふとぞ、こは伊都那賀兩郡にも、夙の者と內緣などある家を半夙。といひて、共に忌むといふと全同じ、（中略）

前夙の條、定政が說の中に、伊賀國にて煙房をハチといひて、土師とかき、又夙の者の言傳に、野見宿禰の裔といふなどいへるは、おしあての寓說なるべし、野見土師は同系にて、殉葬をとゞめ、土物にかへし功により、土師部を司り率て、土師の姓を給へるにこそあれ、みづから其工をなしたるにはあらず、土師部その裔にもあらず、土師部はその已前よりくさ〳〵ありけるを、土物の工によりて、こと〳〵く隷し賜へるなり、さてその土師部くさ〳〵の中にて、陵墓の土物をつくらするは、又夫より一種の支流出來たるにて、こと〳〵くの土師部には預らぬ事なり、かゝる子細をもしらで、その者どもの言よくいひなせるなり、さて煙房をハチといふは、珍らしくよしあるべき事なり、土師より轉じたるか、又は托鉢鉢ひらきの鉢にて、物を乞ふよりいへるにもあらむか、

〔祇園執行日記〕文和元年二月廿九日、法華宗住所可破却由事書又到來、（第三度也）山門公人不相副馳向事無先規之由、犬神人等申候旨返答了、使者釋迦堂御座供歸進公人云々、閏二月二日、所詮任妙顯寺之近例、相（○相下恐有脫字）祇園執行以犬神人可徹却一向宗奴原之住宅云々、事書使者一人持

來、神供一前給了、

〔鹽尻三〕一又祇園犬神人と呼輩も、古へ神事前路不淨のものを取棄しが、後に路下の死屍をも携へ他所に埋しむ、是より諸寺の旦那死すれば葬埋の料をとりし、近世は諸寺正月七月米錢を犬神人に贈る、今清水坂の弦指は則犬神人也、

凡汚穢不淨の事に預る輩は、火を別にして神事に憚事、猿樂人傀儡師等も亦悲田院の部といへど、穢惡の事に預らざれば、世人火を隔てざるにや、今之寺僧の如き屍を沐浴し、その髮をそりなどすれば、甚だ穢れある事なれども、大概世間に入て同火有、されば神事に僧家を忌むは、彼常に死穢に混じ不淨なる故也、　賢按、此事も昔はなし、切支丹此かたの事也、

〔賤者考〕弦賣(ツルメソ)僧といふ者あり、犬神人ともいふ、もと弓弦を賣る僧なり、七十一番職人盡歌合の繪に、弦賣と出て僧形に覆面し笠を著たり、詞書に、つるめし候へ、ふせ弦も候、關つるも候とあり、歌にて見れば、まづさか弦といふもありつときこゆ、いづくなるらむしらず、もとは僧のたづきなきが、くさ〳〵生活の爲に、欠の商聖ともなり、田樂法師ともなりなどして、種類わかれたるなるべし、その中に此つるめそは、殊に賤者となりてしは、弓弦に膠などを專と扱ふ故にや、今は轉じて弦賣る事はなく、名のみ殘りて、京の祇園の祭に出たつにより、神人めきて神人ならぬより、犬神人ともかくなるべし、前條の犬神にはあづからず、犬神とはつゞかず、犬人とつゞきていひわくとて、上に犬といふ字を冠らしめたるなり、此犬といふ意は、その物に似てその物ならぬをいふ、犬蓼、犬椒、犬櫻などいふが如し、此類の外なる稱多くありて、おのれが後奈良院御撰何曾の解に詳に記せり、

〔雍州府志七土產〕韈履　六波羅蜜寺門前弦神院犬神人製韈幷袈裟、或僧家帽上、

古事類苑

政治部六十八

下編

賤民下

乞食名稱

〔倭名類聚抄 三乞盜〕乞兒　列子云、齊有貧者、常乞於城市、乞兒曰、天下之辱莫過於是、楊氏漢語抄云、乞兒、保加比比止、今按乞索兒卽乞兒是也、和名加多井、

〔箋注倭名類聚抄 一男女〕漢書云、列子八篇、名圄寇、今所傳晉張湛注、所引說符篇文、按說文、气、雲气也、象形、借爲气與字、後又省一畫作乞也、○中略按保加比與保伎同、謂稱壽詞祝之、新撰字鏡、祠訓保加布、宮內省式大殿祭此云於保登能保加比、神功紀、擧觴以壽、壽字訓左加保加比、新猿樂記、酒祝訓左加保加倍、者皆是也、保伎、古事記息長帶日賣命御歌、加牟菩岐、萬葉集、千年保伎、又綺豊御酒、大殿祭祝詞、壽古語云許止保企、後世訓壽許登夫岐者、此語之轉也、保加比比斗、壽人之義、立人屋前、稱壽詞以乞物者、加多井、傍居之義、坐路側乞物於行人者、後混呼無別也、

〔伊呂波字類抄 保人倫〕乞索兒ホカヒヽト　乞兒同亦カタヒ、

〔和字正濫鈔 二〕乞索兒同乞兒　かたゐ　和名、乞食者なり、癩人を俗にいひ習へり、かたゐとは、道のかたはらなどに居て、物をこへば、傍居の義歟、又和名に、ほがひゞとゝもいへり、壽の字を、日本紀にほがひとよめり、ことぶきといふにおなじく人を祝ふなり、乞丐の輩、人の心を取て、祝ひて、物をこへば名づくる歟、

〔倭訓栞 前編 六〕かたゐ　靈異記に乞匂をよみ、倭名鈔に乞索兒を訓せり、道路のかたはらなどに

ゐて物を乞ば、傍居といふにや、今俗は癩人をかくよべり、聖武帝の時、建悲田院於奈良、令孤獨居、此と見ゆ、今般若坂に其遺趾ありて、癩人集り住て錢を旅人に乞り、よて同じくよべる成べし、伊勢にて多度かつたゐといふは、癩病谷といふ所ありて、其所の人皆病を受、多度の社の下より瀧流落て下る所也とぞ、毒石などにふるゝ水にや、

〔書言字考節用集 四人倫〕乞兒 カタヰ 乞丐人也、見列子、　乞丐人 コツガイニン 倉頡篇、丐行請也、　乞兒 コツジ　乞食 コツジキ 又云分衛

〔拾芥抄 下本諸道讀〕源信僧都四十一箇條起請○中略

一乞食來時、無厭可行施、

〔乗燭譚 四〕乞有二義コト

乞ノ字、人タヾ乞丐ノ乞アルコトヲシリテ、乞與ノ乞アルコトヲシラズ、字彙ニ、去冀切、音氣、與也、又欺吉切、音詰求也ト、アタフトヨム、トキハ、氣ノ音ニテ、本義ナリ、モトムトヨムトキハ、詰ノ音ニテ、借義ナリ、通志ニ、乞氣也、因音借爲與人之乞、音氣、因與人之義借爲求人之乞、此因借而借也ト、コノ註ニテ、ソノ仔細アキラカナリ、前朱買臣ガ傳ニ、買臣乞其夫錢、令葬、閫中給食之ト、晉書謝安傳ニ、謝玄顧謂其甥羊曇曰、以墅乞汝ト、此等ノ處イヅレモアタフトヨミテヨシ、コノ外史傳ノ内所々ニアラハル、枚擧ニイトマアラズ、

〔倭訓栞 中編古 入〕こつじき　乞食は、法華經に出、僧に乞食頭陀行といへり、增賀の傳に、名聞こそくるしけれ、乞食の身こそたのしかりけれ、又こじきといふ、

〔嬉遊笑覽 乞十七〕乞食は佛氏の道ながら、わきて一遍上人などの如く、遊行をことゝするあり、舊本今昔物語に、阿彌陀の聖といふことゝして行ふ法師有けり、鹿の角を付たる杖の尻には、金の杈に又たるを突て金鼓を扣て、万の處に阿彌陀佛を勸め行ける云々、此聖古畫に往々見えたるが、其さま有髮なるもあり、撰集抄に、播州小屋野にて髮生ひたる僧むしろを著、足手泥によごれたる

が、さゝらすりて居たることをいひ、又自然居士、東岸居士なども、頭を剃らず、さゝらすりたること、其傳に見えたり、鉢は瓢を用ゆ、みな乞食の所作なり、

〔物類稱呼一人倫〕乞人ものもらい、　江戸にて乞食といふ、法華經に、清淨乞食、又乞食頭陀行、これは僧を云、長崎にて、ばん藏、又山ばん、中國及四國、又奥羽より越後越中邊にて、ほいたうといふ、庭訓抄ニ陪堂飯米を副る僧なりと有、又筑紫にてどうといふ、此國にては、こじきといふものは、癩病人なり、江戸にていふ非人かぶりといふものを、へいたうと云、上總にてへいたう、是は乞食也、下總にて氣らくといふ、肥の唐津、又は薩摩、日向にてせんもんといふ、京にてばんたといひ、又ひでんじといふ、大坂にて垣外といふ、

〔賤者考〕伊勢の合の山牛谷などに出ゐる丐者をハイタといふ、何の義なるをしらず、〇中略國によりて、ホイタウとも、與次郎とも、丐人を目す、ハイタ、ホイトは、通音にて、同語なるべし、或人いふ、癈太郎にて癈人の意、番太郎を番太と略すると同じかるべしといふは、太の義はたれもさおもふことなり、癈はいかにあらむ、もしは配流配沒などの配の意か、又は前に云ふ盲人の米錢を乞ありくを配當といひ、又進物などを他よりうけたる時、その使の奴婢に爲目などをやるを、伊勢尾張本國などにてはお曳といふは、曳出物の略語なり、婚に曳出などもいふ、もとは馬などを率出てやるよりいふとぞ、京大坂にてハタメといふ、何の義か知らず、是を得たる僕など、尾州邊にて同じくおひきとも、又配當ともいへれば、配當は分配して得る意にて、此語より轉じてハイタ、ホイトとなりたるにはあらじかとも思ふなり、猶地所によりて別稱あるべし、

〔運歩色葉集保〕陪堂

〔節用集保食物〕陪堂俗食

〔遠碧軒記二〕陪堂、遲齋の事なり、佛經の字なり、ものもらひの事なり、

制度

〔南海治亂記四〕讃州河野氏建不動堂記

河野家ニ、右衞門三郎トテ門戸ヲ守ル者アリ、其氣象强暴ニシテ、哀愍ノ情スクナク、乞食人ヲ嫌ヲ、門戸ニ不入、四國ハ弘法大師出生ノ地ニシテ、佛法流布ノ靈域也、眞言ヲ宗トスル者ハ、四國邊路陪常シテ、靈佛ヲ巡禮シ、菩提ヲ祈ル、此陪常人ヲモ門内ニ不入、○下略

〔烹雜の記前集上〕相川○佐渡の人平夏海、曩に予○瀧澤解に語ていへらく、佐渡にて乞兒をホイトといふ也、古老傳へていふ、承久三年の夏、順德天皇、本州へ遷され給ひしとき、みやこ人、のち〳〵こはいたく落魄たるもありて、嗟來の食だも辭せざりしかば、漁翁山妻これを憐ざるなし、これより乞兒をホイトといふ、ホイトは布衣徒の義なりといへり、解按ずるに、これ牽强附會の言なり、信ずるに足らず、ホイトとは、乞兒をいふ、こは佐渡に限る言葉にあらず、今も中山道及紀路にて乞兒をホイトといふ、高野山に杜鵑の歸り後れたるが、木の節穴などにかゞまり居てや、寒くなる時は、得動かず、餌も元來えせぬを、雀がつどひて餌を與へ、來るとしの春に及ふまで養ふなり、いと不思議なることにて、これを雀のホイトといふ、ほいととは乞兒の事也、雀の爲の食客といふこと、ぞ、これを醫生和田氏に聞るよし、閑田次筆にいへり、又按ずるに、江戸にて嚼齋をはつち坊といふ、ハチとはホイトといふが如し、ハとホと通じ、チとトと通ず、江戸にて、比丘、比丘尼の乞兒して人の門に立ときは、必はアいイといふ、上野以西にては、ほゥいィといふ、ハイとは鉢米を入れ給へといふ事也、ハとホと通ずれば、ホイといふもおなじこゝろなるべし、

〔享保集成絲綸錄四十一〕寛文十二子年二月

一勸進仕候大神樂法度候間、町中宿借シ申間敷候、只今宿借者有之候ば、來ル九日内寄合江可訴出候、寺社方御代官所ゟ、町中大神樂をも改の書付可差上事、

一大佛を荷せ、町中出勸進仕候もの幷うでかう高あしだの行人宿仕候者有之候ば、書付可差立

候、他所より出候はゞ、是亦宿所を書付可差上候事、

右之通り町中相觸候はゞ、其通事桁屋所江同行事可申來ル候、少も油斷有間敷候、以上、

二月〇中略

寶永元申年七月

一女順禮人多ニ而、所々町中致徘徊事、念佛講中之者共、僧俗申合、夜中人多ニ而挑燈などともし、是又致徘徊候由、不宜相聞候、向後令停止候間、名主家主急度可申付候、於相背者、可爲曲事者也、

七月〇中略

寶永六丑年六月

一頃日女順禮大勢づれにて、町々勸進いたしあるき、不埒之仕形有之様相聞不屆候、名主家主相改順禮出し申間敷候、於相背者、急度曲事可申付候間、此旨町中可相觸候、以上、

六月

〔天保集成絲綸錄百三〕寬政元酉年四月

町觸

近頃無宿物もらひ共連立、町々徘徊いたし、見世先ニ立ならび、物を乞、遣し方不足を申、押もらひいたし、又は食物を乞候者、あたへざる內は立去不申、彼是不埒之趣相聞候、以來右體之者有之候はゞ、月番之奉行所江引連罷出候共、又は奉行所江訴出、捕方相願候共、勝手次第宜様ニ可致候、尤召捕又は訴出候共、後日ニあだ不致様ニいたし可遣候、

酉四月

右之趣、町中不洩様可觸知候、

〔賤者考〕乞食の者の制度名目、國々にて異あるべし、本國〇紀伊若山府下には、新堀といふにあり、もと

四濱村に有りしが、うつりたりとぞ、又濱の者、籠持、ふくろ持、手桶擧などいふもあり、長吏頭を道齋と世々名のる、又川原乞食といふは、前の宿なし野ぶせりといふなり、京にては六波羅の邊、牢の谷にあり、浪華にては某所、江戸にては某所、名古屋邊にては東の町はづれて、玄界村といふにありて、そこには官より構びて、假屋をたて、給ふ故に、そを御小屋乞食といふ、頭ありて、それ〳〵の法あり、圖中の者ならでは、その所に入ことなく、そこに居るには、一人一日に一錢づゝ頭へ出すとて、その餘を非人宿なしといふ、盜をなして錢を乞ふ者、お小屋乞食へ通せざればゆるさずなど聞たり、又府下入江町といふに、入江捴内と世々いふ者、乞食頭にて、かつ入牢罪人の事にあつかる、その近き廣小路といふに牢屋敷あり、罪人の出入拷問刑場などに出る者を、俗間綽號して手子平といふは、責問ふに挺杖を用ふるよりいふ、捴内の屬下なり、府下の戲場辻能、觀場、曲馬、輕口話やうの物、何にても木戸をつけて料を取る類に、皆此捴内あづかり知る事にて、興行中はその事にかゝづらふ者は、その指揮をうく、相撲は卑賤穢者にあらず、かつ諸家の扶持ありて帶刀するもあれども、名古屋にては興行中は、帶刀を免さず、木戸を建る故に、捴内の指揮をまぬかれず、興行せざる間は、世上他國の例と等し、是等の制も一ふしありて可なり、京にて南禪寺邊悲田院非人頭なり、江戸にては丐頭を車善七といふ、車飛驒守といひし武士の裔にて、事ありてかくなりたれど、由緒ある者なりなどいへり、浪華其他諸所々にて丐頭を長吏といふ、丐頭ならず、次にいふ番太といふ類なし、長吏といふ地もあり、丐の長たる吏の意にてきこえたれど、三井寺の貫首をも同じさまに長吏といふにて見れば、いかゞなる稱なり、されど同稱にて貴賤くさ〳〵ある例もあり、別當といふは、仙院中にては、大納言より帶する職なり、淳和奬學兩院別當は源氏長者の職なり、勸學院は藤氏、學館院は橘氏、何れも氏長者の職なり、女院に女別當あり、神社に付たる僧をも別當といひ、和田義盛、齋藤實盛などは侍所の別當に補したり、清水冠者を遊女別當とするなど、東鑑に見ゆるは、後世珍らしく

聞ゆるに今は既の馬をつかさどるをさへ別當といふ事になりたると同例なるべし、〇中略

本國〇紀伊化子の居所は、往年五穀不登にて飢餓甚しかりし時、官より假屋をまうけて、粥をたまひ貧民を惠みたまひし後、その假屋そのまゝに殘りしが、たづきなきもの、住所となりて、化子の群と轉じたりときく、諸國の夙やうの者、此類多しと見ゆ、大和國などに、ミサンザイ、又サンザイといふ地所々にあるを、ミサンザイは御陵の意とは既に說あり、さもありぬべく聞ゆれど、大和宇野の邊にもサンザイといふ地あり、陵ありともきこえず、もしはサンザイは山作所の轉ならむか、山作所は墓地をいふなり、陵ミサヽギは天皇又は異なる皇后春宮などならではいはず、山作所は同じことながら、ひろくいへれば、さては說をなしやすし、されど本國奥熊野合賀莊わたりに殘れる古文書に、合賀長島散在、又三在ともかける事多く見えて、其兩莊邊の諸村をさせりと見ゆるは、陵の意とも山作所ともきこえず、山村多く處々に隔絶したる村もあれば、散在の意にやあらむ、その中にて賤とさすべき者もあれど、それのみをいふ語とは聞えず、此例にて見れば、大和邊の地名も陵の義ともたのみがたし、又京地所々四條の邊に、俗に雜澀町といふあり、工商の貧窮にたへざる者、その町に移住す、此町に別側にて、親族朋友近隣へもすべて音信贈答せず、遊山翫水をも禁じ、飲食衣器すべてあるに任せて汚穢をいとはず、勸進行乞の輩も來る事なく、弊小の家のみにて、借貸定數ありて、諸役は皆家主よりつとむる故に他の煩なし、こゝに移りて、工商それ〲の業をなす者は常の如し、傭役に賃を得る者も、力作する者もありて、やゝ積蓄して產を得れば、又よのつねの町へ出づ、必竟は常人と乞食の中間にて、いまだ賤稱に入らず、可法といふべし、前にいふ尾張玄界村の乞食は、もと皆國民にて、他の浮浪をくはへず、無宿と異にて、凶年などに浮浪の無宿は放逐せらるれども、玄界村へは救米などをも賜ひて、一人も放逐はせられず、

乞食種類

〔賤者考〕乞食後土にて化子ともいふは、もと化子なるを、通音にも書たるなるべし、勸化の化と同じく物を乞ふ意也、かくにもくさ〳〵あるべし、一種は前條の無宿なり非人はいやしめ賤したる稱なり、續後紀承和九年七月、罪人橋逸勢除＝本姓＝賜＝非人姓＝流＝於伊豆國＝とあり、又一種俗に袖乞などいふ、平民の貧窮にせまりて、面を覆ひて往來の憐を乞ひ、又は夜々市街の家々に憂を告げて救を乞ふ、是ら異なるはいと〳〵不便なる者なり、されどそれにも贋僞の者あれば、ひたすらに信じがたし、荒年の飢饉はもとより、大水大火風雨大地震等に、俄に產を破りたる類もあり、そは年により所によりて常にはあらず、又一種それに似て異なるは、佛徒の行乞なり、雲水の僧より一寺の住職も眞面目なれば常とす、その餘習六十六部の納經、西國巡禮、廿四輩巡、四國遍路、善光寺參などいふ類多し、是とひとしく伊勢拔參り、諸國一宮巡、大社巡、金毘羅詣などもあり、是らもかく擬し、僞りてありく、眞の乞食も多けれども、元來は平民よりなしはじめたる事にて、常に耻とせず、是を修行と心得あやまりたるさへあるは、佛意の惡習なり、それに似て又一種いづこの寺院建立の爲とて、乞ひありくも多く、さのみにてはめづらしからねば、踊をなし、舞をなし、歌うたひつれ、鉦たいこにてはやし、歌念佛、踊題目など、くさ〳〵奇を出し、つひに兒女輩をさへ粧ひたてめぐるにいたるは、いとあさましきことなり、社頭の砂持、神事の假事、佛場の緣日などを賑はせむ爲のみに出るは、醜態はこのましからねど、一時の漫戲鬱散ともいふべけれど、米錢を乞ふたく鉢のわざは、僧みづからすべし、平民より助くるにおよばず、助力すべくば、その兒女の粧料舞謠の具より、まねびとる間の雜費、又たち出る日の飲食、その暇をもて家業をなして、それらをつどへなば、乞ふよりはまさりて多かるべく、それらの料を寄附すべきなり、必竟はその事に託して、みづからの漫戲をたのしむなれど、乞食の臭氣を帶ぶることを玄らざるは、いと〳〵拙し、

〔嬉遊笑覽乞十一〕物もらひ、昔より僞り多し、順禮、伊勢參、納經、鐙鈴、怪我したりといふ船頭、日雇取の

類なり、〻〻僧の手燈頭香などたきて、經よむものを見しことあり、恐らくは、其方ありてするものならん、〇中略又一種の腕香あり、鹿筑波集第二、かうがいなほしすげそ小刀句といふあらすのうで香たきやありくらん、吉勝これは香を燒にあらず、腕に小刀を指なり、訓蒙圖彙に圖あり、有髮なる者、腕に刀を貫きたる物もらひなり、注云、佛法を求るには、身命おをしまぬ事、古今の通法にして、諸祖師其行跡あまたなり、然れども今行人は、これをふれありきて人にみせ、食をもとむる手だてなれば、名は行にして澆山かはれり、とかくつらきは命かはといへるおかし、是又苦痛なく身を貫く方もあるなるべし、山伏に火わたりといふことする者あり、又觀場に鐵火をつかむもの時々あり、又膏藥を賣る者臑をきりて、その痕に膏藥をはり、卽効を驗するもの有り、近年是なし、予〇內藏本居が稚き時よく見しに、是は股を剃刀にて横にきりたり、その切やう、二三分ヅヽ引々して三寸ばかりもきるなり、剃刀の尖少し殘して、刃を引たるものとみゆ、日々幾度となくきる故、股の上、五六寸の間すきもなし愈たる處を切るなり、唯毛筋ほどに切ゆゑ、血も出ざれば、外に刃引のわきざしを拔、みねに手をそへ、押切る體をなして、切たる邊を押て血を出すなり、

〔日本靈異記 上〕聖德皇太子示異表緣第四

皇太子居住于鵤岡本宮時、有緣出宮遊觀片岡村之路側有乞。匃人。得病、而太子見之、從輿下俱語之問訊、脫所著衣覆於病人而言安臥也、遊觀既訖、返輿幸行、脫覆之衣挂于木枝、无彼乞匃、太子取衣著之、有臣白曰、觸於賤人而穢衣、何乏更著之、太子詔佳矣、汝不也、彼乞匃人他處而死、太子聞之遣使以殯、〇下略

〔日本靈異記 下〕撃沙彌乞食以現得惡死報緣第十五

犬養宿禰眞老者、居住諸樂京活目陵北之佐岐村也、天骨邪見、厭惡。乞。者、當帝姬阿陪天皇之代、有一沙彌、就眞老之門而乞食、眞老不施乞物、返奪袈裟、諸見逼惱言汝局僧也、乞者答曰我是自度、眞老亦

拍逐之、沙彌大恨而去、於其日夕、煮鯉塞凝、明日辰時、起居朝床、彼鯉含口、取酒將飲、自口黑血返吐傾臥、如幻絕氣、如寐命終、〇下略

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字六年閏十二月丁亥、配乞索兒(ホカヒヒト)一百人於陸奧國、便即占著、

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年六月十四日癸亥、左京職言、天長年中、於八條二坊、造立七間板屋一字、以爲乞人所居、而乞人之輩、別處停留、無居止、頃年駈役四人、隨便寄住、去年以來、無人居宿、加之毎遇風雨、愈增腐損、欲加修理、非無煩費、望請除弃以脫職累、太政官處分、依請、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年八月三日己巳、先是、令木工寮造東西京乞索兒宿屋二字、至是令左右京職毀年終帳、勤加撿按、

〔古事談三僧行〕叡山ノ平燈大德ハ、阿彌陀房之阿闍梨淨眞之師也、池上阿闍梨皇慶之祖師也、或日朝ニ河屋ニ居タリケルガ、足駄許ヲ蹈脫テ晦跡了、弟子共、天狗ナドノ取タルヤランドテ、暫ハ求ケレドモミエザリケレバ、七々佛事ナド修シテ訪後世畢、其後年序押移、淨眞阿闍梨讃岐守ナリケル人ノ祈シテ相伴下向任國之間、異樣ナル乞食國司ノ[illegible]へ出來テ乞物ケルヲ、此淨眞見ケレバ、失ニシ我師ノ平燈ニ似タリケレバ、寄テ能見之處、アヤシゲニ衰老タレドモ無疑平燈也、其時走出テ見テ、御座ケルハトテ泣々取付タリケレバ、雖不及返答、涕泣退去シケレバ、淨眞キト歸入、物ハキテ雖追尋、須臾之間不知行方晦跡了、相尋國人之處、申云、彼ハ年來此國ニ候門臥ト申乞食也、不定住所、只行至之所ノ人ノ屋ノ門ノ前ニノミ臥テ、以不斷念佛爲業、不受多施、只口分許乞之食云々、國司モ隨喜此子細、下國宣雖尋求、一切不聞之、遂期樵夫云、門臥ハ深山向西方、乍坐合掌死、但自口靑蓮華一莖生出云々、守已下擧詣山中、禮敬、異香猶留、見人無不流涙、淨眞被見付ヤガテ入深山、遂往生云々、

〔今昔物語十五〕比叡山僧長增往生語第十五

今昔、比叡ノ山ノ東塔ニ長増ト云フ僧有ケリ、幼クシテ山ニ登テ出家シテ、名祐律師ト云フ人ヲ師トシテ、顯密ノ法文ヲ學ブニ、心深ク智リ廣クシテ、皆其ノ道ヲ極メタリ、然レバ山ニ住シテ年來ヲ經ル間ニ、長増道心發ニケレバ心ニ思ハク、我ガ師ノ名祐律師モ極樂ニ往生シ給ヘリ、我レモ何デ極樂ニ往生セムト思ヒ歎テ、他人ニモ如此ク云ケル程ニ、長増房ヲ出テ厠ニ行テ良久ク返リ不來ザリケレバ、弟子此ヲ恠ムデ行テ見ルニ无ケレバ、外ニ知タル房ニ行タルニカト思ヘドモ、房ニ返テ手洗ヒテ、念珠袈裟ナド取テコソ何クヘモ行カメ、恠シキ態カナト思テ、所々ヲ尋ネ行クニ无シ、房ニ多ク法文持佛ナドノ御スルモ取リ不拈ズシテ无ケレバ、心モ不得ズ、何クヘ坐ストモ、此等ヲバ取リ置テコソ可坐キニ、此ク俄ニ死タル人ノ樣ニ不坐テバ、弟子共泣キ迷テ求ムルニ、其日不見エズ、其ノ後日來ヲ經ト云ヘドモ、遂ニ不見エズ成ヌレバ、弟子共其ノ房ニ住テゾ有ケル、多ノ法文共ハ同法弟子ニテ有ケル清尋供奉ト云フ人皆拈テ運ビ取テケリ、其後數十年ヲ經ト云ヘドモ、遂ニ不聞エズシテ止ヌ、而ル間清尋供奉モ年六十許ニ成程ニ、藤原ノ知章ト云フ人、伊豫ノ守ニ成テ國ニ下タルニ、此ノ清尋供奉ヲ事ノ緣有ルニ依テ、新ノ師ニ語ヒケレバ、守ニ具シテ下ヌ、清尋供奉國ニ行タレバ、別ノ房ヲ新シク造テ居エタリ、修法ナドモ其ノ屋ノ内ニシテ令行メケリ、守此ノ清尋ヲ貴キ者ニシテ、國人ヲ以テ宿直ニモ差シ分チ、食物ナドモ別ニ行フ人ヲ定メテ歸依スレバ、國ノ内ノ人皆清尋ヲ敬フ事无限シ、其房ノ邊ヲバ蠅ヲダニ翔ラセズシテ、清尋人ヲ追ヒ嗔ル、房ノ延ニハ菓子御菜持來テ所无ク居エ並タリ、而ル間房ノ前ニ切懸ヲ立渡シタル、外ヨリ見レバ、ヒタ黑ナル田笠ト云フ物ノ鈷破レ下タルヲ著タル老法師ノ、裳ノ腰マデ械懸タルヲ係テ、身ニハ調布ノ帷ノ濯ギケム世モ不知ズ朽タルヲ、二ツ許著タルニヤ有ラム藁沓ヲ片足ニ履テ竹ノ杖ヲ築テ、房ノ内ニ只入リニ來レバ、宿直ノ國人共此レヲ見テ、彼ノ。。。門乞匃ノ御房ノ御前ヘ參ヌルト云テ追ヒ嗔ル、清尋何者ノ來レルヲ追フニカ有ラムト思テ、

障紙ヲ引キ開テ顔ヲ差シ出テ見レバ、奇異シ氣ナル乞匃ノ來ル也ケリ、乞匃近ク寄來テ笠ヲ脱タル顔ヲ見レバ、我ガ師ノ山ニテ厠ニ行テ失ニシ長增供奉ノ坐スル也ケリ、如此ク見ツレバ、清尋惶テ下テ居タレバ、追ヒ次キテ國人共杖ヲ以テ追ヒ喤ルニ、淸尋ガ下テ居タルヲ見テ、或ハ湊テ立リ、或ハ走リ返リ去テ云ク、彼ノ門乞匃ノ御房ノ御前ニ參ツレバ、追ヒ去ケムト思テ走リ寄タルニ、御房ノ此ノ乞匃ヲ見テ手迷ヒヲシテ下テコソ居給ヒツレナムド云ヒ騒ギ喤ル事无限シ、長增ハ淸尋ガ下タルヲ見テ、疾ク登給ヘト云テ、共ニ板敷ニ登テ、長增蓑笠ヲ延ニ脱ギ置キテ、障紙ノ内ニ這ヒ入ヌ、淸尋モ次キテ入テ長增ガ前ニシテ、臥シ丸ビ泣ク事无限シ、長增モ泣ク事无限シ、暫時有テ淸尋ガ云ク、此ハ何デ此クテハ御坐ケルゾト、長增ガ云ク、我レ山ニテ厠ニ居タリシ間ニ、心靜ニ思エシカバ、世ノ无常ヲ觀ジテ、此ク世ヲ弃テ偏ニ後世ヲ祈ラムト思ヒ廻シニ、只佛法ノ少カラム所ニ行テ、身ヲ弃テ次第ニ乞食ヲシテ命許ヲバ助ケテ、偏ニ念佛ヲ唱ヘテコソ極樂ニハ往生セメト思ヒ取テシカバ、即チ厠ヨリ房ニモ不寄ズシテ、平足駄ヲ履乍ラ走リ下リテ、日ノ内ニ山崎ニ行テ、伊豫ノ國ニ下ダル便船ヲ尋テ此國ニ下テ後、伊豫讃岐兩國乞匃ヲシテ年來過シツル也、此ノ國ノ人ハ心經ヲダニ不知ヌ法師ト知タル也、只日ニ一度、人ノ家ノ門ニ立テ乞食ヲ爲レバ、門。乞。匃。ト付タル也、而ルニ此クテ其ニ對面シヌレバ、人皆知ナムトス、被知テ後ハ乞匃ヲモ爲ムニ人不用マジケレバ、相ヒ不聞エジト返々ス思ヒツレドモ、昔ノ契リ睦マシキ故ニ、心弱ク此ク對面シツル也、然レバ此ヨリ出デナバ、人我レトモ不知ザラム世界ニ亦行ナムト爲ル也ト云テ、走リ出デ行ケバ、淸尋尚今夜許ハ此クテ御坐セト云テ留ムレドモ、益无キ事ナ不宜ソト許云テ出デ去ヌ、其後尋ヌルニ、實ニ其國ヲ去テ跡ヲ暗クシテ失ニケリ、而ル間其ノ守ノ任畢テ上テ後三年許ヲ經テゾ門乞匃亦此ノ國ニ來タリケル、其ノ度ハ國人門乞匃御坐ニタリト云テ、極テ貴ビ敬ヒケル程ニ、幾ノ程ヲ不經ズシテ、其ノ國ニ舊寺ノ有ル後ニ林ノ有ケルニ、

門乞匃行テ、西ニ向テ端坐シテ掌ヲ合セテ、眠リ入タル如クニシテ死タリケレバ、國人共此ヲ見、付テ悲ビ貴ビテ、取々ニ法事ヲ修シケリ、讃岐阿波土佐ノ國マデ此ノ事ヲ聞キ継テ、五六年ニ至マデ此ノ門乞匃ノ爲ニ法事ヲ修シテケリ、然バ此ノ國々ニハ露功德不造ヌ國ナルニ、此ノ事ニ付テ此ク功德ヲ修スレバ、此ノ國々ノ人ヲ導ムガ爲ニ佛ノ權リニ乞匃ノ身ト現ジテ來リ給ヘル也トマデナム、人皆云テ悲ビ貴ビケルトナム、語リ傳ヘタルトヤ、

〔今昔物語二十九〕住清水南邊乞食以女謀人人殺語第廿八

今昔、誰トハ不知ズ家高キ君達ノ、年若クシテ形チ有樣美麗ナル有ケリ、近衛ノ中將ナドニテ有ケルニヤ、其人忍ビテ清水ニ詣デタリケルニ、歩ナル女ノ糸淨氣ニテ、ハナヤカニ著物ナド有ル參會タリ、中將此レヲ見ケルニ、下臈ニハ非ヌ者ノ、忍テ歩ニテ詣タルヨト思テ、女ノ何心モ无ク仰タルヲ見レバ、年廿餘計也、形チ淨氣ニテ愛敬ヅキタル事、世ニ不似ズ微妙カリケレバ、此ハ何ナル者ニカ有ラム、此レニ物不云デハ何デカ有ラムト思フニ、万ヅ不思エズ心移リ畢テ、女ノ御堂ヨリ出ルヲ見テ、中將小舍人童ヲ呼テ、彼ノ女ノ入ラム所、慥ニ見テ來レト云テ遣ツ、然テ中將家ニ返テ後、小舍人童返來テ云ク、慥ニ見入レ候ヒヌ、京ニハ不候ザリケリ、清水ノ南ニ當テ、阿彌陀ノ峯ノ北ナル所ニ候フ家也、糸モ賤ハヽシ氣ニ住テナム候ヒツル、共ニ候ヒツル長シキ女ノ己ガ後ニ立テ罷ツルヲ見テ、恠ク何カニ御共ニ參ル樣ニハ見ユルゾト問ヒ候ツレバ、彼ノ清水ノ御堂ニテ見奉ラセ給ヒツル殿ノ、慥ニ入セ給ム所見テ參リ來ト候ツレバナムト申シ候ツレバ、此ヨリ後ニ若シ參ル事有ラバ、己ゾ尋ヨトコソ申シ候ツレト語レバ、中將喜テ文ヲ遣タリケレバ、女艶ズ書テ返事有ケリ、此樣ニ度々云遣ケル程ニ、女ノ返事ニテミヅカラハ山郷人ナレバ、京ナドヘ出ル事ハ否不有ジ、然ラバ此方ニ渡セ給ヘ、自ラ物越ニテモ申サムト云タリケレバ、中將女ノ見マ欲カリケル餘ニ、喜ビ乍ラ侍二人計、此ノ小舍人童馬ノ舍人計ヲ具シテ、馬ニ乘テ京

ヲ暗ク成ル程ニ出テ忍テ行ニケリ、彼ニ行著テ童ヲ以テ此ナムト云入サセタリケレバ、女出テ、此方ニ入セ給ヘト云ケレバ、女ノ後ニ立テ入ルニ、見レバ廻ノ築垣糸強クシテ門高ク立タリ、庭ニ深キ湟ヲシテ橋ヲ渡シタリ、其レヲ渡テ入ルニ、共ノ者共馬ナドヲバ湟ノ外ナル屋ニ留メツ、我レ獨リ入テ見レバ、屋共數有リ、客人居ト思シキ所有リ、妻戸ノ有ルヨリ入テ見レバ、糸吉ク口ヒキテ屛風几帳ナド立、淨氣ナル疊ナド敷テ、母屋ニ簾掛タリ、中將此ル山鄉ナレドモ、故有テ住成シタレバ、心憾ク思テ居タル程ニ、夜モ深更ヌレバ主ノ女出タリ、然レバ几帳ノ內ニ入テ臥ヌ、氣近ク成テ後ハ近增シテ勞タキコト无限、而ル間日來ノコトナド云次ケテ、中將末マデノ深キ契ナド云臥タルニ、此ノ女極ク物思タル氣ハヒニテ、忍テ泣ニヤ有ラムト思ユ、中將恠クテ、何ト此ハ物歎タル氣色ナルゾト問ケレバ、女只物哀レニ思ユル也ト云ケレバ、中將倚極テ恠ク思ヒテ、今ハ此ク馴ヌレバ、何事也トモ不隱レソ、然テモ何ナル事ノ有ゾト、此ク不只ヌ氣色ナルハト強ニ問ケレバ、女ノ云ク、不申ジトハ不思ネドモ、申サムニ付テ心疎キ事ナレバト泣々ク云ケレバ、中將只宣ヘ、若シ我ガ可死キ事ナドノ有ルカト云ケレバ、女實ニハ隱シ可奉キ事ニモ非ズ、己ハ京ニ有シ然々ト云シ人ノ娘也、其レガ父母失ニシカバ獨リ有シヲ、此ノ家主ハ乞食ノ極ク便リノ付テ、此テ年來居タリケルガ、構ヘテ我レガ京ニ有シヲ盜取テ養ヒ置テ、爲立テ時々清水ニ參レバ、參會タル男我レヲ見テ、此樣ニ假借スレバ、此ク御マシタル樣ニ此ニ謀寄セテ、寢ヌル際ニ、天井ヨリ鉾ヲ差下シタレバ、我ガ男ノ胷ニ取宛タル時ニ差殺シテ、其ノ著物ヲ剝取リ、供人ヲバ湟ノ外ナル屋ニ置テ皆殺シテ、其著物ヲ剝乘物ヲ取ル、此樣ニ爲ル事既ニ二度ニ成タリ、此ヨリ後モ亦此ノミコソハ候ハムズレ、然レバ此ノ度己レ殿ニ代リテ鉾ニ當テ死ナムト思フ也、速ニ逃給ヒネ、御共ノ人ハ皆死ヌラム、但シ亦見奉ラム事ノ不有マジキコソ悲ケレト云テ、泣ク事无限シ、中將此レヲ聞クニ總テ物不思エズ成ヌ、然レドモ思ヒ念ジテ云ク、實ニ奇異キ事カナ、我

レニ代ラムト有ルハ、世ニ難有キ事ナレドモ、其ヲ見弃テ、獨リ逃ムコソ悲ケレ、然ラバ具シテ逃ムト云ヘバ、女ノ云ク、縮返シ然ハ思ヘドモ、鉾空クバ定メテ急ギ下テ見ムニ、二人乍ラ无クバ、必ズ被追テ二人乍ラ死ナムトス、只殿獨リ命ヲ存シテ、我ガ爲ニ必ズ功德ヲ作リ給ヘ、此ヨリ後モ何デカ然ノミハ罪ミハ作ラムト云ヘバ、中將其ノ我ニ代ナムヲバ、何デカ功德ヲ作テ其ノ恩ヲバ不報ザラム、然モ何ニシテカ逃ムズルゾト云ヘバ、女遣ノ橋ハ渡給テ後即チ引ツラム、然レバ此レヨリ其方ナル遣戸ヨリ出テ、遣ノ其方ナル狹キ岸ヲ渡テ、築垣ニ狹キ水門有リ、其ヨリ構ヘテ逼出給ヘ、既ニ其ノ時ニ漸ク成ヌ、鉾ヲ差下サバ、我レ自ラ胸ニ取宛テ被差テ死ナムズト云フ程ニ、奥ノ方ニ人ノ音スレバ、怖シト云ヘバ愚也ヤ、中將泣々ク起テ衣一ツ計引折テ、緘ニ其敎ヘツル遣戸ヲ出テ、其ノ岸ヲ渡テ、水門ヨリ構テ逼出ヌ、出タルハ賢ケレドモ、可行キ方モ不思エザリケレバ、只向タル方ニ走ケル程ニ、後ニ人走テ來ル、人ノ追テ來ル也ケリト思フニ、物モ不思デ見返テ見レバ、此ノ我ガ小舍人童也ケリ、喜乍ラ此ハ何ニト問ヘバ、童ノ云ク、入セ給ヒツルマヽニ、遣ノ橋ヲ引候ツルヲ惟ト思給ヘテ、構テ築垣ヲ超テ出候ヌルニ、殘ノ者共ヲ皆殺シ候ヌト承ツレバ、殿モ何ガ成セ給ヌラムト悲ク思給テ、否罷リ不返デ、藪ノ中ニ隱居テ、此モ彼モ承ラムトテ候ツルニ、人ノ走リ候ヘバ、若シ然ニヤト思給ヘテ走リ參ツル也ト云ヘバ、中將然々ノ事ノ有ケルヲ不知デ奇異キ事也ト云テ、相具シテ京ノ方ヘ走ケル程ニ、五條ト川原ノ邊ニテ見返テ見ケレバ、其ノ有ツル家ノ方ニ大ナル火出來タリケリ、早ク鉾ヲ差下シテ突殺シツト思ケルニ、例ニモ不似ズ、女ノ音モ不爲ザリケレバ、惟ムデ慾下ヲ見ケルニ、男ハ无クテ女ヲ差殺シタリケレバ、男逃ナバ即チ人來テ被搦ナムトスト思ケレバ、程ナク屋共ニ火ヲ付テ逃ニケル也ケリ、中將ハ、家ニ返テ童ニモ口固メ、我レモ其ノ後此ノ事ヲ人ニ不語ズシテ止ニケリ、但シ誰ガ爲ニトモ不云シテ、毎年大キニ佛事ヲ儲テ、其ノ日功德ヲ修ケリ、定メテ彼ノ女ノ爲コソハ有ケメ、此ノ事

世ニ聞エテ、人有テ彼ノ家ノ跡ニハ寺ヲ起ケリ、□寺トテ于今有リ、

〔西行物語〕ともに出家したりし西住が心を見むとや思ひけむ、頭陀は是第一の行なり、けうまん、はたほこをたをして、善人のかたきをうつと、佛とき給へりとて、ふたり乞食行ほどに、西住がめのとのもとへ行て、經を讀たてれば、内になきあひたり、つれなく經をよめば、白米をぬり桶のふたに入て、年比つかひし女、なく〳〵持て來り、袖をひろげてうけて歸とき、内よりも聲も惜まずなく中に、めのとの聲もしつゝ、又いとをしかりし子の、父に似たるとてなきければ、西住聞て、たへずや、墨染の袖をしぼりけり、西行見つゝ、かく心よはからむには、我同行には叶はじとて、はなれにけり、

○按ズルニ、乞食ヲ袖乞ト云フ事ハ、袖ヲ廣ゲテ物ヲ受クルヨリ名ヅケシモノヽ如シ、

〔發心集四〕永心法橋乞食をあはれむ事

永心法橋といふ人、ちか比の事にや、清水へ百日まいりける時、日くれてはしをわたりけるに、河原にいみじう人のなく聲きこえけり、何物のいかなることをうれふるにかと、おぼつかなきうちにも、觀音はあはれみをさきとし給へり、そのとくをあふぎたてまつりて、まうでながら、なさけなくとぶらはですぎむ事こそ、いとあやしけれと思ひて、こゑをたづねつゝちかくいたりて、なにものゝかくはなくぞとゝふ、かたわ人に侍りとこたふ、いかなることをかうれふるとゝへば、我かたわにまかり成にし後、しれる人にもこと〳〵くわかれて、たちよる所も侍らぬにより、さきだちてかたわなる人の家をかりて、そこにやどりゐて侍れば、ひるは日ぐらしといふばかりせためつかひ侍り、うしとてもなれぬ身なれば、又物をこひていのちをつがむとつかまつる、とにかくに身のくるしさ申つくすべきかたなし、よのかたにうちやすむべきを、又このやまひのくつうにせめられてねられ侍らず、きりやくがごとくうづきひゞらき、身もほとをりてたへ

しのぶべくもあらねば、もしやたすかると、河のほとりに、まうできて、あしをひやし侍るなり、いにしへ世々にいかなるぎやくざいをつくりてか、かゝるむくひをうけつらんと、かなしく心うく侍るに、そのかみ住山して、かたのごとく學問などし侍りしが、大師のしやくに、唯圓教意逆卽是順、自餘三教逆順是故といへる文を、たゞ今思ひ出て、そのこゝろをしづかに思ひつゞけ侍るに、たうとくたのもしく覺えて、とにかくにさくりもしあへずなかれ侍るなりとかたる、永心これをきくに、あはれにいとをしき事かぎりなし、すなはちわが一山の囘法にこそありけれとて、なみだをながしつゝ、みづから、きたりけるかたびらぬぎてとらせて、逆卽是順なるやう念比に、やゝ久しくときゝかせてさりにけり、年ごろをへぬれど、わすれずとなんかたりける、

〔慶長見聞集五〕樂阿彌乞食の事

見しは今樂阿彌とて、江戸をあるく乞。食。あり、狂言綺語をいひて、人の心をなぐさめ、扨また隱家は心の内に有物を知らでや山のおくに、入らん、とよめる古き歌にふしを付てうたひ、町をあるきめぐれば、一日に錢を百も二百ももらふ、或時樂阿彌、町へ出て云やう、我けふのもらひを半分とらせ、小者をやとはんといふ、樂阿彌が錢もらふ事かくれなければ、貫取出てやとはるゝ、樂阿彌は常に赤手ぬぐひにて頭をつゝみ、そうじてけうある姿也、小者をつれ小歌をうたひ町をまはり、萬の殘飯魚の切くず、何にても人のくるゝ物を取てもたせ、日も暮ぬれば半分小者にやり、半分にてはをのれが一日の口をやしなひ、扨手を打たゝひて、愛の辻かしこの道のほとりに臥て夜をあかす、又或時は樂阿彌小者をもやとはず、ひとりあるきをなし、錢を一貫ばかりもち、首にかけてあるく、人是を見て、扨は樂阿彌はかしこくなり、欲をも知りたるかと思ふ處に、樂阿彌傳馬町へ行、毛よき馬をかり、くらをかせ、萬づ道具をかりあつめ、日本橋に立出、大音あげて云やう、今日は廿四日、樂阿彌が愛宕まうでなり、小者中間をやとはんとよばゝる、日本橋の事なれば、

貸取共我も〳〵といふまゝに、百人ばかりあつまり、樂阿彌をおつとりまひて、つらふりあげ聲を立、やとはれんといふ、樂阿彌四方を見まはし、すくやかなる若き者、侍がましき者共をかひゑりかひゑり、錢をとらせ打立、其日のせいぞろひを、往來の人がとゞまつてぐん衆をなして見物する、先鑓持、長刀持、弓、てつ、ほう、はさみ箱、さしがへの刀かつがせ、あたりに若黨四五人つれ、我身は馬に打乘て、兩口とらせ愛宕へ參詣することそおかしけれ、衆らぬ他國の道行人は、大名の御通りとておそれをなしてぞとほしけり、愛宕の山にのぼりては何事かと問、何事にても樂阿彌が願ふ事こそなけれとて、大酒のみて、日くるれば、愛宕の山を下向して、日本橋につきにけり、馬よりをり樂阿彌はいとま申て、貸取達さらば〳〵と手を打て、四方へ散こぞ失にける、町の人々是を見て、誠に樂阿彌とはよく社名をば付たれと、いはぬものぞなかりける、

〔駿臺雜話三〕二人の乞兒

近世是ほど風俗衰へて、利欲にさかしけれども、人の性もと善なる程に、族姓にもよらず、ならはしにもよらず、乞食體の者にも、はからざるに義理を衆るの心あるぞかし、朱子小學の書に、李鞋衆錄極、天問鑒といへるは、信にして、誣ざる事とこそおもひ侍れ、此十年以前、享保癸卯の歳の十二月十七日、江戸室町の商人越後屋吉兵衞といふ者の手代市十郎、諸方の掛の金請取て歸りしが、金三拾兩入たる袋ひとつ見へざる故、さだめて途にておとしたるものにてあらん、もはやあるまじきとはおもひながら、もと來し路を段々に尋ねありく程に、ある所に、乞食一人ありしが、見とがめて、なにを尋候や、もし金をおとさるゝにては候はずやといふをきゝて、市十郎うれしくて、有のまゝに語りければ、さればとよ、我等拾ひ置て候、其主のたづね來ぬ事はあらじと、それを待てこそ、さき程より此所におるにて候、いよ〳〵慥なる事承りて、しかとたがひなくば渡し候べしといふ、市十郎、金の員數、又は中にある證文などのやう一々いひきかせしに、さては疑な

しとて取出し、袋のまゝにて渡しけり、市十郎餘の事に、さてやみがたくて、内五兩取出して、是は貴てそこの得分にせられよとてあたへけれども、中々受るけしきなし、市十郎いひけるは、此かねはなき物にきはめ置しに、そこの志ゆへにこそふたゝび手にも入たれ、然るをのこらず我物にすべきにあらず、遂て受てくれ候へといへば、よく考へて見給へ、其五兩をもし望意得ならば、三拾兩を返し申べきや、もとより自分のよくにて拾ひ置たるにてなく候、定めておとしたる人、主人のかねなどならば、さぞ難儀に及ばるべし、他人に拾はせなば、其落せし人にはふたゝび返るまじ、さらば我等拾ひ置て、其人に返さまく思て、拾ひ置たるにてこそ候へ、そこもとへ渡し候へば、我等が思通りて候、さらばいとま申候はんとて、其まゝそこをさりて、見かへりもせで行けるを、市十郎跡を慕たひて、取あへず懐中より金一星取出し、けふは寒氣もつよく候、歸られ候はゞ、是にて酒をもとめてたべられ候へとてあたへければ、是は御志にて候まゝ申受候て、是にて御酒給申べきとて、それをば受て立わかれける、名を尋ければ、名は八兵衛とて、車善七が手下の乞食のよし申候、市十郎宅に歸りて、主人吉兵衛にくはしく語りしかば、吉兵衛聞て感涙にたへず、なにとぞ右の五兩を八兵衛につかはしたし、明朝早く善七が宅迄持参し、善七にも申きかせ、八兵衛に合點いたさせ、とかく受候やうにはからひ候へとて、市十郎に手代頭をさしそへつかはしける、さて善七がもとへ行て尋ければ、其八兵衛と申候乞食は、昨夕いづくにてやらん、金一きれ、もらひ候とて、善七へも見せ候しが、なかまの乞食どもよびあつめ候て、その金をもて酒肴もとめ、人にも給させ、其身もたべ候しが、たべつけぬものを多くたべ候て、食傷いたし候か、今曉急死いたし候といふを聞て、市十郎おどろき、死骸を見とゞけ、善七に此死骸もらひたく候、かまへて粗忽に外へ移すべからずと堅くいひ合せ、さて家に歸り、其よしを吉兵衛にいひきかせければ、早く人をつかはし、死骸をうけ取、右の五兩のかねをもて、本庄無縁寺にて厚く葬りしとなん、吉

兵衛も義に感ずる事、商買には奇特といふべし、日ごろ加賀侯家の用をきゝて出入する故に、手代市十郎、その月の二十日に加賀の邸へ來て、かの家の役人に始終語りしとて、翁(室鳩巣)にきかする人ありき、世に是に似たるやうの事ありと折ふし人のはなしにきくといへど、是程たしかなる事はきかず、よりてきゝたる通りを少しものこさず、各にも語り侍る、おもふに八兵衛たゞ人にあらず、いかなれば乞食の黨には入にけん、定めてもとはいやしからぬものにありしが、孤貧きはまりて家もなく乞食まてありく程に、外の乞食と一例になりて、是非なく善七が手下に屬しけるにもあらむ、さればながらへて甲斐なき事とおもひしか、幸に金を得て、酒食をもとめ、火伴と歡會しける程に、是を限りとおもひて、自から喉などしめて死けるにもあらん、はかりがたし、この八兵衛を士とし、又は人の上におくとも、權柄をもて人の物を乞求るやうの事は決してすまじき者なり、されば世には、名は歷々の士大夫とよばれて、實は乞食なる人もあり、此八兵衛は、名は乞食なれども、實は士大夫といふべし、又加賀の國に野田山とてあり、前田家先祖以來代代こゝに葬る故に、家中の諸士も死すれば、其麓に葬らざるはすくなし、さる間中元には家々より墓前に燈籠を具ふ、毎歲の事なり、厚祿の家こそ假屋を造り人をつけ置て守りもすれ、其外は大かた夜ふくればともし捨て歸りぬるに、下部の惡黨ども來て、火を打けし蠟燭を奪取けり、側に乞食とおぼしき者、こもをかぶりて臥し居たりけるが、それを見て、人の祖考のためとて墓にすゝめける物を、さやうに狼藉する事あるべからずと制しけるに、惡黨どももろ共に罵りて、こもをかぶる身として、いらぬ事をいふ奴かなといひしに、その乞食きゝて、各が今するやうなる事をせぬ故に、こもをかぶるといひしとぞ、齊の餓者の嗟來の食を食せざる故に、こゝに至るといひしに、語意相似ておもしろく覺へ侍る、

〔兎園小說〕なら茸、乞食の實、羅城門の札、

延享五年戊辰〔この年寛延と改元〕春正月十三日の夜の明がたに、大坂四ッ橋にて、そのほとりなる非人、金五拾兩拾ひしに、その包がみに、宇津屋氏と書きつけてありしかば、隈なくたづねて、終にそのぬしに返しけり、金のぬし歡びて、謝物として金子少々とらせしかども、つや〳〵うけず、よりて又酒代として鳥目三貫文つかはしゝに、左の詩を相添へて、その鳥目を返しつゝ、非人はゆくへしれずとぞ、

橋上路邊一二錢　往來終日幾千人　死生富貴任天命　昨日錦今日草鞋

たからぞとおもへば袖につゝみけり、ひらへばおもき障りなりけり、

又いづれのとしにかありけん、豐後國〔郡たづぬべし〕地藏寺門前に、行き倒れの尼あり、その住所をたづねしに、乞食のよしなればしれず、その傍に辭世あり

漸出人間界　忽今上昊天　卽捨敝裝笠　夢醒寺門前

予これらの人の塵埃に埋もるゝを哀み、錄してもて人に示して、後に傳へんと欲するのみ、

〔鹽尻三十五〕一去年の秋は、我友林氏の門にて、裸行草食の者餓死せり、いまだ息ある時、湯を乞侍る儘に、ごきやあると問なれば、泪を流、孤子落魄にして耻をさらすとも、いかで丐者の名を得べき、此ゆへにごき持侍らず、いかなる器にも、最後に湯一ッたび候へといひしかば、人木石に非ず、ことにかんじ、食なんどあたへしに、否と計いひ、湯少し飲て、やがて死にけるとなん、こゝら多き乞食見て、あれは世に愚なるしれものに候ひし、この頃永林寺の門に伏して居ながら、瓢を操り物乞すべきもしらず、勸め、食を貰ひもとめよといひしに、よしや今少しの命を食事につながれ、憂身のしばしもながらへんこそあさましけれ、早く死して侍らんこそ嬉しかるべきとて、終にその意なかりしと語りけるとかや、あはれなりける事にこそ、

〔閑田耕筆二〕近江八幡にて、もと有しことゝて人の語りしは、醉人もろ肩をぬぎ、劍を廻して過る

もの有、花子の長非常をみめぐる者、或家の門にてみつけて、此劍を奪んとす、醉人はとられじとすまふ間、みるもの堵のごとくなれば、彼家のあるじ出て、花子の長を叱りて、吾門を塞げて何とするぞ、疾他所へ引連ゆけといふ、長いらへて、無理なる人哉、かく危き劍の下にて、我心にまかすべきものかはといふに、家あるじ息まきて、花子の身をもて、無禮なることをいふものかと、握りこぶしをもて打んとす、長も怒りて、我は其花子を治め、はたかくやうの非常を、防ぐが任也、貧者の身をもて、吾を花子とやはいふべきと、是も棒を引そばめ、打はうたんず勢也、其間に、醉人は本性になりて、劍を室にし、肩をさしいれて、彼爭ふ中に入て、さしもなきことに、さは爭ふものかはとあつかふを見て、つどへる人はみなどよみけりとぞ、

〔病間長語 一〕賈人の肆に居しに、乞丐の傀儡師と云へるもの前に立ちて、色々の徒言を發して函の内より鼬鼠の尾を出して、山猫の化物もゝんぐわに食せよと云ひ了り、大官人一文と云ひし時、かの賈人の妻、一文錢を與へんとせしを、大聲あげて叱して云ひけるは、たとひ錢は山の如くに積澄とも、那の乞食に與るは半文錢もなし、乞丐も函を下に置き、たかゞ一文の錢、渾家のだされずはその分、だして險些に菜に與たまふをとゞめらるゝは、さりとては餘りに忍人なりと云ければ、賈人いよ〳〵怒れる態にて、この口人一文錢はおれが骨からしぼり出した錢で、妻を育する有用の者なり、若その方が不成人か窮民ならば、十文や五文惜むにも非れども、その大男子が外に活計もなき樣に山猫の化物とは何事ぞ、乞丐言下に自新の志を生じて、雙涙を流て感せり、その後一年ほどありて、貨郎となり、この所へ來りて、再生の恩とて拜謝せりと、性理家の氣質變化の證據に語れり、これが氣質變化であるや、そこは病夫が知ぬことなれども、陸機が戴淵を化したるに似て、いかにも面白きことなり、

〔半日閑話 十五〕一五月中旬頃、赤城油揚屋の女房、堀之内江願がけに日參致す所、或日刻限を間違、

内を正七ッ時に出かけ、手代一人召れ參りし所、江戸やの横丁にて、非人共に山へかづかれ行、三十人計にて、手代を木へ捕へ置、其前にて、彼の人數にて、女房をおかし候よし、夜明人見付候とき、いき計出て、草の上に其儘臥し居り候し、彼の油屋は名高き町人にて、女房簡樣の耻をさらし候事、いかなる故哉と尋るに、日頃女房情なきものにて、乞食など乞致候節、見世のものへ申候者、居ざり或は手足不叶者は壹文でも遣し可申候得共、其外の乞食は、足腰も自由にて、貰ひ候者、此方も同前の處、夫を貰ひては、盗人も同樣なる事ゆへ、遣し申間敷と、日頃情なくあひしらひ候ゆへ、夫を乞食鬱憤におもひ、あだをなし、よし、夫より兎角油揚屋の見世先へ參り、此内の女房よいきみであろ、己が女房だなぞ申、色々惡口に及び候よし、

〔賤者考〕觀物師舌耕の類種々あり、前にいふ願人僧、輕業、籠抜、手妻、品玉やうの事をする者を使役して、諸方へ遣り、所々に場を開きて見せて料を得る者にて、やがておのれも其中の伎藝をなす者もあり、おのれがなさゞるもあり、もとはその中の上手の者頭となりて支配せしが、得分となりて、其子にいたりては、伎は拙けれども、その得分によりて產業となし、つひには伎はなさゞるにもいたるを羨みて、又かたへよりおのれはその伎をなさざれども、其頭だちたる事のみをなす者も出來たるなり、賤者はすべてその給を得る時は、忽消色に變し、給を得ざる時は、飢渇にも及ぶを、その間を扶助して寄食する者を、親方又は頭と稱す、此類はその閑なる間を養ひて、事ある時の給をもて、その費用にあてゝ、賤者の餘沫をおのが產とする故に、遂はいたく賤し、此末伎は狛(コマ)まはし、コマはむかしこまつぶりといひたる玩弄の物なり、軍書讀、以前太平記よみといへり、落話(オトシバナシ)、輕口、蛇役(ヘビツカヒ)、謎解、力持、火食、鍋嚙、盲相撲、異鳥、異獸、異魚、異器、異物、機關(カラクリ)、畸疾者(カタハモノ)、侏儒、僞造の異品、天狗、人魚、長頭、髑髏、飛頭蠻、幽靈の類なり、の奇巧精妙の類、日夜に新趣をなし、百出變現してかぞへつくしがたし、近來籠細工、竹ざいく、糸ざいく、硯ざ目がね、火をたけば、蓋密合してはなれざる釜、大佛、大頭人、足長、一統、虎、狐、大龜、鯨、術者あり、野狐役(キツネツカヒ)、飯蠅法(イヅナツカヒ)などいふ、是は制禁あれども、おのづからたえず、時々ありて人を誑惑す、翫弄のみなるは害も淺く、又それと見えてさもなくただ手妻の方なるもあり、手づまは、たゞ手さきによく熟練して、人氣を轉じ、人しらぬ間に、はやく物を替などするのみにて、妖術にはかゝはらぬかたをいふなり、奇を見せ、假托饒舌して、信を起さしめて、人を惑せる類まゝあり、神佛の靈異に托し、醫藥奇方に托しなどすること、和漢共多くあり、

又今はしからぬも、父祖よりその家に傳はりて、妖を殘すもあり、四國の犬神、出雲の狐持などの家筋といふ類なり、緣家となれば、その家にも轉來すとて、婚を忌み避け恐るゝ事なり、(中略)町中にも藝ある者は、やゝ米錢も得やすく、藝によりては其裝をもなし、器械をも作る、大抵一小市をなして、あらざる職なきにいたると見ゆ、戲場をなすあり、三絃を彈くあり、鼓弓、大鼓、鼓、諸笛、鉦、舞、淨瑠理、小歌、俄狂言類なさゞる事なし、(以上論圖にては乞丐の業なるな、いかなる故か、本間には此類の藝は皆穢多のする事なり、さる故にゑたは皮ざいくする者と、藝する者とありて、雜居して甚多く、乞食は無藝の物もらひにて、穢にくらぶれば甚少し、)その餘おとし話、ちよんがれ、祭文、豐後、新內、はやり歌、くさ／＼日々新をきはふ唱歌の類、はんじ物、謎、月の大小を戲繪に圡たるなどを板に彫りすりても賣る、前にいふ願人なども頭そりたるのみ此類なり、或は戲れをかしき面を著、をこなる出たちをし、犬と相撲をとり、犬にしひて踊らせ、獨相撲のまねをし、蛇をつかひ、春駒、鳥追、大黑舞、節季候とてはやし謠をし、齒朶を編笠につけ著たるもあり、(此者若山なるに、他にや上異にで、以上の如くなる、にあかれ木綿の覆面なして下にたれてなどる、はやしたつる語も異にて、三四樣あり、九人組といへて、九人づゝ來る、牛わかれても來る、是も穢多にては乞食にあらず、その黨にては古き家なりなどり、)すた／＼坊主、(近來は見ることまれなり、すべて遊行によりてかはるべし、)寒垢離、(寒中水をあみて代ごもりするなとぞ、)庚申代待、(上に同也、)つくり物細工物などを擔ありく類、(是らはつくる者別にありて、くさ／＼の品なつくり出て、日々にかして料なとるとぞ、)異形の戲(いたりのどいひて、獸面な異く突出すやうの類、又異顏なつくりかぶ畫形生なりて踊り、異形なる妖怪のさまなゝゐしくまれぶ類なり、)皿まはし、鉢まはし、日傘の上にて輪をまはし、錢をまはし、鷄卵をまはす、錢輪をかけはづし、物を高くさゝげ、頭に置て苗をふき、手づま、品玉、あやつりの類、大抵は觀物師の所にいふ類の、やゝ揃きが常なれど、中にすぐれて目を驚かす類もあり、先年鯨男とて淸水をのみ、泥水をのみ、たばこのけぶりを多くのみ、つひには烟管を吸口より吞みて、かへりて唇へ吸口を出し、淸水を噴出し、かたへよりは泥水を噴出し、又吸口よりけぶりをふき出し、かたへよりは淸水を吐き、又吸口より泥水を出し、かたへより烟をはく、かはる／＼自由なること、見る目もあやなり、是ら鍛錬して實に圡かるか、別術あるか知らず、此

他箱なる栗を陶器の水とを移しかふる種類品多し、(中略)

伊勢の合の山牛谷などに出ゐる丐者をハイタといふ何の義なるをしらず、世にいふお杉お玉は、そのかみ此所にさいふ美婦ありて名高く、今は通名の如くになりて、三絃のすががきをひく、合の山のお杉お玉はかくのごとくなるに、そのかみ南の牛谷にもお鶴お市といふ美形、たれか乞食と思ふべきと、好色旅日記といふ貞享四年の戯冊に出たるに、そは人いひもつたへず、不幸といふべし、幼子の殿中踊(袖なし羽折のことを、いせ尾張邊にてでんちばなりといふは、此殿中踊に袖なしばなりを著るより出たり、)となど、此地一種の定形なり、

〔觀聽草七集十〕二丐者傳 南畝先生文集

東叡之下有鶴吉者、金龍之山有泥鰌者、皆丐者也、吉之開場也、倚一茶店、日與二三丐兒、畫地爲規、觀者如堵墻、初搊三絃、不歌不言、次著單齒高屐、濶歩坦々、次弄數丸、如以一粒豆、一酒壺、交弄之細大不遺、操舍不失、又加以一茶碗與二刀、刀握其柄、碗承其底、如機婦投梭、如燕々之頡頏、俯仰上下、飄瞥倏忽、累々乎如貫珠、或含豆而吐、刀迎而擊、百不失一、乃舍二刀、以碗承丸、以壺承豆、碗盛數丸、豆盡入壺中而止、最後左弄一巨石、右弄一酒壺、意若石將壓壺者焉、衆岌々而注視、俄擲巨石於頭上、過額數尺、急翻身避其隕、硼磬響地、兩手捧酒壺曰、危哉、衆哄然而笑、賞以數錢、吉手鍛其錢、度之以指曰、未滿百錢、吾技本直千金、折以百錢、不亦廉乎、諸君歸、試弄茶碗、其不破裂者幾希、吾有奇術、空屏中出鳩、變竹葉爲魚、今日之事、不過百錢、得則呈技、其坐茶店者、自有茶錢、唯環立如堵墻者、縱觀無厭、有靦面目、請賞數錢、於是人々投錢如雨、每人投一錢、吉與衆丐兒同唱曰、一錢、曰二錢、以至百餘、似射之唱獲者、吉曰、少曷不百錢、多曷不二百錢、奇零微鮮、是吾憂也、乃猶然而起、腰一刀、手一籃、請錢於環立者、人或還延而却、則嘲且罵曰、嘻怯哉、人亦笑而不怒、目觀者以衣色曰、靑衣有阿堵物乎、曰白衣囊中何如、一似責債者、謔浪笑敖、傍若無人、令人不覺捧腹、吉曰諺不云乎、魚臉以酷美、男兒以氣喜、何必稱々焉網利

之爲、投籃于地、盡收其錢、與而拜曰、大人無乞人不樂、乞人無大人不活、幸得大人之庇、得數百錢、夫乞人開場、多列粉白黛綠者、我無婦女、又無戲臺、幕天席地、曾日長風暖、請佇立斂刻縱觀吾伎、蹲而哈曰、守錢奴之喜、溢乎眉宇、乃使丐兒彈絃、圍一小屏、覆以帷、而撤屏帷、示其中無物、又圍屏覆帷、頃刻而撤、有一青鳩、躍如而去、衆絶叫而稱奇、但捷耳、非幻也、其他檢利佩斂之術、恢諧孟浪之言、更僕不能盡也、於是行者下擔、立者忘歸、不知日之隱西山云、吉親奇偉、身丈七尺、眼光爛々射人、自稱松川氏、縮之設場也、亦倚茶店、無伴無絃、無他技術、蕭然古藤架下、一扇擊節而談耳、掛一聯曰、燕子知社、泥鰌知穴、時時題嗣語以揭焉、蓋其得意也、縮上自王侯大人、下至士農工商、探其隱微、盡其情狀、冶遊子弟之裝、無賴惡少之氣、粗俗武人之言、木訥田舍之質、娼妓婦女之態、宛然如睹、不啻優孟抵掌也、言語不避忌諱、形勢不愧猥褻、陵轢一時、嘲哂九流、出神入佛、呵儒罵道、毎嘆曰、列侯祿百万、不食百方椀、吾人無祿、三粲而足、又曰、此山觀音大士所占、大士則吾地主也、地主長一寸八分、其堂周回十八歩、其香火之資日万錢、我長七尺以長、食粟而已、豈不慚愧乎、都人士女、進香合掌、絡繹不絶、大士終日凝然不動、抑何慵也、無乃疲於津梁乎、明和火災、都下焦土、雷門列肆、北里之倡、盤燭物傘、上於大提、吾輩亦焚巢高厦千間、盡爲烏有、方是之時、大士獨立、衆人救之、而得出焉、顧其爲性、非愚則癡、雖然大士其有靈乎、天新雨、反風滅、火梁、有靈也非痴也、上古有三漁夫、居於淺草之河濱、魚網之設、佛則離之、魚蝦之求、得斯大悲、今大士是也、是大士雖靈乎、殆無異於溺屍也、何尊之有、其荒唐如此、而其得賞錢、不及吉之多也、近於知足者、其容羸而癯、其口多嘲、其譚如炙轂過、

稗史氏曰、奇哉二子、滑稽多智、思周事情、以爲大志不可以滿也、故降以伍於乞丐、濁世不可以居也、故屈辱以養身、多言數窮、故以小術亂人耳目、空言無實、故假形勢開人情竇、降其志而放其言、辱其身而潔其質、可謂遊乎方之外者而已矣、吾幼聞、金龍有志道軒者、能劇談、又有芥子者、能弄丸、今也則亡、蓋數年有二丐者、嗤腐儒居陋巷、而好語經濟、庸僧登高座、而說法、類於俳倡者、有愧於二丐者矣、

〔雍州府志古蹟八〕愛宕郡　悲田寺　古在京師、今在東三條、古施藥院爲救大人之病惱而設之、悲田院爲小兒之藥局、施藥院、悲田院、始不詳在何處、凡小兒有病者、於悲田院而撫養之、其後至乞兒有病者寓、茲藥餌之事無雙而絕、爲大人小兒乞丐之寓居、今專乞人會長居之、惣謂與次郎、常造草鞋爲業而賣之、○中略於本朝、凡每年自臘月二十一日斯徒小草笠上插貫首葉、蒙頭上、又以赤布巾覆面顏、纔出兩眼、四人或六人、入人家庭踊躍、是稱節季候、倭俗臘月謂節季、候一決之辭也、每家告歲終而請米、又自元日至十五日、著笠以白巾覆面、而歌手唱祝語、倚門戶請米錢、是號敲與次郎、又稱鳥追、元民間出自追拂甲嶋鳥之辭者也、又二月八月彼岸、亦攀米囊、入人家請齋、其人同而稱號依時異耳、大凡良賤家每有吉凶、各往其家、高聲請米錢、且飽喫酒食而歸、此徒在門則他乞兒不能鄕其家、故吉凶家皆賞斯人也、

〔賤のをだ巻〕一四月八日には、釋迦の誕生とて、小さき盥へ茶を入、中に釋迦の誕生のすがたを建、屋根は色々の色紙などにてこしらへ、卯花などを付、ものもらひの坊主が戶々家々をもち步行たり、屋敷へも入たり、一錢二錢ヅヽの散錢を皆上たり、又正月十六日、七月十六日は、焰魔王の形をこしらへ、右のごとく家々を持步行て錢を貰ひたり、又山猫廻しといふもの有て、奉加坊主の首へかくる樣なる箱を胸へかけ、其箱の中なえも知らぬ獸を出して、子どもに見せ、山猫廻しとて步行たり、又願人坊主に一人おもしろきものありけり、大なる鐵鉢をたゝいて、お釋迦うひと高らかに呼て、市中を往來し、手の內をもらひたり、小男なれ共能男付にて、ひれ有て色も白く、まかも柔和なり、年は五十計にも見えたりしが、あごの髭をまびきぬき立て長くのばし、油を付て左右へかきわけ、小びんの上迄撫上ゲて、角のごとく兩方へそろへて切たり、眞黑にして見事なる髭なりけり、島帽子の上下を著て、小ぎれいなる草履取をつれて、愛宕下を鈴ふりて、中臣の祓をよみて步行たり、(尤太刀拵の大小をさしたり)長屋の窓下などを、一錢の手の內をもらひて、少しもわろびれ

乞食從平人制

ず、立どまりて鈴をふりて、中臣のはらへをよみたり、草履取は側にうづくまり居る、興ありておもしろきことなり、名をば大野大隅と云たり、今はさ樣の人もなし、人情のいやしく成たるか、又さかしく成たるか、

〔蜘蛛の糸卷〕乞食鐘馗に扮出す

此比非人一人は、七つ梅の酒樽の菰を著、鬼の面をかぶり、（田沼の紋所七つ梅）一人は、劍菱の菰に、鐘馗の面、兩手に銀紙張りたる劍を持ち、鬼を追ひまはし、稿に佐野の眞似をなして街上をかけめぐり、門門に錢を乞ふ、よき案じなりとて、門毎に錢をあたふ、是余（○京山）が見たる所なり、

〔閭里歲時記〕十二月二十日より後、乞人（コヂキ）ども、絳き手拭にて半面を覆ひ、又絳綿布にて膝を蔽ひ、薄き編笠を著て、いろ〳〵の祝辭をうたひ舞ありく、其さま殊にいそがはし、これをせきぞろと名づく、都鄙ともにある事也、節季に候へば、來る年の麾（サイハイ）と、又年の終まで事なくおくり來しを祝する意なるべし、

〔賤者考〕鰥寡孤獨の世にありへがたきもの、親族あるはそれよりやしなひなきは、五保よりもたすくる昔の法なり、さてもありにくきは、悲田院に入りて、はつかに命を存す、病あるは施藥院に附する古制あふぐべし、諸國にもそれ〴〵にさぞ有けむ、是ら今の夙村などの基元なるべし、されば皆市外郡界村界にあるにて志るし、是よりおのづから乞食の一種起る、せんかたなくて良民より移る、故に今猶足洗ふとか俗にいひて、平民にかへる法ありとぞ、但乞食にて既に三世を經れば平民となることあたはず、此故にまことの乞食といふは、三世以上にて舊しといへり、父子二世は寓居の意なり、○中略尾張玄界村の乞食は、もと皆國民にて他の浮浪をくはへず、○中略平民窮にせまりてこゝに入たるも、父子二世の間は、また常民にかへる法あり、三世以上に及べば、平民になりがたし、京の雜澀

町は、此父子二世の間と同じ意ながら、居を別にするのみにて、賤の目に至らざるは良法なり、他國にもまねびうつさば貧民に益あるべし、或人いふ、所に制せざれども、いづこも町々のはしつかたは、おのづから小家にて、賤者のみつどへば、同じことなりといへり、按ずるに、大にまからず、世上すべて奢侈にうつる故に、所制なくては、賤者小家といへども分限なく、近隣に競あれば、儉にせんと思ふ者もあたはず、俗にいふ衣服附合これなり、まづ此附合鬪奢を禁ぜずしては行はれず、まして婦女子などは、飲食よりも外飾をせちに欲する者にて、嚴制なくては、夫親といへども、呵責行はれざればなり、

〔松屋筆記 百六〕近江ドロバウ、伊勢コジキ、

俗諺に、近江ドロバウ、伊勢コジキといへりドロバウは盜者の義也、舊本今昔二十九巻三十六語に、伊勢國ハ極キ父母ガ物ヲモ奪取リ、親キ疎キヲモ不云、貴キ賤キモ不簡ズ、互ニ隙ヲ量テ魂ヲ暗マシテ弱キ者ソ持タル物ヲバ不憚ズ奪取テ己ガ貯ト爲ル所也と見ゆ、また伊勢人はひがことしけりさゝ栗の俊にはならで柴にこそなれ、又いせ人はひがことしけり津島よりかひ川ゆけば、□□の原なども、夫木抄に見ゆ、今も輕き神人比丘尼お杉お玉などいへる乞食など、面皮を押拭て物乞さまげに伊勢こじきの諺空からずぞある、

〔松屋筆記 八十三〕乞食

佛者の乞食はもとよりなり、輟耕錄六の巻十四丁ウ鬼賊の條に、道流乞食あり、本朝に神道乞食あり、これにて三道乞食也、近來儒者乞食、歌讀乞食、俳諧乞食、狂歌乞食、武者乞食などかずへつくすべからず、

〔本朝世事談綺 二器用〕烟管

元和元年六月二十八日、天下一統に多波古御停止ありける、そのころ白木屋といふ者、柳原の封疆を通るに、つかれたる乞食の、菰の下にしのびてたばこを呑を見る、渠がおもふは、かくきびしき御停止に、假につきたる者だに、これを捨得ざる事、かほど世の人好むなれば近ほどにゆるやかならん事を考、江戸京大坂の捨れるきせる、其外たばこの器の當時用だゝざるを買求め庫に

納む、はたして程なく此禁弛けり時に右の器物を賣て、大きに利を得て富有と成りて今に榮ふ、

〔雲萍雜志　二〕ひとりの躄を車に載て、十三四歳の子とおぼしきが、綱を肩にかけて曳き、躄が妻とおもふ女の幼子を脊負ひ、六七歳なる子の手を引て、道路に食を乞ぬるを見てある人、予〇柳澤淇園にいへりけるは、かく乞食の分際として、多くの子をまうけ、引つれてよわたりすること、せん方なきものなるべしと笑ふに、予おもへらく、世はさま〲の草の露、うつせばうつるいろ〱なれど、よにある人の親子兄弟夫婦の中にへだてありて、國所を別にして住居する輩にくらべては、たとひ乞食してなりとも、互にむつまじく、此乞食が如くありたきものなり、おもふに車をひける子は孝子なり、子を負し妻は貞婦ともいふべしといへば、その人笑をとゞめぬ、

〔賤者考〕浮浪俗にいふやどなし、又ボンキレなどもいふ、無類子の父祖兄弟にも見放たれて絶籍したる類、輕罪を犯して放逐せられたる者、放蕩磊落にて、みづから逃亡したる者、貧窮にせまりて、密に鄕里を亡命したる者、罪狀發覺せむを恐れて、遠く出るまゝに還らざる類、くさ〲あるべし、たま〱は勾引せられ、幼にして家を志らずなれるも、捨子といふ者の成人したるも有べきか、志かしながらそれらは、本據こそ知らね、人あはれびて何とかなしもすべし、前にいふ類は家系正しきもあらめど、浮浪となりては證なきが如く、證ありても還りがたきほどの者は、好人物なるべき筈はなし、殊に多くの中には、屠者熅房乞食より紛れもすべければ、なべて賤に屬すべし、此類雇作奴僕となるもあるべし、たゞちに乞食非人となるもあるべし、鉢ひらき願人僧その餘、藝あるは、それ〲の者ともなるべく、不定の身なれば、中々に支配する首もなきが如し、戲場がゝり、觀物師の雜役、驛路の雲助といふ者、これらは其驛々に長ありて事をとるなり、法にそむけば、いづれの驛にもゐる事を禁ず、いづれにも生活せんとすれば、その會長ありて法をとる、それらにつかじとすれば、たゞちに乞食する他なければ次條とひとし、

〔嬉遊笑覧十一乞士〕宿なし坊を木葉坊と云へり、柴花鳴木辻鴨川に乞食坊あり、此坊主世にある時、あはぬ女郎一人もなし、その善悪をいふことうるさく、いやがりて一文ヅヽやりて、いひやませけるに、次第に奢り付て、わる口いひやみ、貫直あげをして、後は三文ヅヽ、毎ばん取ければ、此處のあげ錢八十五匁と、外に三文は木葉坊主が取と大笑になりぬ、

〔松屋筆記百六〕人を罵て乞食といふ

俗に人を罵て乞食といふは、古くよりの事也、舊本今昔物語廿八卷廿話に、内供大キニ嗔テ、紙ヲ取テ、頭面ヲ懸タル粥ヲ巾(ノゴヒ)ッヽ、己ハ極カリケル心無シノ乞匂カナ云々、乞匂はカタヰと訓て乞食の事也、

〔嬉遊笑覧十一乞士〕乞食の部類に、乞胸と呼ものあり、辻ばなし、辻講釋、其外編笠を著て物乞ふもの、みな乞胸に屬す、其者を仁太夫といふ、その由緒書といふ物あり、その始め上がた浪人と見えて、江戸に下り、説經祭文を三線に合せ、往來の路、次に蓆を敷、合力を請たるが、いつの頃にか、處々の明地寺社の境内にて、葭簀を張、木戸錢を取、小みせ物、綾取、猿若、江戸萬歳辻放下、からくり、淨るり、説經講釋、物よみ等、支配いたすべき御ゆるしを蒙りしとなん、おもふに慶安中に、武士浪人御府内に住居いたすまじき御定めありし頃にもや有らむ、非人頭善七より、毎年節季に、鳥追の編笠幾つにて何程とか定りて、役錢と號し、仁太夫へ贈る事となむ、これをおもふに、京師の與次郎にひとしきものなり、乞胸といふは、胸たゝきの名に似つかはしけれど、是はもと乞旨などの意にや、

〔乞胸頭家傳〕一乞胸頭山本仁太夫

右は明和五子年中より町内に罷在候、起立之儀、往古長島礒右衞門と申浪人有之、當時は小傳マ町と唱、其砌は藥師堂前と相唱へ候場所に罷在、所々寺社境内幷明地等にて草芝居、其外種々見世物等仕渡世送り候處、追々同樣之者差加、大勢に相成、礒右衞門儀、世話致し罷在候處、非人頭善

七手下之者仕來候家業に有之、右之者ども迷惑致し候者にて差留候故、仕馴候儀に付、右家業體に拘り候儀は、自今善七支配請可申積、對談之上、慶安之度、其段中御番所石谷將監様御勤役之節、磯右衛門善七兩人より御願申上、則磯右衛門儀乞胸頭に相成、町人にて右體家業致候者は、又是家業計、磯右衛門支配仕、其節より鑑札相渡し、壹人前四十八文づゝ毎月請取、淺草溜近邊出火之節は、囚人爲警固人數廿人宛召連相詰來候、尤寺社境內其外明地辻々へ罷出家業仕候、何國より參候哉程と相知不申候ものも可有之候間、右爲取締家業筋支配に被仰付候儀に御座候て、往古より家業場所相廻り、諸事心付來、當仁太夫迄十一代相續仕候、尤往古之書留等、度々類燒にて燒失仕、委敷儀は相知不申候へども、前々より町宅仕、家業計善七支配請來申候、且往古より仕來候家業左之通、

綾取　猿若　江戸萬歳　辻放下　操り　淨瑠理　說教　物眞似　仕形能　物讀　講釋

辻勸進

右之外にても所々寺社境內、幷明地葭簀張水茶屋之內にて見世物仕、木戸錢或は藝等仕、總て見物人より錢申請候者は、往古仁太夫より支配に有之、尤古來より致來候家業之內、見古し候品は家業に相成不申候間、時々品を替渡世仕候儀の由、勿論寺社境內にて草芝居之儀は、正德四年中、寺社御奉行石川出羽守様御勤役之節、御停止被仰付候に付、夫より配下之者ども編笠冠り、諸淨瑠理三味線を彈じ、其外種々藝等仕、門々へ立、錢を申請家業仕來候、且又所々寺社境內、幷町々へ仁太夫手下之者日々相廻し、乞胸同様之家業致し候もの見當り候得ば、鑑札之有無相尋、鑑札無之家業筋乞胸支配之旨不辨ば、右家業乞胸支配筋之旨得と申聞、願成者請人に取、御法度之儀は不及申、仲間作法可爲相守旨、一札取、支配に仕來候、尤乞胸支配筋之儀、乍存家業內證にて致、鑑札無之者は道具取之、相侘候上は其品相返し、彌家業致候得ば鑑札等相渡、支配に致定法之由、尤仲

ヶ間入之者有之候節は、其度々善七方へ相屆候由、右仲間家業相止め候節は、是又相屆け鑑札差戻し、勝手次第仲間相除申候、此儀家業計之支配に有之候得ば、仁太夫儀も同樣、家業相止め候得ば、善七方引合候儀無之候、全く家業仕候內計り、支配請候儀に有之、家業筋之儀に付、諸御役所より御呼出し之節は、善七方同道にて罷出申候、身分之儀に付、御呼出し之節は、町役人差添候て罷出候、乞胸家業の儀は、善七支配請候得ども、仁太夫始、仲ヶ間之者ども、元來町人に紛無御座候間、町法町並相勤來申候、浪人共等、古主より歸參相願候內、渡世之乞胸に相成候者、脇差等帶し家業に罷出候處、安永巳年〇二年三月中、町御奉行牧野大隅守樣御勤役之節、乞胸之者共、帶刀は不及申、脇指儘之者、家業先へ一切無用可仕旨被仰渡、其節より支配一統、脇指帶之もの堅差留申候、乞胸住所之儀は、所々有之申候、夜分門付致候者、又素人にても、淨瑠理を語り、錢を乞候者は、鑑札相渡、毎月四十八文宛請取支配仕候、日々袖乞に罷出候者之儀は、前書家業付に有之候、辻勸進に有之、無藝成もの、又は妻子共之稼にて、非人同樣之渡世に候得共、身分は町人とは譯違ひ無く御座候、〔市中取締類集九ノ百二十二〕下谷山崎町貳丁目、外五ヶ所木賃宿致候者共、凡名前、其外取調左ニ申上候、俗ニぐれ宿共申候、

下谷山崎町貳丁目

此者共方ニ、當時乞胸家業之者、百人餘も止宿罷在候由、

乞胸頭　仁太夫

同手代　京右衛門

同　善右衛門

同　藤吉

同　儀兵衛

同　彌助

同　同町源兵衛店　卯兵衛

四ッ谷天龍寺門前

同所、拾六七人程茂止宿罷在候由、

同　安兵衛店　權次郎

深川海邊大工町里俗中道

同所、貳拾壹人程茂止宿罷在候由、

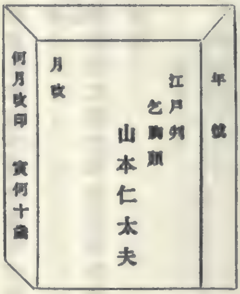
同　中藏店　昌藏

右者、乞胸木賃宿と唱候分、前書之通、下谷山崎町、四ッ谷天龍寺門前、深川海邊大工町、都合御府内ニ三ヶ所ニ而、軒數凡九軒程有之、乞胸頭仁太夫ゟ、乞胸家業之者江燒印札、壹人分錢貳百文宛受取相渡置、右之者共ヲ仁太夫宅、并同人手代宅江止宿爲致置、乞胸家業之者ゟ、木錢米等受取不申、家根代と唱、一日壹人分廿四文宛請取候處、御趣意に付、近來廿貳文に引下ゲ請取候由、尤右宿ゟ一日分薪少々番茶見計止宿之者江相渡、外ニ蒲團借受候者、一日錢拾六文、又者廿四文位宛置主方江受取候由、其外乞胸札料と唱、毎月壹人ニ付四拾八文宛仁太夫方江受取長く逗留致、三ヶ年五ヶ年、其外年來止宿致、右場所々ニ罷在候者茂有之由尤右乞胸家業之者而已止宿爲致候樣ニ而者、仁太夫并手代共引合不申哉ニ而、いつとなく長旅之六十六部、千ヶ寺順禮、金比羅參り、伊勢參、并袖乞之類、旅人宿江止宿難致程之者共者、乞胸方江止宿相頼候得者、是又一日壹人分廿貳文宛ニ而止宿爲致候由、此者共茂壹ヶ年貳ヶ年茂止宿罷在、右宿ゟ市中江日々修行、又者物貰ひニ罷出、自然同居人之體ニ相成居候向多分有之、右故俗ニぐれ宿と相唱申候、然ル處、今般無宿之者御召捕ニ相成、其上去寅十一月中、寺社御奉行所ゟ、願ン人共江被仰渡有之ニ付、其場所々々町役人共ゟ心付、全乞胸家業之者は差置申間敷旨、乞胸頭江申談候由ニ而、去十二月中物貰ひ共外紛敷者は宿拂致候趣ニ御座候。○中略

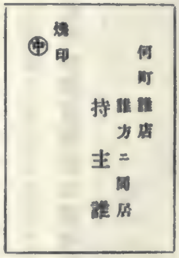
右は其場所々取調見込之處率ニ申上候、以上、

卯十四 天保 正月

表



裏



下ゲ札

（市中取締類集九ノ百二十二）卯十四 天保 十月廿五日出ス

淺草龍光寺門前名主之儀ニ付、申上候書付

市中取締懸

乞胸職之もの、淺草龍光寺門前江一纏ニ住居仕候樣被仰渡、一統引移候處、同所者名主無之、月行事持之場所ニ付、乞胸頭仁太夫儀、元地下谷山崎町名主藤七支配受申度旨願出、先達而町年寄并取締懸名主共江差障有無糺方被仰渡候處、差支之儀も無之趣、何れも申立候付、遠江守殿御勤役中、右藤七江當分御預支配ニ可被仰付積、御相談も相濟候處、内實龍光寺并町役人共等、彼是不伏之趣ニ而折合不宜、差障も可申立取沙汰致し候旨ニ而、取締懸名主共ゟ猶申出候付、町年寄江再應御下ゲ有之、同所ゟ差出候書面御渡有之、得と取調可申上旨被仰渡候間、尙又廻り方江探索之儀申付相糺候處、別紙之通ニ有之、就而者同人御預支配之儀者、孰ニも不穩趣ニ相聞、追而支配離シ等申出候樣ニ而者、却而取締ニも相拘り候儀ニ付、同人儀者其儘不被及御沙汰、先ヅ當分最寄

貳拾壹番組名主共江、組合持ニ被仰渡、爲取扱候方取締も相付可然哉ニ奉存候、依之別紙書類相添、此段申上候、以上、

卯十月　　五名

卯十月廿五日出ス、同十一月十九日挨拶來ル、（天保十四年）

内匠頭殿　　鳥居甲斐守

乞胸渡世之もの、淺草龍光寺門前町屋江爲引移候儀、先達而越前守殿江伺濟之上申渡候處、右場所者名主無之、月行事持ニ付、取締ニも拘り候間、以來支配名主申付候積、當時取調中ニ有之、然處乞胸頭仁太夫ゟ是迄支配受候下谷山崎町名主藤七江附支配之儀願出候付、年寄共江申付、差障有無爲相糺候處、差支之儀も無之趣ニ付、當分預支配ニも可申渡積、御先役江相談相濟候處、左候而者、龍光寺其外之もの、內實不伏之趣ニ付、藤七江預支配之儀者不及沙汰、御存寄も無之候はゝ、廿一番組名主共江組合持ニ可申渡哉と存候、依之別紙書類相添、御相談およひ候、

卯十月

（下ヶ札）御書面之趣致承知候、拙者儀何之存寄無御座候、依之被遣候別紙書類一纒返却、此段及御挨拶候、

卯十一月　　鍋島內匠頭

天保十四卯年十二月

向方相談廻

木挽町釆女ヶ原女子踊之儀ニ付隠密廻り申上候趣調

木挽町采女ヶ原ニ而女子踊致候儀申上候書付

朱書 卯十二月十六日來ル　隱密廻

當御役所御掛、木挽町采女ヶ原明地葭簀張ニ而、此節豊年踊與唱、素人共女子之踊相始候ニ付、掛名主共及承差止メ候由、併右之者共者、乞胸頭仁太夫ゟ鑑札受所持罷在候ニ付、木戸銭を取不申、大目ニ見遣候而可然哉不聞ニ付、私共迄掛名主七左衛門、佐兵衛相伺候處、右様十四五歳之女子衣類等者不目立由候得共、かつらを懸ヶ化粧致し候由、右者両國橋東西廣小路水防受負助成地葭簀張ニ而、女子香具芝居之儀も、今般御改革ニ付、差留相成候上、旁更ニ相止メ候様、名主共江可申聞筋ニ存候、依之乞胸頭仁太夫差出候書面共二通相添、此段申上候、以上、

卯十二月　隱密廻

下ヶ札
本文采女ヶ原之儀、享保三戌年中、馬場并餘地共、木挽町四町目月行事江御預ヶ相成候處、猶又右餘地之内江葭簀張仕、近邊足弱老人壹之内楊茶為商度旨、寛政三亥年中、初鹿野河内守殿町奉行之節願出候處、願之通被仰付、尤地代等受取申間敷旨被仰付、其後十ヶ年目、毎年延相願候場所内ニ御座候、

ヒレ付
書面乞胸頭ゟ鑑札申請候上者、両國廣小路ニ而狂言致來、去寅年中引拂被仰付候旅役者共とは、差別も可有之哉と存候得共、一體采女ヶ原之儀者、近邊老人共等ニ、楊茶為商度旨を以、年限を定願済相成候場所之儀ニ而、趣意も違、殊ニ女子踊之儀ニも有之候間、自然猥ヶ間敷儀等出來可致哉も難計、風俗ニも拘り候儀ニ付、右之趣を以、更ニ相止候様可被仰渡旨、御挨拶有之候方、可然哉

願人坊

ニ奉存候、

卯（天保十四年）十二月

市中取締懸

〔嬉遊笑覧十乞士〕又法師の乞食に、願人といふものを、一説におもへらく、訴訟の事ありて、いづくよりか江戸に来り、その事引ゝろひて久しくなり、貯へ盡て、そのものどもかゝる者となりぬといへるは非なり、もとより乞食にて、代待、代垢離かきなどして有しもの故、願人とはいふなり、万治元年戊戌八月十五日、町宅之出家山伏願人坊主名前帳面に仕立、町年寄へ可差出之、尤旅人之出家は、御番所へ可申上旨被仰渡候、慶安五年壬辰二月三日、江戸町觸、南方出家百廿二人之内、三人家持山伏、百八拾三人内、拾三人家持、願人十三人、道心者十四人、行人五人、五口合三百三十七人と有、家持の山伏、多くはむかし華美なる粧ひして、峯入の供するを名聞として答られたる者など有り、寛文二年寅九月十八日、町觸、出家山伏行人願人町屋に宿借候はゞ、本寺より弟子に無紛段證文を取、其上請人を立裏店に差置可申候云々、洛陽集、寒垢離があびける水に月もなし、（有知）俳度曲（享保七年刻）正尊を楓のかげや誓文ばらひ村しぐれ、（貫山）これすた〳〵坊主なり、（願人坊主裸にて鉢巻し、しめ縄のやうにわらを腰にさげ、手に扇を開き、錫杖をもてり、）古き畫雙六に見えたり、（今も手遊に、此人形残りたり、）京師に正尊の祠あり誓文携といひて、市人これに詣、この願人はその代参の意とみゆ、後にはわけもなく、すた〳〵坊主のくる時は世中よいと申などいひて踊れりとぞ、竹丈點冠付、浮世かな貧僧すた〳〵口の世話、不角が甕械輪、早足に高聲あやし冬の空、はだか代待自己の追剃、其後は寒中行衣を著、頭を白布にてかつら巻にし、鐸を振て、細かき繪紙を切たるを蒔ちらしながらありければ、童部多く付てこれを拾へり、（蒔けといふを、子供らまかしよ〳〵といふ故、これが名をまかしよといへりとぞ、）この繪を蒔しは、そのまへに天狗の面を著たる社人、天王様の守とて小札をまきたり、（此事事跡考に具さに出）件のまかしよも、寛政ごろよりなくなりて、榛田稲荷の代参となり、住吉踊など〻なれり、

〔統親聽草二第十〕願人坊主由來幷掟目

願人名目之儀者、源義經公奥州下向之節、拙者〔〇鞍馬寺大藏院〕坊人之内合法虎之巻傳授仕候者共、本尊多門天江心願有御供仕候砌、武運を被爲開候故、源公願人と被稱候ニ付、拙寺にて坊人を願人と申候古實にて御座候、所謂坊人と申者、諸國徘徊仕、加持祈禱等を仕、札守秘符を勸め候俗法師にて御座候、只今に至、一山にても餘院にても多く有之候、則願人も許狀者一役にて御座候、但圓光院方願人も、古來は拙寺より勝泉院と申江分り置候處、元祿三年より圓光院支配に相成、其砌御奉行所江以代僧御屆申上候、往古者拙者許狀を取組頭等國々多有之候、一國切之支配に申付候儀にて候所、元龜年中以來、貧寺に相成候付、本寺より改も不致猥になり、修驗方江隨候樣ニ成行候、御當地多く支配下有之儀は、慶長年中以來之儀にて、組之内仁體を撰、觸頭役に申付置關八州之願人等、年々組頭共相廻り改置、從御公儀御尋物等被仰付候節は、關八州江は觸狀にて申付、餘國江は御當地より人數を差出、數度御用をも相勤來候、此度吟味仕候得者、近來は關八州も猥に相成候、

一大坂表組頭之者有之、只今に百計居住仕候、彼地にて開帳勸化等之改被仰付候儀にて御座候、

一駿河府中にても圓光院拙者支配之願人少居住仕候、其外諸國ニも無本寺の願人等多く有之候旨相聞江候、右之趣ニ而修驗不似寄候ものは、何方にても願人と申候樣ニ成行候、

右從御尋覺悟仕候趣、書付奉差上候、以上、

延享元甲子年十月　　鞍馬寺　大藏院

圓光院下知狀

鞍馬寺圓光院門末之徒、如先規專守公儀之御掟式、不可違背法儀及本山之命令、勿論可停止俗儀權家巡行、諸勸化等質素可相勤者也、若於違犯輩者、如古法門中遂可令擯罰之條、下知如件、

年號月日　　　圓光院書印

寶泉坊組中江

同許狀

一鞍馬寺檀那廻之事、任先例申付候條、其働可爲肝要事、

一御公儀御法度之趣、謹而相守可申事、

一法中之行儀等、堅固相務可申事、

右之條々於違犯之輩者、可爲越度者也、

年號月日　　　圓光院實印書印

誰下誰江

大藏院判物

一鞍馬寺檀那廻之事、任先例申付候條、諸事可爲神妙事、

一公儀御法度之趣、謹而可相守事、

一掟書を以申付置候通、法中之作法等、急度可相守事、

右條々於違背者、可爲越度者也、

年號月日　　　大藏院書判實名判

持主誰

乍恐以書付奉申上候

今度御尋被遊候、配下願人修行勸進左ニ申上候、

一天台宗祈願加持札守秘符相勸候事

一毘沙門天江願結願解代參之事

一日踊法樂之事

一御國八卦卜筮之事

一諸經修行之事

一荒神釜〆勸請之事

一水行之事

一灌佛會指出候事

一閻王差出候事

一淡島法樂勸進之事

一施餓鬼差出候事

一大山不動江梵天相勤候事

一毘沙門天八體佛御影配勸進之事

右者、先ニ御奉行所ゟ御尋ニ付書上置候、以上、

寛政二戌年九月、松平紀伊守様ゟ御尋ニ付御答申上候、

一願人組人並死失等之節取計之事

此儀、弟子取仕候義は、僧侶共願人弟子ニ相成度段申來、願人は遠近共取方相糺則一札取置弟子仕候趣、摠僧共支配下ゟ書付を以願出候得者、觸下役僧當人糺之上、配下人別差加、鑑札袈裟相成申候、是は願人職分仕候、尤修行勸進致馴不申候內、ロ々雜用賄致し、時物一衣著を古參之者江申付、同道にて爲引廻、職分馴候迄世話爲仕候事、

本寺許狀取候者相煩候節者、書付を以屆出候、若病死仕候者、當番組頭ゟ目付當番行事見分之上、菩提所江葬申付候、尤重立候役人より本寺許狀取候者迄、香奠相渡申候、平願人師匠賄ニ御

座候見分同樣之事、

一配下之者不埒之筋有之節取計之事

此儀、觸下宗法相背不埒成者は、其筋書付を以、拙僧共江願出候得者、於觸頭宅仲間總會合之上吟味致、當人不埒之筋相極り候得者、古來ゟ擯出申付、並山伏行人職分差構、御府内徘徊不仕樣申渡一札取之、當人願ニより品川千住板橋江送出し差拂申候、此段寺社御奉行所御月番江御屆申上候古格ニ御座候、

一愛宕多賀等も願人と唱候者有之由、是又御當地ニ罷出居候也、

此儀、愛宕多賀等坊人と唱候而、願人と唱不申候由承り申候所、源義經公鞍馬入山之砌、坊人之內、虎之卷傳授仕候者御供仕候而、御運被爲開候付、源公願人と被稱候、是より鞍馬坊人を願人と申候、愛宕多賀坊人御當地ニ罷出居候哉存不申候、

一願人組人又は本寺觸頭等江附屆之事

此儀、古來より本寺禮儀差出候事、觸頭江役料差出候事、組人ニ出錢等無之事、

右就御尋奉書上候　兩觸頭名前

〔享保集成絲綸錄四十一〕享保八卯年六月

覺

一願人作法之儀、元祿五申年、先寺社奉行於內寄合願人共仲間請不仕、外之僞成者請ニ立可申旨停止申付置候、然るに此度も不埒有之ニ付、元祿年中申渡候趣相尋候之處、其段書留も無之旨申候、彌以右申渡候通り、急度相守可申候、

一總而願人頭取支配下江之申付、疎略之樣ニ相聞候間、向後別而入念可申候、

一願人之儀は、先々ニ而不埒も有之、又は無宿抔願人ニ紛候儀も有之樣ニ相聞候間、自今願人頭

共より、其配下之願人江銘々札相渡置、紛敷儀無之様ニ、急度可申付候、

右之趣、堅相守可申者也、

六月

〔市中取締類集九ノ百二十二〕

下谷山崎町貳丁目源兵衛店　鞍馬大蔵院末願人寮坊主と唱候もの　立圓　外六軒

橋本町治兵衛店　同末願人同断　圓鏡　外廿七軒

同町吉左衛門店　同圓光院配下願人触頭　谷之坊　外十七軒

四谷天龍寺門前善兵衛店　鞍馬大蔵院末願人寮坊主唱者　念眞　外壹軒

元鮫河橋北町重次郎店　同末願人同断　願山　外壹軒

芝新網町新兵衛店　同大蔵院末願人同断　教道　外三軒

同町卯兵衛店　同圓光院末願人同断　明海　外廿軒

右者願ン人木賃宿之分ニ而、前書之通、橋本町、山崎町、芝新網町、四谷天龍寺門前、元鮫ガ橋北町、都御府内ニ五ヶ所有之、木賃宿致候願ン人共、軒數凡八拾三軒程有之、右願ン人を寮。坊。主。と相唱、願

ン人之所業而已ニ而者、暮シ方出來兼候ニ付、先年ゟ長旅六十六部、千ヶ寺順禮、金比羅參り、伊勢參り、物貰ひ之類、其外何稼ニ不拘、右寮坊主方江便り參候分ヲ止宿爲致、一夜泊り錢壹人ニ付男女共、是迄廿四文宛受取來候處、是又御趣意ニ付、廿貳文宛ニ引下ゲ受取候由、尤小兒者木賃受取不申由、疊壹疊と定、膳碗飯鉢人數ニ應じ貸渡、右損料者取り不申、夜分蒲團望候者江者、壹枚ニ付蒲團之善惡ニ寄拾文、又者拾六文位宛取之貸遣シ候由、且又下部屋ニ壁築壹ッ、勝手道具一式渡置、銘々修行又者袖乞等致し、貰ひ錢を以、米鹽噌薪共勝手ニ買調、銘々煮焚致、食事仕候趣ニ御座候、夜分行燈之儀者、掛行燈ニ而、下部屋ニ壹ッ宛、右燈心水油共宿ゟ差出、代錢者取不申、毎朝茶ヲ煮、宿ゟ差出候趣ニ御座候、泊り之者一夜限り之者ハ有之、又者長く逗留致者ハ有之、勿論長く差置候者は、諸人を取候由ニ御座候、右體何稼ニ不拘、寮坊主宅江止宿爲致候ニ付、止宿之人數總體ニ而、凡八九百人も有之由ニ而、俗ニぐれ宿と相唱申候、然ル處、去寅十一月中、寺社御奉行阿部伊勢守様ゟ、願ン人觸頭之者江、是迄願ン人修行、其外不取締ニ付、以來取締方被仰渡、其上願ン人之方ニ俗人差置候儀、御尋有之候處、觸頭ゟ俗人者差置不申由申立候ニ付、其後俄ニ俗人之同居ヲ相斷候ニ付俗ニ而止宿人之分者立去、又者同店內江新ニ店持ニ相成候向も有之由ニ御座候、

一右木賃宿之儀者、乞胸木賃宿、願ン人木賃宿と二タ廉ニ相成居、起立は相分り不申候得共、貳拾四五ヶ年程以前迄者、馬喰町旅人宿ニ而ハ、並旅籠之外、木賃銀九分と、見世先江張出置、順禮、其外長旅ニ而並旅籠錢拂兼候者も差留來候處、追々木賃錢ニ而泊り候者少く相成、壹人貳人ニ而者、旅籠屋ニ而引合兼候趣ニ而、近來は木賃と申張出し致不申、いつとなく木賃宿と申儀相止メ候由、長旅之順禮六部等者、九分之木賃者差出兼、乞胸幷願ン人共之方江便り參り止宿致來候處、右之方者前書之通、木賃ハ安く候間、其後者旅人宿之方江者泊人無之、乞胸幷願ン人之方江而已止宿之者多く候に付、乞胸幷願ン人寮坊主と唱候者ハ、右木賃宿ヲ家業ニ致罷在候處、追々増長致、

烏追

木賃宿江泊り候者者、種々成者ヲ引入レ止宿爲致不取締之處、去寅十一月中寺社方ゟ願人ヘ被仰渡有之候後者、乞胸之方者、全乞胸家業致候者而巳止宿爲致、無商賣、又者紛敷者者差置不申由、并願ン人之方者俗人者聊差置不申、全願ン人而巳住居罷在候趣ニ者申立有之候得共、内實者今以乞胸并願ン人木賃宿共、種々成者ヲ止宿爲致候樣子ニ御座候、依之此上嚴重取締方被仰渡御座候はゞ、向後木賃宿と唱候向相止、御取締茂相付可申哉と者奉存候得共、左候而者全長旅ニ而、御府内江國々ゟ罷出候六部、千ヶ寺順禮金比羅參り、伊勢參り等之類ニ而、旅人宿江止宿難致者者、御府内ニ木賃宿無之候而者差支可申哉ニ付、猥ニ不相成樣、右六ヶ所江木賃宿ヲ相建、非人者勿論、紛敷者者堅く止宿差留、國々ゟ長旅ニ而罷出候託鉢修行、又者袖乞等致實ニ一夜之宿ニ差支候者者、是迄之木賃ヲ取、止宿爲致、決而長く逗留不爲致樣、乞胸頭江嚴敷被仰渡御座候はゞ、御取締茂相付、尤一宿爲致候者共ヲ、何月幾日止宿と申儀ヲ明細ニ帳面ニ記し置、毎月兩度宛、其支配名主共方ニ而、右帳面ヲ改候樣致候はゞ、不正之者共、猥ニ止宿いたし候儀者無御座哉と奉存候、且願ン人之儀者、舊冬寺社御奉行所ゟ被仰渡茂御座候事故、以來木賃之儀者堅く相止、全市中修行專分ニ致、僧侶之體ヲ不失樣致候はゞ、不取締之儀無御座哉と奉存候、

右者、其場所々々取調、見込之處奉申上候、以上、

卯天保十四年正月

〔本朝世事談綺四時〕鳥追

鄙歌の遺風なり、相傳ふ、延文のころ、三河國に長者あり、數千町の田圃を持、土民にして土民ならす、武士にあつて武士ならす、常に貴人高位にまじはり、三槐九棘に因あつて、富て貴き人也、代々時宗をとうとみ、遊行上人を仰ぐ、一とせ正月、遊行上人此第宅に舍せり、村の土人、歳首禮を長者の家になす、その中にさゝらをすりて、うたふもの數人あり、いかなる者ぞと上人の尋られしに、

鳥追といふものなりとぞ、蓋鳥追は長者の田園の鳥を追ふばかりの勤にて、妻子を養ふ者ども、長者の跡を歌にうたひ、年のはじめにことぶきを伸るなり、唄の發端に、せぢよやまんぢよの鳥追と云は、千代も万代も殿の田の鳥を追べし也、お長者のみうちへおとするはたれあろ、右大臣に左大臣、關白殿が鳥追、御内證へおとづるゝ人は、高位高官、扨は鳥を追ふわれ〳〵かとなり、にしだもよせんでよひがしだもよせんでよは、東西に八千町の田を持てる事を云り、

〔嬉遊笑覽五歌舞〕鳥追は、もとより一種かゝるもの有しにあらず、千秋万歳が、士農工商の家に行、それぞれの職分に付て、祝語をうたひし其内にて、田家のためにせしものなり、今江戸の鳥追は、非人の女房娘にて、常には淨るりなどをうたひ、三絃ひきて來る故、俗に女大夫と呼ッ、あるまじき名づけやうなり、この女共、春毎に衣服は木綿なれども、新らしきを着て、三四人づゝ一組となり、三絃胡弓ひきつれて、いとかしましく唄ひ來る、いつの程よりしかるにか、雍州府志悲田院の條に、今專乞人舍長居之、總謂與次郎、又自元日至十五日、著笠以白巾覆面、而敲手唱祝語、倚門戸請米錢、是號敲與二郎、又稱鳥追、元民間出自追拂田疇鳥之辭者也といひ、訓蒙圖彙には、たゝきとありて、注に、鳥追と云り、何れもかくあれば、敲といふが本名と聞ゆ、其圖は、二人にて掌を扇にてたゝくさまなり、江戸の鳥追とは、いたく異なり、古き鳥追のうたひものを、浪速人の注したるあり、青陽唱和といふ、多田義俊が鳥追の歌は、殿うつり物語に似たりといへるによりて、其事の似かよふをしるせるよし、注の内にみゆ、されど殿うつりは、この注者も予いまだみざる所、多田氏の僅に所々書置るを見るのみといへり、殿うつりは、枕草紙に、物がたりは、住吉、うつぼ、殿うつりとあれば、いとふるき物語なり、其是非はしばらく置て、先この注者の解しかねたるところ、ひとつふたついはむ、しらげもよンにあらふ、注よにとはよねなりニと子と通ずといへるは非なり、しらげは精米なり、そのうへに米といふこといかゞなり、是はよく洗ふと云事なり、よきをよといふは、

万葉に吉事をよごと、いへり、はぬるは語勢なり、まちもさかえさぶらふさかいてが玄やうには、〈注〉殿も町も榮ふる故に、鳥追も來るよし歟、玄かれども、玄やうにはといへる古語未ㇾ詳といへり、玄やうといふこと、此外にも二處あれども、いづれも注なし、こゝに至りて、始てかくいへるは、注者解しがたかりしと見ゆ、玄やうは定にて、さあるべき事をいふなり、

〔鹽尻十〕一万歳は一宅の祝辭、鳥追は田事の祝ひ、春駒は蠶桑の壽き也、衣食住の三ッを重しとして、故ヽに年の始に是をことぶき、與を催し侍るによて、食を得て、命を保ち、衣を以て寒をふせぎ、家に居て雨露におかされずとて、人生を養ふ故也、王政も是を始めてぞ、孝悌忠信を敎へ給ふ、中臣祓に衣食を穢すを、天津罪とせしも、深き意ありとかや、

〔賤者考〕狙公(さるまはし)も諸國にあり、本國〈〇紀伊〉には那賀郡貴志莊より出て、府下〈〇和歌山〉に來り、正月は藩中などを經歷す、其はじめ甚兵衞といふ者名高くて、今も貴志の甚兵衞猿といへり、その住所の邊を猿垣内といふ、同郡上田井村にもあり、是らも良民よりは婚をなさず、此類にて犬を踊らせ、山雀を使役し、鸚鵡香呼鳥鳩諸鳥を役し、又鼠を使役して札を啣せて、その札を賣りて藥を配りなどするもあり、〈俗に長吉鼠などいふ〉是ら前のヤシのするもあり、觀物師の屬なるもあるべし、

〔德川禁令考〈五十降第者〉〕年號闕戌九月五日

猿飼長太夫門太夫身分職業之儀ニ付、穢多頭彈左衞門差出候書付、

一私支配手下猿飼共身分格式都〈而〉取扱方之儀御尋ニ付、左ニ奉ㇾ申上候、

一猿飼共儀ハ、從ㇾ往古私支配仕、園内地面ニ差置、猿飼頭長太夫門太夫兩人有ㇾ之、其外役人と唱候者有ㇾ之、右長太夫門太夫始頭立候者ハ、西御丸下御厩ハ不ㇾ及ㇾ申、總御厩〈井〉諸御屋舗樣方〈井〉罷出、御馬之御祈念仕、又ハ猿を舞せ御鳥目等頂戴仕、其外手下猿飼共ハ町家を猿引歩行、錢米等貰請候儀ニ候得バ、先ハ非人ニ類し候儀と乍ㇾ恐奉ㇾ存候、乍ㇾ然非人とハ格別ニ〈而〉、頭取候者ハ脇差

胸叩

を帶、袴も著用仕、手下猿飼共儀も非人同樣、斬髮等仕候儀ハ決而無御座候、私方取扱も非人同樣ニハ不仕、乍去長吏同樣ニも取扱不申、右兩樣之間ニ取扱來申候、

一天正年中乍恐御入國之砌、御召御馬足痛爲御祈念、猿引御尋有之候節、私先祖彈左衛門儀、猿飼長太夫召連罷出、御祈念相勤候得ハ、御馬全快仕、爲御褒美御鳥目奉頂戴、右爲御引例以、只今每年正月十一日、西御丸下御厩ニ而、御鳥目壹貫五百文宛私江御渡被下置、尙又私より相渡頂戴爲仕、且又先年日光御社參之御時、私先祖彈左衛門儀、猿飼十貳人召連罷出、御泊之御厩ニ而猿之藝御上覽被遊候節、御扶持并御扇子頂戴仕、右御扇子于今長太夫所持仕罷在候、

一在々罷出候猿飼長太夫支配ニハ無御座、頭と申者も無之、國々ニ罷在候私配下長吏共之下知を請罷在、人別帳面每年其所之長吏共方江請取、夫より私方江差出候仕來ニ御座候、扨又於御當地寺社境內猿芝居并猿之見せ物等、素人ニ而仕候節ハ、長太夫方江掛合、同人より私方江相屆候上、相應之助成長太夫方江請取、興行爲致候仕來ニ而、其外遠國私支配外之猿飼、御當地江出、右體之芝居興行仕候節ハ、自分猿飼ニ付町宅難相成、長太夫方江止宿致居、万端同人下知請、是又相應之助成差出稼仕、何れも猿見世、又ハ芝居等仕舞候節ハ、猿長太夫江相渡候致來ニ御座候、

右就御尋、乍恐以書付奉申上候、以上、

戌九月五日　淺草　彈左衛門

〔嬉遊笑覽〕十一上胸たゝき、三十二番職人歌合に、胸たゝきといふ物もらひ有り、頭に編たる頭巾のやうなる物を著、裸にて、腰に餌ふごを附たり、手して胸を扣くによりて、名に負るなり、其歌、宿ごとに春まゐらむとちぎりしは花のためなるむねたゝきかな、判云、春參らむと節季に契りしを、花のためぞと、春おもひまゐらせぬる、胸のうちやさしくこそ侍れとあり、是後世の節季候なり、胸

河原者

た、きといふ名は、後世扣の與次郎といふも似つかはし、與次郎は悲田寺の內に居て、其類のかしらたり、二季の彼岸又所々の祭禮の頃は、たゝきといひて、口ばやなることをいひて、物もらふとなり、又毎年臘月より節季候となり、元日より十五日まで、鳥追となる、これを扣といふといへり、俳諧染糸、たゝきくたびれかへる門前口々にこへど勸進いれずして、

〔塵尻三〕一京都に而河原者と呼は乞食の部類也、是元ト官寺の悲田院より出て、道路を掃除し、死穢を藏なんどせし故、穢多の部也、然るに中世は公方家の雜事にも供せしにや、伊勢守記寛正六年八月、今出川殿夫人產胎衣を東山に納る時、河原者四五輩先行以堀土といへり、產穢納藏の事にもなりしとみへたり、

悲田院は、昔窮民の便なき者を集て、養ひ給ひし官舍也、今は東三條悲田寺と呼て、專ら乞食の住居となりぬ、(則乞食頭たたき與次郎)居て東都の(松右衞門善七)の如し、唐にもかゝる事あるにぞ、

〔貞丈雜記二人品〕一河原者と云ふ事、舊記にあり賤しき人夫雜役の者也、

〔時慶卿記〕慶長十四年六月廿一日、紫宸殿ニハ樂人衆樂ノ道具、舞ノ裝束ヲ風燭候、御所中有掃除、鳥飼衆勤之候、庭ヲハ川原者共掃除、ゴミヲ摘候、

〔松屋筆記五十二〕河原者

對山君遺事乾の卷に、顯宜君は、頓智神速の方世に稀にして、心の及ばざる事のみなり、船手の竹本丹後守方へ御入、終日御遊興の砌能を竹本が大夫に被仰付、是は小春大夫が子にて、天王寺聖德太子の役人、名は小大夫といふ、是に東北を被仰付候へども、此小大夫は河原者なり、囃子は御免被成候へども囃子せず、御慰の遠亂に成けるを御聞被成、いな事を役者どもは申候、東北の囃子を致し候へば、小大夫には東北を舞候へ、兩方面々いたし除にせよと被仰付事濟しなり云々、河原者の事は、四條河原に芝居を立て、そこにて技藝をてらふもの、名なるよし、ものにおほく

番太

見ゆ、

〔賤者考〕諸村に卑役をとる番太といふ者あり、國々にて制も名もかはり有べけれど、まづ乞食丐子のうちなり、若山町（紀伊）には夜番ありて番太なし、名古屋の町には夜番ありて又番子あり、此番子すなはち番太にあたれり、（前にもいふごとく、名古屋の夜番は夜のみ人家の軒下に篝なを篝へて、固な類はまゝあれは、賤民よりもするなり、番子は御上に別に小屋ありて、夜のみ時を報ず、晝は臓てこもりぬる、江戸の番太郎の小商などする者とはひとしからず、）乞食などはわかちやれども、火を共にするにはあらず、（同火はこなたかなた互に火を共にするなり、わかちやりてもさき〲の火をこなたへ突へぬは捨火といふ類にて、同火に對しては、片火といふべし、）これ捨火の類なれども、きはやかなる捨火伊勢山田より、その近鄕尾張熱田などやうの所ならでは人知らず、（實體にもあるべけれど、いまだ聞しらず、その餘はただ神社に奉仕する家のみ行ひて、里人におよばず、）火替といひて、今まで火のかゝりたる物をこと〲くあつめて、捨火として後新に鑽火にてとゝのふ、是まことの捨火なり、わかちとりたる捨火のあとを又食ふは、汚火の交らぬのみなり、合火には近し、（盃のとりやりせず、同器中にてくはざれば、わかちとりて、捨火といふといたく異ならず、）婚はもとより通せぬこと丐者と同じ、尾張の村々なる番太は、歳萬歳、大黒舞、踊やうの事をもなす、若山にてはかゝるわざはみな穢多よりする故に、番太も乞食もせず、京大坂にて非人番といふ是にあたるべし、（町々非常の時は、家々より出て別に番をなすを、自身番といふは、平生賤者の番に對してわかちていふなり、）番太は番太郎の略語なるべし、されど前にいふ江戸の市街の番太郎は、平民にて卑職なるのみ、同火など少しも隔なし、名は似ても事同じからねば、再こゝにくはしく記す、番をするより番太郎など、人の名めきていふ例世に多し、射場の式に第一等なるを弓太郎といふ、（是は弓道第一の意にて、太郎といふに意あり、何となくいふとはやゝたがふ、）心おそきを鈍太郎といひ、（狂言にもいへり、）阿房の三太郎ともいふ、酒好を吞助といひ、髮少く兀たるを十筋右衛門、溺死の者を土左衛門、好兵衛といひしを訛りて助兵衛といひ、田舍かたぎなるを遊里に併左衛門といひ、痴なるを拔作、東國人を關東兵衛、（是は一說にいくべいかへるべいなどいふ詞よりいふにて、別義ともいへり、）諸國をよく〱めぐりたる者を日本左衛門といひ、物見すきなるを見物

左衛門といひ、（狂言にもあり、尾州の方言には、是をアコヤ饅頭といふ、此くわし行れて、いづれの守社の縁日祭事にも、出ぬことなかりしよりかくいふと、古老の話にのこれり、）長ばなしするを長兵衛、人なれぬ男女の少年を木蔵、下手浄るりをかたりて、はづかに飲食するを茶飲大夫、大凡に察するを筋右衛門、辨舌顔なるを口松（江戸にては、口まれするものをかく云ふ、）といひ、其他エテ吉、浮助、長吉、作蔵、居助、猿松、お狂、おむく、おぬく、きよろ作、ひが左衛門、在郷の金太郎、武左などいふ類いと多し、何れもおとしめてそしらはしくいふ意なり、始に出せる弓太郎のみは然らず、此類は東國にて大なる刀禰川を坂東太郎といふ、風雨に彼岸太郎、八専次郎、土用三郎、寒四郎、樋五郎などいへり、此餘方言に多し今ひとつ此番太の太の意の説あり、穢多の條にいふべし、○中略塩房をハチといふは、珍らしくよしあるべき事なり、土師より轉じたるか、又は托鉢體ひらきの鉢にて、物を乞ふよりいへるにもあらむか、出雲國にては、番太をハチヤといふと、留學に來居たりし、其國人富永芳久、清水高平などいへり、ハチは前と同義、ヤは家の意なるべし、かの國俗借金の證状に、若期月及遲滯候はヾ、ハチヤ催促を以、御取可被成候、其節一言の違亂申間敷候など、かく法ありとて聞たるに、此ハチヤ常は門戸閾のうちにも、漫に入る事なく、用要ありて入る時は、門より内は跣足にて入る、まして床に上る事は無し、同火せず、殘餘の飯菜は、捨火とてやるならはしなるが、借用遲滯して返しがたく、數度の限を差ふる時は、かしたる者より、かのハチヤを催促に遣ることなり、此時は、常にかはりて、履をもぬがず、庭に入床の上にものぼりあぐらをかき、懷手などして、居催促といふ事をす、客あれどもいとはず、甚人目わろく、耻がましきことゝぞ、そのうへに、一度來る毎に、料足百銅をかり主より出して、勞にあつる定なりとぞ、さま〳〵のならはしもあるものなりけり、座頭の金銀をかりてなさゞる時は、いくたりも來り居ふたげて、うながす事などは聞たれど、その類にて、今一しほけやけきならはしなり、是によりてその賤しきさまもおしはからるれば、記しそへつ、ハチヤの義を、又おもふに、源氏物語柏木卷小侍從の語に、何

にまゐりつらむと、はちふくといへるは、衞門督の女三宮の事をいふを、いとふさまにて、古き注に、蜂を吹拂ふやうの意といへり、本義はいかなるか志らねど、忌み避る語意は明なり、他書にも此語かれこれあり省(ハツ)くは、もと此語の略なるべし、今俗に「一流の中にて、一人を別にしてまじへぬを、ハチブといふ、是はちふくより出て、略して體語になれるなり、ハチ屋も此意にて、良民よりはちふき避けし、共にせぬより出たる號にやあらむ、前の煙房のハチも同じ、

○按ズルニ、江戸ノ謂ユル番太ハ、自身番ナリ、

古事類苑

政治部六十九

下編

會計上

德川幕府時代ニ於ケル幕府ノ公領、年代ニ依リテ異同アリト雖モ、其草高ハ凡ソ四百萬石ヨリ四百六十萬石ヲ上下シ、歳入ハ凡ソ百四五十萬石ノ間ニアリ、世上ニ幕府ノ領地八百萬石ト稱スルハ、公領四百餘萬石ニ加フルニ、家臣中万石以下ノ輩ノ領地ノ高三百餘萬石ヲ以テスレバ、八百萬石ニ近キヲ以テノ故ナルベシ、其他歳入ノ重ナルモノハ、川船運上、寄合小普請役金、長崎上納金等ニシテ、是等ノ歳入ヲ合セテ幕府年中ノ費用、家臣ノ俸祿、其他水利土功ニ關スル諸般ノ費用ヲ支辨シ、又其幾分ヲ蓄積シテ非常ノ用ニ供ス、御用米ト稱スルモノ即チ是ナリ、若シ臨時ニ費用ヲ要スルコトアレバ、國役金ト稱シ、石高ニ應ジテ徴集シ、或ハ諸侯諸士、寺社、及ビ農工商等ヲシテ獻金セシメ、以テ支出入ノ均衡ヲ保テリ、始祖家康以來二三代ノ間ハ、百事質素ニシテ、費用ヲ要スルコト少カリシガ、文物制度ノ整頓スルト共ニ、奢侈ノ風日ニ盛ニシテ、從來ノ歳入ヲ以テ到底支辨スルコト能ハザルニ至レリ、是ニ於テカ屢〻令ヲ發シテ奢侈ヲ禁ジ、經費ヲ節減シテ出入ノ均衡ヲ保タシメントセシカド、尚ホ歳入ノ不足ヲ免レザルヨリ、金銀貨幣ヲ改鑄シ、以テ歳入ノ補足ヲ圖レリ、寶永以來ノ改鑄ハ、概ネ多クハ歳入補足ノ策ニ出デザルハナク、之ガ爲メ大ニ幕府ノ歳入ヲ増加シタリト雖モ、貨幣ノ實質、漸ク粗惡ニ流レ、大ニ幕府ノ威信ヲ失スルニ至レリ、

歳出入額

凡ソ幕府諸般ノ會計ハ、勘定奉行之ヲ掌ル、其配下ニ藏奉行、金奉行アリ、金奉行ハ貨幣ノ出入ヲ掌リ、藏奉行ハ米穀ノ出入ヲ掌ル、幕府ノ金庫ハ、江戸及ビ大坂ニアリ、米廩ハ江戸、京都、大坂、其他數所ニアリ、就中關東公領ノ年貢米穀ハ、江戸淺草、本所ノ米廩ニ納メ、京坂以西ノ年貢米穀ハ、京都大坂ノ米廩ニ分納セシム、金穀ヲ出納スルニハ、毎月一定ノ期日アリ、之ヲ支出スルニハ、勘定所又ハ關係吏員ノ裏判ヲ得テ提出セシメ之ヲ以テ證左トス、

歳出入ノ精算ハ、三年毎ニ之ヲ行ヒ、後進ノ勘定組頭之ガ主任トナリ勘定方ヲ使役シテ精密ニ調査シ、結了ノ後、老中、若年寄、勘定所ニ出席シ、勘定組頭、帳簿ヲ讀ミ、勘定方、算盤ヲ執リテ計算シ、其誤謬ナキヲ認メテ、老中、若年寄、之ニ調印シ、是ニ於テ精算ノ決了ヲ告グルナリ、

尚ホ徳川幕府ノ會計ノ事ハ、官位部勘定奉行及ビ勘定吟味役等ノ諸篇ニ貫聯スルモノアリ、宜シク參看スベシ、

〔京都御役所向大概覺書　三〕八箇國御藏入御成箇厘付之事　但正徳四年、同五未兩年分、

一正徳四午年
高三万四千貳百八石餘　山城
内二百八石七斗四升貳合　城州八瀬村御免許高入厘付除之
此取九千八百七十石餘　高貳ツ八分九厘九毛内　已五分二厘三毛下

一高貳拾万九百貳拾三石餘　大和
此取五万貳千貳百三十九石餘　高二ツ六分内　已七分二厘下

一高四万五千貳百五十八石餘　和泉
此取壹万四千四百拾貳石餘　高三ツ一分八厘五毛内　已一ツ一分二厘九毛下

一高九万七千百六十八石餘　河内
此取三万三百四十壹石餘　高三ツ一分二厘三毛内　已一ツ五厘九毛下

一高拾四万七百拾貳石餘　攝津

此取四万三千七百八十八石餘　高三ッ一分一厘二毛内 已一ッ二厘一毛下

一高五万二千七百五十八石餘　近江

此取壹万五千四百七石餘　高貳ッ九分二厘餘 已二分三厘二毛下

一高一万千七百九十八石餘　丹波

此取四千五百七十九石餘　高三ッ八分八厘一毛餘 已壹毛上

一高五万九千六百六十四石餘　播磨

此取貳万八百拾五石餘　高三ッ四分ノ厘九毛内 已九厘七毛上

八箇國

高都合六拾四万貳千四百九拾貳石餘

内貳百八石七斗四升貳合　城州八瀬村御免許高入厘付除之

此取十九万千四百五十五石餘　高貳ッ九分八厘壹毛内 已七分貳厘六毛下

外貳百三十三石七斗餘　夫米見取　厘付除之（中略）

正徳四午年

八ヶ國御納米大豆仕拂目錄之事

五畿内近江丹波播磨

取米拾九万千四百五拾五石六斗四升六合　〇按ズルニ、此内譯總計拾九萬千六百八拾、九石四斗貳升四合トナル、本文誤脱アラン

内

壹万八千貳百八十五石四斗三升九合　十分一大豆銀納

内貳千三百三十七石六斗四升壹合　現大豆納

九万五千百九十八石四斗壹升六合　三分一井宗銀納所、大和米所々地拂共、

七万八千貳百五石五斗六升九合　米納

此譯

壹万五千三十四石八斗七升三合　萬拂

三万六百拾八石七斗壹升貳合　冬春大坂御藏詰

但大坂御藏詰五万八千石之所、不足ニ付、他國米を以都合相納ル、

三万五十壹石九斗八升四合　冬春二條御藏詰

貳千五百石　冬春大津御藏詰

大豆合貳千三百三十七石六斗四升壹合（攝津 近江 丹波 播磨、）

內

千九百三十七石　大坂御藏春詰

四百石六斗四升壹合　二條御藏春詰

〔地方要集錄〕關東上方高幷御物成中位之年一ヶ年分

上方高貳百五拾三萬三千百石餘

此取九拾七万三千九百石程

內拾三万八千六百石餘　小物成入

現米八拾三萬五千五百石餘　田方

內壹万千石餘　小物成

內

金五万五千三百兩餘　畑方

內五万千兩餘　小物成

關東高百七拾九萬六千九百石餘

此取七拾七萬千石餘

内拾萬五千六百石餘　小物成入

現米三拾八萬五百石餘　田方

内壹万貳百石餘　小物成

永拾四萬五千貫文餘　畑方

此金拾四萬五千兩

内三萬八千百兩餘　小物成

右は享保六丑ゟ同十五戌迄、拾ヶ年之内中分に當候御取箇如是、

關東上方御料高都合四百貳拾萬石程

小物成は除本途御物成

此取百五拾萬六百石餘　厘附三ツ五分程ニ當ル

現米百拾九萬四千八百石餘

内

金拾壹万千五百兩餘

〔地方要集錄〕諸國御藏入小物成浮役幷諸運上之類大概覺帳

總寄

金三萬四千八百三拾八兩餘

銀千五百八拾五貫五百目餘　此銀、金ニシテ貳万六千四百貳拾兩餘、

丁銀百貳貫四拾目餘　丁銀、金ニシテ千七百兩餘、

付ケ札
△灰吹銀壹貫貳百四拾目餘
△灰吹銀、金ニシテ四拾兩餘、

錢千四百七拾貫文餘
錢、金ニシテ三百六拾兩餘、

米三万六千四百貳拾石餘
書面之金共ニ、合六万三千四百五拾兩餘

大豆千七百石餘

麥貳拾石餘

荏貳百石餘

稗三拾石餘

鹽六百石餘

眞綿貳貫目餘

材木貳万貳百八拾本餘

榑木千九百九拾挺餘

板壹万四千五百枚餘

下ケ札
此金銀は、乾字金四方銀に御座候、新金銀段々極直シ候積御座候得共、品之儀ニ御座候故、いまだならべ相濟不申候、追而新金銀に直候はゞ、增減可有御座候、

國役三万六千六百本餘

薪九万八千束餘

炭七百俵餘

萱拾七万七千四百把餘

漆八貫目餘

白土四千五百俵餘

右員數は、年々增減ものも有之候ニ付、大積如此御座候、以上、

（御勘定所掛取扱御用向書付）享保元申より同十巳迄拾ヶ年平均

高四百拾貳万七拾五石餘
此取百三拾九万五千七百八拾貳石餘 免三ツ三分八厘七毛餘
享保十一午より同二十卯迄拾ヶ年平均
高四百四拾七万三千七百六拾四石餘
此取百四拾七万七千三百五拾石餘 免三ツ三分二毛餘
元文元辰より延享二丑迄拾ヶ年平均
高四百五拾九万六千六百六拾八石餘
此取百五拾八万四百四石餘 免三ツ四分三厘八毛餘
延享三寅より寶暦五亥迄拾ヶ年平均
高四百四拾貳万八千五百八拾八石餘
此取百六拾六万六千八百四拾五石餘 免三ツ七分六厘三毛餘
寶暦六子より明和二酉迄拾ヶ年平均
高四百四拾貳万五千九石餘
此取百六拾四万六千七百八拾八石餘 免三ツ七分貳厘壹毛餘
明和三戌より安永四未迄拾ヶ年平均
高四百三拾八万八百拾九石餘
此取百五拾壹万八千四百八拾七石餘 免三ツ四分六厘六毛餘
安永五申より天明五巳迄拾ヶ年平均
高四百三拾六万貳千六拾四石餘
此取百四拾六万三千九百八拾六石餘 免三ツ三分五厘六毛餘

天明六午より寛政七卯迄拾ヶ年平均

高四百三拾九万貳千九百四拾壹石餘

此取百四拾壹万三千三百貳拾三石餘　免三ツ貳分壹厘七毛餘

寛政八辰より文化二丑迄拾ヶ年平均

高四百四拾九万三千三拾八石餘

此取百五拾三万六千七百五拾貳石餘　免三ツ四分貳厘餘

文化三寅より同十二亥迄拾ヶ年平均

高四百四拾五万貳千五百六拾四石餘

此取百四拾九万五千七百六拾五石餘　免三ツ三分五厘九毛餘

文化十三子より文政八酉迄拾ヶ年平均

高四百三拾貳万八千四百三拾貳石餘

此取百四拾六万貳千八百拾六石餘　免三ツ三分七厘九毛餘

文政九戌より天保六未迄拾　年平均

高四百貳拾万四千五百三拾八石餘

此取百三拾七万九千五百九拾三石餘　免三ツ貳分八厘壹毛餘

御高増減有之候儀は、新田御高入、私領上地等にて相増候得共、私領渡にて減じ、免合劣候儀、近年は全く違作にて、格別に免合劣り候得共、一體は村々宜分、兎角私領に相成、おのづから手餘荒地川欠損地等之引方も多く、且は御代官手先ゆるみ候氣味合も相見候事、

（御年貢金其外諸向納渡書付）享保七寅年より同十六亥年迄十ヶ年平均

納　一金八拾六万九千四百六拾八兩餘

渡り　一金七拾四万千九百拾壹両餘
差引　金拾貳万七千五百五拾七両餘餘ル

納　享保十七子年より寛保元酉年迄十ケ年平均
一金百五拾七万九千八百拾三両餘
渡り　一金百貳拾万五千貳百九拾四両餘
差引　金三拾七万四千五百拾九両餘餘ル

納　寛保二戌年より寶暦元未年迄十ケ年平均
一金百六拾万六千百四両餘
渡り　一金百拾九万五百四拾貳両餘
差引　金四拾壹万五千五百六拾貳両餘餘ル

納　寶暦二申年より同十一巳年迄十ケ年平均
一金貳百七万四千四百三拾五両餘
渡り　一金百拾壹万四千八拾壹両餘
差引　金九拾六万三千五百五拾四両餘餘ル

納　寶暦十二午年より明和八卯年迄十ケ年平均
一金百六拾八万六千四百貳拾三両餘
渡り　一金百六拾四万三千貳百九拾九両餘
差引　金四万三千百貳拾四両餘餘ル

納　安永元辰年より天明元丑年迄拾ケ年平均
一金百八拾貳万六百貳両餘

渡り

一金百五拾七万千五百拾七両余

差引

金弐拾四方九千八百八拾五両余餘ル

天明二寅年より寛政三寅年迄十ヶ年平均

納

一金百九拾三万三千四百四拾五両余

渡り

一金百八拾九万三千七百六拾九両余

差引

金三万九千弐百七拾六両余餘ル

寛政四子年より享和元酉年迄十ヶ年平均

納

一金百弐拾三万五千弐百八両余

渡り

一金百弐拾四万六千四百九拾弐両余

差引

金壹万千弐百八拾四両余不足

享和二戌年より文化八未年迄十ヶ年平均

納

一金百四拾万三千九百七拾七両余

渡り

一金百四拾四万四千六百三拾弐両余

差引

金四万六百五拾五両余不足

文化九申年より文政四巳年迄十ヶ年平均

納

一金弐百拾五万三千百九拾三両余

渡り

一金弐百弐拾弐万七千六百八両余

差引

金七万四千四百拾五両余不足

文政五午年より天保三卯年迄十ヶ年平均

納

一金三百五万七千弐百三拾七両余

渡り
一金三百貳万九千三百壹両餘
差引　金貳万七千九百三拾六両餘餘ル

〔御年貢米其外諸向納渡書付〕享保七寅年より同十六亥年迄十ヶ年平均

納　一米六拾五万三千八百六拾石餘
渡　一米六拾壹万八千貳百六石餘
差引　米三万五千六百五拾四石餘餘ル

享保十七子年より寛保元酉年迄十ヶ年平均
納　一米七拾六万三千四百八拾九石餘
渡　一米七拾壹万四千九百拾四石餘
差引　米四万八千五百七拾五石餘餘ル

寛保二戌年より寶暦元未年迄十ヶ年平均
納　一米八拾万貳千七百拾三石餘
渡　一米七拾貳万七千百拾九石餘
差引　米七万五千五百九拾四石餘餘ル

寶暦二申年より同十一巳年迄十ヶ年平均
納　一米七拾六万七千三百拾八石餘
渡　一米七拾四万九千三拾七石餘
差引　米壹万八千貳百八拾壹石餘餘ル

寶暦十二午年より明和八卯年迄十ヶ年平均
納　一米七拾万三千百七拾壹石餘

渡　一米七拾貳万四千九百三拾五石餘
差引　米貳万千七百六拾四石餘不足

安永元辰年より天明元丑年迄十ヶ年平均納　一米六拾貳万九千八百拾九石餘
渡　一米六拾五万八千七百七拾五石餘
差引　米貳万八千九百五拾六石不足

天明二寅年より寛政三亥年迄十ヶ年平均納　一米六拾壹万三千三拾五石餘
渡　一米五拾七万五千八拾三石餘
差引　米三万七千九百五拾貳石餘餘ル

寛政四子年より享和元酉年迄十ヶ年平均納　一米六拾壹万七千石餘
渡　一米六拾万六百三拾四石餘
差引　米壹万六千三百六拾六石餘餘ル

享和二戌年より文化八未年迄十ヶ年平均納　一米六拾壹万七千七百拾石餘
渡　一米六拾万五千六拾四石餘
差引　米壹万貳千六百四拾六石餘餘ル

文化九申年より文政四巳年迄十ヶ年平均納　一米五拾六万六千三拾三石餘

渡
一米五拾七万三千六百七拾七石餘
差引 米七千六百四拾四石餘不足

文政五午年より天保二卯年迄十ヶ年平均
納
一米五拾貳万千貳百九拾六石餘
渡
一米五拾三万八千五百三拾七石餘
差引 米壹万七千貳百四拾壹石不足

（天保九戌年御代官幷御預所御物成納拂御勘定帳）天保九戌年御代官幷御預所御物成納方

金四拾七万九千七百五拾兩永百貳拾壹文壹分五厘壹毛
筋金九貫五百三拾七匁五分
銀貳万貳千四百五拾壹貫七百六拾匁壹分四厘七毛
朱書 金ニ〆三拾七万四千百九拾六兩永貳文四分五厘
一灰吹銀四百貫五百六拾六匁貳分
一錢貳万七千六百五拾七貫百四拾壹文
一米六拾九万千八百四拾三石九斗九升貳合壹夕三才
内 大豆貳千百貳拾壹石六斗八升八合四夕三才
雜穀貳百貳拾石七斗九升五合
麥四百貳拾三石貳斗五升三合壹夕貳才
粟五拾石九斗壹升貳合九夕
稗貳千貳百七拾七石四斗四合七夕八才
鹽五百三拾貳石四斗
蠟六千六百七拾九貫四百貳拾貳匁

山蠟實百九石五斗五升七合三夕
里蠟穂貳千四拾七貫百拾九匁三分九厘
里蠟實四升貳合
漆百拾八貫七百九拾四匁貳分
材木千三百九拾八本
右取立都合之内を以、御代官幷御預所ニ而、諸入用相拂候分、
米貳千貳百八拾九石三斗五升壹合　公家衆渡
金四両壹分永貳百四拾貳文四分
銀貳百五拾四匁六分八厘　寺社御寄附料渡
朱書 金ニメ四両永貳百四拾四文六分六厘
米千四百石六斗壹升四合七夕
米貳万七千七拾五石九斗七升　長崎廻り渡崎御蔵詰米
是者戌年長崎廻り渡崎御蔵詰之分、御勘定拂ニ相立、渡崎御蔵詰り同年御勘定ニ組候積り、
米千七百三拾五石四斗九合三夕　御鷹方諸入用
是者御鷹野御飼米、御鷹匠、御犬牽、御鉄炮方、御鷹野之者御扶持方、幷在宅御鳥見御切米、御扶持方、其外御鷹場御普請人足扶持等相渡候分、
金八百五拾八両三分永百八拾文貳分
錢千三百八拾九貫三百貳拾貳文　奈良奉行、堺奉行、山田奉行等、其外遠国役人御切米御扶持方渡、
米六千百九拾三石四斗壹升五合
金八両壹分永五拾六文
銀壹貫五百貳拾九匁壹分八厘　御代官幷百姓江被下候新田十分一之分

金ニ〆貳拾五兩壹分永貳百三拾六文三分三厘（朱書）

米百四拾五石三升七合

大豆三石壹斗七升壹合四夕三才　新畑見立候百姓江被下候大豆

是者百姓見立候新畑大豆取之内、百姓江相渡申候、

金貳千九百三拾五兩三分永貳百貳拾三文貳分

銀貳百貳拾九貫七拾九匁貳分四厘貳毛　御城米駄賃運賃

金ニ〆三千八百拾七兩三分永貳百三拾七文三分六厘（朱書）

米九百六拾九石八斗三升七合三夕

金拾壹兩貳分永百貳拾五文三分

米貳百三石九斗四升壹合六夕四才　堤川除御入用

金壹万六千三百七拾七兩永百三拾八文八分四厘六毛

銀千百拾壹貫六百七拾五匁八分八厘五毛　諸色渡

金ニ〆壹万八千五百貳拾七兩三分永百八拾壹文四分壹厘（朱書）

米壹万九千五百四拾五石六斗壹合壹夕貳才

是者在方役人諸入用、御扶持方、并在々江罷出候御代官手附手代御扶持方、御傳馬宿入用米等、其外品々相渡申候、

米貳千百九石貳斗八升九合五夕

大豆六石五斗五升五合　破船之節、浦中捨御失墜、

米四百七石貳斗貳升五合八夕　濃州笠松尾州熱田御囲籾

此籾八百拾四石四斗五升壹合六夕（朱書）

是者非常為ニ御手當、兩所御藏江詰置、年柄を見計、作徳米を以詰替、其年々御勘定ニ組候積り、

米貳百九拾石九斗三升貳合五夕

是者、爲ニ御用ニ置米之分、作廻米を以請替、其年々御勘定ニ組候積り、

東海道宿々御圍米

米壹万三千四百七拾八石七斗壹升壹合壹夕貳才

是者奥州但州銀山、濃州銅山、其外請負人江戌年御物成米之内を以相渡、代金取立、翌年御勘定ニ組候積り、

銀山銅山其外請負人江買請米

米壹万千貳百六拾七石五斗五合八夕三才

是者戌年御物成米之内を以相渡、代金上納之割合を以、年々御勘定ニ組候積り、

南部信濃守、松前隆之助江御貸米、

金六百五拾兩貳分永百七拾八文

阿部駿河守代知物成不足之分

米五拾貳石五斗七升

金六拾六兩三分永拾五文五厘

是者領知之内、御用地、上り代知之場所下見に付、物成不足之分、年々相渡候付、御物成之内、戌年相渡申候、

私領潰地物成渡

米七拾五石六斗九升七合七夕貳才

金百五拾兩三分永四拾文壹分六厘

私領代知物成渡

銀九貫百八拾八匁五分五厘壹毛

（朱書）金ニ〆百五拾三兩永百四拾貳文五分壹厘

是者私領之内、御用地、上り代地之場所、未ニ相渡候付、御物成之内、戌年相渡申候、

銀七拾貫目

（朱書）金ニ〆千百六拾六兩貳分永百六拾六文六分六厘 飛州榑木元伐採山中村々買請米、井和州北山御材木前貸渡、

米三千四百石

米四千三百六拾三石

是者戌年日光今市御藏詰米之分、御勘定ニ掛ニ相立、今市御藏同年御勘定ニ組候積り、

日光今市御藏詰米

米千九百五拾三石八斗貳升七合　浦賀御藏詰米

是者戌年浦賀御藏詰米之分、御勘定拂相立、浦賀御藏同年御勘定ニ組候積り、

米六拾七石貳斗五升　小菅納屋納

朱書
此籾百三拾四石五斗

金六拾三兩壹分永百貳拾三文　夫食拜借渡

金壹万五千貳百五拾六兩永貳百五文四分九厘三毛　但金銀米

銀千九百七貫八百四拾貳匁九分貳厘六毛

朱書
金ニメ三万千七百九拾七兩壹分永百三拾貳文壹分

米三万九千貳百貳拾八石六升八合八才

是者戌年御物成之内、品々爲御用買金銀米、同年御勘定拂ニ相立、翌年御勘定ニ組候積り、

米千石　延石

是者甲州八代郡山梨郡巨摩郡村々、御物成米之内、年延仕、戌年御勘定拂ニ相立、翌年御勘定ニ組候積り、

米千七百八拾五石壹斗六升四合九夕貳才　御下穀

金九千五百五拾貳兩三分永百貳拾貳文四分九厘三毛　貯穀御拂代

銀九拾六貫三拾六匁九分四厘九毛　在方御貸附

朱書
金ニメ千六百兩貳分永百拾五文八分壹厘

米壹万六千九百三拾五石三斗貳升三合七夕六才

朱書
此籾三万三千八百七拾石六斗四升七合五夕貳才

麥四百貳拾三石貳斗五升三合壹夕貳才

粟五拾石九斗壹升貳合九夕　御囲籾并麥粟稗

稗貳千貳百七拾七石四斗四合七夕八才
塩五百石
御賄所納

右貳拾九口合

金四万五千九百三拾七両永百五拾文壹分四厘貳毛
銀三千四百貳拾五貫六百七匁四分壹厘三毛
（朱書）金ニメ五万七千九拾三両壹分永貳百六文八分八厘
錢千三百八拾九貫三百貳拾貳文
米拾五万五千九百七拾三石七斗四升三合貳夕九才
大豆九石七斗貳升六合四夕三才
麥四百貳拾三石貳斗五升三合壹夕貳才
粟五拾石九斗壹升貳合九夕
稗貳千貳百七拾七石四斗四合七夕八才
塩五百石

右貳拾九口取立都合之内ニ而相拂引殘候分

金四拾三万三千八百拾貳両三分永貳百貳拾壹文九毛
筋金九貫五百三拾七匁五分
銀壹万九千貳拾六貫百五拾貳匁七分三厘四毛
（朱書）金ニメ三拾壹万七千百貳両貳分永四拾五文五分六厘
灰吹銀四百貫五百六拾六匁貳分
錢貳万六千貳百六拾七貫八百拾九文

江戸
大坂
御藏納
甲府
佐州

米五拾三万三千五百貳拾七石七斗六升五合四夕壹才
大豆貳千百拾壹石九斗六升貳合
菜種貳百貳拾石七斗九升五合
鹽三拾貳石四斗
（江戸　大坂　二條　大津　駿府　甲府　佐州　御藏納）

漆百拾八貫七百九拾四匁貳分
蠟七千百拾貳貫三百三拾貳匁（淺草御藏納）
内　六千六百七拾九貫九百四拾貳匁（蠟納）
　　四百三拾貳貫九百拾匁（點立蠟納）
是者山蠟實百九石五斗五升七合三夕、里蠟穗貳千四拾七貫百拾九匁三分九厘、里蠟實四升貳合點立候分、

材木千三百九拾八本（御材木藏納）
是者四年中、和州北山百姓江代米被下、伐出候御材木之分、渡方ハ御材木奉行御勘定仕上申候、

右は去々戌年〇天保九年御代官幷御預所御物成納拂御勘定、書面之通相違無御座候、以上
天保十一子年十一月
〔吹塵錄二十九徳川氏〕天保十三寅年

金七拾八万六千五百貳拾六兩餘（定式納）
米五拾七万七千七百壹石餘（御年貢）
合金百三拾六万四千貳百貳拾七兩餘

右拂方
金百壹万四千貳百拾兩餘（定式御入用）
米五拾七万四拾三石餘（諸向渡）
合金百五拾八万四千貳百五拾參兩餘

差引

金貳拾貳万貳拾六両餘　不足

天保十三寅年元拂差引凡調

金九拾貳万五千九拾九両餘○按ズルニ、両以下ノ端數ヲ除キテ、計算スルニ、八拾七万七千九拾九両トナル、本文誤アラン、　元立

此譯

金五拾五万三百七拾四両餘　御年貢金

金三千貳百三両餘　川船運上

金三万四千六百三拾三両餘　寄合小普請御役金

金壹万六千六百三拾三両餘　獻上金銀

金貳万貳千七百九拾貳両餘　長崎上納金

金貳万五千九百三拾貳両餘　國役金

金七万六千六百八拾六両餘　諸拜借返納

金拾四万六千八百四拾六両餘　品々納

外

金五拾五万七千三百貳拾貳両餘　金銀吹立御益

金貳万九千七百貳拾七両餘　西丸御普請御手傳年賦上納

小以金五拾八万七千四百四拾九両餘　不時納

右拂

金百四拾五万三千貳百九両餘　御入用

外

金拾五万六千四百六拾九両餘　　不時御入用

是は、西丸御入輿、臨時所々御普請御修復分銅吹方、日光御參詣前年御入用渡等之分、

右元拂差引

（朱書）金五拾貳万八千百拾両餘　　御不足

〔天保十四卯年金銀納拂御勘定帳〕辰〇弘化元年十二月　　御勘定方

寅年御物成諸運上并卯年諸向納方之覺

金三拾六万八千八百七拾九両

銀壹万四千八拾九貫七百九拾七匁八分三厘五毛　　御代官所御預り所之分

一 筋金七貫七百四拾壹匁　　寅年御年貢、金銀

灰吹銀三百貳貫貳百八拾九匁九分

山吹銀三百九拾目

錢三万七千九百拾七貫百七拾四文

金壹万七千四百四両壹分

一 銀百拾三貫拾八匁六分六毛　　大坂諸川船關東川船運上

錢九百七拾八貫三拾七文

金壹万八千貳百九拾両貳朱

一 銀三貫八百九拾八匁貳分　　寄合并小普請御役金

大判貳百八拾九枚

金三拾両貳分

一 銀九拾八貫三百八拾四匁　　献上金銀御納戸納

錢八拾四貫文
大判貳百五拾七枚
金三百貳拾八兩三分　西丸獻上金銀
一銀百拾六貫四百壹匁　御納戸納
錢百拾八貫文
大判七枚
御小納戸去ル戌ゟ寅迄御納戸納
比御遣方殘
一金貳拾兩三分
銀四貫三拾貳匁九分貳厘三毛
金壹万六千五百三拾三兩壹分　大津長崎御拂米代
一銀千七百四拾九貫六百貳拾壹匁五分五毛
一大判三百枚　御買上大判
金壹万貳千六百三拾貳兩貳分　公役金其外地代金并町々
一銀百九匁壹厘六毛　河岸地冥加金等町奉行納
金五百九拾七兩壹分
一銀三貫七百九拾三匁壹分九厘　御普請奉行納
錢四貫八百四拾三文
金壹万八千五百四拾七兩三朱
一銀貳百貫四百七拾壹匁七分九厘七毛　品々納
灰吹銀五拾貫七拾六匁貳分八厘九毛
錢五貫百三拾七文

一金三百八拾貳両　京都町奉行納、并京大
　銀百拾七貫貳百九拾貳匁七分九厘九毛　坂帳合延商賣御益金、
一金六百両　大坂町奉行所江取立
　銀八拾七貫目八分四厘七毛　候地代金幷冥加金
一金九千九百五拾両　大坂市中川浚冥加金
一銀貳拾八貫三百九拾四匁五分九厘四毛　遠國御役所納
一銀四百三拾五貫九百六拾壹匁壹分八厘　長崎會所上納金壹万五千両之内、長崎奉行納、
一金八千九百壹両貳分貳朱　佐州品々納
　錢三万五千三百貳拾貫八百五拾七文
一筋金五貫百三拾九匁　奥州半田銀山筋金灰吹銀
　灰吹銀百五拾壹貫四百三拾八匁壹分
一灰吹銀百八拾三貫四百七拾目　佐州出灰吹銀
一灰吹銀壹貫四百目　佐竹右京大夫納
　大判八百五拾三枚
　金四拾七万三千九拾七両三朱
　銀壹万七千四拾八貫百七拾七匁四分九厘貳毛　御遣方元ニ立候分
都合筋金拾貳貫八百八拾目
　灰吹銀六百八拾八貫六百七拾四貫貳分八厘九毛
　山吹銀三百九拾目
　錢七万四千四百貳拾八貫五拾六文

右拂方〇中略

大判千貳百五拾枚

金七拾九万六千貳百貳拾貳兩三分

銀七千九貫五百四匁九分三厘

筋金八貫五百九拾四匁

灰吹銀貳百五拾九貫四拾三匁七分四厘四毛

錢九万千六拾九貫九百五拾四文

拂合　　　　　　　　　　　　　　定式御入用之分

右元拂差引

銀壹万三拾八貫六百七拾貳匁五分六厘貳毛

筋金四貫貳百八拾六匁

灰吹銀四百貳拾九貫六百三拾目五分四厘五毛　餘ル

山吹銀三百九拾目

大判三百九拾七枚

金三拾貳万三千百貳拾五兩貳分壹朱　不足

錢壹万六千六百四拾壹貫八百九拾四文

〔元治元子年地方御勘定帳摘要〕去ル子年御代官御預所取立都合

金六拾貳万七千三百拾五兩永貳百貳文壹分八厘九毛

筋金壹貫貳百四拾目

銀四万八千八百三拾七貫七百五拾四匁九分五厘八毛

灰吹銀百拾貳貫四拾六匁

錢四貫貳百六拾八貫三百三拾五文
米八拾六万貳千五百八拾六石三斗七合七夕七才

内

米八拾五万九千百拾五石八斗四升貳合三夕四才
大豆三千貳百五拾八石八斗七升五合四夕三才
菜種貳百拾壹石五斗九升
麥四百四拾五石四斗六合五夕四才
稗四千四百五拾八石貳斗五升九合七夕四才
鹽四百拾三石五斗六升四合貳夕五才
蠟八千三百八拾九貫三百四拾貳匁五分
山蠟實八拾壹石五斗八升四合九夕
里蠟穂千七百八拾六貫七百拾五匁五分九厘
里蠟實四升貳合
漆百拾八貫七百九拾四匁貳分
材木八百貳本

右取立都合之内諸渡方

金七万七千五百四拾六兩三分永丸拾八文九分七厘四毛
銀貳万貳千九百貳拾七貫三百三拾五匁四分八厘六毛
錢七百拾九貫四百貳拾四文
米三拾七万六千貳百五拾石三斗九合七夕九才

大豆千貳百四拾壹石五升貳合四夕三才
麥四百四拾五石四斗六合五夕四才
稗四千四百五拾八石貳斗五升九合七夕四才
鹽三百八拾壹石壹斗六升四合貳夕五才
右諸渡方引殘高
金五拾四万九千七百六拾八兩壹分永百三文貳分壹厘五毛　江戸御藏納
筋金壹貫貳百四拾目
銀貳万五千九百拾貫四百拾九匁四分七厘貳毛　大坂御藏納
灰吹銀百拾貳貫四拾六匁　甲府御藏納
錢三千五百四拾八貫九百拾壹文　佐州御藏納
米四拾八万貳千八百六拾五石五斗三升貳合五夕五才　江戸大坂御藏納
大豆貳千拾七石八斗貳升三合　二條御藏納
菜種貳百拾壹石五斗九升　大津御藏納
鹽三拾貳石四斗　駿州甲府御藏納
漆百拾八貫七百九拾四匁貳分　佐州御藏納
蠟八千七百三拾貳貫七百七拾貳匁五分　淺草御藏納
內　八千三百八拾九貫三百四拾貳匁五分　蠟納
　　三百四拾三貫四百三拾目　點立蠟納
是者山蠟實八拾壹石五斗八升四合九夕、里蠟壹千七百八拾六貫七百拾五匁五分九厘、里蠟實四升貳合點蠟立候分、
材木八百貳本　御材木藏納
是者和州北山百姓江代米被下、伐出候御材木之分、

右之通

慶應三卯年七月

朱書見出シニ去ル子年トアルハ、元治元子年ノ事ニ御座候

〔吹塵錄二十五 徳川氏〕徳川氏領國八百万石旗下八万騎の說

世間云ふ、徳川氏政府の領國高八百万石ありと、又其實を察するものは冷笑して云ふ、是れ虛稱其大に誇るなりと、余〇勝安房案するに、兩說共に其一を知て、いまだ其二を知らざるなり、其全く藏入となるべきの地は、實に四百餘万石にして、此中藏米を以て給する、旗下家人數万家あり、政府の用度、自己の費途に充つるものは、僅々の數のみ、故に万一非常の變に逢へば、金穀欠乏して給せざるものあるに至るなり、而して家臣中萬石以下の知行を有する輩、其祿高三百餘萬石あり、此二つの者を合算すれば、七百餘萬石に到る、八百萬石の概稱蓋し是より出づ、

〔天明集成絲綸錄二十二〕明和八卯年四月

御勘定奉行
御勘定吟味役 江

去寅〇明和七年夏中、御料所旱損之國々多、御收納高格別相減、御勝手向御入用御遣方御不足ニ相成候ニ付、當卯年ゟ來ル未年迄五ヶ年之間、御儉約被仰出候ニ付、諸向一ヶ年之御入用御定高、左之通可被相心得候、

金貳千兩　町奉行

是は寶曆五亥年、被仰出候御定金高之通ニ候間、可成丈右御定高不相増樣可被取計候、

金四百兩　御船手

金貳百兩　大坂御船手

禁裏御所方堂上方并二條御藏米共
銀貳百六拾五貫八百目餘　御修復御入用

銀四拾貫百目餘　二條御城内外御修復御入用
米七拾五石九斗餘

金七百五拾兩　大坂御城内外御修復御入用

金三百五拾兩　駿府御城内外御修復御入用

金百兩　甲府御城内外御修復御入用

金五拾兩　京都橋御修復御入用

金五拾兩　大坂橋御修復御入用

金七百兩　神器佛具裝束類御入用

金壹萬五千兩　元方御納戸

金壹萬兩　拂方御納戸

金六千兩　西丸御納戸

金壹萬兩　御賄方

金五千兩　西丸御賄方

金六千兩　御作事方

内

金五千貳百六兩貳分　定式御入用

金七百九拾三兩貳分　臨時御入用

金貳千兩　御疊方并備後表御買上ヶ代共

但定式臨時御入用共

金八千三百八拾六兩餘　小普請方定式臨時共御入用

外

金三拾兩　小普請方手代等出精之者被下金手當之積り

合金八千四百拾六兩餘

金七百五拾兩　御材木方

金貳千五百兩　御細工所

金七百五拾兩　淺草御藏方

金千百五拾兩　銅瓦御買上ケ代

金壹萬兩　飛州榑木材木元伐川下賃

金千兩　御普請役諸入用

金五千四百兩　在方品々御入用

金四千兩　川除御入用

但格別之急破等之外者、可成丈川除御入用相減候樣可取計候、

右者寶暦五亥年、御定有之候金高相減、此度被仰出候間、右金高ニ而一ヶ年之御入用相濟候樣、勘辨いたし取計可被申候、

金百五拾兩　伏見奉行

銀五拾貫目宛　大坂町奉行

銀四拾五貫九百目餘宛　京都町奉行

外

銀壹貫六百目　酒井丹波守懸り、名目銀取上ケ、三拾ヶ年賦取立方入用、

金三百兩　盜賊改
金百兩　植木奉行
右は此度御定高被仰出候間、右金高ニ而一ヶ年之御入用相濟候樣取計、猶御入用高相減候樣可致候、
右諸向御定高ニ而、一ヶ年之御入用相濟候樣致勘辨取計可申候、差支候儀も有之候はゝ、翌年之金高繰越御入用ニ相定、其分は翌年御定内を相減候樣可取計候、委細之儀は、御勘定奉行可被相談候、
右之通、向々江申渡候間、可被得其意候、
四月〇中略
安永七戌年六月
御勘定奉行江
川除御入用御定高金四千兩、神器佛具類御入用金七百兩ニて、壹ヶ年御用相濟候樣、去ル卯年〇明和八申渡候處、年々右御定高ニ而は不足之趣に付、此度川除之方金三千兩、神器佛具類之方金五百兩相增、御定高左之通、
金七千兩　川除御入用
金千貳百兩　神器佛具裝束類御入用
右之金高を以、一ヶ年御入用相濟候樣取計、繰越之儀は、不申立樣可相心得候旨、向々ニ可被申渡候、
六月
安永七戌年六月

御勘定奉行
御勘定吟味役　江

諸向一ヶ年御定高、去ル卯年〇明和八年申渡候内、年々右御定高にては不足之趣に付、其分此度夫々相増、以來御定高左之通、

一金壹萬貳千兩　拂方御納戸
　内貳千兩　此度增
一金九千兩　小普請定式臨時共御入用
　内六百兩　同斷增
一金千貳百兩　御材木方
　内四百五拾兩　同斷增
一金壹万三千兩　御賄方
　内三千兩　同斷增
一金五千五百兩　西丸御賄方
　内五百兩　同斷增
一金三千兩　御細工所
　内五百兩　同斷增
一金五千兩　御疊方幷備後表御買上代共
　内三千兩　同斷增
一金七千兩　川除御入用
　内三千兩　同斷增

一金千貳百兩　神器佛具裝束御入用

内五百兩　同斷增

右之金高を以、一ヶ年御用相辨候樣取計、繰越之儀不申立樣可相心得候、尤委細之儀は、御勘定奉行可相談候、

右之通向々江申渡候間、可被得其意候、

六月

〔御作事方定法〕御作事小細工方一ヶ年分御入用定高

高金六千兩内御殿渡首尾覆五拾兩引

一金五千九百五拾兩

内

貳千九百貳拾六兩　御作事方

貳千貳百三拾兩貳分　小細工方

七百九拾三兩貳分　右兩方共臨時

金壹萬千六百貳拾兩　寶暦二申年

金七千兩　同五亥年

金六千六百拾五兩　同六子年

金六千兩　明和八卯年

千五百五拾七兩　御作事方月限定式御入用伺無之十二ヶ月分

六百兩　諸場所御修復御入用伺濟貳拾兩以下定式月限江組入候分

七百六拾九兩　諸場所御修復御入用大概積

千四百七拾六兩三分　御本丸西丸小細工方月限定式御入用伺無之十二ヶ月分

三百六拾貳兩貳分　小細工方諸場所御修復御入用伺濟貳拾兩以下定式月限江組入候分

首尾覆金五拾兩引　三百九拾壹兩壹分　小細工方諸場所御修復御入用大概積

七百九拾三両貳分　所々御掛懸直、御塀屋御修復數少々新調共、其外風損、并御買上物代等、御作事方小細工方共、前々臨時御入用立來候分、

但石灰之儀は、書面金高之外御座候、

寶暦二申年、御作事方小細工方共、一ヶ年分御入用、吟味之上、金壹萬千六百貳拾両ニ相極申上、同五亥年金七千両ニ而相濟候樣取計可申旨被仰渡、翌子年三ヶ年御入用平均を以、口々割下ゲ金六千六百拾五両ニ相極置候處、此度御定金六千両之積、内定式御入用高五千貳百六両貳分、臨時御入用之分七百九拾三両貳分之積被仰渡候ニ付、御作事方小細工方月限并貳拾両以上以下、伺濟御入用之口共引方勘辨仕割合申候處、左之通御座候、尤小細工方御入用之儀別帳割合仕候、〇中略

明和八卯年五月　　比留半四郎　〇以下八人略

淺野備前守

新庄能登守

柳生主膳正

肥田豊後守

篠山十兵衛　江

岸　斎十郎

〔天保集成絲綸錄八十九〕文化八未年十二月

此度格別に御倹約被仰出候に付、諸向壹ヶ年之御定金等、年限中、左之通可被心得候、

金四千七百六十両　　御作事方

金三百貳拾六両　　御普請方

増御入用相定候分

金千三百六十両　小普請方
但御定金は是迄之通
金壹萬二千両　御納戸
但向後之御定金は壹萬五千両
是迄之通
金五千両　西丸御納戸
金八千両　御賄方
但向後之御定金は一萬両、閏月有之年は五百両増、
金四千両　西丸御賄方
但閏月有之年は、貳百五十両増、
一別段目當高千五百両
是迄之通
金三千両　御細工所
右之通相極、臨時之分可成丈差延、定式之儀は猶省略いたし、定高に不相増樣減方無油斷可取計旨、向々江相達候間、得其意、本途直段引下位下等之儀、何もより可被申談候、

十二月

〔吹塵錄二十九〕〔德川氏〕奥向其外御定金
天保十四卯年より
金貳万両　奥御用
同年より
金九百両　御廣敷御用
同年より
金五百両　西丸御廣敷御用

文政八酉年より
金壹万兩　水戸殿永續御手當

安永五申年より
金壹万貳千兩　宗對馬守永續御手當

〔天保十四卯年金銀納拂御勘定帳〕辰〇弘化元年十二月　御勘定方

寅年御物成諸運上幷卯年諸向納方之覺〇中略

別口納

一金貳万六千貳百五拾九兩壹分
銀百八拾四貫六百三拾七匁四厘壹毛
川除幷國役普請御取替金返納

一金貳万貳千七百五拾三兩三分貳朱
銀拾貫九百三拾目六分
諸拝借幷兩度類燒瓦葺其外拝借返納、

一金七千貳百貳拾貳兩壹分
銀七拾七貫百七拾九匁九厘
夫食種貸其外農具代等拝借返納、

一金三千六百五拾九兩
銀壹貫三百七匁三分六厘
荒地起返、小兒養育料御手當御貸付元、利、

一金百貳拾兩壹分貳朱
銀五拾壹匁四分八厘六毛
元御代官御勘定不足金年賦返納

一金三万千七百四拾八兩三分
銀貳百四拾九貫七百八拾八匁貳分八厘九毛
諸家江戸京大坂、其外在町江御貸附元利、

一金五千貳百九拾壹兩貳朱
銀壹貫四百四匁五分
道中金ヶ貸渡候宿拝借返納

一金貳百四拾兩
道中筋刎錢御貸附利金

日光御靈屋幷諸堂社其外
一　金七万五千百七拾貳両　　御修復御入用之內、御手傳方出金之分、
　　銀四拾五匁八分四厘九毛

上野文恭院様御靈屋御廟向其外
一　金四万三千二百三拾壹両貳分　　御普請御入用之內、松平陸奥守出金之分、
　　銀九匁五分八厘貳毛

上野浄観院様御靈屋御廟向其外
一　金壹万貳百七両貳分　　御普請御入用之內、御手傳方出金之分、
　　銀四拾貳匁七分壹厘貳毛

一　金五百両　　自在心院宮御取替金御返納

一　金四万両　　紀伊殿御取替金御返納

一　金千五百両　　清水殿御拜借金御返納

一　金九百五拾両　　民部卿殿御拜借金御返納

一　金千七百七拾五両　　右衛門督殿御取替金、幷御拜借金御返納、

日光御法會ニ付
一　金九百五拾壹両貳分　　道中筋宿々人馬繼立圖役金納
　　銀六拾九匁六分八厘貳毛

一　金貳百五拾貳両　　米價引立方ニ付、領分收納米之內、圍方被ニ仰付ニ候諸方江拜借金之內返納、
　　銀三拾貫四百拾八匁五分七厘八毛

一　金拾両　　濱地實加銀御貸附、幷町人共ゟ上ケ金之利金、
　　銀四百六拾壹貫七百八拾七匁六分八厘四毛

一　金六拾両　　元御金改役後藤庄三郎江御預金之內、諸向借入金返納、

一　金千六百四拾壹両
　　銀拾壹匁九分八厘壹毛　　荒銅俵物代佐渡奉行納

一金千拾八両貳分　宿驛爲御手當御貸附利金
銀百四拾五匁貳分

一金壹万五千七百七拾六両壹分　御前貸、其外御取
銀七百九拾六貫三百目六毛　替金等諸返納、
日光御宮御參詣ニ付
金壹万九千四百六拾七両

一銀八拾八匁六分三厘貳毛　品々御入用請取過返納
錢貳百四文

一金貳万八千四百貳拾三両貳分貳朱　西丸御普請ニ付年割御手傳、并諸向其外御料所村々上納金之分、
銀三拾五匁

一金千両　松前志摩守上ゲ金

一金百三拾九万千九百四拾四両壹分　小判壹分判吹直、并貳朱金吹立、後藤三右衛門納、
銀貳拾八匁五分三厘

一金貳百八拾八万三千四百貳拾貳両三分　壹分銀吹立銀座納

一銀壹万八千八百貫六百壹匁　通用銀吹直銀座納

一金三千両　五両判吹立御益金納

一金貳万両　小判壹分判吹直御益金納

一金八万両　二朱金吹立御益金納

一金貳万両　百文錢吹立御益金納

一銀千八百貫目　通用銀吹直御益銀納

金壹万貳千六百四拾貳両三分貳朱

一銀五貫三百九拾目五分四厘六毛　臨時品々納
灰吹銀五百拾九匁六分壹厘七毛
鍰貳百六拾八貫七百貳拾七文
一金八千五百四拾五兩貳朱　寅御年貢金之内ゟ、道中方除金引取候分、
銀三拾八貫八百目五分七厘
大判百壹枚
筋金八貫五百九拾四匁
一灰吹銀貳百五拾六貫三拾四匁七分四厘四毛　御有高之内、并御遣方ゟ引取候分、
鍰壹万四千八百六拾四貫百七拾貳文
大判百壹枚
金四百七拾五万八千七百八拾五兩三分
銀貳万貳千四百五拾九貫七拾三匁九分壹厘八毛　別口元ニ立候分

都合
筋金八貫五百九拾四匁
灰吹銀貳百五拾六貫五百五拾四匁三分六厘壹毛
鍰壹万五千百三拾三貫百七文

右拂方
金七千九百三兩壹分　伊勢兩宮式年御造營料
銀六拾八匁三分
光格天皇御葬送并御法事其外
銀拾貳貫三百七拾八匁六分　品々御入用
東照宮御誕生支干御相當
金四百貳拾四兩貳分　御祝儀御入用

銀六匁

久能山御宮并諸堂社御修復御入用殘金渡
金三百六拾五兩貳分
銀拾貫五百貳拾六匁貳分

日光御宮御靈屋并諸堂社其外御修復御入用殘金渡
金八千五百四拾六兩
銀貳拾貳貫百九拾七匁壹分

增上寺文昭院樣御靈屋御廟向其外御修腹御入用
金三百七兩壹分
銀五匁七分

上野大猷院樣、嚴有院樣、浚明院樣、文恭院樣、御靈屋御建繼御廟向其外、御普請御入用殘金渡
金四千百四兩貳分
銀五貫貳百八拾貳匁壹分

西丸御普請品々御入用殘金渡
金壹万七百七拾八兩三分
銀壹貫三拾三匁五分八厘壹毛

外櫻田御門外ゟ清水御門外迄、御堀端小土手損樣普請御修復御入用、
金八百六拾壹兩壹分貳朱
銀三匁九分

市ヶ谷火消御役宅向其外御修復御入用、
金七百四拾貳兩
銀拾四貫四百六拾目

上野大佛堂燒失跡御普請御入用
金九百六拾壹兩三分
銀拾壹貫七百貳拾目七分

大坂御城内八小屋總御修復御入用
金貳千百九拾五兩
銀六拾壹貫貳百三拾壹匁

金三千八百八拾六兩　學問所總御修復御入用
銀四拾貳貫九百三拾三匁三分
金五百三拾兩　頒暦調所、并御道具御修復御入用
銀三貫百四拾目
金八百貳拾八兩貳朱　小菅納屋御廠御普請、其外御入用、
銀三貫五拾貳匁五分
金千八拾八兩　御船御修復御入用
銀百四拾七匁九分
日光御宮御参詣ニ付
大判百枚
金九万貳千七百八拾兩貳朱
銀四百九拾壹貫七百四拾四匁貳分貳厘五毛　品々御入用
灰吹銀貳百七拾八匁貳厘
錢壹万四千壹貫九百文
御簾中樣御入輿ニ付
金七百三拾八兩三分
銀六貫貳百拾四匁　品々御入用殘金渡
精姫君樣御下向ニ付
大判壹枚
金千壹兩三分貳朱
銀貳拾四貫貳百七拾九匁九分　品々御入用殘金渡

金五千貳百六拾三兩三分貳朱　奥向別段御入用
銀貳拾四匁五分

峯壽院樣
金百兩　御納戸金御不足ニ付被進金

峯壽院樣
金五百兩　御手元金御内々被進金

峯壽院樣
金千五百兩　御台力金御不足ニ付御足金

峯壽院樣
金千三百三拾五兩三分　臨時御入用
銀四匁九分

松榮院樣
金貳千兩　御住居御燒失ニ付被進金

松榮院樣
金千八百九拾九兩　御道具御燒失ニ付新規出來御入用
銀六百八拾八匁
灰吹銀六貫目

末姫君樣御產
金千貳百五拾壹兩　御入用
銀五匁七分

誠順院樣

金貳千貳百拾四兩貳分　臨時御入用

文恭院樣御法事

金千五百六兩三分

銀三拾貫三百七匁七分　品々御入用

錢壹貫五百文

泰明院樣 蓮玉院樣 御非送御法事

金三千七百四拾五兩三分

銀五拾壹貫六百五拾壹匁貳分　品々御入用

錢壹貫五百文

金九百三拾八兩貳分

銀三拾六貫六拾六匁貳分　御法事品々御入用

錢四貫五百文

金百八拾貳兩　知恩院宮御修學在府中、御賄向其外御入用、

銀貳拾九貫九百五拾四匁四分

金三拾兩　寺社被下金

銀八貫六百目

金三千貳百五拾三兩　屋敷引料

金五千七百八拾五兩三分

銀四拾六貫七百四拾五匁四分　臨時遠國江被遣候者、宿代其外被下金、

金貳千百九拾九兩壹分
銀六貫百四拾九匁九分
臨時御普請役在出其外諸雜用

金四千四百八拾五兩三分
銀三百六拾壹匁八分
上水方御取替金

金九百九拾兩
銀四匁四分
鍛冶橋御門外通御堀浚御入用

金八百三拾八兩
銀拾四匁四分
大川中洲切通浚御普請御入用

金三千兩
錢千百八貫四百五拾五文
利根川分水路印旛沼試堀御入用

金八千七百貳拾九兩
東海道府中宿通船路御普請御入用

金三百五拾五兩
駿府御城付御武器、去卯ゟ五ヶ年割御修復御入用、

銀拾六貫四百三拾目
淀川通臨時堀浚御普請御入用

金五千八百四拾兩
江戸大坂御城最寄、私領上知ニ付御手當金、

金五千七百七拾五兩貳分
銀壹貫七百貳拾七匁壹分
道中筋道橋御普請其外御入用幷宿拜借、

金壹万貳千九百拾九兩
銀貳拾五貫三百六拾九匁六分
國役幷川々御普請御取替金

金千四百七拾壹兩三分
銀三匁八分
夫食種貸農具代、幷御救其外小屋掛拜借、

金三百貳拾両三分
銀拾六匁壹分
荒地起返、小兒養育料其外拜借、

金千五拾七両貳分
銀九拾三匁七分
荒地起返、小兒養育料其外御手當、

金貳万両
紀伊殿御取替金

金壹万両
水戸殿勝手向永續御手當金

金五千両
水戸殿勝手向難澀之旨を以、別段被遣金、

金三千両
右衛門督殿御取替金

金千八百両
田安一位殿江被遣金

金八百六拾三両貳朱
民部卿殿附過人之分

銀九匁五分
御宛行其外被下金

金三千両
恭眞院殿御手當金

金九百七拾壹両貳分
銀貳拾七匁貳分
先君下向ニ付品々御入用

灰吹銀百四拾五匁壹分貳厘四毛

金五千両
御改革御趣意行届候ニ付、女中一同江被下金

金四百五拾両
京都江被遣金

金百拾五万五百七拾六両貳分
銀七拾壹匁六厘
筋金八貫五百九拾四匁
小判壹分判、并二朱金爲吹元後藤三右衛門渡、

灰吹銀貳百四拾七貫拾壹匁、　貳朱金爲差銀、後藤三右衛門渡、

金貳百八拾八万三千四百貳拾貳兩三分　壹分銀爲吹元銀座渡

銀壹万八千八百貫六百壹匁　通用銀爲吹元銀座渡

金四千四百八拾六兩　吹直金銀引替織立ニ付、東海道宿々御手當金、

金壹万四千百兩　大坂御廻木土州諸材御買上代

金八百兩　菜種綿實御買上代

金千七百三拾兩　御菓子御用ニ付、砂糖御買上代、

銀貳拾九匁壹分

金壹万五千八百七拾七兩貳分　御廣敷向別段諸色御買上物御用代、幷人足賃、

銀五貫百三拾壹匁四分

金四百六拾七兩壹分　御廻米納方會所、其外諸入用、

銀五貫百六拾九匁

文恭院様

金貳千兩　爲御弔詞朝鮮譯使渡來ニ付、宗對馬守江御手當金、

金四万三千六百六拾五兩壹分　諸拜借

金三萬兩　淺草猿屋町會所別段御貸附金

金五千三百四兩　金座積金御貸付元利金之内金座渡

金壹万貳千兩　銀座永積手當御貸附元利金之内銀座渡

金貳万兩　札差共貸出金御主法替ニ付御下ゲ金

金千七百八拾三兩貳分

銀七匁六分
金五千百五拾七兩壹分
銀拾壹匁貳分
銀九百八拾八貫三百八匁三分九厘
銀貳百拾九貫百五拾貳匁
金千百貳拾貳兩三分
銀三百五拾六貫九百貳拾壹匁四分
金千四百八拾貳兩貳分
銀拾七貫八百貳拾五匁四分
金三百兩
金百拾壹兩貳分
金貳千六百貳拾八兩貳分
銀壹貫三百八拾壹匁六分
金三千兩
銀九拾壹貫九百九拾目
金五千八百四拾兩
金三万九千六百八拾九兩壹分
銀五百四拾七貫百八拾貳匁壹分
灰吹銀三貫百貳拾目貳分壹厘七毛
錢拾五貫貳百四拾八文

御國恩爲冥加、江戸町人共差出金之内御下ゲ金、
米價引立方ニ付、江戸町人共差出候御用金之内御下ゲ金、
米價引立方ニ付、大坂最寄町人共差出候御用金之内御下ゲ金
大坂町人御用金之内御下ゲ金
囲米穀代、御料所村々差出金之内御下ゲ金、
評定所諸入用
人足寄場諸入用
房州總州御備場諸入用
新潟其外御備場御入用
御前貸其外御取替金
地所引替ニ付神職修驗江被下金
品々臨時御入用

大判百壹枚

金四百五拾壹万三千百五拾九両壹分

拂合　銀貳万千九百九拾八貫四百六拾壹匁七分五厘六毛　臨時御入用之分

筋金八貫五百九拾四匁

灰吹銀貳百五拾六貫五百五拾四匁三分六厘壹毛

錢壹万五千百三拾三貫百七文

右元拂差引

金貳拾四万五千六百貳拾六両二分

銀四百六拾貫六百拾貳匁壹分六厘貳毛　餘ル

以上

辰十二月

〔弘化元辰年米大豆納拂御勘定帳〕巳〇弘化二年十二月

御勘定方

卯年御物成幷辰年諸向納戸之覺〇中略

別口納

一米七千四百拾六石七斗八升七合五夕　臨時御買上米

一米千五百石
　粟稗貳百拾四石八斗貳升五合　御有高之内、幷御遣方ゟ引取候方、

都合　米八千九百拾六石七斗八升七合五夕
　粟稗貳百拾四石八斗貳升五合　別口元ニ立候分

右拂方

國役金

禁裏江
米三百石　御足米
東宮江
米八百石　被進米
米四百石　靈司殿エ被進米（民部卿殿附、過人之分御宛行、）
米貳百九拾壹石五斗五升
米七百六拾三石七斗四升五合　町方會所渡
菜種貳百拾四石八斗貳升五合　油絞方渡
拂合
米貳千五百五拾五石貳斗九升五合　臨時御入用之分
菜種貳百拾四石八斗貳升五合
右元拂差引
米六千三百六拾壹石四斗九升貳合五夕　餘ル
以上
巳十二月

〔台德院殿御實紀十六〕慶長十六年六月朔日、先に京にて仰出されし大内築地の課役、關東のともがら、八尺間一間に銀二貫五百目とさだめ、その銀を京職板倉伊賀守勝重並に大工棟梁中井大和守正次のもとに納むべしと令し下さる、

〔勘定所條例二〕國役普請之儀、享保五子年、被仰出候國分川々金高割合定法、左之通、
一國役掛リ之儀、御料私領共に、入用にても、或は御料、或は私領計にても、川々之入用末に記し候定之金高に及候へば、國役に割合候事、〇中略

一國役割合候節、御料之入用高は、拾分一公儀御入用に相立、其跡を國役に極、私領願候て普請有之候分は、村方百石に付拾兩ヅヽ爲差出、總入用高之内、右之分引之、殘高之内、拾分一は公儀御入用に相立、其殘を國役高に可相極事、○中略

一萬石以上國役普請願候節は、其入用分、銀高にて可成分は、願場所之外、領分にても普請其外減普請、又は田畑損亡之様子、家來幷見分之ものへも承屆、其品に應じ可相伺事、

但小給所之分は、知行之場所狹く候間、家來へ相尋候に不及、見分之もの承屆、其品に應じ可相伺事、

一貳拾万石以上之領知之内は、其領主にて普請いたし候故、國役割も懸り不申候事、

但國續にて無之、貳拾万石以上之領分離候て有之分は、貳拾万石以下之私領に准じ、願有之候へば、國役普請に成候、依之右離候領知には、其領知之内、普請無之候とも國役割合相懸候事、

一國役高極候事、正月ゟ十二月迄、國役に可成川々清帳出候内にて、春之國普請、又は四川之ごとく、御料私領定例割合有之分を相除、殘金高國役に可成高に及候へば、翌年之春國役割候事、

但秋之出水にて普請出來、右之内水溜等之普請御金請取、其年仕立と云共、殘普請翌春仕立清帳差出候へば、大水溜之分も、翌年之國役可割合事、

一國役金壹万兩餘に及候時は、右懸り候國々之分、御藏前入用、御傳馬宿六尺給米之掛物可差免、其年之國役兩年に懸候時は、右懸物兩年可差免事、○下略

○按ズルニ、水利ニ關スル臨時費ノ出入ハ、水利篇ニアリ、

〔嘉永明治年間錄〕十六慶應三年九月、皇后宮造立ニ就テ國役金ヲ命ズ、

美濃守殿○老中稻葉正邦渡書付　准后御方立后被仰出、大宮御所新規御造立相成候に付、右御普請御

獻金

入用、先格は萬石以上の內へ、御手傳被仰付候へども此度は御料所、並諸大名領分寺社領へ國役割被仰付候間、村高百石に付、金三分の割合を以て、御料は御代官御預所、私領は領主にて取立、納方の儀は、御所御用取扱大久保主膳正、星野豐後守へ承合、當卯年中上納可致、但寺社領は、最寄御代官へ相納候ても不苦候、

右之趣、御料私領寺社領とも、不洩樣可被相觸候、

〔續泰平年表〕天保九年三月廿六日、榊原式部大輔西丸御普請に付、上納金仕度之旨、內願之通達御聽、尤之儀被思召候、依之金二萬兩被仰付、水野出羽守、同斷金壹万兩上納、是より大名御旗本町人迄願候、依て上納金凡百二十六万千五百五十一兩餘也、此外材木金銅瓦迄鐵石等獻上數多有之、

〔御普請付類二〕天保九戌年

西丸御普請に付ては、御用途莫太之事に候間、御三家始御手傳被仰出候、就ては萬石以下之面々、諸役人御番方寄合小普請、都て五百俵以上勤仕幷不勤共、高百俵に付金二兩ツヽ、五百俵以下百俵以上勤仕幷不勤共、高百俵に付金壹兩二分ツヽ之割合を以、上納金被仰付候間、當冬中迄に上納可有之候、納方之儀は、御勘定奉行江可被談候、

右之通、万石以下之面々江可被相觸候、

三月

〔嘉永明治年間錄二〕嘉永六年二月十八日、西丸土木ニ就テ、諸侯ヨリ金ヲ幕府ニ獻ズ、

諸家姓名略之、高壹萬石に付、金五百兩の割、

十一月六日、品川海中臺場新築ニ就テ、獻金ヲ農工商ニ諭ス、

御代官齋藤嘉兵衞廻村先、品川宿本陣へ村々役人身元相應の者呼寄申諭、　近來夷國船度々渡來、其次第に寄、安危にも相拘候儀に付、西丸御普請を始、臨時の御出方相湊ひ候折柄に候得

共莫大の御入用厭せられず、內海へ嚴重の御臺場御取建仰出され、猶追々御處置の次第も有ㇾ之候積、國家の安危、四民の憂にて、武家へは武備一途に力を用可ㇾ申旨仰出され、農工商の儀は、別段御沙汰も無ㇾ之候得共、防禦筋に於ては、四民共力を盡し可ㇾ申儀に付、右體不ㇾ容易筋を會得致し、且つ昇平二百年來の御恩澤に浴し、御備筋御入用の內へ、身分相應の上納金相願度內存も有ㇾ之候はゞ可ㇾ申立、今般呼出し候者の外にも、身元相應の者於ㇾ有ㇾ之は、右の趣、村役人共より厚く可ㇾ申論候、

十二月廿七日、獻金ヲ大坂町人ニ諭ス、

去子年、西丸御普請に付ては、御用途莫大の處、速に御出來相成、右は諸家より御手傳、幷依ㇾ願上納金、其外萬石以下の面々、高割上納金をも仰出され候處、今度浦賀表へ異國船渡來に付、爲ㇾ御固諸大名仰付られ、右に付ては、公儀御入用若干の儀に候へども、右の面々失費も不ㇾ少、其上防禦武備の御世話も有ㇾ之候に付、右御手當幷高割上納金等の儀も、都て御免仰出され、西丸御普請御入用は、皆以て御出方相成候儀、殊に近年夷國船度々江戶近海へ渡來に付、防禦御備の儀、嚴重御手當無ㇾ之候ては難ㇾ相成候儀、是又如何程の御用途に至り可ㇾ申哉も難ㇾ計然る處此度の、御大喪○是年七月、德川家慶薨、引續き御代替將軍宣下○是年十月、德川家定爲二將軍一、等の御大禮、都て御省略難ㇾ相成、就中右海岸筋の御入用の儀は、前後見合も無ㇾ之程の儀にて、不ㇾ容易之大御用途一時差湊候儀、是又前後例も有ㇾ之間敷、御城代○大坂を始め自分共、一統深く恐入痛心致し候、大坂表の儀は、諸國無雙の豪富の者共も群居致し、是迄度々御用金等相勤、當時年割御下げ戾し中とは申ながら、此御時節柄、徒に見分致し居候儀は不ㇾ相成場合に付、此度猶又御用金等の御沙汰可ㇾ有ㇾ之趣に候得共、前件の通り、不ㇾ容易御用途差湊の折柄、誠に不ㇾ得ㇾ止事次第に有ㇾ之候、然ば改て仰出され無ㇾ之內、其方共心得を以て、御國恩の冥加を辨へ、銘々身分相應上納金相願ひ、今般の御用途に御

差加にも相成候はゞ、御治世太平の御恩澤に浴し、安逸の渡世相營み候冥加を辨へ候は勿論、殊に當所の町人共、抽る奇特の取計は、諸國一體の手本にも相成り、公儀御用途御繰合の一端にも相成候はゞ、其方共身分を以て、御手傳相勤候も同樣の儀、一廉の御奉公甲斐相立、如何計規模の筋に可有之候、然るを萬一心得違猶豫致し、上より被仰付候樣にては、折角の誠意の規摸を失ひ候而已ならず、如何にも御恩澤の御時節柄を不辨樣にて、常に有德に相暮し、豪富と名を唱候詮も無之、誠に以て殘念成次第にも有之、厚く御思慮の上被仰含候次第に有之、自分共も再應熟考を加へ、右等の趣申諭候條、能々會得いたし、篤と勘辨の上、夫々身分出格の上納金相願候樣可致候、改て申聞候迄も無之候へども、御城代は當所の管領職、町奉行は町方其外支配にて、上の御爲は勿論、下々の爲筋をも存じ、勘辨の上、大坂の者共撫育引立て方の儀に付は、兼々厚く存含、專ら申談居候一儀も有之、旁此度の儀も、上より御用金等被仰付候樣にては、後年に相成、別て此度の儀は、是迄の御振合とも違ひ、一際御國恩冥加を相辨へ候廉、不相立候ては難相成場合にて有之、旁其方共心得を以て、上納金相願候はゞ、一入奇特の心底も相貫き、公邊御用途御繰合る相成、其方共自然規摸も相立、先祖以來の御治世の御恩澤を蒙り、冥利に相叶、銘々家名相續は勿論、行末子孫の後榮にも相成候事に付、當座一果の私情抔に拘り、躊躇致し候儀には有之間敷候、是等の儀御城代も深く御勸考、自分共も厚く談判に及び、改て御用金不被仰出以前、前件の趣申諭候條、其旨相心得可申事、當時海岸防禦筋の儀、天下國家を被爲安候御仁惠の大本にて、彼是厚く御配慮被爲在、且萬石以下御旗本の面々、勝手向不如意の由達御聽、此度拜借金被下金をも仰付られ候次第、莫大の御入用、且又自然海運に便利を失ひ候ては、是又不容易儀に付、所々通船路堀割、又は陸地運送等の儀、夫々御手當も無之候ては相成間敷歟、旁大造の譯にて、幾許の御用途に至り可申歟、實は難計、公儀には末々の者共迄、往々安

穏に被成遣度との御仁惠にて、斯迄御苦勞被遊候事に候條、疎遠に相心得候ては、實以て冥利に背き候儀と存候、士農工は各其職有之候て、有事時は畏りて歩役等に苦み、心力を盡し候へば、商人は取分軍事に預り候儀も無之、産業を守り、太平の御恩澤に浴し、衣食住は勿論、何不足無之、安穏の渡世罷在、いづれの時、此御恩を報じ可申哉、兼て御國用を辨候段、當然の儀に可有之、旁如此御時節、一廉の御奉公不相勤候ては、不叶筋と存候事、

右之通の譯にて、一體於公儀も、非常の御手當向は兼て被爲在候儀に候へ共、前條申論候通り、彼是不容易御用途、一時の御差湊に相成、素より天朝へ被奉對、万民等へ被爲對候ても、御政務筋、暫時も難被差置儀、事實不得止事次第、一同深く恐れ入、痛心致し候て、實に此度は日本國中上下一體の力を致せ、御安心の場合に至候樣、武家は武家丈け、百姓は百姓丈け、町人は町人丈けの粉骨を盡し、御國恩を可奉報は、此御時節に付、右等の趣厚く相辨へ、銘々彼是の私情を相除き、御爲筋一途に相心得、速に受致すべし、但一朝一夕の儀に無之候間、銘々篤と勘辨の上、否の儀、封書を以て可申上候、尤今日罷出候內論の趣、肺腑に銘し、會得致し候ものも有之候はゞ、前後左右の斟酌に不及、速に受可致、追て御賞美の節、其心得可有之儀に候事、

右論の趣相分りがたく儀も有之候はゞ、無遠慮可申出、幾度も申論し可遣事、

右大坂町奉行、石谷因幡守、佐々木信濃守、申渡之、

〔嘉永明治年間錄 八〕安政六年十二月朔日、江戸本丸炎上ニ就テ、上金及ビ獻品ヲ諸藩ニ命ズ、

金五萬兩	加賀中納言	金三萬兩	松平陸奥守
金二萬兩	松平肥前守	延鐵壹萬五千貫目	南部美濃守
金千兩	松平織部正	疊表存寄次第	阿部伊豫守
金五百兩	中川修理大夫	金三百兩	加藤出羽守

金五百兩　京極佐渡守　金三百兩　毛利淡路守
上納金存寄次第　堀丹後守　御屏風一雙　南部丹波守
金一萬兩　有馬中務大輔　金四千兩　牧野備前守
金三千九百兩　戸田綏之助　金三千兩　秋元但馬守
金千七百兩　牧野豊前守　金千五百兩　永井肥前守
金千五百兩　黒田伊勢守　金千兩　石川若狹守
金八百兩　阿部因幡守　丸太八十本、角五十本、　竹腰兵部少輔
右之通被仰付
金百兩　高家今川駿河守　金百兩　高家大澤右京大夫
金六百五拾兩　堀田豊前守　金五百兩　稲葉兵部少輔
金五百兩　松平丹波守　金五百兩　本庄宮内少輔
金二百兩　白須甲斐守　金百五拾兩　津田美濃守
金二百五拾兩　近藤遠江守　金六拾兩　御普請奉行松平上野介
金二百五十兩　新番頭松平信濃守　金六十兩　大久保市郎兵衞
金八拾兩　大久保甚右衞門　金六十兩　三好山城守
金八拾兩　新庄美作守　金八拾兩　松下大學
金地御屏風十雙依内願獻上　松平下總守　同斷ニ付金三千兩上納　小笠原右近將監

〔嘉永明治年間錄十四〕慶應元年五月、諸國ノ寺社ニ諭シテ金ヲ上納セシム、

十八日、寺社奉行達書、此度被遊御進發候に付ては、莫大の御用途に有之、是迄迚も御物入打續き候折柄に付、諸寺社の向も、御國恩を相辨じ、上納金願出候樣、諸宗觸頭、並に吉田白川兩家

執役所へ、無急度及内論置候間、追々上納金願出候様可相諭旨、

〔嘉永明治年間録十六〕慶應三年九月廿七日、萬石以下ノ諸士ヲシテ、采地租税ノ半限ヲ上納セシム、

美濃守殿〇老中稲葉正邦達　今般無據御場合、御軍制御改正相成り、右は兩度の御上洛、其上御進發御物入續きに付、不得止事次第にて、此度一萬石以下二千石迄、知行所收納高の内半高、十ヶ年の内御借上げ被仰出候、尤も馬喰町其外共、拜借金は無利足十ヶ年据置に候、且小普請金等も御免相成候、其段厚相心得可申、委細の儀は、書付を以て相達候、

美濃守殿〇稲葉正邦周防守殿〇松平康英渡、書付七通、　萬石以下知行取の面々へ、軍役の儀、慶安度御定も有之候へ共、近年諸物價騰貴、一同可為難儀と思召、先般減少の上被仰出、海陸の兵備、專ら御世話有之候へ共、今一層御擴張無之候ては難相成、時勢無餘儀、今度慶安度御定の人數可差出旨、可被仰出候處、御軍制一變の折柄、自己銘々の兵にては、規律一様相成兼候に付銘々知行高物成の半高、軍役として十ヶ年間金納被仰付候、上納割合の儀は、御勘定奉行へ可承合、依之軍役金高納年限中、馬喰町を初め、諸役所御貸付金、都て無利足据置に可被成下、寄合小普請の面々には、年限中役金上納をも御免被成下候旨被仰出之、但二千石未滿の者ば、此度被仰出候軍役金上納に不及候、是迄の通可相心得候、〇中略

十月、江戸諸問屋ニ用金ヲ命ズ、

米穀地廻り問屋と相唱候もの凡五百軒、右のもの共より、十月中金壹万五千兩、十一月廿五日限り金五万兩、十二月十五日限り金五万兩、御用金上納被仰付之、

外に材木問屋、鹽問屋、炭薪木問屋、栄種問屋、酒問屋等にて、金十八萬兩上納被仰付、其餘難勝計、略之

用途節約

○按ズルニ、用金上納ノ事ハ、雜税篇ニ載セタリ、參看スベシ、

〔武家嚴制錄四十〕一御賄方御條目

定

一御賄方萬事御入用、無入念費無之樣に無油斷可申付事、〇中略

萬治二年九月十日

〔享保集成絲綸錄十九〕寶永元申年十月

覺

去年より何角と御物入共、御手づかへ被成候故、御切米又は御拂方被下候事も、至來年候はゞ、差つかへ可申候、何方よりも出可申處無之に付、御用金差上候積に各申合候、此上罷成たけは諸事請取物、又は御拂方共に、何によらず減少候樣に、無遠慮吟味可仕候、たとひ少分之儀にても積り候ては、御勝手之爲に罷成事に候間、隨分精を入、相考可申候、只今迄仕來候儀にても、當分相止障に不罷成儀は、格を改め可申候、二三年も相止候て不苦儀は、其趣を相考、存寄之趣、其支配支配迄書付可差出候、以上、

十月

寺社奉行　御留守居　大御番頭　御書院番頭
大目付　町奉行　御勘定奉行　御作事奉行
御普請奉行　長崎奉行　山田奉行　日光奉行
西丸御留守居　火消役　御目付　御船手
御納戸頭　御賄物奉行　小普請奉行　御右筆組頭
道奉行　御馬方　御賄頭　御細工頭

御臺所頭　　御同朋頭　　御數寄屋頭

右之分江達之

〔有德院殿御實紀十四〕享保七年五月廿八日、宿老少老芙蓉の間に出て儉約の令を傳ふ、近年國々しきりに風水の害ありて、租稅とゞこほり、倉廩空乏なれば、御家人の俸祿、工商の物價下し賜はりがたき事聞しめされ、御心を惱さるゝといへども、おぼしめすまゝに行はれざりしに、去年はわけて凶荒し、國用あまた費ければ、御家人の廩祿も減じてたまはりしをもて、御みづからのうへにも省約をつとめさせ給ひ、去年減じたる米金を、この春殘なく賜はりしかど、かうやうのありさまにては、この冬もまた減省仰下さるゝ事あるべければ、人々専ら儉約をつとめ、よく心がまへしてあるべしとなり、

〔享保集成絲綸錄十九〕享保七寅年五月

覺

總て近年諸國風水之損毛相續、御藏納方不足有之に付、諸旗本御給米金渡方、幷諸商人江之御拂方等迄、及遲滯之由達御聽、彼是被仰出候品雖有之、當分之儀にて、大勢之御給米金渡方行居兼候處、去年は諸國別て不納、其上堤川除等之破損所多有之、難捨置、數ヶ所御普請被仰付候、夫のみならず、御料所之百姓共、及飢渇候者共江御救米被下置候、其上於御當地御城廻りは不及申、其外所所破損數ヶ所有之、臨時之御物入多、諸職人御拂等も不足に付、去年冬御切米金之內、少々相減候故、別而御勝手向減等之儀被仰付候、扨又御料所之內にても、運送惡敷所は、御年貢米其所にて、所之相場に相拂、過年下直に相納事に候、然共御給米金渡方は、御當地之時相場にて被下候故、彼是御失却多候、尤御切米等之儀は、別て滯無之樣にとの思召故、當春に至り、去冬御切米金減候分も、不殘被下置候、夫故當春借之儀も、いまだ不殘は不相渡候、依之段々諸引ヶニ成、當夏御借米も早

速渡候手當難成程之事に候、右之通之儀に候得ば、當冬御切米渡方、必定可爲不足候、然ば去冬之殘米金、當春被下候分、當冬相減被下にて可有之候、且又此上若損毛等有之においては、大勢之御人、悉難被宥儀にも成行候ては、公私之難儀、以之外成事に候、依之今度和泉守（○老中水野忠之）御藏入幷諸向御入用等吟味之儀被仰付候、大身小身之面々、自分之勝手之儀、萬事相減候覺悟專要に候條、右爲心得被仰出之候、以上、

五月

〔享保集成絲綸錄十七〕享保十七子年十二月

御勘定奉行江

今年西國中國邊作毛、夥敷虫付候て、御料は夫食、私領も拜借等被仰付、旁以御入用多候條、來年は御作事方、小普請方、御普請修復共に相止候樣に相心得可申候、無據分は、吟味之上申付にて可有之候間、兼而可有其心得候、

右之通、御留守居、御作事奉行、小普請奉行江申渡候間、可被得其意候、

十二月

〔寶曆集成絲綸錄十七〕延享三寅年十二月

去年以來御入用多、且來々辰年朝鮮人來朝付ては、打續御物入多有之事に候、當年之儀は、定式之御入用、幷御修復等、難差延付、伺出候分申渡候、來卯年より之儀は、一兩年之間、別而諸役所定式之御入用も、何不限致勘辨、可成丈過半減少候心得可有之候、臨時之儀は、品により難差延事も可有之に付、兼而定式之內減量候樣可被致候、

一御城內外御修復場所、是又可成だけ可被差延候、實に難差延所計、取繕可被仰付候、

一寺社御修復神器佛具等に至迄、前條之通可被相心得候、

右之趣、一通に不ㇾ相心得、役所限に巨細吟味相遂候儀專要候、

十二月

〔憲教類典〕五ノ二 御儉約 寶曆五乙亥年二月廿九日

御目付江

一諸向相ゆるみ、一兩年別て御入用相增候に付、定式之內減候而書出可ㇾ申候、右掛り一色周防守〇勘定奉行 稻生下野守、正木大膳、〇以上二人並目付 足田庄九郎、橫山傳右衞門〇以上二人並勘定吟味役 被ㇾ仰付候間、委細之儀可ㇾ被ㇾ談候、

二月

右之趣、向々江可ㇾ被ㇾ相達候、西御目付へも可ㇾ有ㇾ通達候、

〔天明集成絲綸錄〕二十二 寶曆十三未年十月

御勘定奉行江

諸役所御入用高、當六月積立差出候ゟ、追々相當候趣ニ付、猶又帳面書付等被ㇾ差出候諸役所におゐても、隨分此上御入用嵩不ㇾ申候樣ニ勘辨之儀、書付ヲ以達方之儀被ㇾ申聞候、併諸向ゟ斷物等出候時々、御勘定所江不ㇾ相下品は無ㇾ之候得ば、第一於御勘定所其時々被ㇾ心懸候はゞ、此節に至り、諸役所江俄に多懸候樣被ㇾ申聞候儀にも無ㇾ之哉ニ付、向後諸斷物等之吟味、別而相糺被ㇾ申候はゞ、自然與諸向御入用高減も相付可ㇾ申事ニ候、尤諸向江も書付を以相達候之間、其向々可ㇾ被ㇾ談候、

十月〇中略

天明三卯年十二月

近年御料所損毛打續候上、當卯年關東北國筋不作にて、御收納相減候に付、來辰年ゟ來ル戌年迄七ヶ年之間、諸向御儉約之儀被ㇾ仰出候、右に付萬石以上以下共、七ヶ年之間は、依ㇾ願拜借等之儀不

被及御沙汰候、

但御役に付、定例拜借之儀は、是迄之通に候、

右之趣向々江可被相觸候

十二月

〔天保集成絲綸錄八十九〕寛政元酉年九月

御勘定奉行江

近年凶作等打續、不時御物入及莫大候に付、去々未年ゟ三ヶ年之間、嚴敷御儉約被仰出候處、諸向御役人末々迄、一統出精いたし、御取〆宜敷相成候に付、去年去々年、至而御操合せ不宜處、格別之御差支も無之儀は、一統出精之儀に思召候、乍去連年打續御操合せ不宜、殊に以前よりは御取箇も減少いたし、御入用は相嵩候付、年々御不足有之處享保之度、御世話有之候御有餘を以、年々御繰合有之程之儀に付、急速御勝手向舊時に難被復候、依之來戌年より來ル寅年迄五ヶ年之間、猶又御儉約被仰付候間、一統出精可被相勤候、近年は物每手重に相成候に付、無益之費用も有之、御用辨も不宜候、見分書面體の儀に拘り、實事取失ひ候儀は、御趣意に背け候義に候、右等之趣被相辨、成丈御費無之樣可被心得候、被仰出候御用度にても、御費用之筋は勿論、御手元之儀にても、御儉約之筋心付候儀は、役所限之存意を以可被申出候、瑣細利勘之筋をのみ專一といたし候得ば、吝嗇之趣にも相成候儀は心得可有之儀に候、只一時一己之功に不拘、實事之御儉約立行候儀專一に候、

酉九月〇中略

寛政六寅年十月

大目付江

去ル酉年御儉約之儀被仰出、當寅年御年限に候處、思召之外、未御勝手御操合も不被行屆候に付、猶此上來ル子年迄十ヶ年之間、是迄之通御儉約被仰付候旨御沙汰に候、〇中略

右之趣、可被相觸候、

十月

〔泰平年表大御所〕文化八年十二月十六日、近來度々御儉約被仰出候へ共、不時の御物入も莫大にて、御勝手向御不都合の儀に候、依之來申年より五ヶ年を限、猶又嚴敷御儉約被仰出、御手元の義を始、總て格別に御省略の事に候間、御入用方面々は不及申、諸向此上別て出精致、少も失費無之樣心懸、年限中御儉約御趣意行屆候樣可被致候、引續如此被仰付候事は、思召にも不應候得共、後に非常の御備、又は御家人御扶助等の御手支も難計、不容易事に付、一通ならず御減少有之、立直候樣にとの御沙汰に候條、被存其趣、自分々々共、彌無油斷節儉相用候樣可被致旨被仰出、

〔天保集成絲綸錄八十九〕文化八未年十二月

大目付江

一諸拜借之儀、不依何事容易に御沙汰有間敷候、遠國御役人等、御役被仰付候節は、是迄之通拜借可被仰付事、

但是迄拜借有之面々、返納年限に不拘、成丈早々可有返納候、勿論差延願は難成候事、

一寺社御修復願、并御寄附物等も不被及御沙汰候事、

一御臺所被下面々、御料理之品數之內被相減、且又五節句三日之外は、御酒被下間敷事、

一御城內外幷上野增上寺、其外總て御修復所破損有之候共、成丈御修復被差延候事、

但役屋敷等は、成丈自分にて取繕置可申事、

一諸役所定式御入用金、并筆墨紙、其外受取物之分、是迄受取高之內、精々勘辨いたし、格別減方を

附、書面を以可被申聞事、

一諸役人、近來追々相增候分、并定人數たりとも、多人數之分可被相減候、頭支配有之處は、致了簡可被申聞候、且又不差急御用向出役等は差延可申事、

一諸向臨時御用相勤候面々被下物之儀は、相減被下候品も可有之事、

右之通可被心得候、委細之義は、柳生主膳正、肥田豐後守、〇以上二人勘定奉行篠山十兵衛、岸彥十郎〇以上二人勘定吟味役ゟ可申談候間、可被承合候、

文化十四丑年正月

去ル未年十二月、御儉約被仰出候砌、牧野備前守殿〇老中被仰渡候趣を以、定式御入用金、其外諸品共、一同二割減、并品劣相成宜類は、位下之積御取調有之候樣及御達、御年限中、夫々御省略方御取計も有之候、然處御年限相滿候に付、當年よりは中年以前之通たるべく旨被仰出有之候得共、平常儉素を守り、其有餘を以、非常之備等に可致旨、心懸候は、勿論之義に付、中年以前之姿に相復し候迚、諸品位下等にて差支無之分迄も、以前之品合に復し候は不及儀に付、其段拙者共より及御達候樣、大炊頭殿〇老中土井被仰渡候間、右之趣に御心得御取計有之候樣存候、

丑正月〇中略

大目付江

天保四巳年十二月

近年引續御儉約被仰出候得共、累年御入用筋相嵩、殊に御緣邊向御度事、其外御普請御修復等にて、不時之御用途相重り候に付、當巳年迄、嚴敷御省略有之候處、彼是不時之御物入莫大にて御用途差湊、御勝手向御繰合不被行屆候、其上當年之儀は、關東并北國筋不作にて、御收納方江も相響可申候、依之來午年ゟ戌年迄五ヶ年之間、猶又御儉約被仰出候間、諸事文化八未年以來、度々被仰

出候通可被相心得候、且右年限中は、不依何事、無據申立を以拜借相願候共、被及御沙汰間敷候、右に准じ、都て臨時御入用に拘り候諸願筋は被差扣、面々にも彌儉約相用候樣可被致候、

右之通可被相觸候、

十二月

〔嘉永明治年間錄十一〕文久元年三月廿六日、御料租稅金、半年ノ用途ニ足ラザルヲ以テ、諸事省略スベキノ旨ヲ、三奉行〇寺社奉行、勘定奉行、町奉行、等ニ達ス、

閣老より、三奉行、御留守居、大目付、御作事奉行、御普請奉行、小普請奉行、御目付へ、近年打續き、定式の臨時御入用莫大に相嵩み、無餘儀廉には有之候得共、年々御收納より一倍餘の御入箇に相成、此姿にては、御改革も難被爲屆次第にて、深御案事被遊候、就ては何れも御改革無之ては相成間敷、右體御收納より一倍餘の御出方に相成候ては、不容易儀にて、片時も御捨置可被遊譯には無之、かゝる御時節に候へば、衆心一致いたし、假令瑣末の事たりとも、聊油斷可仕筋は無之、迚も御主法替等被仰出候のみにては、御備は勿論、御暮方可相立期も有之間敷候旨、銘々其身を忘れて何事となく厚く勘辨を盡し、支配組末々に至る迄、眞實に相心得向後御收納にて御經濟相立候樣、諸場所にても省略の見込早々可被申聞候、

金藏　金藏金銀納拂

〔御金奉行公用囊中勤仕錄〕御金藏、古來は御切手御門外〈江戸〉に御座候處、正德二辰年五月、蓮池御門之內〈江戸〉相立申候、〈○中略〉

六月

〔官中秘策〕〈一〉大坂城之事幷諸御役人之事

一大坂御藏幷間數〈○中略〉

銀御藏〈二間梁長九間〉壹ケ所　同〈四間梁長拾貳間〉壹ケ所

〔御金奉行公用囊中勤仕錄〕寶曆二申年中ゟ、奥御金藏御修復初り、三月廿四日、元拂御金奉行へ被仰渡、

奥御金藏御修復中、元方御金藏へ御預り之分御金銀、左之通、

一金三百五拾箱〈但金二千兩入〉

內端箱壹ッ有之

一金三千四百六拾箱〈但銀拾貫目入〉

一花印子　壹長持

一金分銅　三ッ

一銀分銅　五ッ
一銀錠　九箱
右は奥御金藏御修復中、去申年中ゟ御預り有之處、酉年二月中御普請出來に付て、正月廿三日より二月十五日まで、日々元方ゟ御金銀奥御藏へ移替いたし申候處、二月十五日迄に不殘移替相濟申候之事、
〔元方御金藏帳〕天明八申年元方御金藏帳
大判千三百四拾五枚
金百拾四万五千貳百三拾兩壹分貳朱
銀壹萬貳千貳百五拾三貫九百拾九匁五分貳厘五毛壹弗六
納合
錢八千三拾五貫四百三拾八文
灰吹銀千貳百三拾貫九百四匁七分八厘五毛四弗
外四貫六百貳拾七匁三分三厘壹毛足灰吹
吹金貳拾貳貫八百五拾壹匁四厘
筋金四拾貳貫九拾七匁貳分五厘
紅毛銀錠百九拾貫六拾九匁五分
南鐐銀百貳拾八貫貳百三拾四匁八分
同年渡方差引申十二月晦日御藏有高
大判七拾四枚
內壹枚古金
金三拾壹万八千八拾四兩貳分

銀千九拾八貫貳百五拾貳匁八分貳厘五毛壹弗六
外貳百八拾貫文　拂方御納戸江預ケニ成ル
灰吹銀貳百五拾貫三百六拾八匁七分八厘五毛四弗
古金貳百拾八兩貳分
古銀八百七匁八分八厘
吹金貳拾貳貫八百五拾壹匁四厘
筋金四拾貳貫九拾七匁貳分五厘
燒金壹貫百七拾七匁五分九厘壹毛七糸
正銀貳貫七百拾壹匁三分
吹堅銀四貫四百八拾貳匁
唐金貳百七拾六匁七分
唐銀九貫貳百六拾五匁四分
天川銀壹貫貳百三拾九匁壹分
呂宋銀五拾目
朝鮮錢拾壹貫九百七拾五文
外國銀三拾壹匁五分
唐錢六貫拾四文
金目百四拾七匁
元寶足紋銀四百九拾七匁六分
中形足紋銀四拾九匁七分

板金壹枚
流金壹枚
紅毛銀錢六拾九匁五分
紅毛銀錢吹立上銀百三拾目八分
金皮拾壹匁九分
薄筋金八匁九分
馬城金燒金四拾四匁
馬城金四拾壹匁八分餘
廣東金貳拾六匁六分
安南金三貫目
安南銀五百八拾八匁貳分

〔元方御金藏帳〕寛政三亥年大坂御金藏御勘定帳
　大判金拾四枚
　金五拾八萬千九百六拾四兩三分二朱

納合
　銀三萬七百六拾壹貫七百拾匁壹分七厘五毛二弗
　唐金百九拾七貫六百九拾壹匁三分一厘一毛四弗四九二五
　唐銀百七匁三分九厘二毛七弗四
　灰吹銀四百六拾一貫六百六拾匁
　大判金拾四枚
　金三拾八萬四百五拾五兩二分二朱

渡合　銀壹萬六千七百八貫三百六拾三匁六分九毛七弗

　　灰吹銀四百六拾貫六百目

〔御金奉行公用留中勤仕錄〕享保八卯年六月十八日、水野和泉守殿御出にて、奥御金藏內、戸前錠之御封印。御持參にて、御附被成候月日、和泉守殿御名前御記被成候、御老中御達印之由、御勘定奉行衆、吟味役衆被相越候て、中之戸前御勘定奉行封印にて、外銅戸は前々之通り、元方御金奉行封印被致候之事、

〔二條在番中手留〕文政三庚辰年十一月廿二日

一今日御金藏封印切替候に付、出雲守同道にて、直に同人小屋江罷越、平服に被成候、無程御門番頭御藏奉行御殿番重野長左衛門、同見習三輪市十郎被參候間、先江罷越候樣申達候處、御門番幷御藏奉行には殘り被居候、我等共御門番衆連印之封、扣共四枚、我等方にて認持參致し候に付、各調印致し候、

一御場所宜趣に付、出雲守同道罷出、御門番衆御藏奉行江及挨拶、同道罷出、二丸御門外に兩組御破損奉行衆待合被申候間、及挨拶先立二丸御門より入、同所御番所にて當番出雲守組與頭山本清兵衛、御番所より下り被致會釋候、御金藏前江罷越候處、出役之衆被致會釋候夫より長左衛門御金藏戸前開之、長左衛門より鑰筥持參有之、封之儘被為見候之間、封切被申候樣申達、則鑰箱封切被申候、上り口之戸封切被申、夫より同心二階江薄緣敷候內見合罷在、長左衛門案內にて、刀取手に持二階江上り申候、尤召連候用人共、其外供之者柵外江差置候、二階正面に月番我等出雲守と申順に、刀後江差著座、左之方に御門番衆御藏奉行著座、上り口之方に長左衛門、市十郎著座有之、御金箱入候長持封印長左衛門切被申、鍵明ヶ被申候、夫より御金箱我等共前江並、封印切蓋明候て、長左衛門入記被為見候間、扣之方與引合せ相改申候、夫より御金鍵封印

御藏奉行長左衞門連印之封、長左衞門付被申候、右御金箱長持江入候に付、御長持際江認越、得と見分いたし、御長持錠御し候、我等共御門番之頭衆連印之封、長左衞門附被申、右相添鍵箱封印其外上書等、長左衞門取計被申候、右鍵箱封之上、我等共御門番之頭衆調印、長左衞門取計被申候、二階上り口戸前内封印相濟、外戸前迄不殘相濟、總て退散之節、初之通御番所前にて、淸兵衞會釋被致候、二丸御門より出、地役衆暇乞、御破損奉行江も挨拶におよび被歸小屋候、

但鍵箱上書等爲認候に付、右筆召連候處、右上書者御殿番之者取計候由、長左衞門相認候儀に付、近年相止之候、爲念記置、

一去卯年、戸田和泉守、松平縫殿頭封印、長左衞門と我等用方之者江被相渡候間、書狀を以返却におよび候、

一封印左之通〇圖略

右封印用紙美濃紙

一御金藏鍵箱封印左之通〇圖略

右御金藏封印切替相濟候爲御屆、以使者所司代江申達候、尤御金出入等有之、御金員數相違之節者、所名自書封書付、所司代江致進達候得共、今日者員數相違無之候に付、先格之通其儀無之、

〔天保十一年武鑑〕御金奉行〇中略

御金納日　六日　十四日　廿六日　右之前日前々日庭橋
御金渡日　朔日　十日　十八日　廿四日　右之前日前々日

橋庭

〔京都御役所向大概覺書〕一小堀仁右衞門勤方之事

覺〇中略

一京都に御金藏無之候ニ付、毎年金銀諸方定渡り御拂方臨時渡共、前々ゟ仁右衞門御代官所納金銀を以相渡、自然臨時渡多、銀高不足有之候得者、大坂御金藏ゟ、御老中御證文を以請取之、銘

銘江相渡申候事、○中略

但正德四午年十二月指出候扣

〔京都御役所向大概覺書 二〕同所○二條御城御藏ニ有之錢座運上金銀之事

金合參万千八百八拾八兩

銀合五百九拾貳匁壹分六厘七毛五弗

內

金壹万千八百七十兩貳歩銀八匁七分壹厘　御買米代

是者御買米三万俵、石高一万千三百三十一石七斗之代、但壹石ニ付、平均六拾貳匁八分五厘四毛內、

是者御買米三万俵、大坂ニ而相調、江戸廻被仰付候ニ付、江戸大坂ニ而諸色御入用、幷右御用相勤候町人兩人江被下候御金共如此、

金四百三十九兩三歩銀六匁貳分　諸色入用

貳口金都合壹万貳千三百拾兩壹歩銀拾四匁九分壹厘

銀ニメ七百三拾八貫六百貳拾九匁九分壹厘　但六拾目替

右者當春御買米爲御用、芳野屋惣右衞門、中川淸三郞代乾忠右衞門、大坂江罷下調上候御米代、幷御米廻船ニ積立、大坂表出船江戸著、淺草御藏詰迄之諸色入用金、町人共差出候勘定目錄、吟味之上相違無之ニ付、此度御金不殘三輪市十郞方ゟ請取、右町人江相渡り候、

但寶永二酉年七月、安藤駿河守、水谷信濃守、○以上二人京都町奉行並組勘定方役人請取手形ニ、三輪市十郞、○二條御殿番松平紀伊守殿、○京都所司代與力兩人宛所ニ而、安藤駿河守奧書ニ、松平紀伊守殿裏書、錢座運上金を以可相渡旨、右裏印ニ而相渡り候、

金八千六百拾両壹歩貳朱

銀五百五十貳匁五分三厘

是者、寶永三戌年七月八月四ヶ度ニ、江戸上納爲替ニ成候ニ付、芳野屋惣左衞門、中川淸三郎相納、御金奉行四人ゟ、三輪市十郎方江請取證文來ル、

金五千五百貳拾貳両貳分銀五匁四分三厘

是者、親王大准后御構御築地入用金、都合六千拾七両銀拾匁八分八厘之内、江請取、職人共江銘銘相渡申候、

但松平紀伊守殿組與力、普請奉行両人、請取手形ニ三輪市十郎、幷紀伊守殿與力両人宛所ニ而、紀伊守殿裏書、銀座運上金之内を以可ㇾ相渡旨、右裏書印ニ而相渡り候、

金四千四百八拾七両

是者、牢屋就ニ御普請、御入用金安藤駿河守組公事方與力貳人、中根攝津守〇京都町奉行組公事方與力貳人請取手形ニ而三輪市十郎幷松平紀伊守殿組與力貳人宛所ニ而、安藤駿河守奥書、松平紀伊守殿裏書、銀座運上金を以可ㇾ相渡旨、右裏印ニ而相渡り候、

殘

金九百五十七両三歩貳朱

銀拾九匁貳分九厘七毛五弗

但正德五未年、三輪市十郎ゟ指出候帳面之寫、

〔御金奉行公用囊中勤仕錄〕蓮池御門御斷書付、右之年〇正德二年出候由、御目付中より御金奉行境野六左衞門借寫置候、左之通、

毎月御金藏金銀渡り、六日、十八日、廿六日、

右之通、定日御座候間、臨時御用之節は、間之日にても納渡方御座候、常々臨時之日御斷は不ㇾ仕候

へども、蓮池御金藏は、坂下蓮池御番所不案内にて可有御座候間、來月中迄、臨時之日爲御知可申候、其後は常之通りにて候よし被仰渡候、只今迄は平川口梅林坂御番所へ斷候義は無御座候、以上、

六月十八日

荻原近江守〇以下四人皆勘定奉行
中山出雲守
平岩若狹守
大久保大隅守

右日限之外、臨時之日、共に坂下より立番出之、御金藏御用之者、紅葉山下御門之方江通し候樣可仕候事、

〔御觸備忘記 中〕正德五未年

元方拂方御金藏役人納拂等勤方定書

一元方拂方共、御藏は金銀幷灰吹金銀、其外御藏に有之候品々、月々納拂之所度々改之、員數明細帳面に記置、其帳面を以、同役立會、有金銀之分量計合、無相違樣可被致候、且又同役役替新役被仰付候節も、其度々互に立會、有金銀之數相改、其上にて月番を立可被相勤候事、

一御藏金銀納方之儀、隨分念を入、銘々納拂之手形帳面等、印形は印鑑引合相改、毛頭無相違樣可被致候、且又壹分判小玉銀之方も、納方之向々、紛敷無之樣、帳面に書載之、納手形にも其數を記可被差出候、渡方も是又手形帳面に記、其數を書加へ可被相渡候事、

一金銀納拂御勘定之儀、元方拂方共、年々無油斷仕立可申候、但壹分判小玉銀納渡之事も、御勘定帳面に書載之、無相違樣可被致事、

一御金藏納拂定日者勿論、臨時納渡有之節も、御金奉行相揃可有出勤候、元方拂方共に御藏開候

度々同役立會、封印改之上開可申候、壹人して開間敷候、御用相濟候はゞ、同役中申合、萬事念入申付、御藏幷總圍之門封印共、前々之如く、元方御金奉行、拂方御金奉行立會、念を入相封致置可申候、且又奧御金藏之御入用極候帳面、總都合之一紙、證文を以引替、無油斷遂吟味、若格別に引替、延々に相成候も於有之は、是又其譯御勘定所へ可申達候事、

一御藏金銀包紙、又者上箱封印損候節、包改直候事、後藤幷大黑屋長左衛門等御藏へ呼出、於御藏包直、封印をも仕直候樣致、少にても爲包改之、町人共へ渡置候儀、堅可爲停止事、

一御藏金銀、御金奉行自分計として、壹分判小玉銀等、少々にても町人に申付、兩替仕候儀堅可爲停止候、御用に付而、若壹分判小玉銀等金兩替候時は、御勘定所へ相達、御勘定奉行裏判之證文を以、可有其沙汰事、

一御金奉行中、私用之爲に御藏之金銀取出不申哉、封印之儀、何れも出勤之度々心を付可申事、

附金銀納方渡方之數多當日難相濟殘候時は、其翌日何れも罷出可有其沙汰候、是又壹人として被致間敷候事、

一納渡之儀に付、諸證文留書明細に記置、其當日不相濟儀は、翌日出勤候て念を入吟味可有之候、且又御金奉行月番にて承り候御用之儀は、早速同役中江相達、物每區々無之樣可被心得事、

附御藏に有之帳面書付、御用に付て御金奉行宅江持參候時は、同役へ相達可有持參候、尤事濟候はゞ、早速御藏に入置、其旨同役へ申達、麁末無之樣可被致事、

一諸向拜借幷道中拜借、又は諸式御入用内借金銀渡之儀、常に入念改之、拜借返納之次第、無滯樣遂吟味、若子細も有之、返納遲滯之面々も候はゞ、其譯御勘定所へ可被相達候、内借渡候事も、御入用は不及言、少分之事にても、人に頼候儀、堅御制禁有之候、若違犯之者有之時は、少も不隱置、同役ゟ御勘定所へ可被相達候、自然隱置候はゞ、違犯之人可爲同科候事、

米藏
米藏米穀納拂

一於御藏金銀請取候者共ゟ、歩銀を相定、同心共方へ其歩銀を分ケ取、御金奉行は、其爲禮音物等請納候儀、一切堅御制禁之事に候間、此旨を以御用承り候町人、御金請取方之者共に、急度被申渡置、若自今以後此旨於違犯事は、同心共は御金奉行、御金奉行は御勘定所へ可被相達候事、

一納方請取方之もの共、不作法成儀無之様可被申渡候、若猥成族有之ば、急度申斷置、其譯御勘定所へ可被相達候、總て納方請取方之もの、御藏園之内大勢不入込様いたし、御金持運候黒鍬之もの、又は御金奉行同心以下家來等迄、猥に無之様、急度可被申付事、

附於御藏場、茶丼當類は不及言、少にても火之取扱堅可爲停止事、

右之條々、御老中被仰渡候間、堅相守之、御役儀に付、聊以猥成儀無之様、可被遂吟味候、若違犯之事も候におゐては、其沙汰可有之者也、

正德五未年七月　　御勘定奉行

〔御金奉行公用簿中勤仕錄〕享保二酉年五月十八日、御鷹野御成ニ付、定日納拂可仕哉之旨、元方御金奉行山田治右衛門、足田庄九郎兩人、御殿へ罷出相伺候處、今日者勿論、向後も終日御成之節は、納拂共相延し候様にと、御勘定奉行水野因幡守殿被申渡候に付、明十九日、納拂諸向へ相延し申候、御納戸江は御城内之義ゆへ相渡可申候事、

〔憲敎類典五ノ四地方〕寶暦三癸酉年十二月

岡田庄大夫御代官所御物成銀、去々未年ゟ長崎會所江相渡、右會所より大坂御金藏江相納候得共、向後庄大夫方ゟ大坂御金藏直納に仕候様可被致候、長崎奉行江も申渡候間可被談候、

十二月

〔淺草米廩舊例〕一淺草御藏總構地坪　三万九千八拾八坪

一御藏總立坪　八万六拾坪　　一御藏總構棟塀延長四百八拾七間壹尺

一御藏棟數　五十四棟　一同戸前數　貳百七拾戸前

內

一五拾戸前　東向　一貳戸前　西向　一百四戸前　南向　一百拾三戸前　北向〇中略

一本所御藏總構　地坪三万坪餘

內

貳千八百七拾七坪半

是は大久保加賀守殿江御領地に相成候分但安政五午年返地ニ成ル

一御藏總立坪

一御藏棟數　三拾七棟

一同戸前數　貳百四十六戸前〇中略

一濱御殿地內御藏棟數三棟戸前貳拾六口〇下略

〔地方落穗集八〕淺草御藏番數之事

一淺草御藏古來は二百七拾一番有之由、二番より右之通也壹番之御藏は無之由、是は往古伊奈之家也、先祖關東御郡代之初は、御藏奉行衆帶にて園之內に御藏所々相立候よし、其後御藏淺草江引ケ候節、右由緒を以て、壹番之御藏は園之內へ殘候由、其後淺草御藏建直之節、右壹番之御藏淺草へ引ケ、當時は壹番より二百五拾八番迄番數有之、竹橋御藏廿八番迄古來之御藏、此二ケ所也、其以後本所御藏御造立有之也、去れば右之由緒を以、伊奈家より御藏納之出役は、白衣にて出る、御藏奉行衆も白衣なり、同じ形なり、

〔官中秘策一〕大坂城之事幷諸御役人之事

一大坂御藏幷間數

御米藏五間梁長三拾六間　一ヶ所　同五間梁長三拾壹間　一ヶ所　同四間梁長廿四間　一ヶ所　同四間梁長貳間　八ヶ所　下○

略

〔大坂諸一覽〕難波御米藏

一御藏場　攝州西成郡難波村領　東西七拾間　南北百八拾間　享保拾八丑四月より

入堀幅八間　船入堀二拾間四方

天王寺御米藏難波御藏積南手引直し

一御米藏　桁行三十六間　梁行四間　宛八棟　但壹棟上仕切にて四戸前宛附

右御藏引直、相殘諸品を以、難波御藏場御建增、

一御米藏　桁行二十五間　梁行三間　但壹棟一仕切にて戸前附

東西七拾六間壹戸前

東手三拾二間三間　梁○桁三間　二尺

南北四拾三間二尺

西手ニ而四拾三間四尺之間者

南北四拾六間三尺五寸

道頓堀川ゟ御藏場へ入堀四百七拾三間半

御城ゟ未申之方道法壹里餘

〔京都御役所向大概覺書 二〕二條御城内外御藏數并穀大錢銅之事

御城内二ノ御丸御番所前

一三間梁に四拾八間　七戸前　壹棟

御詰米七千三百石程相詰り候

右七戸前之内　六戸前者七間宛　壹戸前者六間宛　但　七千百石程宛入　七百石程入

御本丸高麗橋前
一三間梁に拾七間　貳戸前　壹棟
　御詰米貳千五百石程相詰り候　但壹戸前千二百五十石程宛

御天守下
一三間梁に十八間　貳戸前　壹棟
　御詰米二千六百石程相詰り候　但壹戸前千三百石程

御城外御藏
一三間梁に貳拾間　拾四戸前　七棟
　御詰米二万二千四百石程相詰り候　但壹戸前千六百石程宛

一同
一三間梁に貳拾五間　四戸前　貳棟
　御詰米七千石程相詰り候　但壹戸前千七百五十石程宛

一同
一三間梁に貳拾間　貳戸前　壹棟
　御詰米貳千八百石程相詰り候　但壹戸前千四百石程宛

一同
一三間梁に貳拾間　貳戸前　壹棟
　御詰米貳千四百石程相詰り候
　是者、五間藏壹戸前、先年より小堀仁右衛門江〇上方代官借し置申候、
　殘拾五間藏、壹戸前ニ而貳千四百右程入、
　御城内三ヶ所御藏拾壹戸前　詰高壹万貳千四百石程
　外御藏拾壹棟貳拾壹戸前　詰高參萬四千六百石程
右御藏數合參拾貳戸前　詰高合四万七千石程　大積

元祿十三庚年ゟ同十五年迄
一御本丸御多門御糯貳千石　御藏四戸前ニ納

寛永七寅拾貳月ゟ正德六申二月迄
一大錢七千百七十貫五百貳拾八文　御藏有
　是者、二之丸御米藏江入置申候、

二條御藏に有之候大錢不殘、享保元申十月十六日迄に呉服師共江相渡申候、

一銅參千百貳拾九貫目　諸御用ニ段々相渡ス錢　御藏有

是者、二之丸御米藏江入置申候、

〔官中秘策 三十 二〕大津御藏之事

一棟數合貳拾壹ヶ所　内御銀藏有之

入米高四万七千七百餘石

觽五千百石餘　御藏納之

一右貳拾壹ヶ所之御藏、三間に拾七間、四間に拾貳間を首として、三間に八間を小とす、

〔京都御役所向大概覺書 七〕大津御藏數之事

一三間梁に拾參間　一戸前　一棟

御詰米貳千四百拾五石餘

一三間梁に拾壹間　一戸前　一棟

御詰米貳千五拾石餘

一四間梁に九間　一戸前　一棟

御詰米貳千貳百三十石餘

一三間梁に拾參間　二戸前　一棟

御詰米貳千四百拾五石餘

一三間梁に貳拾間　二戸前　一棟

御詰米三千七百貳拾石餘

一四間梁に拾貳間　一戸前　一棟

御詰米貳千九百七拾石餘

右御藏貳拾棟有之候處、元祿十三辰年、拾四棟御拂ニ相成、如此六棟相殘、雨宮庄九郎〇代官上方預りニ成候、

一正保四亥、慶安元子、同貳丑、右三ヶ年ニ積五千石餘、大津大藏ニ詰り有之候處、朽損候ニ付、元祿十二卯年御拂ニ成、夫ゟ二條御城内御本丸之御多門江新積詰り申候、

〔淺草米廩舊例〕當時御藏有錢之覺

一文錢三千八拾五貫三百三拾貳文百六十六番ニ入　但九六錢ニ而拾貫文詰

此金四百五拾兩餘　但六貫八百文相場

是は寛政三亥年、長谷川平藏懸ニ而、御買上納相成候分、

一耳白錢三千百五拾八貫五百四十文同斷　但九六錢拾貫文詰

此金四百六拾兩餘　但六貫八百文相場

是は寛政三年、右同斷、

一眞鍮錢は、寛政三年、長谷川平藏懸りニ而御買上、同四子年、大貫次右衛門懸り過料錢、同八辰年より浦賀奉行右錢納、尤右錢之義は、文化元子年より、代金納ニ相成、右三口納之眞鍮、諸向渡方ニ相成、當時御藏錢無之候、

右渡方は、兩國橋懸替、先年籾挽入用、御能御入用、窮民御救、關東川々御普請御入用、其外渡方ニ成ル

〔京都御役所向大概覺書三〕大坂二條大津御藏詰米大豆之事享保貳酉改

一大坂御藏詰米石高五万八千石

右者、五畿内、近江、丹波、播磨ゟ納不足之時、丹後、石見、出羽、越後米等、江戸御勘定所ゟ割賦足詰、

一二條御藏詰米石高三万石餘ゟ四万石餘迄
右者、五畿內、近江、丹波、年により播磨ゟも納、
一大津御藏詰米石高四千石程
右者近江
一大坂御藏詰大豆石高貳千石餘
右者、攝津、近江、丹波、播磨、年々不同、
一二條御藏詰大豆石高三百石餘ゟ四百石餘迄
右者、攝津、近江丹波、播磨、年々不同、
右大豆者、御藏詰之外、餘慶過分に有之候得者、所拂銀納に申付、

〔官中秘策三十三〕二條御藏之事、

一御本丸御藏　白銀千貫目入
一二丸御臺所前御藏　錢四千百拾五貫文
一御臺所前　三間ニ七間　壹ヶ所
一同斷　三間ニ八間　壹ヶ所
一西御丸　三間ニ八間　壹ヶ所
一御天守下　三間ニ拾八間　壹ヶ所
右四ヶ所御藏九千餘石入
一七ヶ所　三間ヽニ貳拾間
但壹ヶ所米千六百石程宛入
御藏數拾貳ヶ所米三万千五百石入御積

一壹ヶ所　三間ニ拾間　小堀數馬〇上方代官預り

一壹ヶ所　貳間ニ拾間　繩廣入

都合拾四ヶ所

〔京都御役所向大概覺書　一〕小堀仁右衛門〇上方代官勤方之事

覺〇中略

一二條御城外御藏壹ヶ所、先規ゟ仁右衛門方江預り置候而、京土居之内村々、并山城、河内、攝津、丹波、御藏入之御物成米之内、三千百石餘納置、公家衆方領米、法皇女院御所、東山院樣、東福門院樣、明正院樣、深信解脱院樣、被召仕候女中、其外禁裏院中之諸役人御切米御扶持方、所司代并御所方御附衆裏判を以、定役人之者共附置相渡させ申候事、〇中略

但正德四午十二月指出候扣

〔京都御役所向大概覺書　七〕同所〇大津御藏御詰米大豆并渡り方之事

正德四午年割符
一大津御藏詰　米四千貳百五十六石五斗二升七合　大豆貳百十六石五斗七升壹合

近年御藏詰減、今程五百石程詰り申候、先年は所司代小笠原佐渡守殿迄、御役料同與力御切米渡り候處、今程御役料不ニ相渡、與力御切米者、二條御藏渡りニ成候ニ付、定渡り減候故、元祿十二卯年、御藏奉藤沼猪之助、布施庄左衛門兩人は、江戶江被召呼、長坂新右衛門は二條御藏役被ニ仰付候、

〔武家嚴制錄　二十五〕御藏米高札

定

一御藏前におゐて、御切米御扶持請取候輩、差札等之儀に付て、萬事不作法なすべからず、并對ニ御藏衆、雜言申べからざる事、

一米不渡已前、俵のうへにのぼり、又は俵に手を不可付事、

附御藏屋敷へ用所なくして、人馬共に一切入べからざる事、

一俵まはしの時、一番鬮より三番までのもの立合、升目の吟味いたすべき事、

右可相守此旨、若違背之輩於有之者、可被行嚴科者也、

萬治二年十一月朔日　　奉行

〔勘契備忘記　中〕享保十九寅年

淺草御藏役人勤方納米改方之定書（〇中略）

一御藏御門之儀、暮六時限爲〆、役所へ鍵取上、夜中通路之儀、其役所へ屆、吟味之上、中之御門計出入可爲致候事、（〇中略）

一御藏戸前封印之儀、御藏奉行組頭、幷御藏奉行之內ニ而壹人兩判ニ而下封致し、上封は出役之御藏奉行一人之封印可被致候事、（〇中略）

一諸國納米之儀、運日ニ無之樣相心得、御代官ゟ手本米差出候はゞ、御藏奉行組頭兩人幷詰合候御藏奉行立合候而、可被致吟味候、納米著船之節、早速御藏を借、爲致水揚、日限等記置之、順々に無滯可被相納候、（〇中略）

一米納六月七月炎天之節は、明六ツゟ四ツ迄之內可被相納候、蒸候歟、又は凉敷日は、晝之內納候而も不苦候事、

一米納候節、御藏之內、少しも虫抔も無之樣掃除等能候哉、念を入見可被申候、前々は茲筵を敷候得共、享保九辰年ゟ相止候間、向後も可被致無用候事、

一御藏納米之節、一ト戸前限りに俵之員數改、幷俵入番附帳ニ記之、出役之御藏奉行判形被致候上、再改いたし、組頭致加印置可被申候、尤米善惡、年附所附、委細有高帳に記、出役之御藏奉行判

形被致候上再改いたし、組頭加印致し置可被申候事、〇中略

一渡方之米は、日限ニ庭帳ニ〆、番を札、出役之御藏奉行致判形、出俵之員數念を入、其時之趣を以、員數を相極メ、番に引合、無相違樣可被相渡候、尤出俵之員數、廻し何程と拂番付帳に渡り候俵數廻し、幷米之所付迄委細書記、出役之御藏奉行判形致候上、再改いたし、組頭加印可被致候、尤殘米之分は有高帳江記し、勿論一廒之御米不殘渡切候はゞ、前廣納入候俵數之元拂之帳をも改、出目欠米何程と知候樣に、帳面記置可被申候事、

一御切米御扶持方相渡候時、小札ニ俵數を書付、手形と引替、渡置候庭帳に記し候本俵、右之札江引合、銘々爲割渡、端米は出役之御藏奉行、小渡帳を扣、小札と引合可被相渡候事、〇中略

一御藏渡殘米少々づゝ有之候はゞ、月番之御藏奉行有高帳を見合、其類米御藏江逐集、尤能米ふけ米仕分置、鼠喰候俵抔、又は亂俵も有之候はゞ俵に作り、渡にも可成分は可被相渡候、散米有之ば俵に作り、御藏を定溜置、得下知、御拂に可被致事、〇中略

一大豆渡方之儀、御馬飼料には並之大豆、火消方馬大豆は、御馬飼料よりは次之大豆可被相渡候事、

一御藏江納置候米、平生遂吟味、虫附又はふけ不申樣に取計、渡方等も段々勘辨可被致候、ふけ米多候はゞ渡方相考、被得下知、御拂にも可被致候事、〇中略

一御賄方幷御女中樣方江相渡候餅米之儀、春中相渡候分は米にて相納、四月頃ゟ以後相渡候分は、籾ニ而相納、御用次第御藏にて摺立置可申事、〇中略

右之通相心得、不時之儀有之節は可被相納候、以上、

享保十九寅年九月　　御勘定奉行

〔淺草米廩舊例〕納拂仕方申合

一納米之御藏江配出候は丶、三方江縄張爲致、尤其日之納人數之内、小揚之分は戸前之分ニ差置、日雇人足は河岸之方ニ置、日用札を渡させ候事、

一納俵米札と手扣讀合拼數との算を入、俵數を調、疑敷俵も有之候哉、棹毎ニ改候事、

一棹圖拼圖を入候節、御代官手代、又は御預所役人、幷納名主上乘、納引受人等爲立會、杖突ニ圖を爲振、當候拼貫目懸致候事、

但御代官手代、又は御預所役人ニ而も、兩人宛配出候事ニ候間人附若壹人ニ候而如何之譯ニ候哉相糺候事、

一廻立様、棹圖拼圖を入、當三拾六俵貫目懸、貫目違幾日有之候共、一口之内、俵之厚薄、縄之細太、米之善惡を考、俵入不足ニ可有之被存候、俵口々より貳俵宛取出、枡廻し之上、一口貳俵も平均ニ致、若元入より廻切候得者、差米別段ニ取候積ニ而、差米程之石數相減、納札出申候事、

但貫目違壹俵出候節は、右壹俵廻平均ニ枡目與見競、前書之通取計可申候、若一口ニ出候はば貳俵廻、是は平均ニ不致、貳俵之内、入少之方相用、勿論元入より餘米候は丶、何程ニ而も合米之積相心得、且拾俵以下壹俵廻、若貫目二口ニ出候は丶、一口より壹俵宛相廻し入少之方極候事、

右貫目懸、幷廻俵小口切、其外明俵はたき候儀、或は掻桶ニ而斗枡江移候迄者、引請人手先之もの差出取扱、御藏方小揚之者相懸不申候、

一右納米拼之内、端拼をも圖ニ入、目安に當候は丶、次之拼より三拾六俵ニ足シ俵いたし、貫目懸枡廻し等致候事、

一廻シ俵貫目懸候上、吟味不濟内者、一切手を付させ申間敷事、

一廻シ俵中札御代官名前、國郡年分等納手扣江引合改候事、

但廻シ筵は廻シ立候節爲敷、一斗枡之角、壹升枡置候上より米入させ、名主に爲計候事

一納ニ懸り候節、手本之箱封印切、納米を米見板ニ早々引合せ、手本ニ合候分相納、不合分者撰出候事、

但手本米引合候はゝ、早々箱江は封印付候事、

一納藏之內見分いたし、棟迄詰候樣可申付候、尤御藏內破損等有之候はゝ、御藏番江爲見置、御普請方江相達候樣申候事、

但前文之通、梁迄御米詰候處、御藏保方爲試、當時者梁下迄詰候事、

一先達而納置候端米差出米、幾ツ有之候哉數相改、不紛樣見通ニ爲置候事、

一撰出米有之候者、不紛樣ニ爲拂置、本米納仕舞ニ而、右撰出シ、俵壹俵毎ニ見分いたし、勘辨可相成分者、御代官幷御預所役人江爲見、納得之上相通候事、

一廻俵廻シ相濟、俵之口縮り候節、入念候樣申付候事、

一納濟候上、御役所ニ而扣ニ引合相改、帳面印形いたし納四半差出候事、

尤帳面幷納四半者、月番再改致、加印相調候事、

庭帳四半但押切有　番附帳　有高帳　石留帳　但番付帳有高帳ニ月番加印有之候

日雇帳　小揚壹扶持帳

右相濟、出役手代退散爲致候事、〇中略

拂之仕法

一出役前、御役所ニ而、前日包置候手形袋と庭帳讀合、致印形候事、

一拂書出候御藏江繩出、繩張いたし、日雇札爲渡候儀納場所同斷、

一其御藏之御米、御藏ニ而可渡ほど出切、闕入廻立、得與切候上ニ而者俵制等手間取剋限遲相成、

引取等ニ差支候間、幾拼有之候共、壹棹、百俵宛付候はゞ、圖入廻相立可ㇾ申候事、
一廻立棟、棹圖拼圖を入、當り候俵取出、廻し相立不ㇾ申候事、
但貳俵且三俵廻共、平均廻ニいたし候事、
一御用米總俵出シ切
五拾俵迄　壹俵廻シ
五拾壹俵より　貳俵廻シ
一諸渡方廻シ方
五俵迄　壹俵廻シ
六俵より貳拾俵迄　貳俵廻シ
貳拾壹俵より以上者　三俵廻シ
一採附廻シ之分
御用大豆　御拂物　圖役壘刺　水盛棟梁　糊飯米　大豆　荏　施行米　御救米　猿樂
扶持　作事扶持　端石渡
猿樂作事扶持者廻し
枡　不立　挨　不切　差　不入
右之分、貳拾俵迄壹俵廻シ、貳拾壹俵より貳俵廻シ之事、
一廻シ相立、出役手代僉割相濟、出俵高極り候はゞ、其通り爲ㇾ出、尤俵數得と改可ㇾ申事、
一渡方本俵者、出役手代ニ爲ㇾ渡、端米者出役奉行小渡帳を扣、杖突之者讀候割札之通ニ候哉突合、
壹枚宛順々ニ可ㇾ渡事、
但小渡場所混雜致候ニ付、枡目其外共、隨分心付可ㇾ申事、

一濟方濟候上、御役所ニ而相改、印形いたし候品々、

庭帳　番附帳　有高帳　石高帳　日雇帳　小揚壹扶持帳

但番附帳有高帳者、月番加印有之

右相濟、出役手代相歸申候事、

以上　終

月々渡方凡石數覺

二日御役扶持　米六拾石程

廿一日渡御役扶持　米二百九拾石程

勤仕御役扶持　米五千六百石程

不勤御扶持　米八百石程

御臨時方御入用御次米　米八百石程

一橋御合力　米八百石程

旅籠扶持渡　米二百五拾石程

野旅御扶持方、不時御切米御役料新、御合力米、其外諸渡方、壹ヶ月　米平均三千百石程

〆

外

御佛供料壹ヶ年　米二千五百石餘　是は春夏冬に渡る

女中御切米壹ヶ年　米三千九百石餘　是は二月九月兩度に渡る

御代官扶持　米六千石程　是は春夏冬に渡る

五日目書上

一有米納拂石高上納金員數書付、御勝手方江差出、

一月々總有高一ヶ月納拂、出目闕差引、御金藏江納金、有金等勘定帳、御勝手方江差遣ス、

一同納拂殘總有高書付、月番奉行衆江遣、

一同納拂幷總有高帳、御年貢米納人別帳、御取箇方江差出ス、

一同總有高一ヶ月納拂、出目闕差引勘定帳、吟味役衆江差出ス

一三季御切米御金積、請取日割書付、御勝手方江差出ス、

一右同斷、五段廉々渡、切米金員數御屆書付、月番奉行衆、幷御勝手方御藏懸吟味役江差出ス、

一月々六日十八日廿六日、上納銀相場、御勝手方江承り二遣、是は石代金等上納之節ニ用る、

一御藏懸吟味役見廻り之節、前日御膳籾有高、摺立米石數、御遣方、有方、其外薬種稗有高書付、

一同御年貢米納高書付

一同遣方米有高、當日納拂口々書付、

但臨時見廻り之節者、末之貳口而已差出候事、

右之分、書上懸りニ而取調候事、○中略

御藏直渡定印と唱候事

一臨時御用野旅御扶持方、其外定式ニ無之臨時渡之方、御勘定所裏判ニ而、御添狀無之相渡候分定印也、

一御藏渡、定例御添狀廻り引付ニ而相渡候分は、定印無之、

一書替渡ニ而、御馬飼料大豆は、定印御座候事、○中略

諸渡方

御用米米を受取方江爲レ見、此俵出切聞入、

五拾俵迄一俵廻、五拾壹俵より貳俵廻し、細太餅米大豆同斷、

新宮様御方料米

右御用米渡之通、附送なし、

御三卿様膳米渡請取方役人江米爲レ見候事

御用米渡之通、御膳方御藏ニ而米を臺木江乘出し申候、廻方同斷、

御靈屋料御佛供御位牌所料

女中御切米

御三卿様御賄料

右之分、請取方江米爲レ見候而相渡ス、廻し諸渡之分同斷、三俵廻し之事、

諸渡之分

五俵迄壹俵廻し、六俵より貳拾俵迄貳俵廻し、貳拾壹俵より以上三俵廻し、

但御靈屋料之類は、細太餅米も廻し方右同斷、

株付廻しの方

御用大豆　御拂物　國役疊差　水盛棟梁　糊飯米　大豆　在　施行米　稗　猿樂扶持

但鐵燒作事扶持は不ニ升立一候不レ切

右之分貳拾俵迄壹俵、貳拾壹俵以上より貳俵廻し、〇中略

御藏直渡之分幷諸向渡米裏判之事

一御用米幷大豆　御勘定所裏判

但御勘定所裏判不ニ相濟一内、急御用之節は、御賄頭假手形ヲ以可ニ相渡一旨、寛延元辰九月伺相濟、

瑞春院様　増上寺　天英院様　同　月光院様　同

一御佛供料　寺社奉行壹人并御勘定奉行裏判

有德院様　至心院様　正雲院様、惇信院様　随性院様　花光院様

涼地院様　浄圓院様

一御佛供料御位牌料　書替奉行判

一公家衆御賄料　御勘定所裏判

一黑本尊御賄料　寺社奉行壹人并御勘定所裏判

一御三卿様餘分米　御勘定所裏判

御代官扶持　御勘定方御用扶持　御勘定所支配向一體　其外共御役扶持

右者御勘定所裏判〇中略

右之外、不時御用ニ而相渡候節は、添狀ニ而直判渡も有之、又は御勘定所裏判ニ而、相渡候義も有之候事、〇中略

文政十亥年十二月調進來壹ヶ年大凡渡方

壹万八千石程　御用米

大凡月千五百石宛

三千七百石　右衛門督殿〇田安齊匡養子齊荘賄料

是は春手形入置、追々請取由候、

三千七百石程　民部卿殿〇一橋、齊禮養子齊位賄料

渡方前同斷

五百石程　兵部卿殿〇一橋齊禮賄料

是は年々少々宛増減有之

二千九百石程　千三百石程夏　千六百石程冬　御佛供料

三万三百石　御役扶持幷月割御合力

大凡月貳千五百石程宛

五千百石程　貳千五百石餘二月渡　貳千五百石餘九月渡　女中御切米

壹万六千石　御役料

六千石程　春中分米渡

六千石程　夏同斷

四千石程　冬三分一米渡

拾八万五千石　三季御切米

五万五千石程　春中分米渡

五万五千石程　夏同斷

七万五千石程　冬三分一米渡

三千五百石程　右近將監殿　○德川家齊子上野館林領主松平齊厚

千七百五拾石　亥年は春江戸渡

千七百五拾石　同年は大坂渡

合　上中中　上米渡之廉

貳拾六万八千七百石餘

右之所年々中米以上納高

凡貳拾三万九千石程

差引

貳万九千七百石程　中米以上年々大凡御不足

中次米渡之廉

凡渡高

拾貳万七千石程　三季不勤御切米月々定御扶持

内

八万四千石程　定御扶持方

月割

七千石程宛

四万三千石程　不勤御切米

壹万三千石程　春半分米渡

壹万三千石程　夏同断

壹万七千石程　冬三分一米渡

壹万三千五百石程

御代官扶持、作事飯米、諸職扶持、

内

四千五百石程　御代官扶持

九千石程　作事諸職渡り

中次米渡之廉

拾四万五百石程

右之處、中次米年々納高、

凡拾四万七千五百石程

差引

七千石程　中次米餘ル

年々總納高
米三拾八万六千五百石余
內
貳万六千石程　　買納之分
年々
總渡高
凡四拾万九千二百石程
外壹ヶ年
凡貳万石程　　中米以上ニ而臨時渡之分

〔勘契備忘記上〕享保二十一辰年〇元文元年
御勘定吟味役勤方并可見廻所々御書附
一下御勘定所　一竹橋御藏　一蓮池御金藏　一淺草本所御米藏　一本所御材木藏
右場所江折々爲見廻罷越候樣可被致候、此外之儀は、只今迄吟味役相勤候通可被相心得候、
辰四月

〔御金奉行公用叢中勤仕儀〕享保八卯年六月四日、水野和泉守殿御金藏江御出に付、御案內申來り候之事、
一翌五日八ッ時、和泉守殿御出にて、元方之御役所へ被成御上り候、御金奉行細田彌三郎御案內申候、夫より奥御金藏、元方御金藏へ通り御見分御座候て、直に拂方へ御通り被成候、御勘定奉行衆、吟味役衆不殘、其外御徒目付、御小人目付差越候、
寶曆十辰年八月三日、御勘定奉行一色、小幡、石谷、坪內、并吟味役小野、天野、古坂、組頭依田十郎兵衛、

物品受拂

上遠野源太郎被ㇾ參候て、元方御金藏三ヶ所共見分、御金銀改相濟申候事、

〔大坂堺巡見記〕御堀廻り幷玉造鳴野御藏見分〇中略

一御藏 桁行三間 梁間六間　一八角御藏 十二戸前

右は新入候由

一御米藏 四間に廿間　棟數廿九棟　戸前數六十四戸前

右は御米奉行出迎案內

一勘定場 二間に六間　但藏番所有

右見分相濟、靑屋口玉造御門外通、御堀廻り追手御門より御城入〇中略

難波村御藏見分

御藏數十七棟但 戸前數三十四 二間二尺、廿間宛、 御米五百俵

一御勘定所一ヶ所右入口へ御藏奉行出迎、幷御定番の與力、町御奉行與力一人宛出、右見分濟、

〔甲府巡見記〕八月廿七日〇年號不詳

朝六半時過、一色丹後守殿、戸川因幡守殿より以ㇾ口上書、御城內何れも揃候間、勝手次第罷越候樣案內被ㇾ申越、〇中略丹後守殿因幡守殿同道にて御玄關より下り、御破損奉行先立、兩組頭衆一同御金藏江罷越、御圍內御代官立會、假役衆案內ニ而見分相濟、〇中略夫より御米藏見分、其節御代官御藏立會、假役衆被ㇾ罷出候、夫より御門々御櫓等不ㇾ殘見分相濟、山之手御門より御城ヲ出ル、此所にて一同乘輿、支配衆之跡ニ付罷越廓內御米藏表御門外にて一同下乘、御藏見分、其節御代官立會、假役衆被ㇾ罷出候、

〔享保集成絲綸錄 十八〕正德二辰年七月

御納戸頭へ相添渡之

覺

常々御用之品御入用等、心之及候程入念、同役申談、吟味之上、御費無之樣ニ相定可被申付候、御納戸へ請取物、且又御納戸ゟ所々江相渡物之儀、右之心得ニ而、吟味之上、斷之書付可被差出候、向後不吟味に在之候はゞ、何も越度たるべく候間、可被得其意候、以上、

七月

御賄物奉行へ相添渡之

覺

常々御用之品御入用等、心之及候程入念、同役申談、吟味之上、御費無之樣に相定可被申付候、御賄物方へ請取物、且又御賄物方ゟ諸色申付候御用之品々、右之心得にて、吟味之上、斷之書付可被差出候、向後不吟味に有之候はゞ、何も越度たるべく候間可被得其意候、以上、

七月

御賄頭へ相添渡之

覺

常々御入用等之儀、幷御賄方江請取物、且又御賄方ゟ所々江相渡物之義、再篤遂吟味、御費無之樣に可被相心得候、吟味之儀、段々ゆるみ候樣相聞候間、心之及候程入念可被申候、尤支配幷組之者にも、勤方不精ニ而、不相應之者も在之候はゞ、伺之上引替可被申候、向後不吟味ニ而在之候はゞ、何も越度たるべく候間、可被得其意候、以上、

七月

御細工頭へ相添渡之

覺

常々御用之品、御細工所へ向々ゟ斷有之申付候節、再應遂吟味、少も御費無之樣可被相心得候、別而三郎兵衞、兵右衞門、安左衞門は、前々櫻田より相勤御用向之筋も存在之故、御取立當御役も被仰付候處、段々勤方もゆるみ、總而近き比者、御誂物御買上物直段等、高直に有之處、吟味等も麁末に相聞不屆候、向後相愼、御入用之儀諸事入念可申候、尤支配幷組之者にも、勤方不精ニ而不宜者候はゞ、吟味ニ而伺之上引替可被申候、以後御入用等吟味之儀、麁末之事候はゞ、何も越度たるべく候間、其旨可被相心得候、以上、

七月

御臺所頭へ相渡之

覺

諸事御用ニ付、向々ゟ斷、御臺所へ請取物之品、其度々委細同役寄合相談候而、御費無之樣に、心之及候程入念、吟味之上、斷之書付可被差出候、段々勤方ゆるみ不宜候間、其旨急度可被相心得候、尤向々ゟ御用之品諸色請取候以後も、御道具等麁末に無之樣、支配之者へも常々堅申付、諸事入念可申候、支配幷組之者勤方不精ニ而不宜者も候はゞ、吟味候而可被申聞候、向後不吟味ニ有之候はゞ、何も可爲越度候間、可被得其意候、以上、

七月

〔天明集成絲綸錄二十二〕寶曆十四申年〇明和元年正月

御勘定奉行江〇中略

一諸向御入用請取候書付被差出候節、此度之御入用請取候得ば、當正月ゟ是迄御入用、都合何程請取候段、幷御修復御入用積等被差出候節、何年以前御修復有之候場所之旨、且臨時請取もの書付被差出候節、何年以前請取候旨、以來右書面之肩書に朱書に相認差出候樣可被致候、

一御作事方、小普請方、御賄方、御細工所、筆、墨、紙、蠟燭、石灰、瀝油、布晒、其外品にて請取候儀、此以後相止、其役所々々にて買上にいたし、右金高は、一體御入用之内江差加、其分脇書に相認差出候樣可被致候、

右之通、向々江申渡候間、可被得其意候、尤支配之向々江も可申渡候、

正月

（天保集成絲綸錄八十九）天明八申年十月

御目付江

拂方御納戸ゟ、是迄諸向江相渡し候蠟燭、御納戸渡相止、以來御本丸於御賄所相渡候樣、御賄頭江申渡候間、來月朔日ゟ受取候分は、御賄所におゐて受取候樣、別紙向々江可被相達候、

十月

天明八申年十一月

御目付江

蠟燭受取候斷之儀、非常其外無據差懸假受取にいたし候儀も有之候はゝ、右之分は、其翌日御賄所江之斷書差出可申候、斷延引に無之樣、蠟燭受取候向々江可被達候事、

（天保集成絲綸錄七十四）寛政元酉年三月

御目付江

總而御賄所御細工所より諸向江相渡候品々損候得は、引替相渡來候處、近頃相嵩み候向も有之趣ニ付、以來御道具類は勿論、鐵物、瀬戸物、釣瓶、井戸車、桶類、其外日用御勝手遣之輕キ品々、小刀庖丁箒等之類ニ至迄、損シ候はゝ其品差出候上、引替可相渡旨、御賄頭御細工所頭江申渡候間、右品品請取候向々江、書面之趣相心得、損之品々は差出引替請取候樣可被達候、

買上

三月〇中略

寛政元酉年九月

御勘定奉行江

御小納戸爲御用諸向より請取候品々御入用之儀、向後一ヶ月限〆高江、向々奉行頭之印形取之、其月御用立之品々突合、改之上右帳面江、何も致奥印、幷扣之帳面相添可被差出候はゝ、御勘定所江可相渡候間、其上ニ而御金相渡候積相心得、可被取計候、尤其段向々江も申渡候、

右之通、元掛奥之番江申渡候間、被得其意、漆奉行江可被申渡候、

〔憲教類典 五ノ九 米穀〕享保十七壬子年十二月廿二日

一知行米賣上分は、上中下米之穀數書付手本米相添、自分之名書付、御勘定所江可差出事、

一江戸屋敷幷船中、または知行所に有之米も、賣上べき分は其譯書付可被差出候事、

一米直段之儀は、其時々之問屋相場より高直に買上べく候、米直段御勘定に張紙いたし置候事、

一御買上米之儀は、淺草御藏にて納可申候、但運賃は地頭之入用之積りたるべく候事、

一米所持候ても賣上まじくと存候分は、勝手次第たるべく候事、

右之趣幷別紙書付、關東領分有之三千石以下之面々江可被達候、

子十二月〇中略

享保十八癸丑年二月二日

一麥御買上に成候義も可有之候間、新麥出來次第、餘計も有之候はゞ、江戸江廻し相拂可申候、

一右之通、麥相廻し候に付、百姓夫食不足爲無之、隨分精出し、雜穀多く作り候樣可致候、

右之趣、關八州、伊豆甲斐之私領へ可被相觸候、以上、

丑二月〇中略

拂下

延享元甲子年九月十二日

町奉行所にて申渡候覺

一江戸八町米屋米御買上候間、上中下三段直段差出し、淺草江取出し拂可申候事

但御買上候義、江戸計にて無之、日本六十六ヶ國にて御買上ゲに候、

〔淺草米廩舊例〕仙臺米御買上納仕法

一棹圖を入、當り候拼三十六俵之內より、圖にて三俵取出し、打込平均廻石詰台切之積り、(中略)

町米御買上納　井太餅米　大豆　菜種　荏　荒稗

一棹圖拼圖を入、中り三拾六俵江又々中り圖三本入拂之通、打込平均石詰納也、

右は寛政二戌年十月朔日、御附紙相濟來、依之細太餅米、大豆、荒稗、荏、菜種等も、是に准じ申候事、

但貳俵より三拾五俵迄貳俵廻り、三拾六俵より三俵廻し、

御買上太餅米大豆納仕法　飯塚常之丞（飛驒郡代手附）

御買上人　荒井孫助

一棹圖拼圖を入、中り三拾六俵買目懸一口ニ出候得共壹俵宛計立、建札入通ニ相成候得ば不及、

差米、是は孫助ニ限り候事、

〔淺草米廩舊例〕御拂米

近江屋喜右衛門、埀見屋淸右衛門懸りニ而有之候節、左之通諸渡方同樣、圖ニ而三俵出、打込平均廻ニ而相渡候事、

株附二俵廻しの事

端石渡

壹俵より拾九俵迄壹俵、貳拾俵以上貳俵廻、

〔憲教類典五ノ四下 地方〕寶曆四甲戌年四月

佐州御藏米御拂之儀、相川町之者、人數に應じ、先達て元書石高相極去十二月迄極高之通買請候處、當春より元書之通不買請由、左候ては御米拂方時節後れ相成、自然と御米御損失に成候、右御拂米は、地役人幷地下人共之ため殘置、買請させ候事ニ候、元書石高極置候通買請候樣、相川町之者江可被申渡候、右元高極置候通り不買請義は、在々より米附出候故之義と相聞候、畢竟口留番所不〆り故、在々より附込候、以來口留番所にて、急度差留候樣可被申付候、尤御勘定奉行可被談候、

四月

右之通り佐渡奉行へ申渡候間、得其意可被談候、

〔地方凡例錄七〕一鄕帳發之事 附り一地方三帳之事 一御取箇帳之事 一納拂明細帳之事 一御勘定帳之事 一御證文幷起合印調印之事 一鄕帳幷御取箇帳可差出期月之事 一諸帳面寸法之事

一鄕帳之濫觴を尋るに、古來は諸事大樣にして租稅之法も細密ならず、其事年々御代官御取箇を極め相納め、公儀にて多少の御穿鑿もなく、厘割と云も無之濟來し處、大猷院樣〇德川家光御代、慶安二己丑年、諸國御代官江被爲命、年々御取箇幷小物成、高掛物等、可納分帳面に仕立、御勘定所江可差出旨にて、御案文相渡り、仕立て御取箇鄕帳と名付、此時〻差出す事に成たり、尤其一村の土地より出る品類を記す帳面たるに依て、是を鄕帳と云、租稅の元にして、可納品々是に洩たる事なし、至て大切の帳面なり、〇中略

一納拂明細帳といふは、右御取箇帳鄕帳に載りたる諸納物は勿論年々增減之諸運上分、或は御林立枯、御普請古木、古鐵物、御拂代、又は闕所物、過料金等、都て淺草御藏御金藏江可納品々、一事

も不洩様組入、地方組之元に成なり、又村々へ可渡品々、是又無滞拂に立諸拜借返納米金地方に不組分は外書にして、御勘定仕上ゲ之元拂になる帳面也、御殿皆濟方へ差出し、證文今もあり、仕組方は末に雛形を出す、

一御勘定帳は、御年貢米金、其外諸納拂、一品も不洩様、右納拂明細帳に載たる分、淺草御藏御金藏江上納皆濟、并諸渡方も相濟し上仕立之、御勘定所帳面方組頭へ出し、掛り御勘定改を受、證文合せ札合、札合と云は、淺草御藏御金藏に納たる米金、御藏奉行御金奉行の請取書を納札と云、御勘定帳に人數記し、納札と突合するを札合と云也、其外突合せ物不殘濟し、置證文并納札は小直紙に寫、帳に仕立差出、置證文は御代官に置、當證文納札は御勘定所へ上る、右證文合せ濟たる上、起印方調べ方へ御證文持參突合せ、起合印調印共留帳を消す、其後御勘定奉行ゟ御老中方へ差出、於御席御勘定奉行、吟味役、組頭侍座、御代官罷出、御代官所地方御勘定帳計、勘定合中儀有、帳面奥之總寄を御代官讀之、但御勘定帳寄にては、御代官讀、違算計に付、元拂共別之紙に書、總寄之所へ入置讀之、尤於御勘定所下稽古有、唯四五日計之事也、御勘定方致算盤、元拂差引合せ、御勘定合濟めば、御勘定奉行、吟味役、組頭連名にて、御代官宛所之奥書致し、猶其奥に御老中方御連名之奥印、綴目印、御勝手方御老中御調印にて、御代官へ渡す、御金藏御勘定帳は、御金藏ゟ請取たる金銀を元に立、其拂の廉々記之、是又證文合せ等有り、改濟たる上、御勘定奉行ゟ組頭迄之奥印にて渡る、御金藏御勘定帳、并地方御勘定帳も、御預り所之分は、御老中方奥印なし、帳面仕立方は、雛形末にあり、

但御勘定仕立の儀、御年貢未進等有之、年送りに成、三年迄御勘定仕上無之分は、其通にても相濟めども、若三年を越、皆濟無之、御勘定仕上於延引は御糺明に可成、御代官役にも障り、其時宜に寄りて家にも障る事有、〇中略

一諸帳面寸法之事

一鄕帳　竪壹尺五分　橫七寸八分　綴目外四分　紙中程村、苧縄雙紙綴、

一御。勘。定。帳。（竪壹尺四分 横七寸六分 綴目外七分）紙厚程村、袋綴、

但（綴目御老中御印有之に付平学 綴、切目付帳にて御綴目不高様に致す、）

一勘。方。帳。（竪九寸五分 横六寸七分 綴目外七分）紙大障子、小口張、

一村。鑑。大。概。帳。郷帳同寸、綴上西之内打紙、苧縄雙紙綴、

右之外、御勘定所へ出す諸帳面寸法定メ無、御取箇帳も、紙は西之内、袋張に極りあれ共、寸法之極めはなし、

〔御金奉行公用囊中勤仕録〕享保七寅年四月、元方御金藏金銀員數、延寶七未年、同申年、右兩年分書上候樣、御勘定所より申來り候之間、相糺候へども、右書物等一切見へ不申候に付、左書面之通書出し申候之事、

覺

一元祿二巳年以前、御帳面幷諸書物、元方御金藏には一切相見へ不申候、

一拜借帳類一件引出し之内に有之外、御帳無之候事、

寅四月廿一日

元方御金奉行

覺

一延寶七未、同申、兩年分、元方御金藏金銀員數吟味仕候處、右之帳面類無御座候、反古同前之書物迄吟味仕候へども、右御尋之御用に相立候書物無御座候、以上、

寅四月廿八日

元方御金奉行

〔憲敎類典五ノ四下地方〕寶曆八戊寅年四月

御代官より差出候御。勘。定。帳。翌年中に令加印候趣、近頃は相延候も有之候、然ル處、御代官より差出候諸伺書、御勘定所にて吟味差滯、自然と御代官より差出候御勘定帳、延引に相成候も有之趣

に相聞候、依之向後御代官御勘定帳加印之儀、翌十月かぎり可被差出候、尤格別之譯有之、及延引候はゞ、右之譯十月限書面を以可被申聞候、若子細無之相延候はゞ、其懸之組頭幷御勘定共に無念可相成候之條、常々無油斷、諸伺等遲々無之樣可致旨可被申渡候、尤右之趣、以來共忘却無之樣可被致候、右之通候上は、御代官にては、御勘定帳遲滯無之樣、是又可申渡候、

四月

〔代官觸留 四〕御代官名々々差出候地方御勘定帳、御加印濟御渡之節、陣屋詰、又は支配所廻村中者、元〆手附手代共之內、御呼出之上御渡御座候處、向後右御加印濟御渡之節は、矢張元〆共御呼出有之候て御渡、請取書は御代官直判之書付差上候樣、御評議相濟候段、銘々御代官江可申聞旨被仰渡、承知奉畏候、右御受奉申上候、以上、

卯 閏九月十〇天保四年八日

藤方彥市郎手代 野中修平印
外出役連印

小馬登一郎殿被仰渡

〔天保集成絲綸錄 七十四〕寬政二戌年九月

御勘定奉行江 〇中略

一總勘定帳、幷運上帳は、老中若年寄御勝手懸り江、一通ツヽ可差出事、〇下略

〔渡邊與次右衞門筆記〕役所帳面之次第

一金銀錢請取元帳一冊 此帳面は、役所一大切成ル帳ニ而候間、此帳面を以樣子可承届ケ事、

此帳へ水戶御金方、其外諸役所のは、相納候金銀錢玉金等迄一切之役所元ニ請取分を記シ申候、則手形之面ヲ此帳へ留、手形を引合、かど／＼へ押切りいたし、尤名所へも判ヲ致、能帳手形讀合、月日改、納人へ相渡シ申候、此帳は年々之御勘定ニは出シ不申候、仲間御役替之時分仕退、御勘定之節、此帳面不殘書記し、御勘定所へ出シ申候、御勘定所ニ而は、年々之拂御勘定之節被相渡候帋

替ハ、此元帳を引合、元拂之御勘定被見濟候、是を指出し帳ト言、此帳面ト手形共は、皆々元御金奉行之宛所ニ而、手形出シ申候事、

一兩替證文帳一冊、小粒ヲ小判ニ兩替ニ付切賃、小判ヲ以銀子調申直段、此證文有り、此帳へ者水戸ゟ御金小粒ニ而參候節、小判ニ兩替致、其品々を留申候帳ニ而御座候、兩替ニ出シ申候節者、手代衆日々御目付部屋江、明ル兩替ニ罷出候由斷、御歩行目付罷出立合被致候間其衆ト申合、駿河町江參候而、兩替屋四五間ゟセリ札ヲ取此方兩替屋海保六兵衛方ニ而、其セリ札ヲ拔キ、直段安き方へ札を落銀子小判切り賃共ニ落札之方ゟ納させ申候、兩替屋は、海保六兵衛、藏田七郞右衛門、島屋清兵衛、大坂屋六右衛門、中川清三郞、是は元祿八正月ゟ入札入御用相達シ候、此五ケ所ゟ札ヲ取、今日札相究候得者、翌日御用金銀持參申候間、改請取、此兩替證文へ賣上ゲ人之判ヲ取、代金相渡し、此證文重而御目付部屋へ手代衆持參して、立合衆判形取申候、證文之面は、此帳面之金銀通り元與申候而、年々の負ニ罷成候事、

一金何百兩者小判、但小粒百兩ニ銀何拾目宛切賃也、此小粒何萬兩也、

一銀何拾目者、右之切賃也、

右者小判御用ニ付、御藏ゟ小粒御出シ、誰殿御立合ニ而、相場ニ兩替仕上ゲ申候との文言ニ而、其當人兩替屋判形被相濟申候事、宛所在番之御金奉行壹人計也、

一負判と申候は、一年切之御勘定之時分、兩替證文帳出し申候間、其年々の兩替金切賃、大判小判、小粒共ニ、其元高を御勘定方ニ而、右之新元へ組添被置候、此分は返リ元と申候、此帳面へ同役衆判形被致候を負判と申候、此判仕退之節ならでは、消し申候事成り不申候、是又大切之事ニ候間、此方の扣を寫し、能々見合、判形可被致事、此元は致兩替金銀高也、年々の御勘定に出し候事、

計算

〔渡邊與次右衛門筆記〕一兩替之事、諸方萬拂方ノ兩替六拾四匁六拾貳匁ノ割ニ而相渡し來候處ニ、元祿九年子ノ二月中ゟ、銀子直段下り申候ニ付、三月中見合候得は、次第ニ相場安く罷成候而、四月兩替相場下直ニ成候へば、諸手形の相場付六拾二匁ノ諸手形、役所へ取納難成候旨申達候、依之御用部屋御相談相究、諸役所御用部屋ゟ斷出、自今以後は、諸手形之相場付六拾四匁ニ相究申候由、役所江斷有之事、

但銀直段下り候儀は、新銀大方作り申候故、上方ゟ銀子多ク指下シ候、依之銀直段只今下り申候由、兩替屋共申候事、

〇按ズルニ、兩替ノ事ハ、產業部商業篇ニ詳ナリ、

〔御金奉行公用叢中勤仕錄〕台德院様（德川秀忠）大猷院様（德川家光）御代御金奉行其節は納拂之帳入上覽、其帳は御黑印被遊被下置候由、

〔憲教類典五ノ三上　地方〕承應元壬辰年正月四日

覺〇中略

一每年三月五日より御勘定始り、去年之分は中勘定、其餘は皆濟尤候、若皆濟可在之御勘定及遲滯候はゞ、御藏改之上、滯候子細御僉議可有之候間、可被得其意事、〇中略

寬文六丙午年四月

覺〇中略

一御年貢收納之金銀は、早速御金奉行衆江可被相渡候、翌年春夏之內、勘定目錄仕上、三年目三四月之頃、必可在皆濟候之事、

〔勘契備忘記上〕貞享四辰年

御勘定組頭幷御代官可心得御書付

定、〇中略

一御代官御勘定を、去々年を皆濟、去年を中勘定に可仕、勿論去年共ニ皆濟可成分は彌其通可仕、右之通難成子細於有之は、御勘定所江相斷、吟味之上可立事に候はゞ、御勘定頭中江組頭中ゟ可申達事、

一諸役人御勘定、年々又は隔年に可仕候、是又可滯子細有之ば可爲右同前事、

〈朱書〉此ヶ條、當時は元拂御金藏、淺草御藏、御賄方元拂方、御納戸、此分は、去年分翌年に仕上、其外之諸役所は、去年分を翌春中御勘定仕上申候、

〔勘定所條例一〕正德二辰年

地方取計之儀ニ付、御勘定奉行御代官江申渡候書付、

覺〇中略

一御勘定、年限ニ仕上可申候、子細無之延引ニ而は、急度可遂吟味候、米金銀くり越不申樣に御勘定可仕上事、〇中略

右之趣、前々も急度申渡候へども、尙又書付遣之候、得其意、手代共へも入念可申渡候、巳上、

辰四月

〔御金奉行公用囊中勤仕錄〕小田切庄兵衛咄候は、享保元申年御用留に、御勘定不足金之御尋之處に委有之、且又元祿二巳年御勘定帳之奥書には、御留主居より之引受高と相見へ申候、享保二酉年御用留に委有之候、いまだ御勘定者、元祿元辰迄は仕上無之、先々御金奉行手前に下帳諸證文留有之由を、西尾彥四郎、土屋新五郎など勤候節之事之由にて候、

〔天明集成絲綸錄二十二〕安永四未年閏十二月

御勘定奉行江

御勘定吟味役

去卯年ゟ五ヶ年之間、諸向御入用御定高被仰出、當未年迄にて年限に相成候に付、去午年迄四ヶ年分、向々御入用增減之儀相糺候處、御定高相減候向も有之、又は不足いたし、年々繰越に相成候も有之由、御勘定奉行申聞候、右年々御定高を越不申、減有之候はゞ、御入用減方出精いたし、勘辨も有之儀と相聞、年々御定高繰越候分、向々ゟ斷下ゲ候に付、無據御入用は減方も有之間敷、年限滿候事に付、其沙汰に不及候間、當年迄繰越候分は、其年々之御入用勘定に被相立、來申年ゟ之儀は、諸向とも、猶卯年之御定高を相守、向々ゟ斷下ゲ候分と、償方勘辨いたし、可成丈翌年之繰越等不致樣可被取計候、尤是迄減も有之候分は、彌御定高内にて相濟候樣、猶可被心附候、

閏十二月

右之通、御定高有之向々江申渡候間、可被得其意候、

〔天保集成絲綸錄七十四〕天明八申年三月

諸向御入用遣拂之儀、翌年御勘定仕上候樣、享保八卯年相達候處、當時ニ而は格別延引および候向も有之趣相聞候之間、是迄延引之分は、早々取調仕上帳御勘定所江差出、以來之儀は、享保年中相達候通彌相心得、翌年十二月限り仕上帳御勘定所江差出、其度々可被申聞候、尤御勘定奉行可被談候、

三月〇中略

寬政元酉年二月

御目付江

諸向御入用場所向々、去申正月ゟ十二月迄之御入用金銀米、其外諸品請取高書付、幷安永七戌年ゟ去々未年迄十ヶ年御入用請取高書付相添、尤定式臨時二口にわらべ分ヶ差出候樣可被致候、

欠損

右之趣、御入用場所向々江可被逐候、尤取集可被差出候、

二月

(元治元子年地方御勘定帳摘要)朱書御勘定所諸納ノ總勘定ハ、三ヶ年目ニ仕上ル仕來ニテ、則チ子年○元治元年分ヲ寅年○慶應二年中ニ總勘定ヲ濟セベキ筈ノ處、同年分相後レ、卯年○慶應三年ニ至リ漸ク著手、右掛リハ新參ノ御勘定組頭主任スル慣習ニ依リ、子年分ノ總勘定ハ石川壯次郎主任致シ候、御勘定ハ鈴木孫四郎外五名ニ御座候、全ク取調相濟タル處ニテ、御老中若年寄御勘定所江出席、其面前ニ於テ數十冊ノ帳面ヲ以テ、御勘定組頭ハ讀人トナリ、御勘定ハ十呂盤ヲ持テ細カナル内譯ヨリシテ算當致シ、其上ニテ此總合高迄算改致シ、間違ナキヲ認メテ、御老中若年寄ノ調印ヲ申請ヒ候定例ニ御座候、

(地方要集錄)一御藏にて、納米若火事にて燒失之時、公儀役人米請取納置候得ば、公儀之御損失、公儀役人不請取、名主請取置候分ば、百姓損失なり、

(難破船取計一件)難破船御定法御運賃被下方箇條覺○中略

一御米積立、出船以後破船仕候はゞ、船は船頭之損、御米海中江入候内、掛揚米并海中へ捨り候米共、御運賃金高之内三分二、御公儀御失墜可被成候御事、

一御米積立、於其湊逢難風破船仕候はゞ、出帆同前に、御米并御運賃金高之内三分二、御公儀御失墜可被成下候、勿論船者船頭之損に可仕候御事、○中略

一海上にて逢難風、打米不仕候ては不叶時節者、先粮米不殘打捨、御城米之儀者、上乘江相對仕、打捨可申候、捨米之儀は、御運賃返上納仕候、積船破損仕、濡米に成候はゞ、前々之通、御運賃金高三分二之積被下置候筈、但濡米干立、御藏江積屆候はゞ、是又前々之通、本米同樣に御運賃不殘被下置候筈御請仕候、但打米仕候節、百姓欠米、船頭粮米之打殘、船中に有之候はゞ、御公儀江御取

上ゲ可被遊候御事、

(難破船取計一件)御達書

御年貢米、幷御買上御廻米及難船候節、陸揚いたし候もの江三十分被下方區々に付、以來者難船入津之上、濡濕手米有之、所御拂に相成候節、浮船より陸揚いたし候もの江は、三十分一不被下積、水船より陸揚いたし候もの江は、三十分一被下候積に候間、巳來右之通取調可被相伺候、此段岸本武大夫、山口鐵五郎、吉川榮左衞門江可被相達候、以上、

文化四卯七月十七日

水野若狹守 ○以下四人並勘定奉行

松平兵庫頭

小笠原和泉守

柳生主膳正

加藤捴兵衞殿 ○以下二人並勘定組頭

岸査十郎殿

(難破船取計一件)奥州伊達信夫郡村々、去寅年分、夫食拜借返納米、海中捨御失墜に相成候に付伺書、

覺

寛政四子年水谷祖右衞門 ○代官 入手形

米二千五百六十七石三斗三升七合六夕　但申より丑迄三拾ヶ年賦

内米七拾六石六斗二升五合三夕二才　去ル子年、私方より岸本彌三郎(代官)方江引渡候分、

同六寅年松下内匠引受高

米二千四百九拾石七斗壹升二合二夕八才　但右同年賦

内米六百三拾九石八斗六升三合四夕四才　去ル亥年、松下内匠より竹内平右衞門方江引渡候分、

米三百八石三斗九升六合三夕二才　去ル申より亥迄四ヶ年、松下内匠方にて取立返納仕候分、

文化元子年私引受高

米千五百四拾二石四斗五升二合五夕二才　但子より丑迄二十六ヶ年賦、壹ヶ年米五拾九石三斗二升五合一夕ヅヽ、未年は五拾九石三斗二升五合二夕返納

奥州伊達信夫郡村々

去寅年分夫食返納米、海中捨御失墜に相成候分、

一米三十五石四斗八升六合壹夕四才

外米二拾三石八斗三升八合九夕六才　石代金を以、淺草御藏江返納相濟候分、

右者私御代官所、井私領奥州伊達信夫郡村々夫食米拜借返納、去寅年分之內、書面之石數御年貢米一同私立、當正月廿七日、同國寒風澤湊出帆、竹內平右衞門掛、仙臺領御買上米同國石卷湊におゐて積入、三月十八日同所走登候處、於沖合同四月二日沈船に相成、書面返納米、海中捨失墜に相成申候、於然は右夫食米返納皆濟之節、年々取置候納札、井此御證文を以、先達て水谷祖右衞門入置候手形引出候樣、置御證文可被下候、以上、

文化四卯年九月　大岡源右衞門官〇代　印

御勘定所

〔落穗集追加四〕土井大炊頭殿と伊丹順齋出合の事

一問曰、權現樣の御事は、少は御吝嗇なる御方被成御座たる共申、又左樣には無御座共申よる、をば如何承り候や、答曰、權現樣杯の御噂を、拙者如き者の口より申上事るは、恐れ入たる御事にはあれども、人々の惑ひを散じ候爲と存るを以て、愚意の趣を申上候、〇中略權現樣の御事を相考へ奉に、よく儉約を御用被遊たると申に於て、御相違は無之也、其子細を申に、台德院樣〇德川秀忠御代の儀のよし、御勘定方に於て、公義の御勝手方の義に付、大分の德用有之義を、何も打寄勘辨の上、其趣を委細書付に認め、式日朝に至り、伊丹順齋〇勘定頭土井大炊頭殿へ持參也、是は對顏の上、件

の書付を被差出ければ尤此書付をも披見可申なれ共先大體如何樣なる、趣の義に候やと、大炊頭殿御申に付、順齋申さるゝは、只今迄の義は、御旗本衆大身小身に限らず、御藏米を以、物成等をも被下置也、其外大扶持方拜領の面々共に、其通りの御沙汰に有之を以、諸國の御代官所より、御當地取の御囘米多く有之故、運送の御失墜もかゝり、其上御藏の内に積置く間の欠米鼠喰と申も、大分の御費に相見へ申間、向後の義は、御藏米三四百俵取の義は、只今迄の通りになし被置、五百俵以上を被下置るゝ面々の義は、知行所へ遣す家來にも事欠不申儀に候へば、何も地方知行に御直し被遊、幷に大扶持を被下置候衆中の義も、俵數の高を以て知行御直し、是又地方にて被下置如く有之候はゞ、大分の御德用可有御座と、御勘定方に於て何れも相考候也、其上御藏米多く有之に付、三四年宛も越米と罷成しを以、其米は悉く虫喰となり、左樣なる俵に取り當りたる末々の者共は、殊外迷惑仕る由に候、御廻米の高を減少被仰付、御當地の御藏の棟數へるに付、其德用之儀は品々有之を以て、右段々を書付て、御城に於て御同役方被成御揃、御列座にて差上可申旨、同役共申合せけれ共、先御内意をも相伺可申ため參上仕ると也、其時に大炊頭殿御申には、其儀に於ては最早此書付を見申迄も無之也只今其元御申聞の趣は、權現樣御繁昌にて被成御座候節、先達て御沙汰有之たる事也、其節の上意には、我當地を居城と有るにつゐて、東西南北の諸大名を初め、天下の萬民當所へ寄集り候事也、常とても廿日三十日とも入船とだへる節には、諸色の直段の上るに付、諸人迷惑仕る由なり、若何變の義も出來して、廻船等の運送不自由にも成り候節、江戸中の者共をば誰れかはごくみ可申と存候也、去によつて、我等手前に大分の損米有之義は、兼て相知れたる事ながらも、藏米を潤澤にたくわへ置くと有るは、天下を知る者の役義と思ふに付ての義也、然るに差當りたる損益計りに目を付け、大變の處へ心付の無之と有るは、下勘定ふせいの者などの了簡には左も有るべきなり、最早勘定頭共言るゝ者迄が、一同して

ヶ樣なる義を我等迄云聞せると有るは、不器量沙汰の限りなる義也と有る上意にて、以の外御機嫌惡く、其節老中へも被仰聞るゝは、總て大名の道中をするに、雨具を持たる中間どうの獻そうなる仕置をばせぬもの也と上意被遊候を、其以後何も打寄られ、先日雨道具持の義はいかなる思召を以ての上意にて、右御廻米御德用の義を、一々書立のヶ條の中に、末々の御奉公人ども、虫喰米に取り當り候ては、何れもめいわく仕ると有之儀を、專一の樣に書のせ有之也、右御覽遊ばすに付ての上意にても可有御座やと、何れも推量被有るゝと也、右の通を大炊頭殿御咄の上、件の書付を御返し有りければ、順齋是を請取て申さるゝは、只今被仰聞を、夫には心付も無御座、不調法なる書付を差上候て、めいわく仕候、併如此不調法なる義を申上るに付、結構なる御物語承り、向後共に、私共の大きなる心得となり申儀なりと申されて、退出被致候と也、右之趣は、直に大炊頭殿御物語にても有之や、大野知石雜談を慥に承り罷在候に付、此一事を以、權現樣には御儉約の一筋を御用ひ被遊、御吝嗇と申す譯にては無御座と有之儀を奉承知と也、

〔折たく柴の記〕中二月〇寶永六年三日、召しにしたがひて參れり、詮房朝臣〇間部して仰下されしは、大喪〇是年正月、徳川綱吉薨、の後は、老どもも一人づゝをして本城に宿直せしむ、しかるに彼等申す事あり、かゝる時、一日も本城に主なからむ事然るべからず、我〇德川家宣すみやかに移るべしといふ也、代々の例、前代常の御座所をば造り改められて移り給ひぬ、此たびは大御臺所移り住せ給ふべき御所をつくりてまゐらすべき事なれば、これらの事を議らしむるに及びて、國財すでにつきはて、すべて今より後の事共に取用ふべきものなしといふ、前代に國家の財用、加賀守忠朝大久保つかさどりし由なれども、眞實は近江守重秀荻原一人に任せられしかば、重秀、美濃守吉保、〇柳澤對馬守重富稻垣等と相はからひし所なり、されば加賀守も其詳なる事をばしらず、まして其餘の者どもの相あづかれる所にはあらず、今重秀が議り申す所は、御料すべて四百萬石、歲々に納らる　所

の金は、凡七十六萬兩餘、（此内長崎の運上といふもの四萬兩、酒運上といふもの六千兩、これら近江守申行ひしところなり、）此内夏多御給金の料三十萬兩餘を除く外、餘る所は四十六七萬兩餘なり、しかるに去歳の國用凡金百四十萬兩に及べり、此外に內裏を造りまゐらせらるゝ所の料、凡金七八十萬兩を用ひらるべし、されば今國財の足らざる所、凡百七八十萬兩に餘れり、たとひ大喪の御事なしといふとも、今より後に用ひらるべき國財はあらず、いはんや當時御祭務、御中陰の御法事料、御靈屋作らるべき料、將軍宣下の儀行はるべき料、本城に御わたましの料、此外內裏造りまゐらせらるべき所の料猶あり、しかるに只今御藏にある所の金、わづかに三十七萬兩にすぎず、此內二十四萬兩は、去年の春、武相駿三州の灰砂を除くべき役を諸國に課せて、凡百石の地より金三兩を徵れしところ、凡四十萬兩の內、十六萬兩をもて其用に充られ、其餘分をば城北の御所造らるべき料に殘し置れし所也、これより外に、國用に充らるべきものはあらず、たとひ今これを以て當時の用に充らるゝとも、十分が一にも足るべからずといふなり、加賀守をはじめて皆々大きに驚きうれへて、かさねて近江守に議らしむるに、前代の御時、歲ごとに其出るところ、入る所に倍增して、國財すでにつまづきしを以て、元祿八年の九月より金銀の製を改造らる、これより此かた歲々に收められし所の公利、總計金凡五百萬兩、これを以て常にその足らざる所を補ひしに、同じき十六年の冬、大地震によりて傾き壞れし所々を修繕せらるゝに至て、彼歲々に收められし所の公利も忽につきぬ、そのゝち又國財たらざる事もとのごとくなりぬれば、寶永三年七月、かさねて又銀貨を改造られしかど、なほ歲用にたらざれば、去年の春、對馬守重富がはからひにて、當十大錢を鑄出さるゝ事をも申行ひ給ひき、（此大錢の事は、近江守もよからぬ事のよし申せしとなり、）今に至て此急を救はるべき事、金銀の制を改造らるゝの外、其他あるべからずと申す、加賀守年比此事を奉れるだに、なほ其詳なる事をばしらず、ましてその餘は、これらの事初て聞し所なれば、今にいたりていかにとも議すべき所をしら

ず、たゞ近江守が申す所にしたがふべきよしを以て申す、我も此年比國財つがざる所ありぬべしとは思ひしかど、かほどまでの事なるべしとも思ひよらず、されど金銀の制を改むべき事は我心にあらず、此事を除くの外、よろしく相議すべしといひたり、○中略此事天下の大議なり、よろしくはからひ申すべしと仰下さる、某○新井君美此仰を承りて、當時此所にこそ、去年の春、諸國より徵れし所の餘分のみはあるべけれ、大坂の御藏にある所はいかにやと申す、其事をも問はせ給ひしに、それもこと／＼く皆用盡されしと申也と答らる、神祖の御時、黄金千枚づゝを以て大法馬をつくられて、行軍守城之用、莫作他費と、銘せられしものゝ、候なるを承りぬ、これらの物いかに候やらむと申すに、其事をも問はせ給ひしに、それもたゞ一つ二つをとゞめおかれて、其餘は皆々新金の料となされしと申す事也と答へらる、窮しては通ずとこそ大易にも見え侍れ、ましてや當時は國財窮り乏しく候とも、さすがに天下の富をたもたせ給ふ御事なり、いかむぞ、その通ずべき道のなくては候べき、これほどの事御心を苦しめらるゝ所にあらず、某よきにはからひ申すべきに候と申させ給へと申て罷出づ、四日には、申すべしと思ひし事のありしに、又此事を承りしかば、夜一夜此事を議し申す事をしるして、夜あけぬれば、封事二通を袖にし、詮房朝臣して奉れり、此事議し申せし所の大要は、○中略當時國財の急なる事に至ても、近江守が申す所心得られず、其故は彼申す所による時は、今歲の國用にあつべきもの、わづかに三十七萬兩のあるのみ也、これしかるにはあらず、彼申す所の去年用ひられし所の國財は、卽是去々年の課稅なり、されば今年の國用となさるべき所は、たとひ彼申す所のごとくたりとも、去年納められし所の七十六七萬兩と、今ある所の金三十六七萬兩とをあはせて、總計一百十餘萬兩もあるべし、また當時の急に用ひらるべき物ら、各色まづ其價を給らざれば、其事辨せずといふにもあらず、其事の緩急にしたがひ、一百十餘萬兩の金をわかちて、或は其全價をも給り、或は其半價をも給りて、

來年に及びて、其價をこと〴〵く償はれんに、その事辨得ずといふ事なかるべし、また前代の御時に國財つがざるために、いまだ其價を償ひ給ざる物共をば、これより後、或は六七年、或は十數年の間を以て、その全價を償ひ給らむに、なにごとか候べき、さらばこれらの事ども、御心を苦しめらるべき所にはあらず、むかし後漢の馮異、願くは國家無忘河北難と申せし事ありき、某はた願ふ所は、今日の御事を忘れさせ給ふ時なくして、天下のために財用を惜ませ給はゞ、實に大だ四海に賚せさせ給ふ所なるべしと申たりき、〇中略これ天下の大議をもて、某に下し問はれし御事の始なりけり、

古事類苑

政治部七十一

下編

田文

田文ハ、田畝ノ町段等ヲ注載セル記文ニテ、從前ノ田籍、田記ナリ、後鳥羽天皇ノ建久年間、鎌倉幕府諸國ノ田文ヲ徵シテヨリ以來、勘造セシメシコト尠カラズシテ、今猶ホ存セルモノ多シ、而シテ又圖田帳、坪付帳、丸帳、作田目錄、作田勘文、水帳等ノ稱アルハ、蓋シ田文ノ類ナルベシ、因テ今此篇ニ收ム、

〔倭訓栞前編十四〕たぶみ　東鑑に田文と見えたり、田地の文籍也、神鳳抄にも田文ニ曰と引り、〇下略

〔小右記〕萬壽五年〇長元元年七月五日戊戌、良圓所申事、呼權辨章信令達關白、左中辨經賴持來源中納言道方加大安寺作料物文、備中安藝駿河備後料官符、常陸守田文、〇中略常陸守田文者、令民部省并山城國勘申、隨其狀可奏聞之由相示畢、

〔蓹軒小錄〕田文之事

攝津國豐島郡南鄕村は、小曾根莊の內也、此處に春日の社あり、社司を今西宮內と云ふ、其家に古來傳來の古證文ども多くあり、此中に田文と云ふ物あり、今の世にクヅと云ふ紙の如くにてはゞ一寸餘、竪にけいを引きて、又橫四系有りて、山川田畑墓原など一々橫に書きてあり、其最初に、文治五年御檢註加納田畑取帳とあり、前に埀水鄕御牧榎坂とありけいの內には、勅旨田、不輸田、公田など云ふことあり、後世に裏打して、折本に直せりと見えたり、東鑑太平記等に、

造田文

大田文と云ふことあり、今時の人は、いかやうの物たることをしらず、此證文にも、田文と云ふ文字はなけれども、古來此を田文と云ひ傳ふなり、今世に水帳なと云ふ類とみゆ、

〔三餘叢談〕吾妻鏡卷十九に、建曆元年十二月廿七日乙亥、明春駿河、武藏、越後等國々、可作整大田文之由被仰行光清定云々、○中略宣昭○長谷川按に、大田文は、いにしへの風土記の遺風なり、太平記に武藏前司諸國大田文を作といひ、北條九代記には源性作といへり、今ノ世に但馬國大田文殘れり、そは弘安八年その國の守護太田太郎左衞門尉政頼が注進せしなり、又東寺所藏の古文書殘篇に、諸國田文事とて、若狹國大田文に、文永九年十一月廿日と年號しるせしがあり、此等に據れば、武藏前司泰時此事を定て、國々の守護職に注進せしめたるものなり、

〔吾妻鏡九〕文治五年九月十四日辛未、二品○源頼朝令求奥州羽州兩國省帳田文已下文書給、而平泉館炎上之時燒失云云、難知食其巨細、被尋古老之處、奥州住人豐前介實俊、幷弟橘藤五實昌、申存故實之由之間被召出、令問子細給、仍件兄弟、暗注進兩國繪圖、幷定諸郡劵契、鄉里田畠山野河海、悉見此中也、注漏餘目三所之外、更無犯失、殊蒙御感之仰、則可被召仕之由云云、

〔吾妻鏡十九〕承元四年三月十四日壬寅、被造武藏國田文、國務條々更定之、當州者右大將家○源頼朝御代初、爲一圓朝恩所令國務給也、仍建久七年、雖被遂國撿、未及目錄沙汰云云、

〔吾妻鏡十九〕承元五年○建曆元年十二月廿七日乙亥、明春駿河、武藏、越後等國々、可作整大田文之由、被仰行光清定云云、

〔太平記三十五〕北野通夜物語事附青砥左衞門事

夫天下久武家ノ世ト成シカバ、尺地モ其有ニ非ト云事ナク、一家モ其民ニ非ズト云所無リシカ共、武威ヲ專ニセザルニ依テ、地頭敢テ領家ヲ不侮、守護曾テ撿斷ノ外ニ不綺、斯リシカ共、尙成敗ヲ正クセン爲ニ、貞應ニ武藏前司入道○北條泰時日本國ノ大田文ヲ作テ庄鄉ヲ分チ、貞永ニ、五十一

箇條ノ式目ヲ定テ、裁許ニ不稱、

〔甲斐國誌二 國法〕本州田數ノ事ヲ記ス者未見之、莊園ノ名行レシモ、全ク録之ノ書ナシ、於古史中稀レニ所見ノミ、今又搜索舊誌所得其名アリト雖ドモ、田數ノ事ニ不相及ナリ、鎌倉ノ時ニ太田文ヲ造ラシム、〈筑前風土記云、貞應中武藏前司入道遣之ト聞ドモ、今不傳、但馬考云、弘安中守護人太田左衛門尉政頼所造者、全然トシテ今存スル趣ナレバ、追年命ニ其國々守護人使造者ト見エタリ、〉其書モ本州ニハ傳ハラズ、

〔古文書聚三〕文永九年十月二十日、關東御敎書案、同十一月三日、相模國司〈○北條時宗〉御敎書案、文永十年三月二十四日到來、謹以拜見仕候了、被仰下若狹國田文事、於瓜生庄分者、可令注進候、恐惶謹言、

三月廿五日　右兵衛尉範□〈○中略〉

諸國田文事、御敎書案如此、早任被仰下之旨、若狹國分可令注進給、仍執達如件、

文永九年十一月三日　左衛門尉頼綱

澀谷十郎殿

〔古文書聚三〕諸國田文事、爲支配公事被召具候之處、令欠失云々、駿河、伊豆、武藏、若狹、美作國等文書、早速可被致勘進、且神社佛寺庄公領等之田畠之員數、領主之交名、分明可令注申給者、依仰執達如件、

文永九年十一月廿日　左京權大夫〈北條政村○在御判〉

謹上　相模守殿〈○北條時宗、中略〉

諸國田文事、御敎書案二通如此候、當國在廳御家人令觸申給、相共守被仰下候旨、可令注進給之狀如件、

文永十年二月廿日　平經重〈在判〉

包枝進士太郎入道殿

進田文

〔古文零聚三〕若狹國太良庄文書

當國田文事、關東御教書如此候、郡鄕庄公領幷便補保等、被仰下之旨、可令調曰右候、仍如件、

文永十年三月十七日　沙彌光全在判

謹上　郡鄕庄保政所

〔淡路國大田文〕淡路國　二郡

注進　國領幷庄園田畠地頭注文事

合

津名郡

國領

郡志鄕田二十一町八反百五十步前地頭女房三條殿 新地頭佐野太郎

除田五丁一反六十步

殘田十六丁七反九十步

畠十三丁二反六十步

除畠二丁二反

殘畠十一丁六十步

浦一所

郡家鄕田三十町三反　地頭駿河入道殿

除田十一丁七反二百四十步

殘田十八丁五反百廿步

畠廿二丁九反百八十步

除畠二丁八反六十歩
殘畠廿丁一反百廿歩
一宮社一所
同神宮寺一所○中略
右大略注進如件、但於庄園者、任建立最前立劵文之旨、注進仕之間、有不審歟、於國領者、付當時文書之旨、令注進也、仍言上如件、

貞應二年四月日

散位藤原朝臣花押
散位凡　宿禰花押
散位播守宿禰花押
右馬允藤原朝臣花押

此注進之狀、無一事僞頗、但於國領田畠者、付當任撿注員數、令注進之、於庄田者、付根本文書、令注進之間、不知委細、畠者自元无注文、此外若虛言注申者、王城鎭守諸大明神、當國鎭守十一箇所大明神、神罰冥罰、在廳等身可蒙候者也、仍爲御不審起請文以解、

貞應二年四月卅日

散位藤原朝臣花押
散位凡　宿禰花押
散位播守宿禰花押
右馬允藤原朝臣花押

合

〔若狹國大田文〕若狹國注進文永二年實撿大田文內事

東鄕八十七町五反二百八十歩○中略

右注進如件、
文永五年七月

〔常陸國大田文〕
同宿内永江六丁八段三百歩　前文闕(朱書)
同宿内林十九丁一段半　○中略

一奥郡
多珂郡百五十三町四段三百歩
久慈東三百八十丁二段半
同西二百四十八丁八段百四十歩
那珂東百四十五丁七段三百歩
安福四十二丁一段半
中村七丁九段六十歩
田谷東方十五丁
同田谷西方十五丁
青柳十丁
枝河九丁六段
津田十二丁
今泉十一丁　○中略
右弘安二年作田總勘文、大略注進如件、
〔但馬國大田文〕　太田太郎左衞門尉政頼
弘安八年之注進

朝來郡

常陸二宮
粟鹿大社百丁七反二百廿六步 領家竹殿法印跡
粟鹿大社定田五十二町小四十五步　地頭島津常陸入道
常荒流失二丁二反六十步　佛神田三十二丁百六十二
步　人給十四丁四反大
文治六年改建久　但雖相觸、不出註文之間、任建久九年百姓注進之、○中略
菩提院領
久世田荘十九町八反半　神田四反　寺田二反　預所佃四反　下司給一丁　公文給五反○中略
略

國衙領
久世田勘納十丁三反○中略 地頭江民部大夫基俊家

畠本家一條殿領家民部大夫　地頭佐貫三郎太郎御家人
田道荘畠十五丁 公文八代孫五郎入道道佛　領家分　十二丁　地頭給二丁五反　公文給　五反○中略

領家八條左少將
物部上荘十六丁五反六十步 地頭左近藏人云々
流失五丁六反四十步　神田四反　領家佃　五反
地頭給六反　公文給　六反　定田　八丁

本院御領
同下荘八丁 領家吉田大納言家、地頭小河左近將監眞盛、公文物部新太郎吉清跡、
河成二反　神田一丁三反百八十分　地頭一丁四反小　公文給一丁二反　徵使二反　已上
地頭代如違註文定
但如建久、承久、建治帳等者、十六丁五反六十分云々、自元上下荘田數等同之地也、半減之上、不註
公田之條、不審也、○中略
右注進如件、抑隨催促、出註文之所者、就其狀注進之、度々雖相觸、不敍用輩事者、雖須註進言上、日數
延引之條、依有恐、且任建久建治之帳注進之、於田 ○此間文缺 地者雖不被仰下、至前田代 ○此間文缺 所入之

檢田文

彼島地也、又雖帶地頭職〈○此間本文缺〉本自入之勤仕御家人役來輩〈○此間本文缺〉注分之、謹令注進言上之狀如件、

弘安八年十二月日　守護人大江〈○以下文缺〉

〔常陸國大田文〕税所殿よりの田文案文

注進常陸國造伊勢口宮役夫工米田數事

合壹段別壹升四合定

奧郡千五百九十町六段六十歩內、

多河郡百五十三町四反三百歩〈○中略〉

嘉元四年八月十日　税所平
大掾平
目代前加賀守

〔吾妻鏡十六〕建久十年〈○正治元年〉十一月卅日戊午、武藏國田文被整之、是故將軍〈○源賴朝〉御時、被遂總檢之後、未及田文沙汰云云、

正治二年十二月廿八日庚戌、金吾〈○源賴家〉仰、政所被召出諸國田文等、令源性算勘之、治承養和以後、新恩之地、毎人於五百町者、召放其餘可賜無足近仕等之由、日來內々及御沙汰、昨日可令施行之旨被仰下、

〔建武以來追加〕一日吉社神輿造替要脚內其國段錢事〈應安五、七、十一〉

就被下院宣、所有其沙汰也、所詮召出國之大田文、寺社本所領、幷地頭御家人等分領、悉充公田、段別三拾文、急速可執進之、〈○下略〉

〔建武以來追加〕一日吉祇園北野神輿造營要脚事〈康曆元、七、廿五、門眞左衞門尉奉行、〉

圖田帳

就綸旨重所有其沙汰也、所詮以諸國之段錢可造畢三社之神輿云々、此上仰使節召出國々大田文、段別參拾文(除三社領、并三代御起請符地、)職寄可檢納之、若令對捍者、爲處罪科云々、交名云在所可注申之、(下略)

(日向國圖田帳)注進國中寺社庄公總圖田帳

合田數八千六十四町(中略)

右去元暦年中之頃、武士亂逆之間、於諸代國之文書者、散々取失畢、雖然寺社庄公總圖田、大略注進如件、

建久八年六月日

日下部依包

權掾矢田部恒

權介日下部盛直

權介日下部行直

權介日下部重直

權介日下部宿禰盛綱

(大隅國圖田帳)注進國中總田數寺社庄公領并本家領所地頭弁濟使等交名事

合田參仟拾柒町伍段大(中略)

右件總田數、任御教書之旨、注進如件、

建久八年六月日

大判官代藤原

諸司檢校散位大中臣(在判)

田所散位建部宿禰(在判)

税所散位藤原朝臣(在判)

目代

源(在判)

一右今年去五月廿二日、守護所牒(六月二日)到來、併欲任鎌倉殿御敎書旨、在廳參上注進當國内郡鄕圖田并寺社庄園田數同本家領所及地頭政所弁濟使交名事、

牒、今年四月十五日御敎書到來、併九州之内、一國一國其國案内候在廳(仁)仰付、國總田庄公可令注進給也、其國幾(土)其内庄分公領分各幾許可被注進也、且又次第郡立候庄公可令分注載給也、其上庄者本家領所地頭、公領者地頭某可令注申給也、地頭者自是補任之所國無隱知歟、且是不補給之地頭其可被注候也、管國之方地頭申、又政所弁濟使何候歟計懸紙各神妙可注給候也、自是地頭補任不令補給之所知食、又誰人何出來時分明爲知食也、仰旨如此、仍執達如件者、當國内云郡鄕田數、云庄園田數、并本家領家預所及地頭政所弁濟使等交名、任御敎書旨、在廳參上令著到、子細具可□也、事急速之御下知也、更不可在延怠也、(○此間文缺)如件以牒之者、任御牒之狀注進言上如件、

建久八年閏七月日

權大掾伴

權介淸原(○以下十四人略)

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國注進國中總圖田帳

合肆仟拾町漆段(○中略)

右件圖田注文、去文治年中之頃、依豐後冠者謀叛、彼亂逆之間被引失畢、仍大略注進如件、

建久八年六月日

權掾藤原朝臣(在判)

權　掾　伴(在判)

大　目　大　藏(在判)

目代右馬允藤原(在判)

〔豐後國圖田帳〕弘安八年十月十六日、自國府被立御力畢、(○中略)公田領家領所地頭弁濟使等交名之事、

宇佐宮御神領千六百餘町〇中略　城興寺領二百七十餘町　權門庄領千三百八十餘町　國半不輸領六百八十餘町　公田八百五十餘町　府警固田十八町　府済物弁國官物定田二百五十六町

豐後國庄公并領主等之事、可委細注進言上由、今年二月廿日、雖被成御教書候、德政之御使、依下向、去正月以來、直人相共昇向博多候間、未尋究處、御使參洛候、其後依兩社造營延引候、此程令歸國、雖致其沙汰、不能巨細候歟、雖然若急速御用候者、可違期候之間、直人等粗令注進、狀一卷、內々爲御存知、令進上候、但此狀者、無四度計候、追進之時、可被替取候、謹言上、

弘安八年九月晦日　　沙彌道忍裏判

謹上　信濃判官入道殿

豐後國直人等記〇中略　當國八箇郡分、國崎、速見、直入、大野、海部、大分、日田、玖珠、田數并領主等之事、

一國東郡　千六百三十八町

武藏鄕三百町　宇佐宮領領主神官名主等

本鄕二百五十四町八段　地頭職大友兵庫入道殿

久吉名十六町　重藤八町　同人

池內永吉名二十一町　地頭職忠左衛門尉惟景跡當知木工助三郎景元

〔集古文書二十八下知狀〕高野山金剛三昧院領筑前國粥田庄雜掌種春與在廳成藤等相論、造宇佐宮所課事、

右〇中略如成藤等申者、當庄者〇中略參百伍十丁之條、無實證、如建久圖田帳、正應二年納帳、去年七月廿日國衙納符者、陸百八十丁之旨所見也、〇中略

正中二年四月五日　　　修理亮平朝臣花押

〔東寺百合古文書七十九〕注進　山城國紀伊郡拜志庄田代坪付事

合貳拾伍町少十六歩内本田○久○畠○十二町少　新田十三町十六歩

上津鳥里

十九坪八段半内

三反半本田、自餘略レ之、

都合田畠二十五丁一反六十六歩　但一反增歟

但此内八反者有二由緒一別當入道推方御之時、相傳數地ミミ定二相傳之仁一申二子細一歟、

文永三年十月日　　　下司

〔運歩色葉集津〕坪付ツボツケ

〔年中行事歌合〕二十六番　右　不勘田奏九月　　　女房○關白藤原基

此秋は千町のをしね數そひて作るに堪ぬ坪○付もなし○中略

右不堪田奏とて、諸國の田の損じて作るにたへぬ所々の目錄をして奉れば、其につきて租稅を三分一など免じ給事の有しなり、細に諸國より坪付を奉れば、大臣陣に參りて、定申て諸國に施行し侍なり、

〔古文零聚三〕注進若狹國恒枝保田地内太良庄仁押領坪付之事

合

七反　淸水南號高屋尻　一反　同坪　一反大四十歩名四郎

二反　道野邊　一反　栢本　一反　栢本　一反六十歩同坪

一反　町繩手　一反　同坪　一反　同坪　一反六十歩榎木本

押付紙

大　町縄手　一反半　上カヤ嶋○中

右田畠坪付注文如件

文永六年十一月五日實檢定

〔東寺百合古文書九十〕五段半坪付事

一段戌亥町自南第二長

半同町自北四段目第五長

一段同[illegible]自北壹段小目次南

一段同町自北参段小目次南

壹段戌亥町

一段四[illegible]

以上正安四年三月八日、藤原氏女寄進御影堂理趣三昧供料也、

〔東寺百合古文書七十九〕注進　拜師御庄内東寺供僧御分切田坪付事

合

異嶋里五坪　壹段　地藏太郎

同八坪　參段半　右近太郎

上津島里卅二坪　肆段　故右馬入道

幡鉾里二坪　壹段　六藁屋太郎

同卅坪　壹段半　異性房

同卅六坪　肆段半　右衛門尉河原太郎　藤阿彌陀佛

吉手里八坪　壹段　覺道房

同十坪　貳段　悦道房寄阿彌陀佛

跡田里廿九坪　貳段　鹿觀房

眞幡里九坪　壹段　又太郎後家

同十八坪　叁段　右近太郎

角神田里口坪　叁段　右近太郎

同卅二坪　肆段　治部左衛門入道

幡鉾里十八坪　壹段　右近太郎

穴田里十七坪　貳段　千熊丸跡

眞幡里廿九坪　壹段　後藤次入道

鳥羽手里廿二坪　壹段　藤次郎入道

已上叁町陸段　分米肆拾貳石八斗

右粗注進如件

正和四年七月十七日　下司花押

〔妙興寺文書〕讓渡　所領注文事

合

尾張國大介職

一所　中島屋敷並近邊〇中略

一〃　漆段　新支里　同寺田

一〃　漆段　佐賀里廿七坪

一〃　四段　同田六反　石橋　同寺田〇中略

右坪付注文如ㇾ件

元應二年四月三日　沙彌承念在判

〔東寺百合古文書〕申請下久世地頭御方田坪付事

合

參段半　矢作〈此内二反ハ二斗三升代 一反半ハ三斗四升代〉

壹段　ふまの木三斗四升代

右坪付如ㇾ此、爲二後證一可ㇾ下二賜御判一之狀如ㇾ件、

元德參年三月十五日　重貞

〔集古文書三十三打渡〕打渡

八幡降人所領半分事

右陸奥國岩城郡國魂村田畠在家等、爲二中分一任二將軍家御下文幷御施行之旨一、所二沙汰付于國魂太郎兵衛尉行泰一也、坪付有二別紙一、仍渡狀如ㇾ件、

曆應二年三月廿三日　法眼行慶花押

沙彌勝義花押

〔集古文書四十三寄附狀〕奉寄進　伊豫國善應寺

同國風早郡河野鄕土居分内田地伍町〈坪付別紙在之〉間事〈○中略〉

貞治二年六月一日　沙彌善惠花押

〔集古文書五十五坪付〕通玄庵忌田之坪附

一所　二段　〈土居分、山城殿分ノウラタ 四郎丸中代十貫文藏豐分、〉

一所　二段　〈宮王名高山ノ中殿分、在坪善弘寺 ノ戌亥、代官米四石一斗、妙淸分、〉

一所　一段　在坪ニイ條ノ四、高山東殿分、代四貫文、妙清分、
一所　一段小　御内所ハ屋敷、秋夏地ニ五百文、タホウチノ□□□分、宮内□□大郎屋敷也、南代五貫文
一所　一段半　有坪沙野佛之内、山城名田□□院下地ノ井、代五貫文、
一所　二段　在坪古御所之南天山分
已上九段三百歩　支證七通有ㇾ之
時于永享十二年六月廿二日　守塔士雄 印

〔勢州社家文書〕志貴内檢坪付文安目六案文

注進　田參町肆段佰肆拾歩丹付畠拾漆町肆段拾歩、内除畠貳町壹段佰參拾歩、定畠拾五町貳段、右勘合知ㇾ件、丹附抓、
志貴御厨田畠内檢坪事　使丹付小司大臣在平丹付
合　赤坂東ハナワテ限、南ハ大道ヲ限、西ハ□□限、北ハ神田宮限、
四條西里外
三坪河、四坪河、十四坪、四反小作、今年□貢、廿一坪、河　廿二坪、田一反、畠一反、廿三坪九反内、田四反大、畠四反小、廿四坪、田大、今畠成、畠一反三百歩、廿五坪畠九段小、廿六坪、田二反、畠七反、廿七坪九反内、田一反半、畠五反半、荒畠二反、廿四坪八段内、田一反、丹生人加田二反、畠一反半、
同一遠田里
一坪、田一反半、畠一反半、二坪、田一反三百歩、畠中、殘可ㇾ尋、七坪、田五反　十二坪、畠四反小　十三坪、畠五反半　十四坪、畠一反、於二二百六十歩一者土可ㇾ尋、十八坪、畠大、殘荒井河、廿三坪、畠五反、於二四反一者土可ㇾ尋、廿四坪、畠六反　廿五坪、畠五反小　卅五坪、四反、畠六反大、廿六坪、田小、畠中、
二執田里
六坪、河　七坪、四反半、郡作可ㇾ尋、八坪、田九十歩、荒畠二反二百廿歩、年荒、十六坪、田七反、號二笠服一、注論郡司作、十八坪、田一反、郡司作、〇中略

右件內撿帳任御下文旨、大略注進如件、

文安六年十月廿二日　　保宗（〇以下人名略）

〔高良山文書〕高良山御神領坪付

一所阿志岐村八十町（山本郡肆十町上、三井郡肆十町下、）　三井郡一所石崎村十貳町　同郡一所高野村拾八町　同郡一所野中村六町　同郡一所南國府六町　三潴郡一所大石村十町　同郡一所津福村六町　同郡一所白口村十貳町

已上

永正五年十一月三日

〔箱崎大宮司文書〕那珂郡內、大宮司領五拾七町一段地之事、先年以坪付御注進候、聊御社領不可有略落者也、仍執達如件、

永祿二年九月十八日　　高橋左衛門大夫鑑種（花押）

大宮司秦弘重殿

〔周防國一宮領打渡坪付〕防州佐波郡大崎內（打渡坪付）之事

合　　得業坊領

（長太刀はま田）田壹反大　米六斗　助六

（同所）田四段　米貳石貳斗　惣左衛門

（一宮馬場尻）田六十歩　米八升　新左衛門

（同所）田壹段　米六斗　彌左衛門

（同所馬場尻）田壹段　米六斗五升　宮坊

（同所）田壹段　米七斗　五郎左衛門

田小（座ないし屋敷）　米壹斗七升　孫左衛門

寺一ヶ所　得樂坊

屋敷半（居合）　助左衛門

田數九段六十歩

以上　分米五石

屋敷二ヶ所

右打渡如件

天正十七年六月朔日

瀧川 平左衛門尉 花押

長井 右衛門大夫 花押

國司 雅樂允 花押

内藤 與三右衛門尉 花押

得樂坊

裏書（朱書）
今度御究相證畢

文祿五年卯月廿三日

國司備後守 花押

少林寺 花押

山田吉兵衛 花押

〔周防國一宮領打渡坪付〕防州佐波郡大崎村内一宮領打渡坪付事

合

法金剛院領

田三段（地藏講免）　米壹石八斗　神三郎

田壹反（同所鐘講免）　米七斗五升　六郎丸

田貳反（チャウダ）　米壹石貳斗　惣五郎（中略）

以上　田數貳町貳反六十歩
分米拾三石四斗八升

同領

寺壹所　法金剛院

畠半（いなりの前）　代六十文　徳ノ又左衛門

畠小（りんこう）　代廿五文　同ノ新九郎

畠六十歩代十六文（同所）　高田河内

屋敷小（カケンカイナ）　與四郎

屋敷小（ウルシ）　新七（カケンカイナ）（中略）

畠數貳町貳反大

以上　代貳貫五百八十七文
屋敷七ヶ所
并米拾六石六升七合代方共

右打渡如件

天正拾七年六月八日

鵜川平左衛門尉　花押
内藤余三右衛門尉　花押
圖司雅樂允　花押
長井右衛門大夫　花押

法金剛院

裏書(朱書)
今度御究相證畢

文祿五年卯月廿三日

關司備後守 花押
少林寺 花押
山田吉兵衛 花押

丸帳

(雜筆要集)丸帳樣

注進　某御庄某年撿田丸帳事
合參佰町者
除拾五町
常荒二町
不作十町
河成三丁
見作貳佰捌拾伍町
除三十五町
神田一町　寺免三町
人給十丁　損田廿丁
定田貳佰伍拾町
所當分米壹仟貳佰伍拾斛
右依例注進如件
年月日

公文姓判
下司姓判

〔備中國新見庄作田目錄〕備中國新見御庄文永八年辛未御總撿作田目錄事

使官位姓判

合作田玖拾捌町玖□三十五代十八歩○中略

右御總撿作田目錄注進如件

文永八年七月日

公文大中臣重高花押

田所代同

地頭

預所花押

御使花押

〔正應二年作田目錄〕福井御庄東保　注進正應二年作田目錄事

合

總田數佰玖拾漆町玖段肆拾代

入勘免庄田十八丁二反五代十八歩

大江島庄田十一丁五反卅五代十八歩

山階庄田六丁七反十

應輸田百七十九丁六反卅代十八歩

不作田三十二丁三反卅但依レ未レ被レ注、木屋村分不レ入レ之、

見作田百四十七丁二反卅代十八歩

除田八丁八反卅五代六歩

八幡宮田七丁廿五代十八歩　今西宮田七反

來迎寺田卅五　津堂田一反廿
清善寺田三反廿五　知波羅寺田二反五
東光寺田二反五　法花寺田一反廿
定作田百三十八丁四反五

作田勘文

〔常陸國大田文〕下妻庄三百七十町
東郡
吉原四丁三段小
鵜原十八丁六段小〇中略
中郡庄三百八十二丁六段小
眞壁郡
長岡十五丁二段六十歩
谷貝十五丁〇中略
右弘安二年作田惣勘文、大略注進如件、

水帳

〔倭訓栞中編二十五〕みづちやう　村々にあるもの也、御圖帳なるべしといへり、民部省の圖帳を呼しなり、朝野群載に、田圖戸籍と見えたる意なるべし、今水帳と書は誤なるべし、

〔安齋隨筆前編七〕水帳　上古皇家盛なりし時、民部省に圖帳あり、諸國の圖なり、百寮訓要抄に云、民部省、此省は諸國の事をつかさどるなり、國々の年貢なども、此省に沙汰しけるなり、又人の忠孝をも、此省にておほく行けるなり、民部省の圖帳とて、日本國の指圖、境などを定たる文の數百卷、此省には昔より傳はりて、日本國の重寶にて侍りしなり、近頃はうせて侍るにや、いたく見及び侍らず、諸國の境相論などの時は、此圖帳にて考へられしかば、明鏡にて侍りしと見えたり、貞

丈云、此圖帳に、朝家の御物なる故、御の字を付て、御圖帳と云ふなり、(御ノ字をみとよむ)今諸國の田畑の段步の數其處の地の字、田畑の主等を書きたる帳を水帳と云ふは、御圖帳と云ふ古名の殘りたるを、御圖帳と云ふ本の事を知らぬ故、詞に合せて、あて字に水帳と書なり、又云、古の民部省の圖帳の殘本なりとて、一冊あり、圖なし、僞書なり、

〔田圃類說〕撿地の事

一或覺書云、水帳と云もの村々に有り、御圖帳と書べし、民部省に大圖帳といふ事あり、按するに、撿地帳を水帳と書來る事、或說に土地を水土といふを以、水土の下略なりと、又或說に、田は水を以第一とする故也と、撿地は其位反別をわかち、經界を記るすものなれば、水土の下略といふも、事たらぬ說也、田は水を第一とするといふも、撿地は田計の事にあらず、いづれも附會の說也、御圖と水、和訓同き故、いつとなく書違ひたるべし、東鑑には田文と書けり、或覺書に、江州にて水帳の事を、あせばしりと唱へ候と也、

〔松屋筆記八十六〕水帳

今世水帳といふは、古の圖帳の流にて、その體裁はやゝかはりたれど、名義は御(ミ)圖帳なるべし、明の魚鱗圖冊すなはち本朝の水帳也、其說經濟纂要前集六の卷に見ゆ、

〔地方凡例錄二上〕一撿地之事

一撿地帳を水帳といふことは、民部省に田圖の數量を書記したる計帳あり、之を大圖帳といふ、依て水帳は御圖帳なるを、水の字に書誤りたると古書に見えたり、又或說に土地を水土と云を以て、水土帳の下略なりといふ說もあり、又田は水を以て第一とするゆへに、水帳と唱ふると云人あり、先吏小宮山某の評に、撿地は其位反別を別ち、經界を記すものなれば、水土の下略と云も惑說なるべし、田は水を第一とするゆへ水帳と云も、押付たる考へなり、撿地は田計り

のことにあらず、畑あり、屋敷あり、山あり、左すれば水の縁に由て、水帳と唱ふるも、附會の説なり、所謂水と御圖の和訓同じきゆへ、何となく書誤りたるなるべしといふ、此説是ならんか、禁裏に大圖帳あるに依て、是に類したる帳なるを以て、御圖帳たること著明なり、然りといへども、舊來水帳と書來り、德川氏の書物にも水の字を用ひ、世上一統に流布する文字を、今更御圖帳と書改むべきことには非ず、只その本源を知らしむるのみなり、又東鑑には、水帳のことを田文と書たり、これも田のみに限るべからずと難ずる人もあるべけれども、田地といへば田畑一體にかゝり、田は作地の總名なれば、田文と書ことも宜なるかな、

〔田園地方紀原中〕貫并貫高之考

又案ずるに、予〇朝川鼎信州飯田の人に知れるありて、其村の水帳の事を尋ね問ひしに、後日抄録して贈り越しぬ、攷證のために左に擧ぐ、〇中略

松尾領村高

一六百石三斗貳升四合貳夕　竹佐下

一三百廿九石九斗八合貳夕　羽入野下

一貳百六拾貳石九升　大瀬木下

一四百九拾七石壹升九合　北方中

一千三百拾三石八斗六升三夕　山村中〇中略

松尾高〆壹萬貳千四百四拾壹石九斗四升六合三夕

天正十九辛卯年九月

御水帳　京極修理大夫様御撿地

御竿奉行　淺井九兵衛　吉井小右衛門

〔一話一言 二十六〕天正水帳

天正拾九年辛卯八月廿六日　　持主川德路

武州立花郡稻毛庄　　駒林之鄕

御繩打　　水帳

右府中宿、名主次郞左衞門所持之水帳也、

〔出羽國風土略記 六 飽海郡〕宮内館

古羽州一宮神領、故に宮内村と稱す、〇中略彼役人梅津某所持、慶長の水帳に、本田四萬三千四百七束刈、此米三百九拾五石四合、此内兩所神領出田壹萬三千四百九拾九束刈、此米百拾石六斗八合、此内六百三拾九束刈兩所神領、苗代千貳百拾貳束刈、此米拾貳石一斗貳升、此内拾貳束刈兩所神領、苗代奧田千百六拾五束刈、此米拾石五斗八升三合、奧田九百八拾束刈、此米六石八斗二升八合、右田合六萬百三拾一束貳把刈、此米五百四拾五石九斗四升七合、出屋敷百五軒、家數九拾一と有、反別等の事繁ければ略之、帳面表紙共に、慶長十六年九月十九日、進藤但馬守判と有、〇中略其後元和九年、酒井家より、白井吉兵衞、中世古喜兵衞、兩人を以御撿地、其後寬文年中、神領不殘御取上、新制の水帳御預、元和九年御撿地帳御取上、新制水帳の末文、寬文九巳六月五日、伊黑喜右衞門印、永田彌一右衞門、小黑長左衞門、三浦七右衞門と有、

〔上下兩總地方古帳寫〕慶安元子年馬加村水帳

上田合壹町壹反壹畝拾貳歩　　十四

分米拾五石五斗九升六合

中田合三畝廿七步　　十

分米三斗九升
下田合五畝三歩　六ッ
分米三斗六合
下畑合四町壹反八畝廿四歩　三ッ
分米拾貳石五斗六升四合
中畑合貳町五反貳畝拾九歩　六ッ
分米拾五石壹斗五升八合
田畑合七町九反壹畝廿五歩
高合四十四石壹升四合〇下略

〔甲斐國志佛寺八十九〕都留郡郡內領

一大幡山廣敎寺〇大幡村中略　慶長六年八月廿七日鳥居久五郎成次ヨリ四石ノ地寄進、寬文撿地ノ時合テ水帳ニ記シ、寺ニ付ヶ置ケリ、

〔上下兩總地方古帳簿寫〕御水帳寫寬保二戌年四月

一下畑（つかへど）七畝歩　七左衛門
一中畑（やしき）貳拾四歩
寄　反畝合七畝貳拾四歩〇中略
四郎右衛門
一中畑（へた）（やしき）六畝貳歩
一中畑四畝貳拾歩

雜載

ひかへと
一下畑八畝貳拾四歩
長さく
一下畑三畝八歩
同所
一中畑貳畝歩
とり内
一下田四畝歩
寄
中畑合壹反貳畝貳拾貳歩
下畑合壹反貳畝貳歩
下田四畝歩
反畝合貳反八畝貳拾四歩〇下略

〔上下兩總地方古帳簿寫〕下總國千葉郡馬加村須ヶ原門松山野畑水帳

覺

須ヶ原門松山

一野畑七町四反歩

取錢六貫拾貳文　　但反ニ錢七拾八文取

此門松三拾壹門

馬加村鄕持

右者元祿十丑年、撿地相改帳面渡し置候處、紛失之由願ニ付、此度水帳書替相渡シ候、尤門松之儀者、右錢ヲ以、每年極月廿日限り無遲滯可相納者也、

寶曆十一年巳十一月

俵井幸助印〇以下署名略

〔常陸國吉田神社文書〕

壹所大々　百姓、神官、小禰宜、

田壹町一反三百步內、祭田二反、神官給三反、定田六反三百步

右依被仰下、雖不見田文、大略任眼前之趣、注進言上如件、

建久三年十一月二日　　平忠幹

〔東寺百合古文書七十〕若狹國太良御庄

注進　建長六年實撿取帳事

一所二段　眞利　一所二段半　貞國

一所百八十歩加久留六十歩定　時澤　一所百廿歩　末口

一所一段半　安近　一所二百十歩　眞利

一所卅歩スキモト　貞國　一所二段半スキモト（カロハ）　長俊士

一所半スキモト　眞利　一所二段卅歩　重水

已下略

〔集古文書四十二寄附狀〕寄進

高野山高祖院別願長日光明眞言護摩料所和泉國土生郷地頭職參分壹〇繪圖在ニ別紙〇中略

曆應元年十月九日

從五位上行兵部少輔源朝臣〇華押

古事類苑

政治部七十二

下編

田積

鎌倉幕府以降ノ田積ノ制ヲ考フルニ、中古ノ法ノ如ク、六尺ヲ一歩トシ、三百六十歩ヲ一段トシ、十段ヲ一町トセリ、然ルニ足利幕府ノ比ニ至リテハ、世態漸ク變遷シ、土地ノ廣闊ヲ貪リ得ンガタメニ、曲尺方六尺五寸ノ地ヲ、一歩ト稱スルコト、ナリ、豐臣秀吉執政ノ時、天正十七年ヨリ、文祿四年ニ至ルマデニ、悉ク天下ノ田地ヲ丈量シ、一段ノ内六十歩ヲ除キ、三百歩ヲ以テ一段トシ、十段ヲ以テ一町トス、而シテ當時曲尺方六尺三寸ノ地ヲ、一歩ト定メシ由ナレバ、壹段ノ地ハ、三百三十歩七分五釐ニ當レリ、之ヲ一段即チ三百六十歩ノ制ニ比較スレバ、實ニ二十九歩貳分五釐ヲ減ズルナリ、是ヲ天正ノ石直トモ、文祿ノ檢地トモ云フ、カク田積ヲ改定セシ所以ハ、田積ヲ減ズルトキハ、町段ノ數ヲ增シ、租稅諸役ノ隨テ增加スルガ故ナリ、此改制ハ、長束正家ノ計策ニ出デタリト云フ、又從前ハ、一段ノ十分一、即チ三十六歩ノ地ヲ一段頭ト云ヒ、一段即チ三百六十歩ノ地ヲ一町頭ト云フ、即チ一町ノ十分ノ一ナリ、又大半、小ノ稱アリ、即チ一段ノ三分ノ二(二百四十歩)ヲ大ト云ヒ、一段ノ半(百八十歩)ヲ半ト云ヒ、一段ノ三分ノ一(百二十歩)ヲ小ト云フ、而シテ天正改制ノ後ハ、二百歩ヲ大トシ、百五十歩ヲ半トシ、百歩ヲ小トシ、一段ノ十分一ヲ一畝トシタリ、而シテ德川幕府ノ時ニ至リテハ、六尺ヲ以テ一歩ト爲シ、外段畝ノ數ハ前制ニ同ジ、

條里坪

又鎌倉幕府足利幕府ノ間ニ於テ、古文書中タマ〳〵段ノ下ニ丈ト稱スルアリ、合ト稱スルアレドモ、廣ク行ハレタルニアラザルベシ、

〔大橋文書〕讓與相傳敷地等事

合〇中略

田地參段字佐伯院

在左京五條六坊五坪西邊〇中略

文治二年丙午十月日　　大法師花押

〔下總國小野織幡地帳〕注進　葛原牧内小野織幡地帳事

合　高房里

一坪六反小内（金丸五反 癸一反小）十一月四日中太郎判官代〇中略　　卅六坪十一月四日御勝料 マカスノツヽミ子 金丸一反中太郎判官代

二里

一坪金丸半皆　津原次郎〇中略　　卅六坪金丸四斗五升代 マメキヘ 一反大文平三入道ツハラ

三里

一坪金丸五斗五升代 マメキヘ 五反内（一反次郎太郎メヽ 一反五郎太郎メヽナ子 二反彌五郎ツハラ）〇中略　　卅六坪金丸半メキノシリ 鍵炉田六郎祝

四里

一坪織幡宮當知行 利助二反五郎撿挍〇中略　　卅六坪永吉五反内（二反藤四郎入道 一反織力法師 一反別當太郎 一反地寺無シセ）

五里

一坪利助三反内（一反朝智郎 一反權禰宜 一反文平三入道）〇中略　　廿二坪金丸大藤太入道

織幡

一坪金丸六斗五升代 二反源七入道〇中略　　卅六坪安久二反一人

二里
一坪金丸七反内（一反行事次郎　一反三郎四郎　二反六郎入道　一反才三郎　一反別當太郎　一反才三郎〇中略）　卅六坪金丸小小藤太入道
三里
一坪眞吉私二反小七郎太郎〇中略　卅六坪金丸大安平四郎
四里
一坪爲里私六反内（一反權守入道　一反三位房　二反半六大夫　二反權守入道〇中略）　卅六坪重枝三反權守
五里
一坪金丸二反又次郎殿　二坪金丸（六斗五升）小舟次郎
三坪金丸（甲神田）一反大御前　四坪金丸一反大一人
五坪金丸一反七郎大郎　六坪金丸三反小平六大夫
七坪節弘半一人　八坪一丁（天宮神田）
小野
一坪重枝三反三位房〇中略　卅六坪金丸二反才三郎
二里
一坪天宮神田二反舟次郡〇中略　卅六坪金丸一反半平六大夫入道
三里　司大　六四郎
一坪金丸大平六大夫入道〇中略　卅六坪金丸一反宮大郎
四里
一坪金丸三反（一反別當大郎　一反次郎大郎　一反性園房〇中略）　卅六坪金丸二反大郎大夫
五里

一坪金丸四反半平五郎入道〇中略　十四坪金丸二反內一反小平三大郎 大津原大郎

弘長元年十月廿五日

〔下總國香取檢田帳〕注進　正應四年辛卯十一月日加符檢田取帳事

合

一坪御名才三郎　二段才六又六郎小二郎入道　舟三郎入道三郎大郎ツタリ〇中略

卅五坪節弘　二反才三郎源三郎

二里

一坪節弘　二反才三郎中七入道又大郎〇中略

卅六坪同文〇氏神　一反才小才六十郎平次郎

〔春日若宮御領伴田東西庄目錄〕春日若宮御社領大和國葛上郡伴田東御庄

注進　延慶三年所當米一反別一斗二升四合宛

合

忍海郡卅一條四里

七坪四反之內　西ヨリ二反目一反　八郎タマナ
西ヨリ三反二反　五郎ハレカミ
西ヨリ五一反　八郎ハレカミ

葛上郡三十三條五里

西台下津賀茂社北浦坪卅三坪　二反　下津賀茂神主

同條六里

下津賀茂ヒツレサル六坪　一反　三室殿

サフメ山ノ南浦西ヨリ十六坪　四反小　ナラハラ新次郎左衛門殿

卅三條八里

上津賀茂ノ東ハシ 卅坪七反之内二反　三郎左衛門入殿ナカ川

カセタ 四反之内伏田一反半東田リ三四五六　六郎殿

西ノハシ 一反　新太郎ナカ川

〔下總國香取諸名帳〕注進　應永六年卯月十六日

香取九ヶ村諸名帳事四帳合

合

一坪司神拜田五反内二反五荒　三郎二反目代一反大親○中略　卅゜七゜坪゜吉千代松濱田三反　手

三里

一坪金九一町五反　手○中略　卅七坪御名二反次郎太郎

四里

一坪眞吉御名四反　手○中略　卅七坪實命私三反荒平次入道○下略

〔勢州社家文書〕志貴内撿坪付文安目六案文

注進○中略

四條西里外

三坪河、四坪、河十四坪、四段、小作、今年口破、廿一坪、河廿二坪、田一反、島一段、廿三坪九反内、田四反大、島四反小、廿四坪、田大、今島成、島一反三百歩、廿五坪島九段小、廿六坪、田二反、島七反、廿七坪九反内、田一反半、島五反半、荒島二反、廿四坪八段内、田一反、丹生人知、田二反、島一反半、

同一連田里

一坪、田一反半、島一反半、二坪、田一反三百歩、島半、難可尋、七坪、田五反十二坪、島四反小十三坪島五反半十四坪、島一反、於二百六十歩、其上可尋、十

代

八坪、畠大、残荒井河、廿三坪、畠五反、於四反、其上可尋、廿四坪、畠六反、廿五坪、畠五反小、卅五坪、四反畠、六反大、廿六坪、田小、畠中、○中略

右件内撿帳、任御下文員、大略注進如件、

文安六年十月廿二日　　保宗　○以下列名略人

〔東寺百合古文書　三十五〕補任神田陵領名主職貳反事

在所山城國紀伊郡社里廿六坪、東縄本ヨリ参反目壹反、同六反目壹反以上貳反、字號橋實田云々、○中略

寬正二年二月七日　　諸陵頭賀茂朝臣　花押

〔集古文書　四十二寄附状〕寄進　大山寺毎日佛供燈油料田事

合貳段貳拾代内石堂天王社前井尻符代也

右地新田寄進者、毎日佛供燈油令備進之後、可被祈念二世所願也、○中略

嘉禎二年丙申三月八日　　地頭景隆　花押

〔備中國新見庄作田目錄〕備中國新見御庄

文永八年辛未御總撿作田目錄事

合作田玖拾捌町玖口三十五代十八步

一本田分陸拾伍町漆段十五代

除二十一丁三段

常荒五段卅五代　河成一丁七段卅代十八步　不作一段十代十八步

畠成三段廿代　佛神田三町三段廿代

一丁二段四斗代　念佛堂免　一丁三斗代　五所宮免

五段三斗代　五所宮正月祭免　四段五斗代　八幡宮大般若經免

二段卅代　三斗代　三室明神免

〔岩松家文書〕ちうまんにつたのみまやう、かおう二ねんの目六、たはたけまいけにの事、

合

田二百九十六町十たい

畠百町六反三十たい〇中略

さたむち田二百六町二反十たい

大田の郷田三町七反畠四反十たいまいけ三う　　田畠郷田五町八反廿たい在家六宇

本幸澤田十一町二十たい、畠一町たい、在家九う、

ゆわまついぬまの郷田三町五反廿たい、畠三反、在家三う、

なかつ郷田十八町三反十五たい、畠四十九反十五たい、在家十七う、

一井の郷田二十町八反十たい、畠二町、在家十一宇、

やふつかの郷田六町八反廿たい、畠七丁四反卅たい、在家八う、〇中略

享徳四年乙亥閏四月吉日

〔釐簡集五〕坪付

五ヶ所合五段拾五代四歩高橋肝介上地吉井郷與藤兵へ上地桑田山

右之田地、此中別而奉公心懸候間、云付候、自今猶以公役以下、無緩可仕者也、

天正二十年三月吉日親忠

市川一衛門〇中略

右高岡郡吾井郷岡崎孫六藏凡六通

坪付　市川一衛門給

七ヶ所合六反廿七代貳歩中山北川大野見下分郷上予郷

段

右之買地、此中別テ奉公相心懸候條、爲レ加二扶持一言付候、國役幷宇役等、無レ緩可二相勤一候、猶以向後無二退屈一奉公可レ仕者也、

文祿三年甲午十一月六日親忠花押

市川一衛門かたへ

右吾井郷岡崎孫六藏

坪付　田上六右衛門新給

十七ヶ所
合壹町壹反廿八代五歩半 大野見中津川下向名 鮎戸付名木名

右之加扶持は、今度高麗へ召連候處、別而奉公仕候條、爲二褒美一云付上ハ、向後抽二自餘一國役幷宇役、諸事無レ緩可二相勤一者也、

文祿三年甲午十一月六日親忠花押

田上六衛門かたへ

右大野見宅兵衛藏凡六通

〔土佐國幡多文書〕土佐國幡多郡上山鄕御地撿高目錄

總田數合參百八拾四町九段四拾代四分夕內 本田貳百六拾貳町三反廿七代 出田百廿二町六反十三代四分夕

右內

上田　拾八町七反廿七代夕　上出　八町五反廿八代四分夕

中田　四拾五町四反十七代壹分夕　中出　廿四町七反卅代三分夕

下田　九拾五町三反卅五代壹分　下出　五拾九町五反二代五分夕〇中略

慶長二年　正木右兵衛〇以下四人略

〔正長元年記〕九月廿七日戊子、高田將監申云、田地之一段三百六十步、巨細令レ存知一者希也、先一步ト

云事ハ、六尺四方ヲ申也、一町ト申者、五十五間也田地之一畔ト申モ、十段ノ事也、則常一畔之内也、竪ハ五十五間、長横者六間之廣也、是十合時、一町之田地ト成也、一段ト云ハ、五間半四方也、六々三十六也、

〔問田歩〕天正中、太閤天下の田地へ繩を入れられし時、世の人申候は、上古以來、一段の田を三百六十歩に定められ候事は、一歩を以て一日の食にあてゝ、一年の食料とせられし處に、此度關白殿の三百歩を以て、一段と定められ候へば、一天下の人民、凡一年の食料六十日分を減じ申候、いかにも是にて末のよき事可ㇾ有歟と申たる由にて、其事を歌に作りうたひ候者、近き頃まで、殘り候と申候き、右按前說は非と申べく候、其故は古法方六尺を一歩として、三百六十歩なり、太閤の後は方六尺五寸を以て、一歩として三百歩なり、當時の法は、方六尺を以て一歩として、三百歩なり、右之樣に候へば、一天下の人民、六十日分の食料を減じ候と申は、當時の繩の事にて候歟、太閤の時歩數をば減じ候へども、繩を五寸づゝのべられ候き、是又朝三暮四の術に出候といへども、今の如くに、六十歩の減じはなき積りにて候、是に依て奉ㇾ問、古法方六尺爲二一歩一三百六十歩爲二一段一、近法方六尺五寸爲二一歩一三百歩爲二一段一、右の差別いか程の減になり候歟、今法方六尺爲二一歩一三百歩爲二一段一、近法と今法とは、又いか程の減になり候歟、

〔田園地方紀原〕上町段畝歩ノ考附間竿尺寸ノ考

鼎川〇朝案するに、大化以後、大尺にて五尺、小尺にて六尺を以て一歩とする事は、天下一統の制度なれども、鎌倉以來、武家の世となりて、國に守護職、庄園に地頭ありてより、古の制度は、日にまし失せ、月まし亡び、ましてや戰國封建の世に及びては、我領國は己が心々に取扱ひ、一定せる事なければ、いつとなく、六尺五寸又は六尺三寸を一歩とする所も、國により鄕によりて、土地の歩廣なるまゝに、私に古制の樣に、申傳へし事もありて、一定せざるは、亂れし世の常なれ

ば、左もありぬべし、太閤天下一統せられしより、一歩を六尺三寸とし、三十歩を一畝とし、十畝を一段とし、十段を一町とする事にはなりし、此人微賤より起りて、累世名家の舊諸侯を壓倒し、遂に天下一統の功業を立られし所以は、全く賞の重きを行て、人心を得るにあり、後日天下平治の世となりても、勢の至る所、今更に賞を吝せんも本意なく、さればとて心のまゝに、一國一郡一庄を、功臣寵人にあたへむには、六十餘州の地も、足らざる事を思ひて、天正の比、天下を撿地し、かくは定められしにて、世に是を太閤撿地とも、又天正の石直ともいふ、

〔田園類說〕町段畝歩之事

按ずるに、〇中略往古は、三百六十坪壹反なりしが、今は三百坪一反とすとありて、いつの頃ゟ變せし事を論せず、又畝といふ事、いつの頃ゟ始る事を知らずといへり、予〇谷本教が臆見には、三百歩一反になりしは、貫高の頃より始り、畝といふ名目は、石高になりて起れりと見えたり、京都將軍家以來、貫高永高大半小などいへる名目出來て、其内大半小は、壹反三百歩の積りにて、其半分百五十歩を半とし、三分二貳百歩を大とし、三分一百歩を小とす、畢竟壹反の小割の名也、〇中略古へに六貫一疋といふ事あり、是は田地千坪を貫とし、六千坪を六貫とす、此六貫の地ゟ、軍役一騎を勤る事なり、然るに、古來の積り三千六百歩を以て一町の積りなれば、其積り六ヶ敷也、三百歩を一反とし、三千坪を一町とすれば、二町にて、すぐに六貫なるを以て、早速の積り、知れやすきにより て、かくなりし也、

〔地方凡例錄〕一田地は一段三百歩たる濫觴の事

文祿四辛未年、秀吉公時代、宮部善祥坊、山口玄蕃頭正廣、經濟の道に委しく、算勘の秀逸たるに依て、兩將に命せられ、諸國田園道路を撿地せしむ、其時に五の數を加へ、五六三百歩を壹反とし給ふ、〇中略其時西國より次第に、國々を撿地して、越前の國に到りし頃、太閤薨去に付、彼國までにて

止み、夫より東は、太閤撿地なし、又田壹段三百歩と成たるは、足利尊氏時代、貫高の頃六貫壹匹の軍役を勘定仕安からんが爲、三百歩に改りたるともいふ、

〔但馬國大田文〕太田太郎左衞門尉政頼弘安八年之注進

朝來郡 ○中略

賀都莊　百四十一丁六反二百六十五歩内

上莊　六十八丁五反三百歩 ○中略

下莊　七十三丁三百廿歩 ○下略

〔豐後國圖田帳〕豐後國直人等記申、當國八箇郡分國崎、速見、直入、大野、海部、大分、日田、玖珠、田數領主等之事、○中略

一玖珠郡三百八十町 ○中略

魚返村一町六段三百二十四歩 ○下略

〔明良洪範〕三大坂籠城五月ノ頃、高木仁右衞門入道宗夢トイフ者アリ、○中略右府秀頼ノ御前ニ召サレ、宣マヒケルハ、○中略所詮此度ノ一戰ニハ、骸ネヲ此城ノ地ニサラシ、諸士ノ恩ニ報フベシト思フ也、汝ガ所存ハ如何ト尋ネ給フニ、宗夢承ハリテ御尤ナル御意ニ候、今更餘儀有ルベカラズ、ツラ〳〵往事ヲ考ガヘ候ニ、○中略又往古ヨリ日本ノ田畑六間六十間ヲ一反ト定メ置レシヲ、長東大藏トイフ算勘人ヲ愛シ、彼レガ奸智ヲ用ヒ、五間六十間ニ定メテ、日本ノ撿地ヲ改タメラル、百姓等是ガ爲ニ苦ルシム、

〔伊勢國渡邊文書〕就伊勢國御撿地相定條々

一田畑屋敷六尺三寸棹を以、五間に六拾間三百歩ヲ壹反に可致撿地事、○中略

文祿三年六月十七日　秀吉公御朱印

羽柴下總守どの〇以下六名略

右伊勢國一志郡須ヶ瀬村渡邊六兵衞が家に所傳の古文書也、〇中略太閤撿地の時、〇中略仁右衞門の筆記せる古き書物の内に、〇中略

古來撿地六尺坪にて

一長六拾間横六間　此歩三百六拾坪　壹反也

其後撿地六尺五寸坪にて撿地有

太閤樣御撿地六尺三寸坪也

一長六拾間横五間　此歩三百坪　壹反也

是六尺坪にて三百三拾歩七分五厘ニ成、然バ元一反にて廿九歩貳分五厘ヅヽ出也、

〔御神領配當以下知行勘定目錄〕香取神領貫目高勘定之心得

一古來三百六十坪壹反、香取之反別之勘定ハ、百八十坪一反ニ相定候樣ニ承傳候、國行司持分之内、別當谷之畑之畝歩間地水帳之寫書之通ヲ、百八十坪之一反と積り置、勘定候へば、違なく勘定ニあい申候、

大半小

〔田園地方紀原下〕大半小之考〇中略

又案ずるに、大半小はもし三百六十歩壹反の小割なるを、三百歩壹反とも通用せしを、田園類説に、大半小は三百歩壹反の時の名目にして、承應撿地の頃歩廣なるは、往古の三百六拾歩に取合せ、反別を付直せしとあるは、本末の取違ひにて、誤といふべし、予〇朝川鼎足利時代の田地古文書に、大半小を書載たるを數十通見たり、いづれも三百六拾歩壹反也、その内水戸の高倉逸齊より寄示されし、常陸國鹿島郡鹿島神社大宮司に傳來の古文書には、大半小の割合にて書載せたり、

〔大賀村檢注取帳副日記〕

六十歩ト云ハ足數六十也　小ト云ハ二六十歩也
半ト云ハ三六十歩也　大ト云ハ四六十歩也
三百歩ト云ハ五六十歩也　一段ト云ハ六々十歩也
凡一反ト云ハ頭六枚、可六十枚也、一枚ト云ハ六十歩也、〇中略
元德二年庚午十一月十八日日記ヲ寫畢
應永四年丁丑十二月八日書寫了
同十一年甲申十一月廿五日書改

〔正長元年記〕九月廿七日戊子、高田將監申云、田地之一段三百六十歩、巨細令存知者希也、〇中略小ト云者、一段ノ三分一ヲ云也、大ト云ハ、一段ノ三分二ヲ云也、雖爲凡卑事、書留之、

〔御神領配當以下知行勘定目錄〕香取神領貫目高勘定之心得
此割をもつて見れば三百坪一反也
大とは貳百坪之事也　中とは百五拾坪也
小は百坪也　壹畝　拾八坪二合五夕に當ル
上古見は　大貳百四拾坪　中百八十坪　小百廿坪也

〔地方答問書〕世上にて、太閤撿地と申し、文祿年中頃には田畠反歩を、大歩小歩半歩と記候水帳有之、大歩は貳百歩、小歩は百歩、半歩は百五十歩之事に候、三百歩此時も一反に而候、

〔四民格致重法記〕太閤撿地は、一段三百六十歩と云傳へたり、然れども天正年中の水帳を見しに、三百歩なり、其水帳には、畝と云はなく、壹段大歩、小歩、半歩、八十歩、九十歩など有之、

〔地方凡例錄二〕大半小歩之事
天正文祿之比までの撿地には、大半小と云て、壹反三百歩を三ツに分けし小割有、永高の比ゟ石高に移る時代迄も、行れし事と見え、往古之撿地帳所持之村方には、大半小之附たる水帳今も有

之、尤上古ゟ之事とは不聞、其濫觴時代不相知、大半小之小割如左、

壹反三百歩　大歩貳百歩(壹反の三分二を云)　半歩百五十歩(壹反の半分を云)　小歩百歩(壹反の三分一を云)

豊臣時代、天正十九年、撿地奉行守田右京、下野國足利郡羽田村水帳の內、

中田五反半四十二歩　下田三反大拾壹歩　田合九反小三歩

右之通相見え、位反別もありて、高石盛はなく、關東永高同樣と見えたり、

〔田圃地方紀原中〕鼎川〇朝案するに、天正の石直しは、天正十八年よりなれば、此水帳〇信濃國飯田水帳に、天正十九年とあるにて、太閤撿地の水帳なる事知るべし、其頃より、古の三百六拾歩壹段を三百歩にせしは、前條に云へる通りなれば、此大半小の積りも、三百歩壹反にて云ひし事必定なり、〇中略大半小は、壹反の小割にして、官よりたてし制度にてもなく、たゞ民間に取扱ひし稱なれども、三百六拾歩に足ざる地を積るに、都合よき故、民間の申ならはしに隨ひ、水帳にも書入るゝ事になりて、石直し以後、三百歩壹反は、天下一統の制度故、三百歩の割合に、貳百歩を大歩とし、百五十歩を半歩とし、百歩を小歩とし、其頃の撿地帳にも書加へしなり、されど大半小に三百六拾歩の地と、三百歩の所とにて、割合相違ある故、後に三拾歩を一畝とするの制度たちて、大半小の稱は、官に用ひ給はぬ事とはなりしにあらん、

〔甲斐國誌[illegible]二註〕大半小ト云ハ、三百六十歩ヲ三割シテ、二百四十歩ヲ爲大、百八十歩ヲ爲半、百二十歩爲小ナリ、弘安中、但馬國太田文ニ、大半小アレドモ、多クハ何段二百何十歩、三百何十歩ト記シテ一定ナラズ、本州鹽山ニ所藏、文安二年寄進狀ニ、中田之事云々、壹段半、土貢壹貫伍百文ト記タリ、亦加賀美寺、明德二年寺領記、凡町段ニ限ルト見ユ、倘大半小ノ名アリ、二段六十歩一段六十歩合三段小ト記スニ至テ、其法備ハレルコトヲ知ルノミ、柏尾、中山、小黑坂、一條ノ諸剎ニ存セルハ、四方ノ傍示ヲ記シテ、田數ナキ者アリ、或ハ何町何段ト記スルモ皆少數ナシ、鎌倉以來、文明永正ノ比ニ及テ

猶有リ、○中略天正十七丑年、伊奈熊藏、一國檢地ノ時ニ至リ、全ク以大半小ノ舉小數、今一二有存ヲ明ナリ、按ズルニ、承久一亂後、北條泰時命ジテ、貞應中ヨリ太田文ヲ作シメ、貞永ノ式目成リヌ、此時大半小ノ法ヲ出シ、微細ニ檢地セシト見エ、豆州ニ所存モ、安貞二年、三島社ニ藏ムル武藏守、相模守下シ文ニ、貳町七段大ト記シタリ、以前ノ文書ニハ所見ナキ由、彼國志ニモ云ヘリ、

〔壬生家文書一〕太政官符若狹國司○中略

見作田參拾肆町壹段參佰伍拾歩内○中略

貳拾肆坪壹町内作八段小、荒一段大、○中略

熊野北作參町漆段貳佰漆拾歩内作二町八段百五十歩、荒九段小、○中略

建久六年十二月四日

〔大隅國圖田帳〕注進圖中總田數寺社庄公領幷本家領所地頭辨濟使等交名事

合田參仟拾漆町伍段大

正宮領　本家八幡　地頭掃部頭

田千二百九十六町三段小

不輸五百町五段小　應輸七百九十五町八段

國領

公田百丁半　不輸百三十三丁三段小○中略

曾野郡二百廿九丁四段大○中略

國方○中略　寺田九丁六段半佛性灯油料　經講浮免田五十三丁六段大○中略

右件總田數任御政書之旨、注進如件

建久八年六月日　大判官代藤原○以下署名略

〔田園地方紀原下〕賣進　𤱶田事

合伍段少者

在壹小路南朱雀東角二段大

八條坊門北防城西之面南一段

同次一段大

右𤱶田者、大江氏女之代々相傳私領也、爾依有直要用、所賣七條之法印御房實也、仍注進如件、

建仁元年八月八日　大江氏

源賴基

〔集古文書十二下文〕下　武藏國別府鄉百姓等所

可早令自當鄉內車石赤木奧宮以通千長止呂小道自河西、爲次郎行助分、致知行、以同小道東、相加太郎能行分、爲地頭、致知行事、

總田數貳佰伍拾貳町參段小內（建仁三年九月於□定）

太郎能行分佰參町壹段大

次郎行助分佰參町壹段大○中略

右別府鄉事、兄弟相論之間、或遂問注對決、或經次第沙汰之後、去建仁二年九月、令大和前司光行朝臣幷右衞門次郎光俊等、加實檢之處、總田數貳佰五拾貳町參段小也、但本田百廿四町內、如本配分者、太郎分五十町、次郎分五十四町內、後家分十町、小林三郎妻分十町、女子三人分六町、（各二町）次郎分廿八町也、而今太郎方餘田廿町九段大、次郎方餘田百七町三段大也、此內以廿二町、加次郎分廿八町、爲五十町、所殘八十五町三段大、相加太郎餘田廿町九段大、定百六町三段小也、其內能行分五十三町一段大、行助分五十三町一段大、本新相幷各百三町一段大也、○中略依鎌倉殿仰下知如件、以下

元久元年十二月十八日　　　　　清　　直（花押）
前右京進中原（花押）
左衛門尉平（花押）
前大膳大夫中原朝臣（花押）

〔吉田文書〕三里　七丁七反三百歩

一坪　二反大　春三（略○中）　　三坪　半　押領使名主（略○中）
五、　一反小（損半）　査太清様　　六、　三反半　埴安二郎細士（略○中）
九、　三反大　四郎細士（三郎太）　　十、　二反半　春三
十一、　大　同人（略○中）　　十三、　一反小　源二郎宮（中三郎）
十四、　大　守直　　十五、　小　左平二案主次
十六、　二反半　名主　　十七、　半　埴安（彦宗藤五郎）
十八、　大　四郎細士　　十九、　一反大　守直（略○中）
廿二、　大　名主□□□　　廿三、　半　中三郎敎乘房
廿四、　小　守直（略○中）　　廿七、　大　中三郎
廿八、　一反大　近藤（略○中）　　卅三、　大　中三郎
卅四、　大　同人

并田二十二丁三反

右酒戸古沼田撿注地文、段丁注進如件、

安貞二年十一月日　　　　地　頭　代（在判）
社田所權祝大舍人（在判）

檢注御使紀在判

(貞永式目追加)一遠江國鎌田御厨内十八町四大、畠一町八反二大半事、神領之事者、不拘年紀、於非器輩傳領者、可被停止云々、〇中略

寶治元年六月廿一日　相模守判

河内國守護代

(東大寺要錄二)散在佛餉田料所事

一奉寄進佛餉田

合伍段小者　所當三石六斗

伊賀國名張郡新庄領之内、作人、宗貞相模新六郎兵衛次郎〇中略

右旨趣者、爲令成就二世之悉地、奉寄進之狀如件、

弘安元年七月　日

以上不知施主名字

(東大寺要錄二)大佛殿佛餉懸札云

記錄　東大寺大佛殿長日佛餉料田事

本願勅施入之田地　在大和國

合參拾伍町伍段大

一小東庄十三町一段大之内、庄沙汰人給分、本者五段、今者一町、并定使給分五段、六町大者行康押領、佛餉料五町六段、入合定一段別一斗五升八合、但此内二町者、段別一斗宛、字十坪〇中略

右天平勅施入之佛餉田三十五町五段大之内、庄沙汰人并定使給分四町一段、所殘三十一町四段大、毎日一段々別一斗五升八合、器物八合定被宛置、以備三百十四日靈供、〇中略

元曆二年陸月十二日　堂司大法師定忠

〔岩松家文書〕足立郡大窪郷地頭方二分一方田畠注文

一田大　畠二反　すはの大明神

一壹町内二反ほり上畠一町　普門寺

一二段小　阿彌陀堂

一八段　長福寺

巳上田二町一反 畠一町二反○中略

應安二年七月廿八日

〔常陸國吉田藥王院文書〕注進菅生庄本郷五町別半分御免名寄事

合五町別田貳拾漆丁八段小四十分○中略

一忠時二町一反大○註略　一吉國二町三段半四十内○註略

一爲安一町九段小○註略　一重登二町二反○註略

一正清二丁二反半廿分○註略　一重守二丁二反小四十分○註略

一安清一丁一反三十分○中略

右注進之狀如件

曆應貳年二月日

〔河内國西琳寺領田畠目錄〕河内國古市郡西琳寺領田畠目錄

合

一國分寺分○中略

若江郡北條秋公田貳町七段小○中略

一高木庄○中略

定田九町二段大七十歩〇中略

龍王寺公文給八段半〇中略

一一切經分〇中略

右總田畠目錄之狀如件

應永元年甲戌八月五日

奉行飯尾美濃守貞之花押

〔筑紫文書〕永正六己巳年五月十三日

肥前國養父郡幸津撿麥取帳之事

合

一小宮田所六段内大四反小二反　太郎丸〇中略

一庄口所三段内大一反小一反　孫太郎〇中略

一三ノ島所壹段貳丈大　執行名〇中略

一中道所壹段内小半大半　小二郎丸名内中山方〇中略

同所三〇原ノ壹段小　德光名内祐泉〇中略

以上

五月十三日　原治部右衛門尉秀則花押〇以下二名略

〔周防國一宮領打渡坪付〕防州佐波郡大前内打渡坪付之事

合　菊樂坊領

島田壹段小　米六斗七升　彌三郎〇中略

灯明田貳反半　米壹石五斗　同人〇略五郎

岡田壹反大　米壹石五升　新左衛門〇中略

丈

右打渡如件

天正十七年六月二日　國司　雅樂允（花押）〇以下三名略

〔大隅國圖田帳〕注進　國中總田數寺社庄公領幷本家領所地頭辨濟使等交名事

合田參仟拾柒町伍段大〇中略

國領〇中略

寄郡七百十五丁八段三丈〇中略

曾野郡二百廿九丁四段大〇中略

大府御沙汰

島津御庄永利廿三丁三段三丈〇中略

帖佐郡二百七十一丁大〇中略

寄郡七百十五丁八段三丈

但付去仁平三年御庄方撿注帳注進之、御庄官等撿田入部時、滿作年者號居沽田付之辨濟所當物、不作年者雖遂撿田、不幾田數國衙訴也、

橫河院三十九丁五段二丈　蒙苅郡百卅八町一段〇中略

串良院九十丁三段二丈　鹿屋院八十五丁九段

肝付郡百三十丁二段三丈　禰寢北役四十丁五段四丈

下大隅郡九十五丁九段　始良西役廿四丁六段二丈

小河塚內百引村十三丁四丈（近鄉小河塚內在之）　同永利十二丁六段四丈（同）

曾野郡永利廿三丁三段三丈（近鄉內在之）　筒羽野四十八丁五段一丈〇中略

右件總田數任御敎書之旨、注進如件、

建久八年六月日　　大判官代藤原〔〇以下署名略〕

〇按ズルニ、一丈ハ其歩數七十二歩ニテ、五丈ヲ以テ一段ト爲スモノヽ如シ、次ニ掲グル永正七年肥前國養父郡幸津本庄檢見取帳事ニ見エタル文、永正十二年同國佐賀郡新莊之內金丸取帳之事ニ見エタル文等ニ由レバ、五丈ヲ以テ一段ト爲スヲ知ルベシ、而シテ五丈ヲ以テ一段ト爲ストキハ、一丈ハ一段卽チ三百六十歩ノ五分ノ一ニテ七十二歩トナル、謂ユル十代ト同一歩數ナリ、

〔遠江國御神領記〕定　永財沽渡進畠地立劵文事

合壹段者

在渡會郡〔〇伊勢國〕湯田郷下粟野村內字桑原垣內總二段一丈之中〔〇中略〕

直錢六貫文請納畢

右件畠地者、〔〇中略〕永所沽渡于物部字孫王丸之如件、〔〇中略〕

弘安七年十二月廿日　　領主中臣守支〔花押〇以下署名略〕

〔遠江國御神領記〕沒收言上大袋殺害以下條々罪科犯人筑前八郎跡田畠等事

合

一田地

壹段　前田作人親音、、　　壹段　烏帽子形作人石若次郎

壹段　四郎宮掌作　　壹段半　四丁四作人小法師

壹段　小馬渡、湘田坂三郎作　　三丈餘　十抄前付北

壹段　北垣內付西大世古次郎作　　壹段　南万町辻作人物忌作

半　牛庭作人藤次郎　　壹段　石橋作人、、次郎、、

一畠地
壹段屋敷付東　二段半屋敷後大垣內
二丈北畠作人石若次郎　壹段坊、、内田、、、在之作人岩淵鮎大夫
壹段惣官前道副　壹段大垣内
壹段西垣内作人、、　三丈久志木作人箕曲三郎大夫
三丈久志本麻部大夫作　鹽濱三丈
山一所尾上寺東坂前分止中分之
右件事、任被仰下之旨、所令沒收言上也、仍状如件、
元德三年三月十日　紀景實在判

〔筑紫文書〕注　文和五年丙申鏡宮御寄進北牟田新開田檢注取帳

合
一所御行大路西傍一町五段内
四丈　分米　一斗一升未進一斗二升　木引刑部太郎
三丈　分米　五升　秦二郎
四丈中分米　一斗己未進　本智御房
四丈中分米　一斗一升　常乗御房
三丈　分米　七升　刑部二郎
四丈中分米　一斗一升　宗太跡口二郎太郎
四丈中分米　一斗一升　五郎大夫
三丈　分米　七升　紀五郎跡九郎大夫

三丈　分米　六升　　又太郎
三丈　分米　五升　　源七
三丈　分米　五升　　覺法跡大夫五郎
三丈　分米　五升未一升　　丹三郎
三丈　分米　五升　　藤七跡大夫五郎
三丈　分米　五升　　壹八淨惠後家
三丈　分米　五升　　乘戒跡、乃
三丈　分米　三升　　源五郎跡大夫五郎
三丈　分米　三升　　丹七跡代太郎
一段一丈分米四升　　宗太
一所二丈分米七才　　五郎大夫〇中略

右御寄進新開田撿注取帳如件

文和五年丙申九月廿一日

〔光明寺舊記二〕永財沽渡進治畠地立劵文事

合百八十歩者

在下栗野村〇伊勢國度會郡湯田郷内字桒原畠者、本二段壹丈々中□付西□□□□

直錢貳貫百文請納了

右件畠地者、〇中略今依有直急用、限上件直物、永相副次第手繼證文、所沽渡于物部子孫王丸如件、〇中略

嫡子大中臣字藥王次郎〇署名以下略

〔筑紫文書〕永正六己巳年五月十三日　肥前國養父郡幸津撿麥取帳之事

合

小宮田
一所六段内（大四反大二反）　太郎丸　孫九郎（太郎丸名内）

島たわし
一所二段内（秋壹反一丈そは河成四丈）　又二郎

同所半　秋　彌七方○中略

なわまろ丁
一所壹段壹丈内（秋三丈そは河成三丈）　忠二郎○中略

庄口
一所三段内（大一反小一反秋三、上二丈）　孫太郎○中略

庄口南
同所壹段（大一丈秋四丈そは）　同人（○孫衛門、中略）

同所四反内（大二反三丈秋壹段二丈ひへ）　祐泉

同所壹段壹丈内（大二丈秋四丈そは）　助六○中略

五月十三日

原治部左衛門尉秀則（花押○以下二人略）

〔筑紫文書〕永正七年庚午九月廿八日　肥前國養父郡幸津本庄撿見取帳事

坂本
一所一段　大窪殿○中略

當代丁
一所八段内（六反四丈々一反一丈河成）　彌二郎○中略

一所三段内（二反三丈々二丈島地○中略）

かし丁
一所三反三丈内（四丈島地二反四丈河成○中略）

あな丁
一所七反三丈内（二反々二反四丈二反四丈）　二郎さへもん（與五郎祐泉○中略）

かし丁
一所四反内（三反四丈々一丈河成）　同人（○二郎さへもん、中略、）

四しんかい
一所一丁内（一丈一反八反四丈河成）　與五郎祐泉○中略

坪
一所一反内（二丈々三丈河成○中略）

かわらけ
同所一反三丈内四四丈丈　九月節供免
同所一反三丈内四四丈丈　ふまやめん
同所一反三丈四四丈丈　三月節供免
同所一反三丈四四丈丈　七月七日免
同所一反三丈四四丈丈　五月節供免
九月廿八日

執行名　又二郎名
三郎丸名　あま名
德滿名　小二郎名
末滿名　鬼丸名
井上名　太郎丸名　青木主殿助名
永則花押　○中略

〔筑紫文書〕肥前國佐賀郡新莊之内金丸取帳之事○中略
總都合六十五町八段壹丈中内
德田　三十町五段二丈内　佃所　六町貳段三丈
公事足　三町七段貳丈　たしかゝ丁　壹町
土肴料　壹町　定下　壹町四段三丈
庄屋樣　四町八段四丈　佛神免　三町七段貳丈
寺分
拾三町貳段
永正十二年乙亥二月九日

積貫宇左衛門　爲信花押
□山平太郎　高祐花押

〔筑紫文書〕寺家分
一所六段　數地やしき　勝樂寺
かいしやく　一所壹町　同免
一所壹町　はらさいでん　同免
六ノ坪　一所六段　同免
一所五段　數なし　同免
下野口　一所三段　同免

一所壹段三丈よこまくら　同尅　　一所壹段三丈ちらちまち　同尅
一所壹段やくら　同尅　　一所四丈池町　同尅
一所壹段うすい　同尅　　一所三丈左河　同尅
一所三丈きやうれん島地　同尅　　一所壹段三丈まきて
以上四町八段四丈
一所五段寺内　正愛寺　　一所壹町すひこ　同尅
一所壹町かけ丁　同尅　　一所五段小坪　同尅
一所五段一切町　　一所貳段二ノ坪　同尅
一所貳段三丈うり島　同尅　　一所三段杵町　同尅
一所壹段二丈本田　同尅　　一所三段大屋ふ　同尅
一所壹段柳ノ坪　同尅
以上四町八段〇中略

卯月十三日　南山隼人佐高安花押
原治部左衛門尉秀則花押

〔遠江國大福寺田文〕公方寄進分

貳反　津々木田　　三丈　津々木石はし
三丈　福延　　二丈　山カウレ
貳丈　井尻　　三丈　神下
一反　多々木ホソ田　　一反　上田九日田東又入立

公文名

杖

一反三丈　中島　貳反　フセ宇ト
四丈　みくり　二丈　コモ田
一反　みくり　一反　いちはの下
一反　宮前　一反　かたのまへ
三丈　同かたのまへ　井尻
目代名
貳反　向田河成　一丈　河島
一反　多々木まかとふり　貳反二丈　にし芝原不動田
一反　東不動田　二丈　治部山コウレ
一反　神下　二丈　彦衛門跡神下略○中

天文十七年戊申八月吉日　大福寺

〔大賀村検注取帳副日記〕凡一反ト云ハ頭六杖、町六十杖也、一杖ト云ハ六十歩也、

〔遠江國御神領記〕定　永財沽却渡畠地事

合貳杖餘歩者

在所栗野村桑原垣内者略○中

直錢壹貫五百文請納畢

右件畠地者、略○中中臣守支沽却渡也、略○中

仁治四年三月五日　領主度會犬子

相知嫡男山下金石丸

〔遠江國御神領記〕定　永財沽渡治田新立券文事

合壹杖者但貳段内付東

在高柳御園内

四至本券面具也

直錢壹貫捌百文請納了

右件治田者、○中略所沽渡于大中臣惟貞也、○中略

文永二年六月廿七日　領主大中臣惟道

〔遠江國御神領記〕處分少財物等事

合○中略

三女子乙子給物

田地四杖字中島高田

畠地壹段○中略

右件少財物等隨有所令分給也、○中略

康永三年甲申正月廿九日　嫡男權禰宜度會神主貞見裏判

〔徵古文府一〕永犬一丸母滿子處分渡少財物事

合

田地伍杖　宇治鄕内字東小島弘正寺領

田地百八十步同鄕内字東森河新開火打田

右件少財物等、隨有志所令處分也、○中略

貞和四年十一月十日　荒木田常安花押

〔貞治七年宮田前大宮司家領記〕前大宮司忠緒朝臣代伴朝幸立申紛失日記事

合○中略

一田地陸段肆杖同所在、(飯野郡宮田)字波多社、平四郎入道鶴石孫入等作、但此内壹段畠地、○中略

一田地壹段貳杖同所在、字脇田、孫入作、○中略

一田地五段貳杖飯野郡立利所在、字市田、參段貳杖藏法師入道作、貳段丈石大夫作、○中略

一田地肆杖同所在、(飯野郡西黒部)常光寺行田、○中略

一田地肆杖豐原所在、字橋下、

一畠地貳杖櫟田所在、金入道作、○中略

貞治七年戊申二月七日　　伴朝幸○領主大中臣忠精、署名略、

〔大湊太田文書〕永沽渡進屋敷事

合一杖卅歩者

在所箕曲牌内馬瀨村云云

四至限東駒次郎屋敷、限南藏人殿地、限西高田松法師利部田、限北左衛門次郎殿屋敷、

直錢一貫三百文請取畢

右件地者、自親母菊鶴女手處分給後、數年知行所也、雖然今依有急用、限上件直物、空同御房良圓仁

永沽渡進處、實正明白也、○中略

康應二年庚午閏三月廿七日　　沽主大中臣安忠花押

〔遠江國御神領記〕永奉相傳吹上光明寺領屋敷畠地事

合壹段四杖者

在所沿木鄕小坂村之西北字八王寺○中略

右件畠地者、自度會神主範雄之手、令買得、與吹上光明寺領櫟木村屋敷奉相傳所也、○中略

合

文安六年己巳卯月廿九日

相傳主櫻木住番匠屋遠次郎 服次吉

〔陸奥國好島浦島檢注目錄〕注進 八幡宮御領好島御庄元久元年〇中略

殘所之田貳百九十七丁陸段一合內、新田貳拾玖丁三段四合、

得成拾陸丁九段四合

吉光玖丁陸段壹合內新田一丁八段

右目錄如件

元久元年九月十日 公文所在判

〇按ズルニ、合ハ一段ノ十分ノ一卽チ三十六步ナリ、次ニ揭グル正和三年浦田ノ檢注目錄ニ見エタル文、及ビ好島田ノ檢注目錄ニ見エタル文ニ由レバ、十合ヲ以テ一段トセルヲ知ルベク、又好島田ノ檢注目錄ニ見エタル殘村分田七町八段卅步ノ內譯三丁八段一合半、得田三丁九段九合十二步ニ由リテ按ズルニ、七町八段卅步ヨリ三丁九段九合十二步ヲ減ゼハ、三丁八段一合十八步トナリ、十八步ハ合ノ下ナル半ノ數ニ充タル、之ヲ二倍シタルモノ卽チ一合ノ積ナリト知ルベシ、況ヤ當時ノ一段ハ三百六十步ナルニ適フニ於テヲヤ、

〔陸奥國好島浦島檢注目錄〕注進浦田正和三年甲寅檢注目錄事

合

田數貳拾町捌段三合內除荒野打口文枝定

除田

大折寺壹町 石佛壹町

神宮寺壹町八合 地藏田伍段

供僧田貳町壹段四合　燈油田壹段二合

新寺伍合　湯免參合

執行田貳段

以上陸町壹段二合

人給田

地頭給肆町貳段　名主壹町

垸飯田六段六合六步

以上伍町八段六合六步

殘村分田捌町八段四合三十步內

河成二段七合　江代四合　岡成二段

地切三合　石作壹合　損二合

損田二丁六段三合半

以上三丁二段半

得田五町六段四合十二步內（斤二丁九段四合）

本田四丁壹段七合十二步內（斤析加之 御年貢廿四反）

御年貢帖絹四疋　餘四反七合十二步

口糀田四丁七合十二步（中略）

右目錄之狀如件

正和四年二月十五日　預所代沙彌覺乘

注進好島田正和三年甲寅檢注目錄事

合

田數貳拾町玖段三合內除荒野打□定

除田

大折寺貳町　埵明神伍段　供僧田六段一合　命婦壹町

□□田壹段　申口壹段　燈油田壹段五合

以上四町四段六合

人給田

地頭給肆町八段　名主壹町　郡司給壹町三段　公文給田伍段

定使給四段　垸飯田六段六合六歩

殘村分田七町八段卅歩內

川成壹段八合　江代四合　定免三合　岡成壹段六合

不作三段　損田三丁一段半

以上三丁八段一合半

得田三丁九段九合十二歩內斤二丁六段三合

本田二丁六段七合十二歩斤折加定

御年貢帖絹二疋四丈　餘田一段七合十二歩嶋○巾

右目錄之狀如件

正和四年二月十五日　預所代沙彌覺乘

〔書言字考節用集十數量〕一畝ヒトセ左傳、田百歩曰畝、又秦孝公制二百四十歩爲畝也、本朝三十歩曰二一畝一、

〔倭訓栞前編十三〕せ　畝をせとよむも瀬より轉せる成べし、唐土には步百爲畝といへれど、今一

畝といふは三十歩也、十畝を一段とす、一段は十七間二尺一寸四方也といへり、

○按ズルニ、本書ニ瀕は說文に水流沙上也とみゆ、背は肉の淺き所なれば同じくよべるにや
ト見エタリ、

〔田圃類說〕町段畝歩之事

按するに、〇中略畝といふ事、いつの頃より始る事を知らずといへり、予〇谷本敎が臆見には、三百歩壹反
になりしは、貫高の頃より始り、畝といふ名目は石高になりて起れりと見えたり、〇中略畝と云も
壹反の小割なれば、石高起りてより始ると見えたり、

〔和漢三才圖會五十五地〕畝〇中略

中古方六尺五寸爲步、其三十歩爲畝、〇中略天正年中改復用六尺法、其三十歩爲畝、

○按ズルニ、中古トイヘルハ、天正以前ノコトナリ、而シテ天正ニ六尺ノ法ヲ用ヰルトアレド、
六尺ノ法ハ、慶長以後ニテ、文祿檢地ハ、方六尺三寸ナリシナリ、

〔甲斐國誌二圖法〕慶長元申同二酉年ニ至リ、淺野彈正少弼長政、一國撿地シテ石高ニ改ム、〇中略同元
年十二月朔日、古府中三拾七寺、屋敷地子免許記〇教安寺所藏米合四拾壹石七斗壹升トアリ、三百歩爲
一段、三拾歩爲壹畝、貳拾九歩以下ハ何拾歩ト云、

〔田圃類說〕町段畝歩之事

按するに、〇中略今之石高に成りて、三拾歩を壹畝とし、十畝を壹反とする事、一統の通法と成たる
なり、

〔能登國四郡庄郷保公田田數目錄〕注進國中四郡庄郷保公田田數目錄

一羽咋郡

家田庄　捌拾伍町六段七　永承□年立劵狀〇中略

土田庄　本四十一丁七反四 拾六町七段六　文治四年立劵狀○中略

堀松庄　本二十五丁二反六 捌町二段五　建久八年立劵□

菅原庄無地頭　貳拾三町四段壹　元暦二年立□□

大田富永保　三町九段三　元久元年立劵狀

志雄保地頭除園岡本大三入道　本二十九丁五反五 拾貳町壹段八　承久元年立劵狀○中略

粟生保　本四丁一反六 九段六　建暦二年撿立田定○中略

富○宮恐來院　本八四十一丁五反壹 拾五町九段八　建保元年撿立田定○中略

都智院　本五町四反九 九町七段五　建治元年撿□□定○中略

一能登國　鹿島郡○中略

飯川保　本八二十四丁三反三 五町三段五　久安年中八幡宮劵狀

高田保　本五丁一反 貳町六段九　壽永三年劵免○中略

一珠々郡○中略

方上　本三十丁五反九 十三町二段七　正治元年撿注定○中略

右國中四郡庄郷保公田田數目錄如件

承久參年九月六日注進畢

康應元年極月廿日

○按ズルニ、此文書段ノ下單ニ六、五、壹、三等ト記セルハ、畝ノ字ヲ略シタルナラン、

〔朽木文書〕算田御帳之事

合　寛正四年二月○中略

一畝○中略品ハ屋敷廊まき　三畝○中略字田野前屋敷廊まき

二畝在中野前田○中略　　一畝半在所マサノサノハナ

外戸庄算用狀

合寛正六年酉十月廿九日

八畝　八斗八升○中略　　四畝　四斗四升○中略

九畝　九斗九升○中略　　七畝　七斗七升

〔豐後國高田名知行坪付〕豐後國高田名門田邑知行坪付分錢三拾貫文內○中略

一上田七畝分錢七十五文　田成高○中略

一下田四畝廿分錢四十八文　中野○中略

一中田七畝分錢六十文　かりた○中略

一中田六畝分錢六十文　松田脇○中略

一中田八畝半分錢七十文　宇左田○中略

天文十八年丑八月廿五日　丹生田丹後守　年次

吉弘左近大夫

同小田伊豫守殿

○按ズルニ、前ニ掲ゲシ能登國四郡庄鄕保公田田數目錄以下ニ見エタル畝ハ、三十六歩ヲ一畝ト爲スナリ。

〔薩藩舊記後編十八〕薩州伊作之內領知目錄

田尻名

一田代野の內

參段貳畝　三枚田

六段五狹　同所
壹段七畝　道上
壹町壹反　楠木の丸
七段八狹　山の口
壹段九狹　山神の前
七狹五分　新山
合參町貳段八畝五步
畠方
四段三狹　大國
六段貳狹　岩下
三段七畝　居屋敷
九狹　紺屋敷
合壹町五段壹畝
浮免
邪答院塔之原之内
東鄕播磨先
三段貳畝　替地田
同名
三島領
貳段　くみ迫
同名
養春院先
貳段四畝　ゐの木田

合七段六狹

畠方

壹段八畝　うるし畠

壹段二狹　黒井堀

田畠合五町八反五畝五步

分米四拾五斛八斗四升六合

文祿三年二月十三日　町田出羽入道

存松判

浦地孫四郎殿

〔續常陸遺文六〕文祿四年乙未

常陸國信太庄土浦村御繩打水帳

三月九日

上田七せう　わらの後　あしかるやしきのした　與三兵衛

上田同　六世貳步　あしかる屋敷行　用なは　藤四郎

上田同　四世廿四步　同　七郎二郎

上田同　貳反五世貳步　やしま　彌七郎

上田同　貳反壹世廿八步　おかの　源六郎

上田壹反八世廿步　四郎右衛門○中略

此內

上田壹町四反拾五步

中田壹町八反九畝拾四歩
下田拾五町四反五畝七歩
田合拾八町七反九畝六歩
下畠壹反十歩
田畠合拾八町八反九畝拾六歩
乙未三月九日　　青木勘右衛門人○以下三署名略
○按ズルニ、此ニ云ヘル畝ハ三十歩ニテ、田合拾八町七反九畝六歩トアルハ、十八町七段五畝六歩ノ誤ナルベシ、
〔妙傳寺文書〕沼津之内、東馬門永荒之所、切起下田壹段五畝廿七歩、下畑九畝廿壹歩、以上合田畑貳段五畝拾八歩、右石貳石四升六合、爲寺領末代付置申者也、○中略
慶長九年甲辰十二月十九日　　大久保治右衛門尉
忠佐花押
妙傳寺
〔御神領配當以下知行勘定目錄類〕大禰帳百四拾石之外田地寫帳也慶長拾壹年丙午十月拾壹日寫之
コタウサウ中田貳せ歩　太郎左衛門　同所中田貳せ廿三歩　同人
ベツメウサク下畑六せ六歩　同人　大サカ中田九せ拾六歩　町孫太郎○中略
慶長拾壹年丙午拾月拾壹日書寫之○署名略
○按ズルニ、此文書ハ下總國香取神宮ノ神領ニ關スルモノナリ、
〔榎戸文書〕下總國境世村年貢割付狀
戌ノ取

塙世

上田四町貳反三畝廿歩

此取三拾三石八斗九升三合　但八斗取

中田壹町貳反三畝拾五歩

此取八石六斗四升五合　但七斗取

下田壹町貳反五畝貳歩

此取七石五斗四合　但六斗取〇中略

慶長十五年十一月三日　久右衛門印

名主百姓中

〔和漢三才圖會地五十五〕畝〇中略

中古方六尺五寸爲歩

〔日本書紀通證三十律〕今按、中古制方六尺五寸爲一歩、天正中復用六尺爲歩法、蓋準古五尺、

〔田圃類説〕町段畝歩之事

壹歩は六尺四方、壹反は三百六拾歩、十反は壹町とする事、往古ゟの定也、

〔田園地方紀原中〕町段畝歩ノ考附間竿尺寸ノ考

鼎〇略川案するに、〇中略六尺五寸一歩を以て、中古天正以前の制といへるも天正以前天下一統の制にてはあるまじけれど、土地の歩廣なるは、士民ともに利ある故、餘地あるまゝに、古の制の様に中ならし、多くは里程を量る六尺五寸の間竿をおしあてがひ、六尺五寸一歩などいひ傳へし也、〇中略地方答問書に、文祿年中の頃、秀吉公の命にて、諸國撿地の時、六尺三寸の竿を用ひ候と申傳へ候とあるは、尤の様に思はる、又書記し候義も無之故、難信用候といふは非也、予嘗て勢州の

友人細木某に、太閤撿地の事を問合せしに、勢州南北にも、文祿三年六月十七日、御朱印にて、撿地役は、羽柴下總守、服部釆女、稻葉兵庫、岡本下野守、一柳右近大夫、朽木河内守、新庄東國の七人にて、間竿は、六尺三寸之由なれど、いづれの撿地帳奥書にも、間竿を書載たるは見當らずと答へられし、玄かし勢州とても、廣き事なればいづれにか間竿のある撿地帳の存在せざることはあるまじと思ひ、彼是と問合せしに、一友人の藤堂侯の封内、大和國城上郡三谷村にて、見當りしとて、寄示さる、大和國、文祿四年、太閤改撿地有之、城上郡三谷村も、同年八月十八日、小堀新介撿地にて、奥書に云、

六尺三寸竿ヲ以テ、五間ニ六拾間、三百歩ヲ壹反ト定申候とあり、又其後勢州須ヶ瀬村渡邊六兵衞が家に所傳の太閤の撿地條目を書寫して贈らる、原本拙筆にして、古く損ずれば、難讀文義分り兼る所もあれど、其儘に寫すと云、○下略

○按ズルニ、伊勢國渡邊文書ニ豐臣秀吉ノ時、六尺三寸ヲ以テ一歩ト爲スコト見ユ、其文ハ載セテ段條ニ在リ、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一本道六尺五寸間、可爲二間、同道事、在々山里浦々共庄屋堅可申付、若道悪時者、其地頭百姓より、科錢壹貫爲庄屋取集、奉行中へ可相渡事、

一尺杖之事、城普請其外何によらず、本間六尺五寸間たるべき事、付田地者可爲各別事、○中略

右條々、於國中自今以往可爲龜鑑之條、貴賤共令信用、全可相守、若一言於相背者、忽可處嚴科者也、依所定如件、

慶長貳年三月廿四日　盛親在判

元親在判

〔律原發揮〕田畝法〇中略

本邦以方六尺三寸(以曲尺算之)爲一歩、三十歩爲一畝、十歩爲一段、(計三百歩)十段爲一町、(計三千歩)

〔田制篇七〕天正改制後ノ六尺三寸歩

田地ハ各別タルベシトアルハ、文祿撿地ニ六尺三寸歩ト定メシ故ニ、田地ハ其制ニ據リ、道路家作等ハ、從前ノマヽニ、六尺五寸ヲ一間トセシナリ、〇中略高知縣ニテ、今ニ至ルマデ、常ニ用ル所ノ撿地竿ノ一間トイフハ、曲尺ニテ六尺三寸ナリ、然レドモ、其算法ノ勞ヲ省カンガ爲ニ、假ニ之ヲ五尺ニ割シテ用キル、譬ヘバ、撿地棹ニテ、一間一尺ト云ヘバ、其實曲尺ノ七尺五寸ト知ルベシ、

〔大日本租税志田制總錄十〕天正十七年、豐臣氏海内ノ田地ヲ丈量セシム、然ドモ干戈騷擾、東西未ダ定マラズ、其制徹スルニ足ルナシ、文祿中ニ至テ、海内始テ統一ニ歸シ、曲尺方六尺三寸ヲ以テ一歩トシ、三十歩ヲ一畝トシ、三百歩ヲ一段トシ、十段ヲ一町トス、町段歩ノ名ハ、舊ニ仍ル、而シテ其實ハ則チ異ナリ、民皆言フ、一段毎ニ六十歩ヲ削ラルト、今之ヲ當時ニ徴スルニ、豐後國ニ玄蕃竿、法印竿アリ、肥後國ニ駒井竿アリ、土佐國ニ長曾我部ノ尺杖アリ、六尺以上ノ奇數、必シモ一定ナラズ、姑ク方六尺三寸ノ一歩ヲ以テ、計較スレバ、二十九歩餘ヲ減ズルニ過ギズ、然ドモ和銅以來、六尺ヲ以テ歩トスルモノ、亦唯其概法ニシテ、地ヲ度ルガ爲メ、尺度自ラ寛假有リ、豐臣氏因テ以テ、其有奇ノ數ヲ定メテ三寸ト爲ス、故ニ其削ル所、實ニ六十歩タルカ、

〔周防國一宮領打渡坪付〕防州佐波郡大前内(打渡坪付)之事

合　菊築坊領〇中略

こうきやう田
田三百歩　米五斗五升　吉守〇中略

右打渡如件

天正拾七年六月二日　國司 雅樂允 花押下署名 ○以下略

防州佐波郡大前内打渡坪付之事

合　　　　　　　　　　行泉坊 領 ○中略

田半 行泉坊後　米三斗　　　行泉坊 ○中略

以上田數八段三百卅歩 ○中略

右打渡如件

天正拾七年六月二日　溝川 平左衛門尉 花押下署名 ○以下略

田品

鎌倉幕府以後モ亦地ノ肥瘠ニ由リテ田地ヲ四等ニ別チ、之ヲ上田、中田、下田、下下田ト稱ス、又希ニ上上田ヲ加ヘテ之ヲ五等ト爲スモノアリ、此等級ハ畠ニモ亦之レアリト雖モ、上畠ハ大略中田ニ準ズルモノヽ如シ、而シテ其四等田及ビ公田名田等ノ事ニシテ、幕府ノ創立以前ニ係ルモノハ、政治部上編田品篇ニ在レバ、宜シク參看スベシ、

田畠位付

〔牧民金鑑 九〕元祿七戌年四月

撿地條目

一今度飛驒國村々撿地御用ニ付、撿地惣奉行、幷下役人竿取等迄、堅誓詞可仕、田畑位付正路ニ縄目無延縮、隨分念いれ、且又百姓之費無之、作毛不踏荒様可申付事、○中略

一田畑位付之儀、大方上中下三段ニ候、此度吟味之上、地面取分ケ能所は、上々田、又は所により關田、麻田等、一段立之石盛は、上ゟ壹斗高ニも相極、惡地有之所は、下々田、或は山田、砂田、谷田、段々

ニ立之、相考、下ニ壹斗或は貳斗參斗も相考、石盛を下ゲ可ㇾ相極、畑之儀、上々畑、麻畑、茶畑、下々畑、山畑、燒畑、砂畑、其外ニも所ニより見計、段々立之、石盛地面ニ應じ可ㇾ有ㇾ了簡、〇中略但位付之儀は、其村ニ案内申付、百姓ニ爲ㇾ致ㇾ誓詞ㇾ候以後、田畑共ニ古撿之位ニ不ㇾ構、一二附之位所ニゟ壹より十五六迄も段々爲ㇾ付立、帳面取之、撿地役人之見分と引合、遂ㇾ吟味、上中下位可ㇾ相極事、〇中略

戌四月

〔地方落穗集〕七享保十一午年被ㇾ仰出ㇾ候新田撿地御條目之事

新田撿地條目〇中略

一田畑位付、其村本田畑之位付を元ニ用ひ、上、上ノ下、中、中ノ下、下、下ノ下ニ見付、何れも壹斗劣りニ新田畑位を可ㇾ極、勿論其村古田畑眞土之處、新田畑野土ニ候はゞ、隣鄕致ㇾ吟味、隣鄕野土畑之位を用ひ見合、土地相應ニ可ㇾ極、其村本田畑は野土、新田畑は眞土ニ候はゞ、隣鄕眞土之所之位を以、右同斷見計可ㇾ極、屋敷は其村上畑之位付可ㇾ爲事、〇中略

午八月廿九日〇署名略

〔勸農固本錄〕下撿地仕樣之事〇中略

田畑位付は、大方上中下三段なれども、別て能所は上々田、又蒲田、麻田等は石盛、上より壹斗高にも極、又惡地下々田、砂田、谷田等は下ニ壹斗、或貳斗、三斗も、土地之品により下ゲべし、又屋敷は上畑並か、上々畑、麻畑、下々畑、山畑、燒畑砂畑、其外所により見計、地面に應、了簡有べし、大方段間、貳つ下りのものなれども、品により二には限まじ古撿之位に不ㇾ構、位番付、所により十四五迄も付立させ、百姓ゟ取之、役人見分と引合考べし、〇下略

〔地方凡例錄〕二撿地之事

撿地は土地の經界を改め糺之總名にして、田畑に竿繩を入れ、反別を改め、土地之位を糺し、石盛

を付高を定たるを云。○中略今用る所は、田高百石之地割ヲ以テ天下ニ押及ぼし、撿地賦税の本とす。假令は高百石の村、三ッ五分の物成を納る時、三拾五石の米を以て、武家百石の軍役を勤ること、古今の通法なり、其餘計にて百姓家數六軒、人員三拾人餘の渡世足る、此制法は地面よき處貳百間四方を一村として、其内に百姓屋敷を建て、畔井堀道を付け、堅横に地割をすれば、田拾町畑六反あり、屋敷際貳町歩を上田とし、其次を中田三町、村端野末下田五町、屋敷附畑六反、藪敷六反、外に空地五反ほど諸用の爲に殘す、是を二三五の法といふ。○中略右の割合左の圖のごとし、

田方百石の地割の圖解二百間四方を四十間四方ヅヽ、二拾五に割て、西北の角四方を居村として、其内に上畑藪敷を取り、中央一分を明地とし、村付二分を上田とし、其次二分を中田とし、野末の折廻を下田とす、

高二十四石　上田二町歩　石盛十二　一反壹石二斗

高三十石　中田三町歩　石盛十　一反壹石

高四十石　下田五町歩　石盛八　一反八斗

高六石　上畑六反歩　假石盛十　一反一石

小以高百石○中略



一石盛は上田壹坪に付籾壹升、壹反にて三石なり、此内貳割を減じて貳石四斗、又半減米にして壹石貳斗、是上田の石盛十二なり、二ッ下りにして、中田は十、下田は八ッ、畑は中田に准じ十と極め、高百石に成るなり、〇下略

〔成形圖說 六農事〕稅則〇中略又取箇見賦の事を石盛と云、出來籾を料て地の位を試み、籾を量に盛て租米を定ルの名なり、上田十五盛、一段に一斗五升、中田十三盛、一段に一斗三升、下田十一盛、一段に一斗一升、下々田に九升也、上田の斛盛一石五斗、この穀一坪に一升なれば一段に三石なり、半磨にして米一石五斗となる、是を五分納にして七斗五升の取なり、是は一歩三百歩の積にして云なり、

〔甲斐國志 二國法〕石盛ノ法ハ一ナラズ、土地ノ沃瘠ニ隨テ、一位ノ内ニ又高下アリ、蘭田壹段ニ貳石三斗、麻田貳石貳斗、麥田貳石壹斗、或貳石貳斗三升モ有リ上田貳石、或貳石壹斗貳升ヨリ壹石八斗以上、中田、下田、下々田、無位田、砂田、谷田等ノ品目アリテ、四斗三斗ニ降レリ、畠方ハ上畠屋敷大抵對下田ノ位、中畠、下畠、下々畠、無位畠、山畠、草刈畠、草畠、藪畠、砂畠、桐畠、柳畠、漆畠、楮畠等ノ名目アリ、三斗貳斗ノ位ニ及ブ、又田畠共ニ見付見取トテ段畝ニ懸リ石盛ナキ者アリ、

〔地方凡例錄 二〕一土地善惡之事〇中略土地を見る、先ヅ陰陽を見分ケ、草木盛長與いろ合、石之色、土之色、輕重淺深、ねばる與もろき與地所之高低ニ心を附べし、大概をいへば、南下り之土地は上、東下りは中、西下りは下、北下りは下々與知べし、土濕りねばり堅まるは陰、乾て重くはらゝく類いは陽なり、〇中略村居北ニ在て南を請、村前ニ田地有り、又北高く南低く日請能きは上田也、南ニ村居森林等有之、北請ニ而北低き地は下田也、東高西低土地は下田なれ共、早稻宜敷、東低きは中ニ而晩稻によし、又水掛り能く低に水氣ヲ含、日請ニ而上へに陽氣を請、地深く土目重く潤ひ有り、塊和かに碎るは上々田なり、尤田は

少々地淺くとも、水掛りさへ能ク日請ノ田は吉畑ノ地淺なるは、作物日負け多く入れば必稲に虫附ものゝ也、眞土ニ赤黑青ノ小石交り與白眞土ニ而ねばり能く黑眞土ゑや香色成は上地也、ねばり干堅まる土は下々也、原村の高みは田畑共惡地與知るべし、野土ニ而も潤ひ有之重メ成ルは眞土ニ不劣、上なり、亦飛色なるも上、鼠色は中、隅墨の如く黑く見ゆるは下なり、山土薄柿色ニ而土目輕、又燒土之樣ニ赤くねばり堅りたる土、砥心之如く白く堅まりたる土山方ニ多シ、何れも取辭惡シ、土路土重キは上、輕キは下也、扨又うない置たる田ニ稲根株大ク赤く澤山見ゆるは地性惡シ、野土砂土ニてパりなき故、根株不損して浮キ安く太ク澤山有は甚惡田也、眞土パり土目宜敷、上田也、根株少く又腐り、髭ニ似たるひると云草多くはゆる畑は下々也、土筆之澤山ニ出るも下畑なり、又地之底ニ朽たる葭萱抔之根多く、竹抔さしこめば何程もはいる田有り、常陸邊ニ而はけとらと云、國ニ依而ほつゝと云所も有り、出羽、越後抔ニ而は浮田といふ田は、畔を寄行けばふら／＼動く、土一面下タは何程深キにや、底不知、沼方ニ多く有之、○中略諸土之位、上々與下下は人力ニ而は如何樣共仕がたし、中下之土は人力を以、惡土を肥土ニし、弱土を强くし、堅きを和らげ、ねばきをもろく、淺きを深く、輕きを引ゑぼる程之事は、肥之仕方、うない方、人力之精次第心掛ニ而出來ものなり、土目之儀色々有之、難見分與いへども、大概上中下を分て見時は左之如し、

砂眞土　白眞土　黑眞土　鼠眞土　大河ごみ土あづま土とも云　稲子眞土おや眞土共云　野土交之眞土、小石交ける土、

右は上之田畑なるべし

ざく石交眞土　砂之過たる眞土　小石交白眞土　黑ク重キ野土　砂之過たる大河ごみ土

右中之田畑成べし

ねばき赤土　強キねば土　強キ黑眞土　砂交野土　輕赤土　灰土　輕キ野土　青キ眞土　砂斗畑

右は下之畑田成べし

〔地方凡例錄〕一田畑六分違之事〇中略

田畑六分違と云は石盛取米共、田畑之勝劣を以、位を分ケたる古法なり、石盛は末之ヶ條ニ如記、田畑共上中下貳ツ下リニ而、田畑對用するには上畑之盛、中田之盛、同然と云傳ふを、中田の石盛を直ニ上畑ニ用ると心得ルは誤り也、中田之盛同樣ニ致スは假石盛ニ而、夫ニ田畑六分違之六江乘ジて、則上畑之實石盛ニ成、縱ば上田十二、中田十ヲ、下田八ッ、下々田六ッならば、上畑は中田之盛十ナニ六分違之六を乘ジ、六ッ之盛になる、夫ゟ中、下、下々と二ッ下りニ石盛可附事なるに、近年は六分違之古法を不知ニや、大概上畑を下田之石盛と對用する樣ニ附る事、撿地之法之樣ニ成りたり、六分違ニ而は中田ニ上畑は四分劣りなる處、下田石盛直ニ上畑ニ用れば、中田ニ異分劣りに當ル、直ニ用ルならば、下々田之盛ニ而對用する事なり、六分違之法左ニ記ス、

上田壹反步　此分米壹石貳斗〇中略

中田壹反步　此分米壹石〇中略

下田壹反步　此分米八斗〇中略

上畑壹反步　此分米壹石〇中略

中畑壹反步　此分米八斗〇中略

下畑壹反步　此分米六斗〇下略

〔成形圖說〕農事九田文〇中略

依田品定村位

門割検地といふは、一村の門々盛衰ありて、百姓互に親疎あるとき、田地を按割することとなり、譬ば上田に宛たる所も年經て下田に變り、又下田も上田になりて、高結物成の輕重等からざるゆゑ、中墨の竿を入て田地を割配、各税則を平にするをいふ、

〔筑前國續風土記〕一本州村の位、田の位に依て改別石高、

畠の段別の高は、郡村に依てかはり有、一樣ならざればしるさず、

村の位五段、上々村、上の村、中の村、下の村、下々の村、

田の位四段　上田　中田　下田　下々田

上々村田一段高

　上田二石二升(已下三升(升恐斗誤)三合下ル)　中田一石七斗一升七合　下田一石四斗一升四合　下々田

一石一斗一升一合

上村田一段の高

　上田一石九斗一升九合(上々村上田一斗一合下ル)　中田一石六斗一升六合(上田より是も三升(升恐斗誤)三合下ル)　下田

一石三斗一升三合　下々田一石一升

中の村(〇中の村三字原脱、據二前後文一補レ之、)

　上田一石八斗一升八合(上の村の上田一斗一合下ル)　中田一石五斗一升五合(上田已下是も三斗三合下ル)　下田一石

二斗一升二合　下々田九斗[illegible]合

下の村

　上田一石七斗一升七合(中の村上田一斗一合下ル)　中田一石四斗一升四合(三斗三合下ル)　下田一石

一斗一升一合(上同)　下々田八斗八合(上同)

下々の村

上上田
上田
中田
下田
下下田

上田一石六斗一升六合(下の村の上田より一斗一合下ル)　中田一石三斗一升三合(三斗三合下ル)　下田一石一升　下々田七斗七合

〔島津本吾妻鏡〕延應元年七月十五日壬午、今日前武州(〇北條泰時)以田地、爲不斷念佛料所、限未來際、令寄附于信濃國善光寺給、(〇中略)圓全法橋草寄進狀云、

寄進(〇中略)

一田疇配分事

右(〇中略)但有沃壤上腴之上田、有薄地下流之下田、悉計會優劣、可配分多少也、(〇中略)

延應元年七月十五日　　正四位上行前武藏守平朝臣

〔東寺百合古文書(百二十三)〕請文東寺御領丹波國大山庄一井谷百姓等御年貢□□代事

合八町壹段參十代內

上田參町三段　　段別七斗五升

中。田。參町貳段　　段別五斗七升

下田壹町六段卅代　　段別四斗五升

右御領者以下地被切進寺用足之時、段別一色石代旨被定之畢、雖然損亡之時、就申入子細被下口口使之間、云地下云御寺、非無其煩、仍任百姓申請、所被定上中下之斗代也、(〇中略)仍起請文狀如件、

文保二年六月十四日　　右馬尉判(〇以下三人略)

〔香取神宮古文書(三)〕讓與　嫡子實長分田畠注文

本屋敷　比畠　壹所ゆやの跡　畠壹所(平四郎内)　畠壹所(トヽキ)　畠壹所(倉跡)　畠壹所(門田上)

畠壹所(新寺次郎入道作)

田坪付

巳上田數四丁參段小內上田壹丁大 中田壹丁四反小 下田壹丁小　不作參段 チカナリ二反 神田一反コヌマリ○中略

右注文之狀如件惣田數六丁九反斗

嘉曆貳年八月廿一日　沙彌道寂花押

〔香取神宮古文書纂八〕□□□吉成分

□□田所職幷租穀沙汰幷手作名田畠等□□屋敷田畠證文事、

□反妙見神　下。田。一反○中略　荒田一反水口○中略

右者藤井吉安先祖相傳所帶之職也、○中略

康永三年太才甲申二月十二日　田所藤井吉安花押

〔豐後國高田名知行坪付〕豐後國高田名門田邑知行坪付分錢三拾貫文內

一上田四段半　分錢六百二十文　爲成本
一中田二段　分錢二百六十文　地藏免
一下田一段廿　分錢百十文　外川田
一中田二段廿　分錢百七十文　吉松
一上田七畝　分錢七十五文　田成高
一下田壹段半　分錢八十四文　石黑
一下田四畝廿　分錢四十八文　中野
一下田四段　分錢九十八文　鹿松
一上田二段　分錢三百文　宇曾
一中田一段　分錢百文　馬場表
一中田七畝　分錢六十文　かりた
一下田壹段　分錢五十文　野田口
一中田六畝　分錢六十文　松田脇
一上田六段　九百八十文　用作
一中田八畝半　分錢七十文　宇せ田
一下田二段　分錢二百文　かやた
一上。々。田。二段半　分錢四百文　東ノ川原
一上田六段　分錢壹貫文　西川原田
一下田四段半　分錢九百文　丹入田
一下。々。田。三段半　分錢百五十文　市田
一下田二段廿　分錢二百文　上市口
一下々田九段　分錢壹貫文　山ノ脇

以上○中略

天文十八年丑八月廿五日

丹生田丹後守

吉弘左近大夫　年夬

同小田伊豫守殿

〔伊勢國渡邊文書〕就伊勢國御撿地相定條々○中略

一上田壹石五斗、中田壹石三斗、下田壹石壹斗、下々者見計可相定事、

一上畑壹石貳斗、中畑壹石、下畑八斗、下々見計可相定事、○中略

右之條々相守、下々迄此一書を遣、さほ打ニ可申付也、

秀吉公御朱印

文祿三年六月十七日○名略寛

〔土佐國幡多文書〕土佐國幡多郡上山鄕御地撿高目錄

總田數合參百八拾四町九段四拾代四分夕内（本田貳百六拾貳町三反廿七代　出田百廿二町六反十三代四分夕）

右内

上田　拾八町七反廿七代夕　　上出　八町五反廿八代四分夕

中田　四拾五町四反十七代壹分夕　　中出　廿四町七反卅代三分夕

下田　九拾五町三反卅五代壹分　　下出　五拾九町五反二代五分夕

上屋敷　壹町九反四十壹代壹分　　上屋出　三反四十代二分夕

中屋敷　六町四反廿九代二分　　中屋出　貳町五反四十六代四分夕

下屋敷　拾六町四反卅九代貳分夕　　下屋出　五町八反八代五分

上畠　五町四反十七代四分　　上畠出　四十七代壹分

中畠　五町六反十四代二分夕　　中畠出　貳町八反卅七代四分
下畠　四拾壹町四反四十六代壹分夕　　下畠出　十七町六反廿代三分夕
荒。三十町七反五代四分夕
外切。畑。拾八町五反十三代二分夕
巳上
合十五町五段卅三代夕内（本田拾貳町八反拾九代壹分　出田八町七反十三代五分夕）
右内
上田　七反四十二代　　上出　貳反廿三代
中田　壹町五反廿壹代貳分　　中出　六反五代二分夕
下田　五町五反十六代五分　　下出　壹町六反十六代五分
中屋敷　貳反廿代
下屋敷　九反卅代四分　　下屋出　十六代
下畠　貳町貳反廿二代二分　　下畠出　貳反二代四分
荒壹町五反十六代○中略
慶長二年　　大用村上山岡元給

正木右兵衛
國津右近
松田七左衛門
横山二右衛門
黒岩治部

〔香取神宮古文書集六〕

慶長拾壹年丙午十月拾壹日寫之
大福帳百四拾石外田地口帳也（綴本ニテ表題此ノ如シ）

（コクウザウ）中田貳畝歩　太郎左衛門　（同所）中田貳畝廿三歩　同人
（ベツタウサク）下畑六畝六歩　同人　（大サカ）中田九畝拾六步　（町）孫太郎
（同所）下畑六畝十步　同人　（ヘタノ下）中田四畝廿三歩　（町）源左衛門
（ヌクイ）上田八畝八步　同人　（大サカ）中田壹反五步　（町）總右衛門
（スクホ）中田五畝七步　（篠原）左衛門次郎　（同所）中田三畝廿一步　同人○中略
（ヤマサキ下）上田九畝廿貳步　（山崎）源四郎○中略　（カハヤサク）中畑壹反貳畝廿壹步　分飯司○中略
下田壹反貳畝七步　（サイノ）三郎左衛門○中略
以上
右此帳百四十石口口田地寫帳也○中略
慶長拾一年丙午十月十一日書寫之
實房花押
知行花押

（榎戸文書）下總國塙世村年貢割付狀
戌ノ取
塙世
上田四町貳反三畝廿步
此取三拾三石八斗九升三合　但八斗取
中田壹町貳反三畝拾五步

此取八石六斗四升五合　　但七斗取
下田壹町貳反五畝貳歩
此取七石五斗四合　　但六斗取
下々田九反壹畝廿歩
此取貳石七斗五升　　但三斗取
田合七町六反三畝廿七歩
取ノ米合五拾貳石七斗九升貳合
付荒壹反九畝壹歩
掉違壹反拾七歩
上畠三拾九町貳反貳畝廿壹歩内八畝分田ニ成本帳付違
〃三拾九町壹反四畝廿壹歩
此取三拾貫五百卅五文　　但七十八文取
中畠貳拾五町三反三畝歩内（貳畝拾四分掉違　壹反拾六分田々成本帳付違　壹反貳畝廿七分すな入川かけ）
〃貳拾五町五反七畝九歩
此取拾七貫三百九拾文　　但六十八文取
下畠拾五町内（九畝四分すな入川かけ　壹町貳反八畝貳分付荒）
〃拾三町六反貳畝廿四歩
此取七貫四百九拾五文　　但五十五文取
屋敷壹町五反六畝拾貳歩内　六畝廿五歩名主定使やしき
〃壹町四反九畝拾七歩

此取壹貫六百四拾五文　但百十文取

畠合八拾壹町六反貳畝九歩

取ノ永樂合五拾七貫六拾五文

右當月中ニ皆濟可仕候、於油斷者以譴責可申付也、

慶長十五年十一月三日　久右衛門○黒印

名主百姓中

下總國塙世村年貢割付狀（寛永十年）

塙世村

一上田四町貳反五畝拾歩

此取米貳拾八石貳升九合　但六斗五升九合取

一中田壹町六反七畝拾七歩

此取米九石四斗六升七合　但五斗六升五合取

一下田四反六畝拾四歩

此取米貳石貳升貳合　但四斗七升四合取○中略

一上畠三拾三町三反八畝六歩

此取永樂三拾四貫八百八拾四文貳分　但百四文五分取

一中畠拾九町四反六畝拾八歩

此取永樂拾六貫貳百五拾四文　但八拾三文五分取

一下畠拾町九反六畝廿八歩

此取永樂七貫七百三拾三文四分　但七拾文五分取

上畠
中畠
下畠
下々畠

一下々畠貳反八畝拾貳歩
此取永樂百拾貳文　但三拾九文五分取〇中略
右物成、來霜月十五日以前皆濟可仕候、於油斷者、急度催促可申付者也、
寛永十年酉九月十九日
坂田左近右衛門印〇黒
奥野將監印〇黒
大原主水印〇黒
大石藏之助印〇黒
塙世村
名主　百姓中

〔豐後國高田名知行坪付〕豐後國高田名門田邑知行坪付分錢三拾貫文内〇中略

一上畠二段半　分錢百文　原ノわき
一下畠二段半　正月田　上ノ原
一中畠一段半寄進免　石谷
一下畠貳段　分錢百文　柿ノ木本
一中畠二段三十　分錢二百文　下市口
一下畠五段　分錢八百文　吉原口
一中畠一段半　分錢八十文　長田道添
一中畠四段廿　分錢五百文　爲成田
一下々畠三段半正月田　空田尾
一下畠二段半廿　分錢百八十文　市持口
一中畠三段半　分錢八百文　下穴原
一下々畠一段半　正月田　下ノ原
一下畠二段　分錢三百文　石田
一上畠五段半　分錢壹貫文　四良田
一下畠三段　分錢四百文　上市口
一下畠五段廿　分錢七百文　白石
一下畠二段廿　分錢百文　赤田口
一下畠五段　分錢七百文　たうやしき
一中畠壹段半正月免用作　空原

以上

天文十八年丑八月廿五日

丹生田丹後守

吉弘左近大夫　年次

同小田伊豫守殿

〔香取神宮古文書集十六〕依有用々本錢返賣渡畠狀

合本錢返壹貫八百文

右件之畠坪は、つはら畠上畠二百代、下小畠六十代、あわせて二百六十代壬子年之作毛より始候て、來候はん戊午年の作毛迄、十四作が間賣渡處正也、年記過候はゞ、本錢お以受返申べく候、爲後日如件、

天文廿一年壬子今月吉日

賣主　香取又四郎

買主　ばゞ藤内二郎

〔甲斐國志十八村里〕成澤村都留郡、中略、

古撿地帳一冊村民所藏

成澤大田和村御撿地帳

天正十九年辛卯十月吉日

成澤屋敷拾八軒、合壹反三畝、○中略

中畠壹町壹反貳歩、分米八石八斗五合三勺四才、

下畠壹町三反貳畝拾貳歩、分米七石九斗四升、

下々畠三町貳反四畝貳拾歩、分米拾貳石八斗貳升六合六勺八才、

荒畠壹反七畝拾三歩、分米壹石九升七合三勺、○下略

公田

〔府中總社文書拾遺〕新治郡〇常陸田木野谷村

はしくたり
中田一反壹せ廿七歩　田木野谷坊

同 中田六せ廿四歩　わた引作

石の峯
上畠拾四歩　い、つう作

同 下畠仁せ歩　はやと作

道さかり
中畠七せ拾一歩　平右衛門

同 上畠壹反六せ歩　せん二郎作

同 下畠仁せ廿五歩　同人作

同 下畠壹せ拾歩　同人作

たいしとう前
中畠四せ拾歩　内せん

台五石

慶長七年子十二月二日　島田次兵衛印

府中總社

〔春日社領田畠取帳〕春日御社領

垂水西御牧榎坂鄕文治五年御撿注加納田畠取帳事

一垂水村田畠

水田〇中略　公田　不輸〇輸恐輸誤、次亦同、中略、

一榎坂村田畠

田〇中略　公田　不輸田〇下略

〔常陸國總社文書〕常陸國宜

名田

廳宣　留守所

可早任宣旨狀、除三社領外、不論神佛寺以下免給等、平均宛催公田、建久以後新立庄園、令進濟大嘗會用途料段別參升米事、

副下

宣旨　院宣

右大嘗會者、天下之重事、諸國之課役也、是以所被宛召段別三升米也、早任宣旨、平均令宛催、早速可進濟、兼又新立庄園并公田員數等委可令注進、言上之狀所宜如件、國宜承知、不可違失、以宣、

文永十一年　月　日

介惟宗朝臣

〔妙興寺文書〕賀茂社造營料及段錢納付狀

納賀茂社造替并公家進段錢事

合陸貫伍百文者

右爲妙興寺領散在公田拾町分、沙汰所納如件、

明德二年十二月五日　松田大寺友國（花押）

眞室（花押）

〔香取神宮古文書纂三〕香取大禰宜大中臣實員所領、下總國小野、織幡兩村并金丸、犬丸、名田畠等事、如申狀者、爲私領三十七代之間、于今無濫妨云々、然者任相傳、不可有相違之狀、依仰下知如件、

承久三年十月廿九日

陸奧守平（花押）

〔神護寺文書〕兩六波羅探題裁許狀

神護寺領播磨國福井庄西保沙汰人　地頭非法條々○中略

一永安名田事

右如覺嚴法眼申者、本是爲預所名之處、地頭一向押領之、然而於所當者、所辨進領家方也云々、如經光法師申者、令辨濟所當米於領家方之條勿論也云々者、早守東保任先例、可全所當年貢矣、○中略

天福元年九月十七日

掃部助平 花押 ○北條時經

駿河守平 花押 ○北條重時

〔香取神宮古文書纂二〕關白前左大臣家政所下　香取社神官等

可早停止惟實新儀濫妨、任手繼證文道理、以大中臣氏號龜若女、令進退領掌社領三角田參段、上分田參段屋敷等事、

右彼氏女訴狀云、件屋敷名田等、手繼相傳之證文顯然也、而惟實乍知此等之子細、致新儀濫妨之條、猛惡之至何事如之哉、就中對論本主子孫之條、所被停止也云々者、早任代々相傳證文道理、以大中臣氏女、可令進退領掌件名田屋敷之狀、所仰如件、神官等宜承知、不可違失、故下、

文永八年三月日　案主中原

別當權大辨兼皇后宮亮藤原朝臣 花押　大從彈正少忠惟宗

右少辨藤原朝臣 花押

前備中守藤原朝臣 花押

〔香取神宮古文書纂八〕嫡子吉有捴領分事

口口田二段 たまたのきのこ上　名田五段 小野たけにふん八坪六斗代 ○中略　名田加符五段大 作人大倉天神下入道 ○中略

口屋敷田畠等者、忠吉之先祖相傳之私領也、○中略

文永十年癸酉大才閏五月廿九日　藤井忠吉 花押

〔續寶簡集五〕僧榮秀御影堂陀羅尼田寄進狀○中略

寄進 名田壹段事

在金剛峯寺御領政所下方字イフリ田井タヌキノ坪

加地子陸斗伍升者

右件名田者、淨得相傳私領也、而爲後生菩提、永所奉寄進于御影堂也、於證文者、先年燒失之、仍立置紛失狀者也、彼狀依爲連券不副進之、且此條、故淨德遺言之旨也、仍爲後日龜鏡寄進之狀如件、

弘安六年癸未五月十五日　　嫡弟榮秀(花押)

〔續寶簡集四〕僧宗信御影堂陀羅尼田寄進狀

(端裏書)御影堂寄進□

奉寄進 御影堂陀羅尼紀伊國名手庄名田事

合一段四至在本券、　一通本券 一通信堅阿闍梨讓狀

右件名田者、自故先師信堅阿闍梨、宗信所相傳也、然爲紡學頭信日幷信堅阿闍梨菩提、相具本券幷讓狀、永所奉寄進御影堂陀羅尼實也、仍爲後日寄進狀如件、

元亨四年三月廿一日　　宗信(花押)

〔常陸國總社文書〕僧快智讓狀

養子徳房田事

合田貳段者

右件田者、三郎丸名上車田壹町內下堺ニよせて貳段快智重代相傳名田也、しかるをすき大夫殿にそくとくばうやうしのそくたるによて、永代をかぎてゆづりわたすところ實正也、○中略仍後日ためにゆづり狀如件、

元德貳年(大才)かのへむま十月廿三日　快智(花押)

(親元日記(武家名目抄文書二十一所引))施行案

伊勢國朝明郡小向鄉名主山本兄弟等(交名在別紙)跡散在名。田畠屋敷山林以下事、早任御判之旨、可被沙汰付下地於伊勢與一貞弘代之由、所被仰下也、仍執達如件、

寛正六六十七　(管領畠山)尾張守在判

一色左京大夫殿

(政所賦銘引付二)一(清泉州)山徒法花院承舜申狀(文明五九廿)江州志賀郡南庄内名田四段、爲大師八講料所奉行職永代買得相傳證文有之、當知行之上者、安堵御奉書事、被成御奉書畢、頭人御加判、

(親長卿記)傳奏奉書案

當社領越中國倉垣庄上使職事、申付氏人景定之處、百姓等令同意、有限去年月宛神事定等、號損免不致沙汰云々、爲事實者、太以不可然、就中同庄田四ヶ村之内白石名。事、氏人景盛本役事、年々一向不及其沙汰、抑留之條、言語同斷次第也、吝放氏人職、可處罪科、若有子細、急度令參洛、可明申之由、可被下知給之由、被仰出之旨候也、恐々謹言、

十月十〇(文明五年)六日　親繼判

鴨禰宜三位殿

古事類苑

政治部七十三

下編

開墾

鎌倉幕府時代ニハ、山林原野ヲ開墾シテ新田ヲ起シタルモノ少カラザリシガ、應仁以來干戈止ム時ナク、人民ハ常ニ武人ノタメニ苦役セラレ、美田良土モ荒蕪ニ屬セシヲ、德川氏ノ政權ヲ握ルニ至リテ、人民始テ安堵シ、農業漸ク盛ニ、幕府モ亦意ヲ勸農ニ用ヰ、種々獎勵ノ法ヲ設ケ、人民ノ開墾ヲ乞フモノアレバ、相當ノ保護ヲ與ヘ、殊ニ代官ノ新ニ開墾地ヲ發見セシモノニハ、永ク租稅ノ十分ノ一ヲ賜フコトニ定メシヨリ、開墾ノ業益盛ナルニ至レリ、是ニ於テカ他ノ利害ヲ顧ミズ、爲ニ水源地ノ森林ヲ濫伐シテ河水ノ汎濫ヲ致シ、或ハ乾燥ノ美田ヲ變ジテ、卑濕ノ惡土タラシムルニ至リシモノ亦尠カラズ、

名稱

〔地方要集錄〕新田を新開ともいふ、是は場所一場立候地所を新規に開たるを申候、切添と申は、有來古田畑の地續をひらき候をいふ、〇中略

一新田と申候得は、田畑屋敷等之總名にて候、細々申候得ば、田新田、畑新田と差別有之候、

〔地方凡例錄〕二一新田切添之事 附リ 一分間の事 鍬下年季之事 地代金之事

一新田と云は、新田畑屋敷等之總名にして、新田共新開共云、細かに分て云時は、新田、新畑、新屋敷之差別有り、何れも一場立たる所を、新規に致開發を、都て新田と唱へ、海川之附洲池沼等之埋りたる處を、山方原地萱場等田畑に可成場所見立、其村之者にても、又他村之者にても、新開願出る

時、古田畑之障り、幷隣村之差障有無等得と糺し、障無ければ、新開申付ル、先づ大繩反別迚、其場所總廻りを致、見分、可除地所は相除、用水路堤敷道敷等是又相除キ、分間繪圖、步詰にて總反別何程と相極メ、右地所早速田畑に開發成安キ所か、又は格別開キ手間可掛哉を致見分、五年にても三年にても、鍬下年季を極、代金も其場所相應に、凡壹反金貳分か壹分と相立、總金高鍬下年季內に割合上納致させ、年季明翌年撿地いたし、高入にいたす、○中略

一古田畑之地續を切開たるを切添と云、是又多分の切添なれば、其場所計致撿地、高反別共相增事也、石盛は類地同樣にいたす、併類地は土地も宜く、切添之分は山寄木陰野付等にて、畝步も多く、格別地味劣たらば、類地同然之石盛にも難付、土地見計中にも下にも附事も有之なり、

〔地方落穗集七〕新田開發願に付初發吟味之事

一前々空地にて有之芝原、又は沼池等、新田に開發致度旨、奉行所へ願出候節は、右吟味願場所最寄御代官へ被仰付候儀も有之、然共支配村々右新田場所へ拘り候へば、外御代官へ被仰付候儀も有之、右類繪圖書物、其御代官へ相渡、可致吟味旨被仰渡候儀也、尤願人共へも右之趣被仰渡候也、

一願人役所へ罷出候はゞ、在所の者ならば、江戶旅宿の名所承り書付取べし、扨右新田願場所は、御料か私領歟、一村か村々入會の場所か、御料は何之誰御代官所、私領は何之誰知行所に而、何村都合何ヶ所入會に候哉之譯相尋、委細書付取、之勿論右に付、村々相對致し候哉の趣等有無、是又書付取べし、

一扨右入會の村々地元村の御代官地頭の役人へ、吟味承り候御代官の元〆役の者ゟ文通致し、何々御用に付、相尋候儀御座候間、何村々來る幾日、何之誰役所へ罷出候樣被仰付可被下旨、申遣呼出す、

一村々罷出候者へ、右場所新田願有之趣申渡、此沼原地前々何樣の譯にて、新田不成に候哉、原は原付村の馬草肥し等の爲、空地にて差置候哉、沼溜り水近邊村々用水に引取候哉、或は村々惡水を開き候ために差置候哉、其外助成有之村々渡世の爲に成候に付、差置候哉の旨、又新田被仰付候て、古田の障りに成候哉、村々勝手にも宜敷候哉の段、委細相尋、吟味の上、何方の障にも不成場所は伺の上新田開發被仰付候也、又障村有之候ては、場所におゐて見分有之事なり、

〔地方要集錄〕一町人請負候新田畑は、御停止に候、○中略

覺

一新田之御取箇はゆるめに取候て、農を勸候樣に仕候儀肝要之事に候、百姓甘く候て、村方賑候樣に持立候儀、第一之儀に候、初年々御取箇能御所務立候樣に仕候儀は、畢竟御爲に成不申候、不功之いたし方にて候、

〔阿波國社寺文書乾〕當市場村荒地之儀、障鄕にて、役はづれの百姓幷流浪人罷出可相開候、一作は不可有年貢候、翌年より聊之上分可相計者也、

慶長九年正月八日

〔本間文書〕新野池新田置目之事

一田地起候其年は、十分一たるべき事、

一二年目は三ッ取たるべき事、

一三年目よりは、本鄕に一ッさがりたるべき事、

右峯田新田如置目、諸役令免許候、但苗代所之儀者、新野、あさいな、門屋三ヶ鄕○遠江小笠郡にて、田地之積り次第可申付者也、仍如件、

慶長十年巳正月十一日　　忠政朱印○大須賀出羽守

池新田百姓かたへ

〔郡村志城東郡〕池新田村　慶長十巳年、遠江國城東郡新野池ト云フ川ヲ堀、湖水ヲ旱シテ、本高千四百五十石、新高三百六十石ヲ開發シ、池新田村ト號ス、〇中略初メ新野池新田ト唱ヘ、今ハ池新田村ト唱、

〔三河國岡崎領古文書下〕掟

一村々の荒子、其村々に百姓とあいたい致し合點に候はゞ、おこしてもの作り可申候、當給人かまい在間敷候、若年貢已下何にても地役於無沙汰には、地頭取上百姓に領可申候、其地頭は作り申間敷候、又荒子おこし候もの作り候上は、田畠無相違、其村之百姓請取可申事、

一村々荒子今度撿地入候はぬ所改、當地頭可致所務候、但先地頭荒子おこし作り候は、當年は先地頭作取、來年は當地頭へ可相渡候、左候ば其子細當給人に可相理事、〇中略

右之條々、相背申間敷候、已上、

慶長拾五年戌卯月四日

〔地方凡例錄六〕一見立新田十分一被下事

御代官支配所之內、又は支配外にても、海川原等新田畑に可相成場所見立、古田障有無等遂穿鑿、外之障於無之は、新開相伺、鍬下年季明御年貢上納之年ゟ、見立たる御代官一生御物成十分一ツヽ被下御定法に相成ル、尤當時は御代官に不限、御勘定御普請役等見立、新田致世話、是又一生十分一被下之、御代官手代見立相願候ても、十分一被下例、先年會田伊右衞門手代支配所にて見立新田取立、十分一被下たる近例有之、右御代官江十分一被下儀、何頃ゟ始たるや不相分、尤享保八卯年新田十分一之儀に付、御勘定奉行ゟ左之通伺書有、其頃有德院樣〇德川吉宗御治世之始、御政道諸事改りたるに付、此頃始たる儀にも可有之哉不詳、都て新田畑取立ルは、宜敷事といへども古田

畑秣場等之障能々可相糺、地方增を而已功之樣に心得、不吟味にて取立ては、後年甚害多し、若秣場等致不足、古田畑之妨に成、或は地味不宜新田高入いたし、年貢作德も無之、無是非作り荒し冠り高と成、末代村方の煩を引出す事も有り、十分一被下德分を思ひ、始終國益之可否不考して、容易新田取立ル儀は不宜事なり、

享保五子五月、御代官江品々御書付出る一條之內書拔

一新田出來之儀は宜敷事に候得共、外之害に不成處は被申付可然候、大概古田畑或は秣場等之障に成事、度々有之儀に候條、左樣成所は可爲無用事、

（牧民金鑑九）享保七寅年七月　新田開發に付高札

覺

一諸國御料所、又は私領と入組候場所にても、新田に可成場所於有之者、其所之御代官地頭幷百姓申談、何れも得心之上、新田取立候仕形、委細繪圖書付に記し、五畿內筋は京都町奉行所、西國中筋は、大坂町奉行所、北國筋、關八州は、江戶町奉行所江可願出候、願人或は百姓をだまし、或金元之者江、巧を以てすゝめ、金銀等貪取候儀を專一に存、僞を以申出るものあらば、吟味之上、相咎にて可有之事、

一總而御代官申付候筋之儀にても、納方之益にも不相成、下々却而致難儀候事有之ば可申出、併可申立謂も無之、自分之勝手に宜儀計於願出は、取上無之事、

右之段可相心得もの也

寅七月　　奉行

享保七寅年九月廿九日御書付大久保佐渡守殿御渡

總而自今新田可有開發場所者、吟味次第障り於無之者、開發可被仰付候、夫に付右地所私領村附

之地先に而、只今迄開發可致筋に而も、此度新田御吟味に付、いまだ開發不仕有之候場所之分は、山野又は芝地等、或は海邊の出洲内川の類、新田畑に可成地所は、公儀より開發可被仰付候、乍然私領一圓之内に可開新田は、公儀より御構無之候、爲心得此旨相通じ候、

右之通可被相觸候、以上、

寅九月

〔會計秘錄 二〕御代官申立致開發候新田は十分一御代官江被下候、外願人申立致開發候新田も、十分一御代官に被下可然哉、存寄可申上旨承知仕候、外願人新田之由申出候ても、御代官係り不申候爲には可然も御座候へ共、願人共申出、開發いたし候新田迄、悉く御代官へ被下候はゞ、大分之義に可有御座候、其上自分見立同旁骨折候ても、十分一被下、外願人申立、自分に少も無世話候ても、十分一被下候はゞ、自分見立精出し薄く可有御座哉と奉存候、新田致成就、取立納等仕候儀は、其代御口米被下候間、支配所增地被仰付同意御座候、願人申出開發候新田は、御代官へ十分一不被下候而可然奉存候、以上、

十一月（享保八年）

新田開發爲仕候御代官は、御取箇之內十分一被下候義奉伺候處、其身一代十分一可被下旨、先達て被仰渡候、就夫小宮山杢之進支配小倉佐倉新田場之內、當卯年ゟ少々御物成相納候間、此納候分之十分一、先當年ゟ可被下筋奉存候、總て御代官見立相伺開立候新田之分は、右之通御取箇付候其年より、多少によらず、十分一可被下義と奉存候、此外請負人に申付候て、開發爲仕候新田は、御物成不殘上納仕、其所之御代官へ十分一は、被下間敷義に御座候、依て申上候、以上、

卯十一月（享保八年）

表書之新田十分一之事、御代官見立を以開發候新田は、自今以後、其年々御取ヶ之內十分一づゝ、

毎年可被下候、其方見立候新田、當卯年ゟ御取ヶ付之分、米永之内十分一請取候御勘定、拂方へ可被相立候、總て新田見立候御代官、其身一代は御役替雖有之、右十分一可被下候、勿論十分一之外、御口米は御代官所本田並に可被受取候、以上、

卯十一月　　　　九八

小宮山杢之進殿

〔寶暦集成絲綸錄二十二〕寶暦七丑年四月

御勘定奉行　江
御勘定吟味役

一新田開發之儀に付、享保年中被仰出候、私領一圓之儀万石以上以下共、一給之地内に籠り候場所は、公儀より新開は不被仰付候事、

但一村一領に無之分郷に而も、一領に而取廻候内に有之地所同前之事、

一他給之地先少に而も交り候分は、一圓に無之に付、公儀より新開被仰付候事、

但一國内に而無之、國境に而他國之地先交り候而も同前之事、

一海邊川通出洲寄洲等、右同前之事、

右之通、唯今迄取扱來候得共、向後共彌相違無之樣相心得、取扱可被申候、

四月

〔牧民金鑑九〕寶暦九卯年正月十九日　一色安藝守申渡

一新田願吟味之儀、以來は二三ヶ年にて相濟候樣仕候樣、評議仕可申上旨被仰聞候、以來は三年過候はゞ、願人呼出、吟味延引に成候譯爲申聞、願可相止候はゞ、願書下げ延引仕候而も、相願候はゞ引續吟味可仕旨、寶暦三酉年二月八日、相摸守殿江伺候處伺之通可仕旨被仰渡候事、

〔牧民金鑑九〕明和九辰年四月申渡書付 川井越前守申渡

都而田畑新開之義、願人有之節、吟味之上、村受相願候得ば、村受にも申附候得共、左候ては願人共無益之骨折に相成、願候詮も無之事故、自然と外々新開相願候ものも見合候樣相成行哉、畢竟開發可相成場所は、其村々ゟも早速申立、吟味可受處、願人有之、吟味に相成候上にて、村請相願候は、其村百姓共等閑之義に候、依之向後願人有之候以後、村受に相願候共、其仕法同樣之義候はゞ、願人江申付、村受之義不申付候間、被得其意、新開等可相成場所は不捨置、其村々ゟ願出候樣可被申渡候、

〔憲法部類一〕御林伐拂跡地新開之義、相願候もの有之、或は御林茂り候場所は、猪鹿籠田畑諸作喰荒難義いたし候旨にて、伐拂新開之義被相伺候も有之候、勿論各心付被相伺候分は、不用之御林にて、新開之義被致吟味候には可有之候得共、遠國邊鄙の國々は格別、近國御林之分、百姓町人共引請開發相願候內には、開發に事寄、內實は立木拂代銀を見込、相用候類も有之趣に相聞候、依之江戶表ゟ廿里內は不及申、廿里外にても、御林伐拂新開之義は相願候はゞ、得と吟味之上、不用之御林は格別、一通りの義は、先づ不及沙汰段申渡、其譯御勘定所江可被相伺候、依之是迄追々被差出候御林跡地新開之分、相違候間、尙又再吟味仕候よし相伺候、且又遠國邊鄙之場所にて、御林被立置候ても、御用木にも不相成、村內御普請御遣方にも難成分は、格別之事に候、遠國御林之內、猪鹿等籠り、本田畑差障りに相成候段申上候類は、新開之不及沙汰候、枝葉等伐透御拂之積を以、吟味いたし被相伺候樣可被致候、

安永三午十一月

〔天明集成絲綸錄三十五〕安永四未年十一月

御勘定奉行江

同吟味役

諸國御料所新田畑開發并荒地起返等の儀、是迄者川井越前守、松本十郎兵衛懸りに付、取扱候處、以來は廉立候大町歩の新開、并荒地起返等之儀に付、存寄度有之、被申立候はゝ、其場所取扱の懸り被仰付候儀も可有之候、其外は都而前々之通、定式に相心得可被取計候、

十一月〇中略

安永六酉年九月

國々において新田畑開發之儀、一領一圓之内に籠り有之候場所者、公儀ゟ新開不被仰付、万石以下知行所之分も同斷之事候、

但一村一給に無之分郷にても、一給にて差配し候内に有之候地所同前之事、

且村々之地先は不及申、山野之芝地原地并秣場海川之附洲寄洲、其外右類之場所、御料は勿論、他領之地先少にても、入受有之候分は、私領にて開發不相成、公儀ゟ新田被仰付候、尤新田畑之儀に付而者、享保七寅年被仰出も有之候得共、猶又右之趣、以來違失無之樣可被相心得候、

九月

右之趣可被相觸候、

〔牧民金鑑 九〕安永七戌年七月

一村々地先新田御高入、初年取米之儘にて、增方無之類致吟味候事、

一右同斷石盛低場所、免三ッ以下之分致吟味候事、

一右同斷石盛高き場所にても、反取低分致吟味候事、

一荒地起返之儀田畑仕譯いたし、書付差出候事、

一右同斷前之起返之場所免直致吟味候事

一荒地之外、年々一作引に相成引付を以荒地同前取計候場所は、手入爲致立返候樣、致吟味候事、

一見取場反高場之内、追々地劘候分は、御高入之積無油斷相改、尤川附不定之場所は、可成丈に手入爲致、御取箇附之儀出來毛に隨ひ致吟味候事、

一新田撿地鍬下年餘地起返小物成類、其外共年季内も、撿見廻村之節、村方手入之趣糺候事、

一本田畑見取反高場等之内、不定地又は地味不宜場所直し方、致吟味候事、

一川除御普請所之内、是迄仕來に而仕立候所之内、摸樣替等致候はゞ、保方宜川欠損地等も出來不申、村方勝手にも可相成場所は、得與相糺可申事、

右拾ヶ條之趣、可被得其意候、尤七ヶ條之儀、去ル午年相達、此度三ヶ條相增、尙又申達候間、以來撿見廻村之節、委敷相糺、ヶ條限吟味之趣、年々可申聞候、

〔天保集成絲綸錄九十八〕寛政十二申年三月

御勘定奉行江

於國々新田畑之儀に付而は、享保幷安永年中被仰出候趣も有之候處、諸國川筋之儀、連々押埋水行惡敷相成候間、自今以後、諸國共御料私領に不限、沼川通り之附寄洲を新開に取立候儀は不及申、葭眞菰等植出し候儀堅仕間敷、追々生立候場所苅拂、此上附洲に不相成樣に可心掛候、

但私領之内、古田畑川欠等に相成居候分、前後村方其節差障も無之、起返に可取懸場所も有之候はゞ、御勘定所江問合、得差圖可申候、難相分儀も有之節は、見分のもの差遣に而可有之候、且亦一統水源より海口迄、一領分に籠り候川筋附洲之儀も、本文之趣に准じ可相心得候、

右之趣、可被相觸候、

〔入會新田開發法圖式〕文化七午年八月十八日、松平伊豆守殿、石尾彥四郎を以、御尋有之候者、御料私領入會海面新開に付、私領一圓の振合、私領に而可相成振合等心得方、繪圖に而可申上旨、岸彥

十郎江申聞候趣、新田方に而取調可申段、同人申聞候に付、右繪圖取調之上、柳生主膳正、小笠原伊勢守、一同評議之上、存寄茂無之趣被申聞候、同九月四日、石尾彥四郎を以、伊豆守殿江上ゲ候段、彥十郎申聞候、

一領一給の地先に出來候附洲に而も、書面之通〇圖略見通し候場所の内に、御料又者他領の地先出候所者、一領一圓の筋に無之候間、私領に而開發難相成、

但寄洲茂同斷

國郡境を隔、一領一給の地先に出來候附洲に而も、書面の通〇圖略見通し候場所之内に、御料又は他領の地先出候所は、一領一圓の筋に無之候間、私領に而開發難相成、

但寄洲茂同斷

一領一給の入江内に出來候洲に而茂、書面之通〇圖略右附洲入江を越、左右之御料私地先ゟ見通し候樣引續有之候得者、一圓之筋に無之候間、私領に而開發難相成、

入江の外左右に御料他領の地先出候ても、書面の通〇圖略一領一給の入江内に限り出來候附洲は、地元の私領に而開發可相成、

但寄洲茂同斷

御料又は他領ゟ見通し候場所に而も、一圓の私領内に而、繪圖面の通〇圖略山林等に而隔り候得ば、見通し可申にも無之、私領に而開發可相成、

私領入江内追々押埋葭生に相成候場所、繪圖面の通〇圖略御料又は他領ゟ見通し候而も、取廻し候島地或は出先等も有之、隔居候得ば、敢而見通しと申に而も無之、私領に而開發可相成、

〔代官觸留〕一國々におゐて新田畑開發之儀、一領一圓之内、又籠り有之候場所は、公儀ゟ新開不被仰付、萬石以下知行之義も同斷之事に候、〇中略

右之通、安永六酉年相觸置候處、其後年暦も相立候に付、猶又相觸候間、彌以已來違失無之樣可被致候、

亥十一月（天保十年）

右之通可被相觸候

右之通御書付出候間、寫遣之候、可被得其意候、以上、

十一月廿五日

遠 右衛門尉

源 遠江守

明 飛驒守

内 隼人正

〔例書 四〕一除地有之處、山師共見立、新田開發願候事有之候、其場所撿地帳外に載り候除地に候者、新田願書不取上、

〔例書 六〕一新田開發願場處地先村々、障有之開發差障に付、新田願人强而相願候共無取上、

但新田開發場根村差障候は、何故障之趣可糺事、

〔地方凡例錄 三〕一荒地並起返之事

荒地之儀は、右に如示定免村なれば、小前持高十分一以下之荒地は、年季內は引に不相立、百姓內損也、切替之節迄不起返は、其節相改引ヶに相立、十分一以上之荒地は、訴出次第相改、年季內たり共、引ヶに相立於撿見取村々は、十分一內外に不拘於撿見序反別相改、其年より引ヶに成荒地有之段訴出ば、小前帳爲差出、場所致建札、帳面に引合せ相改べし、右改方は、水帳か名前帳突合、一筆限小前帳字上中下之位付、持主名前印形爲致、尤一筆不殘荒地に不相成、縱ば壹反步之內三畝四畝步川欠か山崩等に成り、村方にて畝步改、小前帳肩書に元反別壹反步之內三畝步

山崩とか押。堀。とか相記、總寄仕立、上田何程、此分米何程、此取米何程と、田畑其位限、夫々に認差出させ小前帳之通、其坪々に、木か竹に札を當建てさせ、反別竿を入相改、縦ば村方ゟ三畝歩と書出たる畝歩改、二畝歩有之は、野帳改貳畝歩と書記す、川欠等向に境無之、欠込反別難改方は、殘地に竿入相改、以荒地殘地共反別改の儀、其村の寄餘歩不相知しては難致候に付、古來撿地請たる砌、切廣げ又は畔側等無之撿地之儀、少も形之不替田貳三枚、試に竿入相改、餘歩之目樣に致し、荒地改候節、其通之餘歩を附、反別勘定致べし、村方の古撿か新撿か相糺、古撿の村ならば、六尺三寸竿新撿は六尺壹歩竿可相用事なり、

一起返場所改方も、右之通にて、最初荒地改引ヶに相改たる節之小前帳と、翌年にても翌々年にても、起返りたる時は、小前帳突合、地所引合可相糺、尤起返之儀、其年ゟ本免には難致、作物之樣子幷起返手間等を考、地所により五ッの本免ならば、三ッにも貳箇にても免下可致、又は荒地起返等に成場所は、五分七分にも可致、一兩年も相立、地所之樣子致再改、本免に直べし、荒地改之節、年季起返等相願候はゞ、吟味之上、年季にも申付る、其節泥砂入之厚薄、地所を堀せ寸尺を當て、又砂石之取除場所遠近、人夫手間相考、場所に應、三年とか五年とか、鍬下差免す事もあり、

一右改方は本法なれ共、荒地起返共、撿地或は論所地改等と違ひ、當分之事に付、右體巨細に地押同然に改ては、撿見序抔之改には不相成、改方は悉作略有儀なり、小前帳建札等紛敷儀無之樣、嚴敷申付、場所引合致見分、小前帳反別と地所之廣狹目積にて、縱ば三畝歩之荒地と小前帳に有之處致見分、貳畝歩とも見受たらば、村役人と押合改、何畝歩と野帳に記、又は起返場も右同樣貳畝歩之起返と書出たる處、三畝歩も可有之と相見候得ば、是又押合畝歩相極、然共不埒之仕方致ス村方も有之、利害等及難澀儀も有之は、縱手間取共本法に竿入、前書之通可相改事、

開墾法

〔農業全書一〕耕作

菅茅などの生たるやはらかなる所を、初て新にひらくは、先牛馬をゆるして踏せ、草の根をうかばせ、七月耕せば、草死し草の根腐り、牛のちから不入して、其しるし速かなり、〇中略 又海濱潮の入所干潟などを開き、田地となすには、其所相應よりも、後年不慮に高汐大風などのあらんことをよくはかりて、丈夫に土手をつき、其土手と田との間にも又相應に小土手をつき、其内にも小溝を堀、溝と田地との間にも、猶細き土手をつき、其内を田地となすべし此みぞなければ、外の潮氣田にもれ通ずるゆへ、稻たちまち痛もの也、此溝を甜水溝と云なり、此水久しくたまりて、ねれたるゆへ、田に引ては田の糞ともなるもの也、さて此田に先始は稻をば作らずして水稗をうへ、其地少潮の氣ぬけたる時、恰好より高く畦作りし、豌豆又は所により木綿を作り、よく潮の氣をぬかして後、稻を作るべし、しからざれば多くの人力を盡しても潮にいたみ實らず、但大河の邊りなどの潮氣早くぬくる地は、開となれる次の年より稻を作りて難なきもあるべし、凡此田にて稻を收る事、常の田にくらぶれば、一倍も有といへり、潮の氣は陽氣のある物なれば、實り多きなるべし、 又山原にかぎらず、新地を始てうちひらく事は、春は火をはなちてやき、其跡をうち、おこし田畠となすべし、春は地の氣うるほひて、草のめだち出んとする時なるゆへ、草木つはりて根も脆く柔かになる物なり、其時ひらき打こなす事、秋冬にくらぶれば、半分の力も入らず、殊に春の草木め立んとする時は、陽氣發生の物なれば、早く腐りて其地よく肥る理也、 又夏草しげりたるをうち返し、青草をうちおほひたるは、其草則糞と成て、濃糞を入たると同じ心にて、土よく肥るものなり、されども此時に成ては、ひげ根多くさかへはびこるゆへ、つよき牛ならでは、すきかきなりがたく、人の力も費るものなり、春の柔らかなるにはしかず、又秋は草木しげりさかへたるに、其まゝ火をはなつべからず、草を刈ほし置て、よく干たる時、火をはなち燒てあらう

ちらし、蕎麥からしを蒔、春に至りてくはしくこなして開となすべし、草木の根くさり土やはらぎて、人手間入ざるものなり、そばは根の毒氣〈毒とは灰木也〉つよき物なるゆへ、木かやの根までもよくくさる事也、からしは又冬中雪霜にも痛まずさかへて、跡もやせざるゆへ、山野の燒うちに蒔ても、利分他の物の及ざる所なり、又芝原其外沙地など、やはらかなる草むら、石もなき所ならば、耙のかねにはがねをやき付て、強き牛にてかくべし、しかれば草の根きれて、人力をたすくるものなり、

〔地方要集錄〕一新田之儀、田方之新田はたとへ地所惡敷候ても、手入れこやしの仕方年を經候て作なれ候得ば、地面も能なり候、畑方計之新田は、惡地之所の廣場にては、上土風吹拂、小麥も作候事成兼候故、可仕樣無之、松苗を植、又は萩桃木等植候て、少計の年貢納候儀に候故、百姓之ために不能成候、畑方は人手間多く入、こやしも多く入、人馬多く掛り候て、百姓之仕當に合かね候事故、畑計之新田は益に立不申候、就中關東方にては、野原多く候故、前々ゟ畑計之新田取立候儀不申付義に候得ども、近年は畑新田も大分出來候へ共、用立不申候、

〔培養秘錄　一〕第七章培養ノ發端ヲ論ズ

燒化法ハ、山澤丘陵其他荒蕪タル野原等ヲ新規ニ墾開スル法ナリ、故ニ先其開發セント欲スル場處ハ、秋冬ノ中、其地ノ柴茅篠竹荊叢ノ類ヲ悉ク芟夷シ、翌年ノ早春迄、能乾燥シ置テ、正月晴天ノ續キタルトキニ、火ヲ放テ此ヲ燒捨ニシ、四五日過テ、其燒跡ヲ犂且耕シ、最初ハ蕎麥粟黍稷等ヲ蒔ニ宜シ、近來三作熟スル蕎麥アリテ、春分頃ニ種子ヲ下セバ、五月ノ初ニ熟シ、乃此ヲ蒔付レバ七月中旬ニ熟ス、卽復蒔付ルトキハ九月下旬ニ熟ス、三作ノ利其潤少ナカラズ、其後ハ大小麥ヲ蒔モ、或ハ豌豆蠶豆其他芸薹芥子等ヲ蒔モ宜シ、新畑モ三年ヲ經ルトキハ、卽熟畑ナリ、若又用水灌漑ノ便リアラバ、溝洫ヲ通ジ、或ハ兩毛作ノ水田トナスハ、殊更ニ宜シ、水利ヲ通ズルノ法ハ、

堤防溝洫志ニ詳カナリ、

〔内洋經緯記〕予〔○佐藤信淵〕ガ祖父ナル不昧軒信景翁ハ諸事ヲ工夫スルニ絶倫ノ奇技ヲ生ズル人ナリ、四海ヲ遊歴シテ足跡殆ト至ラザル所ナシ、殊更關東諸州ヲバ、山海水陸ノ形勢、及ビ地理ノ厚薄ヨリ、土性ノ好惡、氣候ノ寒暖ニ至ル迄ヲ、精シク熟覽シ、寶永元年ニ、此内洋ノ周圍ヲ巡覽シテ、潮汐盈虚ノ增減ヲ測量セリ、其筆記ニ曰、抑此内洋ノ周圍盈縮スルノ潮水ハ、往々南ニ退キテ、今ヨリ一千七百年ヲ經タランニハ、相州ノ猿島ヨリ以北ハ悉ク乾燥シテ陸地ト爲リ、唯ニ二三條ノ大河ヲ遺サンノミトアリ、予此言ヲ熟按スルニ、抑寶永年間ノ乾潟ハ三十町程ノ洲ナリシ由ナリ、然シテ今文政七甲申年ニ至テ、既ニ復一百二十餘年ヲ經歴シテ、此ヲ徵スルニ、乾潟ノ地凡一百餘町ニ及ベリ、玆ニ於テ初テ祖父ガ遺書ノ偶言ナラザルヲ驚歎シ、下總國ノ内洋ニ濱スル船橋ノ驛ニ卜居シテ、數海濱ヲ空測シ、或ハ船ヲ浮ベテ東ハ馬加(マクハリ)、登戸、濱野等ノ村々ヲ始メトシ、南ハ上總ナル五井、岩崎、姉ケ崎、木更津、富津等、西ハ武州ノ羽根田邊ヨリ、本牧、杉田、野島等ノ村々ヲ經テ、相州ノ湊浦、横須賀等ニ至ルマデ、或ハ上陸シテ海濱ヲ巡覽シ、故老ニ遇テハ潮水乾滿ノ消息ヲ周ク爰ニ咨謀ルニ、都テ内洋ノ潮汐ハ、年々次第ニ減少シ、船舶ノ出入自由ナラザル事、先年ニ一倍スルノ由ヲ述ルコトハ、何レノ海濱ニ至リテ、コレヲ聞トイヘドモ、異ナルモノアルコトナシ、予此ニ因テ益々祖父ガ言ノ驗アルヲ實測シ、退ヒテ又關東古代ノ地形ヲ推考スルニ、江戸谷中ナル日暮里ノ山上ニ太田道灌ガ船繋松アリ、又下谷及ビ神田邊ノ土中ニハ古貝頗ル多ク、其他三河島、根岸、坂本、金杉、三之輪、小塚原、今戸、橋場等ノ浦手ナル草原、或ハ水田ノ地下ヲ穿チテ、朽壞セル螺殼ヲ出ス事頗ル多シ、故ニ此邊ノ農家ハ耕作ノ餘暇ニ胡粉ヲ製シテ販グル者數多アリトイヒ、或ハ新ニ井ヲ堀リテ、往々古代ノ漁獵具ヲ得ルコト多シトイフ、抑太田持資入道道灌ハ、上杉家ノ陪臣ニシテ、乃チ足利義尚將軍時代ノ人ナリ、其領内湯島ノ地ニ天神ノ社ヲ造

營セラレシハ、文明十年ノ事ニシテ、其後八年ヲ經テ文明十八年ニ卒セリ、是等ニ就テ熟按スルニ、文明年中ヨリシテ内洋ノ南ニ退ク事、殆ド二里ニ及ベリ、且又下總ナル行德ノ堀江村ノ出洲ヨリ、東ハ濱野村田ニ至リ、南上總ナル五井、岩崎新田ヨリ富津ノ出洲ニ至ル迄ノ際ハ、潮汐漸々ニ退キ、海水次第ニ埋リテ、乾潟ノ砂磧ト爲リタル場所殊更ニ多シ、土俗ノ方言ニ乾潟三十町ト云ルハ、寶永年間ノ記錄ニ符合ナセル俗語ニシテ、其時代ヨリ一百有餘年ノ今ニイタリ、予ガ親睦ナル漁人ニ命ジテ、其出獵ノ往復ニ精ク、潮水ノ乾滿及ビ其潮ノ淺深等ヲ探索セシメタルニ、既ニ正シク百有餘町ノ際ハ、悉ク皆乾潟タラントセリ、故ニ潮水大ニ滿ルノ時トイヘドモ、淺キ處ハ七八寸、深キモ三尺ニ過タルハ最稀ナリ、實ニコレ予ガ家ニ相傳セル開拓ノ良法ヲ行ヒ、漸將ニ此ヲ埋テ陸地ト爲シ、以テ皆新田ヲ開發スベキノ機會至ルトイフベキ乎

今夫此開作ヲ發起スルニハ、宜ク先ヅ大洋ヨリ推來ル荒浪激波ヲ軟和シテ、内洋ニ打入ルノ水勢ヲ斷ツノ良法ヲ設ケ、而テ一二ノ年序ヲ經ル時ハ、砂石ノ類自ラ來リ集テ、其處ヨリ内ハ皆乾潟トナスベシ、乃チ是予ガ家傳來ノ奇術ニシテ、勢子石是也、且石堤ヲ築キ、（是モ又予ガ家ノ秘法ヲ以テ、築立ル事ニシテ、普通ノ土手ニハアラズ、）以テ此勢子石ナル者ノ裏面ヲ埋塞ギテ、其内ノ乾潟ヲバ先ヅ鹽瀨（シホタレ）場ト爲スベシ、若既ニ鹽濱ト爲ルニ及ンデハ、漸次ニ又此ヲ埋テ新田ヲ興スノ基礎ヲ成就セシムベシ、蓋右ノ勢子石ノ法タル、一度此ヲ設テ、石ノ堤ニ打寄ル水勢ヲ斷絶スルニ於テハ、假令何程ナル暴浪起リ來ルトイヘドモ、絶テ其石堤ヲ崩スコト能ハズ、信ニ無比ノ法術也、昔シ長州侯其領國周防ナル三田尻ノ裏海ヲ埋メテ、巨大ノ新田ヲ開拓セラレタリ、元來此三田尻ハ裏海ナレドモ、波當頗ル暴ク、潮水モ亦從テ深カリシ由ナレドモ、此法ヲ用ヒラレシヲ以テ、遂ニハ膏腴ナル陸地ト爲リテ、當今毛利家ノ福田タリ、況ヤ又此内洋ノ如キハ、潮水漸々南ニ退キ、自然ニ埋ルベキノ地勢ナルニ於テヲヤ、故ニ若シ此開拓ニ從事スルコトアラバ、其成功ハ意外ニ速ナラン事疑ナキ者

ナリ、

〔二宮農書〕荒地起返無利足金貸附雛形目錄

一御仕法御土臺金凡百兩ト見積リ候事

一右同斷御仕法金、無利七ケ年賦貸付積リ之事、

今般格別之以御仁惠、日光御神領村々荒地起返方仕法附見込ノ趣、委細可奉申上旨、被仰付候ニ付、荒地起返入百姓人別增、夫食種穀借財返濟窮民撫育料、無利足金貸付方、イヅレモ目當無御座候ニ付、世俗ノ諺ニ、一者万物ノ始ト、ミナ一元ノ一ニ基キ、元金一百兩ト見積リ、年賦返濟長短之儀ハ、一元ノ內陰陽アリ、一年ノ內ニ春夏秋冬アリ、一日ノ內ニ晝夜長短アリテ、春ハ田畑山林原野ニ至ル迄、万物生育シテ國家ヲ潤澤スル大德天、自然ノ長日ニ基キ、無利十ケ年賦貸付、養方三段ニ見積リ、猶陰陽六段ニ見積リ、立秋ハ百物百種、又百木百草實熟シテ、口腹ヲ養ヒ身命ヲ保ツ、大德天自然ノ短日ニ基キ、五ケ年賦貸附養方三段ニ見積リ、猶陰陽六段ニ積リ立、猶又春秋晝夜長短其中ニ基キ、七ケ年賦貸附養方三段ニ見積リ、猶陰陽六段ニ積立、都合拾八段ニ組立、年數之儀ハ、天地東西南北六合ニ基キ、年號ノ義ハ卷數多ク、前後相分リ兼候間、年代記ニ基キ、十干ノ儀ハ、水火木金土五行ノ內、每年木ノ芽立、草ノ芽立始、甲乙ニ基キ、十二支ノ儀ハ、每朝日ノ出、每年万物生育ノ始、東方卯ノ方ニ基ヅキ、乙卯年ヲ中勸ノ始トナシ、甲寅年マデ六十ケ年一周度ヲ以爲一卷、拜借人ノ儀ハ、伊呂波四十五文字幷一十百千万億兆ノ十五字ヲ加ヘ、六十字ニ基キ、假ニ名前ヲ設ケ、算數ノ目驗トナス、無利足金貸附ノ儀ハ、有欲々々ニアラズ、無欲々々ニアラズ、正ニ日月ノ國土ヲ照シ、萬物ヲ生育シ賜フ、天地自然ニ基、無利七ケ年賦貸附方、陰陽六段ニ積リ立、其內陽ノ部一ハ御土臺金百兩、年々繰返シ貸附方左ニ中勸組立申候、

一家借財返濟暮方取立仕法取行方之事

一何右衛門儀、前々不仕合打續、臨時物入等相嵩、無據金拾兩致他借、急場相凌取續罷在候恩金之儀、是非共損毛不相掛樣致返濟度、家内一同朝暮相心懸申候得共、何分返金之出道無御座、漸利拂置候得共、此儘捨置候ハヾ、右恩澤ヲ忘却致シ、詰リ一家可致退轉哉モ難計、途方ニ暮致歎息居候極難貧者、今般被仰出候御仁惠ニ基、借財金去ル何年何村誰方ヨリ年何割何分ノ利足ニテ借入、其外家株田畑山林高反別生荒明細仕分ケ、御年貢諸役高懸リ物等ハ不及申、暮方入用相除キ、作德浮米有體取調、無利七ケ年賦貸附、古借不殘爲致返濟、志願之通爲致恩澤、是マデ利足諸雜費手間隙等空敷相減ジ候費ヲ以、元金ニ振替爲致返納候ハヾ、御仕法金如元立戻、當人義ハ急度無借ニ罷成、一家相續相整ヒ、譬バ人糞馬糞酒粕醬油粕落葉下草等不淨ノ肥シヲ以、清淨ノ米穀ヲ作リ出シ、銘々相助リ居候同樣、眼前暮方立直リ、積レバ、村爲ニモ相成可申見込ニ御座候、

一家荒地起返暮方取直仕法願方之事

一荒地起返暮方取直シ仕法新ニ願出候共、不容易儀ニ付、堅ク相斷、猥ニ取扱申間敷候、夫共前々困窮難澀ニ陷リ、御仕法金致拜借、荒地起返ハ勿論、數年相嵩居候借財皆濟致シ、全暮方立直リ候者兩三人モ申合、内外ノ始末有體取調、其外自己ノ分内ヲ省キ助成致シ、歎願申立候ハヾ、志願之通報德金貸附、万一年賦返納差支之節ハ、銘々預御取立、暮方立直リ候浮金ヲ以、爲報德冥加引受可致辨納旨、治定仕願書ヲ以申立候ハヾ、任其誠意、荒地起返シ取立遣シ可申見込ニ御座候、

〔吾妻鏡九〕文治五年二月卅日壬寅、安房、上總、下總等國々、多以有荒野、而庶民不耕作之間更無公私之從、仍招居浪人、令開發之、可備乃貢之旨、被仰其所地頭等云云、

〔吾妻鏡十六〕建久十年(○正治元年)四月廿七日戊子、仰東國分地頭等、可新開水便荒野之旨、今日有其沙汰、凡稱荒不作、於乃貢減少之地者、向後不可許領掌之由同(被)定云云、廣元(○大江)奉行之、

〔吾妻鏡十八〕建永二年(○承元元年)三月廿日壬辰、武藏國荒野等、可令開發之由、可相觸地頭等之趣、被仰

武州〈○北條泰時〉云云、廣元朝臣奉行之云云、

〔吾妻鏡二十七〕寛喜二年正月廿六日、於武州〈○北條泰時〉公文書、武藏國太田庄内荒野可新開事、其沙汰在之、尾藤左近入道道然奉行之云云、

〔吾妻鏡三十三〕暦仁二年〈○延應元年〉二月十四日甲寅、武藏國小机鄕鳥山等荒野、可開發水田之由、被仰大夫尉泰綱、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年十月廿二日丙子、以武藏野可被開水田之由議定訖、就之可被懸上多摩河水之間、可爲犯土之儀歟、將又將軍家〈○藤原賴經〉御沙汰歟、可爲私計歟、賢慮猶難被一決、仍今日前武州召陰陽師泰貞晴賢等朝臣、被示合、各一同申云、堰溝耕作田畠事者、雖不及土用方角沙汰、於此事者已爲始御沙汰歟、可謂大犯土者歟、雖非將軍家御沙汰、私御方違可宜歟、若可爲國司沙汰乎云云、前武州又被仰曰、雖似沙汰耕作之後者、爲御所御計可賜人々、然者可爲御所御沙汰、北方當時王相歟、自明年又可爲大將軍方、可見定御方違御本所云云、爲武藤左衞門尉賴親奉行、相具泰貞晴賢、行向武藏國海月郡、自彼所猶爲北方、〈亥方云々〉即兩人歸參于前武州亭、申此由、以秋田城介所領同國鶴見鄕、可爲御本所之旨、泰貞等令一同之間、可有入御之由、攝津前司師員、毛利藏人大夫入道西阿、民部大夫入道行然、佐渡前司基綱、出羽前司行義、秋田城介義景、太宰少貳爲祐、加賀民部大夫康持等、群議治定之後、相副行義、義景、於泰貞晴賢被申御所、召入御前、被聞食其子細、仰曰、冬至以後、鶴見相當艮方、可爲王相方、始御方違于塞方事者、有其憚、冬至以前、先可有渡御、可被用何日哉云云、泰貞等申云、來月四日可宜、其後可有立春御方違也云云、　十一月四日丁亥、今朝將軍家爲武藏野開發御方違、渡御于秋田城介義景武藏國鶴見別庄、

〔駒井日記〕文祿二年十二月十四日

一尾州之御帳面御條數、彼是民部法印を以、重て被仰出、

御諚覺○中略

一算置共は、荒地之在所江こさせ、荒地をおこし、其物成其年一年之分を、一圓に被下、翌年よりは如御置目、年貢可致執沙汰事、

三年三月十日

一京都其外唱聞尾州荒地おこしに被遣候樣にと、民法申上、上意には陰陽師書付上次第に、尾州へ可被遣由、民法へ申遣、

三月十一日　一民法存にて、尾州江罷下陰陽之書立、從民法來寫、

一百九人京ゟ　一拾人堺南北ゟ　一八人大坂ゟ　合百貳拾七人

三月十二日　三位法印樣江爲御諚申遣書狀案文

一爲御諚致言上候、仍尾州荒地分に被遣候所之陰陽師之事、時分柄御座候、所々ゟ罷下候陰陽師共に、尾州荒地被成御覽、被成御割符、陰陽師在々へ被遣候、得と上意候、然間荒地之所々大破小破之所被聞召届、其內過半者清須近之荒地、又者太閤樣御成之刻、切々被成御覽候所へ、專に陰陽師被遣候へと被仰候、左樣之領能樣可被成御計候間、京都堺大坂、右三ヶ所之分者、民部法印江被成御尋候處、如此由以書付申上候、

一百九人京之陰陽師　一十人堺南北より　一八人大坂より　合百二十七人

右之通はや其地江被下、御請取被成由被聞召候、左樣に御座候哉、何都所々國々より其地江罷下被成、御請取候陰陽師、速荒地江御割符可被成旨上意候、今度堺昔請總奉行として、德永法印被下被仰付候、左候得者、荒地分之所々、德永法印可爲案內者候間、則德永法印被爲遂御相談、可被成御割符旨被仰出候、德永方江も、右之趣、三位法印樣へ可得御諚旨、爲上意申遣候、被成其御心得、可被仰付旨、猶以時分柄之儀候間、早速陰陽師可被成御有付旨、宜預御披露候、恐々、

三月十二日　駒井中務少輔重勝

三輪八蔵殿

勝田六蔵殿

一為御掟尾州江下陰陽之儀に付而、徳永法印へ遣書中、

一為御掟令啓達候、仍所々陰陽師尾州江被遣、荒地分耕作之儀可被仰付旨、舊冬ゟ太閤様被仰出候、然處に所々陰陽共清須江罷越候得共、荒地之割符於于今不被仰出段迷惑にて、陰陽共民法迄訴訟申に付而、急度被仰付、御尤之由民法被申上候、然者尾州之内荒地之事、今度堤御奉行衆貴老可為御案内之間、所々荒地之體被御覧、計陰陽共割符御沙汰候而、在々江可被遣之間上意候、

一陰陽之事、所々國々ゟ清須江罷下候分、三位法印様へ御尋被仰上、随其御割符、尤之由被仰出候事、

一荒地之割符井陰陽之割合、何も凡御仕立にて、其上三位法印様にも被得御掟候へと被仰出候、法印様江も貴老江委細被仰出候、其上様子貴老へ可被成御相談之旨、為御掟申上候、

一京堺大坂陰陽之分書付、民法被上候間、則別紙に令進入候事、

一陰陽荒地江割符候事、上様御掟に者、総國へろく〳〵にとは思召候得共、先清須近邊又は太閤様其國御成之刻、切々被成御覧候所之分、專に御割符候而、荒地おこしたる體、自然者太閤様被成御覧候様に御計候而可有御割符旨被仰出候、法印様被得御掟候様に可有御沙汰旨候事、

一右之儀、早時分柄候間、重而何かと此方へ被得御掟候半事、無用之由被仰出候、其通可申遣旨候事、

一御割符之體、井所々ゟ罷下候陰陽共之數、御割符之以後者、御書付御上可被成候、恐惶謹言、

猶以指急御割符被成、御沙汰御尤候、以上、

三月十二日　　　　　　　　　　　　　　　　　　駒井中務

法式法橡人々御中〇中略

三月廿四日

一所々陰陽師尾州荒地江割符之帳面、三位法印樣德法印ゟ來、

一百九人京陰陽、但此内壹人淸須にて死去、　一拾人堺南北　一六人大坂　一六人奈良　巳上

百三拾壹人

右陰陽共を割符

一淸須より萩原迄道通　一淸須より津島迄道通　一淸須より宮迄道通　一宮より津島迄道通

〔八丈島年代記〕一享保四年七月、玉置傳右衛門差配し、三根村赤切下泉邊新田ニ開發ス、

〔新編武藏風土記稿一百二十八多摩郡〕武藏野新田　武藏野新田ハ、多摩入間新座高麗ノ四郡ニ跨リテ、昔ハ茫々タル曠野ノ地ナリシニ、享保年間新墾ノ事ヲ命ゼラレシカバ、遠近トナクコレヲ望メル農民等、公ニ願ヒテ墾闢ヲ促セシニ、日ツミ年ヲ累ネ、ソノ功遂ニ成テ、新田八十二村ヲ開ケリ、ソノ區別ハ、多摩郡ニ屬スルモノ四十村、新座郡ニ屬スルモノ四村、入間郡ニ屬スルモノ十九村、高麗郡ニ屬スルモノ十九村ナリ、撿地ハ元文元年大岡越前守忠相奉リテ、時ノ御代官高坂安左衛門政形コレヲ糺シテ貢稅ヲ定ム、水田少ク、陸田多シ、土性ハ粗薄ノ野土ニシテ、糞培ノ力ヲ假ラザレバ、五穀生殖セズ、因テソノ費用ヲ資ンタメ、元文比ヨリシテ、八十二村ノ毎戸ヨリ稗穀五升ヅヽヲ出サシメ、年々コレヲ郷藏ニ積ヲキ、時モテ賣代ナシテ、價金ハ官所ヘ納メサセ、息ヲ加ヘ積金トセラレシカバ、寛保三ヨリ寛延二年ニ至ルノ間、御代官川崎平右衛門定孝ガ計ラヒニテ七百兩ノ積金トナリシニ、伊奈半左衛門忠辰支配ニ替リテモ其事ヲツギテ、安永ノ初、伊奈半

左衛門忠敞ガ時ニ至リテハ、其金四千兩ニ及ベリト、是年數四十餘年ノ間ノコトヽゾ、夫ヨリタチ文化十一年小野田三郎右衛門信利ガ支配ノ時ハ、五千兩餘ニツメリト云、此息年々新田八十二村ヘ扶助金トシテ家別ニ賜ハルコトニナレリ、カヽル御仁惠ノ至リモ、實ニ川崎平右衛門、伊奈半左衛門等ガ、丹誠ニヨレル所ナレバ、其恩澤ヲ謝シ、且ハ冥福ヲ仰グノ志モテ、文化年中、八十二村ノ農民等コゾツテ、常夜ノ石燈籠ヲ榎木戸新田ニ建タリ、

〔刑錢須知四〕武藏野新田開發之由緒之覺

一武藏野新田之儀、御料私領入會秣場に候處、享保八卯年、有德院樣〇徳川吉宗思召を以、開發被仰付、大岡越前守支配岩手藤左衛門荻原源八郎吟味之上、村々江引渡相濟、芝地壹反に付役米三升宛、鍬下三ヶ年上納被仰付、農具代家作料等被下、所々より出百姓家數千軒餘出來候處、同十七戌年に至、取續兼多分離散いたし候に付、上坂安右衛門御代官所に被仰付、同人伺之上、爲開發養金、千五百兩貸付被仰付、利金之分年々被下置、其上井戸堀呑水田場用水堀等、御入用を以被仰付、同十九寅年元文元辰年に至り、本田地續南武藏野壹万貳千六百石餘、御高に入被仰付、同四丑年、外百姓及困窮、夫食御貸付之上、御救金八百五拾兩被下置候得共、取續兼、猶又離散之者有之、相續成兼候に付、右取計方、川崎平右衛門被仰付、新規掛下役貳人御給金拾兩貳人扶持、筆墨紙駄賃爲入用、米拾五石、金四拾兩ツヽ、被下之、村方江出張被仰付、兩人にて手足り不申節者、加勢手代差出、取計候積り、支配御代官は上坂安左衛門江被仰付置候、然る處、先達之御貸附金子五百兩之內、元金貳百兩返納殘井猶又金四千三拾兩、同人伺之上貸附被仰付、貸附金高都合五千三百六十兩、此壹ヶ年利金五百三拾六兩ツヽ、年々出百姓共作物養料被下之、尤年々出來穀物少々ツヽ取集、夫食種貸等に相渡、殘石者凶年之爲手當貯置候筈、勿論豐作之節、餘計に取集貯置候得共、永く差置候而者、受石に相成、減石等も相立候間、見合相拂、利金年々壹割に貸附、右利金を以普請入用相拂、殘金

有之候節は、元金江差加へ、利倍いたし、寛延二巳年迄、金七百六拾兩餘、貯石五百九拾石餘に相成、同年伊奈半左衛門支配に被仰付、川崎安左衛門より請取候節、取計方伺之上、下役相止め、右御用に付差出候家來諸入用は、御入用に相立候積り伺相濟、且前書之通、御手當有之候に付、作物仕附出來いたし候間、追々本田並にも相成候に隨ひ、養料金御取立可被仰付候、左候はゞ可及難儀候間、雜穀溜代利金を以、自普請仕候儀相止、自分稼にいたし、右利金共致貸附利倍候はゞ、往々出百姓相續之足金にも可相成段、同人存寄之趣、村々江申渡候處、難有存候旨申答候に付、翌午年より利倍金貸渡、年々出來穀取集候儀者、前々之通取計候、開發養料金返納被仰付、寅卯辰三ヶ年川崎平右衛門取集、寛延二巳、同三年兩年は、半左衛門方にて取立相納、上坂安左衛門伺之上、貸附被仰付候金四千六拾兩餘は、前々之通被仰付置、年々利金四百六兩ヅヽ、爲養料村々江被下候之處、本村同樣に相成候間、元利金寶暦三酉より戌迄拾四ヶ年之割合、壹ヶ年四百九拾三兩之内、貳百九拾兩ヅヽは、年々致上納、貳百三兩ヅヽは、村方江相渡、養料も渡限に相成候、取集穀物之儀は、明和四亥迄拂代貸附、利金四百貳拾兩餘宛之養料に爲代り、年々村方へ相渡候之積り、其節伺相濟取計候内、其後安永七戌年迄に、猶又雜穀貳百七拾石餘取集相増、都合三百九拾石餘之内、三百九拾石餘夫食に相渡、六百石餘村方持に付、所相場を以相拂、此代金九拾六兩餘、安永七戌年より亥迄貳ヶ年に貸附致、利倍亥より貳拾壹ヶ年目、午年に至り、元貸付四千貳百貳拾三兩餘之元金江差加へ、右利金年々出百姓共へ相渡候積り伺相濟候處、其後天明四辰年までに又候雜穀六百七拾石餘取集り、天明三卯年凶作に付、翌辰年夫食に差詰り、村々相願候、伺之上取相場を以相拂、右石代金百九拾七兩餘、辰より午迄三ヶ年賦貸渡、年季中取立、同七未年より貸附之積り伺相濟、都合貸附元金四千四百貳拾壹兩餘に相成、此利金四百三拾五兩宛、年々村方江割渡候、其後元金追々相増、當時にては元金五千兩餘に相成、戌年とも利金五百拾三兩餘相渡候、右渡方之儀は、武藏野新

田八十二ヶ村、家別に割賦いたし、壹軒に付永三百拾七文宛割賦いたし候、右八十二ヶ村左之通、

多摩郡

鈴木新田　井口新田 傳三郎組　小川新田　同新田 五郎左衛門組　前澤新田　北野中新田 善右衛門組　境新田　南野中新田　上谷新田　大澤新田　野新田　關野新田　源大寺新田　榎木戸新田　關前新田　平兵衛新田　本多新田　内藤新田　戸倉新田　戀ヶ窪新田　中藤新田　芋大保新田　砂川新田　是改新田　大沼新田　柳久保新田　田無新田　梶野新田　砂川前新田　日野本郷新田　栗澤新田　殿ヶ谷新田　下小井新田　貫井新田

入間郎

栗原新田　善一屋新田　神谷新田　堀之内新田　上安松新田　下安松新田　林新田　北田新田　上新井新田 彦右衛門組　三ヶ島新田 次郎右衛門組　市場新田　風下新田　堀兼新田　小野新田　所澤新田　中北野新田　平塚新田　三ッ木新田　高倉新田　下新田　町谷新田　片柳新田　關間新田　藤金新田　大塚新田　森戸新田　勘六新田

高麗郡

築地新田　高萩新田　下高萩新田　馬引澤新田　上大谷澤新田　新堀新田　脚折新田　原宿新田　寺澤新田

新座郡

膝折新田　濱崎新田　溝口新田　田邊新田

右之村々江割賦いたし候

但養料金渡方之儀は、前々村方江手代役人差出候、則剋爲致持参、家數等相改、吟味之上、割合相渡来候處、大金持参之儀、途中井村方逗留中、番人等之費も有之、安心も不致迷惑之旨に付、家數

吟味之手代差出、吟味相濟次第村々申合、總代之者役所迄罷出、利金請取歸村之上、割渡候積り、伊奈半左衞門支配之節申渡、當時者小野田三郎右衞門支配榎木戸新田源藏と申者總代相勤罷在、貯穀物之儀は、新穀詰替減石相改、足石申付、支配手代致封印、村々江預ケ置候事、

右新田場之內、南武藏野之分は、享保十九寅年、元文元辰年に、壹萬貳千六百石餘寶暦八寅同九卯、安永五申年に、度々高三千石餘撿地有之、不殘御高に入る、北武藏野之分は、元文元辰、寶暦八寅、明和九辰三度に、千八百石餘御高に入る、高麗郡之內拾四ヶ村、此反高貳百九拾町歩餘、享保十巳年萩原源八郞割撿地無之候、

〔有德院殿御實紀附錄三〕府內の處士二人投書し、上總下總の國にあらきはりすべき荒地ありと申せしものあり、代官池田喜八郞季隆、萩原源八郞乘秀に命せられて、これをたゞされしに、はたして東金のほとりのみにても、五萬石ほどの荒地ありければ、速に新墾を命せられしとぞ、

〔利根川圖志三〕手賀沼　印旛郡に在り、東西三里南北一里許、その兩源西の方なるは、十大夫新田より出で、（小金より我孫子に行く間呼塚にてその橋を過ぐ）南は南相馬粟野なる入道池より出づ、又一源あり、南相馬金山より出で、北に落つ、（これは淺間堤より東なり）淺間堤その中を塞ぎたりしが、今は斷えて島の如く殘れり、（こはその長を稱めていへるか、もしは相馬郡淺間前新田に因れる者か、）享保十三年、高田友清といふ人、家財を損て堤を築きて、二万石餘の新田を開きしゆゑ、そこを高田堤といふ由を高田與清が松屋叢話等、何くれの著書に載せて、殊に相馬日記卷三に、

つきなせし手賀沼つゝみつゝむともいさを高田の名やはかくるゝ　源與清

といふ詠歌さへ出したれど、若はこの淺間堤ならむ、今知るべからず、されどその後も公より力出し給ひて、今は沼の畔の地大率緑疇となれり、沼の下流は發作新田の飛地を夾み、六軒新田の傍を經て、木下にて利根川に合す、

〔武江年表　四〕享保十五年庚戌十一月、足立郡見沼に新田を開かる、去る戊申年、（享保十三年）下總に手賀沼を新田に開れし頃、高田茂右衛門源友清といふ者、其摠にあづかり、其功を全せしが、今年も又命ありて、弟鈴木文平爲秀と倶に、此事を司り、多くの功を立たり、

〔刑錢須知　四〕一足立郡見沼新田之儀、往古は長四里餘、横平均拾五町餘之沼地にて、鯉鮒多分有之、萬治二年初て江戸新堀八右衛門、小田原町善太郎、小網町助右衛門、千瓢屋小左衛門願にて、魚猟運上差出、萬治年中より正德年中迄、請負仕候處、其後二鄕半領三輪口村百姓甚兵衛と申者引請、夫より享保年中鯉屋仁兵衛と申者請負被仰付、運上差出候處、享保十三年、伊澤彌惣兵衛吟味之上大間木村之内にて八町堤と申所を切落シ開發に相成候、右新田繩請反別六百九拾九町貳反五畝廿三歩有之、外六拾九町九反貳畝拾九歩は、繩心にて壹割除有之候、

〔天明集成絲綸錄　三十五〕天明六午年八月

御勘定奉行江

下總國印幡沼新開之儀、此度出水に而、新開場も押流、迚も不捗取に付、新開之儀無用にいたし、跡取〆方之儀、相調可被伺候、

八月

○按ズルニ、印幡沼疏鑿ノ事ハ、水利篇ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

〔報德記　八〕先生〇二宮金次郎日光祭田ノ荒蕪ヲ開キ、百姓安撫ノ命ヲ受ケ巡村開業ス、弘化元辰年、幕府日光祭田ノ廢蕪ヲ起シ、窮民ヲ安ンズルノ策ヲ命ジ玉フニ由リ、良法ノ條々微細ニ書記シテ是ヲ奏ス、後眞岡縣令ノ屬吏トナリ、實業ヲ以テ數ケ村ノ衰廢ヲ擧グ、言行共ニ合シ、彌良法ナルコトヲ試ミ、嘉永六丑年、先生ヲ江都ニ召シテ命ジ玉フ、其文曰日光御神領村々荒地起返難村、舊復ノ仕法取扱被仰付間、見込通御料私領手廣ニ取行可申候トノ命也、先生謹ンデ命ヲ拜シ退テ此ノ大業ヲ成就シ、上下ノ大幸ヲ開キ、萬代不朽ノ規則ヲ立、大ニ富國安民ノ大道

ヲ行ヒ、上國恩ヲ報ジ、下萬民ヲ安ゼントシ、沈默數日、彌開業ノ順序ヲ慮リ、門下ヲ招キ、教諭シテ曰、今如是命令ヲ受ルト雖モ、我老體ニシテ大業ノ成功甚難シ、二三子志ヲ勵マシ、此方法ノ基本ヲ確立シ、永行ノ道ヲ盡スベシト教示ス、〇中略五月ニ至リ、諸事悉ク辨ズルコトヲ得テ、江都ヲ發シ、野州東鄕ノ官廨ニ至リ、開業ノ順序ヲ計リ、六月下旬將ニ登山セントス、親族從者諫テ曰、疲勞未ダ除カズ、病根亦全ク去ルニ非ズ、此炎暑ヲ冒シ光山ニ登ラバ、豈再發ノ憂ナシトセンヤ、冷氣ヲ待テ至ルニ不如ト、先生不肯、遂ニ登山シ、奉行某ニ謂テ曰、廢田ヲ開キ、此民ヲ安撫スルノ命ヲ受ルヨリ以來、速ニ開業セントコトヲ欲スト雖モ、其順序ヲ考フルガ故ニ、遲々ニ及ベリ、先ヅ村々ヲ巡回シ、土地ノ肥瘠、諸民ノ貧富、人情ノ向背ヲ察シ、然後ニ愚意ヲ言上セント、將ニ發セントス、奉行某、先生ノ病後未ダ本快ナラザルコトヲ察シ、轎ヲ命ジテ是ニ乘ジ回村スベシト云、先生不肯シテ曰、某民ノ窮苦ヲ憂フルコト急ニシテ、自ラ病ヲ省ルニ暇アラズ、且邑中ノ微細ヲ洞察スルニアラザレバ、救助ノ道其宜キヲ得ベカラズ、轎シテ以テ回村セバ、難苦ノ實情廢衰ノ根元ヲ了知スルコト能ハズト、固辭シテ徒步シ大暑ヲ冒シ、一邑ヲ見分スルニ、必ズ既往ヲ考ヘ、將來ヲ察シ、邑中ノ大小事悉ク胸中ニ了然タラザレバ、他ノ邑ニ至ラズ、夫光山ノ村々山岳丘陵多クシテ平地甚稀ナリ、此邑ヨリ彼ノ村ニ至ルニ、或ハ高山ヲ超エ數里ヲ隔ルモノ多シ、栗山鄕十邑ノ如キニ至テハ、最モ深山ノ邑ニシテ、道路甚險ナリ、或ハ高山ノ頂ニ村アリ、或ハ深谷ノ邑アリ、壯強ノ者ト雖モ、頗ル嶮路ニナヤメリ、然ルニ先生年既ニ六十七歲、病後未ダ快然タラズ、食モ亦平生ニ復セズ、炎暑燃ルガ如クナルニ、此嶮路ヲ推步シ、村々ノ盛衰ヲ鑑ミ、厚ク善人ヲ賞美シ、鰥寡孤獨身ニ便リナキモノ、又ハ窮困ノモノヲ惠ミタリ、各其次第ニ由テ、或ハ金壹兩ヨリ五兩ニ至ル、又ハ農業ヲ勤メ、衰貧ニ不陷ノ村ニ至テハ、或ハ十金十五金ヲ以テ、邑中ノ民ヲ賞ス、且救ルニ孝悌ヲ以テシ、導クニ田圃ノ尊キ所以、勤業ノ德甚大ナルコトヲ以テシ、或ハ堤ヲ築キ、水田渇水

諸侯開墾

ノ憂ヲ除キ、荒地ヲ開キ、是ヲ與ヘ民ノ生養ヲ安ンズ、○中略先生炎熱ヲ冒シ、八十九ケ村周ク巡回シ、普ク土地ノ肥磽人民ノ勤惰得失ヲ察シ、光山ニ歸テ、是ヲ舊復スルノ策數十ケ條ヲ記シテ奉行某ニ呈ス、嘗テ諸侯ノ封内ヲ再復スルヤ、數十年ノ租稅ヲ平均シ、其平均度ヲ以テ分度ト定メ、興復安民ノ仁政施行ニ由テ、餘外ニ生ズル所ノ米財ヲ以テ分外ト爲シ、此ヲ以テ開墾撫恤ノ用度ニ充ツ、故ニ每歲ノ用度盡ル事ナク、仁澤ノ及ブ所窮リナシ、譬バ川源一タビ開クル時ハ、末流ノ潤澤竭リ無キガ如シ、然ルニ神領ノ租稅ニ於ルヤ、僅々タル薄稅ナリ、是山間幽谷ノ土地瘠薄ニシテ民食甚乏シ、往々餘業ヲ以生活ノ一助トナス、故ニ租稅ヲ薄クシテ、以テ此民ヲ永續セシメンコトノ恩澤ナルベシ、租稅ノ定額如此、故ニ田圃廢棄ニ歸スルト雖モ、敢テ稅額ヲ減ゼズ、是以許多ノ開田ヲ成ト雖モ、些モ租稅ヲ增ス所ナク、惟民食ヲ裕カニシ、生養ヲ安ズルノ仁術ノミ、更ニ分外トナス可キ仕法用度ノ出ル所ナシ、故ニ先生興復ノ大業ヲ開クニ當リ、從前開墾安撫ノ淨財幾千金ヲ、光山官廨貸附所ニ託シ、每歲利子ヲ以仕法ノ資本トナシ、且積年諸侯ノ封内再興ノ爲ニ數千金ヲ抛チ、其廢ヲ擧ゲ其領民ヲ安ンズ、光山良法開業ノ應返金アレバ、是モ撫育ノ用費ニ加フ、奧州中村侯報恩ノ爲、日光開墾撫恤用度金トシテ、五千五百兩ヲ年賦ニ獻ズ、官是ヲ先生ニ附與シ、以撫恤セシム、嘉永七寅年二月、幕府先生ノ長男彌太郎ニ命ズルニ、父ト同ク安民法ヲ施行ス可キ旨ヲ以テス、於是父子同心黽勉、益興國ノ良法ヲ擴張セントス、

〔東下野守益之墳記〕先公諱益之、京人、姓平、其先千葉之族、○中略濃之郡上河水大出、山岳爲之崩矣、村郭爲之失矣、道路爲之沒矣、公自奮曰、禹何人也、驅聚治内万姓、疊山石、築陂隄者里許、新鑿溝瀆由其道路、而遠挽河水於安光鄉、自註地名變原野作水田者、凡一萬六千餘步、歲貢倍前、民咸催賀、永享四歲、公年五十六、以病乞骸於朝、乃去鬚髮著方外服、自號素明、蓋不墜素暹之緒也、

〔微妙公夜話〕一越中の船見邊に今井村と申村有之候、奧村十郎左衛門殿改作奉行之時分、御郡廻

り仕候時節に付て參り候、肝煎百姓共に小松之邊にも今井村と申有ㇾ之候、同名と申候得ば、小松邊之出村にて御座候由申候故、是は遠所江之出村と申候所に、其事に御座候、微妙院様〇前田利常江戸ゟ被ㇾ爲ㇾ入候節、此所は田地に可ㇾ被ㇾ成所と御意にて十村共に御詮議候得ば、五百石出來可ㇾ仕由申上候、山本清三郎、岡田左七抔と吟味仕候所、小松江被ㇾ爲ㇾ入、今井村之百姓子供二十ゟ三十迄之者、男女夫婦被ㇾ仰付、家貳拾軒之積り、農具家財も被ㇾ下候て、家作出來被ㇾ遣候、其時分明日罷越候と申前日に、御城江呼寄、御居間之御庭へ被ㇾ召出、御覽被ㇾ成候、品川左衛門殿に、あれ〳〵御覽候得ば、一段健成者共、作も可ㇾ仕候、御領國は何方も同事ながら、御城近邊ゟ遠所江被ㇾ遣候故、不便に思召御覽被ㇾ成候旨御意候得ば、末若き者共に候得ども、一同にどつと泣出申候、夫故今に毎月十二日には、御茶湯仕、村中精進仕候由申候、外之村にて精進仕候事相尋候所に、今に堅く其通と申候間、慥成事と、奥村十郎左衛門殿はなし承候、

〔信府統記〕二十七松本領新田 寛文四甲辰年、忠職公書上ラレシ目錄ノ寫アリ、其節新田ヲバ別ニ記シ上ラル、委細下ノ如シ、〇中略

信州松本領目錄　筑摩郡之内

一高三千六百三十三石七升三合　麻績組新田

一高三千百四十三石三斗五升八合　會田組新田

一高千七百二十五石二斗八升八合　岡田組新田

一高千三百四十八石三斗一升三合　山家組新田

一高千八百七十九石五斗三合　庄内與新田

一高三千四百六十四石九斗二升一合　島立與新田

一高二千八百四十石一斗一升三合　出川與新田

一高三千三百四十二石五斗一升四合　鹽尻與新田

小以二万千三百七十七石八升三合

安曇郡

一高二千二百二十四石二斗五合　上野與新田

一高三千九百三十九石一斗五升一合　長尾與新田

一高二千四百八十三石九斗五升八合　成相與新田

一高二千二百二石三斗八升九合　穂高與新田

一高千三百二十八石九斗三升二合　松川與新田

一高三千九百九十二石七斗七合　池田與新田

一高四千五百五石八斗四合　大町與新田

小以二万六百七十七石一斗四升六合

都合四万二千五十四石二斗二升九合

是ハ松平丹波守、松平出羽守、堀田加賀守、同姓隼人正、代々連々開發御座候、並私代ニ方々見立新田申付、慶安四年卯ノ年ヨリ申ノ年迄改之申候、此内五千石得上意、同姓周防守拜領仕候、但シ諸色小物成ハ右之外ニテ御座候、村數三百二十二ケ村之内、三十六ケ村ハ新田二百八十六ケ所ハ本村ヨリ開發之新田ニテ御座候、

右之外

高百六十三石ハ、御朱印寺領十一ケ寺分、

寛文四年甲辰四月十一日　水野出羽守書判

〔治憲公御年譜附錄五〕安永三年、七手組之面々伺之上、西江俣村地開發之節、江戸表より右頭中へ

被成下御書、

以鴻書申伸候、秋暑之節愈可為平安珍重存候、然ば此度各并組中申合開發手傳給候義、家國之爲とは申ながら、身分をも忘れ、土泥に身を委ての手傳、誠に以て不淺令滿足候、尤痛入たる事には候得ども、民は國の本と有之候も、農ある故の義、衰微を再興候半事も、此事に止り候へば、不可遠慮寛に任せ相頼候、暑氣之節有油斷間敷候、彼是宜く組中へも可被相達候、不備、

七月九日　　御華押

本庄彌次郎どのへ

中條兵三郎どのへ

市川美濃守どのへ

島津左京どのへ

竹俣三五郎どのへ

〔桐外危言 二〕此頃又長州萩の人來りて物語て候、周防の國三田尻十二萬石の新開地は、長府何れの侯の御代とか云し忘れ申たり、其侯養老の後、此三田尻に隱栖させ給ひし時、宿驛羈旅の處士の言らく、此海は埋て新田と成すべしと傳語して、隱侯の聞に達し、一日召て其理を聞給ひ、頓に府侯へ仰ふせられけるは、隱居料十二萬石の處、已來半減の御賄を以て、其半をもつて三田尻開發の費に宛行はるべきとの事に而、忽ち決許し、終に福田十一萬石を開かせ給ひたる砌、新令を設け給ひ、此十二萬石の收納は、永世撫育安民の筋に積置、假令公務御軍役御家傳等の御入用あるといふとも、此積金を費す事能はざる嚴禁と爲し、唯々飢民救援の筋をはなれて是を遣ふ事、決して無之事に極め、依て此取扱之役人を撫育奉行と名付、定書を安民錄と號し、常に篋に入、首に懸けて、身を放つ事なからしめ給ふ、假令君命たりとも、撫育筋を放れ他用に遣ひしものは

私人開墾

國散なりとして、萬民ともに是を誅戮すべしとの事なり、されば世々貧福儉奢區々たりと雖も、此新田の積金少しも散耗する事なく、窮民御救ひも、先より無利息に而永年賦なれば、一度救ひて慥に身上の取直しにも至る故、冥加を思ひて追々返し納を以て、彌此蓄積手堅く、今に而は夥しき事の由、誠に長防二州の萬民、永世安堵の思ひを爲すのみならず、高徳萬世不朽に傳へて、眞に民の父母たる善政と申べし、

〔新編武藏風土記稿 二十七葛飾郡〕伊豫田村　伊豫田村ハ江戸ノ行程用水前〇小岩田村ニ同ジ、慶長十五年伊豫ト云モノ開發セシ故、伊豫新田ト號セシヲ、元祿十年、酒井河内守檢地ノ時ヨリ、今ノ如キ村名トナレリ、此伊豫ノ事ハ、土人タヾ伊豫殿ト傳ヘテ尊敬スルサマナレド、其事跡ハ絶テ傳ヘズ、シカルニ長島村ニ舊家久左衞門ト云モノアリ、彼レガ傳ニ先祖篠原伊豫ハ、里見安房守義弘ニ仕ヘシ士ニテ、伊豫田村ヲ開墾セシハ、則コノ伊豫ナリト云、今伊豫ノ墳墓ハ村内寶林寺ノ境内ニアリ、其開キシ地ナルユヘ、コヽニ葬リシモノナルベシ、當村モト小岩村ニハラマリタル原野ナリシヲ、開墾シテヨリ別ニ一村ノ名ヲナセリ、

〔攝津名所圖會 三東生郡〕衞壤島　今土俗九條島と書す、寛永年中に香西哲雲といふ人あり、原は甲州武田信玄の裔孫にして、水理の才あり、〇中略泉州に於て荒野を開發す、これを哲雲擘といふ、河州の吏となり、民を御す、遂に武城に卒す、

〔新編武藏風土記稿 二十五葛飾郡〕八右衞門新田　八右衞門新田ハ、寛永ノ頃、足立郡大門宿ノ百姓源左衞門ノ子八右衞門ト云モノ、來テ開發セシ故、村名トナレリ、今其子孫代々當村ノ名主ヲツトム、家數六十、東ハ久左衞門新田、西ハ深川扇橋町、西ハ海邊千田、砂村ノ三新田、北ハ小名木川ヲ隔テ下大島町ナリ、東西十二丁南北二丁半、〇中略

砂村新田　砂村新田ハ江戸ヨリノ里數一里餘、當村ハ相模國三浦郡ヨリ、新砂村新四郎ト云モ

ノ來リテ、萬治二年、原野及ビ海岸ノ寄洲等ヲ切開キテ新田トナセリ、故ニ彼ガ苗字ヲ以テ村名ニナセシト云、家數百二十三、東ハ八右衞門新田、及ビ海面ニ添ヒ、南モ海面及ビ平井新田ニ接シ、西ハ石小田新田、永代新田、北ハ八右衞門新田、久左衞門新田、龜高村、大塚新田等ナリ、東西十五丁程南北七丁許、

〔新編武藏風土記稿〕七十四 久良岐郡 泥龜新田 屬金澤領 泥龜新田ハ內河ノ西北ノ崖ニ添ヘル地ニテ、天水ヲ待テ耕ス、○中略 相傳フ、當所ハ寛文八年、長島泥龜トイヘルモノ、己ガ財ヲ費シテ新墾セリ、此人儒ヲ以テ擢ラレ、後ニ醫師トナリ、食祿五百石ヲ賜フ、晩ニ其祿ヲ弟長島道仙ニ讓リ己ハ爰ニ退隱シテ、此所ヲ開墾シ、終ニ農家トナル、今ノ里正團右衞門ハ其子孫ナリ、元ヨリ少許ノ新田ナレバ、村役助鄉等ノコトハ公ヨリ免除セラル、

〔下總國椿新田濫觴記〕將軍家光公之御治世に當江府町人に白井治郎右衞門と云者、此湖水○椿湖干、田地になさんと御注進致事、最早廿五ヶ年に及べき、時至て寛文年中、征夷大將軍家綱公御治世、御老中酒井雅樂頭稻葉美濃守御評定有之、則仰付ヲ以而、稻奈半十郎御見分として下向有之、御見分被遊候趣、東西三里、但シ東ハ松谷村長者松西ハ飯塚村長者松 南北壹里半、南ハ太田村北ハ諸德寺 諸方共に町見を以御積被成處、砂地共八萬石程可有之候得共、半分は砂地にて、用水は無御座、殊に下村々渴水可仕由被申上、其後且又御詮議有て、地方御奉行妻木彥右衞門、細田重左衞門、平野治郎左衞門、此三頭の衆中、寛文七丁未年六月御下有之、成程新田に能場と御相談極り、前々の願人白井治郎右衞門可被出旨仰付られ、然共此治郎左衞門事、廿五ヶ年の內御評定所江相詰、有時は御吟味にあい、或は御詮議に日を費事故、至極困窮いたし候に付、右願相止し處に、大工辻內刑部左衞門と云者願出づるに、先願と同心にて可被罷出旨被仰付候に付、則白井治郎右衞門へ掛合、互に得心得道致、同心にて兩人猶又願に罷出候處、中年に御奉書頂戴致、其上御普請奉行關口作左衞門、八木仁兵衞

御下著にて、諸方より人足相集め、上は後草村ゟ三川野中両村境へ落堀相極め、川敷拾五間、両土手七間半宛と、悉くはらし杭立置、白井治郎右衛門と辻内刑部左衛門、川中央より左右と場所を相分け、互に是を堀初る時に、辻内方には、野田市郎右衛門と栗本源左衛門と申者、両人金親也、白井には金親無之、殊に廿五ヶ年中の困窮故、三川村地内迄堀割しか共、人足賃銭續き兼、相渡す事ならずして、普請をくれたり、辻内方は彌募掛、半切坏に錢を入れ持せ、日雇賃錢無滯相渡、精力を盡し是を堀といへ共、砂底に岩有之、中々堀兼難澀致に付、此段御訴奉申上候處、此度の堀割終に相止ぬ、此時白井方を御取上ゲ、辻内刑部左衛門壹人になり、尤金親三人江被仰付、依之三人元〆として、今般見立は椿海より南の方太田村井戸野村之用水刑部川と云川を形取、見通立ければ、右両村の用水川成故、両村ゟ故障願有之、數日送る處、猶又御見分下り、太田村かう屋六左衛門宅を御旅宿として、見分被遊候處、長七千六百六拾間、里にして三里拾九町四拾間也、上は當村關戸村古川下ゟ吉崎湊迄、但し水勾配高低貳丈八尺新川堀割幅三拾間、内拾五間川鋪、左右土揚場七間半宛と御目論見有之、勿論下村用水之儀は、岩井の瀧水、見廣村鶴巻の水、蛇園村大坂水、此三ヶ所の水切流シ、太田村の瀧井に引受、下村用水に可致御了簡にて、新川堀割普請彌々相極り、此時ゟ（切流シ岩井始）此時諸國ゟ人足集り、御普請取掛候、然ル處御普請なかばにして、悲哉刑部左衛門病死す、其子未幼少なれば、聟に辻内善右衛門と申者、勢州桑名の鑄物師なり、甚才覺成者故、御公儀樣思召宜しく、御老中へ御目見へ袮いたし、又妹娘は栗本源左衛門妻に合す、孫娘は野田市郎右衛門抱傾嫁と成、右三人縁者中間彌々御上表首尾等宜、御拜借金六千両下給、御普請は寛文九己酉十二月廿八日成就、元〆切流シ見るに、水落早き事三羽の矢をいるがごとし、翌十年庚戌三月十一日ゟ水干始、同十一年辛亥迄成就せし、底もなき泥海なれば、近在の農人は船に乗り、稗を蒔事數石計なし、元來年久しく鱗ごみ芥腐し所なれば、粲はびこる事は葦のしげるが如し、翌年より

性能早稲抔仕付見るに、其利十分也、依之子の年秋中より御撿見下り御年貢米納者なり、

〔新編武藏風土記稿葛飾郡二十五〕毛利新田　毛利新田ハ、古ヘ猿江村ノ内龜戸分ト唱ヘ、一旦御材木藏ノ出來シ跡地ニシテ、總坪五萬五千二百八十坪ノ内、入堀ノ分二萬五千坪餘ノ地ナリ、享保七年、彼ノ入堀ヲ埋立畑ニ開發スベキ旨、松下專助龜戸ノ村民ニ命ヲ傳ヘシガ、村民自分入費ヲ以テ埋立ンコト、力ニ及バザルノ由ヲ以テ辭シ奉レリ、其頃伊勢屋藤左衛門ト云町人、紀州ヨリ江府ニ移リ、麹町隼町ニ住セシガ、彼ノモノ此地殘ラズ賜ハラバ、自分入費ヲ以テ埋立、三年ノ後ヨリ貢ヲ奉ルベキノ旨願ケルニ、伊奈半左衛門命ヲ奉ジテ、彼ガ願ニ任セ、埋立ノコト御免アリテ、新開ノ陸田トナシ、藤左衛門ガ苗字ヲ毛利ト稱スル故、ソノマヽ新田ノ名ニ唱ヘ、同十一年伊奈半左衛門撿地セリ、○中略

平井新田　平井新田ハ、昔海中ノ干潟寄洲等ナリ、後年追々築立地トナリ、其内西北ノ方ハ、元祿十六年、町人久右衛門ト云モノ、代金ヲ奉リ買得センコトヲ願ケルニ、彼ガ望ノ如ク免許セラレ、則久右衛門町三町目及石川町ヲ開キ、後年町奉行支配トナリ、其餘モ追々開ケシ地ナリ、江戸大繪圖附説ニ云、平井新田新開場總坪數凡二十萬坪餘、新土手凡長千間、〔或ハ十七町餘ト云〕高一丈二尺敷六間、馬踏二間、明和二年六月十七日ヨリ、同年十一月二十二日ニ至テ成トアリ、是同年御堀浚アリシ時、其土ヲ以テ築立シモノナリ、叓ハ滿右衛門虎五郎ト云モノ願上テ新墾シ、彼レ等ガ氏平井ト號スルヲ以テ、直ニ新田ノ名トセリ、又前ニ云久右衛門町三丁目及石川町トモ津波ノタメニ廢セシカバ、同三年前ノ二人願ニ依テ陸田ニ開墾シテ、當新田ニ籠リ、共ニ御代官所トナリ、同年伊奈備前守撿地ス、

〔新編武藏風土記稿葛飾郡三十五〕大島新田　大島新田ハ川邊郷ニ屬ス、モト安戸沼トテ渺々タル地ナリシヲ、享保八年、江戸柳橋ニ住セル商人清兵衛ト云フモノ墾闢セリ、清兵衛ハ大島ヲ氏トス、故

ニ村名トナレリ、天明七年、清兵衛五十回追福ノ爲ニ建シ墓誌ニ、此墾闢ノ顛末ヲ記セリ、其祖先ハ美濃大島藏人義繼ノ後胤、太井田太兵衛義氏トテ、鷹飼ヲモテ業トセシガ、台德院殿〔秀忠〇德川〕ノ御時、此地ニ移リ田地ヲ給リ、義氏ノ孫ニ至テ本姓大島ニ復シ、其男九郎兵衛、其子清兵衛、元文三年六月八日沒シ、江戶靈巖寺ニ葬ルト見エタリ、

〔山陽遺稿三碑〕廣邑新墾碑　賴山陽

藝之東、山勢彎環、與海相出入、農蜑襍居、稻魚之利、生齒之繁、甲於諸郡、而廣邑居一焉、邑之水注海、海口沙淤、積成廣斥、因而隄之、以爲田、鹹鹵沮洳、漸化膏腴者數處、其最新成曰彌生新田、成於邑里正多賀谷翁宗親、多賀谷氏、姓平、本貫蒲刈島支流、來家本邑者二、翁爲其一、三世相承、及翁富最於宗族、翁營助其父、闢田三區、今役最大、㓻工於文化辛未二月之季、告竣於其三月有閏焉、爲日總五十九日、役夫每一日率二千、爲夫總十二萬人、既成籍其阡陌疆場之略、上於藩府、得田三十九町有奇、分隸數家、課耕勸作、租額未立、有命特賜一町於多賀谷氏、世々勿有所與焉、嘉其功也、蓋佗邑亦有墾闢者、糜官錢鉅萬、延以歲月、終能底成、翁此擧出於己策、取乎己貨、未嘗有煩於官、雖因其地勢、或易爲力、抑亦偉矣、余自吾父已識翁、省鄉之次、適得相見、翁足跡不出其鄉、無佗嗜好、獨以奉上濟物爲心、自奉儉朴、不類豪民、所以能成此偉擧也、翁請余記其事于石、余以病廢仕、放浪客土、不能報涓埃於父母之邦、視翁所成、寧不赧恧、然因翁以得不朽其隻詞於本土、亦所自幸也、於是不辭而爲之銘、其詞曰、

維潮與水、日戰交綏、非海非陸、厥地棄遺、爰疆爰理、畚鍤雲飛、非澤於家、唯國之滋、遏潮延水、祭土之神、伐鼓鏜々、百吏臨焉、□、、、、、、、、、、公曰汝功、錫汝一阡、貽萬子孫、莫之或刋、彼太弗思、湎酒漁色、失厥舊業、新之敢得、克菲乃食、致力溝洫、噫乃孫子、視茲所述、

〔常陸國吉田文書〕令開發箕川村荒野□□大明神朔幣事

右件朔幣、爲別祈願所、□御料田者、開發彼村荒野、令引□可令致祈禱之狀如件、不可違□

社寺開墾

建暦三年八月　日

左大史小槻宿禰花押

〔新編武藏風土記稿一百二十八 多摩郡〕南野中新田　南野中新田ハ郡ノ東北ニアリ、此新田武藏野新田ノ中程ナルガ故ニカク名ヅクト云、野中新田ト唱フルモノ、南北二ケ所ニアルガ故ニ、南北ノ字ヲ冠セシム、此新田上谷保村圓成院ノ住僧大堅ト云ヘルモノ、開墾ノ志願タリシガ、法體ノコトナレバ同意ノモノ十二人ヲカタラヒ開キシト云、是享保七年ノコトナリト云ヘリ、按ズルニ上谷保村ニ圓成院ト云ル寺ナシ、北野中新田ニ圓成院ト云寺、初代ノ僧大堅、享保元年五月三日示寂ストアリ、然ラバ圓成院ハモト上谷保村ニアリシ寺ナリシヲ、北野中新田ヘ引寺ニセシナルベシ、大堅ハ享保元年示寂ノ僧タリシニ、開發ノコトヲ願ヒシハ、享保七年トアレバ、符合セズ、是示寂ノ前ニ願ヒヲキシニヤ、江戸日本橋江八里ノ行程ナリ、四境東ハ鈴木新田戸倉新田ニ隣リ、西ハ砂川前新田中藤新田ニ界ヒ、南ハ戸倉新田平兵衛新田ニ至リ、北ハ小川村砂川前新田ニ接ス、榎木戸新田少シカヽレリ、東西廿五町ニ餘リ、南北二十町許、平夷ノ地ニシテ、土性ハ野土ナリ、水田ナク陸田ノミ、民家四十五軒、所々ニ散在ス、元文元年、大岡越前守奉リテ、時ノ御代官上坂安左衛門檢地ス、開發以來御料所ニテ、今小野田三郎右衛門支配セリ、

〔新編武藏風土記稿六十 橘樹郡〕天眞寺新田　天眞寺新田ハ大野原ノ内ニシテ下菅生村ノ西ニアリ、ソノ地ハモト上菅生村ノ内ニテ、長尾村持添ノ地ナリシヲ、享保年中、江戸麻布天眞寺ノ住僧孝岳、コノ地ヲカヒトリテ開墾セリ、故ニ寺號ヲ以地名トセリ、土人傳ヘテ云、コノ地開墾ノ後、丘原ノムナシク樹木ナキコトヲウレヒ、田畑ノ外ニハ松樹ナド植シガ、今ハソノ餘ノ木モ暢茂シテ深邃ノ地トナレリ、カノ松樹ヲ植シトキ、一株ゴトニ孝岳般若經一卷ヅヽヲ讀誦セシナドイヘリ、サレバ今モ山岳ノ内般若臺ト云ル字アルハ、コレソノ故ナリ、此地モト寺ノ祠堂永續ノタメ

邊要開墾

ニ設ケシ山ナレバ、小字ノ祠ヲ營ミテ、祠堂山ト號セリ、ユヘニ江戸ニテハ、山號ヲ佛陀山ト號スレドモ、當所ニテハ祠堂山天眞寺トヨベリ、當所新墾ノ後、享保十六年、筧播磨守正舖奉行シテ撿地シ、アラタニ水帳ヲツクリテ、天眞寺ヘ附屬セリ、ソノ田ハ山谷ヲ除キテ十三町九畝二十七歩、ソノ餘野錢場八町六段ト定メラル、ソノ頃天眞寺ヨリ地主代トシテ、定寔トイヘル僧ヲコヽニ居ラシメテ、コノ地ノ事ヲハカラハセケリ、今モ宗寔ガ居迹ヲ祥翁庵トテ存セリ、コノ餘ハ民家ト云モノモナク、近村ノ民ニ附シテ耕種セシム、スベテ村中ノコトハ、下菅生ノ名主ノ進退ニヨレリ、

〔松前志　六〕米

卽チ粳米、國俗是ヲウルゴメト云、古ヨリシテ我藩此物ナシ、國人他國產ニ因テ、僅ニ性命ヲツナゲリ、昔時元祿五年、東部龜田ニテ、作左衞門ト云者、新田ヲ試ミケレド、二三年ニシテ廢シタリ、又同七年、東部邊幾利知ニテ墾田ヲ試シガ、實リテ新米ヲ藩士ヘ呈セシコトアリ、又同十三四年ノ頃、西部江差ニテ新田ヲ開發セシカド、幾程ナクスタレタリ、又享保十七年ニ至テ、再ビ江差ニテ試ミタリシガ、實リテ一苞ノ米ヲ藩士ヘ呈セシコトアリ、又元文四年己未春、東部福島古名折ケ内ト云リ、福山城外ヨリ道矩四里四丁三十間アリ、四ニ於テ新田ヲ開發セリ、三年ヲ經タレドモ、其利潤スクナカリケルニヤ、自ラ廢シタリ、誠ニ惜ムベキノ秋ナリ、近年又明和ノ末ヨリ二三年ノ間、東部亘部ニテ少シク試ミタレド、是亦廢レタリ、安永戊戌夏、宇治ノ儒生平澤茂助元愷ト云人、我藩ニ遊歷シテ、墾田ノ事ヲ藩主ヘモ說キスヽメタリ、安永八年己亥春正月、羽州秋田檻褸子村ノ農夫成田彌助ト云モノ來ルコトアリ、予○松前廣長モ又兼テ墾田ノ志アリケレバ、藩主ニ告テ、是春ヨリ右ノ福島村ノ中央ヲトシ、新田ヲ開發セシガ、初年ナル故ニヤ、是歲ハ甚不作セルニゾ、羽州ノ農夫モ覺束ナクヤ思ヒケン、再ビ來ラザリキ、然レドモ凡廿人役ホドモ有ルベキ大新田ヲ、空ク打棄ンコトノ本意ナラ

ネバ、翌庚子ノ年ニハ、津輕ノ農夫ヲシテ試ミケルニ、是歲ハ天幸ニヤ二十俵餘ノ新米ヲ得タリ、今年辛丑（〇天明元年）春ヨリ再ビ早收（わせ）ノ籾胤一種ヲ以テ試ント、今歲專ラ用意ヲナセリ、サレバ今秋ノ吉凶如何アルベクモハカリ識リガタケレバ、年數ヲ積マバ早收米ニ於テハ決シテ大業成就スベキナリ、白石ガ論ズル如ク、土地唯風氣多寒ヲ恐ルヽニアルノミ、故ニ地味自然ト熟セバ、年ヲ經ズシテ永世ノ國益タルベキコト、足ヲ跂テ待ベキナリ、然ドモ國人多ク墾田ノ志ナキコトヲ如何スベキ、誠ニ惜ムベキコトノ至レル哉、

〔獨言五〕邊地開き方の箇條大意

蝦夷地之義、一見も不仕候事故、誠の推はかりには候得共、心易きもの共、參見候ての咄を取合せ相考、且古人草昧の地を開き候法、幷漢土邊地防戍之制等を見合、愚意相認候儀に御座候、

一先邊地御開き之儀、何之御爲と申儀御決定第一に奉存候、右を取開候て、御國地を御增、御取箇を御增候樣被成候義に候哉、又は是迄之通、空虛にして捨地同樣に相成居候ては、外國人來開發仕も難計左樣候ては御國疆を失ひ候のみならず、直に外夷と界を接候樣相成候に付、內地は守衞六ケ敷相成候間、爲御警衞御開被成候哉、若御取箇相增候御爲に候ば、不發上之御手にてぼつぼつと御開き、御物入も格別無之樣無之ては、中々新開之場所より、左樣に直樣御益上り候者には無之候間、詰り矢張是迄之通、只漁獵運上之利を御取置被成候ても、格別之御得失は有之間敷と奉存候、（〇中略）偖又其開き方に罪人を遣すの、信濃出羽等の民を移すの、蝦夷の人に恩を施し人を殖すの志あるものを募り、心次第に試みに開かせるのと申ものも有之候得共、罪人迚左樣に多人數あるものにてはなく、また嚴法を立て多く罪人を拵へ、邊防を修めんとして、一揆に相成國を亡し候者、秦の始皇に御座候間、此事も容易に相成兼候、信濃出羽の百姓を移し候と申も、右兩樣迚左樣に餘計の人多く有之ものにては無之、夫を無理に多く移し候得ば、是迄其土を安ん

じ居ものを遠方え遣し、新百姓に致候は、人情に戻り候のみならす、其本國只さへも人數不足之處へ、又々如此多人數引移候は、其跡荒蕪に相成可申候、蝦夷人江恩澤を施し人を殖候と申は、一通は尤の樣に候得共、高が弐千人や三千人の員數なれば、二三百年も相立不申候ては、中々此廣き境土江充滿する程の人數は、生育不仕候、其内には外夷ゟ最初心掛、人を植候工面も仕候樣子に付、間に合候事には無之候、志あるものを募り開かせ候と申ても、何程志あり候ても、金銀無之ては、遠方え參り致方あるものに無之に付、是非有力者を結び不申候ては、相成兼候得共、有力之者は蝦夷え不參とも、三都抔に居、自由に貨殖仕候事手段有之、蝦夷地え參り候迚、急度まふかり候と申見詰無之候間、誰も應じ候者は無之、ケ樣なる事を御當に被成候内には、空敷歲月を過し候樣に相成候、外夷より開き候はんと覬覦仕候處を、先此方より開き可申と申者、一月をも爭ひ候譯にて、手後れに相成候ては、臍を噬候ても不屆義に御座候、誠に眉に火の付候如く、急に致さねば、御間に合兼候時勢にて、左樣に火急に致す積にても、中々五年や六年には行屆事には無之、夫をかく悠々たる了簡にて打過候得ば、其内には必外夷心を生じ、金銀銅鐵の出るをしらば、カリホルニヤの新疆を開き候手段にて、萬國の人を集め、何の造作もなく開き候に相違無之、其時に至り候ては、此方の境土たる約定ありとて、口舌を以て爭ひ候ても、間に合候事には無之候、彼は自分之利を專にせず、土地の開くるをよしと致候心入にていたし候間、何の造作もなく開け申候、此方にて御開き被成候にも、矢張其思召にて、我國の人にて開き、邊防の御爲に相成候得ば、宜敷と申思召を以、大臺場を築積にて、御元入を被成、上之御益を御目かけ不被成、人を御疑被成候御掛念を御止め、御開無之ては、相成間敷と、乍恐奉存候、申上候も恐多き義に候得共、松前家一手に御任被置候ては、外夷より被開候も難計とて、上江御引上ゲニ相成候て、矢張同樣御手屆き不申、外夷に開かれ候ては、御申譯無之義、是を思召候ても、御踏込御手早に、御開き無之ては、不相

成かと奉存候、○中略

一蝦夷地を開き候には、手廣なる事故、中々五萬や十萬の小人數にては不參候間、先其御見積り肝要に御座候、此見積り無之故、罪人を遣すの、信濃出羽の百姓を移すのと申呆說も有之候、私承り候に、イシカリ川の左右計にて、一耕土に六七十萬石開き候處は、いくらも有之由、左樣候得ば、先カラフトはさし置、蝦夷地計にても、貳百万石近地は出來可仕旨奉存候、夫を先內端に見候て、百六十万石の地と見候得ば、此地を耕すには人別百萬人無之ては相成不申候、

〔水府獻策上〕寛政のころ、蝦夷地御開きの儀等數御評議有之候處、昔ゟ松前志摩守家へ御任せ被遊候土地之事故、御引上相成候も如何敷との御評議どもに候哉、其儘被差置候內、果して騷動出來、神國の耻辱を引出候に付、蝦夷地御引上被遊、志摩守も所替被仰付、松前奉行御立、公邊之御持に被遊候御儀、誠に御尤千万の御儀に御座候處、幾拾餘年過候得者、又々元のごとく御返し被遊候儀、乍憚御失策と奉存候、（御儀合之儀へ委細不奉存候得ども、文化の度、松前御引上に相成候は、御政道正敷時節にて、文政の度御返しに相成候は、賄賂行はれ、御政事相雜み候御時節に御座候得ば、此一條にても、御引上と御返しとの善惡は相分申候に奉存候、）蝦夷之土地松前家へ御任せにて行屆候御事に候はゞ、元ゟ御引上にも不及候得共、何を申も極小家之儀、殊に古來ゟ利益のみ貪り、神國の御爲に蝦夷切開き可申抔申志は毛頭無之家風に相成、又たとへ志し候迚も、人數も少く力にも及びかね、先は當座の無事を好み、異人段々南を伺ひ候とも、松前は段々跡しざりのみ致候勢にて、所詮右家へ御任せ被差置候而は、蝦夷の御開抔は六ケ敷候故、一旦御引上にも相成候事を考見候得ば、松前奉行御立にも御撰通不宜候はゞ、猶重にも永續の御仕法御評議に而、神國之御威光くじけ不申樣、被遊度事に御座候處、○中略間もなく御返しに相成候儀、いよいよ蝦夷地は北狄の蠶食に御差向被遊候も同樣にて、何とも殘念至極に奉存候、世上之沙汰は、蝦夷は寒國故、御府內などより彼地へ罷越し居り候得ば、病死人のみ出來、撰通不相成申候、尚また松前奉行其外役々被

地に相詰候御手當、并御備場御入用等莫大にて、御永續に不相成と申候處、元より極寒の土地には相違も無之候間、艱難辛苦は差見候儀に御座候、右土地へ罷越切開き候はゞ、治世にては無此上大業に候間、實に神國の御爲を存寄、例令氷雪の中に骨を晒し候とも上の御威光を押弘め可申と張込候ものに被仰付候はゞ、身命を不惜仕法立致候はゞ、存の外病死人も出來申間敷、又御入用も彼地之所務にて間に合可申處、右樣之人は何れ一癖有之者にて、太平の御世に御見出しに不相成、先は無事一通にて役人向のものは、御撰に相成、松前へ參候も、長崎浦賀へ參り候も同樣の心得に而、勤役中家を出し候工夫など致し、左樣無之候とも柔弱にて、眞實より國恩を報ひ候心得無之候ては、諸事行屆不申、御入用も相嵩み御還通不相成筈に御座候。○中略 蝦夷地之儀は、往古はヲロシヤ只今程强大に無之、カムサスカ邊無人の土地に候故、松前家へ御任せにて、何等の苦勞も無御座候得共、只今は前に申上候通、北狄强大にて、蝦夷近く迄押寄居、尙又唐太島の儀は、蝦夷の種類にて候處、今は淸國へ貢納候樣相成、眼前に二ヶの大敵を引請居候得者、長崎よりも要害の地に相成候、祖宗之御掟にても、古今の時勢相違仕候得ば、夫々御改に不相成候而は、神國の內の事にさへ御油斷は不相成候、尙又敵國の摸樣昔と替り候を、いつまでも昔の御掟に而御備被遊、北海をば小家へ御任せ被差置候儀、如何の御懷合に可被爲在候哉、外患の儀、ヲロシヤにはかぎり不申候得共、外々の夷狄は、數万里の波濤を越來候儀にて、差當り候患は無之候處、北地之儀、魯西亞ゟ狹られ候儀は、日に月に其患深く相成候事にて、委細其筋御役人へ御尋被遊候はゞ、蝦夷地の情實も御分り可被遊候間、何卒御熟慮被爲在、文化之例にて、松前家ゟ御引上被遊、蝦夷地鎭撫開拓の御所置被爲在候樣仕度、御當家之御爲には勿論、天下萬世之爲、不堪至願奉存候、誠惶誠恐頓首々々、

天保九年戊戌八月朔日　源齊昭謹上

〔日本國郡沿革考 四〕蝦夷島

蝦夷、○中略 文化四年、幕府有開拓北陸之議、移松前氏封于陸奧梁川、以其地爲幕府直隷、置松前奉行、以布新政、文政四年、廟議變換、罷奉行、使松前氏復舊封、嘉永六年始准築城于松前、名福山城、安政三年、開拓之議復興矣、則除松前地方之外、闔境復爲直隷、以箱館爲府治、置奉行屬吏、安政六年十二月、以東西北部等之地、頒賜于仙臺、佐竹、津輕、南部、松前五諸侯、令各庸勵爲開墾之計、

〔嘉永明治年間錄 四〕安政二年十月十七日、蝦夷地開拓ニ就キ、有志ノ者ハ該地ニ移住スルヲ許ス、

阿部伊勢守殿渡書付　五百石以下御目見以上以下、同總領、二男、三男、厄介、淸水附の者、浪人、百姓、町人、右は今般蝦夷地一體上地被仰付候に付、御旗本御家人の內、風寒暑濕を厭はず、山野を跋涉し、骨骸を固め、文武の修練心懸候者共相願候へば、元身分に應じ、在住被仰付候間、名前早々取調べ可申聞候、且萬石以上以下の家來、主人見込の者も有之候はゞ、是又被差遣候間、書面の者共、何れも荒地開發、野馬牧牛の養を始として、食料藥用に充べき生類育方、金銀銅鐵鉛、山田畑巨材薪柴伐出し、草木類植付、石炭堀取、器具製作、採藥、鯨漁、何に寄ず出產相成候類、並港付等の場所へ、休泊所茶店取立度存候者は、望に任せ被差遣候、尤其品に應じ御手當をも可被下、猶又御國益にも相成り、格別出精の廉顯れ候者は、篤と事實相糺し、士人の身分に御取立、農工商の輩は、地所家宅等相渡し、其上御賞賜御手當等も有之候條、右之趣相心得、有志の者は、其筋迄可願出候、猶委細の儀は、箱館奉行へ可承合候、

〔嘉永明治年間錄 八〕安政六年九月廿七日、蝦夷地開拓守衞ヲ奧羽兩國ノ諸侯ニ命ズ、

松平肥後守

蝦夷地開發守衞の儀、當節の時勢專要の事に付、別段の譯を以て、蝦夷地の內割合領分被成下候、松平陸奧守、佐竹右京大夫、酒井左衞門尉、同樣被仰付候間、諸事申談じ、一同入精、專開發等、格別行

屆候樣可被取計候、內海御警衞の儀は、御免被成候、且又南部美濃守、津輕土佐守持場の儀は、只今迄の通り相心得、陣屋有之場所にて、相應の地所被下候間、是又申談じ、一同入精相勵可申旨、被仰出之候、○下略

〔嘉永明治年間錄九〕萬延元年八月廿三日、北蝦夷地開拓ヲ土井能登守○越前國大野領主土居利忠ニ命ズ、

土井能登守、北蝦夷地開拓御用被仰付、彼地御渡の地所領分同樣可被心得候、翌酉四月八日に至り、北蝦夷地開拓筋御用相勤候に付ては、彼是入費多く、可爲難儀候間、出格の譯を以て金三千兩拜借被仰付之、

開墾願拜

〔石川正西聞見集乾〕一田中兵部○吉政は關白殿○豐臣秀次一老にて候、○中略

一科人候へば其輕重により、首の代に荒子を切らせられ候、ケ樣の仕置は、九州小倉にて、越中殿○細川忠興も被成候、

〔石川正西聞見集坤〕一長岡三齋豐前拜領の上、小倉の城結構に被成立、御子越中殿へ御ゆづり、中津へ隱居被成候、其後十二三年、越中殿小倉に在城被成候內、諸法度よく御申付、百姓町人以下安堵仕候、自然も科人有之時は、輕重をたゞし、田中兵部殿さほうに、荒子をきらせ被成候由にて、一人も御ころしなきやうに承候、

獎勵開墾

〔常陸國吉田神社文書〕下　吉田社領

可令開發荒野壹町、募故石川女子男殿給田事

右件給田、早令開發荒野、可令引募之狀如件、

建久六年三月廿日　造東大寺次官三善朝臣在判

六郎殿男殿給田開發事、令度被取入撿注之由被訴申也、早任先度御下文、可被沙汰除狀如件、

十一月十八日　造東大寺次官花押

田所

下　吉田社領

可任故殿御下文引募男殿給田壹町事

右件給田故家幹、以本給田五町内、雖讓與女子男殿、被分行地頭四人之間、開發發野壹町、可引募之由、成給御下文畢、而自去建久九年撿注催所當云云、早可令免除之狀如件、

正治二年十二月廿二日　造東大寺長官三善

〔駒井日記〕文祿三年三月十四日

一梅津十村之内永荒之事、可成程小作にも申付ひらかせ可申候、當秋者物成之儀、作人に可有御扶持候之條、成其心得肝煎中ヘ右之通可申觸、不可有油斷候、爲其如此に候、以上、

三月十四日　駒井益庵

庄屋刑部太郎どのへ

十村百姓中

四月十日

一態申遣候、仍在々田畠作毛之事、無油斷精ニ可入、若去年毛付分之儀雖荒置、年貢米者如御法度可召置候、猶以永荒有之所者新開仕、少も不作無之樣に可申付候、右之通出作等へも慥に可申屆候、猶口上申遣條、成其意從在々請狀可相上者也、

四月十日　駒井

右之通、在々代官所ヘ申觸、

〔毛利三代實錄考證〕慶長十二年二月十八日、玖珂郡山代邑ヱ對シテ、御令條ヲ出サル、○中略

考證

正下源兵衛請

玖珂郡之内山代

一當郡之内、幅はづれの所、新堤仕候はゞ、六ケ年無役に可遣置候、後には役目相調候之者、給地トシテ可遣之候、

一近年幅之内之荒所開候者には、此中定のごとくたるべく候、但井手堤のきれなくつくろひ、新敷申付候はゞ、是又四五年は無役に遣之候、後には役目申付、給人には遣之、百姓已下には年貢相調させ、不可召放候事、

但給地之人に遣候共、右之地は不可有相違候事、

一家人に遣置候所に、荒田新堤井手など申付、開之望候者、其給主に相屆、無分別候者、言上次第、聞屆可申付候事、

右條々、郡中江相究、開作可申付者也、仍而如件、

慶長十二二月十八日　　御黒印〇毛利輝元

佐世長門守どのへ

〔新編武藏風土記稿三十二多摩郡〕茂田井村

茂田井村モ御料所ニテ、〇中略文祿ノ頃、信濃國佐久郡茂田井村ノ人榎本藤右衛門ト云モノ來テ開發セシ故、村名トスト云、開墾ノ時、御代官伊奈半十郎忠治ガ出セシ證文アリ、其文左ニ載ス、

二郷半之内もたい新田

一當新田へ罷移候もの諸役不入たるべし、但其所之堤井堀御普請之時は、罷出普請可仕候事、

一田之儀はおこし候年は無年貢、二年目ゟ代官見當を以、御年貢相濟可申候事、

一畠之儀は、二年無年貢、三年目より、所により少づゝ御年貢納所可申候事、

一他所より參候牢人之儀、地頭主人と申分有之ものは、堅停止申候事、

付申分なきものは、なにほどもうつり可申候事、

一たねかしの儀、なにほども利なしにかし可申候事、

右之旨少も相違有まじく間、のぞみのかたは相移、田地可有開發候者也、

慶長十七年子三月五日　　伊奈半十花押

もたい新田の藤へもん

〔新編武藏風土記稿三十三葛飾郡〕二郷半領　三輪野江村

三輪野江村ハ八木郷風早庄ニ屬ス、當村ハ慶長年中、伊奈半十郎忠治命ヲ奉ジテ、此邊ヲ新墾セシ頃、下總國ノ浪士平本主膳トイヘルモノ、來テ忠治ニ屬シ、同キ十七年當所ヲ開發セリ、其時半十郎ヨリ出セシ證狀アリ、今主膳ノ家ニ藏ス、其文ニ、

二郷半之内みやのへ新田

一當新田へ罷移候もの、諸役不入たるべし、但其所之堤井堀御普請之時は、罷出普請可仕候事、

一田之儀は、おこし候年は無年貢、二年目より代官見當を以、御年貢相濟可申事、

一畠之儀は、二年無年貢、三年目より所により少ヅヽ御年貢納所可申候事、

一他所より參候牢人之儀、地頭主人と申分無之ものは、なにほどもうつり可申候事、

付、申分有之ものは、堅停止申候事、

一たねかしの儀、なにほども利なしにかし可申事、

右之旨少も相違有間敷候間、のぞみのかたは相移、田地可有開發者也、

慶長十七年子三月五日　　伊奈半十花押

みやのへ新田　主膳　庄左衛門　大膳（本書三人並列）

〔紀州政事鏡下〕領內藏入給所、共に田地開發に可ㇾ成所は、川筋澤々谷地野山立山の內に而も、場所熟と吟味之上、田畑に蘆可ㇾ成所有ㇾ之ば、開立候樣、出情可ㇾ申付候、尤山主谷地主へ申付候而も、其主開立兼候はゞ、誰に而も屆次第開立可ㇾ申、若亦右場所主違亂之事も可ㇾ有ㇾ之候間、其向々を以、內々申出候はゞ、無ㇾ遲滯ㇾ可ㇾ申付候、田地にも相成場所永々捨置候事は、末代迄無ㇾ益之事に候、少ヅヽも連年開發有ㇾ之時は、永々爲ㇾ子孫ㇾ國の寶と言もの也、總而役人は不斷之勤、差而手柄無ㇾ之共、末々の事を存、大切に勤る者を忠義と云、退役之跡に而も、名の殘る所也、左樣之者子孫に至り斷絕に成候程に而も、家名計りも一度立遣べく候、先年先祖勤功を以之事也、左候得者、何れも出情可ㇾ勤事也、當分差當り之勤は、誰も可ㇾ致事也、先年ゟ有來之田地計りに而は、連年洪水之度每に、川欠減馬計出可ㇾ申候間、此度別而申付候田地開發之儀は、勘定奉行方代官相廻り、村々之百姓共へ可ㇾ申付ㇾ候、右開發高有ㇾ之候はゞ、連年根面に而差出候はゞ披見可ㇾ被ㇾ下候、夫共開發に物入等有ㇾ之、成兼候はゞ、其村方へは、納戶金ゟ貸遣し可ㇾ被ㇾ下候、右上納之儀は、無利足三ヶ年に上納可ㇾ申上旨、共に熟と村々に而可ㇾ申付候、

〔有德院殿御實紀二十三〕享保十一年九月、この月市井に令せらるゝは、上總國東金領塚崎新墾の地に移り、農民たらん事を望むものあらば、鐵炮洲船松町市人某のもとにまかりはかりあふべしとなり、

〔天明集成絲綸錄三十五〕寶曆十四申年十二月

町奉行江

小林孫四郎御代官所

下野國那須郡　大津村　小鄉野村　一本木村

同　國鹽谷郡　土屋村　土屋山田村

同　國芳賀郡　大澤村　小貫村　沖村　伊勢崎村

下總國結城郡　臺川新田　下妻菅谷村

稻垣藤右衞門御代官所

常陸國眞壁郡　黒駒村　關本中町　關本下町

右町々百姓人少に付、持主無レ之地面有レ之荒地に相成候、江戸町人之內、望之者於レ有レ之は、吟味之上、鍬下之內御年貢差免、右地所可レ被二下置一、望之者於レ有レ之者、御代官小林孫四郎、稻垣藤右衞門方江申出候樣、江戸町中江可レ被二相觸一候、

十二月

〔鷹山公偉績錄五〕墾田御手當ノ事

殖民墾田ノ御世話、年來ノ御窮迫ニ自ラ衰ヘケレバ、安永年中頻ニ開發アリシ地所モ再ビアレ果、有リ來レル良田サヘ往々廢レシカバ、此ヲ開カセラレンコト急務ナリトテ、新ニ勸農金ヲ組立ラレ、荒地ヲ開發シテ新百姓トナラン者ヘハ、家作料農具料夫食種籾糞代マデ御惠借アリ、尤年貢ハ三ケ年御免ノ旨被二仰出一、但シ新開ニ限ラズ、已ムコトナキ貧民ヘハ、農具コヤシ代等御借付有レ之、或ハ難村凶民ノ潰地高ヲ引受ル新百姓ハ半免一種代御用捨ニ定メラル、又荒所ノ多ク出ルハ、農民不足ノ故ナリトテ、種々殖民ノ御世話ヲ盡サレシ事數ルニタヘズ、

同〇寬政四年、諸士ノ子弟勝手次第土著スベキノ命ヲ下サル、如レ左、

諸士ノ次三男、兄弟、伯父甥等、勝手次第鄉中ヘ土著シ、妻子ヲ榮ヘテ耕作イタシ候樣被二仰出一候、農ハ士ニ次テ賤カラヌ者ニ候ヘバ、必恥ヅベキニ非ズ候、尤諸士其祖並ノ身分ヲバ屹ト御立被レ成下、家ノ末家トシテ、年始御目見ヲモ被二仰付一、尤本家取組候仲間ヘノ名跡緣定等モ可レ被二仰付一候、サテ何ゾ事アルトキハ、本家ニ屬シテ一人前ノ働ヲナサバ、武士ノ本意本末ノ舉タルベ

ク候、

右ニ付、土著願ヒ出ル者ヘハ、相應ノ田地並ニ家作料トシテ三十貫文、材木三十本ヲ下サレ、一過夫食米五俵、農具代十貫文、無利十年賦ノ御惠借、御年貢ハ三年御免、四年メヨリ、末三年ハ半免ノ米銀バカリ御取立、十年メヨリ村並ノ御年貢掛物共ニ上納ノ旨、或ハ荒所開發セシ者ニハ、二町ノ開發料十兩御借付、四年メヨリ無利二十年賦ニ上納ノ旨等、御定メニテスヽメラル、又頻ニ他郷ノ民ヲモ募リテ開カセラルヽ內、寛政八年ニ至テ、代官色麻五左衛門ガ建議ヲ以テ御定メ左ノ通、

諸國ヨリノ入人、妻子召連レ罷越シ、四五ケ年モ人柄見タメシ候上、家作イタシ新百姓ニ相成タキ旨申出候ハヾ左ノ通、

一夫食五俵、家作料五貫文、御林材木二十本、右三行一通可被成下事、

一高五石　引受高十石ニ限リ候內如上、右ハ初年一通半免一種代御用捨可被成下事、

　但シ離村割地高ノ內引受ケ候者ヘハ、引受高皆式三ケ年限リ半免一種代御用捨可被成下、

　尤後年持添高ノ義ハ、勝手次第ノ事、

一五ケ年住居ノ上、引受高ハ無之トモ、望ノ村ヘ家作イタシ度旨申出候者ヘモ、前文ノ通家作料夫食被成下、七ケ年ノ間、奉公人別御免被成下、八ケ年メヨリ御法ノ通人別可相勤候事、

一新百姓ニ相立候節、宗門ハ其者ノ望ニ任セベキ事

　右ノ通、今度被仰出候、尤御國ヲ慕ヒ、遠國ヨリ入來候者ニ付、前文ノ通御手當被成下候ニ付、村々ニ於テモ疎意ナク世話イタシ、百姓ニ相居候樣可致候、尤百姓ニ相立候者ハ、三ケ年ノ間、諸人足其外面當物等、村方ニテ用捨致シ與レ、相續致サセ候樣可被申渡候、

又開發ノ者、諸士町在共ニ、御手當ノ御令條アリ、左ノ通、

鐵下五ヶ年御用捨ノ事

一六ヶ年目ヨリ末五ヶ年、村免ノ内四ヶ一米銀バカリ御取立、

一十一ヶ年目ヨリ末五ヶ年、半免米銀バカリ御取立、

一十六ヶ年目ヨリ末五ヶ年、半免米銀バカリ御取立、

一廿一ヶ年目ヨリ本地諸掛リ一式御取立被仰付候、且又實ニ惡地ニ候ハヾ、其節吟味合次第、御手當可被成下候事、

一地主開發イタサズ差置候場所有之バ、何者ナリトモ、望者ハ其地主ヘ申斷リ、本村他村ニ限ラズ、勝手次第願ヒ可申立、其上見分人御差下シ、見濟ノ上、右ノ趣御判形御渡可被成下候事、

是ヲ御令條開キト稱ス、右之通、誠ニ御手當ノ厚キ事共ナリケル故、開墾力田風ヲナシ諸國ヨリ慕ニ應ズル者又多クシテ、田畑戸口年ニ增セリ、（手引草 蓮錄）

〔鷹山公偉蹟錄十三〕諸士墾田御慰勞之事

安永二年五月、五十騎組ヨリ伺出、小野川村ノ荒田開發セシニ、御賄成サレテ働カシメラル、（諸組入組）（御手傳數百人アリ）同十四日、公（〇上杉治憲）竹俣美作ト其場ヘ入ラセラレ、働キノ樣子ヲ御覽アリ、宰配頭北澤五郎兵衞ヲ御小屋ニ召出サレ、御慰勞詞ヲ以テ、御紋ノ帷子下サレ、三十人頭中ヘハ御樽肴下サル、十人頭平番共ニ皆賜物アリ、且ツ又一統ヘ其場ニ於ヒテ御酒ヲ賜フ、其時公御手ヅカラ樽ノ鏡ヲ開キ玉ヒテ、我等自身ニ酌シ遣スト思ヘト宣ヒテ、柄杓ニテ御手ヅカラ御銚子ヘ酌ミ入レ、御酌取ノ者ニ渡シ玉フ、御酌ハ美作始メ御小姓頭御近習御中ノ間之ヲ勤メ、百姓御雇ノ者マデ殘リナク賜ル、人皆淚ヲ揮テ奮激セザルハナシ、於是人々益相勵ミテ、日ナラズシテ夥シキ荒地開發成就セリトゾ、又同年六月旱魃ニテ、北條鄕就中害ヲ被ムル、其難苦甚シク、田畑共ニ枯レ焦ルヽト聞ヘケレバ、與板組ヨリ伺ノ上、松川ノ水ヲ汲揚ゲカケ渡シ、其仕掛色々ナル工夫ヲ盡シ

開墾類起

テ、百姓ヲ救ヒシカバ、一口公同處ニ入ラセラレ、親ク其働キノ樣子ヲ御覽ナサレ、炎暑ノ節働キノ辛苦傷ミ入ノ旨、御懇ノ御詞モテ慰勞シ玉ヒ、右組中ヘ御前ニ於テ御酒賜リ、其他諸賤吏田夫野人マデ御目通ニテ、御酒ヲ成下サル、安永三年三月、與板組ニテ、窪田村開發御手傳ノ時モ入ラセラレ、宰配頭ヘ御樽肴賜リ、三拾人頭ヘ御樽肴賜ル等ノ御手數、都テ五十騎組小野川開發ノ時ノ如シ、サテ諸士御手傳以來新田開發セシ處、二年ノ間ニ六十町餘アリシトナリ、

〔新編武藏風土記稿一總國圖說〕正保改定國高九十八万二千三百二十七石九斗六升五合八勺、此後玉川次左衞門某、野村次郎右衞門某等、武藏野開墾ノ功ヲ起シ、寛文九年閏十月二十七日撿地シ畢、南原野新田、北原地藏野、小川新田、砂川新田、下石原新田、松野五箇所、都テ高十八万石許、一所ニテ廣ナルモノ一區、地藏野分一區、其餘ハ飛地ニテ所々ニ區別セリ、故ニ元祿ノ改ニ至テハ、高百十六万七千八百六十二石九斗八升三合三勺九才ニ至ル、其相距コト六十年ニシテ、貢數ノ增加スルコト十八万五千石餘、其後享保十三年、井澤彌惣兵衞爲永命ヲ蒙リ、足立郡中見沼鴻沼ナドイヘル大沼ヲ埋ミテ水田トシ、後又元文二年二月、堀江荒四郎芳極、荒川涯ノ閑地ヲ開墾シテ高入トナリシカバ、元祿ノ度改定ノ高ニ增加スルコト又万石餘ニ及ベリ、

〔信府統記二十七〕安曇郡

一長尾與二木村枝郷　一日市場村　寛文三癸卯年村別　今ハ水野壹岐守ヘ分地

一長尾與二木村枝郷　七日市場村　右同時開發　今ハ水野壹岐守ヘ分地

一長尾與　中堀村　貞享四卯年開發

一同與　小田多井村　慶安元戊子年開發

一同與　住吉村　元和元卯年開發　今ハ水野壹岐守ヘ分地

一同與　田尻村　開發高別トモニ不相知　今ハ水野壹岐守ヘ分地

一成相與飯田枝郷村　小海渡村　寛永十七辰年高分ル

一成相與町村枝郷　犬飼新田村　寛永十四丁丑年開發

一穗高與　等々力町村　開發高別トモニ不相知　今ハ水野壹岐守ヘ分地

一穗高與　狐島村　開發高別トモニ不相知

一松川與島下枝郷村　富田村　承應元壬辰年開發

一松川與松川枝郷村　神戸村　慶安四辛卯年開發

一池田與荻原枝郷村　荻原新田村　承應元壬辰年開發

一同與　峯方村　開發高別共ニ不相知

一同與　內鎌新田村　慶長七壬寅年開發

一同與　青木新田村　慶長十八年癸丑年開發

一同與　島新田村　慶安二己巳年開發

一大町與大平枝郷村　大塚村　慶安元子年高別ル

一大町與大平枝郷村　切久保村　右同時ニ高別ル

一同與　相川村　寛永十二亥年開發

一同與　新行新田村　延寶六午年開發

一同與　捻平村　寛永四卯年開發

一同與　加藏新田村　延寶六午年開發

一同與舟場枝郷村　野平村　開發高別共ニ不相知

一同與大鹽枝郷村　切明村　元和七酉年高別ル承應年中開發

一同與大町枝郷村　高根新田村　慶安四卯年開發

一同與（枝澤渡郷村）細野村　慶安元子年高別ル
一同與（枝飯田郷村）野平村　慶安二丑年高別ル
一同與（同断）大出村　右同時ニ高別ル
一同與（同断）峯方村　慶安四卯年高別ル
一同與（枝飯森郷村）深澤空峠村　承應二巳年高別ル
一同與（枝驛島郷村）鹽島新田村　慶安四卯年開發

筑摩郡

一島立與　永田村　開發高別共ニ不相知　今ハ水野壹岐守ヘ分地
一同與　南栗林村　開發高別共ニ不相知　今ハ水野壹岐守ヘ分地
一同與　三ノ宮村　右同斷　同斷
一出川與（枝神戸郷村）神戸新田村　右同斷
一同與　野溝村　右同斷　同斷
一同與　笹部新田村　慶長十八丑年開發　同斷
一同與　高宮新田村　寛永十一甲戌年開發
一鹽尻與（上西條村枝郷）中西條村　寛永五巳年村別
一同與（野村枝郷）原新田村　開發不相知
一山家與　大嵩崎村　寛文八申年開發
一會田與（會田村枝郷）北山村　慶安三寅年高別ル
一同與（横川村枝郷）相吉新田村　寛永十四丑年開發
一同與（井刈村枝郷）執田光村　寛文六午年高別ル

一同與（東條/枝鄕）村　大澤新田村　慶安五辰年開發

一同與（別所/枝鄕）村　荻新田村　右同斷

右ハ元祿年中改ム

〔地方要集錄〕一新田出來之儀は、宜事候得共、當時新田に成候場所無之、前々新田を見立開發仕候御代官には、御物成之十分一を、子孫迄被下候故、段々六七拾年以前新田可爲場所は、不殘開立申候、近年之新田は、秣場之外には、新田可成地所無之候故、秣場を新田に仕候儀は、秣場は本田を養候こやし、馬を養候草を取候場所故、是を新田に仕候得ば、馬持候ては事欠、本田のこやし少く成候故、本田やせ候樣に成候故、當時之新田は不宜儀に候、

〔地方落穗集一〕村里田畑開闢之事

一古へ國を建民を居らしむるは、必ず土地を理し、水勢の不及所において、民家を作り棲を納る、然る時は大川の游波寬緩として廻らす、小河の細流瀦溪として以て注し、卑濕の地を田として、高原の土を畑（古は畑を火田と云）とす、隄を作りて決水に備へ、溝を堀て用水に當、民耕して是を田に作り、又耘りて畑を營み、久敷損害なければ、稍村里築と云云、（今新田開發准之）

〔地方落穗集五〕野山開發損益之事

一野錢、山錢等も納候場所、田畑に開發相願候へ共、見分の上高入に可成場所は格別、左も無之見取場にて、差置體の所は、縱野山錢と見取年貢と指引、見取の方格別御益有之とても、開發は不可然也、其詮は知行渡の節、野錢山錢は貳石五斗を以、高に直し渡す也、當分御益の樣にても、見取の分は高外にて、知行渡に成故、御爲によろしからず、

〔明良洪範一〕酒井忠勝大老タリシ時、下野國新田開發ノ事、老中ヨリ申立ラレシ、凡十萬石ノ新田出來候トノ事ナリ、忠勝言、右新田取立ニ付、古田ノ潰ル事ハ無ヤト尋ラル、老中言、二萬石程川筋

ニナリ、又二萬石程土手ニナル由掛リ奉行申候ト申、忠勝然レバ六萬石ノ御益也、其開基ノ間御扶持米二萬石計モ掛リ申ベシ、サレバ四萬石程ノ御益也、夫モ成就ノ所明ナラズ、御當地年年繁榮ニ成ニ隨ヒ、薪モ次第ニ多ク入用ナラン、今新田ニ開クベキ地面ヘ、松杉其外諸木澤山植附ラレヨ、是薪ノ益也、其下ニテ馬草刈ンニハ、馬草ノ益也、サラバ古田モ別條ナク、御扶持米モ入ラズ、諸人ノ爲ニモ宜シカルベシ、今新タニ四萬石ノ御益附タリトテ、將軍家ニテサノミ變ル事モ有可ラズ、今申シタル如クセバ、御城下ノ民モ高直ノ薪ヲ用ヒズ、又其所ノ民モ古田ノ潰ル憂モナク、旁宜カルベシ、其通リ申付ラレヨト云ヒシ、大老ノ一言其任ニ當レリト申ベシ、

〔集義外書一書簡〕一來書略、新田をおこすは、人を養ふの第一にて、可然事と存候いかゞ、

返書略國に田畑ばかりにて、山林不毛の地なきは、士民共にたよりあしき物なり、野は野にておきたるぞよく候、其上新田をひらきて、古地の田あしく成所あり、よく／＼かんがへ有べき事に候、たとへさはりなくよき新田なりとも、君子ならばたゞにはおこすまじ、おこさばかならず其義あるべし、義といふは大道をこなはれて、ありかゝりの遊民をかたづけなくば、新田をおこして有付候べし、鹽濱國土の山林に過て、材木薪不自由なる時、その濱を減ずべきに、鹽燒どものかたづきのために新田をおこすべし、鹽濱五百石の人は、田地千五百石に入候ともあまり有べく候、鹽濱には人多入こむものにて侍り、如此のやむごとなき入かへあらでは、おこすまじきは新田なり、人入こみて後、其人を迷惑せさすることは、ならぬ事にて侍れば、こゝろあらん人は、もし後世に仁政のをこなはれんために殘し置度儀に候、

〔宇佐問答〕武士云、次第に人多成侍れば、新田はおこして能御座候哉、　社家云、上より考ありておこし給ひ、人を上のさしづにて入給ふは能道理も有、下より望んで開は、大に天下の害と成也、故いかんとなれば、其新田を望みて何もなきあらた成所へ行者は、富なる者ならでは入事を得ず、

其富成ものは何方に居ても過かねぬ者なれば、救にもならず、今さへ屋の多過、本の家は人にあたへて、新田にあらたに屋澤山に作並、作人を抱、こやしを買込ぬ、唯さへこやし不自由成に、富人に買取れば、昔の土地はいとゞ不出來に成、本百姓は少しけぬ、今は山野あれて、下木下草とてこやしの爲に伐入べきやうもなし、牛飼庭さへ有かね、釜焼さへ不自由なる事也、いとゞさへ屋根ふく茅不自由にて迷惑するに、茅野を新田にとられなどすれば、富人は彌富て驕を極め山野を荒し、貧人は彌貧に成行也、如此なれば古今の新田開は、天下の衰微となれども、國家の益にあらず、君子は上へ取上るを以益とす、國民の安堵をもつて益とす、　武士云、上より被仰付て、新田のよき道現有事は如何、　社家云、遊民の御かた付なく、新田をひらきてすましめ給はゞ、古地の荒にもならず、本百姓の迷惑にも至らず、山野も荒ぬ被成様おはしまさん御心だに有ば、事は如何様にも調行侍らん、

〔鹽尻三十三〕一大河ある國は、水の愁ありて、民力共に勞せり、されど地境に寄、天のなせる所は人力の及ばざる事あり、但此河に依て、人のなせる禍あるぞ歎かはしき、夫利を好む者は、百町の墾田を得べきとては、地理をも辨へず、築まじき所に妄に堤を仕出し、或は水を逆に流さんとする事、近年多し、故に破まじき本田を損し、却而古田千町の災となり、民の役いやましにして、人の難儀となれり、是を能すれば彼の害となる、地形に背き水勢に度り堤を築故に、洪水には國破れて、人の勞せしも金を出せしも、一ッに費となる所多し、又民口をはかりて田を開ける所は、新田たのみ力を入て、本田却而疎そかになるもの也、一時の利を貪りて、末代の愁を殘す、國の罪人なれど、吏たる人其運上を得て、主人の悦を取べき爲め、考へもなく奸人に欺れて、要害の地を空しくし、又は無用の地を廣めて、人の禍をなす事、今世諸國にて多し、上下利に迷ふ故に、小人時に用ひられて、政事の根本を破る事淺間敷此外様々ありしが漏しつ、

〔政語〕新田開墾の事、地理により時節によりて、一定の法あるまじき也、いづれも其初は必上の利便を求べからず、且掌職の者其人にあらざれば、後々の利益を成就しがたし、誠に精力つよく明敏にて、其事になれたるものをして、郡邑を巡り地理の宜しきを見、科條を明にして、有司のものを責て、官錢を惜まず、民人を愛し、耕作の具牛馬の類を、新に集る民、或は他所より立歸りたるものにあたへ、或は土著の富民ありて、游民を催、開墾せんと思ふものは、また一統に戸口を計て、田地を授け、其所にて富民を以て保長とし、四五年の後、田の肥たると瘠とを量て貢税をおさめ、富民も新集の戸も一様にすべし、かくのごとくすれば、游民も業を得、曠地も其利を盡して、年を經れば自然に富强を致べし、然れどもも多く官錢を用ゆれば、算計の臣其費多きを憂へ、有司の者其間に就て、種々の弊を生ずる事多かるべし、故に上下明にし、主職の者に任ずる事專らならざれば、其功をたつる事かたし、

〔經濟錄五〕古ヨリ草萊ヲ開ヲ國ノ善政トスルハ勿論也、草萊ヲ闢クトハアライハ蓬也、草萊ノ殖茂リタル荒地ヲ開發シテ新田トスルヲ云、國ニ草ライノ地多ハ、國ヲ治ル人ノ耻也、地ヲ闢キ新田ト爲ハ、誠ニ善政也然ドモ新田ヲ開發スルハ極テ大事也、卒爾ニ事ヲ創ムレバ、多ハ故田ノ障ト成、民害ト成コトアリ國ノ爲ニ未ダ少利モナサヌ内ニ、一方ニ大ナル害ノ出來ルコトアリ、然ドモ人主之ヲ好ミ玉ヒ、執政ノ人之ヲ以立功ヲ欲スレバ、其下上ノ好ニ投ジテ、一己ノ利ヲ求ントスル者、必蜂起シテ其事ヲ請ヒ願也、如此輩ハ國ノ利害ヲモ論ゼズ、民ノ愁苦ヲモ願ミズ只一時ノ計策ヲ申テ、其事ノ始ルベキ樣ヲ圖ル故ニ、其節ヲ巧ニシテ、上ノ人ノ肺腑ニ入ル、上ノ人モ民間ノコトヲ精ク知ラズ、地理ニモ深ク熟セザレバ、多ク其願フ者ノ辨說ニ惑ハサレテ、後日ノ害ヲ思ハズ、害ノ生ズル時ニ及テ、俄ニ其事ヲ止ムレドモ、民ノ被リタル傷ハ愈ズ、國ノ害モ故ニ復

セズ、箇様ノコトヲ云出ルヲ興利ノ説ト云、興利トハ利ヲ興ス也、古ヨリ國家ニハ之ヲ惡ム也、故ニ新田ヲ多闢クハ目出度コトナレドモ、其利害難知キニヨリテ、古人ハ之ヲ重ンジテ、輙クハ事ヲ創メズ、上ニ云如ク、五土ハ皆夫々ニ功用アル物也、平原曠野ハ田地ニ比スレバ、ムダ成様ナレドモ、常ニハ牛馬ヲ放チ牧ヒ、草ヲ苅テ田ノ糞トス、人君ノ遊獵ニモ平原曠野ハ無テ協ハズ、万一國ニ大事アルトキハ、數十万ノ軍兵ヲ集ムルニ、廣キ處ナケレバ、良田ヲ蹂躙スルコト有、五穀ヲ種ルガ好迚、平原ノ地ヲ悉ク田地トシテハ、不便利成コトアリ、此義ヲ思慮シテ斟酌有ベキコト也、又水澤ハ水ノ行所止ル所ニテ、五土ノ一也、水ハ流行スル性ニテ、畢竟海ニ入ル者ナレドモ、海迄行間地ニ滯ル所アレバ、四方ノ水聚リテ池トナリ沼トナル、大ナルハ湖トナル、是地勢ト云者也、人ノ成シタルコトニ非ズ、天造ニテ自然ナル者也、此水澤モ五穀ヲ生ゼヌ物ナレバトテ、無用也ト云ハ大ナル惑也、川ニハ川ノ德アリ、澤ニハ澤ノ德アリ、澤ノ字ヲウルヲスニ訓ズルハ、潤澤ノ義也、其地ヲ潤澤ナス德アル也、今興利ノ説ヲ申モノ、動モスレバ池沼ヲ乾シテ新田ニ成ント請フ、天造自然ノ池沼ヲ乾サント爲ニハ、必新ノ河渠ヲ開テ水道ヲ作ル、其間ニハ許多ノ田地ヲ壞リ郷村ヲ破ル、故ニ人民ノ痛ミ甚シク國ノ害多シ、凡池沼ハ旱ノ時ハ水ヲ引田地ヲ養ヒ、霖雨激水ノ時ハ、潦水ヲ此ニ溜テ流漲スルヲ待者ナレバ、國ニ無テ叶ヌ者也、之ヲムダ成者ト思ヒ、水ヲ落シテ田ト成ントスルハ、五土ノ用ヲ不知也、

〔松屋筆記七十四〕新田みだりに不可開

藪澤を開き山野を墾て新田を造ること、天下の大利也、されど其地理を察し、其利害を解せざれば却て天地の怒にふれ、亂の階を生ずべし、河崎平右衛門が武藏野を墾り、井澤彌三兵衛が見沼を開たるなどは、實に天下の大利なれど、野を開く者は鬼神のにくみをうけず、河崎氏今に相續して家門をおとすことなし、江湖を埋み山を墮は幽冥の氣に逆ふ、井澤氏子孫おとろへぬ相摸

野下野那須野、下總小金が原の類、島にもかへすべく、樹木をも生ずべし、近比水戸人大久保今助といへるもの、近江湖を新田にせんことを請許されて、かしこにまかりぬといへり、此はいにしへより運漕漁獵の利おほく、靈神の守り給ふ名湖なるを、新田にせば天地の氣にとり、國家のため害なしとはいひがたし、

〔救急或問〕一生財大道ト云フコト大學ニ見エテ、至極ノ道理ナレドモ、今世ニハ之レヲ生ズル者ハ百姓ノミニテ、之レヲ食フ者ハ士ト商ト古ヘニ數十倍シ、其上ニ浮屠、修驗、神職、游手等夥シキ人數ナレドモ、其勢速カニ變ジ難シ、但用之舒ナル事ハ人君ノ心ニアレバ、今日生財ノ道ハ用ヲ節スルヲ肝要トス、然レドモ委敷邦内ヲ講究セバ、猶伏利ナキニアラズ、農ノ餘力アル者、振高ノ小民等ヘ勸メテ、開墾セシムベシ、又山僻曠寞ノ地アラバ、小祿ノ士二三男ヲ募リ、一纏メニ聚メ、始メハ夫食ヲ給シテ開墾セシメ、五箇年ノ間ハ作リ取トシ、六年目ヨリ本田畠十分二ノ租ヲ出サシメテ士格ヲ許シ、萬一國家爭擾ノ事アラバ、宗家ニ屬シテ出陣セシムベシ、久シキ後ハ自然ニ古ヘノ寨兵ノ如キ者ト成リテ、治亂トトモ兩便ナルベシ、其地五穀ニ宜シカラズンバ、蕎麥蕃薯稗芋ヲ始メ、綿茶漆、楮櫨甘蔗ノ類、其地ニ宜シキ品ヲ種シムベシ、蕎麥蕃薯稗芋等ノ類ハ、新開ノ桑脆ナル地ニ宜シク、如何程瘠薄ノ土ニテモ善ク蕃殖ス、木綿ハ赤土ノ淺クシテ岩サシ雜リタル地沙地等ニ宜シ、尤モ東南風ヲ受ル地ヲ善トス、黑壤ヲ嫌フ茶漆楮ハ北陰ニ宜シ、海風ヲ諱ム茶ハ川霧立地ヲ尤モ妙トス、櫨ハ之レニ反ス、甘蔗ハ沙地ニ宜シ、猶老農ニ功者アルベシ、詳カニ問ヒテ明ムベシ、○中略

一新田畠ハ上ノ手ニテ開クベカラズ、民ヲ導キテ開カシムベシ、年貢ハ本田畠十分ノ一タルベシ、三年毎ニ撿見ヲ遣スベシ、出來足宜シケレバ、少宛年貢ヲ增シ、六□ニシテ本田畠七八分ノ處ニ止ルベシ、新田開墾ハ財費ヘ力勞スルユエ、稅薄カラザレバ民勸マズ、老子ノ取者與ト云ル是

レナリ、

〔勸農策上〕一田地も先年より段々開き添候而、古開、開方、新開、新田など多く相成候、尤荒廢仕候田地も餘程御座候へ共、右撿地の節よりは開出し、大に相增候事と奉存候、左候へば、御物成も相增し、又下方にも新開地は下免に而、年貢安く利分多き當りに而御座候處、ケ樣に益困窮に及び申候は、人力減じ候故、地力を盡す事能はざるにより候義と奉存候、夫故に新開田地は人力餘りある時は、大に利益御座候へ共、ケ樣に農民減少仕、人力足らざる時は、新開地却而損亡多き事と奉存候、其故は田地多く相成候程、人力彌行屆き不申、古田の年貢高き所を疎略に仕候故、土瘠て取實少く相成候、殊に新開は、皆山寄せ、川端、又は海邊等に而御座候故、洪水の節は砂入、川落等に相成、又海邊は汐枯等に相成候而、大に人力を費し申候、又川邊迄開き詰、空地少く水筋細く相成候故、少し洪水有ば水損多く、又土地廣く相成候程水不足仕、谷川地掛り等は旱損多く相成候、水損共多相成候は、新開地の增候故と奉存候、其上池隄井關溝等の普請に、多くの人夫を用ひ、其入用莫大の儀に而御座候、然共人力さへ行屆申候へば、普請等も手早く成就仕、其仕方も念入候樣に相成、又水旱の手當をもよく仕候故、新開地利益多く御座候へ共、只今のごとく農民衰微仕、人力不足致候へば、新開地は却て古田の爲に不宜、困窮の基と相成候、然るに人の議するもの、新開をし荒地を發するのみ御國益と申事心付候而も、人力不足仕候へば、却而國の益とはならず、害に成之事を不存候、新開を務めて仕候より、農民を增、人力を強く仕候方第一にて、人力餘り有時は、自然に新開も出來、荒地も發し候事と奉存候、

〔經世秘策後篇〕第三小急務三條

第一、備州兒島の入海干潟といふは、備州の南海礒邊通凡七八里の入海干潟あり、北側は岡山領、南側は兒島なり、兒島は御料なれば、私領と御料入會の土地にして、則御料の新田となるべし、開

發成就すれば、凡十萬石程の最上至極の良田とならん、其開發仕方は、西の地端と東の地端とに塘堤を築立て、滿潮汐を禦ぐべし、東西の塘堤に水門を設、常に閉塞、大雨洪水ともあらば、是を開き、洪水を拔拂なり、干潟の眞中の東西へ親川を堀割、惡水堀となし、兩緣に塘堤の入用なければ、其土砂を窪地へ小舟に運送して、高低を平均すれば、則最上至極の良田となるなり、新田開發は海邊を最上とせり、洪水の憂なきゆへなり、

〔林子平上書〕一金華山は餘程大なる島にて御座候得共、只今の如く無用の地にして被差置候事、御不術なる事にて御座候、何卒山を切開候て、利用の木を御植立被成置候はゞ、夥き御益と相成可申旨、早速御開發被成置候て宜かるべきと奉存候、併名山大河抔には、必神有ものにて御座候故、古へは名山大河の物を取候には、其趣を其所の神へ告候て、祭をも致し、其上物を取候事にて御座候、然ば此度金華山を被相開候とも、先其趣を金華山の神へ被相告、祭をも被成置候て、其後山の雜木どもを切拂、利用の木共を御植立可被成置候、併山の木を一同に切拂ひ候はゞ、山上水氣盡候て、植立候木も根付申間敷候間、斑に切開候て次第々々に植立候が宜く可有之奉存候、扨其神は權現なりとも、辨天なり共、只今迄祭來候神を祭可申候、右の如く御開發被成置候はゞ、此一島にても、大なる御益にて可有之奉存候、

〔大平之船歌〕先年鹿島香取を始め東國の神社を拜禮せんとて出立道に、彼の小金ヶ原より印幡手賀沼を一見して、終に那須野原を見たるに、何れの原にも水脈結構なる地數ヶ所ありて、數十万石の田畑になるべき土地柄成るに、いかにして捨置るゝ御事やらんと、不審晴れざるによりて、或功者に此事を尋問なせるに、其人いへらく、抑も此原は御軍用の駒場にて假令幾万石開發成る共限りてならざる事也といへり、〇中略若万一小金那須野原御開發ならば、彼の原に御陣屋を儲、其傍に十間或は二十間の堀を建、長屋の小屋を建置、小普請御旗本衆御一人、下役四五人住

居被卯付、此御陣屋へ重罪以下の咎人五十人も百人も差遣し給ひて、其原の百姓に御取立あり度御事也、勿論斯の如き不屆者故に、迚も百姓の辛抱は成間敷、付ては忽逃散可申は必定也、仍て悉く鼻に入墨するより外なし、扨諸御關所及川々渡船場、且道中旅籠屋此外呑酒屋、遊女屋、並諸商人等へ御觸あらば、鼻に入墨有之者、御關所及川々渡船場におひて曾て通さす、旅籠屋遊女屋にては止宿致さず、呑酒屋並諸商人且茶店に至るまで、商をいたさゞれば、彼の咎人ども御陣屋の外江一足も出る事成難し、此上金銀の盗をいたすとも遣ひ捨る場所なければ、盗は既に止むべし、然れば以來盜賊をせず、本心に立歸る事、鏡にかけて見る如し、故に全ふに百姓をなして、生涯を經る成るべし、係る御蔭德は、何卒來春〇天保十三年文恭院樣〇德川家齊御一周忌の砌、大赦行はるゝ節、斯の如くなし給はゞ、何寄之御追善なるべくと乍恐奉存候、猶右に准じ博奕諸勝負致し候惡黨數万人、及び公事し出入し、並に高利を貪る非道の金貸等を始めとして、乞食物貰ひの類、或は巾著切ども、悉く右の振合を以て、小金那須野印幡手賀沼等の新開百姓に御取立被成下ば、廣大の御仁慈と乍恐奉存候、

〔例書三〕一武州埼玉郡所久喜村地内へ空地有之、新田見立人有之候て願出候に付御普請爲見分差遣、右見立地所見分吟味之上、空地に相違無之趣、右村役人總百姓新田地之積請書差出申候、右見立所々にて入組候間、地處を集め、是迄高内之場所を開發に可成分、夫丈切取新田開發見立人江相渡候之由、然處右村古繩之內、荒所數多有之、其分打出見立地と一處に致し、右之通御普請役取計之由、於然は右荒所と申候は、右繩內にて五給御朱印拜領地にて、地頭所より連に可起返旨申付候場所にして、其上右之通取計候上、見立場所にて、餘程隔候儘、當時耕作之地所を切取集め、廿町歩餘、古繩之內切取候處、村役人取計にて、拾八町歩餘切取、拾六町歩餘計之由、總百姓共村役人を相手取、亦々及出入候、尤切取候地所は、古田故、被切取候百姓共、地處に離れ迷惑致候に付、總

百姓共より地代金三拾八兩餘差出、新田見立人方へ償ひ、地所銘々切取候者共方江相返候由にて右貳拾町歩餘可切取之所、都合三拾四町歩餘切取、村役人共押領仕候段、奉行所へ先達而訴上候由、右論中再訴同前に、地頭所へ百姓共申出候は、何分村役人諸事押領仕候而、百姓共令難義之旨申出ル、

右空地之分、新開發見立候處、尤候得共、古田荒地之分は、空地同前見立新田に可致筈無之、向後新田開發致候は、地劚候上高入に可相成候、左候得者、其節は八重に相成候事に候、五給地頭御朱印には、頂戴有之候拜領地減少致候事に候、此度見分を請、右體に取計候義にて、地頭所にて差構候筋は無之、見分取計に、此方より決而差略不致事に候得共、地頭にては、此後追々荒地起返申付候事に候、其節に至、何れの地を以起返候哉、勿論是迄の荒地字幷撿地帳番附に相違有之候ては、難成趣申渡ス、

但所久喜村に不限、何之地所論にても一村地押等にて、一筆限地改候得者、一筆之內請歩の分引、近郷様し歩致し、餘歩見平均之上、其餘歩丈引殘、餘歩有之候得者、改出にても可有之哉、地所論も無之拜領地、有形之分何程餘歩有之候とても、餘歩改出に可相成筋無之候、此儀は何れの地所にても有之義にて、歩廣の分銘々從公儀無故御改出有之候而者、際限無之事に候、

賞罰

〔古文書類纂奉行上〕後土御門天皇明應七年足利義澄御敎書京都神泉苑所藏

神泉苑事、爲天下無雙之靈地、異于他之處、大勧進僧永奪開彼境內於田地、相付作人令自專云云、前代未聞之狼藉也、不可不誡、所詮於永尊者、被處罪科、至作人者、向後可停止耕作旨、被成御下知之上者、早令存知其段、如先々可被專炎旱祈雨等之御祈禱之由、所被仰下也、仍執達如件、

明應七年五月卅日

加賀前司花押

豐前守花押

東寺雜掌

〔寛政重修諸家譜 三百九十二〕小泉吉次 次大夫 慶長六年、武藏國稻毛、川崎の代官職となり、このとき吉次あらだに水を引て、新田を開發せむことを言上せしかば、中むねにまかせられ、十年正月九日、人夫配當の御黒印をたまひ、其のち功成しことを賞せられ、貞盛の御刀をたまひ、本領のほか、舊田新田のうちにをいて、十が一をたまふ、

〔譜牒餘錄 後編二十五〕

小泉次大夫

曾祖父小泉次大夫、稻毛、三崎筋御代官被仰付候時分、用水御普請成就仕候爲御褒美、本田新田之拾分一被下之、井貞守之御刀拜領、于今所持仕候由、覺書有之、

〔松屋叢話〕余○小山田與淸が祖高田茂右衞門源友淸といへるは、都人なりけるが、江戸に廿六所の宅地さへありて、いと富さかえてぞおはしたる、○中略享保十三年下總國手賀沼を決て新田をひらかんとせられしに、沼深して堤築ことかなはざりけり、こゝに友淸撰にあづかりて、さまざまおもひめぐらしつゝ、もたりける黄金はいふもさら也、京江戸の宅地家財器用にいたるまでを、ふつに費つくして、費をいとはず、遂にその功を終しかば、二萬石ばかりの新田ぞいできにける、朝廷その功を賞たまひて、二千石の采地賜べきよし、館林の君、寛氏、井澤氏などいはれしつかさびとして、おふせごとありしを、辭奉りしかば、さらば、おもひよりたる事のあらん時、のぞみ申べきよしのたまひけり、同十五年に、やンごとなき仰ありて、武藏國足立郡なる見沼といへるを新田にひらかれし時も、命を承て任におもむき、鈴木氏の家に養れたりし弟文平胤秀とともに、あまたの功をば立たりけり、

〔大坂町觸頭書〕寛永五子年

三月廿三日

一攝州神崎川中津川筋、新田ニ成候所々入札之事、

制度

五月廿五日
一川筋新田入札之事

〔南龍公言行錄下〕一或時新田開の場所見立る事有、和歌浦其外所々七八ヶ所繪圖に致、奉行其外役人御前江出、御覽に入ける、賴宣君御覽被成被仰けるは、我勝手の便に宜とて、名有池を埋め、名ある山を堀崩し、田畠に致まじく候とて、御吟味之上、取分二十一代集の歌に入名歌書のせたる名所舊跡をば、堅いらふべからず、末代に至て、紀伊大納言は利欲の爲に、歌の集に入、詩文に載たる名所舊跡を、新田の田畠に致たり、扨も愚盲人にて有けると、末代に我をあざけり、耻を末世に殘し、萬人のわらひぐさに成ん事、掌を指がごとし、必々名木を切、名池を埋め、名所舊跡を新田に致事努々不可仕と急度被仰付候、

〔窻の須佐美二〕延寶の頃にや、隨軒が知惠と云事世に稱して、人力に及ばざる事を、隨軒にても叶まじといひふらしける、予○松崎堯臣が少年の頃、世にいふ所、始は車力なりしが、才智を以て世に用ひられ、川村隨軒と號し、殊に地理に熟し、諸國の新田をひらきしは、大かた此一人なりとぞ、

隱田

鎌倉幕府以來ノ制、凡ソ隱田ノ疑アルモノハ、實檢使ヲ遣シテ之ヲ檢察セシメ、隱匿ノ實アルモノハ、事ニ隨ヒテ之ヲ處罰スルコト粗、上世ニ同ジ、

〔新式目〕隱田咎事

一遣實檢使、隱田到露顯者、年々隨無沙汰員數、早速可辨濟之、若猶令物掠○物恐誤借者、不論理非、於彼下知者可被沒收之矣、

〔大內家壁書〕聞出之地停止之事

無足不足之仁、爲御扶持、聞出隱地、可望申之由、被仰付之處、動非隱地、於號隱地、非闕所之地、於號闕所、如此之仁不可申次之、闕所之事者、或御沙汰未落居歟、或御罪科未斷歟、或有御思案、可有御宥免歟也、此等之地者、縱雖爲闕所一定、御奉公之淺深可被思食宛之處、不能左右、所成望無謂也、然間隱地事者、不聞出、準偏以求諸人越度、所詮於自今以後者、總別不望申聞出之所領之由、壁書如件、

延德三年七月十九日

〔信玄家法上〕一、百姓有隱田者、雖經數十年、任地頭之見分、可改之、然者百姓有申旨者及對決、尙以不分明、遣實撿使可定之、若地頭有非分者、可有其過怠矣、

〔三河國岡崎領古文書下〕掟

一隱田隱畠幷小成物以下有様に可申聞、若以來訴人罷出候ば、遂對談隱置主可成財、然上者つげ知する輩、其申聞する出來分は、一作爲褒美可宛行之事、〇中略

右條々相定訖、若於違犯は、急度可加成敗之者也、仍如件、

隱岐守長頼御書判

文祿四年十月日

大和田村
わき上下村
あさひ村總百姓中

〔長曾我部元親百箇條〕掟〇中略

一新林年荒開新開幷鹽田之事、遂上聞、以下知可開之、爲内々開隱置事、堅停止之事、付反米者、其年より則可運上、又次年より有様之貢物可進上、何も公領也、〇中略

一不寄給人百姓、隱田仕者、聞立於遂言上者、一稜可褒美、其上を以奉行中相談仕、撿地帳を以令沙汰、歴然地頭隱置候者、太以可處罪科、若百姓相隱候者、撿地以來之違算用、以利倍取、皆濟上にて

可追失、若令難澁者、可斬頸事、(○中略)

慶長貳年三月廿四日　盛親(在判)

元親(在判)

〔御定書百箇條〕田畑永代賣買并隱地致候者仕置之事

(寛保二年極)一隱地致候者　中追放

〔地方要集錄〕一隱田と申は、撿地入候時、案內いたさず候て殘置候田畑、撿地入候後、所務いたし候後も、地主より不訴出候を隱田と申候て、磔に被行候定法に候、但撿地入候て一所務仕候上に、一二年過候て、落地有之旨注進候得ば、落地と申候て、科に不被行事に候、新田新開切添あら地所は、三年四年不申出候ても、隱田と申筋には無之、咎不申付事に候、總て新開又は荒地等起返候を早く改候て、年貢取候儀は不宜事に候、一兩年も年貢を免し置候て、百姓之入用手間等之替りに爲取置候儀能候、如是に不致候得ば、新開荒地之起返不出精故に候、

〔吾妻鏡十九〕承元五年(○建曆元年)七月十一日庚申、宗掃部允孝尙、預勸發、被召預武州、(○北條泰時)是以下野國中泉庄有隱田等之由、及本所訴之間、可令尋沙汰之旨、雖被仰含、于今對捍之故也云云、十二月一日己酉、宗掃部允孝尙勸發事、今日免許、是中泉庄內、有隱田由事、可令尋聞之旨、雖被仰付、懈緩之間及此儀、仍改仰仲業、有沙汰之處、無隱田實、此事者、自雖非孝尙之罪科、只被咎仰不法一事訖、但有隱田之實者、猶可爲重過之由、兼者所被思食儲也、本所虛訴、併爲孝尙幸運歟、向後於事可令謹愼之趣、以廣元朝臣(○大江)被仰含云云、

〔東寺百合古文書〕實圓所犯條々

一太良河內隱田事(以地頭方內、號時澤名、今隱田之處、地頭代兵衞四郞所務之時、令露顯之條、地下ニ無其隱、)

貞和四年五月

〔上諏訪神社文書五〕信玄花押

諏方上宮祭禮退轉之所令再興次第

一南御園之郷より、御湛祭之時五貫文出し候、五貫文を以、三月小立増の神事相勤云々、然處去頃彼地へ、遣實撿使、改隱田之處ニ、撿使爲神田之由不知之間、右之五貫文をも、截取候、故に祭退轉、略○中

玆時永祿八乙丑年十二月十日

大祝殿

神長官殿 略○下

〔武德編年集成六十三〕慶長十八年癸丑十月十九日、石川玄蕃頭康長ハ、暗弱ニシテ家法正シカラズ、領地ニ新開ノ田園多シト雖ドモ、縁家大久保石見守ト合眉シ、是ヲ隱シ上聞ヲ經ザルヲ以テ、信州松本ノ領地沒收シ、豊後佐伯へ謫流セラル、

〔例書三〕一常州嘉生野村百姓三拾人訴出候者、名主隱田仕罷在候、其外溜井普請料、地頭所より請取候て、普請は不仕取込致候段訴出、吟味致呉候様願出、依之地押に取掛り候處、地頭役人右村へ罷越し、二三日立名主致欠落候に付、奉行所へ右隱田ノ義書添、地頭所ゟ申立候積、其上地頭所より闕所申付、家財田畑地頭所へ取上候様、可被仰付事之處、右名主儀も隱田有之、地押に相掛り候處相顯、江戸表へ召連、奉行所吟味之上、右儀は獄門に被仰付、家財田畑欠所被仰付候、名主は永尋被仰付候事、略○中

一越後國魚沼郡關村百姓治郎兵衛訴出候者、八海山之麓に八色原と申候而、三里四方の平地御座候、其場所五拾三ケ村地出候而、右之原内五十三ケ村の者共之隱田有之候、私村方も右五十三村の内にて、地先隱田有之候に付、當時名主江其段申達候處、何れにも打捨置候、尤私義も當村外百姓幷に右原地江作付致度、名主へ度々申候得共、私に限り右之場所江一向手を爲附不

申候に付、其段相尋候處、名主申候は、私義は中興之者之由にて、右之者共を右之場處地面割合候得者、私に割合與候地所無之由申之、私并相百姓佐五郎兩人は、相除難義仕候、何分外百姓並右之場所へ入交り、開發仕候樣被仰付被下置度奉願候段、御勘定奉行一色安藝守殿ゑ訴出候、依之尋候は、右原地は五十三ヶ村にては、村々內野等有之候て、內野之外原地ゑ作付仕候哉、何れとも撿地受、作付等自由可仕事に候、右原地に五十三ヶ村隱地を取掠作付仕候は何年以來ノ事に候哉、亦原地は村々稻干場等に成候哉、且右原地は撿地帳外書除地にては無之哉、隱田と申出候に付、右場所作付之分、定而作り取に致事と存候、彌左樣之事に候哉、尤右場所水掛り有之田方も有之候哉、畑方計作方致候哉之旨、右治郞兵衛ゑ尋申候處、答候は、五十三ヶ村內野は、銘々所持仕罷在候而、右內野は居村にて自由仕、秣刈を仕、亦は少々切替畑等仕村候段申之に付、右切替畑は撿地帳に載り候哉之旨尋候處、答には、私義小百姓之義にて、都而撿地帳は、其村々名主手前に御座候得者、決而不奉存候段申上候に付、左候得者撿地帳に不載田畑を隱田と申候、仍撿地帳に載り候哉、又は載不申候哉、其譯不存隱田と申立候は、如何之譯に候哉之旨尋候處、答候は、內野と申候は、右に申上候通り、其居村々にて自由仕候故、外々にては居村々により、廣狹は五拾三ヶ村別々に相譯り申候、外ゑ入會秣場とて、人々存寄次第作付仕候に付、隱田御座候と申上候、併何年以前ゟ外々野ゑ作付仕候哉、其譯は不奉存候、三里四方之原地之義に御座候得者、秣も苅取、或は稻干場等にも仕候、且撿地帳之外書除地に相立罷有候哉、右村々撿地帳、其村々に而名主宅に御座候得者、相見せ不申候に付、是亦不奉存候、勿論右外野水掛りは無御座、大概畑計仕付申候、最隱田と申證據證跡何にても無御座候得共、外野五十三ヶ村之者共、自由に開發仕、切替畑作付仕候て、參一度作付仕候得ば、本田同樣何ヶ年も初發之場所ゑ仕付申候、外村は不存、私村方にも、本田之外右之野作仕候相百姓御座候に付、隱田之申立には

無御座候得共、本田之御年貢納方取續、勘定仕見申候處、本田丈ケ之御年貢、私共同樣仕候樣相見得申候、野作り之御年貢之義は、如何相成候哉に付、隱田とは申上候、依之地押撿地被成候は、隱田之譯相分り可申義と奉存候旨、答候に付、分間井地押撿地井本撿地を以相改候處、隱田に相違無之候に付、五十三ヶ村之村役人始及吟味候處、私共先祖何つ時ゟ右作付仕候哉、先祖より作付致來候場所故、隱田と心附不申、今更御察當奉請、一言之申披無御座、如何樣御咎被仰付候而も、御願申上候筋無御座候書付取之、仍而奉行一色安藝守殿被仰立、以御憐愍村役人共重過料、平百姓共一通り之過料、勿論原地は就中撿地役高に結、本田も五十三ヶ村とも撿地仕直し相濟、

但シ右之御仕置被仰付候は、五十三ヶ村之内、初發頭取申候百姓討首、其外重立候而野作仕候百姓貳拾壹人は遠島、拾五ヶ村にて百姓中追放、名主共不殘退役之上重過料、組頭並之過料、

古事類苑

政治部七十四

下編

邸宅上

鎌倉足利兩幕府ノ間、大名士庶ノ邸宅ニ關スル制度ハ多ク具ハラズ、只僅ニ京洛中ノ宅地ニ關スル制、幷ニ士分以上ノ邸宅ノ制ニ關シテ規定スル所アリシノミ、

徳川幕府時代ニ至リテハ、家屋宅地ノ事ニ關シテ夙ニ規定アリ、元和以降、武家ノ屋敷内ニハ、浪人其他定職ナキモノヲ停宿セシムルヲ禁ジ、其他武家平民ヲ論ゼズ、他所ノモノヲ宿セシムルニハ、最モ心ヲ用ヰルベキ事ト爲セリ、

武家ノ屋敷ニハ居屋敷卽チ上屋敷、中屋敷、下屋敷、拜領屋敷、抱(カヽヘ)屋敷等ノ別アリテ、幕府ニハ屋敷改ノ職ヲ置キテ、武家ノ家屋、宅地ニ關スル事ヲ掌ラシム、其内抱屋敷ハ、陪臣、浪人、町人等ハ、特別ノ理由アルニアラザレバ、之ヲ所有スルヲ得ズ、士分ト雖モ、百姓地ニ於テ之ヲ所有スルハ、容易ニ許サヾルコトヽ爲セリ、蓋シ抱屋敷ハ、無税ノ地ナルガ故ナリ、

幕府ノ用地ヲ御用屋敷ト云ヒ、其空地ハ往々之ヲ人民ニ貸シテ借家ヲ建テシメ、地代ヲ徴收スルノ例アリキ、又江戸町會所ハ、其所有地面ニ貸屋ヲ建テヽ、之ヲ一般人民ニ貸附クル等ノ事モアリキ、尙ホ邸宅ノ構造ニ關スル事ハ、居處部ニ詳ナリ、

名稱

〔書言字考節用集〕一乾坤 宅地(ヤシキ) 屋敷 同

〔落穗集追加〕四 制外の家の事

慶長五年、御當家天下御一統の以後は、御當地ニ於て、諸大名衆の義は何れも居屋敷を願ひ、拜領あられ、家作等をも被致る、中に○下略

〔幕朝故事談〕公方家文廟○徳川家宣御代、大名、御城近所の屋敷を上屋敷と唱へ引移可申と被仰渡候時分、細川侯なども、伊皿子の屋敷より、大手へ引遷り候なり、德廟○徳川吉宗の御代、家來を差置に、手狹の段相願、伊皿子に居住候事も有之、然則上屋敷は相對替不相成事なり、

〔敎令類纂初集五十五〕正德二壬辰年七月十一日、御番之節出候書付之扣、

最前御書付出候通、上屋敷之外、所々屋敷、抱屋敷、預地之儀、此案文之通認可被差出候、委細之儀は別紙申入候、以上

七月　　渡邊外記

天野彌五右衛門

島田佐渡守

中川淡路守

別紙

案文竪紙に認可被申候

覺

一中屋敷　所付　何千何百坪

一下屋敷　所付　同斷

一抱屋敷年貢地無年貢地　所付證文記　同斷

但親類、緣者、浪人、家來迄、所持之者有之候はゞ、此末に書入可申事、

一預り地　　所付何千何百坪

右之外、抱屋敷預地、自分は不ㇾ及ㇾ申、家來にも無ㇾ御座ㇾ候、且又支配無ㇾ之親類、緣者、男女とも不ㇾ致ㇾ所持ㇾ候、以上、

年號月日　　　　誰名判

四人名付

別紙

覺

一抱屋敷之事

前々より改無ㇾ之遠方にても、屋敷と名付有ㇾ之分は、たとへ家作圍不ㇾ相濟候共、可ㇾ被ㇾ書出ㇾ候、尤家作圍相濟候共、相濟不ㇾ申候共、其譯書付可ㇾ被ㇾ差出ㇾ候、幷江戶之道法何里と申儀も、可ㇾ被ㇾ書出ㇾ候、且又不ㇾ限ㇾ遠近、相對にて他へ借置候はゞ、屋敷主方より誰に借置候と書付可ㇾ被ㇾ差出ㇾ候、借候者よりは書付不ㇾ及ㇾ差出ㇾ候、

一預地之事

一上り屋敷、或は明地割殘地、當分預り之分は不ㇾ及ㇾ書出ㇾ候、尤從ㇾ公儀ㇾ預候はゞ不ㇾ及ㇾ申、縱脇々より預候共、永々預居候はゞ可ㇾ被ㇾ書出ㇾ候、

一組支配有ㇾ之面々は、組切に一帳に認、可ㇾ被ㇾ差出ㇾ候、

一在國在城、又は遠國之御役人御役所に罷在候衆も、主人へ相達、其上にて書付可ㇾ被ㇾ差出ㇾ候、尤主人可ㇾ爲ㇾ名付ㇾ候、

一屋敷無ㇾ之衆も、其旨可ㇾ被ㇾ差出ㇾ候、

一抱屋敷、幷預地、自分は不ㇾ及ㇾ申、家來迄所持無ㇾ之衆も、其趣可ㇾ被ㇾ書出ㇾ候、若又自分は無ㇾ之候共、支配

無之親類、縁者、浪人、家來等、所持有之候はゞ、其譯も可被書出候、

一最前書付被差出候衆も、此案文之通書付認直し、四人之内何れへ成共、可被差出候、肩書に御役御奉公之品書記可被差出候、

一屋敷之儀、吟味之内、御役被仰付候歟、或は名被改、又は隱居家督之衆、四人之内へ何れへ成とも、可被相達候、

一町屋敷所持之面々、其所幷軒數共に書付可被差出候、百姓地にても町家有之候分は、書出し可申候、尤町屋敷無之面々も、其段書付可差出候、

〔享保集成絲綸錄三十九〕享保九辰年五月　○中略

一町内ニ交リ有之候拜領屋敷、拜借屋敷、助成屋敷、幷上リ屋敷等之儀、是又先達而書出候趣ニ而、委細内譯書記可差出事、

右書面之趣相心得、名主方ニ而能々帳面致吟味、相違無之樣ニいたし、可差出候、尤名主支配切ニ帳面相認、名主月行事奥判致シ可差出候、以上

五月

〔天明集成絲綸錄四十七〕安永二巳年八月

面々居屋敷、中屋敷、下屋敷、抱屋敷、坪數、幷所附相認、向寄之屋敷改迄可差出候、且又最前も相達置候通、家督其外名改等之節々、無等閑屋敷改江可相屆候、

右之通、可被相觸候、

八月

〔的例問答〕町屋鋪抱屋敷之譯之事

享和元酉年六月屋敷改江問合

覺

一抱。地。
一抱。屋。敷。
一町。屋。敷。
一町。並。屋。敷。

右之名目譯合、巨細致承知度候、以上、

六月

答

一抱地と申候は、囲家作等相成不申候場所、野田之儘を所持仕候を、抱地と唱申候、

一抱屋敷と申候は、囲家作等相濟候場所を、抱屋敷と唱申候、

但抱屋敷之内ニ而も、囲取拂家作何拾坪相濟候抱屋敷も有之、又何千坪之内狹囲何百坪相濟候抱屋敷も御座候、

一町敷屋と申候は、町奉行一手之支配場所を、町屋敷と唱申候、

一町並屋敷と申候は、町奉行と御代官兩支配之場所を、町並屋敷と唱申候、尤御代官支配ニも限不申、私領寺社領ニ而も、町奉行支配と兩支配ニ御座候得ば、町並屋敷と唱申候、

六月廿九日　屋敷改

一賃。銀。附。抱。屋。敷。と申候は、百姓名前ニ而所持仕候抱屋敷、天明六午年御改ニ而、直名前ニ相成候分、并其後百姓地新規抱屋敷相成候分、役人足賃銀取立申候、

囲壹間ニ付　人足五人

此賃銀五匁三分、但壹人ニ付壹匁二分、

家作拾坪ニ付　人足五人

前同断

右之通、毎年十二月中、私共御役方ニ而取立相納申候、

右を役人足賃銀附抱屋敷と唱申候

七月　屋敷改

〔大乘院寺社雜事記〕延德四年八月廿八日

一杏郷ニ向屋敷ト號シテ、杏郷之寄郷在之、久しく社家輩居住之屋敷也、○下略

〔享保集成絲綸錄〕五享保六丑年十二月

申渡○中略

一名主、角屋敷御年頭ニ上ゲ候面々獻上も、何モ御扇子三本入壹箱、臺乘可ㇾ差ㇾ獻上ㇾ候、

十二月

享保六丑年十二月

一來寅正月三日、御城江御年頭御禮ニ上り候名主幷角屋敷之者、昨日喜多村所ニ而申渡候通、扇子臺之下ゲ札、

御扇子三本入　何町名主誰

同断　何町角屋敷誰

右之通、銘々名書致シ、紙札ヲ附可ㇾ申候、紙ノ類熨斗包水引ニモ、金銀之箔は不ㇾ及ㇾ申、錫其餘之箔附候紙水引用ヒ申間敷候、若俄ニ無ㇾ據差合有ㇾ之、難ㇾ罷出ㇾ面々は、正月二日迄之内、其斷書可ㇾ被ㇾ差出ㇾ候、少モ違背有間鋪候、以上、

十二月

〔續百一錄〕寬保三年三月廿日

口上覺

日野殿御屋敷ニ御裏附尼衆被差置候屋敷名代河井權兵衛江諸事氣遣之儀申渡被置候得共、其元支配所之義故、何角御世話之由過分之至に存候、猶以此以後義宜御世話頼入存候、爲其使を以申入候、以上、

三月　山本隼人
西野左近

岡崎村庄屋
三郎右衛門殿

〔吾妻鏡五十〕文應二年○弘長元年二月廿九日辛酉、關東祗候諸人家屋之營作、出仕之行粧以下事、可令停止過差之由被定之云云、

〔大内家壁書〕今八幡社頭幷御神領事條々○中略

一御家人中、雖有所望地、不可立神人居宅事、○中略

右條々堅固所被仰出也、以此旨可有其沙汰之狀如件、

文明十年卯月十五日　遠江守正任奉

〔東武實錄〕元和五年五月十五日

屋敷之内ニ町人幷無主置候輩堅停止候、來廿二日御撿使候間、右之者共置候屋鋪ハ可被召上者也、

五月十五日

九年二月十五日

覺

屋敷之内ニ、町人幷主なしもの置候事堅御停止候、來廿二日より撿使廻り候間、右之者共差置候屋敷ハ可被召上者也、

元和九年二月十五日

〔教令類纂初集五十五〕萬治元戊戌年八月朔日

覺

一面々之屋敷所付四方間數、幷屋敷之なり東西南北等、念を入繪圖にしるし可被申事、

一左右表裏誰人と名字書付可被申候、但近所と申合、一紙之繪圖に調申候得者猶以能御座候、自然左樣に不成子細は、壹人宛別紙に繪圖可被仕候、

一屋敷之内高下有之候哉、亦は道筋坂谷堀川など有之に於ては、書付可被申候、

一中屋敷下屋敷所持之衆は、先條之通委細書付可被申候、

一借屋敷、又は地代屋敷被罷在候はゞ、其譯幷地主等書付可被申候、

右之通、面々支配方ゟ被相觸、繪圖早々出來次第、評定所江遣し、繪圖之役人へ可被相渡候、

八月

〔大成令七十四〕寬文四辰年九月

一此以前も相改候通、町中に大名衆幷侍衆之屋鋪、御扶持人衆同醫者衆之屋敷、出家衆之屋敷有之候はゞ、誰人之屋敷家守誰と有體書付、帳面に作り、町中連判仕、町年寄方江持参可被申候、若本屋敷主之名を隱シ置、家守之名計を書付、帳面上ゲ置候以後、其かり名之家守惡事仕出シ候歟、又は欠落など仕候はゞ、其屋敷ニ罷成候間、自今以後、此旨本屋敷主方江申斷、少も違背無之樣に入念可申觸事、

九月

〔享保集成絲綸錄 三十八〕寛文七未年十月

覺

一從㆓此以前㆒如㆑被㆓仰出㆒之、所々明地に家を作出儀、堅御制禁之條、明春以㆓御撿使㆒可㆑被㆓相改㆒之、若新規に家を作出輩有㆑之におゐては、可㆑無㆓曲事㆒事、

一奉公人屋敷之内商賣人に借之儀、彌御停止也、萬一借輩於㆑有㆑之は、是又可㆑爲㆓曲事㆒事、

一自今以後、御料私領之百姓幷寺社領等之地をかし、家をつくらせ候もの於㆑有㆑之者、可㆑爲㆓曲事㆒事、
附、所により斷之上可㆑任㆓差圖㆒事、

十月〇中略

元祿九子年七月

覺

一今度本所深川も屋敷改被㆓仰付㆒候間、向後求屋敷地子屋敷等作事仕候者、先達而屋敷改江相伺可㆑被㆑任㆓差圖㆒事、

一只今迄有來屋敷坪數幷家作坪數之書付、屋敷改之方江可㆑被㆓出置㆒事、

一寺社百姓町人其外抱屋敷家作改之儀者江戸廻之通に候事、

右之旨被㆓仰出㆒者也

七月

〔享保集成絲綸錄 三十九〕正德二辰年七月

先達而相觸候町人抱屋敷願地之義、彌念入書出可㆑申候、且又町人居宅之外ニ町屋敷所持之者共、幷拜領屋敷拜借地、江戸近在田畑、右居宅共間數坪數相改、書付差出可㆑申候、若居宅計持候者不㆑及㆓書出㆒間、此旨町中不㆑殘可㆓相觸㆒候、

七月

〔御書付留要略 二〕一享保二酉年六月廿七日、左之御書付山岡助右衛門被相觸候、

一各組支配迄、居屋敷書出候筈ニ罷成候、尤組屋敷も書上候筈ニ候、此案文之通、一組切帳面致近日之內三人之內可被差出候、

一最前差出候諸屋敷違變候儀者、彌御届可有之候、

一御役替小普請入名改候節、又者家督之方可有御届候、以上、

六月　島田佐渡守

佐々木五郎右衛門

山岡助右衛門 ○中略

一享保二酉年十月十日、左之御書付、上田新四郎被相觸候、

覺

一百姓地に、近年抱屋敷數多有之候、御鷹場之障にも可被成、其上猥に抱屋敷所持候者、無益之事にも候條、右之趣を以、抱屋敷構候圍取拂可申候、勿論向後新規之抱屋敷彌可爲停止事、

一居所無之面々者不及申、差當致住居候歟、或者拜領屋敷江取繕候抱屋敷、又者親類家人不差置候而は難成子細候はゝ、其譯委細相達、差圖を受、圍可差置候事、

一年貢地ニ而も町中或者屋敷續に有之抱屋敷之圍者伺之上其儘差置不苦候事、

一右品々之外者、抱屋敷之分圍取拂候儀、來戌二月を限、家之儀者勝手次第追々に取拂可申候事、

但竹木しげり候所は、差圖を請切拂可申候、

一居屋敷計に而、外に屋敷所持無之輩者、抱屋敷も圍者取拂、家差置候儀、勝手次第たるべく候、若居宅類燒之剋、抱屋敷之家に致住居候內者、家之廻り當座之圍者不苦候、不致住居候節、圍差

置候儀者不相成候事、
但下屋敷可被下候格に而、未下屋敷無之面々、順次第相應に下屋敷可被下候間、抱屋敷者取拂可申事、
一陪臣浪人、町人、抱屋敷不相成候、然共陪臣主人浪人町人者所々之支配ゟ相願、格別候譯相立候は丶、吟味之上、差圖可有之事、
一圍取拂候共、作物等爲致、地計抱置候分は、勝手次第たるべく候、耕作人差置候百姓並之家者、取、拂候に不及候事、
一寺社百姓等之抱屋敷も可爲同然事
右抱屋敷之儀、横田備中守、島田佐渡守、佐々木五郎右衛門、山岡助右衛門方ゟ可致差圖候、圍取拂候節も其度之屋敷改江可被相達候、
酉十月
〔的例問答〕中屋敷下屋敷ゟ出火之事
享保八卯年十一月十八日御書付
中屋敷下屋敷抱屋敷ゟ出火候者、自今其居屋敷同樣差扣之義伺候樣、向々江可被達候、
同年同月廿八日、水野壹岐守殿被仰渡候者、拾間ゟ内之出火者不及遠慮筈ニ候處、拾間ゟ内にても類火有之候得者、遠慮之筈ニ候、拾間餘ニ而も一ト屋敷之内ニ候得者、不及遠慮筈ニ成候間、其心得寄々向々江物語致し置候樣被仰渡候由、右之通ニ被仰渡候得共、自火ニ而類燒無之候ても、遠慮伺被致候樣ニと御目付衆物語有之候由、
〔御書付留要略 二〕一享保十六亥年十一月十二日、左之御書付、本多伊豫守殿被成御渡候間小川新九郎被相觸候、

宅地

近來所々屋敷之間數打候者有之由相聞候、總而屋敷之間數改候儀者、御普請奉行ゟ仕事ニ候、其屋敷江申聞候以上、間數打候事に候、若屆不仕候而、屋敷主又者辻番ゟ相尋不分明ニ付、其所江留置、御普請奉行又者向寄之御目付江可相屆候、

右之趣可相觸候

〔天明集成絲綸錄四十七〕寶曆十三未年四月

屋敷違變并名改繼目家督等之儀、屋敷改江可相屆旨、享保四亥年、寬延二巳年兩度御書付も出候、彌以右之趣被相心得、屋敷替名改等之儀、屋敷改江可相屆候、

〔德川禁令考二十六屋敷改〕嘉永五子年十月十一日

抱屋敷內家作ハ勿論、竹木伐取等屋敷改江承合之事、

伊勢守殿御渡　　大目付江

覺

抱屋敷內家作ハ勿論、竹木伐取等、都而屋敷改江承合、差圖次第取計可申筈之處、近頃ハ承合方不行屆向も有之哉ニ相聞候、向後右樣之心得違無之樣可致候、

右之趣、向々江寄々可被達置候事、

〔碩鼠漫筆十五〕京間田舍間考

屋敷地の步數の定に、京間田舍間と云事は、古代よりの制とおもへど、いまだ其所出をしらず、且方六尺五寸を京間と稱ひ、方六尺を田舍間と稱ふも、何をもて割定けむものとも、さらに其所據をえらず、さるを京師人藤爲恭と云人の所藏とて、書名もしられぬ葉子本の片葉を、摸寫したる一紙を見るに、筆勢のおもふきなど、恐くは建武以來、應永以前にやとおぼしきものにて、これに據て熟おもへば、方六尺五寸を京間といふこと、おろ〳〵稽へ知らるゝ由ありて、いひしらずお

ばゆるまゝに、さらに又左に摸寫して、其おもひ得らるゝ由を、委曲にいひ試みむとす、但此片面には、天德四年新内裏の柱に、遺るとも又もやけなむ云々と云歌を、蟲のはみ顯したる事を記せり、たゞし此片面は、今こゝに要なければ寫さず、

舊記發備　　京師藤爲恭藏

洛陽地法

町内千六百丈十六万寸、一方六千尺一方卌丈四面百六十丈、凡一丁内卅二戸主也、

一戸主長十丈、弘五丈　准百卌八歩三尺二寸　三尺六寸爲二一歩一

田舍定一丁二段百廿四歩一尺六寸也○中略

右を建武以來かといふは、書體に依て推考せるところ、又應永以前かといふは、拾芥抄よりも今すこし古げなるが故なり、またかのみならず、醍醐理性院の雜記にも、其體裁いとよく似たれば、もしくは同じ殘闕にやとも思へば、かた〳〵當時のものならむかとは云なり、

○按ズルニ、宅地ニ上中下ノ三等級アル事ハ、田品篇ニ在リ、

〔粟生系圖〕盛廣粟生四郎左衞門尉法名道□

遠江箕取郷、三河國額田郷、秦梨子郷、梅薮屋敷、草鼻屋敷、木窪破世工地屋敷、上總國秋田郷高師村知行ス、

〔天龍寺文書〕一臨川寺領大井郷内關所遠那院并屋地事、寺家管領不レ可レ有二相違一者、依二院宣一執達如レ件

建武三年十月廿九日　　參議花押

謹上　夢窻國師禪室

〔政所賦銘引付〕三文明十二年庚子

一中務大小笠原左京大夫政秀代一色長門入道正久文明十二九十四

屋地四町々(西室町、東烏丸、北六角、南四條坊門、)事、任應永卅三七十三御判之旨、知行无相違候處、萬松軒號買得相傳御知行更无覺悟云々、

〔柳斧雜筆四〕御旗本の兵士、祿千石の屋敷は千七八百坪より五百坪まで、三百石は千坪餘より二三百坪まで、百石は五六百坪より百五拾坪まで、御前許なども、殿中に召て執事の命を傳へらるる兵士の屋敷三百坪より百坪まで、殿中に召ことなく、其頭々の家にて命を受る兵士は、二百坪より五六十坪までを限りとす、廣きも限に踰す、狹きも限より減せず、文政元年三月定められしとなり、甲斐の武田の家法に、鎗一本の兵士の屋敷三百坪なり、三百坪なき時は、十一杖の的場作るべき地なければなりと見ゆ、十一杖とは八丈二尺五寸(十三間四尺五寸なり、)三百坪は、方田にして方十七間餘なれば、十三間四尺五寸の的場築に優なるべし、又奥州某の城下の町割屋敷割の制を聞くに、足輕町奥行十八間、間口は四間半より五間餘に至る、八十一坪より九十坪に及ぶ、然れども足輕は弓を習ふが故に、射場の爲に奥へ長く屋敷を割與へしとなり、是を以て見れば、兵士は必屋舖內に的場築くべき制と知らる、

上野箕輪の城繪圖も、又此制に違ふことなきを以て考ふるに、諸國通同の如く知られたり、名和長年の屋敷に、笠懸の馬場ありしことは、伯耆卷に見え、京都將軍家の花の御所の內にて、細々犬追物射させ玉ひしことゝ、伊勢宗五の大冊子に見えたり、然れ共、花御所の占地一万八百坪に過ぎず、其內に寢殿、泉殿、對の屋など棟數立られて、猶犬射玉ふべき空地あり、蓋冗長の營造なく、必要専途の第宅のみなればなるべし、偖こそ武家雛形に門、舞臺、物懸、廣間、納戶、構厩と立つゞけしも理と聞えしなれ、古き武家の館の圖多く傳はらず、惜むべきことなり、

〔柳斧雜筆三〕百姓の屋敷は間口七間に奥行十五間の定めと、美濃國可兒郡天正十三年の撿地帳に見えたり、石田杢頭の奉行せし由なれば、豐臣關白の掟と聞ゆ、此坪數百五坪なり、(三畝十五歩の地也、)但

是は軍役を宛らるゝ爲となり、去ば屋敷廣くて三百坪に餘れば是を三軒役と云、又千坪餘なれば十軒役と云、然るに此間口七間奥行十五間と云こと長東正家、石田杢頭等の心より定めしことにやと思ひしに、左にあらず、大内裏の頃、一町の内を三十二戸主と割定められし時の一戸主と云は、間口四丈五尺餘、京間七間餘奥行九丈五尺京間十五間餘なるよし、拾芥抄四行八門の法に見えたり、是に依て考ふれば、長東石田等の私意に定めつること〻も思はれず、若拾芥抄に從て立たる屋敷割ならば、畜物と云者は何時何の用に立と云ことの彙ては知ぬものなるのみならず、豐臣太閤も畜物ぎらひとは云難し、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年〇建保元年四月二日、相州〇北條義時被拜領胤長荏柄前屋地、則分給于行親忠家之間、追出前給人和田左衛門尉義盛代官久野谷彌次郎、各所卜居也、義盛欝陶含欝陶、論勝劣、已如虎鼠、仍再不能申子細云云、先日相率一類參訴胤長事之時、敢無恩許沙汰、剩面縛其身、渡一族之眼前、被下判官、稱失列參之眉目、自彼日悉止出仕畢、其後義盛給件屋地、聊欲慰怨念之處、不事問被替逆心彌不止而起云云、

〔幕朝故事談〕諸侯御旗本にて町屋敷被下候は、御醫師と女中計り也、御中間は御目通り致者故、衣服見苦敷候ては、御目障に相成候故、町屋敷被下、伊賀は被召出候時分、小身にて口り彙候故、被下なるべし、御小間使黒鍬にても、町屋敷は不被下、猷廟〇德川家光の敎命にて、羽織を長く被仰付候は黒鍬也、

〔敎令類纂初集五十五〕元祿九丙子年八月二十二日

於本所屋敷被下候坪數

拾萬石ゟ拾五萬石迄　七千坪

七萬石より九萬九千石迄　六千五百坪

五萬石より六萬九千石迄	五千坪
三萬石ゟ四萬九千石迄	三千五百坪
壹萬石ゟ貳萬九千石迄	貳千七百坪
八千石ゟ九千石迄	貳千三百坪
五千石ゟ七千石迄	千八百坪
三千石ゟ四千石迄	千五百坪
貳千石	千坪
三百石ゟ九百石迄	五百坪

右は大概之積、屋敷之品に寄、少づゝ之増減は可有之事、

右之通、子八月、各出羽守、右京大夫相談極、

覺

西　大川を限り

東　中川をかぎり

南　永代新田海岸をかぎり

北　あや瀬川をかぎり

右之通可被相改候、以上、

子八月二十二日

各出羽守、右京大夫申談候上ニ而、本所深川屋□花房勘右衛門、飯田四郎左衛門江、於豐後守宅、書付を以て申渡之、

(享保集成絲綸錄三十九)享保九辰年五月

一其町々拜領屋敷之分、公役銀割直シ有レ之間、右之趣、委細書付可二差出一候事、

一町並屋敷之内ニ交リ有レ之候拜領屋敷之分者

何町何町目

總間數京間何間此坪何程

内

京間何間　　誰

此坪何程　　拜領屋敷

京間何間　　家持何人

此坪何程　　町並屋敷

右之通、帳面ニ認可二差出一候、尤去ル寅年〇享保七年書上候趣相心得可二差出一候事、

一町内不レ殘拜領屋敷之分者、去ル寅年書上候通帳面ニ認可二差出一事、〇中略

一願之儀有レ之、先達而願之通被二仰付一相濟候分者、是又帳面之内、其所々ニ相濟候段、帳紙ニ致シ可二差出一事、

一願之儀有レ之、先達而願書差出、未二相濟一候分、是又帳面ニ願之趣張紙いたし可二差出一事、〇中略

右書面之趣相心得、名主方ニ而能々帳面致二吟味一、相違無レ之様ニいたし可二差出一候、〇中略

五月

〔天明集成絲綸錄　四十七〕天明元丑年四月

御勘定奉行江

大坂御代官大屋四郎兵衛御役屋敷手狹ニ付、手代町宅等爲レ致、取締も不レ宜候ニ付、彼地町奉行御役宅境、五百七拾坪餘之明地、不レ殘足地ニ相願候得共、右明地之內、三百拾九坪餘足地ニ被レ下候間、

其段可被申渡候、殘貳百六拾坪餘之地面者、爲火除之致空地置候樣、牧野越中守被申渡候間、可被得其意候、

四月

〔公用雜纂 四〕屋敷願

（朱書）
文化四卯年七月、西丸御用番小笠原近江守殿江春阿彌を以進達御扣添、

屋敷拜領奉願候書付　寛越前守

西丸新御番寛越前守組
杉浦新右衛門

高三百俵拾人扶持

右新右衛門儀、甲府勤番ゟ御番替被仰付候に付、甲府拜領屋敷差上、於御當地相應之屋敷被下候樣、先達而奉願候處、右願之通、甲府拜領屋敷差上、於御當地被下候間、所者見立願候樣、享和元酉年十二月、植村駿河守殿被仰渡候、依之駒込新屋敷田安殿上ゲ地森川源左衛門上ゲ地三百坪拜領仕度奉願候、則別紙繪圖面相添差上申候、新右衛門願之通被仰付被下候樣仕度奉願候、以上、

七月廿四日　寛越前守

同年八月十三日、御普請奉行岩瀬加賀守ゟ杉浦新右衛門高之儀、承知いたし度旨申來、返答左之通、

岩瀬加賀守殿　寛越前守 ○中略

（朱書）
十二月二十四日、青山大膳亮殿御渡、

西丸新番頭江

駒込新屋敷森川源左衛門上ゲ地
貳百八拾坪　寛越前守組
杉浦新右衛門

右願之通、屋敷場所被下候、御普請奉行可被談候、

〔代官觸留四〕屋敷見立願濟、未屋敷拜領不致分不洩樣取調、早々申聞候樣可被達候事、
右之通、水野越前守殿被仰渡候間、半紙竪帳に被成不洩樣御取調、拙者共之内江早々御差出可有之候、

〔公用雜纂四〕居屋敷隣明地を添地願

高千五百石内（千百石本高 四百石御足高）　御先手　佐野豐前守

私拜領屋敷、小日向服部坂上ニ而御座候處、安永五申年、屋敷相對替願之通被仰付、永田馬場南横町ニ而五百七拾五坪御座候處、間口之外三方共屋敷境段違ニ而、境際長屋家作等難仕、當御役相勤、手狹ニ而難儀仕候、依之可相成義ニ御座候はゞ、私屋敷隣霞ヶ關諏訪部三之助元御預御厩上ケ地千四百三拾貳坪之内、相應之御添地被下置候樣仕度奉願候、則繪圖面相添差上申候、右之段偏奉願候、以上、

七月　佐野豐前守

〔吾妻鏡三十六〕寛元二年八月三日辛未、市河女子藤原氏事、於往柄社不啻通落合藏人泰宗之由書起請文、令參籠之間、以御使寂阿西佛被加撿見之處、七日七夜無其失之由各申之、仍市河掃部助入道見西所訴申之信濃國船山内青沼村、伊勢國光吉名、甲斐國市河屋敷等者、可令氏女領掌之、至市河屋敷者、氏女一期之後、可賜見西子孫之由今日被定之、氏女者見西舊妻也、令相嫁之始、若離別者、可知行件所々之旨成契約之間、任契狀可充賜之趣、有氏女訴訟之時、令密通泰宗之旨見西申之、依難被閣之、及起請參籠等沙汰云云、又爲領家進止之所々事、御家人相傳所帶等、雖爲本所無指誤、於改易者、任先度御教書之旨、可被申子細之趣、被仰六波羅云云、

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年（○寶治元年）七月十七日戊辰、相州（○北條時賴）自六波羅參著、以故入道武州經時小町上舊宅爲居所、是前武州禪室跡也、武州經時被相傳之處、去寛元二年十二月燒亡、然而如元新造

於此第、被取終之後、于今無其主云云、

〔南路志十三〕讓與所領屋敷田畠事

合專當名壹名內者

右件名者爲諸雜免の領地也、然者代々讓狀にまかせて、御房丸之所えゆづりわたす所實也、いかなる本家領家地頭あづかり所御ちぎやうある共、是を本證文のゆづり狀にまかせて、こうれいのせんだう百しやう等あいもよをし、御くう事をざい所〱つかまつるべき物也、仍きやうこうきけいのゆづり狀如件、

正平十一年二月一日　伴時貞花押

太郎法師花押

〔香取文書七〕契約狀　分神寺內屋敷田畠等事

右件の屋敷田畠等者、分神寺末友重代相傳の私領也、然而三ッ四ッとはんぶんづゝもち候ところ也、有限御公事は、一事のけたいなく、半分宛きんしすべし、若、三ッ二ッ、三ッ四ッにむき、一言もいらん申事候はゞ、このやしき田畠を一ロニ知行せられ候べく候、仍爲後代、契約之狀如件、

文和二年四月廿九日　分神寺末友有判

〔家屋敷一件〕手形之事

一捴十郎町、東側北角ゟ四軒目、表間口京間五間、裏行町並貳拾間有之家屋敷壹ヶ所、拙者養父太郎兵衞所持仕來り候處、此度拙者讓り請、向後所持仕候に付、沽劵狀之通、間數地境等、相改無相違請取申候、最當所者、塗家作り、御定場所之義、慥に承屆け候、右急度相守、勿論町方不相應之家作等致間敷候、

一御法度之儀、大切に相守、諸御觸事、地借、店借、召仕等迄、入念申聞、諸事貴殿支配を受、急度相守候

樣可仕候、勿論地受狀、店受狀、宗旨寺手形、入念取置可申候、最町役之義は不及申、町內入目其外町中一統之義相滯申間敷候、不依何事、一同仕ざる新規之義申張、及論候樣成儀致間敷候、

一寬政三亥年町法御改正ニ付、町入用減金之七步は、町御會所江積金致、壹步者町入用江差加江候儀承知仕罷在候、少も差滯申間敷候、

一右家屋敷讓り、繼目、名改等之儀有之候はゞ、早速沽券狀江致繼書、町內江右之段申弘メ候義、遲滯無之樣可致候、

一家守相附候共、前書之趣篤と申聞、爲相背申間敷候、最家守退候歟、又は病死抔致候はゞ、早速家守相附可申候、若家守不勤未熟之義有之、貴殿ゟ斷有之候はゞ、早速附替何れにも町義差支無之樣致可申候、爲後日仍如件、

芝田町八丁目家持條助事　仙波太郎兵衛印

文化十三子年九月十九日

名主　長尾久藏殿

同　長谷川伊左衛門殿

後見　富澤德兵衛殿

〔德川禁令考 三十七 屋敷〕文化元酉年六月八日

屋敷相對替年限之事

本多美濃守殿御渡

覺

相對替致し候屋敷、又ハ相對替願之儀、是迄ハ十ヶ年不相立候而ハ難相濟候、以來ハ五ヶ年目より相對替相願候共不苦候間、此段向々江寄々可被相達置候事、

但新規屋敷拜領之面々も、三ヶ年不相立候而ハ、相對替願不差出候得共、以來ハ年限ニ無構、相

對替願差出不苦候間、其段も可被達置候事、

六月

〔的例問答〕屋敷相對替願之事

寛政五年八月、奥御右筆衆へ問合、左之答之由、

屋敷拜領致し、三ヶ年相立相願候得ば相濟候事、一旦相對替致し候上、亦相對替致候儀、年限願可申事、

切坪替又候切坪替致候儀は、年限之無差別相濟候事

〔落葉集〕屋敷三方相對替奉願候書附

長谷川兵助拜領屋敷
本所吉岡町

高貳百五十俵
小普請組松平石見守支配

貳百坪　稻垣藤四郎江

私先祖之內、何代目ニ御座候哉、青山新屋敷之內四百拾貳坪拜領屋敷御座候處、右者譜代拜領仕候と申、年月等之儀、先年類燒之節、書面燒失仕、巨細之儀相知不申、其後私曾祖父稻垣藤左衛門御代官相勤候節、右青山新屋敷之內四百拾貳坪與、小普請組田中出雲守支配岡部長元拜領屋敷相對替奉願候處、願之通堀田相模守被仰渡候段、御勘定奉行中山遠江守申渡、其後相對替不仕候、

稻垣藤四郎拜領屋敷
元飯田町橋坂下

七百五拾六坪　御代官　大原四郎右衛門江

大原四郎右衛門拜領屋敷
牛込山伏町

富士見御寶藏番
三宅久三郎組

貳百坪　長谷川兵助江

右之通、屋敷三方相對替仕度奉願候、以上、

享和二戌年酉七月

〔公用雜纂四〕（朱書）屋敷相對替幷三方替共

文政七申年十二月十三日、京極周防守殿江進達、

周防守殿

屋敷相對替願

水野小十郎

屋敷相對替奉願候覺

高貳千石
内五百五拾俵御足高

新番組
水野小十郎

拜領屋敷下谷貳丁目

八百五拾三坪餘

右屋敷、私御先手相勤候節、小石川御藥園脇拜領屋敷貳千貳百坪與寄合秋元隼人正下谷貳丁目下屋敷八百五拾三坪餘與相對替仕度段、文化十酉年十一月十一日奉願候處、同年閏十一月十六日、願之通被仰付、其後相對替不仕候、

右屋敷不殘

藤堂佐渡守江

高五萬三千石

藤堂佐渡守

拜領下屋敷
神田佐久間町

九百五拾坪

右屋敷之内東之方ニ而七百五坪

水野小十郎江

右之通、屋敷相對替仕度、此段奉願候、以上、

十二月十三日

水野小十郎

寛政十戌年十月三日、青山下野守殿へ進達、

屋敷三方相對替願

西丸新御番松平侶之進組
松平侶之進

高貳百五拾俵
内百五拾俵御足高

佐々兵之丞

宅地召上
宅地引料
代地

拝領屋敷 小川町神保小路　三百九坪

右兵之丞拝領屋敷、同人祖父佐々勘兵衛儀、元文元辰年六月十四日、本郷御弓町ニ而拝領仕、其後御留守居土屋兵部少輔組與頭鈴木幸七郎拝領屋敷江相對替奉願候處、延享三寅年七月三日、願之通相對替被仰付候旨、西尾隱岐守殿被仰渡候、

右屋敷不殘　大御番遠藤備前守組 佐山左門江

高三百俵　佐山左門

拝領屋敷 小石川元白山御殿跡　貳百五拾坪

右屋敷貳百五拾坪之内 百貳拾坪　小林貞五郎

小普請組戸田中務支配 小林貞五郎

高貳百俵 四人扶持

拝領屋敷 駒込片町阿部伊勢守上地 貳百坪

右屋敷不殘　佐々兵之丞江

右之通、屋敷相對替仕度奉願候、兵之丞願之通、被仰付被下候樣仕度奉願候、以上、

十月三日　松平倡之進

〔德川禁令考屋敷改二十六〕寶永三戌年十二月

宅地引料之覺

一去年、當年、根津權現社御用付而、屋敷上リ候內、被地家作住居仕候分江ハ、挽料金被下候間、支配支配頭々迄吟味、御勘定奉行石尾阿波守、御目付戶田七內江相達受取候樣ニ、向々江可被申達候、以上、

覺

一千石之内より三百石迄　金貳拾兩
一三百石之内より百石迄　同拾五兩
一百石之内より四拾石迄　同拾兩
一四拾石之内より拾石迄　同五兩
一家作仕罷在候者江借置候共、自分少々ニ而も家作いたし住居仕候者、右之分江引料金被下候間、支配々々頭々より断次第、其品承屆可被渡候、
一家作一圓無之者
一家作を借し家を作らせ、其身者其所ニ不罷在者、
一家ハ屋敷主より作り、外江借置候者、
一長屋ニ住居仕候者
右之外江ハ引料金被下候間、可得其意候、以上、

（御書付留要略二）屋敷辻番

一正德六申年六月七日、左之御書付、森川出羽守殿被仰渡候、
支配之内權太原元御屋敷三田元御屋敷之内御長屋に罷在候者共并預屋敷有之分は、右御長屋可指上旨可被申渡候、

（天明集成絲綸錄四十七）明和四亥年十二月

御勘定奉行江　松平淡路守

居屋敷并拜借地共、御用に付差上候、四谷御堀端尾張殿屋敷之内被下、銀五百枚被下
右之通に候間、得其意可被談候、○中略

一明和五子年二月

御勘定奉行江

御勘定　原田孫助

右町屋敷先達而被召上候、爲代地武士地ニ而、大久保尾張殿上ゲ地之内貳百坪被下、爲引料銀拾枚被下之、

金拾兩　御勘定　眞井利左衛門

同五兩　御普請役　倉橋定右衛門

右屋敷、先達而被召上候爲代地、大久保尾張殿上ゲ地之内ニ而、元坪之通被下、爲引料書面之通被下之、

右之通可被申渡候、尤町奉行御普請奉行可被談候、

明和六巳年七月

御勘定奉行江

漆奉行組手代　山路總兵衛

深川南松代町壹町目町屋鋪御用に付可差上候、代地者追て可被下候、其段可被申渡候、尤町奉行江可被談候、

七月

地返

〔御觸書集覽〕天保十二丑年十二月廿一日

御目見以上以下、陪臣、寺社、町人等、御料、私領、寺社領に不限、百姓地借受住宅之者、來寅年中迄に、返地爲仕可申、尤來年中に者不殘返地仕候樣、嚴敷取計可申むね越前守殿被仰渡候、依之借地之分夫々呼出し、早々返地申渡候間、御支配向にて、百姓借地有之候はゝ、右之趣兼々被仰渡可被下候、

十二月

右之通屋敷改中ゟ御達有之候間、組合不洩樣、如例之早々可申觸旨、被仰渡承知奉畏候、爲後日御請御帳へ印形仕置候、以上、

丑十二月廿一日

南北小口年番
檜物町 名主 又右衛門
新革屋町 同 定次郎
多町 同 五郎大夫

(享保集成絲綸錄三十九)享保六丑年十二月

西河岸町、呉服町、本材木町壹丁目、貳丁目邊、本銀町、本石町邊、今度明キ地ニ成候筈之處、町人共相願候品有之、自今火事之節、火移不申樣可致候間、居なりに罷在度相願候ニ付、願之通申付候、此以後火移し候はゝ、地面取上候筈ニ成候間、定而右町々江火は移し申間敷候、就夫日本橋際南は本船町、品川町裏河岸、西は御堀端之町々、北は本石町壹丁目ゟ同四丁目南側迄、東者伊勢町通、都而此邊之町々、向後火事之節何方へ成共飛火いたし燒立候はゝ、其壹町可取上候間、了簡致し、隨分火移り不申候樣ニ、兼而其旨相心得可申候、爲其前廉申渡置候、

十二月

(用屋敷一件)爲取替申規定之事

一此度御用屋敷御地所之內、東之方五百坪之分拜借仕、只今迄地低又者田地等ニ相成有之分、追追埋立、關板等仕付、地形出來之上、貸長屋相立候積、御願相濟候上者、左之通相心得可申候、

一貸長屋相建候ニ付、店子之もの共住荒し候而者難儀致候間、店五人組、世話人壹人附置、店賃取立方、店內取締方等爲致候ニ付、万一不取締等之儀、御心付之儀も有之候はゝ、右世話人江御申

聞可被下候、世話人ゟ夫々申付、不取締無之樣爲致可申候、

一御公儀樣御法度之儀者不及申、總而不見屆者店内江一切差置申間敷候、

一火之元等別而入念、不取締無之樣可爲致候、

一地借店借等、追々貸附候節者、店子之もの不引移以前、店受人相調、店受狀貴殿御名前ヲ以無相違取置可申候、尤店子名前等其度々御斷可申候、

一拜借之御地所、當月分ゟ總御地代、我等方ニ而上納仕候儀ニ付、店子之もの共代り候度每、祝儀樽代其外、右拜借地之分者、都而我等方江受取、世話人之手當ニ可致候、

一店子之もの、店賃滯候歟、又者不取締之儀等有之、店立致候節、万一相拒候もの有之候はゞ、早速御訴訟御取計被下度、其外都而御訴訟等御取計被下候節は、相應之御挨拶可致候、

一店子之もの共、万一諸役所樣江御訴訟、其外罷出候儀有之候節者、右同樣可爲致候、

右之通相心得、町法之趣堅相守、不取締之儀無之樣心附可申候、爲後日爲取替一札如件、

吉岡町貳町目御用屋敷拜借人　佐七印

文政十三寅年十月十九日

吉兵衞殿〇圖略

御用屋敷拜借人之儀ニ付申上候書付

御屆　本所道役

私共御預り、本所吉岡町貳丁目御用屋敷、元二ヶ屋敷ニ而總坪九百四拾坪之處、東之方五百坪之場所空地多ニ而、地低水溜之地所、此度本銀町會所屋敷濟吉店佐七と申者、自分入用を以、右場所追々地形致、家作補理貸附度旨相願、願之通聞濟候はゞ、地借之有無ニ不拘、月々金貳分貳朱ヅヽ地代上納致度旨相願候間、身元相糺、且家主吉兵衞方差障之有無共相糺候處、差障儀も無之間、願

之通、地所貸附申候、尤爲₂以來之₁前書吉兵衞、佐七儀、爲₂取替₁證文爲₂致候、此段御屆申上候、以上、

寅十月

家城善兵衞

清水八郎兵衞

拜領屋敷貸付

〔德川禁令考〕三十七 屋敷 天保十四卯年正月晦日

拜領屋敷を、親類其他江貸置候儀ニ付御書付、

越前守殿御渡

享保四亥八月

一拜領屋敷を他江貸し置、自分ハ外ニ罷在候儀は有₂之間敷事ニ候間、其旨可₂相心得₁候、右屋敷ニ罷在候而、屋鋪之端を親類ニ貸置、住宅爲₂仕候儀ハ不₂苦候、他人江貸置候儀ハ可₂爲₂無用₁事、

一役屋敷抔江引越罷在候者、拜領屋敷を他江貸置候儀は不₂苦候、然共他之もの江家作爲₂致候儀ハ可₂爲₂無用₁事、

一幼少之者、一類方江引取置、跡屋敷外江貸置候儀は不₂苦候事、

一組屋敷ハ勿論之儀、與力同心抔之屋敷、前々より貸來候ものは格別、其外右類之輕きもの共、屋敷貸候儀は頭支配江相達、差圖次第貸可₂申事、

一火事ニ逢候者、當分普請難₂仕候ニ付、明ケ置、外ニ住居仕候儀ハ不₂苦候、右屋敷を外江貸候儀ハ可₂爲₂無用₁事、

右之通ニ付て、屋敷借り罷在候もの、借地引拂候儀ハ、來年中ニ可₂限候、

同年十月

一拜領屋敷、自分住宅いたし、屋敷の端を、親類ニ貸置候儀ハ不₂苦候間、最前相觸候通に候、就₂夫親類遠近抔相尋候者も有₂之候ハヽ、遠き續きにても世話いたし候親類を差置候事不₂苦候、緣者

も同斷ニ候、たとへ近き親類にても、地代も爲出貸候儀ハ不仕筈ニ候、

右之通、享保之度、萬石以下之面々江相觸候處、篤と不相辨ものも有之哉、近來猥ニ相成、幼少にも無之面々、拜領屋敷を他江貸置、自分ハ外ニ罷在、或ハ拜領屋敷之内を、多人數江貸置候ものも有之哉ニ相聞、如何之事ニ候、向後ハ享保之度相觸候趣堅相守候樣可致候、尤頭支配之面々も、厚く相心得、組支配之ものより、貸地等之屆申出候節々、能々遂穿鑿、猥ニ承置申間敷候、若觸面之趣、等閑ニ相心得候ものも於有之ハ、嚴重ニ御咎可有之條、可存其趣候、尤屋敷二ヶ所持之もの、自分住居いたし不申方之屋敷を、由緒有之もの江貸置候儀ハ不苦候、

右之趣、萬石以下之面々江不洩樣可被達候、

正月

〔代官觸留〕四 去月中被仰出候拜領屋敷貸地之儀に付一時に相改候儀可爲難儀旨を以、暫時御猶豫有之候に付、追々無油斷相改候樣被仰渡候に付而者、若心得違ニ而等閑にいたし置、心弛之面面も有之候而者不宜候間、最前被仰出候御書付之趣、銘々厚相心得、無油斷相改候樣可被致候、依之猶又申達候、以上、

三月廿日〇天保十四年

井　備前守

岡　近江守

戸　播磨守

梶　土佐守

跡　能登守

〔柳營諸書例的〕七 貸地幷借地差戻屆之部

文化二丑年六月二日

借地之内差戻御届

寄合 松下嘉兵衛

小普請組石河壹岐守支配 鳥居政次郎

右政次郎由緒御座候ニ付、八丁堀築地拜領屋敷地面之内百坪、私屋敷手狹ニ付借屋申候段、寛政七卯年六月、御用番立花出雲守殿江御届申上候處、雙方申談之上、當代小普請組逢坂九兵衛支配鳥居仙之助方江右百坪之内七拾坪、是迄通借置申候、依之此段御届申上候、以上、

六月二日 寄合 松下嘉兵衛

町會所宅地貸付

〔町會所留 二十一〕寛政十二申年十一月廿六日左之通評決

一貸附中長屋等建足シ借増願候分、元貸付候月ゟ十八ヶ月内に願出、上リ高貳割以上之増に候へ者貸付、右月數立候得者不貸付極之所、向後十八ヶ月過願出候而も、最初取極之期月を居へ置候仕法ニ而、殘ル月數之上リ高見込ニ而者、金高も左程不相増借増候詮も無之に付、殘ル月數に不拘やはり五ヶ年之上リ高見詰ニ而、尤定例よりは内端に貸付可申候へ共、殘ル月數江右之元利を割込候間、月々納高増候儀、願人承知に候へ者、十八ヶ月過候而も貸付候積り、此取計方、たとへば向六十ヶ月、成崩ニ而貸附有之もの、貳拾ヶ月も立候而貸増願候へ者、此貸増金之分殘四十ヶ月に割、元利成崩之積にいたし、最初之證文書替不申、増貸附高之分計リ繼添に而、巨細譯合相認、右兩度に貸付は總金高并已來月々可取立貳口之元利合銀高者下ゲ札に成共取置可申事、

但十八ヶ月内に願出候借増之分者、最初之殘金中途返金いたし、直に金高増貸返し證文新タニ書替候間、其節ゟ向六十ヶ月、成崩に相成候仕來之事、

〔萬年帳二番〕肝煎名主共

町會所借請居候もの貸長家之儀、去月四日大風雨之節大損に及、店借之者共住居も難成體に

相成、貸替之儀願出候向も有之候處、一體修復之儀者、銘々地主共方にて可差加筋に候處、此度之儀稀なる大風雨にて、一編破損も多く候て、實に大破之分、地主難澁にて、修復自分に難及分者、格別之譯を以、風損之月より三ヶ月之中に貸替出候はゝ、夫々見分糺之上、貸替遣し候積り、

一右風損有之候ても、地主方にて修復差加へ、貸替之儀不相願は、月々元利猶豫之儀願出候分は、風損之月より貳ヶ月、元利猶豫いたし候積り、

右之通申渡候て、地主共實ニ難澁にて可致修復手段無之、追々明店にも可相成程之分に有之、最風損は多分屋根向之儀に可有之間、其筋心得を以取調可申立旨、總町之名主共江申通候樣可致候、

子九月

右大風雨にて大破及候ニ付、右之通り御觸有之候、然上借替願出候處、御聞濟ニ付、借替之御人數左之通り、

栗島道福樣　家守治右衛門
遊佐卜庵樣　家守新右衛門
山口喜悅樣　同　彥兵衛
木賀順昌樣　同　金次郎

河岸地貸付

〔享保集成絲綸錄三十九〕元祿十二卯年五月

一河岸之町々、河岸之藏ニ而所帶仕、火を燒候由相聞不屆候、向後左樣成義一切致無用、火をたき申間敷候事、

一同ジ藏之内ニ而庇を懸、諸色商賣仕、是又不屆候、向後堅商賣仕間敷候事、

一藏地赦免之場所、藏者建不申、小屋掛仕罷在、又者店を構、商賣致候者も有之由、左樣之者は、早々

小屋取拂可申事、

五月

〔御觸書集覽二〕天保十三寅年十月五日

御堀端幷河岸付　町々名主共

此者共、組合町々御曲輪廻り御堀端ニ建有之候土藏物置納屋等之分者、不殘取拂、河岸地ニ有之候土藏物置納屋家根無之炭薪竹木其外置場物揚場、幷河岸之內會所地と唱、沽券地地先ニ無之、公儀江建候土藏物置納屋其外建物之儀は、是迄之通り差置、尤町方組合橋臺建物之儀者、御入用橋ニ准シ、五間之間、建物之儀者取拂、大下水等江懸ケ候小橋際建物之儀は、是亦是迄之通差置、勿論河岸地冥加金は差免候間、以來相應之地代金差出候樣可致、併土藏物置納屋等之內、火焚所ニ紛敷床抔を張、常住致し候由ニ相聞候ニ付、以來右體之儀は不相成候間、床幷張出等致候類は、早早取拂、常住致し候ものは、是亦引拂候樣可致、猶組之者見分等ニ差出候間、万一相背候もの有之ニおゐては、急度咎申付候間、一同心得違無之樣可致、

前書被仰渡之趣奉畏候、尤此以後追々土藏建繼納屋之類不隱樣厚申合、取拂可申旨被仰渡奉畏候、仍如件、

寅十月五日　壹番組本石町　名主　孫兵衛　外拾七人

右之通、昨五日南御番所江、組々名主一組壹人ツヽ被召出、於御白洲被仰渡候間、御達申候、右ニ付伺可申廉々有之候處、其段尙又樽藤左衛門殿御沙汰有之候筈ニ御座候間、御沙汰次第追々御達可申候、以上、

十月六日　組合　世話懸り　取締懸り

地主
家持

〔守貞漫稿四人事〕地主。〇中略

自宅ノ地ヲ買得テ、自地ニ住居スル者ヲ、戸籍ニハ家持。某ト署ス、俗ニハ是ヲ居付。町人。ト云、

自宅ハ他人地ニ借居シテ、他町ニ地アル者ハ家持ト云ズ、自宅ハ借地借宅ニテモ、當町ニ地アル時ハ、家持ニ准ズ、

自地ニ居シ、他町ニモ地アル、或ハ自宅借地ニテ他町ニ地アル、トモニ借居スル店子及家主ヨリ指之ヲ地主ト云ナレドモ、他ヨリモ亦是ヲ地主ト云、

〔法隆寺衆分成敗曳附幷諸證文寫〕天文十四年

一十月廿日夜、衆分衆郷内ヘ夜廻沙汰スル處ニ、芝小路シツカ新五郎ト云者ノ宿ニ、博奕之勝負在之間、押入、端々搦取、東室ヘ召グシ、其砌逃散之人數相尋之處仁、福井源次郎親子二人、次郎三郎、刀禰ガ弟、同下部、檜物屋子、烏屋子、大黒子、市若三郎、五郎、二郎三郎、紙屋ニ一人、以上十二人、此内ニ家。持。ハ五人在之、悉以翌日廿一日放火シテ、于罪科被處了、其内ニ福井源二郎ハ、其年ノ冬、博奕之寄宿之風聞ヲ以、寺家ヲ被擯之間、住宅者、屋敷之地子ニ、兩役人ヨリ衆ナヨリ撿封之間、栽、高札、成敗了、

天文十四年乙巳　　于時

沙汰衆清慶
公文英賢

〔町會所願向案文〕家質年賦成崩願

前文前之振合

右之通ニ御座候處、此度私儀無據金子入用ニ御座候ニ付、右家屋敷家質ニ差上、五ヶ年賦成崩之積を以、金何程拜借仕度奉存候間、何卒町御會所金之内御貸付被成下置候樣、別紙繪圖面相添奉願上候、已上、

年號月日

何町何町目
家。持。　誰印

右之通、相違無御座候、已上、

五人組　諱印

名主　諱印

町御會所

〔享保集成絲綸錄三十九〕享保六丑年九月〇中略

一町中入用之事は、地主共ゟ差出候事故、家守共疎略いたし、唯今迄之町代ニ任せ置候由、自今は何事ニよらず、自身之家持は勿論、家守共取計失却多く無之様ニ致シ、名主共立合遂吟味、入用減候様に可致候事、

以上

九月

〔間數地主印鑑〕一加賀町〇中略

一右間數家屋舖、寶暦六子年四月十六日讓り請申候、

地主　善次郎弟　長谷川善太郎　二人役

前書之家屋敷代金千四百兩賣券求之

寛政十午年六月廿七日

地主　德右衞門

前書之家屋敷讓り受弘メ致候

文化二丑年十月廿六日

地主　德右衞門孫女　はる　當丑十二歳

後見　德右衞門

前書之家屋敷讓リ受弘メ致候

天保十二丑年十二月十日

地主　四谷傳馬町三丁目家持伊勢屋　治兵衞

家主

〔守貞漫稿四人事〕家主。。

戸籍等ニハ主家ト書、則家守也、私ニハ大屋トモ云、家主ノ數江戸總テ二萬零一百十七人、

地主ノ地面ヲ支配シ、地代店賃ヲ店子ヨリ集メテ地主ニ收メ、公用、町用ヲ勤メ、自身番所ニ出デ、非常ヲ守ルヲ職トス、

家主株ハ陽ニ金ヲ以テ讓之、雖然ドモ地主ノ意ニ應ゼズ、或ハ奸曲、及ビ地代店賃等ヲ多ク償スル時ハ、地主ヨリ追放スルコトアリ

株金ハ大略二十兩三十兩ヨリ一二百兩ニ至ル、地主ヨリノ給金ト餘得トニ應ジテ賣買ニ差アリ、大略百兩ノ株ノ年給廿兩、餘得十兩、糞代大概凡三四十　得ル、蓋如此ノ株金、昔ハ賤シク年年漸クニ貴シ、因云、江戸ハ尿ハ專ラ溝涅ニ棄之、屎ハ厠ニ蓄之、屎俗ニコエト云、コヤシノ略也、屎價コエ代ト云、屎代ハ家主ノ有トシ、得意ノ農夫ニ賣之、稀ニ尿ヲ蓄フ者アリ、皆代家主ニ收ム、京師ハ尿ハ借屋人ノ有トシテ野菜ト代ル、

大坂ハ屎代ハ家主、江戸ニ云地主ノ有トシ、尿ハ借屋人ノ有トシ、得意農ニ與之テ、冬月綿ト蔬菜トヲ以テ易之トス、屎價大略十口ノ屎一年金二三分也、農地ニ近キ所貴價也、

京坂ハ路傍諸所尿桶ヲ置テ、往來人ノ尿ヲ棄ズ、大坂ハ此桶渡邊ト云穢多村ヨリ出之コト官許也、屎ヲエタノ有トス、江戸ハ路傍ニ尿所稀ニアルノミ、

又家主ノミヲ業トシテ妻子ヲ養ヒ、他業無之者アリ、或ハ工商ヲ兼ルモアリ、大略他業ノ有無相半スル歟、

又江戸ニテ始テ地借店借シ、或ハ他ヨリ移リ住ム時、其居宅ニ應ジ、金二朱或一分、多キハ金三五兩、又ハ十兩モ家主ヘ呈ス、號ケテ樽代ト云、酒料ノ意也、與之コト粗其宅ニ定制アルガ如シ、京坂ハ酒一二升ノ手形ヲ與フノミ、

又五節毎宅居ニ應ジ、五七十文ヨリ五六百文、或ハ二朱一分ヲ家主ニ呈ス、號ケテ節句錢ト云、京坂ニ更無之、

右ノ樽代節句セン、天保府命ニ禁之レドモ止ズ、

〔御當家令條二十一〕京都町々年寄可相定觸狀〇中略

京都町中家主。幷借家之者共ゟ、年寄方江之請狀案文、是又毎月二日會所ニ而讀聞セ可申候、若又家主借屋替候はゞ、如斯請狀をかゝせ、年寄方江可被置者也、

御請狀

一博奕遊女其外むさと人之出入多、又者何事ニ不依、不審ニ被存候義有之ニ付、年寄幷町中ゟ改被申付、無實を被申掛候樣ニ、面々腹立仕候ニ付而、却而町中之申事出來仕事多く御座候、向後者不依何事、不審令存知義有之時、從町中使を立候者、聊遺恨ニ不存て、委細ニ可申明候、其上猶疑敷被存事御座候はゞ、雙度成とも神妙ニ御請可申候、少しも御公儀幷町義等之御法ニ背申間敷候、此上者親類知音之者共、相互ニ申合、內證ニ而異見仕止させ可申候、若止兼候はゞ、町中申候而止させ可申候、爲後日請狀如件、

明曆二年申正月

〔御當家令條二十一〕他町有之家。主。事

一借屋ニ科人有之時、名代之者牢舍可申付之、但名代之者申分有之而、家主越度ニ相究者、勿論家主可爲曲事事、

一五人組之事、右ニ如有之、不穿鑿致不念指置候五人組勿論可爲牢舍事、〇中略

年號月日　隼人
　　　　　丹波

家守

町與力中江

(享保集成絲綸錄三十九)正德三巳年八月

一總而家守致請狀候分は、准家來候間、得其意、地主申付次第相勤可申候、若地主之申付於相背は、准家來仕置可申付候間、此旨地主幷家守江急度可申聞候、〇中略

一近キ頃は、家守共、町役人目之儀、町內江者割合之通書出シ、家主江は過分ニ入目附懸いたし、金銀貪取候者も有之由相聞江、不屆至極ニ候、向後家守共堅ク相愼、不直成儀不仕樣、是又町中不殘可觸知候、若違背之族於有之者、急度曲事可申付者也、

八月

(家屋舖一件)手形之事

一總十郎町東側北角ゟ貳軒目、表京間三間、裏行町並貳拾間有之家屋敷一ヶ所、私母よし所持仕來候處、此度私讓受、向後私所持仕候ニ付、〇中略

一御公儀樣御法度之義大切ニ相守、諸御觸事等地借店借召仕等迄入念申聞、諸事貴殿支配を受、急度相守候樣可仕候、〇中略

一家守附候共、前書之通篤と申聞、爲相背申間敷候、〇中略

總十郎町家持

文化十酉年八月十一日　　家屋敷讓受人　五郎右衛門印

名主　長尾文藏殿

同　長谷川伊左衛門殿

後見　富澤清兵衛殿

(町會所願向案文)大名方抱屋敷貸付願之案

何番組名主誰支配
何町
何之何守抱屋敷
家守誰

何ノ
何月幾日

以書付奉願上候

何町何側何角より何軒目

一表間口京間田舎間何間

裏幅　何間何尺　裏行　何間何尺

何之何之守抱屋敷
家守誰

沽券金何程

右地面地代店賃上り高

壹ケ年分
金何程

内
金何程

町入用并積金
家守給金共

差引
金何程

全手取ニ相成申候

右者何之何守抱町屋敷ニ御座候處、此度主人儀無據金子入用有之候ニ付、右家屋敷家質ニ差出、五ケ年賦元利成崩之積を以、金何程借用仕度、尤金子御貸付之節者、質渡證文江何之守勝手掛り家老何之誰、何之誰、兩人奥書致、加判、御貸渡之砌者、地面掛り何之誰、元〆用人何之誰、并町役人一同罷出連印可仕候間、何卒御會所金之内御貸付被成下候樣別紙繪圖面相添奉願上候、已上、

年號月日

何町　何之何之守抱屋敷

右之通、相違無御座候、已上、

家守　誰印
五人組　誰印
名主　誰印

町
御會所

〔萬年帳二番〕家守弘目録

家守新規弘

一金百疋目録　貳本入扇箱付、此代貳匁、　名主殿江

右名主殿方進物、古來者名主殿江扇子同御内證江百疋と記有之候得共、御内證無之節も、右同様遣し來候、以來御内證有無に不拘、右之通差出し可申候、

一上木綿壹反ツヽ　壹反ニ付、代八匁五分、　家主中江　并振舞　壹人前六匁五分掛り

一銀壹兩目　書役江

一錢貳百文　番人江

右弘有之候節、町内家主中ゟ、右家守之仁江進物酒肴古來帳面之通、最代ニて遣候はゞ、錢五百五拾文遣可申候、〇中略

天明四辰年十月　名主〇人略

〔德川禁令考後聚二十九行刑條例〕地主江疵付候家守

寛永六年丑五月十八日　湯島棟梁屋敷喜兵衛地借〇　利兵衛

此もの儀、地主喜兵衛を脇差ニ而肩先壹ヶ所、後腰下壹ヶ所切付候由、町人共訴來候ニ付、撿使遣し口書申付召寄、令詮議候處、此もの申候ハ、親太兵衛儀、喜兵衛家守仕罷在候處、去亥五月相果、其

後少内此もの家守仕候得ども、右喜兵衞氣ニ入不申、家守幷居宅共に取上ゲ、此ものハ出居衆ニ成罷在、居宅を崩取候樣ニ申候得共、左候而ハ母壹所ニ有之故、養育難仕候故、不斗右之段無念ニ存、喜兵衞を切付申候由申之、右仕方不届ニ付牢舍、

〔記事條例十三〕寶暦二申年十二月六日、言上帳書拔、

一四谷仲町三郎兵衞、長右衞門、七兵衞、傳右衞門申上候、私共五人組之内平兵衞と申者、三拾壹歲ニ罷成候もの、元大坂町伊右衞門出見世預り家守役相勤、酒賣商賣仕罷在候處、先月廿六日致欠落候、出見世預りニ御座候得共、家守役をも仕候もの故、御帳付之儀、御月番伊豆守殿御番所江御訴訟申上候得者、御吟味之上、願之通被仰付候、爲後日申上候由、右之三郎兵衞、長右衞門、七兵衞、傳右衞門、名主半四郎、幷地請人元鮫ヶ橋八軒町吉右衞門同道申來候、

〔類聚撰要四十九名主〕地守請狀之事

一此喜右衞門与申三十八歲ニ罷成候者、出生等能存、慥成者ニ付、私受人ニ立、淺草新堀常浚付下谷小島町ニ而、間口田舍間貳拾一間四尺五寸、裏幅同貳拾壹間四尺、東裏行同參拾壹間、西裏行内二拾九間三尺五寸有之、各方御拜借町屋敷地守兩人之内、右喜右衞門儀、東之方間口拾間五尺貳寸五分、地守相勤申處實正ニ御座候、然ル上者、西之方地守与申合、兩人ニ而左之通相勤可申事、

一御法度之儀、急度相守、町役大切ニ相勤、諸觸事地面中ニ罷在候者共江、無油斷申聞爲相守、火之元入念、勿論地借店借之者差置候節、出所相糺、地請狀、店請狀、家守請狀、出店衆請狀、入念取置候上爲引移可申候、尤町方不相應之家作不爲致、麁儀見苦敷儀等無之樣可致候、常々心ヲ付、博奕、諸勝負、賣女ヶ間敷儀、曾而無之樣、其外不見屆者等閑ニ不差置、人別外之者、縱親類たり共無斷一宿も爲致間敷候事、

一宗旨之儀者、代々一向宗淺草法恩寺地中西岸寺檀家ニ御座候、若紛敷宗門與申者於有之は、何方迄も罷出、右之通紛レ無之段申披キ可致候、寺手形之儀は、支配名主方江差出可申候事、

一地守給金之儀は、一人分一ヶ年金六兩ツヽ、幷居宅地代被下候積承知仕候、

一地代金之儀は、右家屋敷附淺草新堀常浚入用別紙内譯書之通、幷町入用地守給等差引、委細勘定書ヲ以、毎月御寄合場江持參、各方之内御世話番之御方江差出可申候、若相滯候儀も有之候はゞ、私引請差出可申候、

右之通、地守請に立候上者、金銀出入其外如何樣之儀出來候共、私引受御苦勞掛申間敷候、勿論地守等御取放被成候砌者、當人家族共無異儀引取可申候、且又私共相請ニは無之、以後所替其外相替儀有之候はゞ、早速御届可申候、爲後日證文仍而如件、

寛政九巳年閏七月

下谷南大門町家主
受人　喜助

地守　喜右衛門

肝煎名主衆中

地守請狀之事

一此留五郎與申四十歳ニ罷成候者、出所等能存、慥成者ニ付、私請人ニ立、淺草新堀常浚ニ付、下谷小島町ニ而、間口田舍間貳拾一間四尺五寸、裏幅同貳拾一間四尺、東裏行同三十一間、西裏行同貳拾九間三尺五寸有之、各々方御拜借町屋敷地守兩人之内、右留五郎儀、西之方間口拾間五尺貳寸五分地守相勤申候處實正ニ御座候、然ル上者、東之方地守江申合兩人ニ而左之通相勤可申候事、

一御法度之儀、急度相守云々、朱書以下前之喜右衛門請狀同樣ニ付略之

一宗旨之儀は、代々一向宗下谷池之端茅町祖成寺旦那ニ御座候云々、

一地守給金之儀は、壹人分、一ヶ年金六兩ツヽ云々、
一地代金之儀は云々
右之通、地守請ニ立候上者、〇中略其外相替儀有之候はゞ、早速御屆可申候、爲後日仍而如件、

寛政九巳年閏七月

下谷松下町代地
請人家主　吉兵衛
地守當人　富五郎

肝煎名主衆中

〔御用屋敷請事留〕拜借地請狀之事

一此佐七と申者、生國ゟ能存慥成者ニ御座候間、私請人ニ罷立、各樣御預り本所吉岡町貳丁目御用屋敷、元貳タ屋敷ニ而九百四十四坪之御地所、家守吉兵衛、是迄一圓御地守被仰付有之候處、右御地所家作無數空地多候而、殊更東之方五百坪之處明地ニ付、右御地所拜借仕、地低水溜之處、追々自分入用を以埋立地形仕、家作取建貸附、御地代月々上納仕度段、先達而奉願候處、願之通御聞濟被下置難有奉存候、然ル上者、地借之有無ニ不拘、壹ヶ月金貳分貳朱ツヽ上納可仕候、尤御地代上納之節者、吉兵衛罷出候節、佐七儀、同樣罷出上納可仕候、萬一御地代引負等仕候はゞ、請人相辨早速相納可申候、且又家守吉兵衛爲取替證文之通、相違仕間敷候事、

一御公儀樣御法度之儀者不及申上、町法之通り大切ニ相守、都而御觸之趣、店々江申渡、火之用心入念、且店借之者身元相糺、不埓之もの一切差置申間敷、其外御差圖之通、無違背相勤可申候事、

一宗旨之儀は、代々日蓮宗ニ而、寺者谷中妙雲寺旦那ニ紛無御座候、則寺手形取置候間、御入用之節、何時ニ而も差出可申候事、

右之通、私請人ニ罷立候上者、若此もの儀ニ付、何樣六ヶ敷儀出來仕候共、私引受少も御苦勞相掛申間敷、若當人幷請人取替、又者旅行仕候はゞ、其節御屆可申上候、爲後日拜借御地面請狀仍如件、

木銀町會所屋敷 淸吉店
拜借人　佐七印

長谷川町 家主
受人　喜兵衛印

文政十三寅年十月廿日

家城善兵衛殿

淸水八郎兵衛殿

〔御用屋敷地守進退書留〕

深川越中島町
家主　磯右衛門

同　新右衛門

同　太七

其方共儀願出候者、御用屋敷之內、深川越中島町上納地千貳百坪餘者平助、五百七拾坪者平吉地守いたし、兩所合月々金壹兩三分二朱宛、壹ヶ年金貳拾貳兩貳分、閏月有之年者、一ヶ月分相增上納仕來候處、右兩人共、先達而病死に付、此度平助娘江惣七と申もの聟養子ニいたし、平助と名改、平吉忰權次郎と申者、平吉と名改兩人共親之跡相續致し候ニ付、病死平助平吉時之如く、惣七事平助、權次郎事平吉江地守爲致度、萬一不納等致し候はゞ、其方共引受辨納可致段願出候ニ付、相糺候處、病死平助平吉跡式之儀ニ付、去々卯年中、平助親類同所入船町家主平七、同所大島町藤四郎店常次郎ゟ、前書權次郎幷同人弟安次郎相手取、伊賀守殿御役所江願出、吟味之上、病死平吉跡式者、同人忰權次郎、病死平助跡式者、同人娘江聟養子致し、銘々親之跡相續致し候積、右養子取極候迄者、其方共世話致し、町用上納金等差支無之樣取計候積、雙方熟談內濟致候旨申立、尤其方共世話致し候段者、先達而申立置、是迄上納金滯候儀も無之、外差障等も無之候間、千貳百坪餘之場所は惣七事平助、五百七拾坪之場所は權次郎事平吉江、地守願之通申ニ付之、〇中略

天保四巳年七月廿九日〇下略

〔萬年帳二番〕町證之目錄

地守家作讓渡弘　　名主殿江

一、羽子三本入畫付羽箱、此代貳匁五分、金百疋目錄へぎに載せ、

一、鰹節壹連づゝ、但土佐貳拾入、數拾也、此代壹連ニ付拾貳匁、　　家主中江

一、金貳朱　　書役江

一、錢三百文　　番人江

右之外

一、金百疋宛但加判之儀、讓り人ゟ差し可レ申候、　　組合兩人江

右者當辰四月中相極申候

附り右地守家作讓渡證文致候節、組合兩人立合印形いたし候に付、壹汁三菜之晝食差出し可レ申候、○中略

天明四辰年十月名主○人名略

〔政普集乾〕地立店立之事○中略

一、地守幷小作人取放候儀、撿地高請以來者勿論、貳拾年以上支配致來候地守、亦者小作人も同樣にて、容易に取放申間敷候、小作滯等有之候はゞ、日限極メ濟方申付、右ニ付取放候筋者難レ成事與可二心得一候、

一、貳拾年內、亦者當座之地守小作人者、兼而證文極之通ニも有レ之候はゞ、猶更無二餘儀一儀ニ候共、地主勝手を以取放度願候はゞ、地主江引渡旨申付不レ苦候、尤小作滯有レ之相願候はゞ前同斷、

一、地守取放、右屋敷地主住居致度抔申類、右地所屋敷受取哉、吟味之上、前ニ准じ取放可レ申付、若田畑ニ候はゞ難レ成事與可二心得一事、

〔守貞漫稿四人事〕地借人

他人ノ地ヲ借リ、爰ニ居宅土藏等ヲ造ルニハ、自費ヲ以テシタルヲ云、地代ト號シテ、毎晦是ヲ家主ニ收メ、家主ヨリ地主ニ收ム、

〔御定書百箇條〕倒死幷捨物手負病人等有之を不訴出もの御仕置之事

寛保二年延享元年極

一倒死幷捨物等有之を押隱不訴出においては　店借地借家主　過料五貫文

〔萬年帳二番〕一當町〇長澤町伊左衛門殿店地借り中、子細有之、去春中不殘地立之義被申付候處、家主中扱ニ被頼、是迄延置有之候處、銘々地代之義、壹軒ニ付壹ケ月ニ貳匁ヅヽ相增、勿論地借之內、七兵衛儀者、坪數多候ニ付、壹ケ月貳匁貳分五厘相增可申候間、是迄之通被差置被下候樣、地借一同相願申候、依之右之趣、家主方江一札ニ認取置候上、地主遊佐ト庵樣江家主中參り御懸合申候所、右之通ニ而御得心有之相濟申候、

巳〇天明五年六月十四日

〔松屋筆記九十七〕借家シヤクヤ、店借タナガリ、賃宅ヂンタク、

今俗、借家、店借などいふは、漢文には賃宅と書くべし、野客叢書十一廿八丁オ唐詩見所處條に、賃宅得花饒、初開恐是妖、此一詩、既見楊巨源集、又見王建集云々、

〔守貞漫稿四人事〕借屋人ハ前ニ云如ク、家主ノ造リタル家ヲ、月收ヲ以テ假居スル者ヲ云、蓋江戶ノ如ク地ノミヲ借テ、家ハ自費ニ造リ住ム者、京坂ニ無之、皆專ラ宅地トモニ假居スル也、月收大略一筵錢五六分ヨリ一文目二三分ニ至リ、或ハ土藏有アリ、或ハ壯麗ナルアリ、江戶ノ不及者アリ、然ドモ家美ニシテ月收江戶ヨリ賤シ、一筵ハ長六尺五寸、巾三尺二寸半ヲ云、乃一疊ヲ云也、又江戶ニハ地借ト云テ、宅地ノミ借用シテ、家宅ハ自費ヲ以造リ住ム者多シ、京坂ニハ地借極テ稀トス、借屋人ハ甚多シ、借屋江戶ニテ店借トス、借家ト云フコト古シ、中御門宣胤ノ記ニ、近所ノ借家云々、〇中略

店。借。

他ノ地ニ家宅モ造リ有之レ地ト家宅トモニ借テ住ヲ、店借ト云、月收ヲ店賃ト號ケ、毎晦家主ニ收、之同前、〇地借人同

裏。店。借。

同前、但裏地ニ居宅スルヲ云、裏住居ニモ地借ト號シ自費ニテ家ヲ造ルアリ、又家宅トモ借居スルモアリ、

店。子。

タナコト訓ズ、地借人、表店借、裏店借、トモニ店子ト云、家主ヨリ云詞也、

〔川邊氏舊記七〕一札之事

一今度借屋御吟味ニ付、此片右衛門と申者、宮村町又六殿借屋。ニ罷在候、此者生所會田組宮本村之者ニ御座候得共、此方構無御座候、此者共町ニ被差置可被下候、爲後日一札仍而如件、

正德四年午四月十八日　片右衛門

平右衛門印

庄や長三郎印

宮村庄や與兵衛殿

〔緑百一錄〕宿所屆

一日野左中辨家來小場兵右衛門、塔壇上片原町庄宮左兵衛店致借。宅。申候、右爲御屆、如此御座候、

以上、

享保四十二月十日

〔享保集成絲綸錄三十九〕慶安四卯年三月

一棚明候はゞ、念を入、棚の者移り不ㇾ申前廉ニ請人を極、店。かし。可ㇾ申事、

一棚之者致ニ欠落一候はゞ、棚請人ニ御懸り可ㇾ被ㇾ成との御事ニ候間、能々吟味いたし、慥成請人を取可ㇾ申事、

三月

〔町鑑秘錄二〕覺

一町中家主、店。借。出居衆等に至る迄、欠落者過分之買懸り、わづかの諸道具、又者商物之賣殘り明ニ致立退、吟味者らく著ニ罷成候者も無ㇾ之樣ニ相聞候、○中略

明暦二年申極月九日

〔享保集成絲綸錄三十九〕明暦三酉年七月

一町中棚。か。り。之諸商人申合候而、棚罷立候以後、棚中ヶ間之者障りを申、棚借不ㇾ申候樣ニ仕候、又新規に明棚借り候者には、棚中ヶ間之者、禮金幷大分之振舞爲ㇾ致候ニ付、棚かり候者無ㇾ之、家主迷惑仕候之由に而、其上諸商人賣物之直段相究賣買仕之由、此等之趣は、旁以徒黨之樣ニ相聞候間、向後棚かりの者申合、一同仕間敷候、尤明棚借り候者に障申間敷候、商賣物之直段茂、時々之相場に賣買可ㇾ仕候に付、明棚借候之者に、禮金振舞堅可ㇾ令ニ停止一候、此旨於ニ相背一者急度曲事ニ可ㇾ申ニ付一者也、

七月○中略

寛文元丑年閏八月

一町中店借り候者、店かへ候時、其店かへ候先を、元家主方ゟ見屆ヶ置可ㇾ申候、家主方江相斷候儀者無用ニ可ㇾ仕候、但出入有ㇾ之、斷すして不ㇾ叶者は、家主方江相斷置可ㇾ申候、若其店かへ候ものニ付出入有ㇾ之時、店かへ候先を、元家主不ㇾ存候と申候者可ㇾ爲ニ越度一候、此旨町中家持共、永相守可ㇾ申

候事、

閏八月

寛文二寅年九月

一出家、山伏、行人、願人、町屋ニ宿借し候はゝ、本寺ゟ弟子ニ無紛段證文を取、其上請人を立、裏棚ニ差置可申候、無本寺方ニは一圓宿借シ申間敷事、

一右之輩、町屋表店ニ差置申間敷候、裏店ニ宿借シ候共、寺構ニ者、曾而任せ申間敷候、其上右之寺ニ一夜之宿借とも置せ申間敷候事、

一題目講念佛講、表棚ニ而一切執行仕間敷候事、

九月 中略○

天和三亥年九月

覺

一町中店借し候者、彌店請人に念を入取置可申候、慥ニ無之者ニ店借し申間敷候、徒もの差置候はゝ、大屋は勿論、品ニより五人組名主迄、曲事ニ可申付候、五人組相改、互ニ店之者吟味可申事、并出店衆差置候とも、受人取之、慥成者置可申候、徒もの差置候はゝ、是又大屋五人組名主江掛り可申候事、

一店借之者迄、五人組を相定、互致吟味、不見屆もの在之候はゝ、家主名主可申之、隠置候はゝ、可為曲事、名主大屋承引無之おゐては、番所江可申出事、

一町内ニ有之辻番髪結并非人等迄致吟味、若不見屆者有之候はゝ、町中より可申出之、見のがしに仕候はゝ可為曲事、

右之通相觸候上ニ、壹町切ニ人別帳面を以互ニ相改、毎月町年寄方迄相屆可申候、自今以後、徒者

借家請狀

出候はゞ、科之輕重ニより、名主五人組大屋店之五人組迄、急度可申付者也、

九月

享保十五戌年五月

一町々ニ而店借し候節、元家主方吟味も不遂、猥ニ店借候故、尋者等差置候儀も有之、并筋悪敷人宿出入、其外不埒成儀共出來候之間、自分元家主方承届、不埒之者ニ無之候はゞ、店借し可申候、新規之店がり者、其者出所承届店借し可申候、

右之通吟味虛不仕店借置、不埒之出入致出來候ば、家主は勿論、品ニより名主五人組迄、可爲越度候、此旨町中不殘可觸知候、以上、

五月

〔店人足一件〕

町々店火消共出精之趣取調、御内慮奉伺候書付、

町火消人足改

一出火之節、町々店子之もの共、早速罷出、町火消不駈付以前、消防水之手等骨折出精仕候所々之者共、〇中略

丑〇嘉永六年　二月

〔大坂要用錄三請證文〕出證文

一札

一私同家誰と申者、此度其元借屋借り請、何屋誰と名前差出し別宅仕候、家内人別者、是迄我等方人別ニ相加へ有之候者共ニ而、別紙寺請狀差出申候、勿論諸掛り合等一切無之、右別宅之儀ニ付、故障之儀無之候、何時ニ而虛家入用之節者、此方江引取、家明ケ渡し可申候、爲後日一札仍而

如件、

年號月　　　　何屋誰

何屋誰殿

〔續百一錄〕享保十四酉二月十二日

一中立賣油小路西へ入御借宅、家主替ニ付、請狀相改申候ニ付、三升樽

たち花屋喜兵衛へ

〔大江俊光記〕元祿五年二月九日、屋守喜右衛門參申候、借屋請狀、今迄は生島元庵に候得共、如此御借主に御改被成度由、去年ゟいたし、則庄屋へ申候へば、御尤に候間、御改可被成候、則請狀案紙進上申候間、持參申候也、如左、

町。。請狀之事

一中岡崎村元右衛門に而、玉屋玄晢家に、禁裏樣御奉公人北小路石見と申仁、借屋いたし居被申候、則京都に家屋敷も御座候、妻子眷共に先祖我等能存知申候に付、請人に罷立候、則宗旨は日蓮宗本滿寺ノ寺中正行院之且那に而御座候、御法度之不受不施耶蘇宗門、并武士之浪人に而も無御座候、尤在所之掟相守り、所々不似合賣買、又は惡敷人宿仕間敷候、其外如何樣之義出來仕候共、我等方へ引取申、於御公儀樣急度其埒明、所地主家主へ少も御難懸け申間敷候、并家人申候時分は、何時に不限急度明させ可申候、爲其後日之請狀證文手形仍而如件、

東洞院三本木三町目

元祿五壬申二月七日　　請人　田中玄清印

借主　北小路石見口印

列見家守　喜右衛門

行事

九郎右衛門殿

御町中

寺請狀之事

一中岡崎村に而玉屋玄哲老家ヲ借居被申候、北小路石見殿と申仁、代々當院旦那日蓮宗に紛無御座候、尤御法度之不受不施或耶蘇宗門と申訴人有之候はゞ、拙僧罷出申明、御在所家主へ少も、御難懸申間敷候、爲後日寺請狀如件、

元祿五壬申二月七日　本滿寺　正行院印

中岡崎村　九郎右衛門殿

町中

借屋請狀之事

一中岡崎元右衛門玉屋玄哲老家に、禁裏樣御奉公人北小路石見と申仁、借宅居被申候、御法度之切死丹不受不施、又ハ武士之浪人に而も無御座候、京都に家屋敷も有之、慥成義能存候に付、請人に罷立申候、宗旨は日蓮宗に而、本滿寺寺中正行院旦那に而候、組中之掟相守、所々不似合義、又は惡敷人宿など不仕、其外金銀に御入等如何樣之六ヶ敷義出來候共、我等罷出、於御公義樣急度其埒明、所地主組中へ少も御難懸申間敷候、幷御家入用之節は、何時に不限明させ、御家渡可申候、爲後日證文如件、

東洞院三本木三町目

元祿五壬申二月七日　請人　田中玄清印

借主　北小路石見□印

判見家守　喜右衛門
行事　與十郎
店請人

中岡崎村
　組中參

一屋賃之義は定之通、毎月廿七日相濟させ可申候、若一ヶ月に而も相違仕候はゞ、請人方ゟ相渡可申候、

〔大坂要用錄 諸證文 三〕人別諸色引取一札

引取申一札之事

一其元借屋何屋誰幷御町人別之通、諸色諸道具共、此度我等方江引取申處實正也。然ル上者、以來如何樣之儀有之候共、此方江引請、其元江少茂御難義懸ケ申間敷候、爲後日人別引取一札仍而如件、

年號月　　何屋誰

　何屋誰殿

△朱書 死跡ニ候はゞ

何屋誰當何月病死仕、死跡相續人無之候ニ付、右家內御町人別之通、幷諸色諸道具共、此度我等方江引取申處實正也。○

〔德川禁令考後聚十九 行刑條例〕元文四未年三月差上、翌申五月十日、綠色御書入御好之趣有之帳面之內

諸奉公人出入之儀ニ付町觸 ○中略

一奉公人出入幷諸借金買懸り等之儀、本人滯候得者、家主又者店。。。請人江近來段々申付候得共、右條々之通、向後相極候事、

地代家賃

右之趣、急度心得可申旨、町中江可觸知者也、

亥八月

〔大坂堺問答坤〕一家受人致死失候歟、又は致欠落等候ニ付、跡請人立替候歟、無之候はゞ、家明渡候樣願出候節者、直ニ相手呼出、其品ニ寄、五人組をも相糺、請人難立替候はゞ、早々借屋立去候樣可申付、尤請人死失、又者致欠落候ヲ、數月其儘ニ差置有之候はゞ、家主等閑之仕方不念ニ付、急度叱り置申候、

但立去申付候得共、不立去旨家主申出、廿日以前ニ不立去候はゞ、同心差遣爲召捕、外ニ子細無之候はゞ、門前拂可申付候、

此儀請人致死失候歟、又者致欠落候ニ付、跡請人早々立替候歟、又は無左候はゞ、家明渡候樣、家主願出候節、取計之儀御同樣ニ御座候、併家主等閑ニ致置、數月其儘差置候はゞ、其趣意ニ寄、嚴吟味相應之咎も申付候、

但借屋人家明不埒之節之儀、於當表は右體之儀相願候はゞ、借屋人呼出相糺、爲立去候上、願下ゲ承屆候仕來ニ御座候、尤同心差遣召捕、門前拂等申付候儀者、仕儀ニ寄候儀ニ付、衆而難差極候、

〔大内家壁書〕今八幡社頭并御神領事條々〇中略

一諸人號屋地、雖申給神領內、則不作家、不辨收地料、剩於彼地內定置百姓、納取地子、偏如私領有受用族云云、於自今已後者、縱以上裁雖預給、至如此之仁者、言上子細、爲社家可召放件地、若又乍居住不辨納地料者、就訴訟之是非、可被付渡其家於其地主事、

右條々堅固所被仰出也、以此旨可有其沙汰之狀如件、

文明十年卯月十五日　遠江守正任判

〔世事見聞錄 五 上〕諸町人之事

世上一統町人の世と成て、形り振りも町人眞似、行狀も町人風に移りて、義理作法の堅固なる事は、鬱陶敷事いらざる事に成り、猥りに利に走り、輕薄に成り、面眉恥辱を知らず、我儘に奢ることを能とする事になりぬ、扨又右體町家繁昌なるゆへ、段々人數增、家數增、年々倍增し、夫ニ隨つて町々の地面直段高直に成ける事、古今雲泥の違也、今〇文政天保頃日本橋江戸橋近邊の地には、表間口壹間を價千金を以賣買するといふ、又一ヶ月地代壹坪ニ付銀五匁拾匁といふ、店賃家賃も夫に准ずる也、江戸四里四方の町々、場所の榮枯に依て高下有之といへども、何れも年々に直段上り、存外之高料に成、京橋銀座町の內に、萬治の頃、錢四十五貫文にて買たる地面、當時の直段に積れば金千兩以上也、地代店賃抔も、其頃は一ヶ年に錢七八貫文ならでは取上ざりしが、今は金六拾兩程上るといふ、町々の人數多く成し事、繁昌に及びし事を知るべし、右の錢四拾五貫文は金拾兩程也、夫が千兩と成ては百倍なり、万治より當時迄凡百七十年隔るなり、百七十年程の間に、當地の結構百倍せる事也、又深川邊にも享保の頃、百八十兩程にて調たる地面、近頃三千五百兩に賣たりと聞、當地の繁榮ニ隨ひ、地面の直段上りし事を知るべし、か丶る高料なる土地に地代店賃を出し、其外種々の諸失費を出して、結構に住居するなり、商賣の潤澤利益の澤山成事を知るべし、依而御醫師御同朋御坊主御用達町人諸職人等、町地面拜領の分、全體銘々の住居の地に給りたるが、今は右體多分の地代上る故に、其身は外に借地して住み、拜領の町地は町人に貸し、幾百坪貳百坪三百坪に及ぶべき田地一反にも足らざる地所を以て、知行百石貳百石の分限に當り、一ヶ村二ヶ村の物成にも應ずる程の地代金を取上るなり、當地の町々にて表間口六間裏行廿間にて百貳拾坪の處、百姓田地一里四方にも當る事に、今地面を持し町人等、聊の失費も出さず、身も勞さず、莫大の地代店賃を取る也、地面一ヶ所といへる表間口六間裏行廿間を、是が最初

壹人前に表間口拾間二十間三十間など、段々大地面ありて、代金壹万両に及ぶ地所あり、夫を五ヶ所乃至五十ヶ所百ヶ所も持たるあり、江戸中に地面澤山持たる者、大概二百ヶ所持たるが可と見へたり、是武士の五千石壹万石乃至五六十万石の分限に當る程の金高を、無役無年貢にして手も濡さずとる也、是都鄙之違ひ黒白成事を知るべし、爰にヶ樣の福祿滿る故、國々在々に難澁逼る也國々の農民は年々に擧て兎角都會ニ出て、人數減て、田畝廢り、都會の地は人類增して尺寸の透間もなく、家居立籠、地面も高料に成りて、右之事何寸何分を爭ひて賣買する樣になれり、右體年貢も不出、國役も不勤方は人數まして繁榮に及び、年貢を納め國役を勤る方は人數減り、地所も廢る也、是國民の本は薄くなり、末の極民は繁茂する也、誠に天下國家の偏にて、本廢りて末に走りたるといふべし、此上も、彼は衰へ、是は盛なるべし、

〔續百一錄〕寛保貳年十二月廿五日

一 聖護院村

地代米三斗　歩代銀九匁

右者禁裏樣へ御年貢也

聖護院村庄屋

西村源右衛門

餅子田甚右衛門

右養父屋敷之地代、今日庄屋へ遣ス、

〔天保集成絲綸錄八十三〕寛政二戌年九月

此度町々地主共、地代店賃上り高等書出置候ニ付、家屋敷讓渡ニ相談も致、遠慮、自然與見合候樣相成候而者、買求候もの者、不差急事ニも可有之候得共、賣拂候もの者、差當り迷惑可致儀ニ候間、

家屋敷讓渡者勿論、家質其外名前書替等迄も、決而差構無之儀ニ候條、地主迄も心得違不致樣、名主共より中間讓渡家質名前替等迄、差支無之樣可致候、尤先達而地主共名前書出置候事ニ候間、讓渡等有之候はゞ、相濟候上、地主共ゟ訴ニ不及、其前之名主ゟ番所江可申出候、

戌九月十九日

〔諸色調類集十ノ六十九〕天保十三年壬寅四月日

家賃金歩合引下ゲ幷家賃之法可相改旨、町觸之儀奉伺候書付、

左衛門尉殿江相談もの　　町奉行

今般市中地代店賃、寛政度ニ見競引下ゲ方申付候ニ付、地主共手取金相減候間、家賃金借受罷在候者共、

（朱書）家賃金之儀者、沽券證文、名主方江預ケ、家賃證文、家守請狀、金主方江相渡置、其地面上り高目當ニ而、利足之儀者、家賃と唱、月々上り高之内を以、金主江相渡、地所又者金高ニ寄、壹ヶ年三歩ゟ六歩位迄之利足ニ而致取引候通例ニ御座候、

是迄之姿に而者、地所不相應過分之宿賃ニ相當、自ら相滯候ニ者、地所をも相渡候樣成行、難儀可致候間、今般引下候上り高ニ應じ、家賃之儀も歩合引直、證文書替、此以後家賃貸附候分者、是迄之通無差支取引可仕旨申渡候はゞ、御仁惠之一端にも可相成、且家賃取引之節、唯今迄元沽券帖名主方江預り置候故、先年ゟ不正の取計致し、御仕置申付候ものも不少、既今般須田町紋助、根津門前町長右衛門儀、甲斐守伺之上、重キ御仕置申付候得共、畢竟仕法不宜故、右體不正之筋も出來候儀、以來沽券狀名主方江預ケ置候儀者相止、家賃證文江沽券狀相添、金主江相渡候樣仕法爲相改候はゞ、此上紛敷儀も有御座間敷哉ニ付、右之趣町觸申付候樣可仕候哉と奉存候、依之別紙町觸案相添、此段奉伺候、以上、

八月

鳥居甲斐守

遠山左衛門尉

(御用屋敷地守進退)天保十四卯年二月中、受負御免被仰渡趣、

本所龜澤町 御用屋敷上納請負人 治郎左衛門

同所吉岡町貳丁目 同 利兵衛

同 定七

淺草山谷町 兩國橋 御上り場付町屋敷 喜三郎

同 利兵衛

此者共儀、右町屋敷地代仕切上納請負致居、御用屋敷地代之儀は、外町並ゟ格別安く有之候處、家作致し、店貸之分者、外町並同樣ニ貸附ル故、是迄多分之德用を取候段、不相當之至ニ候得共、是迄之儀者不及沙汰、尤地代之義は、惣體五分引下ゲ遣ス、仕切上納請負者差免、寬政度之通り見取に致し、地守共ニ爲取立、其方共建置家作地之地代者、地守共江可相渡、右家作上家代之義は、此度引下ル外町並上家代同樣ニ致し、右江御用屋敷、此度引下ゲ遣ス地代差加、貸付候樣可致、尤治郎左衛門儀者、舊來中之鄉竹町船渡請負致居候處、安永之度、大川橋新規掛渡ニ相成、右橋は往來人ゟ渡錢取ニ有之間、格別差障も無之處、文化六巳年ゟ、小田切土佐守掛りニ而、右橋十組問屋共爲冥加引請相成、渡錢相止間、船渡者衰微致し相續成兼、右橋有之上に、船渡無之共、往來差支者無之處、前々ゟ出水其外役船差出來、中之鄉御上り場見守掃除等いたし、乍少分御用も相勤間、右爲取續、龜澤町御用屋敷之內ニ有之明地江、家作貸し貸付、右上家代之餘德を以、船渡永續致度段、同年

小田切土佐守御役所江願出、其砌取調之節、前々見取之上納高ニ見合、乍聊上納金相增、一圓仕切上納請負致度段、猶又相願候ニ付、願之通リ一圓請負申付置處、此度前々之通り、地守共直取立爲致、仕切上納差止ル上者、其方儀は最初願上之通り、龜澤町御用屋敷之內明地江相建、家作上家代之餘德を以、御用向等無差支樣可致、利兵衛、定七者、地守之儀者是迄之通り相心得、諸事本所道役差圖請可相勤、尤此上貸付方は勿論、都而不取締之儀於有之者、急度申付候間、其旨可存、

天保十四年卯二月二日

古事類苑

政治部七十五

下編

邸宅下 辻番 自身番附

〔新編追加 政所〕一洛中屋地幷近國買地事

於屋地者前々少々雖有其沙汰、自今以後、屋地及買地者、共以沒官領之外不可及沙汰、但於帝仁治以往成敗狀之輩者、准西國堺事可有其沙汰、

弘長二年五月廿三日 武藏守判

相模守判

陸奧左近大夫將監殿

〔御定書百箇條〕讓屋敷取捌之事 享保五年極

一讓請候町屋敷、町內江弘無之、町名前不改、類及出入候得ば、 屋敷取上ル

〔享保集成絲綸錄 三十九〕慶安四卯年二月

一家賣買之儀は、町之名主五人組加判に而賣買可仕候、家守留守居致吟味、手形取可申候、縦ハ借金に而も沽劵仕候上公事出候共、斯之ごとく御さばき可被仰付事、○中略

二月

明曆二申年三月

一町中に而家屋敷買候者、名主五人組所江銘々參候者、五人組能々見屆ケ相改、慥ニ存候上名主

一五人組之加判を以、沽券狀取家屋敷賣買可ㇾ仕事、

一名主五人組候とて、其五人組穿鑿茂不ㇾ仕、家屋敷買取以後に出入ニ於ㇾ罷成ㇾは、さばき申付間敷事、

此趣は町中にて作り五人組のにせ手形を致、家之賣買候故如ㇾ此相觸候間、向後能々僉議仕、買候者自身幷名主五人組改手形取可ㇾ申者也、

三月〇中略

寛文十三丑年〇延寶元年五月

一町中ニ而家屋敷賣買仕候節、又は家屋敷出入仕、沽券手形仕候節、跡々ゟ名主加判不ㇾ致候町々も有ㇾ之由ニ候、自今以後者、名主加判仕相極可ㇾ申候、若何角と申名主加判仕間敷由ニ而、相滯儀有ㇾ之候はゞ、家屋敷賣申者共斷可ㇾ申來候事、〇中略

寶永三戌年正月

一町中家屋敷賣買之節、名主差圖ニ而、町祝之金銀大分出させ、其上芝居又は船遊山など望候而振廻致させ、幷諸勸進之義、名主贔屓を以、無體ニ奉加付させ物入多、町人共別て致ㇾ迷惑候由相聞、名主共仕形不屆至極ニ候、相定候町札者隨分輕くいたし、振廻者堅相止可ㇾ申候、此上名主共非分成儀於ㇾ有ㇾ之者、急度可ㇾ申付候間、早速町人共可ㇾ訴出候、此旨町中可ㇾ相觸候、以上、

正月

寶永五子年六月

一町中ニ而、家屋敷致賣買候節、町札かろくいたし、振廻等堅無用可ㇾ仕由、前方相觸候處、今以かゝり物多く、町中共致難儀候由相聞候、畢竟名主共仕形不屆候、依ㇾ之向後員數を定觸候之間、可ㇾ存其旨候、

一分一金者百兩ニ付貳兩ニ可相定候、貳兩より內出し來候町々者、只今之通可仕事、

一間口并代金町役ニ無構、名主江銀二枚、五人組江金百疋ツヽ、町中家持壹人ニ鰹節一連宛可遣事、

但右之員數ゟ內出シ來候町々者、只今之通可仕事、

一右之外肴物振廻堅仕間敷候、幷家持附替候節、家守之町礼可爲無用事、

右之趣、堅可相守候、畢竟名主共以了簡任勝手仕候儀候、向後外ニ事寄、少成共肴物、又者振舞等請候義相聞ニおゐては、急度曲事ニ可申付候、此旨名主共幷町中江可觸聞者也、

六月

〔德川禁令考後聚六制禁布令〕享保五子年

讓屋鋪之儀ニ付町觸

家屋敷他人ハ勿論、たとひ親類江讓渡候共、早速町內ハ不及申、一類江も弘メ致し、帳面名も改可申候、讓渡候儘ニ而不念いたし打捨置、重而及出入、詮議之上證據も於無之ハ、向後奉行所江取上ゲに成候間、右之段、町中江可相觸者也、

正月

附記

元文三午年三月十四日、彌此通定置、追而被仰出等、此帳ニ可記儀ハ書記可申候、其節々其趣書付可差出旨、評定所一座江被仰聞候帳面之內、

〔御書付留要略二〕屋敷辻番

一享保十一午年九月二日、左之御書付一學〇目付松平被相觸候、

一抱而百姓抱屋敷幷町並屋敷、町屋敷所持之面々讓渡之儀、百姓地ハ百姓江、町屋敷者町人江

讓渡候儀ニ而、筋違之ものへ讓渡候儀者不成事ニ候、讓渡候節、諸方江遣候段、屋敷改江達相談、屋敷改差圖次第遣候樣可致候、

一武士ゟ武士江遣候儀、百姓地を町人江、町屋敷を百姓江遣候儀者不成事候、乍去格別之由緒も有之候はゝ、屋敷改江相屆、差圖次第可致候、

右之趣近年猥成候樣ニ相聞候、向後相違無之樣可心得旨、向々江可被達候、

〔享保集成絲綸錄三十九〕享保十五戌年八月

覺

一家屋敷賣買幷家質出入之節、手付金之儀、先年も相觸候通、名主五人組江相屆、請取可申候、自今相對ニ而手附金取引致シ、公事合ニ成候共、裁許無之候間、其旨可相心得候、

右之通、町中不殘可相觸候、以上、

八月

〔德川禁令考後聚六 制禁布令〕寛延二巳年二月

屋敷讓渡讓受ノ儀ニ付觸書

一新規抱屋敷出來候儀者、決而不相成候、

一御三家諸大名を始、總而御目見以上之分ハ、由緒無之共、相互ニ讓渡讓受候樣可致候、

但抱屋敷數二ツ迄ハ不苦候、其餘者難成候、只今迄持來候分ハ不苦候、

一御目見以下、幷陪臣寺社百姓町人より御目見以上之面々江讓渡候儀、由緒無之候而も可相濟候、

一御目見以上、面々より讓渡候儀ハ、陪臣百姓江ハ由緒無之候而も不苦候、寺社町人江者可爲無用候、

但百姓所持之抱屋敷圍等も有之候ハ、讓受抱屋敷致候儀不苦候、百姓所持之畑地を讓受、抱屋敷致候儀ハ可爲無用候、

一御目見以下幷陪臣寺社百姓町人由緒無之候共、相互ニ讓渡讓受候樣ニ可致候、

右之內

一武士より町人江讓渡候儀ハ可爲無用候

一町人より武士江讓渡候儀ハ不苦候

一百姓所持之抱屋敷を、町人江讓渡候儀ハ難成候、

一寺社抱屋敷ハ由緒無之候共、讓渡之儀、武家町人之無差別可相濟候、

一總而抱屋敷を、百姓江遣候儀ハ、御目見以上以下、何方より願出候共由緒無之候而も可相濟候、

一家來所持之抱屋敷を、主人屋敷ニ仕候儀、又ハ主人所持之抱屋敷を、家來江遣候儀、由緒無之候共可相濟候、

一總而讓渡候抱屋敷を、又候外江讓渡候儀、年數ハ無差別可相濟候、

一町屋敷讓渡之儀ハ、町人より百姓江者難成候、

右之通、向後可被相心得候、

一抱屋敷相對替之儀も、向後讓渡讓受之通相心得、可被取計候、

巳二月

〔寶曆集成綵綸錄二十九〕寶曆九卯年十一月

町々家屋敷賣買幷ニ讓渡等之節、町禮之定、前々度々相觸候處、近來猥ニ相成候段相聞、不屆ニ候、屋敷賣買之節、町禮先年相觸候通、〇中略

一家守共町役入目之儀、町內江者割合之通書出シ、地主江は過分之入用付掛致、金銀貪取候者も

有之由相聞、不屆至極候、家主共堅相愼、不直成儀仕間敷候、於相背は可爲曲事候、

一家屋敷他人者勿論、縦親類江讓渡候とも、早速町内は不及申、一類江も廣目いたし、帳面名も相改可申候、讓渡候儀ニ而致不念打捨置、重而及出入、詮議之上、證據も於無之は、向後奉行所江取上ニ相成候、

右廣目之儀、屋敷賣買之節、音物三分一之積り可致候、

但右員數ゟ内出シ來候分は、出シ來候通可致候、

右之趣、寬永三戌年ゟ享保十七子年迄、段々數度相觸候處、近來猥ニ相成候旨相聞候、他人者勿論、親類妻子江讓渡候儀も、右物入多候故、廣目之儀及延引候類も間々有之樣ニ相聞、不屆ニ候、名主五人組共、常々入念取計候はゞ、右體之儀は有間敷事候、前々も相觸候通、無相違急度可相守候、於相背者吟味之上急度咎可申付候、

十一月

〔德川禁令考二十六屋敷改〕天保十二丑年四月十日

百姓名代ニ而抱屋敷所持致シ候儀ニ付

御書付

越前守殿御渡

御目見以上、以下、陪臣、寺社、町人等、百姓地を内々ニ而讓受抱屋敷ニ致シ、百姓名代ニ而所持いたし候者數多有之趣相聞候、右體ニ而ハ、御場内御取締不宜候ニ付、此度不殘屋敷改ニ而致吟味、持主之名前ニ而抱屋敷帳面ニ相載せ、御料私領寺社領ニ不限、在來圍家作等間數坪數ニ隨ひ、役人足爲差出候樣、屋敷改江申渡候間、所持之面々より、屋敷改江可申達候、是迄之通、百姓名代ニ而内々所持之もの在之候ハゞ、持主村役人共可爲越度候、

但是迄持主相知れ候分之抱屋敷ハ、只今之通役人足等差出ニ不及、尤讓渡シ等も是迄之通之事、

右之通、天明度相觸候處、其後猥ニ相成、百姓地を町人共内々讓受、抱屋敷ニいたし、家作取建候由相聞候、右體百姓名代ニ而内々所持之分ハ、家作取拂、早々返地爲致候、此段屋敷改江申渡候、向後内々所持いたし候もの在之ニ於てハ、持主ハ勿論、村役人等急度可申付候、其可可相心得候、

右之通可相觸候

〔德川禁令考屋敷三十七〕天保十三寅年正月八日

町屋敷讓受之儀ニ付御書付

萬石以上之面々、町屋敷所持いたし候儀難相成と之趣相達置候儀ハ無之、巳ニ御家人江ハ町屋敷被下候程之儀ニ候得共、内々讓受、外名前等ニ而所持いたし候儀ハ難相成、御咎等も有之候、此度より改而表向屆申聞、町家作之町屋敷讓受、武備手當之ため、銘々分限ニ應じ所持いたし候儀者不苦旨被仰出候、尤向後町屋敷内々讓受候者も於有之ハ、急度御咎等も可有之候條可被存其趣候、且又表向屆等申聞候振合ハ、享保寛延之度相達候趣ニ准じ、向々江可被達候、

十二月

〔德川禁令考屋敷改二十六〕追錄

地所讓渡讓受之例左ニ收載スルハ、武士ヨリ町人へ讓渡ノ例ナリ、町人ヨリ武士へ讓渡スモ亦此ニ同ジ、

乍恐以書付奉願上候

一町御奉行御支配音羽町家主新助申上候、御支配神田新銀町代地北側西角より貳軒目、表總地面坪數三拾貳坪壹合七夕餘、同町西角より三軒目、總地面坪數三拾壹坪八合六夕餘有之、町家作之屋敷貳ヶ所町御奉行遠山左衞門尉樣御組同心衆大竹銀藏殿父大竹甚藏殿所持之處、右

町屋敷貳ヶ所家作其外有形之儘、此度相對を以私讓請、以來所持仕度、町御奉行遠山左衞門尉樣御添翰を以奉ㇾ願上ㇾ候、何卒以御慈悲、右願之通被ㇾ仰付ㇾ被ㇾ下置候樣偏奉ㇾ願上ㇾ候、以上、

音羽町家主
願人　新助

五人組　鐵五郎

名主　彌左衞門

屋敷御改
御役所様

以ㇾ書付ㇾ奉ㇾ願上ㇾ候

一町奉行支配神田新銀町代地北側西角より貳軒目、南表田舍間五間壹尺、裏幅同五間壹尺五寸餘、裏行同六間壹尺有ㇾ之地面壹ヶ所、同町西角ゟ三軒目、表田舍間五間壹尺、裏幅同斷、裏行同六間壹尺有ㇾ之地面壹ヶ所、都合貳ヶ所、此坪六拾三坪九合七夕餘有ㇾ之、町家作之町屋敷、去ル天保十三寅年五月中、御屆申上、私所持仕候處、右町屋敷家作、其外有形之儘、此度相對を以、音羽町家主新助江讓渡申度、則別紙繪圖面を以奉ㇾ願上ㇾ候、何卒願之通被ㇾ仰付ㇾ被ㇾ下置候樣奉ㇾ願上ㇾ候、以上、

町奉行遠山左衞門尉組同心

大竹銀藏父
大竹甚藏

弘化二巳年八月六日

屋敷御改御役所

〔本八町堀五町間數帳〕本八町堀壹丁目栗戸塚

一表田舍間九間

西裏行田舍間拾間　東裏行田舍間拾間　裏幅田舍間六間　此坪數七拾五坪〇中略

沽劵狀

此家屋敷、深川大崎町家持太郎五郎ゟ代金六百兩ニ買請、賣主太郎五郎印、五人組仁兵衛印、同嗇助印、名主庄三郎印、永代沽劵を以買請、今日弘相濟、

本八町堀壹丁目重蔵地借　傳吉　未四拾貳才

安政六未年十二月廿六日

〔塞川入道筆記〕一京の町に賣家あり、門に札をたて、おいた、この家うり家なり、但た、みやにうらふと書てあり、皆人これを見て不審する、家をうるほどならば、誰になりともうれかし、た、みやをこのむは何事ぞといふ人おほかりけり、さてこのうりての心をとへば、た、みやにうらうとは、くづいてうらうといふことゝや、

〔武澤文書〕佐野彌太郎増綱申、下野國佐野庄小見家壹宇、上佐野內在家壹宇名字坪付載證文事、

右佐野彌太郎顯綱以當庄多奈和見鄕內田肆段在家壹宇、正和五年四月廿四日、永代令沽却之由増綱依申之、被尋下之處、於彼田在家者、同佐野女房左衛門七郎親綱未來領主也、爲顯綱一期領主之身、爭可令沽却永代哉、仍不可被許容、顯綱放劵之由親綱所支申也、爰如顯綱放劵狀者、有彼田在家相違者、同鄕內以顯綱知行分別田畠可立替之由載之訖、可被糺明之由増綱依申之、重被差文覔奉行之間、爲問實否、去年四月十八日以來、度々雖下奉書、無音之間、同十一月十五日仰三村兵衛次郎親氏、加催促之處、如親氏執進顯綱今年三月十八日請文者、上佐野田奈和見鄕內田在家於仁令沽却之處、親綱支申之間、其替仁件貳ヶ所田在家任永代放劵狀令打渡増綱訖云々者、爲當鄕私領先々成敗訖、然則於彼田在家者、任顯綱放劵可令増綱領掌也者、依鎌倉殿仰下知如件、

文保二年四月廿八日

相模守平朝臣花押

武藏守平朝臣花押

〔光明寺舊記一〕永沽却渡進屋敷事

合壹所者四至本券面具也

直錢拾肆貫文請取事

右件屋敷者、自祖父春彙之御手處分得于今無相違者也、爰依有急用、限上件直物所奉沽却渡于荒木田氏子實正明白也、若十箇年之內違亂於出來者、儻可辨本錢者也、仍爲後代龜鏡沽券之狀如件、

永和四年(戊午)十一月一日　　　權禰宜度會久彙

〔東大寺文書 五〕賣渡　今小路敷地新立劵文事

合口三間奧半町　七尺門定也　在大和國添上郡東大寺鄉今小路南邊　四至等本劵面有之

右件敷地者、戒壇院祈田忌日料ニ買得相傳地也、而權守宗安先祖相傳依爲地、今買返間、限永代直錢拾伍貫文ニ宗安殿ヘ奉賣渡事實正明鏡也、向後更不可有他妨者也、若違亂煩出來候者、可有盜人御沙汰者也、仍爲後日支證文賣劵狀如件、

應永五年(戊寅)八月廿二日　　　年預懷乘(花押)

〔大湊太田文書〕定永財沽渡屋敷之事

合參丈者　所在馬瀨御薗內北次三郎舊屋敷四至(限東勘大郎殿屋敷、限南道場屋敷、限西世古、限北鹽屋、)

直錢貳貫肆百文請納畢

右彼屋敷者、自親父久義之御手處分給後、無相違知行于今、爰依有急用、限上件直物、相副次第之手繼證文等、永所沽渡申于馬瀨之慶若大夫殿實正明白也、但依爲本文書等連劵、相副案文等所申也、若十ヶ年中ニ不思儀之煩出來者、相副本錢ニ利分儻可返進申者也、雖至末代不可有違亂、仍爲後代沽劵之狀如件、

應永十六年(己丑)十月七日

沽主大中臣命幸女(花押)

口入義次郎

執筆權禰宜荒木田守氏(花押)

〔徵古文府 二〕永代賣渡申屋敷之事

合壹處者在所（ヌノヒコノウチ タカノカイト）　四至（限東龍澤庵カキ子、限南道、限西カモントノ地類、限北世古、）　北面四間半、南面四間一尺、

右件屋敷者、依有急用、直錢貳貫二百文、公文倂賣渡申處實正明白也、於但此屋敷違亂煩儀申者有間敷候、仍爲後日賣券狀如件

明應八年己未正月晦日

賣主村山殿後室 花押

世續、、、、、

口入九郎左衞門

〔諸色調類集 十ノ六十九〕（家賣證文 家守請狀）先々振合寫

永代賣渡申家屋敷之事

一何町何町目北角表京間何間、裏幅同斷、裏行同何間有之、拙者所持之家屋敷壹ヶ所、此度代金何百兩ニ貴殿江永代賣渡、則五人組名主立合、右之金子不殘慥に請取申處實正也、此家屋敷之儀、御公儀樣ゟ拜領地拜借地等ニ而者無之、勿論諸親類は不及申、外ゟ構無御座、若横合ゟ違亂申者有之候はゞ、拙者共方ニ而急度埒明、貴殿江少も御苦勞相掛ヶ申間敷候、爲後日永代賣渡申沽券狀仍如件、

右家屋敷 賣主　誰

五人組　誰

同　誰

同　誰

名主　誰

證殿

〔地券帖取合〕南小田原町壹丁目中通南側東北角ゟ三軒目

一表京間五間　裏幅京間五間　東裏行京間拾九間半　西裏行京間拾九間半

此坪數九拾七坪五合　沽券金貳百貳拾五兩

此家屋貳ヶ所ニ而、金四百五拾兩ニ、乘房町家持傳兵衛妻やす後見、右傳兵衛賣主印、表京間五間有之家屋敷、五人組次郎兵衛印、九助印、嘉右衛門印、名主十次郎後見十右衛門印、表京間四間四尺八寸七分、有之家屋敷、賣主右同人印、五人組惣作印、七右衛門印、善次郎印、名主十次郎後見十右衛門印、右之通判形、永代御劵狀ヲ以、今日買受致度目候、

天保四巳年二月廿日　勢州一志郡須ヶ瀬村百姓六兵衛妹
地主　貞眼一　巳三十一歳
後見　右兄　六兵衛　巳五十一歳

同町中通南側東北角ゟ四軒目

一表京間四間四尺八寸七分　表幅京間四間四尺八寸七分　東裏行京間拾九間半

西裏行京間拾九間半

此坪數九拾貳坪六合　沽券金貳百貳拾五兩

右地主貞眼儀、弘化二巳年十一月廿五日、病死致候ニ付、此家屋敷、拙者讓受候ニ付、今日別紙致一札、沽券狀宛名改繼書、間口五間之方、五人組文右衛門印、九助印、嘉右衛門印、名主十右衛門印、間口四間四尺八寸七分之方、五人組儀兵衛印、吉左衛門印、善次郎印、名主十右衛門印、右之通印形相濟、今日繼目致、弘メ候、

弘化五申年〇嘉永元年閏二月廿五日　勢州一志郡須ヶ瀬村
右貞眼跡相續人同人甥吉五郎事
地主　六兵衛印　子廿二歳

安政六未年正月廿一日改印　沽券代 錺屋町家主 四郎兵衛

右家屋敷沽券代四郎兵衛儀、先達而病死致候ニ付、以来嘉兵衛儀、沽券代相勤申候、以上、

慶應三卯年十一月五日　沽券代 錺屋町家持六兵衛店支配 嘉兵衛 卯四十歳

此家屋敷貳ヶ所、代金四百五拾兩ニ錺屋町家持六兵衛、勢州住宅ニ付、店支配人嘉兵衛ゟ買、主六兵衛、五人組八右衛門、九助、藤助、仁兵衛、常次郎、名主十次郎、右之通判形相濟、今日永代沽券狀ヲ以買請致度目候、

慶應三卯年十一月五日　堀江町三丁目元土地借 地主 京助印 卯四十六歳

〔國制記四〕明和四亥年沽券狀御改

明和四亥十月、京都町中沽券御改之事、此度東御役所様ゟ、町々家別沽券、御改被遊候ニ付、十月八日御觸有之、當組行事町ゟ被達候ニ付、則町中立會、家別沽券狀御改、御雛形印形を以、新沽券狀相認、并帳面差添、十一月十二日、町中印形いたし行事町江差出し、同十五日、組町壹結ニいたし、町代ゟ御役所江差上候事、翌子二月十日、東御役所江町中被召出、新古券狀江、於御前御判印頂戴仕候事、

右御觸之寫、御雛形之寫、町々在之候ニ付略之、

東御奉行　沽券改御懸り 石川土佐守様

西　太田播磨守様

御諸司代　阿部飛驒守様

〔公事取扱〕跡式養子離別後住并引取人〇中略

一及出入沽券證文於無之ヲハ、家屋鋪公儀へ取上ル、

〔建武式目〕一可被止私宅點定事

厥庭弱之微力、構口造之私宅、忽被點定、又被壞取之間、無所隱身、則令浮浪終失活計、尤不便之次第也、

〔政所賦銘引付三〕文明十二年庚子

飯加一楠葉庄住人長井源三郎長秀　文明十二九十四

山崎猿屋ヨリ預リ置料足事、畠山右衛門佐殿發向候時、捨私宅罷退候間、悉以被取散了、時宜委細申披之段、神方令存知畢、然今更及催促云々、

辻番

辻番ハ幕府ノ城郭、及ビ武家屋敷ノ附近ニ設置シテ、以テ喧嘩、狼藉、病死者、若シクハ火災等ノ取締ヲ爲ス、寛永年中始テ設ク所ニシテ、大名ハ多クハ各自ニ之ヲ設ケ、旗本ハ無席、小給ノ者ヲ除クノ外ハ、各、組合ヲ立テ交替セリ、之ヲ組合辻番ト云ヘリ、又公儀辻番ト云フモノアリ、蓋シ幕府擔當ノモノナラン、而シテ享保八年ニ、公儀幷ニ組合辻番ハ之ヲ町人ニ請負ハシメタレド、同十二年ニ至リ、組合辻番ハ請負ヲ止メタリ、當時辻番所ノ數ハ、約九百箇處ノ多數ニ至レリト云フ、

〔泰平年表大猷院〕寛永六年、此年始て、江戸武家屋敷小路番所置、

〔武江年表一〕寛永六年己巳、今年より此家がた辻番を置る、端々に於て辻斬ありし故とぞ、十三年丙子、高割辻番所始る、或は五年ともいふ、

〔瀬田問答〕一高割辻番ハ何頃ヨリ初リ候哉

答　高割辻番所ハ、寛永十三年ニ初テ、大小名共ニ小路々々ニ辻番所ヲ建テ、其外町中端々木戸ヲ拵ヘ、番人差置べキ旨被仰出候事、前撰集ニ見エタリ、定テ萬石以下ノ分ハ、此節、諸懸高割

ニ成候事ト被存候、

〔柳營秘鑑三〕御目付支配

一江戸中辻番所 但武家之屋敷辻番廻り場、寺社井町屋敷之儀者除之、

〔教令類纂初集五十六〕寛永十癸酉年六月廿九日

覺

頃日辻番油斷ニ相見へ候、端々ニ而人を切候間、辻番之儀入念急度可被申付候、以來御歩行目付衆毎月まはし、惡所候はゞ可致言上之旨候間、晝夜無油斷可申付事、

酉六月廿九日

〔武家嚴制錄二十九〕一辻番所御條目

定

一辻番の義、晝貳人夜四人宛にて、懈怠なく相勤べし、不行跡之者、大老幷かたわもの、不可差置之、自然夜廻衆被申付候義在之に於ては、一切不可違背事、

一夜中は一時に一度づゝ、町中をまわるべし、若たち留るもの有之ば、改之可追拂、あやしきものニ於いては、先々辻番所迄可送屆事、

附、何方ニ火事出來に於いても、町中へ不殘早く可令注進事、

一狼藉者有之而、先々より聲をたて追來においては、早速出合可捕之事、

一辻番所江番之者之外、不寄男女、一切差置べからざる事、

附、番所ニ於て博奕堅停止の事、

一辻番之もの、一切人請ニ立べからざる事、

右條々可相守之、自然辻番之者於令油斷は、月番之面々、急度可被申付之、又辻番の義ニ付而出入

有之ば、月番之方へ一町中出合、相談いたし相濟べし、滯義在之而難令延引、其月番相極者也、

万治二年亥三月日

〔享保集成絲綸錄三十八〕寛文元丑年九月

一兩國橋　一淺草橋　一柳原新橋

一柳原和泉橋　一筋違橋　一小石川水道橋

一たやす御門之橋　一牛込御門之橋　一四ッ谷御門之橋

一赤坂御門口　一淺布之臺備島屋敷辻　一西久保土器町四辻

一芝金杉橋

右口之を限、在郷荷付馬、并駄賃馬、小荷駄馬ニ口附之もの乘候而參候はゞ、下馬いたし、夫々内ニ而一切乘不可旨可申渡事、

但辻番々々江急度右之趣可申渡旨、御徒目付申渡之候、

〔教令類纂初集五十六〕寛文三癸卯年三月

江戸中辻番之覺

一辻番所之儀相定、人數之通、晝夜無懈怠勤之、油斷すべからず、夜中ねずの番をいたし、番所之戸を明置、切々見廻り、晝夜にかぎらず、狼藉もの、其外不審成もの於有之者、早速出合留置、不屆之子細有之者、其主人江相渡すべし、主人於不知者、其辻番之月番江申斷、指圖を得、町奉行所江相渡すべし、

但公儀之辻番者、其支配之方へ相尋、町奉行江召連可渡之事、

一奉行人御目付并夜廻り之面々申渡、御法度之趣、違背すべからざる事、

附、雜説申觸べからざる事、

一手負たる者來候はゝ留置、主人於有之者相渡之すべし、主人しれず候ば月番ニ申斷、町奉行所ヱ渡すべし、公儀之辻番者、其支配之方へ指圖を請、町奉行所へ可渡之事、

一辻番所に男女ともに、當座之宿をかすべからず、惣じて番所之前ニ、人集め置べからざる事、

附預物仕るまじき事、

一辻番ニ而、食物其外目にかゝる物、商賣すべからざる事、

右此旨を相守べし、若於令違背者、科之輕重に隨ひ可行罪科者なり、

寛文三年三月日　奉行

寛文三癸卯年三月

覺

一辻番之者、六十歳以上、二十歳以下、幷不行步之者、病人等不可差置之事、

一辻番組合之面々月番ニいたし、油斷無之樣に堅可被申付候、木刀、さすまた、もぢり棒、明松、早繩、挑灯、番所ニ差置可申候、但長道具者可爲無用事、

一辻番人數之儀、晝四人夜六人差置之、不寐之番可被申付事、

以上

三月日

〔享保集成絲綸錄三十八〕寛文九酉年二月

一江戶中辻番有之面々ヱ、以書付相達之、江戶中往還之輩、於道路頻に煩出し、又者酒に醉行倒候節、町送りに仕儀、向後堅可爲停止、侍小路町屋敷之前たりといふとも、其所にしばらく留置之、介抱、正氣付候上可遣之、若一日も一夜成共、不得快氣においては、其所々支配方迄申斷可受差圖、たとひ正氣付候上にも、行步不叶時者、其者之住所承屆之、使を差越、迎之者招寄相渡之つ

かはすべし、右之旨趣於致違背は、後日に聞え候共、可為曲事者也、

二月

〔德川禁令考後聚七刺禁布令〕辻番所定書之事

覺

一道橋にて古かね一切賣買仕間敷候、若賣買いたすもの有之候ハヾ、其所之辻番捕へ、奉行所江可出之、見のがし候におゐてハ可為同罪事、

一總じてはづしかなもの、幷銅瓦、鉛瓦、銅樋、自今以後、一切賣買仕間敷候、但賣買仕候ハ而不叶ものハ、奉行所江可相斷事、

一古着其外古道具賣買之儀ハ、請人を取賣買可致事、

右之通於相背者、可為曲事者也、

貞享元子年二月

〔享保集成絲綸錄三十八〕貞享二丑年九月

覺

所々辻番、頭日はさしたる儀にても無之事を、辻番次に申通候段、不謂儀候、向後者辻番江告來ものゝ於在之は、辻番被勤候衆、家來立合承屆相通すべし、組合辻番者、左様之節者、年番月番江申傳、家來出合、委細承之通すべし、且亦不審なるもの持通る族あらば相改、あやしく候はゞ可捕之、辻番請取之場、彌入念可相守者也、

九月○中略

享保八卯年二月

一辻番人之者、拾ものゝ等不致やうに心を付可申儀勿論ニ候、然共万一捨子在之節は、早速取あげ、

御定之通ニ取はからひ可申候、若むつかしく存、麁末之儀有之におゐては、可行厳科事、

但病人酒酔有之節も同断之事

一件之品は、去ル丑年、筋違橋外ニ而捨子有之節、請負辻番之者、右之子を外江捨候儀、後日に相あらはれ番人は被行死罪候、依之自今請負は不申付筈ニ候間、此旨堅可相心得事、

卯二月

覺

(教令類纂二集八十一)享保十六辛亥年十一月十日

一御曲輪内徘徊仕間敷乞食體之者抔茂、間々相見候由ニ候間、御番所并辻番ニ而心附候様ニ可被申渡候、且又下馬并御曲輪之内ニ而、近來者賣物多く集候、御番所并辻番より心を附、多く集らざる様ニ可被申付事、

(官中秘策二十三)辻番之事

一辻番替之節者、其番所江、辻番役御徒目付被参、留守居呼出し申渡、以後年番之御目付衆江、主人より以使者相心得候旨御届申達之、在所之節者、留守居罷越、右之旨申上、追而従在所以飛札御届申入、右之御徒目付衆江茂留守居罷越、不然も可也、修覆之時、大小破共ニ、御目付衆江伺之、番人外江移り候程之事は、所繪圖面認メ持参、任御差圖出來、御條目様ケ文字不見時は、何方江も不及断認直し張事也、

(官中秘策二十四)喧嘩之事

一辻番之前喧嘩雙方留置、手負は疵之所淺深大小、委敷書付、御目付江御届申上候書付無之候不宜候、手負は早速醫者をかけ養生仕候、様子次第に辻番江入、死人は其場を不動、板屏ニ而圍ひ棒突を出し、往來を不留様に仕、手負上に衣類等をかけ、不汚様に仕、撿使を請候、撿使到來口書

を取被歸、其節手負相果候はゞ、撿使被見も、又々御目付中へ以書付御屆申上ル、〇中略

大名旗本之供を割候者之事

一御供を割候もの打捨に被成候はゞ、辻番罷出、御大法にて御座候間、壹人御殘し置候樣ニ申斷、壹人留置、早速御目付衆江申上候、御屋敷見屆候而、又々其段御目付衆江可申上候事、

手負通候事

一手負通り候ば急度差留、早々御目付衆江可申上候、御歷々にても御大法ニ候間、先々屋敷江御立寄、首尾御合候而、御通り候樣ニ可申候、夫も無構御通被成候ば、人を付御屋敷を見屆可申候、先江其內早々御目付江如此斷候へ共、無理に御通り候故、御屋敷爲見屆、人を付申候由御斷可申上候、御屋敷見屆候已後、又々御斷可申上候事、

附、他之辻番人、右之通り之跡を付來り、此方辻番所を通り候はゞ、早速また此方より一兩人相添、御屋敷を見屆可申候、他所之辻番見送りニ參り候迚、此方辻番不構罷在候はゞ可爲越度事、

欠落者尋來候事

一欠落者に跡より追かけ、捕候樣ニと賴置候はゞ、辻番出合差留可申候、是は下ニ而可相渡事相成間敷候、屆候迄追掛參り候者どもニ、急度差留置、御目付衆江申上、御差圖次第請可申候、追來候ものを歸し候はゞ、辻番之可爲越度事、

刀を持通り候者之事

一子細不存候とも急度差留、御目付衆江可申上候事、

手負行倒者之事

一右樣之もの有之時は、則其場江其儘差置、必手を附申間敷候、辻番組合之御方之家來共立會候

て見屆、番人附置、早々御目付衆江言上可申上事、

何某屋敷前、此方辻番廻り場之内に、幾日何時手負行倒死申候、

口上覺

一侍中間體と相見申候、何之衣類著仕、刀脇差ニ而候事、

一年來何歲計ニ相見候事

一見渡候手疵何ヶ所

内首何ヶ所、脊中何ヶ所、右之脇何ヶ所、

一辻番所ゟ行倒候場所江、何拾何間程御座候、

右之通御座候、御見分無之内と存、委細見屆不申候、御改奉願候、以上、

月日　　何某使者　何がし

宛所不入

一手負にて無之常之病人、又は非人乞食行倒とも、右は心得にて書付認候事、尤中間體に相見へ候而も無刀候者、町人體と認る事なり、

器物類捨置候事

一辻番組合之家來立會、幷近所之辻番も呼寄爲見候て、少も手を付不申候其場所に置て、番人付、早々御目付衆江可申候事、是も書付可然、

〔御目付方諸見分心得方下〕諸事取計心得○中略

倒者捨物不限何辻番年番引受之例

一享保十巳年十二月十九日、神樂坂下條右衛門前に、伊勢參長八倒相煩候處、西丸御納戸組頭多門孫右衛門年番ニ付、西丸御目付中上孫右衛門方ゟ申上、西丸御小人目付太四郎善八罷越、醫

師掛ヶ養育、孫右衛門方ニ而致世話候、

一正德五未年九月廿三日、四ツ谷渡邊平十郎屋敷前行倒之男相果候、并男病人、右許ニ罷出候所、平十郎方ゟは不申上候ニ付、曲淵信濃守組合辻番廻り場ニ付、辻番所ゟ右倒候場所迄百間程隔候得ども、辻番年番故、信濃守方ゟ申上候、御小人目付横田所左衛門、神谷權平見分ニ罷越候、右死骸三日晒、病人は中山出雲守方へ可相渡旨、戸田庄左衛門殿被申聞、諸事年番致世話候、〇中略

辻番廻場ニ無之候得共、捨子他之辻番ニ而引受候例、

一享保十五戌年、鐵炮洲一位樣御用屋敷表門軒下へ、貳才計之男子捨置候、御用屋敷預り深澤又七郎方へ先引取、養育仕置候よし、又七郎ゟ相屆申候、吟味仕候處、右預り候例無御座候、近所辻番廻り場之内へ爲引取、世話仕候樣申渡之、可差越旨、壹岐守殿へ大島織部殿書付ヲ以御伺被成候、右之通可申渡旨被仰渡、御小人目付善右衛門遣候處、御用屋敷前辻番廻り場無之ニ付、織部殿へ又々相伺候處、廻り場之構無之、向寄辻番爲引取可申旨申付候樣ニ被仰渡、御小人目付森右衛門遣、青山藤藏組合辻番所へ引取候樣、月番坪岡權左衛門、頭取青山藤藏、右兩人へ申渡候、〇中略

疵付候者見分書三日目ニ而上ル例

一卯〇享保八年十一月十四日、八町堀中川內膳正組合辻番所ニ留置候、疵付中間夜見分罷越、翌十五日見分書上不申、同十六日上ル、〇中略

紀伊殿家老宅ニ而亂心之町人自害之扱

一去ル辰年〇享保九年紀伊殿御家老戸田金左衛門宅江出入町人罷越、致亂心自害仕候節相伺候處、左之通近江守殿、高田忠左衛門へ被仰渡候、右之通左近將監殿宅へ罷越申上候樣ニは、忠左衛

門挨拶之樣ニ可申旨、近江守殿江仰、則御城付へ申含候、金左衛門宅ニ而候共、夫々不構、万石已上ニ而、屋敷之內之事は、何方ニ而も、月番之御老中申上候事と心得可申候、同役へも右之趣申聞候樣ニ、近江守申聞候事、

〔辻番所異變例集〕辻番廻場捨子

一寶曆三癸酉年八月十四日夜五ツ時、木挽町柳生備前守居屋鋪組合辻番廻場之內、捨子有之由番人申來候ニ付、早速徒目付壹人、足輕小頭壹人差出、爲致見分候處、女子捨有之候、組合江も早速申遣及對談、備前守月番ニ付、屋敷內江引取、乳持附置養育爲致候、

一右ニ付、御用頭御目付牧野織部樣江、左之書付、吉村又左衛門持參仕候、

口上覺

一今夜五ツ時、木挽町五町目柳生備前守居屋鋪組合辻番廻り場之內、年頃二歲位ニ相見候女子捨有之候、早速役人罷出取入致養育置候、此段御屆申上候、以上、

八月十四日　柳生備前守家來　吉村又左衛門

右御用人對談差出候處、御承知之由挨拶有之、

〔旗本中諸屆〕辻番捨物

御屆書　石川重左衛門

一昨十一日夜五時頃、私組合辻番所東九段之方ゟ、何共不知人殺と聲掛候ニ付、早速辻番人出合見候處、拔身之刀を持、面體年頃も不知男を追懸來候ニ付、於辻番所前刀は棒ニ而打落し、取押可申と存處、取逃申候、尤被追參候者も、何方ゟ參候哉、行方相知不申候段、昨十二日朝番人申聞候ニ付、私頭取ニ付、早速家來差遣し、右刀は往還之障ニも相成候間、拔身之刀幷傍に落有之候鞘共、辻番所江引入、猶又入念番人附置申候而、御目付石谷周防守方江相屆候處、御小人目付荻原又六、栗

原伊八、昨十二日夜罷越、一通り見分致、右刀辻番所江高札立、三日之内晒、持主尋不來候はゞ、其段有無共、周防守方江相屆可申旨、家來幷辻番人江申付罷歸申候、依て此段御屆申上候、猶又有無相屆申候節可申上候、以上、

二月十三日

〔政令類纂二集八十一〕明和元甲申年五月十五日

先達而御達置候辻番廻り場繪圖面、頭取代合之節、右繪圖面申送茂無之、又者紛失抔致し候茂有之由、組合ニ而自分持場茂不辨、廻り場所茂得與不存候而者、捨物其外違變等有之節ニ至、持場之義吟味致し候而者、取計等閑之樣ニも可相成候間、向後頭取ゟ廻場繪圖、組合江相廻、組合銘々寫取置候樣可被成、左候はゞ、組合一統ニ持場之義存候樣ニ相成候はゞ、右體之義有之間敷候間、以後之義被仰合候樣ニ被存候、捨物倒者有之節のため、調置候而可然旨、信濃守殿被仰聞候ニ付、右之段御達申候、右繪圖面廻り場持場相分り兼候義有之候はゞ、拙者方迄可被仰聞候、以上、

五月　太田三郎兵衛

〔天保集成絲綸錄七十三〕寛政二戌年十月

都而辻番所廻り場之内ニ而、怪者捕候節、組合之内ゟ御目付江屆有之候得者、見分之者差遣、其趣申上、御差圖之上、奉行所江引渡候仕來ニ候處、右體怪敷者捕候節者、向後何方江も屆不及、直町奉行所江引渡候筈ニ伺相濟候、

右書面之通可被心得候、以上、

十月　曲淵勝次郎
平賀式部少輔

〔德川禁令考二十二辻番所〕安政三辰年六月十七日

乗馬之者之儀ニ付達

口附無之沓打候乗馬之者、辻番前通行之節、差留候場所も有之、區々之儀ニ付、向後差留ニ不及候、其旨番人江可申渡候、以上、

但馬喰體、又ハ中間體之者、乗馬ニ而罷通り候儀ハ不相成事、

右之趣、遠藤但馬守殿江伺濟之旨、御目付鵜殿民部少輔、一色邦之輔申聞候、此段申達候、以上、

六月　　大目付

文久三亥年九月十一日

辻番所番人壯健之者可差置旨御書付

遠江守殿御渡

覺

今般御府内御取締向厳重被仰出候ニ付而ハ、辻番所之儀、番人壯健之者差置、持場内繁々爲見廻、夜中ハ別而心附、怪敷もの等徘徊いたし候ハヾ、早速取押置、最寄御目付江相届可申候、

右之趣、萬石以上之面々江可被相觸候事、

九月

〔拾遺柳營秘鑑二〕享保八癸卯年

辻番惣數幷請負人之次第

一總辻番數八百九拾八ヶ所

内壹人勤二百廿九ヶ所　組合六百六拾九ヶ所

外

拜借地辻番拾ヶ所　内、小石川御藥園御圍廻り八ヶ所、御藥園預り支配聖堂前壹ヶ所御目付

支配、牛込山伏町壹ヶ所御目付支配、

請負人　下野屋三九郎
坂田屋八郎兵衛

一拜領地辻番三ヶ所上野目代支配　内、上野車坂下通壹ヶ所、同所屛風坂下通壹ヶ所、谷中通壹ヶ所、

請負人　中川屋源助

牢屋脇土手通御給金辻番二ヶ所町奉行支配

請負人　松屋治右衛門

床商賣髮結床等助成ニ請負、兩國橋、新大橋、永代橋際辻番六ヶ所、町奉行支配外三ヶ所、中番、是ハ夜計番人差置、

兩國橋二ヶ所請負人　小西喜左衛門　駿河屋次郎兵衛　淸水屋庄七　山形屋嘉右衛門

新大橋二ヶ所請負人　小西喜左衛門　駿河屋次郎兵衛　茗荷屋又兵衛

永代橋一ヶ所請負人　久下田屋万之助

〔德川禁令考 二十二 各方城門〕辻番所規則

按ニ、百箇條ノ一書ニ、武府城下之幕番所、内郭廿八ヶ所、外郭廿八ヶ所、勤番ハ内郭ハ譜代在府之士、外郭ハ旗下參勤之士タルベシ、其掟ハ勿論、武具刀戟、器械等ニ至迄、不見苦樣可申付事トアリ、此レ衞門ノ定規ナリ、

公儀辻番

〔憲敎類典 三ノ三十四 辻番〕不知年月日

一江戸中辻番所、從公儀被仰付所々、幷手形差出候名寄、

甲賀町 百人組坂部三十郎組より手形出之　下谷 青山丹後守組より手形出之　高林村 天澤寺より　淺草寺町 喜松院王寺行安能寺 圓福寺より　田畑村 天澤寺より　本郷追分 岡野權左衛門組より　柏木村 天澤寺より

駒込天澤寺より　御藥園池田常陸より　三田寺町圓座寺より　傳通院三ヶ所、當院納所より、

寛永十癸酉年六月二十九日〇中略

湯島天神切通當社別當より　增上寺切通當寺中月光院より　千駄木原東漸寺より　今安村伊奈半十郎手代より　南國橋同斷　高輪村同斷　小塚原同斷　元吉祥寺野村彥大夫手代より　本所廿六ヶ所同斷　江戸橋町年寄三人より

右辻番壹ヶ所之人數六人ヅヽ、壹人ニ付給分扶持共ニ金貳兩ヅヽ、外爲油料金壹兩、合金拾三兩ヅヽ也、此金子請取候剋、手形寺社奉行、町奉行、御勘定奉行、御徒目付裏判之事、

酉六月廿九日

〔享保集成絲綸錄三十八〕寛文十戌年三月

條々

一公儀辻番之儀相定、人數晝夜無懈怠可勤之、夜中にも戸をあけ置、不寢之番をいたし、請取之場所、切々見廻之、若狼藉者又は手負たる輩、其外不審成者來にをひては、早速出向留置之、其主人江相渡すべし、主人不知時者、辻番支配面々申達得差圖、町奉行所江召連可渡之事、

一奉行人御目付衆夜廻之面々申渡、御法度之趣違背すべからざる事、

附、雜說を先々へ申觸べからざる事、

一辻番所に、男女當座之宿もかすべからず、惣而番所之前に人を集置べからず、幷衣類諸道具何にても一切預り置べからざる事、

附、辻番所にて、食物其外見苦敷物商買仕べからざる事、

右條々可相守、此旨若違背之族於有之は、穿鑿之上、隨咎之輕重、急度可申付者也、

大名辻番
組合辻番

寛文十年三月日　奉行

覺

一公儀辻番之者、六十歳以上二十歳以下、并不行歩者、病人一切差置べからざる事、

附、諸事辻番油斷不仕樣に堅可申付事、

一辻番之人數、常々晝四人夜六人充差置可勤之、并つく棒、さすまた棒、續松、はや縄、挑燈、番所に差置べし、鑓、長刀者、無用たるべき事、

一荷物積來船、かしばたに有之、辻番所より相改之、御定之日數之外、船差置べからざる事、

一喧嘩、辻切等之時者、所江近き辻番所より、御目付衆へ早速申屆べき事、

一江戸中端々にて、長屋其外小屋等へ、もぢりにて衣類などをからみ取のよし、其聞え有之間、如此之儀をも見廻、請取候場所、精を入、油斷すべからざる事、

以上

三月

右貳通充、八十七ヶ所江被達之、

〔敎令類纂初集五十六〕壹万石以下組合辻番

條々

一辻番之儀相定、人數無懈怠、晝夜可勤之、夜中たりといふとも戸を明置、不寢番をいたし、請取之場所、切々見廻り、若狼藉もの、又者手負たるもの、其外不審成者於來者、出向留置、辻番組合中江申達し、可得差圖事、

一辻番人數之儀、壹万石ゟ壹万九千石まで之高に而相勤候人數、晝三人、夜五人ニ而可相務事、

附、壹万石以上ゟ壹人辻番ニ而相務候面々、請負之者ニ渡番ニ仕間敷事、

一貳万石ゟ以上之高ニ而相務候番人、晝四人夜六人ニ而可相勤事、

右何れも雖爲組合、相定人數之通可相勤事、

一壹万石以下之組合高ニ而相務候分者、晝貳人夜四人ニ而可務事、

一奉行人御目付衆夜廻之面々申渡、御法度之趣不可違背事、

附雜説先々へ不可申觸事、

一辻番所ニ男女當座之宿も不可貸之、惣而番所之前ニ而人集置べからず、幷衣類諸道具何ニ而も一切不可預置候、

附、辻番所ニ而食物其外見苦敷物商賣仕間敷候事、

一辻番之者、六拾歳以上貳拾歳以下、幷不行歩もの病人一切不可置候事、

一辻番人仲ヶ間申合諸事無油斷相勤可申候、若不儘成者有之共、組合之内月番へ急度可申斷事、

一突棒、さすまた、もぢり棒、積松、早縄、挑燈、番所ニ可差置、鑓、長刀者、可爲無用事、

一荷物積來船、川岸端ニ有之者、辻番ゟ相改之、御定之日數之外不可差置事、

附、御堀江塵芥捨させ申間敷候、若辻番之下知を用ず、ちり芥捨候者有之者、其主人承屆可證事、

一喧嘩辻切等之時者、其所近辻番所ゟ御目付衆江早速可申届事、

一江戸中端々ニ而、長屋其外小家等江もぢりにて衣類などをからみ取之由、其聞有之候間、如此之儀をも見廻之、請取之場所精入不可油斷事、

一江戸往還之輩、於道路頻煩出、又者酒に醉行留候節、町送に仕候儀、向後堅可爲停止、侍小路町屋敷之前たりといふ共、其所に暫く留置之、介抱正氣付候上可遣之、若一日も一夜成とも不得快氣ニ於ては、其者之支配方迄申斷、可受差圖、縦正氣付候上ニも行歩不付時者、其者之住所承

屆之使を差越し、迎之者招寄相渡可遣事、

右之旨於違背者、後日ニ聞候とも可爲曲事者也、

天和三年二月　　奉行

〔御當家令條三十〕天和三年二月日

口上之覺

前々ゟ辻番所に張置候書付致無用、今度之御書付之趣張置可申候、向後は辻番組合之面々、名苗字并組合總知行高をも書付、是を辻番所に張置可申事、

亥二月日

〔敎令類纂二集八十一〕享保十二丁未年十一月六日、本多伊豫守殿御渡、

武士方組合辻番之儀、只今迄之請負相止候、前々之通、組合相對ニ而請負辻番人可被申付候、年番月番之儀者、組合之申合次第、只今迄之通たるべく候、向後組合之內、頭取所壹人可相定候、其頭取は、差置候辻番人共之儀遂吟味、老人又は病人體之者不差置、諸事不作法無之樣ニ可被申付候、委細之儀者、小笠原平兵衞、松波甚兵衞江可被承合候、

但頭取之面々は、年番月番仕ニ不及候、

右之趣、諸向江可被相觸候、

十一月六日

享保十三戊申年二月廿日

於山吹之間、水野壹岐守殿、頭取之面々江御書付御渡、

火之元等之ためニ候間、風烈之節計、組合家來二三人宛、一組中屋敷之外、晝夜ニかぎらす、四月中迄相廻候樣ニ可被致候、夜中者別而繁々可被相廻候、尤怪敷者見出候はゞ捕之屆ニ不及町奉

行江可被相渡候、勿論捕違分者不苦候、以上、

二月

右之趣、番町小川町駿河臺ニ有之頭取之面々江申渡候間、此外之所々も、右ニ准じ、家來相廻候樣可被致候、此段面々江も可被相觸候、

〔憲教類典三ノ三十四辻番〕正德五乙未年四月

辻番人數壹万石以下者、組合ニ而相勤候分者、晝二人、夜四人ニ而可相勤事、

〔享保集成絲綸錄三十八〕正德五未年十二月

寄合辻番所におゐて、番人之外に、かろき者共を差置、又は人あつめ仕候事有之由相聞江候、自今以後、右之通之事にて越度出來り候はゝ、急度重科に行はるべき者也、

十二月

〔德川禁令考後聚七制禁布令〕明和四亥年十二月

武家方組合辻番ノ儀ニ付達書

一都而辻番所之儀、近來夜中戸を建置、廻り場見廻り等不行屆、不埒之所も有之由相聞候、前々被仰出候御定之通り、夜中番所之戸を明け置、廻り場繁々見廻り、怪敷者有之おゐてハ留置、御目付方江可申出候、近來怪敷者罷通候而も、見遁ニ致、其上辻番所江人集等致し候場所も有之由、左候得者、番人共ニ子細も有之哉ニ相聞、如何ニ候、右體之儀者有之間敷事ニ候得ども、猶又此上急度、右之趣番人共江被申渡、已來不埒之筋相聞上者、嚴敷御咎めも可有之事ニ候間、此旨番人共江可被申渡候、尤組合辻番之儀者、右之趣頭取之面々相心得、番人共遂吟味、差置候樣可被致候、

亥十二月

〔天保集成絲綸錄七十三〕寬政三亥年十月

都而組合辻番所人數、場所ニ寄、御定より不足之向も有ㇾ之、幷病所等ニ而步行不自由之者、差置候類も有ㇾ之哉ニ相聞候、安永七戌年十二月、辻番所ニ身元不慥成者、差置間敷旨、御書付も出候儀有ㇾ之候得共、猶番人等相改可ㇾ被ㇾ差置事ニ候、右者番人給金等滯候向も有ㇾ之故、不ㇾ宜もの共も入込候由、風聞而已ニ而、給金等被ㇾ滯候義可ㇾ有樣は決而無ㇾ之事ニ者候得共、若万一辻番所出銀等滯候はゞ、其組合頭取ゟ、拙者共迄御申聞可ㇾ有ㇾ之候、

右之段、組合中申合可ㇾ有ㇾ之候、以上、

十月　　桑原、善兵衞〇目付
　　　　平賀式部少輔〇目付

〔德川禁令考二十二 辻番所〕文政五午年七月十日

無席小給之者、辻番組合可ㇾ相除旨達、

植村駿河守殿被ㇾ仰渡候由、羽田左京須田與左衞門達、

御目見以下輕キ御家人、屋敷外異變有ㇾ之節、壹人立候而ハ取計行屆兼候趣相聞候間、無席小給之者ニ而も、辻番組合ニ入度旨相願候得バ、相糺候上、是迄組入來候處、差支之儀有ㇾ之候間、以來ハ右之者ども組合ニ入候儀難ㇾ相成候、尤於ㇾ鄰躅之間、跡目被ㇾ仰付候格合之者ハ、前々之通、組ニ入候、右之通相成候ニ付而ハ、小給之者共、異變取扱方差支可ㇾ申候ニ付、組々支配限、兼而申合組立置、異變之砌取扱候樣御申渡可ㇾ被ㇾ成候、

〔官中秘策二十四〕器物類拾置候事

一辻番組合之御家來立會、幷近所之辻番も呼寄爲ㇾ見候て、少も手を付不ㇾ申、其場所に置て番人付、早々御目付衆へ可ㇾ申事、是も番付可ㇾ然、

辻番所替候事

一右有之時は、組合辻番候はゞ、組合中江早々爲知候て、立合見分等可仕候事、

辻番所他所より相勤候共、屋敷前にて喧嘩有之時之事、

一右有之時は、辻番勤候方ゟ言上及候はゞ、此方よりも其品を御目付衆へ申上たるが宜し、町掛り候はゞ、町奉行に相通可申候事、○中略

閉門遠慮之御方様、抱之辻番所出入有之節之事、

一公儀江御付届入候節は、御家來御目付衆申遣候事、用捨無之候、此時之使は、羽織袴にて、一人一僕召連、迷惑之體ニ而參候而可然候、少々延引候而も不苦候、日暮參候も宜候よし、辻番勤候程之様子候得ば、辻番之儀ニ付候て、公儀江御届不苦候由を御目付被任候事、

〔舊經錄 遺〕御目付衆役之次第○中略

一辻番頭取一件 [illegible] 同○御目付 二八

〔享保集成絲綸錄 三十八〕享保十二未年十一月

武士方組合辻番之儀、唯今迄之請負相止候、前々之通、組合相對ニ而請負辻番人可被申付候、年番、月番之儀者、組合之申合次第唯今迄之通たるべく候、向後組合之中、頭取壹人可相定候、其頭取は差置候辻番人共之義遂吟味、老人亦は病人體之者不差置、諸事不作法無之様ニ可被申付候、委細之義者小笠原平兵衛、松波甚兵衛江可被承合候、

但頭取之面々は、年番、月番仕ニ不及候、

十一月

〔天保集成絲綸錄 七十三〕寬政三亥年三月

辻番所組合之内、家督名替并改名被致候節、辻番頭取又者年番ゟ、其節々拙者共之内江、御達有之

請負辻番

候樣御心得可有之候、以上、

三月　曲淵勝次郎
　　　桑原善兵衛

〔坂井家日策〕天保七年七月三日、丹治辻番組合屋敷之一條ニ而參ル、四日、壹後辻番組合中江一紙出ス、七日、壹後辻番請負人給金割持來ル、十月廿七日、辻番頭取ゟ繪圖面差出候樣申越、翌廿八日朝出ス、組合江も翌日出ス、八年正月十八日申、辻番組合江年始ニ參ル、二月廿五日癸酉、辻番所給金一紙來ル、

〔政令類纂二集八十一〕享保八癸卯年二月

一筋違橋ゟ西は、御堀端通昌平橋迄、昌平橋ゟ北は、湯島本郷森川宿追分、駒込片町、同竹町通、巣鴨水野日向守樣御屋敷筋迄、

五拾壹ヶ所　牛込水道町圡右衛門地借　八左衛門

一昌平橋ゟ西は、御堀端通水道橋外通、船河原橋迄、船河原橋ゟ北は、江戸川通目白下御上水外通、高田村追分ヶ谷迄、

四拾九ヶ所　小石川古川町家主　甚右衛門
　　　　　　小石川蓮花寺門前家主　仁右衛門

一船河原橋ゟ南は、御堀端通牛込御門迄、牛込御門ゟ西は、神樂坂通、牛込寺町通、榎町通、早稲田通穴八幡前高田馬場先迄、

貳拾貳ヶ所　巣鴨原町壹丁目家主　善兵衛

一筋違橋ゟ西は、昌平橋内大手通、駿河臺通、水道橋内通、小石川御門迄、小石川御門ゟ南は、松平讃岐守樣御屋敷前通、岩城但馬守樣御屋敷前通、飯田町下入堀端通、井上遠江守樣御屋敷前通、雉

子橋御門迄、雉子橋御門ゟ御堀端、一ッ橋御門御堀通、神田橋迄、神田橋ゟ三河町通り、中條半助様御屋敷前通、須田町筋違橋迄、

五拾五ヶ所　市ヶ谷柳町家主　久右衛門

一牛込御門ゟ南は、御堀端通四ッ谷御門迄、四ッ谷御門ゟ西は、四ッ谷大木戸通、内藤新宿先成子村邊迄、

五拾壹ヶ所　築地片町家主　安右衛門

一四ッ谷御門ゟ南は、御堀端通赤坂御門迄、赤坂御門ゟ西は、氷川宮前通、傳馬町表通、青山百人町通、御嶽權現邊迄、

四拾九ヶ所　榎木町家主　傳右衛門
　牛込寶藏院門前家主　仁右衛門
　牛込津久戸下家主　武兵衛

一赤坂御門ゟ東は、御堀端通溜池外虎御門之外、御堀端通新し橋迄、新し橋ゟ南、愛宕下通増上寺後切通、赤羽根橋ゟ西江新堀端内通、松平越中守様御屋敷前通、白銀御殿屋敷新堀端之内通、油田大膳様御屋敷前通、諏訪安藝守様御屋敷邊迄、

八拾九ヶ所　小日向臺町家主　産右衛門

一半藏御門ゟ西江、麹町通四ッ谷御門迄、同御門ゟ南は、土手通赤坂御門迄、赤坂御門ゟ土井伊豫守様前ゟ山王前迄、永田馬場筋虎御門迄、同御門ゟ東江、土手通新シ橋迄、同御門ゟ龜井隱岐守様前通幸橋迄、同橋ゟ北江、山下御門通日比谷御門迄、同所御門ゟ西江、外櫻田御堀端通井伊掃部頭様御屋敷前通、半藏御門迄、

拾五ヶ所　小石川戸崎町家主　次郎右衛門

一南八町堀ゟ鐵炮洲海邊迄、木挽町川通、芝新網町松平右衛門督樣御屋敷邊迄、

貳拾三ヶ所　牛込白銀町家主　佐次兵衛

一雉子橋御門ゟ、飯田町下通、入堀通水野壹岐守樣御屋敷前通、岩城但馬守樣、松平讃岐守樣前通、小石川御門迄、同御門ゟ西江、土手内通、牛込御門之内通、米倉丹後守樣御屋敷前通、牛込御門之内土手通り、同四番町通、市ヶ谷御門之内土手通、四ッ谷御門迄、四ッ谷御門ゟ東江、麹町通、半藏御門迄、半藏御門ゟ北江、御堀端通、酒井信濃守樣御屋敷前通、田安御門迄、同御門ゟ東江、御堀端通り、清水御門外通、雉子橋御門迄、

六拾八ヶ所　市ヶ谷藥王寺門前家主　平四郎

一北八町堀ゟ東江、川通り、稲荷橋通り、湊町海邊迄、向井將監樣御屋敷後海端通、大河内又十郎樣御屋敷後海邊通、永久橋迄、永久橋ゟ東江、大川通、新大橋迄、新大橋ゟ北江、大川通、兩國橋迄、兩國橋ゟ西江、淺草御門内通、柳原土手通筋違橋迄、筋違橋ゟ南江、須田町通、日本橋迄、日本橋ゟ南江、京橋迄、京橋ゟ北八町堀端迄、

三拾五ヶ所　牛込白銀町家主　六郎左衛門

一淺草御門之外ゟ御藏前通、駒形大川通り、花川戸山谷迄、淺草御門ゟ西は、御堀端通、筋違橋御門迄、筋違橋御門ゟ北は、本多喜十郎樣御屋敷前通ゟ、廣小路通上野黒門前通、下谷金杉簑輪迄、

四拾貳ヶ所　牛込五軒町家主　助左衛門

一新シ橋ゟ東は、芝口御門之外迄、芝口御門ゟ南は、露月町通、肴町牛町御殿山邊迄、

三拾三ヶ所　市ヶ谷田町貳丁目小左衛門店　與右衛門
牛込五軒町家主　宇右衛門

一深川南本所　四拾三ヶ所　本郷菊坂町五兵衛地借　紋兵衛

一北本所　五拾三ヶ所　大塚久保町家主　太兵衛
赤城門前町家主　善右衛門

〔享保集成絲綸錄三十八〕享保八卯年二月

覺

一今度江戸中辻番惣御請負相願候ニ付、爲人足代金貳百兩差出シ、且又御旗本部屋欠付人足代金八拾五兩ト相積り、先達而帳面差上候處、右之金子不及差出候旨被仰渡候、然上は彼金子不殘此度相積り差上候辻番人給金之外ニ致增金、随分慥成番人差置可申候事、

一番人之内、勤成兼候老人病人差置申間敷事、

一人殺、火付、盜賊之聞へ有之者を存ながら、番人ニ召置間敷事、

一入墨有之者、欠落者召置間敷事、

一宿元慥ならざる者召置間敷事

一人殺、火付、盜賊、其外惡事有之者を暫くも番所ニ隱し置せ申間敷事、

一博奕、遊女酒商賣、惣而人集番所にて致させ申間敷事、

一於番所他所之者之宿、暫くも致させ申間敷事、

附、何にても預り物致させ申間敷事、

右之條々、少も於相背者番人御仕置ニ可被仰付候、其節場所分ヶ組合御請負仕候者共、番人同罪ニ如何樣之曲事にも可被仰付候、此外ニ辻番人御法度之儀相背候はゞ、右番人是又御仕置ニ可被仰付候、請負組合之者共も、番人被仰付次第、相應ニ御咎メ可被遊候、爲後日仍如件、

享保八癸卯年二月

○按ズルニ、享保十二年十一月六日、武士方組合辻番ノ請負ヲ廢ス、事ハ組合辻番條ニ在リ、宜

シク參照スベシ、

〔市中取締類集九ノ百十三〕朱書天保十三寅三月五日、淺野金之丞ヘ達、同月九日下札付來、即日猶又下札致シ遣、

御目付衆　　鳥居甲斐守

今般問屋組合仲間等相唱候儀停止被仰出候間、辻番請負人共儀、仲間無之、以來御差支之儀有之候は丶、各様方ニて仕法候取調有之候様存候、依之及御達候、

三月五日

御書面之趣、別紙ニて及御答候、

御別紙覺致シ候處、於町方差支候儀無御座、御伺相濟候は丶、尚又御通達有之様致シ度、此段及御挨拶候、

寅三月　　鳥居甲斐守〇中略

朱書寅〇天保十三年十二月廿七日、堀田攝津守殿、田中休藏ヲ以御下ゲ、

御給金辻番請負人共、風聞不宜候ニ付、右請負人共拜領町屋敷取上之儀、左ニ申上候

佐々木三藏

榊原主計頭

下野屋三九郎 寅廿六七歳

坂田屋八郎兵衛 寅廿八九歳

右兩人共御給金辻番受負人と相唱、御目付御藥園奉行兩支配同様ニて、身分町奉行支配ニて、御藥園廻り八ケ所、聖堂脇、櫻馬場前一ケ所、六番丁御藥園附一ケ所、都合十ケ所、右辻番所番人、其外修復異變取扱共、万端兩人にて引受、町屋敷六ケ所上り高を以、入用等取計來候、元來町屋敷爲助

成地、被下辻番所十ヶ所引受方之儀者、品々由緒も有之哉ニ者候得共、當時兩人共、右御用向之義下請負、小石川戸崎町番組人宿常陸屋助次郎親和助と申者のに相任置、給金等差遣し置候由、右三九郎義者、親三九郎代々神田明神下同朋町にて、家主伊勢屋源右衛門之名前を替、藥種類渡世仕罷在、親源右衛門義、貳拾ヶ年程以前、右御給金辻番請負、町屋敷附株引受候由、請負之方者、忰名前に致し置候由、八郎兵衛義も、六ヶ年程以前、先八郎兵衛績合有之候由ニて、同樣右町屋敷附受負人株引受、當時上野廣小路常樂院門前ニて、伊勢屋平八と名前を替、質屋ニて古著渡世致シ居兩人共同樣之所業ニて、町屋敷附受負人株致所持候心得ニて、是迄株讓引等致し候趣ニ相聞、殊ニ一人兩名を相名乘候も、同樣之儀、右始末不正之致シ方、其上辻番所御用之方者、下請負之者ニ相任セ置、持場辻番所見廻り等も疎ニ致シ置候故、取締不宜、一體辻番所之儀、足輕番ニて、晝四人、夜六人之御定ニ有之候處、晝夜壹人歟貳人も差置、其者共も病人又は不丈夫抔之者ニて、番人之詮も無之、如何ニ相聞、猶其上當三月、小石川御藥園廻り辻番所類燒後、只今假建之儘に相成居追追寒氣之時節、番人共致難儀候由ニ候得共、打捨置候趣ニ取沙汰仕、外辻番所取締向差響ニも相成候間、右拾ヶ所辻番所受負取上、助成町屋敷六ヶ所共、取上候方ニ可有御座哉存候、依之此段申上候、以上、

十二月

辻番掛

御徒目付

御小人目付

佐々木三藏〇目付

榊原主計頭〇目付

別紙御給金辻番所請負人下野屋三九郎、坂田屋八郎兵衛義、不埒之筋相聞候間、則取調風聞書を

以委細申上候、○中略受負人取放候上者、六ヶ所とも向後御目付支配辻番所と相唱、異變等有之候節者、私共江無役世話役どもゟ相屆、先例之通、身分差遣候樣可仕候、依之別紙一通繪圖面一枚相添、此段奉伺候、伺之通被仰渡候ハヽ、巨細之義者猶取調申上候樣可仕候、以上、

十二月

佐々木三藏

榊原主計頭 ○中略

御目付支配御給金辻番所改革幷古復調

朱書
卯〇天保十四年三月十七日達

佐々木遠江守殿

榊原主計頭殿

鳥居甲斐守

此間中ゟ御掛合有之候、御給金辻番受負人之義、攝津守殿ゟ拙者共江御沙汰有之候間、元請負人神田明神下同朋町家主源右衛門方同居、御給金辻番請負人三九郎幼年に付、後見右源右衛門外壹人受負差免、助成地幷書物共取上ケ、市谷田町下貳町目家主與右衛門外貳人江跡受負申渡、番人之儀は、各樣ゟ御沙汰有之候迄其儘差置、其外之義は、萬事各樣御差圖請可相勤旨申渡候、尤書物之儀は、取上次第差進可申候、依之此段及御達候、

卯三月

〔兩國橋新大橋辻番水防請負人代替書留〕兩國橋新大橋番人請負一件之覺

一兩國橋東西幷中番所之儀、從前々御給金被下、本所元町加左衛門庄七と申者請負勤來候、然處、本所奉行相止候已後、吉川町廣小路之床幷庭錢之助成被下候ハヽ、西之方番所相勤可申候由、大岡越前守殿江願候者有之候付、町年寄喜多村彥右衛門に吟味被仰付候、右之床幷庭錢之儀

は、吉川町四郎兵衞數年取來候處、外へ被仰付候儀迷惑之由、四郎兵衞申上候付、左候はゞ、西之方幷中番所、右助成を以相勤可申哉と、彥右衞門を以御尋被成候處、四郎兵衞勤申度候由願候ニ付、四郎兵衞に西之方番所中番所之請負被仰付候、然處、亥九月十九日、滿田作左衞門、中田仁左衞門儀、本所御用可承之旨被仰付候、同月廿七日、御內寄合之節、兩國橋番所東西相別り請負候儀、前方之樣子不存候故相伺候處、先達而願候もの有之、喜多村彥右衞門致吟味候上、西之方番所中番所ともに、四郎兵衞に被仰付候趣、越前守殿被仰聞候、四郎兵衞庭銭之樣子、猶又委細致吟味申上候樣にと、兩御頭被仰渡候、

一四郎兵衞幷名主喜左衞門、越前守殿御番所江呼出し致吟味候處、四郎兵衞地主小普請吉田仁左衞門儀、廿四五年已前、長圓と申奧御坊主相勤候時分、吉川町表七間半裏行拾五間之屋敷拜領、廿三年已前、髮結床幷廣小路之庭錢取候儀、秋元但馬守殿へ長圓相願候處、願之通被仰付、其節ゟ屋守附置、支配いたさせ候、一ヶ年分地代髮結床庭錢共に、都合金六拾五兩に仕切、四郎兵衞借り請候、其餘は四郎兵衞助成罷成候由申候、

〔市中取締類集九ノ百十三〕此度御府內辻御番所御請負之義、別冊ニ奉申上候通、御聞濟ニ相成候、被仰付候節者、左之名前之兩人相仁ニ取り、御請負仕度、此段御聞濟之程奉願上候、以上、

天保十四年卯閏九月

願人　鉒師㊞

麹町谷町家主　彥四郎

同町同　卯右衞門

私儀此迄辻番所御請負仕候處、此上手廣ニ右渡世仕度候、當月十日奉願上候處、今般召出、御府內辻御番所御請負仕候、金高之義可申上旨被仰渡、依之御請負金高勘辨仕候趣、左ニ申上奉り候、尤格別出精仕申上候間、左之廉々御聞濟被成下置候樣奉願上候、

一金拾貳兩貳分也　辻御番所一ヶ所壹ヶ年御請負高
此銀七百五十匁
內譯
銀四百八拾匁也　晝夜定番人貳人給分、但壹ヶ月壹人ニ付銀貳拾匁、
銀百貳拾匁也　夜計貳人泊番之者足留給、但一ヶ月一人ニ付銀五匁ヅ、
銀四拾五匁也　一ヶ月油一升四合三勺三才ヅヽ、積代三匁七分五厘見込、
銀四拾五匁也　同蠟燭三拾挺、一夜一丁ヅヽ、壹本代壹分貳厘五毛積り、
銀四拾五匁也　一ヶ年提灯張替、桶類輪替、疊表替、幷諸入用の見積、
〆銀七百三拾五匁也
引殘り銀拾五匁也、此分手代給ニ相成申候、
右之通御座候、以上、
卯〇天保十四年閏九月〇中略
一御府內辻番所請負金高之義ニ付、先達而中ゟ市中重立候辻番請負人共被召出、再應御尋ニ御座候、然ル處、四ノ二と相唱候辻番所之義は、晝番貳人夜四人相詰、都而諸雜費一式取賄、壹ヶ年金九兩位ゟ貳拾貳三兩位迄三段ニ相成居、足輕番之義も三五四六と相唱、是又金高も夫々不同之趣ニ而、辻番請負人共、別紙之通申立候得共、四ノ二と相唱候中間辻番所請負金高壹ヶ年金九兩位之分は、請負人共全引合兼候間、內實は晝貳人之番人江給金相渡、夜番人之義は番子と相唱、獨身ニ而店持候義も難出來程之者ヲ同居爲致置、晝は銘々日雇又は手紙使等ニ罷出、夜分計り辻番所へ止宿爲致、無給之者差置候ニ付、右を見込、請負金高少金之趣ニ有之候得共、右ニ而は事實之義ニ而は無御座、全請負人共懷中ニ而之請負高ニ付、御取締筋には相成申間敷、足輕番之義も

右ニ准じ候義ニ付、此度別紙ニ書上候直安之請負高ニ而は、都而事實之義ニ無御座、今般請負人共ゟ、四ノ二辻番所平均之請負高、壹ヶ年凡金拾七兩ニ申立候處、右金高ニ候はゞ、番人人數も不相減、正路之請負高申立候趣ニ相聞申候、依之此段申上候、以上、

卯〔天保十四年〕十月廿一日　　取締掛　名主共

〔德川禁令考後聚三十三〕嘉永元申年御渡、京都町奉行伺、

酒井若狹守中間嘉太郎、其外之もの共、小堀勝太郎家來村田鎌五郎外三人江爲疵負、右疵ニ而鎌五郎、外壹人相果候一件、

所司代組足輕
丹波口辻番所當番
木内淺右衛門
外壹人

右之もの共儀、去未〔弘化四年〕九月廿六日夕七時頃、酒井若狹守殿中間嘉太郎、外拾壹人儀、小堀勝太郎供侍村田鎌五郎、并石吉、粂吉、音吉を及刃傷候場所ハ、持場内三拾間程之隔ニ而、手近之場所ニ有之候上ハ、早速可出會處、猶豫罷在、相手之もの共取留も不致段、臆候ニ相當、其上最初中間共爲見合罷在候も不心付段、辻番人之詮も無之、不埒ニ付、兩人とも日數百日押込、

此儀、御定書ニ、廻り場之内ニ而人を切殺、或爲手負候を見遁ニいたし、相手を不留置、番人中追放と有之ニ見合、吟味書之趣ニ而ハ、番所持場内三十間程東之方ニ人殺いたし候ニ付、見受候處、中間體之もの人數拾五六人計、木刀を持、狼藉罷在候得共、多人數之儀、猶豫罷在、出會候節ハ相手ニ候哉、拾二三人東之方江逃去、右場所ニ帶刀人疵受惱居候と有之、爲手負候を見留候趣ハ、吟味書ニ不相見候得共、御場所柄おゐて、狼藉およひ候を見受ながら、多人數ニ候迚、猶豫いたし居候段、品輕とも難申候間、中追放、

評定之通濟

〔德川禁令考後聚三十三 行刑條例〕辻番人御仕置之事

延享元年極
一廻り場之内ニ而、金銀又ハ雜物等を拾ひ隱し居候番人、　引廻之上　死罪
　（金子ハ壹兩ゟ以上、雜物ハ代金ニ積壹兩位ゟ以上ハ、）
　入墨敲
　（金子ハ壹兩ゟ以下、雜物ハ代金ニ積壹兩位ゟ以下ハ、）

寛保二年極
一廻り場之内ニ而人を切殺、或爲手負候を見遁しニ致、相手を不留置番人、　中追放

同
一於辻番所博奕いたし候番人　遠島

享保八年極
一廻り場之内、捨子又ハ重病人有之節、外江捨候番人、　死罪

寛保二年極
但倒死有之を押隱し取捨候ニおゐてハ江戸拂

寛保元酉年十一月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之内、

辻番人御仕置之事

一廻り場之内ニ而金銀又ハ雜物等を拾ひ隱し居候番人　引廻之上　死罪

但輕品候ハヽ入墨之上敲

朱書
是ハ享保十八丑年、本所石原辻番人治左衞門、七兵衞、八兵衞儀、廻り場之内ニ、大風呂敷ニ包捨有之候を、八兵衞見出し罷歸相知候付、治左衞門罷越、右之品かつぎ參り、三人ニ而申合、何方江も不相屆、內證にて質物ニ置賣拂不屆ニ付引廻之上死罪ニ成候例を以相認申候、

懸紙

是ハ唯今迄之取計を以相認、但書ハ此度評議之上書加申候、

極

一廻り場之內ニ而人を切殺、或爲手負候を見通しにいたし、相手を不留置番人、　中追放

朱書 是ハ唯今迄之取計之趣を以相認申候

極

一於辻番所博奕いたし候番人、　遠島

朱書 是ハ享保十三申年、芝三田組合辻番所番人藤七、博奕いたし候ニ付、引廻遠島、又ハ死罪ニも可被仰付哉之段伺候處、左近將監殿御差圖ニより、爲見こり之引廻遠島に成候例、

懸紙

是ハ右同斷○中略

右之内三ヶ條、寛保二戌年二月廿九日、伺之通御下知、本文極、○中略

享保十三申年

辻番所ニ而、博奕宿致、并拾物を不訴出、私欲ニ仕送候辻番人之例、

飯倉町二丁目仁兵衛店惣右衛門請負
芝三田武士方組合辻番所番人番頭

藤七

此もの儀、於辻番所博奕宿致候者ニ付、通例之通、遠島可被仰付候哉、但辻番所之儀、屋敷内とハ違重々不屆ニ御座候、外辻番人共見こり之ため引廻し、遠島可被仰付哉、又ハ引廻死罪ニも、可被仰付哉之段、享保十三年申十月十六日、松平左近將監殿江相伺候處、同十一月十八日引廻遠

島可申付旨御下知相濟申候、

市谷七軒町八兵衛店
久兵衛

右久兵衛手下之辻番
長兵衛

同断
喜右衛門

同断
新左衛門

曲淵市郎右衛門、藤井市兵衛、岡崎半九郎、河野藤左衛門、金田遠江守、福井藤十郎、石原太郎左衛門、水野兵左衛門、右八人より四谷牛小屋之辻番を久兵衛請負、去六月十七日之夜、辻番近所ニ而人を切候處、公儀江も不訴、右八人之方江も隱密ニいたし、其上死人之脇差を手前江取置、死骸を辻番所ニ埋置候ニ付、穿鑿之内、牢舍左之通御下知、

死罪　久兵衛

江戸中追放　長兵衛　喜右衛門　新左衛門

辻番所定書之内

一辻番人之もの、捨物等不致様に心ヶ付可申儀勿論ニ候、然共萬一捨子有之節ハ早速取揚、只今迄之通ニ取計ひ可申候、若六ヶ敷存、麁末之儀於有之ハ、可行嚴科事、

但病人酒酔有之節も同斷之事

一件之品ハ、去ル丑年筋違橋外ニ而、捨子有之節、請負辻番之もの右之子を外江捨候儀、後日相顯、番人ハ被行死罪候、依之自今請負辻番人ニ捨子致させ間敷との請負ハ不申付筈ニ候間、此旨堅可相心得事、

享保八卯年二月

比罪例

享和三亥年御渡

町奉行根岸肥前守伺

水野左近將監足輕山岡仲藏外一人行倒もの丶儀ニ付、不埒之取計いたし候一件、

水野左近將監足輕　山岡仲藏

右之もの儀、當十月廿四日辻番所ニ相詰罷在暮時頃見廻ニ出候節、持場內ニ無宿久兵衞病氣ニ而倒居候ハ丶、早速辻番所江引取、其筋江可申立處、重病之體ニも無之、歩行も可成ニ相成候由申候迚、相番人江も不申聞、持場內商ひいたし居候幸右衞門江爲立退候樣申聞、同人より物貰體之もの江申付爲立退候處、久兵衞儀、同廿六日、中川修理大夫池田山城守辻番廻り場內ニ行倒罷在、御小人目付見分之節、前書之始末ハ押隱し、病人體之無宿ハ見懸不申趣申立候儀共、旁不屆ニ付江戶拂○中略

評議通濟

〔南畝莠言上〕鄙俗のもてあそぶ前句といへるもの丶中に、辻番の布子は西へ入給ふ、とあり、按ずるに鶴林玉露云、京師久雨忽晴、兒童懽呼曰、黃綿襖子出矣、注謂日煖也、これ同日の談なるべし、いづくも人情はかはることなし、

附自身番

自身番ハ町方ニテ設置シ、公用、火番、其他町內ノ雜務ヲ處理ス、江戶幷ニ京都、大坂等ニ在リテ、其組織ハ市中ヲ數十組ニ分チ、每組ニ若干ノ番所ヲ置キ、町人ヲシテ其費用ヲ分擔セシムル制ナリ、初ハ町人各自交替シテ、其番ニ出ヅルノ主旨ナリシモ、遂ニ行ハレズシテ、家主

自身番制度

及ビ屆番人ニテ之ヲ勤メ、地主ハ其費用ヲ分擔セルナリ、此他又商番屋、木戸番等アリ、

〔常憲院殿御實紀三十四〕元祿九年八月十日、令せらるゝは、紀伊邸にちかき火消役三隊は、程へだてし火災には出るにおよばず、紀邸近邊か、あるはその風上に火おこらば、とみにまかり撲滅すべし、近き第宅は、殊更に火をいましめ、隷下ある輩は、首長より此旨さとすべし、麴町その他近邊、の市井にては、自身番をこたるまじとなり、

〔德川禁令考四十七自身番〕元祿十一寅年十一月

町中自身番作法能可相勤事

一町中自身番之儀、不作法無之、夜に入、番所戸障子立候儀無用仕、行儀能番可相勤候、尤自身番所ニ而寄合咄候事無用可仕候、

一常番之者、食事等自身番所ニ而給不申、面々宿々ニ而支度可仕候、但寒氣之時分ハ、火鉢指置、茶給候儀ハ不苦候、勿論火之元念ヲ入可申候、以上、

十一月

〔町奉行町年寄覺書〕町方自身番之義先年差免候得共、御留守中ハ晝夜自身番中番相勤、町方之木戸五ツ時ヲ限リ〆候而、往來之もの拍子木ニ而送り、疑敷體之もの者、是又召捕奉行所江可訴事、

右之趣急度可相聞候、晝夜與力同心相廻し候間、其旨可相心得、若申付未熟ニ而、違背之義於有之者、其所之名主五人組始急度越度可申付候、

右之通、從町御奉行所被仰渡候間、町中家持借屋店借裏々迄、不洩樣入念可相觸候、

三月九日　町年寄役所

〔市中取締類集九ノ百二十〕新吉原遊女規定證文

一自身番屋之儀も、年中行事壹人宛相詰、別而十月より四月迄者、外に家主壹人、抱人足貳人宛相

詰、都合四人に而、貳人宛代り〳〵、暮六時ゟ明六時迄、度々相廻り可申候事、〇中略

寛政七卯年十二月

右寛政七卯年、坂部能登守様御勤役中御取極被下置候、規定證文奉差上候、以上、

寅天保十三年十一月　　新吉原江戸町壹丁目 名主仁左衛門判

〔徳川禁令考四十七自身番〕文政七申年六月

町々番屋之儀に付口達觸案

町々番屋株讓渡之唱ニ而、抱番人共、相對之上、金子を以取引致シ、右之内にハ、行事并家主共加判之證文取置候類も有之候處、町内より暇差出、別段番人を抱候故、難儀之由ニ而、讓渡候先番人又ハ町役人を相手取、當人或請人より願出候儀、度々有之、自身番屋ハ勿論、木戸番屋に候共、町内持ニ而、番人ども所持之譯にハ無之、番人共身分も町役人共存寄次第之儀ニ候處、株式と心得、右之通代金を以取引致し候段、不埒之至、加判之家主共も不相濟儀に付、及出入候共、難取上筋ニ候得共、全ク暫之仕癖に泥、心得違致し候儀と相聞え候間、是迄之儀ハ令宥免、たとひ出入ニおよび候共、其始末次第ニ而、濟方も申付るにて可有之候、乍去番人共自身ニ而致し候造作并所持之道具類抔書入、金子借用致し、跡番人に仕込等之相對致し、町役人承知之奥書印形等取置候迄之儀ハ格別、右體番屋株讓渡之對談にて、自今以後、金子取引致し候ハヾ、たとひ規定違變之儀有之、其段申立出訴致し候共、奉行所にて裁許ハ不申付候間、町役人共得其意、番人共江得と可申聞候、

但來月朔日より、本文之通可相觸候、以上、

六月

〔町方舊記〕天保十四卯年正月二十三日

町々自身番屋勤方之儀ニ付、去寅天保十三年十月中巨細被仰渡有之、

御支配限り、家主幷店々連判取置、

右被仰渡之通、嚴重相守義に御座候處、町々之內、今以店番錢取集め、番人其外請負同樣之夜番相勤候向も有之由、右者被仰渡御文言之中にも有之儀にて、不宜儀に有之間、萬一右體之儀有之候はゞ、早々御差留め、表店者勿論、裏店よりも罷出、夜番相勤候樣被仰渡、且木戶番人共妻子有之候者、手替り致候儀も有之由、是又不宜ニ付、右體之儀無之樣、嚴敷御申付可被成、此段申合御達申候、以上、

卯正月二十三日　　世話掛

取締方

天保十四卯年中答書

町々自身番、幷木戶番、平年並嚴重被仰付之節、詰合候もの共、番役人數、左に申上候、

大町幷貳三町摸合、自身番屋壹ヶ所、五人番、內家主二人、番人一人、店番貳人、但晝は人數半減に相詰申候、

小町同斷三人番、內家主壹人、番人壹人、店番壹人、右平年冬春共、寬政度町年寄樽與左衞門殿より伺之上、町々御申渡候通り、冬春共自身番屋障子建置き番仕、一時番に右詰合之もの、內壹人宛、町限り相廻り申候、

大町小町木戶壹ヶ所貳人番、內番人壹人、店番壹人、右平年冬春共、夜四ッ時限り木戶〆切、潜通路いたし、右潜際番屋に相詰有之候ても、拍子木相用ひ不申候、

番被仰付候砌者、大町、自身番屋壹ヶ所、七人番、內家主三人、番人壹人、店番貳人より三人、但晝夜共人數相詰申候、

大町小町共木戶壹ヶ所、貳人番、內番人壹人、店番壹人、右夜四ッ時より、木戶〆切、潜通路致、潜際番

自身番屋

屋見張候間、往來人通行之節、拍子木相用申候、木戸番屋無之場所、并店前共、場所に寄、夜四ッ時より差置候箱番屋へ、店番之もの、壹人相詰申候、場末小町にて、自身番屋も無之、家主人數壹兩人程、店子共も無數之町々者、冬春、家主共、宅又は表店之內、順番に表店へ、夜四ッ時より番いたし候、尤人數家主壹人、店番壹人相詰候得共、家主町用有之節は、店番貳人宛相詰、平年は冬春共障子建番致し、嚴重御沙汰之砌は詰合候人數は、同樣にても、見張番仕候、右之通、私共組合町々晝夜番役勤方、書面之通に御座候、尤大町小町にて少々宛不同は有之候得共、多分右之趣に相勤申候、且又前店番錢と唱、地借店借共より雇賃差出し、右代り雇之もの差出しも有之候得共、去寅年十三年〇天保中よりは表店之もの、家作間數、又は竈數に應じ、壹ヶ月兩三度位、裏借家等は壹ヶ月壹度位宛、店番相勤候振合に御座候、右御尋に付申上候、以上、

卯二月

〇按ズルニ、右ノ文中木戸番ノ事モアレド、今之ヲ分割セズ、

〔守貞漫稿四人事〕自身番〇中略

自身番ハ町內〇江戸家主常ニ交代シテ衞之、又事アル時、會合シテ議之、又官ノ下吏追捕之罪人、先茲ニ繫テ、罪狀ヲ問ヒ、凡テ公用町用ノ場トスルノ設、乃チ京坂ノ會所ニ同意ナレドモ、會所ハ居民ト軒ヲ比シテ設之、自身番ハ專ラ阡陌ニ造ル、

右ノ自身番ニ書〇役〇ト云者一人アリ、乃チ大坂ノ會所守ニ比スベキ者ナリ、自〇身〇番〇書〇役〇トモ、自〇身〇番〇親〇方〇トモ云、地主中ヨリ年給ヲ與フ、又自身番ニ專ラ居ト雖ドモ、別ニ自宅ハ裏店等ニアリテ妻子ヲ置ク、

右ノ書役ハ訴訟ノ時不供之、適々家主障アリ、或ハ名主無人ノ時ハ、代之テ出廳ス、

〔浪花襍誌街廼噂四〕江戸夜中時廻の圖〇圖略

江戸にては、夜の時は、拍子木にて知らすること圖のごとし、但し一町々々に番太郎といふものありて、町役をつとむ、此拍子木も、此者の役なり、其外町内に非常のことあれば、皆番太郎がかゝりなり、

〔德川禁令考四十七自身番〕嘉永三戌年九月

自身番屋總ヶ所

一六拾七ヶ所　壹番組　一七拾四ヶ所　貳番組
一五拾五ヶ所　三番組　一三拾ヶ所　四番組
一三拾五ヶ所　五番組　一四拾九ヶ所　六番組
一四拾六ヶ所　七番組　一五拾壹ヶ所　八番組
一七拾九ヶ所　九番組　一貳拾八ヶ所　拾番組
一四拾九ヶ所　拾壹番組　一三拾五ヶ所　拾貳番組
一五拾六ヶ所　拾三番組　一六拾四ヶ所　拾四番組
一八拾八ヶ所　拾五番組　一四拾四ヶ所　拾六番組
一六拾六ヶ所　拾七番組　一貳拾三ヶ所　拾八番組
一九ヶ所　拾九番組　一拾八ヶ所　貳拾番組
一拾三ヶ所　廿壹番組　一八ヶ所　番外品川
一七ヶ所　番外吉原

都合九百九拾ヶ所

右之通御座候、以上、

戌九月

〔市中取締書留十ノ七十九〕

寛政三亥年町法改正

申渡之内書抜

一自身番屋追々手廣ニ成候も有之、總而手重ニ候間、以來建廣ゲ候義決而不相成、勿論是迄廣ゲ候分も、以後建直し之節は、用向辨じ候迄ニ手狹ニ致し、新造修復共無之様、成丈ケ手輕ニ可致事、

但場末ニ至り候ては、二三町摸合ニ致し候義は、勝手次第之事ニ候、且又番屋江詰候義、御成之節、或は風烈之節、又は格別之譯有之候節は、仕來之通可詰、其餘多寡とても詰ルニおよはす、尤役人之外番屋江入不申、銘々辨當持參、酒は決而可禁事、

〔町法被仰渡書并諸御觸書〕申渡

惣町
名主共
地主共
家守共〇中略

自身番屋、追々手廣に成候も有之、總て手重に候間、以來建廣ゲ候儀決而不相成、勿論是迄廣ゲ候分も、以後建直しの節は、用向辨じ候迄ニ手狹にいたし、新造修復とも費無之様、成たけ手輕に可致事、

但シ場末ニ致り候ては、二三町摸合にいたし候儀は、勝手次第の事に候、且又番屋江詰候儀、御成之節、或は風烈之節、又は格別之譯有之節は、仕來之通可詰、其餘多寡とても詰ルにおよばず、尤役人之外、番屋江入不申、銘々辨當持參、酒は決て可禁事、

寛政三年四月

〔町會所一件書留 四〕寛政三亥年七月七日、越中守殿御直主膳正江御渡、（朱書）

先達而、町奉行所より總町々江申渡候ケ條之内、風聞及承候趣、左ニ申上候、

一自身番屋之儀、場末ニ至り候而は、貳三町捷合ニ致し候之儀は勝手次第、且又番屋江詰候儀、御成或は風烈之節、又は格別之譯有之節は、仕來之通可相詰、其餘は冬春とても不及相詰由之儀は、場末ニ而も出火いたし候而は、必大火ニ相成間敷と難相定候處、前書申渡之通相成候而は、火災用心怠り候様ニも可相成哉之趣、風說仕候ニ付、相考候處、自身番屋之儀ニ付、先達而申渡有之候趣意は、畢竟是迄自身番屋江寄集り、酒喰等調給右入用迄も、町內江割懸ヶ候様成事共有之故、町入用相增、不取締ニ付、右之通相改候儀にも可有之哉、左候はヽ、前書之通いかヽ敷事共は相改候様申渡、其外町役人平日共相詰候儀、正路堅固ニ致し、人數相減勤番仕候はヽ、差而入用多相懸り候儀も有之間敷候間、是迄之通ニ仕、且夜分抔は、碁將棊類翫候儀抔有之、是又いかヽ敷儀ニ御座候得共、右體之處ニ與じ、不寐番仕候故、出火等有之節、速ニ相知、火災之ため其外用心宜方ニ可有之哉ニ存候、自身番屋之儀、町內公用向其外取締等之ためニは御座候得共、多くは火災用心專一ニ可有之間、只今迄之通、平日とも相詰、只其如何敷所而已相改候方可然事ニ存候、

〔市中取締類集 九ノ百十四〕天保十三寅年七月、向方相談廻候、町々自身番屋、商ひ番屋等、定尺之儀ニ付調、

文政十二丑年十二月十一日榊原主計頭殿御番所ニ而（朱書）

「自身番屋并木戸番屋定尺御取極、南北小口年番名主共江被仰渡、」

申渡

南方小口年番

名主佐内町　八右衛門
同　檜物町　又右衛門

北方小口年番

同　新革屋町　定次郎
神田紺屋町名主勘次郎煩ニ付代　卯八
鎌倉町名主平次郎煩ニ付代　喜八

市中自身番屋之儀、寛政三亥年町法改正申渡廉之内ニ而、自身番屋手廣之分者、惣而手重モニ候間、建廣候儀決而不相成、是迄廣候分も、以後建直之節者、用向辨候迄ニ手狹ニ可致旨申渡置、新規修復共、元住居通被建候事故、別ニ建廣候儀者有之間敷候得共、高サ之儀は不同相見え中ニ者二階家體ニいたし、町屋家作同様ニ窓を付候場所も有之哉ニ相聞、出火之節火移相成、自ラ消防ニ相障候哉ニ付、右等は悉く切ちゞめも可申付處町入用ニも可相響ニ付、皆出來之分者當分其儘差置遣候間、重而修復之節者、切ちゞめ候樣可致候、木戸番屋之儀、是又願濟、見分請候上番人共自分ニ而庇等繼足シ候も有之哉ニ相聞候間、以來惣而寛政度申渡置通、自身番屋手廣之分者、普請之節切ちゞめ、町内辨候迄ニ、可相成丈手狹ニ致し、木戸番屋之義も、精々手重ニ無之樣可致候、依之自身番屋木戸番屋丈尺相極申付ル、

一自身番屋

梁間九尺　桁行貳間半　軒高サ壹丈三尺　棟高サ者軒ニ准シ可申候

一木戸番屋

梁間六尺　桁行九尺　軒高サ壹丈　棟高サ者軒ニ准可申候

右之通相定申渡間、右定尺より内ニ而有來分は其儘差置、以後被建候番屋は、右定尺ゟ相增候義、

一切停止申付候場所ニ寄何等之儀ニ而定尺通ニ而差支候筋も有之候はゝ其旨可申立其節糺之上可及沙汰候、

右之通申渡候間町中不洩樣組々一統可申通候、

右申渡趣起證文申付ル、

丑十二月十日

〔市中取締類集九ノ百十四〕天保十三寅年七月向方相談廻候町々自身番屋商ひ番屋等定尺之儀ニ付調、

所々明地內外葭簀張同樣之茶屋又者拜借地御預地等之內ニ有之候植木屋其外家作番屋共御同前掛之分不洩樣箇所之起立之儀取調可申上旨當四月十四日越前守殿被仰渡候ニ付町々名主共江申付書上させ候內商ひ番屋見守番屋者認候分數多有之候趣右者見守番屋抔ゟ申立候中ニ者紛敷家作も可有之候哉一體自身番屋商番屋之儀は寬政三亥年町改正之節手狹ニ補理可申旨申渡猶文政十三寅年中自身番屋之儀者梁間九尺桁行貳間半軒高サ壹丈三尺棟高サは軒ニ准じ可申木戸番屋者梁間六尺桁行九尺軒高サ壹丈棟高サ軒ニ准じ定尺ゟ相増候儀一切停止申付尤場所ニ寄差支候筋も有之候はゝ其譯可申立旨申渡置候儀ニ付向後修復仕立之節是迄之通見分之もの差遣候砌嚴重ニ爲相糺右定尺ニ振レ候分者其節ニ無用捨爲相止不埒之廉も相開候分否申付候樣可致旨相伺候處伺之通可取計旨去ル十九日御同人被仰渡候ニ付別紙之通御番方與力江可申渡被存候依之及御掛合候、

遠山左衛門尉

甲斐守殿

朱書 寅〇天保十三年 七月二日來挨拶下ゲ札付即日返却、

寅七月

下ゲ札

御書面之趣致承知候、拙者方ニ而も御同樣可申渡候、尤爲見合御伺書寫被遣候樣致し度、此段御挨拶旁及御懸合候、

寅七月　鳥居甲斐守

御番方
與力江

町々自身番屋商番屋之儀、文政度定尺申渡、右定尺ゟ相增候儀、一切停止申付、尤場所ニ寄差支候筋も有之候はゝ、其譯可申立旨申渡置候處、向後修復仕直之節、見分差遣候砌、嚴重ニ爲相糺、右定尺ニ振れ候分は、其節ニ無用捨爲相止、不埒之廉も相聞候分、咎申付候筈ニ候間、右之趣、年寄同心共江も申渡置、其度々得と取調可被申聞候、

寅七月

〔追加〕市中取締類集九ノ百一〕嘉永五子年十二月、芝西應寺町自身番屋貳ヶ所之處、壹ヶ所ニ致し度願調、

朱書
子十二月十一日、武次ヲ以御渡、同十四日鍋付てて上ル、

芝西應寺町自身番屋貳ヶ所之處、壹ヶ所ニ仕度願取調申上候書付、

喜多村彥右衛門

乍恐以書付奉願上候

一芝西應寺町之内南通地主拾貳人總代彌助家主總代月行事信兵衛西通地主七人總代總藏家主總代月行事利兵衛奉申上候私共町内之義は片側小町ニ御座候得共是迄自身番屋貳軒ニ而晝夜番相勤來候處當春中〻火之元之義格別嚴重可相守旨厚御仁惠ヲ以被仰渡候御掟書之趣一同難有奉承伏候然處一體西應寺町之儀は壹町ニ有之内譯東西南北四側ニ分り自身番屋相建町用相勤候處南通之義は小間七十九間半家主拾人西通之義は小間三十九間家主四人ニ而相勤來候得共右體少人數ニ御座候間晝夜番勤方若不行屆之義御座候而は奉恐入候ニ付私共一同心痛仕罷在殊ニ右申上候小間丈ケ之小町ニ而自身番屋貳軒建置候而は自然町入用も相嵩候間今般私共打寄談判仕候處南通は東西之木戸ニ而〆切自身番屋は中ニ相成西通自身番屋は西之方之木戸際河岸地ニ建有之候間南通之番屋を西通と操合壹軒ニ而番役相勤候へば家主共勤方ニ差支も無之殊ニ町入用之義も打込仕拂いたし候得ば懸り高も減少致し候私共一同町用勤方之辨利ニ相成尤右南通在來之番屋は中番と定置平常は戸〆致し候風烈之節は家主共幷店番之者出張候而嚴重ニ町内繁々相廻り火之元守方心付候樣仕候間南西兩側之自身番屋を西通り之番屋壹ケ所江組込町役勤方仕度奉存候間何卒格別之御慈悲を以右願之通被仰付被下置候樣一同奉願上候以上

嘉永五子年十一月十二日　芝西應寺町南通地主拾貳人總代
願人　彌助
外八人名前略

御奉行所樣

〔德川禁令考 四十七 自身番〕安政二卯年六月二十二日

町々自身番屋之儀ニ付達

當番與力江

町々自身番屋幷木戸番屋其外新規幷模樣替又ハ先規有來之通建直等之儀願出年寄同心爲見

分差遣候節、文政度申渡定尺ニ不拘町役人共より差出候書面繪圖面而已目當に致し、右見分書文言末に、願人井町役人爲立合相改候處、繪圖面之通相建候得ハ、往還其外差障候儀相見不申旨相認差出候儀、定例之手續ニ相成、不都合ニ付、以來ハ得と見分致し往還其外差障も無之、文政度申渡定尺之通相違無之旨書加可差出旨、年寄同心江可被申渡候、尤各々も右之趣相心得、取扱候樣可被致候、

卯六月

〔德川禁令考四十七 自身番〕年號闕亥九月

町々自身番屋普請之儀ニ付申渡

申渡

南小口年番名主
西河岸町 清右衛門
佐内町 八右衛門
北小口同
葺屋町 庄左衛門
高砂町 庄右衛門

町々自身番屋追々手廣ニ成候も有之、總而手重ニ候間、以來建廣メ候儀、決而不相成、勿論是迄廣メ候分も、以後建直之節ハ、用向辨候迄ニ手狹ニ致し、新規修復とも費無之樣、成丈手輕ニ致し、場末ニ至候而ハ、二三町據合ニ致し候儀ハ、勝手次第之旨、寛政三亥年町法改正之砌申渡置候處、逐年自身番屋井木戶番屋其外共心得違致し、追々手重之姿ニ相成、中ニハ間々不都合之儀願出候分も有之、如何之事ニ候、以來紛敷儀願出候ハヽ、急度咎可申付候間、彌寛政度之申渡之趣堅相守、聊違失無之樣相心得可申候、

商番屋

右之通、町々江不洩樣可申通、

右申渡趣證文申付ル、

亥九月四日

〔守貞漫稿四人事〕自身番

毎町阡陌ニアリ、廣サ九尺ニ二間ヲ定制トスレドモ、今ハ庇ニ擴ケテ、二間モ三間許モアリ、毎町大同小異也、

〔守貞漫稿四人事〕番小屋

是亦專ラ阡陌ニアリ、衛之夫ヲ番人或ハバンタト云、俗ニハ番太郎ト云、多ク北國産ノ人多シ御成アルコト、其他府命アルコト、或ハ水道普通水切レノコト、御免勸化來ルベキコト等ハ、鐵棒ヲ引テ、町中ニ報レ之、夜ハ拍子木ヲ打テ六時ヲ報ジ、其他凡テ町内ノ雜務ヲ職トス、

此番小屋廣サ九尺ニ一間ヲ定制トスト雖ドモ、庇ニ擴テ九尺二間バカリナルコト、自身番ト同ジ、蓋番人ハ私宅別ニ無レ之、皆妻子ドモ番小屋ニ住テ、飯モマヽニ炊テ食ス也、

又此番小屋ニテ草履草鞋等ノ類ヒ、鼻紙、蠟燭、瓦火鉢ノ類賣レ之、草履草鞋ハ店ニテ賣ル者甚ダ稀也、

又多ハ燒イモ、薩摩芋ヲ丸燒ニシ、夏ハ金魚等ヲモ賣ル、又常ニ麁菓子一ツ價四文ナル物ヲ賣ル故ニ、江戸ノ俗、麁菓子ヲ號テ、番太郎菓子ト云、京坂ニ云駄菓子也、

〔市中取締類集九ノ百十四〕弘化五申年〇嘉永元年正月

麴町壹町目北裏通江新規商ひ番屋相建度願ニ付調

朱書申三月四日定小屋江爲持遣ス、同月廿日挨拶下札來ル、

御普請奉行衆　　遠山左衛門尉

木戸番

麹町壹町目北裏通往還向側は、武家御預明地ニ而、杉垣根際迄、道幅六間有之、町内持ニ候處、片側町ニ付、夜分は往來人少く候故、不淨物等捨置、又は野非人共集り、火之元等も無心元、多春は夜分箱番屋差置、自身番屋〻も見廻候得共、場廣ニ而難行屆候、平常見守無之而は、不取締ニ付、有來木戸江並び、右杉垣根際より貳尺隔り、繪圖面之通、柿葺見守番屋壹ヶ所新規相建度段、右町役人共願出候間、相糺候處、同町貳丁目三丁目は、右裏町ニ自身番屋有之候得共、壹丁目之儀は、見張無之、見守商番屋出來候上は、見廻方も行屆候趣相聞、取締之一端ニ候間、御差支も無之候はゝ、先例も有之候間、願之通可申付と存候、依之別紙繪圖面相添、此段及御懸合候、

申三月

下ゲ札　御書面御懸合之趣致承知候、相糺候處、拙者共方差支之儀無之候、依之被遣候繪圖面留置、此段及御挨拶候、

申三月

書面、麹町壹町目北裏通、有來木戸際江、見守商番屋壹ヶ所、新規相建度願之趣取調候處、右場所は年來箱番屋ニ而濟來ル儀と相見候得共、此度之火之元守方、其外取締筋申立候儀ニも有之、且近頃右最寄町内ニ而新規願濟、見守商番屋取建候例も御座候間、此上御普請方差障之儀も無之候はゝ、願之通被仰付可然哉ニ奉存候、

申三月　　市中取締懸

〔一話一言四十八〕江戸中辻番町々木戸

寛永年中、江戸中の大小名の小路々々に辻番、其外町中にて巷門を仰付らる

〔天保集成絲綸錄九十九〕寛政三亥年四月

町奉行江

京都自身番

夜中町々木戸刻限を定、〆切、罷立候往來は承屆、不滯樣ニ相通し、怪敷者通り候はゞ木戸〆切候而相礼、彌盜賊ニ候はゞ、召捕候共、打殺候共可致候、猥ニ拍子木鐘等を打、騷々敷致し候儀は無之樣可致事、

〔市中取締書留 十ノ七十九 朱書〕天明七未年ゟ例年之町觸

一木戸〆切張番等之儀ニ付町觸伺案文

火災盜難之爲守、諸事去ル未年ゟ毎々觸之通申合、十月朔日ゟ矢來木戸張番等相守、怪敷もの見當候はゞ召捕、月番之番所江召連可申候

但矢來之儀横行等不相用、馬上之往來不障樣可致候、勝手ニ而矢來を木戸ニ取拵候儀は不苦候、併木戸ニ致し候はゞ新規之事ニ候間、繪圖致し、伺之上取建可申候、

右之趣、町中不洩樣可相觸候、

右之通、從町御奉行所被仰渡候旨、町中不洩樣入念可相觸候、

閏九月十〇天保十四年

〔百一錄〕寛永二年六月廿七日、去廿二日慶昌院從一品御方〇德川家綱生母薨逝、七十九歲、日暮及奏聞、市中禁音曲、宮内并非廢朝、五ヶ日之際御愼有之、從廿八日町中自身番迄、來月二日殺生禁斷、

〔德川禁令考 五十一 京都〕京都諸司代板倉氏父子公事扱掟條々〇註略

新式目〇中略

一町中夜番之事、定番之外町人一日一夜宛副番仕、從日暮夜明迄篝火無斷絕、町中之火之用心呼廻り、不審成者、又極夜之門衞往還之者、輙不可通、若心外之於急用之者、當番ニ可斷之間、其意得肝要也、又强盜之時、番之者、其町中相催可改、揔別當番之者、萬端付而、親疎好惡無之樣ニ可相勤、

事、〇下略

〔大坂式目〕自身番之事

一惣年寄并一町之年寄、如有來自身番可致用捨事、

一老人幼少之もの名代可爲赦免、并後家勿論之事、

一醫師其外法體之輩可爲名代、但其身覺悟次第自身も可致事、

一居住之外他町に家有之ば、其家の名代可致自身事、

一當番之者病人并他行之輩、勿論可爲名代事、

右每年極月朔日ゟ正月十五日迄之儀に候間、此書付之外、名代可爲無用、但當番之刻急用於有之は、年寄五人組に相斷、親子兄弟其外親類之間、又は手代にても可差置、此旨令違背者可爲或過料、或籠舍者也、

慶安元年子十二月十六日丹波太夫孫

三鄉町中

〔比田氏諸留〕八拾五年以前寛永十一甲戌年七月、大猷院樣〇德川家光京都より大坂江御下向之刻、〇中略御上洛之日より大坂町中へ自身番仕候、

〔御觸及口達〕當地〇大坂町々會所與唱候場所有之、所柄ニ寄、家作等手重ニ致、自身番屋者別段ニ被補理候趣ニ有之、元來町會所之儀者、町人共寄會所ニ候上者、家作等取廣候義者不相當ニ而、往々修復之手數も相掛り、町入用ニ差響候筋ニ付、向後右會所之儀者、江戸表町々自身番屋之振合ニ取直し、町人共寄合者、右場所ニ而相濟、其餘手重之儀は、惣會所ニ而取計候樣可致候、尤町々會所一時ニ差止、前書之番屋取立候者、眼前夫丈ヶ臨時入用も相掛り候儀ニ付、此後右會所修復等致候節、自身番屋之振合ニ取直し、追々會所差止候樣可致候、

一右町々會所之義、多分町家路次内等ニ有之趣ニ付而者、前條之通、追々會所差止候共、同所ニ而自身番屋取立候而者、却而不取締ニ而、其上當地之儀、町幅狹く候ニ付、旁番屋者相應之表家江引直取立候樣致し、會所跡之儀者、町中持店ニ模樣替致し、右店賃等を以、番屋入用相辨候者、重々町入用相減候筋ニ可有之ニ付、夫々熟談次第、右之通取計、追々自身番ニ引直候上者、番之儀、江戸表之振合ニ准可申付候、

一當地之儀者、宿驛ニ者無之候ニ付、當所休泊之諸御役人、其外等、町々會所ニ而御用宿相勤候仕來ニ付、右體追々會所差止候共、何方ニ而も御用宿申付候節、差支無之樣兼而心得致可置候、

一當地町々之儀、他所と違、節句錢又者樽代抔與唱、町内重立候者江乞取候樣之義者無之由ニ候得共、町人共祝事等有之、年寄其外江先格相贈來候祝儀抔心祝迄之儀者格別、右を夫々役德與心得違、又者貪ヶ間鋪取計等決而無之樣致、且都而町入用之儀、寛政度入用高ニ引當減省致、右ゟ相增申間敷段、追々申渡置候趣をも熟慮致、町義ニ付不益之費無之樣、年寄町人申合、精々取締可申候、

右之通、三鄉町中不洩樣可觸知者也、

天保十五辰年七月廿四日

(御觸及口達)町々木戸申付候義者、用心之爲ニ候處、夜中〆置不申候町々も有之趣ニ相聞候、此節町々物騷ニ付、御役所ゟ格別ニ役人相廻し、手當申付候間、怪鋪者見合召捕候節、木戸〆無之而者、逃去可申ニ付、亥之刻ゟ木戸〆置、番人付置、往來人有之節は爲待不置樣早々明通し、怪敷者は捕置可訴出候、捕違者不苦候、勿論盜賊捕方之義者、每々相觸候通相心得可申候、

一市中夜番嚴重ニ可致、其外之心得方、當巳六月中觸書差出候處、町々之内申合能行屆候も有之、不嚴重之町柄も有之哉ニ相聞、又者番人者出候得共、夜中詰所之戸〆切、往來之者を見張候義も

無之、等閑ニ打過候も有之哉ニ相聞候ニ付、猶聞糺之上無相違候はゞ、急度可及沙汰候間、彌一同嚴重ニ可相心得事、

一市中之內壹町堺毎ニ番致、往來人有之節者拍子木を打候はゞ、通行人之樣子も相知候ニ付、自然與怪敷者は、行先等も相分可申候間、向後夜四ツ時ゟ三鄕町中共、右之通町境毎ニ代り合番致、往來人之通行之節、相圖之拍子木打候樣可致、勿論是迄、右體之趣取計候町柄可有之哉ニ相聞候得共、猶亦得〆可申合候事、

一市中裏借屋之路次、夜五ツ時限戶〆切、無據通行之者は、所を聞相通、聊も無差支樣可致事、

且〆切之節、路次之內、怪鋪者忍び居不申哉、隅々迄念入見廻り可申事、

右之通、寬政三亥年九月、文政四巳年十月、口達觸差出候處、末町に而者、取締相弛ミ候向も可有之哉、左候而者、自然與盜賊共致徘徊、別而火之元等不用心ニも有之間、右口達之趣無違失相心得、町町木戶〆り等嚴重ニ可致候、尤拍子木番屋等別段補理致、入用向等迷惑之町々も有之候はゞ、町堺ニ自身番致、拍子木番相兼、往來之者を見張、通行之節、相圖之拍子木打候樣可致候、勿論組之者町々爲見廻候ニ付、若懈怠之町內も有之候はゞ、急度可令沙汰旨、右之趣、三鄕町中末々迄、不洩樣可申達候、

天保十二丑年十月朔日

〔浪花襍誌街廼噂四〕大坂夜中時廻の圖〇圖略

大坂にては、夜のときを知らするには、大鼓にて廻る、其圖かくのごとし、此大鼓の役は、自身番よりのさしづにして、日雇を出すなり、但し大坂にて番太といふものは、丁里のたぐひなり、

明治四十三年六月二十七日印刷
明治四十三年六月三十日發行

神宮司廳

明治四十三年六月二十七日印刷
明治四十三年六月三十日發行

神宮司廳

昭和十年十一月一日印刷
昭和十年十一月五日發行

（普及版古事類苑　全六十册）

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一
東京市芝區金杉新濱町十二番地

印刷者　和田助一

發行所　東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所　東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
　　　　　　　一一〇五四番
電話小石川(85)　一三二六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所　製本）